

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第122集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第8集

白石大御堂遺跡

園池を伴う中世寺院址の調査

1 9 9 1

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第122集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第8集

白石大御堂遺跡

園池を伴う中世寺院址の調査

1 9 9 1

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団



白石大御堂遺跡空中写真（北東上空から望む）



白石大御堂遺跡 大御堂・前原調査区全景（東方上空から望む）



大御堂調査区寺院址遺構全景



大御堂調査区寺院址園池遺構（北東から）



大御堂調査区寺院址南池遣水遺構（東から）



大御堂調査区寺院址遺構（東から）



白石大御堂遺跡出土遺物（古瀬戸・常滑）



白石大御堂遺跡出土遺物（輸入磁器）

序

関越自動車道藤岡ジャンクションから分かれた上信越自動車道は、鐺川をつくる流域“甘楽の谷”を西に走り、長野県佐久市へと向かいます。平成4年度の供用開始を目指し工事が進んでいますが、完成の暁には県内高速自動車道路網の東西を横断する動脈のひとつとして、地域の発展に大きく貢献することになるでしょう。この上信越自動車道建設工事に関連して多くの遺跡の発掘調査が行われ、貴重な埋蔵文化財の発見が数多くあり、大きな成果を得ることができました。

白石大御堂遺跡は藤岡市街地の西部に所在し、縄文時代から江戸時代までの各時代にわたる遺構・遺物が発見された複合遺跡です。なかでも、園池を持つ寺院址は鎌倉時代の創建と推定され、近世を経て現代に至るまでその痕跡を地名や地割りなどに残してまいりました。浄土思想の流行に伴って建立された寺院と考えられますが、瓦や土器・陶磁器類、そして骨蔵器などの出土遺物によって、中世の寺院址や埋葬遺構の調査研究に多くの成果を上げることができました。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、日本道路公団・群馬県教育委員会・藤岡市教育委員会をはじめとする関係諸機関、また、発掘調査・整理事業にあたられた多くの皆様、関係された皆様の御協力と御指導・御支援に厚くお礼申し上げます。そして、本報告書が地域の歴史を解明する上で広く活用されることを願い、序といたします。

平成3年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎



発掘作業風景（大御堂調査区寺院址園池遺構）

例 言

- 1 本書は関越自動車道(上越線)建設工事に伴い事前調査された「白石大御堂遺跡」(調査時の事業名称=大御堂遺跡)の発掘調査報告書である。
- 2 「白石大御堂遺跡」は群馬県藤岡市大字白石字大御堂・沖田・前原・上谷戸地内に所在し、上信越自動車道(旧称=関越自動車道上越線)建設工事に伴って発掘調査された遺跡の名称で、幅員約70m、路線長約800mに及ぶ路線内の遺跡調査範囲について付けられた名称である。
- 3 白石大御堂遺跡の調査地番は次のとおりである。
大御堂調査区 群馬県藤岡市大字白石字大御堂2192、2193、2195～2199、2206～2209、2211～2214、
2216～2218、2235-1・2、2237、2238、2240～2248、2250、字沖田2314-1・2
前原調査区 群馬県藤岡市大字白石字前原2316-1・3、2318～2323、2324-2、2326～2333、2400～2409
上谷戸調査区 群馬県藤岡市大字白石字前原2410、2412～2417、字上谷戸2502～2504、2506～2512、2540、
2543、2544、2547
- 4 本発掘調査は日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 5 実際の発掘調査及び整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団関越道上越線調査事務所(群馬県多野郡吉井町南陽台3-15-8に所在)が担当した。関越道上越線調査事務所は上越線地域埋蔵文化財の調査を目的に設置された事業団組織である。
- 6 調査期間及び担当者
 - (1) 発掘調査
(期 間) 昭和62年度発掘調査事業 昭和62年4月1日～昭和63年3月31日
昭和63年度発掘調査事業 昭和63年4月1日～平成元年3月15日
(担当者) 昭和62年度 右島和夫(専門員)、綿貫鋭次郎(調査研究員)、船藤亨(調査研究員)
昭和63年度 右島和夫(専門員)、船藤亨(調査研究員)、小林徹(調査研究員)、依田治雄(専門員)
 - (2) 整 理
(期 間) 平成2年度整理事業 平成2年4月1日～平成3年3月31日
(担当者) 平成2年度 綿貫鋭次郎(主任調査研究員)
 - (3) 事 務
常務理事 白石保三郎(昭和62・63年度)、邊見長雄(平成2年度)
事務局長 井上唯雄(昭和62・63年度)、松本浩一(平成2年度)
管理部長 田口紀雄(昭和62年度～平成2年度)
調査研究部長 上原啓巳(昭和62年度)、神保侑史(昭和63・平成2年度)
関越道上越線調査事務所長、井上 信(昭和62・63年度)、高橋一夫(平成2年度)
同総括次長 片桐光一(昭和62・63年度)、大沢友治(平成2年度)
同次長 原田恒弘(昭和62年度)、徳江 紀(昭和63・平成2年度)
同調査課長 鬼形芳夫(昭和63・平成2年度)
同庶務課係長代理 黒沢重樹(昭和62・63年度)、宮川初太郎(平成2年度)

同庶務課主任 国定均(昭和63年度)、笠原秀樹(平成2年度)

臨時職員 山崎郁夫、神戸市四郎、町田康子、本城美樹、田中智恵美、松井留男、後閑玲子

7 報告書作成担当者

編集 綿貫鋭次郎

本文執筆 原田恒弘、右島和夫、綿貫鋭次郎、船藤亨、小林徹、津金沢吉茂(専門員)、飯島義雄(専門員)、菊池実(主任調査研究員) (※ 文末に執筆者名を付記した)

遺構写真 右島和夫、綿貫鋭次郎、船藤亨、小林徹、依田治雄

遺物写真 佐藤元彦(技師)、飯島義雄

遺物保存処理 関邦一(技師)、北爪健二(嘱託員)、小材浩一(補助員)

遺物観察 右島和夫(古墳～平安)、津金沢吉茂(石造物)、飯島義雄(弥生)、菊池実(縄文)、関口博幸(石器)、綿貫鋭次郎(中・近世)

遺物実測・図版作成 石井緑、岩佐崑美枝、柿田順子、金田とも、中村順子、藤野ヒロ子、山縣深雪
(上記大御堂整理班の他に、矢田遺跡整理班、田篠・塩之入城遺跡整理班の協力を得た。)

委託関係 空中写真は(有)青高館に、航空写真測量を(株)国際航業に、遺構測量及びトレースを(株)測研に、花粉分析・鉱物分析を(株)パリノ・サーヴェイに、胎土分析を(株)第4紀地質研究所に委託し、人骨鑑定を緑川順氏、宮崎重雄氏に、石材鑑定を陣内圭一氏に依頼した。

8 報告書作成にあたり、下記の諸機関、諸氏に御教示、御指導をいただいた。記して謝意を表す次第である。(以下 敬称略)

愛知県陶磁文化資料館、足利市教育委員会、いわき市教育委員会、神川町教育委員会、鎌倉市教育委員会、瀬戸市教育委員会、鶴ヶ島町教育委員会、奈良国立文化財研究所、横浜市教育委員会、前橋市教育委員会、藤岡市教育委員会、藤岡市役所、吉井町教育委員会、富岡市教育委員会、赤羽一郎、浅野晴樹、市橋一郎、井上太、伊藤実、上原真人、浦部正視、大上周三、大野清一郎、大塚初重、大橋康二、片山元治、加藤充彦、勝明道、金沢陽、亀井明德、久保智康、工楽善通、小島純一、小森俊寛、斉木秀雄、佐川正敏、佐藤昭嗣、志村哲、清水滋、清水信行、菅原征子、関口正巳、早田勉、田野倉武男、田村晃一、田村誠、玉林美男、坪井清足、徳永貞紹、永井正憲、仲野泰裕、中原斉、西川制、橋本久和、服部郁、原博志、福田誠、藤沢良祐、藤田邦雄、古郡正志、堀越克美、堀越茂三郎、前原豊、松村和男、峰岸純夫、宮本長二郎、茂木由行、茂木努、森島康雄、吉岡康暢、吉田章一郎、五十嵐瓦店、中村鬼瓦店、藤岡市農業協同組合平井支所、石坂茂、石塚久則、大江正行、大西雅弘、木津博明、木村収、小島敦子、坂口一、須田茂、新井仁、斎藤利昭、関口功一

9 出土遺物は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。

10 発掘調査従事者

秋谷幸子、阿久津巳ツ子、新井峰子、荒館好枝、有坂美江子、石井美津恵、伊藤寿、今井康久、内海好子、大柿梅子、大木恒雄、大河原不美江、太田清子、太田保、小川正夫、岡崎昭子、岡部専八、小川茂吉、荻原マスキ、荻野操、金井ミツエ、梶山市、河野セツ子、木部和子、木部つぎ子、黒沢幸代、小林喜美子、小林千代子、小林幸雄、小峰政八、小山ツル、斎藤喜和子、斎藤邦枝、斎藤敏子、斎藤初子、桜井はる枝、清水妙子、須川幸、鈴木ヤス、関口真一、関沼イソ、関沼和市、関沼さだ、高橋穂理、高山つね代、田口佳子、竹内文蔵、多胡なか、田島八重子、徳江喜子、豊島たか、中村栄子、中山良江、萩原重寿、羽切四郎、林敏江、原田キクエ、平井光子、細矢ひさえ、堀口シゲル、堀口孝子、堀越利政、堀越美恵子、松田ちか子、松本千代、三木まつ江、宮澤廣治、宮沢ひさ、八木保子、山下昭二郎、藤岡市立西中学校歴史研究部(米山康子先生引率)

凡 例

- 1 本報告書中に掲載した地形図は、国土地理院1：50000、1：25000地形図、藤岡市都市計画図1：2500を縮小して使用した。
- 2 本書中の方位記号の方向は座標北（G.N.）を指す（国家座標第IV系）。
- 3 本書中の挿図縮尺は以下を標準として作成した。

1：30 火葬跡、火葬墓、墓墳、土坑、住居跡内カマド跡遺構平面図

1：40 敷石住居跡、配石墓

1：50 溝状遺構土層断面図、溝状遺構遺物分布図

1：60 竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、井戸跡

1：80 溝状遺構

1：100 濠跡・土塁跡・池跡・溝状遺構

1：200、1：400、1：500 遺構全体図関係

- 4 遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

⅓ ガラス小玉 ⅓ 小型土製品・石製品、銭貨、鉄砲玉、鉄製品 ⅓ 土器(小型)、陶磁器

⅓ 土器(大型)、瓦類 ⅓ 瓦類、陶器(大甕)、石製品・石造物(中世) ⅓ 石材

- 5 遺構及び遺物実測図中のスクリーンーン及びドット表示は下記のことを示す。

■ 表土層(浅間A軽石)

■ 暗褐色粘質土層

■ 黒褐色砂質土(浅間B軽石)

■ 黒色土層

■ 粘質土・シルト質土

■ 砂礫層

■ ローム層(Y.P.)

■ ローム層(B.P.)

■ ローム層(A.T.)

□ 炭化物・灰

■ 焼 土

● 手捏成形土師質土器

○ ロクロ成形土師質土器

▲ 軟質陶器(摺鉢・内耳鍋類)

△ 軟質陶器(焙烙・火舎香炉類)

★ 中世陶器

☆ 近世陶器

★ 輸入磁器

★ 国産磁器(肥前系青磁)

□ 瓦 A 類

□ 瓦 B 類

■ 鬼瓦 A 類

□ 鬼瓦 B 類

☆ 須 恵 器

● ガラス小玉

● 砥 石

◆ 鉄 製 品

▲ 銭 貨

◇ 金属製品(銅・他)

(なお、上記の例以外のものについては、その都度凡例を示すこととした。)

- 6 出土遺物に関しては遺物観察表を用いて記した。なお、遺物番号は本報告書掲載・取り扱い遺物について各調査区毎の種別通番とし、遺物実測図、遺物実測図内遺物番号、遺物観察表遺物番号、写真図版遺物番号に一致する。
- 7 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修（財）日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」1988年版を使用している。
- 8 遺構名称については、発掘調査時の名称を整理作業の過程で再検討し、報告書掲載遺構については遺構の性格にしたがって新たに報告名称を付けた。本報告書では報告名称に（ ）付きで調査名称を付記した。また、遺物については、本報告書掲載遺物としたものについて調査区・種別毎の通番とし、報告書内で統一した。

目 次

巻頭カラー写真図版

序

例 言

凡 例

目 次

表 目 次

付図・挿図目次

写真図版目次

抄 録

《白石大御堂遺跡》

第I章 調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

- 1 上信越自動車道の建設工事と
白石大御堂遺跡の発掘調査 …… 1
- 2 白石大御堂遺跡の調査 …… 3

第2節 調査の方法と実施経過

- 1 調査の方法 …… 7
《発掘調査日誌から》 …… 9
- 2 標準層序 …… 14

第II章 遺 跡

第1節 立地と環境

- 1 遺跡の位置・自然的環境 …… 16
- 2 歴史的環境 …… 17

第2節 遺跡の概要

- 1 大御堂調査区 …… 32
- 2 前原調査区 …… 34
- 3 上谷戸調査区 …… 35
《白石大御堂遺跡報告遺構一覧表》 …… 36
《白石大御堂遺跡全体図》 …… 37

《大御堂調査区》

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物

第1節 中世以前の遺構と遺物

- 1 縄文～平安時代の遺構・遺物の分布 …… 42
- 2 縄文時代の遺構と遺物 …… 42
- 3 弥生時代の遺構と遺物 …… 63
- 4 古墳～平安時代の遺構と遺物 …… 70

第2節 中世の遺構—寺院址—

- 1 大御堂調査区検出の中近世遺構 …… 75
- 2 中世寺院址の概要 …… 76
- 3 寺域西部検出の遺構 …… 85
- 4 寺域中央部検出の遺構 …… 105
- 5 寺域東部検出の遺構 …… 145

第3節 埋葬関連遺構

- 1 種別及び分布 …… 148
- 2 配石墓 …… 148
- 3 火葬跡 …… 155
- 4 火葬墓 …… 163
- 5 土坑墓 …… 167
- 6 土 墳 …… 171
- 7 石造物 …… 174

第4節 寺院址出土の遺物

- 1 寺院址出土遺物の種別及び分布 …… 180

2	土師質土器	182
3	軟質陶器	192
4	陶磁器類	196
5	瓦類	211
6	金属・ガラス製品	257
7	石製品・石材	272
第5節 C区検出の中近世の遺構と遺物		
1	C区検出の中近世遺構	273
2	C区検出の遺物	284
3	浅間A軽石降下前後の遺構	292

《前原調査区》

第IV章 前原調査区の遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物		
1	遺構 — 竪穴住居跡 —	295
2	遺構 — 土坑 —	300
3	遺物	307
第2節 中・近世の遺構と遺物		
1	遺構	315
2	遺物	327

《上谷戸調査区》

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物		
1	縄文時代の遺物	336
第2節 古墳～平安時代の遺構と遺物		
1	遺構の分布	341
2	遺構	341
3	遺物	359
第3節 中・近世の遺構と遺物		
1	遺構	367
2	遺物	393

第VI章 考察

第1節	調査の成果と問題点	431
第2節	鎭川流域の敷石住居跡の様相	437
第3節	中世寺院址について	442
第4節	『元禄村絵図』について	471
第5節	白石大御堂遺跡出土試料 胎土分析鑑定報告	474

表 目 次

第 1 表	白石大御堂遺跡発掘調査工程表	第 24 表	前原調査区掘立柱建物跡遺構一覽表(1)~(3)
第 2 表	白石大御堂遺跡整理作業工程表	第 25 表	前原調査区掘立柱建物跡遺構計測表(1)~(7)
第 3 表	周辺遺跡一覽表	第 26 表	前原調査区出土遺物観察表(1)~(4)―中近世―
第 4 表	白石大御堂遺跡報告遺構一覽表	第 27 表	前原調査区出土銭貨一覽表
第 5 表	大御堂調査区出土遺物観察表(1)~(10)―縄文時代―	第 28 表	上谷戸調査区出土遺物観察表―縄文時代―
第 6 表	大御堂調査区出土遺物観察表―弥生時代―	第 29 表	上谷戸調査区出土遺物観察表―古墳~平安時代―
第 7 表	大御堂調査区出土遺物観察表―古墳~平安時代―	第 30 表	上谷戸調査区出土遺物観察表―古墳~平安時代―
第 8 表	大御堂調査区掘立柱建物跡遺構一覽表(1)~(3)	第 31 表	上谷戸第 1 号掘立柱建物跡計測表
第 9 表	大御堂調査区掘立柱建物跡遺構計測表(1)~(4)	第 32 表	上谷戸調査区出土遺物観察表―土師質土器―
第 10 表	大御堂調査区埋葬関連遺構一覽表	第 33 表	上谷戸調査区出土遺物観察表―軟質陶器―
第 11 表	大御堂寺院址出土遺物観察表(1)~(4)―土師質土器―	第 34 表	上谷戸調査区出土遺物観察表―磁器・グリッド―
第 12 表	大御堂寺院址出土遺物観察表(5)~(6)―軟質陶器―	第 35 表	上谷戸調査区出土遺物観察表―陶器・グリッド―
第 13 表	大御堂寺院址出土遺物観察表(7)~(8)―輸入磁器―	第 36 表	上谷戸調査区出土遺物観察表―磁器・遺構―
第 14 表	大御堂寺院址出土遺物観察表(9)―中世陶器―	第 37 表	上谷戸調査区出土遺物観察表―陶器・遺構―
第 15 表	大御堂寺院址出土遺物観察表(10)~(11)―近世磁器―	第 38 表	上谷戸調査区出土銭貨一覽表
第 16 表	大御堂寺院址出土遺物観察表(12)~(14)―近世陶器―	第 39 表	上谷戸調査区出土鉄製品一覽表
第 17 表	大御堂寺院址出土遺物観察表(1)~(6)―瓦類―	第 40 表	縄文時代敷石住居跡一覽表
第 18 表	大御堂寺院址出土銭貨一覽表	第 41 表	中世史年表・関連寺院一覽表
第 19 表	大御堂寺院址出土鉄製品一覽表(1)~(5)	第 42 表	大御堂寺院址出土瓦種類別総量一覽表
第 20 表	大御堂調査区 C 区掘立柱建物跡遺構一覽表	第 43 表	大御堂寺院址出土土師質土器法量別分布表
第 21 表	大御堂調査区 C 区掘立柱建物跡遺構計測表(1)~(5)	第 44 表	大御堂寺院址出土土師質土器区域別数量表
第 22 表	大御堂調査区 C 区出土遺物観察表	第 45 表	X線回折試験分析資料胎土性状表
第 23 表	前原調査区出土遺物観察表(1)~(9)―縄文時代―		

付図・挿図目次

付図 1	白石大御堂遺跡と周辺遺跡	付図 5	大御堂調査区寺院址遺構―中世面―全体図
付図 2	白石大御堂遺跡全体図	付図 6	大御堂調査区寺院址遺構―中近世面―全体図
付図 3	白石大御堂遺跡大御堂・前原調査区全体図	付図 7	大御堂調査区寺院址土層断面図(1)
付図 4	白石大御堂遺跡上谷戸調査区全体図	付図 8	大御堂調査区寺院址土層断面図(2)
第 1 図	白石大御堂遺跡位置図	第 26 図	大御堂調査区出土遺物実測図(4)―縄文石器―
第 2 図	白石大御堂遺跡調査範囲図(1)	第 27 図	大御堂第 1 号土坑遺物出土状況平面図
第 3 図	白石大御堂遺跡調査範囲図(2)	第 28 図	大御堂第 1 号土坑出土遺物実測図―弥生土器・石器―
第 4 図	白石大御堂遺跡検出遺構垂直分布図	第 29 図	大御堂調査区出土遺物実測図(5)―弥生土器―
第 5 図	白石大御堂遺跡基本土層図	第 30 図	大御堂調査区出土遺物実測図(6)―弥生土器―
第 6 図	白石大御堂遺跡周辺地質図	第 31 図	大御堂調査区出土遺物実測図(7)―弥生土器―
第 7 図	周辺遺跡分布図(1) 先土器・縄文・弥生時代	第 32 図	大御堂調査区出土遺物実測図(8)―弥生土器―
第 8 図	周辺遺跡分布図(2) 古墳・奈良・平安時代	第 33 図	大御堂第 1 号溝状遺構平面図
第 9 図	周辺遺跡分布図(3) 中・近世	第 34 図	大御堂第 1 号溝状遺構出土遺物実測図―土師器・須恵器―
第 10 図	周辺遺跡分布図(4) 鮎川流域	第 35 図	大御堂調査区出土遺物実測図(9)―土師器・須恵器―
第 11 図	白石大御堂遺跡全体図・遺跡縦断地質図	第 36 図	大御堂調査区寺院址遺構分布図
第 12 図	大御堂調査区縄文~平安時代遺構・遺物分布図	第 37 図	大御堂調査区寺院址調査前現況図
第 13 図 1	大御堂第 1 号敷石住居跡遺構平面図	第 38 図	大御堂調査区寺院址―中世面―遺構平面図
第 13 図 2	大御堂第 1 号敷石住居跡遺構平面図(石囲い・炉・埋甕)	第 39 図	大御堂調査区寺院址―中近世面―遺構平面図
第 14 図	大御堂第 1 号敷石住居跡遺物分布図	第 40 図	大御堂寺院址西部遺構平面図・断面図 (第 1 号濠跡・土塁跡・第 2 号溝状遺構)
第 15 図	大御堂第 1 号敷石住居跡出土遺物実測図(1)―土器―	第 41 図	大御堂寺院址第 1 号濠跡・土塁跡土層断面図
第 16 図	大御堂第 1 号敷石住居跡出土遺物実測図(2)―土器・石器―	第 42 図	大御堂第 1 号濠内土坑遺構平面図
第 17 図	大御堂第 1 号敷石住居跡出土遺物実測図(3)―石器―	第 43 図	大御堂第 1 号濠内土坑遺物出土状況平面図
第 18 図	大御堂第 2 号敷石住居跡遺構平面図	第 44 図	大御堂第 1 号濠内土坑出土遺物実測図―土師質土器―
第 19 図	大御堂第 2 号敷石住居跡出土遺物分布図	第 45 図	大御堂寺院址南西部掘立柱建物跡群遺構平面図
第 20 図	大御堂第 2 号敷石住居跡出土遺物実測図(1)―土器―	第 46 図	大御堂寺院址南西部遺構・遺物検出状況平面図
第 21 図	大御堂第 2 号敷石住居跡出土遺物実測図(2)―土器・石器―	第 47 図	大御堂第 1 号掘立柱建物跡遺構平面図
第 22 図	大御堂第 2 号敷石住居跡出土遺物実測図(3)―石器―	第 48 図	大御堂第 2 号掘立柱建物跡遺構平面図
第 23 図	大御堂調査区出土遺物実測図(1)―縄文土器―	第 49 図	大御堂第 3 号掘立柱建物跡遺構平面図
第 24 図	大御堂調査区出土遺物実測図(2)―縄文石器―	第 50 図	大御堂第 4 号掘立柱建物跡遺構平面図
第 25 図	大御堂調査区出土遺物実測図(3)―縄文土器		

- 第51図 大御堂第5号掘立柱建物跡遺構平面図
- 第52図 大御堂第6号掘立柱建物跡遺構平面図
- 第53図 大御堂第7号掘立柱建物跡遺構平面図
- 第54図 大御堂第8号掘立柱建物跡遺構平面図
- 第55図 大御堂第9号掘立柱建物跡遺構平面図
- 第56図 大御堂寺院址南西部掘立柱建物跡群内土坑 a 遺構平面図
- 第57図 大御堂寺院址南西部掘立柱建物跡群内土坑 b 遺構平面図
- 第58図 大御堂寺院址南西部掘立柱建物跡群内土坑 b 出土遺物実測図
- 第59図 大御堂寺院址西部遺物出土分布図
(第1号濠跡・土塁跡・第2号溝状遺構)
- 第60図 大御堂寺院址北西部瓦溜まり遺物出土分布図
- 第61図 大御堂第5号・第6号溝状遺構平面図・断面図
- 第62図 大御堂第3号・第4号・第8号溝状遺構平面図
- 第63図 大御堂第1号池状遺構出土遺物・礫分布図
- 第64図 大御堂第5号～第7号溝状遺構平面図
- 第65図 大御堂第7号溝状遺構礫敷面平面図
- 第66図 大御堂第7号溝状遺構遺物出土分布図
- 第67図 大御堂第9号・第10号・第11号溝状遺構平面図
- 第68図 大御堂第13号溝状遺構平面図
- 第69図 大御堂第12号溝状遺構平面図(掘り方面)
- 第70図 大御堂第12号溝状遺構平面図(上面)
- 第71図 大御堂第12号溝状遺構土層断面図
- 第72図 大御堂第11号溝状遺構平面図
- 第73図 大御堂第12号溝状遺構遺物出土分布図
- 第74図 大御堂寺院址南池～第12号溝状遺構平面図
- 第75図 大御堂寺院址園池遺構一中世面一遺構平面図
- 第76図 大御堂寺院址園池遺構一近世面一遺構平面図
- 第77図 大御堂寺院址園池遺構遺物分布図
- 第78図 大御堂寺院址南池遺物出土状況平面図
- 第79図 大御堂寺院址南池西部閉塞部遺構平面図
- 第80図 大御堂寺院址南池近世石垣遺構平面図・側面図・断面図
- 第81図 大御堂寺院址中央南西隅遺構平面図
- 第82図 大御堂第10号掘立柱建物跡遺構平面図
- 第83図 大御堂第11号掘立柱建物跡遺構平面図
- 第84図 大御堂第1号井戸跡遺構平面図
- 第85図 大御堂第2号土坑遺構平面図
- 第86図 大御堂寺院址中央部遺物出土分布図
- 第87図 大御堂寺院址東部第14号～第17号溝状遺構平面図
- 第88図 大御堂第14号溝状遺構遺物・礫出土状況平面図
- 第89図 大御堂第15号溝状遺構遺物・礫出土状況平面図
- 第90図 大御堂調査区埋葬関連遺構分布図
- 第91図 大御堂第1号配石墓遺構平面図
- 第92図 大御堂第1号配石墓出土遺物実測図
- 第93図 大御堂第1号配石墓列石配置平面図
- 第94図 大御堂第1号火葬跡遺構平面図
- 第95図 大御堂第2号火葬跡遺構平面図
- 第96図 大御堂第3号火葬跡遺構平面図
- 第97図 大御堂第4号火葬跡遺構平面図
- 第98図 大御堂第5・6号火葬跡遺構平面図
- 第99図 大御堂第5号火葬跡遺構平面図
- 第100図 大御堂第6号火葬跡遺構平面図
- 第101図 大御堂第4・5・6号火葬跡切り込み面土層図
- 第102図 大御堂第7号火葬跡遺構平面図
- 第103図 大御堂第8号火葬跡遺構平面図
- 第104図 大御堂第8号火葬跡切り込み面土層図
- 第105図 大御堂第9号火葬跡遺構平面図
- 第106図 大御堂第10号火葬跡遺構平面図
- 第107図 大御堂第11号火葬跡遺構平面図(1)
- 第108図 大御堂第11号火葬跡遺構平面図(2)
- 第109図 大御堂第1号火葬墓遺構平面図
- 第110図 大御堂第1号火葬墓出土遺物実測図
- 第111図 大御堂第9号火葬跡・第1号火葬墓・第1号土坑墓遺構切り合い関係平面図
- 第112図 大御堂第2号火葬墓遺構平面図
- 第113図 大御堂第2号火葬墓出土遺物実測図
- 第114図 大御堂第3号火葬墓遺構平面図
- 第115図 大御堂第3号火葬墓出土遺物実測図
- 第116図 大御堂第4号火葬墓遺構平面図
- 第117図 大御堂第4号火葬墓出土遺物実測図
- 第118図 大御堂第5号火葬墓遺構平面図
- 第119図 大御堂第5号火葬墓出土遺物実測図
- 第120図 大御堂第6号火葬墓遺構平面図
- 第121図 大御堂第1号土坑墓遺構平面図
- 第122図 大御堂第1号土坑墓出土遺物実測図
- 第123図 大御堂第2号土坑墓遺構平面図
- 第124図 大御堂第2号土坑墓出土遺物実測図
- 第125図 大御堂第3号土坑墓遺構平面図
- 第126図 大御堂第3号土坑墓出土遺物実測図
- 第127図 大御堂第4号土坑墓遺構平面図
- 第128図 大御堂第5号土坑墓遺構平面図
- 第129図 大御堂第6号土坑墓遺構平面図
- 第130図 大御堂第7号土坑墓遺構平面図
- 第131図 大御堂第8号土坑墓遺構平面図
- 第132図 大御堂第1号土壇遺構平面図
- 第133図 大御堂第2号土壇遺構平面図
- 第134図 大御堂第3号土壇遺構平面図
- 第135図 大御堂第4号土壇遺構平面図
- 第136図 大御堂第5号土壇遺構平面図
- 第137図 大御堂調査区出土遺物実測図(0)―五輪塔・宝篋印塔―
- 第138図 大御堂調査区出土遺物実測図(1)―板碑―
- 第139図 大御堂調査区出土遺物実測図(2)―板碑―
- 第140図 大御堂調査区北西部配石遺構平面図
- 第141図 大御堂寺院址遺構遺物分布区割り図
- 第142図 大御堂寺院址出土遺物実測図(1)―土師質土器―
- 第143図 大御堂寺院址出土遺物実測図(2)―土師質土器―
- 第144図 大御堂寺院址出土遺物実測図(3)―軟質陶器―
- 第145図 大御堂寺院址出土遺物実測図(4)―軟質陶器―
- 第146図 大御堂寺院址出土遺物実測図(5)―輸入磁器―
- 第147図 大御堂寺院址出土遺物実測図(6)―輸入磁器―
- 第148図 大御堂寺院址出土遺物実測図(7)―中世陶器―
- 第149図 大御堂寺院址出土遺物実測図(8)―近世磁器―
- 第150図 大御堂寺院址出土遺物実測図(9)―近世磁器―
- 第151図 大御堂寺院址出土遺物実測図(10)―近世陶器―
- 第152図 大御堂寺院址出土遺物実測図(11)―近世棧瓦―
- 第153図 大御堂寺院址出土遺物実測図(12)―A類軒丸瓦―
- 第154図 大御堂寺院址出土遺物実測図(13)―A類軒平瓦―
- 第155図 大御堂寺院址出土遺物実測図(14)―A類軒平瓦―
- 第156図 大御堂寺院址出土遺物実測図(15)―A類軒平瓦―
- 第157図 大御堂寺院址出土遺物実測図(16)―A類軒平瓦―
- 第158図 大御堂寺院址出土遺物実測図(17)―A類軒平瓦―
- 第159図 大御堂寺院址出土遺物実測図(18)―A類丸瓦―
- 第160図 大御堂寺院址出土遺物実測図(19)―A類丸瓦―
- 第161図 大御堂寺院址出土遺物実測図(20)―A類平瓦―
- 第162図 大御堂寺院址出土遺物実測図(21)―A類平瓦―
- 第163図 大御堂寺院址出土遺物実測図(22)―A類平瓦―
- 第164図 大御堂寺院址出土遺物実測図(23)―A類平瓦―
- 第165図 大御堂寺院址出土遺物実測図(24)―A類平瓦―
- 第166図 大御堂寺院址出土遺物実測図(25)―B類軒丸瓦―
- 第167図 大御堂寺院址出土遺物実測図(26)―B類軒丸瓦―
- 第168図 大御堂寺院址出土遺物実測図(27)―B類軒平瓦―
- 第169図 大御堂寺院址出土遺物実測図(28)―B類軒平瓦―
- 第170図 大御堂寺院址出土遺物実測図(29)―B類軒平瓦―
- 第171図 大御堂寺院址出土遺物実測図(30)―B類軒平瓦―
- 第172図 大御堂寺院址出土遺物実測図(31)―B類丸瓦―
- 第173図 大御堂寺院址出土遺物実測図(32)―B類丸瓦―

- 第174図 大御堂寺院址出土遺物実測図(33)―B類丸瓦―
 第175図 大御堂寺院址出土遺物実測図(34)―B類丸瓦―
 第176図 大御堂寺院址出土遺物実測図(35)―B類丸瓦―
 第177図 大御堂寺院址出土遺物実測図(36)―B類丸瓦―
 第178図 大御堂寺院址出土遺物実測図(37)―B類平瓦―
 第179図 大御堂寺院址出土遺物実測図(38)―B類平瓦―
 第180図 大御堂寺院址出土遺物実測図(39)―B類平瓦―
 第181図 大御堂寺院址出土遺物実測図(40)―B類平瓦―
 第182図 大御堂寺院址出土遺物実測図(41)―B類平瓦―
 第183図 大御堂寺院址出土遺物実測図(42)―B類平瓦―
 第184図 大御堂寺院址出土遺物実測図(43)―B類平瓦―
 第185図 大御堂寺院址出土遺物実測図(44)―A類鬼瓦―
 第186図 大御堂寺院址出土遺物実測図(45)―A・B類鬼瓦―
 第187図 大御堂寺院址出土遺物実測図(46)―錢貨―
 第188図 大御堂寺院址出土遺物実測図(47)―鉄製品 1―
 第189図 大御堂寺院址出土遺物実測図(48)―鉄製品 2―
 第190図 大御堂寺院址出土遺物実測図(49)―鉄製品 3―
 第191図 大御堂寺院址出土遺物実測図(50)―鉄製品 4―
 第192図 大御堂寺院址出土遺物実測図(51)―鉄製品 5―
 第193図 大御堂寺院址出土遺物実測図(52)―鉄製品 6―
 第194図 大御堂寺院址出土遺物実測図(53)―鉄製品 7―
 第195図 大御堂寺院址出土遺物実測図(54)―石製品―
 第196図 大御堂調査区C区遺構全体図
 第197図 大御堂調査区C区中世遺構平面図
 第198図 大御堂調査区C区東群掘立柱建物跡遺構平面図
 第199図 大御堂第12号掘立柱建物跡遺構平面図
 第200図 大御堂第13号掘立柱建物跡遺構平面図
 第201図 大御堂第14号掘立柱建物跡遺構平面図
 第202図 大御堂調査区C区西群掘立柱建物跡遺構平面図
 第203図 大御堂第15号掘立柱建物跡遺構平面図
 第204図 大御堂第16号掘立柱建物跡遺構平面図
 第205図 大御堂第17号掘立柱建物跡遺構平面図
 第206図 大御堂第18号掘立柱建物跡遺構平面図
 第207図 大御堂第19号掘立柱建物跡遺構平面図
 第208図 大御堂第2号井戸跡遺構平面図
 第209図 大御堂調査区出土遺物実測図(55)―C区グリッド―
 第210図 大御堂調査区浅間A軽石埋没島作遺構平面図
 第211図 大御堂第3号土坑遺構平面図
 第212図 大御堂第4号土坑遺構平面図
 第213図 前原調査区遺構全体図
 第214図 前原第1号住居跡遺構平面図
 第215図 前原第1号住居跡遺構分布図
 第216図 前原第1号住居跡出土遺物実測図
 第217図 前原第2号住居跡遺構平面図
 第218図 前原第1号土坑遺構平面図
 第219図 前原第1号土坑出土遺物実測図
 第220図 前原第2号土坑遺構平面図・遺物分布図
 第221図 前原第2号土坑出土遺物実測図
 第222図 前原第3号土坑遺構平面図・遺物出土平面図
 第223図 前原第3号土坑出土遺物実測図
 第224図 前原第4号～第11号土坑遺構平面図
 第225図 前原第12号土坑遺構平面図
 第226図 前原第12号土坑遺物分布図
 第227図 前原第12号出土遺物実測図―縄文土器・石器・軟質陶器―
 第228図 前原調査区出土遺物実測図(1)―縄文土器―
 第229図 前原調査区出土遺物実測図(2)―縄文土器―
 第230図 前原調査区出土遺物実測図(3)―縄文土器―
 第231図 前原調査区出土遺物実測図(4)―先土器・縄文石器―
 第232図 前原調査区道路跡遺構平面図・土層断面図
 第233図 前原第1号掘立柱建物跡遺構平面図
 第234図 前原第2号掘立柱建物跡遺構平面図
 第235図 前原調査区近世屋敷跡遺構平面図・土層断面図
 第236図 前原第3号掘立柱建物跡遺構平面図
 第237図 前原第4号掘立柱建物跡遺構平面図
 第238図 前原第5号掘立柱建物跡遺構平面図
 第239図 前原第6号掘立柱建物跡遺構平面図
 第240図 前原調査区西群掘立柱建物跡遺構平面図
 第241図 前原第7号掘立柱建物跡遺構平面図
 第242図 前原第8号掘立柱建物跡遺構平面図
 第243図 前原第9号掘立柱建物跡遺構平面図
 第244図 前原第1号井戸跡遺構平面図
 第245図 前原第1号井戸跡出土遺物実測図
 第246図 前原調査区出土遺物実測図(5)―輸入磁器―
 第247図 前原調査区出土遺物実測図(6)―近世磁器―
 第248図 前原調査区出土遺物実測図(7)―D区・中近世遺物―
 第249図 前原調査区出土遺物実測図(8)―E区・中近世遺物―
 第250図 前原調査区出土遺物実測図(9)―E区・錢貨・石製品―
 第251図 上谷戸調査区出土遺物実測図(1)―縄文土器・石器―
 第252図 上谷戸調査区斜面部遺構全体図
 第253図 上谷戸第1号住居跡遺構平面図
 第254図 上谷戸第1号住居跡カマド平面図
 第255図 上谷戸第1号住居跡出土遺物実測図(1)
 第256図 上谷戸第1号住居跡出土遺物実測図(2)
 第257図 上谷戸第1号住居跡遺物分布図
 第258図 上谷戸第2号住居跡遺構平面図
 第259図 上谷戸第2号住居跡カマド平面図
 第260図 上谷戸第2号住居跡出土遺物実測図
 第261図 上谷戸第2号住居跡遺物分布図
 第262図 上谷戸第3号住居跡遺構平面図
 第263図 上谷戸第3号住居跡カマド平面図
 第264図 上谷戸第3号住居跡出土遺物実測図
 第265図 上谷戸第3号住居跡遺物分布図
 第266図 上谷戸第4号住居跡遺構平面図
 第267図 上谷戸第4号住居跡出土遺物実測図
 第268図 上谷戸第5号住居跡遺構平面図(1)―床面―
 第269図 上谷戸第5号住居跡遺構平面図(2)―掘り方面―
 第270図 上谷戸第5号住居跡出土遺物実測図(1)
 第271図 上谷戸第5号住居跡出土遺物実測図(2)
 第272図 上谷戸第5号住居跡遺物分布図
 第273図 上谷戸第1号集石遺構平面図
 第274図 上谷戸第1号集石遺構出土遺物実測図
 第275図 上谷戸第1号溝状遺構平面図
 第276図 上谷戸第1号溝状遺構出土遺物実測図
 第277図 上谷戸調査区出土遺物実測図(2)―土師器・埴輪―
 第278図 上谷戸調査区出土遺物実測図(3)―須恵器―
 第279図 上谷戸調査区溝状遺構土層断面図(1)
 第280図 上谷戸調査区平坦部遺構全体図
 第281図 上谷戸調査区溝状遺構土層断面図(2)
 第282図 上谷戸調査区溝状遺構出土遺物実測図―中近世遺物―
 第283図 上谷戸第1号掘立柱建物跡遺構平面図
 第284図 上谷戸第1号石組み遺構平面図
 第285図 上谷戸第1号石組み遺構出土遺物実測図(1)
 第286図 上谷戸第1号石組み遺構出土遺物実測図(2)
 第287図 上谷戸第1号石組み遺構出土遺物実測図(3)
 第288図 上谷戸第1号井戸跡遺構平面図
 第289図 上谷戸第1号井戸跡出土遺物実測図
 第290図 上谷戸第2号井戸跡遺構平面図
 第291図 上谷戸第2号井戸跡出土遺物実測図
 第292図 上谷戸第1号～第6号土坑遺構平面図
 第293図 上谷戸第7号～第19号土坑遺構平面図
 第294図 上谷戸第20号・第21号土坑遺構平面図
 第295図 上谷戸第22号土坑遺構平面図
 第296図 上谷戸第22号土坑出土遺物実測図
 第297図 上谷戸第23号土坑遺構平面図
 第298図 上谷戸第24号土坑遺構平面図
 第299図 上谷戸第24号土坑出土遺物実測図

第300図	上谷戸第25号土坑遺構平面図	第330図	上谷戸調査区出土遺物実測図(7)―板碑―
第301図	上谷戸第26号土坑遺構平面図	第331図	上谷戸調査区出土遺物実測図(8)―板碑・石臼―
第302図	上谷戸第26号土坑出土遺物実測図	第332図	簗川流域敷石住居検出遺跡分布図
第303図	上谷戸第27号土坑遺構平面図	第333図	簗川流域検出の敷石住居跡変遷図
第304図	上谷戸第27号土坑出土遺物実測図	第334図	臨池伽藍寺院遺構集成図(1)
第305図	上谷戸第28号土坑遺構平面図	第335図	臨池伽藍寺院遺構集成図(2)
第306図	上谷戸第29号土坑遺構平面図	第336図	大御堂寺院址寺域推定図
第307図	上谷戸第29号土坑出土遺物実測図	第337図	大御堂寺院址遺物分布図(1)―瓦―
第308図	上谷戸第30号土坑遺構平面図	第338図	大御堂寺院址出土瓦当文様分類図
第309図	上谷戸第30号土坑出土遺物実測図	第339図	中世瓦集成図
第310図	上谷戸第31号～第33号・第36号・第37号土坑遺構平面図	第340図	大御堂寺院址遺物分布図(2)―土師質土器―
第311図	上谷戸第34号土坑遺構平面図	第341図	大御堂寺院址出土土師皿編年図(1)
第312図	上谷戸第34号土坑出土遺物実測図	第342図	大御堂寺院址出土土師皿編年図(2)
第313図	上谷戸第35号土坑遺構平面図	第343図	大御堂寺院址遺物分布図(3)―輸入磁器―
第314図	上谷戸第35号土坑出土遺物実測図	第344図	大御堂寺院址遺物分布図(4)―軟質陶器―
第315図	上谷戸第38号土坑遺構平面図	第345図	大御堂寺院址遺物分布図(5)―陶器―
第316図	上谷戸第38号土坑出土遺物実測図	第346図	大御堂寺院址遺物分布図(6)―磁器―
第317図	上谷戸調査区出土遺物実測図(4)―土師質土器―	第347図	大御堂寺院址遺物分布図(7)―鉄製品―
第318図	上谷戸調査区出土遺物実測図(5)―軟質陶器・陶器(摺鉢類)―	第348図	大御堂寺院址遺物分布図(8)―銭貨―
第319図	上谷戸調査区出土遺物実測図(6)―陶器(摺鉢類)―	第349図	群馬県内輸入磁器出土遺跡分布図
第320図	上谷戸調査区出土遺物実測図(7)―軟質陶器―	第350図	三角ダイヤグラム位置図
第321図	上谷戸調査区出土遺物実測図(8)―軟質陶器―	第351図	菱形ダイヤグラム位置図
第322図	上谷戸調査区出土遺物実測図(9)―磁器―	第352図	Mo, Mi, Hb 三角ダイヤグラム
第323図	上谷戸調査区出土遺物実測図(10)―磁器―	第353図	Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム
第324図	上谷戸調査区出土遺物実測図(11)―磁器―	第354図	Qt-P1相関図分析資料実測図
第325図	上谷戸調査区出土遺物実測図(12)―陶器―	第355図	Qt-P1相関図―瓦・土師質土器―
第326図	上谷戸調査区出土遺物実測図(13)―陶器―	第356図	Qt-P1相関図―縄文土器―
第327図	上谷戸調査区出土遺物実測図(14)―陶器―	第357図	Qt-P1相関図―弥生土器―
第328図	上谷戸調査区出土遺物実測図(15)―銭貨・鉄製品―	第358図	X線回析図型(1)
第329図	上谷戸調査区出土遺物実測図(16)―板碑―	第359図	X線回析図型(2)
		第360図	X線回析図型(3)

写真図版目次

《遺構写真》		写真図版 28	大御堂調査区・火葬跡
写真図版 1	白石大御堂遺跡空中写真	写真図版 29	大御堂調査区・火葬跡
写真図版 2	白石大御堂遺跡空中写真	写真図版 30	大御堂調査区・火葬跡
写真図版 3	大御堂調査区寺院址空中写真	写真図版 31	大御堂調査区・火葬跡
写真図版 4	大御堂調査区寺院址作業風景	写真図版 32	大御堂調査区・火葬跡・火葬墓
写真図版 5	大御堂調査区寺院址作業風景	写真図版 33	大御堂調査区・火葬墓
写真図版 6	大御堂調査区寺院址西部	写真図版 34	大御堂調査区・火葬墓
写真図版 7	大御堂調査区寺院址西部	写真図版 35	大御堂調査区・土坑墓
写真図版 8	大御堂調査区寺院址南西部	写真図版 36	大御堂調査区・土坑墓・土墳
写真図版 9	大御堂調査区寺院址南西部	写真図版 37	大御堂調査区中央部遺構・遺物出土状況
写真図版 10	大御堂調査区寺院址南西部～中央部	写真図版 38	大御堂第1号敷石住居跡
写真図版 11	大御堂調査区寺院址北西部	写真図版 39	大御堂第2号敷石住居跡
写真図版 12	大御堂調査区寺院址中央部北縁	写真図版 40	大御堂調査区・C区
写真図版 13	大御堂調査区寺院址北池遣水遺構	写真図版 41	大御堂調査区・C区掘立柱建物跡
写真図版 14	大御堂調査区寺院址園池遺構	写真図版 42	大御堂調査区・C区溝状遺構
写真図版 15	大御堂調査区寺院址園池遺構	写真図版 43	大御堂調査区・C区井戸・溝状遺構・C・D・E区全景
写真図版 16	大御堂調査区寺院址園池遺構	写真図版 44	前原調査区全景
写真図版 17	大御堂調査区寺院址園池遺構	写真図版 45	前原第1号住居跡
写真図版 18	大御堂調査区寺院址南池遣水遺構	写真図版 46	前原第2号住居跡・土坑
写真図版 19	大御堂調査区寺院址南池遣水遺構	写真図版 47	前原調査区・土坑
写真図版 20	大御堂調査区寺院址南池遣水遺構	写真図版 48	前原調査区屋敷跡全景
写真図版 21	大御堂調査区寺院址東部	写真図版 49	前原調査区・溝状跡・掘立柱建物跡・道路跡
写真図版 22	大御堂調査区寺院址東部	写真図版 50	前原調査区・中近世遺構
写真図版 23	大御堂調査区寺院址東部	写真図版 51	上谷戸調査区・全景・住居跡
写真図版 24	大御堂第1号配石墓	写真図版 52	上谷戸調査区・住居跡
写真図版 25	大御堂第1号配石墓・第1号濠	写真図版 53	上谷戸調査区・住居跡・1号集石遺構
写真図版 26	大御堂調査区西部埋葬関連遺構	写真図版 54	上谷戸調査区・溝状遺構
写真図版 27	大御堂調査区西部埋葬関連遺構		

- 写真図版 55 上谷戸調査区近世屋敷跡
 写真図版 56 上谷戸調査区近世屋敷跡
 写真図版 57 上谷戸調査区近世屋敷跡
 写真図版 58 上谷戸調査区近世屋敷跡
 写真図版 59 上谷戸調査区・土坑
 写真図版 60 上谷戸調査区・土坑
 写真図版 61 上谷戸調査区・土坑遺物出土状況
 写真図版 62 上谷戸調査区・土坑遺物出土状況
 写真図版 63 白石村絵図
 《遺物写真》
 写真図版 64 大御堂調査区・縄文
 写真図版 65 大御堂調査区・縄文
 写真図版 66 大御堂調査区・弥生
 写真図版 67 大御堂調査区・弥生・土師・陶器
 写真図版 68 大御堂調査区・土師質土器
 写真図版 69 大御堂調査区・土師質土器・陶器
 写真図版 70 大御堂調査区・土師質土器
 写真図版 71 大御堂調査区・土師質土器・軟質陶器
 写真図版 72 大御堂調査区・軟質陶器・陶器
 写真図版 73 大御堂調査区・陶磁器
 写真図版 74 大御堂調査区・陶磁器
 写真図版 75 大御堂調査区・鬼瓦
 写真図版 76 大御堂調査区・瓦
 写真図版 77 大御堂調査区・瓦
 写真図版 78 大御堂調査区・瓦
 写真図版 79 大御堂調査区・瓦
 写真図版 80 大御堂調査区・瓦
 写真図版 81 大御堂調査区・瓦
 写真図版 82 大御堂調査区・瓦
 写真図版 83 大御堂調査区・瓦
 写真図版 84 大御堂調査区・瓦
 写真図版 85 大御堂調査区・瓦
 写真図版 86 大御堂調査区・瓦
 写真図版 87 大御堂調査区・瓦
 写真図版 88 大御堂調査区・瓦
 写真図版 89 大御堂調査区・瓦
 写真図版 90 大御堂調査区・瓦
 写真図版 91 大御堂調査区・瓦
 写真図版 92 大御堂調査区・瓦
 写真図版 93 大御堂調査区・瓦・石製品
 写真図版 94 大御堂調査区・錢貨
 写真図版 95 大御堂調査区・鉄製品
 写真図版 96 大御堂調査区・鉄製品
 写真図版 97 大御堂調査区・鉄製品
 写真図版 98 大御堂調査区・鉄製品
 写真図版 99 大御堂調査区・鉄製品
 写真図版100 大御堂調査区・鉄製品・金属製品
 写真図版101 大御堂調査区・石造物
 写真図版102 大御堂調査区・石造物
 写真図版103 大御堂調査区・石造物
 写真図版104 大御堂調査区・石造物
 写真図版105 前原調査区・縄文
 写真図版106 前原調査区・中近世
 写真図版107 前原調査区・軟質陶器
 写真図版108 前原調査区・土坑遺物・錢貨・陶磁器
 写真図版109 上谷戸調査区・縄文・土師
 写真図版110 上谷戸調査区・住居跡出土遺物
 写真図版111 上谷戸調査区・住居跡出土遺物
 写真図版112 上谷戸調査区・住居跡出土遺物
 写真図版113 上谷戸調査区・土師質土器・軟質陶器
 写真図版114 上谷戸調査区・土師質土器・陶器
 写真図版115 上谷戸調査区・陶器・軟質陶器
 写真図版116 上谷戸調査区・磁器
 写真図版117 上谷戸調査区・磁器
 写真図版118 上谷戸調査区・磁器
 写真図版119 上谷戸調査区・磁器・陶器
 写真図版120 上谷戸調査区・陶器
 写真図版121 上谷戸調査区・陶器
 写真図版122 上谷戸調査区・陶器
 写真図版123 上谷戸調査区・陶器・石製品
 写真図版124 上谷戸調査区・軟質陶器・石造物
 写真図版125 上谷戸調査区・陶磁器
 写真図版126 上谷戸調査区・陶磁器
 写真図版127 上谷戸調査区・軟質陶器・陶磁器・錢貨・銅製品
 写真図版128 上谷戸調査区・陶磁器
 写真図版129 上谷戸調査区・石造物
 写真図版130 上谷戸調査区・石造物
 写真図版131 大御堂第1号配石墓出土人骨
 写真図版132 大御堂寺院址出土遺物胎土分析写真

抄 録

1 遺跡の概略

白石大御堂遺跡は、群馬県藤岡市大字白石字大御堂・前原・上谷戸地内に所在する遺跡で、上信越自動車道（関越道上越線）の建設工事に伴い、路線内の埋蔵文化財の記録保存を目的として、発掘調査が昭和62年4月より平成元年3月までの期間に、整理事業が平成2年4月より平成3年3月まで実施された。

遺跡は藤岡市街地の西方、鮎川左岸河岸段丘上の標高105m～140mのところ広がる。調査区域は長さ約800m（幅約70m）にわたり、地形的には東から鮎川左岸上の沖積低地面（大御堂調査区）・洪積台地面（前原調査区）・丘陵山麓地形（上谷戸調査区）とに区分でき、調査前には主に水田・畑地として利用されていた。調査により縄文・古墳・平安の各時代の住居跡、中世の寺院址・埋葬遺構群、中近世の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑などが検出された。調査により確認され報告する遺構・遺物は下表のとうりである。（報告遺構件数196件）

2 遺構数量

時代種別	ブレ	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	不明	住居跡	掘立柱建物跡	井戸跡	溝状遺構	池・濠・土塁	墓跡	土 坑	備 考
大御堂		◆	◆	◆			◆	◆		縄文 2	中世19	2	22	2・2・1	31	7	寺院址(中世) 1
調査区		◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇			柵列 2			池状 1		(1)	埋葬遺構群 1
前 原		◆					◆	◆	◆	縄文 2	9	1	2		(1)	12	屋敷跡 1
調査区		◇		◇		◇	◇	◇						道路 1			
上谷戸				◆		◆		◆		古墳 2	1	井戸 2	23		(1)	38	屋敷跡(近世) 2
調査区	◇	◇		◇		◇	◇	◇		平安 3		石組 1				集石 1	
※遺物	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	遺構	9	31	6	49	7	31	58	5

（凡例 ◆遺構検出 ◇遺物出土）

3 ま と め

先土器・縄文・弥生時代 前原調査区で尖頭器が1点、表採ではあるが確認された。縄文時代の遺構は、前原調査区（D区）で竪穴住居跡が2軒、大御堂調査区（C区）で敷石住居跡が2軒検出されたほか、前原調査区で土坑が検出された。いずれも中期後半である。遺物は前期から確認され、中期のものが多く、C区では晩期から弥生時代初期（中期初頭）の土器もまとまって出土している。

古墳～平安時代 上谷戸調査区の丘陵斜面部で竪穴住居跡が5軒（古墳2、平安3）確認された。ここでは古式の土師器片もややまとまって出土している。大御堂～前原調査区では、土師器・須恵器・埴輪片などの遺物が少量出土しており、C区では溝が1条確認されている。

中世・近世 大御堂調査区で、中世創建と考えられる寺院址を検出した。寺院の堂宇を確認するには至らなかったものの、濠・土塁・溝・池及び井戸跡・掘立柱建物跡などの寺院施設を構成すると考えられる遺構群と、瓦・中世土器・陶磁器類・金属製品などを初めとする多種多量の遺物が出土しており、「アマダイケ」「大御堂」等の地名伝承を裏付ける結果となった。更に、大御堂調査区の西半（C区）においては2つの掘立柱建物跡群が方形に区画された溝とともに検出され、寺院址とも何らかの関連性をもつものと考えられる。また、寺院址では埋葬関連の遺構（配石墓・火葬跡・火葬墓・土坑墓・土壙等）がまとまって検出された。特

に、配石墓は寺院址のほぼ中央部に位置し、骨蔵器も出土して、寺院との関連が注目される。このほか、前原調査区で溝に囲まれた掘立柱建物跡群が、上谷戸調査区でも近世の屋敷跡とみられる遺構があり大量の近世陶磁器類を出土している。今回の調査では、鮎川左岸の沖積低地面（大御堂調査区）・洪積台地面（前原調査区）・丘陵山麓地形（上谷戸調査区）への各時代の土地開発状況の一端が明らかになった。特に、沖積低地面からの縄文時代敷石住居跡・中世寺院址の検出は、従来あまり注目されなかった立地条件でもあり、今後、当該地域における地域史の研究を進めるうえで重要な遺跡・遺構であると言える。

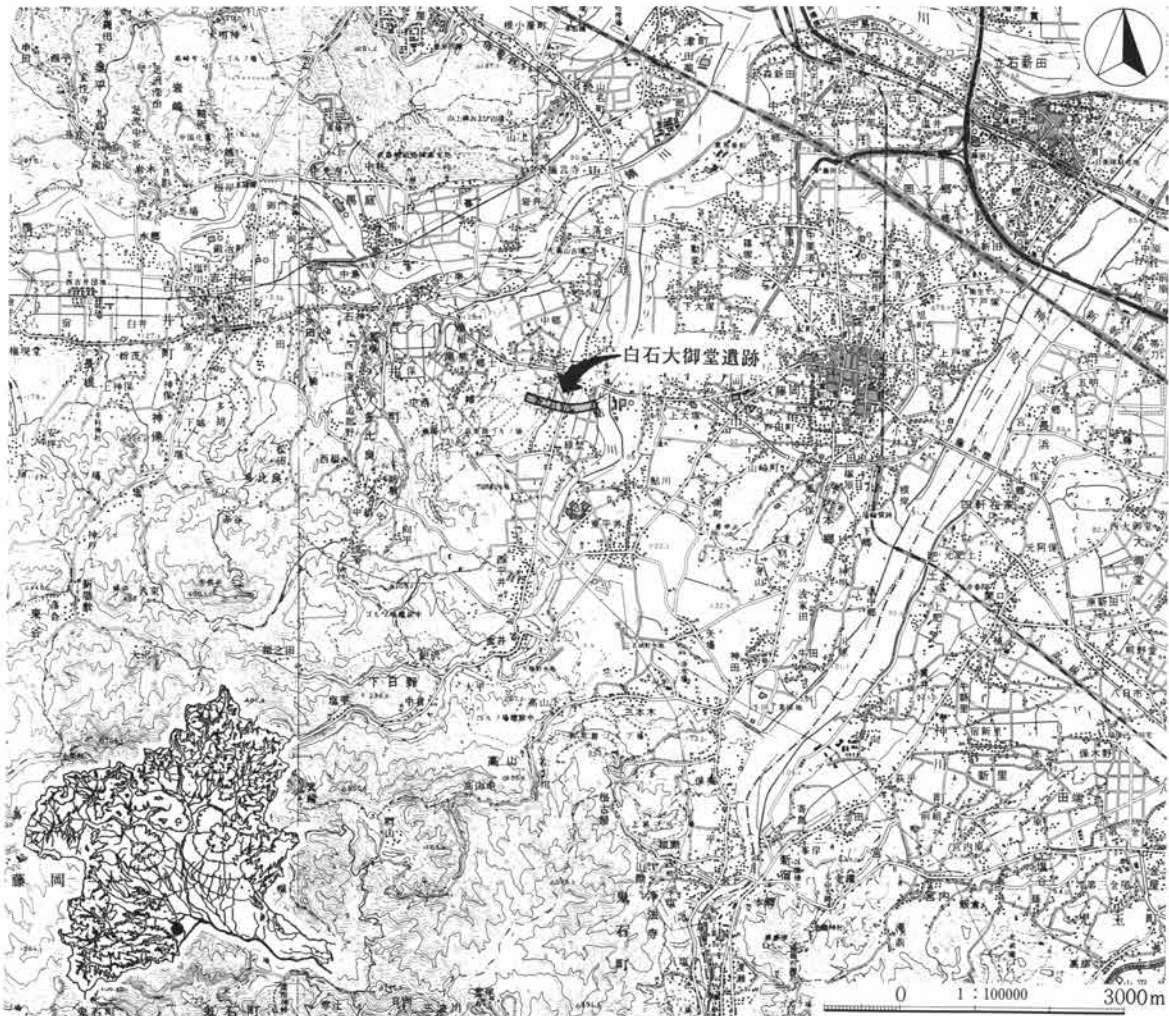
第I章 調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

1 上信越自動車道の建設工事と白石大御堂遺跡の発掘調査

昭和37年10月、全国総合開発計画が閣議決定された。高度経済成長の達成と所得格差拡大の是正、地域間の均衡ある発展をその骨子とし、昭和45年を目標年次として策定された。特に地域発展の要素として、交通運輸手段・道路網の整備が大きくクローズアップされた。そうした中で関越自動車道直江津線（上越線）は、国土の発展と産業の振興、関東と日本海側・中部地域との連携などを基本として昭和41年度に予定路線として第一次調査が実施された。

昭和44年5月、全国総合開発計画を受け、新全国総合開発計画（新全総）が決定された。これは昭和60年度を達成目標とし、引き続き高度経済成長を目指したもので、人口と産業の大都市集中を是正し、情報化、



第1図 白石大御堂遺跡位置図

第I章 調査の経過

国際化、技術革新の進展を図り、開発の全国土への拡大と均衡化、開発に伴う大プロジェクト構想を骨子とするものである。

昭和47年6月、関越自動車道直江津線の建設は、先の第一次調査の結果を経て第22回国土開発幹線自動車道建設審議会に諮られ、基本計画が告示された。建設路線の起点は藤岡市から長野市までの区間とし、以降昭和48年11月、更に長野市から上越市まで、東京練馬インターを起点として総延長280kmの区間の基本計画が決定された。

折りしも、日本列島改造論が国土開発の中核として浮上し、新全総計画の中に盛り込まれた。日本列島改造計画は、都市部に集中した工業の地方分散を図り、新25万人都市作りにより、都市への一極集中を是正する。更に全国一日通勤圏構想として主要都市間を新幹線と高速道路網で結ぶ事がその骨子であった。特に列島改造論の中に新潟地区、松本・諏訪地区が新産業都市構想の中に位置付けられ、新幹線並びに高速自動車道路の早期着手は関東と中部・日本海側を結ぶ動脈としてその重要性が提起された。こうした状況の中で関越自動車道直江津線は、昭和48年第一次石油ショックによる若干の影響を受けながらも、その後の事業計画の中で起点を藤岡市とし、長野県佐久市に至る全区間4車線67kmについての計画が策定された。

昭和49年5月、群馬県教育委員会では当該事業にかかる路線決定にあたり、藤岡市から下仁田町に至る文化財並びに埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて、群馬県企画部幹線交通課あて次のとおり要請した。(1)基本計画ルート決定に際し、文化財保護法を遵守する。(2)市町村並びに県、国指定史跡を避ける。(3)文化財の取り扱いについては県教育委員会と協議する。

昭和52年11月、第三次全国総合開発計画（三全総）が10年間を目途として策定された。三全総では従来の高度成長経済から安定成長経済へ、更に国土資源・エネルギーの有効利用、人間居住の総合的環境整備などの方向性が提起された。

昭和53年5月、建設省から「関越自動車道（直江津線）藤岡・佐久間に関する環境影響調査報告書」（環境アセスメント）が提示された。この中で路線決定に際し、先に行った文化財保護課の要請に基づいて、動・植物の生態系を含め、主要な文化財については特に留意するとの方向性が提示された。

昭和54年、建設大臣より日本道路公団に対し、関越自動車道上越線の工事施行命令が下された。

昭和55年、群馬県教育委員会文化財保護課では通過周辺市町村における埋蔵文化財分布調査を実施し、「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」を作成した。

昭和56年、群馬県藤岡市（5.6km）、吉井町（6.3km）、甘楽町（4.3km）、富岡市（11.6km）、妙義町（2.5km）、松井田町（19.5km）、下仁田町（5.3km）、長野県佐久市（11.9km）を通過する路線が発表され、昭和59年に県教育委員会では予定路線にかかる埋蔵文化財包蔵地の詳細分布調査を行った。その結果、遺跡地の分布状況から濃・淡及び要試掘区域とに区分した。遺跡数では55遺跡、発掘対象面積はおよそ100万㎡となった。

県教育委員会ではかねてより日本道路公団と埋蔵文化財発掘調査について協議を行ってきたが、昭和60年度に次の事項について合意に至った。

(1)発掘調査は昭和66年に終了する。(2)調査は(勸)群馬県埋蔵文化財調査事業団が富岡市以東の約76万㎡について主に実施し、富岡市以西の約22万㎡については調査会方式の導入を図るほか、関係市町村にたいし円滑な調査協力を依頼する。(3)(勸)群馬県埋蔵文化財調査事業団に調査に必要な事務所を開設し、併せて整理作業を実施する。調査の実施は日本道路公団東京第二建設局が群馬県教育委員会に依頼する。

昭和61年度、(勸)群馬県埋蔵文化財調査事業団関越道上越線調査事務所が多野郡吉井町南陽台3-15-8に開設され、職員15人体制で矢田・羽田倉・田篠・西平城の各遺跡について発掘調査を実施した。なお、妙義町

古立II遺跡について、妙義町遺跡調査会が発足し、調査を実施した。

昭和62年度、上越線調査事務所では6班22人体制をもって、大御堂・栗崎八幡・矢田・羽田倉・田篠・内匠下高瀬・上神保・植松・塩之入城東・井出・安坪の各遺跡について調査を実施した。なお、当該年度に藤岡市において新堀・稻荷屋敷、下仁田町遺跡調査会で杣瀬、松井田町遺跡調査会で恩賀の各遺跡についてそれぞれ調査を実施した。また、群馬県教育委員会では遺跡地の範囲等の確認のため予定路線内の試掘調査を実施した。

大御堂遺跡は藤岡市白石字大御堂・前原・上谷戸に位置し路線長はほぼ800m、調査対象面積は35,000㎡であった。調査に際し、東より100m毎にA～G区までのグリッドを設定した。

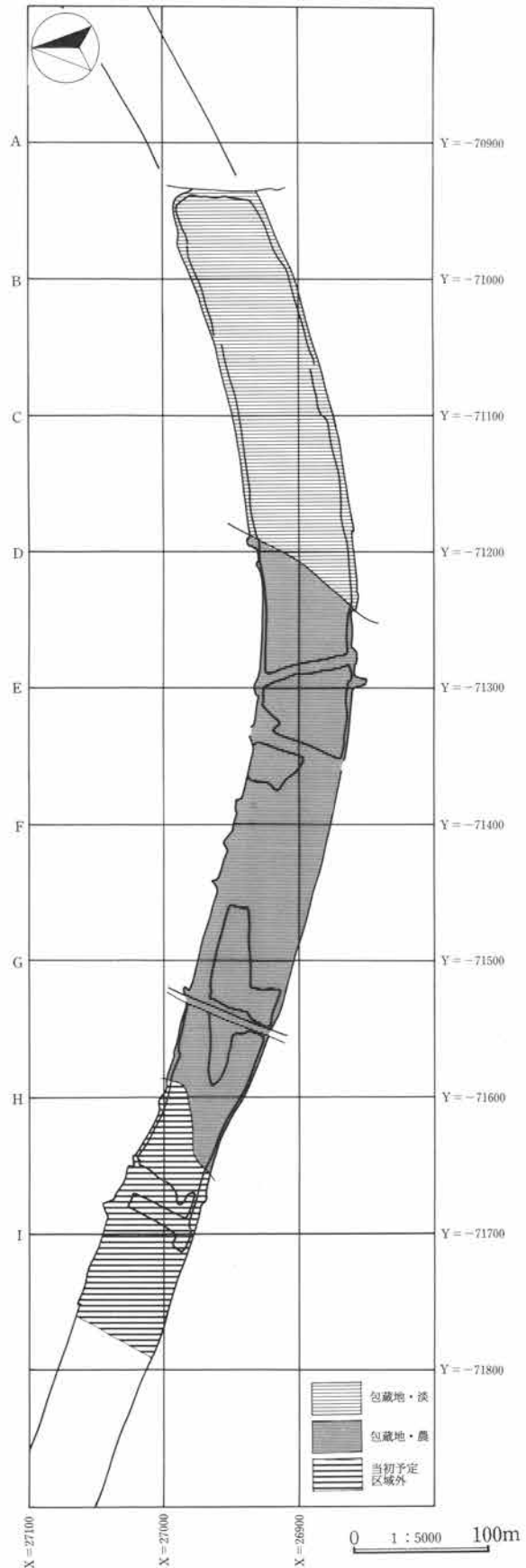
調査に先立ち、日本道路公団高崎工事事務所から鮎川橋梁部分の工事を先行するため、A区の東端約2,000㎡について最優先区間として調査を実施してほしい旨の依頼があった。このため調査は当該地のA区に着手し、続いてD区(4,100㎡)、A・B区(10,500㎡)の順に実施したものである。また、A区にかかる園池遺構が農道下にあたるため、藤岡市と協議の結果、この部分に迂回路を設置することにより、園池遺構の全容が解明されるに至った。(原田恒弘)

2 白石大御堂遺跡の調査

(1) 発掘調査・整理事業の概要

白石大御堂遺跡（事業名称＝大御堂遺跡）の発掘調査事業は昭和62年度・昭和63年度の2カ年にわたって実施された。当初計画で調査対象となったのは、関越道上越線建設予定地のうち鮎川橋梁部分より西側の、路線長約700mの区間(STA.67～STA.75)である。

発掘調査は群馬県教育委員会の委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団関越道上越線建設予定地内の埋蔵文化財の発掘調査が開始されてから2年目の昭和62年度から実施されることとなった。当



第2図 白石大御堂遺跡調査範囲図(1)

第I章 調査の経過

初の計画では、分布調査及び過去における周辺遺跡の調査例などから、沖積低地面に比べて洪積台地面での埋蔵文化財の濃密な包蔵が予想されており、その包蔵予想面積は約35,000㎡(低地面9,800㎡、台地面25,200㎡)であった。(第2図)

発掘調査は、鮎川橋梁工事予定地部分、県道金井倉賀野停車場線袴線橋部分を順次優先して着手するというを前提に、用地買収の進展の具合を見ながら、基本的には東から西へ進めるという方針で、昭和62年度にはA区、D区、B区の順に、昭和63年度はそれを継続する形でB区、C区、E区、F区、G区、H区の順に発掘調査を実施した。

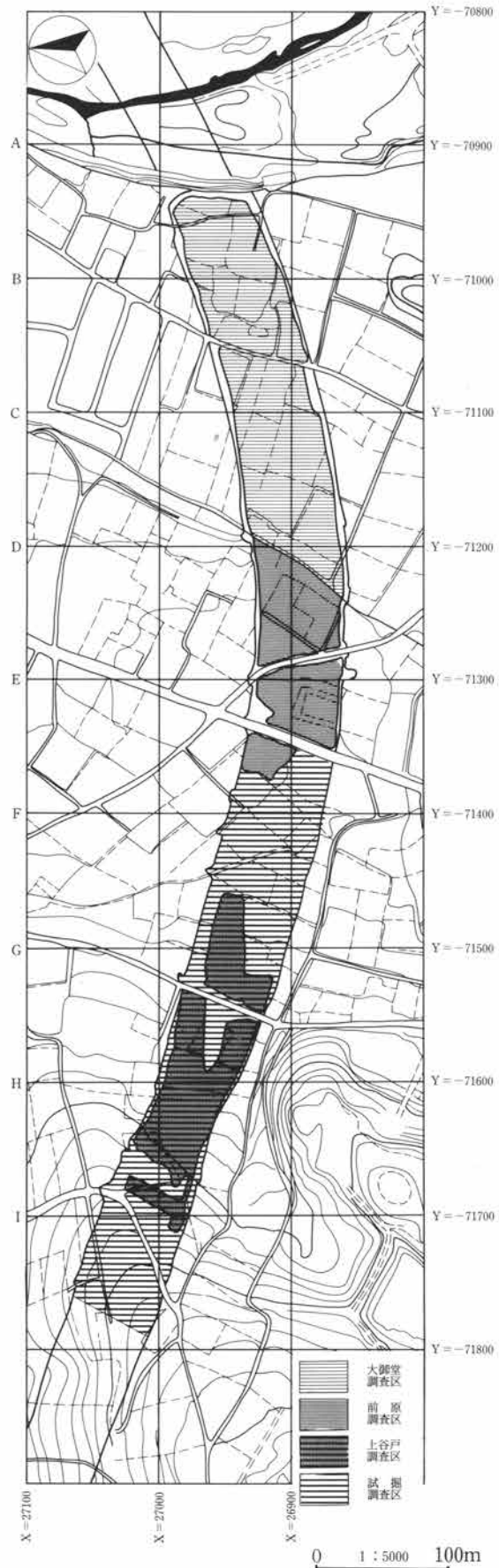
発掘調査実施の過程でいくつか当初計画の方針の変更があった。そのひとつは、調査区域には含まれていなかった西側丘陵部分の調査対象区域への編入とそれに伴う試掘調査の実施であり、もう一点は、調査実績に基づく調査対象面積の算定方法の変更である。この結果、昭和62・63年度を合計した発掘調査面積は総計で55,000㎡ということになる。

以下、発掘調査・整理事業のあらましについて述べる。

(2) 昭和62年度発掘調査事業

白石大御堂遺跡の発掘調査は、鮎川橋梁工事という道路公団側の優先着工区間に関わることから、関越道上越線の調査開始2年目に実施することとなった。昭和62年度の発掘調査事業は、鮎川橋梁工事による早期引き渡し予定工区のA区から着手し、その後、洪積台地面のD区の調査を実施した後、再び低地面のA区の残り部分とそれに続くB区の調査を実施するという工程にしたがって、62年4月20日より現場での諸作業を開始し、4月28日の発掘作業員募集説明会をへて、5月1日より本格的に着手し、63年3月25日まで実施した。

大御堂調査区の東半分にあたるA・B区の調査では、中世創建の寺院址が検出された。この寺院址では濠・溝・土塁・池等の寺院施設と考えられる遺構、火葬跡・火葬墓をはじめとした埋葬遺構群、近世以降の土地利用を物語る溝等の遺構と、中近世の土



第3図 白石大御堂遺跡調査範囲図(2)

器・陶磁器・瓦類などをはじめとし、石造物・石製品、銭貨・鉄製品等、多様な遺物が出土している。また、前原調査区の東半分にあたるD区の調査では縄文時代の住居跡・土坑等が確認された。

昭和62年度の調査の主眼は大御堂調査区（A・B区）の中世寺院址におかれたが、ほぼ全容が明らかになった2月末の段階で遺構全景の空中写真撮影を実施し、調査成果の公表をすべく現地説明会を2月19・20日の両日にわたり開催した。寺院址部分については更に調査を続け、寺院創建時の遺構面の検出に努めた。

(3) 昭和63年度発掘調査事業

昭和63年度の発掘調査事業は、年度当初に担当者1名の交替もあって、4月12日より前年度事業を継続する形で再開し、平成元年3月3日に発掘調査現場におけるすべての調査を終了した。年度当初は前年度に実施した大御堂調査区（B区及びそれに西接するC区）の調査を行い、引き続き前原調査区（E・F区）、上谷戸（G・H区）の順に実施した。また、当初予定になかったマーク外（I区）の試掘調査も併せて実施した。

大御堂調査区は西半分（B区西半とC区）が調査対象となったが、東側の中世寺院址の遺構（掘り方）底面の確認作業と並行して遺構検出を行った。遺構確認面は2面あり、上層（中近世遺構面）では溝状遺構・掘立柱建物跡・井戸跡などが確認され、下層では縄文時代の敷石住居跡2軒と遺物散布地が検出された。

前原・上谷戸調査区は遺構の残存状況があまり良好とは言えず、また、調査対象区域内に宅地・墓地等もあって調査の進行に影響を与えた。前原調査区はE区東半の県道東部分と県道西部分でそれぞれ掘立柱建物跡群を検出した。前原調査区は遺構の残存状況が悪く、表土（耕作土）層下はすぐにローム面となり、この間の地層の堆積は認められず、耕作の直接的な遺構面への作用もあって遺構確認は困難であった。また、前原調査区と上谷戸調査区との間（F区）はトレンチによる試掘調査で遺構・遺物が検出されず、遺構・遺物の包含層とみなされる層位の確認もなかったため、試掘調査のみとして、全面発掘は行なわなかった。

上谷戸調査区の調査において、当初計画された範囲は美濃山丘陵の裾までで、丘陵斜面部は含まれていなかったが、この丘陵斜面部が藤岡市教育委員会実施の遺跡詳細分布調査で埋蔵文化財の包蔵が確認されていることが判明し（平井地区No.14遺跡）、県教委・道路公団と協議した結果、調査対象区域に取り入れ試掘調査を実施することとなった。上谷戸調査区では、当初から予定されていた丘陵裾部（G・H区）で近世の屋敷跡と考えられる井戸跡・溝・土坑などの遺構が陶磁器類を中心とする出土遺物とともに検出され、丘陵斜面部（H区・マーク外＝I区）では古墳～平安時代の竪穴住居跡5軒が検出された。

63年度の調査では全般に遺構覆土が薄く、表土掘削後はすぐに洪積台地を形成するローム面となるため、遺構の残存状況は極めて悪く、試掘調査のみの区域もあって、広い面積にかかわらず調査が早く進行した。

(4) 平成2年度整理事業

白石大御堂遺跡の整理事業は平成2年度事業として計画され、多野郡吉井町南陽台にある関越道上越線調査事務所整理棟に於いて平成2年4月より、平成3年3月末まで実施された。整理事業は遺構・遺物の種別が多岐に亙り、一部復元困難な遺物や保存処理を必要とするものが多くあり、進捗状況ははかばかしくなかったが、関係者の労苦を惜しまぬ協力により予定期間内での作業は達成することができた。（綿貫鋭次郎）

1990. 4月	整理事業開始。遺物分類・仕分け作業。	10月	遺物・遺構図版作成、観察表・原稿執筆。
5月	遺物分類・接合・復原作業。	11月	遺物・遺構図版作成、観察表・原稿執筆。
6月	遺物分類・接合・復原作業。	12月	図版作成・図版組み、観察表・原稿執筆。
7月	遺物実測作業開始。瓦類拓本・実測。	1991. 1月	図版組み作業、観察表・原稿執筆。
8月	遺物実測作業。遺構図版作成作業。	2月	図版組み作業、原稿執筆、入札。
9月	遺物実測作業。遺構図版作成作業。	3月	校正、図面・写真・遺物収蔵作業。

第I章 調査の経過

第1表 発掘調査工程表

調査区	大御堂調査区					前原調査区					上谷戸調査区					1 調査期間 2 掘発 3 写真 4 写実 5 真測																								
	A		B			C		D			E		F				G		H			丘陵部			I															
年月	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5					
62・4																																								
5	↑	↑	↑	↑	↑						↑	↑	↑	↑	↑																									
6	↓	↓	↓	↓	↓						↓	↓	↓	↓	↓																									
7																																								
8																																								
9																																								
10																																								
11																																								
12																																								
63・1																																								
2																																								
3																																								
4																																								
5																																								
6																																								
7																																								
8																																								
9																																								
10																																								
11																																								
12																																								
元・1																																								
2																																								
3																																								
標高(m)	105.56	106.93	107.38	108.85		112.81	114.74	115.46	116.42		117.72	118.96	120.35	123.86		126.91	135.28	135.96	141.75																					
STA. No 中心杭(m)	STA. 66 +60	STA. 67 +90	STA. 69 +40	STA. 71 +00		STA. 71 +97	STA. 72 +80	STA. 73 +65	STA. 74 +55	STA. 75 +80	合計面積 (㎡)																													
調査面積	7965.11	9,263.73	8,678.37	4,087.50																																				
試掘面積																																								
区別合計	(A+B+C)		17,228.84	(D+E+F)		16,065.63	G+H+(丘陵部)+I		20,417.71																															

第2表 整理作業工程表

区分	年月	2/4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	3/1月	2月	3月	備考
遺物	接合				→									
	復元				→									
	実測							→						
	トレース										→			
	版下作成											→		
遺構	写真撮影		→	→			→							
	写真版組										→			
	原図整理					→								
	トレース											→		
	版下作成												→	
その他	写真版組									→				
	観察表				→	→						→		
	本文				→	→	→						→	
その他			→	→	→	→							→	

第2節 調査の方法と実施経過

1 調査の方法

(1) 調査区の設定

白石大御堂遺跡の発掘調査を実施するにあたり、遺跡・遺構の位置を明確にして記録保存上の便宜を図るため、調査区及び調査用グリッドを設定した。調査用グリッドは日本直角座標系第IV座標軸に合致するように、 $X=27000$ 、 $Y=-70900$ を調査区北東隅基点として設定した。調査用グリッドは、4mを単位とする小グリッドとし、その呼称を北から南へは「0、1、2、3、……」の順に数字で、東から西へは「a、b、c、……w、x、y」の順にアルファベットで標記することとし、4m四方のグリッドの名称は北東隅の交点の名称をあてることとした。また、東から西へのアルファベット標記については100m毎に「A、B、C……」の順に大文字を冠し、「Aa00グリッド」のように表した。その際、大文字で標記した100m毎の大グリッドを東からA区、B区、C区……として発掘調査時の調査区名称とした。

なお、調査区の名称については、整理の過程でそれぞれの調査区における遺構・遺物の分布範囲及び性格の再検討を行い地形的要素を加味して、鮎川崖に接する沖積低地上のA・B・C区を「大御堂調査区」、遺跡中程の洪積台地上のD・E区を「前原調査区」、洪積台地面奥部から丘陵斜面部にかけて立地するF・G・H・I区を「上谷戸調査区」と、それぞれ小字名を冠して呼称することとした。また、遺跡名称は発掘調査時には「大御堂遺跡」という事業名称を使用していたが、大字小字連記により遺跡名称を決定するという当事業団に於ける申し合わせにしたがって『白石大御堂遺跡』と変更した。本報告書では『白石大御堂遺跡』は発掘調査の事業名称を意味するとともに、3つの性格を異にする遺跡(大御堂・前原・上谷戸の各調査区)の総称として取り扱い、その範囲は関越道上越線の路線内に限定されるものである。

(2) 発掘調査工程

《方法》

発掘調査は、①試掘トレンチを設定し土層観察及び遺構・遺物の包蔵状況の観察等を行った後に、②バックフォア等の大型重機により表土掘削を行い、③遺構面を精査して遺構の有無を確認し、④遺構を掘る、という手順で作業を実施した。表土掘削は、現耕作土とその下の浅間A軽石を含む層までとし、その段階(近世面)で最初の遺構確認作業を実施した。大御堂調査区(A・B・C区)では、A軽石層下(近世面)での遺構確認を行い、その後はグリッド毎に地山面(礫層)まで徐々に掘り下げ、それぞれの面で遺構検出を行った。前原調査区(D・E区)及び上谷戸調査区(F・G・H・I区)では表土掘削した段階ですでに地山面(ローム面)となったため、その面を遺構確認面として遺構検出を行った。

遺構の調査は、平面プランを確認し、土層観察用のセクションベルトを残して掘り下げるという方法で行ったが、大御堂調査区の寺院址のように全体がひとつの遺構と考えられる調査区では、グリッドに沿ってトレンチを設定し、セクションを観察しながら掘り下げ、遺構面を検出するという方法をとった。

調査記録は実測図面及び遺構写真として残した。道路公団の建設工事用引照杭から測量基準点をおこし、それをもとにほぼ8m方眼にグリッド杭を設定し実測用の測量基準杭とし、調査区全体の図葉割りを行って $S=1/20 \cdot 1/40$ を基本として図面を作成した。

《試掘》

当初の事業計画での遺跡地として認定について、調査段階で再検討せざるを得ない状況を生じたため、遺

第I章 調査の経過

跡の範囲及びその内容を把握するための試掘調査を実施した。包蔵の密度が濃いと予想された洪積台地面では、表土層下がローム面となり遺構・遺物の残存状況が悪く分布密度も比較的薄かったので、昭和63年度に入ってから試掘調査を実施した。その結果、前原調査区と上谷戸調査区の間の約100mの区間については遺構・遺物が確認できなかったため、試掘調査のみにとどめた。また、白石大御堂遺跡の西縁については、当初計画では美濃山からのびる丘陵の裾までであったが、この丘陵部が藤岡市教育委員会の詳細分布調査による平井地区No.14遺跡として周知されたものであることから、新たに調査範囲に加え試掘調査を実施した。

《調査範囲》

白石大御堂遺跡として調査されたのは鮎川崖から約870mの区間、日本道路公団設定の工事中心杭ナンバーではSTA.66+50～STA.75+80の区間である。各調査区の路線長・面積等は第3表に示した。

(3) 整理の経過

《基本整理》

出土遺物については発掘調査と並行して水洗・注記を行い、図面・写真類等についても発掘調査終了時までには点検・整理・分類等の基本整理を終了するよう作業を進めたが、その一部は整理作業に持ち越された。これらの調査資料は、発掘調査終了時に多野郡吉井町南陽台にある関越道上越線調査事務所に仮収蔵し、本格的な整理事業の実施を待った。収蔵遺物はコンテナバットで約200箱を数える。

《遺物・図面の注記》

遺物の注記は「遺跡名・グリッド名・遺構名・出土層位名・遺物番号」の順に行ったが、該等項目がない場合は省略した。遺跡名については大御堂調査区を「K J 白大」、前原調査区を「K J 白前」、上谷戸調査区を「K J 白上」と標記した。また、遺構名称については、遺構種別毎の略称を決めそれぞれの通番とした。本報告書で使用した遺構名称は整理段階で新たに命名したもので遺構の性格をふまえて再整理したものである。なお、遺物注記は発掘調査時のままとし、図面・写真については調査名に報告名を併記し、記録として保管することとした。

《整理事業》

調査報告書作成のための本格的整理作業は平成2年度に実施した。図版については、現場作成図面を元に各遺構毎に遺構平面図・土層断面図・遺物出土分布図を編集し、それを集成して遺構全体図を作成した。遺物については、取り上げたすべての遺物を対象に種別分類を実施し、報告遺物の選択を行った。取り上げた遺物は属性把握の可能性の残るものを整理対象として選択し、その中で資料化の可能なものを報告対象として掲載した。本遺跡を代表する考古学的な成果は大御堂調査区における中世寺院址遺構とその出土遺物であるが、それ以外にも、縄文時代の敷石住居跡や弥生時代初頭の土器及び中近世の屋敷跡などの調査類例が比較的少ない資料をはじめ、先土器時代より中近世に至るまでの各時代の遺物が比較的連続して検出されて、非常に豊富な内容を有する遺跡と言える。したがって、整理作業においても各時代の各種遺構・遺物をすべて対象とするという点で、通常よりも困難度・難易度の高い遺跡であり、すべてにおいてより専門的な知識を必要とする点では、多くの人々の手を煩わさるを得ず、また、整理にあたる補助員にも多大な苦勞をかけたことを特に記しておく。なお、発掘調査報告書作成にあたってはその記録保存を目的とすることに鑑み、できるだけ多くの資料の公開を目的としたが、種々の制約及び担当者の力量不足のため充分なものとなり得なかった。今後、本報告書を第二次資料としてより詳細な遺跡（遺構・遺物）の検討が行われることを望む。

《発掘調査日誌から》

《昭和62年度発掘調査事業》

昭和62年4月20日(月) 発掘調査の事前準備を終了し、現地での調査準備に取り掛かる。現場事務所設営のための用地の整地作業を行い、地元関係者関係機関へ調査開始の挨拶に向う。

《地元関係者》
平井地区地権者会、平井地区区長会、藤岡市教育委員会、藤岡市農協平井支所

4月21日(火) 事務所用プレハブ建て方工事開始、調査用地内の桑抜根を開始し、調査用品の搬入を始める。

4月27日(月) 電気・水道・ガス配管工事等終了し、事務所開設準備整う。前原調査区(D区)桑抜根完了。

4月28日(火) 大御堂調査区(A区)桑抜根開始。発掘作業員募集説明会を藤岡市農協平井支所にて行う。

4月30日(木) 桑抜根終了。発掘作業員採用予定者へ電話連絡。

5月1日(金) 本日より発掘調査作業開始。大御堂調査区(A区)重機による表土掘削開始。

5月6日(水) 大御堂調査区(A区農道東部分)遺構確認作業を始める。前原調査区(D区)トレンチ掘削開始。調査用基準点測量開始。

☆日本道路公団高崎工事事務所関係者来跡。

5月8日(金) A区での重機による表土掘削を終え、D区の表土掘削を開始する。

5月11日(月) A区溝状遺構を検出、遺構の掘り下げを始める。D区は表土掘削と平行して遺構確認作業を行う。

5月13日(水) A区近世～近代の溝・道路跡調査。発掘作業員への労働安全教育実施。

5月19日(火) A区溝状遺構確認(第16号・第17号)。D区遺構確認作業。

5月22日(金) A区溝状遺構掘り下げ、写真撮影・測量作業実施。

5月25日(月) A区溝状遺構は8条を確認し、近世以降の4条について掘り下げほぼ終了、中世溝4条は掘り下げ途中。土坑1基、ピット数個を掘り下げ。D区は表土掘削と平行して遺構確認作業を行う。

5月26日(火) A区・D区測量基準杭打ち。A区溝状遺構精査。

5月27日(水) A区溝状遺構の掘り下げ・写真撮影・平面測量。D区表土掘削終了、重機搬出。

5月28日(木) A区溝状遺構全景写真撮影。D区遺構確認作業。

5月29日(金) A区平面測量、写真撮影、トレンチ掘削。D区遺構確認、トレンチ掘削。

☆高崎市立城山小学校6年生、春の遠足で来跡し発掘調査現場を見学。

6月1日(月) A区中世溝状遺構精査(第15号・第16号・第17号)。D区遺構確認。

6月2日(火) A区、モニタリングカメラを使用して、遺構全景写真撮影を実施。「アミダイケ」伝承地草刈。D区遺構確認。

6月4日(木) A区溝状遺構写真撮影、遺構測量。鮎川橋梁工事予定地引き渡し部分の調査終了。D区遺構確認作業。

6月5日(金) A区遺構測量、D区遺物取り上げ。

6月9日(火) A区道路跡精査、トレンチ掘削。D区遺構面精査。

6月11日(木) A区遺物取り上げ、遺構測量。D区耕作攪乱土掘り下げ。作業員健康診断実施。

6月18日(木) D区遺構掘り下げ、写真撮影、遺物取り上げ。B・C区草刈り作業。「アミダイケ」付近の現況測量。

6月22日(月) B区草刈り。D区耕作攪乱土掘り下げ、住居

跡・土坑検出。

6月23日(火) C区調査区北縁のトレンチ掘削を実施。D区縄文住居跡(第1号住居跡)遺物出土状況写真撮影。

☆藤岡市市教委文化財係長・農政課土地改良係長来跡。

6月25日(木) D区住居跡確認(第2号住居跡)。C区トレンチ測量。B区トレンチ設定。

☆「アミダイケ」旧地権者郡秀男氏を施主として寺院址の地鎮祭を行う。

6月26日(金) B区試掘トレンチ掘り下げ。D区第2号住居跡写真撮影。

7月1日(水) B・C区トレンチ掘り下げ、断面測量。D区遺構面精査。

7月6日(月) A区残り部分、重機による表土掘削。B区トレンチ測量・写真撮影。

7月7日(火) A区遺構面精査、池跡掘り下げ。B区トレンチ測量・写真撮影。重機による表土掘削。D区耕作攪乱土掘り下げ。

7月9日(木) A区遺構面精査、池跡掘り下げ。B区遺構面精査、軒平瓦出土。重機による表土掘削。D区耕作攪乱土掘り下げ、ピット・土坑の掘り下げと測量・写真撮影。

7月10日(金) A区池跡写真撮影・測量。B区表土掘削、園池遺構を確認。測量基準杭打ち。中央部で軒平瓦出土。D区耕作攪乱土掘り下げ、ピット・土坑測量、写真撮影。

7月13日(月) B区表土掘削、近世畠作遺構検出。草刈り。D区耕作攪乱土掘り下げ。住居跡・土坑検出。

7月15日(水) B区表土掘削、遺構検出、銭貨出土「治平元寶」。調査区北壁、測量・写真撮影。D区遺構平面測量。
(この頃、降雨しばしば有り、遺構水没して作業はかどらず。)

7月22日(水) B区調査区北壁写真撮影。遺構内の水の掻き出し、北西部瓦溜まり検出。D区遺構平面測量。

7月23日(木) A・B区園池遺構排水作業にコンプレッサー・排水ポンプを導入、以後園池遺構の調査必需品として活躍する。D区台地縁辺部精査、遺構平面測量。

7月27日(月) A・B区園池遺構平面プラン確認、1号池～3号池と調査名をつけ、浅間A軽石層の掘り下げを行う。

7月29日(水) A・B区園池遺構浅間A軽石層の掘り下げ、遺物取り上げ。北西部瓦溜まり写真撮影。

8月4日(火) A・B区園池遺構掘り下げ、ベルトコンベヤー搬入。以後大活躍する。

8月6日(木) A・B区園池遺構掘り下げ。D区住居跡・土坑掘り下げ、掘立柱建物跡測量。

8月7日(金) A・B区園池遺構掘り下げ、池汀線小礫面精査。D区住居跡・土坑遺物写真撮影。

8月10日(月) A・B区園池遺構掘り下げ、2号池大正期の埋土・礫の除去。

8月12日(水) A・B区園池遺構掘り下げ、池汀線小礫面精査。

☆群馬県史編纂室中世史部会来跡。

8月13日(木) A・B区園池遺構排水作業、但し午後雷雨有り、よって園池遺構の復元的確認が可能。D区埋設土器遺物取り上げ。

8月14日(金) A・B区園池遺構排水作業後雷雨有り。

8月17日(月) A・B区園池遺構排水作業。

☆奈良国立文化財研究所建造物研究室長宮本長二郎先生来跡。

8月18日(火) A・B区園池遺構排水作業、遺物平面図作成。D区縄文住居跡遺物平面図作成。降雨。

8月20日(木) A・B区園池遺構精査、遺物平面図・土層断面図作成。D区縄文住居跡遺物取り上げ。

☆県教育委員会事務局来跡。

8月24日(月) A・B区園池遺構精査、グリッド毎に掘り下げ遺構面精査を実施する。土層断面図作成。

第I章 調査の経過

☆吉井町教育委員会茂木氏来跡。

8月31日(月) A・B区園池遺構精査、土層断面図・遺物平面図作成。D区第1号住居跡完掘、写真撮影。第2号住居跡精査。

9月2日(水) A・B区園池遺構近世底面ほぼ検出。1号池写真撮影。D区土坑掘り下げ。

9月7日(月) 園池遺構排水作業。降雨のため室内作業。

☆青山学院大学吉田章一郎先生他来跡。

9月8日(火) A・B区園池遺構排水作業。発電機を容量の大きなものに交換。D区土坑掘り下げ、掘立柱建物跡写真撮影。

9月11日(木) A・B区園池遺構排水作業。D区ピット・土坑掘り下げ完了。

9月14日(日) A区畠作遺構周辺精査。D区精査、自然堆積の黒色土層掘り下げ。

9月17日(水) D区黒色土層掘り下げ。縄文住居跡精査。ピット群平面測量。

9月18日(木) A・B区溝状遺構掘り下げ。D区ピット群平面測量。

☆北橋村教育委員会富沢氏・近藤氏来跡。

9月24日(水) A区溝状遺構(AD12・13)掘り下げ、写真撮影。園池遺構南西部精査。D区第2号住居跡写真撮影。ピット群平面測量完了。

9月28日(日) A・B区溝状遺構掘り下げ。

10月1日(水) AD11平面測量完了。2号・3号池間精査。

10月5日(日) 2号・3号池、遺構底面(掘り方)確認のため掘り下げ。

10月6日(火) 園池遺構西部小礫面精査。1号暗渠検出精査。

10月9日(日) 2号・3号池遺構底面(掘り方)確認のため粘質土掘り下げ。1号暗渠精査、出土遺物写真撮影。3号池西縁平面測量(業者委託)。

10月14日(水) 3号池遺構底面(掘り方)確認のため粘質土掘り下げ。1号暗渠精査、BD10付近精査。2号池東部平面測量(業者委託)。

10月16日(金) 寺院址中央部精査。降雨。

10月20日(火) 寺院址中央部小礫面精査。

☆文化庁記念物課加藤文化財調査官、調査指導のため来跡。

☆東京考古学を学ぶ会遺跡見学。

10月21日(水) 寺院址中央部小礫面精査。

10月22日(木) 寺院址園池遺構底面検出作業、中世面を確認、遺物出土。1号池北部で暗渠確認。

10月26日(日) 寺院址園池遺構底面検出作業、周辺部精査。1号池北部の暗渠遺構周辺精査。中央部精査。線刻五輪塔下掘り下げ。

10月29日(水) 寺院址園池遺構縁辺部精査。

☆奈良国立文化財研究所建造物研究室長宮本長二郎先生、調査指導のため来跡。

10月30日(木) 寺院址園池遺構縁辺部精査、遺物平面図作成取り上げ。4号暗渠確認。

11月5日(水) 寺院址北西部遺構面精査、浅間B軽石層確認、土坑検出。足場悪く作業困難、3号池排水作業。

11月6日(金) 寺院址北西部遺構面精査、土坑より骨検出、埋葬遺構確認。2号・3号池精査。

11月9日(日) D区写真撮影準備、遺構面清掃。

11月11日(水) D区写真撮影準備、遺構面清掃。A・B区園池遺構掘り下げ。

11月13日(金) 園池遺構底面検出作業。2号池ほぼ完了、写真撮影。

11月16日(日) D区バルーンによる空中写真撮影(青高館航空写真)。A・B区遺構面掘り下げ。

11月17日(火) 園池遺構周辺部掘り下げ。写真撮影。

☆パリーノ・サーベイ早田勉氏(地質)、前橋二高宮崎重雄氏(骨鑑定)来跡。

☆日本道路公団、調査現場映画撮影。

11月18日(水) A区火葬跡掘り下げ。2号池縁辺部精査、掘り下げ。

11月19日(木) 寺院址園池遺構周辺遺物取り上げ。西部グリッド毎に掘り下げ。

11月20日(金) 寺院址掘り下げ。A区火葬跡写真撮影、図面作成。3号池西で砂岩の碎片取り上げ。

☆パリーノ・サーベイ早田勉氏、園池遺構堆積土をサンプリング、テフラ分析・花粉分析。

11月24日(火) 寺院址中央上段掘り下げ精査。A区溝状遺構精査。火葬跡写真撮影。

11月25日(水) A区火葬跡写真撮影。園池遺構内遺物平面図作成。B区西部、重機による覆土掘り下げ。園池遺構上の農道迂回路の準備。

11月26日(木) 園池遺構東側の迂回路予定地精査。寺院址中央部で配石遺構検出。B区農道西側の重機による表土掘削開始。迂回路工事実施、土盛作業、安全柵設置。

11月27日(金) A区火葬跡完掘、写真撮影。1号配石遺構精査。B区農道西側の重機による表土掘削。迂回路工事。

11月30日(日) A区火葬跡完掘、写真撮影。1号配石遺構測量。攪乱土坑掘り下げ。B区農道西側の重機による表土掘削、遺構検出。迂回路工事(土盛・填圧・杭打ち)。ベルトコンベヤー2台搬入。

12月1日(火) A区土坑精査。寺院址内遺構面精査。農道部分表土掘削。(水中ポンプ引き上げ)

12月3日(木) 園池遺構上農道部分表土掘削。園池遺構掘り下げ用にベルトコンベヤー設置。3号池西掘り下げ、写真撮影準備。1号配石遺構平面図作成。

12月4日(金) 園池遺構上道路部分の表土掘削、ほぼ終了。寺院址北西部で火葬墓検出、銭貨出土。

12月7日(日) 前日の降雪の後片付け。A区園池遺構・周辺部掘り下げ。

12月8日(火) A区園池遺構掘り下げ。重機による表土掘削。

12月11日(金) A区園池遺構掘り下げ、寺院址南部で溝状遺構検出。B区農道西側表土掘削。

12月12日(土) B区農道西側表土掘削(終日)。

12月14日(日) A区2号・3号池間精査。寺院址中央部掘り下げ。B区農道西側表土掘削。D区台地縁辺部掘り下げ。

12月15日(火) A区園池遺構底面まで掘り下げ。3号池西暗渠周辺精査。寺院址西部で円形土坑掘り下げ。B区農道西側表土掘削。D区プレ試掘トレンチ掘り下げ。

12月18日(金) A区園池遺構掘り下げ、写真撮影、遺物平面・断面測量。寺院址中央部グリッド毎に掘り下げ、小礫分布遺構検出。土坑(円形土壇)写真撮影、測量。C区重機による表土掘削。D区プレ試掘トレンチ掘り下げ。

12月19日(土) C区重機による表土掘削(終日)。

12月21日(日) B・C区重機による表土掘削、予定した範囲についてはほぼ終了。

12月22日(火) A区園池遺構礫面写真撮影、平面測量。3号池底面及び西側部分精査。4号配石遺構精査。火葬跡掘り下げ、人骨出土。

12月24日(木) 園池遺構精査。遺物取り上げ、平面測量。火葬跡掘り下げ、土層断面図作成。

12月25日(金) 寺院址内測量用杭打ち、測量準備。遺跡周囲の防護・整備作業。事務所大掃除、器材整備点検。(昭和62年の作業終了)

1月5日(火) 調査再開の準備。

1月6日(水) ベルトコンベヤー再配置。3号池掘り下げ、土層断面図作成。火葬跡掘り下げ、4号配石精査、平面測量。

☆前橋二高宮崎重雄氏、群馬県警察本部鑑識課緑川順氏来跡。

1月8日(金) 3号池底面精査、寺院址北西部・西部精査、

第2節 調査の方法と実施経過

- 火葬跡写真撮影・平面測量。
- 1月11日(月) 園池遺構・火葬跡群精査。
- 1月12日(火) 園池遺構近世石積精査。火葬跡群掘り下げ、寺院址西部濠掘り下げ。
- 1月14日(水) 園池遺構3号池西掘り下げ精査。火葬跡群掘り下げ、骨取り上げ。濠掘り下げ。
- 1月18日(月) 3号池南西部精査。火葬跡群掘り下げ、寺院址西部濠掘り下げ。
- 1月20日(水) 3号池南西部精査、測量。西部火葬跡群掘り下げ、写真撮影、測量。濠掘り下げ。
- 1月25日(月) 3号池南西部精査。土塁跡縁辺部精査。濠跡・暗渠掘り下げ。火葬跡・火葬墓写真撮影。
- 1月26日(火) 火葬跡群写真撮影。濠跡南端立ち上がり検出。土塁跡東縁辺部掘り下げ、精査。1号配石遺構小礫面除去。
- 1月28日(水) 3号池、写真撮影、南西部掘り下げ。火葬跡写真撮影。1号配石遺構より骨蔵器検出。空撮打ち合わせ。
- 1月29日(木) 3号池南西部精査、鬼瓦出土。暗渠平面図作成。中央部土塁周辺精査。濠跡底面検出。
- 2月2日(火) 3号池周辺精査、測量・写真撮影。火葬跡・火葬墓掘り下げ、測量・写真撮影。
- 2月4日(水) 1号池内円礫取り上げ。3号池西精査、測量・写真撮影。濠跡掘り下げ。北西部瓦溜まり掘り下げ。
- ☆鎌倉市教育委員会玉林美男氏他来跡。
- 2月6日(土) 3号池西溝状遺構精査、蓮華文軒丸瓦出土、測量・写真撮影。濠跡掘り下げ。北西部瓦溜まり掘り下げ。
- 2月9日(火) 2号池西側小礫面精査、写真撮影・平面測量。3号池西溝状遺構精査。北西部瓦溜まり精査。濠跡掘り下げ。
- ☆文化庁加藤文化財調査官県教委関係者とともに来跡。
- ☆奈良国立文化財研究所所長坪井清足先生、同保存工学研究室長田中先生来跡。
- 2月10日(水) 園池遺構周辺精査。濠跡掘り下げ。
- ☆国際興業空撮打ち合わせ。
- ☆現地説明会用パンフレット作成打ち合わせ。
- (この頃、作業やや遅れ気味、特に迂回路部分についての復旧に関し調査促進の要請あり、2月中旬までに寺院址の全容を明らかにし、空中写真撮影を予定し、併せて現地説明会の開催を計画。)
- 2月13日(土) 園池遺構周辺精査、3号池西溝状遺構精査、遺物取り上げ。遺構平面測量。
- ☆現地説明会の案内を地元へ回覧す。
- 2月15日(月) 寺院址遺構写真撮影のための清掃。排土運搬。
- ☆奈良国立文化財研究所宮本長二郎先生来跡。
- 2月16日(火) 空撮予定するも、強風のため延期。
- 2月17日(水) 大御堂調査区中世寺院址遺構全景空中写真撮影(ヘリ・セスナ・高所作業車)。
- 2月18日(木) 寺院址内遺物出土状況写真撮影。西部濠跡・北部溝状遺構掘り下げ。排土運搬。現地説明会準備。
- ☆明治大学大塚初重先生来跡。
- ☆新田町教育委員会須田茂氏他来跡。
- ☆群馬テレビ取材。
- 2月19日(金) 北部溝状遺構掘り下げ、平面測量。3号池西溝状遺構掘り下げ、遺物取り上げ。農道西側遺構確認作業。排土運搬・整地。現地説明会会場準備。
- 2月20日(土) 現地説明会開催。晴天で絶好の見学日和。見学者は続々とつめかけ、大盛況であった。見学者約350名。
- ☆報道関係者、朝日新聞・TBS・県広報課。
- 2月21日(日) 現地説明会。午後より寒風吹きすさぶ。
- ☆吉野益藤岡市長をはじめ多数の見学者を迎える。
- 2月22日(月) 北部溝状遺構完掘写真撮影。3号池西精査。北西部瓦溜まり精査。道路復旧工事。
- 2月23日(火) 21日の振替休。道路復旧工事。
- 2月24日(水) 道路復旧工事完了。園池遺構は再び埋め戻され、永遠の眠りにつく。3号池西精査。農道西側遺構検出作業。
- ☆国際興業、空中写真成果品持参。
- ☆県立歴史博物館森田秀策館長来跡。
- 2月25日(木) 寺院址北西部精査、掘り下げ。農道西側に濠跡確認(第2号濠)。
- ☆藤岡市立平井小学校6年生90名遺跡見学。
- 2月26日(金) 道路復旧。3号池西溝状遺構精査。北西部瓦溜まり精査、火葬墓検出。B・C区表土掘削、遺構確認、溝状遺構掘り下げ。
- 2月27日(土) 調査課会議。
- ☆足利市教育委員会市橋一郎氏他来跡。
- 3月1日(火) 園池遺構水口部分精査。C区表土掘削、溝状遺構掘り下げ。
- ☆国際興業空中写真成果品(カラーリバーサル)持参。
- 3月3日(木) 園池遺構水口部分精査、寺院址中央部精査。農道西側遺構面精査。
- 3月7日(月) 園池遺構水口部分精査、寺院址中央部精査、北西部瓦溜まり遺物平面測量。
- ☆神川町教育委員会文化財関係者来跡。
- 3月10日(木) 北西部火葬墓平面測量、南部溝状遺構精査。排土移動。
- 3月14日(月) 寺院址遺構平面測量。1号配石墓トレンチ掘削。中央部井戸跡検出。
- 3月17日(木) 寺院址遺構平面測量。中央部精査。南西部ピット群検出。午後降雨。
- 3月19日(土) 寺院址中央部精査、第2号溝状遺構(BD7)検出。
- ☆藤岡市立西中学校2年生250名遺跡見学。
- 3月22日(火) 雨のため室内作業(連日の降雨で作業進まず)。大掃除。
- 3月25日(木) 年度末で現場を一時休止、図面・写真等の整理作業を行う。
- [昭和62年度出土遺物総量]=コンテナ110箱
縄文時代遺物(土器・石器等)、中近世遺物(土器・陶磁器類、瓦類、銭貨・鉄製品、骨、その他)
《昭和63年度発掘調査事業》
- 4月5日(火) 遺跡報告会。
- 4月8日(金) 調査事務所会議、昭和63年度調査体制充足。大御堂遺跡調査担当者1名交替。
- 4月12日(火) 昭和63年度発掘調査開始。
- 4月13日(水) 降雨のため室内作業。
- 4月18日(月) 寺院址南西部、中央部掘り下げ、ピット群検出。
- 4月20日(水) 寺院址1号暗渠写真撮影。南西部ピット群掘り下げ。C区溝状遺構掘り下げ。
- 4月25日(月) 寺院址全景写真撮影。南西部ピット群掘り下げ。C区溝状遺構掘り下げ。
- 4月28日(木) 寺院址北西部掘り下げ。中央部南西井戸・掘立柱建物跡掘り下げ、土層図作成。C区遺構検出作業。重機による表土掘削。
- 5月2日(月) 寺院址南西部ピット群掘り下げ、平面測量。中央部西縁検出の溝状遺構精査。C区重機による表土掘削。遺構検出作業。
- 5月10日(火) 寺院址中央部検出遺構精査、写真撮影、平面測量。C区重機による表土掘削。遺構検出作業、溝状遺構掘り下げ。
- 5月11日(水) 同上。作業員労働安全衛生教育実施。
- 5月16日(月) 溝状遺構(BD7)精査。寺院址中央部・南西部ピット群掘り下げ、平面測量・写真撮影。C区重機

第1章 調査の経過

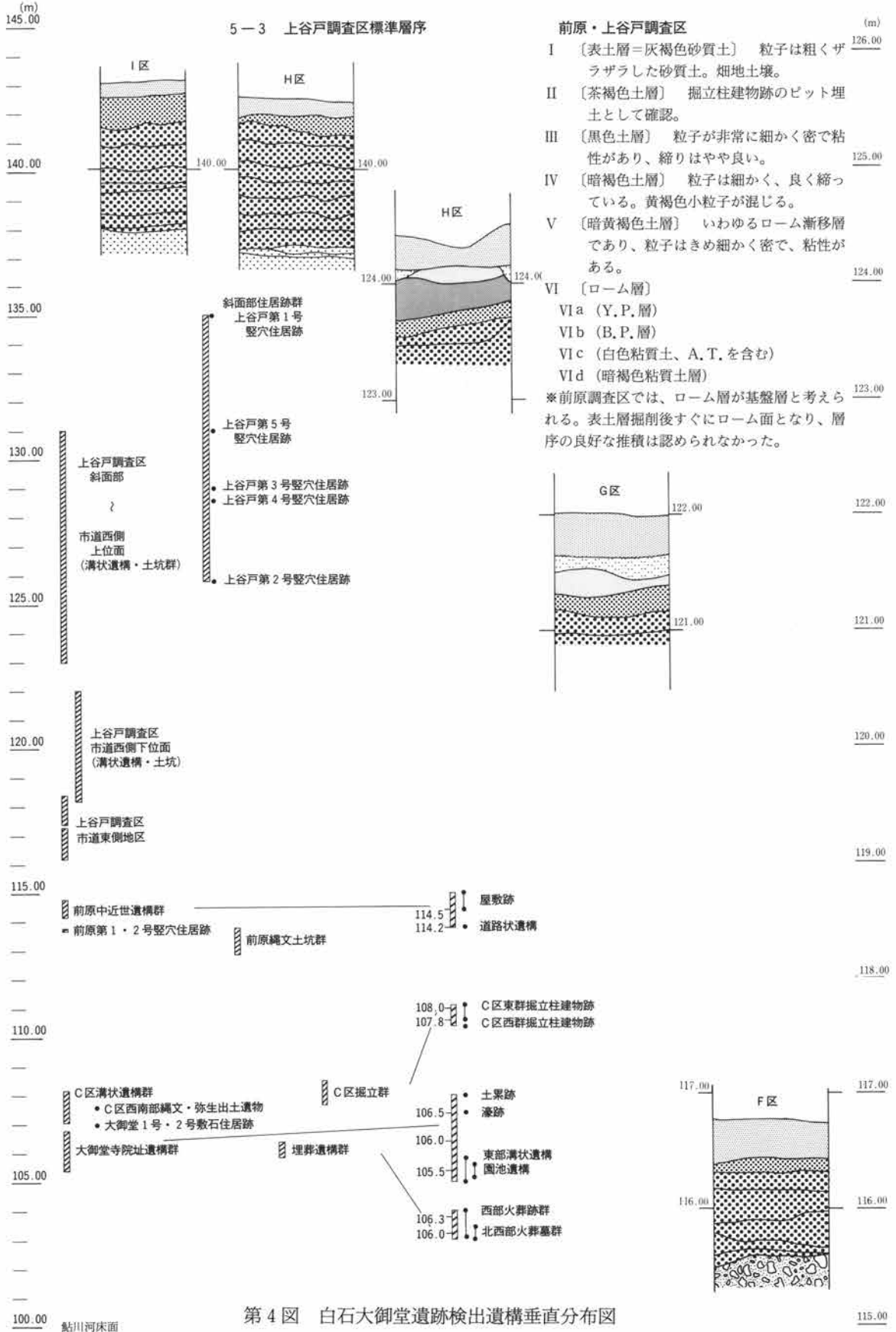
- による表土掘削。遺構検出作業、溝状遺構掘り下げ。
- 5月17日(火) 寺院址中央部・南西部ピット群精査。C区表土掘削、トレンチを設定し掘り下げ、遺構検出。
- 5月18日(水) B区寺院址南西部ピット群柱痕断ち割り。C区トレンチ掘り下げ、縄文土器検出、配石遺構らしきものを確認。
- 5月20日(金) 寺院址掘立柱建物跡平面測量。B区農道西溝状遺構掘り下げ。C区縄文敷石住居跡確認。
- 5月23日(水) 降雨、室内作業。
- 5月27日(金) 寺院址中央部精査、平面測量・写真撮影。C区敷石住居跡縄文遺物取り上げ。
- 5月30日(月) 溝状遺構(BD17)掘り下げ。
- 6月1日(水) 溝状遺構(BD17)掘り下げ、土層図・平面図作成。午後降雨。
- 6月6日(月) B区寺院址北西部溝状遺構精査、溝状遺構(BD17)掘り下げ。C区敷石住居跡周辺精査、遺構範囲確認。表土掘削。
- 6月9日(水) B区寺院址北西部溝状遺構精査。C区1号敷石住居跡平面測量。前原調査区表土掘削準備。
- 6月10日(金) B区寺院址清掃。C区1号敷石住居跡平面測量、遺物写真撮影。前原調査区E区表土掘削。
- 6月15日(水) B区寺院址清掃、北西部溝状遺構精査。C区1号敷石住居跡平面測量、北側拡張。縄文包含層検出。E区表土掘削。
- ☆青山学院大学田村晃一先生来跡。
- 6月16日(木) A・B区寺院址高所作業車による全景写真撮影。C区1号敷石住居跡平面測量。
- 6月20日(月) 寺院址南部暗渠遺構蓋石、平面測量・取り外し。C区敷石住居跡平面測量。縄文包含層拡張掘り下げ。溝状遺構掘り下げ。E区重機による表土掘削。(周辺圍場で一斉に麦刈り、麦藁を燃やす煙りで作業困難。)
- 6月21日(火) C区溝状遺構・掘立柱建物跡等遺構名称の命名。E区表土掘削。
- 6月22日(水) B区3号池西、暗渠周辺精査。1号配石墓周辺精査。C区掘立柱建物跡、ピット掘り下げ。溝状遺構群掘り下げ。
- 6月24日(金) 降雨のため室内作業。
- ☆寺院址部分航空測量図面持参(国際興業)。
- 6月29日(水) この日までずっと降雨。C区排水作業。E区遺構確認作業。
- 7月4日(月) C区遺構検出作業、掘立柱建物跡確認。B区排水作業。E区グリッド毎に掘り下げ。(栗崎八幡遺跡試掘調査)
- 7月7日(木) B区寺院址南部溝状遺構精査、最終掘り方面確認。1号配石墓掘り方検出。C区溝状遺構・縄文包含層・掘立柱建物跡柱穴掘り下げ。E区表土掘削。
- 7月11日(月) B区寺院址南部溝状遺構精査、最終掘り方面確認。C区掘立柱建物跡柱穴掘り下げ。E区グリッド掘り下げ。
- 7月13日(水) B区寺院址南西部掘立柱建物跡群精査、写真撮影。南部溝状遺構最終掘り方面確認。E区グリッド掘り下げ。
- 7月18日(月) B区寺院址南西部掘立柱建物跡群平面測量。E区グリッド掘り下げ。
- 7月19日(火) C区溝状遺構・掘立柱建物跡、写真撮影・掘り下げ。E区グリッド掘り下げ。
- 7月21日(木) E区グリッド掘り下げ、ローム面検出。
- ☆藤岡市教委田野倉氏来跡。
- 7月25日(月) E区グリッド掘り下げ、ローム面で掘立柱建物跡検出。
- 7月27日(水) E区グリッド掘り下げ。
- ☆藤岡市立西中学校歴史研究部生徒、発掘調査体験学習(米山康子先生引率)。
- 8月1日(月) E区グリッド掘り下げ。C区トレンチ掘り下げ。(栗崎八幡遺跡試掘調査終了)
- ☆群馬県議会文教治安常任委員会来跡。
- 8月2日(火) 台風8号の影響による降雨。
- 8月3日(水) C区トレンチ掘り下げ、溝状遺構平面測量。E区道路跡・掘立柱建物跡検出。
- 8月9日(火) C区溝状遺構周辺精査。E区表土掘削。(天候不順で作業は進まず)
- 8月23日(火) C区西部表土掘削、遺構検出。E区遺構検出。
- 8月23日(火) C区溝状遺構周辺精査。E区表土掘削。(連日の雷雨)
- 8月30日(火) C・E区空中写真撮影。
- 9月1日(水) C区敷石住居跡石組炉写真撮影、埋設土器平面測量。段差下精査。E区遺構検出。
- 9月7日(水) E区グリッド掘り下げ。
- 9月9日(金) E区ピット群掘り下げ、道路跡平面測量、写真撮影。
- 9月13日(火) E区道路跡・ピット群精査、掘立柱建物跡3棟確認。県道西側E・F区調査準備。
- 9月16日(木) C区敷石住居跡平面測量、写真撮影。E区掘立柱建物跡写真撮影、平面測量。県道西側草刈り。
- 9月19日(日) C区敷石住居跡石外し、掘立柱建物跡写真撮影。E区県道西側草刈り。
- 9月21日(水) C区敷石住居跡精査。トレンチ掘り下げ。E区県道西側トレンチ設定。
- 9月22日(木) 午前中降雨、室内作業。C区敷石住居跡精査。E区掘立柱建物跡平面測量。県道西側トレンチ掘り下げ。
- 9月30日(金) C区西端段差下精査。E区遺構平面測量。午後降雨、室内作業。
- 10月3日(月) C・E区写真撮影準備。
- 10月4日(火) C区西端段差下溝状遺構平面測量、写真撮影。E区遺構平面測量。
- 10月7日(金) E区プレ試掘調査。
- 10月11日(火) C区溝状遺構清掃。E区プレ試掘調査。県道西側表土掘削。
- 10月17日(月) C区南部道路下調査、溝状遺構掘り下げ、敷石住居跡確認。E区遺構平面測量。県道西側表土掘削。
- 10月19日(水) C区縄文包含層掘り下げ。E区プレ試掘調査完了。F区表土掘削。
- ☆バリノ・サーベイ早田氏来跡。
- 10月24日(月) C区敷石住居跡掘り下げ、縄文包含層掘り下げ。E区プレトレンチ測量、写真撮影。F区表土掘削。
- 10月26日(水) C区2号敷石住居跡周辺掘り下げ、縄文包含層掘り下げ。F区表土掘削。
- 10月29日(土) G区表土掘削。
- 10月31日(月) C区2号敷石住居跡平面測量、遺物取り上げ。周辺掘り下げ精査。G・H区表土掘削。測量用杭打ち。
- 11月1日(火) C区2号敷石住居跡平面測量、遺物取り上げ。G・H区表土掘削、遺構検出。
- 11月7日(月) C区2号敷石住居跡周辺精査、縄文包含層掘り下げ。周辺を重機による表土掘削。
- 11月10日(水) C区2号敷石住居跡写真撮影、平面測量、縄文包含層平面測量。
- 11月14日(月) C区2号敷石住居跡平面測量、遺物包含層掘り下げ。G・H区表土掘削、遺構検出。
- 11月17日(木) C区2号敷石住居跡平面測量、遺物包含層掘り下げ。G・H区表土掘削、遺構検出。
- 11月21日(月) C区2号敷石住居跡遺物取り上げ。G・H区遺構検出、溝状遺構掘り下げ。
- 11月22日(火) C区2号敷石住居跡遺物取り上げ。G・H区溝状遺構・土坑掘り下げ。
- ☆藤岡市教育委員会文化財課勝係他来跡。
- 11月28日(月) G・H区溝状遺構・土坑掘り下げ。重機によ

第2節 調査の方法と実施経過

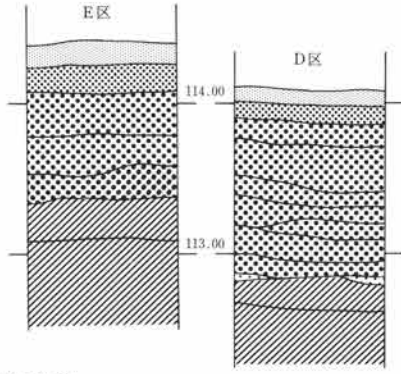
- る表土掘削。
- 11月30日(水) G・H区遺構確認、溝状遺構・土坑掘り下げ。
- 12月1日(木) G・H区遺構確認、近世面平面測量。C区埋め戻し。
- 12月6日(火) G・H区遺構確認、掘り下げ。
- 12月12日(月) G・H区遺構掘り下げ。プレハブ設置。
- 12月13日(火) H区トレンチ設定掘り下げ。F区表土掘削。C・D区埋め戻し。
- 12月19日(月) G・H区平面測量。C区埋め戻し。
- 12月20日(火) G・H区平面測量。E区掘立柱建物跡写真撮影。C区埋め戻し。
- 12月23日(金) G区表土掘削。B区埋め戻し。大掃除、器材点検整備。
- 1月9日(月) 大御堂遺跡西側マーク外試掘調査。
- 1月13日(金) G・H区航空写真撮影。G区表土掘削。E区掘立柱建物跡平面測量終了。マーク外試掘調査区住居跡検出。
- 1月17日(火) G・H区溝状遺構・掘立柱建物跡掘り下げ。E区平面測量。マーク外試掘調査。
- 1月18日(水) G区溝状遺構掘り下げ。E区県道西部分写真撮影。マーク外試掘調査、重機による表土掘削。
- 1月23日(月) 雪のため作業中止。
- 1月25日(水) マーク外丘陵頂部プレ試掘調査。
- 1月27日(金) マーク外丘陵頂部プレ試掘調査。G・H区溝状遺構掘り下げ、暗渠精査。
- 1月31日(火) マーク外丘陵斜面部プレ試掘調査、テフラ分析。G・H区溝状遺構掘り下げ。
- ☆バリノ・サーベイ早田氏来跡。
- 2月1日(水) マーク外丘陵斜面部プレ試掘調査、土層写真撮影、住居跡掘り下げ。溝状遺構平面測量。掘立柱建物跡写真撮影。
- 2月6日(月) G・H区住居跡掘り下げ、溝状遺構・井戸跡掘り下げ。
- 2月7日(火) G・H区住居跡掘り下げ、遺物写真撮影。溝状遺構・井戸跡掘り下げ、写真撮影。
- 2月8日(水) G・H区住居跡カマド写真撮影。井戸跡完掘、写真撮影。
- 2月13日(月) マーク外丘陵東斜面部清掃、写真撮影。溝状遺構掘り下げ。プレ試掘調査。
- 2月14日(火) 丘陵試掘調査部分一部埋め戻し。住居跡写真撮影、断面図作成。
- 2月16日(水) 住居跡精査、写真撮影、平面測量。
- 2月22日(水) 住居跡掘り方精査、写真撮影、平面測量。プレ試掘調査。
- 2月27日(月) 大御堂 H J 1掘り方完掘写真撮影。H J 2カマド完掘、H J 3掘り方完掘、写真撮影、H J 4カマド断面図・平面図、掘り方検出、H J 6床面写真撮影、掘り方検出。H K 11断面図作成。
- 2月28日(火) H J 4掘り方検出、H J 6掘り方検出。G E 3断面図作成。(根岸遺跡プレハブ完成、引っ越し始まる。)
- 3月1日(水) G・H区掘り上がり写真撮影、図面補足。調査区後片付け。
- 3月2日(木) 図面・遺物整理。プレハブ周辺整理。発掘器材根岸遺跡へ搬出。
- 3月3日(金) 図面・遺物整理。プレハブ周辺整理。発掘器材根岸遺跡へ搬出。(白石大御堂遺跡発掘調査終了)
- ※ 遺構名称は調査日誌記載のまま、調査名称を使用している。

第I章 調査の経過

2 標準層序



5-2 前原調査区標準層序



地質調査注記

ローム層 (Lm)

丘陵及び台地の地表面を覆って地形と同調する形で広範囲に分布する降下火山灰よりなる地層で、その平均層厚は1~3m程度となっている。土質は、黄灰~茶褐色のロームからなり、上部は粘性が低くサラサラした風成火山灰の特長を示すが、下部に行くに従い含水と粘性が増す傾向にある。

段丘礫層 (Td)

台地を構成する扇状地~段丘成の堆積物で、低地においても沖積層下に広く分布している。水地層は、一般に上部の粘性土（低地では侵食により欠除）と主部砂礫層からなる。上部の粘性土は、一般に暗褐色~黄灰色の凝灰質粘土や礫混じり粘土からなり、非常に粘性が大きく、また含水の低い所では固結状を種し非常に固くなっている。この地層は、藤岡粘土と呼ばれ瓦粘土として古くから利用され、同地方では、凝灰質粘土部に「バネ」礫混じり粘土に「コビ」との呼称がある。層厚は、数10m~100mに達するものとみられる。

板鼻層 (It)

丘陵を形成する中新世末期（鮮新生の可能性がある）の砂岩、礫岩を主体とし、泥岩、凝灰岩を挟在する層厚1,500mに達する地層で、比較的安定した塊状の軟岩盤を成している。地質構造は、NW-S E方向の一般走行を有し、北東へ30~50°傾斜を有する単斜構造を示す。砂岩及び礫岩は、固結度が低く、凝灰質砂岩等ではコア状で採取出来るが、礫岩ではマトリックスの固結度が低く土砂状となる。泥岩及び凝灰岩は、固結状を呈し、新鮮部ではN>70を示し、棒状コアとなるが、風化部では粘土化が進みや軟質となっている。

沖積層 (A1)

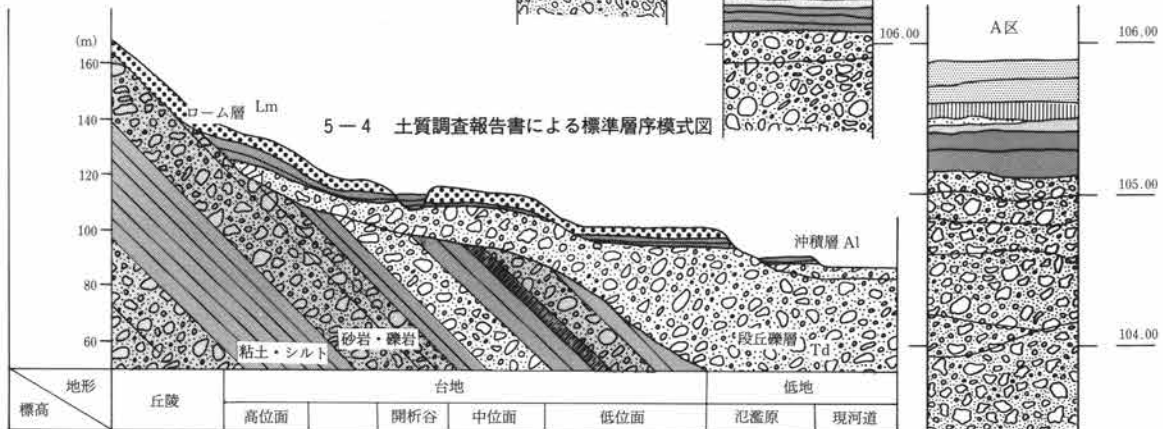
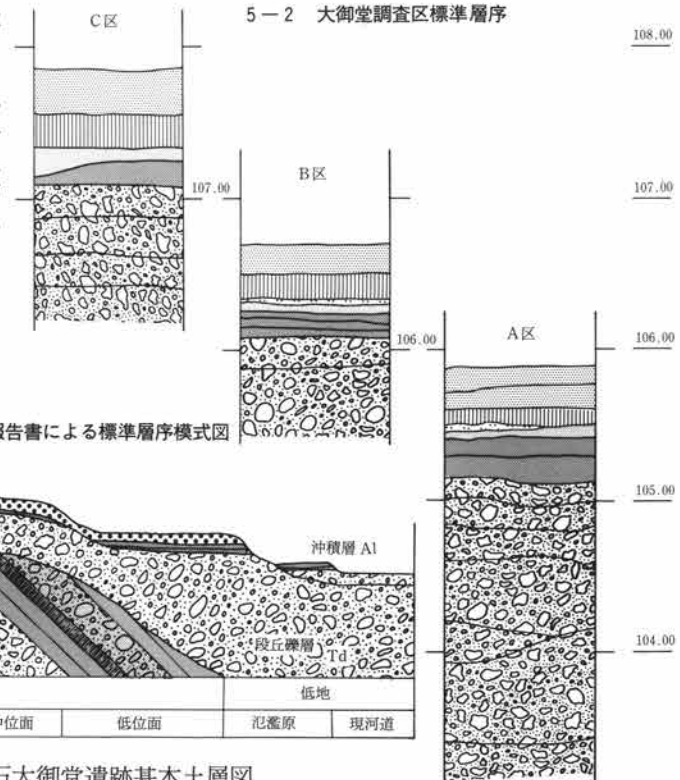
鮎川の河床や氾濫原及び台地を開析する開析谷底に分布する最も新しい地層で、現河道では玉石、転石を主体とする砂礫層、氾濫原では表部が粘土、下部が砂礫、台地上の開析谷では粘土を主体とし、基底が砂礫という土層構成を標準とする。

〈文献「関越自動車道藤岡地区1次、2次土質調査報告書」より〉

大御堂調査区標準層序

- I [表土層] 灰褐色を呈す砂質土、A軽石を含む。
 - Ia いわゆる耕作土でつねに攪拌される層。水田土壌の場合、マンガン・鉄分等の沈殿層が認められる。
 - Ib Iaとほぼ同質であるが、比較的均質でややしまっている層である。
 - Ic A軽石の純層を確認できる砂質層である。
- II [暗褐色粘質土層] 粒子は細かく密にしまっており、粘性やや強い。
- III [黒褐色砂質土層] B軽石を主とする砂質土層。
- IV [黒色粘質土層] 粒子は非常に細かく密で、粘性ややあり、やや柔らかい。
- V [灰オリブ粘質土層] ややシルト質に近い粘質土で、粒子は細かく密でよくしまっている。
 - Va マンガン粒をやや多く含む。
 - Vb マンガン粒やや少なめで黄色土粒子・白色火山灰粒子を若干含む。
 - Vc 黄色火山灰粒子を多く含む。
 - Vd やや赤味がかかった色調となる。
- VI [暗茶褐色粘質土層] 粒子細かく密で非常に固く締っている。マンガン粒・黄色土粒がわずかに含まれる程度で混入物は少ない。

5-2 大御堂調査区標準層序



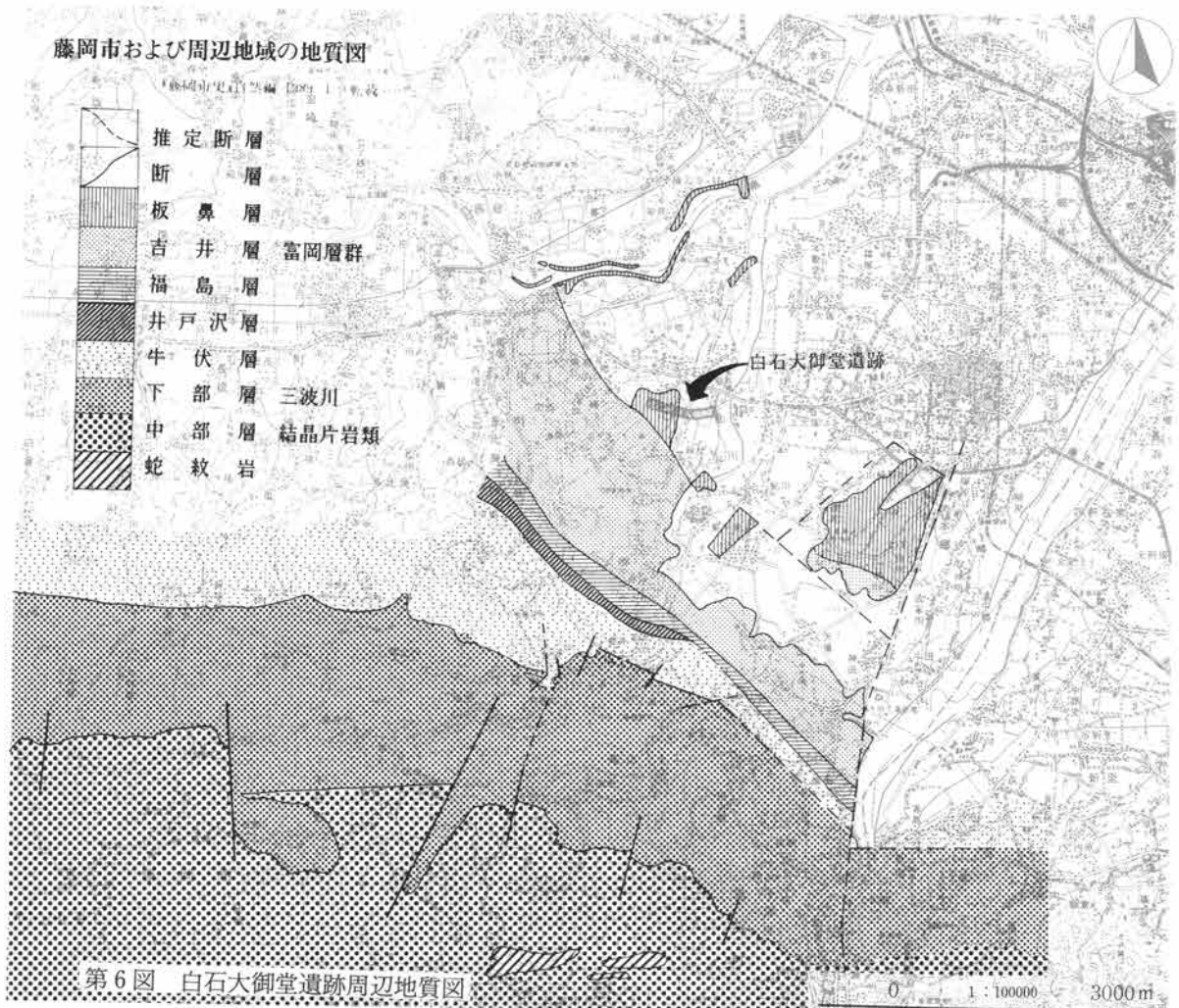
第5図 白石大御堂遺跡基本土層図

第II章 遺 跡

第1節 立地と環境

1 遺跡の位置と自然的環境

白石大御堂遺跡は群馬県の南部、藤岡市街地の西方、藤岡市大字白石字大御堂・前原・上谷戸地内に所在する。この地は藤岡市合併（昭和29年）以前は多野郡（明治29年以前は緑野郡）平井村大字白石であり、関東平野の北西隅、関東山地に源を発する鎗川が関東平野に注ぎ込む谷の入り口にあたり、鎗川右岸に発達した河岸段丘（上位面）の東端にあたる位置を占めるが、御荷鉾山に源を発する鮎川により開析された扇状地の西端とも言える。遺跡地は沖積低地・洪積台地及び山麓丘陵に広がりを見せ、鮎川左岸における埋蔵文化財が各時代・各種別で異なる選地傾向を示し、遺跡立地の在り様を端的に示すという点で西毛地域では標式的な地形ととらえることができよう。また、地理的には関東平野の北西部、鎗川が中流域の谷あいから平野部に押し出すあたりの山間部と平野部との変換に位置し、関東と信州を結ぶ交易路上にあたり、古来より交



通の要衝であったと考えられる場所に位置する（第1図）。

地形的には、関東山地の北部、神流川以北の山塊は通称多野山地と呼ばれ、遺跡はこの山裾の末端部にあたる。多野山地の杖植峠付近に源を発する鮎川は深いV字谷を刻みながら山中を北東方向に進み、日野金井から流路を北に変え平野部に流れ出る。金井―緑埜の間は藤岡台地を深く削り、基盤の第三紀層を露出させながら小規模な蛇行を繰り返し、上落合付近で鑄川に合流する。この鮎川は、洪積世後期を通じて大量の砂礫を運搬し大規模な扇状地を形成した。この扇状地は新生代第四紀の地殻変動によってゆるやかに隆起し、藤岡台地という平坦な地形（開析扇状地）を作った。また、多野山地と藤岡台地との間には、多野山地からの山麓低山帯、竹沼貯水池・三名湖周辺の丘陵地、庚申山や東平井の天神山など台地内の残丘があり、ここでは新生代第三紀の地層の分布が見られる。東御荷鉾山・西御荷鉾山・赤久縄山へと稜線の続く多野山地は古期岩類、つまり中生代・古生代の堆積岩及びこれらの岩石が変成してできた三波川結晶片岩（変成岩）から形成されている。なお、鮎川をはじめとして神流川・烏川・鑄川等の各河川の川床・川原及びその氾濫原は新生代第四紀沖積世（完新世）の地層の堆積したところで、約1万年前から現在までの間にかたちづけられたものである。これを地質学的に見ると次のように言える。

鮎川水源地帯最上流部の多野山地には秩父層群（関東山地に分布する古生代・中生代の堆積岩の名称）が分布し、上流から中流域には東西に細長く広がる変成岩（三波川結晶片岩）が見られる。この変成岩帯は秩父層群の中では山中地溝帯の北側の北帯に属しており、三波川結晶片岩の分布地域を「三波川帯」と呼んでいる。秩父層群は下層より「柏木層」「万場層」「上吉田層」に分けられ、その層相は珪質岩相、火山碎屑岩相、砂質・泥質および珪質岩相で、非変成中・古生層と言える。「三波川帯」は「馬山―金井構造線」と呼ばれる長大な断層の南側に分布する結晶片岩類の広域変成岩で、古生代末からジュラ紀末までの間の変成作用によるものと考えられ、下部層群（点紋緑色片岩・点紋石英片岩が主体）、中部層群（点紋黒色片岩が大部分）、上部層群（緑色変成岩類＝御荷鉾緑色岩類）とに分けられる。

また、関東山地北端の山麓の丘陵地帯には、三波川帯の結晶片岩に接して「富岡層群」と呼ばれる堆積岩の分布が見られる。これは藤岡台地の地下にも広がり認められ、下層から「牛伏層」「小幡層」「井戸沢層」「福島層」「吉井層」「板鼻層」と呼ばれる。白石大御堂遺跡周辺に認められるのは「吉井層」と「板鼻層」である。吉井層の主体は砂岩と泥岩の互層で、下部層は緑灰色砂質泥岩と細・中粒砂岩との互層が多く、白色の酸性凝灰岩や酸性凝灰角礫岩がはさまれている。上部層群は暗灰色～暗茶灰色の泥岩と茶灰色～青灰色の中粒の砂岩との互層を主とし、凝灰岩をはさんでいる。板鼻層は上下2層に分けられ、下部層は海成層（砂岩・礫岩の互層、ときに灰色泥岩をはさむ）、上部層は汽水～淡水の陸成層（礫岩・砂岩の互層）で三角洲堆積物である。これらの層群は新生代第三紀（洪積世）に形成されたものである（第6図）。

藤岡台地は鮎川による開析扇状地（隆起扇状地）と言えるが、その周縁部は鮎川・鑄川・烏川・神流川等による侵食と堆積によって沖積低地が形成されている。藤岡台地には藤岡市街地があり、台地面の土地利用については、ほとんどが畑地である。水田は主に沖積低地と洪積台地に刻まれた小支谷を中心に分布が見られ、地質学的な成因が現況での土地利用に影響を与えている。

2 歴史的環境

(1) 鮎川流域における文化財と考古学的調査

藤岡市には国指定史跡の七興山古墳・本郷埴輪窯跡をはじめとして数多くの埋蔵文化財の包蔵が知られており、その濃密な事においては県内屈指の地域であると言えよう。特に古墳時代の遺跡は質量共に豊富な内

第II章 遺 跡

容で、その性格に本地域固有の特質をもつものが多いことも古くから知られており、鮎川流域においては分布・形態・出土遺物等に顕著である。また、近年は埋蔵文化財の発掘調査も多く実施されて、新たな知見が得られつつある地域でもある。

藤岡市はその地形的特質から、西南部の山間地域と北東部の平野部とに分けられるが、埋蔵文化財の包蔵が多く見られるのは北東平野部である。この平野部は鮎川による開析扇状地が東を神流川、北を簞川、西を鮎川によって隔てられ、藤岡台地とも呼ばれている。埋蔵文化財が濃密に分布するのはこの3つの河川に沿った台地縁辺部である。この鮎川流域には、伊勢塚古墳、七輿山古墳、白石稻荷山古墳及び白石古墳群、東平井古墳群などの古墳・古墳群が、また中世においては鎌倉街道や平井城跡も知られており、神流川流域とともに藤岡市の中では埋蔵文化財包蔵の中心的地域と言える。

この鮎川流域での考古学的な調査の歴史は古く、第二次世界大戦前の昭和8年に白石稻荷山古墳の発掘調査が、昭和10年に『上毛古墳綜覧』にまとめられた古墳の分布調査など、学史に残る調査の実施された先駆的な地域でもある。その伝統は戦後になっても生きており、「白石古墳群の調査」が群馬大学の手により実施され、近年その成果も報告されている。また、上野国分寺に瓦を供給したとされる金井金山瓦窯跡の学術調査も立正大学により実施されており、考古学的にも学術研究の対象として取り上げられた地域でもある。

昭和40年代以降の日本経済の高度成長は本地域にも少なからず影響を与えて、様々な開発の手が及び、埋蔵文化財が破壊に直面する状況も少なくない。経済の高度成長を促進したのは工業中心の産業構造であり、その影響は地方にも波及している。本地域は農業振興地域であるが、農業経営の近代化と農業振興地域の都市化という現象が、大規模な構造改善事業や都市計画事業により当該地域に於ける埋蔵文化財の現状維持を困難にしている。しかし、他方では埋蔵文化財に対する関心も呼び起こし、自治体に専門職員が配置されて行政調査により記録保存の措置を図るというルールが定着し、発掘調査の実施による発見・収穫も得られている。

白石大御堂遺跡周辺では二度にわたり大規模な農業構造改善基盤整備事業が実施され、鮎川中流域左岸の広範な地域が調査の対象となった。その成果は『F1竹沼遺跡群』『F2緑埜遺跡群I』として報告されたが、これは当該地域で初めての本格的な集落・生産遺跡群の調査ということになる。この二つの調査例は行政による緊急調査であったが、その一方では埋蔵文化財の保護及び保存活用を目的とした調査も実施されている。そのひとつは遺跡詳細分布調査の実施であり、行政の手により初めて遺跡の認知と周知の徹底が図られた。もうひとつは遺跡の保護を目的として行われた調査で、白石稻荷山古墳・七輿山古墳での確認調査、東平井古墳群の史跡整備のための調査などである。こうした地域での趨勢は、ゴルフ場開発に伴い大規模な地形の現状変更によって、平井城に関係する山城が取り壊されようとするとき、地域の誇りとする埋蔵文化財を守るという立場からの文化財保護運動に至るまでに地域を啓発した。地域住民主導による意義深い運動として評価される。以上のことから本遺跡の所在する鮎川流域は、考古学的にあらゆる経験を積んだ先進的な地域であると言える。

竹沼遺跡の調査から10年を経て、調査のありようが点から線へ、そしてさらには面的な広がりをも見せている。白石大御堂遺跡の調査も開発事業に伴う緊急調査という性格のものであるが、鮎川左岸において沖積低地・洪積台地・後背丘陵地へと連続的に発掘することにより、遺跡選地の在り方や土地利用・土地開発の状況を歴史的に解明するという意義をもつものであり、近接する調査例との比較検討によって地域史の一端を明らかにし、また、類例の少ない中世寺院址の調査の実施は考古学的に重要な意義をもつものであると言える。

(2) 先土器・縄文・弥生時代の遺跡分布 (第7図)

先土器時代の遺物が藤岡市で最初に確認されたのは、本遺跡の北方の白石字北原の台地である。調査での出土例は竹沼遺跡・緑埜地区遺跡群・北山遺跡でいずれも第三紀の洪積台地上に立地する。

縄文時代の遺跡は、78箇所確認されており、20箇所発掘調査が実施されている。遺跡分布は、鮎川流域の平井・美土里地区と、藤岡台地北辺から東北辺にかけての小野・神流地区に多く見られ、台地縁辺に立地するものが多く、時期的には中期・加曾利E式期のものが多い。弥生時代の調査例は少なく、竹沼遺跡で赤井戸式期の土器を伴う住居が検出された他は、沖II遺跡での中期の土器の出土が知られるのみである。

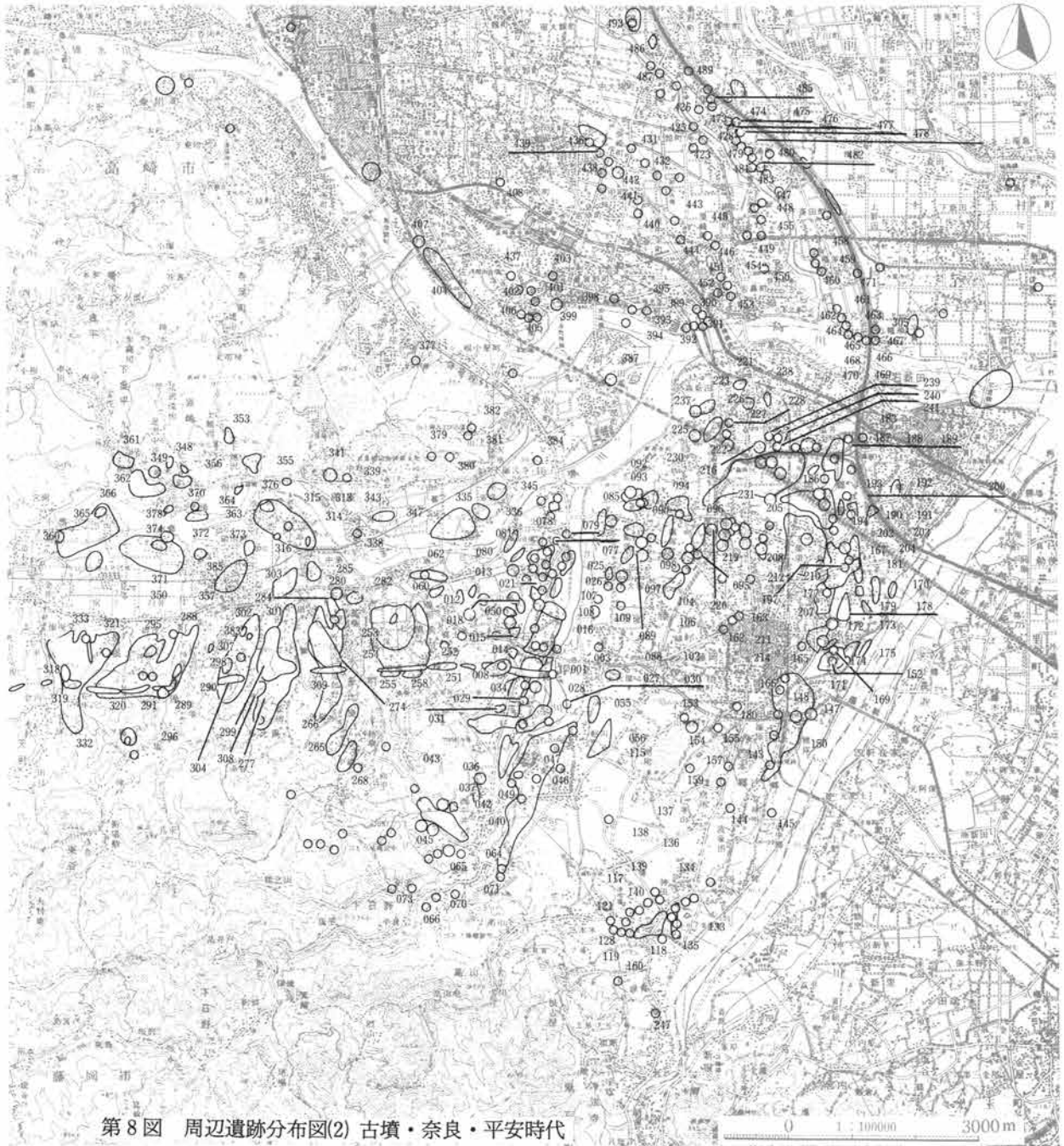


第7図 周辺遺跡分布図(1) 先土器・縄文・弥生時代

第II章 遺 跡

(3) 古墳・奈良・平安時代の遺跡分布 (第8図)

白石稻荷山古墳や七興山古墳などの比較的規模の大きい首長墓的性格をもつと考えられる中期ないし後期の前方後円墳があるが、多くは後期の円墳であり群集する。分布域は鮎川流域と神流川流域に集中する。また、伊勢塚古墳や平地神社古墳など石室構造にこの地域固有の特質(胴張り・模様積み)をもつものや皇子塚古墳のように切石組みのものなど、中期から終末期まで数多くの古墳が営まれた。それを営造した人々の集落跡も『F1竹沼遺跡』『A1堀ノ内遺跡群』などの調査により明らかとなった。奈良・平安時代の遺跡は藤岡台地北側周縁部に広く展開する。



第8図 周辺遺跡分布図(2) 古墳・奈良・平安時代

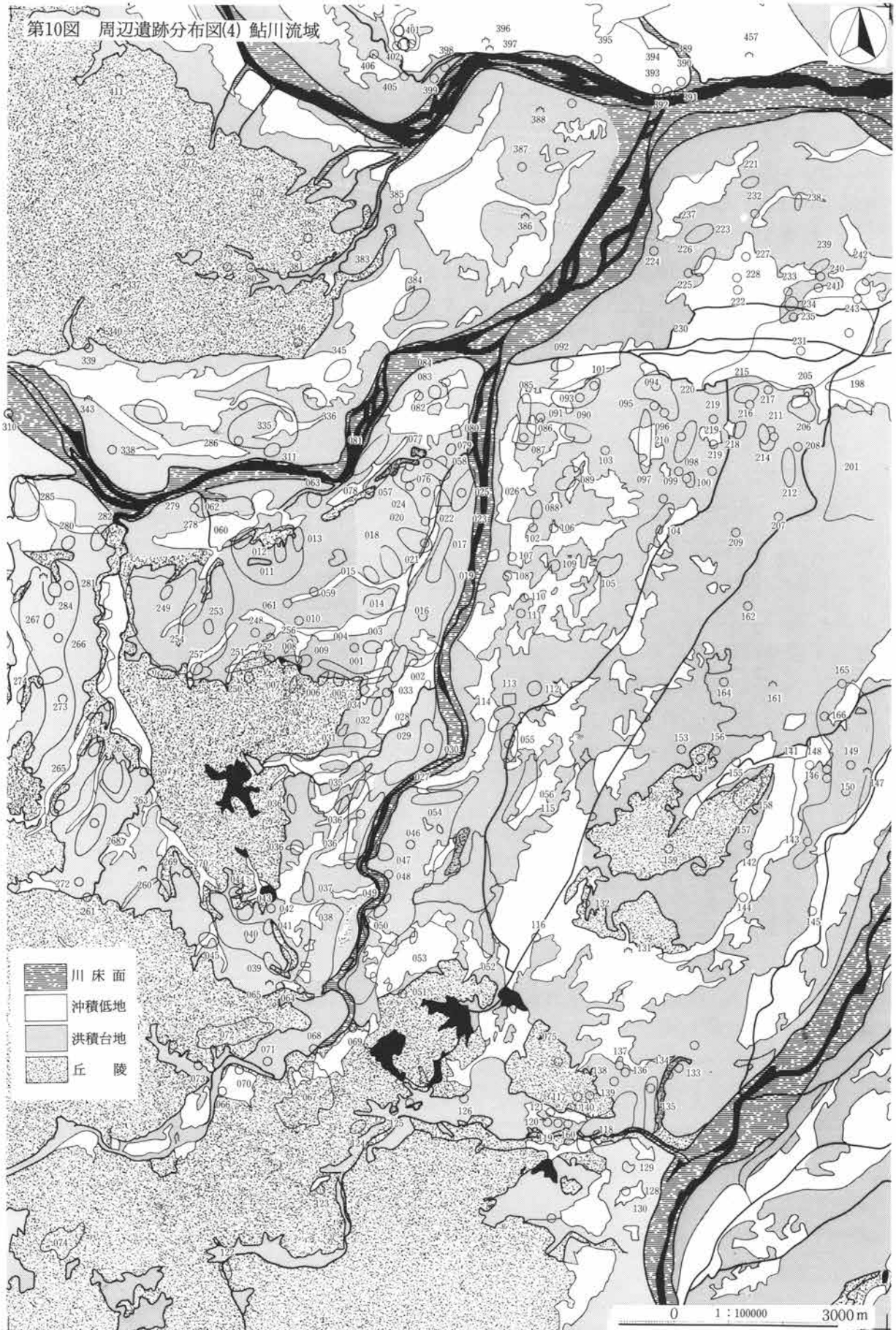
(4) 中世・近世の遺跡分布 (第9図)

中近世の遺跡として明らかとなっているのは城館跡である。特に、中世の後期には関東管領山内上杉氏の関係する平井城が築かれたこともあり、平井城を主城とする山城が幾つか確認されている。また、鎌倉街道が通過していたことも判明しており、今後の調査が期待される。小字名には中世の城館に由来すると思われる地名と、近世初期に芦田氏による城郭・地割りの整備が行われ、それに由来するものが見られる。発掘調査においては中世の埋葬遺構が各遺跡においてかなり検出されている。(綿貫銳次郎)



第9図 周辺遺跡分布図(3) 中・近世

第10図 周辺遺跡分布図(4) 鮎川流域



第3表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	掲載図版	所在地	先	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	集	生	墳	城	他
001	白石大御堂遺跡	7 8 9 10	藤岡市白石字大御堂・前原・上谷戸	◇	◆	◇	◆	◇	◆	◆	◆		☆		☆		☆
002	平井地区No16遺跡	7 8 10	藤岡市白石字前原		◇	◇											分布00
003	平井地区No15遺跡	7 8 10	藤岡市白石字上谷戸		◇	◇	◇	◇									分布00
004	(古墳)	8 10	藤岡市白石字根岸			◇									☆		
005	平井地区No14遺跡	8 10	藤岡市白石字上谷戸		◇	◇											
006	平井地区No13遺跡	7 10	藤岡市白石字美濃山		◇												
007	(散布地)	7 8 10	藤岡市白石字根岸		◇		◇	◇									
008	白石根岸遺跡	7 8 10	藤岡市白石字根岸		◇		◇	◇					☆	☆			
009	平井地区No12遺跡	7 10	藤岡市白石字根岸		◇												分布00
010	境塚遺跡	8 10	藤岡市白石字根岸			◇	◇	◇									
011	(散布地)	7 10	藤岡市白石字上原		◇												
012	平井地区No 2 遺跡	7 8 10	藤岡市白石字上原		◇	◇	◇	◇									分布00
013	平井地区No 3 遺跡	7 8 10	藤岡市白石字上原		◇	◇	◇	◇									分布00
014	平井地区No 9 遺跡	7 8 10	藤岡市白石字島寺		◇	◇	◇	◇									
015	平井地区No 8 遺跡	7 8 10	藤岡市白石字中郷		◇	◇	◇	◇									
016	白石古墳群	8 10	藤岡市白石字下郷				◆								☆		
017	平井地区No11遺跡	7 8 9 10	藤岡市白石字滝		◇	◇	◇	◇	◇								分布00
018	平井地区No 7 遺跡	7 8 10	藤岡市白石字新堀		◇	◇	◇	◇	◇								分布00
019	白石の砦	9 10	藤岡市白石字新堀						◇								凸
020	平井地区No 6 遺跡	7 8 10	藤岡市白石字稲荷原		◇	◇	◇										分布00
021	白石稲荷山古墳	8 10	藤岡市白石字稲荷原				◆								☆		市指 市教委
022	十二天塚古墳	8 10	藤岡市白石字稲荷原				◆								☆		市教委
023	平井地区No 5 遺跡	7 8 10	藤岡市白石字北原		◇	◇											分布00
024	東原遺跡 (D 1)	7 8 10	藤岡市白石字東原		◆	◆							☆	☆			市教委
025	白石猿田古墳群	8 10	藤岡市白石字猿田				◆								☆		市教委
026	平井地区No10遺跡	7 8 10	藤岡市白石字猿田		◇	◇											分布00
027	平井地区No19遺跡	10	藤岡市白石・緑壘・西平井									◇					分布00
028	緑壘地区遺跡群 (F 2)	7 8 9 10	藤岡市緑壘	◇	◆	◆	◆	◆	◆	◆			☆	☆	☆	☆	市教委01
029	緑壘遺跡群	8 10	藤岡市緑壘			◇	◇	◇					☆	☆			群埋文
030	緑壘古墳群	8 10	藤岡市緑壘				◆								☆		市教委
031	平井地区No18遺跡	7 8 10	藤岡市緑壘字中里			◇	◇	◇									分布00
032	平井地区No17遺跡	7 8 10	藤岡市緑壘字不動前・薬師原・北郷		◇	◇	◇	◇									分布00
033	薬師原遺跡 (F 9)	7 8 9 10	藤岡市緑壘字薬師原		◆	◆			◆				☆			☆	市教委02
034	白石古墳群	8 10	藤岡市緑壘・白石				◆								☆		
035	平井地区No22遺跡	10	藤岡市西平井字島・二ノ宮・道									◇					分布00
036	竹沼遺跡 (F 1)	7 8 10	藤岡市西平井・緑壘		◆	◆	◆	◆					☆	☆			市教委03
037	平井地区No23遺跡	7 8 10	藤岡市西平井字屋敷・久伝		◇	◇	◇	◇									分布00
038	平井城跡	9 10	藤岡市西平井							◆						☆	
039	南坂古墳群	8 10	藤岡市西平井				◆								☆		
040	平井地区No29遺跡	7 8 10	藤岡市西平井字南坂		◇	◇	◇	◇									分布00
041	平井地区No28遺跡	7 8 10	藤岡市西平井字滝ノ上		◇			◇									分布00
042	(墳墓)	8 10	藤岡市西平井				◇								☆		
043	平井地区No27遺跡	7 8 9	藤岡市西平井字清水谷・上ノ場		◇		◇	◇									分布00
044	平井地区No26遺跡	7 10	藤岡市西平井字の場		◇												分布00
045	平井地区No30遺跡	7 8 10	藤岡市西平井字不動原		◇	◇	◇	◇									分布00
046	東平井古墳群	8 10	藤岡市東平井				◆								☆		県教委02
047	平井地区No24遺跡	7 8 10	藤岡市東平井字飛石		◇	◇											分布00
048	飛石A遺跡	7 8 10	藤岡市東平井		◆	◆									☆		
049	(墳墓)	8 10	藤岡市東平井字川破				◇								☆		
050	平井地区No25遺跡	7 10	藤岡市平井字塚間		◇												分布00
051	平井地区No33遺跡	7 10	藤岡市東平井字上田1838		◇												分布00
052	平井地区No32遺跡	7 8 10	藤岡市東平井字猿川			◇	◇	◇									分布00
053	東平井の砦跡	9 10	藤岡市東平井字城之内							◇							凸
054	平井地区No20遺跡	7 10	藤岡市鮎川字尺司・時沢・塔之内		◇												分布00
055	鮎川古墳群	8 10	藤岡市鮎川				◆								☆		
056	平井地区No31遺跡	7 8 10	藤岡市鮎川字紅粉谷戸・原ノ坊・薬師			◇	◇	◇									分布00
057	東原II遺跡 (F 8)	8 9 10	藤岡市三ツ木字東原					◆	◆	◆			☆	☆			
058	平井地区No 4 遺跡	7 8 10	藤岡市三ツ木字東原		◇	◇	◇	◇									分布00
059	三ツ木橋向遺跡	10	藤岡市三ツ木									◇					市教委
060	平井地区No 1 遺跡	7 10	藤岡市三ツ木字橋向		◇												分布00

第II章 遺 跡

番号	遺 跡 名	掲載図版	所 在 地	先	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	集	生	墳	城	他
061	三ツ木城跡	10	藤岡市三ツ木						◇								凸
062	(散布地)	8 10	藤岡市三ツ木				◇	◇	◇								
063	(散布地)	8 10	藤岡市三ツ木				◇	◇	◇								
064	金山瓦窯跡	8 10	藤岡市金井49				◆							☆			
065	金山西城跡	9 10	藤岡市金井乙203						◆								☆
066	(墳墓)	8 10	藤岡市金井字川久保				◇								☆		
067	金井城跡	9 10	藤岡市金井字小平						◆								☆
068	高山城跡	9 10	藤岡市金井字上小平						◇								☆
069	(墳墓)	8 10	藤岡市金井				◇										☆
070	(墳墓)	8 10	藤岡市金井字中倉				◇										☆
071	こぼつさま	8 10	藤岡市金井字大平				◇										☆
072	平井金山城跡	9 10	藤岡市金井字金山						◇								☆
073	鉦沢遺跡	8 9 10	藤岡市金井字鉦沢						◆	◆				☆			
074	子王子山城跡	9 10	藤岡市箕輪						◇								☆
075	駒留城	9 10	藤岡市下日野駒留字印字						◇								凸
076	宗永寺古墳群	8 10	藤岡市上落合				◆										☆
077	七興山古墳	8 10	藤岡市上落合				◆										☆
078	美土里地区No.3 遺跡	7 8 10	藤岡市上落合字向山	◇			◇	◇	◇								分布05
079	美土里地区No.4 遺跡	7 8 9 10	藤岡市上落合字七興・猿田	◇			◇			◇							分布05
080	落合の砦	9 10	藤岡市上落合字城山						◇								☆
081	美土里地区No.2 遺跡	7 8 10	藤岡市上落合字上野	◇			◇	◇	◇								分布05
082	伊勢塚古墳	8 10	藤岡市上落合				◆										☆
083	岡の砦	9 10	藤岡市上落合字岡						◇								☆
084	美土里地区No.1 遺跡	7 8 9 10	藤岡市上落合字屋敷裏	◇			◇	◇	◇	◇							分布05
085	本動堂古墳群	8 10	藤岡市本動堂				◆										☆
086	動堂の城跡	9 10	藤岡市本動堂字前屋敷						◇								☆
087	(墳墓)	8 10	藤岡市本動堂				◇										☆
088	美土里地区No.10 遺跡	7 8 10	藤岡市本動堂字新堀	◇			◇	◇	◇								分布05
089	美土里地区No.9 遺跡	7 8 10	藤岡市本動堂字稲荷屋敷他	◇			◇	◇	◇								分布05
090	美土里地区No.6 遺跡	8 10	藤岡市本動堂字上宿・東				◇	◇	◇								分布05
091	上宿B遺跡 (D 5)	8 10	藤岡市本動堂				◆	◆	◆					☆			市教委
092	美土里地区No.5 遺跡	7 8 10	藤岡市篠塚字西原	◇			◇	◇	◇								分布05
093	篠塚古墳群	8 10	藤岡市篠塚				◆										☆
094	篠塚古墳群	8 10	藤岡市篠塚				◆										◎
095	(古墳)	8 10	藤岡市篠塚				◇										◎
096	大明神遺跡 (D 8)	8 10	藤岡市篠塚						◆					☆			市教委
097	美土里地区No.7 遺跡	8 10	藤岡市篠塚字夏目他				◇	◇	◇								分布05
098	岡の西遺跡 (D11)	8 10	藤岡市篠塚						◆	◆							☆
099	狐穴遺跡 (D 6)	8 10	藤岡市篠塚						◇	◇							☆
100	美土里地区No.8 遺跡	8 10	藤岡市篠塚字岡西・狐穴				◇	◇	◇								分布05
101	(墳墓)	10	藤岡市篠塚字西原・中組・北口				◇										
102	新堀遺跡	8 10	藤岡市下大塚						◆					☆			市教委
103	北原遺跡 (D 2)	8 10	藤岡市下大塚						◆	◆							☆
104	美土里地区No.11 遺跡	7 8 9 10	藤岡市下大塚字東イツナ中大塚字下郷	◇			◇	◇	◇	◇							分布05
105	中大塚の城跡	9 10	藤岡市中大塚字下郷						◇								凸
106	平地神社古墳	8 10	藤岡市中大塚字宮前				◇										◎
107	滝下遺跡 (D10)	7 8 10	藤岡市中大塚				◆	◆									◎
108	滝前遺跡 (D10)	7 8 10	藤岡市中大塚				◆	◆	◆					☆	☆		市教委
109	美土里地区No.12 遺跡	8 10	藤岡市中大塚字宮裏・正蓮寺				◇										分布05
110	中大塚遺跡	7 10	藤岡市中大塚字鎌倉1093				◆							☆			県指
111	美土里地区No.13 遺跡	10	藤岡市中大塚字鎌倉										◇				分布05
112	美土里地区No.14 遺跡	7 8 10	藤岡市上大塚字出口	◇			◇	◇	◇								分布05
113	上大塚の砦跡	8 10	藤岡市上大塚字						◇								凸
114	美土里地区No.15 遺跡	7 10	藤岡市上大塚字南	◇													分布05
115	美土里地区No.16 遺跡	7 8 10	藤岡市上大塚字南原	◇			◇	◇	◇								分布05
116	道上遺跡	8 10	藤岡市欠場				◆	◆						☆			
117	(墳墓)	8 10	藤岡市三本木字下原				◇										☆
118	三本木古墳群	8 10	藤岡市三本木				◆										☆
119	(墳墓)	8 10	藤岡市三本木字下原				◇										☆
120	(墳墓)	8 10	藤岡市三本木字下原				◇										☆
121	(墳墓)	8 10	藤岡市三本木字下原				◇										☆

第1節 立地と環境

番号	遺跡名	掲載図版	所在地	先	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	集	生	墳	城	他
122	清水山城跡	9 10	藤岡市高山字山室							◇						凸	
123	高山館跡	9 10	藤岡市高山字下組							◇						凸	
124	伝高山氏館跡	9 10	藤岡市高山字高山							◇						凸	
125	(寺院跡)	9 10	藤岡市高山								◇						
126	(縄文住居跡)	7 10	藤岡市高山	◇									☆				
127	(墳墓)	9 10	藤岡市保美字塚越							◇					☆		
128	高山氏祖代々の墓	9 10	藤岡市保美字丁							◇							
129	芦田川屋敷跡	9 10	藤岡市保美字城戸							◇						凸	
130	保美の砦跡	9 10	藤岡市保美字中内出・西内							◇						凸	
131	常岡城跡	9 10	藤岡市神田字城腰							◆						☆	
132	(墳墓)	8 10	藤岡市神田字宿				◇									☆	
133	(墳墓)	8 10	藤岡市神田字宿				◇									☆	
134	(墳墓)	8 10	藤岡市神田字宿				◇									☆	
135	神田古墳群	8 10	藤岡市神田				◆									☆	
136	(墳墓)	8 10	藤岡市神田字宿				◇									☆	
137	(住居跡)	8 10	藤岡市神田字前原				◇						☆				
138	(墳墓)	8 10	藤岡市神田字宿				◇									☆	
139	(墳墓)	8 10	藤岡市神田字高峰				◇									☆	
140	(墳墓)	8 10	藤岡市神田字高峰				◇									☆	
141	本郷尺地遺跡	8 9 10	藤岡市本郷字尺地・田中東		◆		◆			◇	◇						☆ 群埋文⑧
142	本郷山根遺跡	8 10	藤岡市本郷字山根	◇			◇	◇	◇								群埋文⑧
143	本郷埴輪窯跡	8 10	藤岡市本郷字塚原				◆							☆			国指
144	堂山	8 10	藤岡市本郷				◇										
145	土師神社	8 10	藤岡市本郷字宮下				◇										
146	地藏堂・ひょうたん塚	8 10	藤岡市本郷・根岸				◇										
147	根岸築城跡	9 10	藤岡市根岸							◆						☆	
148	土師食堂前遺跡(A5)	8 9	藤岡市小林748-1				◆	◆	◆	◆			☆	☆			市教委
149	堀ノ内遺跡群(A1)	7 8 9 10	藤岡市小林南・本郷		◆		◆	◆	◆	◇	◇		☆	☆			市教委⑨
150	小林古墳群	8 10	藤岡市小林・根岸・本郷				◆									☆	
151	小林館ノ山の館跡	9	藤岡市小林字中里							◇						☆	
152	(墳墓)	8	藤岡市小林字中里				◇										
153	白塩道南遺跡	8 9 10	藤岡市山崎							◆	◆					☆	☆
154	北山遺跡	7 8 9 10	藤岡市山崎字北山	◇	◆		◆	◆	◆	◆				☆			
155	山間遺跡	7 8 10	藤岡市山崎		◆				◆					☆	☆		
156	光徳寺裏山遺跡	7 10	藤岡市藤岡		◆									☆			
157	(墳墓)	8 10	藤岡市藤岡字南山				◇									☆	
158	大神宮山の砦跡	9 10	藤岡市藤岡字南山							◇						☆	
159	(墳墓)	8 10	藤岡市藤岡字外平				◇									☆	
160	一本松住居跡	8	藤岡市藤岡字外平				◇							☆			
161	芦田城跡	9 10	藤岡市藤岡								◆					☆	
162	奥浅間	8 10	藤岡市藤岡字高崎道西				◇									☆	
163	浅間神社	8	藤岡市藤岡字高崎道西				◇										
164	藤岡城跡	9 10	藤岡市藤岡字城屋敷							◇							凸
165	(墳墓)	8 10	藤岡市藤岡字東裏甲				◇									☆	
166	諏訪神社古墳	8 10	藤岡市藤岡字東裏甲				◇									☆	
167	戸塚古墳群	8	藤岡市戸塚・小林				◆									☆	
168	株木遺跡(B4)	7 8	藤岡市上戸塚字株木		◆		◆	◆	◆				☆				市教委(2D)
169	野見塚古墳群	8	藤岡市上戸塚				◆									☆	
170	神流地区No19遺跡	8	藤岡市上戸塚字七反畑・柳原						◇								分布⑩
171	神流地区No20遺跡	7 8	藤岡市上戸塚字北原・西原・株木・久保	◇					◇	◇							分布⑩
172	神流地区No21遺跡	8	藤岡市上戸塚字正上寺						◇	◇	◇						分布⑩
173	神流地区No22遺跡	7 8	藤岡市上戸塚字島・熊野	◇					◇								分布⑩
174	神流地区No23遺跡	8	藤岡市上戸塚字野前・志多分						◇	◇							分布⑩
175	神流地区No24遺跡	8	藤岡市上戸塚上河原・下河原						◇	◇							分布⑩
176	お熊様	8	藤岡市上戸塚熊野				◇										
177	神流地区No14遺跡	7 8	藤岡市下戸塚字神明・西原・上戸塚字北原	◇					◇	◇							分布⑩
178	神流地区No15遺跡	8	藤岡市下戸塚字神明・西田・上戸塚字正上寺						◇	◇							分布⑩
179	神流地区No16遺跡	7 8	藤岡市下戸塚字上方・上戸塚字原	◇					◇	◇							分布⑩
180	神流地区No17遺跡	7 8	藤岡市下戸塚字東田・三角	◇					◇	◇							分布⑩
181	神流地区No18遺跡	7 8	藤岡市下戸塚字宮川	◇					◇	◇							分布⑩
182	下戸塚の城跡	9	藤岡市下戸塚字上方							◇						凸	

第II章 遺 跡

番号	遺 跡 名	掲載図版	所 在 地	先	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	集	生	墳	城	他
183	温井遺跡	8	藤岡市岡之郷				◆						☆				県教委(5)
184	中道遺跡 (B 6)	7 8	藤岡市岡之郷			◆	◆						☆	☆			市教委(3)
185	岡之台遺跡 (C 5)	7	藤岡市岡之郷		◇												☆ 市教委
186	神流地区No.3 遺跡	7 8 9	藤岡市岡之郷字馬場		◇		◇	◇		◇							分布(7)
187	神流地区No.1 遺跡	8	藤岡市岡之郷字温井東				◇	◇									分布(7)
188	神流地区No.2 遺跡	8 9	藤岡市岡之郷字温井				◇	◇		◇							分布(7)
189	神流地区No.4 遺跡	7 8	藤岡市岡之郷岡の台・中道・加料皆戸・柳田		◇				◇								分布(7)
190	神流地区No.7 遺跡	8 9	藤岡市岡之郷字新井				◇	◇		◇							分布(7)
191	神流地区No.6 遺跡	7 8	藤岡市岡之郷字新井・社宮司		◇		◇	◇									分布(7)
192	神流地区No.5 遺跡	8	藤岡市岡之郷字原				◇	◇									分布(7)
193	加料皆戸遺跡 (B 7)	7 8	藤岡市岡之郷		◇			◆						☆		☆	市教委(3)
194	五町田遺跡 (B 8)	8	藤岡市下栗須					◆	◆					☆	☆		市教委(3)
195	田島遺跡 (B 9)	7 8	藤岡市下栗須		◆		◆						☆				市教委(3)
196	円浄遺跡	7 8	藤岡市下栗須		◆		◆	◆	◆								☆ 市教委(3)
197	大道南遺跡 (B 8)	8	藤岡市下栗須				◆	◆									☆ 市教委
198	神流地区No.8 遺跡	7 8 10	藤岡市下栗須字瀧川・新田・五町田・清水田		◇		◇	◇		◇							分布(7)
199	神流地区No.9 遺跡	7 8 9	藤岡市下栗須字岡之郷境		◇		◇	◇		◇							分布(7)
200	神流地区No.11 遺跡	7 8 9	藤岡市下栗須字清水田・田島・仙久保		◇		◇	◇		◇							分布(7)
201	神流地区No.10 遺跡	7 8 9 10	藤岡市下栗須字権現塚他		◇	◇	◇	◇		◇							分布(7)
202	神流地区No.12 遺跡	7 8	藤岡市下栗須字円浄・下戸塚字稻荷前他		◇		◇	◇									分布(7)
203	神流地区No.13 遺跡	7 8	藤岡市下栗須字長者塚・柵・下戸塚字天王		◇		◇	◇									分布(7)
204	(墳墓)	8	藤岡市下栗須				◇										
205	谷地遺跡 (C 8)	7 8 10	藤岡市中栗須		◆		◇	◇		◇							☆ 市教委
206	小野地区No.9 遺跡	7 10	藤岡市中栗須字谷地		◇												分布(8)
207	八反畑遺跡 (C 3)	8 10	藤岡市中栗須				◆	◆					☆				市教委
208	藤岡境II遺跡 (C14)	8 10	藤岡市中栗須				◆						☆				市教委
209	藤岡境遺跡 (C10)	8 10	藤岡市中栗須				◆						☆				市教委
210	小野地区No.11 遺跡	8 10	藤岡市中栗須字寺前				◇	◇		◇							分布(8)
211	小野地区No.10 遺跡	8 10	藤岡市中栗須字邸前				◇										分布(8)
212	小袋遺跡	8 10	藤岡市中栗須字小袋					◆					☆				市教委
213	小野地区No.13 遺跡	8	藤岡市中栗須字小袋				◇	◇		◇							分布(8)
214	小野地区No.12 遺跡	8 10	藤岡市中栗須字郷戸				◇	◇		◇							分布(8)
215	神明遺跡 (C 5)	7 10	藤岡市中栗須字神明		◆												☆ 市教委
216	小野地区No.8 遺跡	7 10	藤岡市中栗須字神明		◇												分布(8)
217	神明北遺跡 (C 7)	7 10	藤岡市中栗須字神明北		◆												☆ 市教委
218	上栗須古墳群	8 10	藤岡市上栗須				◆								☆		
219	上栗須遺跡	7 8 9 10	藤岡市上栗須		◆		◆	◆	◆	◆			☆	☆	☆		群埋文(7)
220	上栗須寺前遺跡	7 8 10	藤岡市上栗須		◇		◇	◇		◇							
221	小野地区No.1 遺跡	8 10	藤岡市中字下諏訪・森字天神				◇	◇		◇							分布(8)
222	中沖遺跡 (C 1)	8 10	藤岡市中字沖				◆						☆				
223	小野地区No.3 遺跡	8 10	藤岡市中字天神				◇	◇		◇							分布(8)
224	立石堀遺跡 (C12)	9 10	藤岡市中							◇							☆
225	中II遺跡	7 8 10	藤岡市中字中西291他		◇		◆	◆	◆						☆	☆	
226	小野地区No.4 遺跡	8 10	藤岡市中字天王西				◇	◇		◇							分布(8)
227	中I遺跡	8 10	藤岡市中				◆						☆	☆			
228	社宮司遺跡 (C 2)	8 10	藤岡市中字社宮司				◆										☆ 市教委
229	一八様	9	藤岡市字中東黒田							◇							☆
230	中城	8 9 10	藤岡市字中東堤添				◇	◇	◇	◇							☆
231	小野地区水田址遺跡(C 4)	8 10	藤岡市森				◆	◆	◆					☆			市教委
232	森泉遺跡 (C13)	7 8 9 10	藤岡市森字泉				◆	◆	◆	◆			☆	☆			市教委
233	森遺跡	7 8 10	藤岡市森字口無				◇	◆	◆	◆			☆	☆			県教委(5)
234	小野地区No.5 遺跡	8 10	藤岡市森字石塚				◇	◇		◇							分布(8)
235	滝川遺跡 (C 6)	7 10	藤岡市森字滝川		◇												☆ 市教委
236	森東館跡	9	藤岡市森字北口							◇	◇						☆
237	森西館跡	9 10	藤岡市森字中西							◇	◇						☆
238	小野地区No.2 遺跡	8 10	藤岡市立石字鰐谷戸				◇	◇		◇							分布(8)
239	小野地区No.6 遺跡	8 10	藤岡市立石字清水				◇	◇		◇							分布(8)
240	沖II遺跡 (C11)	7 8 9 10	藤岡市立石字沖				◆	◆	◆	◆				☆			市教委
241	沖遺跡 (C 4)	8 10	藤岡市立石					◆									☆
242	小野地区No.7 遺跡	8 10	藤岡市立石字下川				◇	◇		◇							分布(8)
243	下川前遺跡 (C 4)	8 10	藤岡市立石					◆	◆				☆				

第1節 立地と環境

番号	遺跡名	掲載図版	所在地	先	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	集	生	墳	城	他
244	浄法寺(緑野寺跡)	8	鬼石町浄法寺甲						◇							◇	
245	浄法寺の館跡	9	鬼石町浄法寺字内手						◇							◇	
246	三ツ山城跡	9	鬼石町浄法寺字根古屋						◇							◇	
247	(包蔵地)	7 8	鬼石町浄法寺字中曾根	◇			◇										
248	(包蔵地)	8 10	吉井町黒熊						◇	◇							
249	黒熊遺跡群	7 8 9 10	吉井町黒熊・深沢・小串	◆	◆	◆	◆	◆	◆				☆		☆		
250	(散布地)	7 10	吉井町黒熊字栗崎	◇													
251	黒熊栗崎遺跡	8 9 10	吉井町黒熊字栗崎						◇	◇							☆
252	(寺院跡)	8 10	吉井町黒熊字塔之峰						◇								
253	(散布地)	7 10	吉井町黒熊字新井	◇													
254	(散布地)	8 10	吉井町黒熊字新井・中西・久保				◇	◇	◇								
255	黒熊中西遺跡	8 10	吉井町黒熊字中西					◇	◇				◇				群埋文
256	深沢の砦跡	9	吉井町黒熊字内出							◇						凸	
257	(散布地)	7 10	吉井町黒熊字八幡	◇													
258	黒熊八幡遺跡	8 10	吉井町黒熊字八幡					◇	◇				◇				群埋文
259	(生産跡)	8 10	吉井町多比良字下五反田					◇	◇					☆			国土館大学
260	瀬戸城跡	9 10	吉井町多比良字向平							◇						凸	
261	山の神古墳群	8 10	吉井町多比良字山の神				◇										
262	(散布地)	7 10	吉井町多比良字新堀	◇													
263	多比良新堀城跡	9 10	吉井町多比良字新堀							◇						凸	
264	(散布地)	7 10	吉井町多比良字西組	◇													
265	(散布地)	8 10	吉井町多比良字西組・中組					◇	◇	◇							
266	(散布地)	8 10	吉井町多比良字西深沢・追部野					◇	◇	◇							
267	(散布地)	7 10	吉井町多比良字西深沢	◇													
268	(散布地)	8 10	吉井町多比良字中組					◇	◇	◇							
269	中ノ原城跡	9 10	吉井町多比良字中ノ原							◇						凸	
270	中ノ原古墳群	8 10	吉井町多比良字中原				◇									☆	
271	(散布地)	7 10	吉井町多比良字中組	◇													
272	(生産跡)	8 10	吉井町多比良字長谷川					◇								☆	
273	(散布地)	7 10	吉井町多比良字追部野	◇													
274	多比良追部野遺跡	8 10	吉井町多比良字追部野					◇	◇	◇				☆	☆		群埋文
275	(散布地)	7	吉井町多比良字松田	◇													
276	千保原遺跡	8	吉井町多比良字西深沢					◇									
277	柳田遺跡	8	吉井町多比良字松田					◇	◇	◇				☆			
278	塚原遺跡	7 8 10	吉井町小串字塚原	◆	◇			◆					☆				☆
279	小串古墳群	8 10	吉井町小串字東組				◇								☆		
280	祝神遺跡	7 8 9 10	吉井町石神		◇	◇	◇	◇	◇	◇							
281	(包蔵地)	7 10	吉井町石神	◇													
282	石神祝神古墳群	8 10	吉井町石神				◇									◎	
283	峰山城跡	9 10	吉井町石神字城							◇						凸	
284	入野遺跡	8 10	吉井町石神字馬場					◆	◆	◆				☆			町教委
285	塚原古墳群	8 10	吉井町岡				◇									◎	
286	松木瀬古墳群	8 10	吉井町小暮字松木瀬				◇									◎	
287	稲荷山遺跡	7	吉井町神保字稲荷山	◇	◇												
288	折茂東遺跡	7 8	吉井町神保字上神保		◇	◇		◇						☆			
289	神保古墳群	8	吉井町神保字植松・南高原・北山下				◇									☆	
290	神保植松遺跡	7 8 9	吉井町神保字植松		◇	◇	◇	◇	◇	◇				☆		凸	群埋文
291	神保富士塚遺跡	7 8 9	吉井町神保字富士塚	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇				☆			群埋文
292	(散布地)	7	吉井町神保字上神保	◇													
293	(散布地)	7	吉井町神保字上神保	◇													
294	(散布地)	7	吉井町神保字上神保	◇													
295	(散布地)	8	吉井町神保字上神保				◇	◇	◇								
296	(散布地)	8	吉井町神保字上神保				◇	◇	◇								
297	下高原庵寺	8	吉井町神保字下神保							◇							
298	一本杉古墳	8	吉井町神保字下神保					◇								☆	
299	矢田遺跡	7 8	吉井町矢田	◆			◆	◆	◆					☆			群埋文
300	(散布地)	8	吉井町矢田				◇	◇	◇								
301	稲荷塚古墳	8	吉井町矢田				◇									☆	
302	川内古墳群	8	吉井町矢田				◇									☆	
303	川内遺跡	7 8	吉井町川内字旧川内		◇	◇	◇	◇	◇					☆			
304	多胡蛇黒遺跡	7 8	吉井町多胡字西松田	◆			◆	◆	◆					☆			群埋文

第II章 遺 跡

番号	遺 跡 名	掲載図版	所 在 地	先	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	集	生	墳	城	他
305	(散布地)	7	吉井町多胡----		◇												
306	(散布地)	7	吉井町多胡----			◇											
307	多胡古墳群	8	吉井町多胡----			◇									☆		
308	多胡薬師塚	8	吉井町多胡----			◇											
309	中天水古墳群	8	吉井町多胡----			◇									☆		
310	多胡碑	8 10	吉井町池字御門			◇											☆ 国特指
311	西浦古墳群	8 10	吉井町池字塚原			◇									◎		
312	(寺院跡)	8 10	吉井町池字岡				◇										
313	(散布地)	7	吉井町池字御門		◇												
314	(散布地)	8	吉井町----				◇	◇	◇								
315	下池古墳群	8	吉井町池字御門				◇									☆	
316	下涼古墳群	8	吉井町下池字中井				◇									☆	
317	川福遺跡	8	吉井町池字御門					◇	◇							☆	
318	安坪古墳群	8	吉井町長根字安坪					◇								◎	
319	長根安坪遺跡	7 8 9	吉井町長根字安坪・安坪谷	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆					☆	◎	群埋文
320	長根羽田倉遺跡	7 8 9	吉井町長根字羽田倉	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆					☆	◎	☆ 群埋文
321	西脇場・長根宿遺跡	7 8	吉井町長根字上野場					◇	◇							☆	
322	(散布地)	7	吉井町字宿		◇	◇											
323	(散布地)	7	吉井町字権現堂		◇												
324	(散布地)	7	吉井町長根字安坪		◇												
325	(散布地)	7	吉井町長根字下の宿		◇												
326	(散布地)	7	吉井町長根字安坪		◇												
327	(散布地)	7	吉井町長根字安坪		◇												
328	(散布地)	7	吉井町長根字安坪		◇												
329	(散布地)	7	吉井町長根字安坪		◇												
330	(散布地)	7	吉井町長根字安坪			◇											
331	(散布地)	7	吉井町長根字折茂			◇											
332	(散布地)	8	吉井町長根字安坪				◇	◇	◇								
333	愚行寺裏古墳	8	吉井町長根字権現堂				◇									☆	
334	長根城跡	9	吉井町長根							◇							凸
335	(散布地)	8 10	吉井町馬庭				◇	◇	◇								
336	(散布地)	8 10	吉井町馬庭				◇	◇	◇								
337	入道ヶ谷遺跡	9 10	吉井町馬庭							◇							凸
338	御穴塚古墳	8 10	吉井町馬庭穴宿				◇									☆	
339	池四郎塚古墳	8 10	吉井町馬庭字下中林				◇									☆	
340	中林城跡	9 10	吉井町馬庭字下中林							◇							凸
341	馬庭古墳群	8	吉井町馬庭字中光寺				◇									☆	
342	(寺院跡包蔵地)	8	吉井町馬庭字東					◇									
343	馬庭城跡	9 10	吉井町馬庭字内出							◇							凸
344	(散布地)	7 10	吉井町馬庭字中光寺		◇												
345	岩井古墳群	8 10	吉井町岩井				◇									◎	
346	薬師穴横穴群	8 10	吉井町岩井字葛塚				◇									◎	
347	(散布地)	8	吉井町岩井字塚原				◇	◇	◇								
348	(散布地)	7 8	吉井町岩崎字岩木		◇		◇	◇	◇								
349	(散布地)	8	吉井町岩崎字岩木				◇	◇	◇								
350	(散布地)	7	吉井町岩崎字上越沢		◇												
351	(散布地)	7	吉井町岩崎字上越沢		◇												
352	(散布地)	8	吉井町岩崎字上越沢				◇	◇	◇								
353	(散布地)	7 8	吉井町岩崎字下越沢		◇												
354	(散布地)	7	吉井町岩崎字下越沢		◇												
355	(散布地)	8	吉井町岩崎字下越沢				◇	◇	◇								
356	(散布地)	7 8	吉井町岩崎字日影		◇		◇	◇	◇								
357	砂井戸遺跡	7 8	吉井町吉井		◇	◇	◇	◇									
358	雑木味遺跡	8	吉井町吉井				◇									☆	
359	(散布地)	7	吉井町西吉井		◇												
360	道六神遺跡	8	吉井町西吉井						◇							☆	
361	(散布地)	8	吉井町前原				◇	◇	◇								
362	(散布地)	8	吉井町前原				◇	◇	◇								
363	(散布地)	8	吉井町馬場				◇	◇	◇								
364	馬場塚古墳	8	吉井町馬場				◇									☆	
365	(散布地)	8	吉井町片山				◇	◇	◇								

第1節 立地と環境

番号	遺跡名	掲載図版	所在地	先	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	集	生	墳	城	他
366	片山古墳群	8	吉井町片山				◇								☆		
367	小棚古墳群	8	吉井町小棚				◇								☆		
368	北原古墳群	8	吉井町塩川				◇								☆		
369	(散布地)	7	吉井町本郷	◇													
370	(散布地)	8	吉井町本郷				◇										
371	(散布地)	8	吉井町本郷				◇	◇	◇								
372	本郷古墳群	8	吉井町本郷				◇								☆		
373	東原古墳群	8	吉井町本郷				◇								☆		
374	八幡塚古墳	8	吉井町本郷				◇								☆		
375	東吹上遺跡	7 8	吉井町西沢	◇	◇	◇	◇							☆			
376	富岡遺跡	7 8	吉井町根岸	◇			◇							☆			
377	金井沢碑	8 10	高崎市山名町				◇										☆
378	根小屋城跡	9 10	高崎市山名町城山							◆					凸		市教委
379	山之上西古墳	8 10	高崎市山名町山ノ上山神谷				◇								◎		
380	でえせえじ遺跡	8 10	高崎市山名町				◇							☆			☆
381	山ノ上古墳・山ノ上碑	8 10	高崎市山名町山神谷				◇								◎		☆
382	山名城跡	9 10	高崎市山名町下之城							◇						凸	
383	五三山火葬墓	9 10	高崎市山名町五三山字天水							◇					◎		
384	伊勢塚古墳群	8 10	高崎市山名町伊勢塚				◇								◎		
385	古墳(多野八幡67~72号の内3基)	8 10	高崎市山名町土合				◇								◎		
386	木部城跡	9 10	高崎市木部町堀ノ内・勝利							◇						凸	
387	田端遺跡	8 10	高崎市木部町田端・阿久津町田端				◇	◇	◇					☆	☆		群埋文
388	木部町北遺跡	9 10	高崎市阿久津町中組							◇						凸	
389	綜覧倉賀野町189号墳外5基	8 10	高崎市倉賀野町				◇										
390	大道南古墳群	8 10	高崎市倉賀野町下町大道南				◆								◎		市教委
391	大応寺遺跡	8 10	高崎市倉賀野町下町甲大応寺乙				◇	◇	◇					☆			市教委
392	倉賀野大応寺土師遺跡	8 10	高崎市倉賀野町下町甲大応寺				◆							☆			市教委
393	倉賀野大道土師遺跡	8 10	高崎市倉賀野町下町大道南				◆							☆			市教委
394	倉賀野町56号墳外2基	8 10	高崎市倉賀野町下町乙大道南				◇										
395	倉賀野町下町橋東土師遺跡	8 10	高崎市倉賀野町下町橋東				◆	◆	◆					☆			
396	倉賀野西城跡	9 10	高崎市倉賀野町上町薬師前							◇						凸	
397	倉賀野城跡	9 10	高崎市倉賀野町上町・宮前							◇						凸	
398	倉賀野万福寺縄文遺跡	10	高崎市倉賀野町正六字万福寺	◆										☆			市教委
399	倉賀野万福寺土師遺跡	8 10	高崎市倉賀野町正六字万福寺				◆	◆	◆					☆			市教委
400	浅間山古墳	8	高崎市倉賀野町丙下正六				◇								◎		国指
401	大鶴巻古墳	8 10	高崎市倉賀野町丙下正六				◇								◎		国指
402	小鶴巻古墳	8 10	高崎市倉賀野町丙下正六				◇								◎		
403	安楽寺古墳	8	高崎市倉賀野町丙下正六				◇								◎		
404	下佐野遺跡	7 8 9	高崎市下佐野町字長者	◇	◇	◇	◇	◇	◇					○	○		
405	佐野戸崎遺跡	8 10	高崎市下佐野町戸崎				◇										
406	下佐野古墳群	8 10	高崎市下佐野町稲荷塚・鍛冶・風川				◇								◎		
407	舟橋遺跡	8	高崎市上佐野町字舟橋				◇	◇	◇								
408	下之城条里遺跡	8	高崎市下之城町						◇								
409	下之城跡	9	高崎市下之城町村内							◇						◇	
410	城南小学校遺跡	7	高崎市新後関町寺廻	◇													
411	茶白山城跡	9 10	高崎市寺尾町茶白							◇						凸	
412	(古墳)	8	高崎市石原町				◇								◎		
413	寺尾上城	9	高崎市兼附町雨坪							◇						凸	
414	拾式屋敷跡	9	高崎市鼻高町拾式							◇						凸	
415	福田屋敷跡	9	高崎市藤塚町台							◇						凸	
416	高崎城跡	9	高崎市高松町							◇	◇					凸	
417	大類館跡	9	高崎市南大類町館							◇						凸	
418	大類寄居跡	9	高崎市南大類町寄居							◇						凸	
419	降照屋敷跡	9	高崎市中大類町降照							◇						凸	
420	(散布地)	7	高崎市中大類町降照	◇													
421	(古墳)	8	高崎市中大類町降照				◇								◎		
422	大類城跡	9	高崎市宿大類町沼尻							◇						凸	
423	稲荷塚古墳	8	高崎市下大類町				◇								◎		
424	(古墳)	8	高崎市下大類町				◇								◎		
425	(散布地)	8	高崎市下大類町				◇										
426	鍛冶分遺跡	8	高崎市下大類町				◇										

第II章 遺 跡

番号	遺 跡 名	掲載図版	所 在 地	先	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	集	生	墳	城	他
427	反町屋敷跡	9	高崎市上中居町西屋敷							◇							凸
428	中居の砦跡	9	高崎市上中居町新堀前屋敷							◇							凸
429	競馬場遺跡	7	高崎市上中居町平塚			◇											
430	下中居環濠宅地群	9	高崎山下中居町宅地添						◇								凸
431	(散布地)	8	高崎市柴崎町				◇										
432	柴崎蟹沢古墳	8	高崎市柴崎町				◇								◎		
433	諏訪山古墳	8	高崎市柴崎町隼人				◇								◎		
434	(古墳)	8	高崎市柴崎町西浦				◇								◎		
435	柴崎屋敷跡	9	高崎市柴崎町屋敷						◇							○	
436	かくら塚古墳	8	高崎市矢中町				◇								◎		
437	(古墳)	8	高崎市矢中町				◇								◎		
438	村北A遺跡	8	高崎市矢中町				◇								☆	○	
439	天王前遺跡	8	高崎市矢中町						◇						☆		
440	村東B遺跡	8	高崎市矢中町				◇		◇						☆		
441	村東遺跡	8	高崎市矢中町				◇		◇						☆		☆
442	矢中遺跡群	8 9	高崎市矢中町				◇	◇	◇	◇				☆	☆		凸
443	栗崎町宮原・栗崎境遺跡	8	高崎市栗崎町原				◇	◇	◇								
444	飯玉山古墳	8	高崎市栗崎町宮原				◇								◎		
445	栗崎町原遺跡	8	高崎市栗崎町原				◇										
446	(散布地)	8	高崎市栗崎町				◇										
447	綜岩鼻18号古墳	8	高崎市綿貫町堀米前				◇								◎		
448	堀米屋敷跡	9	高崎市綿貫町堀米前						◇								凸
449	堀米古墳群	8	高崎市綿貫町				◇								◎		
450	観音山古墳	8	高崎市綿貫町				◇								◎		
451	台新田町台南遺跡	8	高崎市台新田町台南					◇	◇								
452	首切山古墳	8	高崎市台新田町台南				◇								◎		
453	桃山古墳	8	高崎市岩鼻町延養寺				◇								◎		
454	岩鼻延養寺遺跡	8	高崎市岩鼻町延養寺				◇										
455	不動山古墳	8	高崎市岩鼻町——				◇								◎		
456	岩鼻二子山古墳	8	高崎市岩鼻町——				◇								◎		
457	岩鼻陣屋跡	9 10	高崎市岩鼻町旧陣板上北・坂上南							◇	◇						凸
458	針塚古墳	8	高崎市八幡原町				◇								◎		
459	コンピラ古墳	8	高崎市八幡原町				◇								◎		
460	天王山古墳	8	高崎市八幡原町				◇								◎		
461	八幡原館跡	9	高崎市八幡原町						◇								凸
462	前原1052古墳	8	高崎市八幡原町若宮				◇								◎		
463	前原1052古墳	8	高崎市八幡原町若宮				◇								◎		
464	若宮2133古墳	8	高崎市八幡原町若宮				◇								◎		
465	鈴塚古墳	8	高崎市八幡原町若宮				◇								◎		
466	若宮2040古墳	8	高崎市八幡原町若宮				◇								◎		
467	若宮遺跡	8	高崎市八幡原町若宮				◇								◎		
468	若宮古墳	8	高崎市八幡原町若宮				◇								◎		
469	(墳墓)	8	高崎市八幡原町				◇								◎		
470	(古墳・円)	8	高崎市八幡原町				◇								◎		
471	八幡原A遺跡	7 9	高崎市八幡原町		◇					◇	◇				☆		
472	(包蔵地・集落跡・住居跡)	9	高崎市下滝町中道							◇					☆		
473	慈眼寺A号墳・大師堂古墳	8	高崎市下滝町境内				◇								◎		
474	慈眼寺C号墳	8	高崎市下滝町境内				◇								◎		
475	御伊勢山古墳	8	高崎市下滝町境内				◇								◎		
476	三反畑85号墳	8	高崎市下滝町三反田				◇								◎		
477	三反畑80号墳	8	高崎市下滝町三反田乙				◇								◎		
478	下滝町甲78・81号墳	8	高崎市下滝町甲				◇								◎		
479	三反畑278号墳	8	高崎市下滝町三反田乙				◇								◎		
480	(散布地)	8	高崎市下滝町				◇										
481	(古墳)	8	高崎市下滝町				◇								◎		
482	(散布地)	8	高崎市下滝町				◇										
483	八幡塚古墳	8	高崎市下滝町				◇								◎		
484	上滝遺跡	8 9	高崎市上滝町				◇	◇		◇	◇			☆			
485	島名城跡	9	高崎市元島名町						◇								凸
486	(古墳)	8	高崎市元島名町				◇								◎		
487	浅間山古墳	8	高崎市元島名町				◇								◎		

第1節 立地と環境

番号	遺跡名	掲載図版	所在地	先	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	集	生	墳	城	他
488	(古墳)	8	高崎市元島名町				◇								◎		
489	将軍塚古墳	8	高崎市元島名町				◇								◎		
490	中内出遺跡	8	高崎市元島名町中内出				◇										
491	元島名内出遺跡	9	高崎市元島名町中内出						◇							凸	
492	鈴ノ宮遺跡	7 8	高崎市矢島町鈴ノ宮			◇	◇	◇	◇				☆				
493	白樹原・檜下遺跡	8 9	児玉郡神川町元阿保					◆	◆	◆			☆	☆	◎	凸	町教委
494	同上	9	(児玉郡上里町大御堂)						◇								
495	阿保境の館跡	9	児玉郡上里町大御堂字阿保境						◇							凸	
496	伝阿保氏館跡	9	児玉郡神川町元阿保字上宿						◇							凸	
497	安保氏大御堂跡	9	児玉郡上里町大御堂字堂裏						◇								
498	中新里城跡	9	児玉郡神川町中新里字北城・南城						◇							凸	
499	「阿部屋敷」館跡	9	児玉郡神川町新里字西前畑						◇							凸	
500	前組中世寺院跡	9	児玉郡神川町新里字羽根倉						◇								
501	池田の館跡	9	児玉郡神川町池田字池田口						◇							凸	
502	金鑽御嶽城跡	9	児玉郡神川町渡瀬字御嶽						◇							凸	
503	真鏡寺の館跡	9	児玉郡児玉町塩谷字真鏡寺						◇							凸	
504	ミカド遺跡	9	児玉郡児玉町塩谷字三角						◇								
505	金屋遺跡群	9	児玉郡児玉町金屋字田端						◇					☆			
506	別所の城跡	9	児玉郡児玉町金屋字上別所・観音山						◇							凸	
507	篠城跡	9	児玉郡児玉町塩谷字篠後						◇							凸	
508	椎ヶ岡八幡山城跡	9	児玉郡児玉町八幡山字城之内・他						◇							凸	
509	浮浜城跡	9	児玉郡上里町長浜字城						◇							凸	
510	大光寺裏遺跡	9	児玉郡上里町勅使河原字上勝場・元屋敷						◇								

第2節 遺跡の概要

1 大御堂調査区

大御堂調査区は、発掘調査対象区域の東より約250mの区間(STA.66～STA.69)で、地籍は大字白石字大御堂で、一部が字沖田にかかる。ここは鮎川左岸の沖積低地面にあり、鮎川川床面との比高差は約5～7mである。現在は圃場整備が実施され一面に水田が広がり、北東方向にわずかな傾斜をもちながら水田面のレベルが下がって行き、ほとんど平坦に近い緩傾斜面と言える地形で、標高は105m～108mである。土質は、地表下0.5m～0.6mの厚さで沖積層(表土+粘性土)があり、その下は段丘堆積物である礫混じり土となる(第5図、第11図参照)。

鮎川流域は、藤岡市内で最も濃密に遺跡・遺物の分布する地域として知られるが、その中にあって本調査区域には遺跡台帳に古墳1基が記載されていただけで、埋蔵文化財の包蔵の実態はつまびらかではなかった。しかし、字名の「大御堂」や地元に残る「アミダイケ」の地名伝承が寺院の存在を示唆するものであり、明治9年の地籍図にも池の記載が見られ、「中世の園池を伴う寺院址」の存在の可能性は極めて高いものであった。近年、農業基盤整備のための構造改善事業が計画され、そのための発掘調査も実施されて、当該地域における埋蔵文化財の包蔵は周知のこととなった(『F₂緑埜遺跡群I』)。本遺跡もその予定地内にあって、藤岡市教育委員会による用水路予定地でのトレンチ調査では、溝状遺構や池の一部と考えられる石垣の検出などがあり、中世寺院址と考えられる遺構の包蔵は高い確率で予想された。

大御堂調査区の調査は鮎川橋梁の橋台部分にあたるA区から実施し、B区、C区の順にグリッドを掘り広げていった。昭和62年度にA・B区を、昭和63年度にC区の調査を主に実施した。大御堂調査区には南北に横切る道路(東より=土地改良による新設農道「土地改良農道」、西より=旧来の農道「農道」)があり、これにより3つの区域に分かれる。

調査は試掘トレンチによる土層観察の後、表土(耕作土)及び攪乱土を重機により掘削し、その後で人力による遺構検出を行い、層位的に掘り進めることを原則に作業を進めた。その結果、A・B区では中世の寺院址に伴う土塁跡・溝・池及び掘立柱建物跡などの遺構群と、その後に営まれたと考えられる埋葬遺構群が、C区では縄文時代の敷石住居跡2軒と中・近世の掘立柱建物跡・溝等が検出された。

《昭和62年度調査—A・B区—の概要》

昭和62年度の調査はA区のうち鮎川崖から土地改良農道までの間から実施した。表土をはいだ段階で数条の溝状遺構と道路跡及びピット・土坑等を検出した。確認面はほぼ同一であったが、遺構埋土の観察でA軽石降下を境とする前後二時期の遺構の存在を確認した。A軽石降下後と考えられる溝状遺構・道路跡は地籍図・状量図に記載された道路・水路とほぼ一致しており、近世後半以降の土地利用が現在まで続いていたと考えられる。土地改良農道際では池の埋土と考えられるA軽石の純層(南池の一部)も確認された。土地改良農道西のA区及びB区は寺院の存在が確実視されたため、表土掘削前の原地形の確認とトレンチ調査を入念に行った。鮎川崖に近い部分と農道際が畑地となっていた他はすべて水田として利用されていたが、個々の水田面の高さにばらつきが認められ、畦畔等に見られる地形にそぐわないラインは包蔵する遺構に規制されたものであると予測され、現況で確認できる範囲で寺院址遺構に関するものが存在するということを踏まえて調査を進めた。

表土を除去した段階で茶褐色粘質土の面と浅間A軽石を埋土とする池・溝などの遺構を検出した。すでに

A区のトレンチ調査でこの粘質土（大御堂基本土層Ⅱ・Ⅲ層）の下層は礫層（Ⅴ層）であることは確認していたので、浅間A軽石を覆土・埋土とする遺構を掘り下げた後、グリッド単位で掘り下げることにした。その結果、池・溝・暗渠・土塁・濠などの寺院を構成する施設と考えられる遺構群と、火葬跡・火葬墓・墓壇等の埋葬遺構群が検出された。これらの遺構は、層位的に次のような時期区分に大別できる。

- (新)近世後半～近・現代…浅間A軽石降下以降の時期＝農地としての土地利用がなされ、現代まで続く。
- (中)中世後半～近世前半…浅間A軽石降下以前の時期＝墳墓群が営まれた(寺院は何らかの形で残る)。
- (古)中世前半……………浅間B軽石降下以降の時期＝中世寺院の創建期

本調査区域において、確認し得たなかで最も古い時期と考えられる遺構が層位的に確認できたのは浅間B軽石の堆積後に築かれたと考えられる土塁跡である。この遺構は濠跡（第1号濠跡）・第2号溝状遺構（BD7）とともに寺院西域の区画を構成する性格の施設として、寺院創建時の縄張りを示すと考えられる。この土塁跡の南北の両端付近からはほぼ直角に東方向にのびる溝及暗渠等も検出されている。これは、寺院址東部で検出された二つの池＝「アミダイケ」に接続する導水施設の性格を有したものと考えられる。「アミダイケ」と呼ばれる池は地籍図（明治9年）とほぼ同様に南北に二つ確認された。

以上が寺院の区画を構成すると考えられる遺構群である。これらの遺構のなかには、暗渠・溝等の切り合い関係や池の修復の痕跡など、相互に重複関係を認められるものがあって、中世～近世前半の時期での細分が可能である。北部の暗渠（2号暗渠・3号暗渠）では2時期、南部の暗渠（1号暗渠・4号暗渠及びBD10）では2または3時期にわたっての改変が、また、南北二つの池（2号池・3号池）では、最終的な埋没年代が大正期であるとの地元古老の話もあり、かなり長期間にわたって機能していたと見られ、修築・改変の痕跡も多く認められた。南西部の一角で掘立柱建物跡群が検出されたが、位置等から寺院に付随する建物群と考えられ、また、建物自体の建て替えも認められる。

寺院址からは配石墓・火葬跡・火葬墓・土坑墓・土壇等の埋葬遺構群も検出された。配石墓は1基のみであったが、寺院址の中心的位置にあり上部施設は不明であったが骨蔵器を出土し、寺院とも何らかの関連を持つ性格のものとも推定できる。火葬跡・火葬墓は濠埋没後に営まれており、銭貨・土師質土器等の供伴遺物の出土しているものもあり、層位的及び出土遺物の観察から寺院址に後出する中世後半以降の時期の所産と見られる。

近世後半には現況に近い形＝農地としての土地利用がなされたと考えられるが、池はその後も残っていたことが元禄年間の絵図や明治9年の地籍図で明らかであり、大正年間に人為的に埋め戻した層位についても確認した。元禄の絵図では寺田としての記載や堂宇を示す記号も見られ、近世の出土遺物も比較的豊富であることから、この間の寺院（址）の変遷については検討の必要があろう。

《昭和63年度調査—C区—の概要》

B区西よりにやや斜め南北方向に農道が横切っている。寺院址＝寺域の検出遺構はこの農道の東側にほぼおさまると考えられた。この農道の西側のB区からC区にかけては表土を掘削した後、2面にわたる遺構面を確認した。上層で溝・掘立柱建物跡等の中近世の遺構を検出し、下層では縄文時代中期の敷石住居跡2軒のほか、縄文及び弥生時代の遺物包含層を検出した。

この区域での中近世の掘立柱建物跡・溝状遺構は寺院址ともなんらかの関連（寺地としての可能性）をもつものとも見られ、この沖積低地面での遺跡選地を考える資料として重要である。また、縄文～弥生時代の遺構・遺物はこの地域での類例も比較的少なく、貴重な発見と言える。

《本報告書中の記載について》

第II章 遺 跡

大御堂調査区の検出遺構及び出土遺物については、第III章で詳述する。報告は時代順を基本としながらも検出遺構の性格等を考慮のうえ、次のように記述することとした。

第1節 寺院建立以前の遺構と遺物

C区を中心に縄文時代から平安時代までの遺構・遺物の報告

1 縄文時代（敷石住居跡2軒と遺物）、2 弥生時代（遺物）、3 古墳～平安時代（溝1条と出土遺物）

第2節 中世の遺構—寺院址—

A・B区で検出された中世の遺構—寺院址—の報告

濠・土塁各1、池2、溝17（暗渠4）、掘立柱建物跡11、井戸跡1

第3節 埋葬関連遺構

A・B区で検出された中近世の埋葬遺構群と関連遺物の報告

配石墓1、火葬跡11、火葬墓6、土坑墓8、土壇5、石造物

第4節 寺院址出土の遺物

寺院址出土の土器・陶磁器類をはじめとした中世～近世の遺物の報告

土器、軟質陶器、陶磁器、瓦、銭貨・金属製品、石製品・石材等

第5節 C区検出の遺構と遺物

C区検出の中・近世の遺構と遺物、及びA・B区での近世の遺構について報告

（C区中近世）溝4、掘立柱建物跡8、井戸跡1

（A・B区近世以降）畠作遺構1、土坑2

2 前原調査区

前原調査区は、発掘調査区域の中ほど約200mの区間(STA.69～STA.72)で、鮎川左岸洪積台地上に立地する。洪積台面は下位の沖積低地面との比高差が約3～5mで、鮎川に並行して約300～400m程の幅で南北にのび、さらにその西側は丘陵地となる。前原調査区はこの洪積台地の東側縁辺に立地し、標高は110m～115mで北東方向に緩やかな傾斜をもつ。地籍は大字白石字前原であり、D・E区がこれにある。土質は、表土(耕作土)下はすぐに段丘堆積物であるローム層が2～3mの厚さで堆積し、その下は礫混じり層(基本土層第V層:礫径5～50mm)となる。調査前には大部分が桑園・畑地として利用されていた。また、南方約50mの所には本調査区と同様に洪積台地東側縁辺部に立地する薬師原遺跡があり、藤岡市農協平井支所建設に伴う発掘調査が実施されて、縄文・古墳・中世の遺構(住居跡・墳墓等)と遺物が検出されている。また、南東方向から北西方向にのびて前原調査区を斜めに横断する道路は群馬県教育委員会による歴史の道の調査により「鎌倉街道」と比定されている。

本調査区の発掘調査は、昭和62年度にD区を、昭和63年度にE区県道東部分・E区県道西部分の順に実施した。表土(耕作土)層下はすぐにローム層となり、また、桑根・芋穴・ごぼう穴等耕作による攪乱が著しく、遺構の残存状況はあまり良好とは言えなかった。D区では縄文時代中期の竪穴住居跡2軒及び土坑9基と、掘立柱建物跡1棟を検出した。E区県道東部分では、現農道に沿って道路跡が検出され、道路跡に沿う掘立柱建物跡1棟が、また、2条の溝にとりかこまれた掘立柱建物跡4棟と井戸跡・土坑等が、また、県道西部分では、掘立柱建物跡、土坑が検出された。時期的には、竪穴住居跡・土坑が縄文時代の他は、道路跡・溝・掘立柱建物跡など近世の所産と考えられる。なお、遺構調査終了後、先土器時代の遺構・遺物の有無を

確認するための試掘トレンチを設定したが検出し得なかった。

《本報告書中の記載について》

前原調査区は第IV章で詳述する。遺構及び遺物については時代順を基本とし、縄文時代のものと中・近世のものに分けて報告した。

第1節 縄文時代の遺構と遺物……堅穴住居跡2軒、土坑12基

第2節 中・近世の遺構と遺物……道路跡、溝状遺構2条、掘立柱建物跡9、井戸跡1

3 上谷戸調査区

上谷戸調査区は、発掘調査区域の西より約300mの区間(STA.72～STA.75)にあたり、藤岡市と吉井町の境をなす竹沼丘陵の北麓にあたる部分に位置する。この丘陵斜面には藤岡市平井地区No14遺跡が存在し、本調査区に続く。調査区は、大グリッドのF・G・H・I区にあたり、標高は115m～140mで、段丘面と丘陵との傾斜変換線は標高120mのあたりである。F・G区は洪積台地面の最奥部で比較的平坦である。H・I区は美濃山と呼ばれる北東にのびた丘陵尾根の末端に位置し、南東～東向きの斜面である。当初の調査区域は丘陵下の平坦面(STA.74)までであったが、丘陵斜面部が藤岡市遺跡詳細分布調査平井地区No14遺跡としてすでに周知され土器片の散布も認められたことから、公団・県教委と協議の結果、調査区域に取り入れて試掘調査を実施することとなった。なお、前原調査区との間、約100mの区間(E～F区)については、トレンチ発掘を行ったが遺構・遺物はほとんど確認し得なかったため、試掘調査のみとした。

調査は昭和63年度の後半にはいつてから行われた。丘陵裾部には削平による段差があり、地形的に台地平坦面(F・G・H区)と丘陵斜面部(H・I区)とに分かれる。台地平坦面には屋敷跡があったと見られ、井戸跡・溝・土坑等が検出されている。斜面部では古墳～平安時代の堅穴住居跡5軒と溝状遺構が検出された。また、「の」の字状垂飾(縄文時代前期～中期)なども出土している。なお、先土器時代の遺構・遺物の有無を確認するための試掘トレンチを設定し掘り下げてみたが検出し得なかった。

《本報告書中の記載について》

上谷戸調査区は第IV章で詳述する。遺構及び遺物については時代順を基本とし、縄文時代のものと古墳～平安時代、それと中近世のものに分けて報告した。

第1節 縄文時代の遺構と遺物……先土器・縄文時代の出土遺物

第2節 古墳～平安時代の遺構と遺物……堅穴住居跡5軒、溝1条及び出土遺物

第3節 中・近世の遺構と遺物……溝状遺構・土坑・井戸跡・掘立柱建物跡及び出土遺物

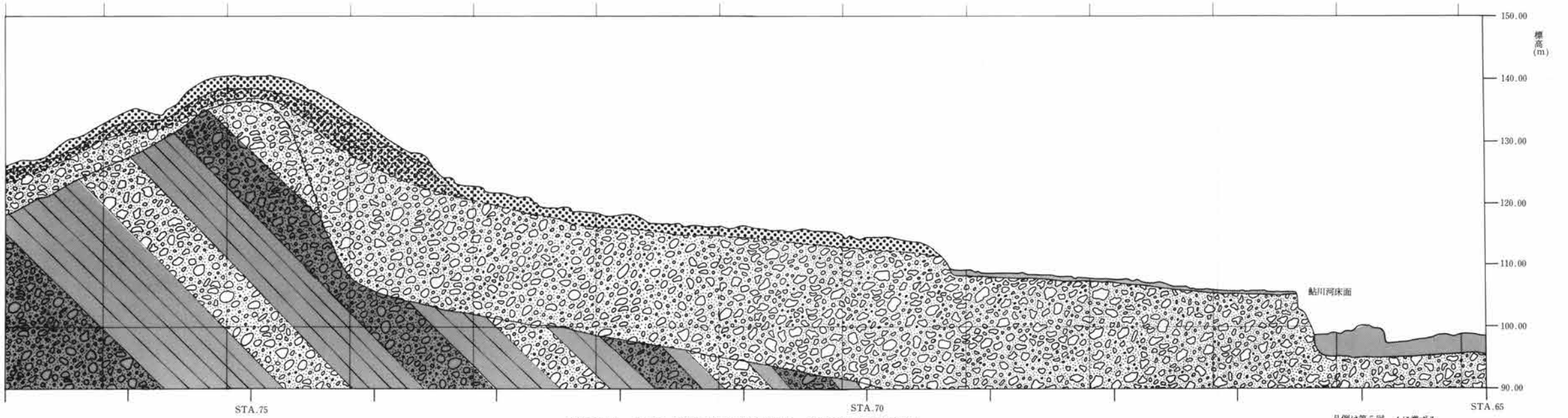
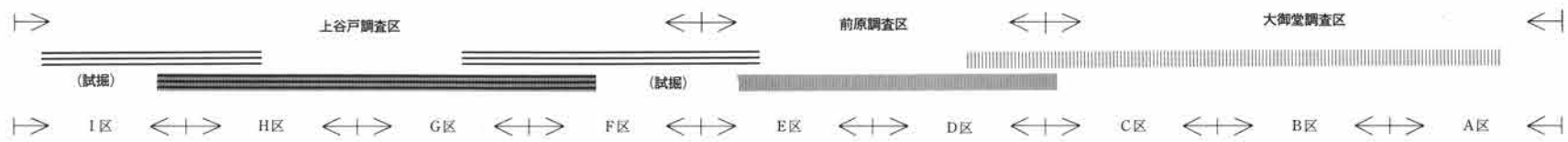
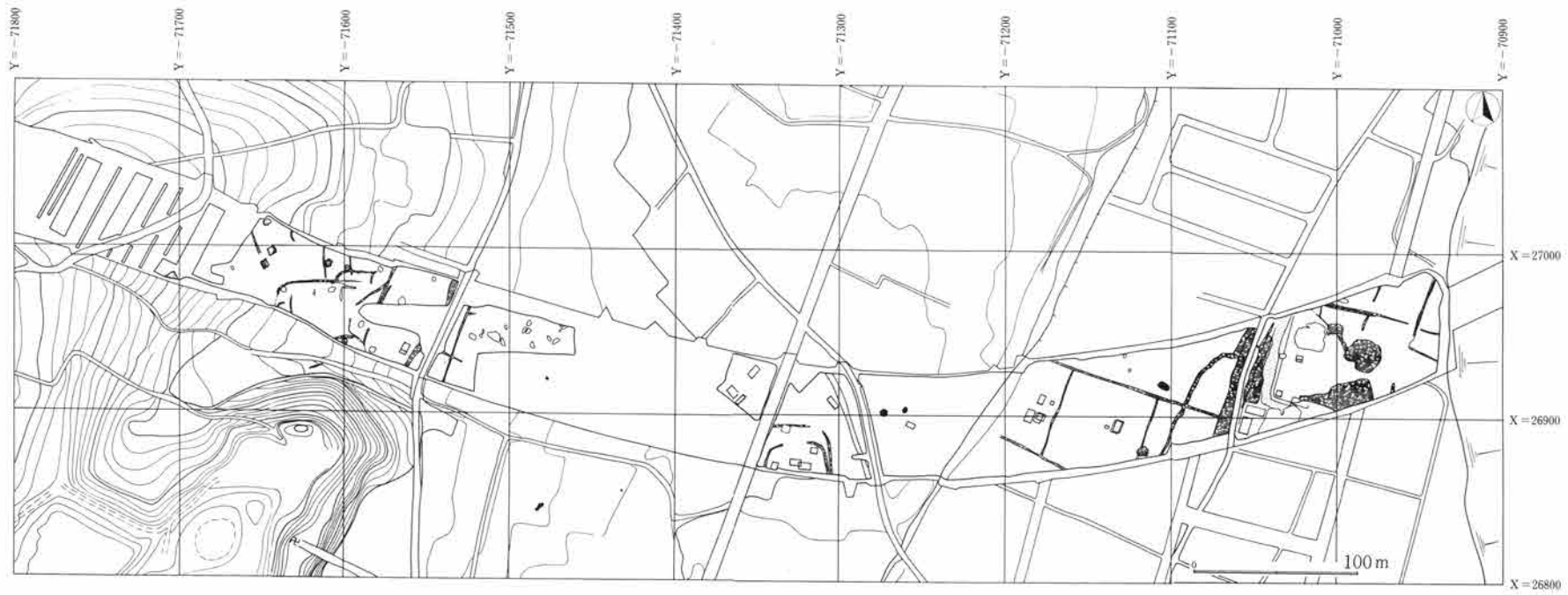
《遺構番号及びまとめ・考察について》

検出された遺構・遺物について、時期・性格等の個別の調査所見は報文中又は観察表等の中で述べるようにし、遺構相互の関連や遺跡の性格等にかかわる問題等については第VI章成果と問題点でまとめた。また、白石大御堂遺跡で検出した遺構は第4表のとうりである。なお、本報告書をまとめるに際し、遺構番号を各調査区毎に遺構種別通番とし、浅間A軽石降下(近世後半)以降のものについては原則として遺構個別の番号は与えなかった。(綿貫鋭次郎)

第II章 遺 跡

第4表 白石大御堂遺跡報告遺構一覽

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド	確認面高	主軸方位	位置・形状・規模・性格等	時 期	章・節
001	大御堂第1号敷石住居跡(CJ1)	Ca・Cb-19・20g	107.00	N-30°-E	C区、円・柄鏡形	中期・加曾利E4式	III-1
002	大御堂第2号敷石住居跡(CJ2)	Cd・Ce-29・30g	107.00	N-13°-E	C区、円・柄鏡形	中期・加曾利E4式	III-1
003	大御堂第1号土坑(CK1)	Cf・Cg-17g	107.10	不明	C区、円形?	弥生中期初頭	III-1
004	大御堂第1号溝状遺構(BD17)	Bo~Cb-15~30g	105.90	N-25°-E	B区農道西	奈良~平安	III-1
005	大御堂第2号濠跡	Bk~Bs-11~27g	107.00	N-20°-E	B区農道西・自然流路	近世以前	III-2
006	大御堂第1号濠跡(濠跡)	Bj~Bn-11~22g	106.50	N-14°-E	寺院址西部	中世	III-2
007	大御堂第1号濠内土坑(BK16)	Bl-17・28g	105.70	不明	楕円形(150×128×30)	中世、寺院創建時	III-2
008	大御堂第1号濠内溝a(BD13)	Bl-13・14g	106.30	N-58°-W	寺院西部	中世	III-2
009	大御堂第1号濠内溝b(BD11)	Bj~Bn-10~23g	106.50	N-15°-E	寺院西部	中世	III-2
010	大御堂第1号濠内溝c(BD12)	Bl~Bo-15~26g	106.40	N-15°-E	寺院西部	中世	III-2
011	大御堂第1号濠内溝d(BD6)	Bj~Bl-20~23g	106.40	N-75°-E	寺院西部	中世	III-2
012	大御堂寺院址土塁跡(土塁跡)	Bn~Bk-09~22g	106.75	N-13°-E	寺院西部	中世、寺院創建時	III-2
013	大御堂第2号土坑(2号配石)	Bj-21g	106.60	N-4°-E	土塁際	近世	III-2
014	大御堂寺院址棚列a	Bk~Bm-22・23g	106.45	N-74°-W	寺院南西部・建物群北	中世	III-2
015	大御堂寺院址棚列b	Bn・Bo-22~26g	106.45	N-16°-E	寺院南西部・建物群西	中世	III-2
016	大御堂第1号掘立柱建物跡(BB10)	Bk~Bm-23・24g	106.45	N-78°-W	寺院南西部・北棟群	中世	III-2
017	大御堂第2号掘立柱建物跡(BB9)	Bk~Bm-22~24g	106.45	N-78°-W	寺院南西部・北棟群	中世	III-2
018	大御堂第3号掘立柱建物跡(BB8)	Bk~Bm-22~24g	106.45	N-75°-W	寺院南西部・北棟群	中世	III-2
019	大御堂第4号掘立柱建物跡(BB3)	Bk~Bn-22~24g	106.45	N-74°-W	寺院南西部・北棟群	中世	III-2
020	大御堂第5号掘立柱建物跡(BB4)	Bk~Bn-22~24g	106.45	N-77°-W	寺院南西部・北棟群	中世	III-2
021	大御堂第6号掘立柱建物跡(BB5)	Bk~Bn-23・24g	106.45	N-75°-W	寺院南西部・北棟群	中世	III-2
022	大御堂第7号掘立柱建物跡(BB6)	Bm~Bo-24~27g	106.45	N-20°-E	寺院南西部・南棟群	中世	III-2
023	大御堂第8号掘立柱建物跡(BB7)	Bm~Bo-24~27g	106.45	N-20°-E	寺院南西部・南棟群	中世	III-2
024	大御堂第9号掘立柱建物跡(BB11)	Bm~Bo-24~27g	106.45	N-16°-E	寺院南西部・南棟群	中世	III-2
025	大御堂建物群内土坑a(BK26)	Bo-27g	106.45	-	寺院南西部、122×101×20	中世	III-2
026	大御堂建物群内土坑b(BK35)	Bm-13g	106.40	N-4°-E	寺院南西部、129×72×35	中世	III-2
027	大御堂第2号溝状遺構(BD7)	Bg~Bj-09~12g	106.60	N-13°-E	寺院中央部	中世	III-2
028	大御堂第3号溝状遺構(AD12)	Ao~Bb-07~10g	105.60	N-80°-W	寺院中央北、寺城北縁区画	中近世	III-2
029	大御堂第4号溝状遺構(AD13)	At~Bb-07~09g	105.60	N-78°-W	寺院中央北、寺城北縁区画	中近世	III-2
030	大御堂第5号溝状遺構(2号暗渠)	Bc~Be-07・08g	105.90	N-14°-E	寺院中央北、北池遺水遺構	中世・13c~	III-2
031	大御堂第6号溝状遺構(3号暗渠)	Bb~Bc-08~10g	105.90	N-45°-W	寺院中央北、北池遺水遺構	中世・13c~	III-2
032	大御堂第7号溝状遺構(3号配石)	Ax~Ba-10~13g	105.40	-	寺院中央北、北池遺水遺構	中世・13c~	III-2
033	大御堂第8号溝状遺構(AD14)	As~Au-04~10g	105.30	N-22°-E	寺院中央北	中近世	III-2
034	大御堂寺院址北西部瓦溜まり	Bg・Bf-09~11g	106.00	-	寺院北西部、土塁跡東面	中世~近世	III-2
035	大御堂第1号池状遺構(1号池)	Bb~Bf-10~14g	105.60	-	寺院中央北	近世・18~19c	III-2
036	大御堂第9号溝状遺構(BD9)	Bf・Bg-21・22g	106.10	N-82°-W	寺院中央南、南池遺水遺構	中世	III-2
037	大御堂第10号溝状遺構(4号暗渠)	Be~Bg-22g	106.15	N-63°-E	寺院中央南、南池遺水遺構	中世・13c	III-2
038	大御堂第11号溝状遺構(1号暗渠)	Bd~Bg-22・23g	106.15	N-76°-W	寺院中央南、南池遺水遺構	中世・13c・14c	III-2
039	大御堂第12号溝状遺構(BD10)	Ba~Bf-21・22g	106.00	N-86°-W	寺院中央南、南池遺水遺構	中世・13c・14c	III-2
040	大御堂第13号溝状遺構(BD8・16)	Bd~Bk-23・24g	106.30	N-76°-W	寺院中央南、寺城南縁区画	中世・13c~	III-2
041	大御堂調査区北池(2号池)	Ar~Ax-12~17g	105.40	-	寺院中央東、園池遺構	中近世・13c~19c	III-2
042	大御堂調査区南池(3号池)	At~Ba-18~22g	105.60	-	寺院中央東、園池遺構	中近世・13c~19c	III-2
043	大御堂第10号掘立柱建物跡(BB1)	Bh・Bi-20・21g	106.10	N-13°-E	寺院中央部南西、1×2間・方	中世	III-2
044	大御堂第11号掘立柱建物跡(BB2)	Be・Bf-15・16g	105.98	N-79°-W	寺院中央部、1.5×2間・方	近世	III-2
045	大御堂第1号井戸跡(BE1)	Bh・Bi-19g	106.15	N-16°-E	寺院中央部、270×213×-	中世	III-2
046	大御堂第14号溝状遺構(AD11)	Ap・Aq-19・20g	105.70	N-13°-E	寺院東部、寺域東縁区画か	中世	III-2
047	大御堂第15号溝状遺構(AD7)	Aj~Al-10・11g	105.50	N-73°-W	寺院東部	中世	III-2
048	大御堂第16号溝状遺構(AD4)	Aj~An-03~12g	105.50	N-21°-E	寺院東部	中世	III-2
049	大御堂第17号溝状遺構(AD5・8)	Aj~An-03~15g	105.50	N-20°-E	寺院東部	中世	III-2
050	大御堂第1号配石墓(1号配石)	Bh・Bi-14・15g	106.20	N-73°-W	寺院中央、方形、372×316×25	中世・14c	III-3
051	大御堂第1号火葬跡(AK5)	An-17g	105.65	N-16°-E	寺・東部、長方形、147×80×17	中世	III-3
052	大御堂第2号火葬跡(AK4)	An-15g	105.50	N-13°-E	寺・東部、凸形	中世	III-3
053	大御堂第3号火葬跡(AK3)	An-14g	105.50	N-20°-E	寺・東部、凸形	中世	III-3
054	大御堂第4号火葬跡(BK7)	Bk-15g	106.35	N-29°-E	寺・西部、凸形	中世	III-3
055	大御堂第5号火葬跡(BK8a)	Bl-14・15g	106.35	N-11°-E	寺・西部、長方形?	中世	III-3
056	大御堂第6号火葬跡(BK8b)	Bl-14・15g	106.20	N-11°-E	寺・西部、長方形?	中世	III-3
057	大御堂第7号火葬跡(BK9)	Bm-17g	106.35	N-11°-E	寺・西部、凸方形	中世	III-3
058	大御堂第8号火葬跡(BK10)	Bl・Bm-17g	106.35	N-2°-E	寺・西部、凸方形	中世	III-3
059	大御堂第9号火葬跡(BK12)	Bl-18g	106.40	N-15°-E	寺・西部、凸方形	中世	III-3



第11図 白石大御堂遺跡全体図・遺跡縦断地質図

凡例は第5図-4に準ずる
 縮尺 垂直方向 1 : 800
 水平方向 1 : 4000

第2節 遺跡の概要

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド	確認面 標高	主軸方位	位置・形状・規模・性格等	時期	章・節
060	大御堂第10号火葬跡 (BK14)	Bk-14g	106.30	N-13°-E	寺・西部、凸方形	中世	III-3
061	大御堂第11号火葬跡 (BK15)	Bk-13・14g	106.35	N-10°-E	寺・西部、凸方形	中世	III-3
062	大御堂第1号火葬墓 (BK11)	Bl-17・18g	106.30	N-4°-E	寺・西部、長方形	中世	III-3
063	大御堂第2号火葬墓 (BK22)	Bd-09g	105.95	N-5°-E	寺・北西部、長楕円形	中世	III-3
064	大御堂第3号火葬墓 (BK23)	Be-08・09g	106.00	N-2°-E	寺・北西部、長楕円形	中世	III-3
065	大御堂第4号火葬墓 (BK24)	Be-09g	106.05	N-13°-E	寺・北西部、長楕円形	中世	III-3
066	大御堂第5号火葬墓 (BK25)	Bg-09・10g	106.10	N-22°-E	寺・北西部、長楕円形	中世	III-3
067	大御堂第6号火葬墓 (BK21)	Bd-09g	105.90	-	寺・北西部、円形	中世	III-3
068	大御堂第1号土坑墓 (BK13)	Bl-17・18g	106.30	N-14°-E	寺・西部、長方形	中世	III-3
069	大御堂第2号土坑墓 (BK31)	Bh-14g	106.05	N-20°-E	寺・中央南、方形	中世	III-3
070	大御堂第3号土坑墓 (BK32)	Be-22・23g	106.10	N-12°-E	寺・中央南、方形	中世	III-3
071	大御堂第4号土坑墓 (BK27)	Bh-22g	106.10	N-74°-W	寺・中央南、長方形	中近世	III-3
072	大御堂第5号土坑墓 (BK28)	Bi-22g	106.15	N-73°-W	寺・中央南、長方形	中近世	III-3
073	大御堂第6号土坑墓 (BK29)	Bi-21g	106.90	N-78°-W	寺・中央南、長方形	中近世	III-3
074	大御堂第7号土坑墓 (BK30)	Bi-20g	106.75	N-8°-E	寺・中央南、長方形	中近世	III-3
075	大御堂第8号土坑墓 (BK17)	Bg-18g	105.95	-	寺・中央南、円形	中近世	III-3
076	大御堂第1号土壇 (AK1)	Aj-06g	105.05	-	寺・東部、円形、径82×28	中近世	III-3
077	大御堂第2号土壇 (BK4)	Bk-21・22g	106.75	-	寺・西部、円形、115×108×50	中近世	III-3
078	大御堂第3号土壇 (BK5)	Bj-15g	106.50	-	寺・西部、円形、88×78×37	中近世	III-3
079	大御堂第4号土壇 (BK6)	Bj-15g	106.50	-	寺・西部、円形、径101×25	中近世	III-3
080	大御堂第5号土壇 (BK33)	Bs-24g	107.05	-	B区農道西、円形、径140×深38	中世	III-3
081	大御堂第1号濠北部礫石面(4号配石)	Bj・Bk-10~14g	106.30	-	寺・西部、1号濠北端	中世	III-3
082	大御堂第18号溝状遺構 (CD2)	Bq~Cr-16~24g	107.50	N-71°-W	C区 ~107.20		III-5
083	大御堂第19号溝状遺構 (CD12)	Cc~Cf-22~31g	107.60	N-20°-E	C区 ~107.40		III-5
084	大御堂第20号溝状遺構 (CD22)	Co~Ct-17~30g	107.90	N-21°-E	C区 ~107.70		III-5
085	大御堂第21号溝状遺構 (CD24)	Cq~Da-27~33g	108.20	N-60°-W	C区 ~107.90		III-5
086	大御堂第22号溝状遺構 (CD1)	Bs~Cs-17~26g	107.60	N-70°-W	C区 107.10		III-5
087	大御堂第2号井戸跡 (CE1)	Cg・Ch-15g	107.10	-	C区、円形、264×222×-(113)		III-5
088	大御堂第12号掘立柱建物跡 (CB1)	Ch・Ci-25~27g	107.70	N-21°-E	C区東群、	中世	III-5
089	大御堂第13号掘立柱建物跡 (CB2)	Ch~Cj-25~27g	107.70	N-22°-E	C区東群	中世	III-5
090	大御堂第14号掘立柱建物跡 (CB3)	Cj-26g	107.68	N-68°-W	C区東群	中世	III-5
091	大御堂第15号掘立柱建物跡 (CB4)	Ct・Cu-24・25g	108.03	N-25°-E	C区西群	中世	III-5
092	大御堂第16号掘立柱建物跡 (CB5)	Cu~Cw-23~25g	108.05	N-29°-E	C区西群	中世	III-5
093	大御堂第17号掘立柱建物跡 (CB6)	Cr・Cs-22g	107.83	N-19°-E	C区西群	中世	III-5
094	大御堂第18号掘立柱建物跡 (CB7)	Cs・Ct-21~23g	107.84	N-24°-E	C区西群	中世	III-5
095	大御堂第19号掘立柱建物跡 (CB8)	Cs~Cu-24・25g	107.98	N-22°-E	C区西群	中世	III-5
096	大御堂近世倉作遺構	Au~Ba-05~08g	105.80	N-43°-W	寺・北部、 ~105.70	近世・18c後	III-5
097	大御堂第3号土坑 (AK2)	Ax・Ay-06g	105.65	N-78°-W	寺・北部、-×252×105	近世	III-5
098	大御堂第4号土坑 (BK3)	Bi・Bj-21・22g	106.65	N-74°-W	寺・西部、261×200×48	近世	III-5
099	前原第1号竪穴住居跡 (DJ1)	Dp-23・24g	113.80	N-47°-E	D区、円形	縄文中期	IV-1
100	前原第2号竪穴住居跡 (DJ2)	Ds・Dt-23・24g	113.70	-	D区、円形?	縄文	IV-1
101	前原第1号土坑 (DK1)	Do-29g	113.70	N-50°-E	D区、円形 87×78×26	縄文中期	IV-1
102	前原第2号土坑 (EK1)	Eg-33g	113.60	-	E区、円形 93×83×51	縄文	IV-1
103	前原第3号土坑 (EK3)	Ei-33g	113.70	-	E区、円形 57×53×44	縄文	IV-1
104	前原第4号土坑 (DK2)	Dr-18・19g	113.10	-	D区、円形 128×129×42	縄文	IV-1
105	前原第5号土坑 (DK8)	Dp-20・21g	113.65	-	D区、円形 141×138×17	縄文	IV-1
106	前原第6号土坑 (DK9)	Dp・Dq-22g	113.75	-	D区、円形 147×137×12	縄文	IV-1
107	前原第7号土坑 (DK12)	Dj-21g	113.00	-	D区、楕円形 99×75×26	縄文	IV-1
108	前原第8号土坑 (DK13)	Di-24g	112.90	-	D区、円形 126×112×21	縄文	IV-1
109	前原第9号土坑 (DP29)	Dq-22g	113.80	-	D区、楕円形 96×68×15	縄文	IV-1
110	前原第10号土坑 (DK29)	Do-23g	113.70	-	D区、円形 105×93×57	縄文	IV-1
111	前原11号土坑 (DK27)	Dp-24・30g	113.70	-	D区、 372×225×105	縄文	IV-1
112	前原12号土坑 (EK2)	Eg・Eh-28・29g	114.60	-	E区、円形 279×261×32		IV-1
113	前原調査区道路跡遺構 (ER1)	Du~Ec-22~24g	114.20	N-20°-W	D・E区		IV-2
114	前原第1号掘立柱建物跡 (DB1)	Dp~Dr-25・26g	113.80	N-62°-W	D区、1×2間・長方形		IV-2
115	前原第2号掘立柱建物跡 (EB1)	Ea~Ee-22~24g	114.10	N-38°-W	E区、2×2間・長方形		IV-2
116	前原第1号溝状遺構 (ED1)	Eb~Em-26~34g	114.60	N-88°-W	E区		IV-2
117	前原第2号溝状遺構 (ED2)	Eb~El-29~34g	114.80	N-6°-W	E区		IV-2
118	前原第3号掘立柱建物跡 (EB2)	Dd・Ee-30・31g	114.50	N-82°-W	E区、2×2間・正方形		IV-2
119	前原第4号掘立柱建物跡 (EB3)	Ee~Eg-32・33g	114.55	N-85°-W	E区、2×2間・長方形		IV-2
120	前原第5号掘立柱建物跡 (EB4)	Ef~Eh-32g	114.60	N-85°-W	E区、1×3間・長方形		IV-2

第II章 遺 跡

遺構 番号	遺 構 名 称 (調査名称)	所在グリッド	確認面 標 高	主軸方位	位置・形状・規模・性格等	時 期	章 節
121	前原第6号掘立柱建物跡 (EB5)	Ej・Ek-32・33g	114.80	N-74°-W	E区、2×2間・方形?		IV-2
122	前原第7号掘立柱建物跡 (EB6)	Eo~Eq-21・23g	114.70	N-48°-E	E区、2×2間・長方形		IV-2
123	前原第8号掘立柱建物跡 (EB7)	Ep~Er-20~22g	114.60	N-41°-W	E区、1×3間・長方形		IV-2
124	前原第9号掘立柱建物跡 (EB8)	Em~Eo-17~19g	114.50	N-50°-W	E区、2×3間・長方形		IV-2
125	前原第1号井戸跡 (EE1)	En-23g	114.65	-	E区、円形 114×111×-		IV-2
126	上谷戸第1号竪穴住居跡 (HJ6)	Ia~Ic-04・05g	135.00	N-30°-W	南東斜面 方形北竈	古墳後期・6c後半	V-2
127	上谷戸第2号竪穴住居跡 (HJ1)	Hc・Hd-02・03g	125.80	N-69°-E	南東斜面 方形東竈	古墳後期・6c後半	V-2
128	上谷戸第3号竪穴住居跡 (HJ2)	Hk・Hl-00・01g	129.00	N-29°-W	南東斜面 方形北竈	平安前期・9c	V-2
129	上谷戸第4号竪穴住居跡 (HJ3)	Hl・Hm-02・03g	128.50	N-30°-E	南東斜面 方形北竈	平安前期・9c	V-2
130	上谷戸第5号竪穴住居跡 (HJ4)	Hl・Hm-03・04g	131.30	N-24°-W	南東斜面 方形	平安前期・9c	V-2
131	上谷戸第1号集石遺構	Hr-03g	131.00	N-35°-W	南東斜面 楕円形		V-2
132	上谷戸第1号溝状遺構 (HD10)	Hh・Hi-01・02g	128.80	南北	南東斜面 古墳周溝か	古墳	V-2
133	上谷戸第2号溝状遺構 (HD9)	Hn・Ho-00~02g	131.50	N-20°-W	南東斜面	近世	V-3
134	上谷戸第3号溝状遺構 (HD11)	Hn~Hp-0.5・0.6g	128.80	N-78°-E	南東斜面	近世	V-3
135	上谷戸第4号溝状遺構 (HD4)	Hd~Hf-00~04g	126.30	N-30°-E	南東斜面	近世	V-3
136	上谷戸第5号溝状遺構 (HD5)	Hd-03・04g	125.60	南北	南東斜面	近世	V-3
137	上谷戸第6号溝状遺構 (HD8)	Gy-01~04g	125.00	N-8°-W	南東斜面	近世	V-3
138	上谷戸第7号溝状遺構 (HD6)	Gv~Hb-03・04g	124.80	N-86°-W	南東斜面	近世	V-3
139	上谷戸第8号溝状遺構 (HD7)	Gu・Gv-04・04g	125.50	N-4°-E	南東斜面	近世	V-3
140	上谷戸第9号溝状遺構 (HD3)	Hi-07~10g	124.50	N-1°-W	市道西側上位面	近世	V-3
141	上谷戸第10号溝状遺構 (HD2)	Hj・Hk-08・09g	124.70	N-80°-E	市道西側上位面	近世	V-3
142	上谷戸第11号溝状遺構 (HD1)	Gx~Hi-05~09g	125.00	N-88°-W	市道西側上位面	近世	V-3
143	上谷戸第12号溝状遺構 (GD6)	Gs・Gt-06~09g	121.40	N-33°-E	市道西側下位面	近世	V-3
144	上谷戸第13号溝状遺構 (GD7)	Gr~Ht-03~08g	122.20	N-25°-E	市道西側下位面	近世	V-3
145	上谷戸第14号溝状遺構 (GD8)	Gs・Gy-04~09g	122.00	N-45°-E	市道西側下位面	近世	V-3
146	上谷戸第15号溝状遺構 (GD9)	Gt~Gw-0.6・0.7g	122.00	N-55°-E	市道西側下位面	近世	V-3
147	上谷戸第16号溝状遺構 (GD11)	Gw~Gy-09~15g	121.80	N-15°-E	市道西側下位面	近世	V-3
148	上谷戸第17号溝状遺構 (GD13)	Gv~Hb-13~15g	121.60	東西弧形	市道西側下位面	近世	V-3
149	上谷戸第18号溝状遺構 (GD12)	Gu・Gv-12~16g	120.50	N-13°-W	市道西側下位面	近世	V-3
150	上谷戸第19号溝状遺構 (CD10・4)	Gh~Gp-05~18g	120.00	N-29°-E	市道西側下位面	中世	V-3
151	上谷戸第20号溝状遺構 (GD1)	Gg~Gk-09~20g	118.80	N-20°-E	市道東側	近世	V-3
152	上谷戸第21号溝状遺構 (GD2)	Gg・Gk-16~18g	118.70	N-80°-E	市道東側	近世	V-3
153	上谷戸第22号溝状遺構 (GD3)	Gg~Gg-09・10g	118.60	N-68°-W	市道東側	近世	V-3
154	上谷戸第23号溝状遺構 (GD5)	Gh~Gt-06~09g	121.20	N-40°-E	市道西側下位面	近世	V-3
155	上谷戸第掘立柱建物跡 (GB1)	Gp・Gq-14~16g	119.90	N-27°-E	市道西側下位面	近世	V-3
156	上谷戸第1号石組遺構 (GE1)	Ha-14g	121.18	N-15°-E	方形 354×345×78	近世	V-3
157	上谷戸第1号井戸跡 (GE3)	Gu・Gv-15・16g	120.30	-	楕円形 441×387×110	近世	V-3
158	上谷戸第2号井戸跡 (HE1)	Gy・Ha-02・03g	124.74	-	円形 354×345×(258)	近世	V-3
159	上谷戸第1号土坑 (FK7)	Fq・Fr-11・12g	116.24	-	450×270×66	近世	V-3
160	上谷戸第2号土坑 (FK5)	Fr・Fs-13・14g	116.46	N-40°-E	楕円形 455×258×99	近世	V-3
161	上谷戸第3号土坑 (FK4)	Fs・Ft-13・14g	116.58	N-44°-W	長楕円形 404×147×71	近世	V-3
162	上谷戸第4号土坑 (FK3)	Fv・Fw-10・11g	116.58	N-19°-E	楕円形 398×312×83	近世	V-3
163	上谷戸第5号土坑 (FK2)	Fv・Fw-12・13g	117.20	N-15°-E	長楕円形 327×267×36	近世	V-3
164	上谷戸第6号土坑 (FK1)	Fw・Fx-12・13g	117.26	N-28°-E	長楕円形 405×(215)×87	近世	V-3
165	上谷戸第7号土坑 (GK5)	Fy-13g	117.44	N-1°-E	長楕円形 414×168×60	近世	V-3
166	上谷戸第8号土坑 (GK6)	Ga-11.12g	117.76	N-34°-W	楕円形 297×147×62	近世	V-3
167	上谷戸第9号土坑 (GK4)	Ga・Gb-13・14g	117.50	N-27°-W	楕円形 552×243×48	近世	V-3
168	上谷戸第10号土坑 (GK2)	Gd-11g	118.16	N-60°-W	楕円形 289×153×99	近世	V-3
169	上谷戸第11号土坑 (GK12)	Gd-12・13g	118.10	N-11°-E	289×165(105)×12	近世	V-3
170	上谷戸第12号土坑 (FK6)	Fr-12g	116.40	-	円形 135(177)×135×54	近世	V-3
171	上谷戸第13号土坑 (GK11)	Ga・Gb-12g	117.50	N-36°-E	楕円形 153×111×26	近世	V-3
172	上谷戸第14号土坑 (GK10)	Gb-11g	117.47	N-11°-E	正方形 87×84×26	近世	V-3
173	上谷戸第15号土坑 (GK13)	Gg-13g	118.60	-	円形 84×72×63	近世	V-3
174	上谷戸第16号土坑 (GK14)	Gc-13g	117.74	-	円形 87×72×57	近世	V-3
175	上谷戸第17号土坑 (GK15)	Gb・Gc-14g	117.77	-	円形 60×54×33	近世	V-3
176	上谷戸第18号土坑 (GK16)	Gc-14g	117.77	-	円形 95×62×69	近世	V-3
177	上谷戸第19号土坑 (GK17)	Gc-14g	117.72	-	円形 74×66×33	近世	V-3
178	上谷戸第20号土坑 (GK7)	Gb-12g	117.68	-	円形 129×122×66	近世	V-3
179	上谷戸第21号土坑 (GK1)	Gf-11・12g	118.50	-	円形 188×174×51	近世	V-3
180	上谷戸第22号土坑 (GK3)	Ge-13g	118.24	-	円形 252×228×69	近世	V-3
181	上谷戸第23号土坑 (GK9)	Gb~Gd-12~14g	118.10	N-68°-W	945×600×73	近世	V-3

第2節 遺跡の概要

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド	確認面標高	主軸方位	位置・形状・規模・性格等	時期	章-節
182	上谷戸第24号土坑 (GK 8)	Gf・Gg-13・14g	118.30	N- 71°-W	楕円形 479×398×36	近世	V-3
183	上谷戸第25号土坑 (GE 2)	Gw・Hx-11・12g	120.63	-	楕円形 475×348×78	近世	V-3
184	上谷戸第26号土坑 (GK18)	Gq・Gr-08・09g	121.03	-	楕円形 522×471×54	近世	V-3
185	上谷戸第27号土坑 (GK19)	Gl-04・05g	121・12	-	円形 261×227×108	近世	V-3
186	上谷戸第28号土坑 (HK 7)	Gt-03g	123.40	N- 25°-W	365×287(186)×54	近世	V-3
187	上谷戸第29号土坑 (HK11)	Gv-02g	124.00	-	円形 120×120×45	近世	V-3
188	上谷戸第30号土坑 (HK10)	Hb-05g	123.36	-	131×123×95	近世	V-3
189	上谷戸第31号土坑 (HK 5)	Hb・Hc-06g	123・54	-	555×339×47	近世	V-3
190	上谷戸第32号土坑 (HK 9)	He-06g	123.82	N- 2°-E	78×58×15	近世	V-3
191	上谷戸第33号土坑 (HK 6)	He-07g	123.74	-	153×134×56	近世	V-3
192	上谷戸第34号土坑 (HK 4)	Hj・Hk-06g	123.28	-	- ×309×69	近世	V-3
193	上谷戸第35号土坑 (HK 3)	Hk-06・07g	124.42	N- 13°-E	楕円形 318×210×45	近世	V-3
194	上谷戸第36号土坑 (HK 2)	Hk-08g	124.46	N- 15°-E	楕円形 131×78×36	近世	V-3
195	上谷戸第37号土坑 (HK 1)	Hk-09g	124.36	-	円形 126×117×54	近世	V-3
196	上谷戸第38号土坑 (HK 8)	Hm-05g	128.08	-	隅丸方形 231×195×20	近世	V-3

第Ⅲ章 大御堂調査区の遺構と遺物

第1節 中世以前の遺構と遺物

1 遺構・遺物の分布概要 (第12図)

縄文時代の遺構・遺物は、主にC区で検出されている。現状の鮎川崖からは約120m程、前原調査区の段丘崖からは約80m離れたところで中期末葉の敷石住居跡が2軒検出された。2軒は直線距離で約50m離れている。敷石住居跡2軒は、出土遺物から判断して加曾利E4式期であり、同一集落を構成していたものと考えられる。調査区西側には、該期の遺構が検出されていないことから、集落の西縁部に当たり、調査区東側に集落の展開があったものとなろう。また、遺構は確認できなかったが、C区南西部に遺物散布域を確認している。いずれも縄文時代中期の土器・石器を出土している。

弥生時代の遺物は2ヶ所で検出された。Cg17グリットの出土遺物は中期初頭の再葬墓に見られる土器で、土壌と考えられるまとまり(CK1)ではあったが、遺構の検出はできず、不明である。また、C区南西部のCh・Ci-26・27グリット付近でもまとまって遺物が出土している。ここでの一群は縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけての遺物が見られ、同様のものは沖II遺跡で出土しているほかは、当該地域では比較的類例の少ない時期のものである。

古墳時代から平安時代にかけては、B区農道西側において土師器坏・須恵器片を出土する溝状遺構(大御堂第1号溝状遺構)が検出された。ほかに、土師器・須恵器・埴輪の破片等の出土が少量ではあるが見られたが、上記以外では明確な遺構は検出し得なかった。

A・B区では寺院造立とその後の地形改変が影響したためか、中世以前の遺物の残存状況は良好ではなく、大御堂調査区での遺構・遺物は主にC区から見られた。縄文時代前期の遺物が数点見られたほかは中期のものが圧倒的に多く、この時代に本調査区も生活域として開発されたと思われる。その後の状況を遺物から見ると、縄文時代の晩期から弥生時代初頭にかけて再びここで生活が営まれた。古墳時代後半から平安時代にかけての遺物量は少なく、流れ込み等の可能性も考えられ、本調査区が生活の本拠地であった可能性は少ない。





2 縄文時代の遺構と遺物

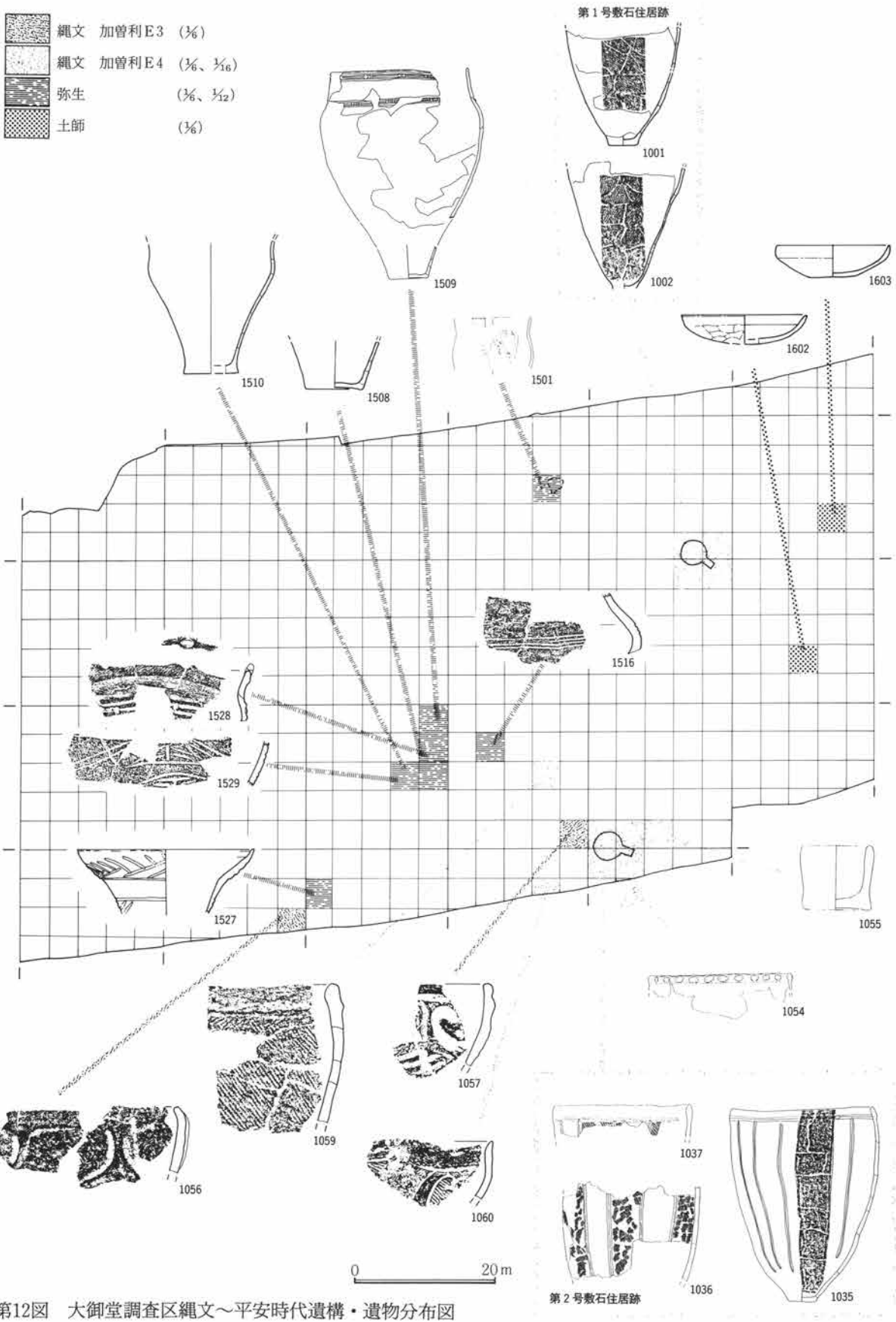
(1) 大御堂第1号敷石住居跡 (第13図～第17図、写真図版38・64)

【位置】 大御堂調査区のほぼ中央に近いCa・Cb-19・20グリットにかけて検出された。大御堂第2号敷石住居跡の北北東約50mのところに位置している。

【経過】 昭和63年度の調査において検出された(調査名CJ1)。確認面標高は107mであり、確認土層は灰褐色粘質土である。遺構はC区中世面の調査後に、グリットに沿って入れたトレンチ調査によって確認された。5月下旬のことである。以後、調査を継続し、6月7日に石囲い炉と先端部埋壔の写真撮影を実施した。平面図の作成と遺物取り上げを継続的に行い、6月下旬には柄鏡形敷石住居跡の全容が判明した。その後、他の遺構の調査に入り、当住居跡の調査を再開したのは9月に入ってからである。先端部埋壔の取り上げ・敷石の取り上げ作業を行い、9月22日に調査を終了した。

第1節 中世以前の遺構と遺物

-  縄文 加曾利E3 (3/6)
-  縄文 加曾利E4 (3/6、3/6)
-  弥生 (3/6、3/12)
-  土師 (3/6)



第12図 大御堂調査区縄文～平安時代遺構・遺物分布図

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

〔重複〕 なし。

〔覆土〕 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

〔形状〕 柄鏡形敷石住居跡で全長5mを測る。主体部の規模は長径3m10cm・短径2m20cmの楕円形を呈し、面積は約8.10㎡である。張り出し部の規模は長径2m80cm・短径50cmで、面積約1.18㎡である。総面積は約9.28㎡となる。

〔敷石状況〕 張り出し部の敷石は、第2号敷石住居跡のそれと比べると、残存状況は良くない。主体部の敷石はやや乱雑であり、また内部には全面敷石は施されてはおらず、炉北側に部分敷石が認められるだけである。主体部の縁石は当初の姿をあまり留めてはいないようである。この縁石の同レベルでの拡散から判断して、当柄鏡敷石住居跡の掘り込みは存在しなかったと判断される。

〔使用石材〕 結晶片岩を主体とした石材である。なかでも石墨片岩類・緑泥片岩類を中心に敷石は構築されている。石材の供給地は、当遺跡の東120mのところを北流している鮎川に求められる。

〔壁高〕 検出できなかった。構築当初より、掘り込みは存在しなかったものであろう。

〔柱穴〕 検出できなかった。

〔炉〕 石囲い炉である。長径70cm・短径60cm・深さ13cmの方形を呈し、面積0.32㎡である。主体部のほぼ中央に位置している。炉内には焼土・炭化物等はあまり認めることはできなかった。

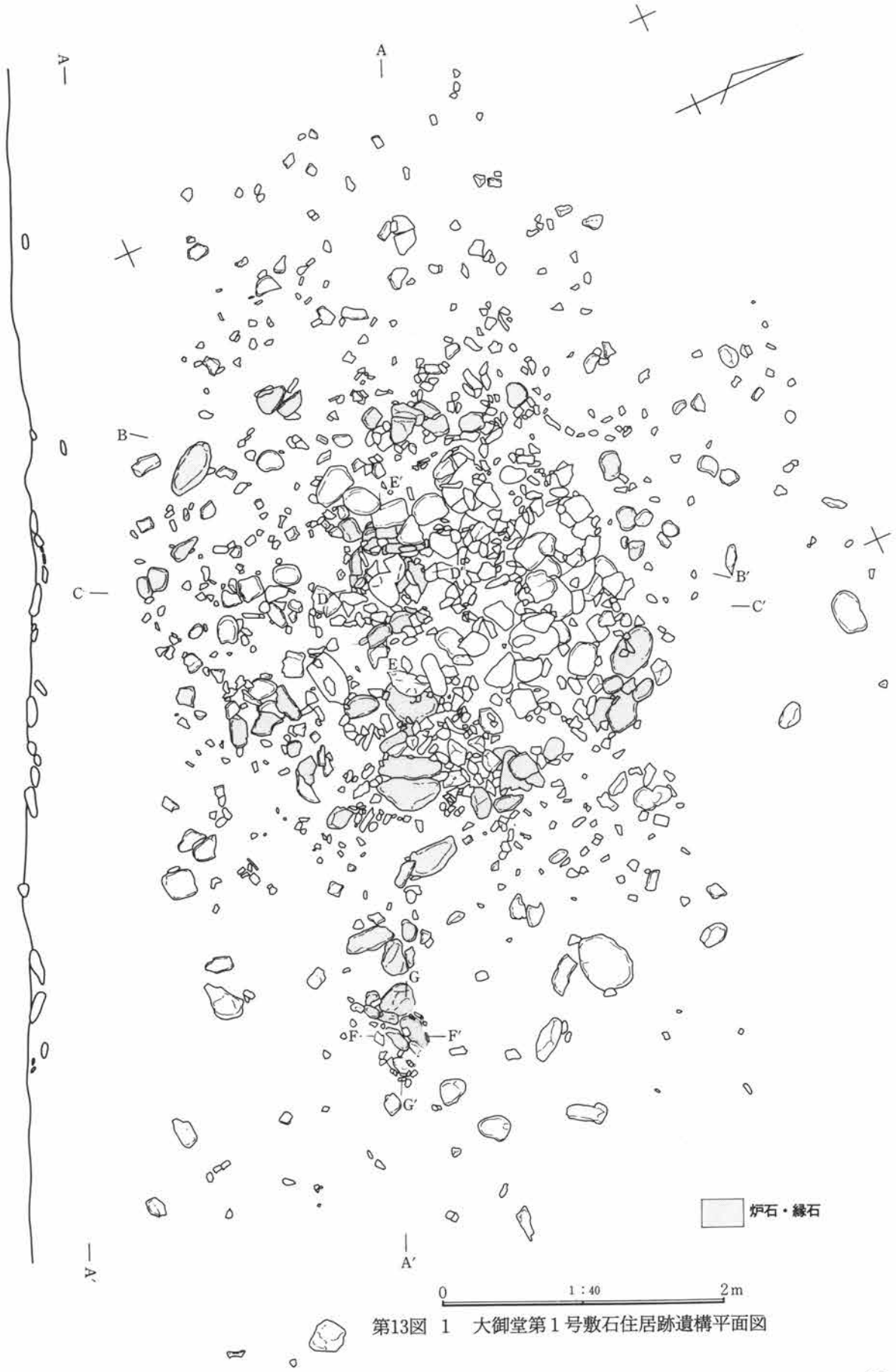
〔埋甕〕 張り出し部の先端から埋甕が3個体出土している。同一土壌内から出土したもので、2個体は入れ子で斜位状態で埋設され、かたわらから底部だけの土器が1個体出土している。土器はいずれも加曾利E4式土器である。土壌の規模は長径70cm・短径55cm・深さ32cmである。当住居跡には接続部埋甕は検出されておらず、先端部埋甕が複数個体存在する事実は、田篠中原遺跡検出の23号配石遺構(加曾利E4式期の柄鏡形敷石住居跡)の在り方と共通している。

〔張り出し部〕 残存状況はあまり良くはなかった。8個体の石と押えの細かな石から構成されている。8個の石の大きさの平均は長径27cm・短径15cmである。

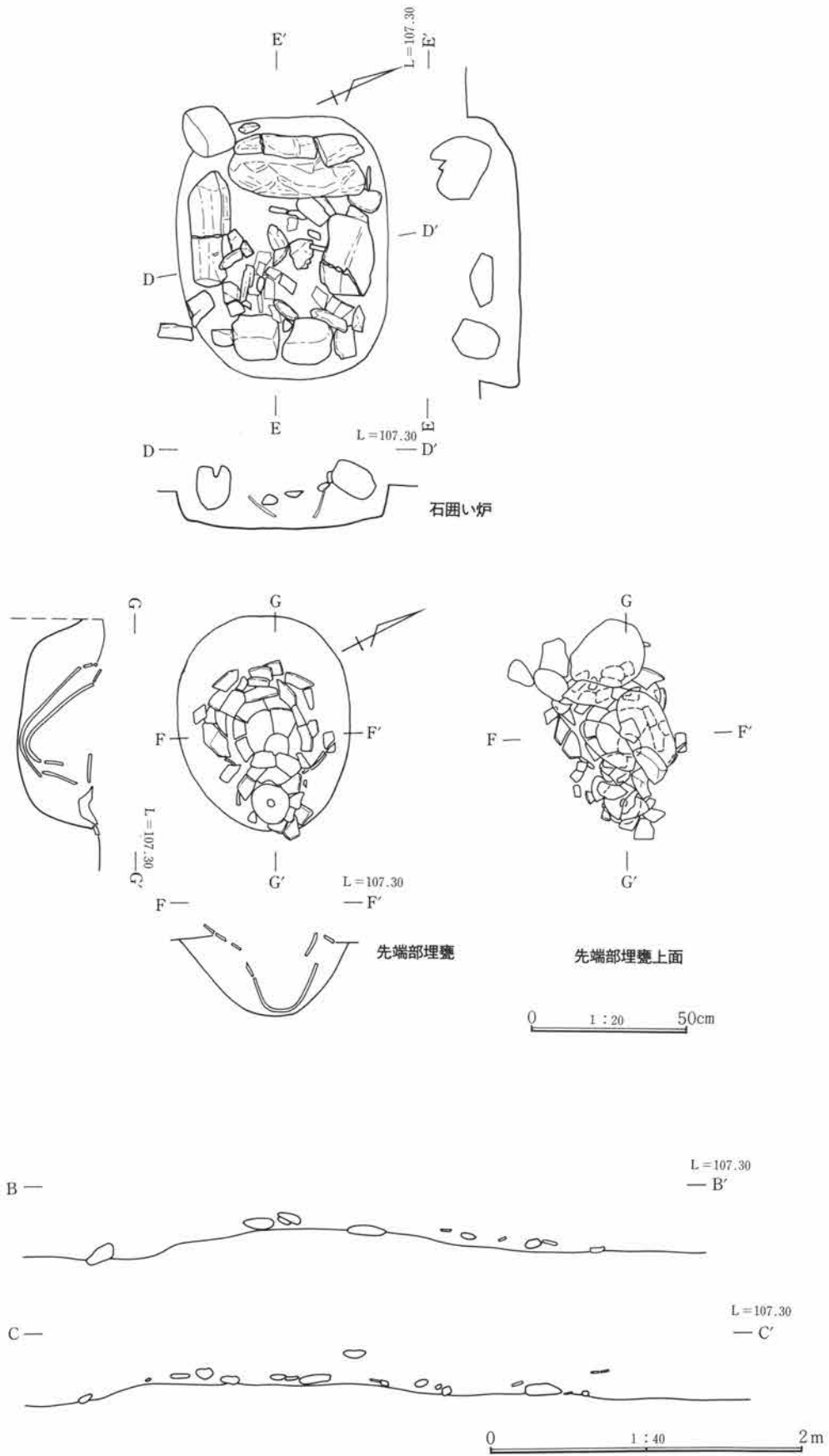
〔遺物出土状況〕 埋甕3個体の他に、口縁部15点・胴部349点・底部2点の計366点の土器片が主体部の東側から集中して出土している。加曾利E4式土器片を主体に、E3式土器片も含まれている。また土製円板1点も出土している。石器では多孔石7点・凹石7点・磨石2点が出土している。多孔石は張り出し部から3点、主体部から3点、縁石として使用されているもの1点、不明1点であった。また焼石も認められた。

第5表 大御堂調査区出土遺物観察表(1)―大御堂第1号敷石住居跡・土器―

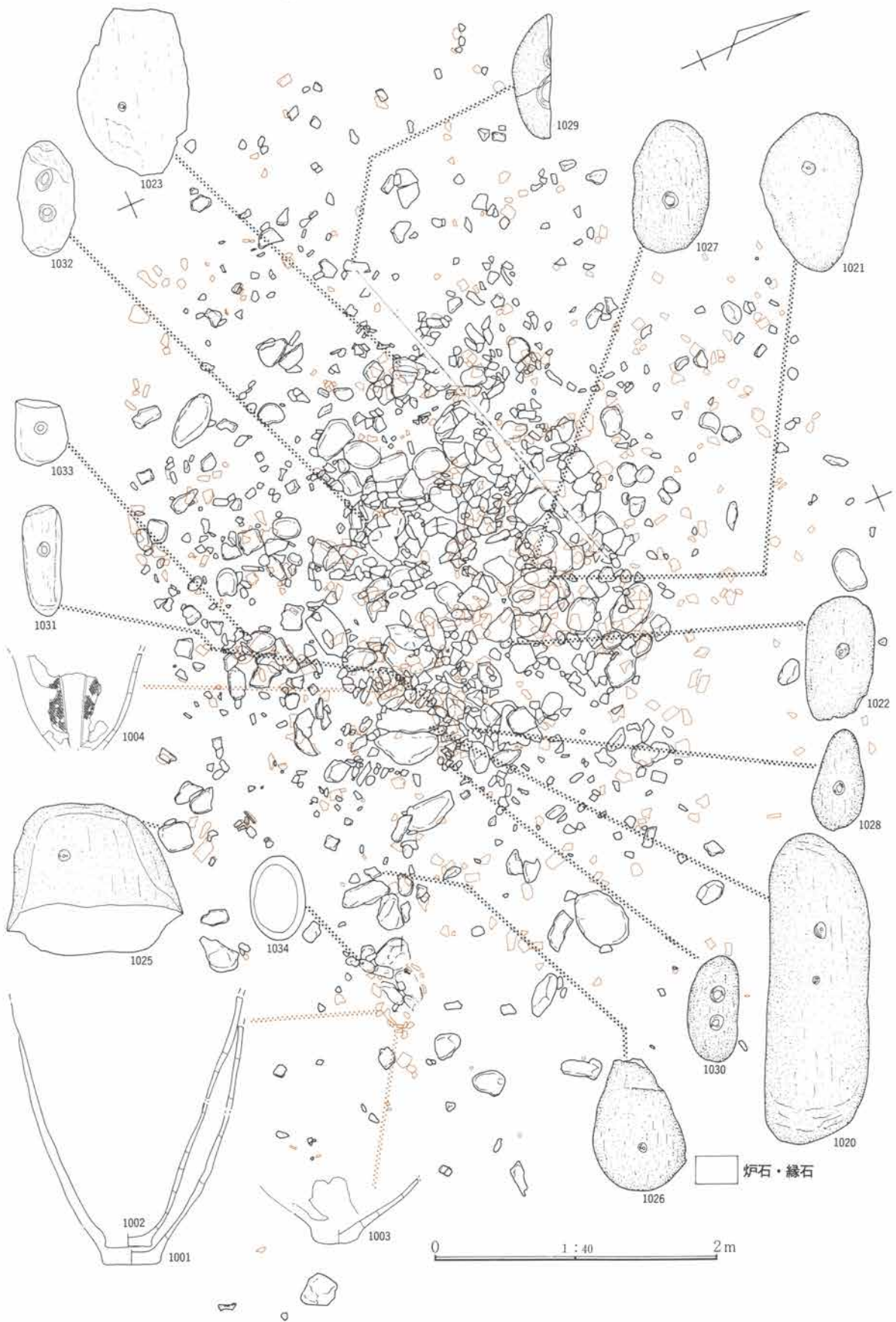
遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
1001 15 64	胴上 半～ 底部	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部上半～口縁部を意図的に欠損。器厚6～10mm。 内外面共荒れている。 内外面の色調はにぶい黄橙色。	底部を除く全面に縄文施文。 原体はL { R 縦転がし。	先端部埋甕 ①
1002 15 64	胴上 半～ 底部	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部上半～口縁部を意図的に欠損。器厚4～9mm。 内外面共に荒れている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい橙色。	底部を除く全面に縄文施文。 原体はR { L 縦転がし。	先端部埋甕 ②
1003 15 64	底部	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径7.5cm。 内外面共に荒れている。 外面の色調褐灰色、内面はにぶい黄橙色。		先端部埋甕 ③
1004 15 64	胴部 ～底 部	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部～底部。器厚5～7mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面黒褐色。	細沈線による「V」状、「A」状の文様が描かれ、区画内に縄文施文。原体はL { R 縦転がし。	Cb-19g



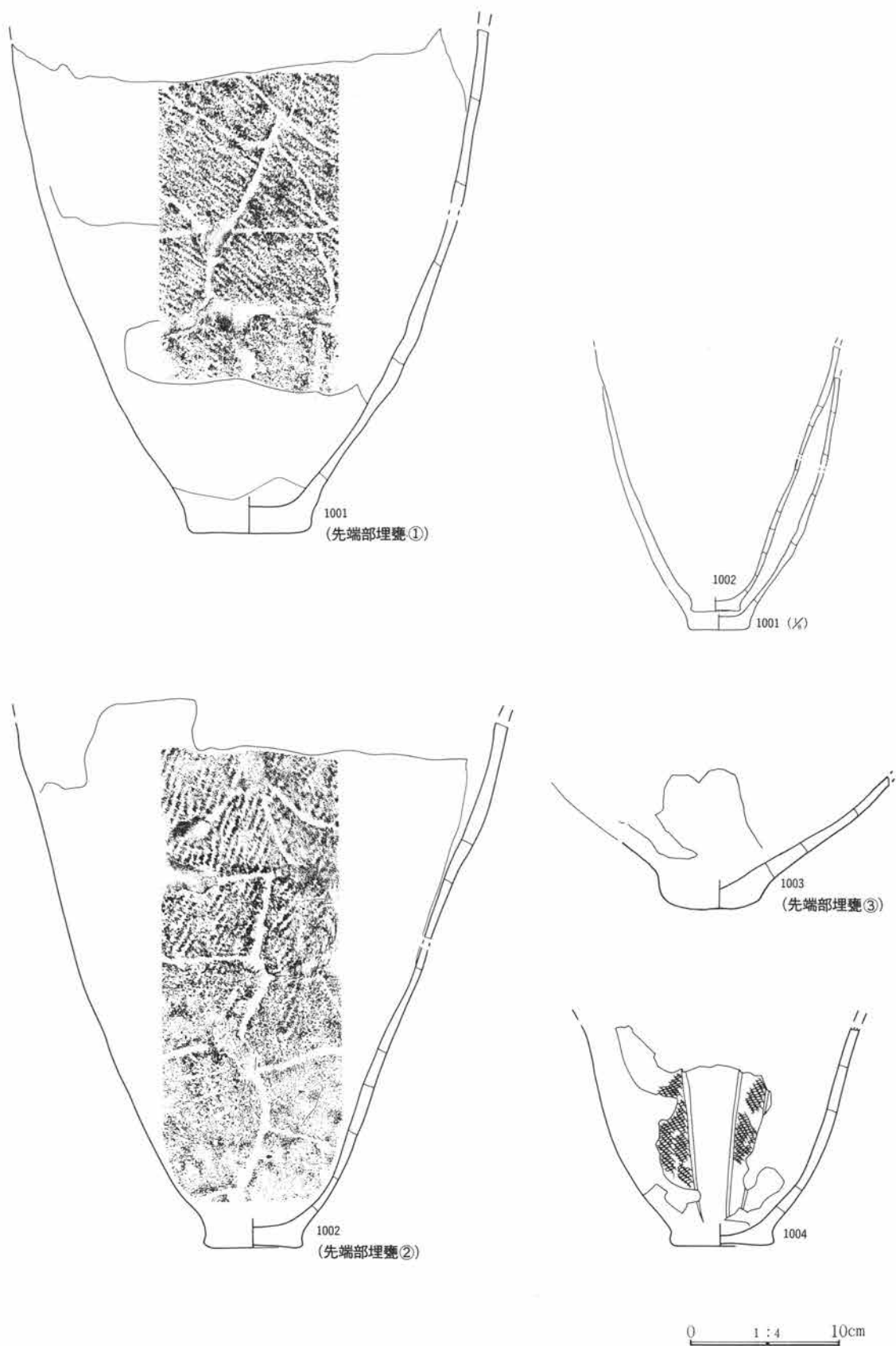
第13図 1 大御堂第1号敷石住居跡遺構平面図



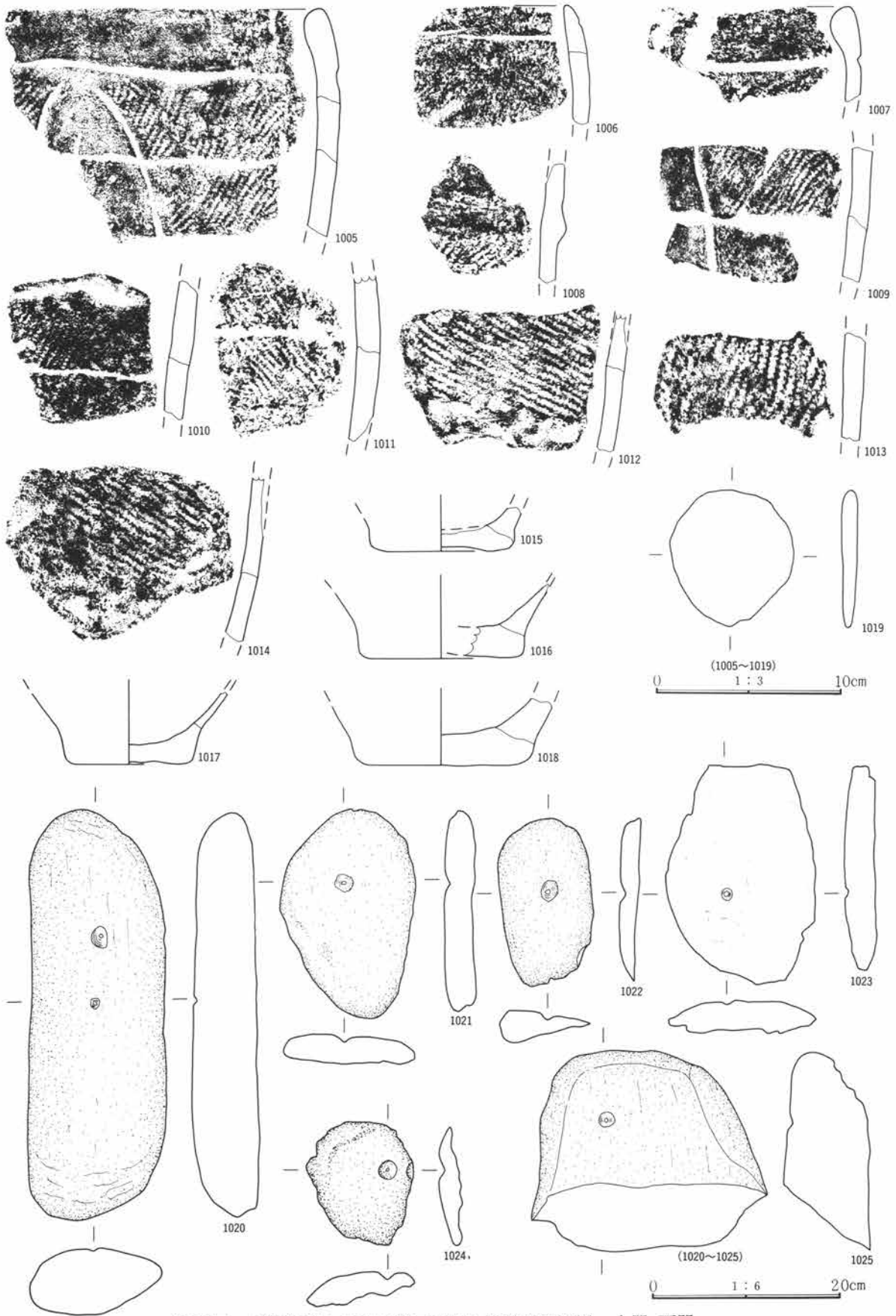
第13図 2 大御堂第1号敷石住居跡遺構平面図(石囲い炉・埋壙)



第14図 大御堂第1号敷石住居跡遺物分布図

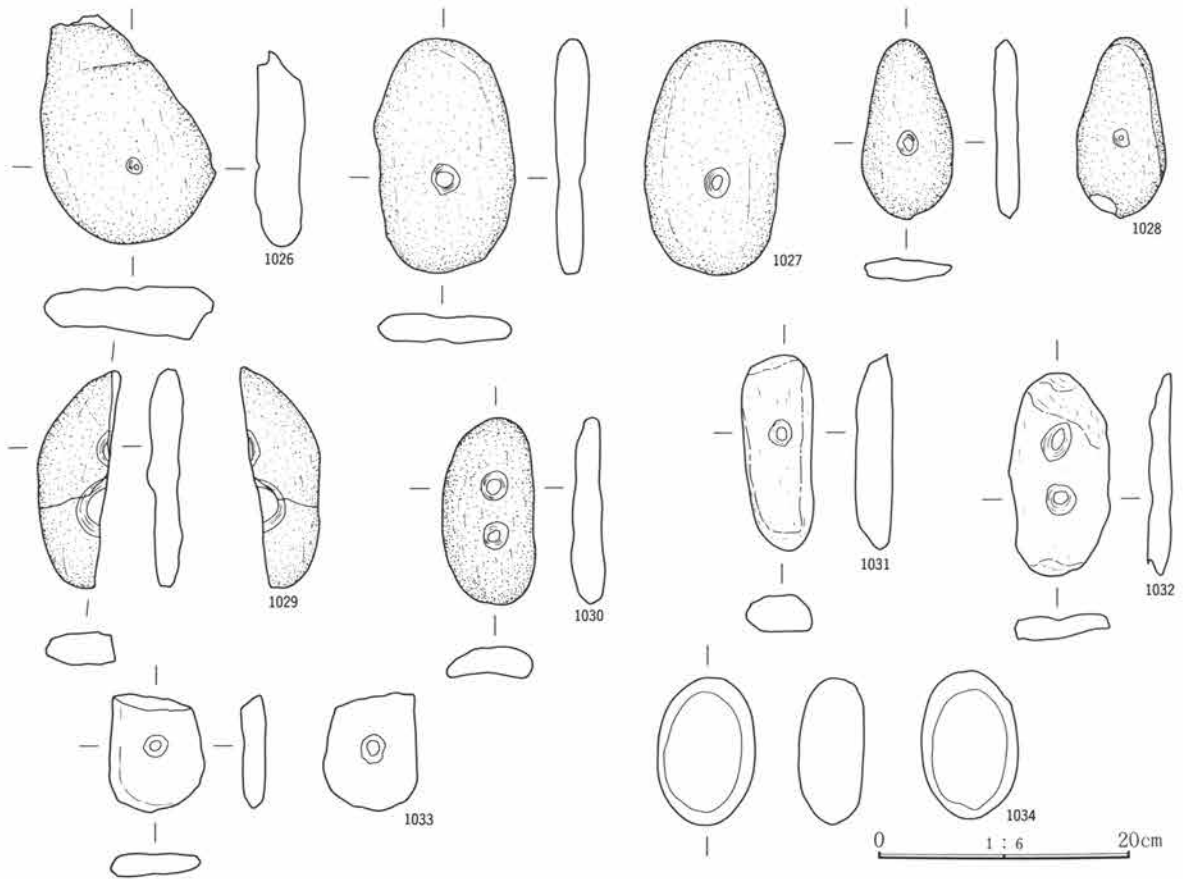


第15図 大御堂第1号敷石住居跡出土遺物実測図(1)―土器―



第16図 大御堂第1号敷石住居跡出土遺物実測図(2)―土器・石器―

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物



第17図 大御堂第1号敷石住居跡出土遺物実測図(3)―石器―

第5表 大御堂調査区出土遺物観察表(2)―大御堂第1号敷石住居跡・土器―

遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
1005 16 —	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11~14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面は灰白色。	口唇部に無文帯をおき、1条の沈線を巡らせる。 以下、細沈線による「 \square 」状の文様が描かれ、縄文施文。原体はR $\left\{ \frac{1}{2} \right\}$ 縦転がし。	Cb-18g
1006 16 —	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整、荒れている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口唇部に狭い無文帯をおき、1条の沈線を巡らせる。 以下、細沈線による「 \square 」状の文様を描く。 外面が荒れているため縄文原体不明。	Cb-18g
1007 16 —	口縁 部片	①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8~14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は橙色。	口唇部に無文帯をおき、1条の沈線を巡らせる。 以下、縄文施文。	Cb-18g
1008 16 —	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は灰褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。 以下、縄文施文。 原体はR $\left\{ \frac{1}{2} \right\}$ 縦転がし。	Ca-19g
1009 16 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚は9~11mm。 内面は荒れている。 外面の色調は褐灰色、内面にぶい黄橙色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR $\left\{ \frac{1}{2} \right\}$ 縦転がし。	Ca-20g
1010 16 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~11mm。 内面は横方向の調整、荒れている。 外面はにぶい橙色、内面は灰白色。	縄文施文。原体はR $\left\{ \frac{1}{2} \right\}$ 縦転がし。	Ca-20g
1011 16 —	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~10mm。 内面は横方向の調整、荒れている。 内外面の色調は橙色。	縄文施文。原体はL $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ 縦転がし。	Cb-20g
1012 16 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~10mm。 内面は横方向の調整、荒れている。 外面色調はにぶい褐色、内面にぶい黄橙色。	縄文施文。原体はL $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ 縦転がし。	Ca-19g

第5表 大御堂調査区出土遺物観察表(3)―大御堂第1号敷石住居跡・土器―

遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
1013 16 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は横方向の調整、荒れている。 内外面の色調はにぶい橙色。	縄文施文。原体はR _L 縦転がし。	Cb-20g
1014 16 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は横方向の調整、荒れている。 外面色調はにぶい橙色、内面にぶい黄褐色。	縄文施文。原体はL _R 縦転がし。	Ca-19g
1015 16 —	底部	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の底部。底径7.4cm。 内面は粗い調整、荒れている。 外面色調はにぶい黄褐色、内面灰黄褐色。		Cb-18g
1016 16 64	底部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部。底径8.5cm。 内外面共に荒れている。 外面の色調はにぶい橙色、内面浅黄褐色。		Cb-19g
1017 16 64	底部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の底部。底径6.5cm。 内外面共に荒れている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。		Cb-19g
1018 16 64	底部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の底部。底径9cm。 内面は粗い。輪積痕が残る。 外面の色調は橙色、内面は明褐色。	底部周縁が磨耗している。	Cb-18g
1019 16 —	土製 円盤	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片を利用している。 厚さ5~8mm。 外面の色調はにぶい橙色、内面は灰褐色。	重量41g。	Cb-19g

第5表 大御堂調査区出土遺物観察表(4)―大御堂第1号敷石住居跡・石器―

遺物番号 挿図・写真	器 種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
1020 16・64	多孔石	完形	点紋絹雲母 緑泥片岩	43.3	14.8	7.0	8,100	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径17mm、短径13.5mm、深さ4mmである。	張り出し部
1021 16・64	多孔石	完形	点紋絹雲母 石墨片岩	22.3	14.0	3.0	1,680	片面に1個の凹みがある。凹みは長径20mm、短径19mm、深さ5mmである。	主体部
1022 16・64	多孔石	破片	点紋絹雲母 石墨片岩	(17.4)	(10.0)	(3.3)	(760)	片面に1個の凹みがある。凹みは長径21mm、短径18mm、深さ6mmである。一部焼けている。	主体部
1023 16・64	多孔石	破片	緑泥片岩	(23.4)	15.9	(3.2)	(2,200)	片面に1個の凹みがある。凹みは長径13mm、短径11mm、深さ3mmである。一部焼けている。	縁石
1024 16・64	多孔石	破片	砂岩	(13.2)	(11.3)	(3.5)	(460)	片面に2個の凹みがある。凹みは長径・短径とも20mm、深さ8mmである。全面焼けている。	Cb-20g
1025 16・64	多孔石	1/2	点紋絹雲母 石墨片岩	(21.2)	25.3	9.2	(7,100)	片面に1個の凹みがある。凹みは長径17mm、短径16mm、深さ5mmである。	張り出し部南
1026 17・64	多孔石	1/2	点紋絹雲母 緑泥片岩	(18.4)	(14.0)	4.2	(1,400)	片面に1個の凹みがある。凹みは長径13mm、短径11mm、深さ3mmである。	張り出し部
1027 17・64	凹石	完形	点紋緑泥片岩	18.4	11.1	2.7	990	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径24mm、短径22mm、深さ2mmである。	主体部
1028 17・64	凹石	完形	点紋緑泥片岩	14.0	7.3	1.8	323	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径17mm、短径16mm、深さ1mmである。	張り出し部
1029 17・—	凹石	1/2	点紋石墨 緑泥片岩	17.4	(5.6)	2.7	(400)	両面に4個の凹みがある。凹みの平均は、推定で長径3.6mm、短径3.5mm、深さ4mmである。	主体部北
1030 17・64	凹石	完形	点紋緑泥片岩	14.7	7.4	2.8	542	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径22mm、短径21mm、深さ2mmである。	張り出し部
1031 17・64	凹石	完形	石墨緑泥片岩	15.3	5.8	2.9	491	片面に1個の凹みがある。凹みは長径21mm、短径19mm、深さ1mmである。	張り出し部
1032 17・64	凹石	完形	絹雲母石墨片岩	15.8	8.1	1.7	412	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径29mm、短径22mm、深さ3mmである。	石囲い炉
1033 17・64	凹石	1/2	輝緑岩	(9.0)	7.6	2.0	(285)	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長22mm、短18mm、深1mm。両面に磨耗痕、焼けている。	縁石
1034 17・64	磨石	完形	輝緑岩	11.5	7.8	5.3	880	両面に磨耗痕が認められる。	先端部埋壘

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物

(2) 大御堂第2号敷石住居跡(第18図～第22図、写真図版39・64)

〔位置〕 大御堂調査区の中程、Cd・Ce-29・30グリットにかけて検出され、第1号敷石住居跡の南南西約50mのところに位置している。

〔経過〕 昭和63年度の調査において検出された。10月中旬に近世の溝の覆土を除去中、縄文土器と石の出土があり集石状況が確認された。このために8mグリットで周辺を掘り下げた結果、敷石住居跡となる可能性が大きくなった。10月20日には埋甕と石囲い炉を検出し、柄鏡形敷石住居跡と判断されるに至った。以後調査に入り、レベルの高い石と土器片については実測後取り上げ、敷石住居跡の全容を把握する調査に入った。この作業は11月上旬まで継続して行い、10日には全景写真の撮影を実施した。24日には先端部埋甕の図面作製と写真撮影を実施し、調査を終了した。

〔重複〕 なし。

〔覆土〕 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

〔形状〕 柄鏡形敷石住居跡で全長5m30cmを測る。主体部の規模は明瞭ではないが、長径3m70cm・短径2m80cmの円形を呈し、面積は約7.88㎡である。張り出し部の規模は長径2m50cm・短径50cm～1m25cmで、面積約2.40㎡である。総面積は約10.28㎡となる。

〔敷石状況〕 張り出し部の敷石は比較的明瞭であるが、主体部の敷石はやや乱雑であった。主体部内部には当初から敷石は存在せず、縁石だけと考えられるが、この縁石も当初の姿をあまり留めてはいないようである。この縁石の同レベルの拡散から判断して、当柄鏡形敷石住居跡の掘り込みは存在しなかったものと判断される。

〔使用石材〕 結晶片岩を主体とした石材である。なかでも石墨片岩類・緑泥片岩類を中心に敷石は構築されている。石材の供給地は鮎川であろう。

〔壁高〕 検出できなかった。構築当初より、掘り込みは存在しなかったものであろう。

〔柱穴〕 検出できなかった。

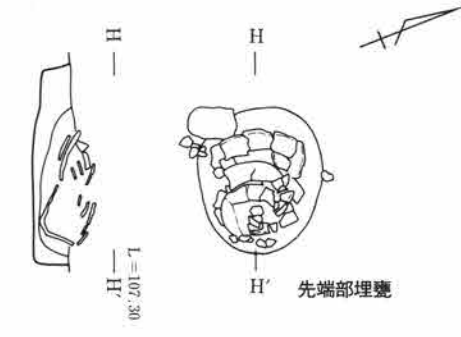
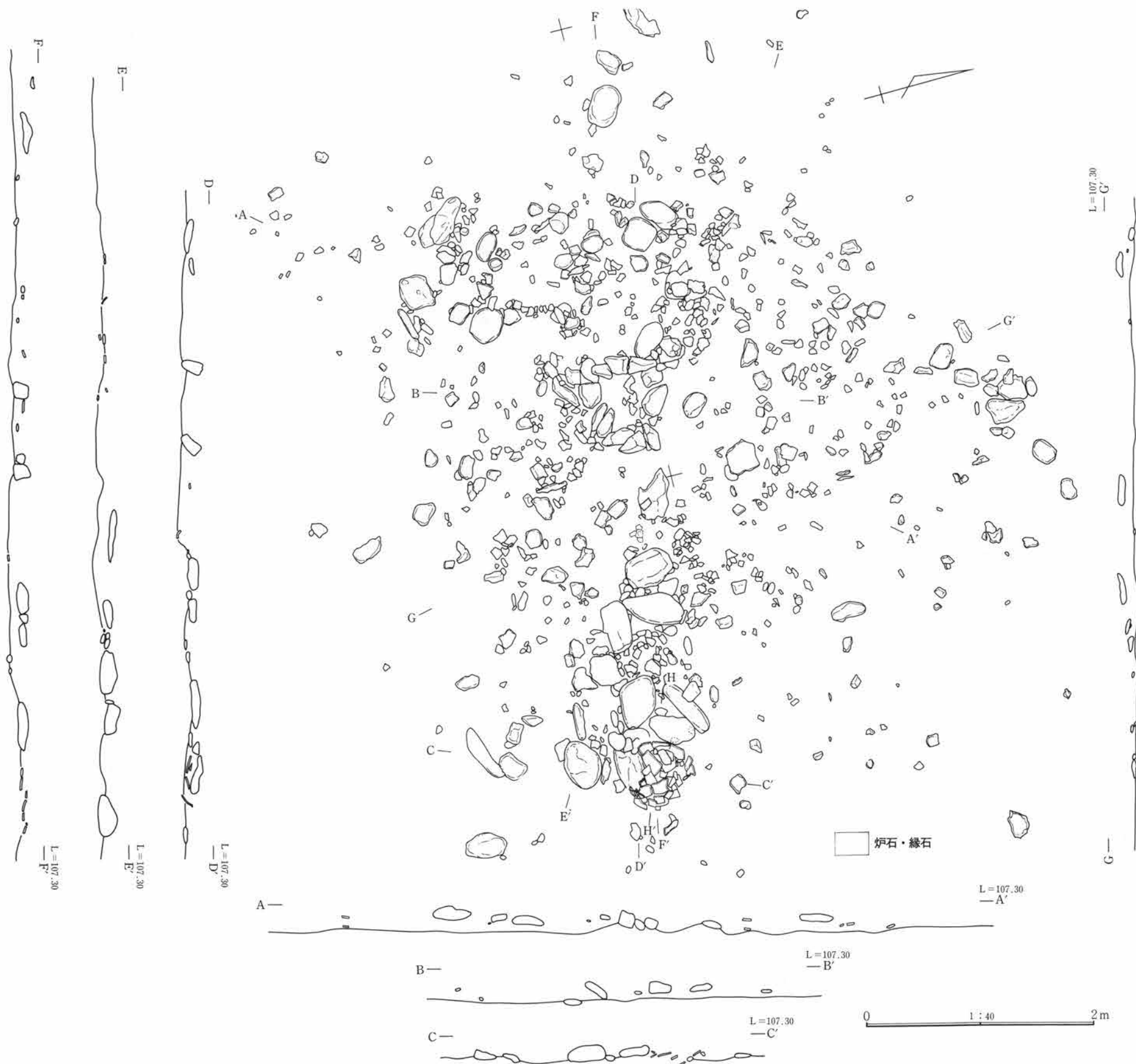
〔炉〕 石囲い炉である。長径84cm・短径76cm・深さ10cmの方形を呈し、面積0.58㎡である。主体部の中央からやや出入り口部寄りに位置している。炉内には一部焼土の堆積が認められた。

〔埋甕〕 主体部と張り出し部の接続部に1点、張り出し部の先端部に1点の計2点が出土している。接続部の埋甕は加曾利E4式土器の底部であり、正位状態で埋設されていた。なお、埋甕は脆弱であったために復元はできなかった。先端部の埋甕は口縁部を一部欠損した大型の加曾利E4式土器であり、土壌内に斜位状態で埋設されていた。この埋甕は別個体の加曾利E4式土器の胴部片によって保護されている出土状態であった。土壌の規模は長径80cm・短径60cm・深さ30cmである。覆土は灰褐色粘質土である。接続部埋甕と先端部埋甕の大きさは著しく異なっている。

〔張り出し部〕 残存状態は比較的良好である。9個の石と押えの細かな石から構成されている。9個の石の平均値は、長径40cm・短径24cmである。

〔遺物出土状態〕 埋甕2個体の他に、口縁部11点・胴部148点・底部7点の計166点の土器片が主体部を中心に出土している。土器片の出土は多くはなかった。加曾利E4式土器を主体にE3式土器片も少量出土している。石器では、石皿3点・凹石3点・磨石1点・打製石斧1点が出土している。石皿はいずれも破片であり、接合関係も認められるものもあった。凹石は2点が張り出し部、1点が縁石からの出土であった。

〔所見〕 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の柄鏡形敷石住居跡である。第1号敷石住居跡とは同時期であり、同一集落を構成していたものであろう。敷石の状況は、田篠中原遺跡検出の



第18図 大御堂第2号敷石住居跡遺構平面図



第19図 大御堂第2号敷石住居跡出土遺物分布図

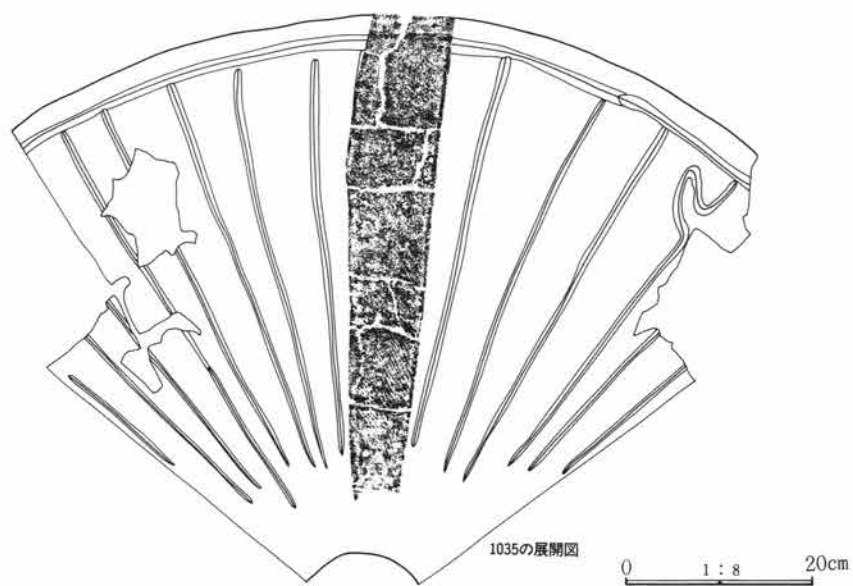
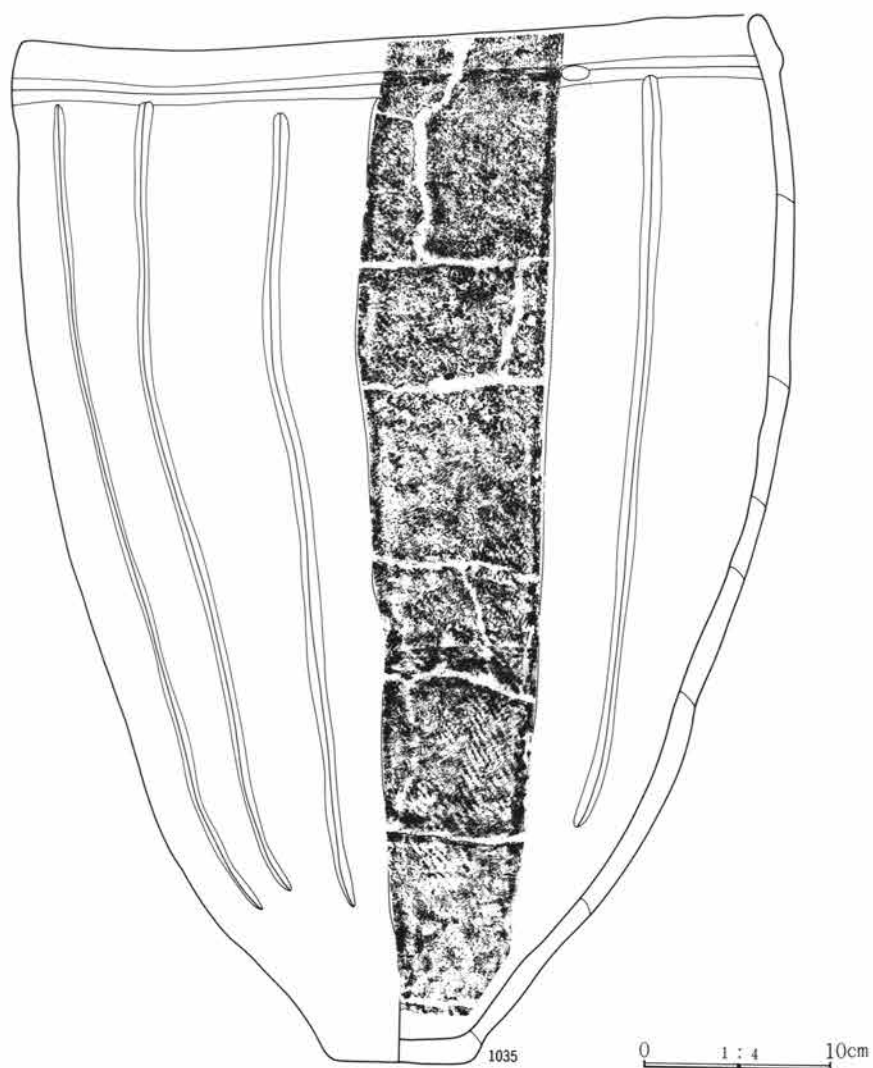
柄鏡形敷石住居跡と酷似している。(右島和夫・小林 徹・菊池 実)

第5表 大御堂調査区遺物観察表(5)―大御堂第2号敷石住居跡・土器―

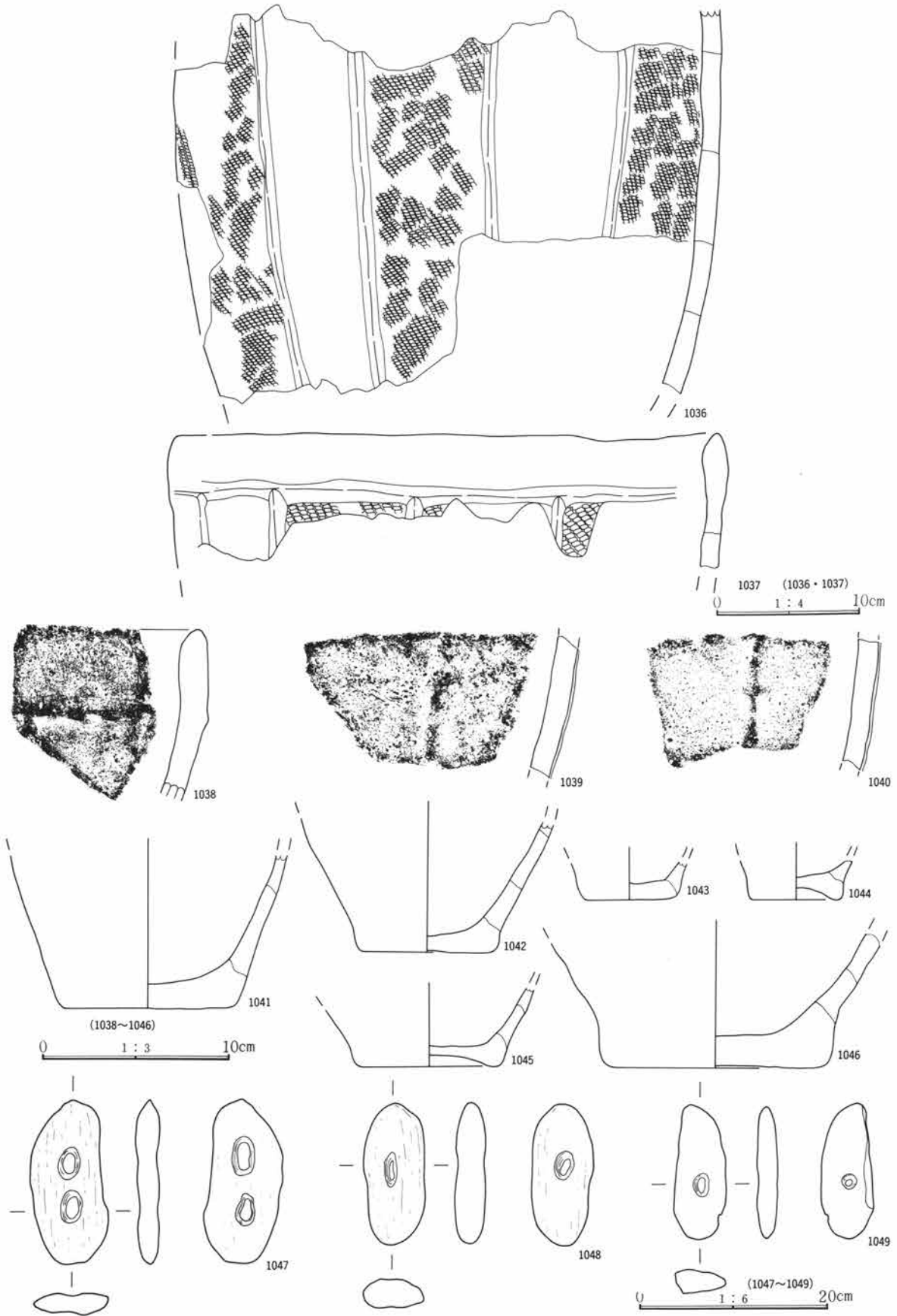
遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
1035 20 65	ほぼ 完形	①中粒の砂を混入 ②やや良	大型の深鉢形土器。口縁～胴部一部欠損。 器厚9～12mm。内面はやや粗い横方向の調整が行われている。 外面色調は明赤褐色、内面にぶい赤褐色。	口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。それに接続する微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。原体はL{R縦転がし。	先端部埋塞
1036 21 65	胴部	①細粒の砂を混入 ②良	大型の深鉢形土器の胴部。器厚11～18mm。内面は横方向の調整が行われている。 器面は荒れている。 外面色調はぶい褐色、内面にぶい橙色。	微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。原体はL{R縦転がし。土器面は柔軟。	先端部埋塞の押え
1037 21 65	口縁部	①中粒の砂を混入 ②やや良	大型の深鉢形土器の口縁部。器厚11～18mm。内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は橙色。	口唇部に無文帯をおき、1条の沈線を巡らせる。それに接続する微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。外面が荒れているために明瞭ではないが、L{R縦転がし。	主体部
1038 21 —	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6～8mm。 内外面共に荒れている。 内外面の色調は橙色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。それに接続する微隆起帯を垂下させている。	炉内
1039 21 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm。 内外面共に荒れている。 外面の色調は褐灰色、内面にぶい橙色。	微隆起帯を垂下させている。 外面が荒れているために、縄文原体の判読は不可能。	主体部周辺
1040 21 —	胴部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚5～6mm。 内外面共に荒れている。 外面の色調はぶい橙色、内面は褐灰色。	微隆起帯を垂下させている。 外面が荒れているために、縄文原体の判読は不可能。	主体部周辺
1041 21 65	底部	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形の土器の底部。底径9cm。 内面は剥落している。 外面の色調は橙色、内面は赤褐色。	縄文施文。外面が荒れているために、原体は不明。	炉周辺
1042 21 65	底部	①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器底部。底径11.7cm。 外面は荒れ、内面は横方向の調整。 内外面の色調はぶい橙色。		主体部周辺
1043 21 —	底部	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の底部。底径4.9cm。胴部で括れる器形。内面は剥落している。 外面の色調は褐色、内面は赤褐色。		主体部
1044 21 —	底部	①中粒の砂を混入 ②やや良	底径4.7cm。 内面は荒れている。 内外面の色調はぶい黄橙色。		主体部
1045 21 65	底部	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形の土器の底部。底径7.2cm。 内外面共に荒れている。 外面は明赤褐色、内面は灰褐色。		一括
1046 21 65	底部	①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の底部。底径7.5cm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面色調は灰黄褐色、内面にぶい橙色。	底部は上げ底で、内外面共に荒れている。	主体部周辺

第5表 大御堂調査区出土遺物観察表(6)―大御堂第2号敷石住居跡・石器―

遺物番号 挿図・写真	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
1047 21・65	凹石	完形	点紋緑泥片岩	17.0	7.6	2.5	585	両面に4個の凹みがある。凹みの平均は長径36mm、短径23mm、深さ2mmである。	張り出し部
1048 21・65	凹石	完形	絹雲母石墨片岩	14.6	6.5	3.3	535	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径23mm、短径17mm、深さ2mmである。	張り出し部
1049 21・65	凹石	片	緑泥片岩	14.0	(5.5)	2.3	(325)	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径20mm、短径15mm、深さ1mmである。磨耗痕あり。	縁石
1050 22・65	磨石	片	点紋絹雲母 石墨片岩	(9.4)	(5.6)	(2.8)	(39)	器面に磨耗痕がみられる。 ほぼ全面焼けている。	縁石

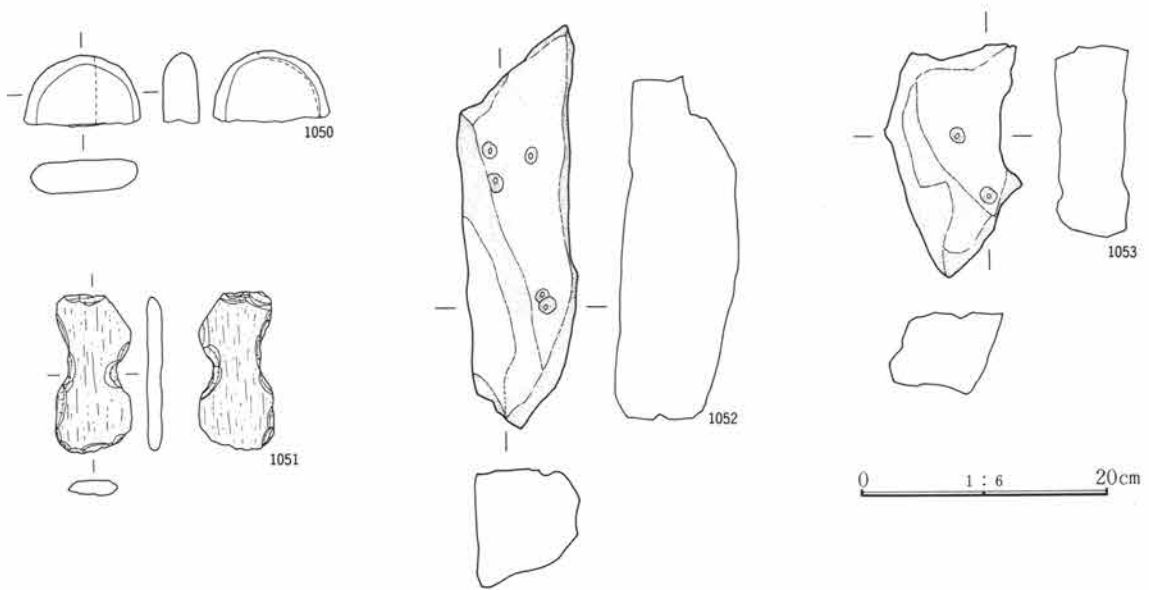


第20図 大御堂第2号敷石住居跡出土遺物実測図(1)―土器―



第21図 大御堂第2号敷石住居跡出土遺物実測図(2)―土器・石器―

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物



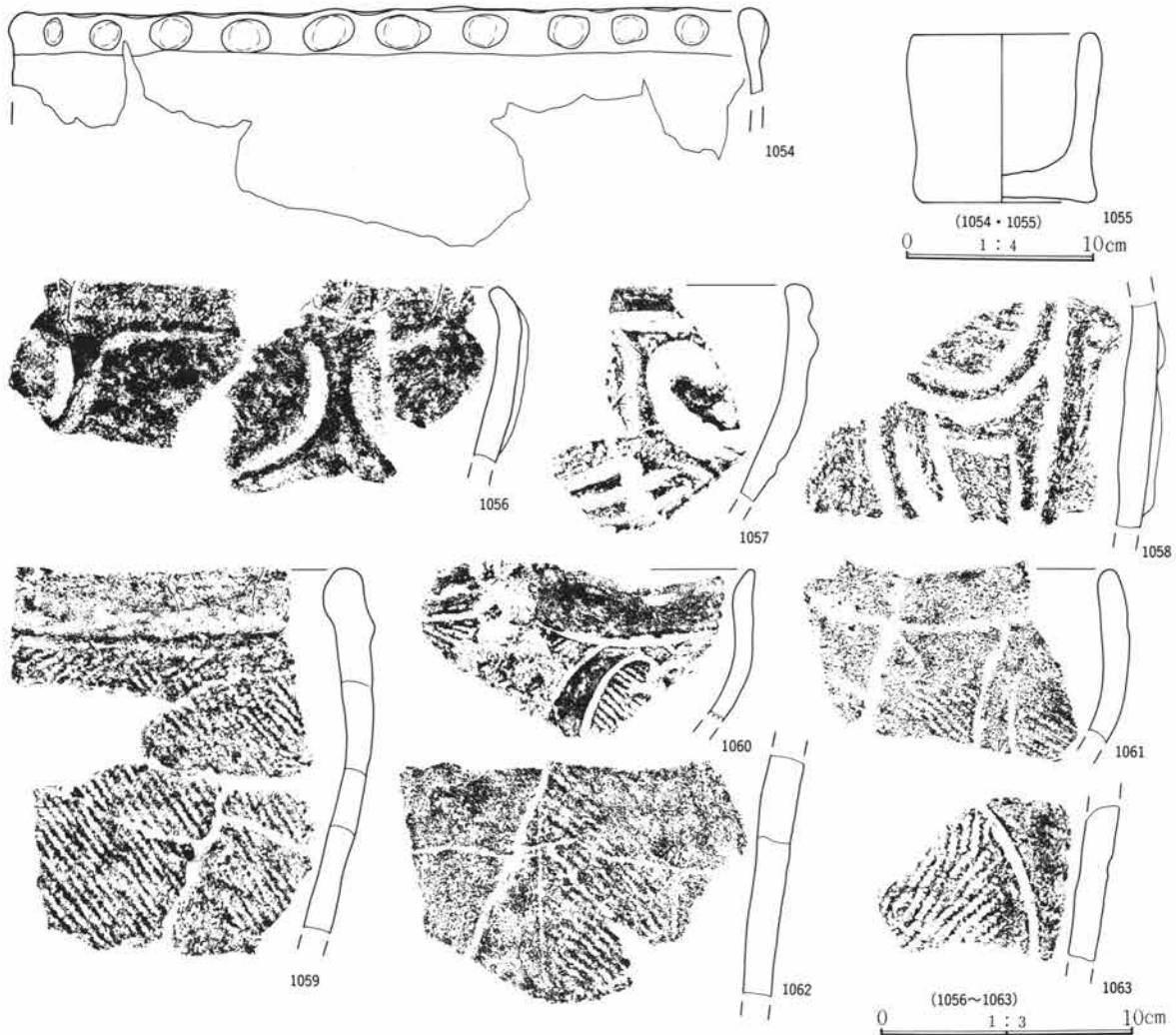
第22図 大御堂第2号敷石住居跡出土遺物実測図(3)―石器―

遺物番号 挿図・写真	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
1051 22・65	打製石斧	完形	点紋絹雲母 緑泥片岩	12.4	6.1	1.3	120	分銅型。	張り出し部
1052 22・65	石皿	破片	砂岩	(32.4)	(9.0)	9.3	(3,250)	磨面と5個の凹みがある。	石囲い炉
1053 22・65	石皿	破片	砂岩	(19.0)	(9.3)	8.6	(1,350)	磨面に2個の凹みがある。	主体部

C区から検出された縄文時代の遺構は、2軒の敷石住居跡だけである。住居跡周辺のグリッドからは、加曾利E 4式土器片が集中的に出土しているが、他のグリッドからは散漫的な出土であった。また加曾利E 3式土器片も出土しているが、該期の遺構は検出されていない。以下、グリッド出土の代表的遺物を掲載した。

第5表 大御堂調査区出土遺物観察表(7)―C区縄文土器―

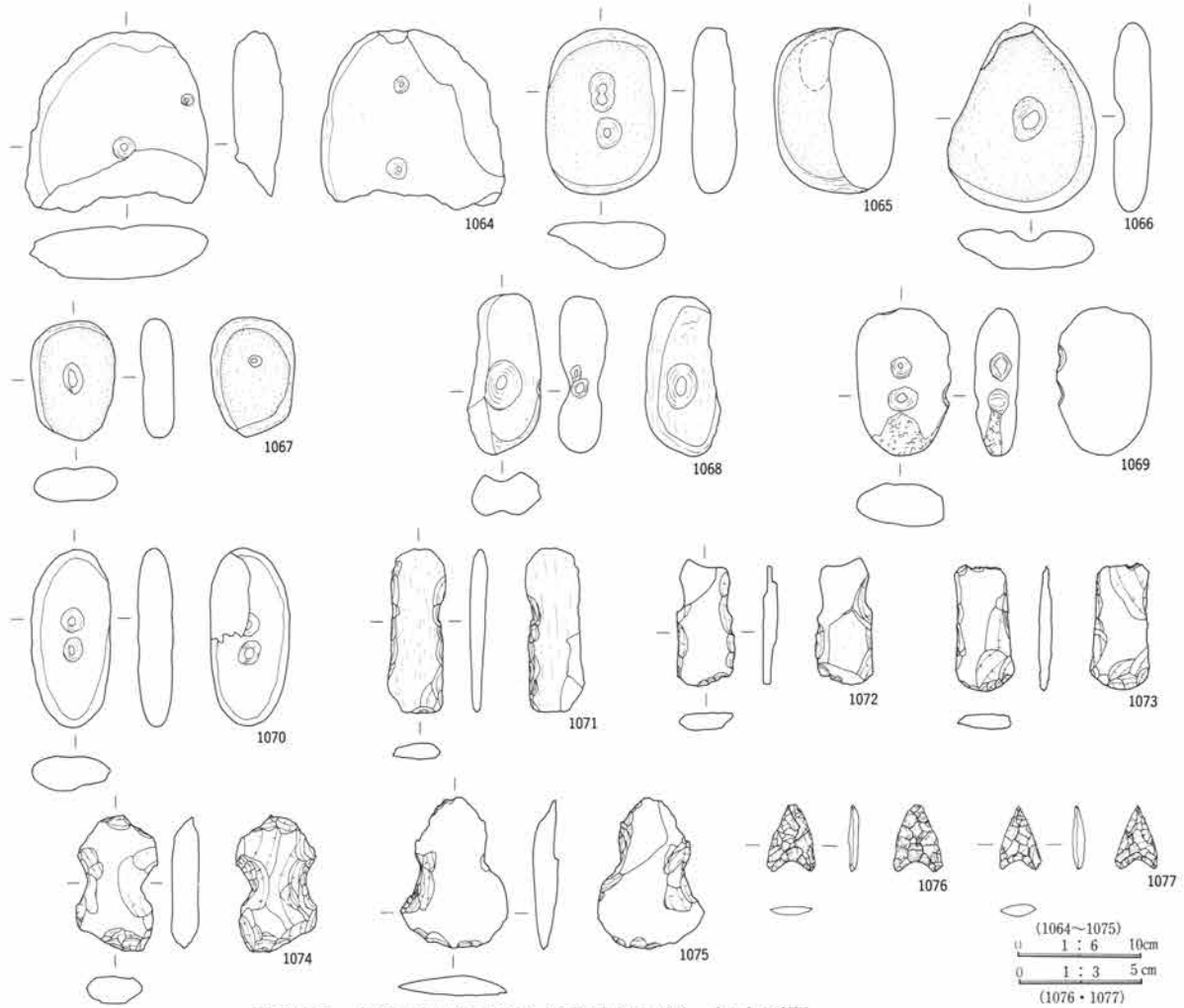
遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
1054 23 65	口縁部	①粗粒の砂を混入 ②やや良	大型の深鉢形土器の口縁部一周。器厚7～15mm。内面は横方向の調整が行われている。器面は荒れている。内外面の色調は灰褐色。	口唇部に圧痕が施されている。	Cu-31g
1055 23 65	ほぼ完形	①細粒の砂を混入 ②やや良	小型土器。口縁部一部欠損。器厚10～13mm。内面は横方向の調整が行われている。内外面の色調はにぶい黄橙色。	底部周縁が剥落している。	Cc-29g
1056 23 —	口縁部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8～10mm。内面は横方向の調整。内外面共に荒れている。内外面の色調は黄灰色。	隆帯による楕円の文様が描かれている。外面が荒れているために、縄文原体は不明。	Cp-32g
1057 23 —	口縁部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。内面は荒れている。外面色調はにぶい赤褐色、内面明褐色。	口縁部はやや内湾する。隆帯と沈線による渦巻き等の文様が描かれる。縄文施文。原体はRⅠ。	Cf-29g



第23図 大御堂調査区出土遺物実測図(1)―縄文土器―

遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
1058 23 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚9～12mm。 内面は横方向のやや粗い調整。外面の色調はにぶい黄橙色、内面は灰褐色。	隆帯による文様が描かれている。 縄文施文。外面が荒れているため原体は不明。	Cg-27g
1059 23 —	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9～16mm。 内面は横方向の粗い調整。 内外面の色調はにぶい黄橙色。	口縁部はやや内湾する。口唇部に狭い無文帯をおき、1条の沈線を巡らせる。 以下、縄文施文。原体はL{R横・縦転がし。	Cg-27・28g
1060 23 —	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	甕形土器の口縁部片。器厚6～8mm。 内面は横方向の丁寧な調整。 外面色調はにぶい褐色、内面は褐灰色。	波状口縁部片。口唇部に無文帯をおき、1条の沈線を巡らせる。以下、沈線による文様が描かれ縄文施文。原体はL{R(0段多条)。	Cg-31g
1061 23 —	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9～11mm。 内面は剥落している。 内外面の色調は灰白色。	波状口縁部片。口唇部に無文帯をおき、1条の沈線を巡らせる。以下、沈線による文様が描かれ縄文施文。原体はL{R。	Cf-31g
1062 23 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚12～15mm。 内面は横方向の調整、荒れている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐灰色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はL{R縦転がし。	Cf-31g
1063 23 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚11～12mm。 内面は荒れている。 外面色調はにぶい黄橙色、内面灰黄褐色。	沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR{L縦転がし。	C区一括

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物



第24図 大御堂調査区出土遺物実測図(2)―縄文石器―

第5表 大御堂調査区出土遺物観察表(8)―C区・石器―

遺物番号 挿図・写真	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
1064 24・65	多孔石	欠	絹雲母緑泥片岩	(14.4)	(14.8)	4.6	(1,380)	両面に4個の凹みがある。凹みの平均は長径・短径とも14mm、深さ3mmである。	Cf-30g
1065 24・65	凹石	欠	点紋絹雲母 石墨片岩	13.2	9.5	3.8	(740)	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径27mm、短径20mm、深さ1mm。一部焼けている。	
1066 24・65	凹石	完形	点紋緑泥片岩	15.1	12.1	3.2	794	片面に1個の凹みがある。凹みは長径36mm、短径27mm、深さ11mmである。	Ch-31g
1067 24・65	凹石	完形	点紋絹雲母 石墨片岩	9.6	6.8	2.8	290	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径18mm、短径13mm、深さ1mmである。	Cg-30g
1068 24・65	凹石	完形	緑簾緑泥片岩	12.9	6.1	4.0	445	両面と側面に4個の凹みがある。両面の凹みの平均は長径38mm、短径27mm、深さ7mmである。	Cc-18g
1069 24・65	凹石	完形	輝緑岩	12.8	7.6	3.7	575	片面と側面に4個の凹みがある。一部に敲打痕が認められる。	Cg-29g
1070 24・65	凹石	一部欠損	輝緑岩	14.2	6.5	2.9	(440)	両面に4個の凹みがある。凹みの平均は長径20mm、短径17mm、深さ1mmである。	
1071 24・65	打製石斧	完形	緑泥片岩	13.1	4.8	1.6	148	短冊型。	Cf-27g
1072 24・65	打製石斧	一部欠損	絹雲母石墨片岩	(10.2)	4.8	1.2	(75)	短冊型。	Cw-32g
1073 24・65	打製石斧	完形	熱変成岩	10.1	4.8	1.3	84	短冊型。	C区トレンチ
1074 24・65	打製石斧	完形	熱変成岩	10.9	6.7	2.4	215	分銅型。	Cw-31g

第1節 中世以前の遺構と遺物

遺物番号 挿図・写真	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
1075 24・65	打製石斧	完形	熱変成岩	12.2	8.8	2.1	200	分銅型。	Cw-29g
1076 24・65	石鏃	完形	黒曜石	2.7	2.0	0.4	1.7	基縁は器体に向って内湾し、脚部が作出される。	C区一括
1077 24・65	石鏃	完形	黒曜石	2.6	1.7	0.5	1.7	基縁は器体に向って内湾し、脚部が作出される。	C区一括

第5表 大御堂調査区出土遺物観察表(9)―A・B・C区縄文土器―

遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
1078 25 —	底部	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径8.5cm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐灰色。	底部に網代痕がある。 内面には炭化物の付着が認められる。	Cu-31g
1079 25 —	胴部	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。	縄文施文。原体はR{ }横転がし。 刻目を施す浮線文を施している。 諸磯b式土器。	Be-23g
1080 25 —	口縁部	①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6~10mm。 内面は荒れている。 内外面の色調は褐灰色。	口縁部に沈線による楕円等の文様を描いている。 外面は荒れているため縄文は不明。 加曾利E3式土器。	Au-5g
1081 25 —	底部	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の底部片。底径10cm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	外面は荒れているために縄文不明。	Au-5g

第5表 大御堂調査区出土遺物観察表(10)―A・B区・石器―

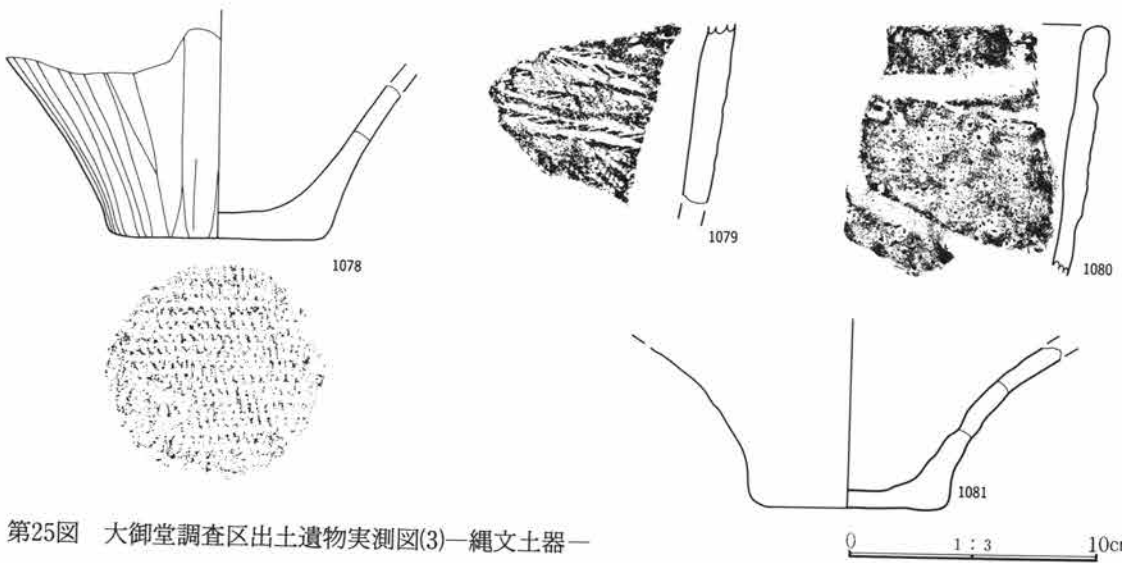
遺物番号 挿図・写真	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
1082 26・—	石鏃	完形	チャート	1.6	1.5	0.5	0.9	基縁は器体に向ってやや内湾し、脚部認められる。	Bl-13g
1083 26・—	石鏃	基部欠損	チャート	(2.7)	1.6	0.5	(1.5)	舌部を形成する。	Bf-16g
1084 26・—	石鏃	欠損	黒曜石	(1.3)	(1.0)	(0.3)	(0.3)		Bg-9g
1085 26・—	石鏃	一部欠損	黒曜石	1.6	(1.5)	(0.3)	(0.55)	基縁は器体に向ってやや内湾し、脚部認められる。	Bn-23g
1086 26・—	石鏃	完形	黒曜石	2.0	1.2	0.2	0.5	基縁は器体に向って尖角状に抉入し、脚部が明確に作出される。	Bn-25g
1087 26・—		完形	黒曜石	5.5	2.5	1.7	30.3		Av-6g
1088 26・—		完形	熱変成岩	13.0	7.0	2.0	280		Ay-17g
1089 26・—	打製石斧	完形	熱変成岩	11.3	8.4	2.7	286	分銅型。	Ba-21g
1090 26・—		完形	輝緑凝灰岩	11.0	7.6	2.4	270		Ay-7g

3 弥生時代

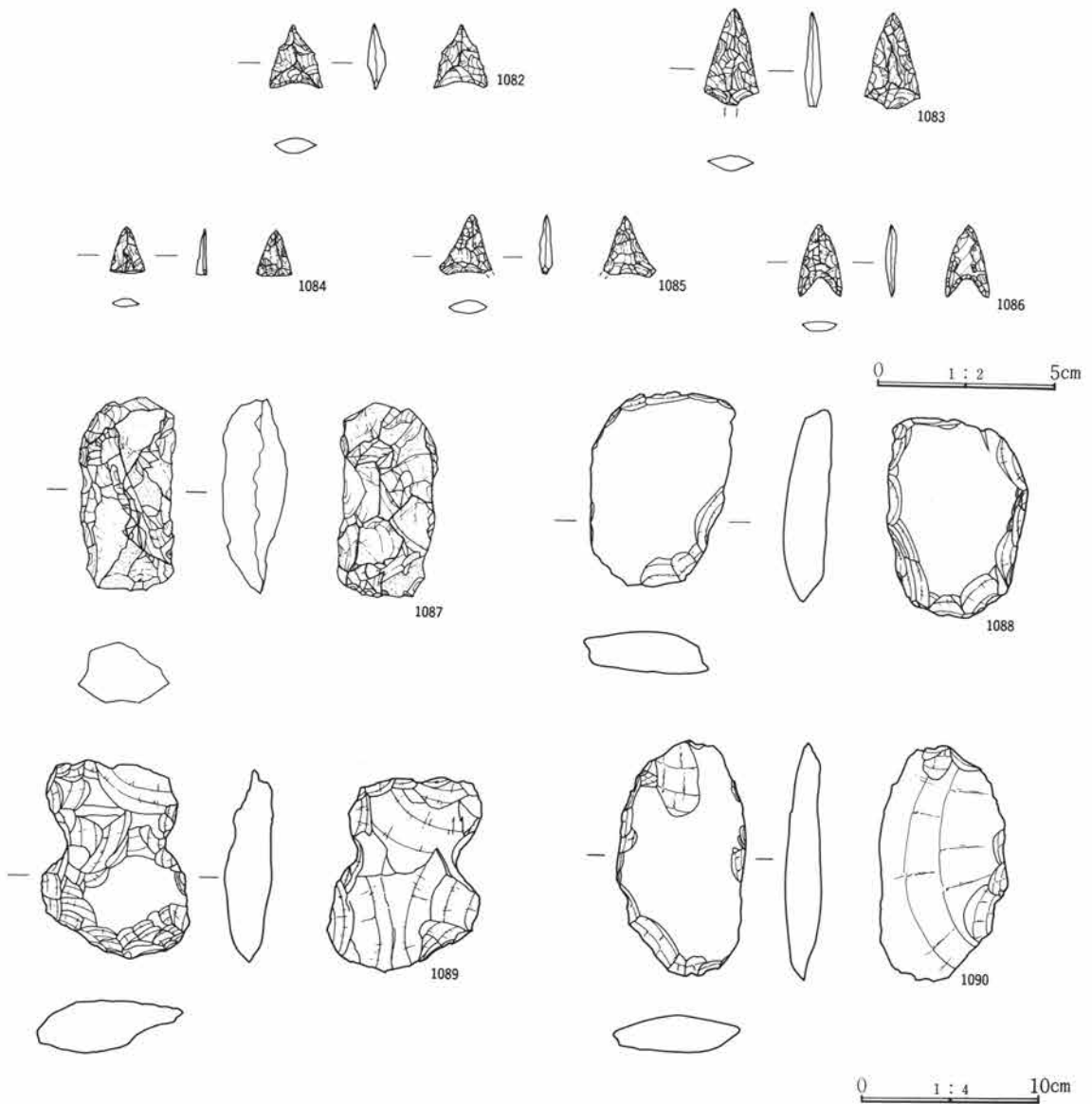
弥生時代の遺物は、その初頭の土器を中心として、主として遺構に伴わずに出土した。わずかに、不定形の浅い落ち込みの土坑(第1号土坑)で、甕形土器(1501)と敲打痕のある結晶片岩の半割状の円礫(1502)の出土した例が、遺構に伴うものである。弥生時代初頭の土器として抽出した資料は、器形や文様から判断したが、縄文時代や弥生時代の他時期の資料が含まれる可能性も否定できない。個々の土器の説明は一覧表に譲り、ここでは概要を記す。

特筆すべきは遠賀川系と判断した壺形土器(1512~1523)の出土である。そして、それと近接して出土した岩櫃山式土器の甕形土器の系譜に連なる土器(1509)や、工字文・変形工字文の土器(1512・1513)、浮線

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物



第25図 大御堂調査区出土遺物実測図(3)―縄文土器―



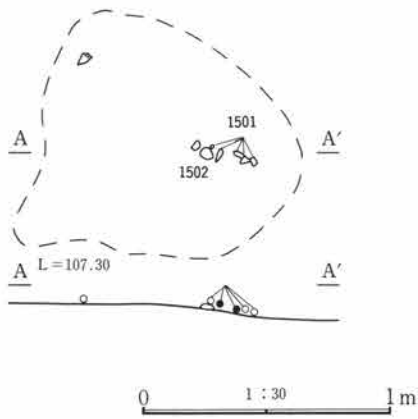
第26図 大御堂調査区出土遺物実測図(4)―縄文石器―

第1節 中世以前の遺構と遺物

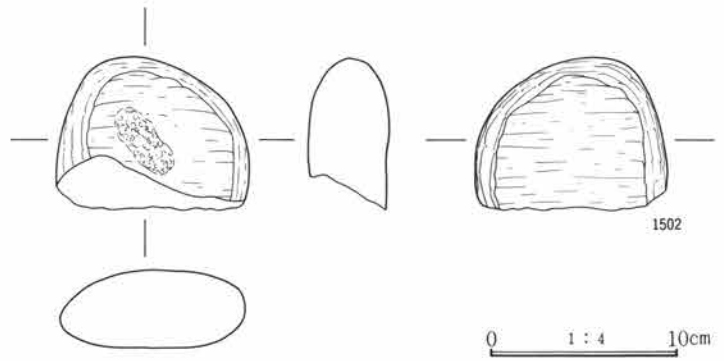
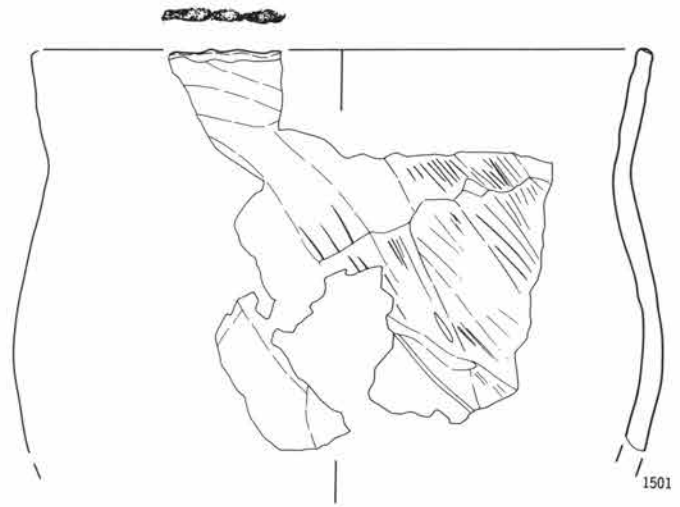
網状文の土器（1526）などが出土していることである。これらの土器の共伴関係は把握されなかったが、本
 県域の縄文時代末から弥生時代初頭にかけての問題を論ずる上で、重要な資料となるであろう。（飯島義雄）

第6表 大御堂調査区出土遺物観察表 — 弥生土器・石器 —

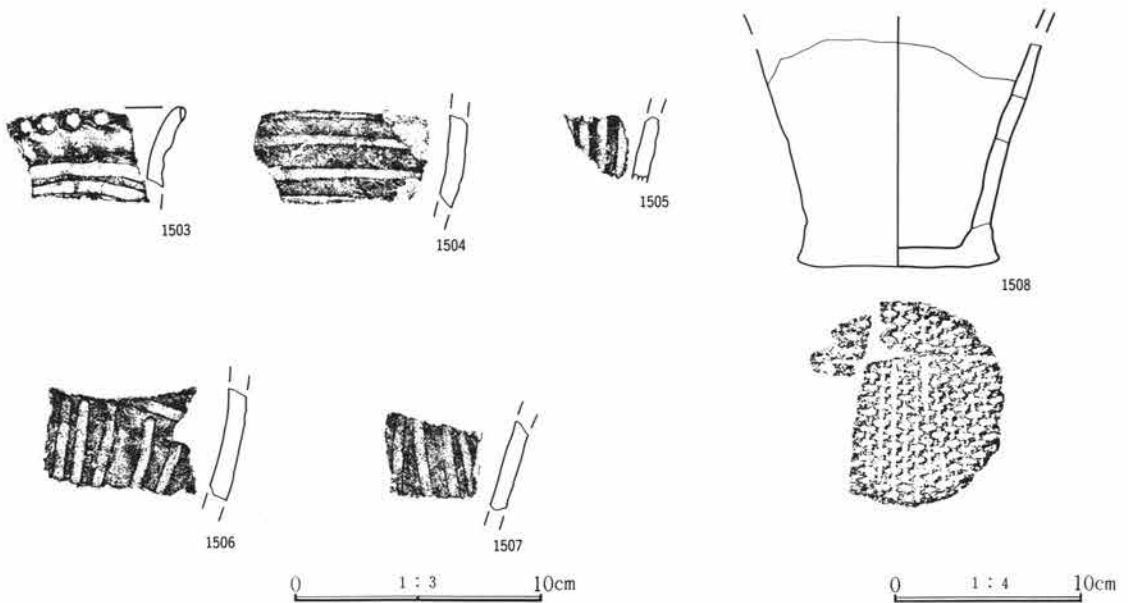
遺物番号 挿図・図版	器種・残存状況 出土グリッド・遺構	①口径③底径 ②器高	①胎土 ②色調 ③特徴	備考
1501 28・66	甕 口縁～体部 大1号土坑	①36.0	①石英・結晶片岩等の砂粒をやや多く含む ②にぶい黄橙色 ③外面斜位の粗い条痕、口唇部指頭圧痕列	
1502 28・66	敲石	長 102 厚 41 短幅81 重500g	(石材) 絹雲母緑泥片岩	
1503 29・—	壺 口縁部破片 Bc10g19		①細砂粒を少し含む ②橙色 ③口唇部に刻み目列、口頸部に横位の平行沈線	1503～1507 同一個体か
1504 29・—	壺 体部破片 Bc11g10		①細砂粒を少し含む ②暗褐色 ③体部に横位の平行沈線	1503～1507 同一個体か
1505 29・—	壺 口頸部破片 Bc10g04		①細砂粒を少し含む ②橙色 ③口頸部横位の平行沈線	1503～1507 同一個体か
1506 29・—	壺 体部破片 Bc11g18		①細砂粒を少し含む ②にぶい橙色 ③体部に縦横位の平行沈線	1503～1507 同一個体か
1507 29・—	壺 Bc11g 6		①細砂粒を少し含む ②にぶい橙色 ④体部に縦位の平行沈線	1503～1507 同一個体か
1508 29・66	底部～体部 Ci26g51	③11.8	①細砂粒をやや多く含む ②橙色 ③網代底、内面炭化物	
1509 30・66	甕 口縁～底部 Ci25・26g	①29.0 ③11.8 ②44.0	①石英・結晶片岩等の砂粒を少し含む ②にぶい橙色 ③口頸部内傾、内外面横ナデ、口頸部の上・下端に推定10単位の2個1対の貼り瘤・網代底	残存約1/2 底部は接合せず
1510 30・66	甕 体部～底部 Ci27・28g		①砂粒を少し含む ②灰白色 ③外面縦ナデ、内面横ナデ、内面に粘土帯の積み上げ痕	口唇部欠損
1511 30・67	深鉢 ほぼ完形 Au07g	①17.2 ③ 6.8 ②22.8	①石英・結晶片岩等の砂粒を多く含む ②明褐色～にぶい褐色 ③口頸部内傾、内外面に粘土帯の積み上げ痕、外面斜位のハケ目痕	縄文土器か？
1512 31・66	壺 同一個体か { 1512(頸・Ch26g26) 1513(胴・ Ch26g23) 1514(胴・Ch27g25) 1515(胴・Ci25g32) 1516(胴・ Ci26g89) 1517(胴上半・Ci26 g85) 1518(胴・Ch26・27g62) 1519(胴・Ch26g57) 1520(胴・ Ch26g60) 1521(胴・Ch27g27) 1522(胴・Ch26g61)		①石英・結晶片岩等の砂粒を多く含む ②橙色～赤褐色 ③器壁やや厚め、胴部が張り口頸部は緩やかに傾斜しながら窄まる器形か、胴部最大径の部位のやや上に、3条から4条の平行沈線の施文、内・外面とも風化が進んでいる	遠賀川系か
1523 31・—	壺 胴部～頸部 Cv31g22		①石英・結晶片岩等の砂粒を多く含む ②橙色 ③球状に近い胴部か、胴上端部に2条の平行沈線か	遠賀川系か
1524 31・—	壺 口頸部 Cw31g03	①10.0	①石英・結晶片岩等の砂粒を多く含む ②橙色 ③口頸は少し内傾する	
1525 31・—	壺 口頸～胴部 Cw29g03・04	① 8.0	①砂粒を多く含む ②黄橙色 ③口頸は少し内傾する	
1526 31・66	壺 口頸部 Ch27g05	① 9.4	①石英・結晶片岩等の砂粒を多く含む ②黄橙色 ③口頸は少し内傾する、口頸部上端に浮線網状文、構成に一部乱れ	
1527 31・66	壺 口縁部 Co31g02	①19.0	①砂粒をやや多く含む ②暗褐色 ③口縁は受け口状、口頸部に2条の平行沈線、上部に綾杉状の沈線文、下部には逆向きの綾杉文か	
1528 32・66	鉢 口縁～体部 Ch25・26・27g		①細砂粒を多く含む ②黒色 ③口唇部に2個一対の突起・口縁上端部に縄文、体上部に工字文	
1529 32・—	鉢 体部 Ch26・27g		①細砂粒をやや多く含む ②暗褐色 ③体部に縄文施文後、変形工字文	



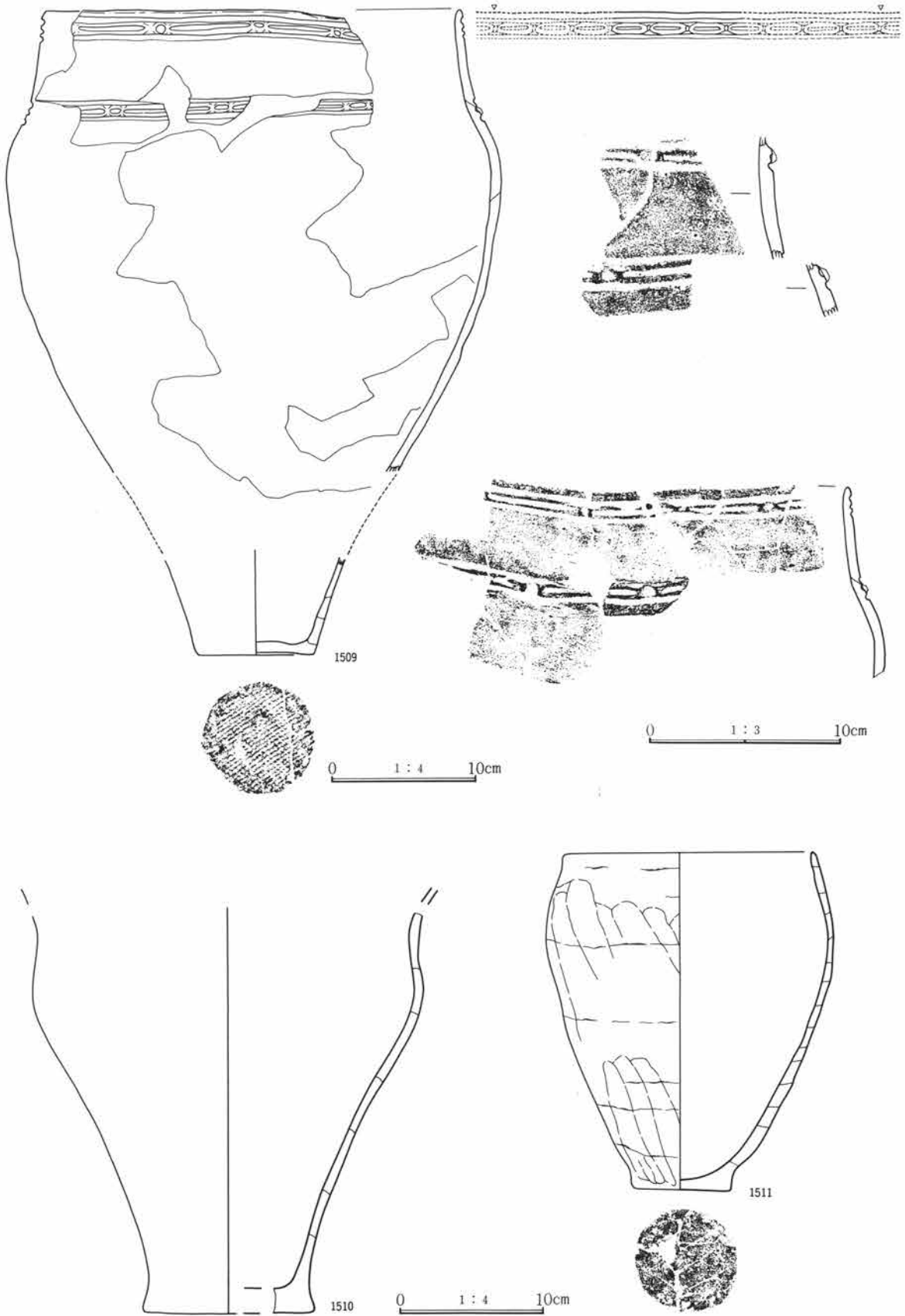
第27图 大御堂第1号土坑遺物出土状況平面図



第28图 大御堂第1号土坑出土遺物実測図—弥生土器・石器—

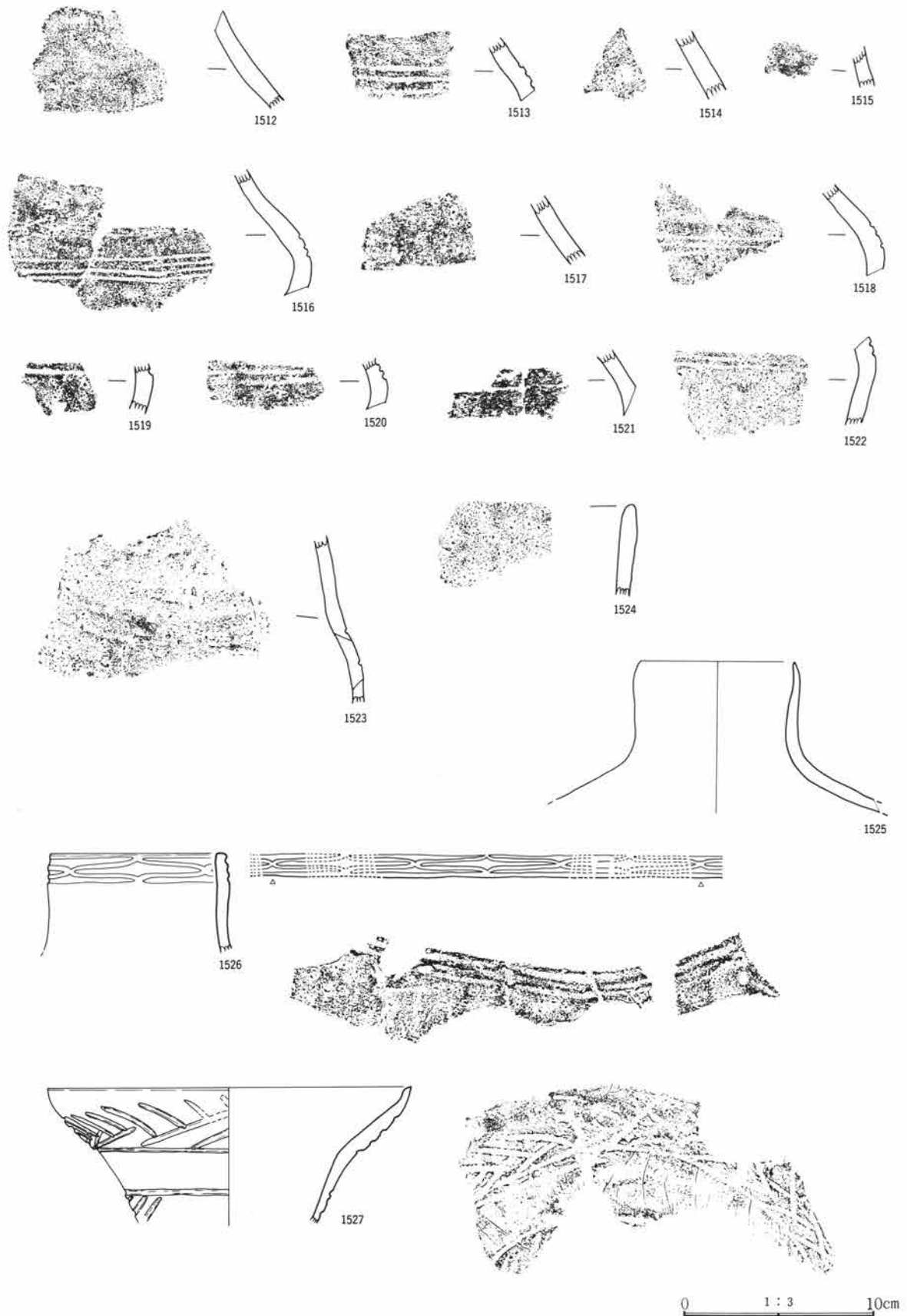


第29图 大御堂調査区出土遺物実測図(5)—弥生土器—



第30図 大御堂調査区出土遺物実測図(6)―弥生土器―

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物



第31図 大御堂調査区出土遺物実測図(7)―弥生土器―



第32図 大御堂調査区出土遺物実測図(8)―弥生土器―

第1節 中世以前の遺構と遺物

遺物番号 挿図・図版	器種・残存状況 出土グリッド・遺構	①口径③底径 ②器高	①胎土 ②色調 ③特徴			備考
			①胎土	②色調	③特徴	
1530 32・一	鉢 口縁～体部 Cg29g28		①細砂粒をやや多く含む	②にぶい黄橙色	③体部上端に平行沈線4条、上部に突起、地文に燃糸文を施文か？	
1531 32・一	鉢 口縁～体部 Cg28g05		①細砂粒を多く含む	②にがい黄橙色	③口縁部に平行沈線最低4条、内外面横ナデ	
1532 32・一	鉢 口縁部 Ch27g77		①石英・結晶片岩等の砂粒を多く含む	②にぶい橙色	③口縁部に平行沈線7条か	
1533 32・一	鉢 口縁部 Ci26g100		①石英・結晶片岩等の砂粒を多く含む	②灰黄褐色	③口縁部に平行沈線7条	98、138、9、29
1534 32・一	鉢 口縁部 Ch26・27g10		①石英・結晶片岩等の砂粒を多く含む	②にぶい黄橙色	③口縁部に平行沈線7条	1533と同一個体か
1535 32・一	鉢 口縁～体部 Ch26・27 Pit 3		①砂粒をやや多く含む	②にぶい褐色	③体部に斜位の条痕、口縁部に平行沈線	沈線は最底7条
1536 32・一	深鉢 Cg17g	①28.0	①細砂粒を含む	②外面暗褐色、内面灰白色	③体部条痕、口唇部に指頭圧痕列	
1537 32・一	深鉢 口縁部 $\frac{1}{2}$ Cu27g	①26.0	①石英・結晶片岩等の砂粒をやや多く含む	②浅黄橙色	③体部外面無文、折り返し口縁	

4 古墳～平安時代の遺構と遺物

(1) 遺構・遺物の残存状況

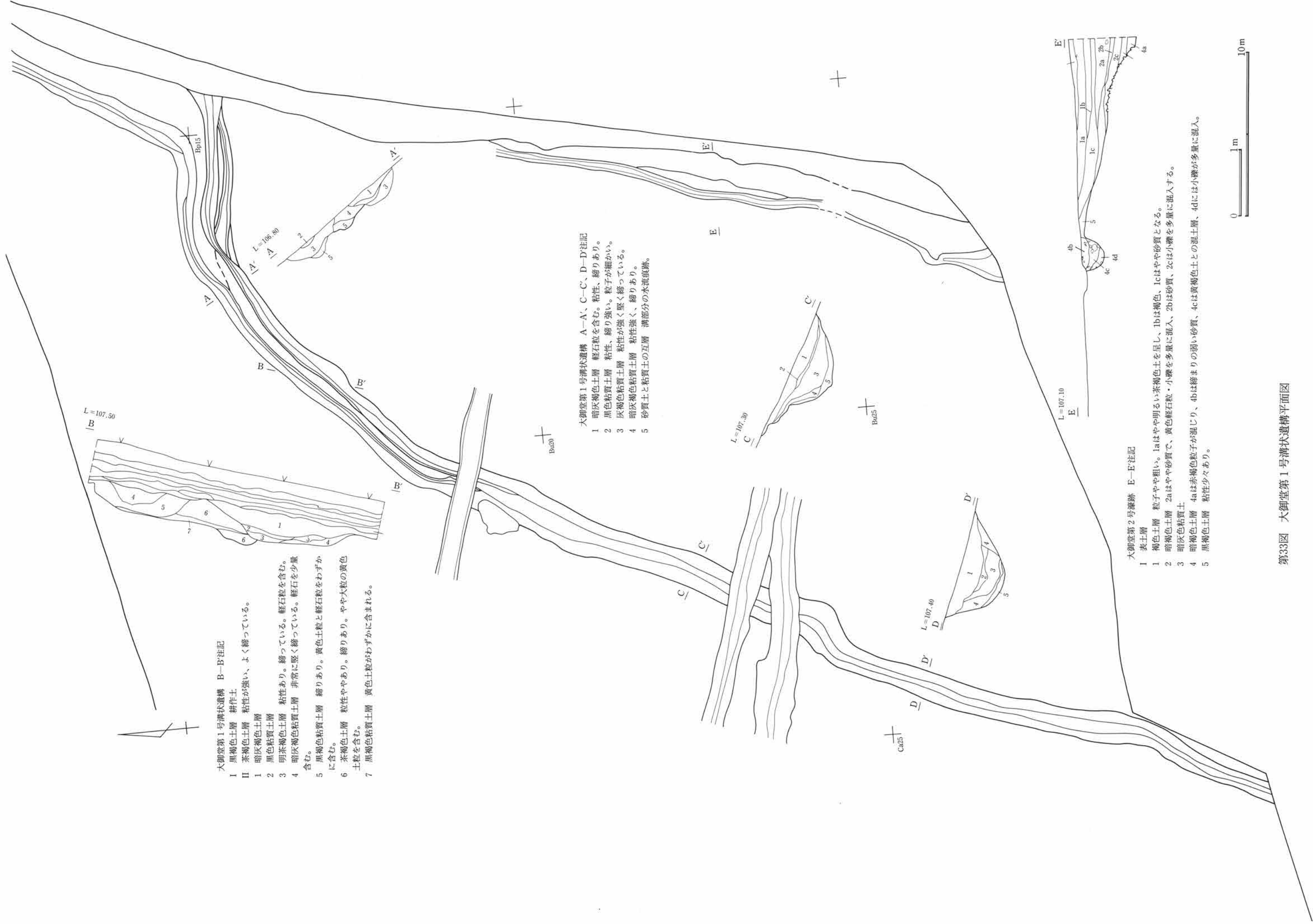
古墳時代から平安時代にかけては鮎川左岸に濃密に遺跡が分布するが、本調査区付近が最も密度の薄い分布域となっている。本調査区においての出土遺物は土師器・須恵器・埴輪・土製品等が見られたが、量的に非常に少なく、また、該当する明瞭な遺構も検出されていない。特に寺院址の確認されたA・B区では、池や溝への流れ込みの遺物が見られるだけであった。

大御堂調査区西側では、表土掘削後に十数条の溝状遺構を確認したが、その中で土師器・須恵器を出土する溝が1条検出され、埋土の観察からも当該時期の遺構と考えられる。

(2) 大御堂第1号溝状遺構 (第33図)

大御堂第1号溝状遺構(調査名BD17)は、大御堂調査区のほぼ中央、北東がBm12グリッド、南西がCb30グリッドでBmラインからCbラインの間で、地形の傾斜方向にほぼ沿って南北方向の走行で確認された。南北両端ともに調査区外へのびる。上端幅は1.5m～2.2m、下端幅は0.2m～0.5m、確認面からの深さは0.5m～0.8mで、遺構の断面形状はU字形である。走行方位は概ねN-26°-Eで、Bq・Bs-15グリッド付近では溝の掘り替えによると思われる切り合いが認められ、ここで2方向に分かれる。東にのびて第2号濠に接続するものはN-87°-W、北東方向へのびるものはN-32°-Eの方位を示し、最も古い溝は東へのび、後に北に伸びる溝が掘られたと思われる。ただし、Bu19グリッド付近から2条分の掘り方が見られることから、東方向と北方向の溝が同時に存在していた可能性がある。底面標高は南端で106.80m、北端で106.40m～106.30mで北に向かう緩やかな傾斜が認められた。埋土に見られるのは黒褐色粘質土で軽石粒の混入が認められ、下層には薄い泥質層・砂層も見られ流水の痕跡と認められる。東西方向の溝数条と重複するが、大御堂第17号溝状遺構に本遺構は切られることから、大御堂調査区西半の遺構の中で最も古い時期のものだと判断される。

本遺構からは、土師器が3点と須恵器片が出土している。土師器は坏が3個体分確認されたほかに、坏の小片が見られ、須恵器は甕の胴部片の他、瓶類の小片(口縁部片と肩部片)が見られ、7世紀代に比定されるものである。溝埋土中にはこれより新しい遺物は見られず、埋土として見られる黒褐色粘質土とこれら出土遺物から奈良～平安時代にかけての遺構と推定される。(右島和夫)



大御堂第1号溝状遺構 B-B'注記

- I 黒褐色土層 耕作土
- II 茶褐色土層 粘性が強い、よく締っている。
- 1 暗灰褐色土層
- 2 黒色粘質土層 粘性あり。締っている。軽石粒を含む。
- 3 明茶褐色土層 非常に堅く締っている。軽石を少量含む。
- 4 暗灰褐色粘質土層 粘性強、黄色土粒と軽石粒をわずかに含む。
- 5 黒褐色粘質土層 粘性ややあり。締りあり。やや大粒の黄色土粒を含む。
- 6 茶褐色土層 粘性ややあり。締りあり。やや大粒の黄色土粒を含む。
- 7 黒褐色粘質土層 黄色土粒がわずかに含まれる。

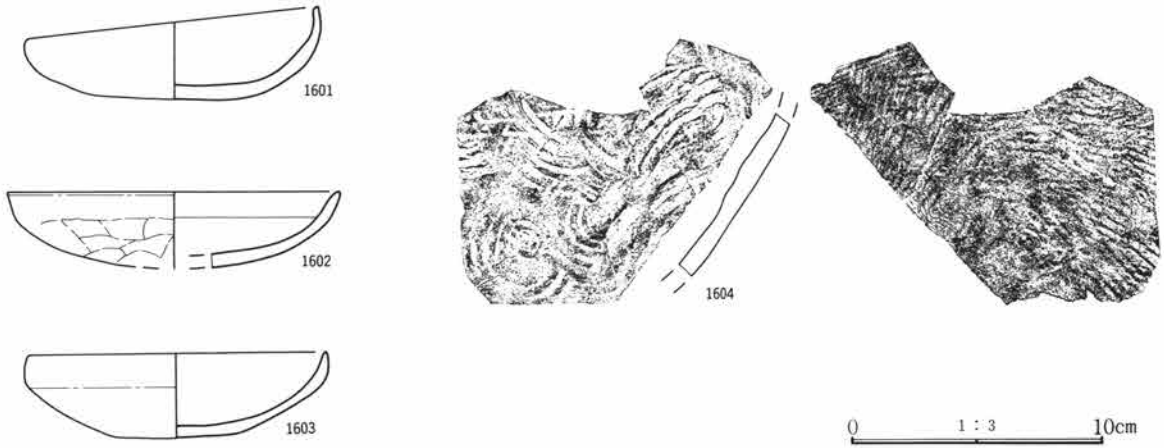
大御堂第1号溝状遺構 A-A', C-C', D-D'注記

- 1 暗灰褐色土層 軽石粒を含む。粘性、締りあり。
- 2 黒色粘質土層 粘性、締り強い。粒子が細かい。
- 3 灰褐色粘質土層 粘性が強く堅く締っている。
- 4 暗灰褐色粘質土層 粘性強く、締りあり。
- 5 砂質土と粘質土の互層 溝部分の水流痕跡。

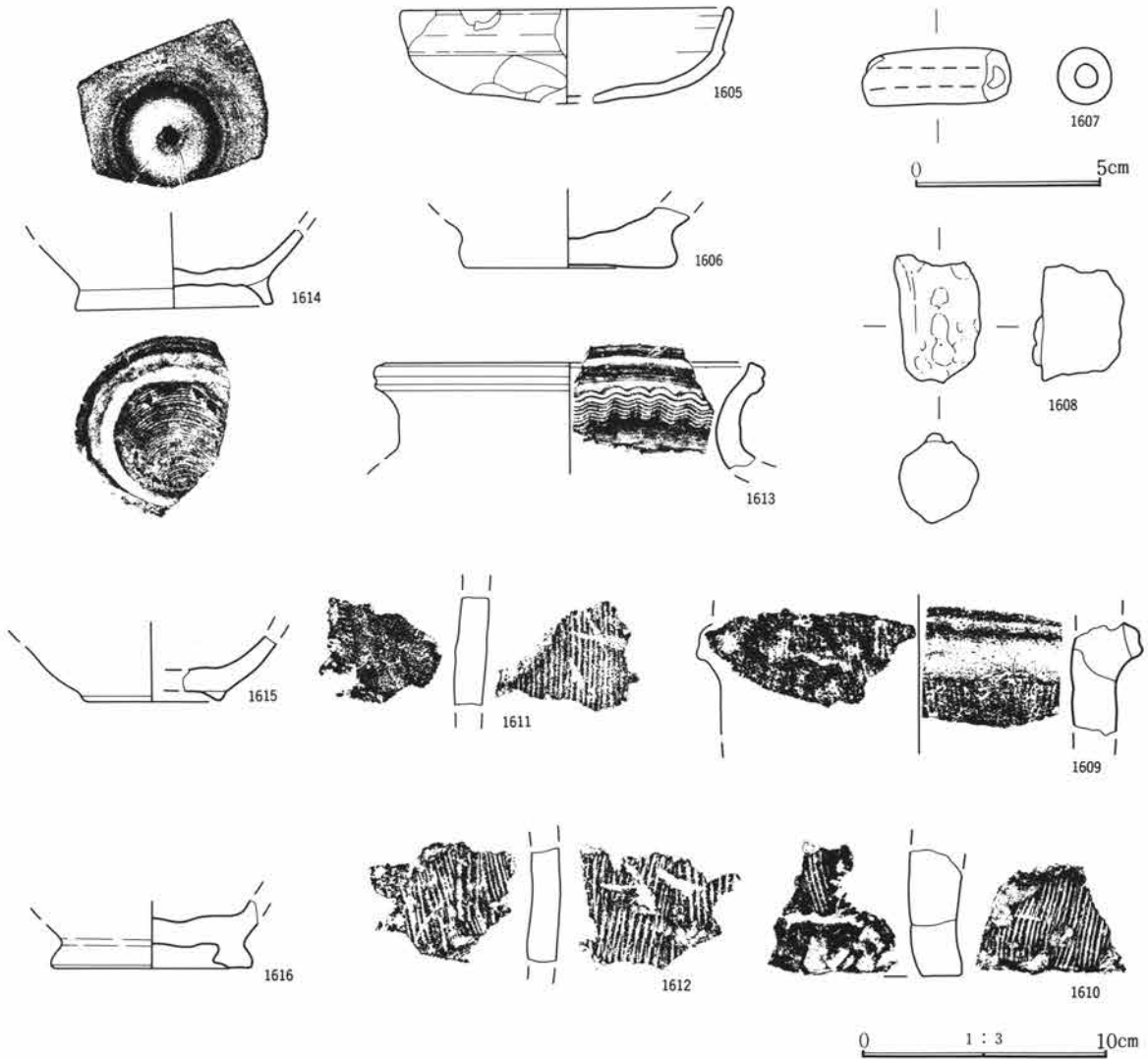
大御堂第2号溝跡 E-E'注記

- I 表土層
- 1 褐色土層 粒子やや粗い。1aはやや明るい茶褐色土を呈し、1bは褐色、1cはやや砂質となる。
- 2 暗褐色土層 2aはやや砂質で、黄色軽石粒・小礫を多量に混入、2bは砂質、2cは小礫を多量に混入する。
- 3 暗灰色粘質土
- 4 暗褐色土層 4aは赤褐色粒子が混じり、4bは締まりの弱い砂質、4cは黄褐色土との混土層、4dには小礫が多量に混入。
- 5 黒褐色土層 粘性少々あり。

第33図 大御堂第1号溝状遺構平面図



第34図 大御堂第1号溝状遺構出土遺物実測図—土師器・須恵器—



第35図 大御堂調査区出土遺物実測図(9)—土師器・須恵器—

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物

第7表 大御堂調査区出土遺物観察表 —古墳～平安時代—

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)		①胎土	②焼成	③色調	調整 特徴	備考
1601 34 67	土師器 坏 ¾口～底	Bp15g 大第1号溝	①122 ② 34 ③丸底		①細粒砂、砂粒の混入が目立つ ②普通 ③橙色			口・内：ナデ 底：横へら削り	
1602 34 67	土師器 坏 ½口～底	Bv18g 大第1号溝	①133 ② 30 ③丸底		①細粒砂、白色粒子・黒色鉱物粒子混入 ②普通 ③橙色			外・口：ナデ 底：横へら削り 内：ナデ	
1603 33 67	土師器 坏 ¾口～底	Bv21g 大第1号溝	①120 ② 33 ③丸底		①細粒砂、黒色鉱物粒子 ②普通 ③橙色			外・口：ナデ 底：横へら削り 内：ナデ	
1604 34 66	須恵器 甕 胴部片	Bo13g02 大第1号溝			①精選、白色小粒子 ②良好 ③表面：青灰色（断面で赤褐色部分あり）			外：平行叩き 後のナデ 内：青海波	
1605 35 67	土師器 坏 ¾口～底	Ballg15	①140 ② 30 ③丸底		①細粒砂、砂礫を混入 ②良好 にぶい段を有する。 ③鈍い橙色			外・口：ナデ 底：横へら削り 内：ナデ	
1606 35 —	土師器 甕 底部				①やや粗い（風化が著しく、非常にもろい） — ③鈍い褐色				
1607 35 93	土製品 土錘 完形	Au18g42	長 40 重9.0 幅 15 孔径5		①細粒砂 ②ややあまい焼成 ③黒褐色				
1608 35 —	埴輪 形象	近代溝(AD6)			①細粒砂 ②良好 ③明赤褐色			人物埴輪の手か？	
1609 35 —	埴輪 円筒（朝 顔？）				①砂粒、粒の大きい結晶片岩 ②良好 ③明赤褐色			外面：縦ハケ 内面：指調整	
1610 35 —	埴輪 円筒 底部	Aw05g			①砂粒、結晶片岩 ②良好 ③明赤褐色			外面：縦ハケ 内面：指調整	
1611 35 —	埴輪 円筒 胴部	Bi13g01			①砂粒 ②良好 ③明赤褐色			外面：縦ハケ 内面：縦の指調整	
1612 35 —	埴輪 円筒 胴部	Au19g			①砂粒 ②良好 ③明赤褐色			外面：縦ハケ 内面：縦ハケ	
1613 35 —	須恵器 壺 口縁部	Ad12g15			①精選良 ②良好 ③暗褐色			外・口：横ナデ 頸：波状文 内：横ナデ	
1614 35 —	須恵器 坏 底部	Be22g32	② 80 ③ 30		①精選良 ②普通 ③にぶい褐色			内外：横ナデ 底部：糸切り未調整	
1615 35 —	須恵器 坏 底部	Bb21g51			①砂粒を混じる ②普通 ③灰白色			内外：横ナデ	
1616 35 —	須恵器 瓶類 高台部	Bd13g			①長石粒を混じる ②きわめて良好（自然釉） ③灰白色			内外：横ナデ	

第2節 中世の遺構 —寺院址—

1 大御堂調査区検出の中近世遺構

大御堂調査区は鮎川崖より西へ約200mの幅で広がる沖積低地部分にあり、鮎川川床面からは6m～8m、前原調査区とは3m～5mの比高差が見られる。調査区中程の農道を境に東と西で若干の標高差が認められ、調査区もここでほぼ二分される。農道東はA・B区にあたり、農道西はB区の一部とC区がこれに当たる。鮎川崖際の地表面の標高は105.5mで、農道際が106.1m～106.5mでこの範囲でもっとも標高の高い部分は106.8mである。農道西は一段高くなって、107.5m～109.0mと比較的平坦な地形である。西接する前原調査区とは段差で隔てられている。

大御堂調査区は、小字名である「大御堂」の他に「アミダイケ」という名称の池が大正時代頃まであったところで、元禄年間作成の絵図及び明治9年の地籍図での記載が確認され、現状の地割りにもその名残が認められている。藤岡市教育委員会による緑地遺跡群の発掘調査によっても池・溝等の遺構の一部がトレンチ調査で検出されており、小字名にちなむ寺院址の存在がかなり確実視されていた。

大御堂調査区の遺構は疎密の差はあるもののほぼ全面から検出されている。農道東のA・B区部分は調査面積が約8000㎡あり、ここでは溝状遺構・園池遺構・濠跡・土塁跡、及び掘立柱建物跡・井戸跡・土坑などの一群と、配石墓・火葬跡・火葬墓・墓壇等の一群、及び畠作遺構・道路跡・土坑等の遺構が検出されている。遺構の年代は中世から近世にかけてのもので、一部は近代にまで及ぶと見られる。また、農道西のB・C区部分は調査面積が約9000㎡であり、ここでは溝状遺構・掘立柱建物跡・井戸跡等が検出されている。

遺構検出は表土層下から入念に実施したので、溝状遺構等の中には最近まで実際に利用されていたと見られるものもあり、また、つい最近の土砂採取等によると思われる攪乱土坑もあって、これらは報告遺構の対象から除外し、遺構名称についても整理を進める過程で遺構の性格の再検討を行い、調査名称とは別に報告名を冠した。その対象となった遺構は、層層的に浅間A軽石の純層下に位置すると思われるもので、既に埋没していて現況では確認できないものである。なお、遺物の注記・図面等の調査段階での資料整理はすべて調査名称に基づいて実施しており、事後の便宜を図るため（ ）内に調査名称を付記した。

大御堂調査区での検出遺構は、検出位置から農道の東と西で区分される。また、農道東のA・B区検出遺構は中世の寺院址に関連する一群と埋葬関連の遺構群、その他の遺構とに分けられる。本節では、主に寺院址に関係すると思われる遺構について報告することとし、それ以外の遺構については、埋葬関連の遺構と遺物を第3節で、農道西の主にC区検出の遺構及びA・B区で検出した近世後半の遺構を第5節で報告する。また、寺院址に関するものについては近世に属すると思われる遺構についても本節で取り扱うこととした。なお、寺院址から出土した遺物については第4節でまとめて報告する。

大御堂調査区で検出された中近世の遺構の概要は以下である。

- (1) 中世寺院址に係る遺構……濠跡、土塁跡、溝状遺構（暗渠等を含む）17条、園池遺構2、掘立柱建物跡11棟、井戸跡1基、土坑等。
- (2) 埋葬関連遺構……配石墓1基、火葬跡11基、火葬墓6基、土坑墓8基、土壇5基。
- (3) C区検出の遺構……溝状遺構5条、掘立柱建物跡8棟、井戸跡1基
- (4) 上記以外の遺構……第2号濠跡、第1号池状遺構、土坑、畠作遺構

本報告から除外したものは、近代以降の攪乱土坑、調査前の現況地籍図において確認された溝・道路等で

ある。

2 中世寺院址の概要

寺院址遺構は鮎川崖から農道までの約100mの区間のA・B区で検出されている。鮎川崖から洪積台地（河岸段丘）端部までは直線距離で約200mで、この間はほぼ平坦な地形となっており、現在は一面に水田が広がる。金井付近で流れを北に変えた鮎川は、緑埜集落付近で大きく東向きを変え、本遺跡付近ではやや西に蛇行しながら北流している。元禄年間作成の絵図によれば遺跡付近ではほぼ南北直線に近い流路と見られることから、近世前半以前には鮎川の流路が現在より東を流れていた可能性があり、本調査区は鮎川による侵食を受けているものと思われ、緑埜橋付近での川幅は100m足らずであるがこのあたりでの鮎川河川敷の幅は500m～600mと広がり、約3km北流して鑓川に合流する。

大御堂調査区の沖積低地面は竹沼貯水地からのびる谷津の末端に位置し、沖積土壌である粘質土層が堆積し基盤層は礫層となる。遺構はこの粘質土層中に包蔵されている。大御堂調査区のほぼ中央を南北方向に横切る農道の下からは濠跡（第2号濠跡）が検出され、寺院址に関係する遺構はこの第2号濠跡の東側に集中する。第2号濠跡は竹沼貯水地に端を発し、板倉集落と緑埜集落の間を通り、白石下郷集落の南東部で鮎川に注ぐ沢筋にあたり、地形的要因による自然流路と考えられる。鮎川中流域左岸の緑埜集落より白石集落までの沖積低地面はこの沢筋を境に二つの自然堤防状の微高地に分けられる。寺院址が位置するのはこの沢筋の東側の鮎川左岸崖上の沖積微高地の北端近くと見られる。

寺院址及び埋葬関連遺構群の遺構検出は、トレンチによる試掘、重機による表土（耕作土）掘削という手順で行った。調査前の地割りにも寺院址に関すると思われる遺構の名残は認められていたが、寺院址については削平等の地形改変もかなり受けていることが予想され、遺構面までの深さも40cm～60cmと比較的浅かったため、遺構の残存状況が良くないことが予想された。遺構は表土層掘削後にほぼ同一地層面（暗褐色粘質土層）で確認でき、遺構埋土及び遺構相互の層位的関係から、B軽石降下以降A軽石降下以前の中世から近世前半にわたる数時期に細分される。寺院址と考えられる遺構は濠・土塁・溝状遺構（暗渠）・池等の一群であり、配石墓・火葬跡・火葬墓・土坑墓・土壇等が埋葬関連の遺構群である。これを層位的に見ると埋葬関連の諸遺構が寺院址関連の遺構群に後出し、その時期は、寺院址関連の遺構群は中世前半、埋葬関連の遺構は中世後半～近世と考えられる。ただし、園池遺構についてはA軽石降下後まで遺構が残っており、近世後半以降も存続していたものと思われる。

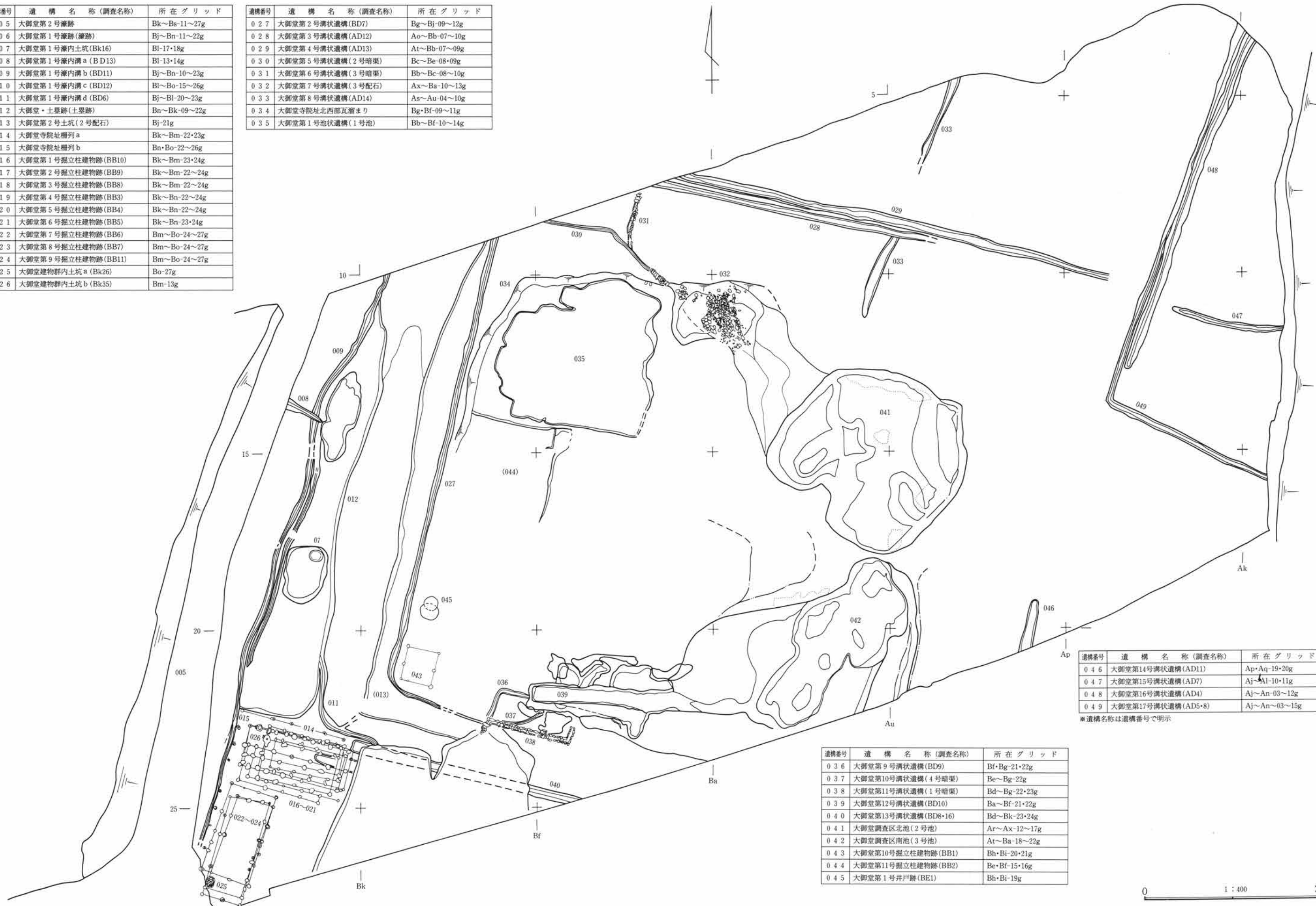
字名に残る「大御堂」の名称は、大御堂（＝阿弥陀堂）が建てられていた寺院を示唆するものであるが、調査では寺院建築物と考えられる遺構は検出できなかった。しかし、濠・溝・土塁・池等の遺構は多少の時間的幅は有るものの寺院を構成する一体的な施設（＝寺域を構成する施設）を示すと考えられ、また、埋葬関連の遺構は、寺院に何らかの規制または影響を受けて営まれていると考えられる分布を示している。

これらの遺構群は大御堂調査区のほぼ中央を南北に横切る農道の東に集中するが、この農道下からも濠跡（大御堂第2号濠跡）が検出されている。この濠跡は現農道下であったのと自然流路と考えられたため全掘は行わなかった。第2号濠跡は確認面標高107.00m、深さ約1mで現農道とほぼ一致する走行を示し、その方位はN-20°-Eである。大御堂第1号溝状遺構(BD17)はこの濠の西で走行もほぼ一致し、Bs13グリッド付近で東に走行を変え第2号濠に注ぎ込む。農道から鮎川崖までは直線距離で約110mである。鮎川崖際での遺構確認面の標高は105.50mであり、この間はほぼ平坦な地形となっている。

第2号濠の東側に寺院の西域を区画する濠・土塁跡があり、これより東側に寺院址の遺構の広がりが見認め

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
005	大御堂第2号濠跡	Bk~Bs-11~27g
006	大御堂第1号濠跡(濠跡)	Bj~Bn-11~22g
007	大御堂第1号濠内土坑(Bk16)	Bl-17~18g
008	大御堂第1号濠内溝a(BD13)	Bl-13~14g
009	大御堂第1号濠内溝b(BD11)	Bj~Bn-10~23g
010	大御堂第1号濠内溝c(BD12)	Bl~Bo-15~26g
011	大御堂第1号濠内溝d(BD6)	Bj~Bl-20~23g
012	大御堂・土塁跡(土塁跡)	Bn~Bk-09~22g
013	大御堂第2号土坑(2号配石)	Bj-21g
014	大御堂寺院址柵列a	Bk~Bm-22~23g
015	大御堂寺院址柵列b	Bn~Bo-22~26g
016	大御堂第1号掘立柱建物跡(BB10)	Bk~Bm-23~24g
017	大御堂第2号掘立柱建物跡(BB9)	Bk~Bm-22~24g
018	大御堂第3号掘立柱建物跡(BB8)	Bk~Bm-22~24g
019	大御堂第4号掘立柱建物跡(BB3)	Bk~Bn-22~24g
020	大御堂第5号掘立柱建物跡(BB4)	Bk~Bn-22~24g
021	大御堂第6号掘立柱建物跡(BB5)	Bk~Bn-23~24g
022	大御堂第7号掘立柱建物跡(BB6)	Bm~Bo-24~27g
023	大御堂第8号掘立柱建物跡(BB7)	Bm~Bo-24~27g
024	大御堂第9号掘立柱建物跡(BB11)	Bm~Bo-24~27g
025	大御堂建物群内土坑a(Bk26)	Bo-27g
026	大御堂建物群内土坑b(Bk35)	Bm-13g

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
027	大御堂第2号溝状遺構(BD7)	Bg~Bj-09~12g
028	大御堂第3号溝状遺構(AD12)	Ao~Bb-07~10g
029	大御堂第4号溝状遺構(AD13)	At~Bb-07~09g
030	大御堂第5号溝状遺構(2号暗渠)	Bc~Be-08~09g
031	大御堂第6号溝状遺構(3号暗渠)	Bb~Bc-08~10g
032	大御堂第7号溝状遺構(3号配石)	Ax~Ba-10~13g
033	大御堂第8号溝状遺構(AD14)	As~Au-04~10g
034	大御堂寺院址北西部瓦溜まり	Bg~Bf-09~11g
035	大御堂第1号池状遺構(1号池)	Bb~Bf-10~14g



遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
046	大御堂第14号溝状遺構(AD11)	Ap~Aq-19~20g
047	大御堂第15号溝状遺構(AD7)	Aj~Al-10~11g
048	大御堂第16号溝状遺構(AD4)	Aj~An-03~12g
049	大御堂第17号溝状遺構(AD5・8)	Aj~An~03~15g

※遺構名称は遺構番号で明示

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
036	大御堂第9号溝状遺構(BD9)	Bf~Bg-21~22g
037	大御堂第10号溝状遺構(4号暗渠)	Be~Bg-22g
038	大御堂第11号溝状遺構(1号暗渠)	Bd~Bg-22~23g
039	大御堂第12号溝状遺構(BD10)	Ba~Bf-21~22g
040	大御堂第13号溝状遺構(BD8・16)	Bd~Bk-23~24g
041	大御堂調査区北池(2号池)	Ar~Ax-12~17g
042	大御堂調査区南池(3号池)	At~Ba-18~22g
043	大御堂第10号掘立柱建物跡(BB1)	Bh~Bi-20~21g
044	大御堂第11号掘立柱建物跡(BB2)	Be~Bf-15~16g
045	大御堂第1号井戸跡(BE1)	Bh~Bi-19g

第36図 大御堂調査区寺院址遺構分布図

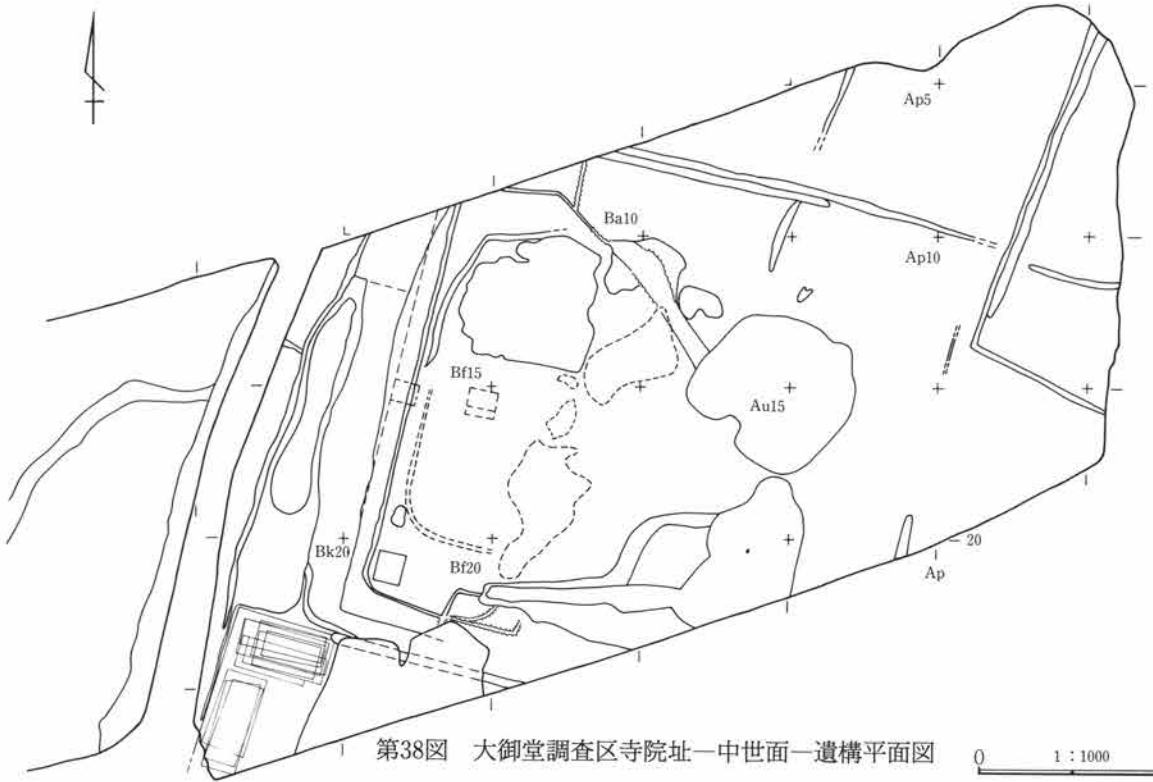
られる。土塁の前面（東側）は比較的新しいと思われる時期の掘立柱建物跡が1棟検出されたほかは、池状の大きな掘り込みが認められただけであった。このオープンスペースの東には南北二つの池があり、それぞれの池に続く遣水施設と考えられる溝状遺構も検出された。西側を濠・土塁に、東側を二つの池に挟まれた範囲が境内域と見られ、南北それぞれに東西方向にほぼ平行する溝状遺構も検出された。また、池への遣水施設と思われる溝状遺構がこの方形区画の中では対称の位置を占めており、検出された遺構の配置が方形に規則性を持つと見られることから、これらの遺構群が寺域を構成するものと考えられる。遺構の主軸方位を見ると「 $N-13^{\circ}-E$ ($N-77^{\circ}-W$) $\pm 3^{\circ}$ 」でほぼ一致する。

池の東側の鮎川屋まで約35mの間では数条の溝状遺構が検出されている。ここには寺院の東域を区画する遺構があると考えられるが、これらの溝状遺構の主軸方位は寺院址の縄張りのものとはやや異なる方位を示すことから、寺院址以外に同時期の他の施設に伴う遺構であったことも考えられる。

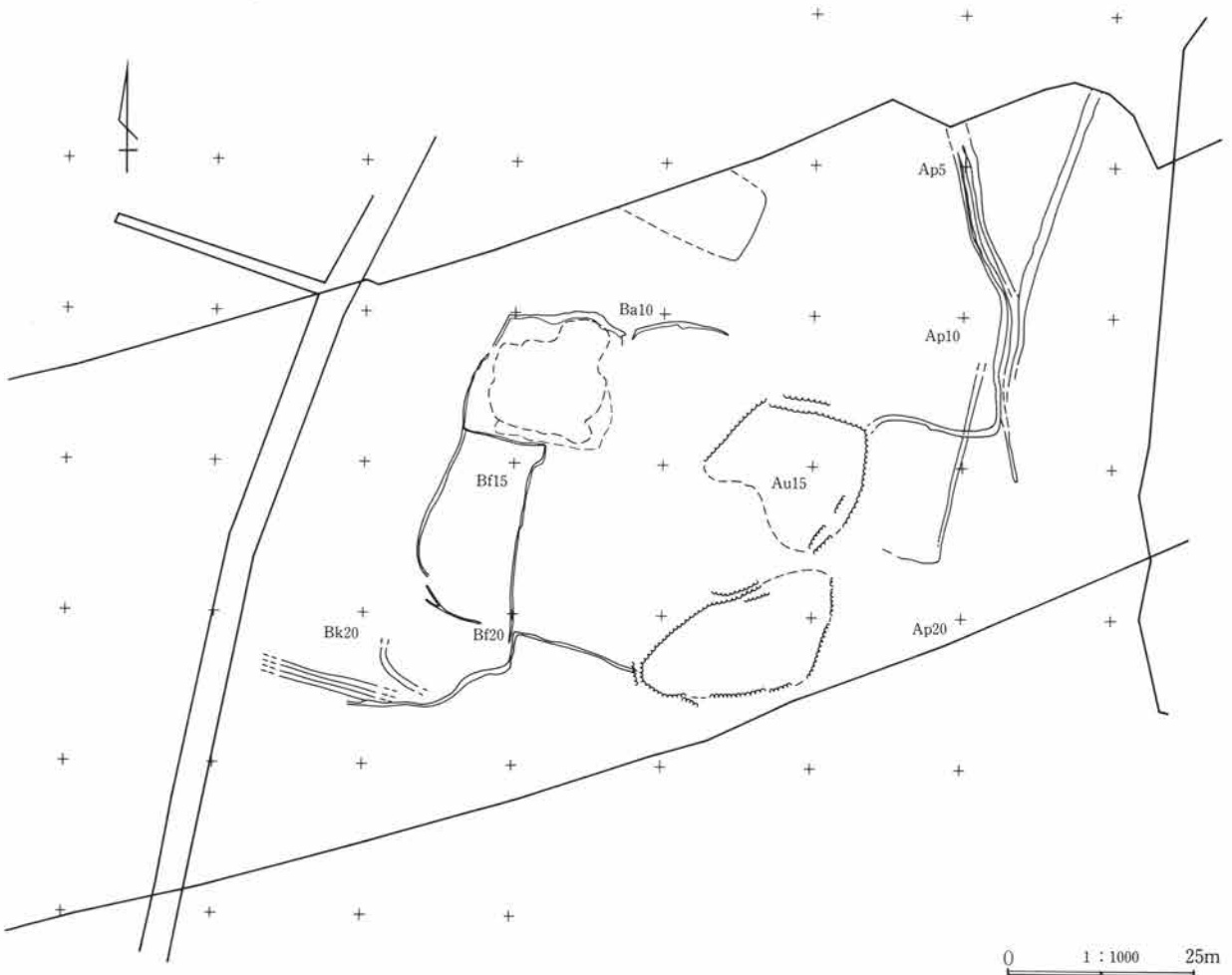
以上が大御堂調査区A・B区で検出された中世の遺構のあらましであるが、本調査区に関しては、緑埜地区土地改良事業に伴う“緑埜地区遺跡群”の発掘調査が、藤岡市教育委員会により昭和57年度より継続的に実施されており、その成果は『F₂緑埜地区遺跡群I』として報告され、本遺跡の南側に広がる段丘面での遺跡の分布と性格の概要はかなり明らかとなってきた。さらに、この事業の一環として、高速道路側道に沿う水路部分についての調査も昭和61年度に実施され、池・溝の一部が確認されている。また、調査区を南北に横断する道路部分の調査では、寺域の南限にあたる溝状遺構が確認されている。



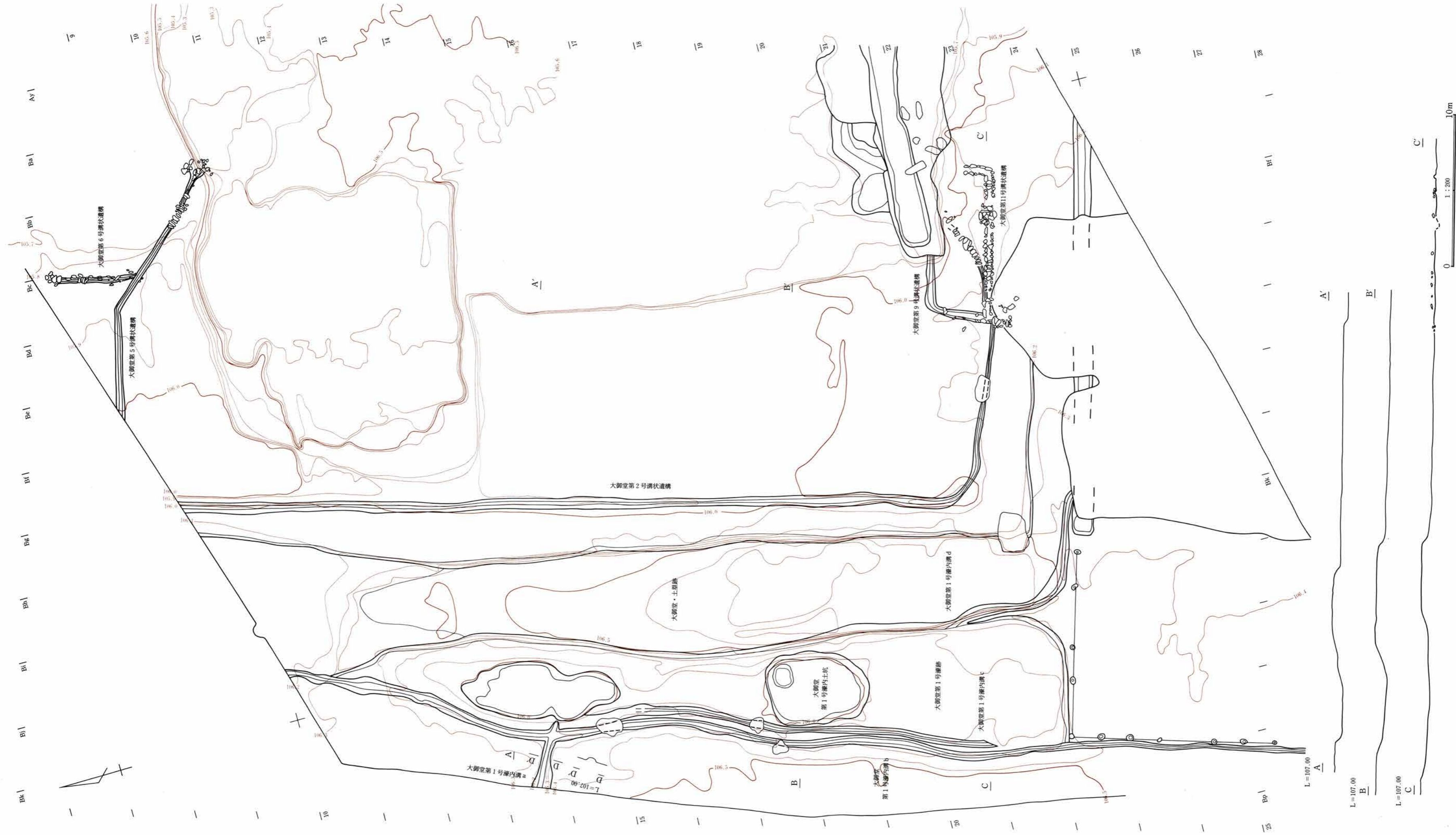
第37図 大御堂調査区寺院址調査前現況図



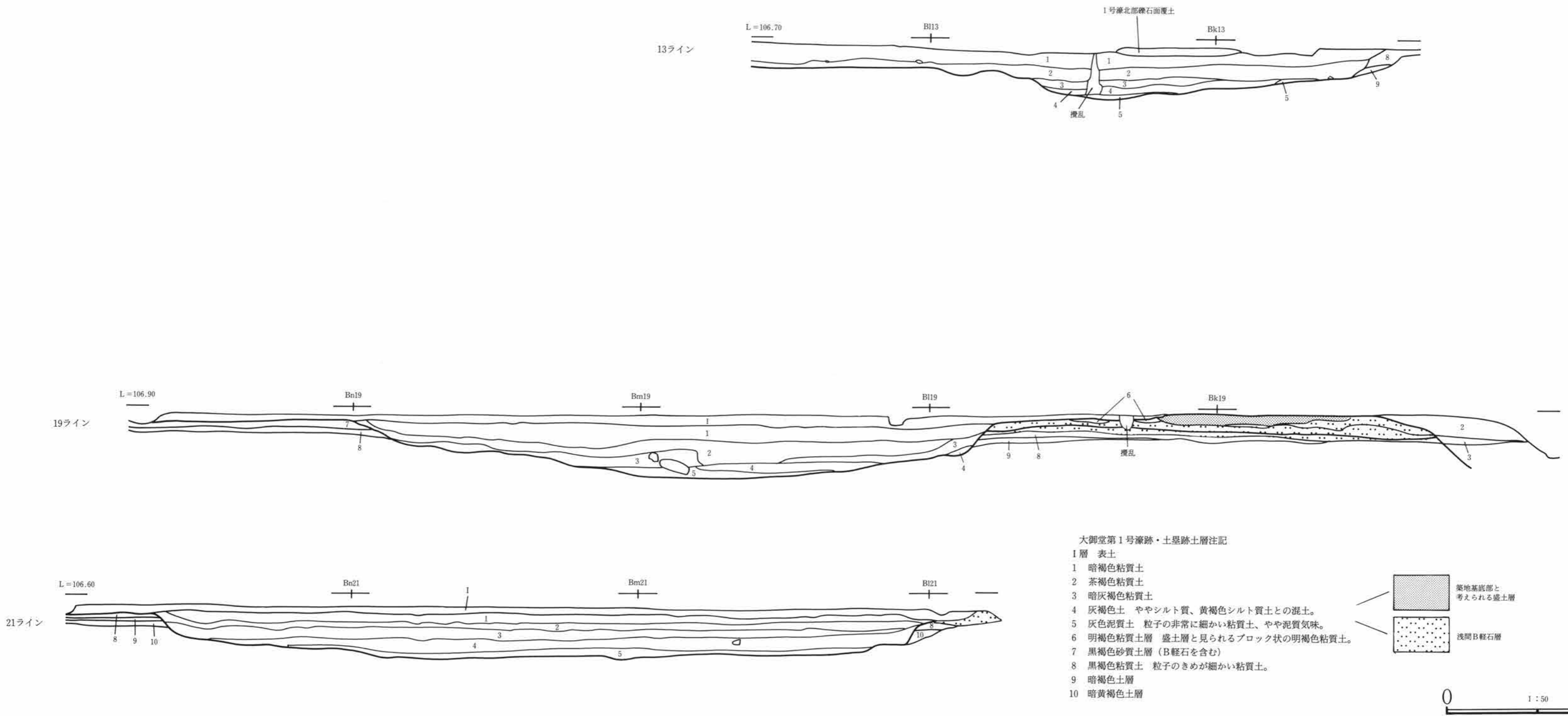
第38図 大御堂調査区寺院址—中世面—遺構平面図



第39図 大御堂調査区寺院址—中近世面—遺構平面図



第40图 大御堂寺院址西部遺構平面图・断面图
 (第1号壕跡・土基跡・第2号溝状遺構)



第41図 大御堂寺院址第1号濠跡・土塁跡土層断面図

3 寺域西部検出の遺構

(1) 検出遺構の概況（第40図・第41図）

確認された遺構は第1号濠跡、土塁跡、大御堂第2号溝状遺構（BD7）及び第1号濠跡底面で検出された濠内土坑1基（BK16）と濠内溝状遺構a・b・c・d（BD10・11・12・13）である。第1号濠跡・土塁跡・第2号溝状遺構はその走行がほぼ南北に一致しており、「濠一土塁（又は築地）一犬走り一雨落ち溝」として寺院西部を区画する一体的な性格を示す遺構と言える。第1号濠の南限は土塁の南端とも一致しており、土塁はそこで約90度折れて東方にのびている。また、土塁の内側を走る大御堂第2号溝状遺構（BD7）も土塁に平行して東方に折れている。第1号濠跡及び土塁跡の北端については後世の削平によるためか明瞭ではない。しかし、土塁跡については調査区北壁での土層観察によって、調査区外にまで延びることが判明している。第1号濠及び土塁南端に接して（寺院址南西部）掘立柱建物跡群が検出されている。なお、濠埋土及び覆土中と土塁上近辺では多数の火葬跡・火葬墓・土坑墓・土壙が検出されている。

(2) 検出遺構の層序

第1号濠跡・土塁跡の検出された面は寺院址遺構が検出された区域のなかでは最も標高の高い部分であった。土塁跡東側の段差はトレンチ調査による遺構確認の段階で確認された。浅間B軽石の純堆積層と見られる黒褐色砂質土層が検出され、その上層には黄褐色粘質土と暗褐色粘質土の薄い混土層が見られた。浅間B軽石堆積後の盛土層の基底部分の残存と判断され、この部分に盛土を伴う施設の存在が予想され土塁跡と考えた。この層は寺院西部の東西方向のセクションベルトで確認された。盛土粘質土の確認幅は3m～5m、浅間B軽石層の確認幅は6m程度であった。この土塁跡の西側には上端幅8m程度の暗褐色粘質土が南北に帯状に検出され、土塁跡に平行する濠跡と考えられた。この面の調査は、表土層（耕作土）を重機により掘削した後、盛土及び浅間B軽石の分布を確認し、濠跡を掘り下げることとした。

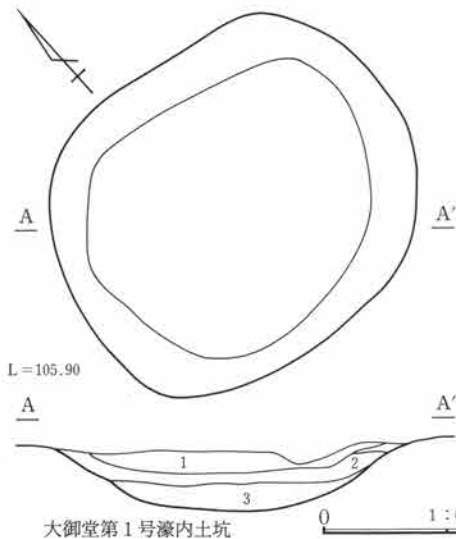
(3) 第1号濠跡及び濠内遺構について

《遺構検出時の状況》

第1号濠跡の最大上端幅は濠南端～21ラインで約10m、19ライン付近で約9m、13ライン付近で6mと北にむかってやや狭まる傾向にある。法面から底面にかけて浅い舟底状を呈し、確認面からの深さは60cm～70cmであった。東側上端は浅間B軽石面で標高は106.80mである。西側上端は暗褐色粘質土で浅間B軽石降下以前の堆積層であり、濠確認面標高は106.70m前後で、東側上端に比べやや低くなっている。遺構埋土は5層確認され、ひとつの層厚は10cm～20cm程度で比較的均一しており、若干レンズ状を呈するもののほとんど水平に堆積していることから自然堆積と考えられる。埋土の粒子も上層ではやや粗く、下へ行くにしたがって細くなる傾向にありシルト質から粘質へと変わる。濠底面は部分的に小礫まじりの地山と見られる明褐色粘質土面となっている。濠埋土中には火葬跡・火葬墓が築かれ、板碑・宝篋印塔・五輪塔などの石造物類が廃棄された状態で出土した。出土遺物は土師質土器・軟質陶器・陶磁器類などであるがいずれも中世に属するものである。

《遺構形状》

大御堂第1号濠跡は、南北に近い走行で土塁跡に沿っており、長軸の中心部分での方位はN-14°-Eである。断面形状は浅い舟底状を呈す。濠の南端は確認できたが北端は明瞭ではない。その規模は、南端付近では幅10m、深さ約50cm、そこから北へ25mのところでは幅約6m、深さ40cm、このあたりから徐々に狭まりプランは明瞭ではなくなる。南端から約48mまでは確認できたが、ここで濠が収束するのか更に北に続くの



- 大御堂第1号濠内土坑
- 1 赤褐色土混灰色土層 小礫をやや多く含む。
 - 2 暗灰色粘質土層 赤褐色土粒子(φ3mmの大)をやや多く含む、粘性強く、締りがよい。
 - 3 炭化物層 炭化材の小辺を含む灰層、遺物はこの層の上面から出土。円礫を含む。

第42図 大御堂第1号濠内土坑遺構平面図

かは明らかにはできなかつた。確認面の標高は南端で106.40m、北端で106.30m、西側濠上端で106.70m～106.30m、東側の土跡では106.80m～106.30mである。濠の底面標高は106.00m～106.10mであるが、やや深くなる部分が、南端から13m～20m付近と30～40m付近に認められ、それぞれ106.00mを上端とする土坑状を呈し、最深部標高はそれぞれ105.63m(上端からの比高90cm)、105.76m(上端からの比高50cm)となる。13m～20m付近の深みでは土坑(BK16)が検出されている。濠の平面プランは13ライン付近から北は浅くなり明瞭ではなくなるが、この付近に径2cm～3cmの礫敷面がかなり広範に検出された。

《濠内土坑》

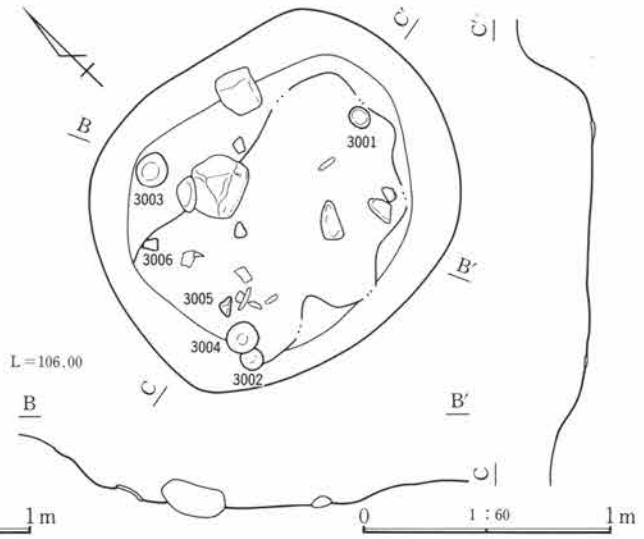
第1号濠内のB117グリッド付近には、南北7m、東西4mの楕円形を呈す10cm～20cmの深みがあり、この深みの北東隅に径150cm×120cm、深さ20cmの楕円形で浅い皿状を呈す土坑が検出された。土坑埋土下層は炭化物層で、この上面から土師質土器が出土している。土師質土器は手捏成形の皿形で6個体分確認され、4個体は完形、2個体は口縁部片であった。完形で出土したものは炭化物層の上に置いた(伏せた)ような状態であり、平面的な配置と遺物の出土状況及び埋土中の炭化物層の在り方からは濠内の祭祀跡と考えられる。

《濠内溝状遺構》

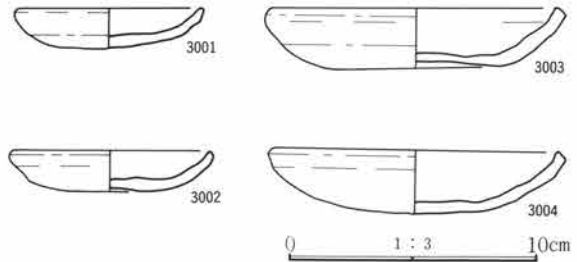
大御堂第1号濠跡に付随する溝状遺構が4条検出されている。

濠内溝aはB113・14グリッドにあり、確認長4m、上端幅50cm、深さ20cmで箱形の断面形状を示し、走行方位はN-58°-Wである。この溝は第1号濠跡に平行する自然流路である第2号濠跡からの取水溝としての性格を持つと考えられる。

濠内溝b・cは第1号濠跡西側法面で平行して検出された2条の溝状遺構である。濠内溝bは106.30mの等高線に沿って、濠内溝cは106.20m～106.10mの等高線に沿っており、北に緩やかに傾斜している。上端幅



第43図 大御堂第1号濠内土坑遺物出土状況平面図



第44図 大御堂第1号濠内土坑出土遺物実測図

—土師質土器—

はいずれも50cm程で、深さは10cm程度の浅いものである。濠内溝bは濠の西側上端に沿いこれと平行する走行を示し、寺院址南西部の掘立柱建物跡群の西側に沿って南にのび、溝の北端は濠を収斂して調査区外にのびる。確認長は約68mである。濠内溝cは濠内溝bの東側に平行して走るが濠内のみの検出で、確認長36mである。走行方位を見ると、濠内溝bは南西部掘立柱建物跡群の西の柵列に平行する部分でN-16°-Eを示し、濠部分ではN-19°-E、北端近くではN-23°-Eとなる。濠内溝cはN-19°-Eを示す。

濠内溝b・cは濠内溝aと重複するが、切り合い関係からは濠内溝b・cが濠内溝aより古く、濠内溝b・cは濠掘削時と同時期に造られたものと考えられる。濠内溝aは掘り方がやや深く、取水溝としての性格をみとめるものの濠掘削当初からあったとは考えられず、濠及び濠内溝b・cにやや後出することが考えられる。

濠内溝dは濠跡南東隅のBk・Bl-21・22グリッドで検出された。この濠内溝dは土塁跡の南西隅を迂回する走行を示している。確認した上端幅は約50cmである。濠に伴う水路と考えるよりも、土塁を区画する溝としての性格が強いように思われるが、Bj23グリッドで攪乱土坑により切られ走行が確認できなかった。溝底面もコーナー部が高いため傾きが北・東の両方向に認められる。走行方位はN-1°-E、N-75°-Wを示す。

《遺物出土状況》（第59図）

濠内出土遺物は、土師質土器・軟質陶器・中世陶器・輸入磁器・石造物類・鉄製品・銭貨等が見られる。また、濠上面では埋葬関連遺構が多数検出されており、銭貨等の副葬遺物が見られた。

石造物類は埋葬遺構に関連すると考えられるが、濠の比較的下層で板碑・宝篋印塔が数個の円礫と共にまともに出て出土した。遺物に伴う土坑等の掘り方は検出できなかったため、これらは濠内へのまともな廃棄と考えられる。廃棄の時期は濠上面で検出された埋葬関連遺構群より古い時期で、濠が埋められ始める時期に比較的近い時期と思われる。

土師質土器は手捏成形の皿形のものが多く見られ、軟質陶器は内耳鍋・摺鉢（片口鉢）の口縁部片などが見られる。陶磁器類は、常滑系陶器大甕類の口縁部・胴部小片と中国製輸入磁器の小片が見られる。このほかに鉄製品、砥石等もあるが遺物量はあまり多くはない。出土範囲は濠の南半に偏る傾向を示し、南西部掘立柱建物跡群内での出土遺物の傾向とも共通する。これらの遺物は多少の時間的幅はあるものの主に中世前半に属する時期と考えられる。（寺院址出土の遺物については第4節で種別毎にまとめて詳述する。）

(4) 土塁跡（第40図、第41図）

土塁跡は第1号濠の東側に接して確認された。ここは調査前には一段高くなっており、畑地として利用されていたところである。表土掘削後のトレンチ調査の土層観察で浅間B軽石の自然堆積層が部分的に確認された。確認標高は106.70mで、堆積の厚さは約20cmである。この浅間B軽石の検出された範囲が土塁跡と考えた部分に一致する。寺院址で浅間B軽石が層位的に確認できたのは現況レベルの最も高いこの部分と園池遺構東側部分だけである。

土塁跡の南端は22ライン付近にあり北北東方向に延びる。長軸方位はN-13°-Eに近い数値を示すと思われるが、5°~22°の振れ幅をもちやや西に弓なりとなる。調査前には石垣が積まれており、土塁は東側より侵食を受けていると思われる。確認された土塁跡の上端幅は5m~7mで、平均的幅は6m程度と推定される。土塁南端から北へ45m程の11ライン以北は、やや削平されて土塁としての形状が確認できなくなる。しかし、調査区北壁の土層観察で土塁跡を示す二次堆積粘質土と浅間B軽石層が見られ、土塁跡が調査区外まで続くことが確認できる。土塁跡上面の標高は106.70m~106.50mで、濠底面とは約70cm、濠確認面とは約20cmの比高差が、土塁跡東側とは約50cmの比高差が認められる。土塁跡はBk22グリッド付近で東にほぼ直角に折れる。

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

確認できた長さは約10mで、15cm～5cm程度の比高差しかなく東へ行くに従い明瞭でなくなり、ここでは浅間B軽石は認められない。上端幅は約2mで、方位はN-75°-Wである。

(5) 南西部掘立柱建物跡群

《遺構検出状況》

濠・土塁に南接して建物跡と考えられる多数のピット群が検出された。検出位置は寺院址の南西部にあたるBk～Bo-22～27グリッドで、南北24m、東西14mの狭い範囲に集中している。ピット群は数度の建て替えが行われた複数の掘立柱建物の柱穴跡と見られ、確認数は約350個で、数基の土坑も認められた。確認面は暗褐色粘質土で、確認面の標高はほぼ106.45mである。ピットのほとんどは黒色・黒褐色土を埋土としており、埋土の観察からは、近世以前で浅間B軽石降下以降時期の遺構と考えられる。ピットは極めて狭い範囲に集中しているが、その配置状況からは連続的な建て替えによる建物跡の柱穴と見られ、配列に一定の規則性が認められた。

確認された掘立柱建物跡は9棟であるが、同時に存在する建物は北と南の二つ棟である。北棟は桁間を東西に梁間を南北に、南棟は桁間を南北、梁間を東西にとり、互いに軒を接する形で鍵の手に配置されている。北棟群では6棟の掘立柱建物跡が、南棟群では3棟の掘立柱建物跡が検出された。また、掘立柱建物跡群の西側と北側に、この掘立柱建物跡を取り囲むように柵列が検出されている。

《柵列》

柵列として確認できたピットは北側で5個、西側で7個である。北側柵列はN-74°-Wの主軸方位を示し、西側柵列はN-16°-Eの主軸方位であり、互いに直交する。北列と西列の交点にあたる位置でのピットの検出はできなかったが一連のものとしてとらえるべきであろう。北列は第1号濠跡・土塁跡の南限から約60cmの距離で平行である。また、西列は第1号濠から南へのびる濠内溝bに約30cmの距離をおいて、これと平行に存在する。

北列は8.4mの間に5個のピットがあり、その間隔は以下の様になっている。

柵列交点→(3.6m)←Pit1→2.2m←Pit2→1.9m←Pit3→2.1m←Pit4→2.2m←Pit5

南列は14mの間に7個のピットがあり、その間隔は以下の様になっている。

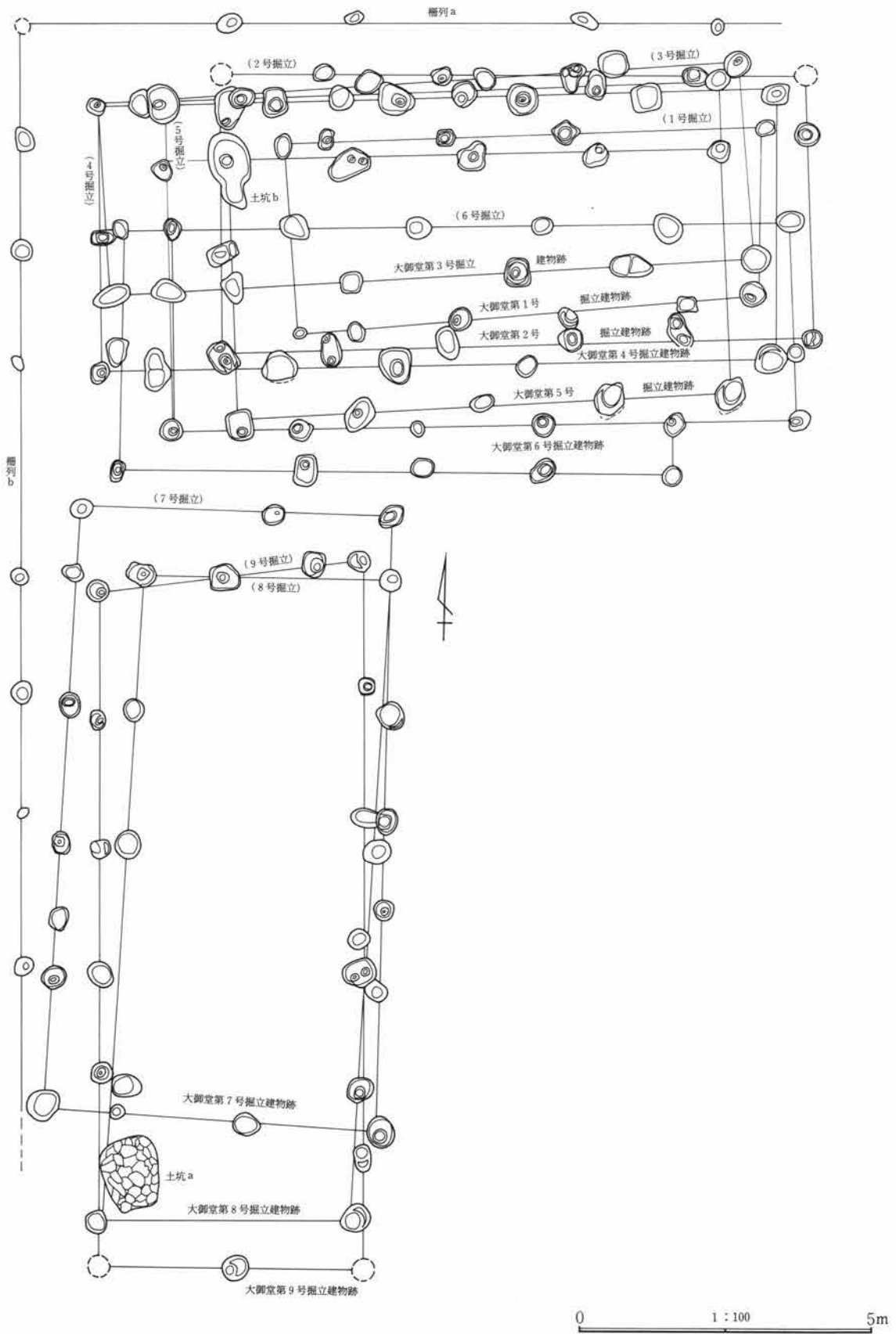
柵列交点→(1.9m)←Pit1→1.9m←Pit2→1.9m←Pit3→3.6m←Pit4→1.9m←Pit5→1.9m←Pit6→2.7m←Pit7

《北棟群》

確認された掘立柱建物跡は6棟（大御堂第1号～第6号掘立柱建物跡）であり、遺構規模については第8表(1)に示した。この6棟は建て替えの結果と見られ、規模も4間×1間ないし5間×2間でほぼ同じであり、また、6棟のうち5棟に廂が付設される。この中で大御堂第2号掘立柱建物跡は棟方位が北側柵列と平行し、柱穴から土師質土器の出土も見られ、北棟群での当初の建物の可能性が他のものより高い可能性がある。

第8表(1) 大御堂調査区掘立柱建物跡一覧表—寺院址南西部・北棟群—

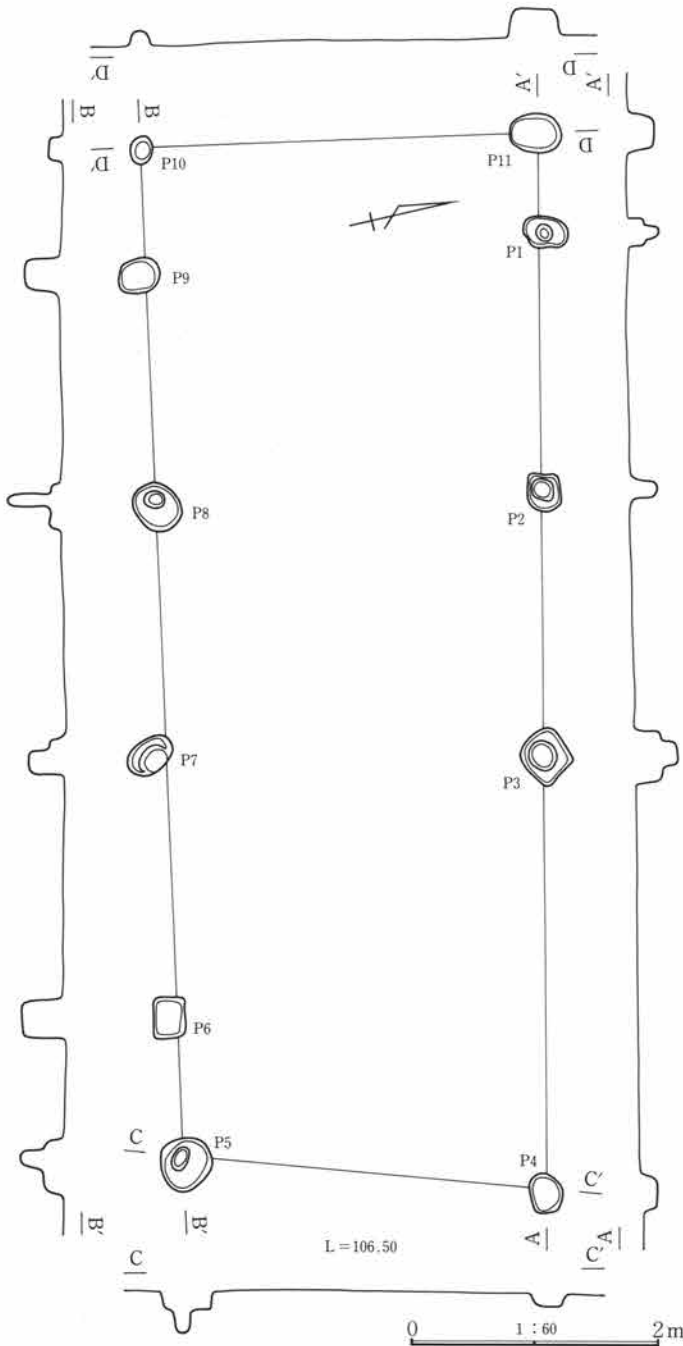
遺構名称	調査名称	棟方位	規模 (間)×(間)	面積(m ²)	桁行(m)		梁行(m)		庇(m)	柱穴平面 形状	備考
					①長辺	②短辺	①長辺	②短辺			
第1号掘立柱建物跡	BB10	N-78°-W	4×1	22.85	①7.60	②7.00	①3.30	②2.96	3.22	円形	
第2号掘立柱建物跡	BB9	N-78°-W	5×2	47.47	①10.28	②10.14	①4.40	②4.40	—	方形	P ₁₄ (陶器)
第3号掘立柱建物跡	BB8	N-75°-W	5×2	38.63	①11.30	②11.16	①3.46	②3.42	—	円形	
第4号掘立柱建物跡	BB3	N-74°-W	5×2	49.94	①10.82	②10.80	①4.68	②4.56	4.64	円形	P ₁ ・P ₄ ・P ₅ (軟質)
第5号掘立柱建物跡	BB4	N-77°-W	4×2	38.40	①8.64	②8.62	①4.60	②4.30	9.95	方形	
第6号掘立柱建物跡	BB5	N-75°-W	5×2	37.66	①10.92	②10.85	①3.46	②3.46	4.10	円形	



第45図 大御堂寺院址南西部掘立柱建物跡群遺構平面図



第46図 大御堂寺院址南西部遺構・遺物検出状況平面図



第47図 大御堂第1号掘立柱建物跡遺構平面図

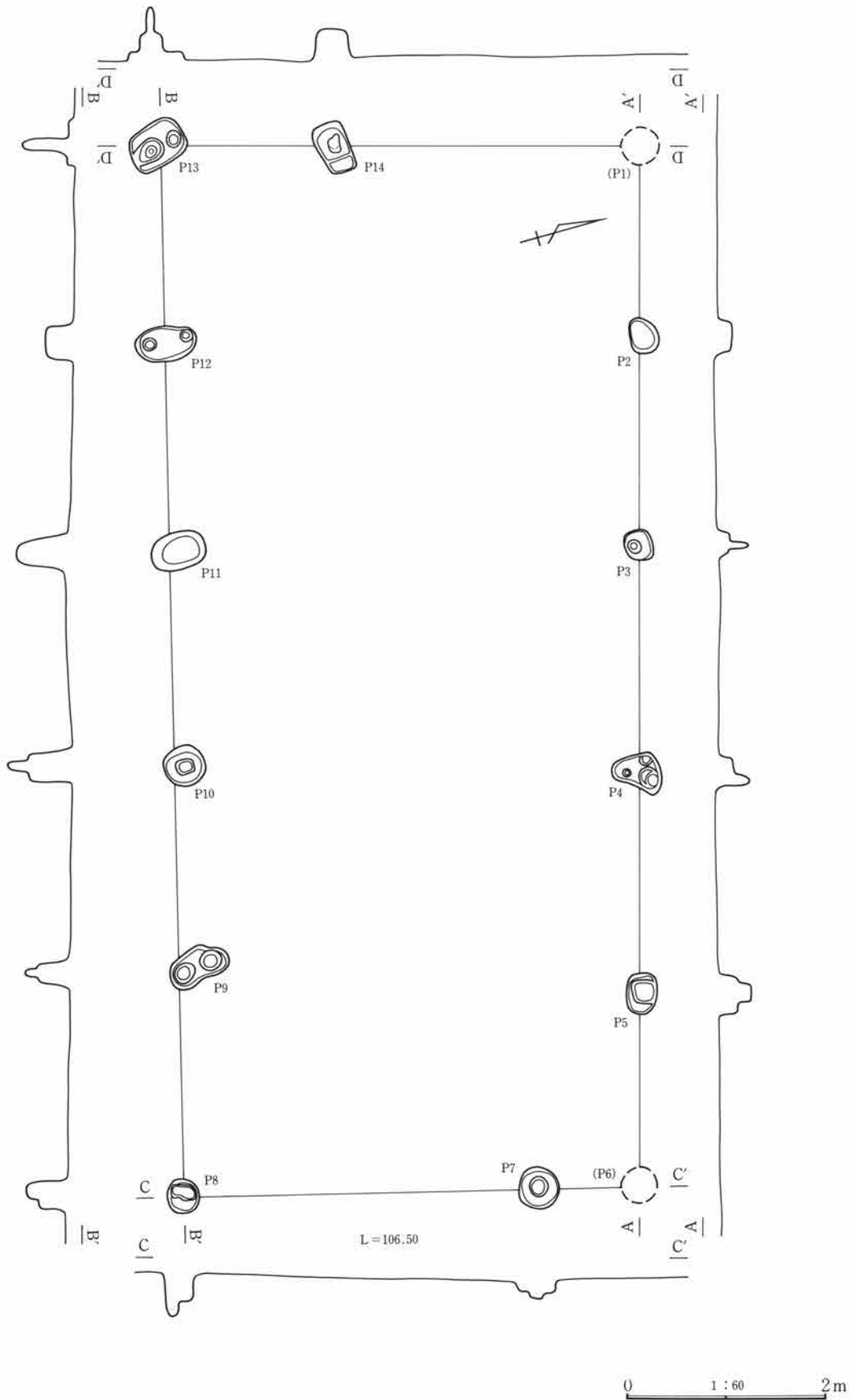
第9表(1)
第1号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径×深さ (cm)	B B10	
		底面標高 (m)	
P 1	17× 12× 14	106.21	
2	27× 26× 20	106.17	
3	36× 36× 34	106.03	
4	—	—	
5	30× 25× 46	105.87	
6	40× 40× 32	106.13	
7	36× 25× 21	106.04	
8	35× 25× 29	106.11	
9	38× 35× 42	105.96	
10	32× 26× 29	106.10	
11	20× 17× 10	106.31	
12	20× 15× 19	106.17	

柱 間 計 測 値 (cm)			
桁 行		梁 行	
P 1～P 2	204	P 1～P10	330
P 2～P 3	208		
P 3～P 5	348	P 2～P 9	316
P10～P 9	180	P 3～P 8	314
P 9～P 8	206		
P 8～P 7	204	P 5～P 6	296
P 7～P 6	110		
		P12～P11	322
P11～P12は庇			
P12～P 1	90		
P11～P10	110		

第8表(2) 大御堂調査区掘立柱建物跡一覧表—寺院址西南部・南棟群—

遺構名称	調査名称	棟方位	規模 (間)×(間)	面積(m ²)	桁 行(m)		梁 行(m)		庇(m)	柱穴平面 形状	備 考
					①長辺	②短辺	①長辺	②短辺			
第7号掘立柱建物跡	BB6	N-20°-E	5×3	58.26	①10.46	②10.22	①5.87	②5.40	—	円形	
第8号掘立柱建物跡	BB7	N-20°-E	5×1	45.79	①10.94	②10.84	①4.33	②4.08	—	円形	P ₁ (土師器)
第9号掘立柱建物跡	BB11	N-16°-E	(6)×2	54.64	①12.13	②11.55	①4.67	②4.56	—	円形	P ₁₃ (土師質)



第48図 大御堂第2号掘立柱建物跡遺構平面図

第2節 中世の遺構寺院址

第2号掘立柱建物跡柱穴計測表

BB 9

柱穴番号	長径×短径×深さ (cm)	底面標高 (m)
P 1	—	—
2	37×28×15	106.22
3	34×27×29	106.08
4	42×32×27	106.09
5	39×29×31	106.02
6	—	—
7	40×38×16	106.12
8	33×32×37	105.96
9	60×30×46	105.93
10	40×40×63	105.78
11	54×36×52	105.86
12	57×33×27	106.15
13	56×42×28	106.14
14	52×33×31	106.11

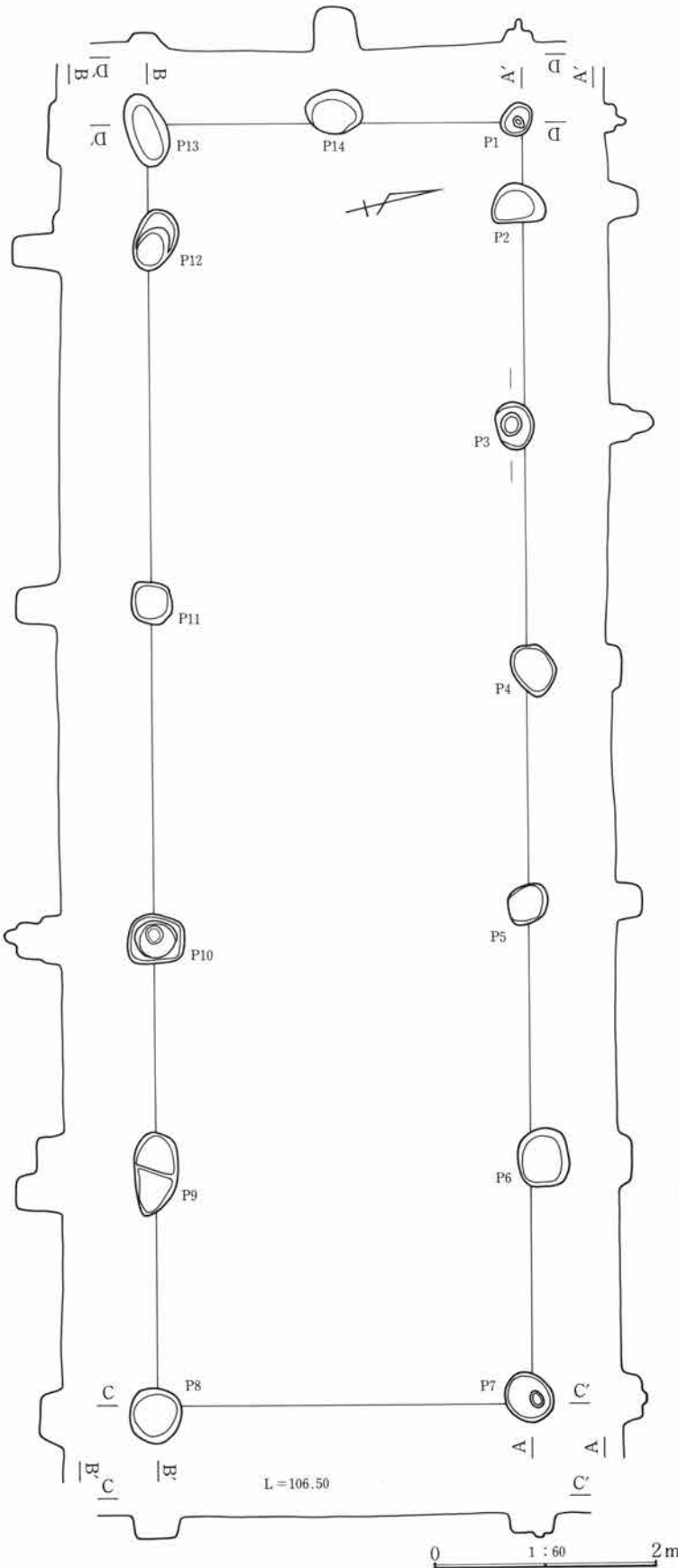
柱間計測値(cm)	
桁行	梁行
P 1～P 2 (170)	P 1～P 14 304
P 2～P 3 208	P 14～P 13 186
P 3～P 4 230	P 2～P 12 470
P 4～P 5 216	P 3～P 11 458
P 5～P 6 (190)	P 4～P 10 456
P 13～P 12 188	P 5～P 9 454
P 12～P 11 208	P 6～P 7 (104)
P 11～P 10 210	P 7～P 8 336
P 10～P 9 196	
P 9～P 8 226	()は推定

第3号掘立柱建物跡柱穴計測表

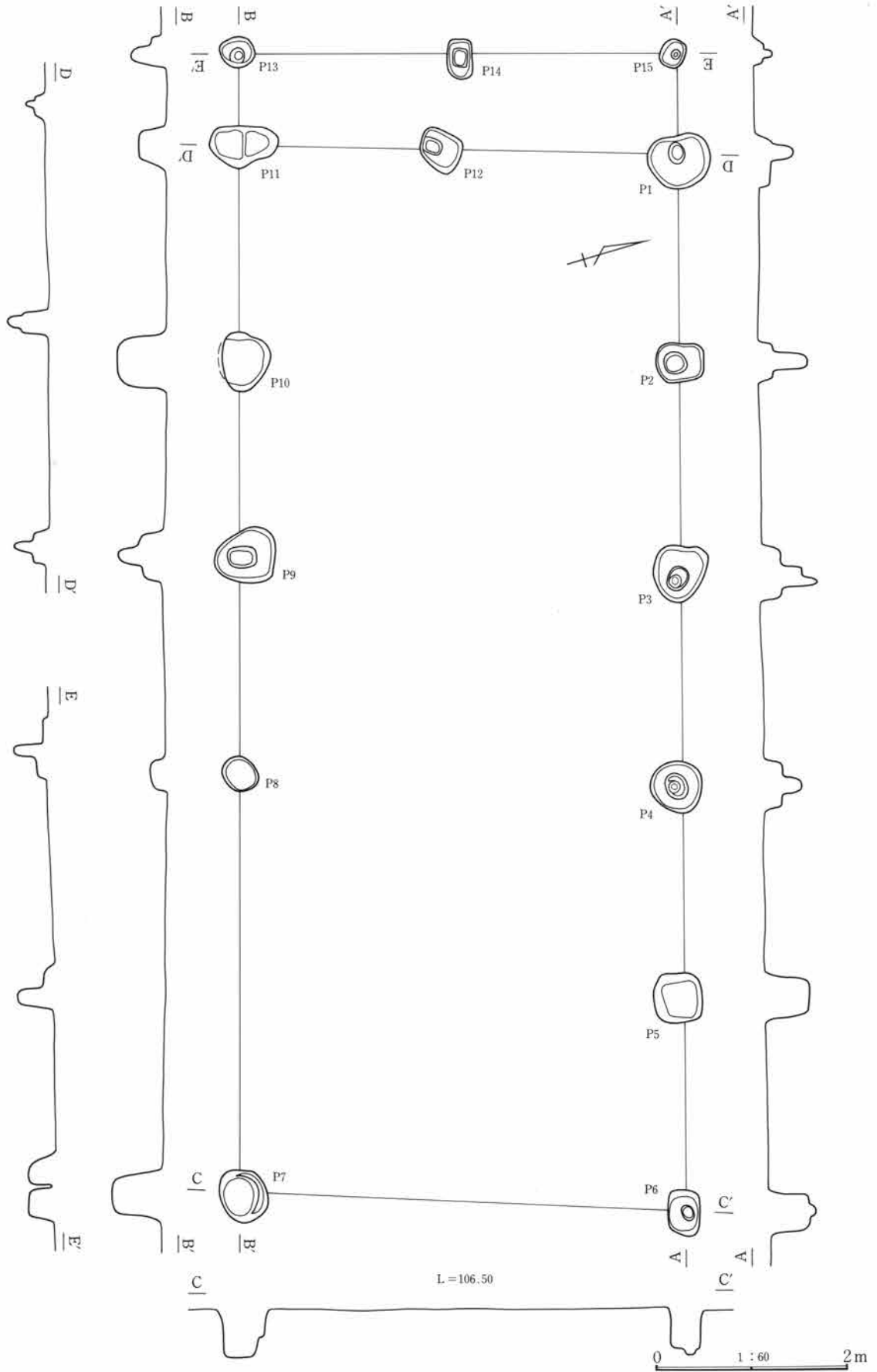
BB 8

柱穴番号	長径×短径×深さ (cm)	底面標高 (m)
P 1	30×25×10	106.30
2	45×32×27	106.10
3	38×32×39	105.98
4	45×38×21	106.29
5	42×34×21	106.15
6	48×33×13	106.23
7	43×35×43	105.87
8	50×45×21	106.14
9	70×35×26	106.14
10	49×43×49	105.89
11	37×37×35	106.00
12	35×25×6	106.36
13	65×35×9	106.30
14	55×38×32	106.11

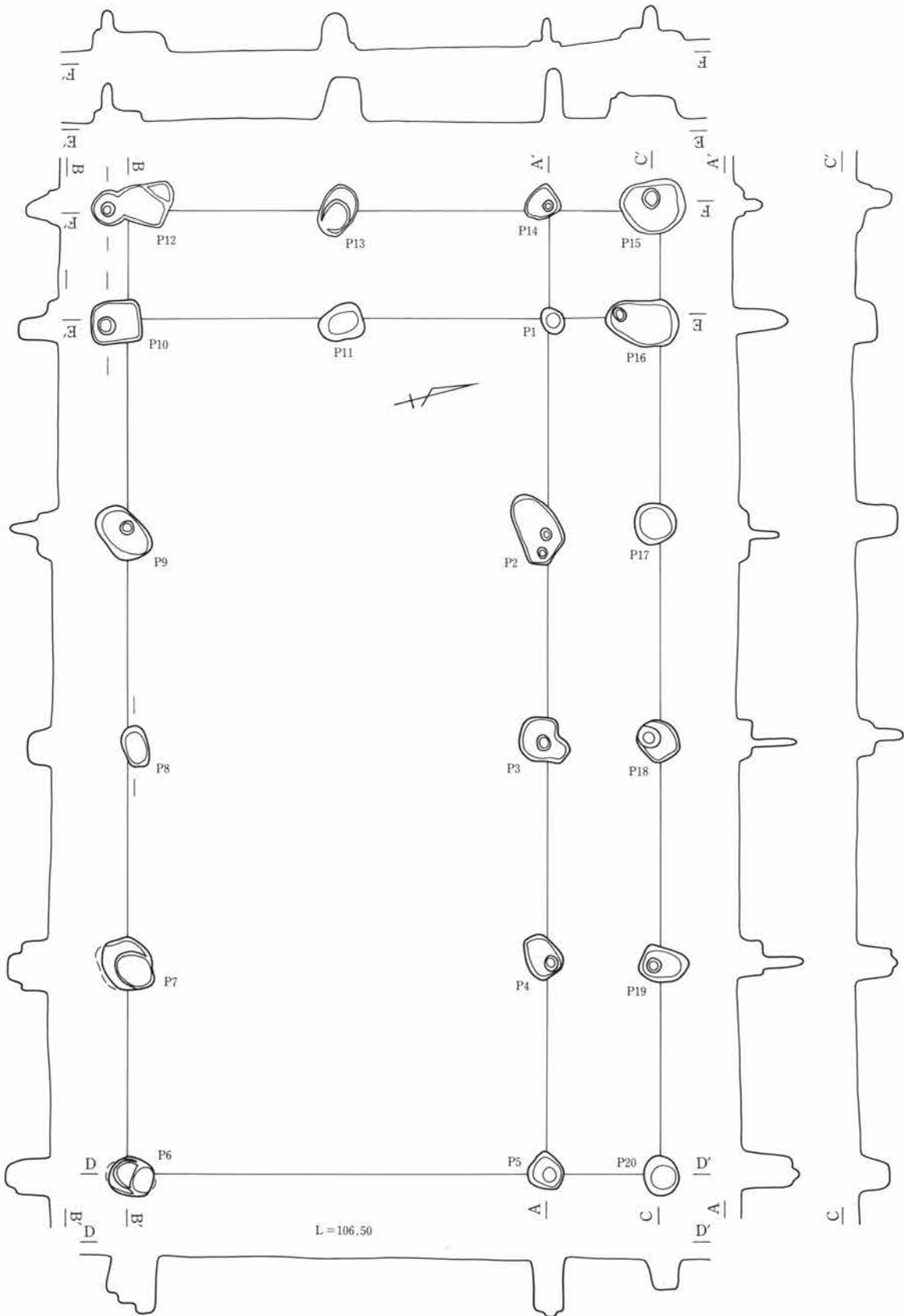
柱間計測値(cm)	
桁行	梁行
P 1～P 2 76	P 1～P 14 172
P 2～P 3 198	P 14～P 13 174
P 3～P 4 212	P 4～P 11 350
P 4～P 5 208	P 5～P 10 344
P 5～P 6 226	P 6～P 9 342
P 6～P 7 210	P 7～P 8 342
P 13～P 12 78	
P 12～P 11 336	
P 11～P 10 292	
P 10～P 9 204	
P 9～P 8 206	



第49図 大御堂第3号掘立柱建物跡遺構平面図

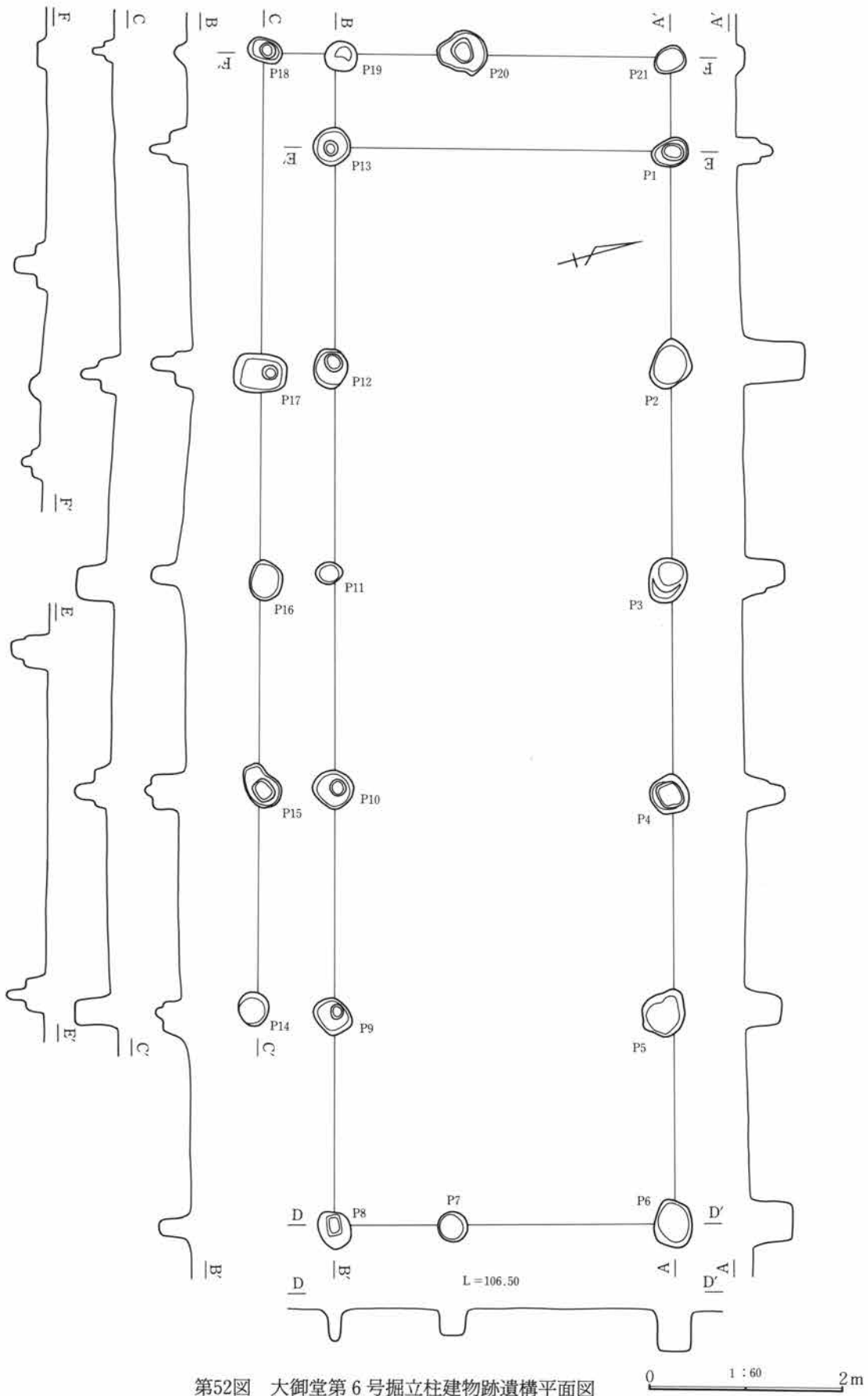


第50図 大御堂第4号掘立柱建物跡遺構平面図

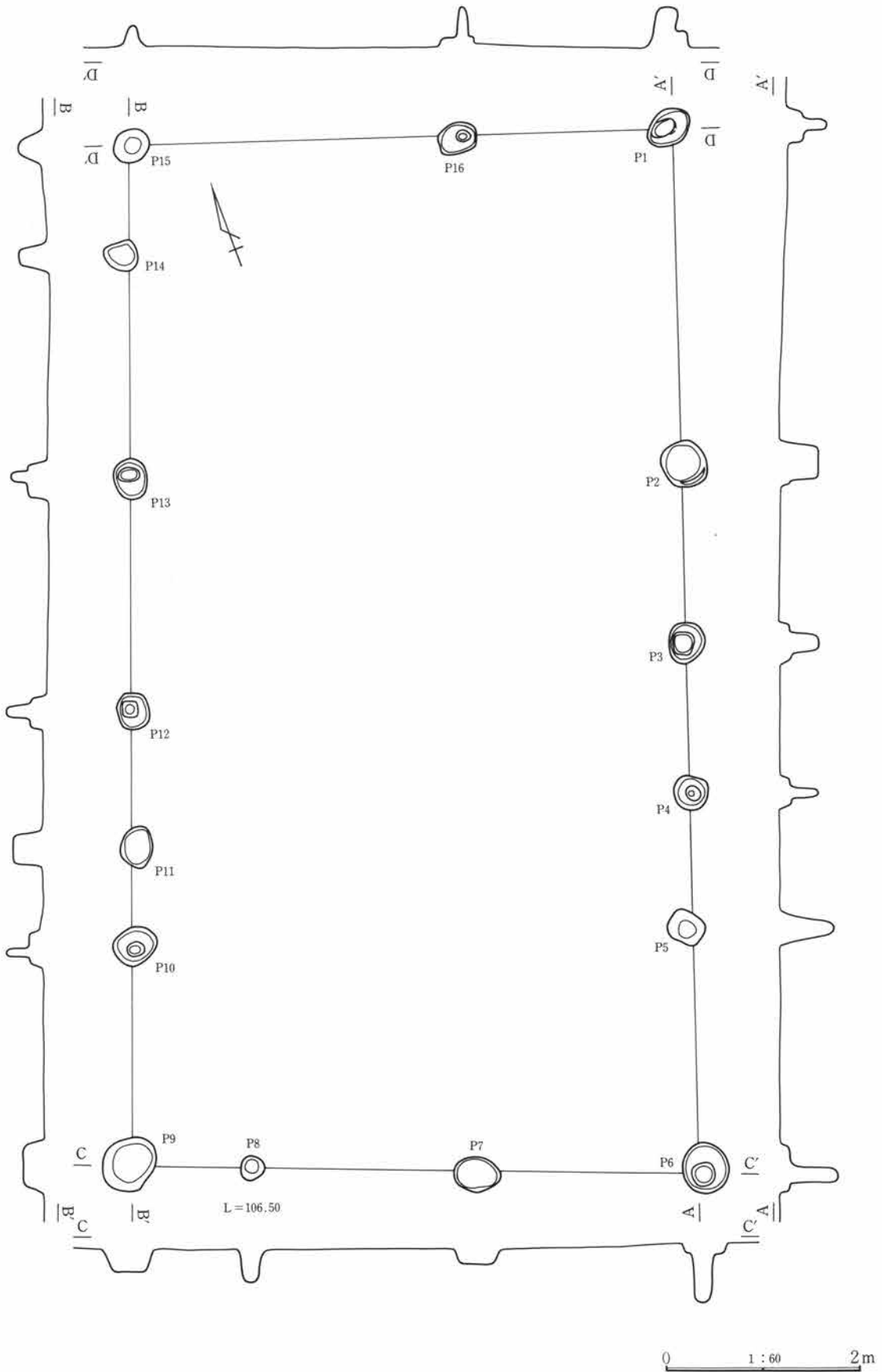


第51図 大御堂第5号掘立柱建物跡遺構平面図

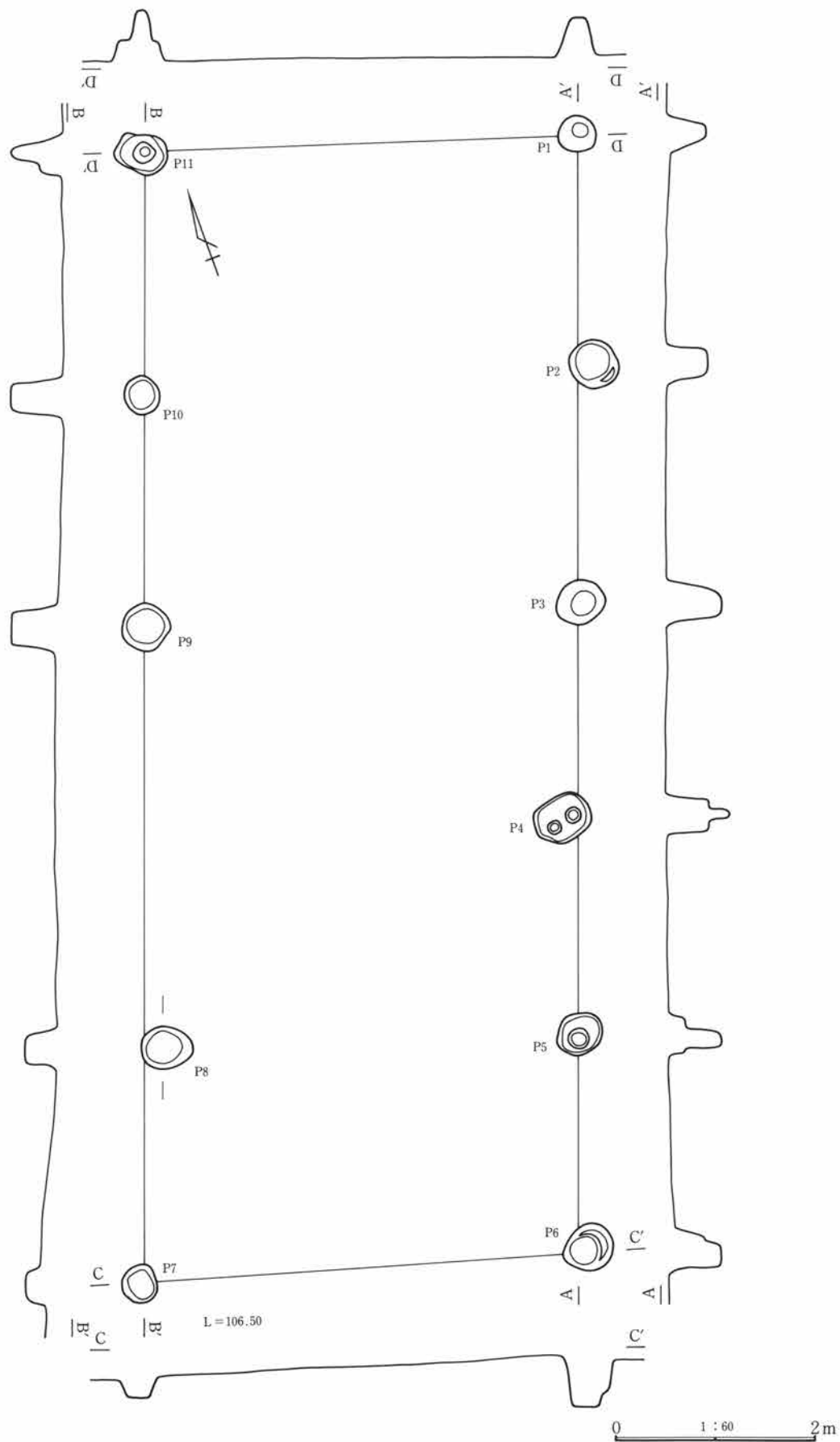
0 1 : 60 2 m



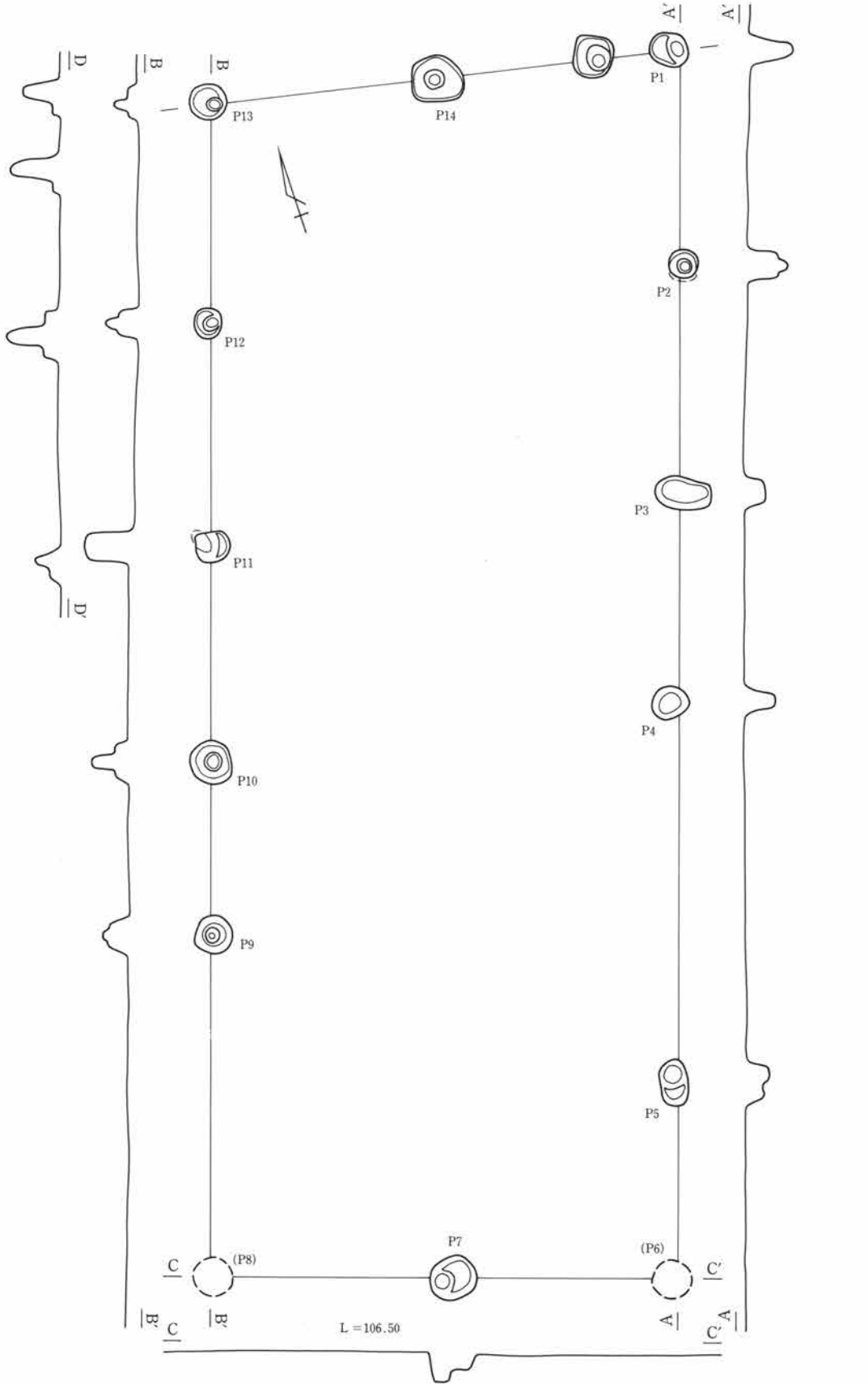
第52図 大御堂第6号掘立柱建物跡遺構平面図



第53図 大御堂第7号掘立柱建物跡遺構平面図



第54図 大御堂第8号掘立柱建物跡遺構平面図



第55図 大御堂第9号掘立柱建物跡遺構平面図

0 1:60 2m

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物

第9表 大御堂調査区掘立柱建物跡遺構計測表

第4号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴 番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	56×54×34	106.02	P 1～P 2 212	P 1～P 12 246
2	48×37×49	105.88	P 2～P 3 215	P 12～P 11 222
3	57×56×47	105.79	P 3～P 4 210	
4	50×48×59	105.77	P 4～P 5 215	P 2～P 10 468
5	51×47×45	105.90	P 5～P 6 228	
6	44×34×43	105.87		P 3～P 9 461
7	53×49×48	105.85	P 7～P 8 438	
8	35×35×6	106.24	P 8～P 9 220	P 4～P 8 464
9	63×56×43	105.90	P 9～P 10 206	
10	59×47×55	105.85	P 10～P 11 218	P 6～P 7 456
11	70×45×27	106.14		
12	46×37×37	106.04	P 13～P 15は底	P 15～P 14 230
13	35×29×30	106.06		P 14～P 13 234
14	40×25×40	106.02		
15	28×26×20	106.20		

第5号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴 番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	26×24×50	106.17	P 1～P 2 217	P 1～P 11 216
2	68×43×40	105.97	P 2～P 3 210	P 11～P 10 244
3	44×43×60	105.79	P 3～P 4 223	
4	46×36×66	105.72	P 4～P 5 214	P 2～P 9 426
5	37×37×56	105.78		
6	46×39×56	105.80	P 10～P 9 206	P 3～P 8 421
7	54×52×40	105.92	P 9～P 8 222	
8	42×26×25	106.13	P 8～P 7 223	P 4～P 7 414
9	62×41×44	105.93	P 7～P 6 211	
10	52×43×33	106.09		P 5～P 6 430
11	47×36×30	106.09	P 12～P 20は底	
12	86×38×38	105.99	P 15～P 16 128	P 15～P 14 106
13	52×37×39	106.02	P 16～P 17 202	P 14～P 13 214
14	38×30×30	106.10	P 17～P 18 220	P 13～P 12 232
15	66×54×34	106.02	P 18～P 19 233	
16	73×46×21	106.16	P 19～P 20 212	P 16～P 1 100
17	42×42×43	105.94		P 17～P 2 110
18	42×40×47	105.90	P 14～P 1 116	P 18～P 3 112
19	50×34×41	105.97	P 13～P 11 113	P 19～P 4 112
20	38×36×27	106.05	P 12～P 10 114	P 20～P 5 116

第6号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴 番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	35×28×35	106.07	P 1～P 2 218	P 1～P 13 346
2	49×38×61	105.75	P 2～P 3 212	P 2～P 12 346
3	46×38×43	105.96	P 3～P 4 223	P 3～P 11 346
4	39×38×35	105.98	P 4～P 5 218	P 4～P 10 344
5	50×32×31	106.06	P 5～P 6 214	P 5～P 9 344
6	46×40×40	105.90		P 6～P 7 228
7	30×28×34	106.09	P 13～P 12 220	P 7～P 8 118
8	38×33×31	106.03	P 12～P 11 215	
9	35×33×24	106.02	P 11～P 10 215	
10	42×38×36	105.94	P 10～P 9 231	
11	27×22×24	105.99	P 9～P 8 211	
12	40×35×41	106.01		
13	38×36×38	105.99	P 14～P 21は底	P 21～P 20 218
14	34×31×38	105.91	P 18～P 17 323	P 20～P 19 120
15	45×35×28	105.97	P 17～P 16 208	P 19～P 18 72

柱穴 番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
16	40×33×39	105.96	P 16～P 15 212	
17	52×40×38	106.05	P 15～P 14 227	P 12～P 17 68
18	33×23×20	106.17		P 11～P 16 64
19	31×23×11	106.26	P 21～P 1 96	P 10～P 15 76
20	48×40×31	106.10	P 19～P 13 98	P 9～P 14 82
21	30×23×7	106.35		

第9表(3) 第7号掘立柱建物跡柱穴計測表

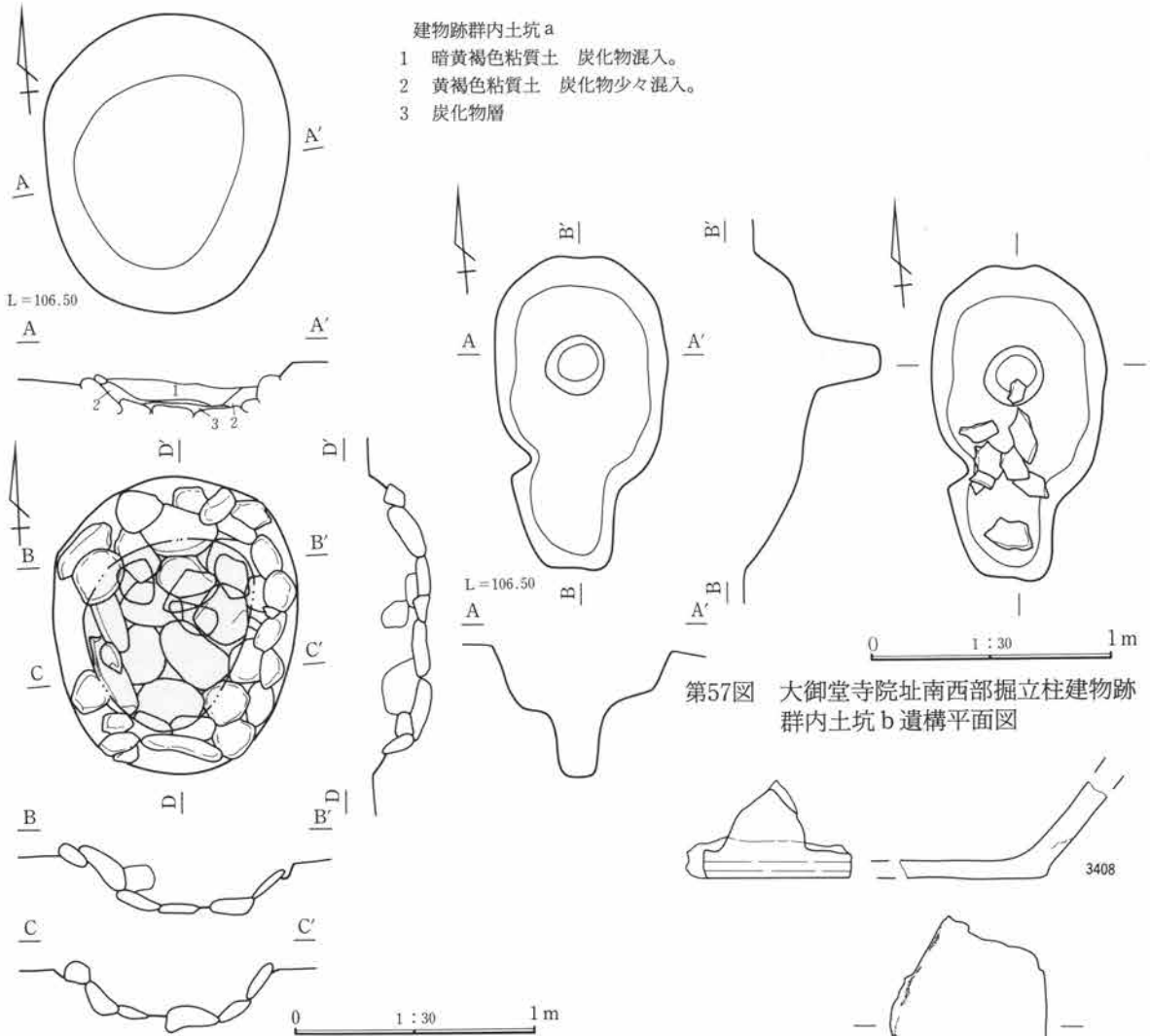
柱穴 番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	47×34×41	105.96	P 1～P 2 329	P 1～P 16 210
2	46×42×29	06.04	P 2～P 3 182	P 16～P 15 330
3	40×35×36	106.08	P 3～P 4 152	
4	37×37×38	106.07	P 4～P 5 143	P 2～P 13 560
5	38×32×53	105.90	P 5～P 6 240	
6	50×49×56	105.87		P 3～P 12 572
7	45×33×14	106.24	P 15～P 14 108	
8	25×23×32	106.04	P 14～P 13 224	P 4～P 11 574
9	57×50×23	106.14	P 13～P 12 228	
10	42×38×30	106.08	P 12～P 11 136	P 5～P 10 572
11	40×30×29	106.08	P 11～P 10 106	
12	35×32×40	106.00	P 10～P 9 220	P 6～P 7 233
13	35×35×36	106.06		P 7～P 8 232
14	32×30×28	106.14		P 8～P 9 122
15	35×32×32	106.15		
16	37×30×40	105.94		

第9号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴 番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	36×36×40	106.01	P 1～P 2 218	P 1～P 15 76
2	28×28×31	106.05	P 2～P 3 210	P 15～P 14 166
3	38×32×18	106.27	P 3～P 4 214	P 14～P 13 225
4	35×32×28	106.16	P 4～P 5 367	
5	44×26×20	106.20	P 5～P 6 (204)	P 2～P 12 466
6	b	b		
7	45×43×27	106.11	P 13～P 12 214	P 3～P 11 463
8	b	b	P 12～P 11 204	
9	38×35×26	106.12	P 11～P 10 221	P 4～P 10 461
10	40×38×34	106.00	P 10～P 9 178	
11	32×30×39	106.00	P 9～P 8 (338)	P 6～P 7 (224)
12	31×25×30	106.13		P 7～P 8 (232)
13	35×33×23	106.20	()は推定	
14	51×44×51	105.90		
15	41×37×50	105.92		

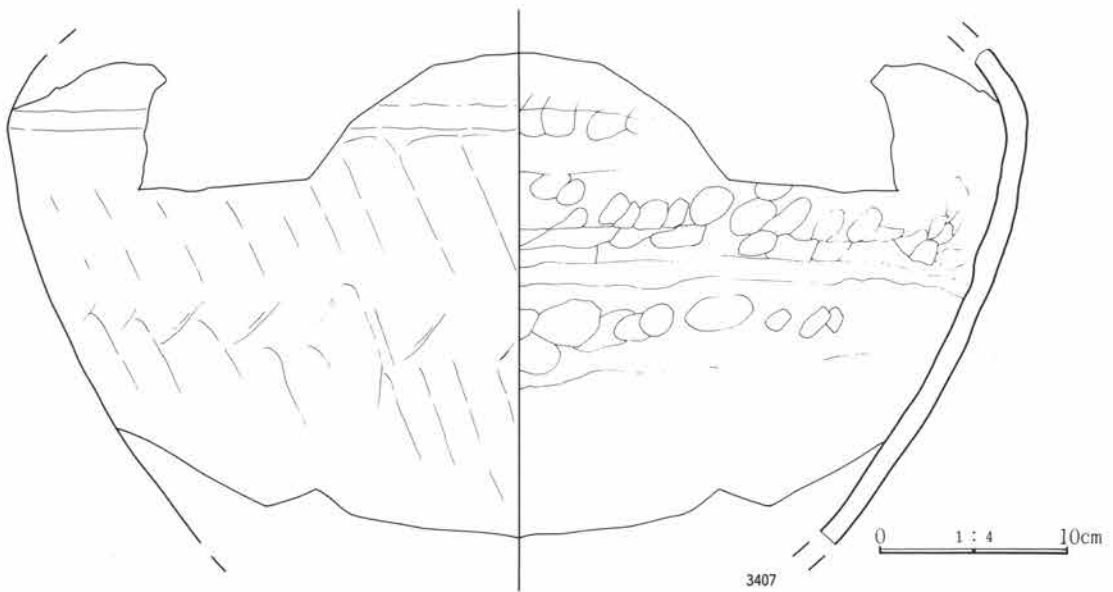
第8号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴 番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	36×36×37	106.12	P 1～P 2 224	P 1～P 11 433
2	46×43×38	106.04	P 2～P 3 220	
3	46×42×54	105.90	P 3～P 4 232	P 2～P 10 435
4	55×45×63	105.81	P 4～P 5 210	
5	45×40×51	105.92	P 5～P 6 208	P 3～P 9 418
6	48×44×49	105.92		
7	35×35×18	106.05	P 11～P 10 250	P 5～P 8 414
8	50×40×29	106.08	P 10～P 9 206	
9	48×47×45	105.94	P 9～P 8 428	P 6～P 7 408
10	35×35×53	105.92	P 8～P 7 200	
11	50×42×48	105.95		



第57図 大御堂寺院址南西部掘立柱建物跡群内土坑 b 遺構平面図

第56図 大御堂寺院址南西部掘立柱建物跡群内土坑 a 遺構平面図



第58図 大御堂寺院址南西部掘立柱建物跡群内土坑 b 出土遺物実測図

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

《南棟群》

確認された掘立柱建物跡は3棟である。この中では第9号掘立柱建物跡が西側柵列と平行し、北棟の第4号掘立柱建物跡とは直行する関係が認められ、南棟群の中では、やはり当初の規制に従うものとの可能性が高いと言えよう。

《建物群内土坑》

ピット群中で数基の土坑が検出されたが、その中に建物と関係すると考えられる土坑が2基（土坑a・b）確認された。土坑aは南棟に属す遺構、土坑bは北棟に属す遺構と考えられる。

建物群内土坑a（BK26）は、南棟群の南西隅にあたるBo27グリッドで検出された。確認面の標高は106.50mで、長径122cm、短径100cm、深さは35cmの楕円形の浅い皿形土坑である。土坑内には径20cm～50cm、厚さ10cm程度の扁平な円礫が敷き詰めてあった。礫は結晶片岩で同じような形・大きさのものを選んで並べてあり、底面には6個の礫が50cm×70cmの範囲に平坦に敷かれてあった。土坑埋土は上層に炭化物を含む黄褐色土が、下層に炭化物層が確認された。炭化物層は礫敷底面上に約2cm厚さで確認された。この土坑は大御堂第9号掘立柱建物跡の南西隅に位置すると見られ、建物内での炊事施設に類したものの可能性が考えられる。

建物群内土坑b（BK35）は、北棟群の北西隅にあたるBm23グリッドで検出された。大御堂第5号掘立柱建物跡の北西隅の柱穴が本土坑の真ん中にあり、柱穴に伴う土坑と考えられる。土坑は長径126cm、短径74cmの楕円形であるが、二つのピットがくっついたような形状である。確認面標高は106.42m、土坑底面は106.04mで深さ38cmのやや浅い舟底形の断面形状を示し、土坑内の柱穴底面は105.86mである。この土坑からは常滑系の陶器大甕の破片が比較的まとまって出土し、胴部の珪ほどが復原され、同一個体と思われる底部片も出土している。この底部片には漆の付着が認められたが、これはひび割れを継いだ痕跡と考えられる。破片は柱穴の南側、すなわち大御堂第5号掘立柱建物跡の建物内部側に分布範囲が広がり、出土状況からはこの建物で使用された大甕と考えられる。

《遺物の出土状況》

遺構に伴うと考えられる遺物は前述の常滑製大甕のほかは、ピット中からのものが多い。土師質土器、軟質陶器、陶磁器類、瓦類、鉄製品類等が出土している。柱穴から出土した土師質土器の小皿は完形で、建物と何らかの関連を有する遺物と見られる。

《調査所見》

寺院址南西部の一角は調査前には、北側に比べ約1m位低く、ピット群は表土層を除去した段階ですぐに検出された。ピット中の埋土は黒褐色若しくは暗褐色系の色調でやや砂質気味な土質であることから、浅間B軽石層に似た土質であると判断できる。遺構確認面は標高106.40m～106.45mであるが、かなりの削平がなされたと推定され、本来の遺構構築面は濠上端との比較から確認面よりは10cm以上は上であったと思われる。土塁跡の土層で確認された浅間B軽石層の上面レベルは標高106.70m～106.75mであり、これを旧表土面と考え、土塁南端をこれよりやや削平したとしても現況よりはやや高いレベルであったと推定し得る。

建物群は南北2棟からなり、2棟が鍵の手に隣接して建てられていることや、建て替えの痕跡をたどるとほぼ同じ位置をトレースしていることから、2棟がほぼ同時期の存在で、比較的連続性のある時間幅を有すものと考えられる。北棟では6棟分検出したが、その新旧関係は不明である。しかし、寺院址との関連性を考えると柵列・濠・溝等と基準方位を一にするものについては同時存在の蓋然性が高いと考えられる。また、検出したピットは建物群内に集中するのでこれに付随するものと考えられ、大甕の出土状況は建物の廃棄に伴うもので、遺構廃絶の時期を示唆する資料と考えられる。

建物群は西と北を柵列によって仕切られていることは述べたが、南側については調査区外となるため不明である。東側は近世以降の土採りと思われる大きな穴があり、すでに遺構面が消滅して内容は不明であるが、鍵の手内側の庭と見られる部分が一部残って、ここでのピットの検出が少なかったことから、建物群はほぼ検出した範囲内に限られるものと推定できる。なお、南側については藤岡市教委の調査が一部について実施され、井戸跡が1基確認されている。

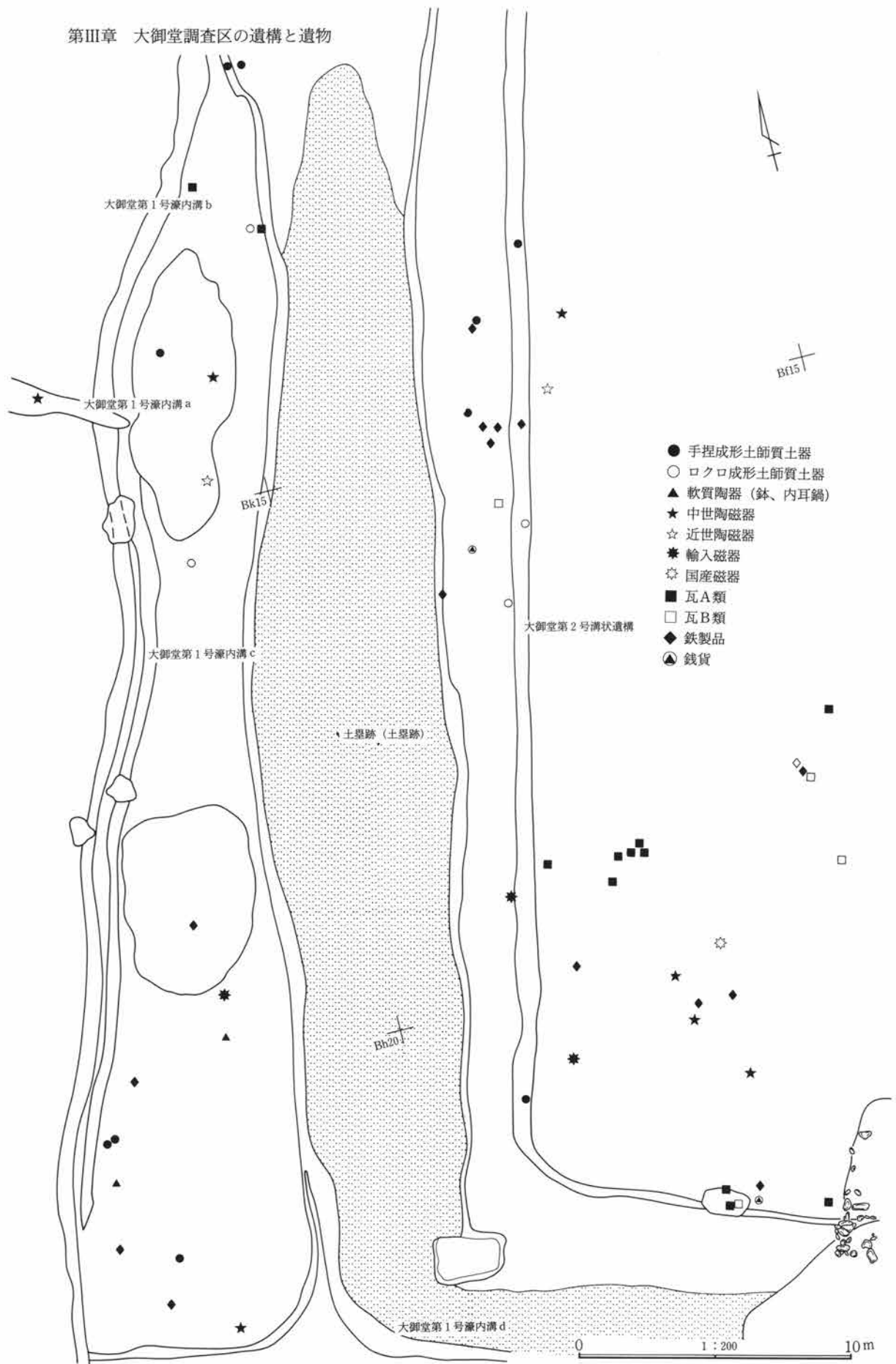
(6) 寺院址西部の遺物出土状況について (第59図)

寺院址西部での遺物は主に第1号濠跡と南西部掘立柱建物跡群からの出土である。ここでの遺物の出土状況を見ると、遺構確認面に至るまでは量的に少なく、トレンチ調査の段階での遺物出土も園池遺構部分などと比較すると少なかった。また、南西部では重機による表土掘削後の面がピット群の遺構確認面となり、遺構覆土としての層が薄いことによっても考えられた。第1号濠跡では自然堆積による濠埋没土が比較的良好に存在し、濠埋没以前と考えられる遺物が出土している。南西部掘立柱建物跡群ではピット群からの出土が多く、遺構に直接伴うもの若しくは遺構の廃棄の時期に比較的近接した時期のものであることが伺われる。この地域で出土した遺物の種別は土師質土器皿類、軟質陶器鉢類・内耳鍋類、陶磁器類（輸入磁器・中世）及び鉄製品、銭貨等である。遺物の個別説明は第4節で取り扱うので、ここでは出土分布の傾向について述べる。

第1号濠内を北・中・南とに三分すると、それぞれで出土遺物がやや異なった傾向を示している。中程を中心に濠埋没土の上面で火葬跡・火葬墓などの埋葬関連遺構がまとまって検出されており、火葬跡に副葬された遺物（土師質土器・銭貨）からは、濠の埋没年代が推定できる。ここでは濠が比較的浅くなっており、濠に伴うと思われる遺物の出土量は少ない。また、ここより北側は削平のために濠平面プランの確認ができず、遺物の出土もあまり見られない。ただし、確認された濠の北端付近では径2～3cmの小礫が一面に分布しており、小礫は大きさと表面の摩滅度が比較的均質し、分布範囲が特定できることから人為的なものと考えられるが性格は不明である。また、この範囲での遺物は検出されなかった。

第1号濠内での遺物出土は南半分に集中する傾向が見られる。層位的に見ると濠内土坑で出土した完形の手捏系土師質土器の皿は濠構築時若しくはそれに近い時期の廃棄と考えられ、火葬墓出土の中世後半と見られるロクロ系土師質土器の皿が濠埋没後と考えられることから、濠が機能していたのはこの手捏成形系土師質土器皿類の年代幅のなかに収まる中世前半頃と思われる。

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物



第59図 大御堂寺院址西部遺物出土分布図
(第1号濠跡・土塁跡・第2号溝状遺構)

4 寺域中央部検出の遺構

(1) 寺院址中央部の概況

《調査前の状況》

寺院址中央部は字大御堂2196番地、2216番地、2213番地、2214番地の4面の水田がこれにあたりと予想された。この4面の水田はほぼ50m四方の範囲内に収まり、圃場の形状が周囲で一般的に見られる長方形若しくは短冊形なのに対し、この区画だけ曲線の形状を示し、明らかに異なった地割りとなっていた。この4面と隣接する圃場は寺院の規制にしたがったものであろうと推定できる。また、この範囲内での圃場の水平レベルは東から105.80m～105.85m、106.50m～106.60m、106.80m～106.90mとやや不自然な垂直的遷移傾向が認められた。「アミダイケ」は2196番地の水田がこれにあたりと思われ、圃場東縁の曲線は検出された園池遺構の東縁とほぼ一致した。

《検出遺構の状況》

中央部で検出された遺構は溝状遺構・園池遺構等であるが、これらは寺院の四圍を取り囲むよう方形に配置されており、検出位置は前述の圃場の四辺にあたる位置に重なる。北縁及び南縁で検出された溝状遺構は寺域の方形区画の線を示すと思われるものと、北池及び南池へ続く遣り水遺構と考えられる性格のものがある。これらの溝状遺構・園池遺構に取り囲まれた区画内では井戸跡・掘立柱建物跡などが検出され、寺院址北西部の隅では瓦溜まりと考えられる遺物集中分布域も検出されている。このほかに池状遺構・土坑等の近世に入ってからと思われる遺構、及び火葬墓・土坑墓等の埋葬遺構が検出されている。

寺院址中央部で検出された遺構はその位置によって北縁・南縁・園池遺構・中央部に分けられる。以下、順に報告する。

寺域西縁の区画……第2号溝状遺構 (BD7)

寺域北縁の区画……第3号溝状遺構 (AD12)、第4号溝状遺構 (AD13)、

北池遣り水遺構……第5号溝状遺構 (2号暗渠)、第6号溝状遺構 (3号暗渠)、第7号溝状遺構 (3号配石)

(不明) 第8号溝状遺構 (AD14)

園池遺構……北池、南池、第12号溝状遺構 (BD10)

南池遣り水遺構……第9号溝状遺構 (BD9)、第10号溝状遺構 (4号暗渠)、第11号溝状遺構 (1号暗渠)

寺域南縁の区画……第13号溝状遺構 (BD8・16)

中央部検出遺構……第10号掘立柱建物跡 (BB1)、第11号掘立柱建物跡 (BB2)、第1号井戸跡 (BE1)、

その他……北西部瓦溜まり、第1号池状遺構 (1号池)

(2) 寺域西縁で検出された遺構

《大御堂第2号溝状遺構》

土塁跡の前面(東側)には第1号濠跡・土塁跡に平行している溝状遺構が1条検出されている。この大御堂第2号溝状遺構(BD7)は上端幅50cm、下端幅30cm、深さ約20cmの逆台形の断面形状を示し、土塁跡に平行して南北方向にほぼ直線に伸びる。その主軸方位はN-13°-Eで、大御堂第2号溝状遺構の南端は土塁跡と同様に東に折れ東西方向の走行となり、その主軸方位はN-68°-Wである。土塁跡東縁と大御堂第2号溝状遺構とは1.8m程度の幅があり、検出面での比高差は約50cmである。

本遺構は灰褐色粘質土(IV層)を切っており、溝埋土は暗褐色粘質土で溝内からは皿形の土師質土器の出

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

土が見られる。遺物は溝の北半で比較的多く見られ、完形のものも多くあり、溝の性格を考えるうえで重要である。本遺構と重複する遺構は、北西部の瓦溜まり、中央付近の大御堂第1号配石墓、南部での大御堂第4号土坑墓であり、いずれも本遺構の埋没後のものと見られる。本遺構は北端が調査区外となるため確認できなかったが、ほぼ同規模の東西方向の走行を示す大御堂第4号溝状遺構が近い位置で検出され、これが大御堂第2号溝状遺構の南側（東西方向の走行）部分と対称の位置を占めると考えられることから、大御堂第2号溝状遺構と一体的な方形区画の縄張り線に沿った遺構として、寺域を区画する性格をもつ溝と考えられる。

本遺構の埋土は1層で、溝底面で手捏系皿形の土師質土器が完形に近い状況で出土しており、遺構規模等から考えて長期にわたる遺構存続期間であったとは考え難い。大御堂第1号配石墓及び土塁跡との関係から確認面は構築面に近いものと考えられ、また、埋土には底面に若干の砂質土があるものの水流の痕跡が認められなかったため、本遺構は建物に伴う雨落溝としての性格を有するものとの可能性が推測される。

《寺院址北西部瓦溜まり》

寺院址北西部のBg～Bf-09～11グリッドでは礫に混じって多量の遺物が出土した。その分布範囲は土塁の東側南北10m、東西6m程に集中しており、出土状況からはいわゆる瓦溜まりのような性格の遺物廃棄場所と考えられる。遺物はほぼ同レベルで検出されており、最も多く見られるのは瓦類である。また、釘と思われる鉄製品もBf・Bg-09グリッド付近に集中して出土しており、土師質土器も数点見られる。ここで検出された遺物群は、大御堂第2号溝状遺構及び北西部火葬墓群と重複関係が認められる。

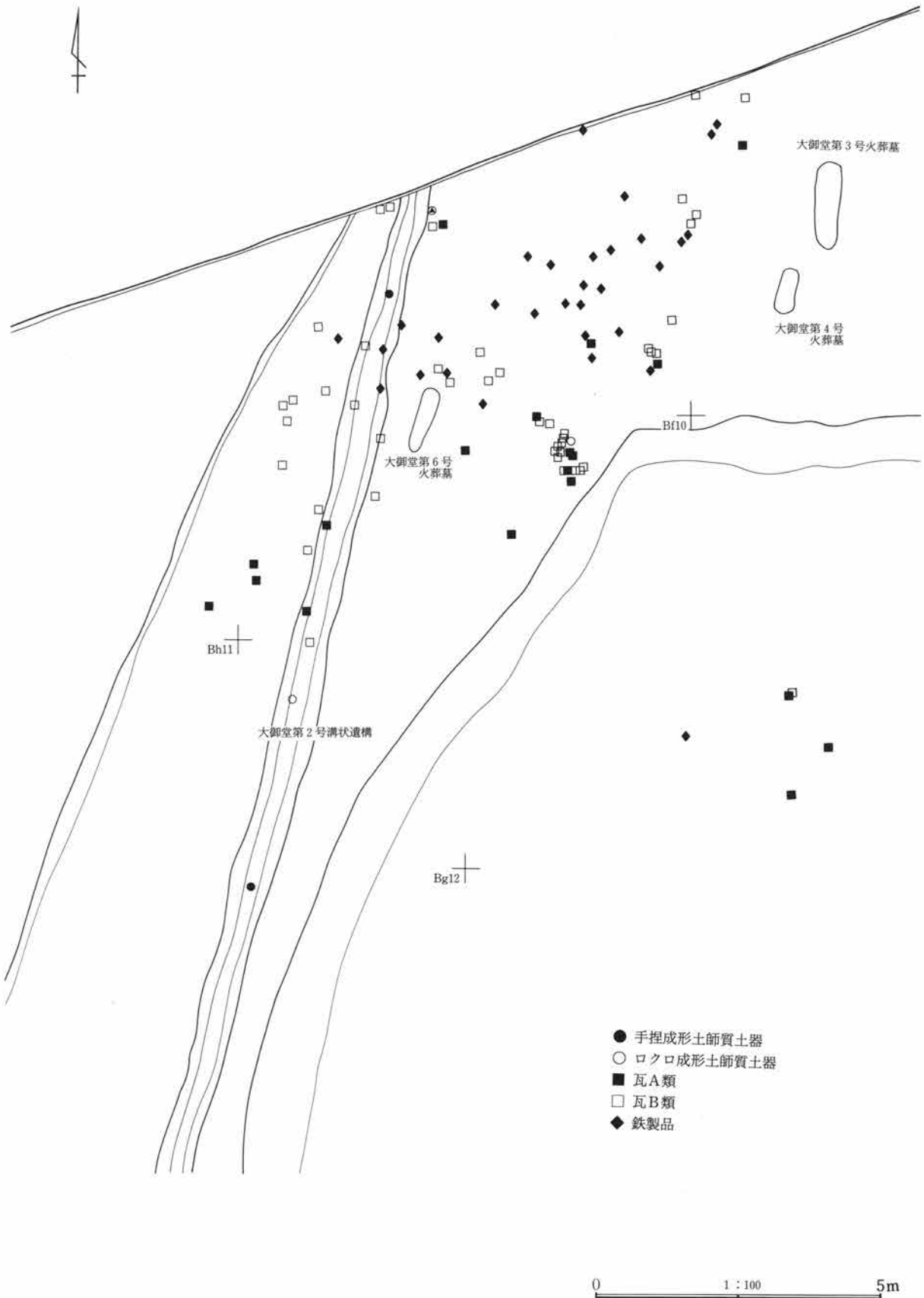
表土層掘削後の遺構面精査の段階で、小礫に混じって瓦類の出土が見られ、この遺物取りあげの過程で大御堂第4号～第6号火葬墓の検出がなされた。ここで検出された火葬墓はほとんど底面まで削平されており、その時期は火葬墓構築後と考えられる。瓦類は寺院に伴う遺物として少なくとも火葬墓より古い時期と考えられるが、二次的廃棄の可能性もあり、この遺物分布域＝瓦溜まりでの遺物廃棄の時期は、遺物検出面で判断すると火葬墓構築後と考えられる。しかし、火葬墓精査後の大御堂第2号溝状遺構の検出面に至る間にも遺物は分布しており、すべてを寺院址廃絶後の二次的なものとは捉えきれない。ここで多く出土した瓦類は寺院址との関係が想定され、比較的多量に出土した鉄釘もやはり同様の性格を持つものと推定されるが、火葬墓の分布域とも重なることからこれとの関連も考えられ、今後の検討を要する。

(2) 中央部北縁の遺構

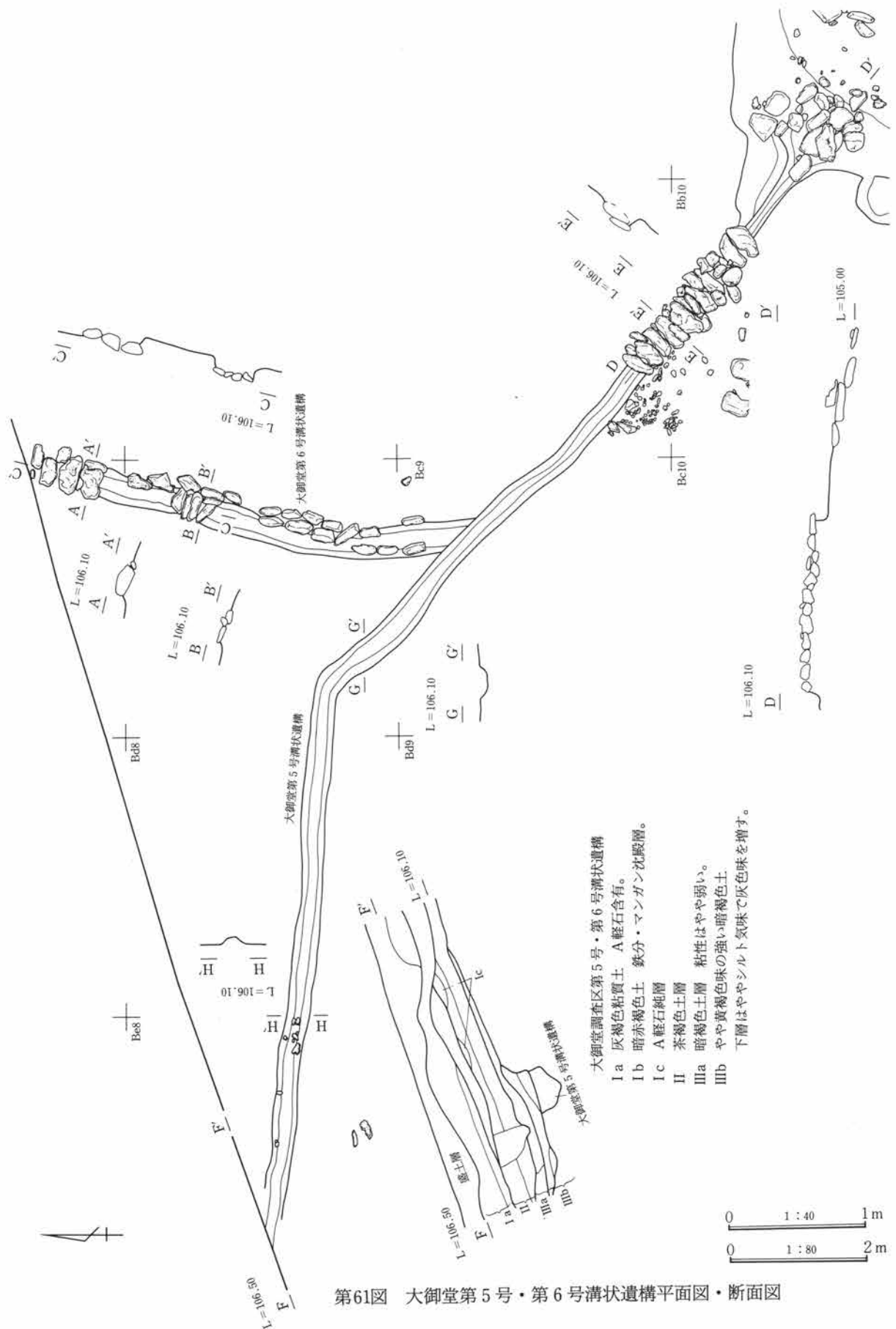
《大御堂第3号・第4号溝状遺構》

この二つの溝状遺構は東西方向に平行して検出された。北側を走る大御堂第4号溝状遺構の方が若干規模が大きい。大御堂第4号溝は上端幅100cm～110cm、下端幅20cm～30cm、確認面からの深さ約30cmで浅いU字形の断面形状である。確認された長さは約50mで、西は調査区外へ伸びると思われ、東は近世以降の溝によって切られるが、更に東へ伸びる様子は確認できなかった。本遺構の検出面標高は105.60m～105.25mで東方に緩い傾斜が見られ、底面標高は西端で105.40mで東に緩い傾斜をもち、Avライン付近では105.20mである。

大御堂第3号溝状遺構は大御堂第4号溝状遺構の南側を平行して走り、その規模は上端幅65cm～80cm、下端幅約40cm、確認面からの深さ約20cmで浅いU字形の断面形状である。確認された長さは約30mで、西は調査区外へ伸びると思われるが、東はAt-08グリッド付近で確認できなくなるが、その延長方向には大御堂第15号溝状遺構があり、本遺構との関連性が注目される。大御堂第3号溝状遺構の底面標高は西端で105.60m、東端近くでは105.30mで第4号溝状遺構よりやや浅い。大御堂第3号溝状遺構と大御堂第4号溝状遺構は調査区北壁で浅間A軽石層下の畠作遺構の下という層序関係が明らかである。二つの溝の新旧関係は大御堂第



第60図 大御堂寺院址北西部瓦溜まり遺物出土分布図



第61図 大御堂第5号・第6号溝状遺構平面図・断面図

大御堂第3号溝状遺構土層注記 A-A' B-B' C-C'

II 暗褐色粘質土層 粒子は比較的細かくやや密。縮り良く粘性ややあり。

① 暗褐色土 粒子細かく粘性ややあり。

② 暗褐色土 粒子小粒子が混入。1a → 1c と色調が暗くなる。

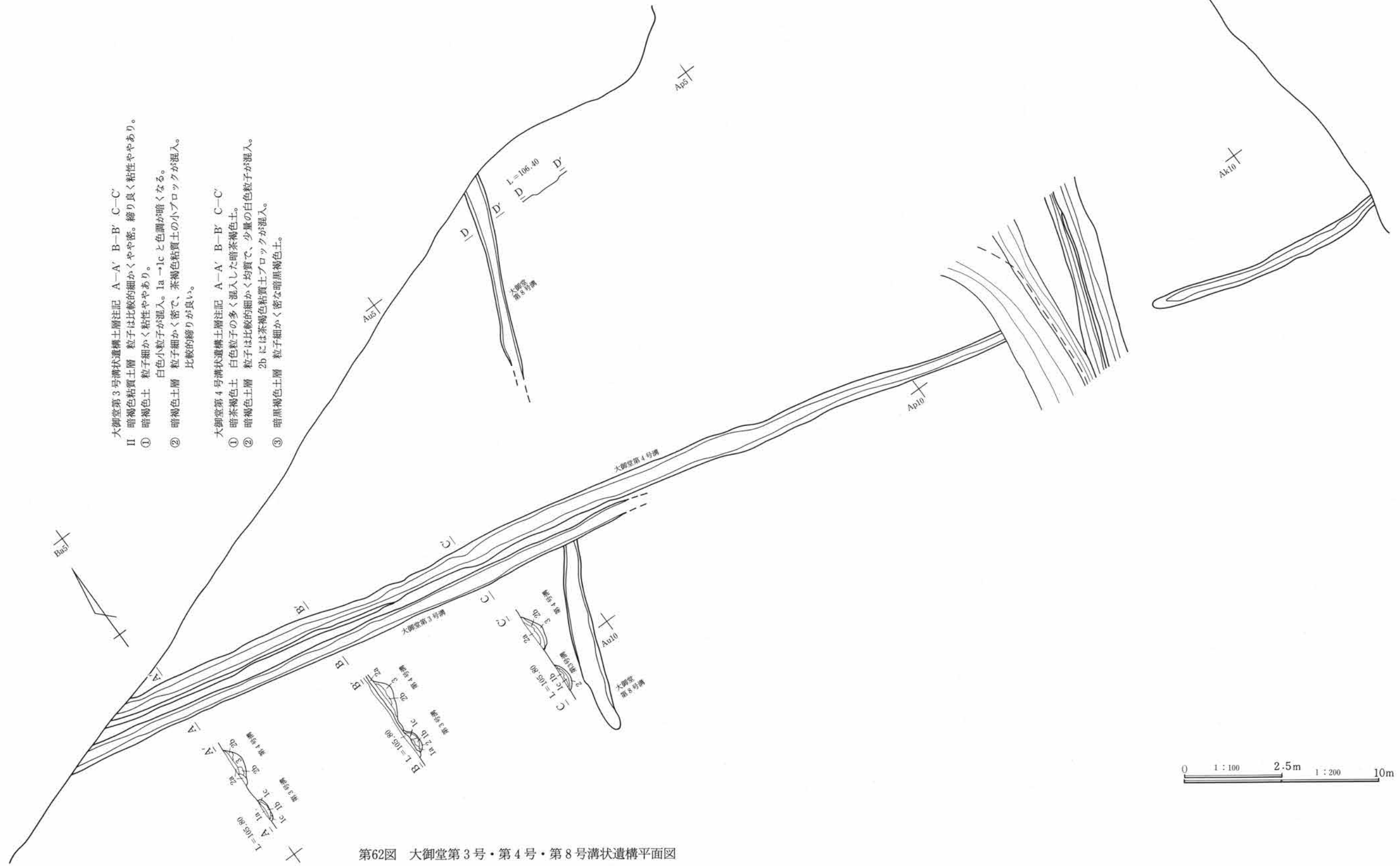
③ 暗褐色土層 粒子細かく密で、茶褐色粘質土の小ブロックが混入。比較的縮りが良い。

大御堂第4号溝状遺構土層注記 A-A' B-B' C-C'

① 暗茶褐色土 白色粒子の多く混入した暗茶褐色土。

② 暗褐色土層 粒子は比較的細かく均質で、少量の白色粒子が混入。

③ 暗黒褐色土層 粒子細かく密な暗黒褐色土。



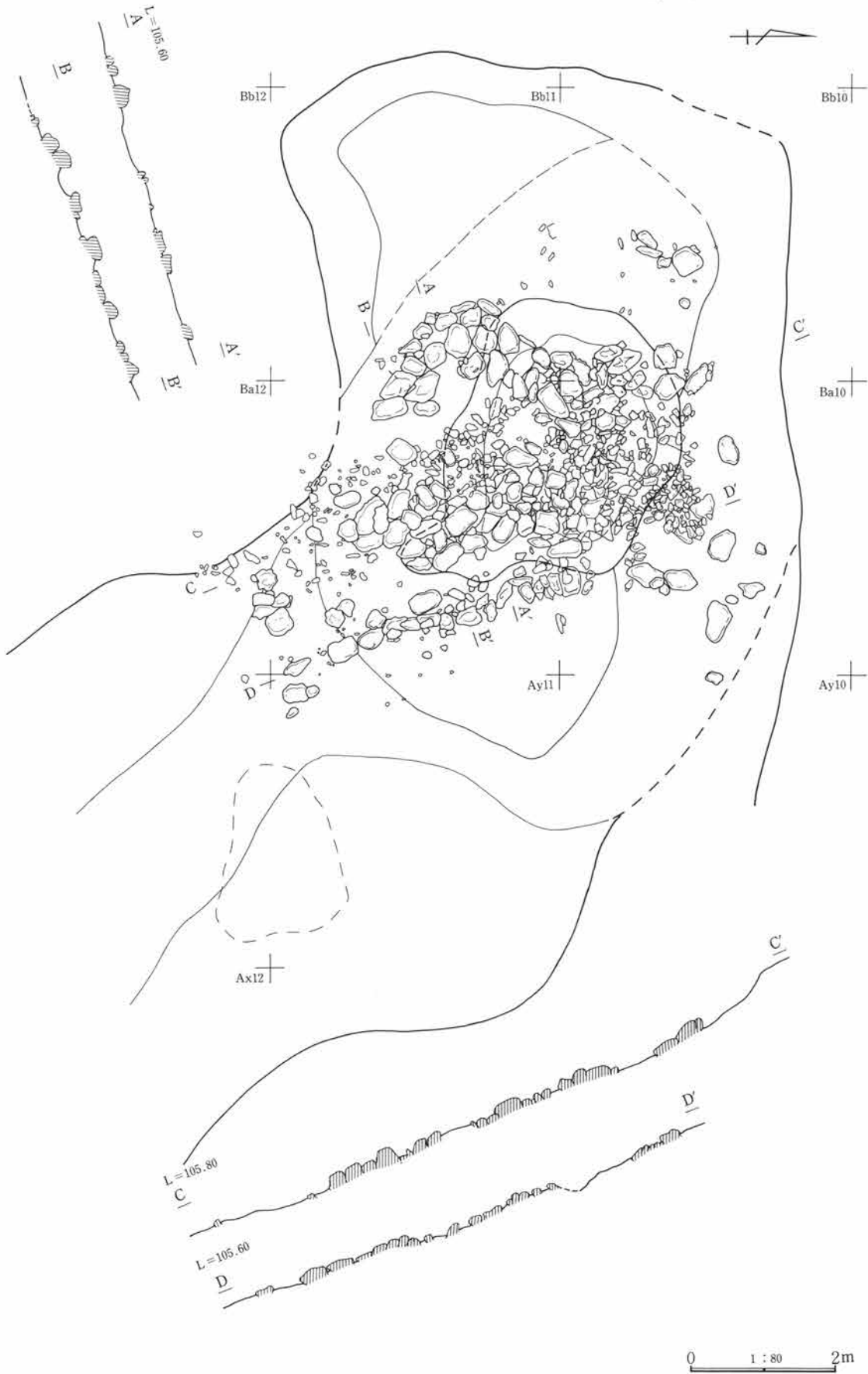
第62図 大御堂第3号・第4号・第8号溝状遺構平面図



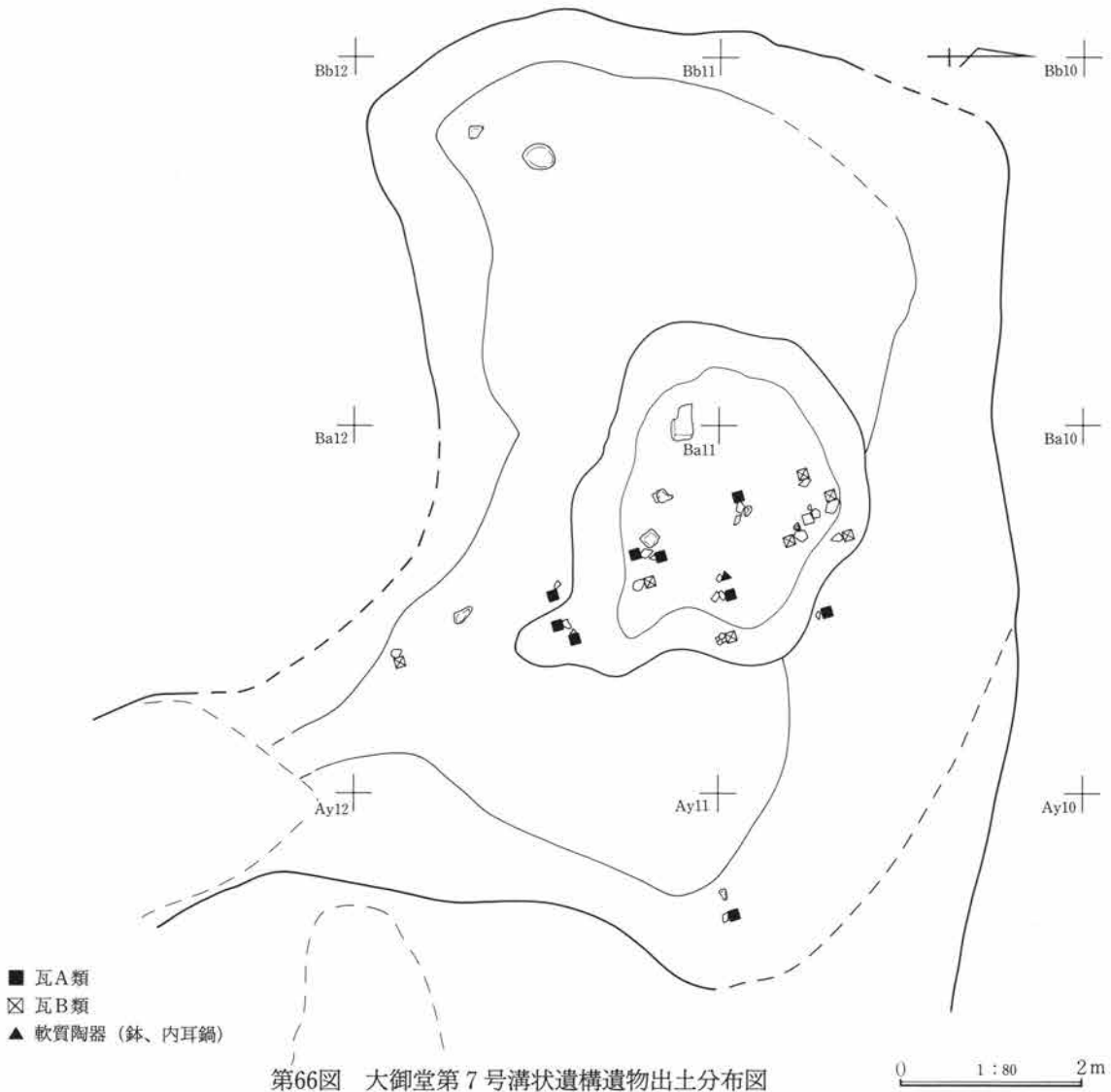
第63図 大御堂第1号池状遺構出土遺物・礫分布図



第64図 大御堂第5号～第7号溝状遺構平面図



第65図 大御堂第7号溝状遺構磔敷面平面図



3号溝状遺構が大御堂第4号溝状遺構より新しいと判断でき、検出した範囲内では両者が平行する同規模のものであるから、一方が一方に対する掘り替えであると思われる。両溝とも埋土は粘質土であるが最下層には砂質層が見られ、流水の痕跡と認められる。また、両溝とも遺物出土は少ない。大御堂第4号溝状遺構には長さ約25mにわたり径30cm～40cmの円礫が溝を埋めるように廃棄されていた。

《大御堂第5号溝状遺構》

大御堂第5号溝状遺構（3号暗渠）は寺院址北西部の Bb～Bc-07～09グリッドで検出された南北の走行の溝である。掘り方の上端幅40cm、下端幅20cm、深さは約10cmであるが、暗渠であったと思われる礫が検出されている。この礫は長さ40cm～60cm、幅10cm～30cmの片岩系の扁平なもので、溝の蓋及び側壁として使用されたものと見られる。溝の主軸方位はN-14°-Eである。底面のレベルは南が105.78mで北側が105.68mと確認された範囲内ではやや北に傾斜している。遺構確認面の標高は約105.90mであり、本遺構のあたりを境に東側がやや低い面となる。大御堂第6号溝状遺構との関係は明瞭ではないが、検出状況からは切り合い関係があると思われる。

《大御堂第6号溝状遺構》

大御堂第6号溝状遺構（2号暗渠）は寺院址北西部の Bb～Be-08～10グリッドで検出された東西方向の

びる溝である。西は調査区外にのびるため不明であるが、東は走行をやや南に変えて大御堂第7号溝状遺構に続く。検出された距離は約18mで、上端幅30cm～40cm、下端幅15cm、深さは5cm～15cmと比較的浅く、溝の主軸方位は西8mではN-85°-Wであり、東10mではN-44°-Wである。溝底面の標高は西から105.84m～105.75m～105.41mと東に緩やかな傾斜をしている。大御堂第7号溝状遺構に続く部分では比高約30cmの段差が認められる。また、この段差の手前には長径50cm、幅15cm前後の礫を暗渠の蓋として並べられていた。大御堂第6号溝状遺構の確認面は西で105.95m、大御堂第7号溝状遺構手前の段差上面では105.65mであった。

この溝状遺構及び周辺での遺物の出土量は少ない。北池の遺水遺構の一部と見られ、Bc-08で走行を変えている。西側約4mの部分ではN-82°-W、東側約4.5mではN-51°-Wを示し、大御堂第5号溝状遺構に接続する。上端幅は20cm～30cmと狭く、深さは10cm程度で断面は浅いU字状を呈す。東側の一部は暗渠となつて40cm～60cm大の横長の円礫が長さ2.5mにわたって検出された。

《大御堂第7号溝状遺構》

大御堂第7号溝状遺構(3号配石)は北池北西部のAx～Ba-10～13グリッドで検出された。本遺構は10ラインに沿う段差の南側で第1号池状遺構の東に位置する。Baラインに沿うトレンチ調査により、礫敷面を確認し掘り広げた結果ほぼ7m×4mの範囲に円礫が敷かれ、その側縁部が一行に並んでいるのが確認された。礫面レベルは105.20mでほぼ一定であり、礫に対する掘り方は見られなかった。調査段階では遺構の性格がつかめなかったが、大御堂第5号・第6号溝状遺構の遺構形状が明らかになり、本遺構との接続部の段差が小滝として配置された遺水遺構の可能性があり、その位置から、北池への導水施設としての性格をもつ遺構であることが考えられた。礫敷面からもその下層からも遺物の出土が見られた。下層からの出土遺物は瓦類が中心であり、礫敷きの目的と時期について、少なくとも寺院創建当初のものでないことは明らかであるが、溝としての性格は当初からあったものと推定できる。

《大御堂第5号～第7号溝状遺構の性格について》

ここで検出された溝状遺構は北池への導水施設としての性格をもつと考えられる。大御堂第5号溝状遺構についてはここで検出されたなかでは最も古いと考えられるが、確認された範囲内での走行が北への傾斜をもつと、大御堂第6号溝状遺構との関係が明瞭ではないため断定はできない。また、大御堂第5号溝状遺構の南端がやや東よりとなる点や暗渠の検出という共通点から、大御堂第6号溝状遺構の東側部分に接続していたとも見られるが、この点については更に検討を加えてみたい。

《大御堂第8号溝状遺構》

本遺構は寺院址北部As～Au-04～10グリッドで検出された南北方向の走行の浅い溝である。確認できた長さは約29mであるが、遺構の削平がかなり進んでおり、遺構プランが明瞭ではない所もあった。上端幅は最大で1m近くあるが深さは10cm程で極めて浅い。大御堂第3号・第4号溝状遺構と重複関係をもつものと思えるが切り合い関係を把握することができなかった。埋土はやや暗い茶褐色粘質土であり、遺物の出土は見られなかった。

《大御堂第1号池状遺構》

本遺構は寺院址中央部の北西の一角を占める。調査当初において園池遺構と同様の確認状況であったため、調査名称は1号池とした。しかし、寺院の園池遺構とは別の性格のものであると判断できたので本章では第1号池状遺構とした。本遺構は南北長17m、東西長17mの不整な方形を呈し、底面は約50cmの深さで比較的平坦ではあるが、2カ所で底面から40cm程度の深い掘り込みが見られる。遺構埋土は浅間A軽石の純層に近

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

い砂質土の中に人頭大の多量の円礫が投棄されていた。この砂質土層は砂粒子はやや粗く多量の遺物を包含している。この下には数cmの厚さの灰色泥質土層が見られ、レンズ状堆積を示す。この層の下には茶褐色粘質土の三角堆積が観察される。周縁部は直線に近い部分も見られるが、2m～4mを単位とする細かな曲線の連続による不定線で、底面がほぼ一定であり、壁面も比較的直立しており、土砂採取等を目的とする人為的な掘り込みのなされた痕と考えられる。また、埋土の堆積状況からは、三角堆積・レンズ状堆積といった自然埋没の証左が認められ、上層に厚く堆積した浅間A軽石層からは掘り込みが浅間A軽石降下以前の時期であることが予想される。遺物の中には瓦類も認められるが多くは近世の陶磁器であり、本遺構は近世の浅間A軽石降下前の掘り込みと考えられ、中世の寺院址とは直接的な関係は無いと考えられる。

(3) 中央部南縁の遺構

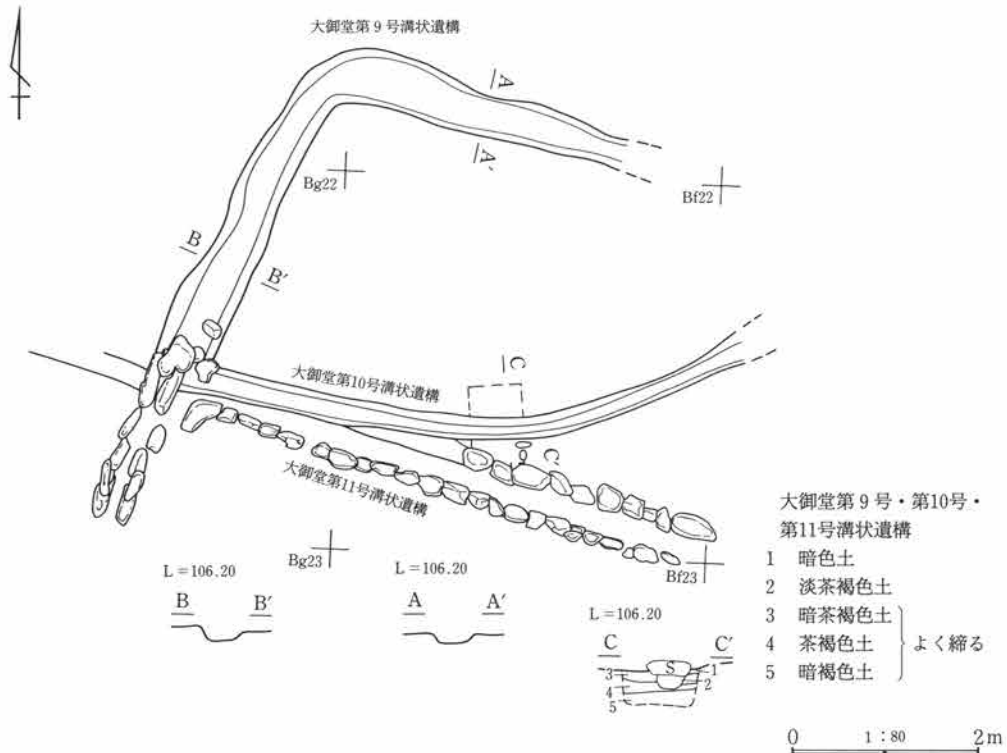
《遺構検出の状況》

寺院址南部の大御堂第2号溝状遺構に続く位置では第9号～第11号の3条の溝状遺構が検出されている。いずれも大御堂第12号溝状遺構につながり南池に続く。大御堂第9号溝状遺構は開渠であるが、大御堂第10号・第11号溝状遺構は暗渠である。いずれも南池と一体の大御堂第12号溝状遺構につながる導水施設の性格を有すものと思われるが、遺構検出の状況からは新旧関係を持つと見られる。第67図は最終の掘り方面の平面図で3つの溝状遺構の位置関係を示している。ここでの遺構確認は第11号→第10号→第9号の順であり、調査の時点においては新→中→古の構築の順序を示すと考えたが、この点については後で述べたい。

上記の溝状遺構とは別に、大御堂第13号溝状遺構がこれらの南で検出されている。東西方向の走行は前述の溝状遺構にも平行しており、寺院境内域の南縁にあたる性格を持つものと見られる。

《大御堂第9号溝状遺構》

本遺構は、大御堂第2号溝状遺構の東端部に続く Bf・Bg-21・22グリッドで検出された。確認された長さは7mで、大御堂第2号溝状遺構東端から北に3.5m (N-23°-E)、東に3.5m (N-82°-W) の長さを確



第67図 大御堂第9号・第10号・第11号溝状遺構平面図

認め、その先は大御堂第12号溝状遺構となる。溝は上端幅50cm、下端幅30cm、深さ10cmで浅いU字形の断面形状を呈す。確認面（溝底面）標高は106.05m（105.94m）～105.95m（105.86m）である。埋土は暗褐色粘質土で地山面は明褐色粘質土であり、東端に近い部分では長さ1mにわたり炭化物が検出されている。

《大御堂第10号溝状遺構》

本遺構も大御堂第2号溝状遺構の東端部からはじまり、やや曲線を描きながら東北東方向にのびる溝状遺構である。大御堂第11号溝状遺構検出後の周辺部精査で長さ2m程の暗渠の蓋石列が確認され、走行等の点で大御堂第11号溝状遺構とは異なり、確認レベルがやや下面であり、大御堂第11号溝状遺構より古い遺構と考えられる。

確認された溝の長さは約6.2mでこのうち西半は大御堂第11号溝状遺構に切られる。暗渠の埋土は粒子の非常に細かい暗灰色土でややシルト質である。地山面はよく締った茶褐色粘質土で、確認面標高は概ね106.00mで溝底面は105.88m～105.90mである。大御堂第12号溝状遺構から3.7mの範囲に暗渠の蓋石列を検出した。蓋石材には長径50cm、幅20cm～30cm程度の比較的偏平なものを選んでいる。大御堂第12号溝状遺構の際では遺構上面に径10cm以下の小礫が敷き詰められており、暗渠がこの部分では完全に覆われていたことが伺われる。また、この小礫面は3m×1mの半月形の広がりを見せ、第12号溝状遺構に面している。小礫面のレベルは106.00mでほぼ平坦になっていた。

《大御堂第11号溝状遺構》

本遺構は寺院址南部のBd～Bg-22・23グリッドで検出された暗渠である。大御堂第2号溝状遺構の東方延長線上で東西方向（N-76°-W）に10mの長さで確認され、西端では南（N-18°～28°-E）に、東端では北（N-22°-E）に走行を変える。長さ20cm～50cm、幅10cm～20cm程度の板状若しくは棒状の片岩系の石材を選び使用している。

暗渠確認時の掘り方上面の標高は106.10m、側壁石列の上面は106.20m～106.30mである。また、蓋石の上面での標高は概ね106.30mである。

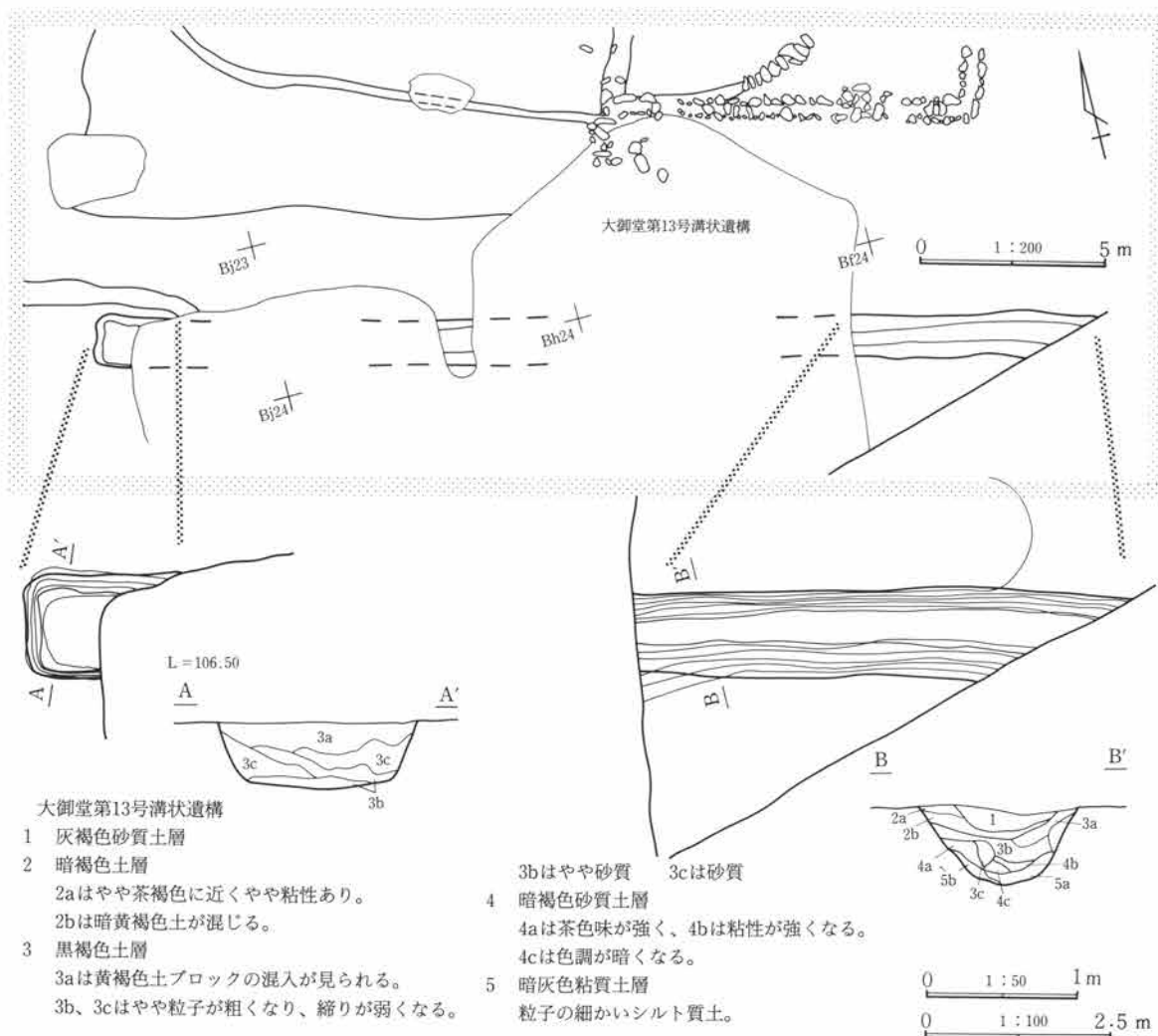
本遺構の南西に現代の大きな攪乱土坑があり、本遺構もそれに壊されて西側の状況が確認できなかった。土坑に切られた断面の観察で構築時の様子を見ると、暗渠は最初に石組規模をうわまわる掘り方を布掘りし、次に石を組んでいる。使用石材は片岩系のやや棒状あるいは板状の偏平な円礫で、側壁及び蓋石として使用する。蓋石を並べた隙間には中小の円礫を間積みして入念にふさいでいる。溝底面は掘り方底面に一致し、蓋石から暗渠底面までは約20cmであり、水はかなり流れやすい状況にあったと考えられる。

地山面はかなり安定した明褐色粘質土で、掘り方面と側壁の石との間にはややよごれた褐色粘質土が見られる。隙間の充填土と思われる。暗渠内の埋土は上下2層が見られる。上層は小礫をやや多く含んだ粘性土で石の隙間から流入したものと思われる。下層はやや堅く締った砂質土で、流水による堆積と見られ、ここではかなりの流れがあったことが伺われる。

《大御堂第12号溝状遺構》

本遺構は南池の西に連続する幅約2m、長さ17m、深さ80cmの方形掘り方の溝状遺構である。本遺構は南池の掘り下げに伴い、水口があると見られた池の西接部分の精査で確認された。溝の西端から5m位までは明確な方形掘り方が認められるが、ここから上端が徐々に広がり、Bbラインのあたりで南池の上端に続く。この辺りで上端幅は10m近くにまで広がる。また、確認された遺構の上端線は105.50mの等高線にほぼ一致する。遺構の軸方向はほぼ東西のN-86°-Wであるが、南側での上端線はN-76°-Wの方位を示す。

本遺構は、近世の池修復の石垣列によって遮蔽され、この時点では南池の導水部としての機能を無くして



第68図 大御堂第13号溝状遺構平面図

既に完全に埋没していたようである。南池の形状は近世石垣列によって比較的容易に確認できたが、本遺構については遺構検出が困難であった。トレンチ調査では瓦等の遺物や砂岩の大石が検出されており、多量の礫が濃密に分布し、遺物出土も豊富で池に関連する遺構の存在は予想された。

本遺構に連なる溝状遺構は前述の大御堂第9号～第11号の溝状遺構であるが、その新旧関係と本遺構の埋没過程とは密接な関連性があるものと考えられる。

《大御堂第9号～第12号溝状遺構の重複関係》

大御堂第9号～第12号溝状遺構の重複・新旧関係及び遺構の埋没土の様子からは以下の事が考えられる。

- ① 大御堂第11号溝状遺構は大御堂第10号溝状遺構を切って構築されている。また、大御堂第11号溝状遺構は大御堂第2号土塚墓によって切られており、土塚墓は中世後半の時期と見られるので、それ以前の年代が与えられる。
- ② 大御堂第11号溝状遺構が大御堂第12号溝状遺構に続く位置は大御堂第12号溝状遺構西端から5m程東であり、このとき大御堂第12号溝状遺構はある程度埋没していたと思われる。また、ここでは長径1m前後の砂岩が数個まとまって検出された。
- ③ 大御堂第10号溝状遺構は大御堂第12号溝状遺構のほぼ西端近くにつながり、方形掘り方に付随する小礫敷面が覆っており、園池遺構掘削当初のものである可能性が高い。

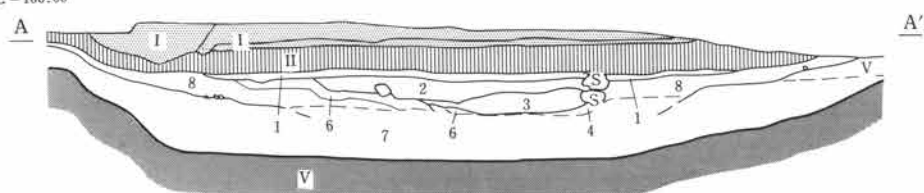


第69図 大御堂第12号溝状遺構平面図（掘り方面）



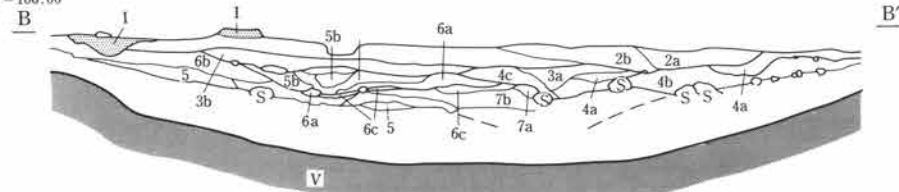
第70図 大御堂第12号溝状遺構平面図 (上面)

L=106.00



- 大御堂第12号溝注記 A-A' (BCライン)
- | | |
|--|--|
| I 灰褐色砂質土 A軽石を多量に含む。現水田耕作土。 | 4 暗黄褐色砂質土 粒子の非常に細かい砂質土 |
| II 暗褐色粘質土 | 5 暗黄褐色粘質土 粒子の細かい粘質土と小礫の混入が見られる。 |
| BD10 覆土 | 6 黄褐色土 粒子は細かく、締り良い。6aには砂質土が混じり、6aには黄色味が強い。6cには小礫が混入。 |
| 1 黒褐色粘質土 | 7 暗褐色砂質土 |
| 2 暗褐色粘質土 粒子細かくよく締り、下層では小礫を含むためややボソボソした感じである。 | 8 暗褐色土 小礫が多く混入。 |
| 3 暗黄褐色粘質土 上層は黄色味が強く、下層では灰色味が強い。 | V 黄褐色粘質土 小礫を多量に含むシルト質粘質土。 |

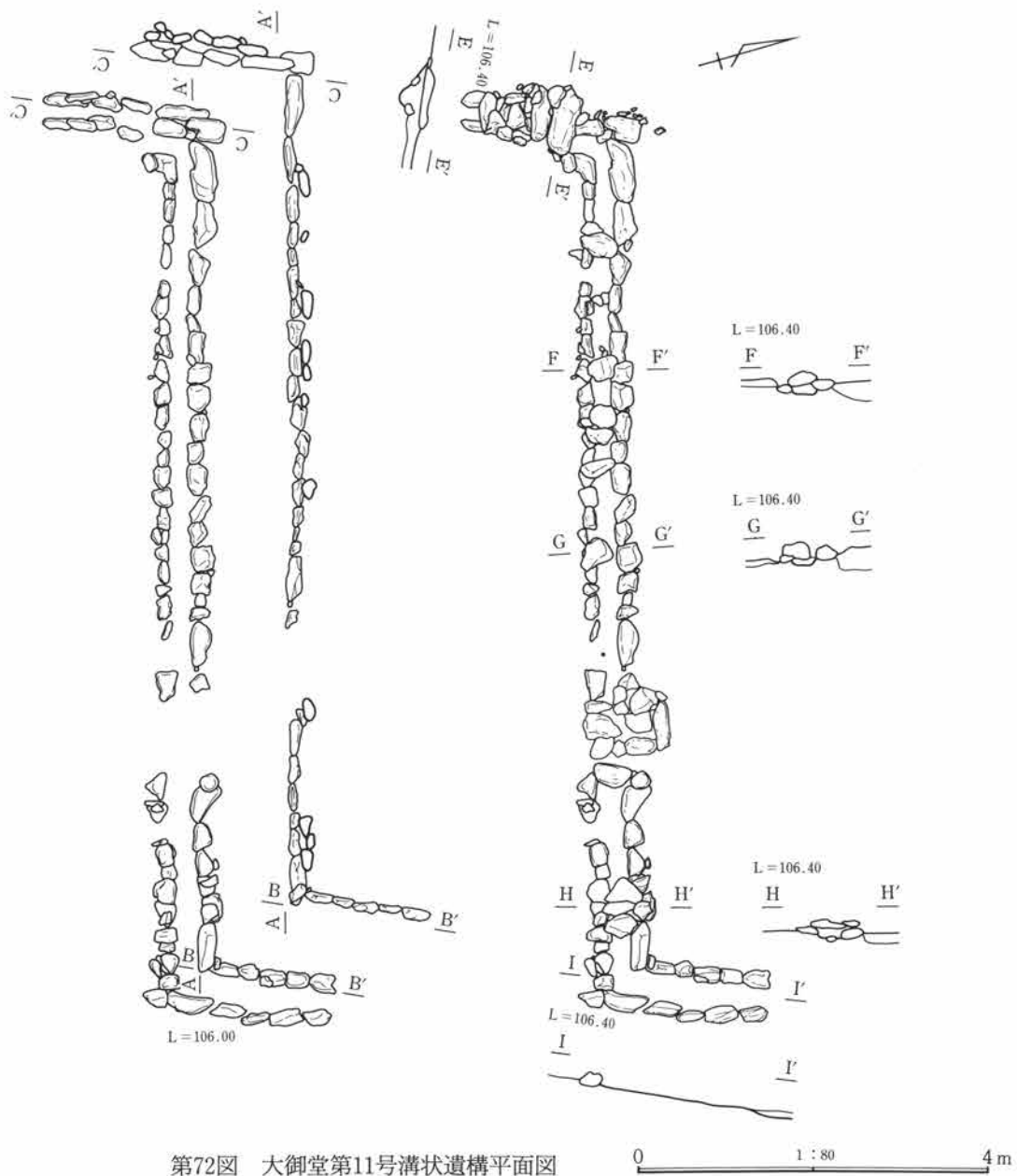
L=106.00



- 大御堂第12号土層注記 B-B' (Bbライン)
- 1 灰褐色砂質土 A軽石を多量に含む。
 - 2 褐色土 2aは小礫を少量含み、黄褐色土粒子を混じる。2bは茶色味が強く、2cは暗い色調となる。
 - 3 暗褐色粘質土 下層では小礫黄褐色土粒子を混じる。
 - 4 灰褐色粘質土 粒子のきめは細かくややシルト質。4b、4c層には小礫を混じり、4c層は暗い色調となる。
 - 5 暗褐色土 粒子は非常に細かく均質で良く締っている。5aには黄褐色土粒子が混じており、5b、5c、5dはほぼ同じ土質で暗→明→茶と色調が変わる。
 - 6 暗褐色土 粘質土で6aは暗褐色粘質土粒子に黄褐色土を混じたもの、6bは小礫を混じた茶褐色土、6cは暗褐色粘質土混黄褐色土。
 - 7 暗灰色粘質土 粒子のきめ細かくややシルト質。7aには黄褐色土粒子が混じり、7bは暗い色調となる。
 - 8 暗黄褐色土 粒子の非常に細かい砂質、遺物出土(土師質土器)

0 1:80 4 m

第71図 大御堂第12号溝状遺構土層断面図



第72図 大御堂第11号溝状遺構平面図

- ④ 大御堂第11号溝状遺構の西側部分の暗渠側壁に修築の痕跡が伺える。大御堂第2号・第10号溝状遺構を側壁がふさぐような形であり、側壁そのものは大御堂第9号溝状遺構に自然につながる方向性を持つ。
- ⑤ 南池は浅間A軽石の二次的な堆積がかなり厚く見られたが、降下時の純層は確認されず、この段階では池として機能していたと見られ、石垣の修築もこの頃と考えられる。石垣修築時には南池西部に閉塞石垣と小礫が積み上げられ、大御堂第12号溝状遺構は既に埋没していたことがわかる。耕作土層下の暗褐色土層はこの頃の遺構覆土と考えられる。
- ⑥ 砂岩がまとまって検出されたが、園池遺構の滝口に見られる石組の可能性があり、暗渠から池に向かって水を落とす位置と考えられる。ただし、その場合には大御堂第12号溝状遺構はある程度埋没していたものと思われる。
- ⑦ 砂岩は鮎川の河原からのものでなく牛伏山系のものであり、寺院での使用を目的として運ばれて来たものである。

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

- ⑧ 大御堂第12号溝状遺構埋土中に多量の砂岩片がみられたことから、この場所で砂岩の石材加工が行われたと考えられる。
- ⑨ 大御堂第12号溝状遺構埋土中からは出土遺物も多くあり、特に瓦類が豊富である。遺物は礫とともに溝中より出土したが、溝埋没時の投棄によるもので、寺院の破却と関係するものと思われる。
- ⑩ 大御堂第9号溝状遺構については、大御堂第12号溝状遺構と80cmの段差があって、そこに水流等の痕跡は見られず、遺構規模にも隔たりがあり、直接結び付くとは考え難い。また、大御堂第2号溝状遺構とのつながりは大御堂第10号溝状遺構の方が自然であり、大御堂第11号溝状遺構西側暗渠の方向性が大御堂第9号溝状遺構と共通することから、相互の関連が伺われる。

以上のことから、大御堂第2号溝状遺構に続き、南池への導水施設としての遺構は大御堂第11号溝状遺構と見られ、次に大御堂第9号溝状遺構が造られたと考えられる。このとき大御堂第12号溝状遺構は埋まり始めており、大御堂第9号溝状遺構はその埋土中に続くとは推定される。砂岩の大岩は園池遺構に計画して置かれたと推定できるが、この時点でどのような在り方であったかは不明である。大御堂第11号溝状遺構はこの砂岩を滝口に使用したと思われる。大御堂第12号溝状遺構はある程度埋まっていると推定され、走行がやや南よりに変わっているものと考えられる。

大御堂第12号溝状遺構が機能しなくなる時期は大御堂第11号溝状遺構と同時期と推定され、大御堂第2号土壇墓構築以前と考えられる。南池との接続部で見られた閉塞や石列は近世にはいつてからのものと考えられる。

なお、大量の砂岩の碎片が出土しており、ここで石材加工が行われた形跡と認められる。

《大御堂第13号溝状遺構》

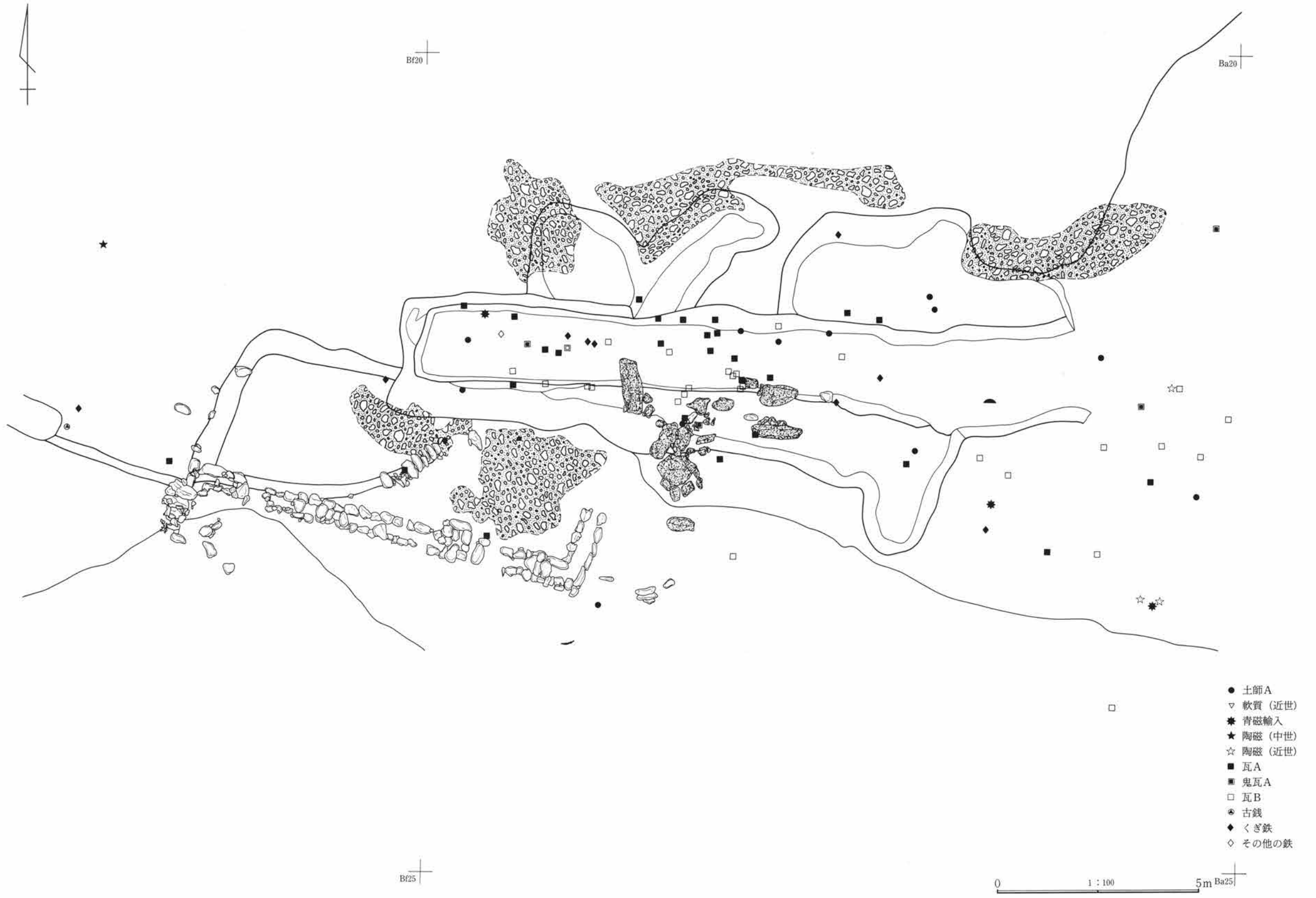
本遺構（BD16）は大御堂第11号・第12号溝状遺構の南の Be24・25グリッドで検出された。確認された長さは約6mで西側は攪乱土坑により壊されて不明であるが、この延長方向の Bh23グリッドで部分的に確認でき、寺院址南西部の Bk24グリッドでもこれに続くと思われる溝状遺構（BD8）が検出された。BD16として確認された部分では、上端幅1.1m、下端幅50cm、深さ40cmの箱薬研の断面形状を呈す。主軸方向はN-76°-Wである。埋土下層には泥質土・砂質土等流水の影響を受けたと見られる堆積が観察される。遺物出土は見られなかった。

(4) 園池遺構

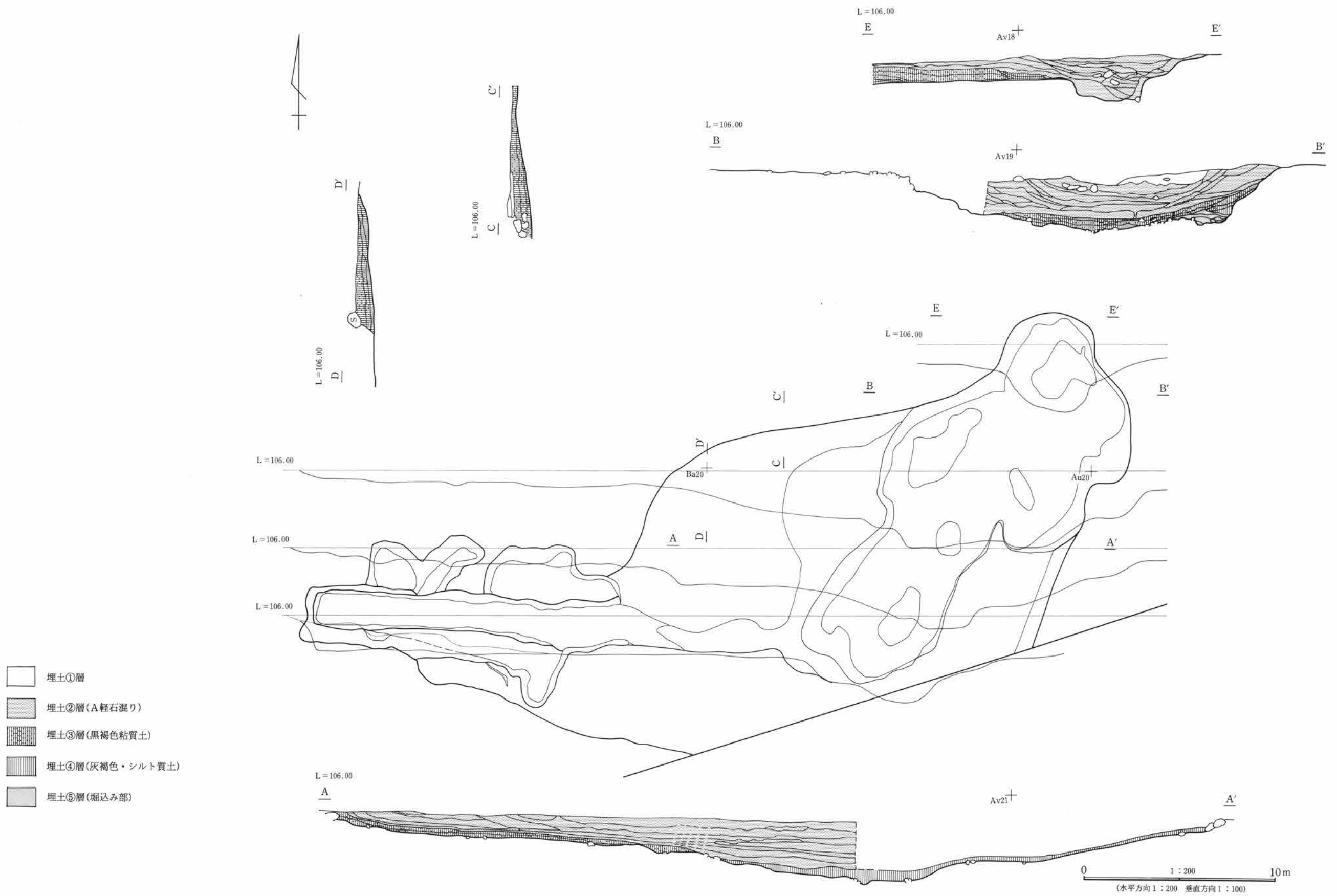
《園池遺構検出状況》

本遺構は、藤岡市教委の高速道路予定地側道際の水路部分の調査において、池の一部と見られる石垣等が確認されており、今回の調査と併せて、絵図・地籍図に記載された「アミダイケ」に該当する遺構を南端の一部を残してほぼ全面的に検出した。確認された園池遺構は北池・南池の二つで、南北の瓢箪形に配置され、池の間は土橋状になって二つを隔てており、別個の存在として確認され、それぞれの池に水を引き入れるための溝状遺構も検出された。また、南池では深い掘り込みを持ち池と一続きになる溝状遺構も付設されていた。池の導水施設と考えられる溝状遺構には暗渠も見られ、滝口の立石と思われるような大石も出土し、寺院の一部を構成する園池遺構であると考えられた。

「アミダイケ」が二つの池を指したものであるかどうかは不明であるが、地元古老の記憶にある「子供のころに泳いだ」「大正時代に埋めた」とされる池は北池であろうと思われる。また、「アミダイケ」は寺院の園池遺構にたいして付けられた性質のものと思われ、池が本来二つであるかどうか別として、ここで検出された池の名称を考えたい。



第73図 大御堂第12号溝状遺構遺物出土分布図



第74図 大御堂寺院址南池～第12号溝状遺構平面図

園池遺構は、トレンチ調査の段階で浅間A軽石の埋没範囲として確認でき、池の周縁部には石列も検出された。トレンチ調査の段階から陶磁器類をはじめ比較的多くの遺物が出土している。南池に伴う溝状遺構の中には瓦類が多く見られた。なお、園池遺構にあたる部分は土地改良事業に伴う農道通過予定地で生活道路として使用されていたために、道路の東側→西側→道路部分と3分割して調査を進めざるを得なかった。

池の確認面標高は北池で105.20m～105.40m、南池で105.20m～105.60mである。それぞれの池で東縁と北縁部分に石垣列が見られたが、これは近世以降の池の修復によるものと考えられ、近世面の標高は石垣列と同様の高さ、すなわち105.40m～105.60m程であったであろうと推定される。池は石垣を池の周縁とする近世面を最初の遺構面として検出し、引き続き池構築時の状況を示す中世面の検出に努めた。南北の池の間の幅は70cmで、土橋状に二つの池を隔てていると思われるが、ここでの地山面の標高は104.91mであり、構築時よりは下がっていると思われるので、当初の形状が二つになっていたかどうかは不明である。以下、北池・南池の順に述べる。

〈北池〉

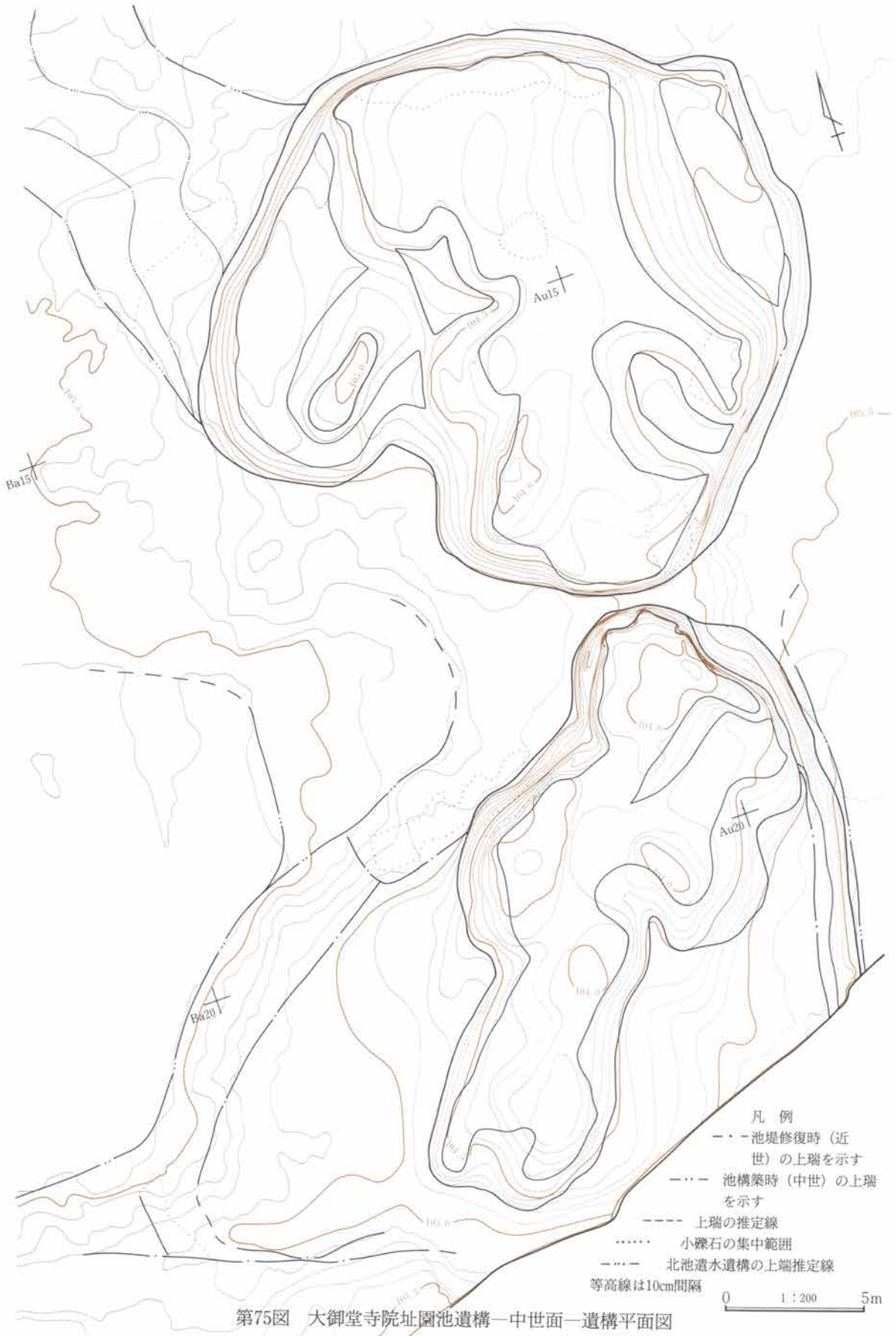
北池の遺構形状はやや不整な円形を呈し、その規模は座標軸に沿う南北間で20.6m、東西間で22.8mである。池の周縁部には近世の池改修に伴うと見られる石列が西縁、北縁、東縁で検出され、東北隅から東方に伸びる溝状遺構も検出された。これは調査前の地割りに見られる水路に一致する。石列は径30cm～60cmの円礫の平口を池側に向け横一列に並べた状態であり、水際の補修を目的とするものと考えられる。池の北面及び東面はやや急な立ち上がりでこの付近での深さは確認面から約1mである。池の西側法面は比較的緩やかな傾斜で立ち上がり、上端も明瞭ではない。石列検出部分では、池掘り方上端と石列はほぼ一致する。

北池の埋土を観察すると、上から、①茶褐色粘質土→②砂質混土層→③灰色シルト質土→④褐色粘質土である。埋土①層は水田耕作土下で確認され、80cm～90cmの厚さで堆積し、礫も混じり土層はやや汚れている。埋土②層は浅間A軽石を主とする砂質土で、砂質層及び砂質混土層等の互層となっている。この層は池の中央部では10cm前後と薄いが、池の法面上では50cm程度に厚くなり、池への流れ込みを物語る。埋土③層は層厚3cm～5cmと薄いがほぼ平均した厚さで、きめの細かいシルト質土であることから、池が安定していた時期の底面上の水成堆積によるものと思われる。この層のラインは周縁部石列に一致する。埋土④層は池埋土最下層で、池底面に直接の灰褐色粘質土である。この層には火山灰起源の砂質土は含まれない。

〈南池〉

南池の遺構形状は検出した範囲内では三角形に近い不整円形を呈し、北池同様に近世の石列が検出された。石列は東縁、北西縁と西南縁に見られる。池の規模を石列を例にとると東西約24m、南北は15m～20mの大きさである。また、中世面と思われる池の掘り方の規模は東西25m、南北20mである。池の深さは約1.5mである。池掘り方上端は、東縁では石垣のラインとほぼ一致するが、北西縁では石列から2m～3m外に広がっており、東縁石垣の上端レベルが105.70m～105.80mの数値を示すことから、本来の汀線はこれと同レベル若しくはこれに近いものと考えられ、105.60mのラインが北西縁での上端線に近いと思われる。前述の北西掘り方上端線にほぼ一致する。

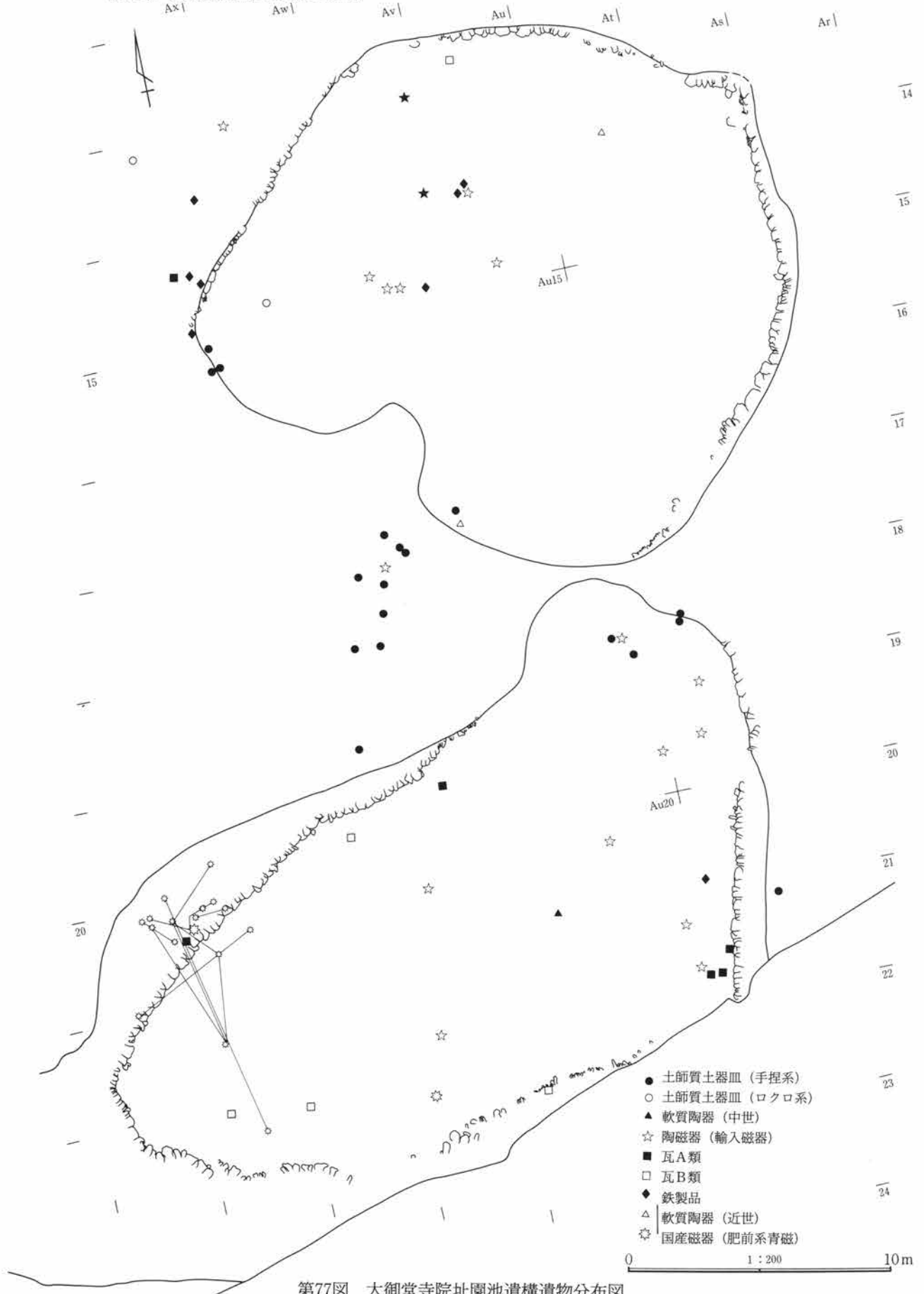
南池の西には大御堂第12号溝状遺構が続き、掘り方面の観察からは両者一体的なものであったと考えられる。近世の石垣を池周縁部に積んだときに大御堂第12号溝状遺構はほぼ完全に埋められて、南池とは遮蔽されたものと思われる。南池の埋土は、基本的には北池と同様の傾向が見られるが、北池埋土①層は認められず、北池埋土②層にあたる砂質土・砂質混土層は約1m近い厚さで堆積する。この層は純砂質・砂質混土・混砂質土・砂混じり土等が交互に層をなし、南池の主たる埋没土である。この層中で確認されたテフラは主



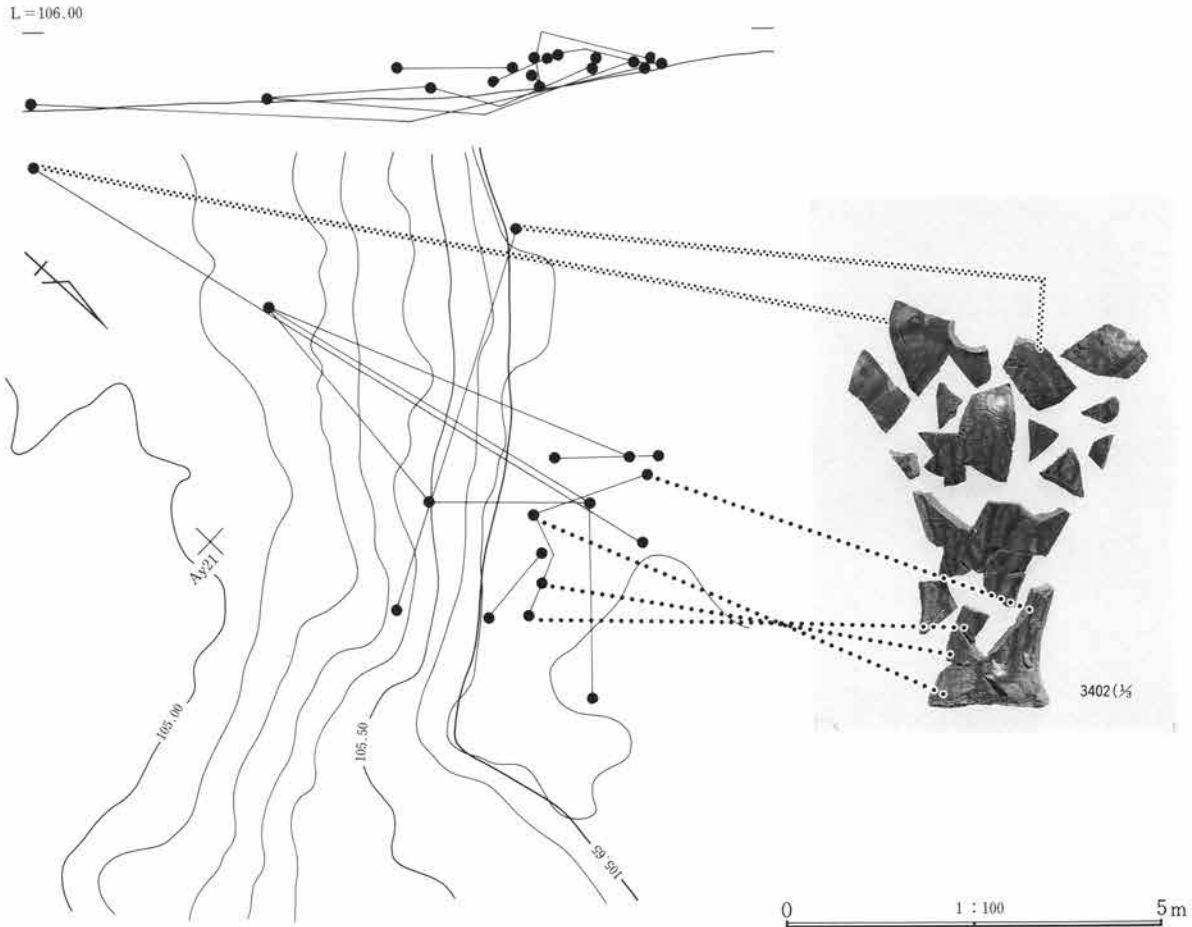


第76図 大御堂寺院址園池遺構一近世面一遺構平面図

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物



第77図 大御堂寺院址園池遺構遺物分布図



第78図 大御堂寺院址南池遺物出土状況平面図

に浅間A軽石に由来するものであるが、埋土②層最下層のものに浅間B軽石に由来するものも認められている。いずれも二次堆積土で流水の影響が認められる。埋土③層・④層土の堆積状況は基本的には北池と同様で、20cm～30cmの厚さの粘質土が池底面上に堆積する。上層は粒子が細かく密な黒褐色粘質土が、下層はややシルト質の灰褐色粘質土で、池底面は小礫交じりの黄褐色粘質土となる。

《園池遺構の構築面と埋没過程について》

北池・南池の二つの池は明治9年の段階では地籍図で存在が確認できる。最終的な埋没はここが全面的に開田された時期と見られ、それは地元古老によれば大正時代である。池は表土層（水田耕作土）を取り除いた段階で石列と浅間A軽石層で確認でき、北池・南池ともに埋没土にある程度の共通性が見られるが、埋没時期の差が層位に反映して、その過程に差異が認められる。

北池埋土①層の明褐色粘質土が池での最も新しい層で、この層はまとめて埋め戻したものであり、②層以下は自然埋没であると考えられる。南池の埋没年代は北池より古いとその時期は浅間A軽石降下以降と見られ、埋土②層中の浅間A軽石純層には流水の影響が見られ二次的堆積の特徴がある。池周縁部改修は②層土埋没以前の近世前半～中頃と推定される。石列の頂部標高は105.70m～105.80mでほぼ一定であることから、当時の地山面の標高はこれに近いものと思われる。池の掘り方の上端もほぼ105.70mである。南池北西の池周縁部において近世石列と掘り方上端線との間は2m～3mあり、徐々に池が狭まっていることが伺われる。

近世石列と掘り方上端線がほぼ一致する北池北縁～東縁と南池東縁では、改修の際の浚渫等による掘削があったと推定され、埋土の観察においても黒褐色粘質土・灰褐色泥質土等はあまり良好な状態では残らず、

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

浅間A軽石を主とする砂質土層が底面近くまで堆積している。南池の北端付近には石列は見られず池の上端線もここだけで円弧を描くことから、石列の改修以降に掘られたものと推定される。また、この部分では池側面に地山の崩落も見られ、ここでは当初の遺構形状は確認できない。

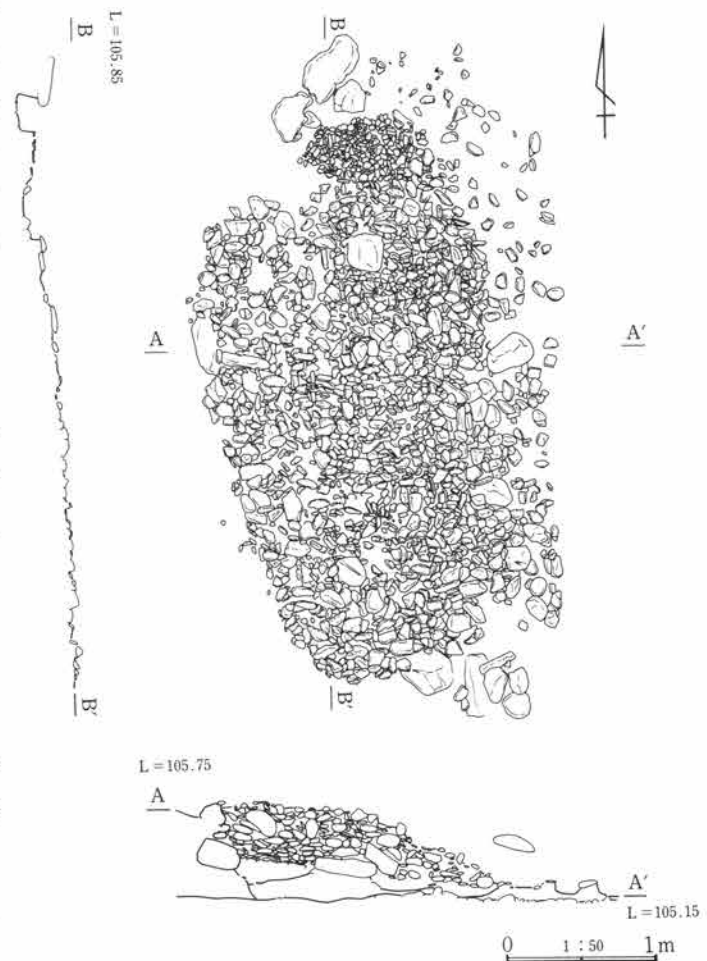
北池南西部と南池北西部は池の法面の傾斜が比較的緩やかであり、寺院の中心に面している。石列の背後の堆積土には池埋土③層・④層が見られ、ここを池汀線と考えることができる。また、池汀線外側の地山面には小礫が一面に敷き詰められ、緩やかな法面とともに洲浜を意識した園池の造りがなされたと思われる。

南池は構築時には大御堂第12号溝状遺構とひとつながりの遺構であったと考えられるが、大御堂第11号溝状遺構からの滝口部分は第12号溝状遺構西端から約3mあり、ここまではある程度埋まっていたのではないかと推測される。

また、この付近では砂岩の大石が複数個検出された。いずれも横位であったが溝状遺構と同方向に置かれたものも見られ、また、この付近にのみ集中することから、暗渠である大御堂第11号溝状遺構の末端部に滝口の大石として配されたものと思われる。但し、これはその出土位置から言えることで、大御堂第10号溝状遺構との関連については不明である。また、北池と南池の関係については検出した範囲内では別々なものとして考えた。

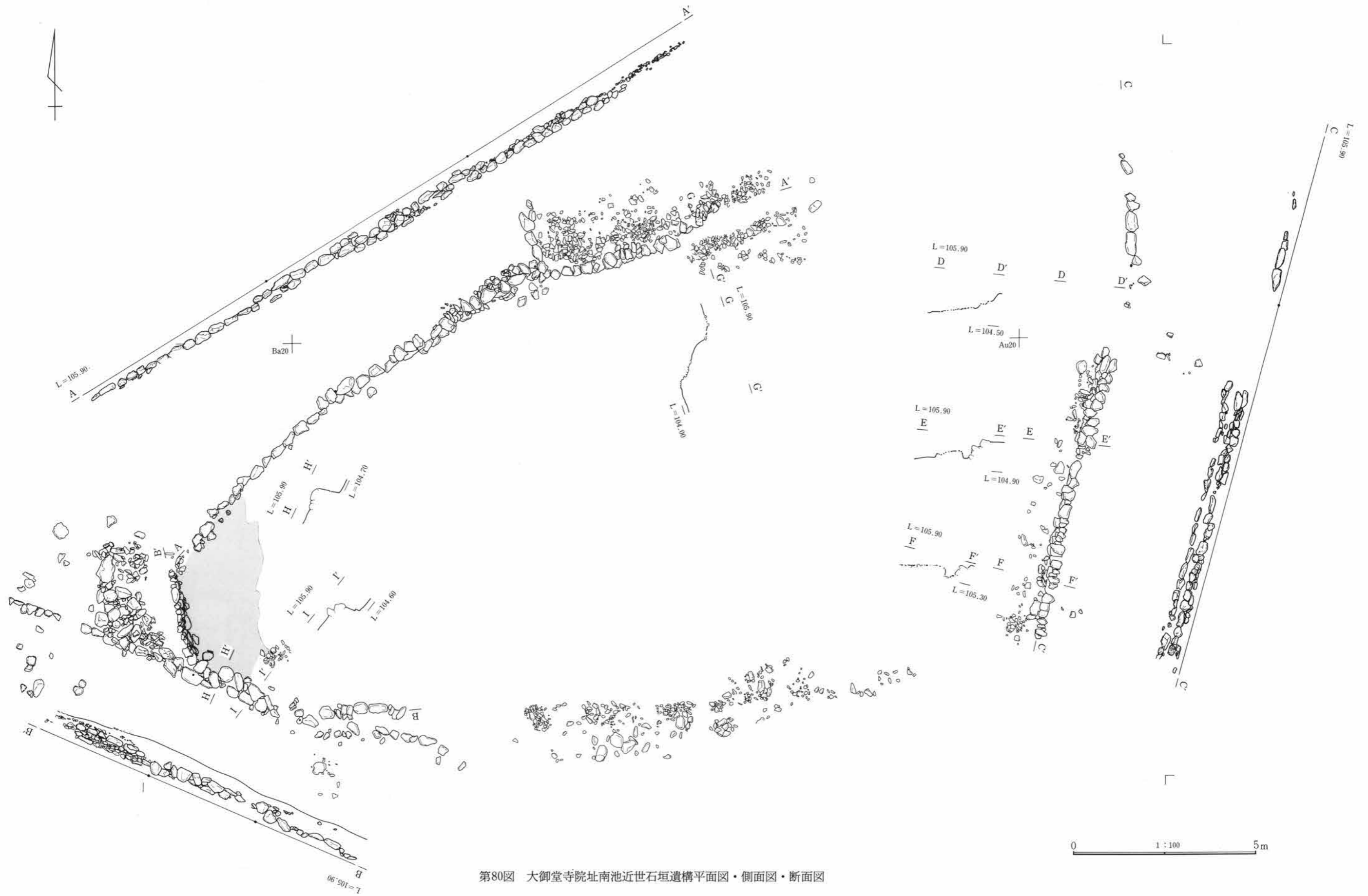
《園池遺構の遺物出土状況》

北池・南池は大御堂第12号溝状遺構及び大御堂第1号池状遺構とともに寺院址の中では遺物の出土が量的に多い区域である。選択した寺院址出土遺物（破片数）のうち北池出土は24%、南池出土は15%、大御堂第12号溝状遺構付近出土のものは13%を占め、量的には寺院址出土遺物の約半数が園池遺構からのものと言えよう。ここでの出土遺物を見ると陶磁器類の量が多く全体の約%の出土量である。池埋土の層位と遺物の出土傾向と比較すると、埋土②層の浅間A軽石を含む砂質土・砂質混土層中からのものは17c～18c代を中心とする瀬戸系及び肥前系の陶磁器類が多い。また、埋土③層の黒褐色粘質土の上面からは17c前半代の肥前系青磁が出土している。ここでの遺物の出土傾向からは、近世の段階で寺院址内にこれだけの遺物を伴う遺構の存在があったことを示唆する。近世石列の修築以前と見られる遺物は埋土④層中及び池底面上から出土している。南池北西部のAy-20グリッドでは礫面上から古瀬戸の瓶子が破砕片ではあるがまとまって出土している。



第79図 大御堂寺院址南池西部閉塞部遺構平面図

大御堂第12号溝状遺構からの出土遺物と



第80図 大御堂寺院址南池近世石垣遺構平面図・側面図・断面図

南池からの出土遺物とを比較すると、大御堂第12号溝状遺構からは瓦類をはじめとして土師質土器・軟質陶器など中世のものが多く、近世陶磁器類はその覆土上層に見られただけで、南池埋土③層・④層中の出土遺物と同様な傾向を示している。

(5) 中央部検出の遺構

《園池遺構周辺の状況》

土塁跡から園池遺構までの間は約40mあり、検出面は約30cmの段差で下段と上段とに分かれる。下段は園池遺構に西接する中央部の東半にあたり、検出面標高は105.60m～105.70mである。この面では広範な小礫面が検出されたが遺構はなく、遺物の出土も寺院址の中では最も少ない区域と言える。上段は中央部西半の部分で下段とは約30cmの比高差があり、検出面標高は106.00m～106.10mである。この面は土塁跡より是一段低く大御堂第2号溝状遺構検出面とほぼ同レベルである。上段部分は大御堂第2号溝状遺構の東側12m～15mの幅で広がり、北側は大御堂第1号池状遺構によって削られている。遺構は上段の中央付近で掘立柱建物跡1棟とピット群が、上段南西隅で掘立柱建物跡1棟と井戸跡1基、ピット・土坑及び墓墳が検出された。

大御堂第2号溝状遺構と園池・遺水遺構に取り囲まれた中央部は、寺院の主要建築物があったと思われる区域であるが、かなり削平を受けたと見えて建物の基礎（基壇）構造らしきものは検出できなかった。下段で検出された小礫面は調査当初において園池遺構に伴う洲浜の可能性を考えたが、小礫面の分布範囲がやや園池遺構と離れ、礫石の個々の状況が河川流水域に見られる自然礫の堆積状況の特徴を備えていることから地山の礫層の露頭部分と判断した。

《遺構の分布について》

寺院址中央部では、上段の中央部と南西部でピット・土坑等が検出された。遺構として把握されたのは中央部での大御堂第1号掘立柱建物跡、南西部の大御堂第1号井戸跡・大御堂第2号掘立柱建物跡と墓墳と考えられる土坑群である。寺院址中央部は調査前から圃場としては比高差の大きい段差が見られたが、表土層掘削後の遺構検出面にも同様の段差が存在する。これは、寺院廃絶後の過程での造作によるものと考えられ、寺院の破却に起因してと、開田のためとの二つの理由が考えられる。調査区の北端で検出された浅間A軽石層下の畑作遺構は近世中頃には農地となっていたことを示している。

《大御堂第10号掘立柱建物跡》（第82図）

大御堂第10号掘立柱建物跡（BB1）は寺院址南西部に近い Bh・Bi-20・21グリッドで検出された。桁行2間、梁行1間、柱穴数6個の小規模なものである。平面形は方形に近く、桁行3.89m（13尺）、梁行3.61m（12尺）、面積14.04㎡、桁行方位N-13°-Wである。この建物跡は土塁の南西隅の内側に位置し、遺構検出面は大御堂第2号溝状遺構と同レベルのⅢ層土である。この建物跡と重複する関係で第6・7号土坑墓があり、周辺にも土坑墓がいくつか検出されている。掘立柱建物跡が土坑墓群に先行するものと思われる。遺物はグリッドの取り上げであるが輸入磁器・古瀬戸の小片が軟質陶器・瓦類とともに見られる。

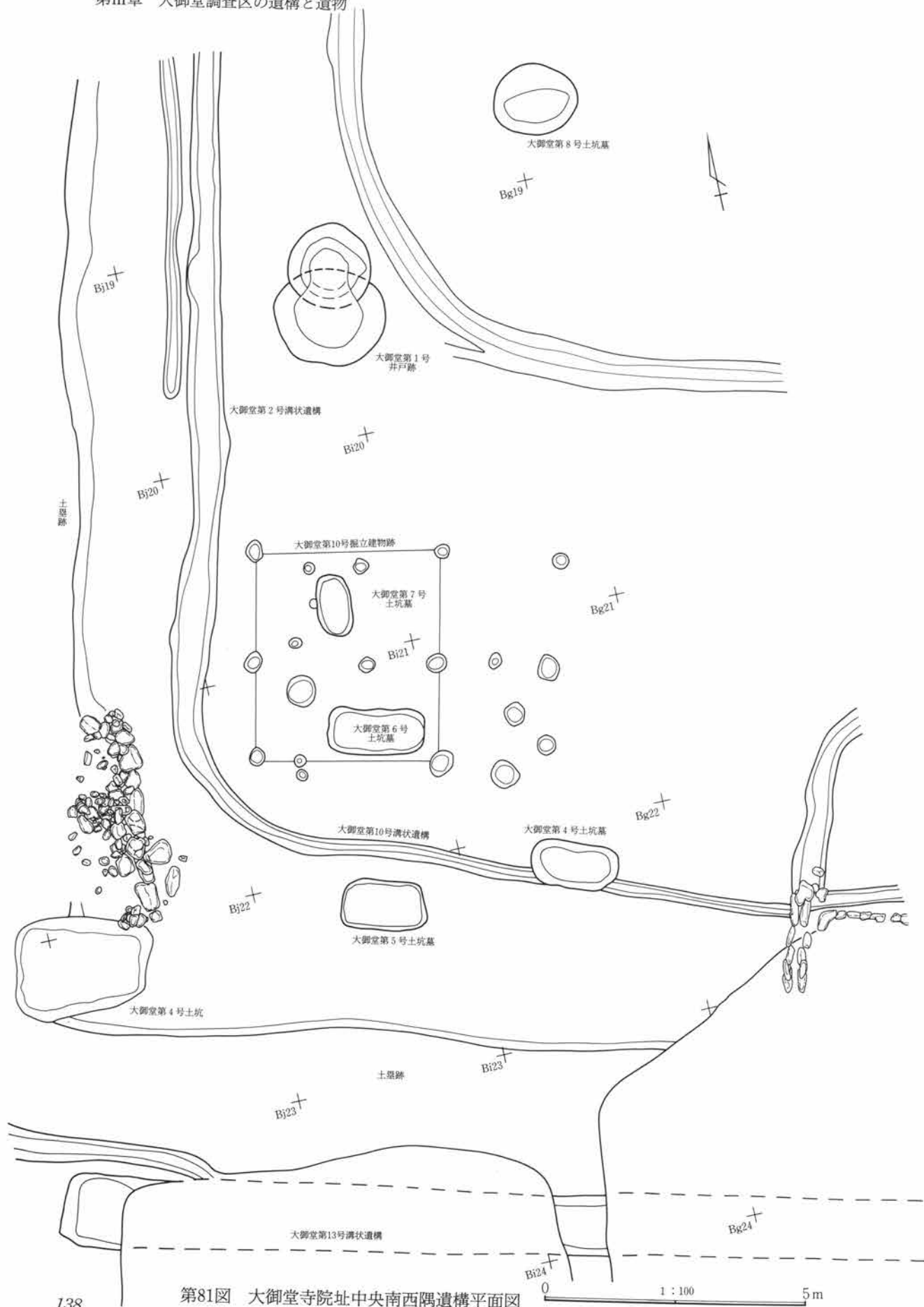
《大御堂第11号掘立柱建物跡》（第83図）

大御堂第11号掘立柱建物跡（BB2）は寺院址中央部の Be・Bf-15・16グリッドで検出された。桁行2間、

第8表(3) 大御堂調査区掘立柱建物跡一覧表—寺院址中央部—

遺構名称	調査名称	棟方位	規模 (間)×(間)	面積(㎡)	桁行(m)		梁行(m)		庇(m)	柱穴平面 形状	備考
					①長辺	②短辺	①長辺	②短辺			
第10号掘立柱建物跡	BB1	N-13°-E	2×1	14.07	①3.88	②3.84	①3.65	②3.64	—	円形	
第11号掘立柱建物跡	BB2	N-79°-W	2×1	9.80	①3.89	②3.89	①2.54	②2.50	—	円形	

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

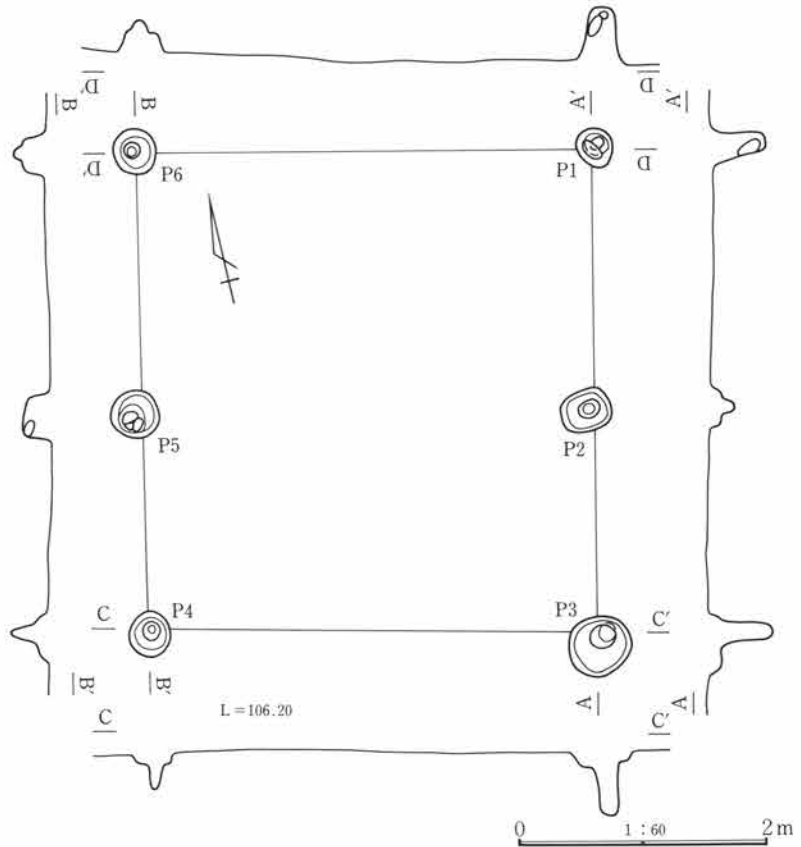


第81図 大御堂寺院址中央南西隅遺構平面図

第10号掘立柱建物跡柱穴計測表

BB 1		
柱穴番号	長径×短径×深さ (cm)	底面標高 (m)
P 1	30× 27× 44	105.54
2	40× 33× 20	105.83
3	49× 46× 51	105.52
4	34× 31× 31	105.75
5	38× 37× 23	105.91
6	35× 33× 28	105.86

柱間計測値(cm)		
桁行	梁行	
P 1~P 2	204	P 1~P 6 365
P 2~P 3	184	
		P 2~P 5 360
P 6~P 5	210	
P 5~P 4	170	P 3~P 4 364

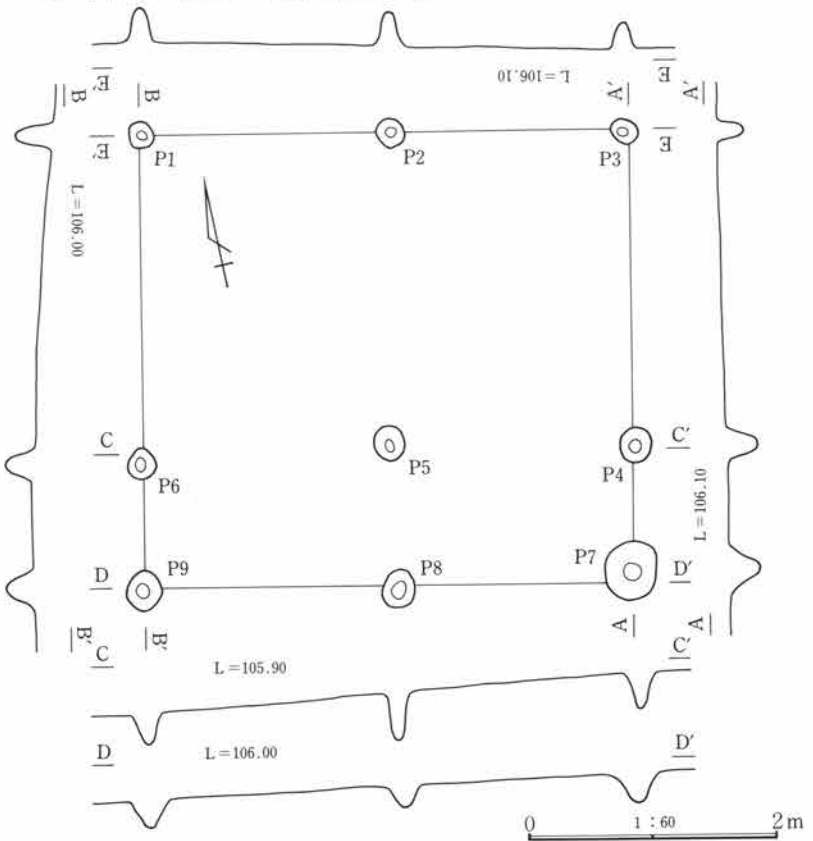


第82図 大御堂第10号掘立柱建物跡遺構平面図

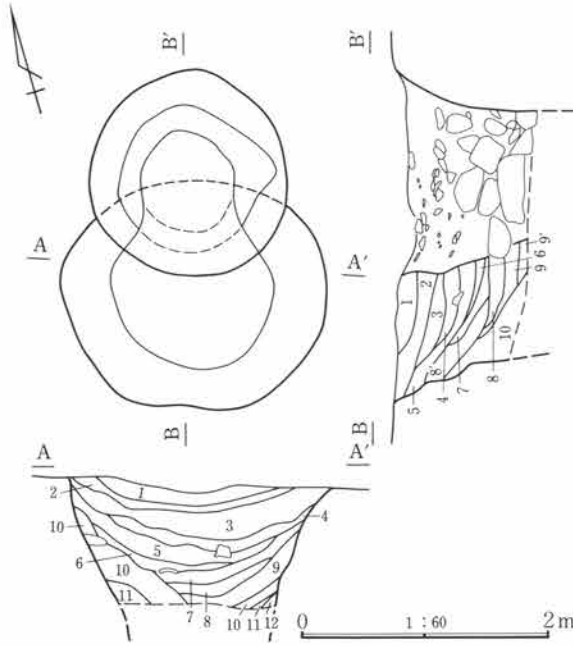
第11号掘立柱建物跡柱穴計測表

BB 2		
柱穴番号	長径×短径×深さ (cm)	底面標高 (m)
P 1	22× 20× 28	105.62
2	24× 23× 26	105.70
3	22× 20× 21	105.77
4	27× 24× 26	105.71
5	28× 25× 38	105.24
6	25× 22× 24	105.50
7	46× 41× 24	105.70
8	30× 26× 18	105.63
9	33× 28× 22	105.50

柱間計測値(cm)		
桁行	梁行	
P 1~P 2	203	P 1~P 6 254
P 2~P 3	186	P 6~P 9 103
P 6~P 5	201	P 2~P 5 252
P 5~P 4	188	P 5~P 8 115
P 7~P 9 は庇		P 3~P 4 250
P 9~P 8	205	P 4~P 7 100
P 8~P 7	185	



第83図 大御堂第11号掘立柱建物跡遺構平面図



第84図 大御堂第1号井戸跡遺構平面図

梁行1間半の極めて小規模なものである。梁行の南の半間は底部分とも考えられる。この周辺には柱穴と見られるピットがややまとまって検出された。遺構検出面は耕作土層下のⅢ層面である。この付近で検出されたピットには遺物を出土するものが多く、瓦類が多く見られる。

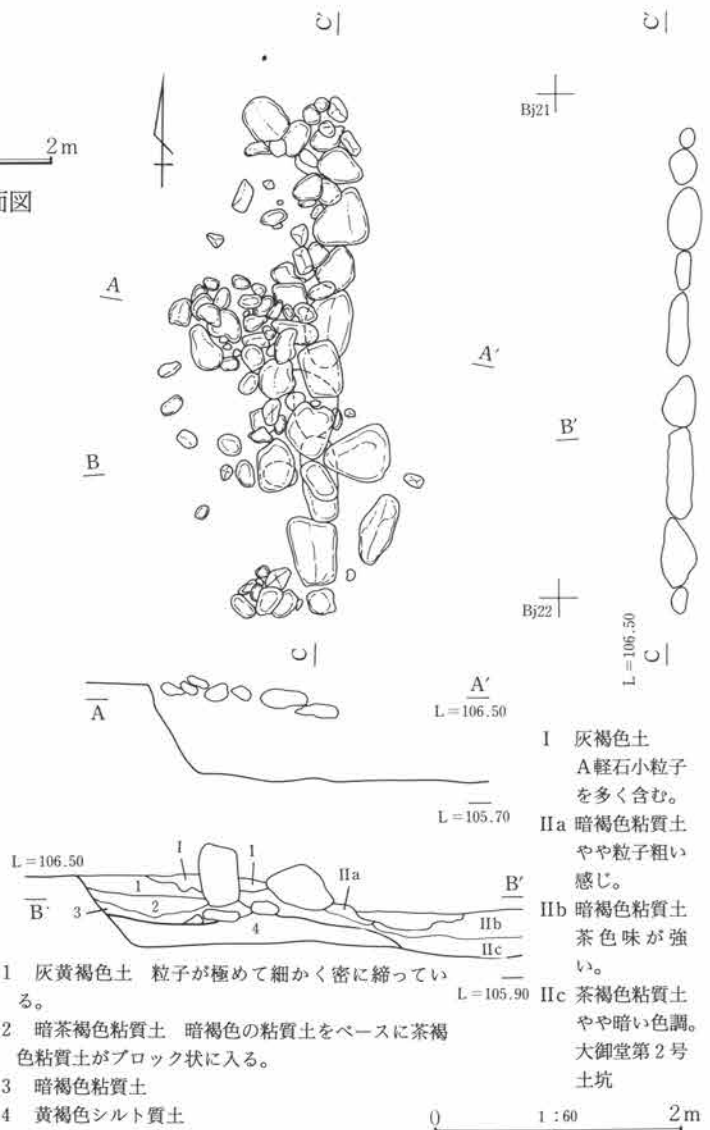
《井戸跡》(第84図)

大御堂第1号井戸跡はBh・Bi-19グリッドで検出された。最終的な掘り方の平面形状は瓢箪形であるが掘り返しによる新旧2時期の重複の結果と思われる。その様子が土層断面で確認できる。最終掘り方面での長軸長は約2.6mであるが、径2.1mの井戸bが掘られ、それがほぼ埋まった段階で、やや北にずれて径1.5mの井戸aが新たに掘られたものと考えられる。掘り方の最終底面は湧水のために確認できず、深さ約1.1mまでしか掘れなかった。井戸aの埋土は混土礫層で、30cm~50cm

大の礫と多量の小礫を投げ込み埋めたもので埋土はほぼ同一層であり、一次的な埋没と考えられる。井戸bの埋土1層には浅間B軽石起源の砂質土が見られ、その下に粘質土と砂質土が交互にレンズ状堆積をなす。遺物は瓦類が多く、土師質土器・軟質陶器類が見られ出土量が多い。井戸aと井戸bとの出土遺物を比べる

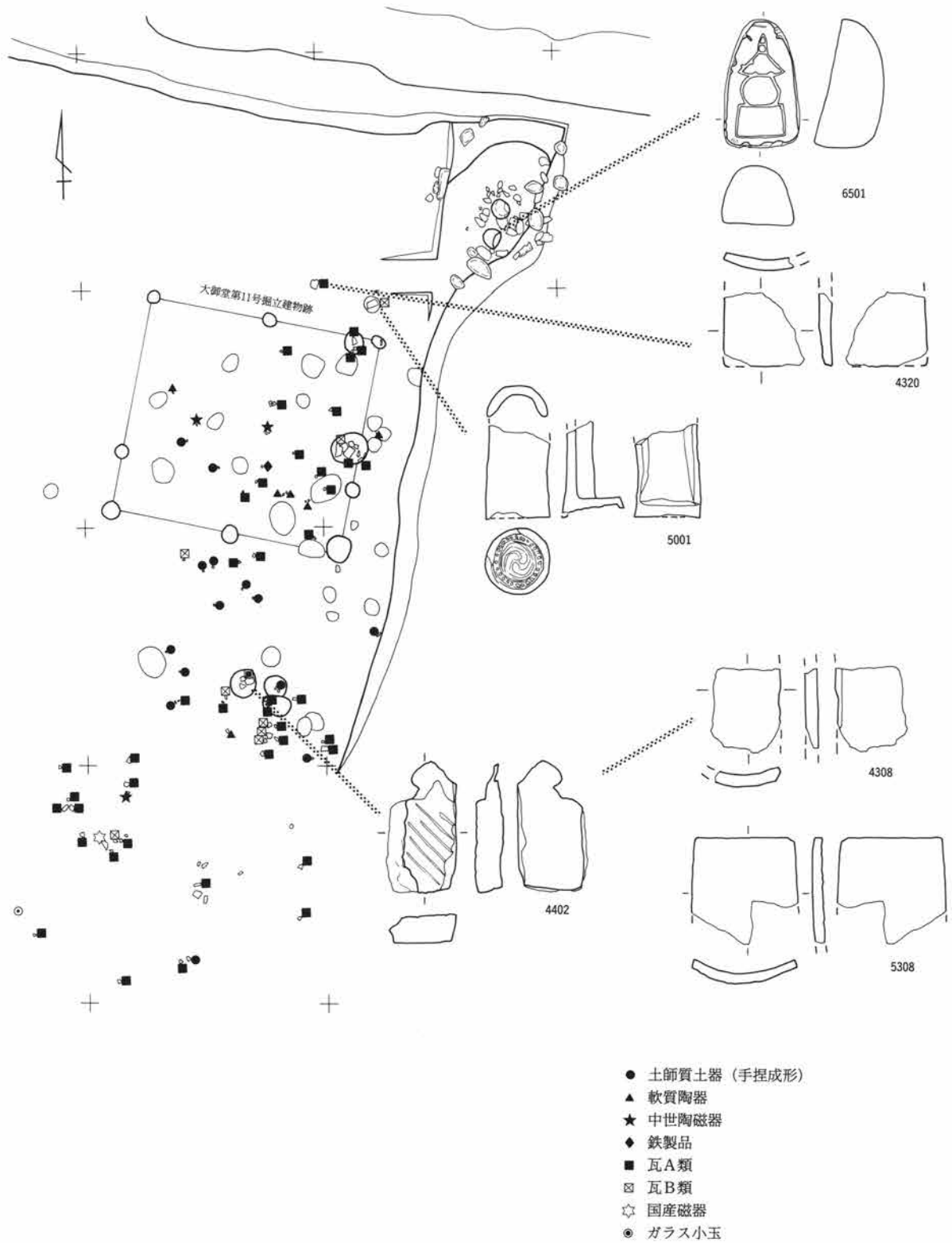
大御堂第1号井戸跡

- 1 黄灰色土 軽石を多量に含む。
- 2 暗灰色土 やや黄色味がある、粘性あり、軽石含む。
- 3 暗黄灰色土 軽石を少量を含む、粘性はない。
- 4 暗黄灰色土 3層に似るが、FAは含まれない。
- 5 黄灰色粘質土 粘性が強い、やや青味を帯びるが強い。
- 6 青灰色粘質土 粒子が細かい、粘性が強い。
- 7 青灰色砂質土 粒子が粗いが粘性しまりある。
- 8 青灰色砂質土 7層より粒子が細かく粘性がある。
- 8' 8より粒子が粗く粘性はさらに弱い。
- 9 青灰色粘質土 やや黄色味を帯びる。
- 9' 9より黄色味強い
- 10 明黄灰色粘質土 5層より黄色味が強く、さらに粘性がある。
- 11 明黄灰色粘質土 10層より粒子が粗い、粘性あり。
- 12 明黄褐色粘質土 粒子は非常に細かい。



第85図 大御堂第2号土坑遺構平面図

- 1 灰黄褐色土 粒子が極めて細かく密に締っている。
- 2 暗茶褐色粘質土 暗褐色の粘質土をベースに茶褐色粘質土がブロック状に入る。
- 3 暗褐色粘質土
- 4 黄褐色シルト質土
- I 灰褐色土 A 軽石小粒子を多く含む。
- IIa 暗褐色粘質土 やや粒子粗い感じ。
- IIb 暗褐色粘質土 茶色味が強い。
- IIc 茶褐色粘質土 やや暗い色調。大御堂第2号土坑



第86図 大御堂寺院址中央部遺物出土分布図

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

と、量的には井戸aからのものが多いが質的に大きな差異は認められず、遺物の出土層位も比較的上層にまとまっている。遺物の9割は瓦でその多くはA類に属するものであり、他に土師質土器・軟質陶器が出土している。

《大御堂第2号土坑》(第85図)

本遺構は土塁跡の南東コーナー付近のBj-21グリッドで、土塁跡に沿う長さ約4mの石列により確認された。土塁跡東側の段差とこの石列はほぼ平行で、約1.5m離れており、この間に円礫がまとまって検出された。石列には径40cm～50cmのやや大きめの片岩系の自然礫が使用されており、この西側の土塁段差までの間に径20cm前後の小礫が石列上面に近いレベルで検出された。石列方位はN-4°-Eである。本遺構に伴う遺物は検出されない。

本遺構は石列の方向などに寺院址に見られる規制と一致する部分が認められるが、層位的には土塁東面がある程度埋没してからのものと見られ、寺院構築時のものとは考え難い。また、埋土に浅間A軽石は見られないことから近世中頃以前のものとは推定される。

《線刻五輪塔について》(第137図、写真図版101)

寺院址のほぼ中央にあたるBe-14グリッドでは砂岩製の線刻五輪塔(6501)が圃場の畔上に置かれていた。圃場地境にごく小規模な塚状の土山があり、その周囲には円礫が寄せ集められていた。線刻五輪塔はI層土の上に置かれており、寺院址を開田する際にここに置かれたものと推定され、原位置からは移動していると思われる。寺院址内で検出された石造物もこれとほぼ同様の出土状況で、すべて移動または廃棄された状態である。五輪塔の火輪が3点出土しているが、1点は北池の埋土中に投棄された状態で、2点は農道の東側の側溝部分から検出され、第1号濠内から出土のものも含め、原位置に止まるものはなかった。

《中央部の遺物検出状況について》(第86図)

大御堂第11号掘立柱建物跡が検出された周辺にはピットがまとまって検出され、ピット内を含め遺物が比較的まとまって出土している。その分布域は大御堂第11号掘立柱建物跡を含め南北12m、東西6m程の範囲であり、瓦類の出土が顕著である。特に、大御堂第11号掘立柱建物跡の柱穴からの遺物出土は見られなかったものの、この周囲のピットからの出土が見られ、量的には少ないものの残存状況の良好なものも多く見られた。瓦類はA類(古)とB類(新)が見られるが、ここでの出土状況に両者の差異は認められなかった。

この掘立柱建物跡は近世のものと考えられ、中世の伽藍はすでに破却され、これとは連続性は持たないものと考えられる。また、この建物は通常の生活遺構と考えるより、寺院址に建てられた小堂宇といったものとする予想され、瓦類はその際に柱穴に詰められたものと推定される。

《寺院址建造物について》

中央部での検出遺構は上記のもの以外には認められず、表土(耕作土)掘削後の遺構確認作業で地山面(自然堆積層)と見られる小礫の露頭面に達した。当初、園池遺構に伴う洲浜状遺構との疑いを持ったが、小礫の傾斜角に一定の規則性と方向性(北々東に向き、共通する傾斜角)が認められ、鮎川扇状地での自然堆積礫層(VII層)と判断した。I・II層とVII層との間の層がここでは認められず、土塁跡で検出された浅間B軽石層(III層)のレベルよりこのI・II層土がはるかに下位レベルであることから、開田等に伴う遺構面の削平が行われたことが推定され、寺院址建造物については確認するに至らなかったと考えられる。

なお、「アミダイケ」埋め戻しの際にはここにあった塚を取り崩したとの話が伝えられており、元禄年間の村絵図でも小堂宇とともに塚と思われる記載があり、何らかの遺構があったと推定される。



大御堂第14号溝状遺構土層注記 G-C'

1 黒褐色砂質土 1aは小礫をやや多く含む砂質土、黄褐色土粒子混。
 1bはやや粘泥があり、少量の炭化物を含む。

2 黒褐色・黄褐色混土層 2aは黄褐色土混黒褐色土。
 2bは黒褐色土混黄褐色土。

第87図 大御堂寺院址東部第14号～第17号溝状遺構平面

5 寺院址東部検出の遺構

(1) 寺院址東部の概況

《調査前の概況》

白石大御堂遺跡の調査にあたり、鮎川崖際の約20mの区間は橋梁工事の関係で早期引き渡しが必要と求められ、最優先工区として発掘調査を実施することとし、鮎川崖から土地改良農道までの間の遺構検出を実施した。ここでは前述の引き渡し部分の他に、成育途中の麦作の取り入れを待った事もあり、3段階に分割しての調査とならざるを得なかった。

調査前の表土面の標高は鮎川崖際から土地改良農道際までは、標高105.55m前後のほぼ平坦な地形であるが南から東にかけてがやや高くなっており、調査前には畑・水田として耕作されていた。耕作土を剥いだ段階で溝状遺構・道路跡・ピット・土坑等の遺構を検出し、土地改良農道際では園池遺構の一部も検出した。ここで検出された溝状遺構には調査前現況図で所在の確認されるものと、完全に埋没して痕跡のたどれないものがあった。所在の確認されていた水路及び道路については、埋土は標準層序Ⅰ層の浅間A軽石混じりの土層であり、溝埋土中からの遺物も近現代のものが見られたので報告の対象から除外した。

遺構として確認されたのは溝状遺構4条と、埋葬関連遺構4基、ピット等である。ここでは溝状遺構について報告し、埋葬関連遺構は次節でのべる。またピット等については、掘立柱建物跡または柵列等の規則性が見いだせず、埋土も近世以降の比較的新しい茶褐色土であったので、本報告の対象から除外した。

(2) 検出遺構

《遺構検出時の状況》

表土層掘削後の遺構面精査で、複数の溝状遺構を検出した。調査名AD1・AD2・AD3・AD6の4条の溝状遺構は道路跡とともに調査前まで使用されていたものと判明したが、この溝状遺構の掘り下げの過程でこれより古い2条の溝状遺構(調査名AD4・AD5)を検出した。また、この溝状遺構から鮎川崖までの間で2条の溝状遺構(AD7・AD8)を検出した。前述の2条は重複しており南北の走行方位であるが、他の2条は東西方向の走行を示し、ほぼ直交する関係である。また、調査名AD5とAD8は後にひと続きの遺構であることが判明した。このほかに調査区南端に近い位置で1条の溝状遺構(AD11)を検出している。これらの溝状遺構は園池遺構とは直接つながることなく、近世以降の溝状遺構が池から出ているのとは区別される。遺構埋土にも浅間A軽石を主とする砂質土は見られず、浅間B軽石の砂質土が混じることから中世から近世前半の時期の遺構と考えられた。

《大御堂第14号溝状遺構》

本遺構(AD11)は、南池の東側のAp・Aq-19・20グリッドで検出された。確認長5.5mで南は調査区外へのび、北端は閉じる。確認面標高は105.70m、上端幅2.0m~2.2m、下端幅約1.5m、確認面からの深さ30cm(底面標高105.40m)、走行方位はN-13°-Eである。断面形は逆台形、埋土は黒褐色土で炭化物粒子を含む層が見られる。埋土は黒褐色土に黄褐色土の混じり方で4層に分かれ、上2層は砂質で小礫・炭化物が混じり、下2層は粒子の細かい粘質土となる。また、下2層の堆積は多分に西側からのものと考えられる。小礫とともに土師質土器・軟質陶器の小片が出土しているが量は少ない。

《大御堂第15号溝状遺構》

本遺構(AD7)は鮎川崖際に近いAj~Al-10・11グリッドで検出された。遺構確認面標高は105.50mで、上端幅80cm、下端幅40cm、深さ約30cmで、断面形状は浅いU字形である。埋土中には礫が多量にあり、土師

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物

質土器及び軟質陶器類の小片が出土している。走行方位はほぼ東西に近くN-73°~83°-Wでやや弓なりの緩やかな曲線を描く。溝の東端は鮎川崖によって切られ、西端はA1-11グリッド付近で浅くなり確認できなくなる。本遺構は鮎川橋梁工事により早期引き渡しを求められた部分にあるため、本遺構と走行方位が共通しその延長線上にあたる大御堂第3号及び第4号溝状遺構との関係は検証できなかった。

埋土からは小礫に混じって土師質土器・軟質陶器の小片が出土している。大御堂第3号溝状遺構では溝中に多量の円礫の投棄が認められたが、礫の廃棄の方法と礫の大きさには差異が認められる。

《大御堂第16号溝状遺構》

本遺構(AD4)は寺院址東部のほぼ中央で南北に直線の走行を示す溝として検出された。確認長は約40mで、N-21°-Eのほぼ一直線の走行方位を示す。溝の南端はAn-12グリッドで確認され、北端は調査区外へのびる。溝は上端幅150cm、下端幅20cm~30cm、深さ90cmで箱葉研の断面形状を呈す。確認面標高は105.35m、底面標高は南で104.80m、北で104.40mと北方向に傾斜が認められる。埋土下層にやや厚く粘質土が堆積しその上の中層に砂質土層が見られ小礫が混じることもある。流水の痕跡は明瞭ではなかったが埋没の過程で砂質土が入る部分も認められた。出土遺物は土師質土器・軟質陶器の小片が見られるが、出土量は遺構規模に比べると少ない。Am・An-12グリッドでは近世の道路・溝と一部重複するため遺物も覆土

中より比較的多く出土するが、埋土上層で常滑製のほぼ完形に近い片口鉢(3406)が伏せた状態で出土した。

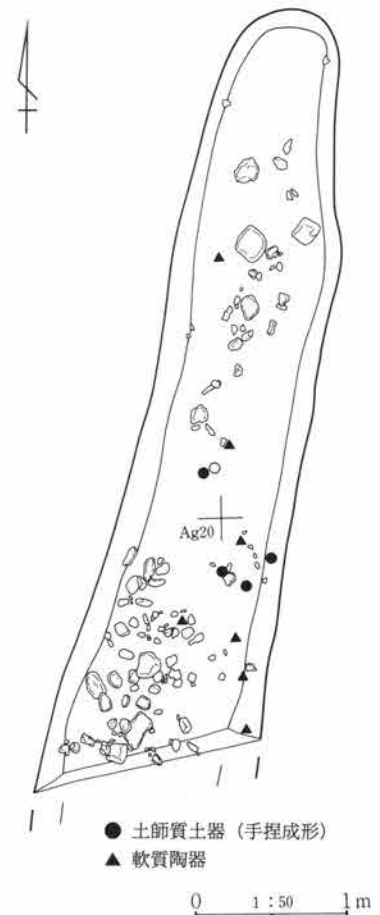
本遺構は大御堂第17号溝状遺構にほぼ平行しながらこれを切って構築されている。しかし、An-12グリッドで閉じている点や埋土の切り合い関係からは、少なくとも大御堂第17号溝状遺構の埋没後のもので、掘り替えではなく別の性格の溝として掘られたものと思われる。

《大御堂第17号溝状遺構》

本遺構(AD5・8)は、寺院址東部のほぼ中央で南北にほぼ直線の走行の溝(AD5)として検出されたが、東西方向で検出された溝(AD8)とつながることが後に判明した。本遺構の北端は調査区外となり、東端は鮎川崖に切られる。南北走行の方位はN-20°-E、東西走行での方位はN-63°-Wである。南北方向の走行部分は大御堂第16号溝状遺構に重複するため東側上端は確認できず、Am・An-11~13グリッド付近では近世道路・溝によって切られていた。埋土中からの出土遺物は土師質土器・軟質陶器の小片が見られた。

《調査所見》

寺院址園池遺構より東側を寺院址東部としたが、ここでは中世と考えられる4条の溝状遺構が検出された。遺構検出面はほぼ同レベルであったが、遺構形状・埋土・出土遺物等に若干の差異が認められ、大御堂第16号溝状遺構と大御堂第17号溝状遺構のように重複関係のあるものもあった。遺構規模としては第16号・第14号がやや大きく、第17号・第15号が比較的小規模なものであった。大御堂第16号溝状遺構の埋土上層で陶器が見られた他は、各遺構とも土師質土器と軟質陶器が4:1ないし5:1程度の割合で出土し、そのほかの

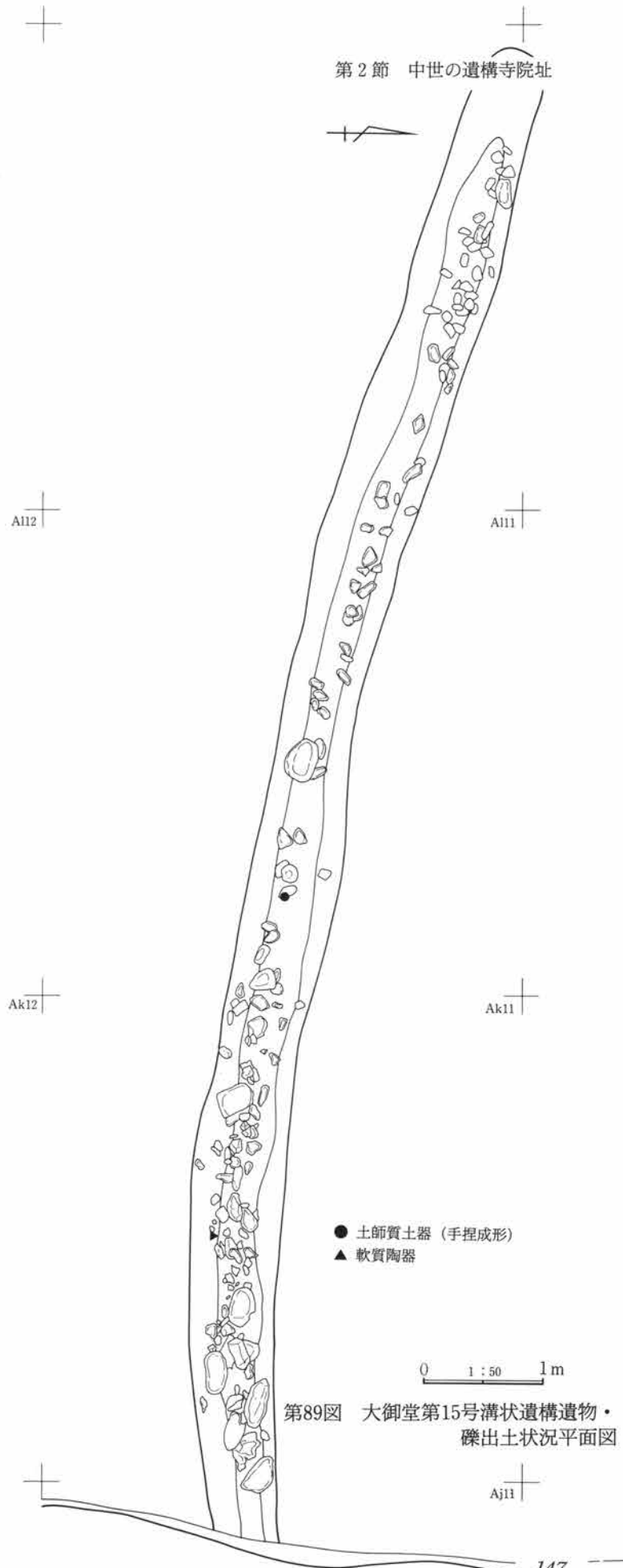


第88図 大御堂第14号溝状遺構遺物・
礫出土状況平面図

ものは見られない。遺物はいずれも中世のもので、溝埋土も似かよった層が認められた。

この区域では寺院の東限を示す性格の遺構が存在するの点という点を調査の主眼とした。大御堂第14号・第16号溝状遺構はほぼ南北方向の同一延長線上にある点では、その可能性の考えられる遺構である。しかし、大御堂第16号溝状遺構の南端と大御堂第14号溝状遺構の北端との距離が約28m離れている点や、溝底面レベルの差を考えると断定はできない。大御堂第15号・第17号溝状遺構は遺構規模と埋土・遺物出土状況に共通性が認められ、大御堂第2号溝状遺構に似た性格のものと考えられる。大御堂第17号溝状遺構はその走行方位が方形になる可能性があり、この場合館等に付随する性格のものとの可能性が考えられる。大御堂第15号溝状遺構の場合には大御堂第3号または大御堂第4号溝状遺構との関連が推定され、位置的なものからは大御堂第17号溝状遺構と同時存在の可能性は少ないと言えよう。鮎川の流路が現在より東にあり沖積低地面も東に広がるとすれば、この溝が方形区画をなす寺院址とは別な性格の遺構が存在した可能性が考えられる。

なお、これらの溝状遺構と園池遺構との間には浅間B軽石の自然堆積層が認められた。したがって、中世での表土面に遺構検出面は比較的近いものと推定された。なお、浅間B軽石層下は約40cm程度の厚さで粘質土層が見られ、その下は礫層となる。(綿貫鋭次郎)



第3節 埋葬関連遺構

1 種別及び分布（第10表、第90図）

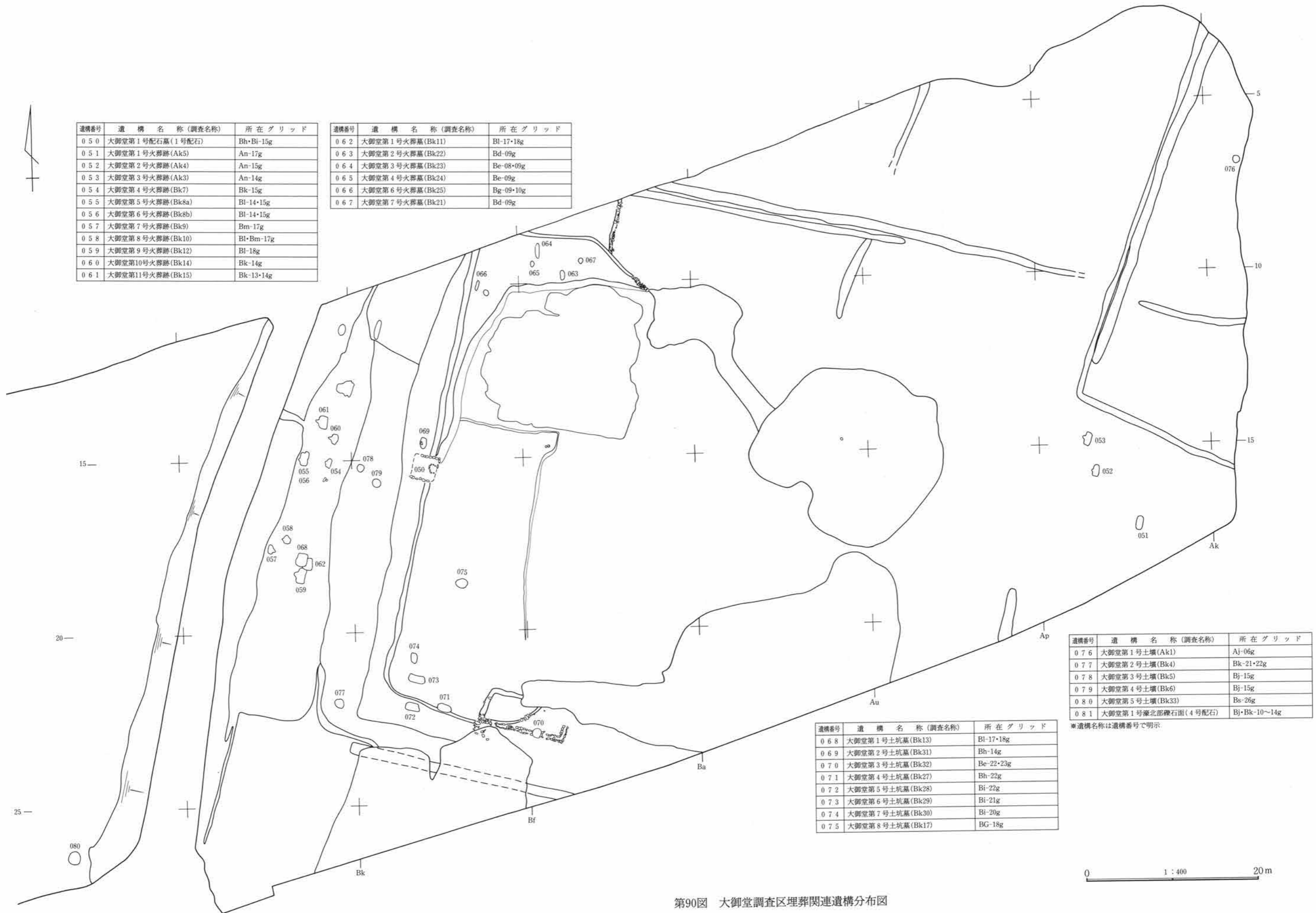
大御堂調査区の中世寺院址では、配石墓をはじめとして火葬跡・火葬墓・土坑墓・土坑等の埋葬に関連する遺構が多数検出され、寺院址内に墓地が営まれていたことが伺える。遺構検出時の状況と個々の形態、埋葬人骨及び火葬痕跡の有無、供献遺物等から、遺構種別を複数に分類することが可能であり、それは葬法の差及び時期差を含む内容を伴うものと認められる。これらの遺構・遺物の他に、廃棄された状態ではあったが板碑・五輪塔・宝篋印塔等の石造物が出土している。これらの埋葬関連の遺構・遺物の分布は、寺院址と何らかの関連性若しくは規制を受けているものと推定される。

検出した埋葬関連の遺構は葬法と形態から以下のように分類した。その総数は31基である。なお、それぞれの遺構は墓群を構成すると思われるが、墓域に敷かれたと見られる小礫面も検出されている。

- (1) 配石墓 方形区画の石敷き遺構から火葬骨を埋納した骨蔵器を出土する。寺院址の中央部に近い位置から1基検出された。
- (2) 火葬跡 凸字形の形状を示し、壁面は真っ赤に焼けており、埋土下層に炭化物層が検出されている。焼骨が検出されたものもあるが遺物は見られない。遺存する火葬骨の量が少ないことから火葬場として利用された土坑と考えられ、寺院址西部と東部で11基が確認されている。（この種のものについて火葬址・火葬土坑等の名称が使用されているが、本報告書中では火葬跡として統一した。）
- (3) 火葬墓 長方形若しくは長楕円形の形状を呈し、銭貨や皿形土師質土器などの副葬遺物を伴って焼骨が検出された。埋土中に炭化物は検出されるが、壁面が焼けているものは確認できなかった。寺院址西部及び北西部で6基検出された。火葬墓としての性格が考えられる遺構である。
- (4) 土坑墓 方形または隅丸方形の形状で直葬と思われる土坑が8基検出された。銭貨・土師質土器皿等の副葬遺物を伴い、円礫が埋土中に見られ棺材と考えられる木質の確認及び火熱を受けた痕跡の残る骨の出土するものも有り、木棺直葬墓としての性格をもつと考えられる。
- (5) 土壇 円形の形状を呈し、壁はほぼ直に近い立ち上がりであり、底面は平坦である。出土遺物等は見られず骨も検出されず墓としての明瞭な痕跡を確認できず、その性格が不明で土坑として取り扱ったが、同種遺構の報告例や本遺跡における検出状況・遺構形状・埋土等からは、墓壇としての可能性が高いと推定し、他の土坑と区別するために土壇とした。本調査区内では5基確認されている。寺院址中央部の一角に比較的近接して検出した。
- (6) 石造物 上記遺構のほか、埋葬関連の遺物として板碑・五輪塔・宝篋印塔等の石造物が出土している。これらは寺院址西部での出土が多い。
- (7) その他 寺院址北西部の第1号濠跡埋土上面で礫敷遺構と思われるものが検出されている。火葬墓等で検出された礫敷きに共通性を見いだせることから、同様の性格を持つものと推定される。円礫の集合も認められたが、遺物もなく掘り方も認められず、人為的な所産であると思われるものの遺構として明瞭に把握することはできなかった。

2 配石墓（第91図～第92図、写真図版24・25）

〈検出状況〉



遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
050	大御堂第1号配石墓(1号配石)	Bh・Bi-15g
051	大御堂第1号火葬跡(Ak5)	An-17g
052	大御堂第2号火葬跡(Ak4)	An-15g
053	大御堂第3号火葬跡(Ak3)	An-14g
054	大御堂第4号火葬跡(Bk7)	Bk-15g
055	大御堂第5号火葬跡(Bk8a)	Bl-14・15g
056	大御堂第6号火葬跡(Bk8b)	Bl-14・15g
057	大御堂第7号火葬跡(Bk9)	Bm-17g
058	大御堂第8号火葬跡(Bk10)	Bl・Bm-17g
059	大御堂第9号火葬跡(Bk12)	Bl-18g
060	大御堂第10号火葬跡(Bk14)	Bk-14g
061	大御堂第11号火葬跡(Bk15)	Bk-13・14g

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
062	大御堂第1号火葬墓(Bk11)	Bl-17・18g
063	大御堂第2号火葬墓(Bk22)	Bd-09g
064	大御堂第3号火葬墓(Bk23)	Be-08・09g
065	大御堂第4号火葬墓(Bk24)	Be-09g
066	大御堂第6号火葬墓(Bk25)	Bg-09・10g
067	大御堂第7号火葬墓(Bk21)	Bd-09g

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
076	大御堂第1号土壇(Ak1)	Aj-06g
077	大御堂第2号土壇(Bk4)	Bk-21・22g
078	大御堂第3号土壇(Bk5)	Bj-15g
079	大御堂第4号土壇(Bk6)	Bj-15g
080	大御堂第5号土壇(Bk33)	Bs-26g
081	大御堂第1号濠北部礎石面(4号配石)	Bj・Bk-10~14g

※遺構名称は遺構番号で明示

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
068	大御堂第1号土坑墓(Bk13)	Bl-17・18g
069	大御堂第2号土坑墓(Bk31)	Bh-14g
070	大御堂第3号土坑墓(Bk32)	Be-22・23g
071	大御堂第4号土坑墓(Bk27)	Bh-22g
072	大御堂第5号土坑墓(Bk28)	Bi-22g
073	大御堂第6号土坑墓(Bk29)	Bi-21g
074	大御堂第7号土坑墓(Bk30)	Bi-20g
075	大御堂第8号土坑墓(Bk17)	BG-18g

第90図 大御堂調査区埋葬関連遺構分布図

第3節 埋葬関連遺構

大御堂第1号配石墓（調査名1号配石）は中世寺院址遺構のほぼ中央付近にあたるBh・Bi-14・15グリッドで検出された。位置的には土塁跡のすぐ東側で大御堂第2号溝状遺構と重複している。遺構確認は、表土掘削後の15ラインにそって入れたトレンチ調査において、暗褐色粘質土を掘り下げ途中で一面に敷き詰められた状態の小礫面を検出し遺構確認をした。寺院址土塁跡は調査区内では最もレベルの高い部分であるが、その東側の一段低い部分に本遺構がある。礫面レベルは105.50mであり、礫面覆土として褐色土が見られた。

《遺構形状》

遺構は長辺長3.72m、短辺長3.16mのほぼ方形の平面形状で、南と北及び東辺には人頭大ないしそれより大きめ（20cm～50cm大）の礫石を縁石として並べ、その中は径5cm～15cmの円礫が一面に敷き詰められており、その中央付近には骨蔵器が径40cm、深さ25cmの円形の小土坑に埋納されていた。礫石は偏平な円礫が選ばれて敷かれており、東側では一辺90cmの方形に配列されたような小礫も検出された。骨蔵器の蓋石に25cm×15cm×

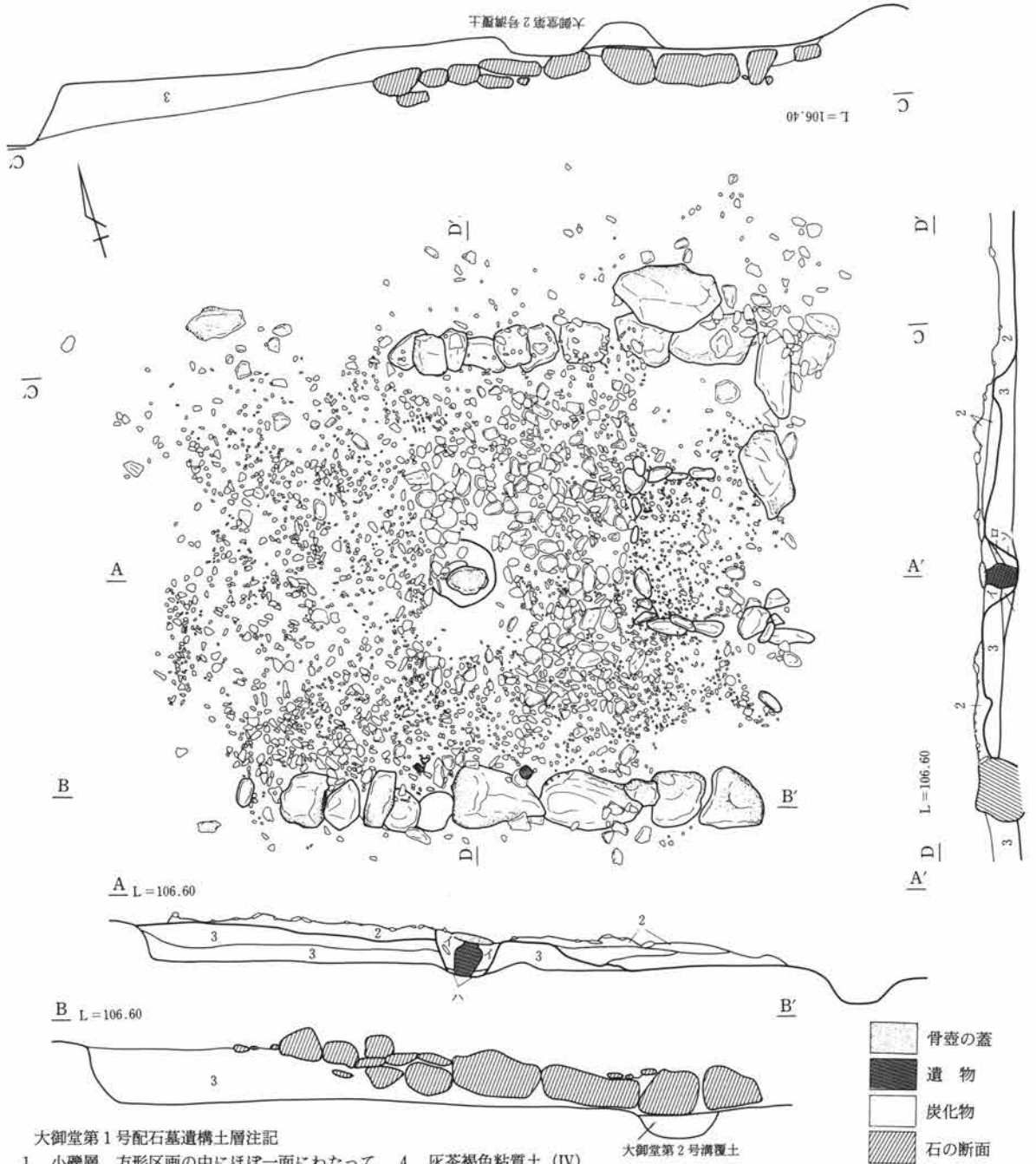
第10表 大御堂調査区埋葬関連遺構一覧表

遺構名称(調査名)	出土グリッド	主軸方位	形状	規模(cm) 長径×短径×深さ	出土状況・出土遺物、備考
第1号配石墓 (1号配石)	Bh・Bi14・15g	N-73°-W	ほぼ方形	372×316×25	円礫。焼人骨。陶器製の小型壺(骨蔵器)と蓋石。土師質土器2点。
第1号火葬跡(Ak5)	An-17g	N-16°-E	長方形	147×80×17	小礫数個。埋土中に焼土塊・炭化物。遺物なし。
第2号火葬跡(Ak4)	An-15g	N-125°-E	凸字形	128×74×32	東壁が焼土化。炭化物量多い。遺物なし。
第3号火葬跡(Ak3)	An-14g	N-19.5°-E	長方形	142×67×38	壁面が焼土化。焼けた骨片10g。
第4号火葬跡(Bk7)	Bk-15g	N-28.5°-E	長方形	110×60×32	炭化物層から多量の焼人骨・歯。
第5・6号火葬跡 (Bk8a・8b)	Bl-14・15g	N-11°-E	長方形	153×94(115)×42 110×60×47	2基の火葬土坑の重複で5号の方が古い。東壁と北壁が焼土化。炭化物層から焼人骨。
第7号火葬跡(Bk9)	Bm-17g	N-11°-E	凸字形	104×55(92)×44	炭化物層から焼人骨。
第8号火葬跡(Bk10)	Bl・Bm-17g	N-2°-E	凸字形	97×83(105)×30	炭化物中に細片化した骨。残存状況が悪い。
第9号火葬跡(Bk12)	Bl-18g	N-15°-E	凸字形	151×80×52	炭化物層(約20cm厚さ)から細片化した骨。
第10号火葬跡(Bk14)	Bk-14g	N-13°-E	凸字形	110×62(119)×47	壁面が焼土化。炭化物層に焼土塊・焼骨。円礫。
第11号火葬跡(Bk15)	Bk-13・14g	N-10°-E	凸字形	142×98(143)×50	焼土塊・焼骨800g・炭その他500g。
第1号火葬墓(Bk11)	Bl-17・18g	N-4°-E	長方形 (推定)	128×73×52	壁面が焼土化。埋土最下層に炭化物層(10cm)。火葬骨と銭貨5枚。
第2号火葬墓(Bk22)	Bd-09g	N-5°-E	長楕円形	90×40×5	小礫数個。炭化物層より火葬骨。土師質土器1点・銭貨4枚。
第3号火葬墓(Bk23)	Be-08・09g	N-2°-E	長楕円形	152×36×6	小礫数個。混土炭化物層より焼骨。土師質土器2点・銭貨1枚。
第4号火葬墓(Bk24)	Be-09g	N-12°-E	長楕円形	80×25×3	礫あり。炭化物層中より、焼骨と銭貨5枚。
第5号火葬墓(Bk25)	Bg-09・10g	N-20°-E	長楕円形	120×30×12	壁面が焼土化。炭化物層中より焼骨。土師質土器2点・銭貨9枚。
第6号火葬墓(Bk21)	Bd-09g	—	円形	径60×深—	炭化物層(3cm)を確認のみ。
第1号土坑墓(Bk13)	Bl-17・18g	N-18°-E	長方形	135×110×43	円礫数個。焼土ブロック混入。炭化材・骨・銭貨11枚。9号火葬跡、1号火葬墓と重複。
第2号土坑墓(Bk31)	Bh-14g	N-23°-E	隅丸方形	125×88×20	埋土上部に円礫と板碑(頭部欠損)。骨・歯。銭貨2枚。
第3号土坑墓(Bk32)	Be-22・23g	N-12°-E	方形	107×85×52	土師質土器3点。銭貨6枚。
第4号土坑墓(Bk27)	Bh-22g	N-74°-W	長方形	174×92×48	円礫(20～50cm大)+数個。平瓦数個。
第5号土坑墓(Bk28)	Bi-22g	N-73°-W	長方形	162×93×14	円礫数個。鉄製品(釘)。
第6号土坑墓(Bk29)	Bi-21g	N-78°-E	長方形	115×62×20	礫(10cm大)4個。遺物なし。
第7号土坑墓(Bk30)	Bi-20g	N-7°-E	長方形	130×86×20	
第8号土坑墓(Bk17)	Bg-18g	—	円形	132×110×52	
第1号土壇(Ak1)	Aj-06g	—	円形	径82×深28	
第2号土壇(Bk4)	Bk-21・22g	—	円形	115×108×50	
第3号土壇(Bk5)	Bj-15g	—	円形	88×78×37	
第4号土壇(Bk6)	Bj-15g	—	円形	径80×深25	
第5号土壇(Bk33)	Bs-26g	—	円形	径70×深—	

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

5 cmの片岩製の扁平な円礫があったが、その周囲の径60cm程の範囲では礫の分布は見られなかった。骨蔵器埋納部の上部には墓標として塔婆類が安置されていたものと思われるが、本遺構内では確認できなかった。小礫の分布はそうした上部構造があったことを示すと考えられ、本遺構のすぐ北で検出された第2号土坑墓覆土で板碑片が、また、第1号濠跡の底面近くからは板碑・宝篋印塔等の石製塔婆類のまとまった廃棄があり、本遺構との関係が注目される。

遺構の構築については、寺院址との関連を検討する必要がある。小礫面の下の層は自然堆積と考えられる茶褐色粘質土で、大御堂第2号溝状遺構の覆土として土塁跡の東側に堆積する。その堆積状況（三角堆土）



第91図 大御堂第1号配石墓遺構平面図

は土塁跡と大御堂第2号溝状遺構の間を埋める自然堆積であることが、縁石底面のレベルが西がやや高く東に緩やかに傾斜することに示されている。縁石には明瞭な掘り方は認められなかった。

本遺構は、東側を正面として10cm~20cm程度の縁石の側面を見せて並べ、浅い基壇状に見せて営まれたものと推定される。西側は構築面がやや高くなっていて、縁石は配置しなかったものと考えられる。この方形区画の中に径10cm程度の円形で偏平な小礫とさらに細かい数cmのものを敷き詰めている。小礫石下の堆積土は寺院構築後の自然堆積層であり、小礫はその面上に敷かれたものと見られる。埋納土坑の東にはやや浅い土坑状のくぼみが礫石下に認められ、炭化物が検出されている。墓前祭等の痕跡を示すものと推定される。

《出土遺物》(第92図、写真図版69)

本遺構からの出土遺物は、骨蔵器として使用された小型壺形の陶器が1点(3401)と、皿形の土師質土器が2点(3120、3121)である。

骨蔵器に使用された小型壺(3401)は高さ20.5cm、口径9cm、肩部下での胴最大径は16cm、底部径9cmで灰色の色調を呈し、肩部に灰釉が刷毛塗りされ、篋描きの刻文が見られる。口縁部の立ち上がりはほぼ直でやや短く、口唇部には短い折り返しが見られる。胴の張りは大きくなく、ややふっくらした感のある器形である。篋描きは「万」のくずれ若しくは平仮名かと思われる。

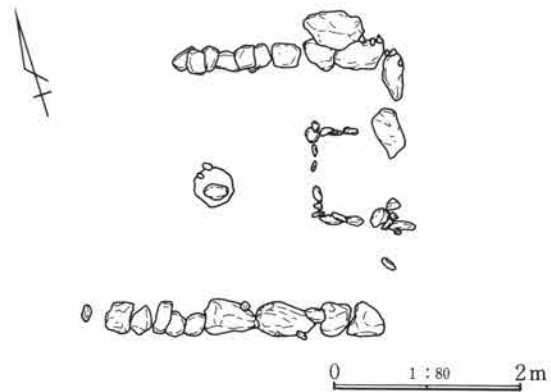
土師質土器2点はいずれも南縁列石付近で出土している。3120は南縁列石の上に置いたような状態で、ほぼ完形で検出され、3121もそのすぐ近くで検出された。いずれもロクロ成形の皿形で、3120の口縁部はほぼ直に外反し、3121はやや短く直に立ち上がる。これらは遺構確認面である礫敷面精査の過程で検出し、出土状況からは原位置に近い状態であると推定された。3121には口縁部に煤の付着が認められた。

《骨蔵器及び埋納骨について》

骨蔵器にはその%程度にまで火熱を受けた骨が埋納されていた。内容物は骨が主体で、その間隙は破碎化した骨と微粒子の土壌が埋めてやや固結した状態であった。当初は骨蔵器の口近くまで骨が収納されていたものと思われる。堆積層の上部表面には微粒子の薄い土の層が認められたが、浸透した雨水に含まれていた土壌が沈着したものと思われる。検出された骨には人骨としての特徴が認められ、人骨以外であると言える



第92図 大御堂第1号配石墓出土遺物実測図



第93図 大御堂第1号配石墓列石配置平面図

積極的な資料はなく、埋納骨はすべて人骨と思われる。

左右一对の岩様部が検出され、他の部位や骨や歯にも複数個体を示す資料はなく、埋納骨は1個体に由来するものと想定できよう。歯はすべて永久歯であるが咬耗がほとんど認められず、骨端部の未癒合状況から十代前半程度と想定される。

人骨は最長4cmで完存したものはなく、歯冠部の全形がほぼ知られるのは8～9点のみで、ほとんど細片化している。色調は灰白色が主体であるが、黒褐色・茶褐色を呈するものもある。歯根部の割れ口は火熱を受けた後に割れた状況を示している。色調と部位の関係から火熱の受け方の復元や骨蔵器への収納時の意識的な破碎の有無等の問題についてはさらなる分析が必要である。

歯が比較的下部からやや集中して検出されたが、骨蔵器の上部からのものもあり、埋納方法の明白な復元の認識はできなかった。

骨蔵器内には直径8mmの小礫1点と数点の小炭化材のみが含有され、土壌の量が少量であったことと、長さ7mm～8mmの上肢(手)・下肢(足)指骨が認められることと併せて考えると、丹念に骨のみが採集されたものと想定される。

火葬時の骨の亀裂等の状況から800°前後の火熱を受けたものと推定される。(宮崎重雄)

《調査所見》

本遺構は寺院址遺構のほぼ中央部にあり、その位置からは寺院址と何らかの関連あるものと想定された。寺院址遺構に後出することは本遺構が大御堂第2号溝状遺構の覆土上に築かれていることから明らかである。大御堂第2号溝状遺構は、その規模と埋土及び遺物の状況から長期にわたる存続期間は考え難く、少なくとも本遺構構築時においては、寺院遺構の一部は埋没の過程にあったと思われる。しかし、園池遺構は池としての機能を維持し続けていたと思われることから、少なくとも寺域を意識させるだけのものは残っていたことが考えられ、本遺構の主軸方向が寺域に見られる方位とほぼ一致することからも意識した配置であったことが伺える。

遺構構築面は、寺院の犬走りにあたる本来は水平な面と考えられるが、この段階においては土塁方向からの埋没が始まっていたと見られ、土塁から東に向かって緩やかな傾斜面となっていたと考えられる。墓はこの土塁(跡)を背景にしたこの緩傾斜面を利用し築かれたと考えられる。墓域を画する周縁部列石は東側には2石のみ残存、西側では検出されなかった。北と南の石列では掘り方は認められず、石列の底面レベルが西にやや高くなることから地山を削り出して三方を石で囲ったものと考えられる。周縁石は50cm×30cm大のものから20cm×30cm大のものまで使われているが、東側に大きめのものを利用し、西に行くに従い小さいものを利用している。

骨蔵器埋納のための小土坑はほぼ中央に掘られ、その東に埋土中に炭化物を含む墓前祭の痕跡と推定される径60cm～70cmで深さ約10cmの浅い皿状のくぼみと、参詣のためと考えられる小礫の方形区画が検出された。この墓は東面して構築され、墓の主軸の延長方向は北池と南池の中間の土橋部分にあたり、本遺構と園池遺構の間には関連性が想定される。

小礫の敷かれ方を見ると、埋納土坑上には礫分布が見られず、骨蔵器蓋石が検出されたことから、上部に石製塔婆等を墓標として置いていたことが想定される。

骨蔵器に使用された小型壺(3401)は渥美系と見られる。渥美での中世陶器窯業は12世紀中頃から始まり13世紀を盛期とし鎌倉時代を通じて14世紀まで続く。本遺構出土遺物は13世紀後半から14世紀にかけての渥美窯第三型式のものと思われる。

また、土師質土器のロクロ成形の小型皿は2点確認されるが、3120はほぼ完形で南側石列上に置かれた状態で出土し、3121は列石内部で出土している。3121には口唇部に煤の付着が認められ、形式的には3120よりやや古い要素が認められ、本遺構の造営年代に近いものと考えられる。出土地点は南側列石のすぐ内側で検出レベルは106.17mであり、これは列石底面に近く、近接する列石の上面が106.30m～106.35mであることを考えると、墓造営以前との可能性も考えられる。一方、3120は周縁部の列石上で検出され検出レベルは106.23mで、石と土器との間に若干の土が挟んであり、少なくとも墓造営後と考えられる。列石を墓の周囲を区画する性格のものとするなら、周囲は露頭していたものと考えられ、3120の出土状態はここが埋まり始めてからということを示している。形式的には3120は土坑墓出土のものに共通し15世紀中頃以降と考えられ、ここで検出された土師質土器では最も後出する特徴を持つことから、本遺構で使用されたと考えするには検討を要す。3121の土師質土器の制作年代はこれより古いものであり、13世紀から14世紀と考えられる。

本遺構の造営年代は3401の骨蔵器の持つ13世紀後半～14世紀前半以降で、3120の土師質土器の15世紀後半以前と考えられ、14世紀から15世紀前半までのものと考えられる。他の中世墓における骨蔵器の伝世の例からは骨蔵器の製作年代がそのまま埋納年代とは言えず、これより下の時期を構築年代と考えたい。また、寺院址との関連については、検出位置から何らかの関係が窺えるものの検証し得なかった。

3 火 葬 跡

《分布》

本調査区において火葬跡と認定したものは、方形ないし長方形に近い平面形の土坑で、凸字形の張り出しを持ち、壁面に真っ赤に焼土化した部分が認められ、埋土中には多量の炭化物を含み、人骨片と見られる焼骨を出土したものである。遺物は認められず、炭化物層中に火熱を受けた骨を検出することから、火葬の為の土坑と考えられる。骨の出土量は非常に少ないことから、火葬の場として利用された土坑であり、埋葬は別な場所に行われたものと推定される。

本調査区内では11基の火葬跡を検出したが、寺院址西部の第1号濠の覆土上で8基(第4号～第11号)、寺院址東部で3基(第1号～第3号)が確認され、それぞれ群としてまとまりをもつものと推定される。それぞれの群は確認面がほぼ同一で比較的集中して存在し、その形状や埋土等の特徴も類似していることから、一定の時間幅の中で一定の条件下に営まれたものと考えられる。

(1) 大御堂第1号火葬跡(第94図、写真図版28)

大御堂第1号火葬跡(AK5)は寺院址東部のAn-17グリッドで検出された。平面形状は長方形で、長軸方向はN-16°-Eである。長軸長147cm、短軸長80cm、確認面からの深さ17cmで、箱形の形状をなす。表土層除去後の遺構確認作業時に焼土化した壁面によりプラン検出した。確認面は暗茶褐色粘質土で、灰褐色土、焼土塊・炭化物を含む茶褐色土が埋土として確認された。数個の小礫が混じていたほかは遺物は検出されなかった。床面及び西側壁面の一部については焼土化は認められない。凸字形張り出しは確認されていないが、確認された深さが浅いことから本遺構はかなり削平されたものと推定され、凸字部があった可能性を否定できない。

(2) 大御堂第2号火葬跡(第95図、写真図版28)

大御堂第2号火葬跡(AK4)は寺院址東部のAn-15グリッドで検出された。平面形状は凸字形で、長軸長128cm、短軸長74cm(凸字部90cm)、確認面からの深さ32cmで箱型に近い形状をなす。長軸方向はN-12.5°-Eである。表土層除去後の遺構確認作業時に焼土化した壁面によりプラン検出した。確認面は暗茶褐色粘質土で、埋土上層に茶褐色土・灰茶褐色土・暗褐色土が見られ、埋土下層には炭化物の混入が認められた。遺物

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物

は検出されなかった。壁の焼土化は東壁で著しく、床面および西側壁面の凸字形張り出し部での焼土化は認められない。炭化物の残存量は比較的多い。

(3) 大御堂第3号火葬跡 (第96図、写真図版29)

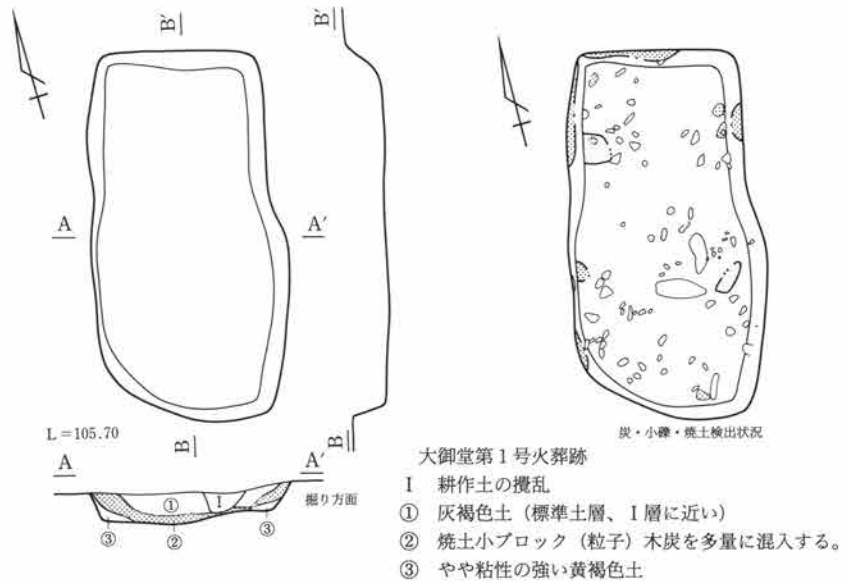
大御堂第3号火葬跡(AK3)は寺院址東部のAn-14グリッドで検出された。平面形状は長方形で西に凸字形張り出し部を持ち、長軸長142cm、幅67cm(凸字部を含めた幅101cm)、確認面からの深さ38cmで箱型に近い形状をなす。長軸方向はN-19.5°-Eである。遺構は表土層除去後に焼土化した壁面により確認した。

確認面は暗茶褐色粘質土で、茶褐色土・暗褐色土・黄褐色粘質土・黒褐色砂質土が埋土として確認された。遺物は検出されなかったが焼けた骨片が残っており、壁面の焼土化などから火葬のための土坑と考えられる。

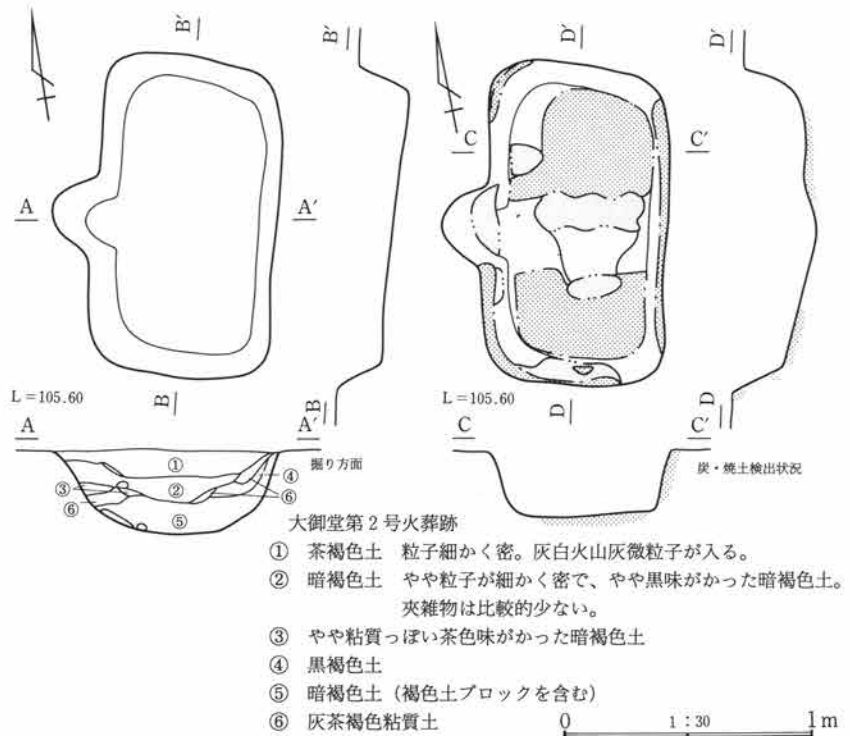
西側壁面に凸字形張り出し部をもつ。床面の焼土化は認められず、壁面は3cm程度の厚さで焼土化している。本遺構では張り出し部の焼土化が認められた。

《寺院址東部検出の火葬跡について》

上記の3基は比較的近接して存在しており、長軸方向がほぼ一致し、遺構検出面・埋土の様子及び形態等に共通性が認められることから、ほぼ同種の性格をもつ遺構と考えられる。特に埋土中に多量の炭化物(炭化材)を含み、壁面が焼土化していることが特徴であり、ここで火を燃やした痕跡を示すものである。凸字形の形状の張り出し部は内容物の掻き出し口若しくは燃焼効率を上げるための煙り出しと想定され、床面から斜めに立ち上がる。大御堂第3号火葬跡では少量の焼人骨を検出しているが遺物は検出されず、埋葬墓とは別の火葬のための土坑でほとんどの骨は取り上げら



第94図 大御堂第1号火葬跡遺構平面図



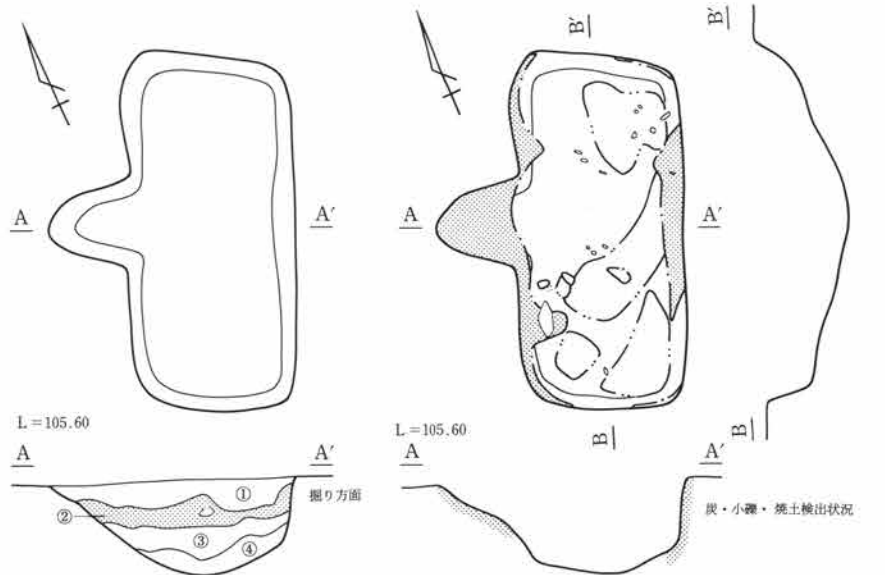
第95図 大御堂第2号火葬跡遺構平面図

れたものと考えられる。埋土は炭化物を含む下層と、暗茶褐色土の上層とでは比較的明瞭に区別される。

(4) 大御堂第4号火葬跡 (第97図、写真図版29)

大御堂第4号火葬跡(BK7)は寺院址西部Bk-15グリッドで検出された。平面形状は凸字形で、長軸方位はN-28.5°-Eである。規模は長軸長110cm、短軸長60cm(凸字部84cm)、確認面からの深さ32cmで箱形に近い形状を示す。底面は中心がやや深いがほとんど平坦である。確認面は第1号濠の覆土上面で、埋土①・②

層に暗褐色土層が、埋土③層に炭化物層が確認され、炭化物層からは焼人骨が出土している。壁面は焼けてはいるものの焼土化は著しくない。炭化物とともに焼けた人骨がかなり多く残されており、ここで火葬したのと考えられる。埋土の①・②層と③層とは明瞭に分離する。①・②層については自然埋没と思われる堆積状況である。



大御堂第3号火葬跡

- ① 暗褐色土で軽石(Aか)を少量含む、やや締りない。
- ② 褐色土 粒子細かく、粘性あり、焼土を含む。
- ③ 黄褐色粘質土
- ④ 黒褐色砂質土層 粒子は比較的細かいがガラガラした感じ。粘性は弱い。

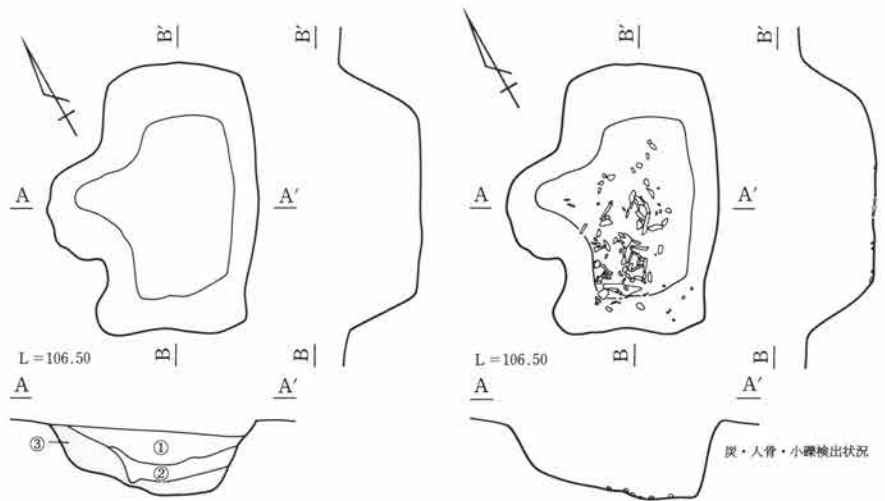
0 1:30 1m

第96図 大御堂第3号火葬跡遺構平面図

(5) 大御堂第5号・第6号火葬跡 (第98図～第101図、写真図版30)

大御堂第5号・第6号火葬跡(BK8)は寺院址西部BI-14・15グリッドで検出された。確認状況からは2基の火葬土坑の重複(BK8a・b)と考えられる。平面形状は凸字形の長

方形で、長軸方位はN-11°-Eであり、2基ともほぼ同一の主軸方向であり、重複状況から見て、同一場所の再



大御堂第4号火葬跡

- ① 暗褐色土 やや灰色味のある、粒子細かく密で若干の粘性あり。灰黄色火山灰小粒子(2~3mm)が混じる。
- ② ①よりやや暗い色調となり、若干の青味を帯びる。
- ③ やや褐色が強い暗褐色である。締りはやや乏しい。
- ③の下よりは多量の炭化物とともに焼骨(人骨)が出土している。

0 1:30 1m

第97図 大御堂第4号火葬跡遺構平面図

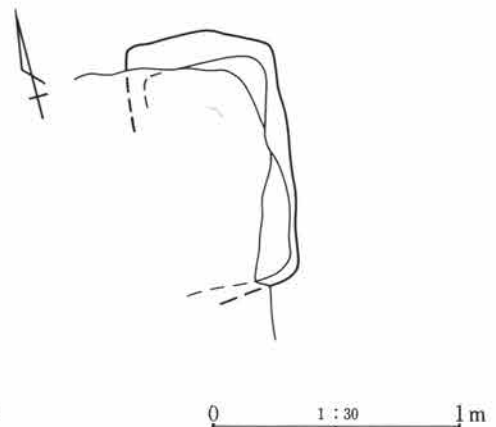
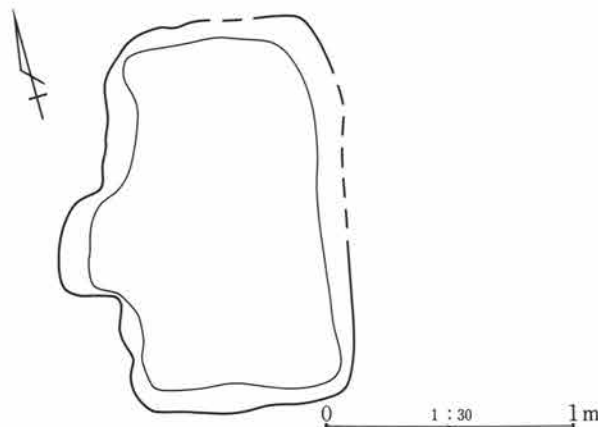
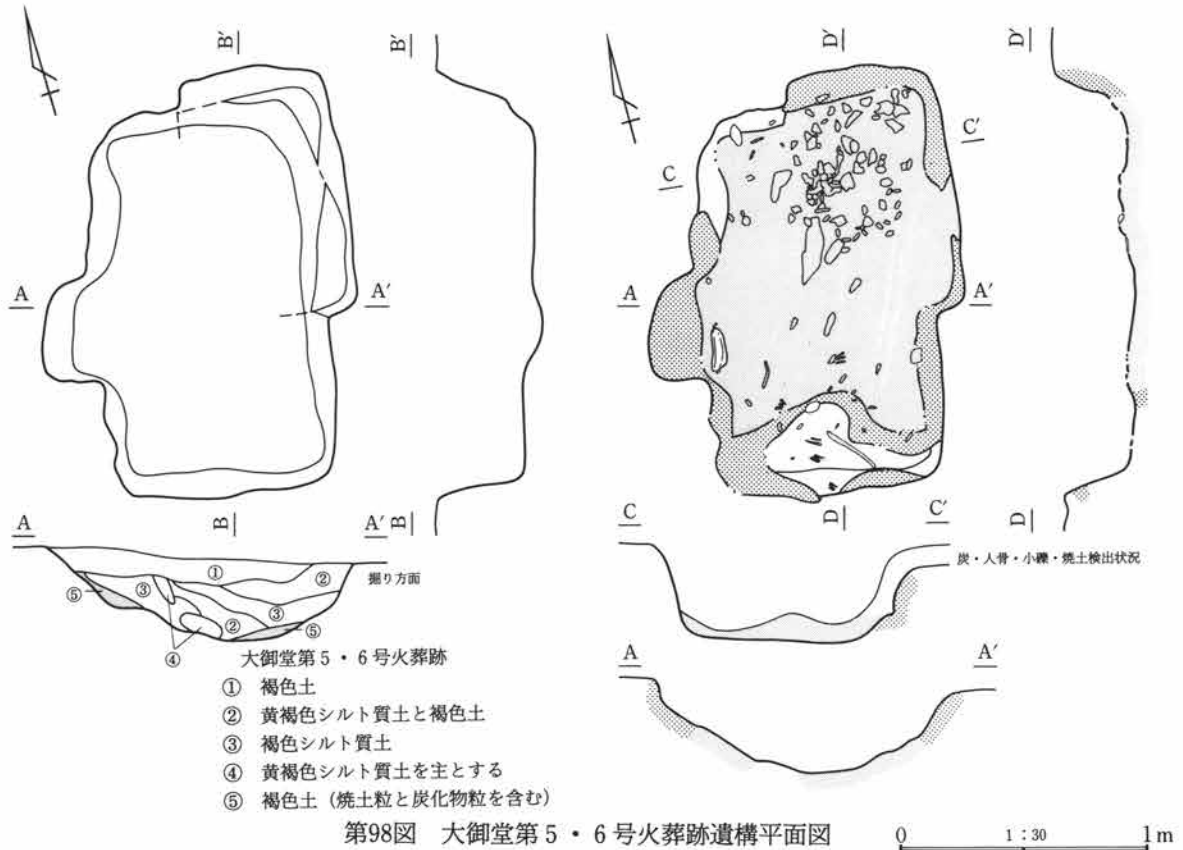
第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

利用の結果と考えられる。なお、調査段階において壁面のずれ等で重複の可能性は考えられたが、埋土中での切り合い関係が容易に把握できず、2基がほとんど重なっていたことから発掘調査は1基分として進めた。

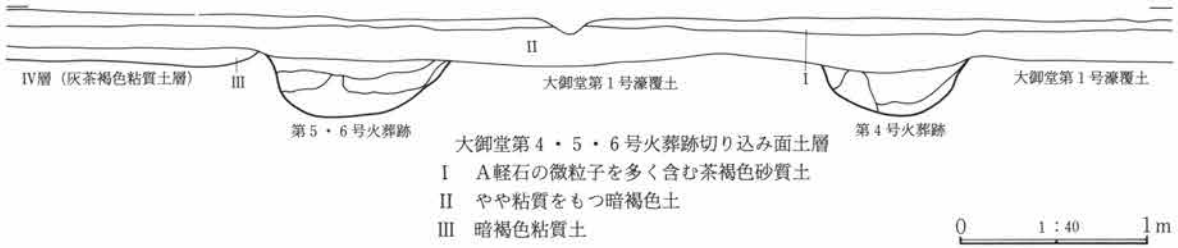
大御堂第5号火葬跡 (BK 8 a) は長軸長153cm、短軸長94cm (凸字部115cm)、深さ42cmである。西側に短い凸字形張り出し部を持ち、箱形に近い形状を示す。壁はほぼ直に立ち上がり、張り出し部の傾斜も比較的急である。

大御堂第6号火葬跡 (BK 8 b) の規模は長軸長110cm、短軸長60cm、確認面からの深さ47cmで、長方形に近い形状を示すと考えられる。

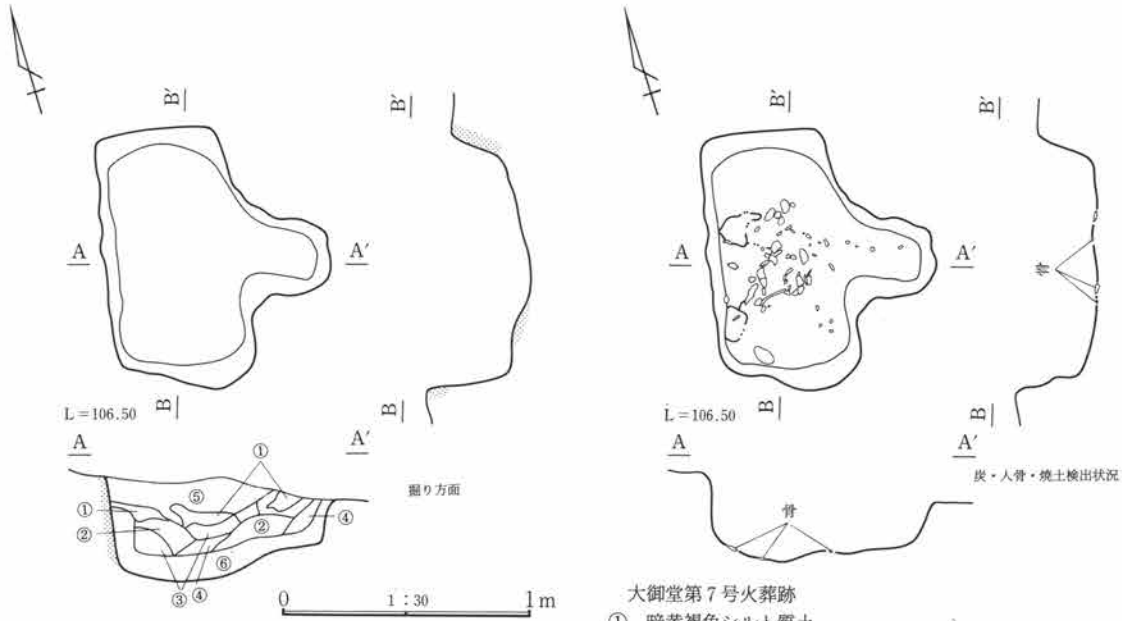
二つの遺構の確認面は第1号濠の覆土上面であり、褐色土・シルト質土・炭化物を含む褐色土を埋土とし、炭化物層からは焼人骨が出土している。東壁及び北壁での焼土の確認状況と焼骨の出土状況から、その重複



L=106.70



第101図 大御堂第4・5・6号火葬跡切り込み面土層図

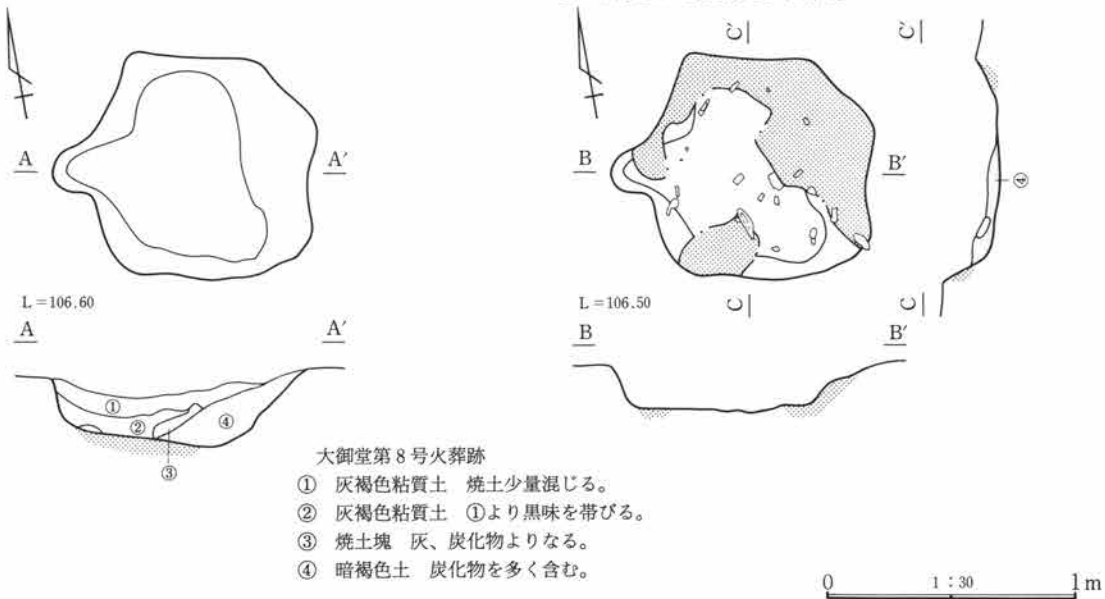


第102図 大御堂第7号火葬跡遺構平面図

大御堂第7号火葬跡

- ① 暗黄褐色シルト質土
- ② 黄褐色シルト質土
- ③ 灰褐色土 粘性。
- ④ 暗灰褐色土 粘性。
- ⑤ 褐色土層 焼土塊、炭化物を含む。
- ⑥ 暗褐色土 炭化物を多く含む。

覆土の状況からすると、本火葬跡は使用後の時期に人為的に埋め戻されたことを物語っている。



大御堂第8号火葬跡

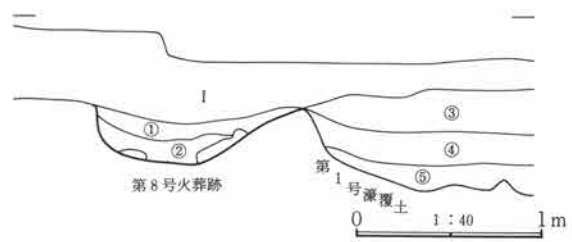
- ① 灰褐色粘質土 焼土少量混じる。
- ② 灰褐色粘質土 ①より黒味を帯びる。
- ③ 焼土塊 灰、炭化物よりなる。
- ④ 暗褐色土 炭化物を多く含む。

第103図 大御堂第8号火葬跡遺構平面図

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物

関係を第5号火葬跡の方がやや古く、やや東によって第6号火葬跡が営まれたと考えられる。

大御堂第6号火葬跡の平面形状については長方形であることは予想されるが凸字形の張り出し部を持つかどうかは不明である。焼骨は主に第6号火葬跡に伴うものと考えられ、北よりの位置でやや多く出土しているが、第5号火葬跡に伴うと考えられる骨も南西部で検出されている。埋土には西側からの流れ込みによる堆積状況が観察され、混土の状況からは人為的に埋め戻されたことが考えられる。遺物は検出されなかった。



第104図 大御堂第8号火葬跡切り込み面土層図

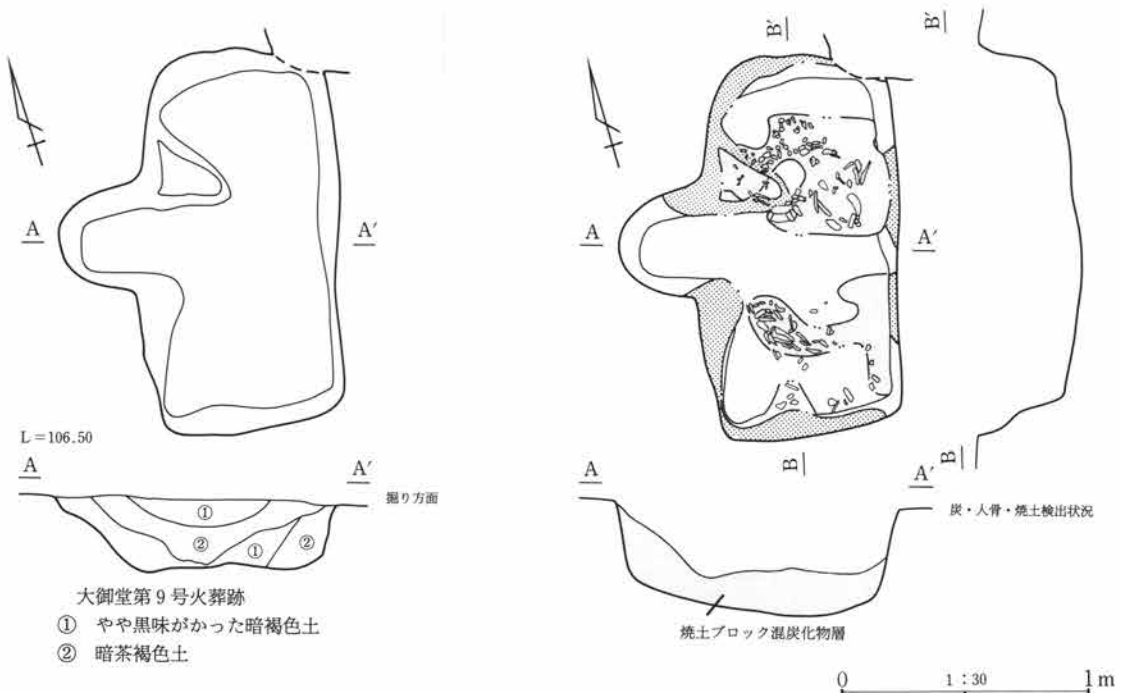
埋土には西側からの流れ込みによる堆積状況が観察され、混土の状況からは人為的に埋め戻されたことが考えられる。遺物は検出されなかった。

(6) 大御堂第7号火葬跡 (第102図、写真図版30)

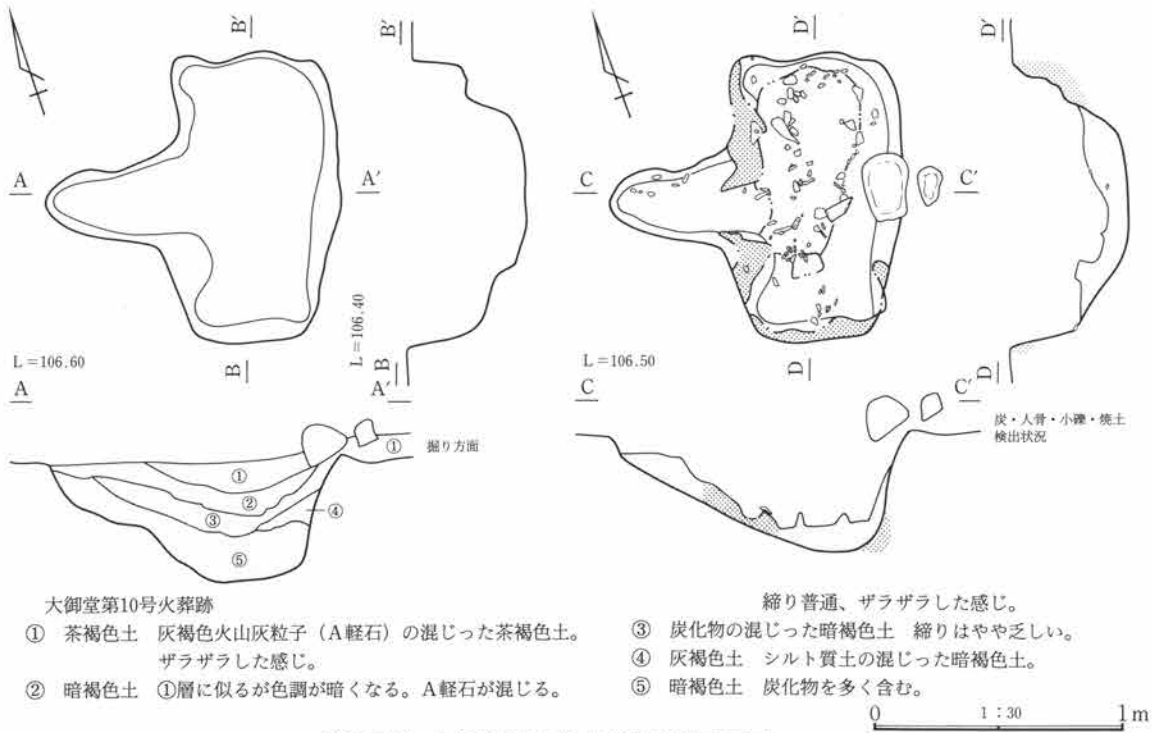
大御堂第7号火葬跡 (BK 9) は Bm-17グリッドで検出された。平面形状は東に凸字形張り出し部を持つ長方形で、長軸方位はN-11°-Eである。規模は長軸長104cm、短軸長55cm (凸字部92cm)、確認面からの深さ44cmで、箱形に近い形状を示す。確認面は第1号濠跡の覆土上面で、暗褐色土層・炭化物層を埋土とし、炭化物層からは焼骨 (人骨) が出土している。壁面は焼けてはいるものの焼土化は著しくない。火熱を受けた人骨がかなり多く残されており、ここで火葬したものと考えられる。また、寺院址西部で検出された凸字形の火葬跡のなかで本遺構のみ凸字部の張り出しが東を向く。埋土の状況から使用後に人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は伴わない。

(7) 大御堂第8号火葬跡 (第103図・第104図、写真図版31)

大御堂第8号火葬跡は (BK10) は B1・Bm-17グリッドで検出された。隅丸方形に近い長方形で凸字形張り出し部を持つ。長軸方位はN-1.5°-Eである。規模は長軸長97cm、短軸長83cm (凸字部105cm)、確認面からの深さ30cmで、不整形であり、凸字張り出し部は短い。埋土中の炭化物はやや多く、その中に細片化した骨が混じて検出された。遺構はやや削平されたと見えて残存状況は悪い。



第105図 大御堂第9号火葬跡遺構平面図



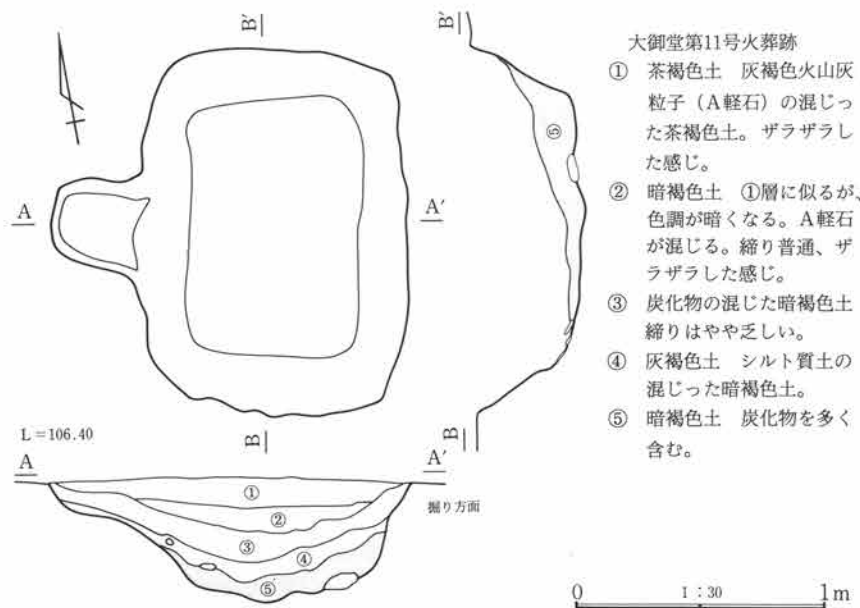
第106図 大御堂第10号火葬跡遺構平面図

(8) 大御堂第9号火葬跡 (第105図、写真図版31)

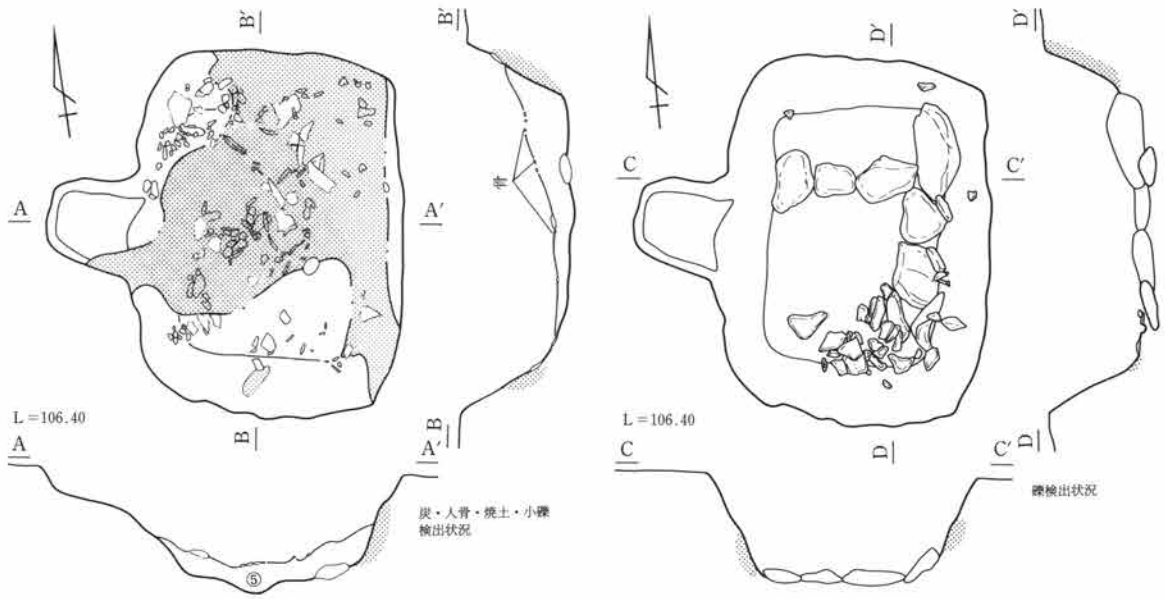
大御堂第9号火葬跡 (BK12) はB1-18グリッドで検出された。本遺構は寺院址西部の火葬跡群の中では最も南に位置し、大御堂第1号火葬墓と重複する。長軸長151cm、短軸長80cm (凸字部113cm)、確認面からの深さ52cmで、西に凸字張り出しを持つ長方形である。長軸方位はN-15°-Eである。壁面は直に近い立ち上がりで、底面中央部がやや深くなる。凸字部は底面と同レベルで続き、急な立ち上がりである。埋土中の炭化物はやや多かったが、その中に細片化した骨が見られた。埋土上層はややレンズ状にくぼみ自然埋没と考えられる。骨を含めた炭化物層は約20cmの厚さで残っていた。埋土上層と下層の炭化物層は明瞭に区別される。

(9) 大御堂第10号火葬跡 (第106図)

大御堂第10号火葬跡 (BK14) はBk-14グリッドで検出された。長軸長110cm、短軸長62cm (凸字部長119cm)、深さ47cmで壁高部分の深さは約40cmでほぼ直に立ち上がり、長軸方位はN-13°-Eである。遺構規模はやや小さめであるが凸字張り出し部がやや長い。遺構は真っ赤に焼土化した壁面でプランの確認をし、

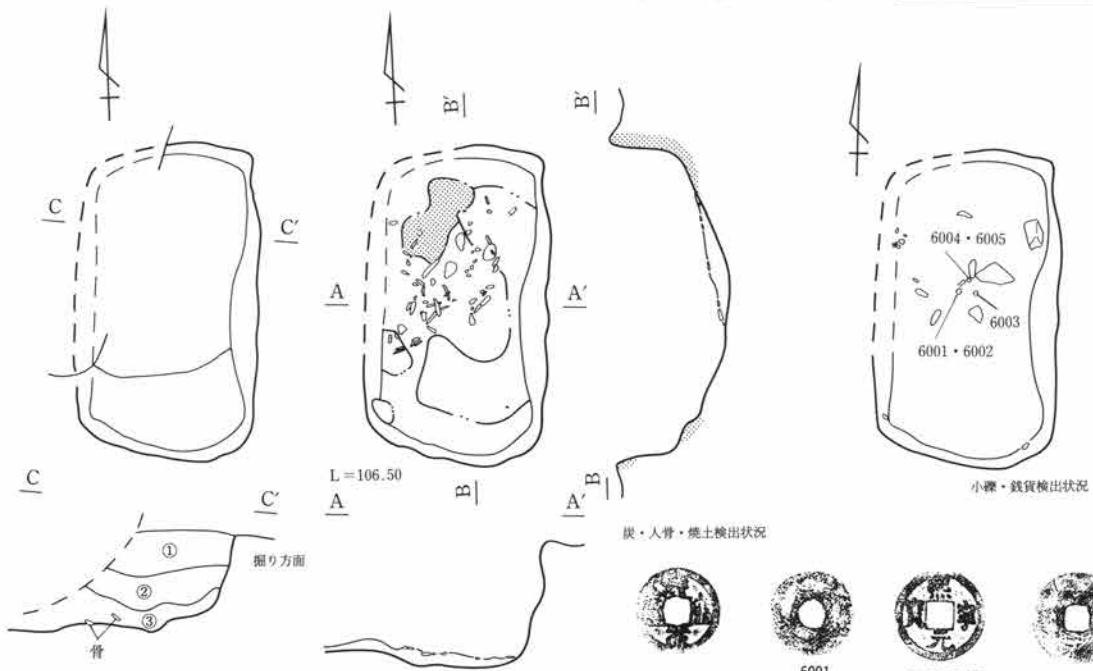


第107図 大御堂第11号火葬跡遺構平面図(1)



第108図 大御堂第11号火葬跡遺構平面図(2)

0 1:30 1m

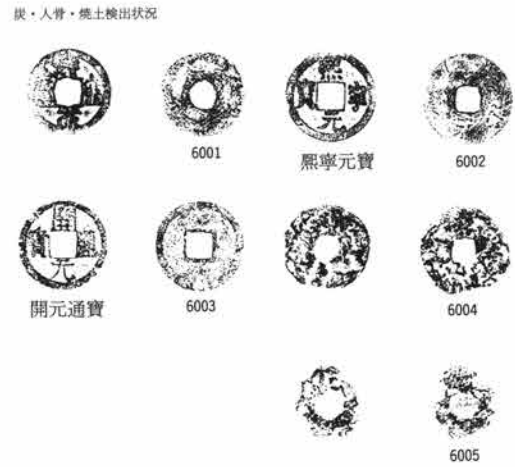


大御堂第1号火葬墓

- ① 灰褐色土 焼土粒少々含む。
- ② 褐色土 少々粘性あり。
- ③ 褐色土 焼土ブロック(黒色、オレンジ色)焼骨含み、粘性あり。

0 1:30 1m

第109図 大御堂第1号火葬墓遺構平面図



第110図 大御堂第1号火葬墓出土遺物実測図

遺構埋土には上層で茶褐色土・暗褐色土が、下層で炭化物層が見られ、炭化物層には焼土塊・焼骨を含む。骨の残存量は火葬跡としてはやや多い。炭化物層は約30cmの厚さで堆積し、遺構底面の焼土化は認められなかった。遺構確認面で30cm大の円礫を検出している。

(10) 大御堂第11号火葬跡 (第107図・第108図、写真図版32)

大御堂第11号火葬跡 (BK15) は Bk-13・14 で検出された。長軸長142cm、短軸長98cm (凸字部長143cm) で、深さ45cm、長軸方位はN-10°-Eで、箱形の形状を示す。遺構は真っ赤に焼土化した壁面でプランを確認をした。遺構埋土は上層で覆土と見られる茶褐色土・暗褐色土が、下層で約20cmの炭化物層が確認され、炭化物層には焼土塊・焼骨を含む。遺構底面の焼土化は認められなかった。

本遺構は火葬跡としては他とやや異なる様相が見られる。本調査区検出の火葬跡は埋土下層で炭化物層がありその中に若干の小礫を含む程度であるが、本遺構ではやや大きめの礫石を底面に並べた状態で検出した。礫石は20cm~40cm大のもので東壁際に3個、北側に3個並べられていた。厚さは約10cmあり、骨・炭化物等は礫面上に直接あり、礫は火葬に伴うものと判断された。北側の3個は西側の凸字張り出し部と並んで配され、凸字部は一辺38cmの方形で確認面からは約10cmの深さで、遺構底面とは20cm以上の段差が認められる。東壁での焼土化の状況は底面に置かれた円礫の上で著しく、炭化物層が礫上面にあることを考え合わせると、礫は火葬の際の燃焼効率を上げるために置かれたものと推定される。

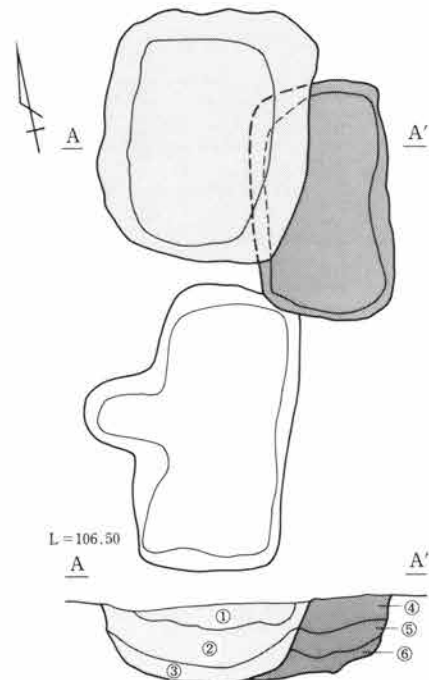
4 火 葬 墓

(1) 分布

火葬墓は寺院址西部及び北西部で検出されている。西部の第1号濠上面では火葬跡群の中に1基(大御堂第1号火葬墓)確認され、北西部では5基(大御堂第2号火葬墓~大御堂第6号火葬墓)が瓦溜まりの中で検出された。西部で検出された1基は火葬跡及び土坑墓と重複関係が認められ、また、北西部検出の5基は火葬墓群を構成しており、その様相はやや異なる。

北西部検出の5基は、寺院址北西部瓦溜まりの遺物取り上げの過程で、径2cm~6cm程度の小礫が密集する分布域があり、その中心付近に炭化物が確認され、炭化物中から土師質土器・銭貨等の遺物と火葬骨が検出されて遺構の存在が判明した。確認面と遺構底面との差がほとんどないことから、遺構はかなり削平されたものとみられる。この5基についてはいずれも炭化物の分布範囲を遺構の範囲と認定したので、遺構本来の形状と一致するかどうかは不明である。

(2) 大御堂第1号火葬墓 (第109図・第110図・第111図)



大御堂第1号火葬墓、第1号土坑墓遺構

- ① 灰褐色土 焼土粒少々含み、堅く締る。
- ② 褐色土 焼土ブロック(黒色、オレンジ色)少々含み、締り余りなし。
- ③ 暗褐色粘質土
- ④ 灰褐色土 焼土粒少々含む。
- ⑤ 褐色土 少々粘性あり。
- ⑥ 褐色土 焼土ブロック(黒色、オレンジ色)焼骨含み、粘性あり。

0 1 : 80 2 m

第111図 大御堂第9号火葬跡・第1号火葬墓・第1号土坑墓遺構切り合い関係平面図

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物

大御堂第1号火葬墓(BK11)は寺院址西部のB1-17・18グリッドで検出された。本遺構は大御堂第1号濠跡埋土中に構築されており、大御堂第9号火葬跡及び大御堂第1号土坑墓と切り合い関係を有する。すなわち、大御堂第9号火葬跡を切って本遺構が築かれ、大御堂第1号土坑墓が本遺構の西側の $\frac{1}{3}$ 程度を切っている。

本遺構の形状は長方形と推定され、長軸長128cm、推定短軸長73cm、深さ52cmであり、主軸方位はN-4°-Eである。壁面はほぼ直に立ち上がり、火葬跡同様に壁面の焼土化が認められ、埋土最下層には10cm程の炭化物層がみられ、埋土中に焼土ブロックの混入も認められた。炭化物層上面からは銭貨が5枚出土した。確認できた銭貨名は「開元通寶」(6003)、「熙寧元寶」(6001)である。

本遺構の残存状況は、壁面の焼土化と埋土最下層での炭化物層の検出という点では火葬跡とほぼ同様であり、火葬骨の残存状況も比較的似ている。しかし、銭貨を伴うということから、本遺構では火葬骨をそのまま埋葬したかどうかは別にして、遺物を副葬する行為があったと判断できる。このことから火葬跡としてではなく火葬墓としての性格を有する遺構と判断した。

(3) 大御堂第2号火葬墓(第112図・第113図、写真図版33・34)

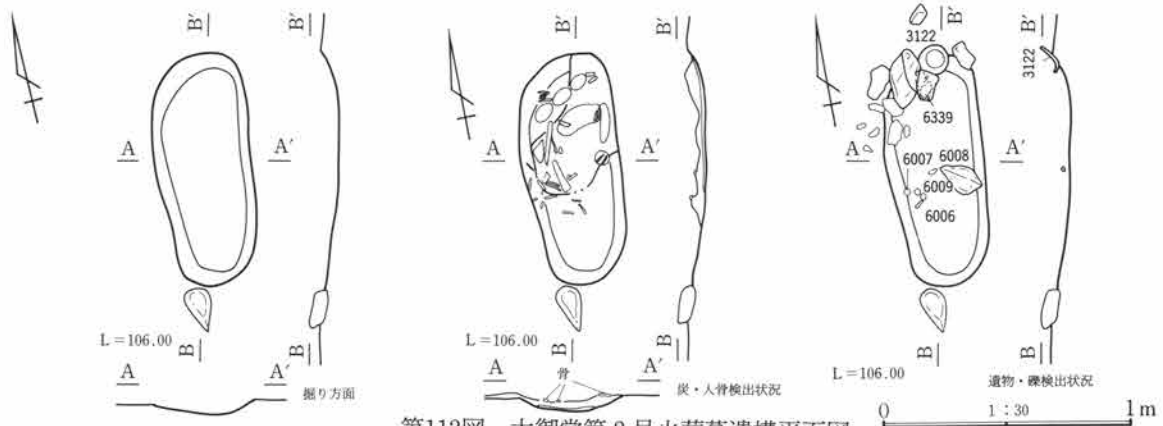
大御堂第2号火葬墓(BK22)は寺院址北西部のBd-09グリッドで検出された。北西部検出火葬墓群の中では東よりに位置し、本遺構のすぐ南は第1号池状遺構の北縁段差となる。確認された平面形状は長楕円形で、遺構規模は長軸長90cm、短軸長40cm、確認された掘り方の深さ5cmで長軸方位はN-5°-Eを示す。遺構埋土は炭化物層のみ確認され、遺構の残存状況は悪い。北西部隅に10cm~20cm大の小礫が数個まとまって検出された。この礫には火熱を受けて割れたものも見られ、遺構に伴う礫と判断された。また、炭化物層上面では火葬骨が一面にあり、北端の礫の間からは、土師質土器(3122)がやや傾いているものの正位の状態で完形のまま出土した。この土器はロクロ成形の皿形で口径110mm、器高27mmで口縁部はほぼ直に外反する器形である。この他に銭貨が4枚(6006~6009)出土した。いずれも「永樂通寶」である。土師質土器や礫は掘り方確認面より上で検出されたことから、本遺構は遺構底面近くまで削平を受けたものと推定される。

(4) 大御堂第3号火葬墓(第114図・第115図、写真図版33・34)

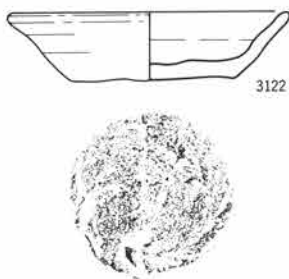
大御堂第3号火葬墓(BK23)は寺院址北西部のBe-08・09グリッドにあり、大御堂第4号火葬墓と隣接して検出された。遺構確認面は106.00m~106.05mの標高であるが、ここは瓦溜まりと考えられる遺物散布地の東縁にあたる。確認された平面形状は長楕円形で、遺構規模は長軸長152cm、短軸長36cm、深さ6cm~8cm、長軸方位はN-2°-Eを示す。遺構埋土は混土炭化物層のみで、遺構内に礫・焼骨・土師質土器等が検出された。焼骨は遺構のほぼ全面から検出され、検出面から遺構底面まで残っていた。遺構底面はかなり堅く締って平坦であり、火熱を受けた痕跡が認められる。10cm~20cm大の小礫が数個見られ中心よりやや南の位置では完形の皿形土師質土器が2個正位に置かれたままの状態と並んで出土した。2点の土師質土器(3123、3124)はロクロ成形の皿形で口径108mm、器高30mm、口縁部はやや外反する器形で、口底比は小さくやや肉厚である。銭貨は「至道元寶」(6010)が1枚確認された。

(5) 大御堂第4号火葬墓(第116図・第117図、写真図版33)

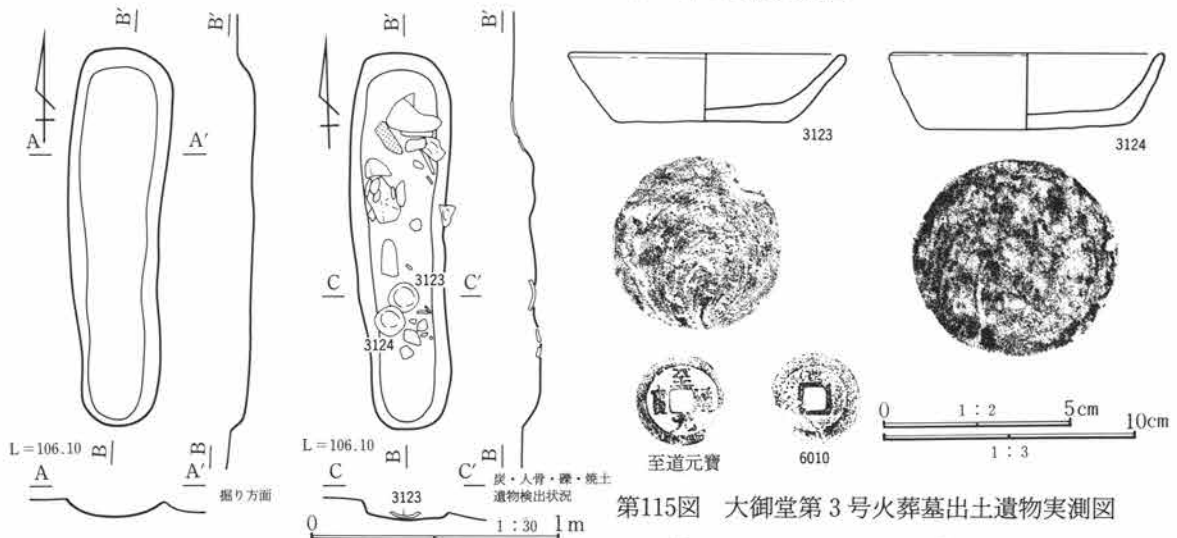
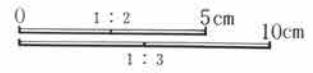
大御堂第4号火葬墓(BK23)は寺院址北西部のBe-09グリッドにあり、第5号火葬墓の南に隣接して検出された。遺構確認面は106.05m前後の標高であるが、ここは瓦溜まりと考えられる遺物散布地の東縁にあたり、第3号火葬墓に比較的隣接して検出された。本遺構の周囲には径5cm~10cm程度の小礫が1.5m~2.5mの範囲に集中しており、その中に炭化物の分布域が認められて、本遺構を検出した。確認された平面形状は長楕円形で、遺構規模は長軸長81cm、短軸長35cmとやや小さく、深さ2cm~3cmとほとんど掘り方を確認でき



第112図 大御堂第2号火葬墓遺構平面図

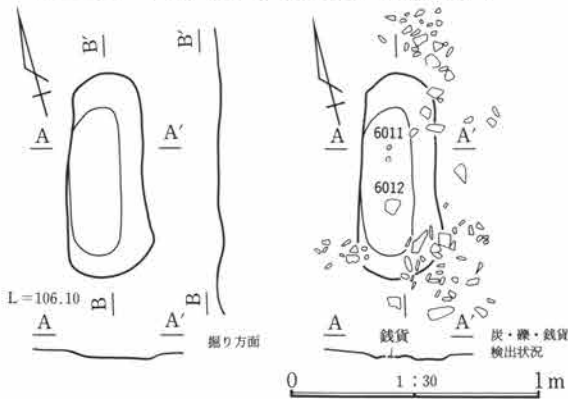


第113図 大御堂第2号火葬墓出土遺物実測図

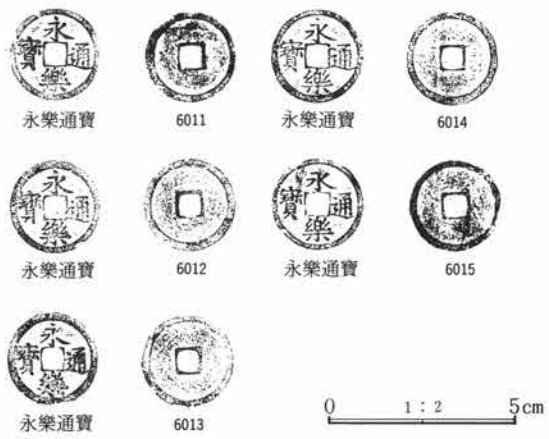


第114図 大御堂第3号火葬墓遺構平面図

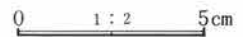
第115図 大御堂第3号火葬墓出土遺物実測図

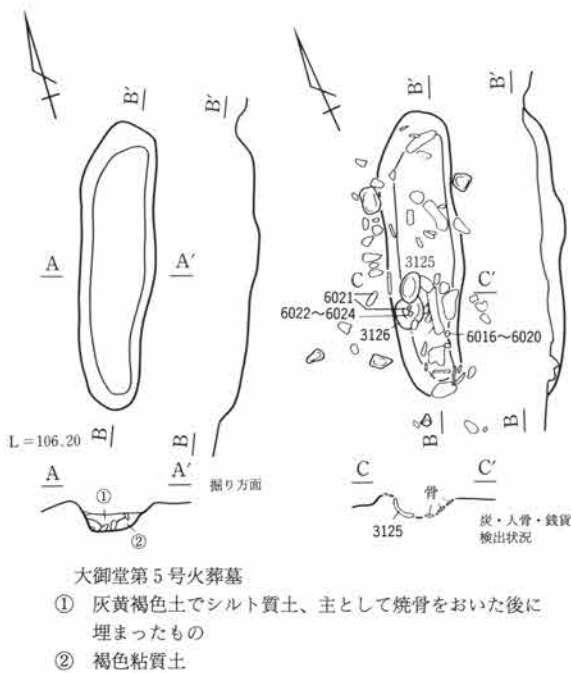


第116図 大御堂第4号火葬墓遺構平面図

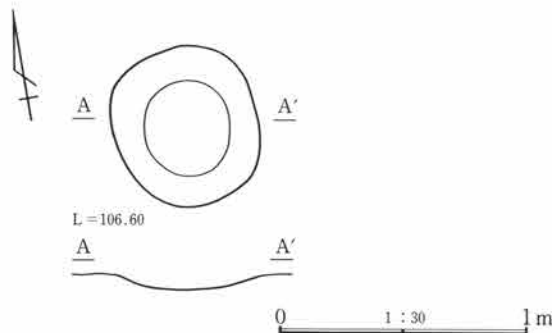


第117図 大御堂第4号火葬墓出土遺物実測図

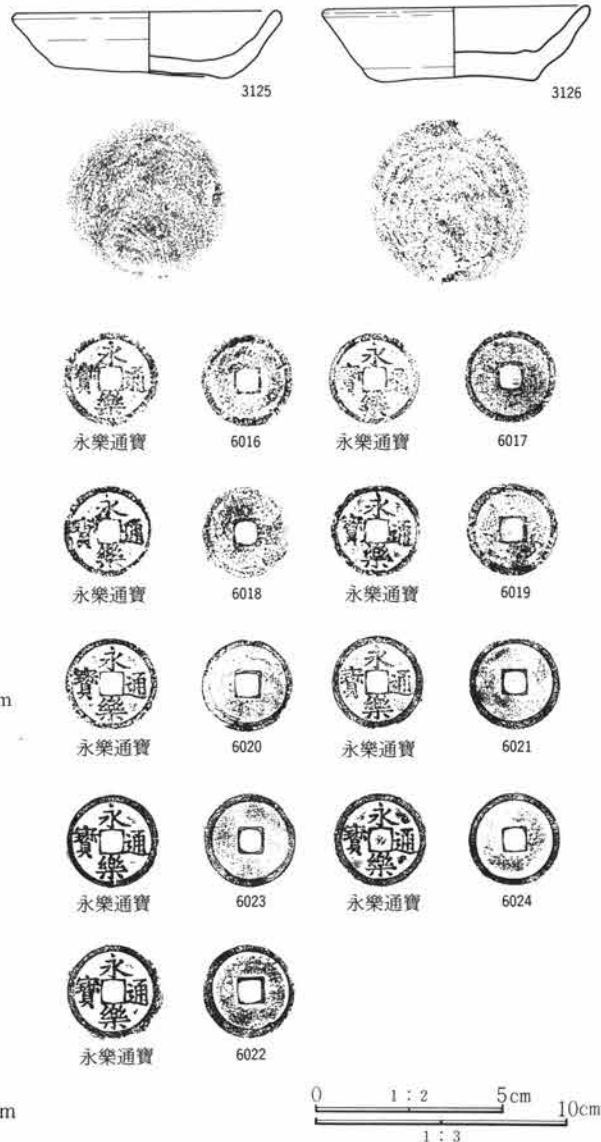




第118図 大御堂第5号火葬墓遺構平面図



第120図 大御堂第6号火葬墓遺構平面図



第119図 大御堂第5号火葬墓出土遺物実測図

ないほどの浅さであった。長軸方位はN-13°-Eを示す。遺構埋土は炭化物層のみで、遺構内に礫・焼骨・銭貨等が検出された。銭貨は5枚(6011~6015)検出され、銭貨名はすべて「永樂通寶」である。

(6) 大御堂第5号火葬墓(第118図・第119図、写真図版34)

大御堂第5号火葬墓(BK25)は寺院址北西部のBg-09・10グリッドで、大御堂第2号溝状遺構・土塁跡にほぼ平行する位置で検出された。本遺構検出面は北西部瓦溜まりの最も遺物散布の密な部分で、遺物取り上げの過程で本遺構を確認した。遺構形状は長楕円形で、長軸長114cm、短軸長30cmで、確認面からの深さ14cm、遺構の主軸方向はN-22°-Eである。遺構内からは炭化物に混じって焼骨・土師質土器・銭貨等が検出された。埋土は灰褐色シルト質土と褐色粘質土が観察され、土坑の壁面はやや焼土化して暗褐色になっているが、火の受け方は弱く、壁が堅く焼きしまった様子は観察されなかった。

土師質土器(3125、3126)はほぼ中央部で検出されたが、2つの土器には若干のレベル差が認められる。器形はほぼ同じでロクロ成形の皿形である。銭貨もその近くで検出されたが、4個と5個の二つのまとまりであった。銭貨はすべて「永樂通寶」である。土坑南半では底面直上に一面に炭化した藁が検出された。焼骨は遺構確認の最上面から見られるが、骨と土とが交互にあり、また、銭貨の出土状況にも間に土層を挟む

という点で複数の埋葬の可能性が認められる。

(7) 大御堂第6号火葬墓(第120図)

大御堂第6号火葬墓(BK21)は寺院址北西部のBd-09グリッドで検出された。北西部の火葬墓群の中では最も東に位置し、径60cmの円形に炭化物が分布域により確認された。埋土としては炭化物層を確認したのみでわずか3cm程の薄さである。本遺構においては骨・遺物等は検出されなかったためその性格は不明であるが、確認面がほぼ同レベルであることと確認時の状況が他の4基の火葬墓と同様に炭化物の分布域にあるという点で同じであることから、火葬墓と推定した。

5 土 坑 墓

(1) 分布

土坑墓としたものはやや隅丸の方形若しくは長方形を呈し、箱型の断面形状を示すもので、埋土中から土師質土器・銭貨等の遺物と骨・礫等が出土するものがあり、木棺直葬の土坑墓としての性格が考えられる。寺院址部分で7基が検出され、その分布は寺域中央部の南西の一角に集中する傾向が見られる。溝状遺構や掘立柱建物跡と重複関係の認められるものがあり、遺構の切り合い関係や出土遺物からはこれらの土坑墓が後出すると考えられる。

(2) 大御堂第1号土坑墓(第121図・第122図)

大御堂第1号土坑墓(調査名BK13)は寺院址西部のBl-17・18グリッドの第1号濠跡埋土上面で大御堂第9号火葬跡及び大御堂第1号火葬墓と重複して検出された。遺構形状はやや隅丸の方形で、長軸長135cm、短軸長111cm、確認面からの深さ48cmの箱型で壁はほぼ直立し、長軸方向はN-14°-Eである。本遺構の埋土は①灰褐色土、②褐色土、③暗褐色粘質土であるが、いずれの層位にも焼土ブロックの混入が認められる。本遺構からは円礫が数点出土している。円礫は30cm大から15cm大のものまでで、南北に並んで検出された。この円礫は土坑底面からはやや浮いており、南端の1個は土坑肩部から落ち込むように検出されたことから本来の位置は土坑上部にあったことが予想される。

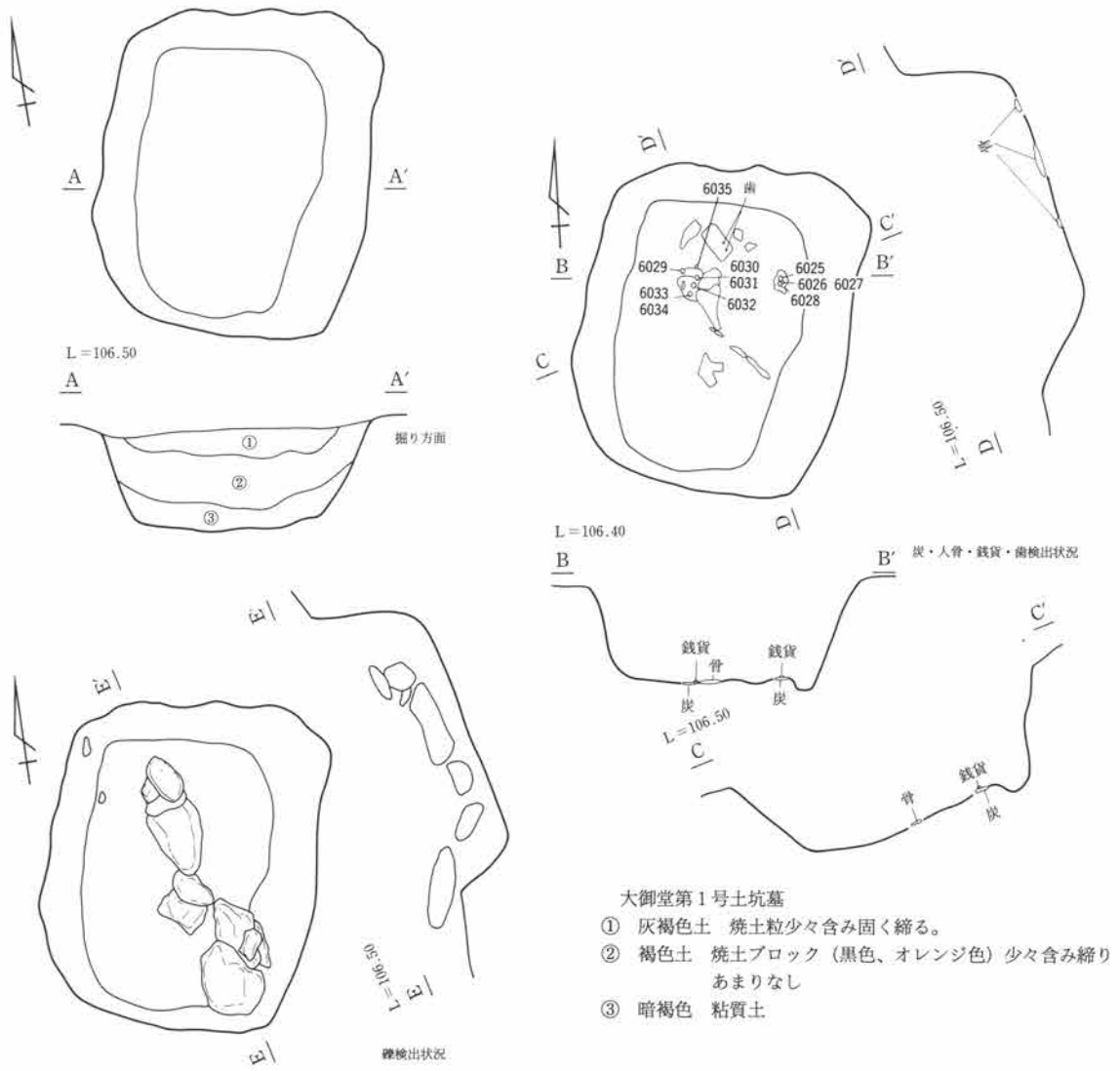
土坑底面からは炭化材とともに骨・銭貨が検出された。骨はやや大きめの鎖骨が1点と歯が確認できた他は部位の特定のできない小片である。炭化材は棺材かと考えられ、銭貨はこの炭化材直上にあることが確認された。確認された銭貨名は「永樂通寶」(6025・6027・6028)、「大觀通寶」(6026)、「聖宋通寶」(6031)、「洪武通寶」(6035)などで11枚出土している。

円礫の在り方から考えると、本遺構の構築面は遺構確認面とあまり大差のないレベルかと思われる。また、本遺構が大御堂第1号火葬墓を切って構築されていることが確認された。

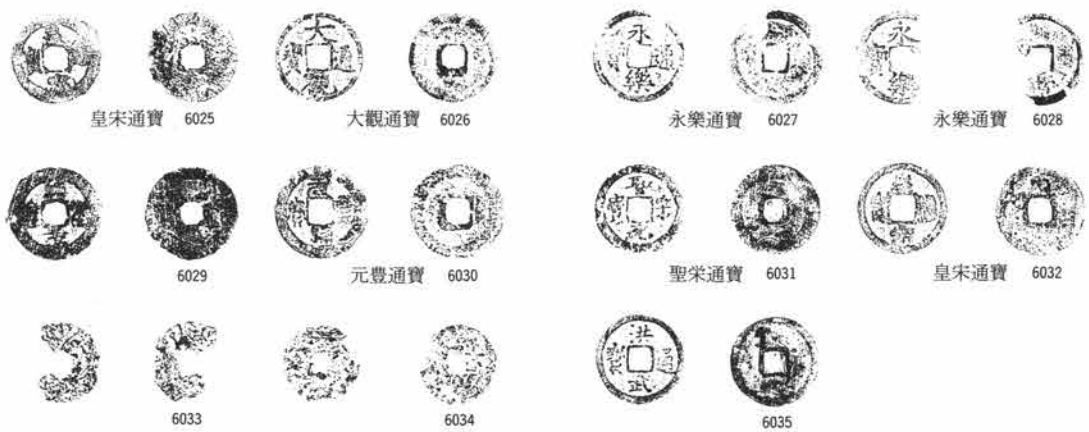
出土した歯は永久歯で、咬耗が進んでおり成人と認められる。鈍い黄橙色を呈しており、火熱を受けた際に生じる亀裂や灰白色化を示しておらず、木棺直葬と推定される。

(3) 大御堂第2号土坑墓(第123図・第124図)

大御堂第2号土坑墓(BK31)は、大御堂第1号配石墓のすぐ北、土塁跡の東にあたるBh-14グリッドで検出された。長軸長131cm、短軸長87cm、確認面からの深さ18cmで、隅丸方形に近い平面形状を呈し、長軸方位はN-20°-Eを示す。本遺構は大御堂第1号配石墓の北に広がる遺物散布域の中にあり、頭部を欠損した板碑が埋土上部で円礫とともに出土した。土坑内からは歯を含む骨が検出され、また、銭貨は「聖宋元寶」(6036)と「永樂通寶」(6037)の2枚が出土した。本遺構から出土した歯は永久歯で、咬耗が進んでおり成人と認められる。鈍い黄橙色を呈しており、火熱を受けた際に生じる亀裂や灰白色化を示しておらず、火熱を受けた



第121図 大御堂第1号土坑墓遺構平面図 0 1:30 1m



第122図 大御堂第1号土坑墓出土遺物実測図

0 1:2 5cm

とは考え難い。

(4) 大御堂第3号土坑墓(第125図・第126図、写真図版35)

大御堂第3号土坑墓(BK32)は寺院址南部のBe-22・23グリッドで大御堂第12号溝状遺構とともに検出された。本遺構は、確認時においては大御堂第12号溝状遺構の一部と見られていたが、暗渠の掘り方の確認作業で大御堂第12号溝状遺構を切って構築されたものと判明した。遺構形状は方形で、長軸長107cm、短軸長85cm、確認面からの深さ52cmである。遺構の残存状況は良好で、土師質土器3点(3127~3129)と銭貨6枚(6038~6043)が出土した。

土師質土器は3点とも口径110mm前後、器高20mm~25mmとほとんど同じもので、ロクロ成形の皿形で完形であり、南東隅からまとまって出土した。また銭貨は遺構の中心に近い底面直上にあり、4点は重なって出土した。確認された銭貨名は「祥符通寶」(6038)、「皇宋元寶」(6039)、「元豊通寶」(6041)、「永樂通寶」(6043)などである。

本遺構は大御堂第12号溝状遺構を切って構築されているが、暗渠用石材を転用しており、土坑内の円礫は底面からはやや浮いて検出されており、土坑上部に置いて使用したものが中に落ち込んだものと考えられる。

(5) 大御堂第4号土坑墓(第127図、写真図版35)

大御堂第4号土坑墓(BK27)は寺域中央部の南西隅にあたるBh-22グリッドで検出された。本遺構は大御堂第2号溝状遺構を切って構築されており、大御堂第5号土坑墓・第6号土坑墓と比較的近接して存在する。遺構形状は隅丸の長方形で、長軸長174cm、短軸長92cm、確認面からの深さ48cmで、長軸方位はN-74°-Eを示す。遺構埋土は3層に別れるがすべて暗褐色土系であり、最下層は比較的粒子が細かく締りがある。また、遺構中に20cm~50cm大の円礫が十数個検出され、その中に平瓦片(A類)も数個混じっていた。円礫は遺構底面よりは数cm浮いており、本来は蓋石として置かれたものが遺構内に落ち込んだものと推定される。

(6) 大御堂第5号土坑墓(第128図、写真図版35)

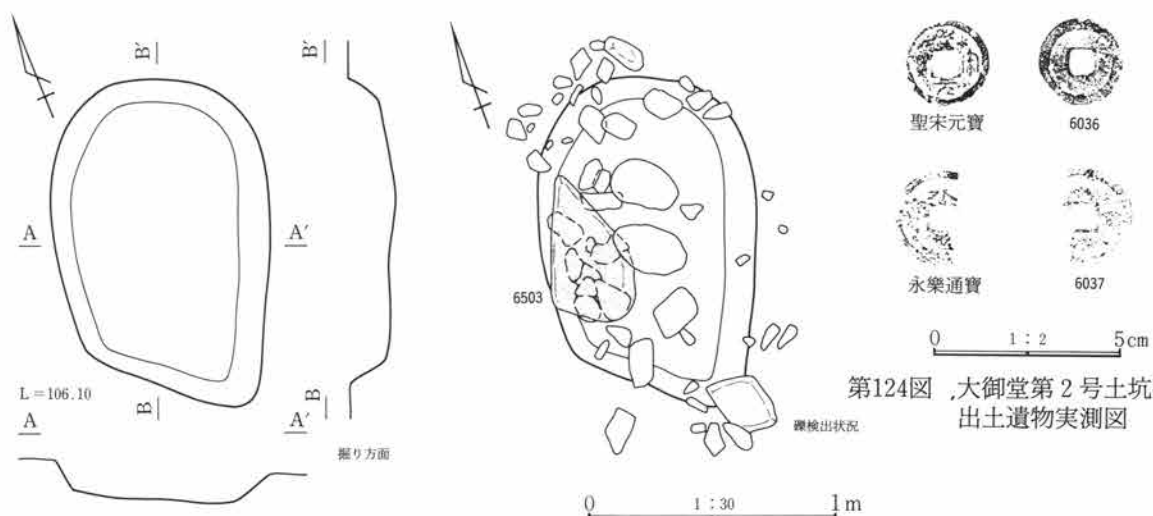
大御堂第5号土坑墓(BK28)は寺域中央部の南西隅にあたるBi-22グリッドで検出された。確認面標高は106.15m、遺構規模・形状は長軸長190cm、短軸長80cmの箱型長方形で、壁面はほぼ直に近い立ち上がりで深さ20cm、確認面から底面最深部までは約30cmの深さで、長軸方位はN-73°-Wである。遺構中に数個の円礫が認められ、遺物は釘と思われる鉄製品が底面より+3cmの高さで出土している。本遺構は大御堂第1号掘立柱建物跡(BB1)の遺構内で検出されているが、その関連性については不明であり、建物に関する土坑とも考えられ得るが、周辺にもピット・土坑等が幾つかまとまっており、遺構形状及び埋土の状況に類似性が認められ、これらと比較検討により土坑墓である可能性が高いと判断した。

(7) 大御堂第6号土坑墓(第129図、写真図版36)

大御堂第6号土坑墓(BK29)は寺域中央部の南西隅にあたるBi-21グリッドで検出された。確認面標高は106.90m、遺構は長軸長130cm、短軸長86cmの隅丸の箱型長方形で、壁面はほぼ直に近い立ち上がりで深さ約20cm、確認面から底面最深部までは約35cmの深さで、長軸方位はN-78°-Wである。埋土中からは形状不明の鉄製品(6359)が1点出土している。

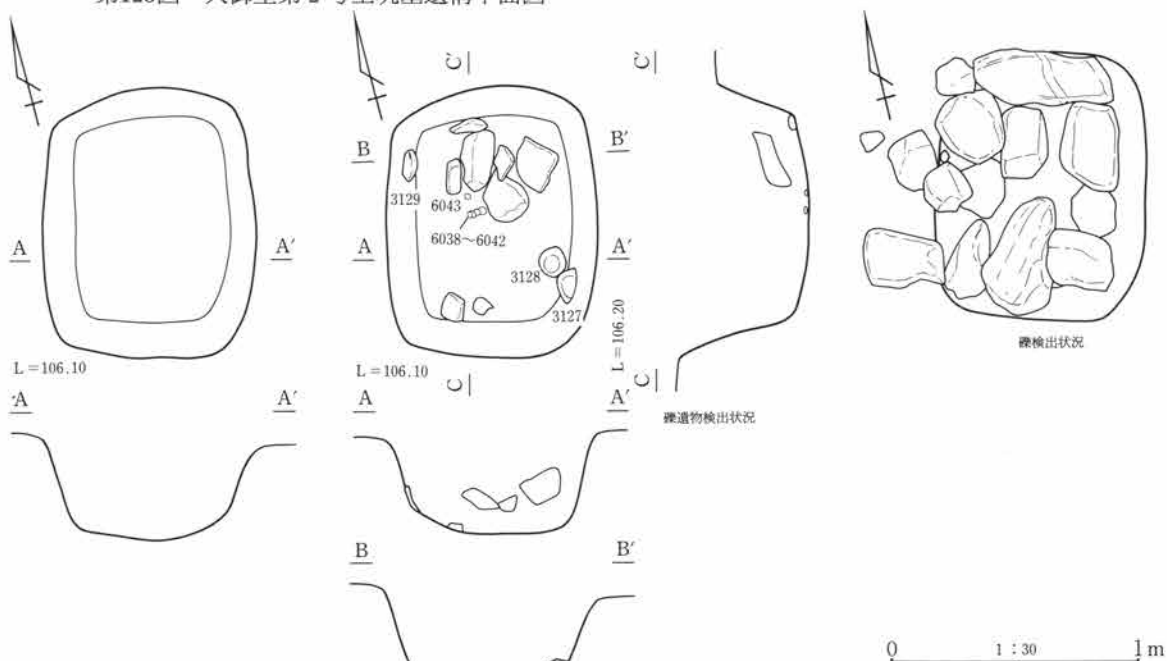
(8) 大御堂第7号土坑墓(第130図、写真図版36)

大御堂第7号土坑墓(BK30)は寺域中央部のBi-20グリッドで検出された。遺構形状はやや隅丸の長方形で、長軸長118cm、短軸長63cm、壁高10cm~15cmで底面最深部は確認面から25cmの深さで、長軸方位はN-8°-Eを示す。本遺構は大御堂第6号土坑墓の北約1.2mのところに位置し、遺構埋土中には径10cm大の礫が4個並んで検出されたが、遺物は確認できなかった。

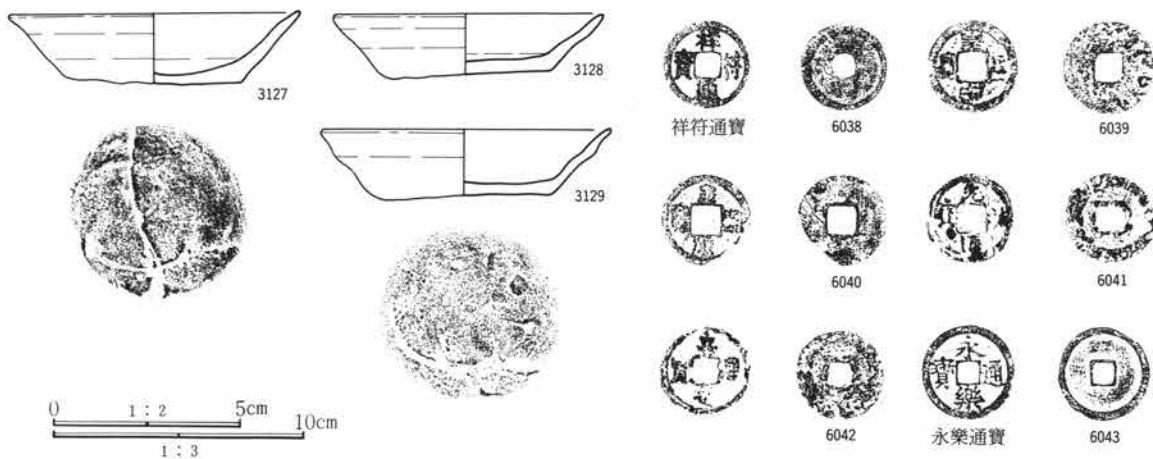


第124図 大御堂第2号土坑墓出土遺物実測図

第123図 大御堂第2号土坑墓遺構平面図



第125図 大御堂第3号土坑墓遺構平面図



第126図 大御堂第3号土坑墓出土遺物実測図

本遺構は大御堂第6号土坑墓とともに大御堂第10号掘立柱建物跡の遺構範囲内で検出されたが、これとは別の時期的に後出する遺構と考えられる。建物に関する土坑とも考えられ得るが、類例の埋葬墓墳が検出されてそれと遺構形状及び埋土の状況に類似性が認められ、周辺に存するピット・土坑等との埋土の比較検討により土坑墓である可能性が高いと判断した。

(9) 大御堂第8号土坑墓（第131図、写真図版36）

大御堂第8号土坑墓（BK17）は、寺域中央部のBg-18グリッドで検出された。遺構は楕円形に近い形状を呈し、規模は長軸長132cm、短軸長110cm、確認面から底面最深部までは52cmの深さである。遺構埋土は上層に灰色粘質土と暗赤褐色土の混土層が、下層には灰色粘質土の混入した暗赤褐色土が認められた。埋土中に円礫があった他は、遺物等の出土はなかった。上層は遺構覆土と考えられ、下層が本遺構の埋土と考えられるが、層序的には差異はなく、埋め戻されたものと考えられる。土坑墓とする積極的証左は認められないものの、検出位置・遺構形状等からその可能性が高いと判断した。

6 土 壙

(1) 大御堂第1号土壙（第132図、写真図版36）

大御堂第1号土壙（AK1）は、大御堂調査区の東端、鮎川崖に近いAj-06グリッドで検出された。遺構形状は円形で、規模は径82cm、壁高27cm～35cm、確認面から底面最深部までは28cmの深さで壁はほぼ直に立ち上がる。出土遺物はなく、埋土は上層に暗褐色砂質土層、下層に暗褐色土層が見られる。埋土からは近世以降と思われ、遺構の性格は不明である。

(2) 大御堂第2号土壙（第133図、写真図版36）

大御堂第2号土壙（BK4）は寺院址土塁跡上の南端に近いBk-21・22グリッドで検出された。長軸長115cm、短軸長108cmで、ほぼ円形の形状を呈し、壁はほぼ直に立ち上がり、確認面からの深さは約50cmで底面は平坦である。確認面は茶褐色粘質土で確認標高は106.75mである。最上層の埋土①層には浅間A軽石混じりの茶褐色土がみられ、その下に埋土②層の暗褐色土がやや厚く見られる。最下層の埋土③層に黄色粘質土ブロックの混入した暗褐色粘質土が観察された。遺物出土は見られず遺構の性格は不明である。

(3) 大御堂第3号土壙（第134図）

大御堂第3号土壙（BK5）は寺院址西部の土塁跡上面のBj-15グリッドで検出された。確認面は茶褐色粘質土、標高は106.50mで、長軸長88cm、短軸長78cmの円形の形状を呈し、壁はほぼ直に立ち上がり、深さは約37cmで底面は平坦である。埋土には浅間A軽石と思われる暗褐色砂質土を含み、下層には暗黄褐色粘質土ブロックの混入した暗褐色土が認められる。遺物出土は見られず遺構の性格は不明である。

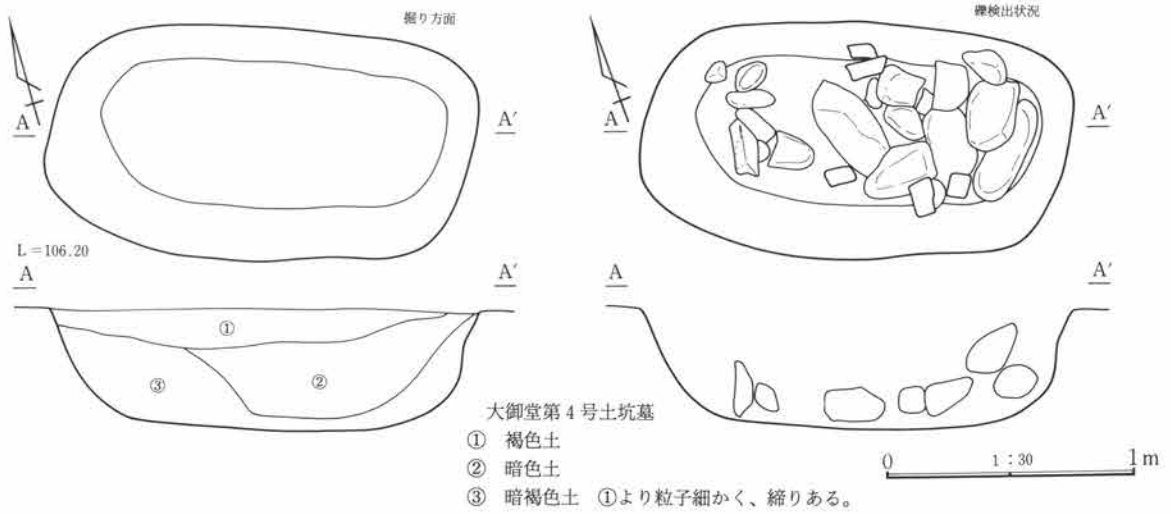
(4) 大御堂第4号土壙（第135図、写真図版36）

大御堂第4号土壙（BK6）は寺院址西部の土塁跡上面のBj-15グリッドで検出された。確認面標高は106.50mで、径101cmの円形の形状を呈し、壁はほぼ直に立ち上がり、深さは約40cmで底面は平坦である。埋土は基本的には暗褐色土で、黄色土ブロックの混入がみられる。遺物出土は見られず遺構の性格は不明である。

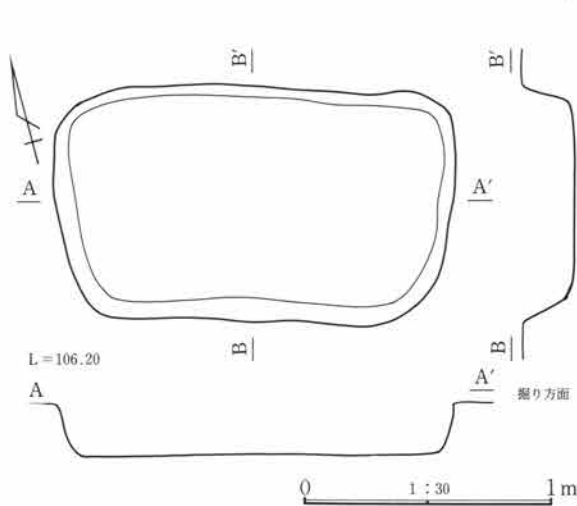
(5) 大御堂第5号土壙（第136図、写真図版36）

大御堂第5号土壙（BK33）はB区農道西の南部、Bs-26グリッドで検出された。径140cmの円形の平面形状を呈し、底面は平坦で壁面はほぼ直に立ち上がり、深さは38cmである。埋土①層に浅間A軽石を含む暗褐色土、②層に黒褐色粘質土層、③層に砂層が認められ、埋土中からは遺物は検出されなかった。遺構の性格は不明である。

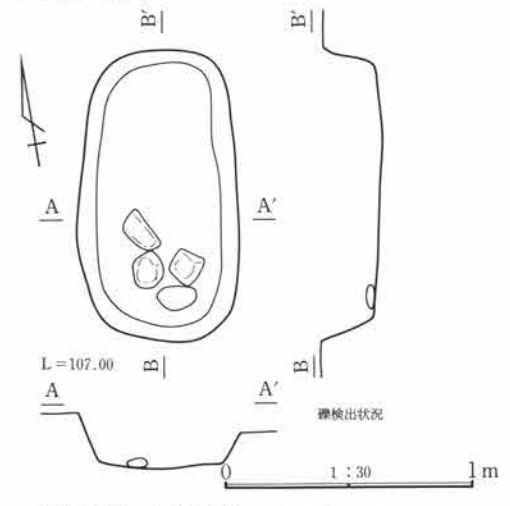
第III章 大御堂調査区の遺構と遺物



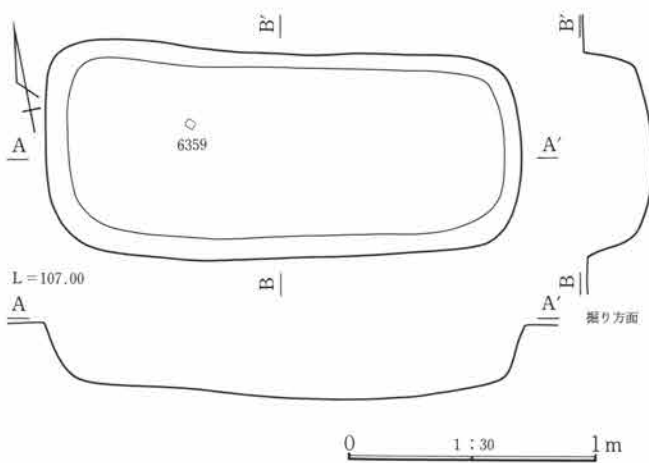
第127図 大御堂第4号土坑墓遺構平面図



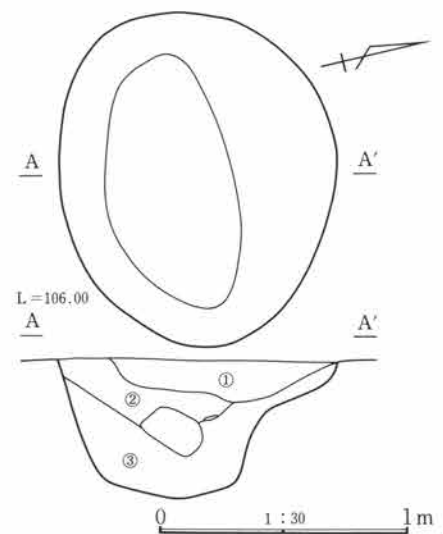
第128図 大御堂第5号土坑墓遺構平面図



第130図 大御堂第7号土坑墓遺構平面図



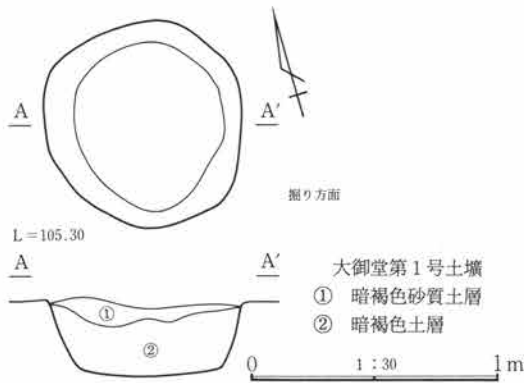
第129図 大御堂第6号土坑墓遺構平面図



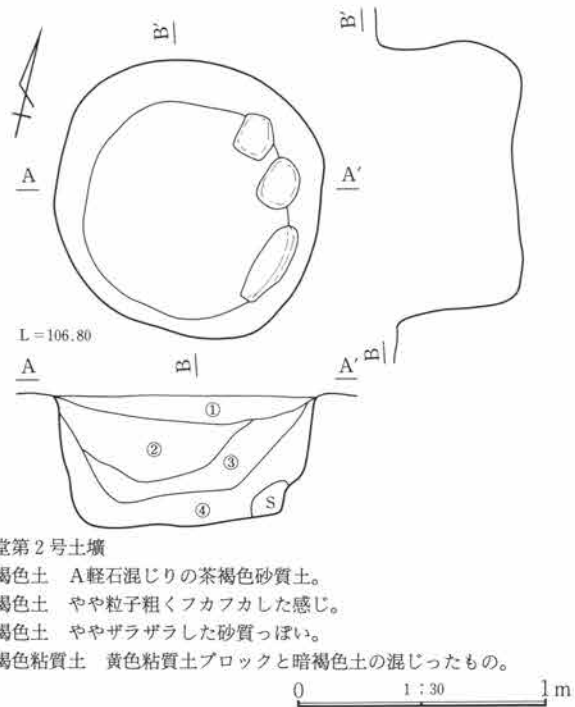
大御堂第8号土坑墓

- ① 暗灰色粘質土との暗赤褐色の混土層
② 灰色粘質と暗赤褐色の混土層
③ 暗赤褐色砂質土 灰色粘質土混入。

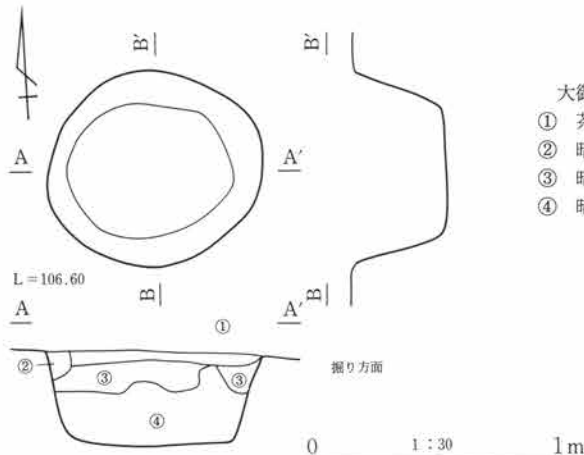
第131図 大御堂第8号土坑墓遺構平面図



第132図 大御堂第1号土壌遺構平面図

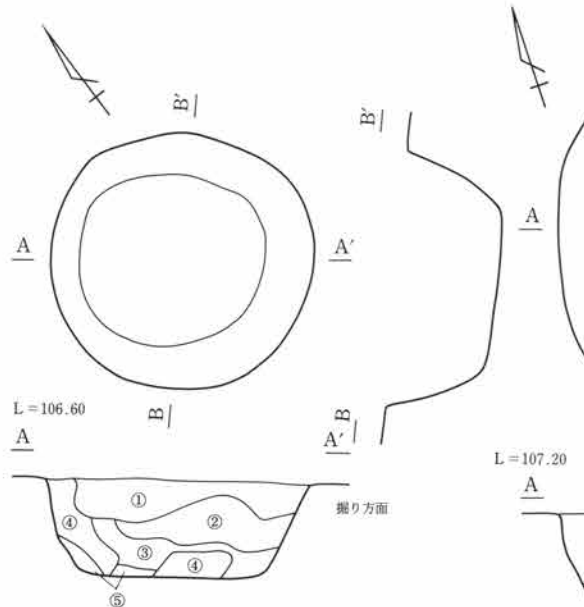


第133図 大御堂第2号土壌遺構平面図

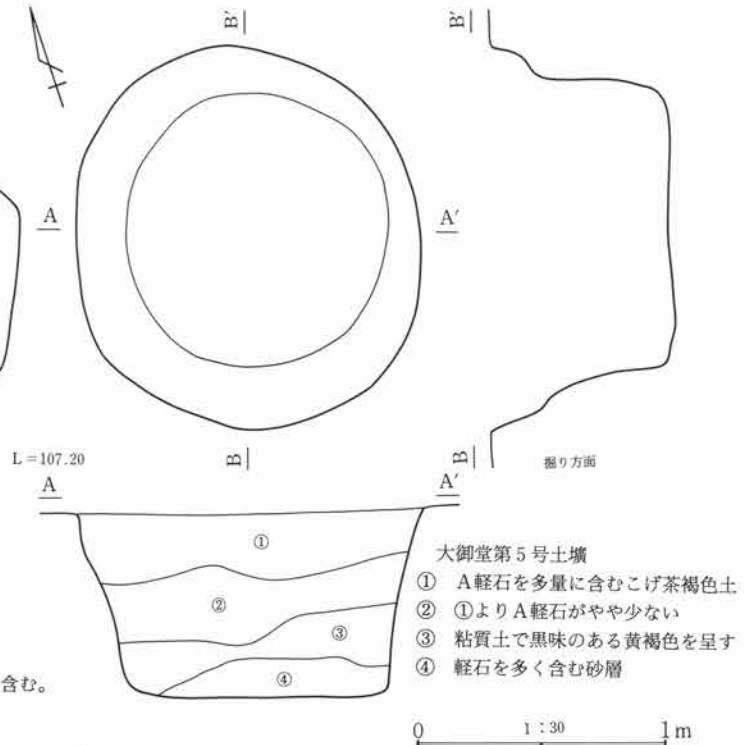


第134図 大御堂第3号土壌遺構平面図

- 大御堂第2号土壌
- ① 茶褐色土 A軽石混じりの茶褐色砂質土。
 - ② 暗褐色土 やや粒子粗くフカフカした感じ。
 - ③ 暗褐色土 ややザラザラした砂質っぽい。
 - ④ 暗褐色粘質土 黄色粘質土ブロックと暗褐色土の混じったもの。



第135図 大御堂第4号土壌遺構平面図



第136図 大御堂第5号土壌遺構平面図

- 大御堂第4号土壌
- ① 黄色土ブロックの混じった暗褐色土
 - ② 締りの悪い暗褐色砂質土 黄色土小ブロックを少量含む。
 - ③ 暗褐色砂質土
 - ④ ②と同質
 - ⑤ 黄色土小粒子がやや多く入る

- 大御堂第5号土壌
- ① A軽石を多量に含む茶褐色土
 - ② ①よりA軽石がやや少ない
 - ③ 粘質土で黒味のある黄褐色を呈す
 - ④ 軽石を多く含む砂層

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

(6) 検出土壌について

上記の5基は、ほぼ同じ規模・形状を示す遺構で、埋土も暗褐色土を主とするという点で共通性が見られる。埋土上層部には若干の異同があるものの、浅間A軽石混じりの暗褐色砂質土があるという点では同様であり、埋土堆積時期から判断して近世中頃以降と推定される。埋土中に黄色粘質土ブロックが混入すること、いわゆる三角堆積土が見られないという点で、埋没が一次的なものと推定される。遺物が見られず、埋土のみで判断するのは早計であるかもしれないが、埋土中の砂質土と粘質土との差異から考えて、墓墳としての性格が推定された。なお、いわゆる土坑と区別する意味で本報告書では土壌の名称を使用している。

7 石造物（第137図～第139図、写真図版101～104）

大御堂調査区では、線刻五輪塔（6501）・宝篋印塔（6502）・板碑（6503～6507）・五輪塔（6508～6510）等の石造物が検出されている。

(1) 線刻五輪塔

線刻五輪塔（6501）は調査区中央部付近で立位で東面して安置されていた。五輪塔の線刻された正面の平面形は高さ75.5cm、最大幅46cmの逆「U」字を、縦断面形は寸の詰まった舟形光背状を、横断面形は半径34.6cmほどの半円形を呈している。正面には総高61cmの五輪塔が線刻される。五輪塔の空・風輪は砲弾を上下に2分割したように、火輪は高さの詰まり気味の二等辺三角形を、水輪は下膨れした円形を、地輪は裾のやや広がる横長長方形を呈している。本石造物は底部に自然面を残すが、側面から裏面は、棒状丸ノミによるノミ切り仕上げを、正面ではノミ切後、粗い水磨き仕上げを実施していると思われる。本五輪塔に類する資料には下仁田町西野牧大栗に1基、群馬町上野国分寺跡で2基、群馬町観音寺堂内に1基その存在が知られている。

国分寺跡出土のものは高さ69cm、幅22.5cm、厚さ7cmほどの安山岩製板碑状塔婆の中央に五輪塔が線刻されている。この塔婆に紀年銘は存在しないが、火輪の軒部の形状や供伴する五輪塔の紀年銘から15世紀中頃の年代が考えられる。他の1基は同種の安山岩製塔婆だが、線刻された五輪塔の形状が稚拙なことから、後出時期の所産と思われる。

観音寺堂内所在の安山岩製板碑状塔婆は残高28cm、幅19cmの小型のもので、刻まれた五輪塔は大御堂遺跡出土の（6501）に類似するものである。この塔婆には「妙心禅 永享 二月 日」との銘文の存在から1429～1441年の所産になるものである。

これら類似遺物との比較から、大御堂遺跡の線刻五輪塔は15世紀中頃の所産になるものと推定される。

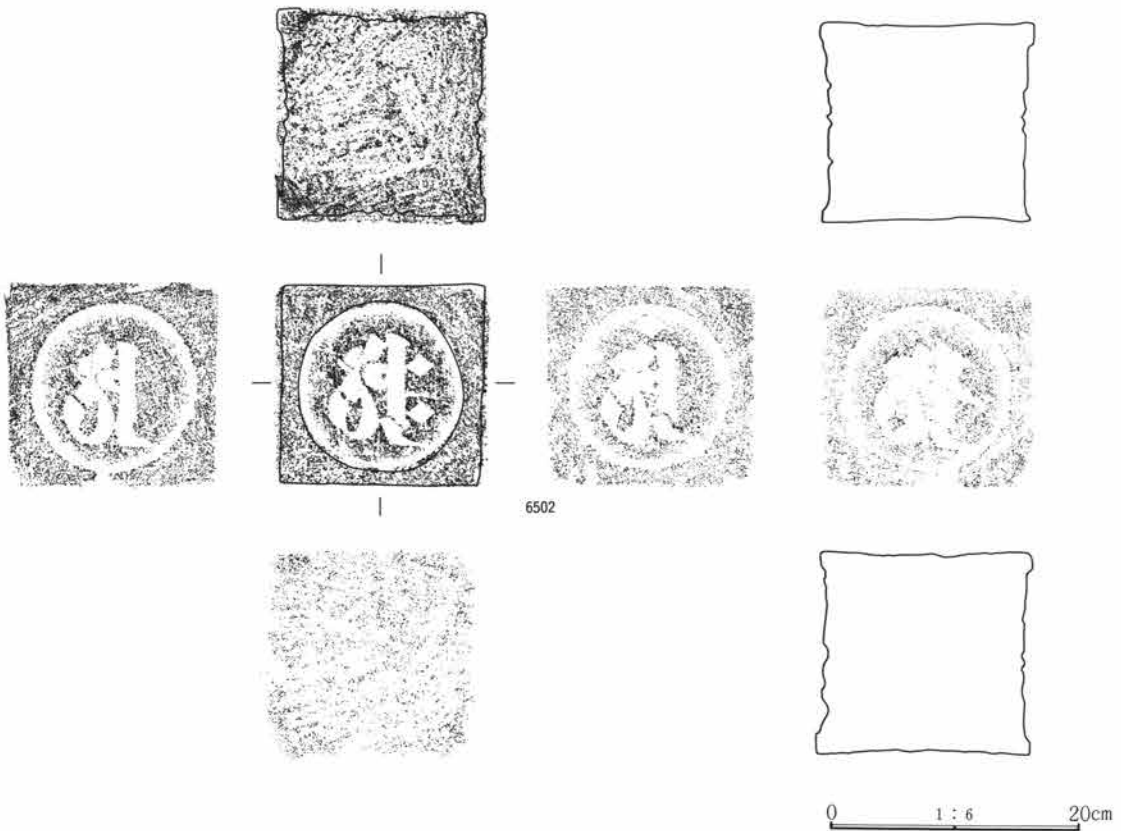
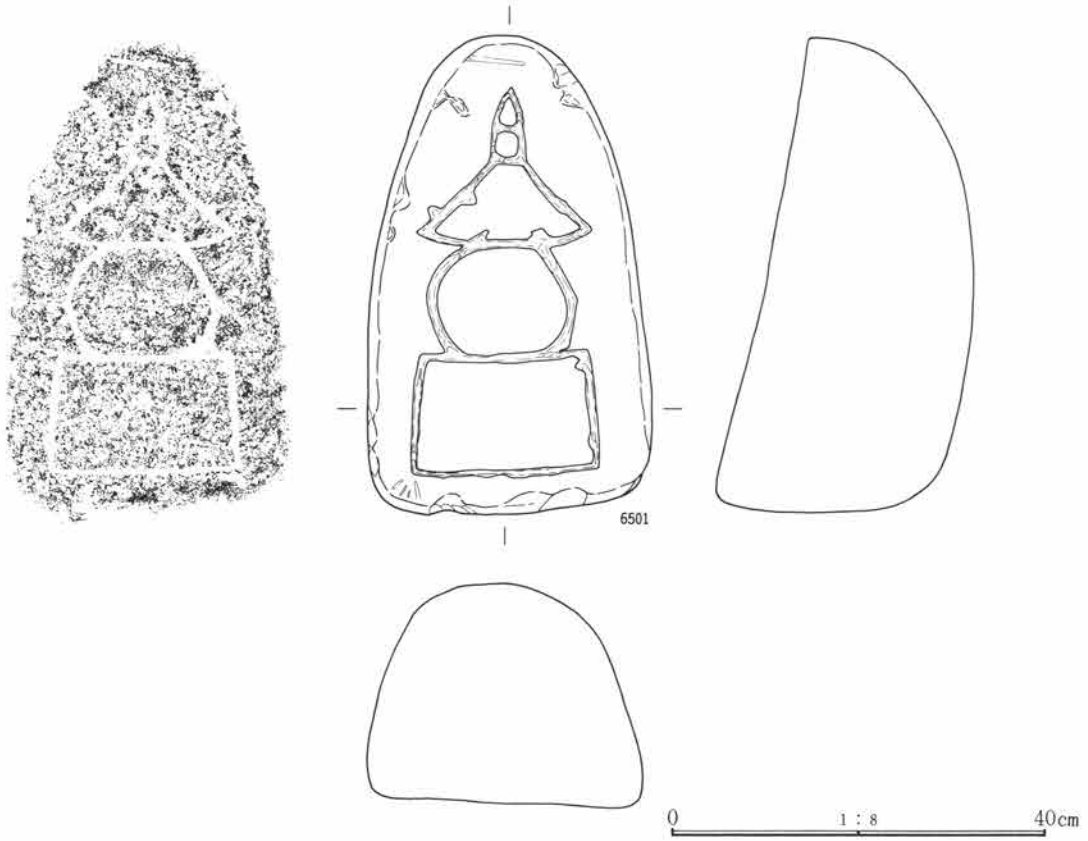
(2) 宝篋印塔

宝篋印塔（6502）は塔心部のみが、板碑（6504）とともに1号濠跡より検出された。本塔心は1辺が30cm～33cmの立方体で、上面及び下面は棒状丸ノミによるノミ切り加工のままにされている。塔心4側面は中央部に径26cm、深さ0.5cmで正円の窪みをつくり、それぞれに梵字「ア・アー・アン・アク」の胎蔵界五仏を薬研彫りしそれぞれの側面には水磨き仕上げが施されている。

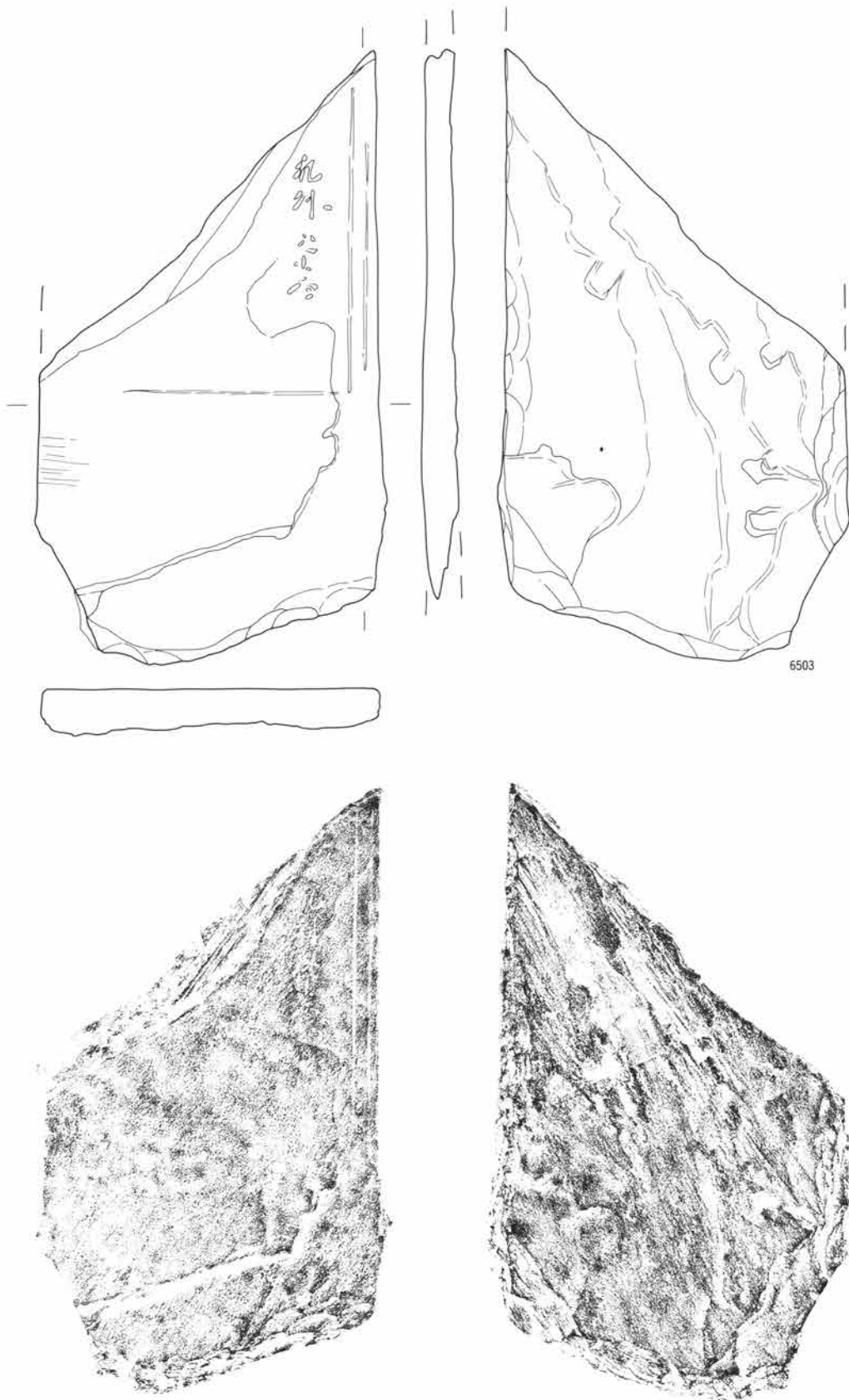
(3) 板碑

本調査区からは合計7点の板碑が検出され、このうち、6504～6505号板碑は中世寺院址の西を画する1号濠跡から、6503号板碑は1号配石墓の北側1.4m地点からの出土である。

板碑（6503）は残高86.5cm、幅48.5cm、厚さ4.6cmの基底部右半分の残片で、表面右端には縦2条の、また、下辺に1条の界線が刻まれる。縦の界線に接して光明真言の梵字24文字のうちの「ア・ボ・キャ・ベイ」の

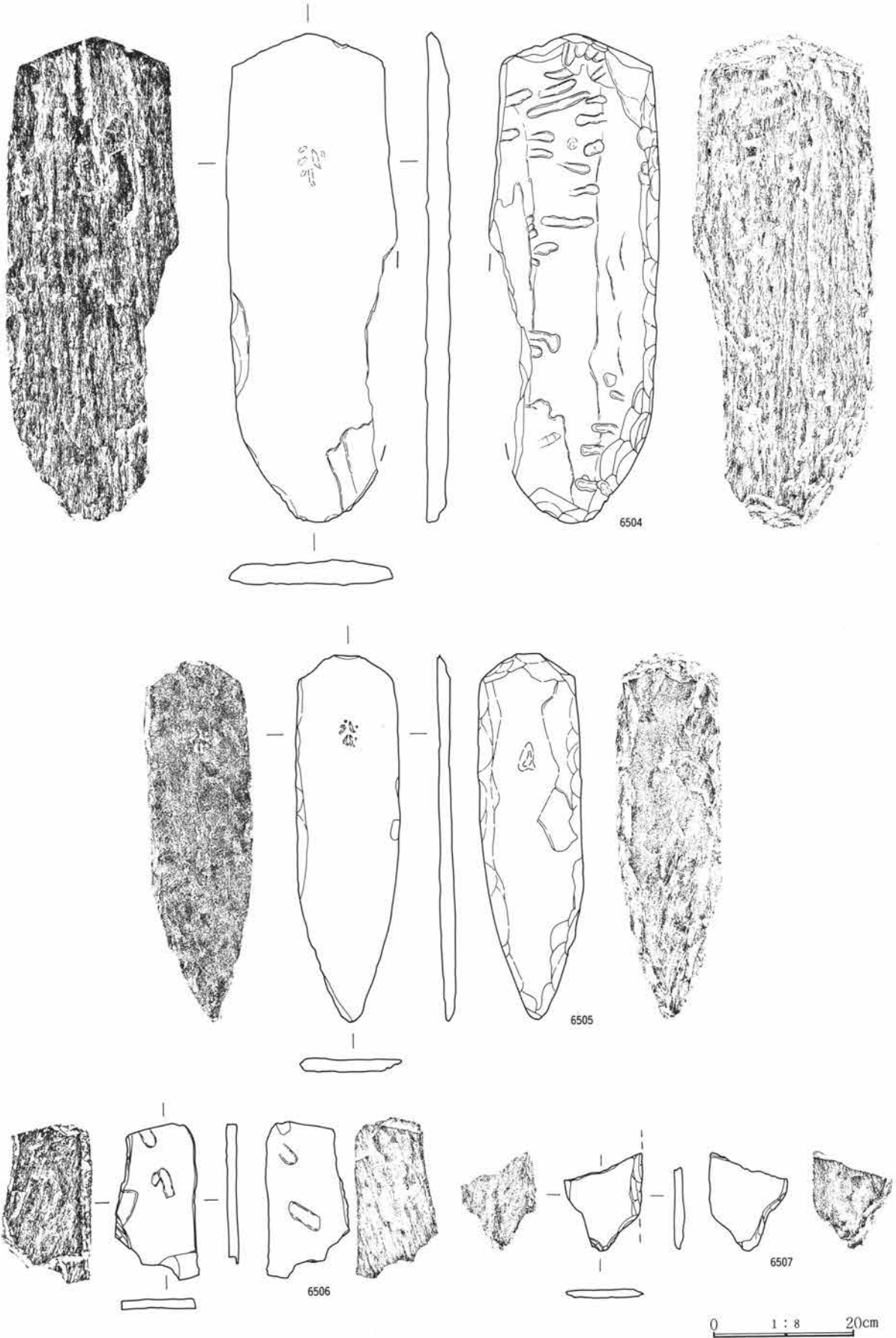


第137図 大御堂調査区出土遺物実測図(10)―五輪塔・宝篋印塔―



第138図 大御堂調査区出土遺物実測図(11)―板碑―

0 1:6 20cm



第139図 大御堂調査区出土遺物実測図(12)―板碑―

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

4文字が辛うじて認められる。板碑側面部は削り仕上げが施されており、基底部端部は旧状をなすものと考えられる。裏面には工具刃幅1.3cmの平ノミ状工具による剝離が、また縁辺部にはハツリ仕上げ成形がなされている。緑泥片岩製。

板碑(6504)は、高さ102.5cm、幅35cm、厚さ4.7cmで右下の一部分を欠失するがほぼ完形を呈している。板碑頂部は、概ね均整のとれた山形を、基部は「U」字形をなす。頂部に2条線は存在せず、中央上位部には微かに、丸彫りの阿弥陀の種字「キリク」が刻まれている。板碑の表面は仕上げも雑で凹凸が著しい。裏面縁辺部はハツリ仕上げ成形され、また面全体は幅1.0cm程の平ノミ状工具による左右からの剝離痕が顕著で、側面は削り仕上げがなされている。絹雲母石墨片岩製。

板碑(6505)は高さ77.5cm、幅21.5cm、厚さ2.8cmの完形を呈し、頂部山形は崩れた平面形を、基部は「V」字状をなす。板碑中央上位部には阿弥陀の種字「キリク」が微かに丸彫りされている。裏面縁辺部はハツリ仕上げ成形が認められる。点紋緑泥片岩製。

板碑(6506)は、いずれが表裏面か断じ難い残高32.4cm、残幅16.5cm、厚さ2cmの破片である。絹雲母石墨片岩製。

板碑(6507)は残高17cm、残幅16.5cm、厚さ2.2cmで、裏面の縁辺部にハツリ仕上げ痕が認められることから、側端部の破片と考えられる。点紋絹雲母緑泥片岩製。

本遺跡から検出された板碑で年代を推定されるものには、基部付近の破片(6503)があるが板碑の大きさ、2重の界線や光明真言の存在などから14世紀中頃のものとして推測される。またほぼ完形を呈する(6504、6505)は頂部2条線が消滅していること、種字の「キリク」が蓮台にのらないこと、さらに種字の刻みが極めて浅く、辛うじてその存在を認めることのできる程度であることなどから、かなり、時代が新しくなるものと考えられ、15世紀代のものとして推測される。

(4) 五輪塔(写真図版103・104)

五輪塔(6509)は最大幅34cm、高さ25.5cmの水輪の完形品で、上面および下面は棒状ノミ切りのまま、側面は丁寧な小叩き仕上げがなされている。砂岩製。

五輪塔(6510)は推定最大幅25cm、高さ23cmの概ね全体の形状の窺える水輪で、表面の風化が著しい。砂岩製。

五輪塔(6508)は推定最大幅34cm、高さ16cmの概ね完形品で強い火を受けている様で、表面の至るところで剝離が認められる。上面の中央部には、径9cm、深さ2cm程の断面半円形の窪みが彫られている。砂岩製。

(5) 寺院址北西部検出の小礫敷遺構について

寺院址北西部のBj・Bk-10~14グリッド付近で、第1号濠跡埋土上面で径数cmの小礫が一面に散布しているのが確認された。小礫の散布域はグリッド杭Bk15の周辺で、約2m四方の方形の範囲に密集しており、ここより北にやや疎密な分布域が広がる。幅4m、長さ9mの範囲で第1号濠跡の範囲に一致する。この小礫分布域の周縁に20cm~40cm大の円礫が見られ、12ラインの南では2カ所でまとまっていた。しかし、土坑等の掘り方は見られず、集礫の性格は不明である。また、小礫散布域での遺物も出土量は極めて少なかった。

大御堂第1号濠跡埋土上という点では西部火葬跡群と同一検出面であり、小礫敷面が検出された大御堂第1号配石墓や大御堂第3号・第4号火葬墓の状況に近似することから、ほぼ同時期の同種の遺構である可能性が高いと推定される。(津金澤吉茂・綿貫鋭次郎)



第140図 大御堂調査区北西部配石遺構平面図

第4節 寺院址出土の遺物

1 寺院址出土遺物の種別及び分布

《遺物取り上げについて》

大御堂調査区での出土遺物は、寺院址という全体遺構の性格と検出された個別遺構が濠跡・溝状遺構・園池遺構など比較的広い範囲に及ぶことから、4m方眼のグリッドを単位としての遺物取り上げを行い、寺院址内での出土位置を明らかにした。調査前には大部分が水田圃場であったため、寺院址検出区域での遺物の表採資料は、畦畔に置かれていた線刻五輪塔を除くと殆ど見られなかった。トレンチ調査の段階で瓦類をはじめとする遺物の出土が見られ、池・溝等における包蔵は期待されたが、すでに遺構面が全体的に削平を受けて、層位的には耕作土層下がすぐに寺院址遺構検出面となるため、ピット・井戸・土坑・埋葬関連の諸遺構の確認段階に至るまでは、個別遺構との関係での遺物取り上げは困難であった。

なお、園池遺構・濠跡・溝状遺構等では、遺構内での水平分布を説明する必要から、やはりグリッドによる遺物取り上げを実施し、出土位置の平面図記載と遺物出土面標高を記録として残した。したがって、寺院址と遺物との関係は、遺物の出土レベルの絶対標高と遺構検出面とのレベル差からの判断を基準とし、遺構覆土・埋土との比較をして層位的把握ができるように努めた。

《出土区域割について》

整理を進める過程で、大御堂調査区（A・B区）寺院址出土遺物を、寺院址内の位置によって次の16ブロックに分類し、遺物分布の把握を容易にするための便宜とした。各区域は第141図に示した。それぞれの区域とその遺構概要は次のとおりである。

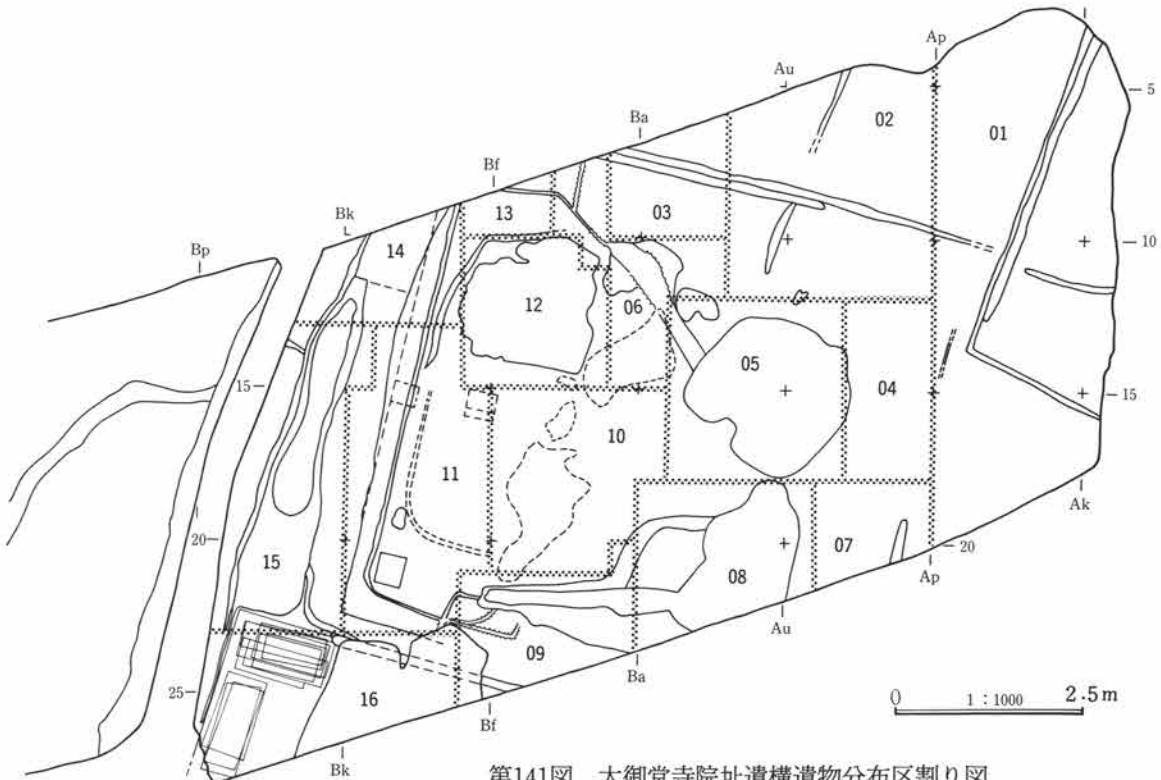
- 01 [寺院址東部] Apラインより東側の鮎川崖まで、溝状遺構・火葬跡等が検出された。遺物は溝状遺構からの出土が多く見られる。第14号・第16号・第17号溝状遺構が検出され、そこでの出土が比較的多い。
- 02 [寺院址北部A] 12ラインより北で Ap～Awラインまでの間、北池の北側にあたる。第3・4号及び第8号溝状遺構・浅間A軽石下畠作跡・土坑等を検出、遺物の出土量は少ない。
- 03 [寺院址北部B] Ap～Bbラインの間で10ラインより北側、北部A地区と同じ遺構面が続く。遺物の出土量は少ない。
- 04 [北池東] Ap～As-12～18ラインの区域で北池の東側、遺物の出土量は少ない。
- 05 [北池] Ar～Ay-12～18ラインの区域で、ほぼ北池の検出範囲である。北池内を中心に豊富な出土遺物が見られる。
- 06 [北池北西] Aw～Bd-06～15ラインの区域のうち、北池遺水遺構としての第5号～第7号溝状遺構の部分である。遺物量は豊富とは言えないが、溝状遺構底面での出土が見られ、寺院との関連において層位的に重要である。
- 07 [南池東] 18ラインより南で Ap-Atラインの間で、南池の東側にあたり、第15号溝状遺構が検出されている。
- 08 [南池] 18ラインより南で At～Baラインの間、ほぼ南池の検出範囲である。池埋土から豊富に出土しているが、埋土の堆積状況から近世面と中世面との層序が認められる。
- 09 [南池西] 21ライン以南の Ba～Bgラインの間で、南池と一続きと見なされる第12号溝状遺構とこれに接続する第9号～第11号及び第13号溝状遺構が検出されている。第12号溝状遺構埋土を中心に豊富な遺物の出

土が見られる。

- 10 [寺院址中央A] Ay~Bf-15~21ラインの間の区域で、小礫面の路頭が見られるが遺構は検出されず、小礫面で少量の遺物の出土が見られた。
 - 11 [寺院址中央B] 寺院址中央部西半のやや高い面。掘立柱建物跡・井戸・配石墓・墓墳・土坑等を検出。遺物の出土量はやや多い。
 - 12 [寺院址中央C] Bb~Bg-10~15ラインの間の区域で第1号池状遺構がこれにあたり、多量の遺物出土が見られる。第1号池状遺構は浅間A軽石の砂質土を埋土とする。
 - 13 [寺院址北西部A] 土塁跡の東側で第1号池状遺構の北側、瓦溜まり、火葬墓群を検出。
 - 14 [寺院址北西部B] 調査区北西隅、第1号濠跡・土塁跡の延長線上、土塁は削平されている。
- ※13・14地区はBgラインで分けたが、ほぼ一面と考えてよい。ここでは火葬墓群・瓦溜まり・第2号溝状遺構などが検出され、遺物の出土量も多い。検出遺構は寺院址関連のものと、埋葬関連のものを層位的にとらえることが可能で遺構年代を特定する資料も得られた。
- 15 [寺院址西部] 土塁跡より西で農道までの間、第1号濠跡がこれにあたる。第1号濠跡覆土上には火葬跡・火葬墓等の埋葬関連の遺構群があり、副葬遺物が見られる。また、濠内からも数量的には豊富とは言えないが寺院に伴うと考えられる遺物の出土が見られる。
 - 16 [寺院址南西部] ほぼ23ラインより南で第1号濠跡に接して掘立柱建物跡群が検出され、これと関係すると思われるピット・土坑等からの遺物出土が見られる。

《遺物分布の傾向》

大御堂調査区内で中近世遺物が集中して出土したのは、調査区を東西に二分する農道の東側である。農道西のB区の一部及びC区での出土量を遥かに凌駕することからもここに寺院址があったことが考えられ、その分布範囲は検出された寺院址遺構の範囲とほぼ一致する。



第141図 大御堂寺院址遺構遺物分布区割り図

第Ⅲ章 大御堂調査区の遺構と遺物

寺院址遺構で遺物出土が多く見られるのは、北池・南池等を中心に寺院址の四囲に配された遺構群に沿ってである。寺院址中央部は礫の露頭面も見られ、ここでの遺構確認がなされていないことでの削平の可能性は出土遺物の少ないことでも窺える。北池・南池の園池遺構より東側では溝状遺構からの出土が見られるがそれ以外は少なくなり、寺院址と一連のものとするにはやや離れた位置であることから、その内容を吟味して寺院址との関連について検討する必要がある。

〈出土遺物〉

寺院址が検出された大御堂調査区（A・B区）の出土遺物総量はコンテナバット数で約110箱あり、その内容も実に多様なものであった。中世以前のものについては第1節で報告したので省略するが、その出土量が少ないのは、もともと包含する量が少ないことと寺院建立による地形改変及び廃絶後の土地利用に伴う削平の影響を受けていることが反映したものと予想される。

寺院址で出土した遺物の種別は土師質土器、軟質陶器・陶磁器類、瓦類、金属製品・石製品等である。そのうち量的に最も多いのは瓦類であり、これに皿形土師質土器が続く。時期的には中世のものと近世のものとが見られるが、調査前まで使用されていた水路・道路等をトレースする遺構からは近・現代のものも多く見られた。ここでは寺院址出土の中・近世遺物を次のような種別に分類し、それぞれの遺物の出土傾向とその特徴を述べることにする。なお、埋葬関連のものについては第3節で別に報告し、本節では溝状遺構・園池遺構等の出土遺物とグリッド出土遺物を以下の順に報告する。

〈種別とその概要〉

- 1 [土師質土器] 手捏成形のものとロクロ成形のものが見られるが、器形はすべて皿形である。溝状遺構・園池遺構等の寺院址遺構及び埋葬関連遺構からの出土が見られ、中世のものである。
- 2 [軟質陶器] 摺鉢類、内耳鍋・焙烙類、火舎・香炉類等の器形が見られ、中世から近世に至るまで時間的な幅が認められる。
- 3 [陶磁器類] 磁器と陶器がそれぞれ中世のものと近世のものに分けられる。中世のものは、青磁を主とする中国製輸入磁器と瀬戸系・渥美系・常滑系の国産陶器であり、器種は壺・甕・瓶類と碗・皿類が見られる。近世のものは主に肥前系と瀬戸系・瀬戸美濃系の碗・皿を中心とした磁器・陶器類が多く、在地系・地方窯系のものも若干見られる。
- 4 [瓦類] 寺院建築物に由来する遺物である。酸化焰焼成で赤褐色を呈するやや肉厚のものと、還元焰焼成で灰色系の色調のやや薄手のものとが見られ、それぞれに軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦・鬼瓦が見られる。
- 5 [金属製品] 銭貨、鉄製品、銅製品、鉛製鉄砲玉が出土している。銭貨は埋葬関連遺構から約半数が出土し、渡来銭が中心である。グリッド出土のものには近世のものも見られる。鉄製品は大部分が釘であるが、刀子、火打ち金等も見られる。銅製品はキセルである。
- 6 [石製品・その他] 硯、砥石等が出土した他、ガラス小玉が1点検出された。（なお、石造物については第3節で述べたので本節から除いた。）

2 土師質土器（第142図、第143図）

大御堂調査区A・B区の中世寺院址からは大量の土師質土器が出土している。器形はすべて皿形で、完形のものから摩滅して小片となったものまで様々な残存状態であった。この中から、個体復元が可能なものを抽出し、さらに実測個体を選択した。抽出遺物数は129点で、実測個体数は74点である。遺物観察表には実測

図に掲載したものを載せたが、本文中では数量的把握に便宜を図る目的で抽出個体すべてを対象として説明する。抽出個体は、小片であっても個体識別ができる範囲のものを選んでおり、抽出個体数量は寺院址出土の土師質土器の個体数量に近い数値を示すものと考えられる。また、抽出遺物の数量は土師質土器全体の約50%（重量比）である。

遺物はグリッド出土のもの、遺構出土のものなど様々であるが、出土状況からは寺院址に伴うと考えられるものと埋葬遺構に伴うものとの二種であると判断できる。実測個体74点の内、10点（3120～3129）は埋葬関連の遺構からの出土である。また、出土した土師質土器は、その成形技法が手捏成形のものとロクロ成形のもののが見られ、法量・形態・成形技法・色調等の特徴から形式的に細分することが可能である。細分の基準となる特徴は次のような点である。

①器形はすべて皿形であり、②手捏成形とロクロ成形の2種の成形技法が見られ、③成形技法に伴って手捏成形のものは丸（偏平）底となり、ロクロ成形のものは平底となる。平底のものはさらに底部の回転糸切り痕が切り離しのままのものとして切り離し後に篋に調整されたものとして細分される。④口径・器高・口底比等に法量差が認められ、基本的には中型と小型の皿とに2大別される。⑤胎土・焼成・色調の点でも差異が認められる。胎土は比較的密な粘土を精選したものと、やや粗い（細粒砂）ものが見られ、色調は灰白色→浅黄橙色→鈍い黄橙色→橙色→赤褐色・鈍い赤褐色等の変化が見られるが、特に手捏系のものに在来の素焼き土器（土師器）の系譜の色調とは異なって白色系のもが見られる。

以上の観点から、土師質土器皿類を手捏成形系とロクロ成形系とに大別した上で、胎土・色調・調整技法の特徴から細分する。選択した土師質土器皿類129点のうち、手捏成形系のもは74%にあたる96点を占め、ロクロ成形系の33点を大きく上回る。また、ロクロ成形系の33点のうち、11点は埋葬関連遺構からの出土が確認されている。全体の8%にあたる量である。

《手捏成形系土師質土器皿類》

土師質土器皿類は、口径が120mm～130mmのものとして80mm前後のものとの2種が見られる。平安京で出土する中世の「かわらけ」には大中小3種の法量差が見られるが、鎌倉で出土したものについても同様な傾向が認められ、それにあてはめた場合には、本遺跡出土のものには中小にあたる。確認した個体数は中型58点、小型38点であり、完形のものも比較的多い。これをA類からE類までの5類型に分類した。

成形・調整技法はほとんど同じで、内型は使用せず、円形の薄い粘土板の端部をつまんで浅い口縁部の立ち上がりを形成し、後に口縁部を横撫で調整しているものと思われる。底部が丸底若しくは偏平であるが、指頭による手捏調整の押圧が観察された。中型のものは口唇部が平坦にナデ調整されて、三角形の端部断面形状を示す。口縁部横ナデ調整の後に口唇部横ナデ調整がなされたものと観察される。小型のものは口唇部は丸いが中型のものと同様に端部にナデ調整されたものと見られる。口縁部外面でのナデ調整の幅は口唇部から中型のもので約15mm、小型のもので約10mmである。器高は深浅2種が中小共に見られる。小型のものにコースター形のもが1点（E類3072）見られる他は、A・B・C類のものに技法の点では大きな差異は認められない。しかし、胎土及び色調の点で、在地産の旧来の土師器の系譜のもの（D類）とは異なって、いわゆる「白色」を意識した作りが考えられる。ただし、これは技術的・形態的と言うより外見的・視覚的要素に分類の力点をおく場合に言えることである。

こうした観点から寺院址出土の手捏成形系土師質土器皿類について、A類からD類までの4類型10種に分類した。A類～C類は技法上の差異は殆ど無く、胎土・焼成・色調といった点が分類の基準であり、D類に器形上の若干の差異を認める。

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

[A類] (A₁類中) 3003、(A₁類小) 3008、3073、3028、3014、3017、3026、(A₂類小) 3015

全面又は一部が黒色の色調を呈す。基本的にはB類と同様の胎土であるが、器面の黒色化は焼成時のものと考えられる(A₁類)。中型皿で2点、小型皿で7点がこれにあたる。小型皿では器面に煤が付着しているものもあり、一部黒色のものがあることから、使用時にB類皿が黒色化したと考えられるもの(A₂類)も見られる。

[B類] (B₁類中)3068、3031、3004、3007、3075、3045、3046、3047、3021、3029、3056、3067、3080、3085、3087、3088、3090、3091、(B₁類小) 3001、3002、3013、3060、3100、3051、3081、3005、3062、(B₂類中) 3084、3042、3050、3053、3054、3064、3065、3066、3093、3097、3089、3103、3104、3118、3022、3023、3033、3095、3105、(B₂類小)3024、3026、3067、3061、3117、3016、3092、3113、3082、3098、3099、3052、3096、3086、3102、(B₃類中) 3069、(B₃類小) 3012、3043、3048、3027、

灰白色または浅黄橙色を呈し、胎土は非常に密で精選された粘土を使用し、胎土中に赤褐色・褐色粗粒子と白色粒子を比較的多く含む。小型皿では72%にあたる26点がこれにあたり、中型皿の45%にあたる26点がこれにあたる。白色を意識した仕上がりであるが、色調の点では微妙な差が認められる。B類を白色系土師質土器の一群と捉えることも可能である。

B₁類は灰白色ないしは浅黄橙色を呈し、B類中では最も白色に近い色調である。B₂類は鈍い黄橙色を呈し、B₃類は橙色ないし黄橙色の色調を呈す(標準土色帖 Hue7.5YR)。

[C類] (C₁類中) 3006、3055、3076、3101、3111、3116、3018、3019、3020、(C₁類小) 3112、(C₂類中) 3059、3077、3094、(C₂類小) 3074、3083、3072、

橙色若しくは黄橙色の色調を呈し(B₃類より赤味がかかる)、胎土は密で精選された粘土を使用している。中型のものに20点見られるが、うち9点はB₃類に近い色調を呈しこれをC₁類とし、明褐色に近い色調を呈するものをC₂類とした。小型のもの2点がこれに近い色調・胎土である(標準土色帖 Hue 5 YR)。

[D類] (D₁類中) 3030、(D₂類小) 3070、3071、3078、3079、3035、

明褐色の色調を呈し、胎土はやや粗く小砂粒を混じる。中型皿で6点、小型皿で2点見られる。器高がやや深く、口縁部の立ち上がりも皿類のなかでは深い。

[E類] (小) 3072

コースター形のもので1点見られる。胎土・色調のはD類と共通する。

《ロクロ成形系土師質土器皿類》

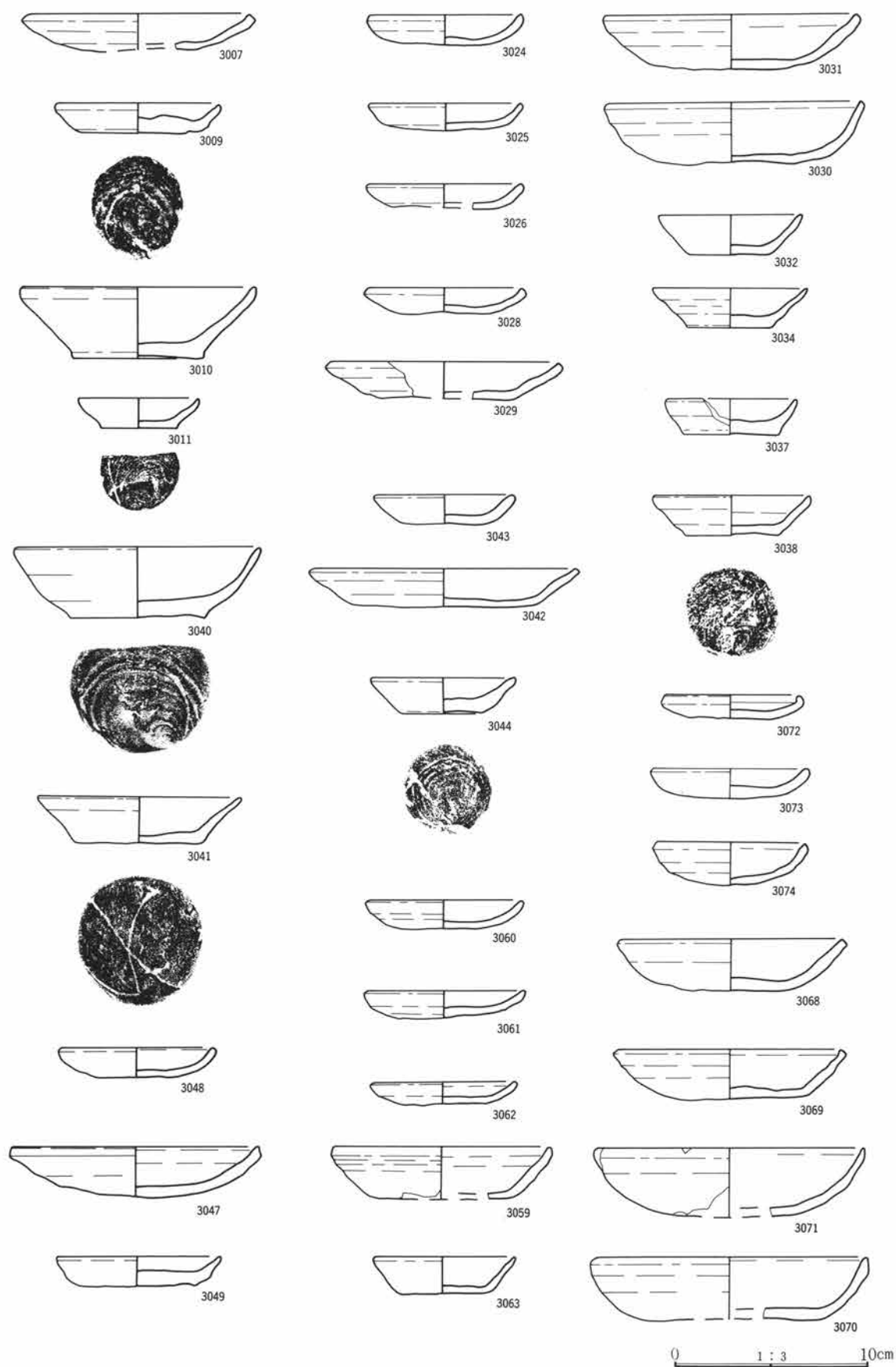
ロクロ成形皿形土師質土器34点のうち10点は埋葬関連遺構からであり、ほぼ完形で出土している。グリッド取り上げの何点かの土器にはこれらと同じ特徴を認められることから、同様の性格を持つと考えられ、総数では16点ある。しかし、この他の18点は別なもの(寺院址遺構に伴うもの)として考えられる。ロクロ成形系土師質土器皿形は点数は少ないものの、手捏成形系のものに比し、器形の点で種類が多く、細別が可能である。

[F類] 3009、3049、3121

口径90mm前後の浅い小型皿である。底部は回転糸切りで口縁部は短くやや外反する。体部外面の調整は底部際と口縁部との2段にわたる。橙色を呈し、胎土は比較的細かく密である。3009と3049の2点がこれにあたるが、大御堂第1号配石墓出土の3121の土器も口縁部の立ち上がりがやや直に近いもののこれに類したものである可能性が認められる。

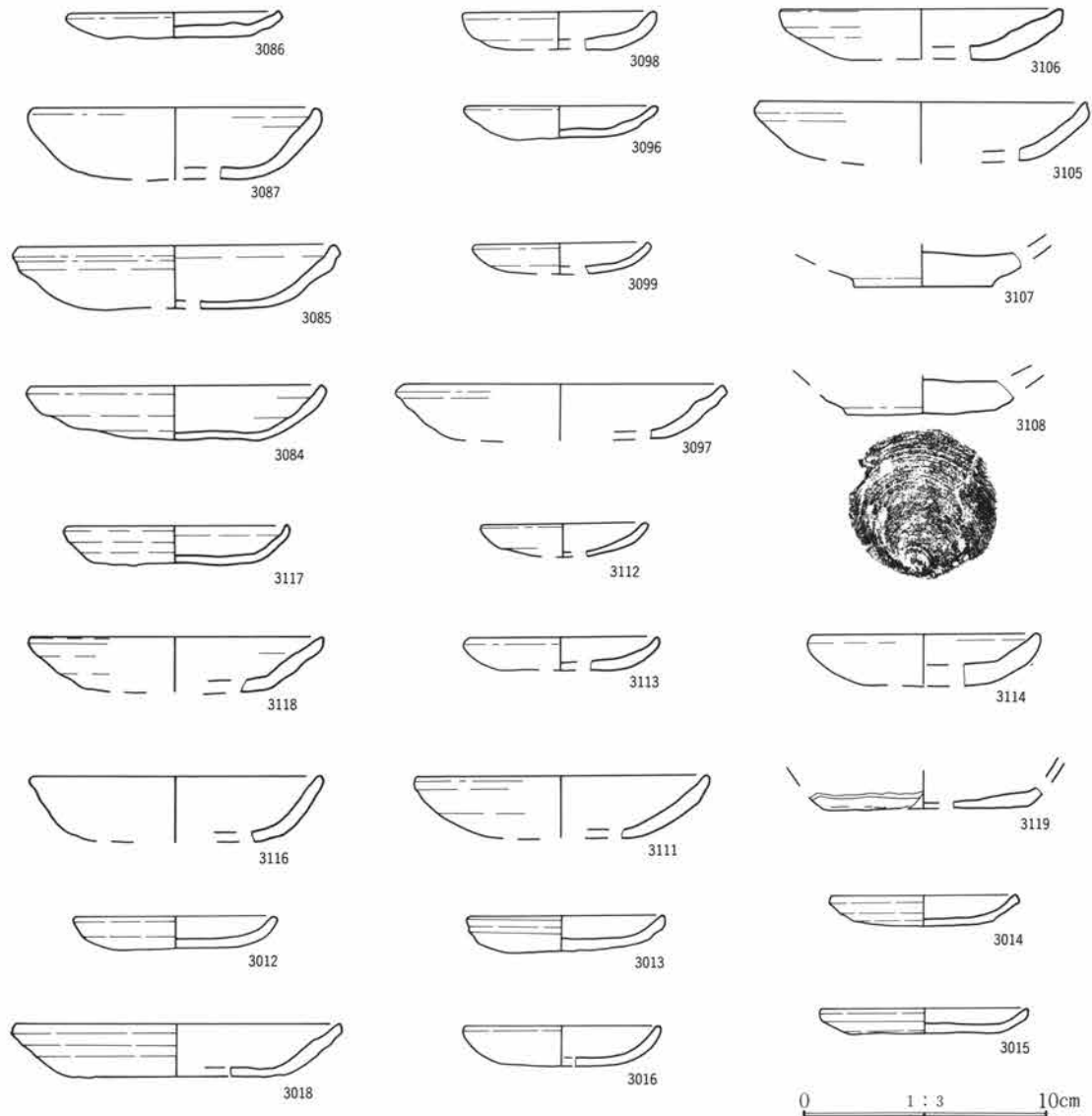
[G類] 3058、3107、3108、3109、3110、3036

第4節 寺院址出土遺物



第142図 大御堂寺院址出土遺物実測図(1)―土師質土器―

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物



第143図 大御堂寺院址出土遺物実測図(2)―土師質土器―

底部片のみで完形のもが見られず、全体を復元することはできないが、底部はやや高台状に作られやや肉厚の回転糸切りであり、体部は浅く開くものと推定される。胎土は粒子が粗く小砂粒を混ぜ、確認された6点のうち5点は大御堂第16号溝状遺構からの出土である。

[H類] 3039、3040

口径約120mmの中型のもので、底部は回転糸切り、体部から口縁部にかけてはやや内湾しながら緩やかに立ち上がる。3010、3039の2点がこれにあたり、胎土はやや密で精選されており、黄橙色を呈す。

[I類] 3114、(3106) (3115)

やや小型で底部は平底、口縁部はやや内湾して浅い立ち上がりであり、器形に対してやや肉厚で内面に横ナデ調整が認められる。胎土はやや粗く砂粒を含む。3106、3115がこれに類する。

[J類] (中) 3010、3011、3037、3044

中小2種が見られる。底部は回転糸切りで、体部から口縁部は直に外反する。底部際でやや外湾し、口縁部付近ではやや内湾する。胎土はやや粗く明褐色の色調を呈す。

[K類] 3122、3123、3124、3125、3126、

出土資料は全て火葬墓出土の土器で、平均して肉厚で口縁部は外反する。体部から口縁部にかけての立ち上がりと色調の点で若干の差異を認める。3123、3124 (K₁類) の2点は立ち上がりが直に近く口底比が小さく、3122 (K₂類)、3125、3126 (K₃類) の3点は口底比がやや大きくなる。いずれも錢貨を伴って出土している。K₁→K₂→K₃類の順で器壁が薄くなり、口縁部の外反が大きくなる。

[L類] (中) 3127、3128、3129、3041、(小) 3120、3032、3034、3063、

土坑墓出土の土器で、やや器壁が薄くなる。中 (口径120mm前後) 小 (80mm前後) の2種が見られ、口縁部横ナデ調整がなされる。中型4点、小型5点が出土している。

[M類] 3119

平底で、鈍い橙色若しくは明褐灰色を呈し、比較的堅緻な焼成である。底部片が1点出土しただけであるが、前原調査区・上谷戸調査区出土の遺物に同様のものが見られる。

《土師質土器について》

大御堂調査区で出土した土師質土器は寺院址遺構及び埋葬関連遺構に関係することが出土層位・出土状況から考えられ、出土遺構の重複関係及び層位的関係から、中世という時間幅の中には収まるものと考えられる。A類からE類は手捏成形系の土師皿であるが、このタイプはほぼ一括のものと考えられる。ロクロ成形系のF類～L類までは中世の時間幅の中で時期差が認められる。M類のものはやや硬質に焼きあがっており、時期的にやや降る可能性がある。

年代が特定できるものとしては錢貨を供伴する埋葬関連遺構出土の土師質土器がある。火葬墓及び土坑墓ではロクロ成形系のL類の土師皿が「永樂通寶」を伴っての出土が見られることから15世紀以降の時期が与えられ、出土土師質土器では最も新しいものと考えられる。また、K類・J類もこれと大差のない時期と考えられ、これら17点は15世紀ないし16世紀と考えられる。

A類～I類の112点が寺院に関連のある遺物と考えられるが、そのほとんどは手捏成形系のもので、個体数比較では86%を手捏成形のものが占める。手捏系のA類からE類まで分類したうちA・B・C類に技法上の差異は顕著に認められないことから、これらは同じ時間幅に属す同型式と考えられる。E類は1点のみでコースター形の形状を示すが、類例は平安京で11世紀後半代から見られる。本遺跡の手捏系土師質土器については、先行する系譜が認められず形式的細分も技法上では特に認められないことから、搬入品若しくはそのような性格を有す在地産で、この時期に一般的に見られ継続的に生産し使用された在来ものとは考え難く、寺院址に直接的な関係を持ち創建にかかわる時期の遺物と考えられる。また、手捏成形系のいわゆる土師皿は、平安京や鎌倉での出土が知られており、その周辺地域でも中世初頭には出現していることから本遺跡出土の遺物もこれと大差のない時期として、13世紀代のものと推定される。

ロクロ成形系の土師質土器については鎌倉市内出土のものと直接比較した結果、F類に13世紀後半の、G類に14世紀の鎌倉での年代観が与えられ(出土遺物の年代観については第VI章第2節において詳述する)、F類のものは手捏成形系A類～E類の土師質土器に最も近い年代を示す遺物と考えられる。

胎土・色調等の観察では、在来の土師器の系譜と推定される素焼き土器の特徴を示すものは、手捏成形系のD類・E類のものとロクロ成形系のG類及びI類～L類のもので、しかもI類～L類については埋葬関連遺構からの出土であることから、寺院に伴う土師質土器の大半は在来の系譜とは異なったものと考えられる。この点でも本遺跡の特質が窺える。

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

第11表 大御堂寺院址出土遺物観察表 一土師質土器一

遺物番号 挿図番号 写真図版	種 別 器種・分類 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(㎜)④重量(g) ②器高(㎜)⑤口高比 ③底径(㎜)⑥口底比	①成形技法 ③器形の特徴 ⑤焼成	②底部の特徴 ④胎土 ⑥色調	調 整	備 考
3001 44 69	土師質土器 皿B ₁ 類 完形	15寺院西部 B117g04 濠内土坑	① 75 ④ 30 ② 16 ⑤0.21 ③ 35 ⑥0.47	①手捏成形 ②丸底 ③小型の浅い皿 ④微粒砂、黒色鉱物・赤褐色粒子 ⑤酸化焰 ⑥灰白色(やや赤味)	口端：丸、内：横ナデ、口縁外：横ナデ		13c
3002 44 69	土師質土器 皿B ₁ 類 完形	15寺院西部 B117g03 濠内土坑	① 84 ④ 40 ② 15 ⑤0.19 ③ 50 ⑥0.60	①手捏成形 ②丸底 ③小型の浅い皿 ④微粒砂、黒色鉱物・赤褐色粒子 ⑤酸化焰 ⑥灰白色(やや赤味)	口端：丸内：横ナデ		
3003 44 69	土師質土器 皿A ₁ 類 完形	15寺院西部 B117g01 濠内土坑	①117 ④ 80 ② 25 ⑤0.21	①手捏成形 ②丸底 ③小型の浅い皿 ④微粒砂、黒色・白色粒子少 ⑤酸化焰 ⑥灰白色	口端：三角口縁外・内面横ナデ		二次的焼成か、やや赤変
3004 44 69	土師質土器 皿B ₁ 類 完形	15寺院西部 B117g02 濠内土坑	①116 ④ 95 ② 25 ⑤0.22	①手捏成形 ②丸底 ③中型浅い皿 ④微粒砂、赤褐色多 ⑤二次焼成の痕あり ⑥暗赤灰色黒色鉱物粒子・白色粒子少量	口端：丸口縁外・内面横ナデ		
3007 142 69	土師質土器 皿B ₁ 類 1/2口～底	15寺院西部 Bm20g05	①118 ④ 72 ②(19) ⑤0.16 ③(60) ⑥0.51	①手捏成形 ②丸底 ③中型浅い皿 ④微粒砂、黒色、赤褐色粒子 ⑤酸化焰 ⑥灰白色	口端：三角内面横ナデ		
3009 142 69	土師質土器 皿F類 1/2口～底	15寺院西部 Bo15g01	① 85 ④ 60 ② 15 ⑤0.18 ③ 65 ⑥0.76	①ロクロ成形 ②平底回転糸切 ③小型浅い皿 ④細粒砂、黒色粒子 ⑤酸化焰 ⑥橙色	内外面横ナデ、口縁部は短く直に外反		13c 口唇部に煤付着
3010 142 68	土師質土器 皿J類 1/2口～底	15寺院西部 Bk15g01	①120 ④ 60 ② 36 ⑤0.30 ③(68) ⑥0.57	①ロクロ成形 ②平底回転糸切 ③中型深い皿 ④中粒砂、黒色・赤褐色、白色粒子 ⑤酸化焰 ⑥明褐色	体～口縁部横ナデ、口唇部内湾		15c
3011 142 70	土師質土器 皿J類 1/2口～底	15寺院西部 Bk13g02	①(62) ④ 20 ② 16 ⑤0.26 ③ 40 ⑥0.65	①ロクロ成形 ②平底回転糸切 ③極小型中粒砂 ⑤酸化焰 ⑥黒色、表面一部灰白色	体～口縁部横ナデ		15c
3012 143 69	土師質土器 皿B ₂ 類 完形	16寺院南西部 Bn25g Pit24-1	① 82 ④ 41 ② 13 ⑤0.16 ③ 50 ⑥0.61	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅い皿 ④微粒砂、黒色粒子、赤褐色、白色粒子少量 ⑤酸化焰 ⑥にぶい橙色	口端：丸口縁部横ナデ		
3013 143 69	土師質土器 皿B ₂ 類 完形	16寺院南西部 Bn24g Pit12-1	① 80 ④ 40 ② 14 ⑤0.18 ③ 65 ⑥0.81	①手捏成形 ②丸底 ③小型浅い皿 ④微粒砂、黒色粒子 ⑤酸化焰 ⑥灰白色	口端：丸口縁部横ナデ		
3014 143 —	土師質土器 皿A ₁ 類 1/2口～底部	16寺院南西部 Bm24g Pit2-1	①(77) ④ 17 ② 12 ⑤0.16 ③ 52 ⑥0.68	①手捏成形 ②丸底 ③小型浅い皿 ④微粒砂 ⑤酸化焰 ⑥黒色、表面灰白色の部分もある	口端：三角口縁部横ナデ		
3015 143 —	土師質土器 皿A ₂ 類 1/4口～底部	16寺院南西部 B124g	①(84) ④ 15 ② 10 ④0.12 ③(60) ⑥0.71	①手捏成形 ②丸底 ③小型浅い皿 ④微粒砂、黒色、白色粒子 ⑤酸化焰 ⑥一部黒色(浅黄橙)	口端：三角口縁部横ナデ		
3016 — 69	土師質土器 皿B ₂ 類 1/2口～底部	16寺院南西部 B125g Pit2-1	①(80) ④ 10 ② 60 ⑤0.20 ③(40) ⑥0.50	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅い皿 ④微粒砂、黒色・白色粒子 ⑤酸化焰 ⑥浅黄橙色	口端：丸口縁部横ナデ		
3018 143 69	土師質土器 皿C ₁ 類 1/2口～底部	16寺院南西部 Bm25g	①(124) ④ 34 ② 21 ⑤0.17 ③(90) ⑥0.73	①手捏成形 ②丸底 ③大型浅い皿 ④微粒砂、黒色鉱物粒子 ⑤酸化焰 ⑥明赤褐色	口端：三角口縁部横ナデ		
3024 142 68	土師質土器 皿B ₂ 類 完形	11寺院中央B Bg09g 大第2号溝	① 78 ④ 40 ② 15 ③ 50	①手捏成形 ②丸底 ③小型浅い皿 ④微粒砂、黒色・白色・赤褐色粒子 ⑤酸化焰 ⑥浅黄橙色	口端：丸口縁部横ナデ		
3025 142 70	土師質土器 皿B ₂ 類 1/2口～底	11寺院中央B Bg11g 大第2号溝	① 78 ④ 23 ② 14 ③ 50	①手捏成形 ②丸底 ③小型浅い皿 ④微粒砂 ⑤酸化焰 ⑥黒色	口端：丸口縁部横ナデ		
3026 142 70	土師質土器 皿A ₁ 類 1/2口～底部	11寺院中央B Bh14g 大第2号溝	① 79 ② 13 ③ 60	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅い皿 ④微粒砂、赤褐色、黒色粒子(白色粒子少量) ⑤酸化焰 ⑥浅黄橙色	口端：三角口縁部横ナデ		
3028 142 68	土師質土器 皿A ₁ 類 1/2口～底部	11寺院中央B Bi19g 大第1号井戸跡	① 83 ④ 32 ② 15	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅い皿 ④微粒砂(粒子の色は不明) ⑤酸化焰 ⑥黒色、表面一部灰白色	口端：三角口縁部横ナデ		
3029 142 —	土師質土器 皿B ₁ 類 1/2口～底部	11寺院中央B Bi19g 大第1号井戸跡	② 18	①手捏成形 ②丸底 ③小型浅い皿 ④微粒砂、黒色・赤褐色粒子 ⑤酸化焰 ⑥灰白色(赤味をおびている)	口端：三角口縁部横ナデ		

第4節 寺院址出土遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種・分類 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(㎜)④重量(g) ②器高(㎜)⑤口高比 ③底径(㎜)⑥口底比	①成形技法 ③器形の特徴 ⑤焼成	②底部の特徴 ④胎土 ⑥色調	調整	備考
3030 142 69	土師質土器 皿D ₁ 類 完形	11寺院中央B Bh13g23~26	①132 ④156 ②30 ⑤0.23 ③90 ⑥0.68	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型深い皿 ④細粒砂、黒色・白色・赤褐色粒子 ⑤酸化 焙 ⑥赤褐色	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型深い皿 ④細粒砂、黒色・白色・赤褐色粒子 ⑤酸化 焙 ⑥赤褐色	①口径：三角 ②縁外から内 面横ナデ	
3031 142 69	土師質土器 皿B ₁ 類 1/4口~底部	11寺院中央B Bh13g35	①132 ④30 ②27 ⑤0.20 ③74 ⑥0.56	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型浅い皿 ④微粒砂、黒色・赤褐色粒子 ⑤酸化焙 ⑥ 灰白色	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型浅い皿 ④微粒砂、黒色・赤褐色粒子 ⑤酸化焙 ⑥ 灰白色	①口径：三角 ②縁外から内 面横ナデ	15c 煤付着
3032 142 —	土師質土器 皿L類 口~底部	11寺院中央B Bi16g01	①74 ④30 ②20 ⑤0.27 ③50 ⑥0.68	①ロクロ成形 ②回転糸切り調整 ③小型平 底皿 ④細粒砂、灰白色粒子 ⑤酸化焙 ⑥ ぶい褐色	①ロクロ成形 ②回転糸切り調整 ③小型平 底皿 ④細粒砂、灰白色粒子 ⑤酸化焙 ⑥ ぶい褐色	①縁部横ナデ ②体部やや内湾	15c
3034 142 —	土師質土器 皿L類 口~底部	11寺院中央B Bh15g03	①80 ④16 ②20 ⑤0.25 ③44 ⑥0.55	①ロクロ成形 ②回転糸切り調整 ③小型平 底皿 ④細粒砂、黒色・白色・赤褐色粒子 ⑤ 酸化焙 ⑥ぶい褐色	①ロクロ成形 ②回転糸切り調整 ③小型平 底皿 ④細粒砂、黒色・白色・赤褐色粒子 ⑤ 酸化焙 ⑥ぶい褐色	①縁部は直に ②外反。器壁は ③薄く横ナデ	
3037 142 —	土師質土器 皿J類 口~底部	12寺院中央C Bc12g35	①68 ④20 ②18 ⑤0.26 ③45 ⑥0.66	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③極小型平 底皿 ④細粒砂、黒色粒子 ⑤酸化焙 ⑥橙 色	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③極小型平 底皿 ④細粒砂、黒色粒子 ⑤酸化焙 ⑥橙 色	①縁部やや内 ②湾、横ナデ	16c
3038 142 68	土師質土器 皿K ₃ 類 完形	13寺院北西A Bf10g147	①80 ④50 ②21 ⑤0.26 ③49 ⑥0.61	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③小型平 底皿 ④細粒砂 ⑤酸化焙 ⑥ぶい黄橙	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③小型平 底皿 ④細粒砂 ⑤酸化焙 ⑥ぶい黄橙	①縁部横ナデ ②内底面横ナデ	16c
3039 — 68	土師質土器 皿H類 底部	13寺院北西A Bd09g01	④26	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③小型平 底皿 ④細粒砂、黒色鉍物粒子 ⑤酸化焙 ⑥赤 褐色	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③小型平 底皿 ④細粒砂、黒色鉍物粒子 ⑤酸化焙 ⑥赤 褐色	①体~口縁部横 ②ナデ	14c
3040 142 68	土師質土器 皿H類 3/4口~底部	14寺院北西B Bg11g54	①128 ④90 ②36 ⑤0.28 ③70 ⑥0.55	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③中型平 底皿 ④微粒砂、黒色粒子少 ⑤酸化焙 ⑥黄 橙色	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③中型平 底皿 ④微粒砂、黒色粒子少 ⑤酸化焙 ⑥黄 橙色	①体部内外面横 ②ナデ ③体部内湾	14c、胎土分 析、口唇部 煤付着
3041 142 70	土師質土器 皿L類 完形	14寺院北西B BJ12g10	①105 ④68 ②23 ⑤0.22 ③65 ⑥0.62	①ロクロ成形 ②回転糸切り調整 ③中 型平底皿 ④細粒砂、黒色・白色・赤褐色粒 子 ⑤酸化焙 ⑥橙色	①ロクロ成形 ②回転糸切り調整 ③中 型平底皿 ④細粒砂、黒色・白色・赤褐色粒 子 ⑤酸化焙 ⑥橙色	①体部浅く外 ②反横ナデ	15~16c
3042 142 69	土師質土器 皿B ₃ 類 口~底部	14寺院北西B BJ11g31	①140 ④35 ②19 ⑤0.14 ③84 ⑥0.60	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型浅 い皿 ④微粒砂、赤褐色・白色粒子少 ⑤酸化 焙 ⑥灰白色	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型浅 い皿 ④微粒砂、赤褐色・白色粒子少 ⑤酸化 焙 ⑥灰白色	①口径：丸 ②縁部横ナデ	
3043 142 78	土師質土器 皿B ₃ 類 口~底部	14寺院北西B Bg09g193	①74 ④20 ②16 ⑤0.22 ③30 ⑥0.41	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅 い皿 ④微粒砂、赤褐色・白色・黒色粒子 ⑤ 酸化焙 ⑥灰白色	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅 い皿 ④微粒砂、赤褐色・白色・黒色粒子 ⑤ 酸化焙 ⑥灰白色	①口径：丸 ②縁部横ナデ	
3044 142 70	土師質土器 皿K ₃ 類 3/4底部	14寺院北西B Bk12g	①74 ④40 ②17 ⑤0.23 ③46 ⑥0.62	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③小型平 底皿 ④細粒砂 ⑤酸化焙 ⑥ぶい褐色、一 部黒色	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③小型平 底皿 ④細粒砂 ⑤酸化焙 ⑥ぶい褐色、一 部黒色	①縁部横ナデ	15c
3047 142 69	土師質土器 皿B ₃ 類 3/4口~体部	05北池 Aw17g33~35	①128 ④78 ②25 ⑤0.19 ③80 ⑥0.63	①手捏成形 ②丸底 ③中型浅い皿 ④微 粒砂、黒色・白色粒子 ⑤酸化焙 ⑥浅黄 橙色	①手捏成形 ②丸底 ③中型浅い皿 ④微 粒砂、黒色・白色粒子 ⑤酸化焙 ⑥浅黄 橙色	①口径：三角 ②縁部・内面 ③横ナデ	
3048 142 70	土師質土器 皿B ₃ 類 1/4口~体部	05北池 Aw17g12	①80 ④15 ②16 ⑤0.20 ③40 ⑥0.50	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅 い皿 ④微粒砂、黒色・白色粒子 ⑤酸化焙 ⑥ 橙色	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅 い皿 ④微粒砂、黒色・白色粒子 ⑤酸化焙 ⑥ 橙色	①口径：丸 ②縁部横ナデ	
3049 142 —	土師質土器 皿F類 1/8口~底部	05北池 Ax14g22・28	①86 ④30 ②25 ⑤0.29 ③60 ⑥0.70	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③小型平 底皿 ④細粒砂、黒色・白色粒子 ⑤酸化焙 ⑥ 橙色	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③小型平 底皿 ④細粒砂、黒色・白色粒子 ⑤酸化焙 ⑥ 橙色	①体部は短く外 ②反 ③2段ナデ	13c後半
3059 142 69	土師質土器 皿C ₂ 類 3/4口~底部	08南池 Au18g30・31	①112 ④31 ②(26) ⑤0.23 ③(70) ⑥0.63	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型深 い皿 ④微粒砂、赤褐色粒子 ⑤酸化焙 ⑥明 赤褐色	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型深 い皿 ④微粒砂、赤褐色粒子 ⑤酸化焙 ⑥明 赤褐色		①内面、外面、 ②体部に煤付 ③着
3060 142 70	土師質土器 皿B ₃ 類 完形	08南池 Aw18g20	①80 ④44 ②14 ⑤0.17 ③40 ⑥0.49	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅 い皿 ④微粒砂 ⑤酸化焙 ⑥灰白色	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅 い皿 ④微粒砂 ⑤酸化焙 ⑥灰白色	①口径：丸 ②縁部横ナデ	
3061 142 70	土師質土器 皿B ₂ 類 1/4口~底部	08南池 At18g06	①82 ④35 ②14 ⑤0.17 ③60 ⑥0.73	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅 い皿 ④微粒砂、黒色・白色粒子 ⑤酸化焙 ⑥ 浅黄橙色及び灰白色	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅 い皿 ④微粒砂、黒色・白色粒子 ⑤酸化焙 ⑥ 浅黄橙色及び灰白色	①口径：丸 ②縁部横ナデ	①口唇部に煤 ②付着
3062 142 69	土師質土器 皿B ₃ 類 1/4口~底部	08南池 At18g07	①74 ④17 ②12 ⑤0.16 ③50 ⑥0.68	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅 い皿 ④微粒砂、黒色・白色粒子 ⑤酸化焙 ⑥ 浅黄橙色	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅 い皿 ④微粒砂、黒色・白色粒子 ⑤酸化焙 ⑥ 浅黄橙色	①口径：丸 ②縁部横ナデ	①口唇部に煤 ②付着

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種・分類 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(≡)④重量(g) ②器高(≡)⑤口高比 ③底径(≡)⑥口底比	①成形技法 ③器形の特徴 ⑤焼成	②底部の特徴 ④胎土 ⑥色調	調整	備考
3063 142 68	土師質土器 皿L類 ㄥ口～底部	08南池 Av18g	① 75 ④ 16 ② 18 ⑤0.24 ③ 48 ⑥0.64	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③小型平底 ④細粒砂、白色・黒色・赤褐色粒子 ⑤酸化 ⑥焼成 ⑥橙色	③小型平底 ④胎土 ⑥色調	口縁は直に外 反横ナデ	
3068 142 68	土師質土器 皿B ₁ 類 完形	09南池西 Bc21g77	①117 ④ 95 ② 26 ⑤0.22 ③ 60 ⑥0.51	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型浅い皿 ④微粒砂、白色・赤褐色・黒色粒子 ⑤酸化 ⑥焼成 ⑥灰白色	③中型浅い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:三角 口縁部～内面 部ナデ	
3069 142 68	土師質土器 皿B ₃ 類 完形	09南池西 Bd21g24	①118 ④110 ② 25 ⑤0.21 ③ 76 ⑥0.64	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型浅い皿 ④微粒砂、白色・赤褐色・黒色粒子 ⑤酸化 ⑥焼成 ⑥にぶい橙色	③中型浅い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:三角 口縁・内面が 横ナデ	
3070 142 68	土師質土器 皿D ₂ 類 口～底部	09南池西 Bd22g53	①140 ④ 62 ② 35 ⑤0.25 ③100 ⑥0.71	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型深い皿 ④細粒砂(砂粒が混っている) ⑤酸化焙 ⑥ 明赤褐色	③中型深い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:三角 口縁部横ナデ	
3071 142 68	土師質土器 皿E類 口～底部	09南池西 Bc21g36・67	①140 ④ 58 ②(35) ⑤0.25 ③(90) ⑥0.64	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型深い皿 ④細粒砂、赤褐色少量、砂粒混じり ⑤酸化 ⑥焼成 ⑥橙色	③中型深い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:三角 口縁部横ナデ	
3072 142 68	土師質土器 皿C ₂ 類 %ほぼ完形	09南池西 Bd22g	① 69 ④ 40 ② 12 ⑤0.17 ③ 50 ⑥0.72	①手捏成形 ②偏平底 ③コースター型 ④ 細粒砂、砂粒少量 ⑤酸化焙 ⑥橙色	③コースター型 ④胎土 ⑥色調	口端部直に折 り曲げ後三面 にナデ調整	内面に朱の 付着痕
3073 142 68	土師質土器 皿A ₁ 類 %ほぼ完形	09南池西 Be21g36	① 82 ④ 50 ② 15 ⑤0.18 ③ 65 ⑥0.79	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅い皿 ④微粒砂、粒子の色不明 ⑤酸化焙 ⑥黒色 (内面一部灰白色)	③小型浅い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:丸 口縁部横ナデ	
3074 142 68	土師質土器 皿C類 ㄥ口～底部	09南池西 Bb22g52	① 78 ④ 34 ② 21 ⑤0.27 ③ 40 ⑥0.51	①手捏成形 ②丸底 ③小型深い皿 ④細粒 砂、白色・黒色粒子・砂粒 ⑤酸化焙 ⑥に ぶい褐色	③小型深い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:三角 口縁部～内面 横ナデ	
3084 143 68	土師質土器 皿B ₂ 類 ㄥ口～底部	01寺院東部 Al-An10~12g 大第16号溝	①122 ④ 81 ② 22 ⑤0.18 ③ 70 ⑥0.57	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅い皿 ④微粒子、赤褐色・黒色粒子・白色粒子少量 ⑤酸化焙 ⑥浅黄褐色	③小型浅い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:三角 口縁部～内面 横ナデ	
3085 143 70	土師質土器 皿B ₂ 類 ㄥ口～底部	01寺院東部 大第16号溝	①134 ④ 30 ② 25 ⑤0.18 ③ 74 ⑥0.55	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型浅い皿 ④微粒子、赤褐色粒子・白色・黒色粒子少量 ⑤酸化焙 ⑥浅黄褐色、底部外面ねずみ色	③中型浅い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:三角、 口唇外面に凹 線、内面横ナデ	
3086 143 —	土師質土器 皿B ₂ 類 ㄥ口～底部	01寺院東部 大第16号溝	① 86 ④ 15 ② 10 ⑤0.11 ③ 60 ⑥0.69	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅い皿 ④微粒子、赤褐色・白色・黒色粒子少量 ⑤酸化焙 ⑥にぶい黄褐色	③小型浅い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:丸 口縁部横ナデ	
3087 143 —	土師質土器 皿B ₁ 類 ㄥ口～底部	01寺院東部 An12g 大第16号溝	①120 ④ 23 ② 28 ⑤0.23 ③ 80 ⑥0.66	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型浅い皿 ④微粒子、赤褐色・白色・黒色粒子少量 ⑤ 酸化焙 ⑥浅黄褐色	③中型浅い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:三角 口縁部～内面 横ナデ	
3096 143 —	土師質土器 皿B ₂ 類 口～底部	01寺院東部 Al-Am-An21g 大第17号溝	① 78 ④ 10 ② 13 ⑤0.16 ③ 40 ⑥0.51	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅い皿 ④微粒砂、赤褐色・黒色粒子 ⑤酸化焙 ⑥ 浅黄褐色	③小型浅い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:丸 口縁部横ナデ	
3097 143 —	土師質土器 皿B ₂ 類 口～底部	01寺院東部 Am-An12g 大第17号溝	①132 ④ 20 ②(22) ③(90)	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型浅い皿 ④微粒砂 ⑤酸化焙 ⑥にぶい黄褐色	③中型浅い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:三角 内面横ナデ	
3098 143 —	土師質土器 皿B ₂ 類 ㄥ口～底部	01寺院東部 Am-An12g 大第17号溝	① 80 ④ 10 ② 15 ③(50)	①手捏成形 ②丸底 ③小型浅い皿 ④微粒 砂、赤褐色粒子・白色・黒色粒子少量 ⑤酸 化焙 ⑥浅黄褐色	③小型浅い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:丸 口縁部横ナデ	
3099 143 —	土師質土器 皿B ₂ 類 口～底部	01寺院東部 Am, An12g(ト レンチ) 大第17号溝	①112 ②(12) ③(50)	①手捏成形 ②丸底 ③小型浅い皿 ④微粒 砂、赤褐色・黒色・白色粒子 ⑤酸化焙 ⑥ 浅黄褐色	③小型浅い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:三角 口縁部横ナデ	
3105 143 —	土師質土器 皿B ₂ 類 口～底部	01寺院東部 A114g 大第17号溝	①134 ④ 28 ②(25) ③(80)	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型浅い皿 ④細粒砂、赤褐色・黒色粒子、砂粒混入 ⑤ 酸化焙 ⑥明褐色	③中型浅い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:三角 口縁部～内面 横ナデ	
3106 143 —	土師質土器 皿I類 口～底部	01寺院東部 大第17号溝	①114 ④ 24 ②(21) ③(66)	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型浅い皿 ④細粒砂、赤褐色・黒色粒子、砂粒混入 ⑤ 酸化焙 ⑥明褐色	③中型浅い皿 ④胎土 ⑥色調	口端:三角 口縁部～内面 横ナデ	
3107 143 —	土師質土器 皿G類 底部	01寺院東部 A114g 大第17号溝	④ 96 ③ 56	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③中型平底 ④細粒砂、黒色粒子、砂粒混入 ⑤酸化焙 ⑥ にぶい橙色	③中型平底 ④胎土 ⑥色調	体部は浅く外 反、底部は高 台作りか	13~14c

第4節 寺院址出土遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種・分類 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(㎜)④重量(g) ②器高(㎜)⑤口高比 ③底径(㎜)⑥口底比	①成形技法 ③器形の特徴 ⑤焼成	②底部の特徴 ④胎土 ⑥色調	調整	備考
3108 143 —	土師質土器 皿G類 底部	01寺院東部 An14g 大第17号溝	④ 78 ③ 63	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③中型平底 ④細粒砂、白色、黒色粒子 ⑤酸化焰 ⑥に ぶい橙色	②底部の特徴 ④胎土 ⑥色調	調整	13~14c 体部は浅く外 反
3111 143 —	土師質土器 皿C ₁ 類 口~底部	01寺院東部 大第15号溝	①120 ④ 14 ②(25) ③(60)	①手捏成形 ②丸底 ③中型浅い皿 ④微粒 砂、黒色鉱物粒子 ⑤酸化焰 ⑥浅黄橙色	調整	調整	口端：丸 口縁部横ナデ
3112 143 —	土師質土器 皿C ₁ 類 口~底部	01寺院東部 大第15号溝	① 70 ②(13) ③(50)	①手捏成 ②丸底(偏平) ③小型浅い皿形 ④微粒砂、赤褐色、白色粒子、黒色粒子少量 ⑤酸化焰 ⑥明赤褐色	調整	調整	口端：丸 口縁部横ナデ
3113 143 —	土師質土器 皿B ₂ 類 口~底部	01寺院東部 大第15号溝	① 80 ② 13 ③(50)	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅い皿 ④微粒砂、赤褐色、白色、黒色粒子 ⑤酸化 焰 ⑥浅黄橙色	調整	調整	口端：丸 口縁部横ナデ
3114 143 68	土師質土器 皿I類 ½口~底部	01寺院東部 Ag19g 大第15号溝	① 90 ④ 30 ② 20	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③小型浅い皿 ④細粒砂、赤褐色、黒色粒子 ⑤酸化焰 ⑥ にぶい橙色、底部内外面うす墨色	調整	調整	14c 口端：三角 内面横ナデ
3116 143 —	土師質土器 皿C ₁ 類 ¾口~底部	01寺院東部 An10g01	①120 ④ 12 ②(28) ③(76)	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③中型浅い皿 ④微粒砂、黒色・白色粒子、赤褐色粒子少量 ⑤酸化焰 ⑥浅黄橙色	調整	調整	口端：丸 口縁部横ナデ
3117 143 68	土師質土器 皿B ₂ 類 ¾口~底部	01寺院東部 Ak13g01	① 90 ④ 18 ② 17	①手捏成形 ②丸底(偏平) ③小型浅い皿 ④微粒砂、赤褐色粒子 ⑤酸化焰 ⑥にぶい 橙色	調整	調整	口端：三角 口縁部・内面 横ナデ
3119 143 —	土師質土器 皿M類 ¾底部	03寺院北部 Ax09g	④ 16 ③ 84	①ロクロ成形 ②回転ヘラ起し ③中型平底 皿 ④細粒砂、やや精選 ⑤酸化焰、普通(や や堅緻) ⑥明褐色、内面一部にぶい橙色	調整	調整	15c~16c
3120 92 69	土師質土器 皿L類 ほぼ完形	11寺院中央B Bh15g09 大第1号配石墓	① 76 ④ 28 ② 17 ⑤0.22 ③ 48 ⑥0.63	①ロクロ成形 ②糸切へら起し ③小型浅い 皿 ④細粒砂、白色微粒多 ⑤酸化焰、良好 ⑥明褐色	調整	調整	口縁は直に外 反、内底面・体 部指ナデ調整
3121 92 69	土師質土器 皿F類 ¾口~底部	11寺院中央B Bi15g09 大第1号配石墓	① 72 ④ 30 ② 19 ⑤0.26 ③ 55 ⑥0.76	①ロクロ成形 ②糸切へら起し ③小型浅い 皿 ④精選・細粒砂、微粒雲母 ⑤酸化焰、 良好 ⑥橙色	調整	調整	口縁は直立 口唇部煤附着 体部ナデ調整
3122 113 70	土師質土器 皿K ₂ 類 完形	13寺院北西A Bd09g05 大第2号火葬墓	①112 ④100 ② 27 ⑤0.24 ③ 66 ⑥0.59	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③中型浅い皿 ④細粒砂、微粒雲母多 ⑤酸化焰、良好 ⑥ 明赤褐色	調整	調整	口縁は直に外 反 体部ナデ調整
3123 115 70	土師質土器 皿K ₂ 類 完形	13寺院北西A Be09g01	①111 ④120 ② 27 ⑤0.24 ③ 72 ⑥0.65	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③中型浅い皿 ④中粒砂、黒色鉱物粒子、微粒雲母 ⑤酸化 焰、良好 ⑥浅黄橙色~灰白色	調整	調整	口縁は直に外 反 体部ナデ調整
3124 115 70	土師質土器 皿K ₂ 類 完形	13寺院北西A 大第4号火葬墓	①110 ④140 ② 30 ⑤0.27 ③ 82 ⑥0.75	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③中型浅い皿 ④細粒砂、白色粒子、黒色鉱物粒子 ⑤酸化 焰、良好 ⑥赤褐色	調整	調整	口縁は直に外 反 体部ナデ調整
3125 119 70	土師質土器 皿K ₂ 類 完形	14寺院北西B 大第5号火葬墓	①106 ④100 ② 23 ⑤0.22 ③ 70 ⑥0.66	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③中型浅い皿 ④中粒砂、黒色鉱物粒子、微粒雲母多 ⑤酸 化焰・良好 ⑥浅黄橙色~赤褐色	調整	調整	胎土分析 口縁は直に外 反 体部やや内湾 体部ナデ調整
3126 119 70	土師質土器 皿K ₂ 類 完形	14寺院北西B 大第5号火葬墓	①106 ④120 ② 27 ⑤0.25 ③ 70 ⑥0.66	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③中型浅い皿 ④中粒砂、黒色鉱物粒子、微粒雲母多 ⑤酸 化焰、良好 ⑥浅黄橙色~灰白色	調整	調整	15c~16c 口縁は直に外 反、体部やや 内湾・横ナデ 調整
3127 126 71	土師質土器 皿L類 完形	09南池西 大第3号土坑墓	①136 ④180 ② 28 ⑤0.21 ③ 70 ⑥0.51	①ロクロ成形 ②回転糸切調整 ③中型浅い 皿 ④細粒砂、白色微粒、微粒雲母 ⑤酸 化焰、良好 ⑥明赤褐色	調整	調整	口縁は直に外 反、体部ナデ 調整
3128 126 71	土師質土器 皿L類 完形	09南池西 大第3号土坑墓	①108 ④ 98 ② 25 ⑤0.23 ③ 67 ⑥0.62	①ロクロ成形 ②回転糸切調整 ③中型浅い 皿 ④細粒砂、白色微粒、微粒雲母 ⑤酸 化焰、良好 ⑤明赤褐色	調整	調整	胎土分析 口縁は直に外 反 体部ナデ調整
3129 126 71	土師質土器 皿L類 口~底部	09南池西 大第3号土坑墓	①116 ④ 80 ② 28 ⑤0.24 ③ 73 ⑥0.63	①ロクロ成形 ②回転糸切調整 ③中型浅い 皿 ④細粒砂、黒色鉱物粒子、微粒雲母 ⑤ 酸化焰、良好 ⑥鈍赤褐色	調整	調整	口縁は直に外 反 体部ナデ調整

3 軟質陶器

軟質陶器とした遺物は、主として在地窯製と考えられる軟質・須恵質・瓦質焼成の製品で、鉢・摺鉢類、内耳鍋・焙烙類、火舎・香炉類等の器種が見られ、中世から近世に至る長期間にわたって生産・消費された製品である。本項では器種別に取り扱うこととし、その際、鉢類については器種が種別分類に優先するという観点から特に中世のものについては陶器製のものも含めて考えた。器形復元の可能な遺物を選択し、掲載点数は28点である。

[鉢類] 軟質陶器製のものが5点、陶器製のものが3点確認された。3201、3202、3203の3点はいわゆる軟質の酸化焼成で、口唇部が平坦で内側に小稜を持つ片口鉢である。3204は器肉のやや厚い黒色粗粒子を胎土中に含む片口鉢で、やや須恵質の還元焼成であるが、断面は酸化焼成の状態であった。3214は内面に摺目が観察される軟質の鉢の体部と見られる。3205～3207の3点は焼締陶器で渥美・常滑系と思われ、いずれも硬質にもかかわらずかなり摩滅している。いずれも中世のものと考えられる。

[内耳鍋類] 3208～3211の5点が確認されている。3211は断面円形の紐状の耳がつく。土鍋本体に円形の小孔を穿ち、耳を装着することが観察された。他の3点については口縁部に内稜が認められ、くの字状を呈することからいわゆる土鍋と判断され、いずれも中世のものと考えられる。

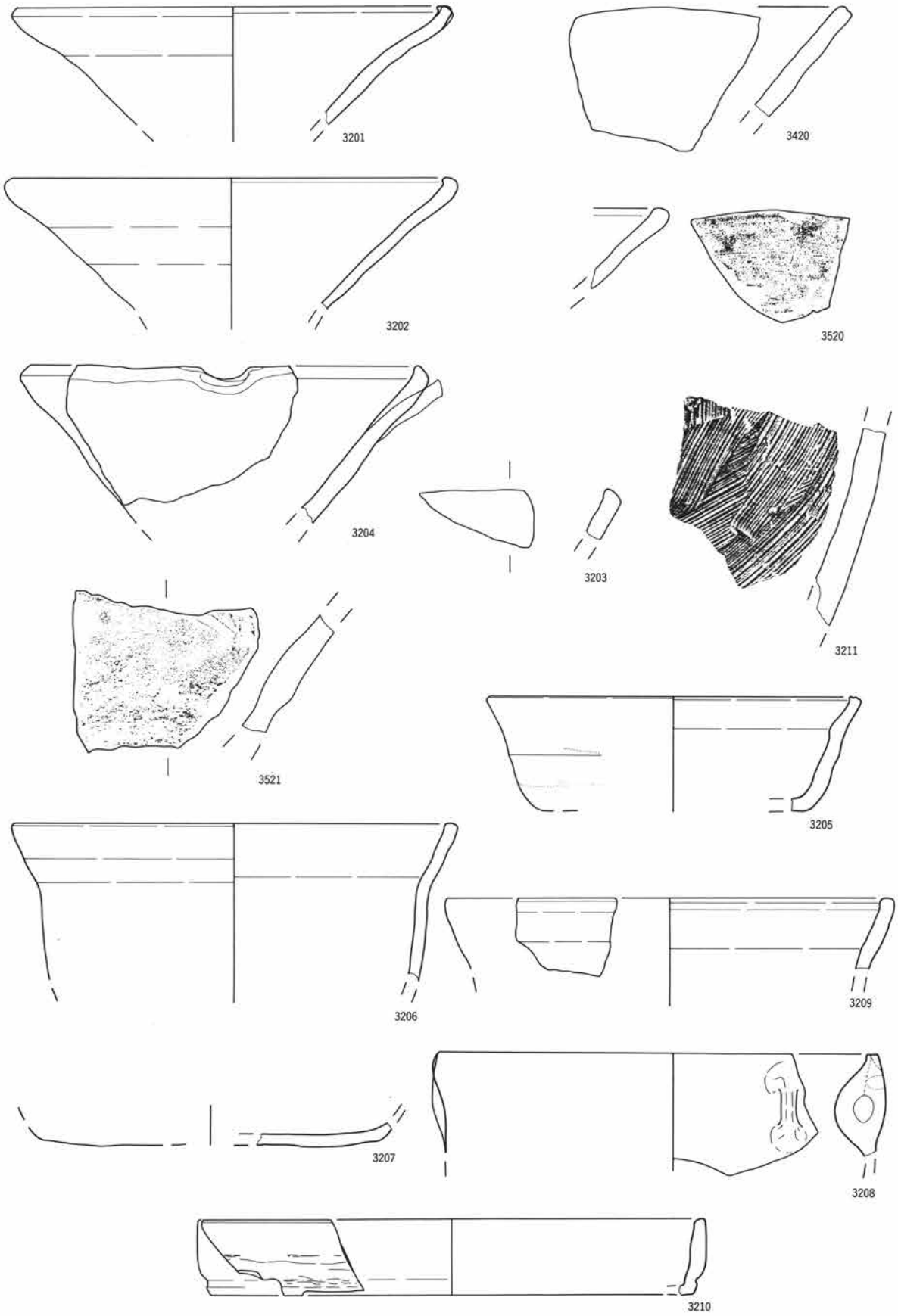
[焙烙類] 3213は口縁部がほぼ直立するタイプで瓦質焼成で、表面は黒色を呈する。口縁部は紐作りで接合痕が認められる。3215及び3216は軟質焼成で赤褐色の色調を呈し、口縁部は浅い立ち上がりの焙烙で、耳は幅広く指頭圧痕の窪みが見られる。3213は中世後半、他の2点は近世のものと思われる。

[火舎・香炉類] 3217には底部裏面に円形の足を付けた痕跡が認められることから火舎の底部と推定される。胎土はやや粗い感はあるが比較的精選されている。3221～3223は三巴文・雷文等のスタンプが体部外面に連続的にみられる。3224～3228は同一個体の角火鉢の口縁部と見られ、口縁部下に連続的なスタンプ文が見られる。この8点は胎土がやや粗い砂粒で軟質焼成である。3218は表面が黒色を呈すいぶし焼成の香炉

第12表 大御堂調査区寺院址出土遺物観察表 一軟質陶器一

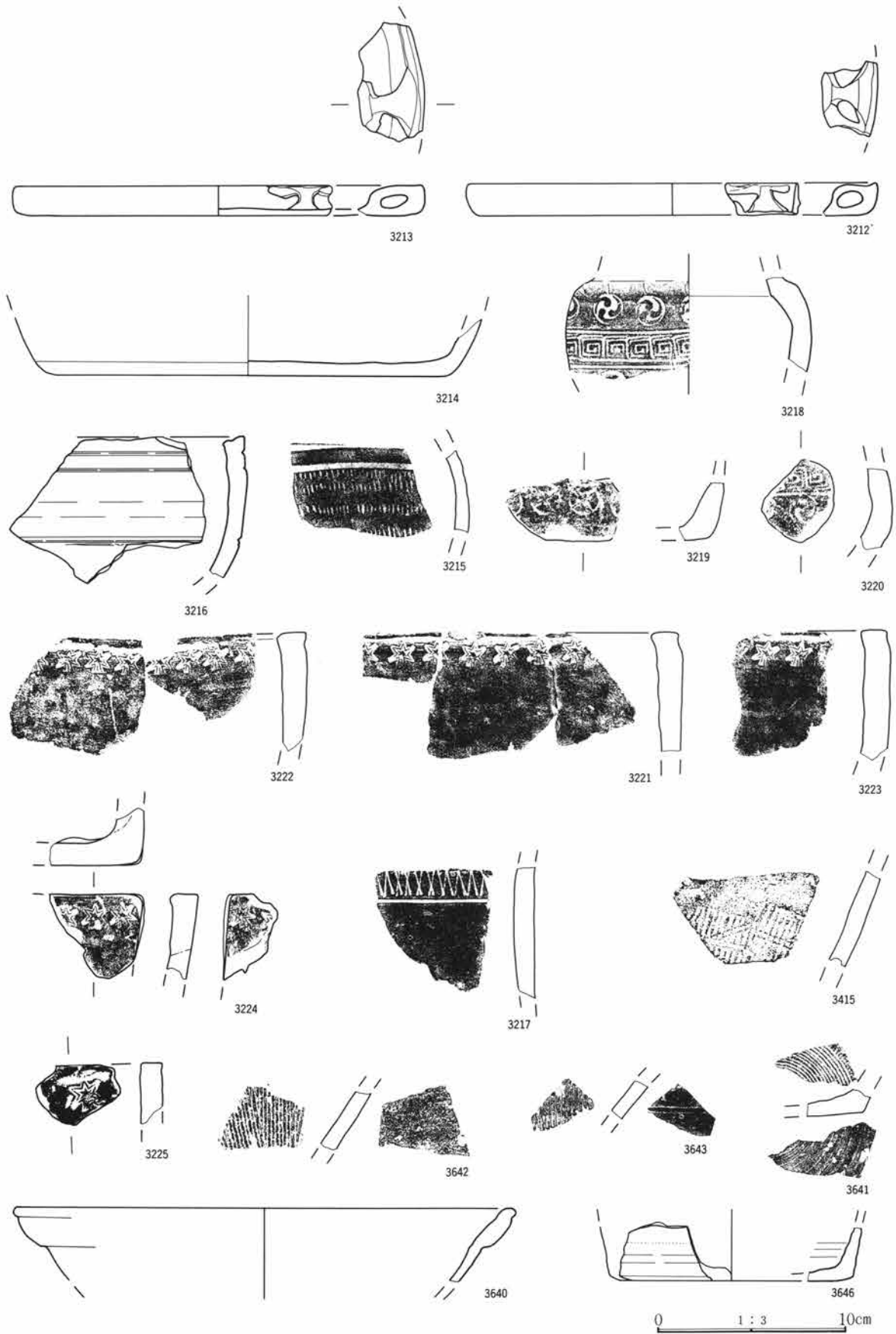
遺物番号 挿図番号 写真版	種別 器種・分類 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(㎜)④重量(g) ②器高(㎜)⑤器形 ③底径(㎜)	①成形技法 ③器形の特徴 ⑤焼成	②底部の特徴 ④胎土 ⑥色調	調整 特徴	備考
3201 144 71	軟質陶器 摺鉢 口～体部	10寺院中央A Be19g01	①304	①紐作り ②欠損 ③逆ハの字形鉢 ④細粒砂、白色粒、黒色鈹物粒、微粒雲母 ⑤酸化焙(断面一部還元)軟質 ⑥表面鈍い赤褐色、断面灰色	口唇部内湾 体部内面横ナデ		中世
3202 144 71	軟質陶器 摺鉢 口～体部	09南池西 Bd22g14・48	①310	①紐作り ②欠損 ③逆ハの字形 ④細粒砂、白色粒・黒色鈹物粒・微粒雲母 ⑤酸化焙(断面一部還元)軟質 ⑥表面鈍い赤褐色～灰褐色、断面灰色	口唇部内湾		中世
3203 144	軟質陶器 摺鉢 口縁部小片	01寺院東部 Ar09g AD13		①紐作り ④微粒砂、黒色鈹物粒 ⑤酸化焙(軟質) ⑥外面明赤褐色、内面灰白色、断面明赤褐色			
3204 144 72	軟質陶器 摺鉢 口～体部	11寺院中央B Bi19g34	①270	①紐作り ③逆ハ字状 ④中粒砂、黒色粒子多、白色微粒子 ⑤還元焙、焼締、須恵質 ⑥灰色(断面一部明赤褐色)	平口縁内側微稜、口・内面横ナデ、体部内面磨滅		在地系
3205 144 —	軟質陶器 内耳鍋 口～体部	05北池 Aw13g44		①紐作り ④粗粒砂、砂粒混入 ⑤酸化焙(いぶし焼) ⑥表面黒色、断面明赤褐色			
3206 144 71	軟質陶器 内耳鍋 口～体部	15寺院西部 Bn22g01		①ロクロ作り ④微粒砂、黒色、白色粒子 ⑤還元焙(須恵質) ⑥暗赤褐色、断面一部灰色			

第4節 寺院址出土遺物



第144図 大御堂寺院址出土遺物実測図(3)―軟質陶器―

0 1:3 10cm



第145図 大御堂寺院址出土遺物実測図(4)―軟質陶器―

第4節 寺院址出土遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種・分類 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(㎜)④重量(g) ②器高(㎜)⑤器形 ③底径(㎜)	①成形技法 ③器形の特徴 ⑤焼成	②底部の特徴 ④胎土 ⑥色調	調整 特徴	備考
3207 144 71	軟質陶器 内耳鍋 口縁部	16寺院南西部 Bm24g04		①型作り ④微粒砂、白色粒子、微粒雲母、小砂粒 ⑤還元焰(軟質) ⑥表面にぶい赤褐色、断面一部黒色		底部横ナデ 底部ヘラけずり調整	
3208 144 71	軟質陶器 内耳鍋 口縁部	15寺院西部 Bl19g02	①310	①紐作り ④微粒砂、黒色粒子、赤褐色粒子 ⑤還元焰(軟質) ⑥外面暗褐色、内面にぶい黄褐色、断面にぶい赤褐色			
3209 144 71	軟質陶器 内耳鍋 口縁部	15寺院西部 Bk14g02	①312	①紐作り ④細粒砂、白色、黒色微 ⑤還元焰(瓦質) ⑥表面黒色、断面にぶい黄褐色、一部灰白色			
3210 144 71	軟質陶器 内耳鍋 口縁部	08南池 Av20g08	①356	①型、紐作り ④細粒砂、黒色鈹物粒子、赤褐色粒子 ⑤還元焰(いぶし焼) ⑥表面黒色、断面灰白色、一部黒色			
3211 144 —	軟質陶器 不明 胴部	15寺院西部 Bm20g07		①紐作り ②すり鉢 ④微粒砂、白色雲母、白色微粒子 ⑤酸化焰 ⑥表面暗赤灰色 断面明赤褐色			
3212 145 71	軟質陶器 焙烙 口縁部	05北池 Av14g04	①286	①型作り ④微粒砂、微粒雲母、黒色鈹物粒子 ⑤還元焰 ⑥橙色			
3213 145 —	軟質陶器 焙烙 口縁部	05北池 Av17g04	①283	①型作り ④微粒砂、微粒雲母、黒色鈹物粒子 ⑤還元焰 ⑥にぶい橙色			
3214 145 72	軟質陶器 火舎 体部～底部	09南池西 Be22g17・38		①紐作り ④小砂粒、黒色鈹物粒子、赤褐色粒子 ⑤還元焰 ⑥表面暗赤褐色、断面明赤褐色		内面体横ナデ 底ヘラ、外面底 ヘラ作り調整	
3215 145 —	軟質陶器 不明 胴部	12寺院中央C Bc13g64		①紐作り ③香炉型か? ④微粒砂、微粒雲母、黒色鈹物粒子 ⑤還元焰(瓦質) ⑥表面黒色、断面にぶい赤褐色、灰色		内面横ナデ 外面沈線と印花	
3216 145 72	軟質陶器 火舎	05北池 At13g01	①220	①紐作り ③香炉型 ④細粒砂、白色粒子、黒色鈹物粒子 ⑤還元焰 ⑥表面にぶい橙色、断面一部灰色		内面横ナデ 外面沈線と縄目	
3217 145 72	軟質陶器 不明 口縁部	12寺院中央C Bd13g13		①紐作り ④細粒砂、赤褐色、白色粒子 ⑤酸化焰(軟質) ⑥にぶい褐色		外面沈線、ヘラ形による三角山紋	
3218 145 72	軟質陶器 不明 体部	05北池 Au13g		①型、紐作り ④細粒砂、赤褐色、白色粒子 ⑤酸化焰(軟質) ⑥にぶい褐色		外面沈線、巴(印花)、雷文(スタンプ)	
3219 145 —	軟質陶器 火舎 体部～底部	10寺院中央A Bc18g02		①型、紐作り ④細粒砂、赤褐色、白色粒子 ⑤酸化焰(軟質) ⑥にぶい褐色		外面⊗模様	
3220 145 —	軟質陶器 火舎 体部～底部	10寺院中央A Bc17g13		①型、紐作り ④細粒砂、赤褐色、白色粒子 ⑤酸化焰(軟質) ⑥にぶい褐色		外面沈線、巴(印花)雷紋(スタンプ)	
3221 145 72	軟質陶器 火舎 口縁部	12寺院中央C Be13g14		①紐作り ③角型か ④やや細粒砂、白色粒子、黒色鈹物粒子 ⑤還元焰 ⑥にぶい赤褐色、内面一部黒褐色		口縁部下外面 印花紋(紅葉文)	※ 3221～3225 は同一個体 の破片か
3223 145 72	軟質陶器 火舎 口縁部	12寺院中央C Bc13g17		①紐作り ③角型か ④やや細粒砂、白色粒子、黒色鈹物粒子 ⑤還元焰 ⑥にぶい赤褐色、内面一部黒褐色		口縁部下外面 印花文(紅葉文)	※
3224 145 72	軟質陶器 火舎 口縁部	12寺院中央C Ay11g39		①紐作り ③角型か ④やや細粒砂、白色粒子、黒色鈹物粒子 ⑤還元焰 ⑥にぶい橙色、外面一部黒褐色		口縁部下外面 印花文(紅葉文)	※
3225 145 72	軟質陶器 火舎 口縁部	15寺院西部 Au14gII層		①紐作り ③角型 ④やや細粒砂、白色粒子、黒色鈹物粒子 ⑤還元焰 ⑥にぶい赤褐色		口縁部下外面 印花文(紅葉文)	※

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

胴部である。3214、3220の器種は不明であるがやや大型のもの胴部片と考えられる。3220はやや粗い胎土で火舎類の胴部かと思われる。

4 陶磁器類

《種別》

出土した陶磁器類には、中世から近世・近代に至るまで、中国製輸入磁器を初めとして瀬戸系・肥前系等の国産陶磁器類等のまとまった量の出土が見られた。以下、輸入磁器・中世国産陶器・近世磁器・近世陶器とに分けて述べる。

《輸入磁器》

輸入磁器は大御堂調査区A・B区で22点出土している。青磁及び青白磁の碗類が中心で、比較的小片ではあるがまとまった出土量と言える。白石大御堂遺跡全体では32点なので、寺院址遺構に集中していると言える。寺院址に西接するC区では3点、前原調査区で6点の出土である。また、上谷戸調査区では青花が1点確認されている。ここでは大御堂調査区出土の25点について報告する。

出土した輸入磁器は宋代の龍泉窯系のもので時期的には鎌倉時代前期の13世紀代に集中する。その特徴から次の5類型に分類される。

[A類] 3301、3302、3303、3304、(3323)

3301は白磁碗の体部小片で、内面に劃花文が見られる。釉調は灰白色で3302・3303は青白磁合子である。3302には鳳鵬の印花文が見られる。釉調は明緑灰色で細かい発泡が見られる。3323は白磁皿の体部片である。胎土・発色共に若干黄色味がかかる灰白色である。

[B類] 3305、3306、(3324)

3305は体部内外面に劃花文が見られ、明緑灰色の発色で胎土はやや密である。3306は胎土がやや粗く灰色のため、釉調も緑灰色を呈す。3324は碗口縁部片である。口唇部がやや外反し、内外面共に劃花文が見られる。外面は鎬蓮弁文と劃花文が組み合わせてある。

[C類] 3307、3308、3309、3310、3311、3312、3313、3314、(3325)、(3326)

体部内面に劃花文の見られる一群である。胎土は3313がややきめ細かく密で、他はやや密で灰色の色調である。釉調は緑灰色～オリーブ灰色を呈し、比較的良好な発色である。

[D類] 3315、3316、3317、3318

比較的上手の一群で、器形は碗である。3315では二重貫入が見られ、3316は高台まで釉がかかっており、総じて釉は厚く、緑灰色または明緑灰色の色調で発色は良好である。胎土もきめ細かくかなり白に近い灰白色である。3317は器壁がやや薄く、外面に蓮弁文が見られる。

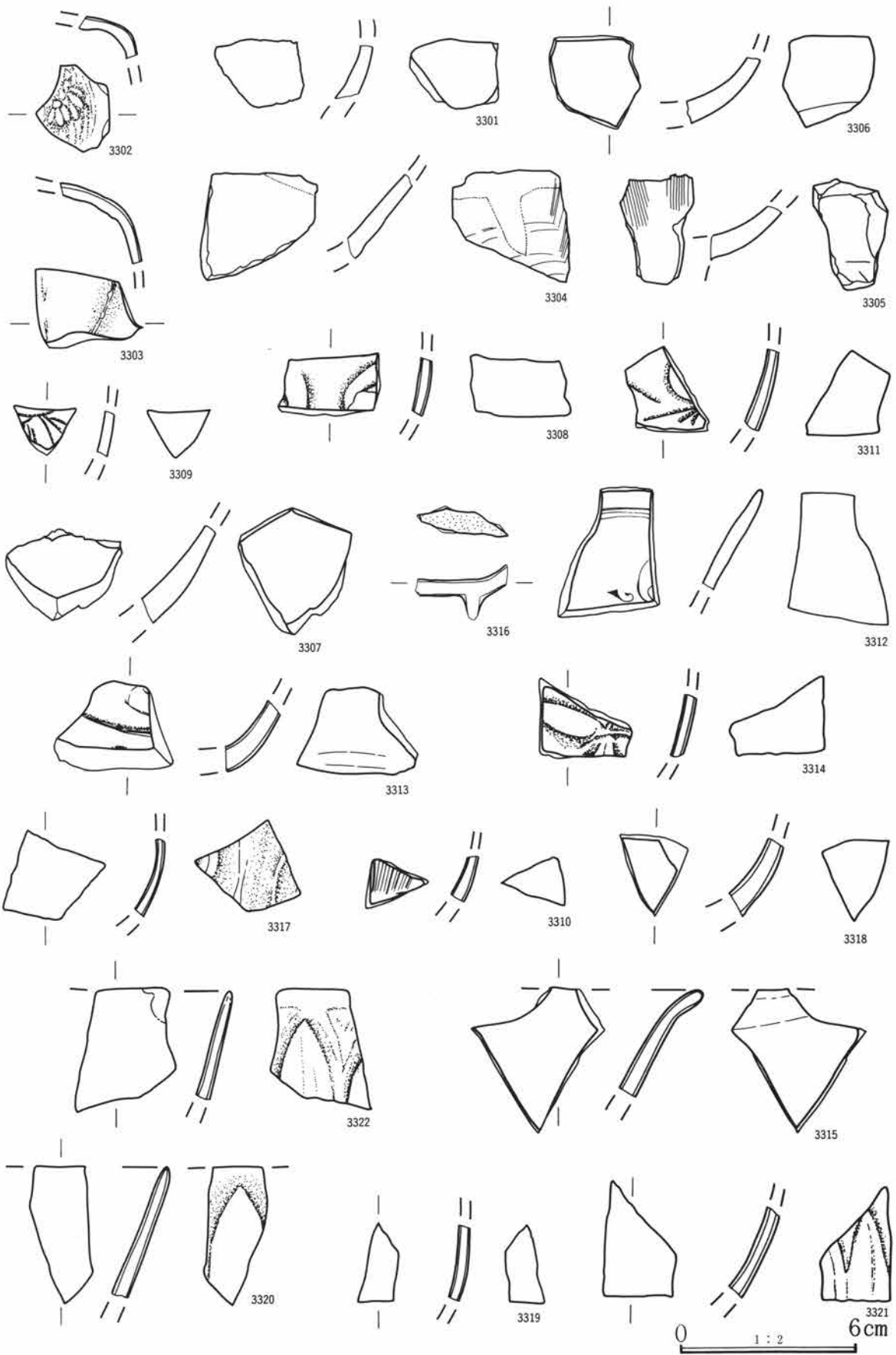
[E類] 3319、3320、3321、3322

鎬蓮弁文の碗の一群である。胎土は比較的密である。3320、3321は明緑灰色を呈すが、3319、3322は灰オリーブ色を呈し、胎土もやや黄色味のある灰白色である。

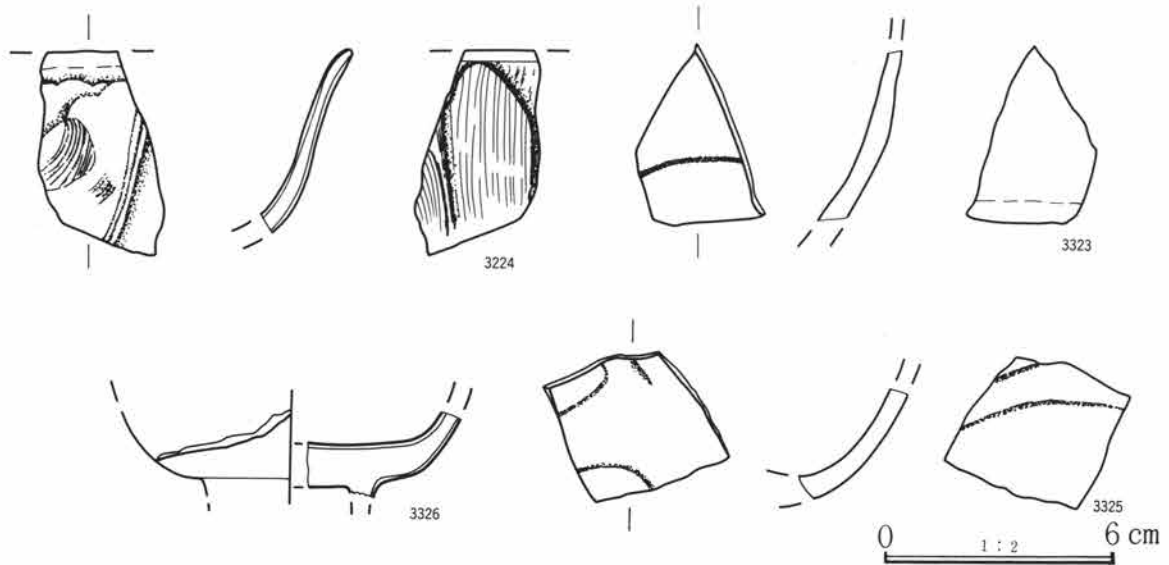
※ 青磁は前原調査区において6点出土したが、上記遺物と同年代同種のものと考えられる。

《中世国産陶器》3401～3421

中世国産陶器と見られるものは、前述の鉢類3点の他に18点が確認された。出土資料は美濃・山茶碗窯系の小皿(3418)、古瀬戸系の瓶子(3402)・平碗(3403、3404)・仏花瓶(3405)、常滑系の大甕(3407～3416)・片口鉢(3406)等である。いずれも中世前半期の生産年代で、13世紀から14世紀のものである。



第146図 大御堂寺院址出土遺物実測図(5)一輸入磁器一



第147図 大御堂寺院址出土遺物実測図(6)―輸入磁器―

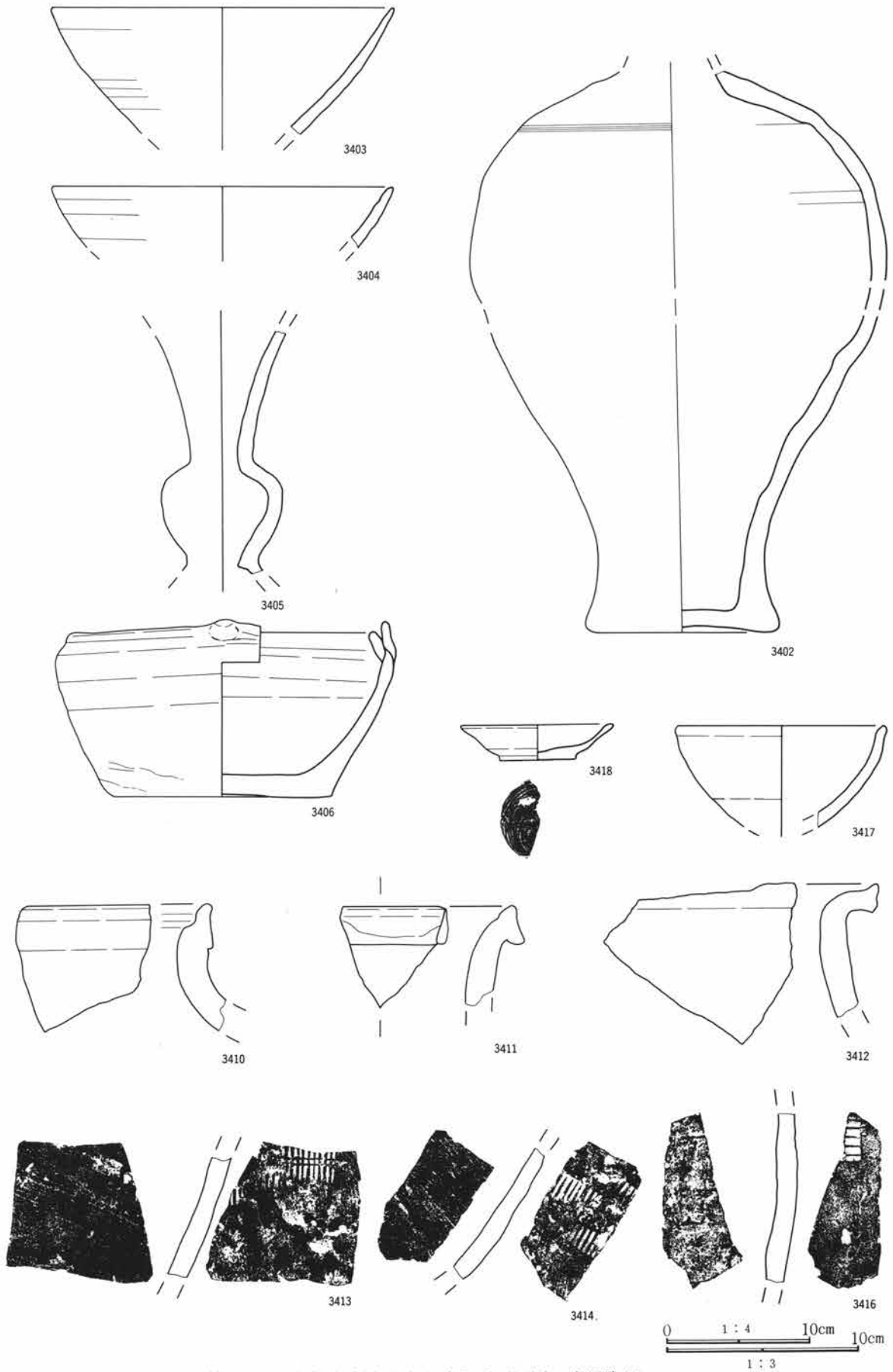
3402の古瀬戸瓶子は南池の北西肩付近の底面近くで碎片となって出土した(第148図)。全体の $\frac{1}{4}$ 程度の残存状況であったが、口縁部は欠損していたが器形復元はほぼ可能である。いわゆる梅瓶で、肩部は緩やかな曲線を描き、3条の細い平行条線が見られ胴下半は縮腰となる。全面に灰釉が流し掛けされている。平碗2点はいずれも口縁部片であるが、胎土・焼成・釉調共に3402の瓶子と共通する特徴を持つ。3405の仏花瓶は底部と口縁部が欠損して全長は不明であるが約15cm前後と推定される。胴部は最大幅5.7cmで肩部にやや張りを持つ。口縁部は緩やかに外反し、黒褐釉がかかる。胎土は灰釉の瓶子・平碗に比べてやや粗く灰色を呈す。3417は黒褐釉のかかる天目茶碗の口縁部片である。3402～3405はいずれも古瀬戸後期のものと推定される。

常滑系の甕3407は、寺院址南西部の掘立柱建物跡群で検出され(第58図)、建物内に据え置かれた大甕と考えられる。胴部片と底部片のみで体部の $\frac{1}{4}$ 程度が確認され、口縁部は欠損している。胴最大径は肩部にあり、比較的明瞭な稜を持つ。口縁部片は3片見られ、いずれもN字状の折り返しが認められる。器形は3412が壺形、3410・3411が甕形と思われる。胎土は3411が最も精選されて密で、口縁部の縁帯はやや幅広く外面に自然釉が厚くかかり発色も良好である。3412は頸部から口縁部までやや外反する立ち上がりで縁帯は短い。胎土・焼成の特徴は3411に似る。3411の口縁部片は胎土がやや粗く、器面は黒褐色を呈する。3413・3414・3415は甕の胴部片で、いずれも押印が見られる。3406はほぼ完形の片口鉢である。甕の底部のような形状で、口縁部はやや内湾させ、その一部を片口状にしている。口縁及び内面に黄緑色の自然釉がごまふり状にかかり、器面は茶褐色を呈す。これらの遺物は常滑編年の第III期から第IV期にあたり、鎌倉時代後半から南北朝時代にかけてのものと考えられる。3419・3420・3421はいずれも摺鉢であるが、3419は酸化焰焼締焼成で明赤褐色を呈し、3420は還元焰焼成で灰白色を呈す。いずれも口縁部片である。3421は酸化焰焼締焼成で、体部下半でかなり擦り減っている。在地系の製品と推定される。

古瀬戸系の遺物は園池遺構からの出土であったが、常滑系の遺物は3406・3410が寺院址東部での出土で、それ以外は寺院址中央部から西部におよび南西部かけての分布であった。時期的には、古瀬戸後期、常滑III・IV期のものであり、鎌倉時代後半から南北朝時代にかけてのものと考えられる。また、天目茶碗はこれよりやや時代の下の中世後半かと推定される。

《近世陶磁器類》

寺院址で検出された近世の陶磁器類は、主に肥前系と瀬戸美濃系で、少量の地方窯及び在地窯系のものが



第148図 大御堂寺院址出土遺物実測図(7)—中世陶器—

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物

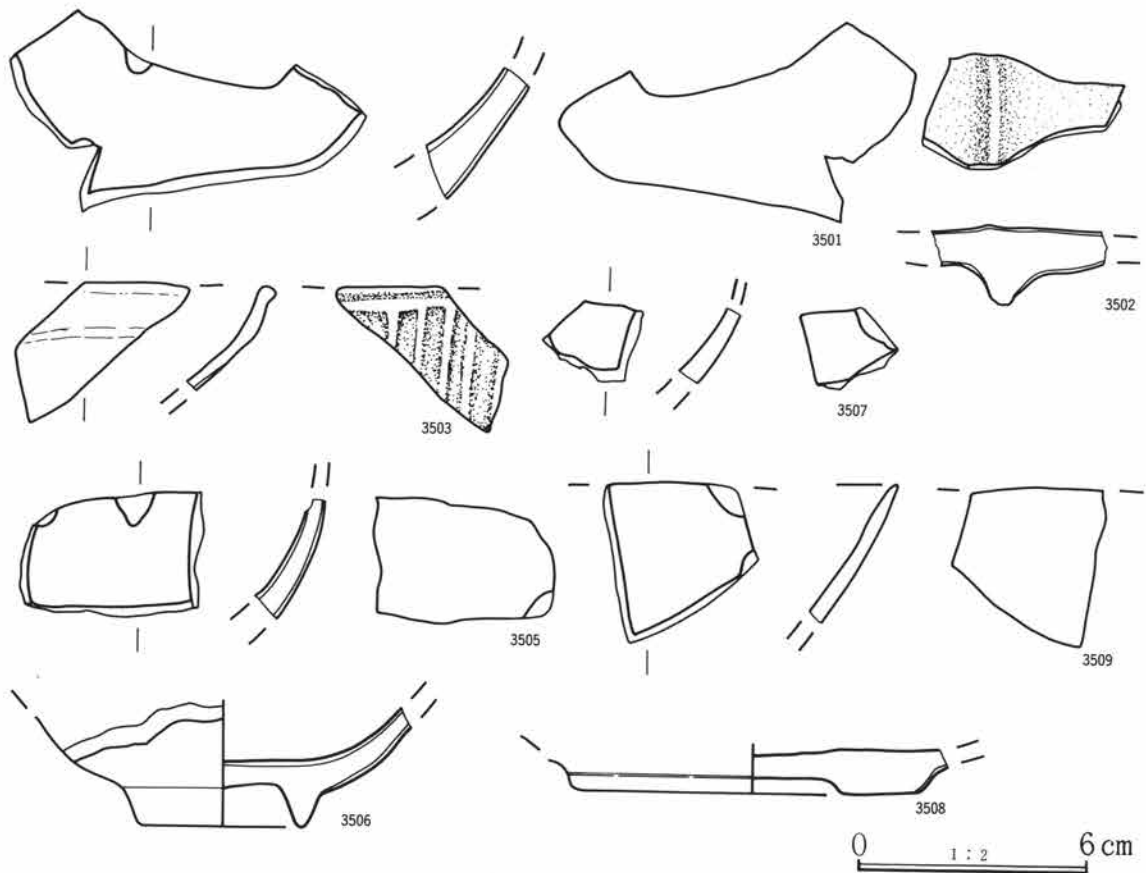
見られる。時期的には、17世紀の中頃からあり、18世紀代のもが多く見られる。また、池が大正時代までは残っていたことから明治時代以降のものも出土し、戦時中の統制番号のついたものも出土した。ここでは、近世のものを中心に選択した。肥前系のもは染付類が中心であるが、陶胎染付・唐津系・京焼風陶器なども見られ、磁器類では青磁も見られる。また、瀬戸美濃系のもは、黒褐色釉系・長石釉系・黄瀬戸系のもの、染付等が見られる。器種は碗・皿類が中心であるが、灯明皿・摺鉢・火入れ・蓋物等も見られる。

近世陶磁器類が多く出土したのは、最も最後まで遺構が存続していた北池で、第1号池状遺構や南池からも多く出土した。個体識別のできるものを選択し、小片については省略したが、青磁等の希少性のものはすべて掲載し、その数量は磁器34点、陶器59点である。

[近世国産磁器] 3501～3536

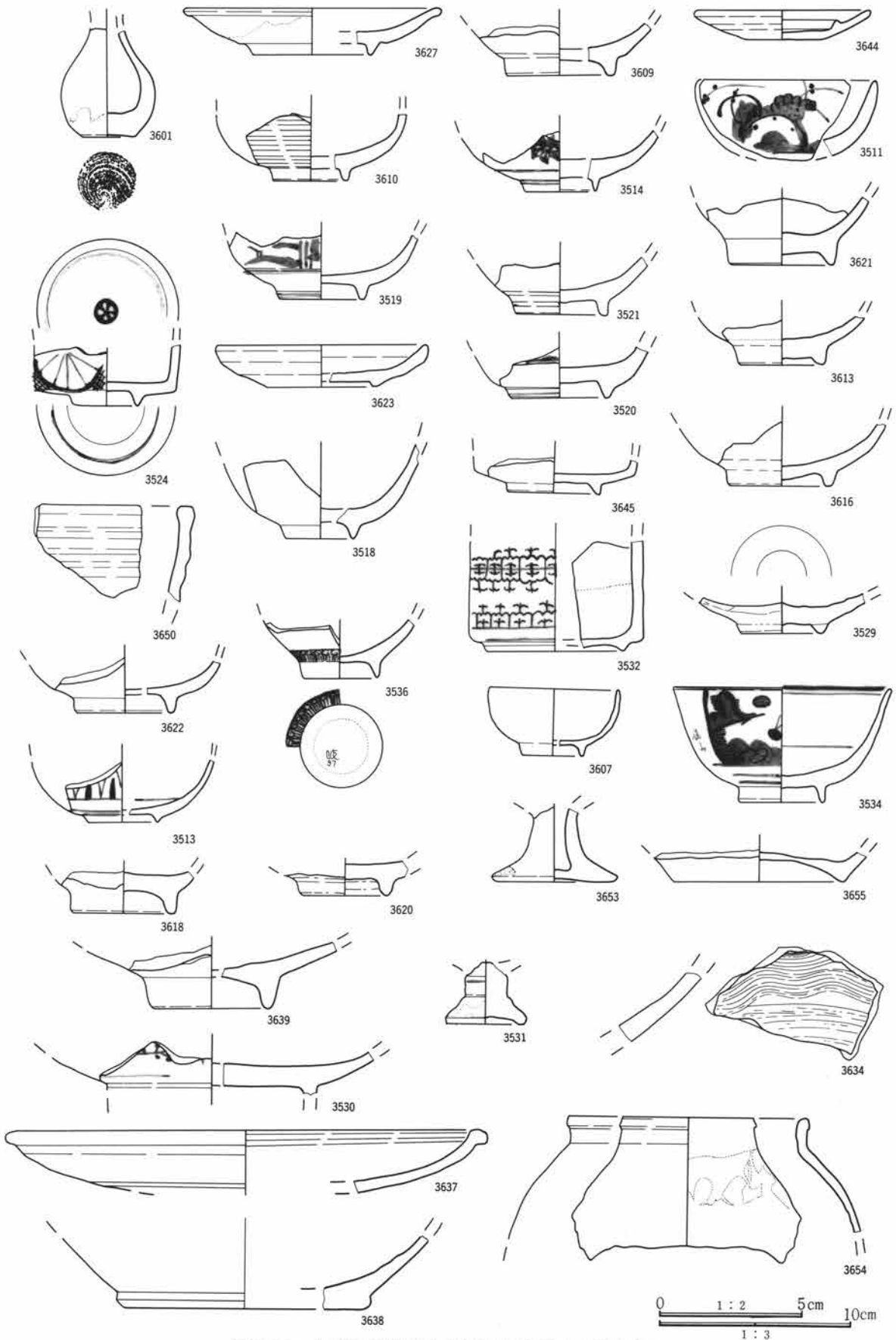
肥前系青磁は9点確認され、皿・碗・火入れが見られる。3510の青磁皿は、南池埋土3層上面で出土した。生産年代が1630～1640年代と特定できる優品である。近世陶磁器類のなかでは最も古い生産年代が与えられる。染付類は18点あり、白磁染付の丸碗が9点(3510～3518)で雪輪梅樹文・一重網文・人物文・コンニャク印判桐花文等が見られる。厚手染付山水文の丸碗が3点(3519～3521)、筒型碗は5点見られたが、3522・3525・3526は肥前系、3523・3524は瀬戸系である。皿形は4点あり、3点が染付で3527には内面に雪持笹文が見られ、3528は内面に蔓草文・蛇ノ目釉ハギ、3529もやはり蛇ノ目釉ハギで白磁かと思われる。この他に肥前系染付仏飯器(3531)、輪宝文火入れ(3532)等が見られ、近代に入る染付も確認されている。

時期的には、17世紀前～中の肥前系青磁、18世紀中～後の肥前系染付、18世紀後～19世紀初の肥前系・瀬戸系染付が見られ、明治期以降のものも認められた。



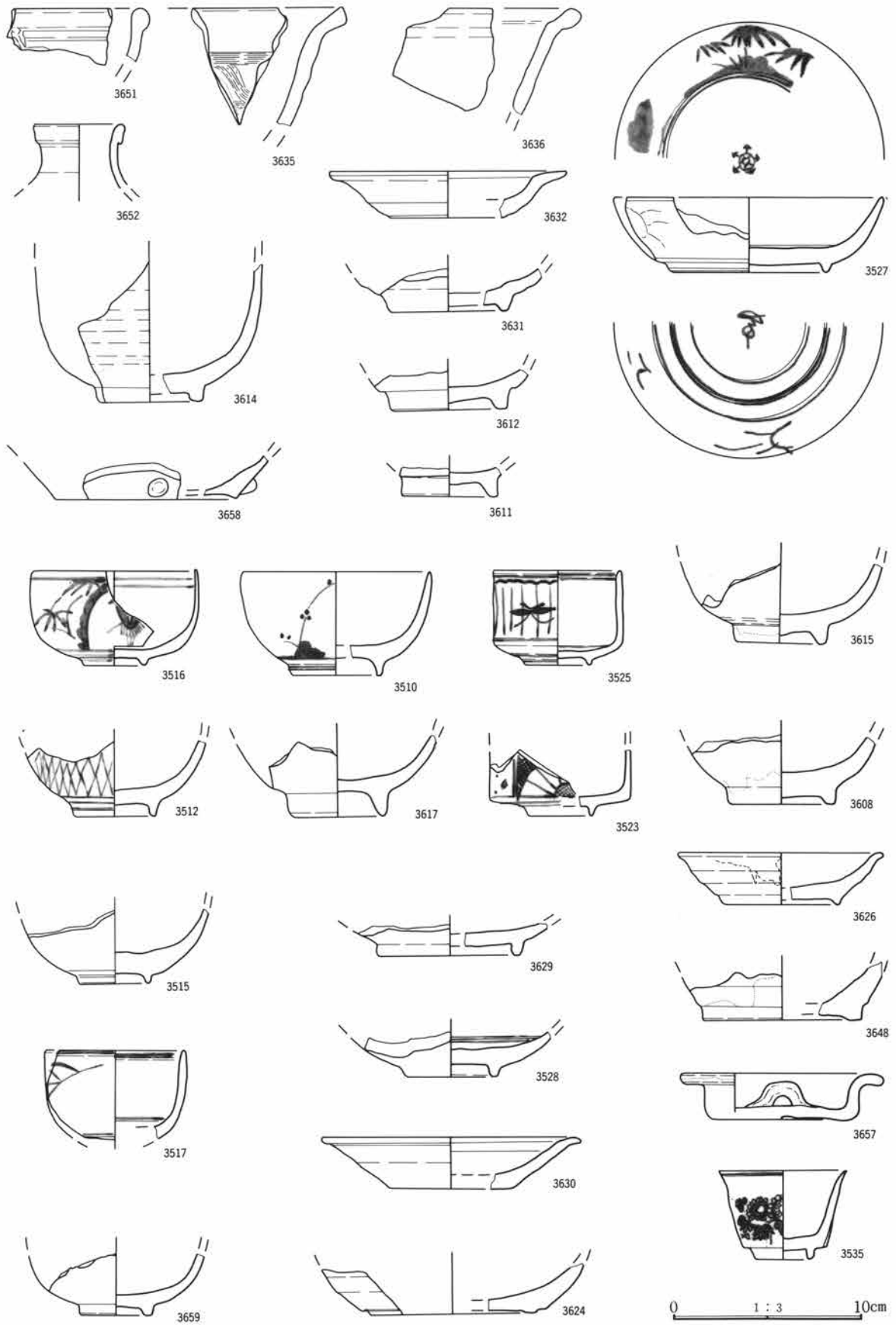
第149図 大御堂寺院址出土遺物実測図(8)―近世磁器―

第4節 寺院址出土遺物



第150図 大御堂寺院址出土遺物実測図(9)一近世磁器一

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物



第151図 大御堂寺院址出土遺物実測図(10)―近世陶器―

[近世国産磁器] 3601～3659

量的には瀬戸美濃系が多く肥前系6点、在地窯系4点、地方窯系6点のほかはすべて瀬戸美濃系と見られる。3601は黄瀬戸のミニチュア瓶子である。3602～3606は天目碗の小片、3607は灰釉の小碗である。3608～3616は瀬戸系褐釉の丸碗、3621は見込みに五弁花の呉須絵のある瀬戸系広東型碗である。3659の灰釉丸碗は下地に白化粧土が見られる。3617～3621は肥前系京焼風陶器の碗、3622・3634は唐津系灰釉刷毛塗りの碗・皿である。3623・3624は美濃の長石釉のかかった小皿で、3624には鉄絵が見られる。3625～3629は瀬戸系灰釉小皿で3626・3627には重ね焼きの痕が見られる。3630は瀬戸美濃系の小皿で鉄泥釉がかけられている。3631は瀬戸美濃系褐釉小皿で見込み蛇ノ目釉ハギ、3632・3635・3636は瀬戸系灰釉縁折れ皿、3637は瀬戸美濃系長石釉の皿で口唇部・外面に鉄釉の圏線が見られる。3638は平高台の皿で胎土がやや焼締めてあり、灰釉がかけられている。3639もほぼ同様の特徴の高高台の皿である。

摺鉢は4点あり、3640・3641は瀬戸美濃系、3642は堺系、3643は常滑系と推定される。3644は鉄釉の灯明皿、3645～3647は瀬戸系の香炉底部、3648・3649は瀬戸美濃系の鉢の底部と思われる。この他、脚・蓋・袋物等が見られたが、3653・3656～3658については在地窯（下仁田系）の可能性がある。また、3654は折り返し口縁の小壺の口～胴部片で、鉄泥釉がかけられている。

出土した陶器は時期的には17世紀代の瀬戸系の黒褐釉の天目碗・肥前系京焼風碗などが見られ、17世紀末～18世紀にかけての瀬戸系・瀬戸美濃系の碗・皿類、肥前系の唐津の刷毛塗り碗などが比較的多く出土し、また、18世紀代及び18世紀末～19世紀にかけてのものも見られるが、量的には18世紀後半より以前のものが多く思われる。

第13表 大御堂調査区出土遺物—輸入磁器—

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種・分類 残存状況	出土位置 出土地点 出土遺構	法量(μ)	①胎土 ②色調 ③文様			特徴	備考
3301 146 口絵カラー	磁器・白磁 碗 A類 体部小片	09南池西 Ba23g 7	①厚さ4～6mm	①密、灰白色(2.5Y) ③劃花文	②釉調：灰白色(5Y)		龍泉窯系 13c	
3302 146 口絵カラー	磁器・青白 合子 A類 蓋部小片	09南池西 Be21g28	①厚さ3mm	①密、灰白色(N) ③印花	②釉調：明緑灰色(10G)		龍泉窯系 13c	
3303 146 口絵カラー	磁器・青白 合子 A類 蓋部小片	15寺院西部 Bl20g	①厚さ2.5～5mm	①密、灰白色(N) ③不明	②釉調：明緑灰色(5Y)		龍泉窯系 13c	
3304 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 A類 体部小片	15寺院西部 Bl19g 3	①厚さ4～6mm	①やや密、灰白色(2.5Y) ③劃花文	②釉調：灰白色(5Y)		龍泉窯系 13c	
3305 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 B類 体部小片	01寺院東部 An18g 4	①厚さ6～8mm	①密、灰白色(N) ③劃花文	②釉調：緑灰色(10G)		龍泉窯系 13c	
3306 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 B類 体部小片	11寺院中央B Bh20g	①厚さ4～8mm	①やや密、灰色(10Y) ③素文	②釉調：緑灰色(7.5G)		龍泉窯系 13c	
3307 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 B類 体部小片	04北池東 Ar17g 1	①厚さ3～9mm	①密、灰色(10Y) ③劃花文	②釉調：緑灰色(7.5G)		龍泉窯系 13c	
3308 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 C類 体部小片	05北池 Ax15g	①厚さ4～5mm	①密、灰色(10Y) ③劃花文	②釉調：明オリーブ灰(5GY)		龍泉窯系 13c	
3309 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 C類 体部小片	05北池 Ax15g	①厚さ4～5mm	①密 ③劃花文	②釉調：緑灰色(5G)		龍泉窯系 13c	

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 種類・分類 残存状況	出土位置 出土地点 出土遺構	法量(mm)	①胎土 ②色調 ③文様	特徴	備考
3310 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 C類 体部小片	11寺院中央B Bh14g	①厚さ3～6mm	①密、灰色(N) ②釉調：緑灰色(5G) ③劃花文		龍泉窯系 13c
3311 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 C類 体部小片	11寺院中央B Bg22g	①厚さ4～5mm	①密、灰色(N) ②釉調：緑灰色(7.5G) ③素文		龍泉窯系 13c
3312 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 C類 口縁部小片	09南池西 Bb22g10	①厚さ4.5～6mm	①密、灰色(N) ②釉調：オリーブ灰(5GY) ③劃花文		龍泉窯系 13c
3313 146 口絵カラー	磁器・青磁 不明 C類 体部小片	11寺院中央B Bi19g10	①厚さ7～10mm	①密、灰色(N) ②釉調：緑灰色(5GY) ③劃花文		龍泉窯系 13c
3314 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 C類 体部小片	農道西 Bu19g表採	①厚さ4mm	①密、灰色(N) ②釉調：オリーブ灰色(5GY) ③劃花文		龍泉窯系 13c
3315 146 口絵カラー	磁器・青磁 鉢 D類 口縁部小片	02寺院北部A 北池	①厚さ5.5～7mm	①密、明緑灰色(7.5G) ②釉調：明緑灰色(10G) ③素文		龍泉窯系 13c
3316 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 D類 底部小片	02寺院北部A Au05g	①厚さ5mm	①密、明オリーブ灰(5GY) ②釉調：緑灰色(5G) ③不明		龍泉窯系 13c
3317 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 D類 体部小片	11寺院中央B Bi20g06	①厚さ2～4.5mm	①密、明緑灰色(7.5GY) ②釉調：緑灰色(5G) ③劃花文		龍泉窯系 13c
3318 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 D類 体部小片	09南池西 Bb21g	①厚さ6～9mm	①密、灰白色(N) ②釉調：明緑灰色(10G) ③素文		龍泉窯系 13c
3319 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 E類 体部小片	08南池 Ay18g	①厚さ4mm	①密、灰白色(7.5Y) ②釉調：オリーブ灰色(10Y) ③不明		龍泉窯系 13c
3320 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 E類 口縁部小片	14寺院北西B Bg09g21	①厚さ4～5mm	①密、緑灰色(10GY) ②釉調：緑灰色(7.5GY) ③蓮弁文		龍泉窯系 13c
3321 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 E類 体部小片	12寺院中央C Be13g	①厚さ4mm	①密、緑灰色(10GY) ②釉調：緑灰色(7.5GY) ③蓮弁文		龍泉窯系 13c
3322 146 口絵カラー	磁器・青磁 碗 E類 口縁部小片	11寺院中央C Bh13g	①厚さ4～5mm	①密、灰色(5Y) ②釉調：オリーブ黄色(5Y) ③蓮弁文		龍泉窯系 13c
3323 147 口絵カラー	磁器・白磁 碗 A類 体部～底部	C区 不明	①厚さ5～6mm	①密、にぶい橙色(10YR) ②釉調：灰白色(2.5Y)		龍泉窯系 13c
3324 147 口絵カラー	磁器・青磁 碗 B類 口縁部小片	C区 表採	①厚さ3～6mm	①密、明青灰色(5B) ②釉調：明緑灰色(10G) ③劃花文		龍泉窯系 13c
3325 147 口絵カラー	磁器・青磁 碗 C類 体部小片	C区 Ct23g	①厚さ4～8mm	①密、明青灰色(N) ②釉調：灰オリーブ(10Y) ③劃花文		龍泉窯系 13c
3326 147 口絵カラー	磁器・青磁 碗 C類 底部小片	C区 表採	①厚さ5～9mm	①密、灰色(一部淡黄)(5Y) ②釉調：灰オリーブ(10Y) ③劃花文		龍泉窯系 13c

第14表 大御堂寺院址出土遺物観察表 — 中世陶器 —

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径 ②器高 ③底径	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調)	特徴	備考
3401 92 69	陶器・焼締 小型壺 完形	11寺院中央B 1号配石墓		①紐作り ②ヘラ起し ③頸部短く直立、肩部に最大幅 ④精選・密(灰色) ⑤還元焰・焼締 ⑥肩部に灰釉刷毛塗り	肩部ひへら描文	渥美系 13c末～ 14c初
3402 148 口絵カラー	陶器・施釉 瓶子(梅瓶) 頸～底	08南池		①ロクロ成形 ②ヘラ起し ③肩部に丸味点腰締め ④精選・密 ⑤還元焰・良好 ⑥胎土灰白色 ⑦灰釉(明オリープ灰色)		古瀬戸 14c
3403 148 67	陶器・施釉 平碗 口縁部	11寺院中央B Bh20g 3	①180	①ロクロ成形 ②欠損 ③やや内湾気味 ④精選・やや密(灰色) ⑤還元焰・良好 ⑥灰釉(明オリープ灰色)		古瀬戸 14c
3404 148 67	陶器・施釉 平碗 口縁部	11寺院中央B Bh20g 4	①180	①ロクロ成形 ②欠損 ③やや内湾気味平碗 ④精選・やや密(灰色) ⑤還元焰・良好 ⑥灰釉(明オリープ灰色)		古瀬戸 14c
3405 148 口絵カラー	陶器・施釉 仏花瓶 %口～体下	05北池 Av13g Av12g		①ロクロ成形 ②高台部分欠 ③尊式仏花瓶に近い形状 ④精選・やや密(灰色) ⑤還元焰・良好 ⑥黒褐釉		古瀬戸 14c
3406 148 口絵カラー	陶器・無釉 鉢・片口 完形	01寺院東部 AD25g An12g AD4	①150 ②85 ③112	①紐作り ②欠損 ③窪底部の作りを特徴とする片口 ④精選 ⑤酸化・焼締・堅緻 ⑥肩部に自然釉、色調は茶褐色		常滑系 13c
3407 — 72	陶器・無釉 大甕 胴部	16寺院南西 Bm23g 土坑	器厚10～12	①紐作り ②3408か ③胴上半に張りを持つ ④精選・白色微粒子(淡褐色) ⑤酸化焰・焼締 ⑥肩部に自然釉、器表面は暗赤褐色		常滑系 13c
3408 — 72	陶器・無釉 大甕 底部	16寺院南西 Bl24g Pit 1	器厚 10～11	①紐作り ②平底 ④白色小砂粒を混じる ⑤酸化焰・焼締 ⑥器表面は暗赤褐色	割れ口にうるし付着(接合の痕跡か)	常滑系 13c
3409 — —	陶器・無釉 大甕 胴部片	16寺院南西	器厚 10～11	※3407・3408と同一の遺物と思われる		常滑系 13c
3410 148 71	陶器・焼締 大甕 口縁部	15寺院西部 Bl13g03	器厚16	①紐作り ②欠損 ③口縁部N字状折返し ④中粒砂、白色粒子、黒色粒子(灰色) ⑤還元焰・無釉焼締 ⑥表面黒褐色	N字状折返しは密着	常滑 14c
3411 148 67	陶器 大甕 口縁部片	03寺院北部 Ay07g05	器厚13	①紐作り ②欠損 ③口縁部N字状折返し ④細粒砂、白色粒 ⑤還元焰・焼締(灰色) ⑥口縁部外面に自然釉(緑色)、内面暗赤褐色		常滑系 13c
3412 148 67	陶器・焼締 大甕 口縁部	15寺院西部 Bk13g01	器厚 13～15	①紐作り ②欠損 ③口縁部T字状 ④細粒砂・精選、白色粒子多 ⑤還元焰・焼締 ⑥表面に自然釉(緑色)、内面暗赤褐色		常滑系 13c
3413 148 67	陶器・焼締 大甕 胴部小片	11寺院中央B Bk19g08	器厚9	①紐作り ③外面に叩き目 ④中粒砂・精選 ⑤還元焰(表面一部酸化焰)、堅緻な焼締 ⑥内面灰色、表面褐色		常滑系 13c
3414 148 67	陶器・焼締 大甕 胴部小片	11寺院中央B Bh14g08	器厚9	①紐作り ③外面に叩き目 ④中粒砂・精選 ⑤還元焰(表面一部酸化焰)、堅緻な焼締 ⑥内面灰色、表面褐色		常滑系 13c
3415 — 67	陶器・焼締 大甕 胴部	09南池西 Ba21g14	器厚 10～11	①紐作り ③外面に叩き目 ④中粒砂・精選 ⑤還元焰・堅緻な焼締 ⑥表面暗赤褐色、内面灰褐色		常滑系 13c
3416 148 —	陶器・無釉 大甕 胴部	01寺院東部 Am11g	器厚 10～11	①紐作り ③外面に叩き目 ④細粒砂、白色粒子 ⑤還元焰(一部酸化)、やや軟質焼成 ⑥内面淡褐色、外面灰色	内面にうるしの付着あり	常滑系 13c
3417 148 —	陶器・施釉 碗 天目 —	寺院北部 Aj 8g		①ロクロ成形 ②欠損 ③体部やや内湾、口縁部短く外反 ④精選(灰色) ⑤還元焰 ⑥黒褐釉		瀬戸系 15c～16c
3418 148 67	陶器・無釉 皿 小形 口～底部	11寺院中央B Bh21g01		①ロクロ成形 ②回転糸切り ③口縁部は浅く外反 ④精選・均質(灰色) ⑤還元焰		美濃・山 皿 13c
3419 — —	陶器 鉢 口縁部	11寺院中央B Bh15g22	④6～8	①ロクロ成形 ②欠損 ③口端部丸縁 ④精選・白色微粒子 ⑤還元焰、焼締 ⑥灰色、口唇部にうすく自然釉		

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径 ②器高 ③底径	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調)	特徴	備考
3420 — 71	陶器・焼締鉢 口縁部	15寺院西部 B m・B n 2 2 g01	④9~11	①紐作り ②欠損 ③口端部平縁 ④精選・白色微粒子 ⑤酸化焰・焼締 ⑥表面淡橙色、断面灰褐色		常滑系
3421 — —	陶器鉢 体部下半	13寺院北西A Be08g31	④10~16	①紐作り ②欠損 ④精選 ⑤還元焰、焼締(妬器質) ⑥灰色	内面の磨滅が著しい	在地系か

第15表 大御堂寺院址出土遺物観察表 一近世磁器一

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調) ⑦染付(文様・具須) ⑧他	特徴	備考 (産地、時期等)
3501 149 74	磁器・青磁皿 体下半小片	08南池 At19 g 22	器厚 6~15	②欠損 ③大型の皿か ④精選・密(灰白色N) ⑤良好 ⑥明緑灰色(5G)、やや厚く細かな気泡	胎土が精緻で釉調が厚い	肥前系有田 1630~1650
3502 149 74	磁器・青磁皿 底部小片	11寺院中央B Bh19 g 02	器厚 8~9	②高台畳付無釉 ④精選・密(灰白色N) ⑤良好 ⑥オリブ灰色(10Y)		肥前系 1630~1640
3503 149 74	磁器・青磁皿 口縁部小片	11寺院中央B Bh18 g	器厚 4	②欠損 ③口縁部は外反、口唇部は玉縁状 ④精選・密(灰白色10Y) ⑤良好 ⑥明緑灰色(10GY)、内面に蓮弁		肥前系 1630~1640
3505 149 74	磁器・青磁碗 体部小片	08南池 Aw22 g 03	器厚 4~7	②欠損 ④精選・密(灰白色10Y) ⑤良好 ⑥明緑灰色(10GY)、発色にややむらあり		肥前系 17c
3506 149 74	磁器・青磁碗 体部~底部	12寺院中央C Be13 g	器厚 5~7	②高台無釉 ④精選・密(灰白色10Y) ⑤良好 ⑥明緑灰色(10GY)		
3507 149 74	磁器・青白碗 体部小片	16寺院南西 Bg25 g	器厚 3~6	④精選・密(灰白色10Y) ⑤良好 ⑥明緑灰色(10GY)		肥前系 17c代
3508 149 74	磁器・青磁香炉 底部小片	13寺院北西A Bf10 g 233		②凹形高台、高台裏無釉・鉄錆 ④精選・密(灰白色10Y) ⑤良好 ⑥明緑灰色(10GY) ③内面無釉鉄備(黄橙色)		肥前系 17c後~18c前
3509 149 74	磁器・青白碗 口縁部	11寺院中央B Bg22 g		②欠損 ④精選・密(灰白色10Y) ⑤良好 ⑥外面の発色良好、明緑灰色(10GY)		肥前系 18c代
3510 151 73	磁器・染付丸碗 口~底部迄	08南池 At19 g 06	① 50 ② 54 ③ 25	②高台畳付無釉 ④精選・密(灰白色) ⑤良好 ⑥灰白色~明緑灰色 ⑦雪輪梅樹文 ⑧やや淡い青色に発色		肥前系 18c中~後
3511 150 73	磁器・染付丸碗 口縁部	05北池 Au13 g	① 48	②欠損 ④精選・密(灰白色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦雪輪梅樹文 ⑧濃(くすんだ青)淡(あわい青色)		肥前系 18c後半
3512 151 73	磁器・染付丸碗 体部~底部	08南池 Au21 g 11	③ 22	②高台畳付無釉 ④精選・密(灰白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色 ⑦外面に一重網文 ⑧暗青灰色に発色		肥前系 18c中~後
3513 150 —	磁器・染付丸碗 底部	An13 g AD 3・5	②(32) ③ 38	②高台畳付無釉 ④精選・密(灰白色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦草花文 ⑧やや濃い青色に発色		肥前系 18c末~ 1810
3514 150 73	磁器・染付丸碗 体部~底部	05北池	② 32 ③17.5	②高台畳付無釉 ④精選・密(白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色~灰白色 ⑦体部外面コンニャク印判菊花文 ⑧やや淡い青色		肥前系 18c中頃
3515 151 —	磁器・染付丸碗 体部~底部	08南池 At18 g	②(37) ③(56)	②高台畳付無釉 ③見込蛇ノ目軸ハギ ④精選・密(灰白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色 ⑦草花文 ⑧鮮かな青色		肥前系 18c後半
3516 151 73	磁器・染付丸碗 口縁~底部	08南池 At19 g 01	① 86 ② 49 ③ 34	③高台畳付無釉、高台際圏線 ④精緻・密(白色) ⑦人物文、見込み五弁花、口縁・底圏線 ⑧良好に発色		肥前系 18c末~ 1810年代

第4節 寺院址出土遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種 別 器 種 残存状況	出 土 位 置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調)⑦染付(文様・具須) ⑧他	特 徴	備 考 (産地、時期等)
3517 151 —	磁器・染付 丸碗 口～胴	09南池西 Ba23 g 06	①(72) ②(47)	②欠損 ④精選・密 ⑤良好 ⑥明緑灰色～灰白色 ⑦草花文 ⑧やや良好に発色		肥前系 18c末～ 1810年代
3518 150 —	磁器・染付 丸碗 体部～底部	01寺院東部 An12 g 第16号溝-25		②高台壘付無釉 ④精選・密(灰色) ⑤良好 ⑥明青灰色～灰白色 ⑦草花文 ⑧ややくすんだ緑青色		肥前系 18c
3519 150 74	陶器・染付 丸碗 底部	12寺院中央C フク土		②高台壘付無釉(赤灰色) ③厚手染付碗 ④精選・密(灰色) ⑤良好 ⑥明青灰色 ⑦山水文 ⑧具須は鈍い青色		肥前系 18c代
3520 150 74	陶器・染付 丸碗 底部	05北池 Aw14 g フク土	② 31 ③ 23	②高台壘付無釉(暗褐色) ④精選・密(灰色) ⑤良好 ⑥釉調緑灰色 ⑦山水文 ⑧くすんだ青色	厚手染付碗	18c
3521 150 74	陶器・染付 丸碗 底部	05北池 埋土		②高台壘付無釉 ③厚手染付丸碗 ④精選・密(赤灰色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦山水文 ⑧にぶい青色に発色		18c
3522 — —	磁器 筒形碗 口縁部	05北池 Au14 g 16		②欠損 ④精選・密(灰白色) ⑦菊花文、口縁部下手描き菱形文 ⑧良好な発色		肥前系 18c末～ 1810年代
3523 151 73	陶器・染付 筒形碗 底部	08南池 Aw19 g	① 74 ② 34 ③ 32	②高台壘付無釉 ④精選やや密 ⑥灰白色 ⑦菊花ちらし文、見込み五弁花コンニャク印判 ⑧具須はくすんだ青色		瀬戸系 18c末 ～19c初
3524 150 73	陶器・染付 筒形碗 底部	12寺院中央C Bd13 g 30	② 32 ③ 32	④灰白色 ⑥明青灰色 ⑦菊花ちらし文、見込み五弁花コンニャク印判		瀬戸系 18c末 ～19c初
3525 151 73	磁器・染付 筒形碗 底部	08南池 Au20 g 03	①(68) ②(49) ③(36)	④密(灰白色)⑥明青灰色 ⑦体部外面網文、見込み五弁花手描き		肥前系 18c末 ～1810年代
3526 — —	磁器・染付 筒形碗 底部小片	10寺院中央A Be15 g 4	② 13 ③ 45	②高台壘付無釉 ④精選・密 ⑥くすんだ青色 ⑦見込み五弁花	「渦福」	肥前系 18c～ 1810年代
3527 151 74	磁器・染付 皿形 口～底迄	12寺院中央C Bd13 g 20	①140 ② 39 ③ 82	④灰白色 ⑤良好 ⑦具須はややくすんだ青、体部内面雪持笹文、見込み五弁花コンニャク印判	「渦福」	肥前系 18c中～後
3528 151 73	磁器・染付 皿形 底部	08南池 Au20 g	② 20 ③ 24	②高台壘付無釉 ③見込み蛇ノ目釉ハギ ④精緻・密 ⑤良好 ⑦具須は暗青灰色、体部内面つる草文		肥前系 18c後半
3529 150 74	磁器・白磁 皿形 底部	05北池 Av14 g 02	② 20 ③ 44	②高台裏明赤褐色、高台裏・高台壘付無釉 ④灰白色、密、精選、賢緻 ⑥灰白色 ⑦見込み蛇ノ目釉ハギ		肥前系 18c末 ～19C
3530 150 —	磁器・染付 大皿 底部	01寺院東部 An11 g AD 1-48	②(24)	②高台壘付無釉 ④密(灰白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色～灰白色 ⑦草花文 ⑧具須の発色は良好		肥前系 18c 中～後 半
3531 150 74	磁器・染付 仏飯器 脚～底部	05北池 埋土	② 32 ③ 42	③仏飯具脚台 ④密、精選(灰白色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦脚部に圏線 ⑧具須は淡い水色系		肥前系 18c代
3532 150 74	磁器・染付 火入れ 底部	05北池 埋土	②(59) ③(74)	④密、白色 ⑤良好 ⑦輪宝文、内面下半無釉		肥前系 18c末～ 1810年
3533 — —	磁器・染付 急須 胴部	12寺院中央C Bd11 g 01・02	①114 ② 61 ③ 45	④白色、やや密 ⑤良好 ⑥白磁釉(やや緑がかり不透明) ⑦山水文 ⑧具須は淡く発色		
3534 150 73	磁器・染付 丸碗 口～底部迄	05北池 Av13 g 10	①(112) ② 54 ③ 45	②高台壘付無釉 ④密(白色) ⑤良好 ⑦山水文、具須は淡い水色でややボンヤリした感じ		瀬戸系 1820 ～1860年
3535 151 74	磁器・染付 碗 口～底部迄	08南池 An19 g 02	① 34 ② 46 ③ 16	④密、淡黄気味の灰白色 ⑤良好 ⑥やや黄色味のある白色 ⑦端反り碗、型純摺、具須は暗青灰色	体下半六角面 取	明治後半 ～大正

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調)⑦染付(文様・具須) ⑧他	特徴	備考 (産地、時期等)
3536 150 74	磁器・染付 飯茶碗 底部	01寺院東部 An13 g AD 3-8	③ 38	④密(白色) ⑦無文、銅判印刷、統制品	統制番号「岐97」	瀬戸美濃系 20c(昭和)

第16表 大御堂寺院址出土遺物観察表—近世陶器—

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調)⑦染付(文様・具須) ⑧他	特徴	備考 (産地、時期等)
3601 150 72	施釉陶器 ミニチュア 瓶子 頸部 ~底部	12寺院中央C Bc11 g 25	② (38) ③ 10	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③ミニチュア 瓶子 ④精選やや密(灰白色) ⑤やや還元 焰・良好 ⑥黄瀬戸釉(オリーブ褐色)		瀬戸系 17c
3607 150 72	施釉陶器 小碗 口~底部	05北池 Av14 g 45	①(33) ② 35 ③(17)	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選やや密 (淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(灰オ リーブ色)		瀬戸美濃系 17c後~ 18c
3608 151 73	施釉陶器 丸碗 体~底部	08南池 埋土	②(36) ③(56)	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選・密(灰 白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥黒褐釉		瀬戸系 18c
3609 150 73	施釉陶器 丸碗 体~底部	05北池 埋土1層	② 27 ③(61)	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ④精選・密 (灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(暗オ リーブ褐色)		瀬戸系 18c
3610 150 —	施釉陶器 碗 体~底部	12寺院中央C Bd13 g 18 Bd14 g	② 34 ③ 36	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ④精選・や や密(にぶい黄橙色) ⑤酸化焰・ふつう ⑥ 内面灰釉、外面褐釉(暗褐色)		瀬戸系 18c
3611 151 —	施釉陶器 碗 底部	08南池 Aw21 g 01	②(15) ③ 50	①ロクロ成形 ②高台裏無釉 ④精選・密(褐 灰色) ⑤酸化焰・堅緻 ⑥内面黒褐釉		瀬戸系 18c
3612 151 —	施釉陶器 丸碗 体~底部	11寺院中央B Bh21 g 01	②(20) ③ 58	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ④精選・密 (灰白色) ⑤堅緻やや焼締気味 ⑥黒褐釉		17c~18c
3613 150 73	施釉陶器 丸碗 体~底部	05北池 Au14 g 16	②(22) ③ 44	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選・密(淡 黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(オリーブ 褐色)		瀬戸美濃系 17c~18c
3614 151 73	施釉陶器 丸碗 体~底部	11寺院中央B Bh14 g 07	③ 29	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選・密(淡 黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(オリーブ 褐色)		瀬戸美濃系
3615 151 73	施釉陶器 丸碗 体~底部	08南池 Aw20 g 03	②(42) ③(46)	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選・やや密 (淡黄色) ⑤酸化焰・良好 ⑥褐釉(黄褐 色)、釉表面が劣化による白濁		瀬戸系 18c
3616 150 73	施釉陶器 丸碗 体~底部	05北池 埋土	② 33 ③ 27	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選・やや密 (灰白色) ⑤酸化焰、ふつう ⑥褐釉(か なり白濁、にぶい黄色)		瀬戸(尾呂) 18c
3617 151 —	施釉陶器 碗 丸碗 体~底部	08南池 Av12 g 2 Av13 g 13・19	② 42 ③ 46	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ④精選・密 (淡黄色) ⑤酸化焰・良好 ⑥黄瀬戸釉(浅 黄色)	京焼風	瀬戸系 173後半 ~18c前半
3618 150 —	施釉陶器 丸碗 底部	01寺院東部 An11 g AD 1-48	②(22) ③ 54	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ④精選・密 (灰白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥黄瀬戸釉(オ リーブ黄色)	京焼風	瀬戸美濃系 17c後半 ~18c前半
3620 150 —	施釉陶器 丸碗 底部	04北池東 Ar13 g	②(18) ③25.5	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ④精選・密 (淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥黄瀬戸釉(明 黄褐色)	京焼風	瀬戸美濃系 17c後 ~18c前
3621 150 73	施釉陶器 広東型碗 底部	05北池 Aw21 g 3層	② 35 ③ 55	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ④精選・や や密(淡黄色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉(灰 白色) ⑦具須は淡い青色に発色	見込み、五弁 花、具須絵	瀬戸美濃系 18c~19c前
3622 150 —	施釉陶器 丸碗 体~底部	01寺院東部 Ao08 g AD 3-77	②(22) ③ 32	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ④精選・密 (暗赤灰色) ⑤酸化焰、堅緻 ⑥灰釉刷毛 塗り		肥前系唐津 17c後半 ~18c前半

第4節 寺院址出土遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調)⑦染付(文様・具須) ⑧他	特 徴	備 考 (産地、時期等)
3623 150 73	施釉陶器 小皿 口～底部	03寺院北部B Aw6 g 01	① 54 ② 27 ③ 29	①ロクロ成形 ②高台裏・施釉 ④精選・やや密(淡黄色～灰白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥長石釉(乳白色)		瀬戸美濃系(志野) 17c前半
3624 151 73	施釉陶器 皿 体～底部	09南池西 Ba22 g 17	② 25 ③ 86	①ロクロ成形 ②高台無釉 ③見込鉄絵 ④精選・やや密(灰白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥長石釉(乳白色) 鉄絵、草花文		瀬戸美濃系(志野) 17c前半
3625 — —	施釉陶器 小皿 口～底部片	09南池西 Bb21 g		①ロクロ成形 ②欠損 ③口縁部外反 ④精選・密(灰白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉(灰白色)		瀬戸美濃系 17c
3626 151 73	施釉陶器 皿 口～底部	08南池 Ax25 g	①106 ②127 ③ 60	①ロクロ成形 ②高台無釉 ③口縁部外反、重ね焼痕 ④精選・密(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(灰オリブ色)		瀬戸系 17c
3627 150 73	施釉陶器 小皿 口～底部	12寺院中央C	① 13 ② 24 ③ 62	①ロクロ成形 ②高台無釉 ③口縁部外反、重ね焼痕 ④精選・密(灰白色～浅黄色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉(オリブ黄色)		瀬戸系 17c～18c
3629 151 —	施釉陶器 小皿 底部	08南池 Au21 g 05	③(38)	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選・密(灰白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉(灰黄色)		瀬戸美濃系 17c
3630 151 73	施釉陶器 小皿 口～底部	09南池西 Ba22 g	①(106) ② 27 ③(66)	①ロクロ成形 ②糸切り底 ③縁折れ皿 ④精選・密(にぶい褐色) ⑤酸化焰・良好 ⑥鉄釉ハケ塗(明褐色)		在地系 17c
3631 151 —	施釉陶器 皿 底部	15寺院西部 Be20 g	②(17) ③ 62	①ロクロ成形 ②高台無釉 ③見込、蛇ノ目釉ハギ ④精選・やや密(淡黄色) ⑤酸化焰・良好 ⑥内面に褐釉(黒褐色)		瀬戸美濃系 18c
3632 151 —	施釉陶器 皿 口～底部	15寺院西部 Bm19 g	①(124) ② 24 ③(60)	①ロクロ成形 ②欠損 ③縁折れ皿 ④精選・やや密 ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉(乳白色)		瀬戸美濃系 17c
3634 150 73	施釉陶器 — —	05北池 Aw14 g		①ロクロ成形 ②欠損 ④精選・密(褐灰色～にぶい褐色) ⑤酸化焰・焼締(堅緻) ⑥内面に灰釉刷毛塗		肥前系唐津 17c後半 ～18c
3635 151 —	施釉陶器 皿 口縁部	15寺院西部 B119 g		①ロクロ成形 ②欠損 ③縁折小皿 ④精選・やや密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(淡黄色)		瀬戸美濃系 18c
3636 151 —	施釉陶器 かめ 口縁部片	16寺院南西 Bm24 g 01		①ロクロ成形 ②欠損 ③縁折れ皿 ④精選・密(淡黄色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉(淡黄色)		瀬戸美濃系 18c
3637 150 —	施釉陶器 皿 口～体部片	04北池東	①(244) ②(33)	①ロクロ成形 ②欠損 ③口唇部短く外反 ④精選・やや密(淡黄色) ⑤酸化焰・良好 ⑥長石釉(乳白色)、口縁部鉄釉で縁とり		瀬戸美濃系 19c
3638 150 —	施釉陶器 鉢 底部	01寺院東部	③170	①ロクロ成形 ②平底 ③大型盤か ④精緻(灰色) ⑤酸化焰・焼締(堅緻) ⑥灰釉(灰オリブ色)		
3639 150 —	施釉陶器 皿 体～底部	01寺院東部	②(35) ③ 62	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ③高高台 ④精選・密(淡黄色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉(灰オリブ色)		瀬戸系
3640 145 72	施釉陶器 摺鉢 口縁部	12寺院中央C Bc10 g 03	①350 摺目条 9条以上	①ロクロ成形 ②欠損 ③縁帯やや肥厚 ④精選・やや密(浅黄色) ⑤酸化焰・良好 ⑥褐釉(褐色)		瀬戸美濃系 18c～19c
3641 145 —	陶器 摺鉢 底部	01寺院東部	摺目条 不明 ①(18)	①ロクロ成形 ②回転糸切り ④精選・やや密(淡黄色) ⑤酸化焰・良好 ⑥鉄釉(褐色)		瀬戸美濃系
3642 145 —	陶器 摺鉢 体部	01寺院東部	摺目条 ②(46) 9条 摺目巾34mm	①ロクロ成形 ④精選・やや密、白色砂粒 ⑤酸化焰・焼締 ⑥赤褐色		関西系 18c
3643 145 —	陶器 摺鉢 小片	01寺院東部	②(26)	①ロクロ成形 ②欠損 ④精選・密(赤褐色) ⑤酸化焰、焼締 ⑥赤褐色		18c

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(㎜) ②器高(㎜) ③底径(㎜)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調)⑦染付(文様・具須) ⑧他	特徴	備考 (産地、時期等)
3644 150 72	施釉陶器 灯明皿 口～底部	05北池 Aw15g	① 45 ② 16 ③ 25	①ロクロ成形 ②平底 ③油受け皿 ④精選・密(灰色) ⑤酸化焰・焼締 ⑥鉄釉(暗褐色)		18c
3645 150 73	施釉陶器 香炉 底部	05北池 Aw15g	②(18) ③ 24	①ロクロ成形 ②高台無釉 ③筒形、体部外面に施釉 ④精選・やや密(淡黄色～灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(灰白色)		瀬戸系 18c
3646 145 73	施釉陶器 鉢 底部	05北池 フク土	② 37 ③ 75	①ロクロ成形 ②平底 ③筒形の形状、体下半部 ④精選・密(淡黄色) ⑤酸化焰・堅緻 ⑥体部外面に鉄釉(黒褐色)		18c
3648 151 —	施釉陶器 鉢又は大甕 底部	08南池 Aw18g	②(39) ③(84)	①ロクロ成形 ②高台裏無釉 ④精選、やや密(浅黄色) ⑤酸化焰・良好 ⑥褐釉(オリーブ褐色)		瀬戸美濃系 18c
3650 150 —	施釉陶器 鉢 口縁部	01寺院東部 Am～Ao05g		①ロクロ成形 ②欠損 ③口縁外面に凹縁 ④精選、密(灰色) ⑤酸化焰・良好 ⑥褐釉(オリーブ褐色)		瀬戸美濃系
3651 151 —	施釉陶器 口縁部片	10寺院中央A Bc17g05	②28	①ロクロ成形 ②欠損 ③玉縁状折り返し口縁 ④精選・密(にぶい赤褐色～灰褐色) ⑤酸化焰・良好 ⑥褐釉(黒褐色)		
3652 151 —	施釉陶器 口～頸部	10寺院中央A Bc17g05	① 46 ②(32)	①ロクロ成形 ②欠損 ③折り返し口縁、縁帯はやや幅広 ④精選・密(灰白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉(オリーブ灰色)		瀬戸美濃系 19c
3653 150 73	施釉陶器 脚部	05北池 Aw17g05	②(39) ③ 62	①ロクロ成形 ②平・回転糸切り ③脚部 ④精選・密(灰色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉(オリーブ灰色)、底面無釉(にぶい橙色)		瀬戸系 18c～19c
3654 150 72	施釉陶器 口～体部	05北池		①ロクロ成形 ②欠損 ③口縁部、玉縁状折返し ④精選・密(淡黄色) ⑤酸化焰、やや堅緻 ⑥鉄釉(褐灰色)	時期等については不詳、北池底面より出土	
3655 150 73	施釉陶器 皿 底部	05北池 Av14g10	②(16) ③ 90	①ロクロ成形 ②凹形の高台 ④精選・密(灰白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥内面に灰釉		
3657 151 73	施釉陶器 蓋 完形	08南池 Au18g03	① 53 ② 24 ③ 36	①ロクロ成形 ③紐状つまみ ④精選・密(灰白色) ⑤酸化焰、やや焼締 ⑥表面褐釉(オリーブ褐色)		在地系(下仁田焼)
3658 151 —	施釉陶器 底部片	10寺院中央C Bg22g	①123 ② 23 ③ 95	①ロクロ成形 ②平底 ④精選、やや砂粒が多い(にぶい青褐色) ⑤酸化焰・焼締 ⑥内面に褐釉(黒褐色)		在地系(下仁田焼)
3659 151 73	陶器 丸碗 体～底部	09南池西	②(32) ③ 38	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選・密(灰色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉(明緑灰色)		瀬戸系 18C

5 瓦 類

出土した瓦類は遺物収納箱（コンテナバット）にして約50個あり、総重量では約275kgであった。これらは大御堂調査区の寺院址区域に集中する。出土した瓦はかなり破損しており、完形のものは殆ど見られなかった。出土瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦・鬼瓦等の器種に分けられ、胎土・焼成・色調等からA類・B類に大別される。A類として分類したものは赤褐色の色調を呈し、胎土が比較的緻密で良好な酸化焰焼成のものであり、厚手のものである。これに対し、B類としたものは灰色の色調を呈す還元焰焼成のもので、A類に比べて胎土はやや粗く砂粒が目立ち、厚さはやや薄くなっている。また、A類・B類ともに胎土中の夾雑物・混和材の有無と焼成条件の差異による細分が可能である。

瓦類の出土域は、大御堂調査区A・B区の寺院址遺構内であり、A・B類ともに中世の寺院址遺構に伴う遺物と考えられる。なお、近世以降の瓦類もごく少量であるが出土している。形状がわかるのは北池から出土した棧瓦の瓦当片（3001）が1点のみであり、この他はA区で検出された近世～現代の馬入れ（道路）に敷かれていたもののみである。特に集中して出土した区域は南池西と北西部の一角であるが、廃棄時の原位置を留めるものはほとんど見られず、二次的・三次的な廃棄の結果と見られる出土状況である。

寺院址から出土した瓦は、A類・B類に大別したうえで器種別に分類し報告遺物を抽出した。軒丸瓦・軒平瓦については瓦当文様が確認できるものすべてを取り上げ、鬼瓦も同様に取り扱った。丸瓦・平瓦については側縁部が確認でき、瓦の成形・調整技法の観察が可能なものを選択することとし、その割合は重量比で出土総量の約25%にあたる172点である。

瓦当文様はA類2型式4種・B類2型式3種が見られ、4型式の組み合わせに分類できる。また、胎土・焼成・色調等からはさらに数種に細分が可能であるが、瓦当から見た前述の4型式の分類が基本的な組み合わせとしてあり、細分された瓦もいずれかの型式に属すものと考えられる。

以下、種別・器種別に述べる。

〈瓦A類〉

酸化焰焼成で赤褐色～浅黄橙色の色調を呈し、表面が黒色若しくは黒灰色に燻がかかるものも見られる。胎土は比較的緻密なものやや粗いものが見られる。夾雑物には赤褐色粗粒子・白色粒子・白色微粒子・黒色微粒子等が見られ、これらの混入状況には差異が認められる。軒丸瓦・軒平瓦は瓦当文様から、平瓦・丸瓦は胎土・焼成・色調等から細分した。

〔瓦A類・軒丸瓦〕4001～4008

確認数量は8点で、重量比では全体の0.7%である。範種は“複弁蓮華文”と“巴文”が見られ、それぞれ4点ずつ出土している。

複弁蓮華文は、4001で瓦当直径140mm、周縁部幅16mm、周縁部高10mm、瓦当側面厚35mmが計測される。他の3点（4002・4003・4008）は小片で計測は難しいが4001と同範と見られる。胎土は小砂粒・黒色鉱物粒子がやや多く含まれ若干粗い感じの粘土を使用している。焼成は酸化焰で、器表面は黒色、断面は鈍い赤褐色を呈す。いずれも瓦当部の破片で全長は不明である。複弁蓮華文軒丸瓦の瓦当部は、内区径72mmの中に8葉の複弁蓮華文が配され、中房は径35mmで蓮子は見られず「卍」のくずれと見られる「十」が見られる。外区は径82～94mm（幅12mm）の中に12個の連珠が配される。瓦当裏面の接合粘土はやや厚く、指頭若しくは掌で押圧を施したままの調整であり、顎の縁辺は丸味を持つ。

巴文軒丸瓦（4004～4007）は、内区に巴文（左回り）を配し、巴の頭は互いにつかず、尾は圏線につく。

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

外区に連珠文を配した意匠と推定される。瓦当部径は推定130mm、周縁部幅10mm、周縁部高10mm、内区径は約62mm、外区径96mmである。外区は幅14mmの中に推定16個の連珠を配し、外区圏線は見られない。瓦当側面高は約25mmと推定される。この4点の胎土は粒子の細かい粘土が精選され、良好な酸化焰焼成である。胎土中に赤褐色粗粒子が見られ、白色粒子・微粒雲母等も含まれている。色調は橙色系であるが、4007では表面が褐灰色を呈し、断面でも灰褐色を示すことから、燻がかけられたものと推定される。複弁蓮華文軒丸瓦に比べ、胎土は緻密で精選されており、色調もやや明るい感じであり、瓦当側面高がやや薄くなる。瓦当裏面は平坦に撫で調整が加えられやや薄い仕上がりで、顎は角張る。

4007は瓦当部が欠損しているが、外区の連珠文が認められ、圏線は見られないことから内区は巴文と思われる。丸瓦部の凹面には布目痕が見られ、4cm²の範囲では縦糸・横糸が15～23本と比較的細かい。表面はきれいにナデ調整され、胴部凹面側縁には幅10～12mmの面取りが見られる。

[瓦A類・軒平瓦] 4101～4111

出土したすべてを掲載し、総量は11点である。範種は“連珠文”と“均正唐草文”の2種で、成形技法・胎土等からも差異が認められる。

連珠文軒丸瓦は4点(4101～4104)出土している。いずれも張り付け顎であるが、4101・4102には瓦当部でも接合痕が認められ、4103・4104には瓦当面に粘土貼付が施されていることが断面で観察される。珠文は4103が径9mmとやや小粒であるが、他の3点は径12mmとやや大きく若干の差異が認められる。瓦当文様を区画する方形の圏線は4点とも認められるが、4101・4102が上下幅26mmに対し、4103・4104が22mmとやや狭くなっている。この差異は顎下の平坦部幅にも見られ、前者は20mm程度であるのに対し、後者は35mm前後に幅広となる。また、張り付け顎はきれいにナデ調整されている。平瓦部の厚さは16mm程度である。

均正唐草文軒平瓦は7点(4105～4111)確認された。連珠文軒平瓦が比較的精緻な作りであるのに対し、やや大振りで重量感のある作りとなっている。顎は平瓦部からの折り曲げ形式で、瓦当文様は中心飾りを宝相華とする左右それぞれ3反転する均正唐草文である。内区・外区を区別する圏線は見られず、かなり簡略化した形式と考えられる。平瓦部の厚さは22mm前後で、瓦当文様から推定する瓦幅は約240mmで、長さは不明である。胎土には小砂粒、黒色鉱物粒子、微粒雲母をやや多く含み、やや粗い感じの粘土である。焼成はいずれも酸化焰であるが、表面は褐灰色を呈し、燻をかけたものと考えられる。断面は鈍い赤褐色を呈す。

4105では顎の裏面に粘土をやや厚く張り付け、平瓦部との接合面がきれいに撫で調整され、顎張り付け形式のものに近い側面観の印象である。4111も同様の特徴を持つと思われる。他のものは折り曲げ顎の接合部に篋状工具によるナデ調整が施され、側面観は直角に近い形状を示す。顎下端部の調整も前2点が他のものよりやや精緻になされている。平瓦部凹面には布目痕が見られる。4cm²の範囲では縦糸・横糸が約19本と比較的細かい。

[瓦A類・丸瓦] 4202～4212

出土量はあまり多いとは言えず、全長若しくは全幅の復元されるものは見られない。胎土は密→粗、色調は明→暗を基本としてA₁類～A₅類まで5種に細分した。

A₁類(4210・4212)は、胎土には精選され粒子の細かい粘土を使用し、胎土中に赤褐色粗粒子、白色粒子が見られる。厚さは12mm～13mmで、焼成は良好な酸化焰で断面では明褐色ないし橙色を呈し、表面は燻がかけられたため黒褐色を呈す。凹面には比較的細かい布目痕が見られ、凸面には縄叩きが認められる。

A₂類(4202・4211)、厚さは16mmとやや厚くなる。瓦の表面は橙色ないし明赤褐色を呈し、断面では灰青色であることから、基本的には還元焰焼成で表面が酸化焰焼成と見られる。凸面に鋸歯状叩きが見られる。

A₃類(4203・4204・4207・4209)は胎土が比較的細かいがA₂類に比べるとやや粗くなり、色調も若干暗くなる。胎土中に白色粒子・微粒雲母・赤褐色粗粒子が認められ、酸化焙焼成である。4203で胴部長240mmが計測され、厚さは16mm～17mmである。凹面には比較的細かい布目が見られ、両側縁には8～15mm程度の面取りが見られる。広端側には15mm幅の面取りが施されている。

A₄類は断面では鈍い赤褐色を呈し、胎土がやや粗となり、白色粒子・小砂粒等をやや多く含む。4205・4208の2点が見られるが、いずれも玉縁部の小片で凸面側が剝離しており、全体の様相は不明である。玉縁部に釘穴痕が認められ、凹面側に布目痕も認められる。

A₅類の丸瓦は4206のみの確認である。厚さが22mmあり、やや大きめのものと推定されるが、全長・幅等を計測できる資料は出土していない。色調は鈍い赤褐色を呈し、表面は黒色に燻がかけられる。凹面には布目痕が見られ、広端部には50mm程度の面取りが見られる。

A₁類～A₃類のものは厚さがやや薄く、胎土は比較的緻密な粘土を使用し、酸化焙焼成で明るい色調に仕上がっている。これに比べ、A₄類・A₅類のものは胎土がやや粗く、厚みがあり、やや暗い色調に焼き上がっている。

A類丸瓦の製作技法は円筒形のキネに布袋をかぶせ、粘土板を巻き付けて叩き締め、その際縄目が残るが表面をナデ調整するため痕跡はかなり消される。凹面側の内叩き痕は明瞭には認められず、布目痕と糸切り痕が認められる。

[瓦A類・平瓦] 4301～4349・5319・5344

胎土・色調及び厚さからは、丸瓦と同様に5種に識別できる。

A₁類(4322・4342・5319)は、明赤褐色ないし橙色の色調で胎土は非常に緻密な精選された粘土を使用し、白色粒子と赤褐色粗粒子がやや多く混入する。厚さは約20mmで、凹面には布目痕が認められる。4322では端部に10mm程度の面取りが見られる。5319はやや黄橙色に近い色調を呈す。

A₂類(4309・4320・4347・4349)はA₁類に比べやや灰黄色に近い色調を呈し、断面では灰色であることから還元焙焼成で、一部が酸化したものと考えられる。胎土はA₁類とほぼ同じ比較的精選された粘土を使用している。

A₃類(4326・4337・4346・5344)の胎土の緻密さはA₁類・A₂類に近いものの若干粗くなり、黒色粒子・白色粒子が多く混じる。断面で観察される色調が灰色若しくは褐灰色を呈すことから、やや還元に近い焼成であったと考えられ、瓦表面が黒色になることから燻がかけられたと考えられる。厚さはA₅類に近く25～26mmあり、凸面に叩き痕が見られる。

A₄類(4301・4305・4306・4310～4312)は基本的にはA₅類に近いと考えられるが、胎土がA₅類に比しやや細かく、厚さも21～22mmとやや薄い。表面の黒色化がA₅類ほど著しくない。

A₅類(4302・4304・4303・4307・4308・4314・4316・4321・4327・4328・4330・4340・4343・4344・4345・4348)はA類平瓦のなかで最も厚く、胎土はやや粗くなる。厚さも25～26mmとA類のなかでは最も厚く、完形のものは見られないものの、大型であると考えられる。断面での色調は鈍い赤褐色を呈し、表面は黒色になって燻がかけられた酸化焙焼成であると考えられる。4327には釘穴があり、径は12mmで両面から穿孔し、凹面では長径が20mmとなっている。厚さは24mmで、凹面に布目痕が認められる。

A類平瓦の製作技法は凸型台使用による1枚作りで、凹面に布目痕が、凸面には鋸歯状き痕が見られる。叩板の幅は約40mmである。

[瓦A類・鬼瓦] 4401～4408

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物

個体識別が可能なものが8点見られ、碎片も多数出土している。このうち、4401は瓦片としては最も重量があり、全体の $\frac{1}{2}$ 程度の残存状況である。胎土は非常に細かい精選された粘土を使用し焼成は酸化焰で比較的良好である。厚さは60mmのアーチ形の鬼板で、周縁部に径22mmの円形工具の刺突による連珠を配し、眼窩は径96mm、高さ20mmで粘土紐を張り付けて作り出し、その中央部に径30mmの眼を盛り上げて、眼球を周縁部の連珠と同様の円形刺突で表現している。牙は粘土紐を張り付けて高10mmに表現し、髭は篋により断面三角に彫られている。4402・4405はこれとは別個体であるが同様の形状・意匠のものと考えられ、4405では焼成時に表面が燻されて黒色を呈し、裏面は剝離している。4406は表面剝離意匠は不明であるが、胎土・焼成等で近似する。4407・4408は連珠文が見られることから鬼瓦の周縁部片と見られる。また、4403はアーチ部に近い部分の裏面である。4404は上記の7点とは異なり、小型の鬼瓦である。左下半部の小片で厚さ28mm、アーチ部高60mmで約20mm近く盛り上がった鼻梁と円形刺突の周縁部連珠文が見られる。

〈瓦B類〉

大御堂寺院址で出土した瓦類のうち、灰色を呈し胎土がやや砂質っぽいものをB類とした。出土総量の約52%（重量比）がこれに当たり、焼成は還元焰で硬質である。瓦当文様には巴文・均正唐草文が見られる。胎土・色調・焼成からは2大別が可能である。

[瓦B類・軒丸瓦] B₁類 (5001・5004・5007・5008)、B₂類 (5002・5006・5010・5218)

出土したB類軒丸瓦は8点であり、7点は瓦当文様が確認できる。範種は“巴文”で瓦当直径は132mmのものと118mmの大小2種が見られ、巴文の文様構成にも若干の差異が見られる。B₁類(大)のものは内区に左巻三巴文、外区に26個の連珠が見られ、外区と内区との間には圏線が見られ巴の尾は圏線につく。計測値は5001の巴文軒丸瓦においては、瓦当直径132mm、内区径79mm、外区幅11mm、周縁部幅12mm～15mm、周縁部高10mm、瓦当高22mm。丸瓦部の厚さ18mmである。瓦当裏面は平坦になで調整され、丸瓦部両側縁凹面の面取りは16～20mm程度の幅である。胎土はやや密な細粒砂で、精選されて均質である。還元焰焼成で比較的堅緻である。瓦当文様は左巻の三巴文で、巴から伸びる尾部はやや太く内区と外区を区分する圏線に接する。

B₂類の軒丸瓦は右巻の三巴文で、巴の頭が大きく円形で尾は細長い互いにつかない。外区には35個の連珠を配し、内区と外区の境に圏線は見られない。計測値は瓦当直径120mm、内区径68mm、外区幅8～10mm、周縁部幅10～12mm、周縁部高10mm、瓦当高25mm。丸瓦部の厚さ15mmである。B₁類に比べ一回り小さいものとなっている。胎土はやや粗くなり、中粒砂で白色粒子・黒色粒子等の夾雑物が認められる。色調は灰色ないし青黒色を呈し、断面では一部橙色ないし明褐色を呈す。焼成は還元焰と思われる。

[瓦B類・軒平瓦] 5101～5119

B₁類の軒平瓦は、5101において瓦当面幅210mm、瓦当高36mm、周縁部幅6～7mm、周縁部高3～4mm、瓦当部厚20mm、平瓦部厚さ20mm、瓦当側面観はほぼ直角である。胴部と瓦当部の接合方法は、瓦当部と胴部の端部をそれぞれ約45°にカットし接合している。瓦当底面及び裏面には横撫で調整が施され、胴下端部にも幅20mm程度の横撫で調整痕が認められる。凹面部には瓦当端部から約50mm程度の幅で横撫で調整が施されている。

B₂類の軒平瓦は瓦当高32mm、周縁部幅5～6mm、周縁部高3～5mm、瓦当部厚20mm、平瓦部厚16mm、瓦当側面観はほぼ直角である。胴部と瓦当部の接合方法は顎折り曲げによる。

瓦当文様の範型はB₁類・B₂類とも同じものを使用していると見られるが、胎土・色調・焼成等には差異が認められる。すなわち、B₁類においては、色調は基本的に灰色で、胎土は比較的精選され粒子の細かい粘土を使用し、焼成は還元焰で比較的堅緻に焼かれている。B₂類では、基本的にはB₁類と同様の製作方法で作られているものと考えられるが、胎土の粒子がやや粗くなり、細～中粒砂を使用し、焼成にやや酸化気味で断

面もしくは器表面で黄褐色系の色調を呈すものや青黒色を呈すものも見られる。

[瓦B類・丸瓦] B₁類 (5203・5210・5214～5216・5226～5230・5233・5236・5237)

B₂類 (5201・5202・5204～5206・5208・5209・5211～5213・5217・5220・5222・5224・5225・5231・5232・5234・5235・5237・4201)

灰色の色調で粘土粒子が精選され比較的細かなB₁類に属すものと、胎土がやや砂質っぽく黄褐色系の色調を示すB₂類に属すものが見られる。

B₁類は5203においてほぼ全体的特徴が明らかであるが、全長は310mm、胴部長255mm、玉縁長55mm、胴部幅110mm、胴部高63mm、器厚16mmである。玉縁部のほぼ中央に径11mmの釘穴が片面穿孔されている。凹面にはタタラからの糸きり痕と布目痕が見られ、端部には面取りが施される。面取り幅は側縁で10～15mm、玉縁部で10～15mm、重なり部分で約45mmである。

B₂類は、B₁類よりやや重量観があり、やや大きくなる。全長が計測できるものはないが、胴部幅は、2204で117mm、2201で122mmを測り、厚さは16～18mmを計測する。玉縁部も比較的厚くしっかりした作りである。出土量はB₂類丸瓦の方がやや多い。

[瓦B類・平瓦] B₁類 (5301・5306～5310・5314～5318・5320・5322・5324・5347・5356)、B₂類 (5302～5305・5311～5313・5321・5323・5335・5338・5341・5345)

平瓦類もB₁類とB₂類とに大別される。復元が可能なものが5点あり、この計測からは、平瓦類での法量差は明瞭ではないと思われる。B₁類の平瓦全長は5301において280mmであり、幅は5308で200mm(端部)～210mmを計測する。瓦厚は16～20mmで、湾曲比は0.14である。B₂類は全長は280mmで幅は不明であるがB₁類と同じ大きさと思われる。瓦厚は12mm～15mmとB₁類よりやや薄くなり、重量も若干軽い。胎土はB₁類のほうがややきめ細かく、B₂類は細～中粒砂である。

成形技法は凹形台使用の1枚作りで、凸面に長56mm、幅10mmの平行条線が見られる。両側縁及び端部にはナデ調整が施されている。広端側ではやや面取りを意識したナデ調整が見られる。

[瓦B類・鬼瓦] 5401～5404

B類の鬼瓦片は4点確認した。5401は鬼面左上半程度程度の残存状況である。厚さは35～40mmで、眼窩部分は65mm、鼻梁部で85mmと幾分かは立体感がある。胎土はやや粗い砂質土で白色粒子が多く見られ、還元焙焼成で灰色を呈す。周縁部には径25mmの円形刺突による連珠文が配されている。裏面はざらざらした砂質であることから離れ砂の使用が考えられ、周縁に面取りも認められる。5402・5405は周縁部の小片であるが、5401よりやや薄いことから同形式の別個体と考えられる。5403は鼻部の小片である。

[道具瓦] 5501～5504・4213

丸瓦・平瓦類の中に小型のものが数点見られる。特殊な道具瓦として使用されたものと推定される。5501の丸瓦は完形で全長110mm、胴部長55mm、玉縁長55mm、胴部幅95mm、胴部高58mm、厚さは12mmである。胎土はやや粗い砂質で色調は橙色で断面で黒色部分が見られる。凹面側縁に面取りが施されている。5503も同様の小型丸瓦であるが、胴部全長59～63mm、玉縁部は一部欠損して全長は不明である。厚さは15～16mmで、5501より若干大きめである。色調は断面で灰色を、表面は青黒色を呈し、還元焙焼成である。5504・5223はこの5503と同様の特徴を示す小型丸瓦で、厚さは13mmで広端部に面取りが認められる。5504では全長105mmが計測される。

《形式分類について》

瓦当の範種は軒丸瓦において、A類巴文・A類複弁蓮華文、B₁類巴文・B₂類巴文でこれに対応する軒平瓦

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

は連珠文・宝相華唐草文、B類均正唐草文である。B類の瓦はB₁類・B₂類に分類されるが、軒平瓦も同様であり、これらは次の4つの組み合わせと考えられる。

I型式の瓦は、胎土が精選されて粒子が細かく、瓦の表面が非常に滑らかな感じである。A類鬼瓦の胎土

型式	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦	鬼瓦・道具瓦
I	三巴文（左巻）	連珠文	A ₁ 類～A ₃ 類丸瓦	A ₁ 類～A ₃ 類丸瓦	A類鬼瓦
II	複弁蓮華文	宝相華唐草文	A ₄ 類～A ₅ 類平瓦	A ₄ 類～A ₅ 類平瓦	(A類鬼瓦)
III	三巴文（左巻）	均正唐草文	B ₁ 類丸瓦	B ₁ 類平瓦	B類鬼瓦
IV	三巴文（右巻）	均正唐草文	B ₂ 類丸瓦	B ₂ 類平瓦	B類鬼瓦

はI型式の瓦の胎土と共通性が認められる。II型式の瓦はやや厚みがあり、大きめである。胎土はやや粗くなり、ザラザラした印象である。III型式とIV型式とは胎土・色調に若干の差異を認めるものの軒平瓦において範種が共通であり、軒丸瓦の瓦当文様にもA類ほどの差が認められないことからIII型式とIV型式の瓦は同時に使用されていたものと見て差し支えない。また、I・II型式のものと比較すると、胎土・製作技法・文様意匠等に明瞭な差が認められ、時間差があるものと考えられる。

鬼瓦は全体の $\frac{1}{4}$ 程度の残存状況で約4.5kgあり、かなり大きなものと予想され、大棟の両端に置かれたものと考えられる。またB類に属す鬼瓦に、降棟のものと考えられる小型のものが見られ、鬼瓦は大きさに3種認められる。

《出土状況》

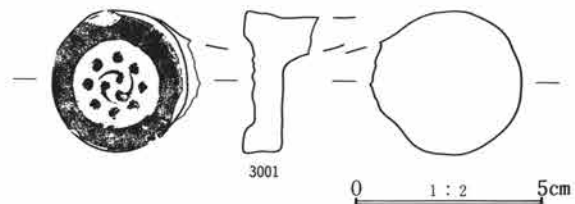
A類・B類のいずれも出土分布域は寺院址遺構の範囲内に限られる。園池遺構の東側では溝状遺構の埋土中に数片見られたのみである。また寺院址西部では瓦には大きさ・胎土・焼成・色調及び瓦当文様等に明らかな差異が認められ、出土状況にも分布に偏りが見られる。なお、瓦類の出土分布については第6章第3節で詳述することとする。

《製造年代》

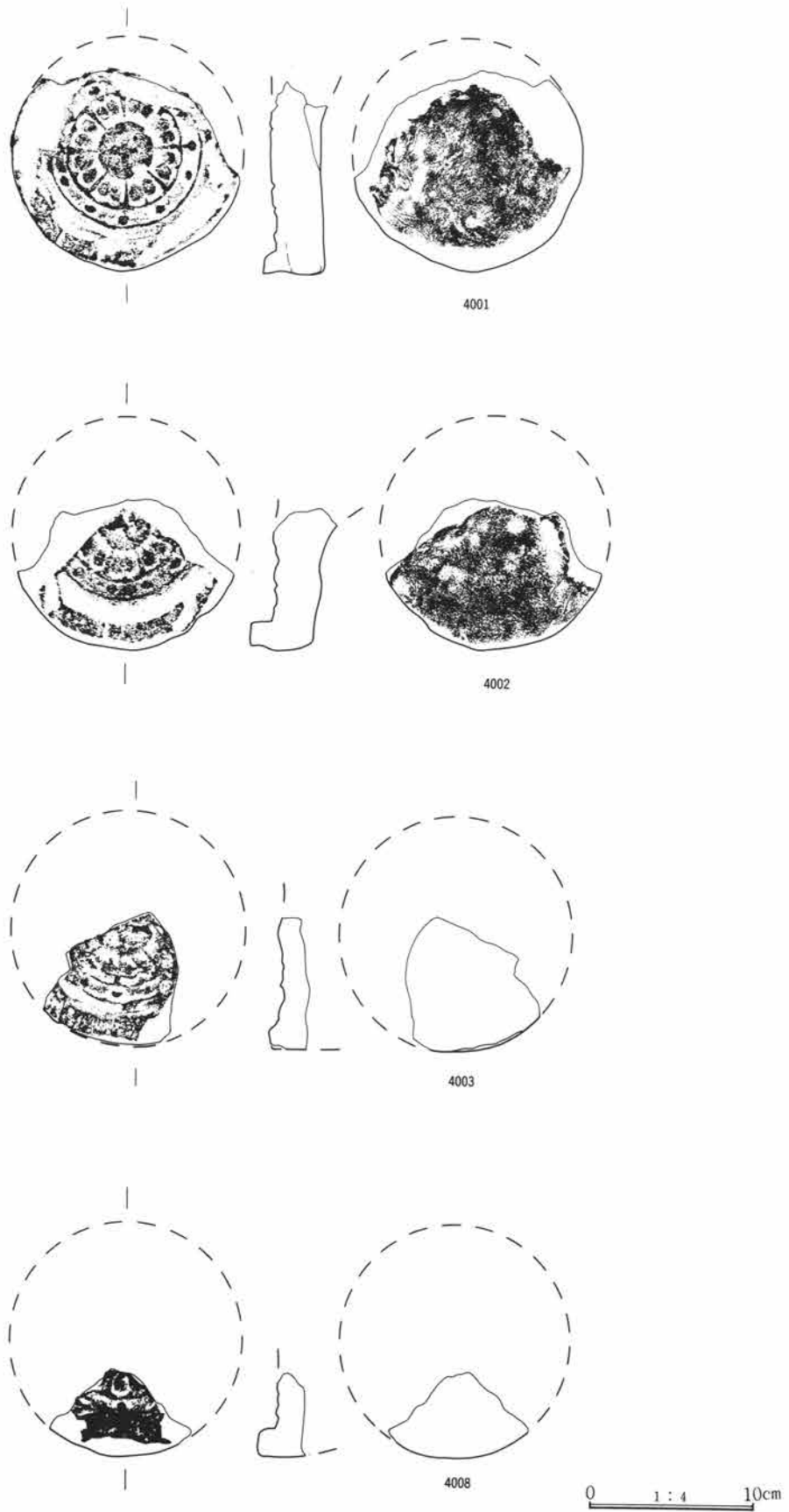
瓦類は寺院の創建に伴って製作使用されたと考えられる。しかし、出土資料にはA類・B類と製作年代が異なるものが見られ、A類のものが寺院創建時のものと考えられる。B類の瓦はやや時期の下るものと考えられるが、修築・改修で使用されたものか、新たに葺き替え若しくは創建時の堂宇と別棟に使用したものかどうかは不明である。

寺院の創建年代=A類瓦の製作年代は、瓦当文様から鎌倉時代と考えられる。巴文については中世以降連続と続く意匠であり時期を特定することは難しいが、平安時代末には出現しており、また、複弁蓮華文については8葉の複弁が短く中の蓮子が「卍」の変化したものと見られることから、鎌倉時代にはいつてからのものと考えられる。軒平瓦での顎の取り付けの形式にも中世前半代に見られる特徴を認められ、13世紀前半から中頃の年代観を与えられる。

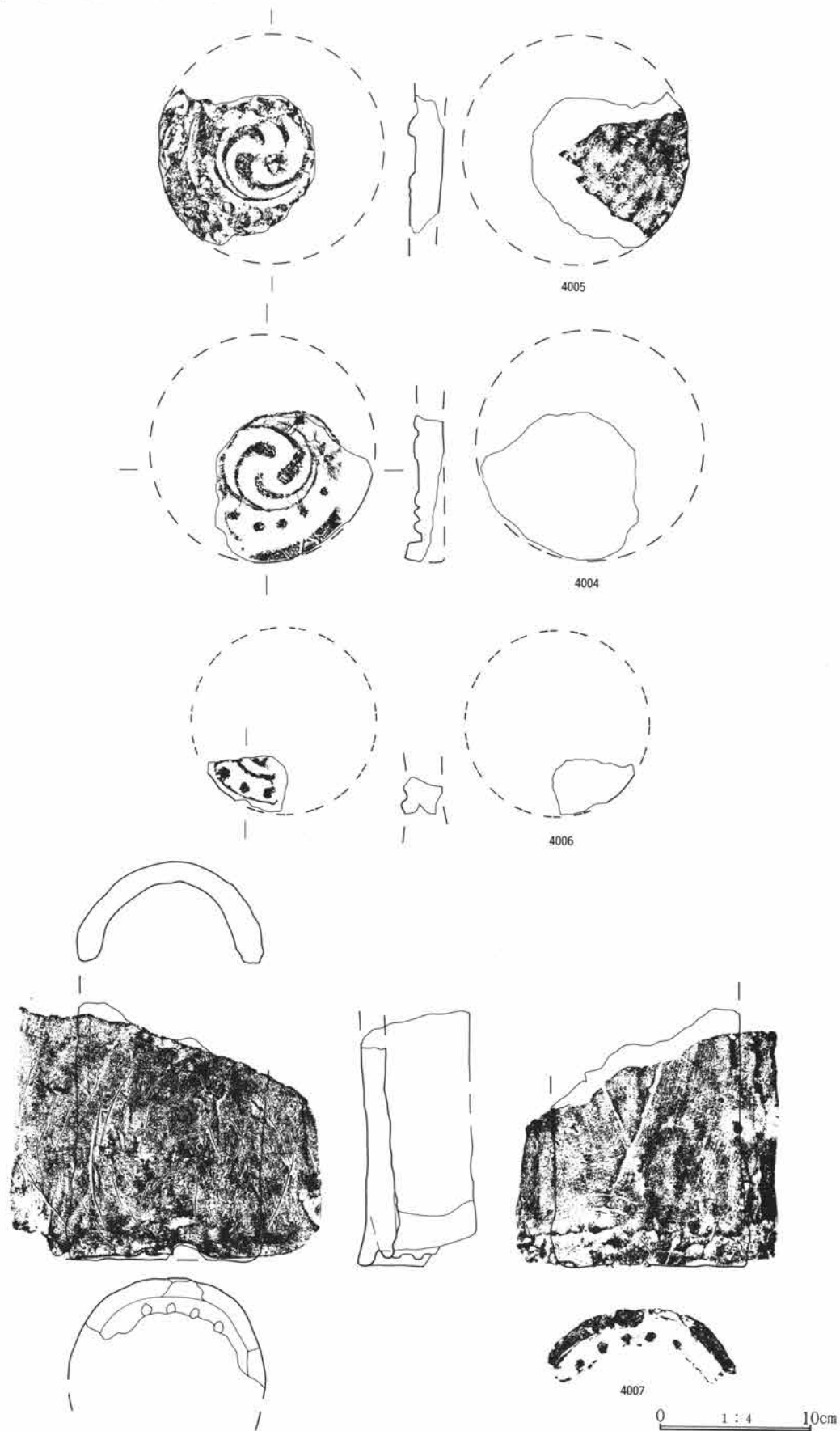
B類の瓦については、室町時代に入ってから形式・形態の特徴を認められ、14世紀代の年代観を与えられる。なお、瓦の製作年代及び出土分布・廃棄の状況等は寺院の造立破却とも関係するので第6章で詳述する。



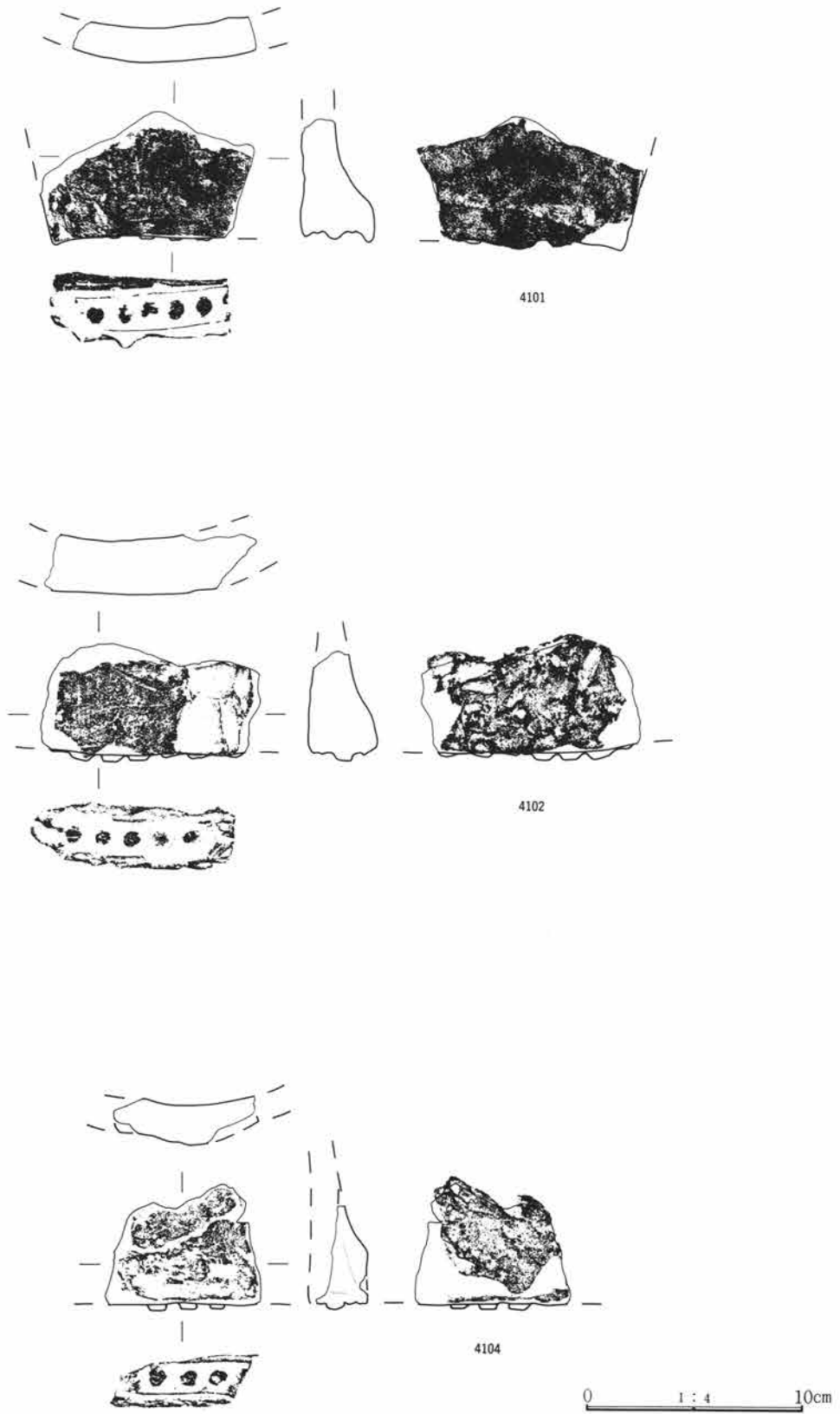
第152図 大御堂寺院址出土遺物実測図(II)―近世棧瓦―



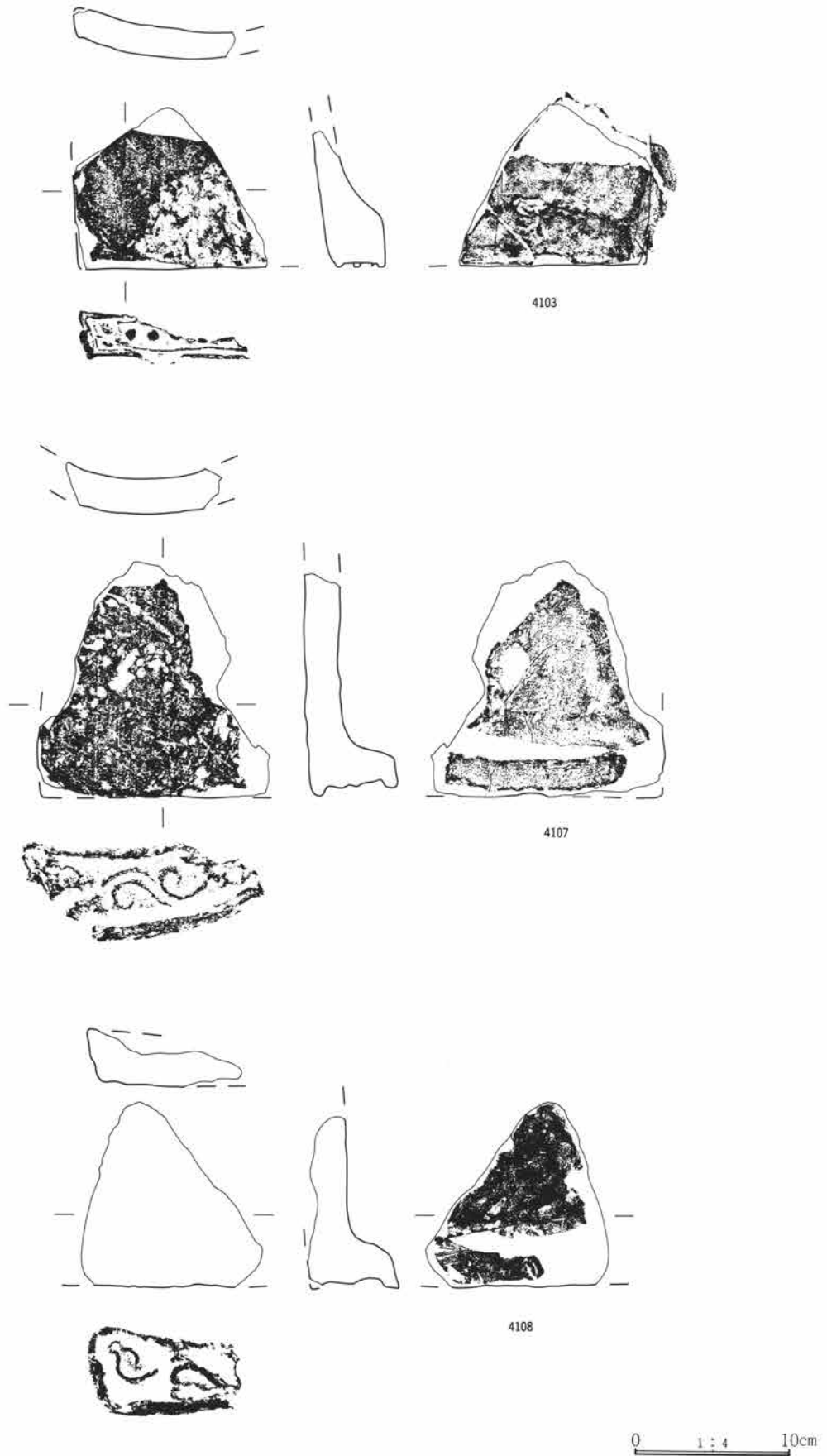
第153図 大御堂寺院址出土遺物実測図(12)―A類軒丸瓦―



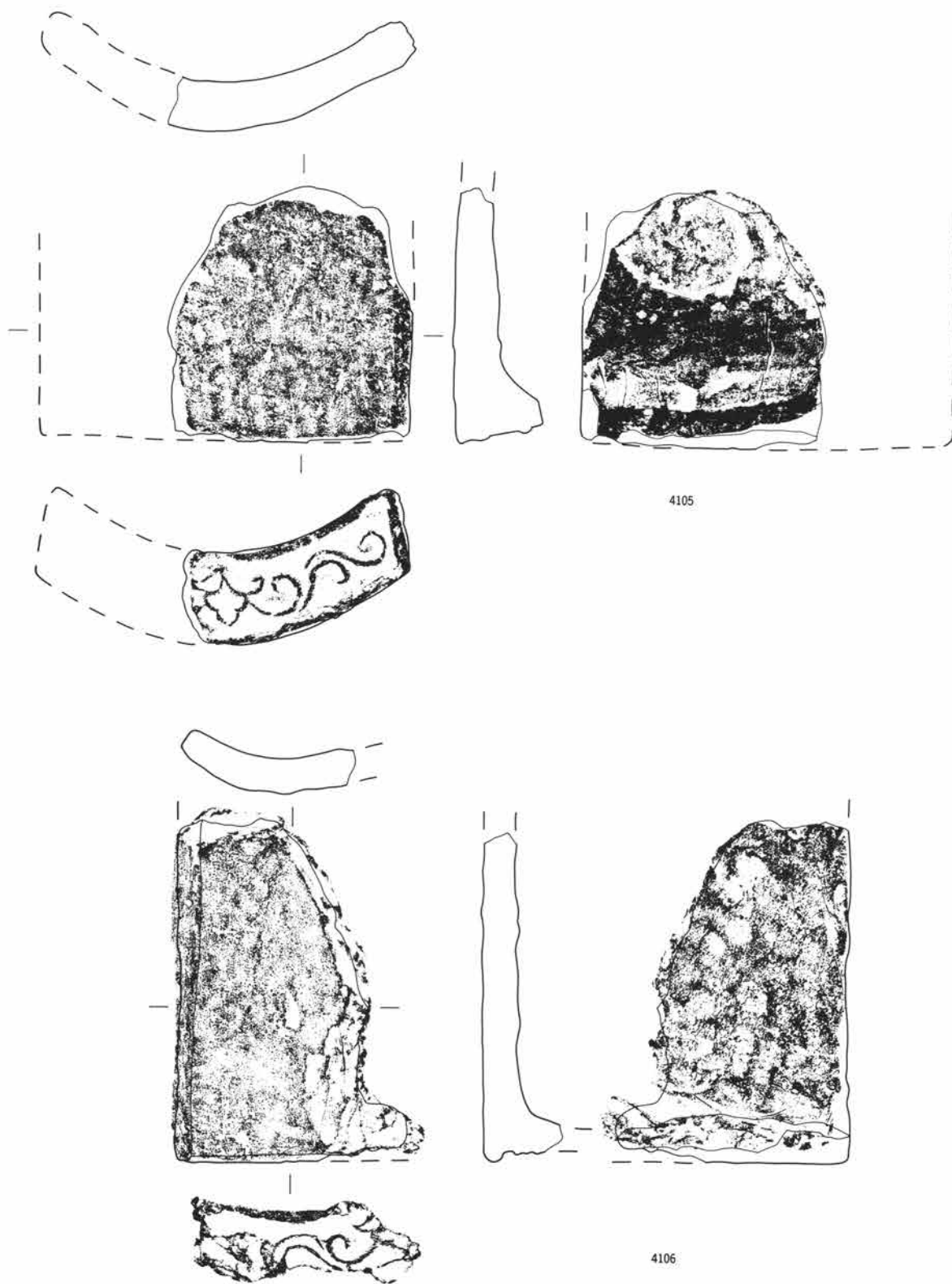
第154図 大御堂寺院址出土遺物実測図(13)―A類軒丸瓦―



第155図 大御堂寺院址出土遺物実測図(14)―A類軒平瓦―



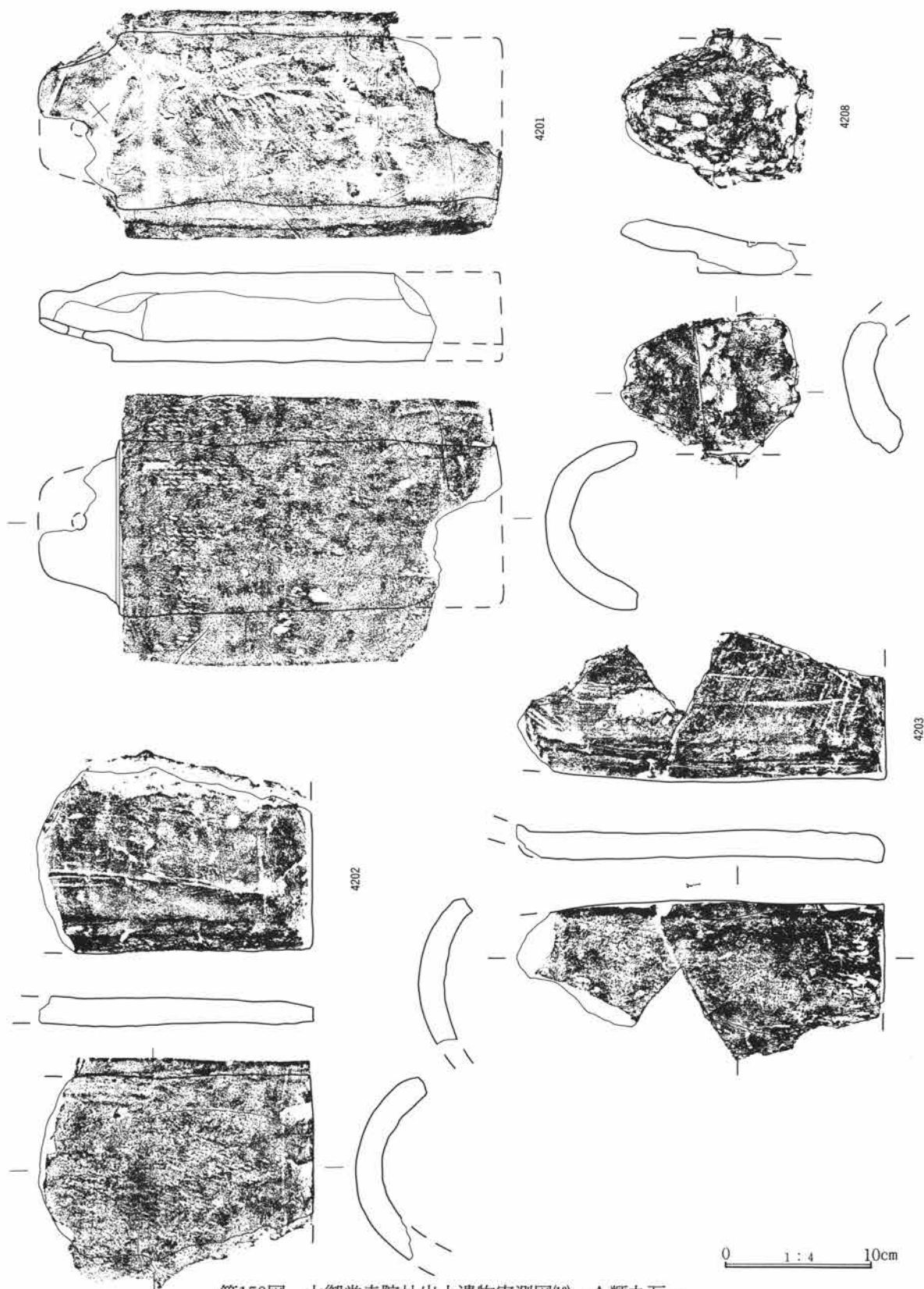
第156図 大御堂寺院址出土遺物実測図(15)-A類軒平瓦一



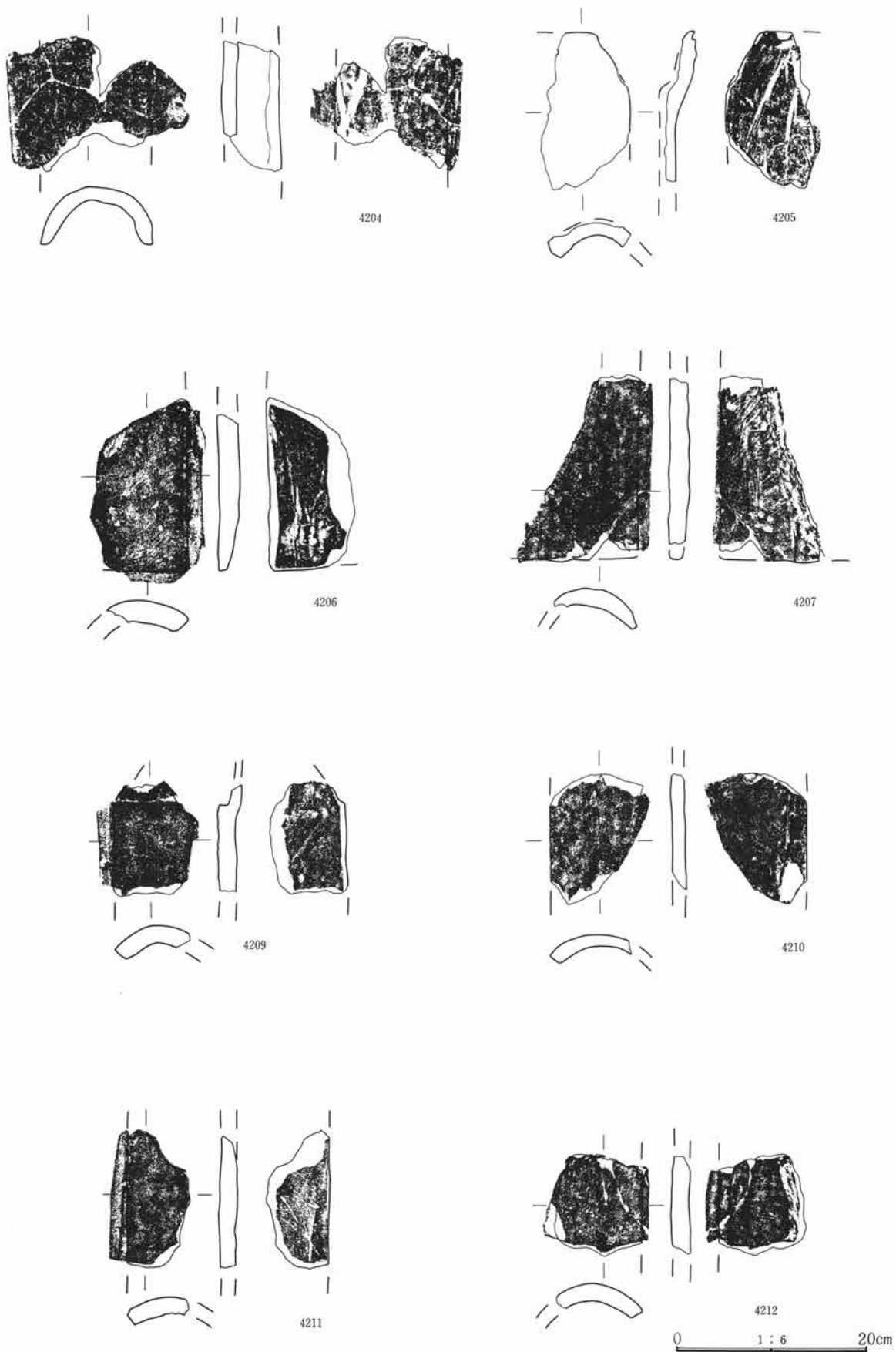
第157図 大御堂寺院址出土遺物実測図(16)―A類軒平瓦―



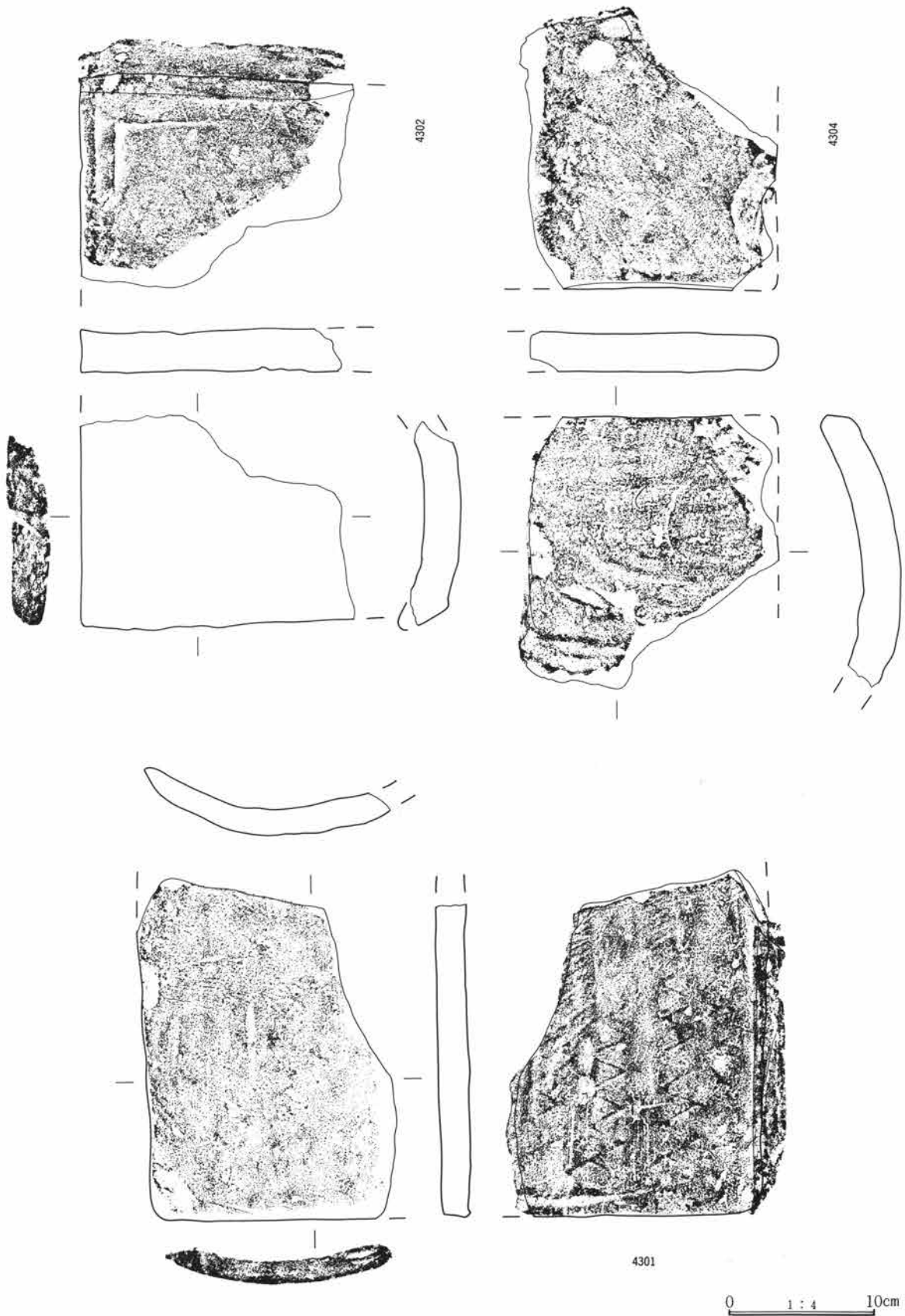
第158図 大御堂寺院址出土遺物実測図(17)―A類軒平瓦―



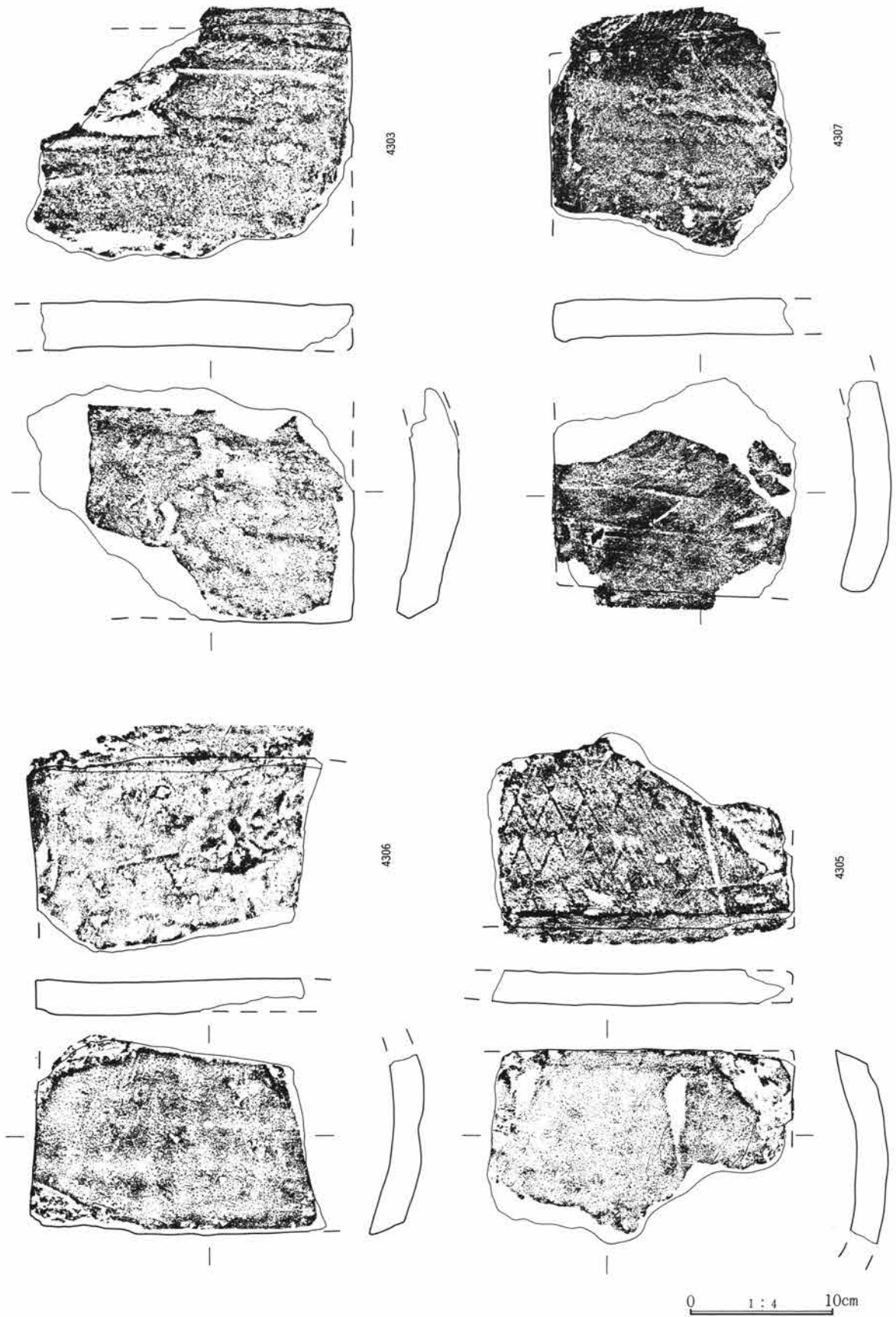
第159図 大御堂寺院址出土遺物実測図(18)―A類丸瓦―



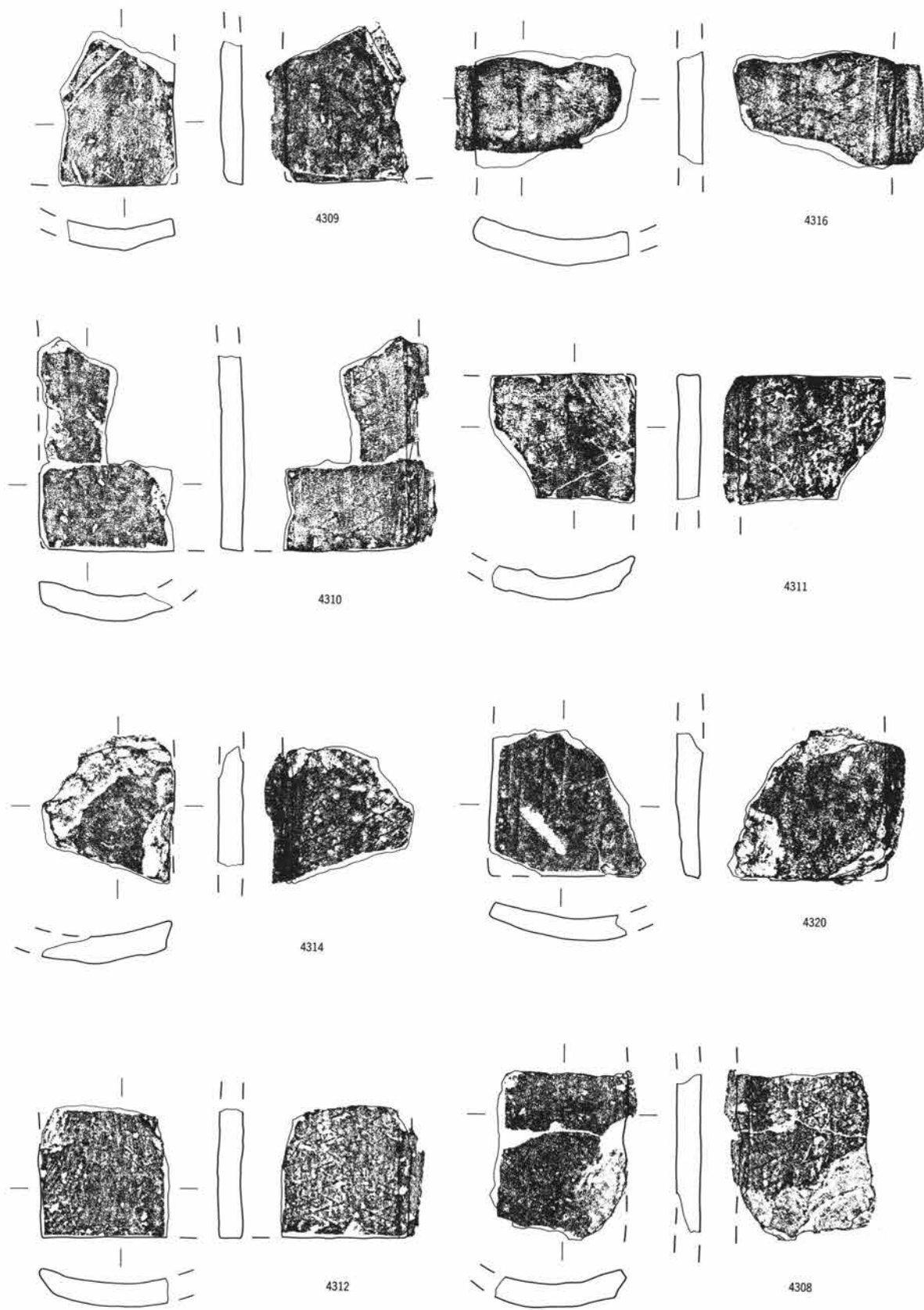
第160図 大御堂寺院址出土遺物実測図(19)―A類丸瓦―



第161図 大御堂寺院址出土遺物実測図(20)―A類平瓦―

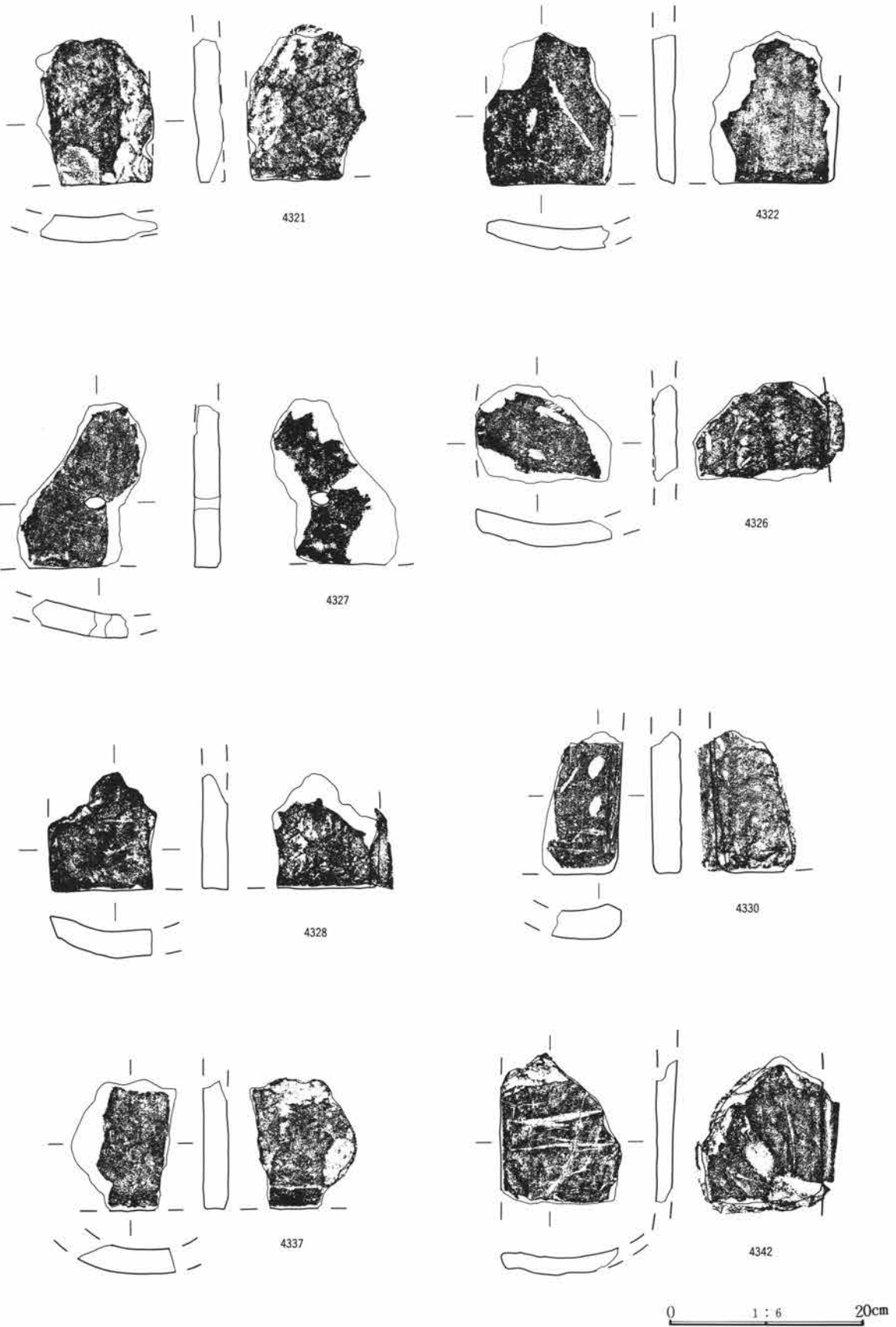


第162図 大御堂寺院址出土遺物実測図(2)―A類平瓦―

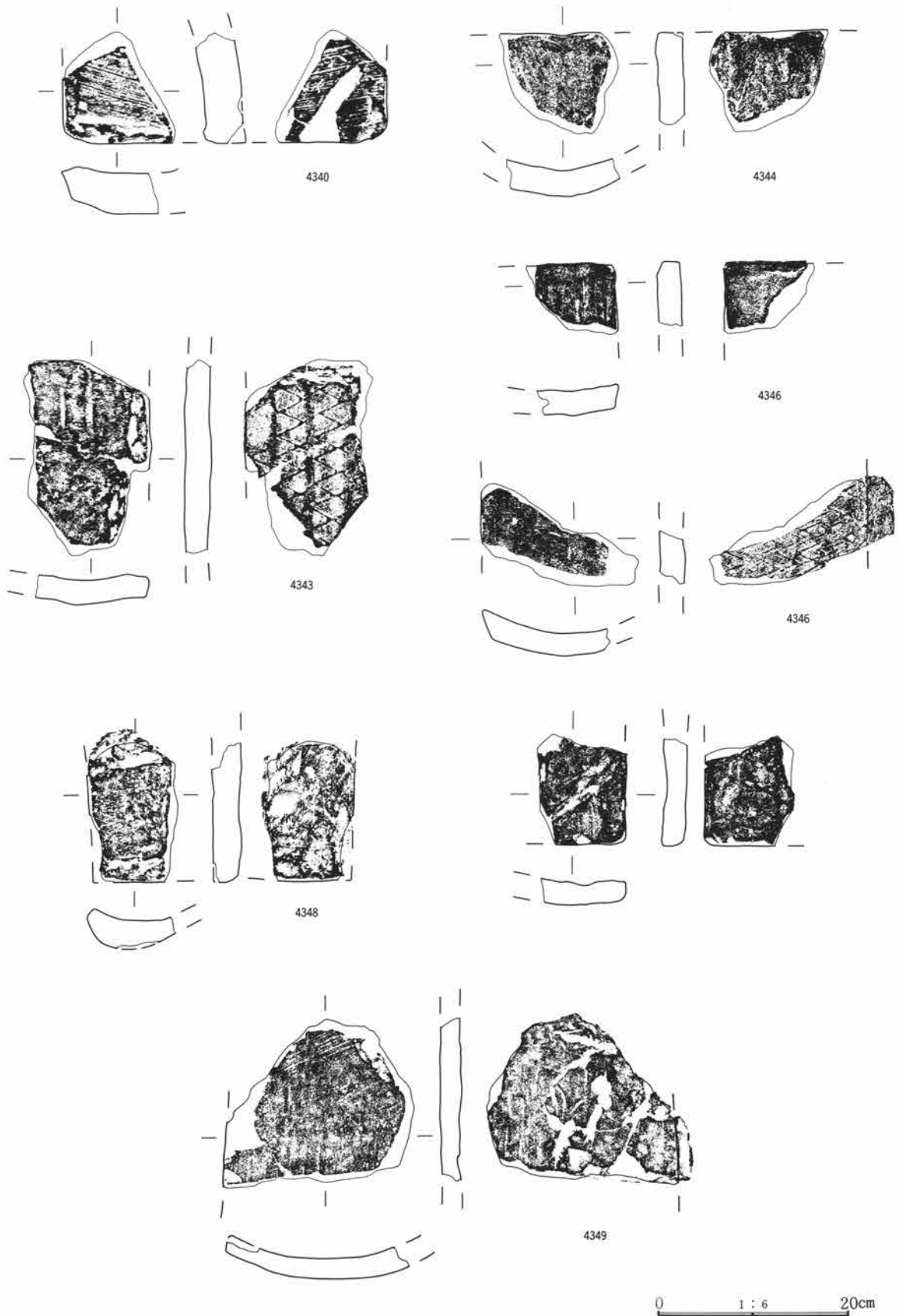


0 1 : 6 20cm

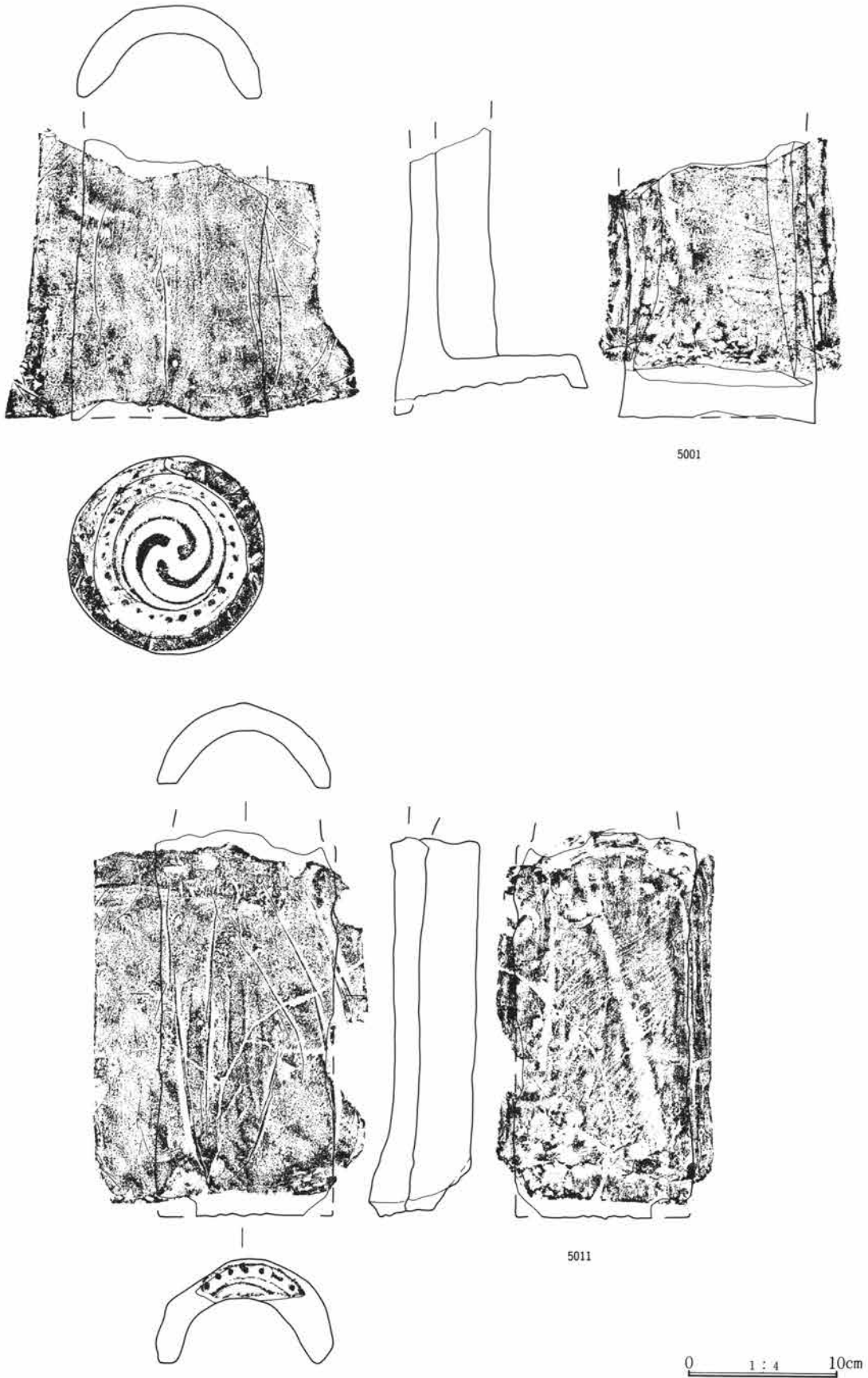
第163図 大御堂寺院址出土遺物実測図(22)―A類平瓦―



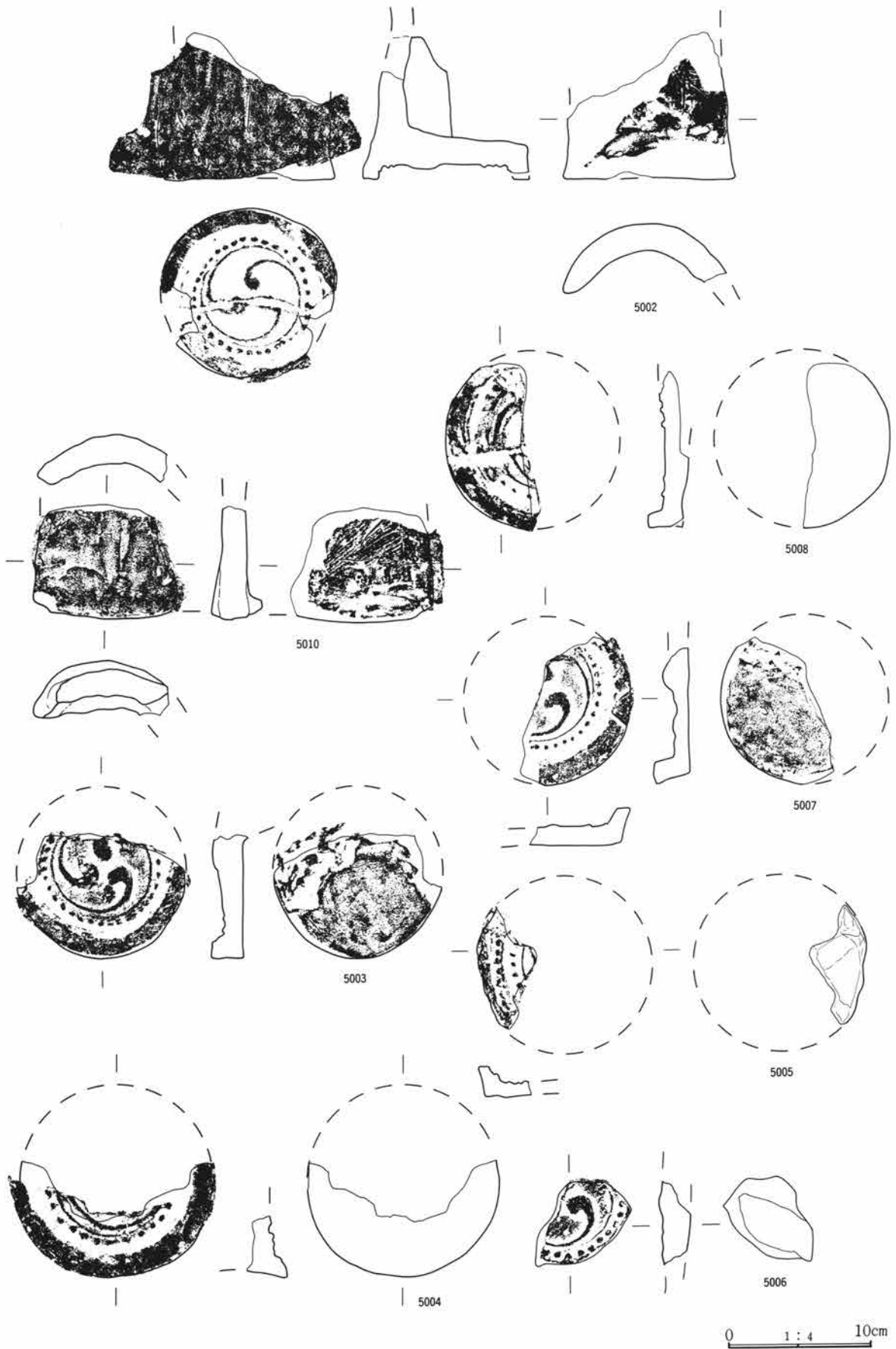
第164図 大御堂寺院址出土遺物実測図(23)―A類平瓦―



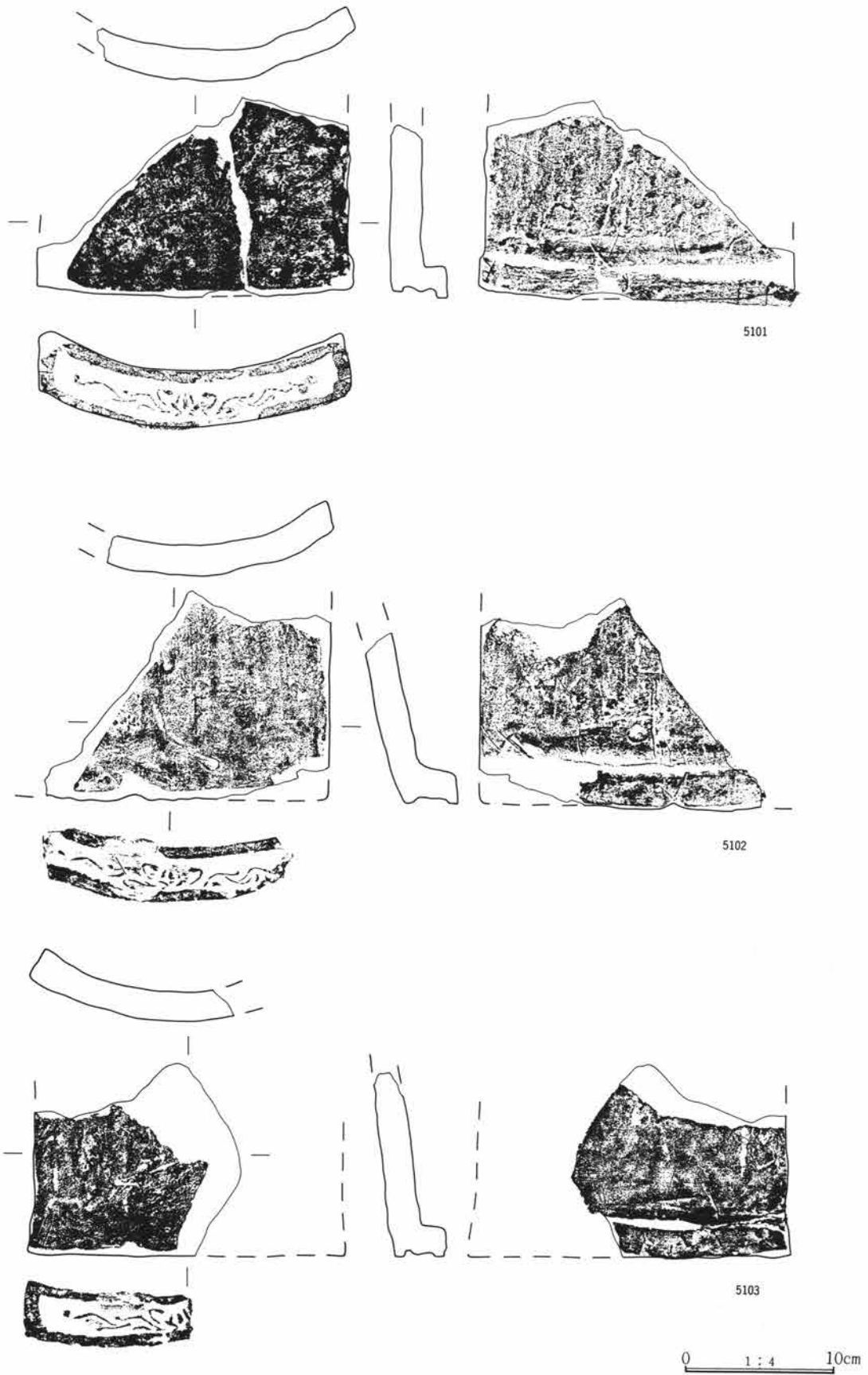
第165図 大御堂寺院址出土遺物実測図(24)―A類平瓦―



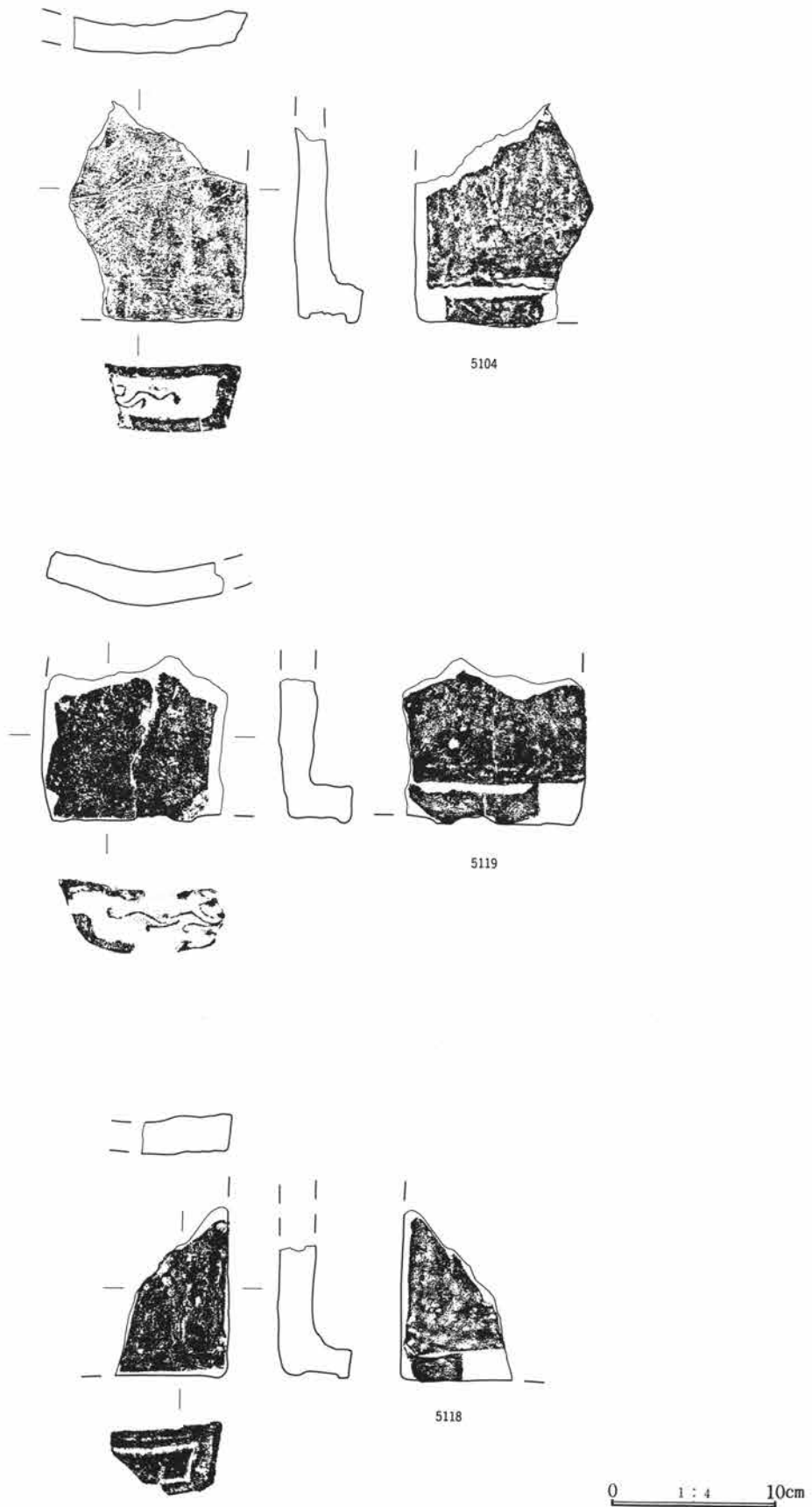
第166図 大御堂寺院址出土遺物実測図(25)―B類軒丸瓦―



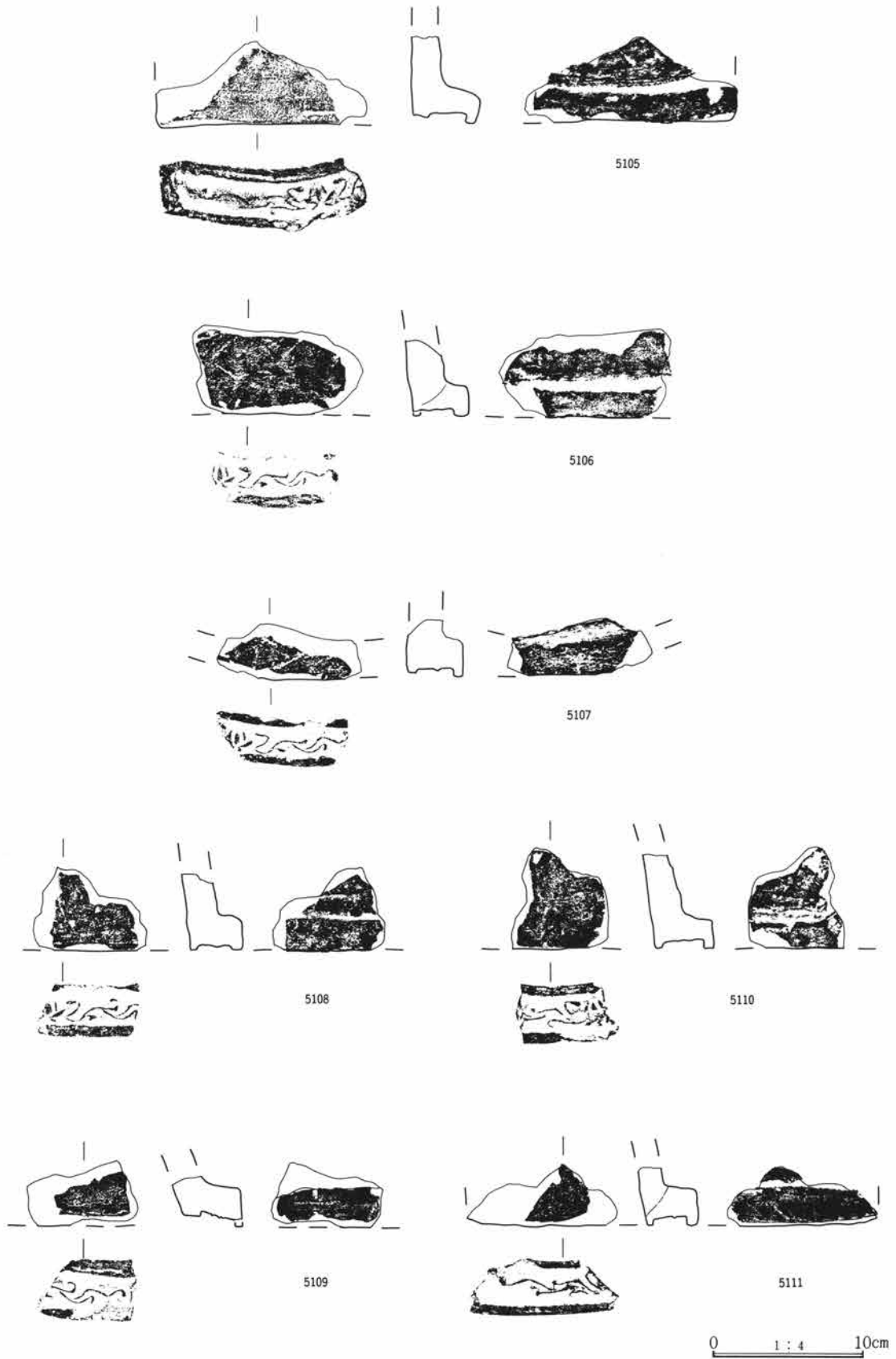
第167図 大御堂寺院址出土遺物実測図(26)―B類軒丸瓦―



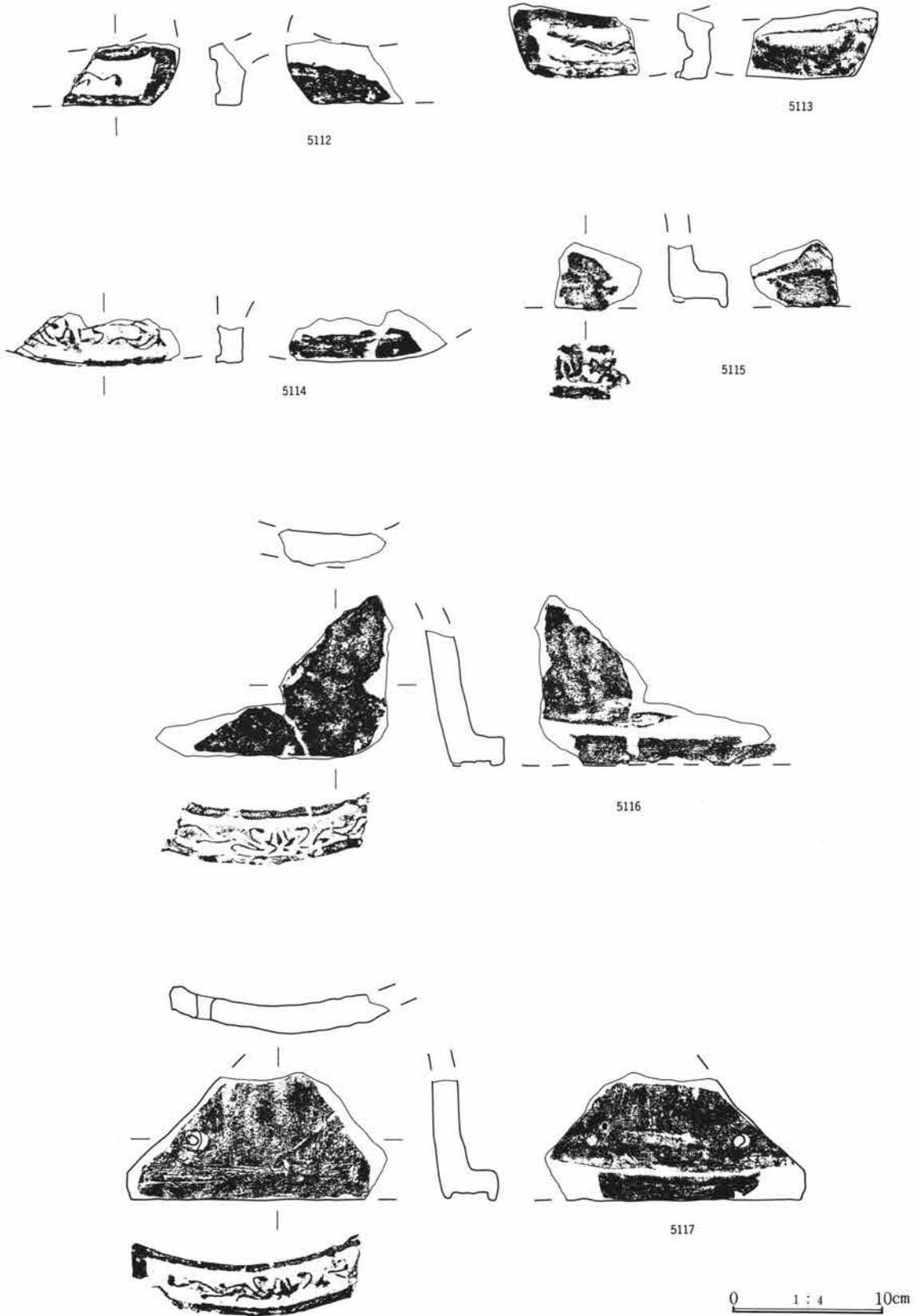
第168図 大御堂寺院址出土遺物実測図(27)―B類軒平瓦―



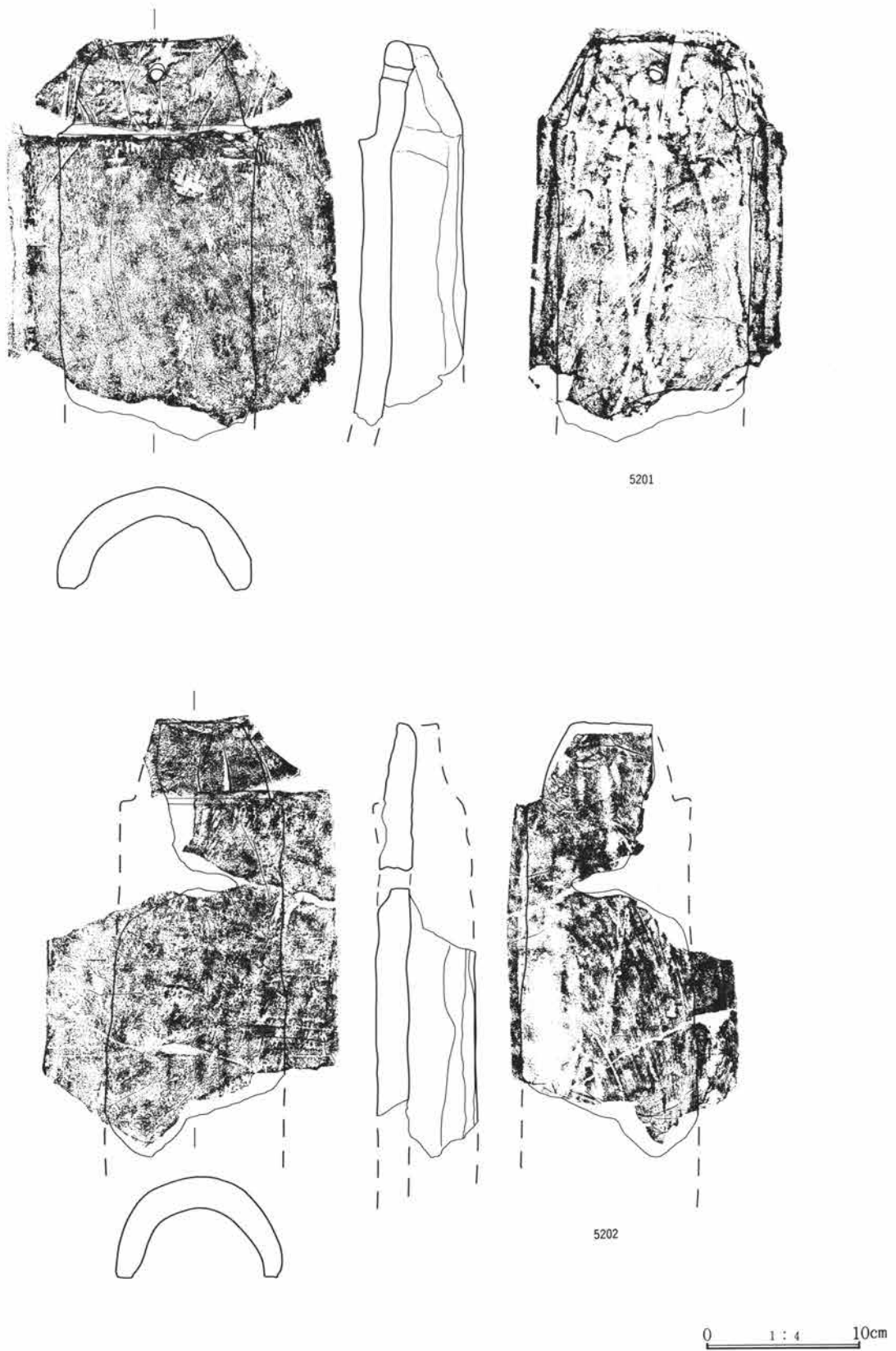
第169図 大御堂寺院址出土遺物実測図(28)―B類軒平瓦―



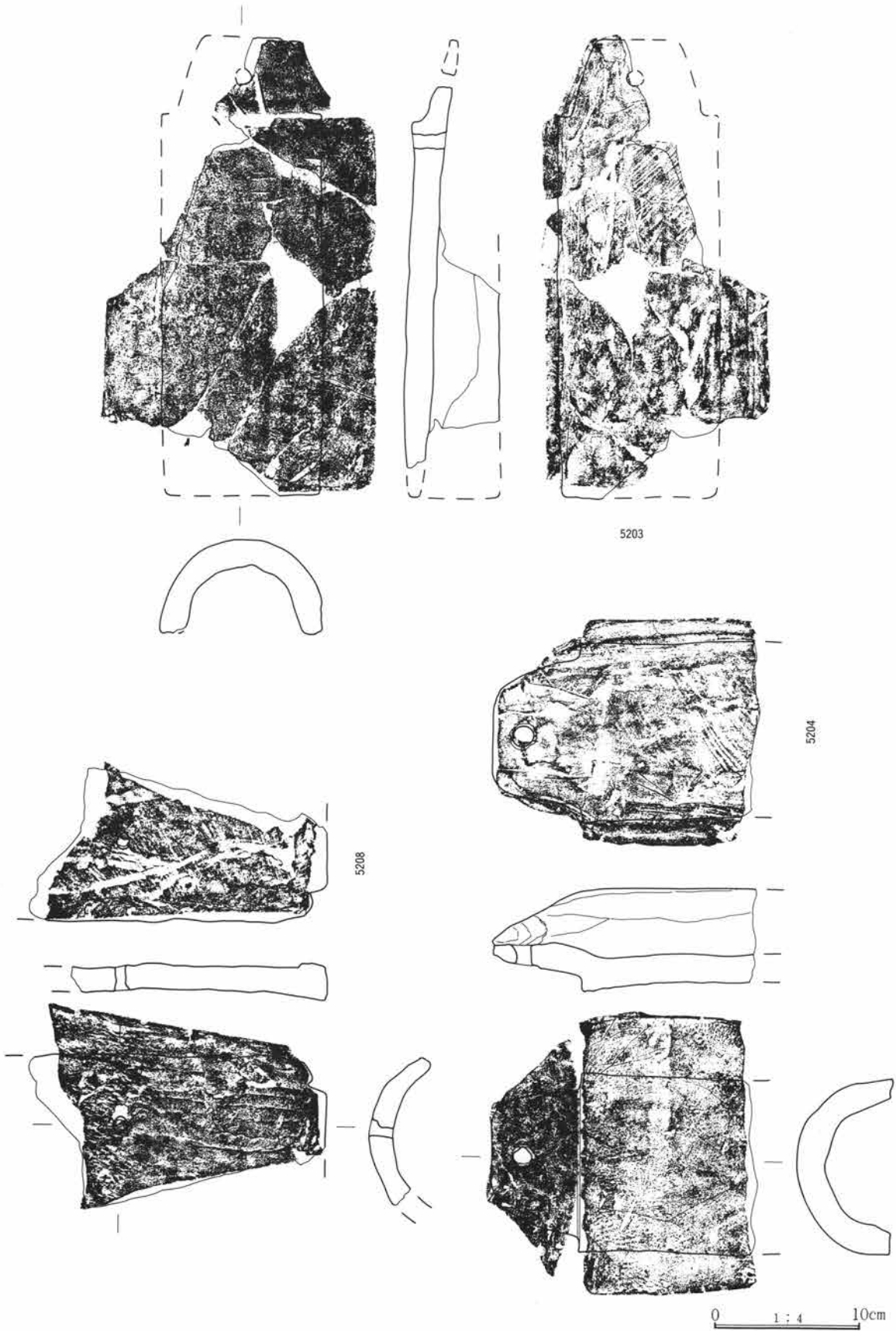
第170図 大御堂寺院址出土遺物実測図(29)―B類軒平瓦―



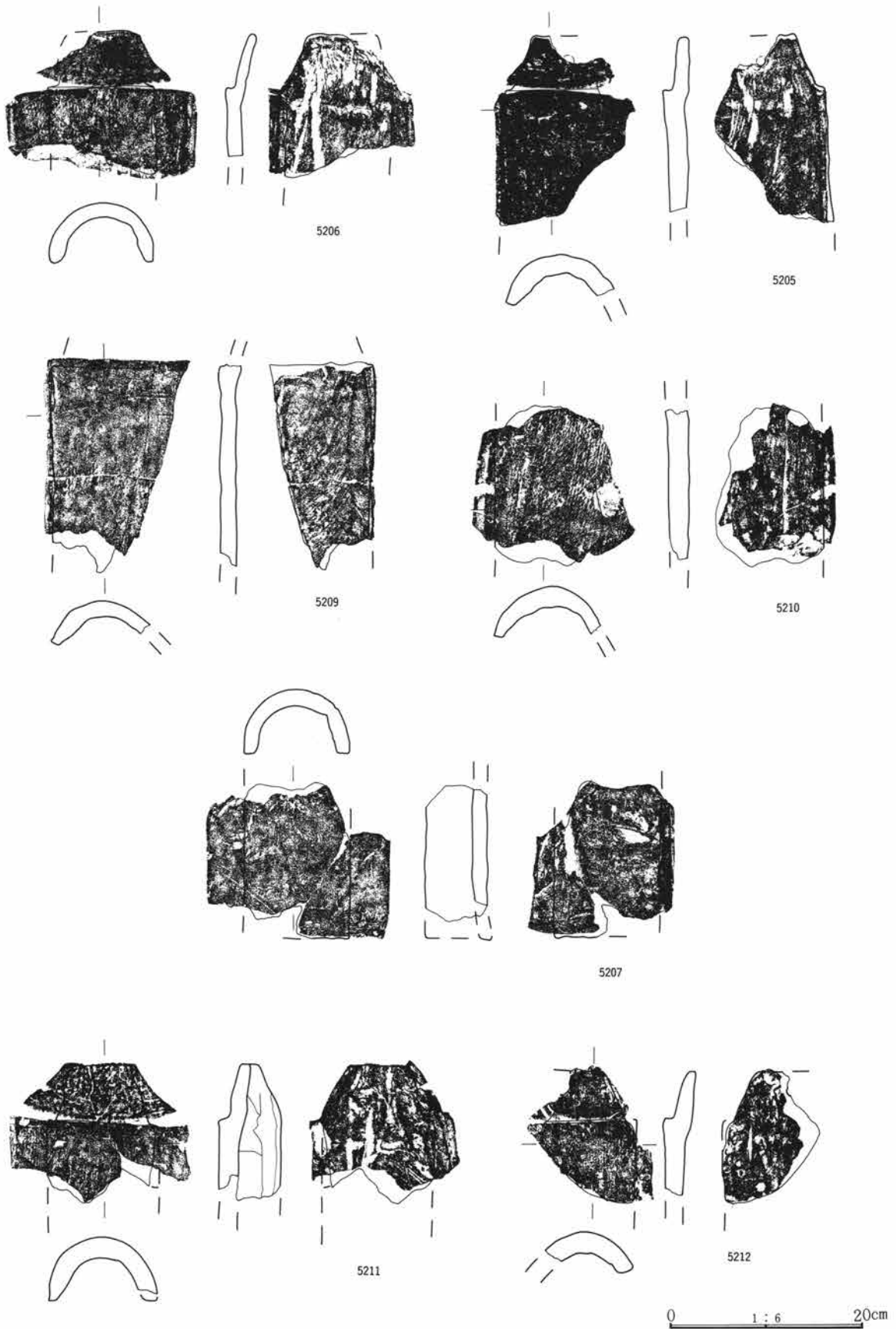
第171図 大御堂寺院址出土遺物実測図(30)―B類軒平瓦―



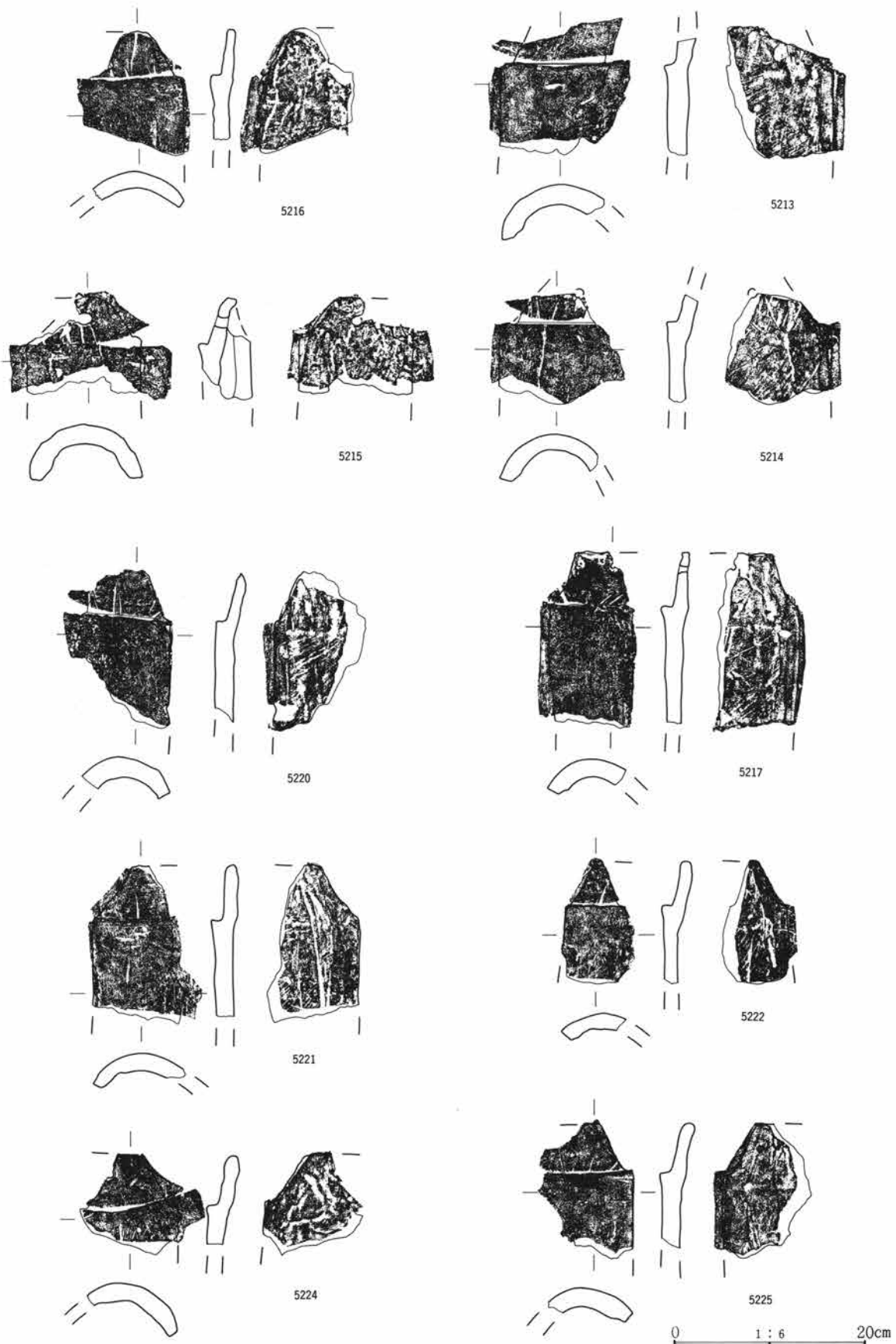
第172図 大御堂寺院址出土遺物実測図(3)―B類丸瓦一



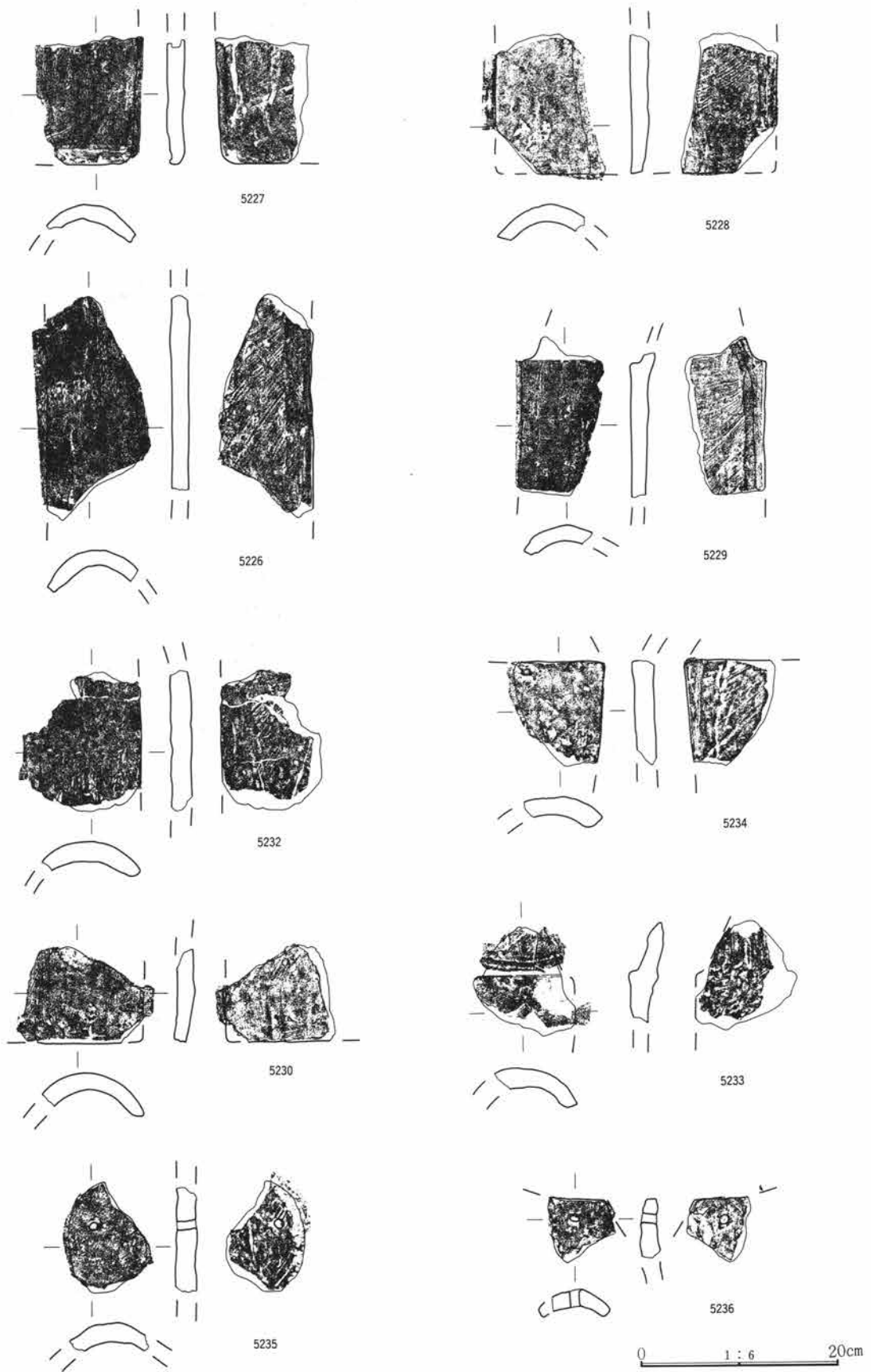
第173図 大御堂寺院址出土遺物実測図(32)―B類丸瓦―



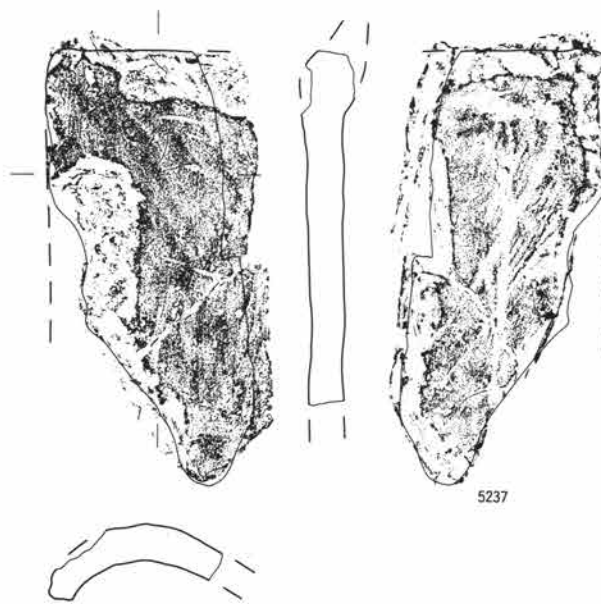
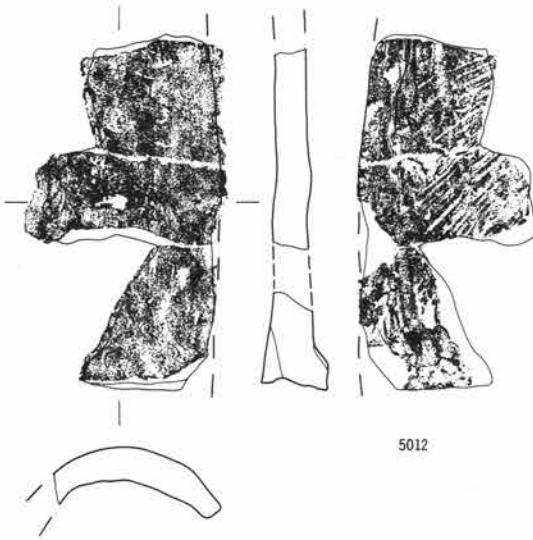
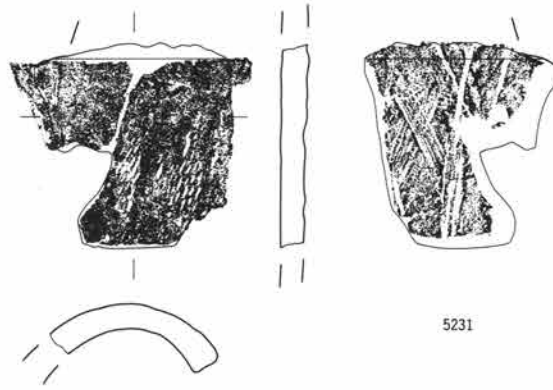
第174図 大御堂寺院址出土遺物実測図(33)―B類丸瓦―



第175図 大御堂寺院址出土遺物実測図(34-B類丸瓦一)

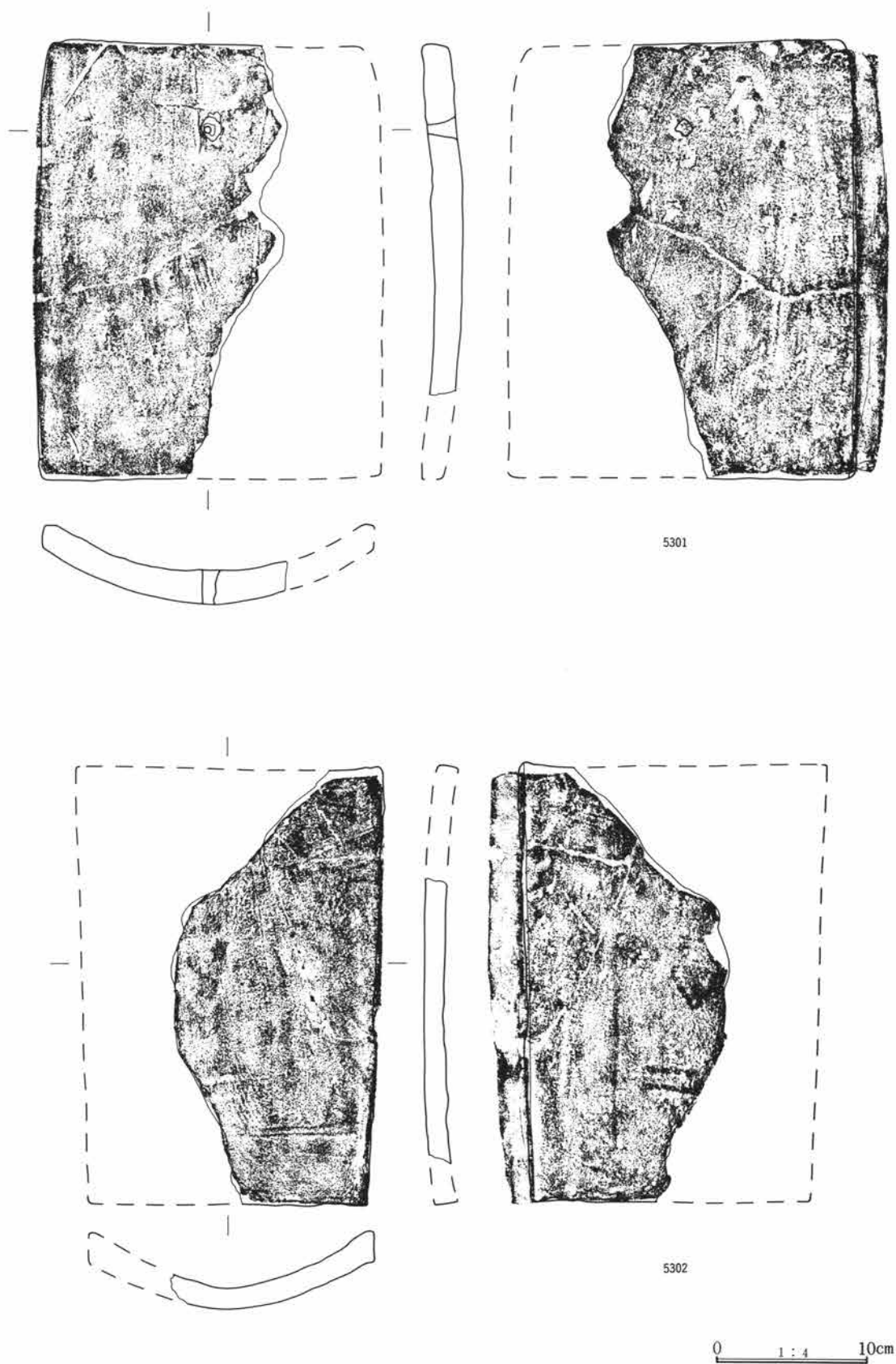


第176図 大御堂寺院址出土遺物実測図(35)－B類丸瓦－

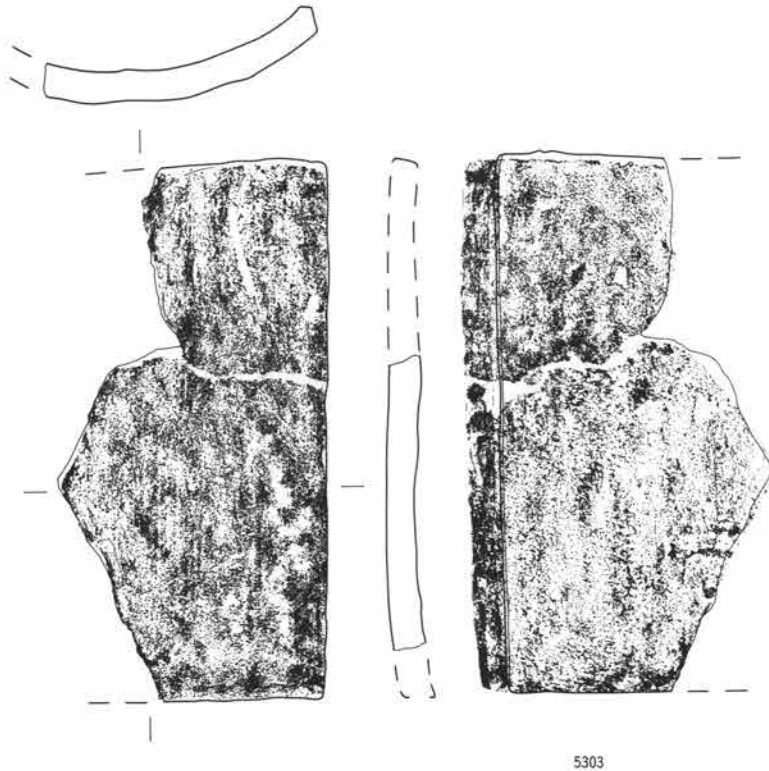


0 1:4 10cm

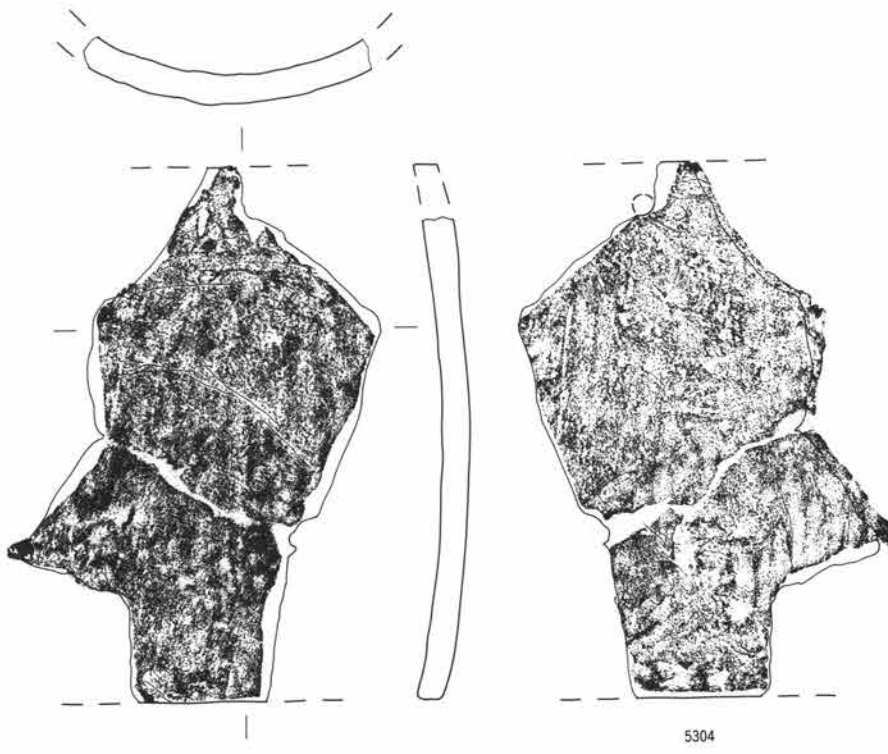
第177図 大御堂寺院址出土遺物実測図(36)―B類丸瓦―



第178図 大御堂寺院址出土遺物実測図(37)―B類平瓦―



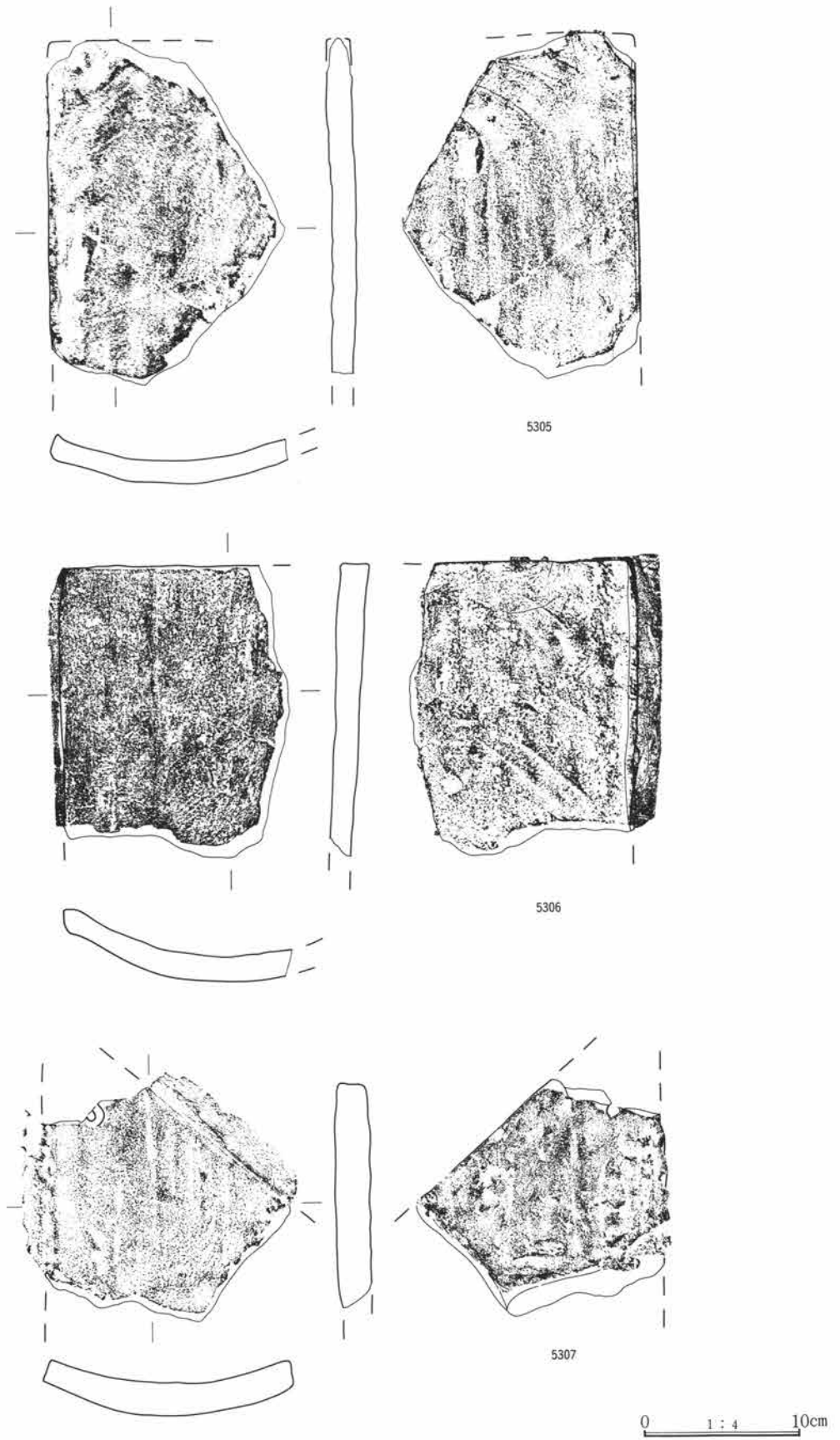
5303



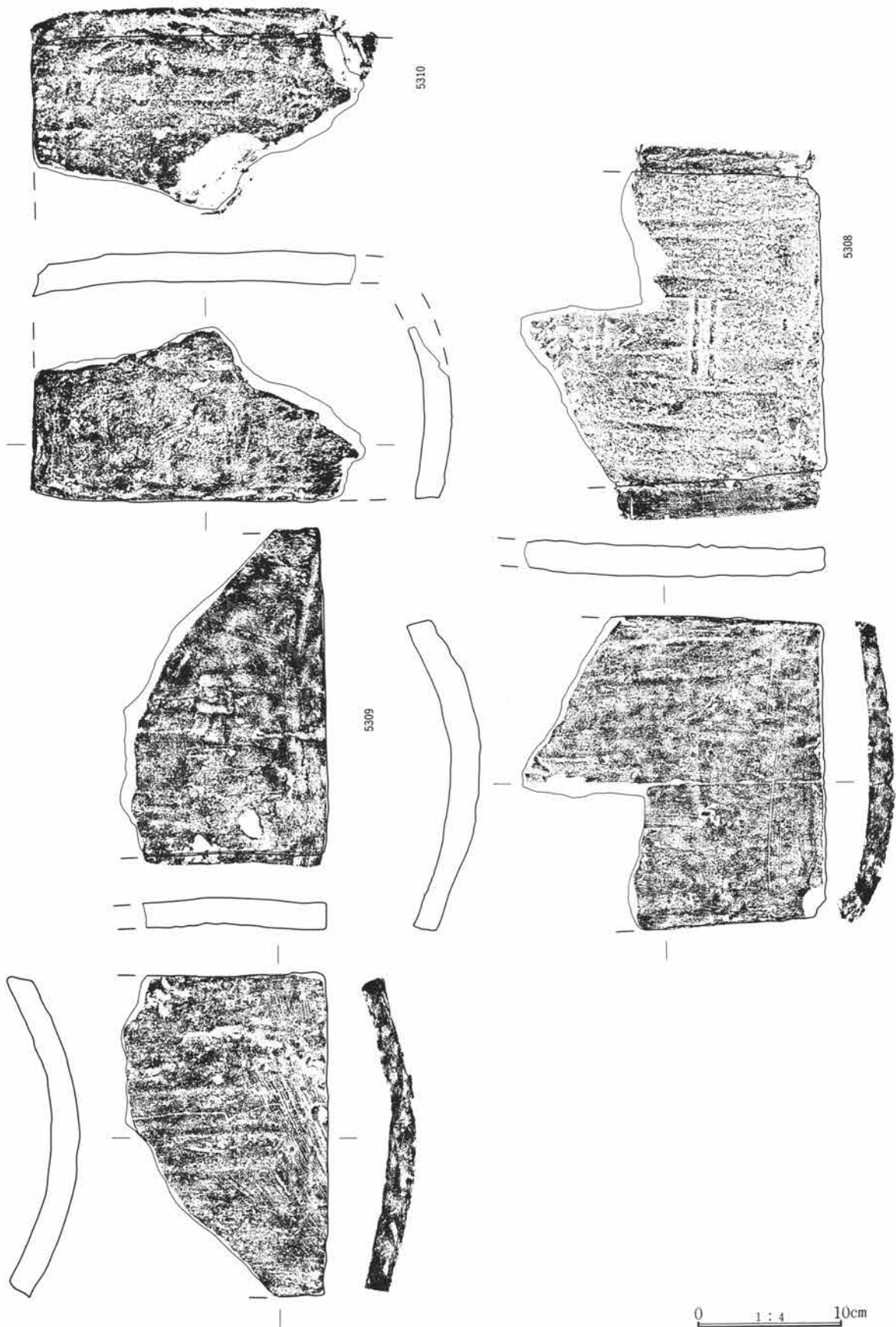
5304

0 1:4 10cm

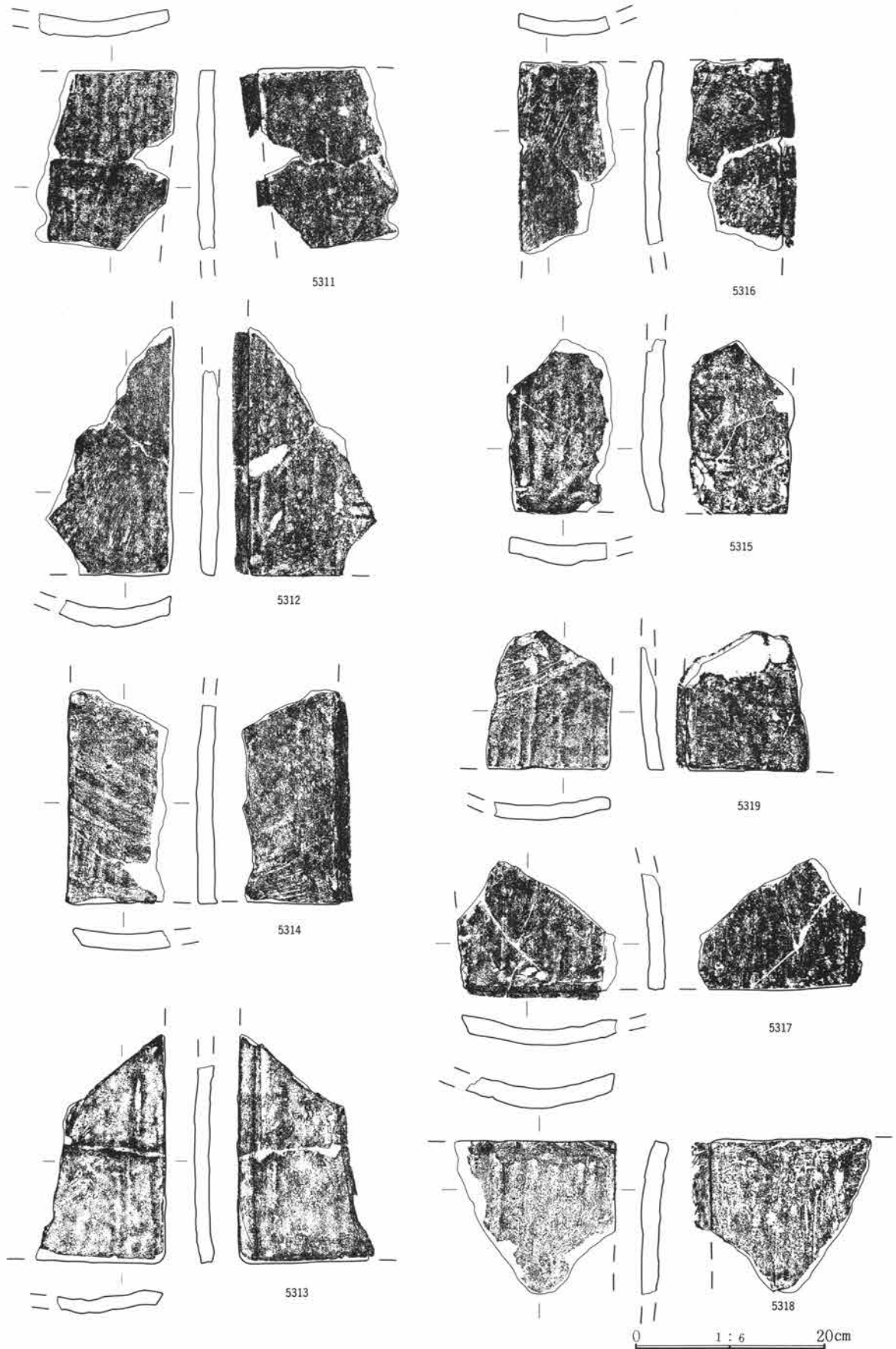
第179図 大御堂寺院址出土遺物実測図(38)―B類平瓦―



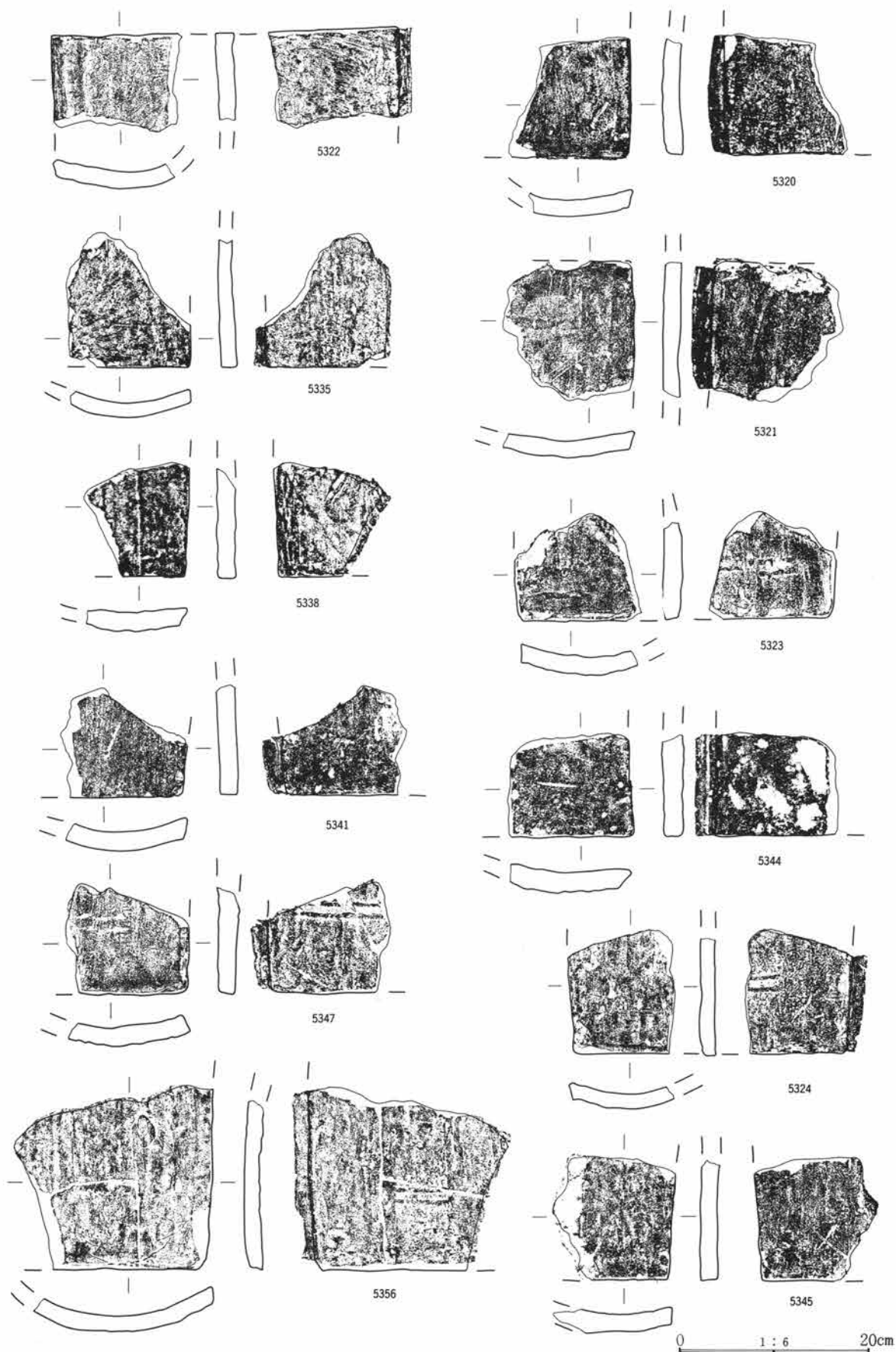
第180図 大御堂寺院址出土遺物実測図(39)―B類平瓦一



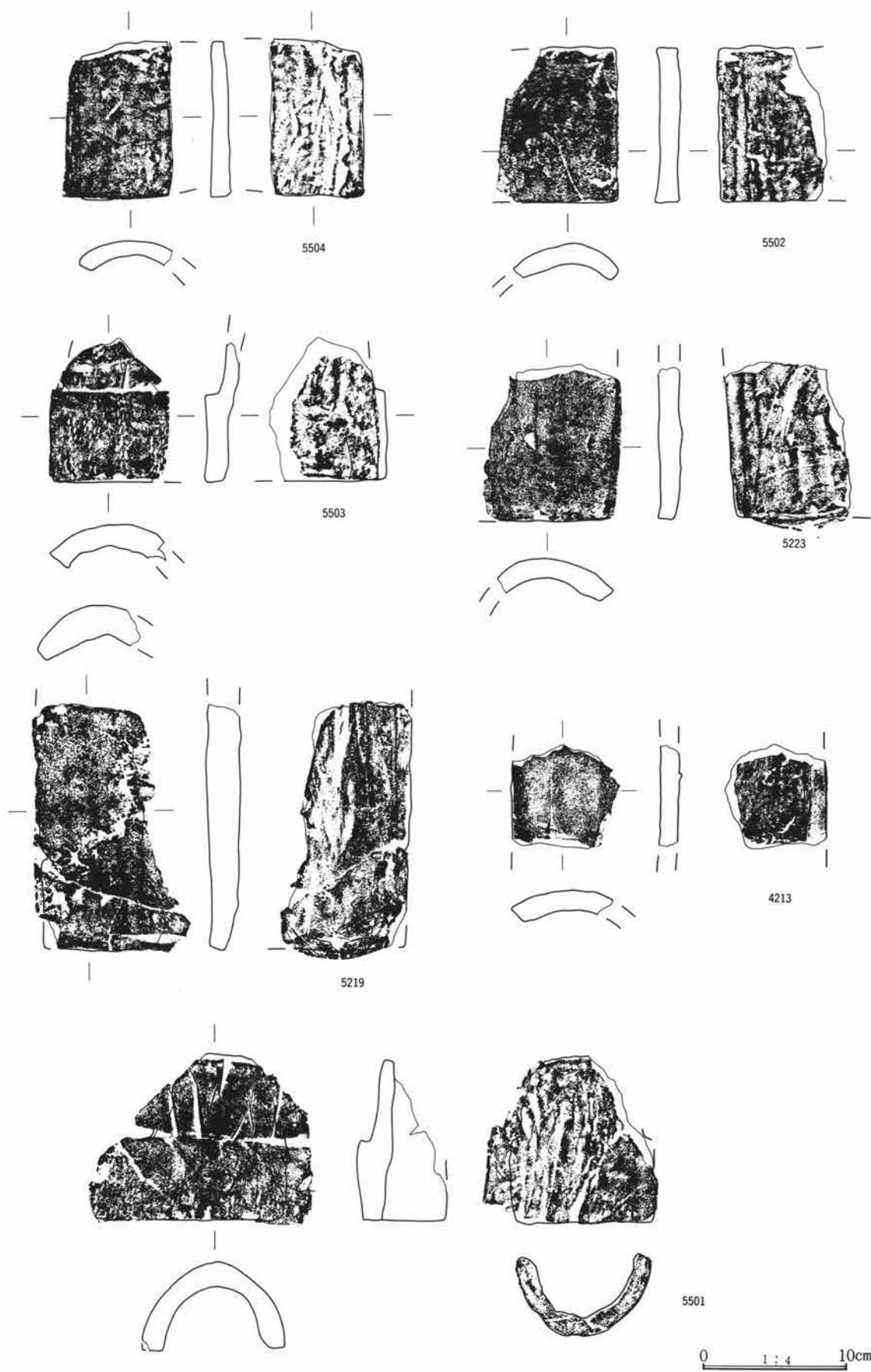
第181図 大御堂寺院址出土遺物実測図(40)―B類平瓦―



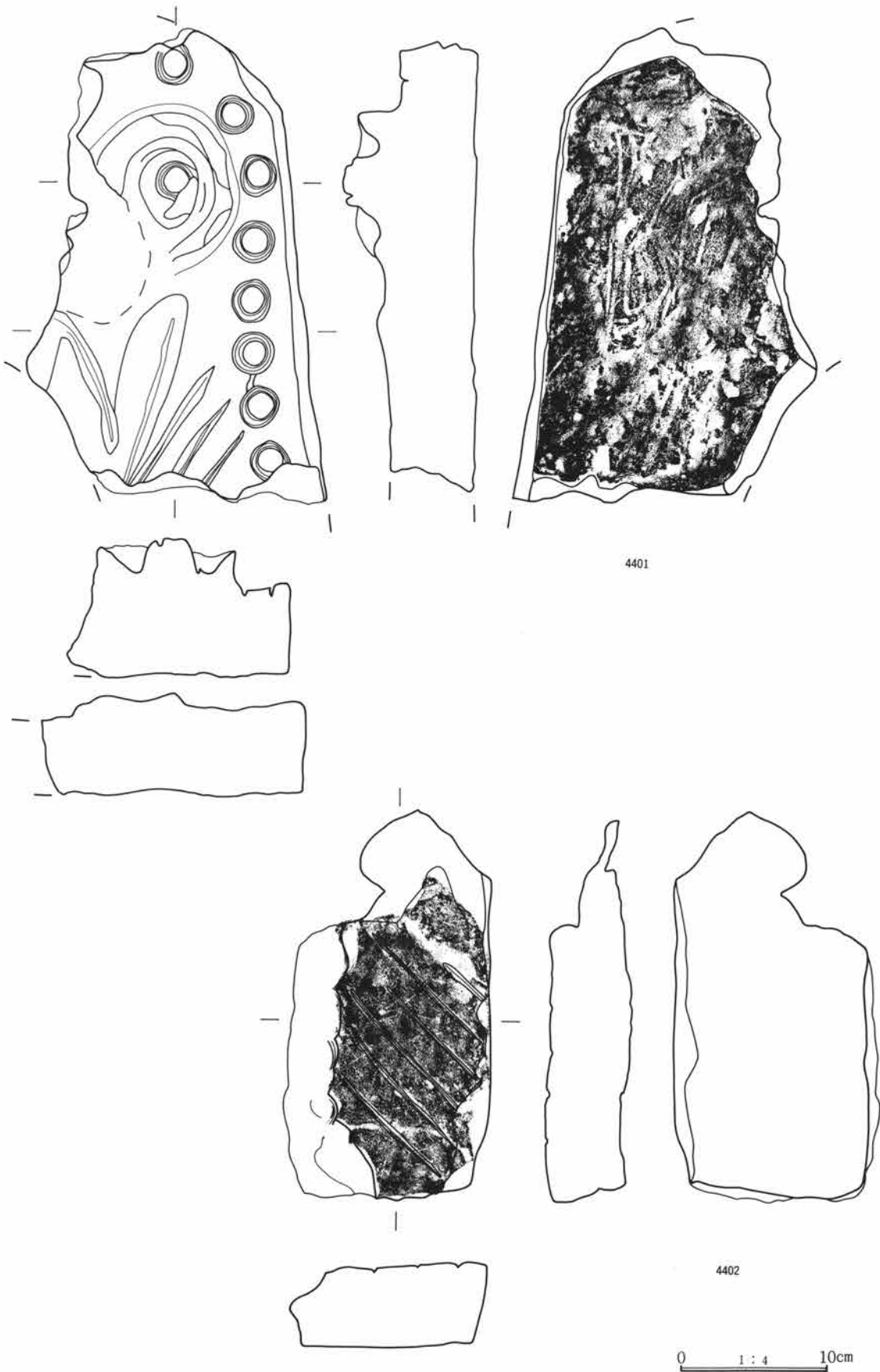
第182図 大御堂寺院址出土遺物実測図(4)―B類平瓦―



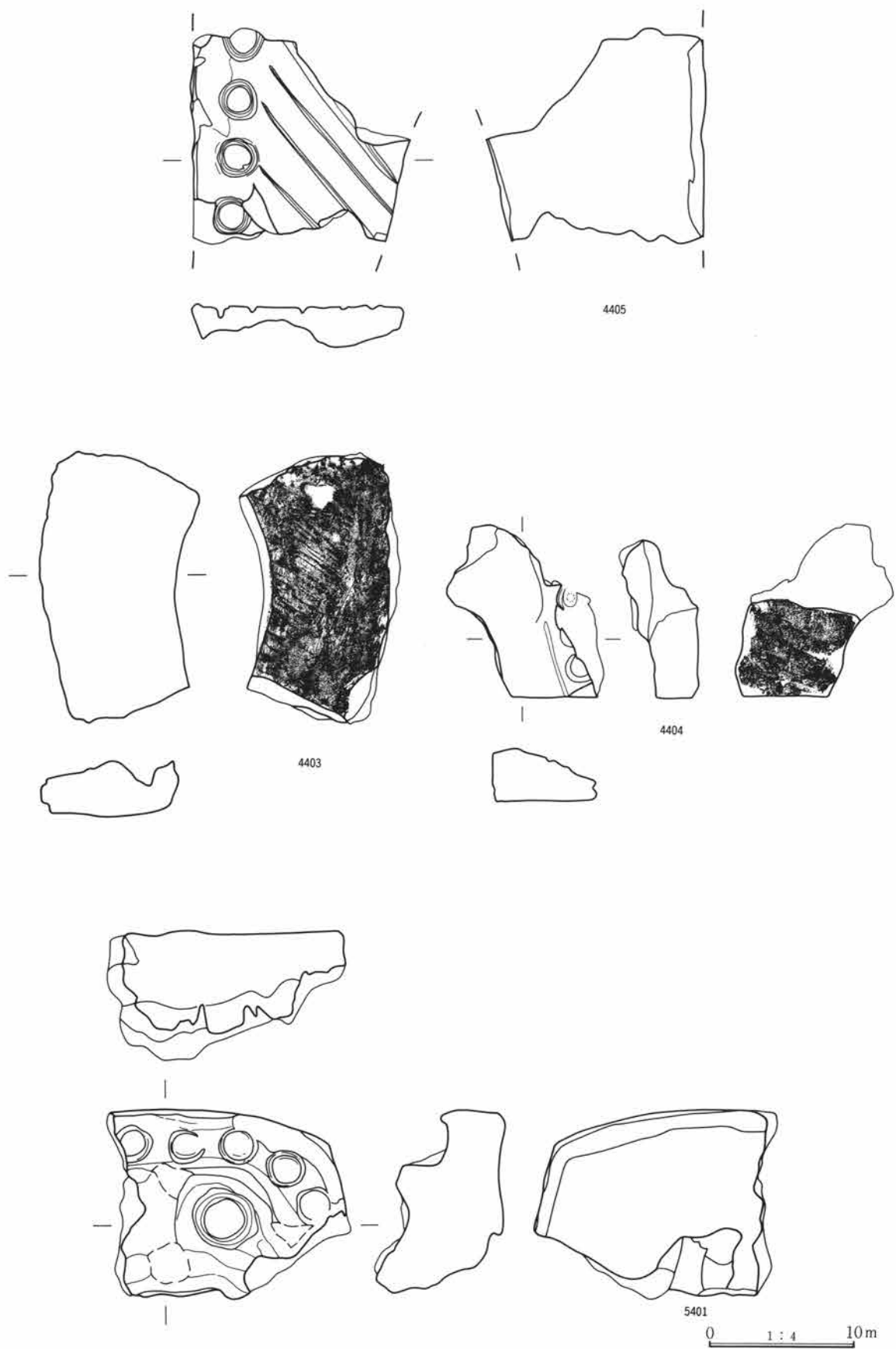
第183図 大御堂寺院址出土遺物実測図(42)－B類平瓦－



第184図 大御堂寺院址出土遺物実測図(43)―B類平瓦―



第185図 大御堂寺院址出土遺物実測図(44)―A類鬼瓦―



第186図 大御堂寺院址出土遺物実測図(45)―A・B類鬼瓦―

第17表 大御堂寺院址出土遺物観察表—瓦類—

遺物番号 種別	挿図 写真	出土位置・遺構 グリッド名	瓦当文様 (特徴)(mm)	長 幅	重量(g) 厚さ(mm)	胎土 焼成 色調	(表)丸瓦凸面・平瓦凹面 (内)丸瓦凹面・平瓦凸面
4001 A・軒丸	153 76	09 南池西 Be22g34	複弁蓮華文 径140	115 141	575 31	細粒砂。酸化。燻。 黒褐色(灰黄褐色)	
4002 A・軒丸	153 76	06 北池北西 Ay10・11g	複弁蓮華文 径(140)	89 132	344 28	細粒砂。酸化。燻。 黒褐色(暗褐色)	
4003 A・軒丸	153 76	08 南池 At21g06	複弁蓮華文 径(140)	81 79	104 15	細粒砂。酸化。燻。 黄褐色、燻	
4008 A・軒丸	153 76	11 中央B 第1号井戸跡	複弁蓮華文 径(140)	42 86	81 16	細粒砂。酸化。燻。 暗褐色	
4005 A・軒丸	154 76	04 北池東 Av16g01	巴文(左三巴)	141 92	207 19	微粒砂。酸化。燻。 灰褐色(明褐色)	角、左巻き
4004 A・軒丸	154 76	12 中央C Be13g54	巴文(左三巴) 径(130)	85 103	175 19	微粒砂。酸化。燻。 明褐色(一部灰色)	角、左巻き
4006 A・軒丸	154 76	12 中央C Bf22g12	巴文 径(130)	36 54	34 —	微粒砂。酸化。燻。 褐灰色(明褐色)	
4007 A・軒丸	154 76	08 南池 Be22g33	巴文 径(130)	160 122	700 14	微粒砂。酸化。燻。 褐灰色(明褐色)	凸:ナデ調整 凹:布目・糸切り
4101 A・軒平	155 76	09 南池西 Ba22g62	連珠文 高	76 111	320 22	微粒砂。酸化。燻。 褐灰色(褐色、灰色)	凹:ナデ調整、面取り(8mm) 凸:ナデ調整
4102 A・軒平	155 76	08 南池 Aw19g20	連珠文	68 130	330 33	微粒砂。酸化。燻。 褐灰色(明褐、灰色)	凹:ナデ調整 凸:ナデ調整
4104 A・軒平	155 76	12 中央C Be13g35	連珠文	75 95	130 22	微粒砂。酸化。燻。 暗褐色(濃灰色)	凹:剝離 凸:剝離
4103 A・軒平	156 76	09 南池西 Ba22g60	連珠文	88 113	300 21	微粒砂。酸化。燻。 黒褐色(明褐色)	凹:布目でナデ、面取り(8mm) 凸:ナデ調整
4107 A・軒平	156 77	10 中央A Bh19g16	宝相華唐草文 幅(240)	224 155	660 24	細粒砂。酸化。燻。 暗褐色(暗赤褐色)	凹:布目でナデ 凸:ヘラ調整、表面風化
4108 A・軒平	156 77	09 南池西 Bc22g01	宝相華唐草文 幅(240)	105 103	400 21	細粒砂。酸化。燻。 黒褐色(暗褐色)	凹:剝離 凸:ヘラ削り痕
4105 A・軒平	157 77	12 中央C Bd21g25	宝相華唐草文 幅(240)	164 245	1190 30	細粒砂。酸化。燻。 灰黄褐色(暗褐色)	凹:布目 凸:ナデ調整、剝離
4106 A・軒平	157 77	10 中央A Bi19g15	宝相華唐草文 幅(240)	160 149	1100 23	細粒砂。酸化。燻。 黒褐色(暗褐色)	凹:布目・面取り(7~16mm) 凸:風化
4109 A・軒平	158 77	09 南池西 Be21g41	宝相華唐草文 幅(240)	153 109	615 26	細粒砂。酸化。燻。 黒褐色(暗褐色)	凹:布目・面取り(10mm) 凸:ヘラ削り痕
4110 A・軒平	158 78	08 南池 Au21g06	宝相華唐草文 幅(240)	82 124	355 32	中粒砂。酸化。燻。 燻(鈍い褐色)	凹:剝離 凸:風化と剝離
4111 A・軒平	158 78	09 南池西 Bb23g02	宝相華唐草文 幅(240)	(143) (126)	560 24	細粒砂。酸化。燻。 燻(暗褐色)	凹:一部剝離 凸:風化
4201 B ₂ ・丸	159 79	10 中央A Bg18g09		— 115	1150 19	粗粒砂、還元 灰黄色(一部黒)	凸:縄目敲き 凹:布目・糸切り
4202 A ₂ ・丸	159 78	09 南池西 Be21g18		187 123	605 17	微粒砂。酸化。燻。 明赤褐色(灰白色)	凸:縄目敲き 凹:布目
4203 A ₃ ・丸	159 78	09 南池西 Bd21g56		250 98	490 17	微粒砂。酸化。燻。 鈍い黄橙(黄褐色)	凸:縄目敲き 凹:布目・面取り(15mm)
4208 A ₄ ・丸	159 78	12 中央C Be11g01		119 90	255 20	中粒砂。酸化。燻。 黄褐色(灰色混入)	凸:縄目敲き 凹:しほり
4204 A ₃ ・丸	160 78	13 北西部A Bf10g33		121 —	410 15	細粒砂。酸化。燻。 赤褐色(一部黒色)	凸:縄目敲き 凹:布目
4205 A ₄ ・丸	160 78	05 北池 Ay11g45		160 89	235 17	中粒砂。酸化。燻。 黒褐色(黄褐色)	凸:剝離 凹:布目
4206 A ₅ ・丸	160 78	14 北西部B Bh10g02		172 87	395 22	細粒砂。酸化。燻。 黒褐色(鈍い褐色)	凸:縄目敲き 凹:布目
4207 A ₃ ・丸	160 78	14 北西部B Bg10g96		183 100	435 20	細粒砂。酸化。燻。 鈍い黄褐色(黒色)	凸:縄目敲き 凹:布目・糸切り
4209 A ₁ ・丸	160 79	05 北池 Ay10g14		112 79	235 18	細粒砂。酸化。燻。 明褐色(黒色)	凸:縄目敲き 凹:布目
4210 A ₁ ・丸	160 78	05 北池 Ay11g41		123 94	210 12	微粒砂。酸化。燻。 黒褐色(明褐色)	凸:縄目敲き 凹:布目

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

遺物番号 種別	挿図 写真	出土位置・遺構 グリッド名	瓦当文様 (特徴)(mm)	長 幅	重量(8) 厚さ(mm)	胎土 焼成 色調	(表)丸瓦凸面・平瓦凹面 (内)丸瓦凹面・平瓦凸面
4211	160	09 南池西		138	165	微粒砂。酸化。燻。	凸：縄目敲き
A ₂ ・丸	79	Be21g34		65	18	黒褐色(黄橙色)	凹：布目
4212	160	09 南池西		101	205	微粒砂。酸化。燻。	凸：縄目敲き
A ₁ ・丸	79	Bd22g15		89	18	橙色(鈍い橙色)	凹：布目
4301	161	10 中央A		232	1050	中粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₄ ・平	79	Bi19g35		167	20	暗褐色(一部黒色)	凸：鋸歯状敲き(32mm)
4302	161	09 南池西		187	950	細粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₃ ・平	79	Bd22g05		143	22	黒褐色(褐色)	凸：敲き
4304	161	14 北西部B		171	1050	細粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂、糸切り
A ₃ ・平	80	Bj12g01		183	25	黒褐色(明黄褐色)	凸：敲き
4306	162	08 南池		203	730	微粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₄ ・平	80	Ay20g42		129	22	黒褐色(明褐色)	凸：鋸歯状敲き(35mm)
4303	162	09南池西		128	1200	細粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₃ ・平	79	Bc21g71		157	31	暗褐色(灰黄褐色)	凸：敲き(20mm)糸切り跡あり
4305	162	09 南池西		206	670	中粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₄ ・平	80	Bd21g29		134	22	明黄褐色(黄褐色)	凸：鋸歯状敲き(32mm)
4307	162	09 南池西		167	800	細粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₃ ・平	80	Bd21g57		148	25	黒褐色(灰褐色)	凸：敲き
4309	163	09 南池西		155	470	微粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂、面取り(7mm)
A ₂ ・平	80	Bc21g78		120	21	灰色(明赤褐色)	凸：鋸歯状敲き(37mm)
4316	163	05 北池		115	630	細粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₃ ・平	81	Au16g		163	25	鈍い褐色(褐色)	凸：敲き
4310	163	09 南池西		212	645	細粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₄ ・平	80	Bd21g25		134	22	黒褐色(鈍い褐色)	凸：鋸歯状敲き
4311	163	09 南池西		130	580	細粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₄ ・平	80	Bc22g34		148	22	黒褐色(灰黄褐色)	凸：鋸歯状敲き(34mm)
4314	163	09 南池西		135	470	中粒砂。酸化。燻。	凹：糸切り
A ₃ ・平	81	Be21g47		133	25	黒褐色(鈍い黄褐色)	凸：鋸歯状敲き
4320	163	12 中央C		148	540	微粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₂ ・平	81	Bf18g06		149	24	灰色(赤褐色)	
4312	163	09 南池西		133	605	中粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₄ ・平	80	Bd21g34		130	23	黒褐色(明黄褐色)	凸：鋸歯状敲き(35mm)
4308	163	10 中央A		166	635	細粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₃ ・平	80	Be15g01		134	24	黒褐色(鈍い褐色)	凸：鋸歯状敲き(44mm)
4321	164	12 中央C		146	505	細粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₃ ・平	81	Be11g07		118	25	黒褐色(鈍い褐色)	凸：鋸歯状敲き(29mm)
4322	164	09 南池西		155	450	微粒砂。酸化。燻。	凹：布目・面取り(10mm)
A ₁ ・平	81	Bd21g05		129	20	灰色(赤褐色・灰色)	
4327	164	11 中央B		167	500	中粒砂。酸化。燻。	凹：布目
A ₃ ・平	81	Bg22g09		106	26	灰褐色(鈍い赤褐色)	凸：敲き
4326	164	08 南池		98	345	中粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₃ ・平	81	At21g13		139	23	灰褐色(鈍い褐色)	凸：鋸歯状敲き(32mm)
4328	164	09 南池西		118	375	中粒砂。酸化。燻。	
A ₃ ・平	81	Bc21g14		108	25	黒色(鈍い赤褐色)	
4330	164	05 北池		145	400	細粒砂。酸化。燻。	凹：布目・面取り(10mm)
A ₃ ・平	81	Ax12g10		78	30	黒褐色(鈍い赤褐色)	凸：敲き
4337	164	14 北西部B		133	370	細粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₃ ・平	81	Bg10g215		101	25	黒色(鈍い褐色)	凸：鋸歯状敲き(32mm)
4342	164	11 中央B		145	360	微粒砂。酸化。燻。	凹：布目
A ₁ ・平	82	第1号井戸跡		123	20	燻し(明赤褐色)	
4340	165	13 北西部A		77	160	細粒砂。酸化。燻。	凹：布目、糸切り
A ₃ ・平	81	Bf10g86		76	26	黒色(鈍い赤褐色)	凸：糸切り
4344	165	11 中央B		104	385	細粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂、面取り(14mm)
A ₃ ・平	82	第1号井戸跡		117	26	黒褐色(鈍い褐色)	凸：敲き(35mm)
4343	165	11 中央B		200	705	細粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₃ ・平	82	第1号井戸跡		123	25	黒褐色(灰褐色)	凸：鋸歯状敲き(36mm)
4345	165	11 中央B		92	175	細粒砂。酸化。燻。	凹：布目、面取り(15mm)
A ₃ ・平	82	第1号井戸跡		73	24	黒褐色(鈍い褐色)	凸：敲き
4346	165	11 中央B		55	290	細粒砂。酸化。燻。	凹：離れ砂
A ₃ ・平	82	第1号井戸跡		142	24	黒色(灰褐色)	凸：鋸歯状敲き(40mm)

第4節 寺院址出土遺物

遺物番号 種別	挿図 写真	出土位置・遺構 グリッド名	瓦当文様 (特徴)(mm)	長 幅	重量(8) 厚さ(mm)	胎土 焼成 色調	(表)丸瓦凸面・平瓦凹面 (内)丸瓦凹面・平瓦凸面
4348 A ₅ ・平	165 82	11 中央B 第4号土坑		143 90	420 26	細粒砂。酸化。燻。 鈍い褐色	凹：糸切り 凸：敲き
4347 A ₂ ・平	165 82	11 中央B 第4号土坑		113 86	310 21	微粒砂。酸化。燻。 灰黄褐色(明褐色)	凹：離れ砂 凸：敲き
4349 A ₂ ・平	165 82	01 東部 第16号溝状遺構		166 191	670 21	微粒砂。酸化。燻。 鈍い褐色	凹：離れ砂
5001 B ₁ ・軒丸	166 83	10 中央下段 Be15g Pit1-1	巴文 径132	185 130	1300 19	細粒砂、還元 灰色	凸：ナデ、角、左巻 凹：布目でナデ調整
5011 B ₂ ・軒丸	166 83	09 南池西 Ba23g01	巴文	253 119	1100 18	細粒砂、還元 黒色	凸：ナデ 凹：布目、糸切り
5002 B ₂ ・軒丸	167 83	13 北西部A Bf09g93	巴文 径120	104 119	510 20	細粒砂、還元 鈍い橙色、燻し	凸：ナデ 凹：ナデ調整
5010 B ₂ ・軒丸	167 83	05 北池 Ah10g17	巴文 径120	79 91	220 19	細粒砂、還元 黄褐色(灰色)	凸：ナデ 凹：糸切り
5008 B ₁ ・軒丸	167 85	05 北池 Av14g13	巴文	115 61	130 25	細粒砂、還元 黄褐色(黒色)	
5007 B ₁ ・軒丸	167 83	13 北西部A Be08g01	巴文	81 42	45 —	細粒砂、還元 灰色	
5003 B ₂ ・軒丸	167 83	13 北西部A Be11g87	巴文	86 118	215 23	細粒砂、還元 黒色(黄灰褐色)	凸：丸、右巻 凹：—
5005 B ₁ ・軒丸	167 83	13 北西部A Bg10g49	巴文	102 78	135 24	細粒砂、還元 黒色(灰色)	凸：丸、右巻
5004 B ₁ ・軒丸	167 83	13 北西部A Bg10g49	巴文	134 83	160 28	細粒砂、還元 灰色	
5006 B ₂ ・軒丸	167 83	06 北池北西 Ax12g01	巴文 径120	48 77	55 —	細粒砂、還元 灰色	凸：角、左巻
5101 B ₁ ・軒平	168 84	13 北西部A 均正唐草文 幅210		132 210	750 21	細粒砂、還元 灰色、一部表面黄褐色	凹：へら削り 凸：ナデ
5102 B ₁ ・軒平	168 84	09 南池西 均正唐草文		121 153	665 20	細粒砂、還元 黒色(灰色)	凹：へら削り 凸：ナデ
5103 B ₂ ・軒平	168 84	13 北西部A 均正唐草文		127 188	460 19	細粒砂、還元 黒色(灰色)	凹：へら削り 凸：ナデ
5104 B ₁ ・軒平	169 84	11 中央B Bh15g02	均正唐草文	131 108	360 17	細粒砂、還元 濃灰色	凹：へら削り 凸：糸切り、ナデ
5119 B ₂ ・軒平	169 85	09 南池西 均正唐草文 高32		87 109	345 21	中粒砂、還元 明黄褐色(一部灰色)	凹：風化 凸：へら削り痕
5118 B ₂ ・軒平	169 85	09 南池西 均正唐草文 高32		79 57	200 21	中粒砂、還元 黒(鈍い褐色)	凹：風化 凸：へら削り痕
5105 B ₂ ・軒平	170 84	15 西部 均正唐草文 高32		53 140	230 19	細粒砂、還元 黒(黄褐色一部黒)	凹：風化 凸：へら削り
5106 B ₂ ・軒平	170 84	10 中央A 均正唐草文 高32		55 114	195 24	中粒砂、還元 黒(灰色)	凹：ナデ 凸：へら削り
5107 B 軒平	170 85	13 北西部 均正唐草文 Bg10g-77		33 32	100 19	中粒砂、還元 灰色	
5108 B ₁ ・軒平	170 84	13 北西部 均正唐草文 Bf10g209		53 76	105 18	中粒砂、還元 灰色	凹：ナデ 凸：へら削り痕
5110 B ₂ ・軒平	170 84	09 南池西 均正唐草文 高32		64 64	120 21	細粒砂、還元 黒(灰色)	凹：風化 凸：へら削り痕
5109 B ₁ ・軒平	170 85	09 南池西 均正唐草文 Be08g05		30 70	100 20	中粒砂、還元 灰黄色	凹：ナデ
5111 B ₁ ・軒平	170 84	14 北西部B 均正唐草文		39 100	90 17	細粒砂、還元 灰色	凹：ナデ 凸：へら削り痕
5112 B ₁ ・軒平	171 85	11 中央B 均正唐草文		39 77	60 19	細粒砂、還元 灰色	
5113 B ₁ ・軒平	171 85	14 北西部B 均正唐草文 Bg10g116		42 90	535 16	細粒砂、還元 灰色	
5114 B ₂ ・軒平	171 85	13 北西部A 均正唐草文 高32		33 105	55 17	中粒砂、還元 鈍い褐色(黒)	
5115 B ₂ ・軒平	171 85	13 北西部A 均正唐草文 高32		42 58	80 16	中粒砂、還元 燻(鈍い褐色)	

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

遺物番号 種別	挿図 写真	出土位置・遺構 グリッド名	瓦当文様 (特徴)(mm)	長 幅	重量(g) 厚さ(mm)	胎土 焼成 色調	(表)丸瓦凸面・平瓦凹面 (内)丸瓦凹面・平瓦凸面
5116 B ₂ ・軒平	171 85	13 北西部A Bf10g162	均正唐草文 高32	90 70	295 19	細粒砂、還元 黒(一部灰黄褐色)	凹:ナデ 凸:ヘラ削り
5117 B ₁ ・軒平	171 85	05 北池 Au16g	均正唐草文	70 147	365 18	細粒砂、還元 黒(灰色)	凹:ナデ 凸:ヘラ削り
5201 B ₂ ・丸	172 86	09 南池西 Ba23g01		257 108	1300 18	細粒砂、還元 灰黄褐色(一部灰色)	凸:縄目敲き 凹:布目、糸切り
5202 B ₂ ・丸	172 86	09 南池西 Ba22g47		279 116	995 20	中粒砂、還元 灰色(鈍い褐色)	凸:縄目敲き 凹:布目、糸切り
5203 B ₁ ・丸	173 87	13 北西部A Bf10g172		313 109	1000 20	細粒砂、還元 灰色	凸:ヘラナデ調整 凹:布目、糸切り
5204 B ₂ ・丸	173 86	09 南池西 Be22g33		182 121	800 20	細粒砂、還元 灰色	凸:縄目敲き 凹:布目、糸切り
5208 B ₂ ・丸	173 86	09 南池西 Be22g47		205 104	460 16	細粒砂、還元 灰色一部鈍い褐色	凸:縄目敲き、ヘラ調整 凹:糸切り
5206 B ₂ ・丸	174 86	09 南池西 Be22g33		141 110	420 15	細粒砂、還元 灰黄褐色(一部黒色)	凸:縄目敲き 凹:布目、ナデ
5205 B ₂ ・丸	174 86	13 北西部A Bf10g87		190 111	525 20	細粒砂、還元 灰黄褐色(黒色)	凸:ヘラナデ 凹:布目、糸切り
5209 B ₂ ・丸	174 86	09 南池西 Bd22g34		208 107	500 16	細粒砂、還元 黒(灰色)	凸:ヘラ調整 凹:布目、ヘラナデ
5210 B ₁ ・丸	174 87	09 南池西 Ba22g29		158 112	535 22	細粒砂、還元 灰色	凸:縄目敲き 凹:布目、ナデ
5207 B ₂ ・丸	174 86	13 北西部 Bf10g26		160 110	550 15	細粒砂、還元 灰色	凸:縄目敲き 凹:布目、糸切り
5211 B ₂ ・丸	174 87	09 南池西 Bf10g16		140 114	465 20	細粒砂、還元 灰色	凸:縄目敲き 凹:糸切り
5212 B ₂ ・丸	174 87	08 南池 Ax19g01		128 96	280 22	細粒砂、還元 黄褐色(一部灰色)	凸:ヘラ削り 凹:布目
5216 B ₁ ・丸	175 87	13 北西部 Bf10g166		113 98	250 16	中粒砂、還元 灰色	凸:ヘラナデ 凹:布目
5213 B ₂ ・丸	175 87	09 南池西 Be22g46		123 109	415 20	細粒砂、還元 濃灰色	凸:ヘラナデ 凹:布目、糸切り・ナデ
5125 B ₁ ・丸	175 87	09 南池西 Bf10g84		88 117	305 19	細粒砂、還元 灰色	凸:ヘラナデ 凹:布目、ナデ
5214 B ₁ ・丸	175 87	13 北西部 Bf10g157		111 109	290 16	細粒砂、還元 灰色	凸:縄目敲き 凹:布目、糸切り、ナデ
5220 B ₂ ・丸	175 88	08 南池 Ay22g02		153 94	235 19	中粒砂、還元 鈍い褐色(黒色)	凸:縄目敲き 凹:布目、糸切り、ナデ
5217 B ₂ ・丸	175 87	09 南池西 Bd22g56		171 85	380 16	細粒砂、還元 黄灰褐色(黒色)	凸:縄目敲き 凹:糸切り
5221 B ₁ ・丸	175 88	11 中央B Bi19g10		155 94	330 18	細粒砂、還元 灰黄褐色(灰色)	凸:ヘラ調整 凹:布目、糸切り
5222 B ₂ ・丸	175 88	05 北池 Ay14g		127 70	170 15	細粒砂、還元 鈍い褐色(黒色)	凸:風化 凹:糸切り
5224 B ₂ ・丸	175 88	13 北西部 Bg09g03		90 101	185 17	細粒砂、還元 黒色一部鈍い褐色	凸:縄目敲き 凹:布目
5225 B ₂ ・丸	175 88	13 北西部 Bg09g95		132 90	245 19	中粒砂、還元 黒色(灰色)	凸:風化 凹:布目、ナデ
5227 B ₁ ・丸	176 88	14 北西部B Bg09g185		127 93	260 16	細粒砂、還元 濃灰色	凸:ヘラナデ 凹:布目、糸切り
5228 B ₁ ・丸	176 88	14 北西部B Bg09g185		139 88	265 17	細粒砂、還元 濃灰色(灰色)	凸:ヘラナデ 凹:布目、糸切り
5226 B ₁ ・丸	176 88	14 北西部B Bg09g		205 94	420 17	細粒砂、還元 濃灰色(灰色)	凸:ヘラナデ 凹:布目、糸切り
5229 B ₁ ・丸	176 89	14 北西部B Bg09g17		155 80	240 16	細粒砂、還元 濃灰色(灰色)	凸:ヘラナデ 凹:布目、糸切り
5232 B ₂ ・丸	176 89	13 北西部A Bf10g135		138 101	340 20	細粒砂、還元 燻(灰黄褐色一部黒)	凸:風化 凹:糸切り
5234 B ₂ ・丸	176 89	05 北池 As13g		101 90	290 20	細粒砂、還元 浅黄色(黒)	凸:風化 凹:糸切り

第4節 寺院址出土遺物

遺物番号 種別	挿図 写真	出土位置・遺構 グリッド名	瓦当文様 (特徴)(mm)	長 幅	重量(g) 厚さ(mm)	胎土 焼成 色調	(表)丸瓦凸面・平瓦凹面 (内)丸瓦凹面・平瓦凸面
5230 B ₁ ・丸	176 89	14 北西部B Bg10g84		95 105	220 16	細粒砂、還元 灰色	凸：ヘラナデ 凹：布目、ナデ
5233 B ₁ ・丸	176 89	08 南池 Av22g07		99 90	200 19	細粒砂、還元 灰色	凸：ヘラナデ 凹：布目、糸切り
5235 B ₂ ・丸	176 89	05 北池 Au13g		110 79	210 19	細粒砂、還元 灰黄色(黒)	凸：風化 凹：糸切り
5236 B ₁ ・丸	176 89	13 北西部A Bc12g06		62 55	70 16	細粒砂、還元 灰色	凸：ヘラナデ 凹：布目、ナデ
5231 B ₂ ・丸	177 89	13 北西部A Bf09g177		224 93	525 19	細粒砂、還元 黒(灰黄褐色)	凸：縄目敲き 凹：糸切り
5012 B ₂ ・丸	177 88	05 北池 Au12g13		186 92	370 18	細粒砂、還元 黄灰褐色(黒)	凸：ヘラナデ 凹：布目、糸切り
5237 B ₂ ・丸	177 88	13 北西部A Bf09g177		230 95	195 18	細粒砂、還元 灰黄色(黒)	凸：ヘラナデ 凹：糸切り痕
5301 B ₁ ・平	178 90	09 南池西 Bd22g33		281 163	1025 18	中粒砂、還元 灰色	凹：糸切り、横ナデ(面取り40mm)
5302 B ₂ ・平	178 90	09 南池西 Bd22g31		286 133	800 13	細粒砂、還元 黒(灰色)	凹：糸切り横ナデ(面取り45mm) 凸：(二型)
5303 B ₂ ・平	179 85	13 北西部A Bf10g04		282 143	1000 15	細粒砂、還元 浅黄、燻(一部黒)	凹：不明(面取り18mm) 凸：(二型)
5304 B ₂ ・平	179 90	09 南池西 Bd22g51		279 152	820 15	中粒砂、還元 黄褐色、燻(灰色)	凹：糸切り横ナデ(面取り20mm) 凸：ヘラ削り痕
5305 B ₂ ・平	180 91	14 北西部B Bg09g119		213 150	615 16	細粒砂、還元 灰色(黄褐色、灰色)	凹：糸切り横ナデ 凸：ヘラナデ
5306 B ₁ ・平	180 91	14 北西部B By10g83		185 145	645 16	細粒砂、還元 濃灰色(灰色)	凹：糸切り横ナデ 凸：ヘラ調整
5307 B ₁ ・平	180 85	06 北池北西 Ay10g03	隅切瓦	143 158	550 22	細粒砂、還元 灰色	凹：ヘラナデ 凸：ヘラナデ
5308 B ₁ ・平	181 90	10 中央A Be15g11		208 215	1100 20	細粒砂、還元 濃灰色(灰色)	凹：糸切り横ナデ(面取り34mm) 凸：(二型)
5309 B ₁ ・平	181 91	09 南池西 Ba22g39		143 223	810 18	細粒砂、還元 灰色	凹：糸切りヘラナデ 凸：ヘラ調整
5310 B ₁ ・平	181 91	09 南池西 Bb21g		227 118	630 19	細粒砂、還元 灰色	凹：糸切り横ナデ(面取り28mm) 凸：ヘラ調整
5311 B ₂ ・平	182 91	14 北西部B Bg10g81		184 135	620 15	中粒砂、還元 黒(明褐色)	凹：ヘラナデ 凸：ヘラナデ
5312 B ₂ ・平	182 91	14 北西部B Bg09g118		253 132	670 17	中粒砂、還元 灰黄褐色(灰褐色)	凹：ヘラナデ(面取り28mm) 凸：(二型)
5313 B ₂ ・平	182 92	14 北西部B Bg09g167		235 113	585 14	細粒砂、還元 灰黄褐色(黄褐、黒)	凹：糸切り、ナデ(面取り21mm) 凸：ヘラ調整
5314 B ₁ ・平	182 92	13 北西部A Bf09g128		216 103	550 17	細粒砂、還元 灰色	凹：糸切り横ナデ 凸：糸切りヘラ調整
5315 B ₁ ・平	182 91	11 中央B Bf18g03		179 107	450 19	細粒砂、還元 灰色	凹：糸切り横ナデ(面取り34mm) 凸：(二型)
5316 B ₁ ・平	182 91	08 南池 Ay22g10		198 98	385 15	細粒砂、還元 濃灰色(灰色)	凹：糸切り横ナデ(指押痕) 凸：ヘラナデ
5317 B ₁ ・平	182 92	09 南池西 Bd21g22		135 163	445 17	中粒砂、還元 黄灰褐色(一部黒)	凹：不明 凸：不明
5318 B ₁ ・平	182 92	11 中央B Bi19g26		158 167	565 19	細粒砂、還元 濃灰色(灰色)	凹：布目糸切り、ヘラナデ 凸：ヘラ調整
5319 A ₁ ・平	182 92	09 南池西 Bd21g27		141 129	330 15	微粒砂、酸化 灰黄褐色(灰色)	凹：布目、糸切り 焼成、やや還元
5322 B ₁ ・平	183 92	14 北西部B Bg11g51		100 137	340 18	細粒砂、還元 灰色	凹：糸切り横ナデ 凸：糸切りヘラナデ
5335 B ₂ ・平	183 93	09 南池西 Bd22g52		127 138	330 15	中粒砂、還元 灰色	凹：糸切り横ナデ(面取り10mm) 凸：ヘラ削り
5338 B ₂ ・平	183 93	13 北西部A Bf09g27		116 109	300 19	細粒砂、還元 黄灰色	凹：ヘラ削り 凸：ヘラ調整
5341 B ₂ ・平	183 93	09 南池西 Bc21g63		114 126	345 19	細粒砂、還元 灰黄褐色	凹：不明 凸：ヘラナデ

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

遺物番号 種別	挿図 写真	出土位置・遺構 グリッド名	瓦当文様 (特徴)(mm)	長 幅	重量(g) 厚さ(mm)	胎土 焼成 色調	(表) 丸瓦凸面・平瓦凹面 (内) 丸瓦凹面・平瓦凸面
5347 B ₁ ・平	183 93	13 北西部A Bf09g180		128 114	365 19	中粒砂、還元 濃灰色(灰黄褐色)	凹：横ナデ(面取り25mm) 凸：ヘラ調整
5356 B ₁ ・平	183 82	11 中央B Bk27g135		183 207	950 17	細粒砂、還元 濃灰色(灰色)	凹：横ナデ(面取り25mm) 凸：ヘラ調整
5320 B ₁ ・平	183 92	14 北西部B Bg10g176		124 126	375 18	細粒砂、還元 濃灰色(灰色)	凹：糸切り横ナデ(面取り23mm) 凸：ヘラナデ
5321 B ₂ ・平	183 92	13 北西部A Bf09g69		142 138	465 18	中粒砂、還元 灰色、燻(暗褐色)	凹：糸切り横ナデ、一部風化 凸：ヘラナデ
5323 B ₂ ・平	183 92	09 南池西 Ba21g79		111 126	350 20	細粒砂、還元 灰色(暗褐色)	凹：糸切り横ナデ 凸：ヘラナデ
5344 A ₃ ・平	183 93	13 北西部A Bc13g04		104 130	395 19	細粒砂、酸化 黒(一部黄灰色)	凹：ヘラ削り痕 凸：一部剝離
5324 B ₁ ・平	183 92	05 北池 Av16g03		127 107	314 14	細粒砂、還元 灰色	凹：横ナデ(面取り42mm) 凸：(二型)
5345 B ₂ ・平	183 93	13 北西部A Be09g10		127 123	380 18	細粒砂、還元 黄灰褐色	凹：横ナデ 凸：ヘラナデ
5504 B道具瓦	184 89	14 北西部B Bg09g67		106 65	125 11	細粒砂、還元 黒(灰黄褐色)	凸：ヘラ調整 凹：布目
5502 B道具瓦	184 89	13 北西部A Bf09g179(2)		105 74	170 14	細粒砂、還元 黒、黄褐色(暗褐色)	凸：ヘラ調整痕 凹：ヘラ削り(面取り3~10mm)
5503 B道具瓦	184 89	14 北西部B Bg09g67		98 80	150 14	細粒砂、還元 黒色(灰色)	凸：縄目敲き 凹：布目
5223 B道具瓦	184 89	09 南池西 Bb21g30		107 84	195 15	細粒砂、還元 黒色(一部黄褐色)	凸：ヘラ調整痕 凹：糸切り(面取り6~8mm)
5219 B道具瓦	184 87	13 北西部A Bf10g25		169 89	395 22	細粒砂、還元 黒色(黄褐色)	凸：ヘラ削り痕 凹：糸切り、ヘラナデ
5501 B道具瓦	184 89	13 北西部A Bf09g179(2)		112 99	290 18	細粒砂、還元 黄褐色(一部黒色)	凸：ヘラ削り痕 凹：糸切り、ヘラナデ
4213 A道具瓦	184 79	10 中央A Ao11g3		69 70	100 12	細粒砂、還元 黒褐色(明赤褐色)	凸：ヘラ削り痕 凹：布目、ヘラナデ
4401 A・鬼	185 75	09 南池西 Be21g20		320 190	4300 92	微粒砂、酸化 灰黄褐色(黄橙色)	
4402 A・鬼	185 75	11 中央B Bf16g17・13		250 140	1900 56	微粒砂、酸化、燻 鈍い黄橙色(灰色)	
4403 A・鬼	186 75	09 南池西 Bd22g17		180 90	650 38	微粒砂、酸化 灰色(鈍い黄橙色)	
4404 A・鬼	186 75	09 南池西 Ba22g10		123 71	350 48	微粒砂、酸化 オリーブ黄色(黒色)	
4405 A・鬼	186 75	09 南池西 Ba21g02・01		145 145	450 32	微粒砂、酸化 褐灰色(鈍い黄橙色)	
5401 B・鬼	186 75	09 南池西 Be21g-19		160 120	1300 68	中粒砂、還元 灰色(灰白色)	
3001 C 棧瓦	152 89	05 北池 Aw15g-07		72 72	175 18	細粒砂、酸化 灰色(オリーブ灰色)	

5 金属・ガラス製品

大御堂調査区寺院址で出土が確認された金属製品は錢貨をはじめとして鉄製品・銅製品・鉄砲玉等が見られた。調査時においては、表土層掘削後に確認された遺物について、すべてをグリッドまたは遺構毎に平面位置と遺物標高を確認して取り上げている。しかし、浅間A軽石を含む土層中のもも含まれていることから、近代～現代のものも混入した可能性があり、整理時において遺物の選択を行った。新しい土坑・溝等から出土したもので、錆・劣化の進行状況から判断して、近現代とみられるものは除外し、それ以外のものについて錆落としと保存処理を実施した。その過程でやはり新しい時期と見なされたものについては報告から除外した。

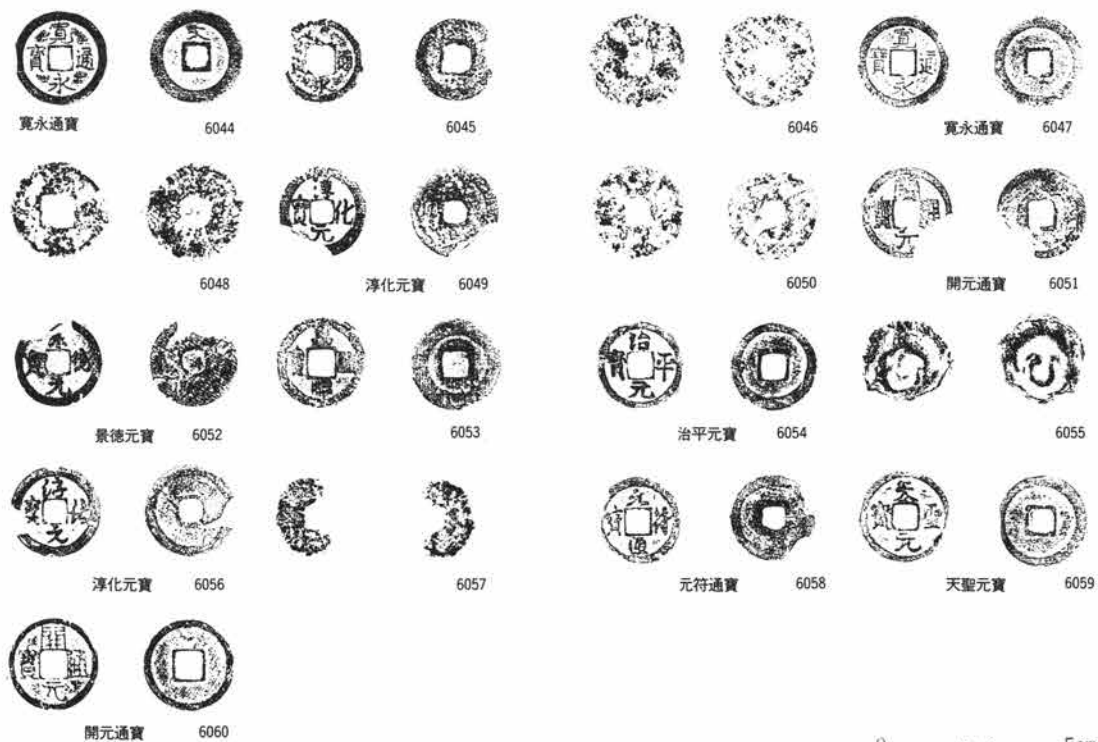
報告遺物は、錢貨が60枚、鉄製品260点、銅製品1点、鉛製品2点、ガラス小玉1点である。

(1) 錢貨 (6001～6060)

出土状況からはグリッド取り上げのものと、火葬墓・土坑墓等の埋葬遺構出土のものが見られ、錢種からは中世の輸入銅錢と近世の国内生産によるものが見られる。埋葬遺構からのものは43点、グリッド取り上げのものは17点で、72%が埋葬関連遺構出土ということになる。また、埋葬関連遺構で錢貨を副葬するものは、火葬墓・土坑墓・土壇があり、ここでは切り合い関係の確認から時期差があるものと想定されるが、出土錢貨を見ると、いわゆる唐宋錢及び明錢などの渡来錢と近世の国産錢とが見られ、寺院址に関するもの、埋葬関連遺構のもの、そして近世に入ってからのもものに分けられよう。

錢貨銘は以下のものが確認されている。

「開元通寶」6003・6051・6060、唐高祖武徳4年(621) 「淳化元寶」6002・6049、宋太宗北宋淳化元年(990)
 「至道元寶」6010、宋太宗北宋至道元年(995) 「祥符通寶」6038、宋真宗大中祥符2年(1009)



第187図 大御堂寺院址出土遺物実測図(46)一錢貨一

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物

第18表 大御堂調査区出土銭貨一覧

遺物番号	挿図	写真	出土区域	遺構名称	グリッド	銭貨銘	読順	材質	外径	内径	孔	重量	書体	特徴・初製造年・備考
6001	110	94	15寺院西部	第1号火葬墓	B117・18g	熙寧元寶	順読	銅	24	7	2.6	楷書	宋(神宗)熙寧元年(1068)	
6002	110	94	15寺院西部	第1号火葬墓	B117・18g	淳化元寶	順読	銅	25	20	7	3.6	行書	宋(太宗)北宋淳化元年(990)6001と重なる
6003	110	94	15寺院西部	第1号火葬墓	B117・18g	開元通寶	対読	銅	24	21	7	2.0	楷書	唐(高祖)武徳4年(621)
6004	110	94	15寺院西部	第1号火葬墓	B117・18g	不明		銅	24	7	1.4			
6005	110	94	15寺院西部	第1号火葬墓	B117・18g	不明		銅	20	8	0.8			
6006	113	94	14寺院北西	第2号火葬墓	Be08g	永楽通寶	対読	銅	24	21	6	2.5	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6007	113	94	14寺院北西	第2号火葬墓	Be08g	永楽通寶	対読	銅	24	21	6	4.0	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)、6008と重なる
6008	113	94	14寺院北西	第2号火葬墓	Be08g	永楽通寶	対読	銅	24	20	6	3.7	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)、6007と重なる
6009	113	94	14寺院北西	第2号火葬墓	Be08g	永楽通寶	対読	銅	24	21	6	2.5	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6010	115	94	14寺院北西	第3号火葬墓	Be09g	至?元寶	順読	銅	24	18	6	2.1		
6011	117	94	14寺院北西	第4号火葬墓	Be09g01	永楽通寶	対読	銅	24	21	6	2.0	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6012	117	94	14寺院北西	第4号火葬墓	Be09g02	永楽通寶	対読	銅	25	21	6	3.4	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6013	117	94	14寺院北西	第4号火葬墓	Be09g03	永楽通寶	対読	銅	24	20	6	2.3	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6014	117	94	14寺院北西	第4号火葬墓	Be09g02	永楽通寶	対読	銅	25	21	6	1.9	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6015	117	94	14寺院北西	第4号火葬墓	Be09g01	永楽通寶	対読	銅	24	21	6	1.5	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6016	119	94	14寺院北西	第5号火葬墓	Bg10g17	永楽通寶	対読	銅	25	21	6	2.6	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6017	119	94	14寺院北西	第5号火葬墓	Bg10g17	永楽通寶	対読	銅	24	21	6	2.5	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6018	119	94	14寺院北西	第5号火葬墓	Bg10g17	永楽通寶	対読	銅	24	21	6	2.5	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6019	119	94	14寺院北西	第5号火葬墓	Bg10g17	永楽通寶	対読	銅	24	21	6	3.4	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6020	119	94	14寺院北西	第5号火葬墓	Bg10g20	永楽通寶	対読	銅	24	21	6	2.4	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6021	119	94	14寺院北西	第5号火葬墓	Bg10g20	永楽通寶	対読	銅	24	21	6	3.5	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6022	119	94	14寺院北西	第5号火葬墓	Bg10g20			銅	26	21	6	2.5		
6023	119	94	14寺院北西	第5号火葬墓	Bg10g20	永楽通寶	対読	銅	25	21	6	3.8	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6024	119	94	14寺院北西	第5号火葬墓	Bg10g20	永楽通寶	対読	銅	24	21	6	2.9	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6025	122	94	15寺院西部	第1号土坑墓	B117・18g	????		銅	26	19	7	1.7		
6026	122	94	15寺院西部	第1号土坑墓	B117・18g	大観通寶	対読	銅	25	21	6	2.6	楷書	宋(徽宗)大観元年(1107)
6027	122	94	15寺院西部	第1号土坑墓	B117・18g	永楽通寶	対読	銅	26	21	6	1.9	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6028	122	94	15寺院西部	第1号土坑墓	B117・18g	永楽通寶	対読	銅	24	21	6	1.4	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6029	122	94	15寺院西部	第1号土坑墓	B117・18g	????		銅	24	17	6	2.9		
6030	122	94	15寺院西部	第1号土坑墓	B117・18g	武??寶		銅	26	18	7	2.6	篆書	6031と重なる
6031	122	94	15寺院西部	第1号土坑墓	B117・18g	聖宋元寶	順読	銅	25	17	6	3.4	楷書	(1101)、6030と重なる
6032	122	94	15寺院西部	第1号土坑墓	B117・18g	皇宋通寶	順読	銅	25	20	9	3.0	楷書	宋(仁宗)寶元2年(1039)
6033	122	94	15寺院西部	第1号土坑墓	B117・18g	不明		銅	22	17	7	0.6		
6034	122	94	15寺院西部	第1号土坑墓	B117・18g	不明		銅	21	5	0.6			6035と重なる
6035	122	94	15寺院西部	第1号土坑墓	B117・18g	洪武通寶	対読	銅	24	20	6	3.8	楷書	明(太祖)洪武元年(1368)、6034と重なる
6036	124	94	11寺院中央	第2号土坑墓	Bh14g	聖宋元寶	順読	銅	24	17	7	2.0	楷書	宋(徽宗)建中靖国元年(1101)
6037	124	94	11寺院中央	第2号土坑墓	Bh14g	永楽通寶	対読	銅	25	21	7	0.7	楷書	明(成祖)永楽6年(1408) ½欠損
6038	126	94	09南池西	第3号土坑墓	Be22・23g	祥符通寶	順読	銅	24	18	6	2.8	楷書	宋(真宗)大中祥符2年(1009)
6039	126	94	09南池西	第3号土坑墓	Be22・23g	皇宋通寶	対読	銅	26	19	8	1.8	楷書	宋(仁宗)寶元2年(1039)
6040	126	94	09南池西	第3号土坑墓	Be22・23g	皇??寶		銅	25	20	8	2.1	楷書	
6041	126	94	09南池西	第3号土坑墓	Be22・23g			銅	25	16	6	1.9		
6042	126	94	09南池西	第3号土坑墓	Be22・23g			銅	25	16	6	2.3		
6043	126	94	09南池西	第3号土坑墓	Be22・23g	永楽通寶	対読	銅	26	21	5	2.8	楷書	明(成祖)永楽6年(1408)
6044	183	94	03北部B		Au07g03	寛永通寶	対読	銅	26	17	5.6	2.8	楷書	
6045	183	94	08南池	南池覆土	Au20g01	寛永通寶	対読	銅	23	15	7	1.9	楷書	
6046	183	94	02北部A		Bc10g01	不明		銅	27	7.8	2.5			
6047	183	94	06北池北西		Bd12g47	寛永通寶	対読	銅	24	20	6	2.5	楷書	
6048	183	94	06北池北西		Bd13g			鉄	28	8	1.9			
6049	183	94	12中央C	1号池状遺構	Be12g04	淳化元寶	順読	銅	25	18	6	2.0	行書	宋(太宗)北宋淳化元年(990)
6050	183	94	12中央C	1号池状遺構	Be12g03			鉄	26	5.6	1.4			
6051	183	94	14北西部B	第2号溝	Bg09g191	開元通寶	対読	銅	25	20	7	1.7	篆書	唐(高祖)武徳4年(621)
6052	183	94	14北西部B	第2号溝	Bg09g191			銅	25	17	6	1.5		
6053	183	94	14北西部B	第2号溝	Bg09g191			銅	25	15	7	2.3		
6054	183	94	10中央A		Bh20g	治平元寶	順読	銅	21	17	7	2.3	楷書	宋(英宗)治平元年(1064)
6055	183	94	10中央A		Bh22g14	(雁首銭)		銅			1.5			
6056	183	94	08南池		Bi15g06	熙寧元寶	順読	銅	25	19	6	1.5	楷書	
6057	183	94	09南池西		Bi21g15	不明		銅	21	5	6	0.9		
6058	183	94	15西部	第1号濠	Bj12g	元符通寶	順読	銅	23	19	6	2.6	行書	宋(哲宗)元符元年(1098)
6059	183	94	15西部	第1号濠	Bj12g	天雲元寶	対読	銅	24	21	6	2.8		
6060	183	94	大御堂C区		Cr21g	開元通寶	対読	銅	24	21	7	2.0	篆書	唐(高祖)武徳4年(621)

- | | |
|---|---------------------------------|
| 「天聖元寶」6059、宋仁宗天聖元年（1023） | 「皇宋通寶」6039、宋仁宗寶元2年（1039） |
| 「治平元寶」6054、宋英宗治平元年（1064） | 「熙寧元寶」6001・6056、宋神宗熙寧元年（1068） |
| 「元符通寶」6058、宋哲宗元祐元年（1098） | 「聖宋元寶」6031・6036、宋徽宗建中靖國元年（1101） |
| 「大觀通寶」6026、宋徽宗大觀元年（1107） | 「洪武通寶」6035、明太祖洪武元年（1368） |
| 「永樂通寶」6006・6009・6011・6024・6027・6028・6037・6043、明成祖永樂6年（1408） | |
| 「寛永通寶」6044・6045・6047、 | |

層位的に確認できる最も古いものは大御堂第2号溝状遺構から出土した「開元通寶」6051であり、3枚が重なって検出された。第1号濠跡からも6058・6059の2枚が検出されている。寺院址に関係すると考えられる銭貨はこの5枚のみである。渡来銭の大部分は埋葬関連遺構に伴うものと考えられ、グリッド出土の遺物の中にも、近接した位置を示すものが見られる。また、第1号池状遺構や南池からは「寛永通寶」の出土があり、遺構埋土の浅間A軽石や共伴する近世陶磁器類に符合する。

(2) 鉄製品 (6101～6360)

総数で260点あり、そのうち223点が釘と思われ、その他に刀子・火打ち金等の残片も確認された。釘若しくは釘状の鉄製品（6101～6323）は断面形状は角形で、頭部が偏平に平坦に加工されているものが多く見られる。こうした釘は屋根の瓦釘などに見られるが、本調査区出土のものは最長のものが94mmで、他のものは一部残存であるにしてもこれを上回らない大きさであることから、必ずしも屋根釘ではなく、建築部材用のものとも考えられる。出土分布は、園池遺構より東の寺院東部区域や農道西側のC区と比較して、寺院址部分に明らかに集中して出土し、その取り上げも浅間A軽石層下という点から考えて、寺院址に伴うものと考えるのが妥当である。6324・6325は、鋸状のものと考えられ、6330・6329は頭部がT字状のものである。6333～6341は刀子の残片と思われ、6338・6339は火打ち金と考えられ、その他のものは不明である。折れているのがほとんどである。

(3) 銅製品 (6401・6402)

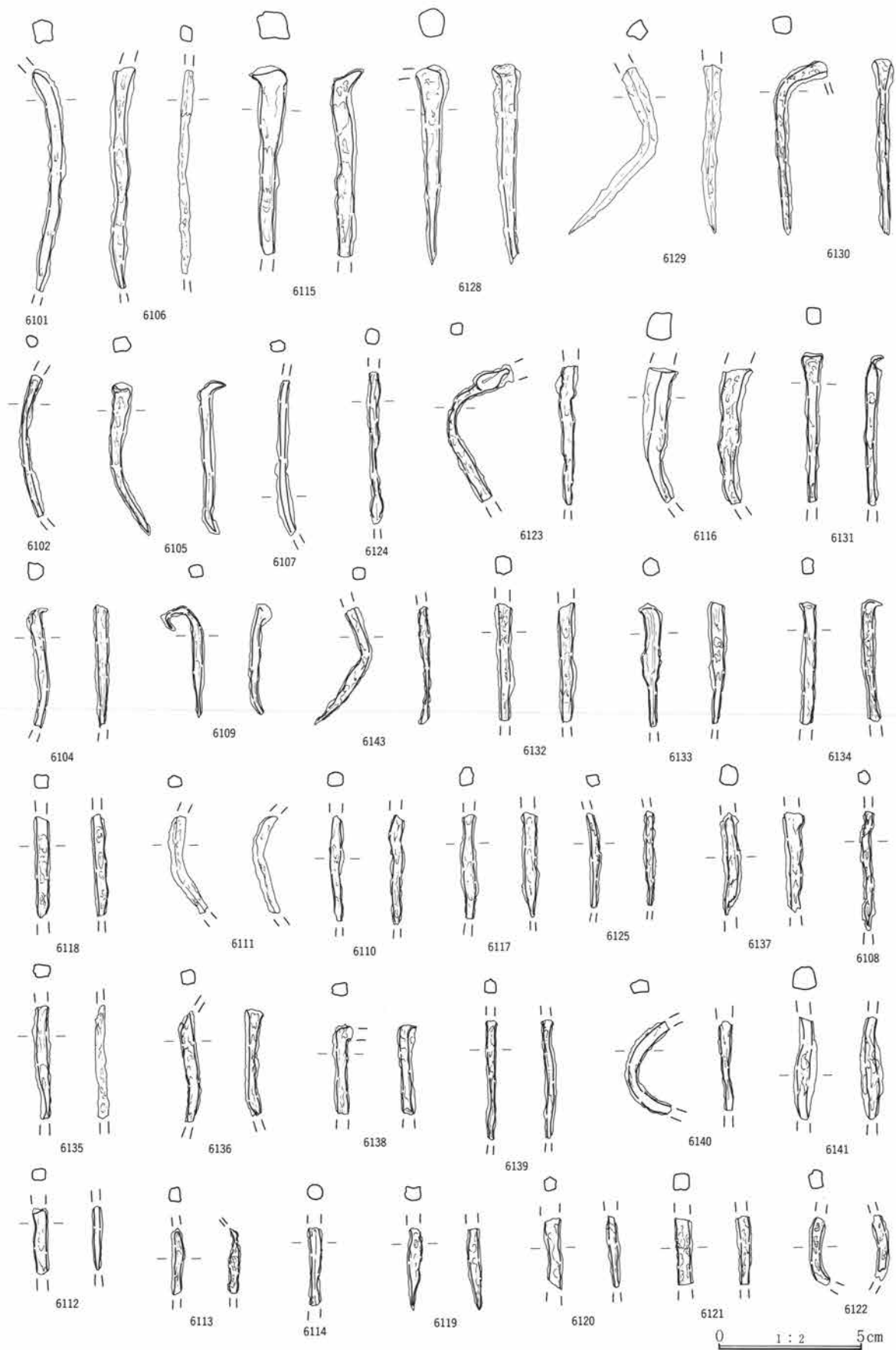
銭貨以外に銅製品として確認されたのはキセルが2点（6401・6402）出土している。6401は雁首であり、口径14mmで残存高10mmである。6402は吸い口側の残片と見られ、径は10mm、残存長は38mmである。

(4) 鉄砲玉 (6501・6502)

2点出土した。いずれも鉛製で表面は白色に劣化している。6411は径12mm、重量10.3g、6412は径12mm、重量11gとほぼ同じ大きさの球形である。

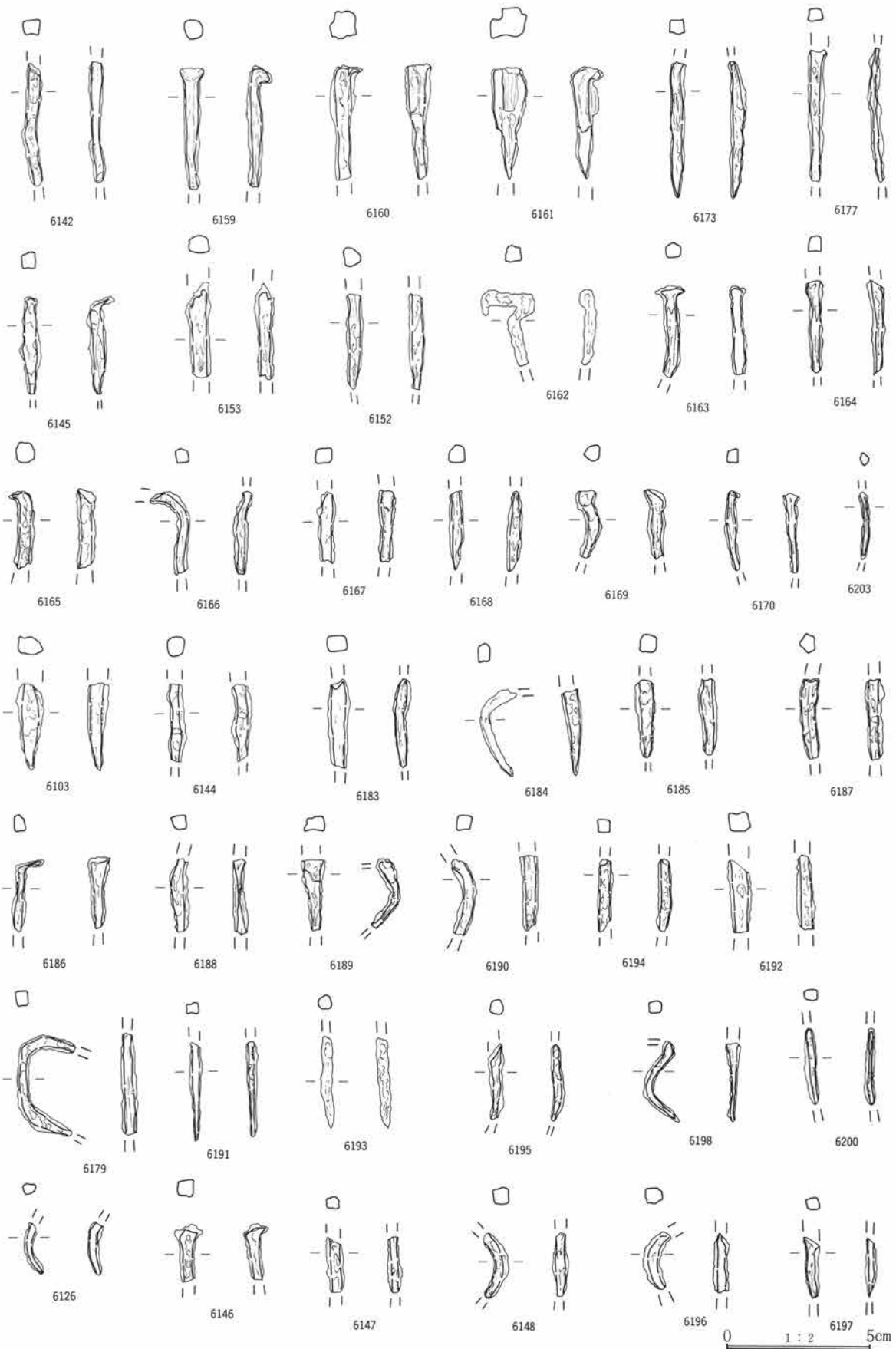
(5) ガラス製品

寺院址中央部のBg17グリッドにおいて、ガラス小玉（6701）が1点出土した。検出面が自然面の露頭と見られる小礫検出面であったためどのような性格のものかは不明である。色調は淡い水色を呈し、片面穿孔でやや偏平である。最大径4.65mm、厚さ1.85mm、重量100mg、孔径1.35mmで、アルカリ石灰ガラスかと思われ、孔の部分がやや劣化している。



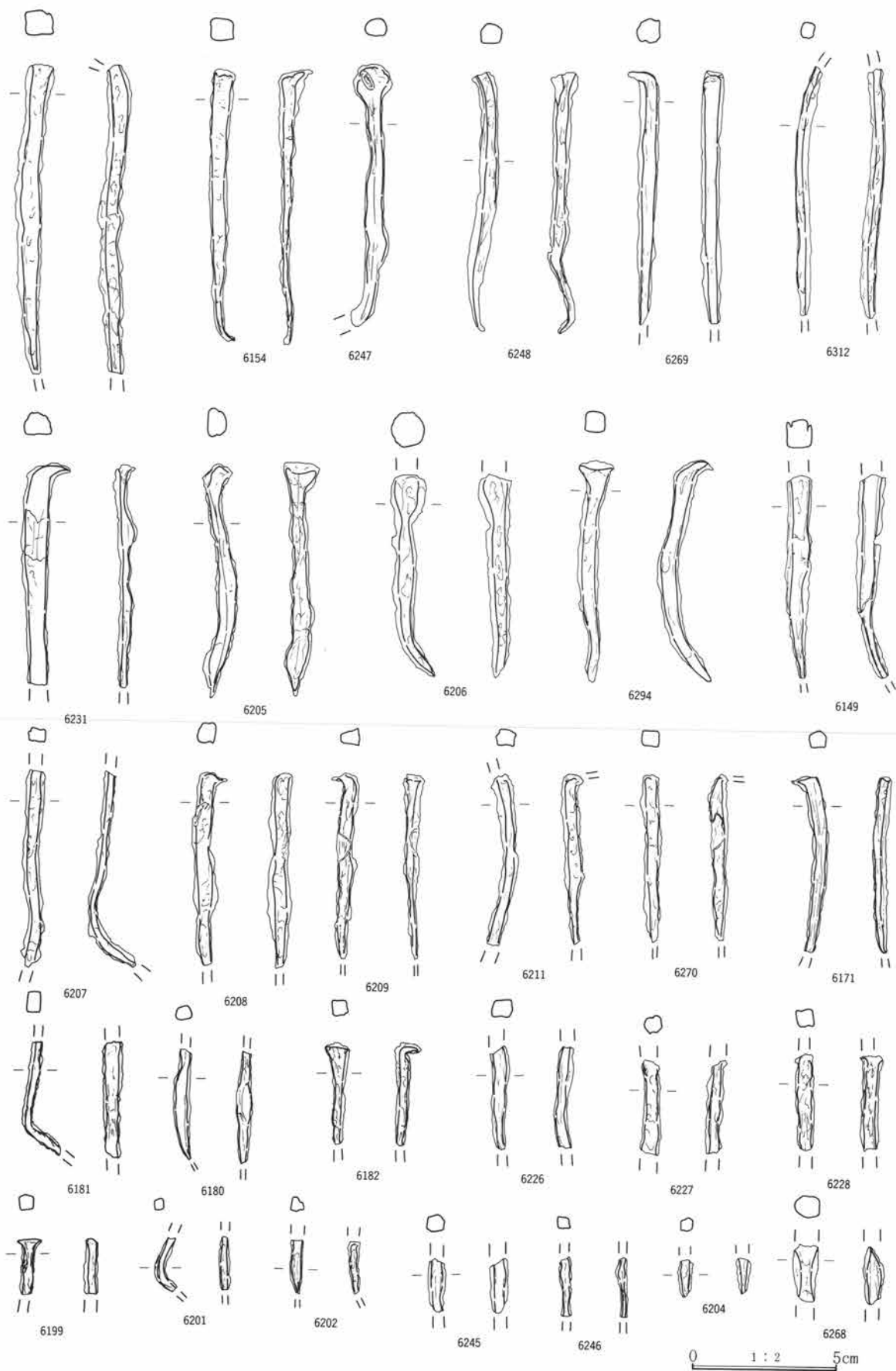
第188図 大御堂寺院址出土遺物実測図(47)一鉄製品 1—

第4節 寺院址出土遺物



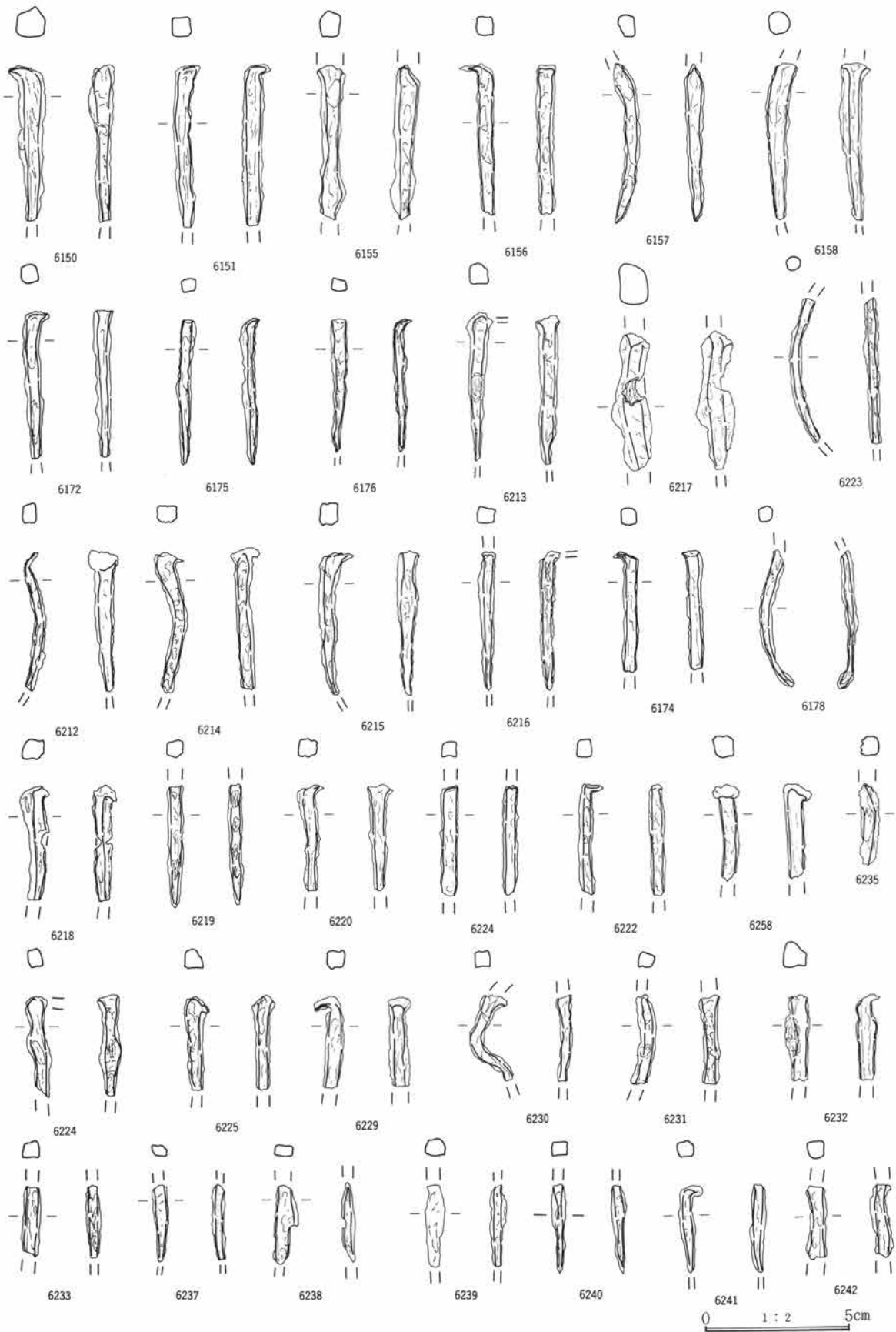
第189図 大御堂寺院址出土遺物実測図(48)―鉄製品2―

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物



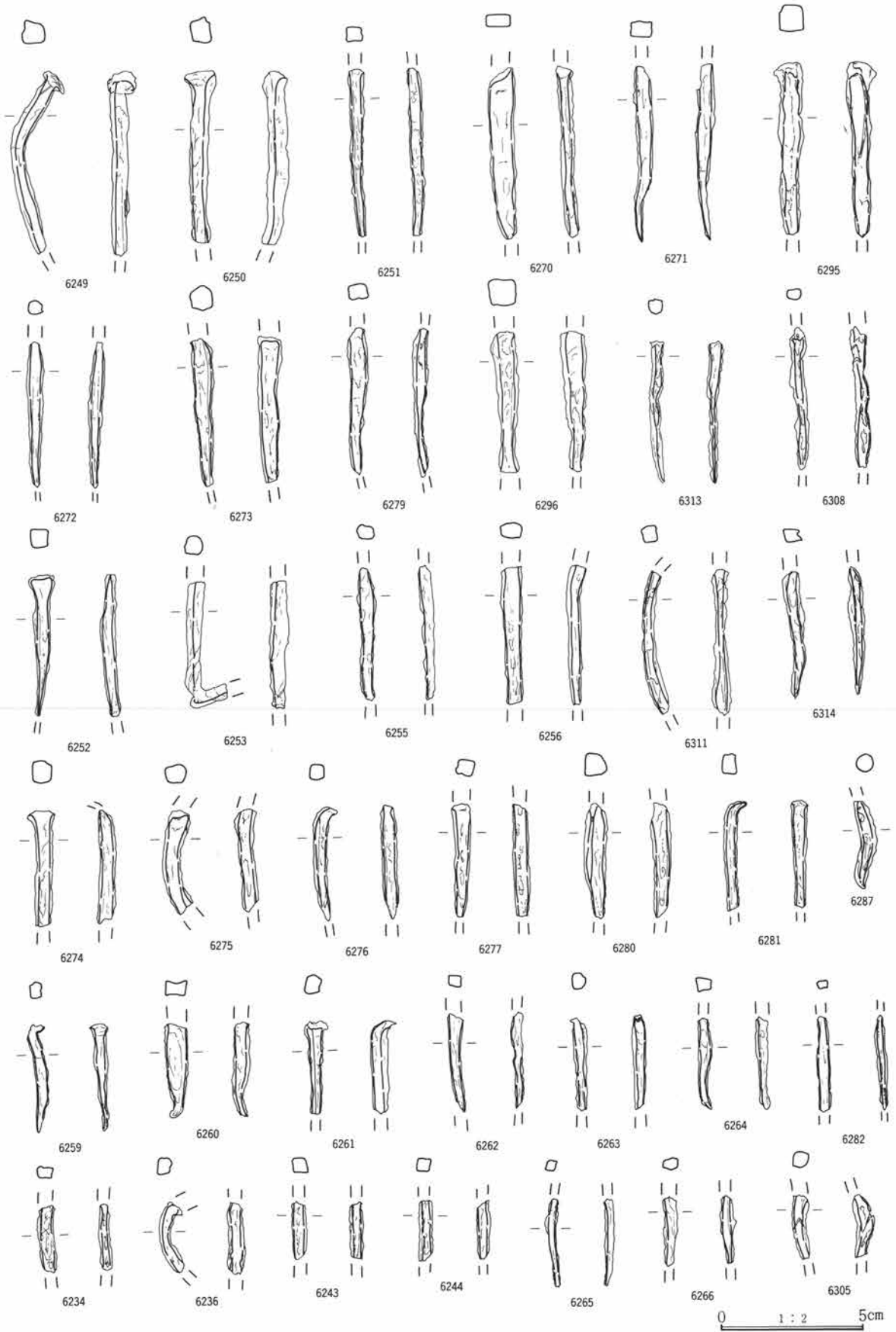
第190図 大御堂寺院址出土遺物実測図(49)―鉄製品3―

第4節 寺院址出土遺物

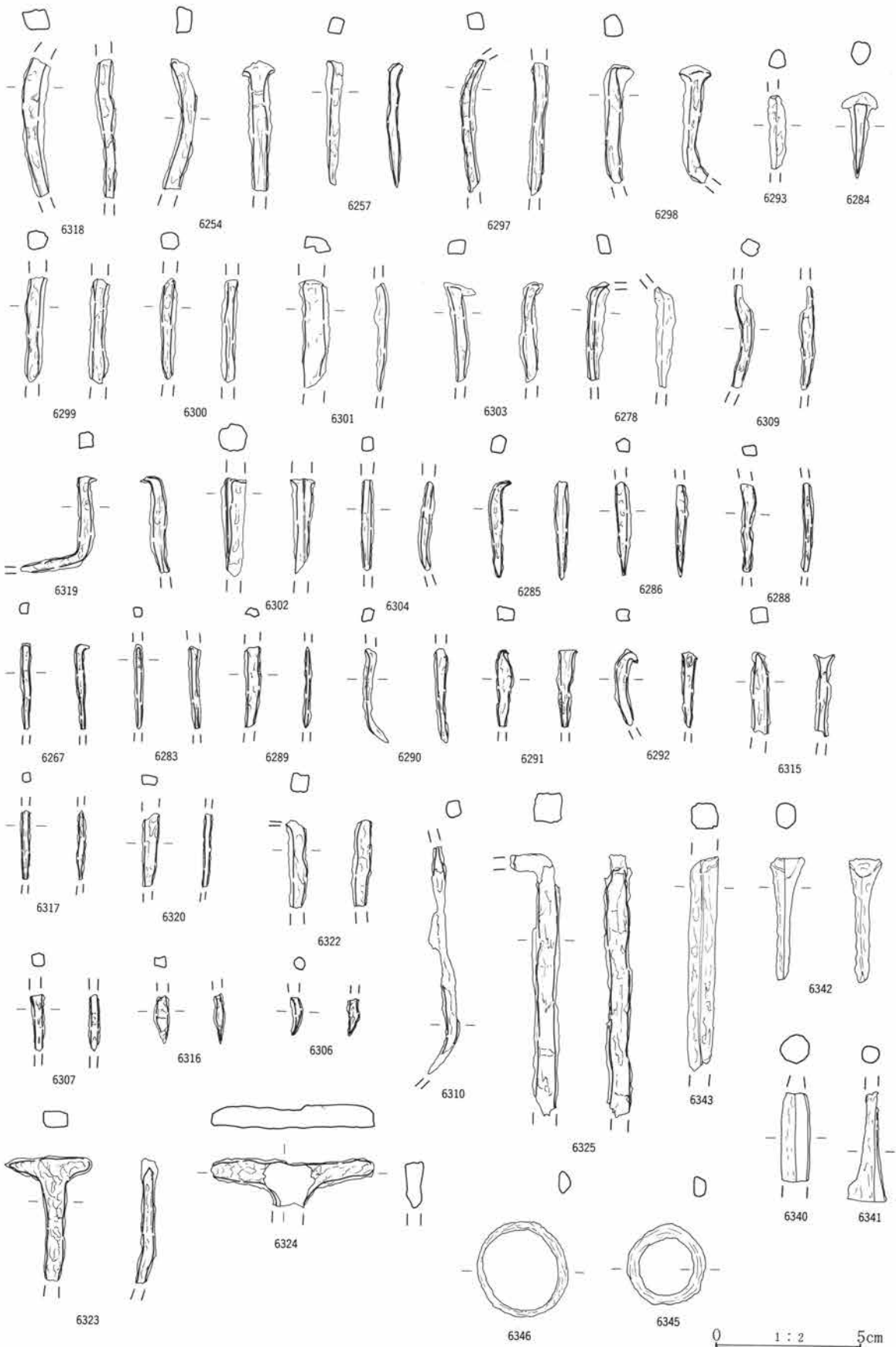


第191図 大御堂寺院址出土遺物実測図(50)―鉄製品 4―

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物



第192図 大御堂寺院址出土遺物実測図(5)―鉄製品 5―



第193図 大御堂寺院址出土遺物実測図(5)―鉄製品6―



第194図 大御堂寺院址出土遺物実測図(53)―鉄製品 7―

第19表 大御堂遺跡出土遺物観察表—鉄製品—

番号	器種	残存状況	出土区域遺構	グリッド名	特徴	重量	長さ	幅	形状	備考
6101	釘	一部欠損	01 寺院址東部	AJ-8g2層	頭部片折	9.5g	76mm	7×5		
6102	釘	中間部残存	01 寺院址東部	An-9g-10		1.1g	49mm	4×-		
6103	釘	下部残存	01 寺院址東部	Ao-12g-7	頭部片折	2.6g	30mm	9×3		
6104	釘	下部欠損	03 寺院址東部B	Ag-7g-フク土	頭部片折	3.0g	41mm	5×3		
6105	釘	完形	05 北池	Ax-13g-14	頭部片折	3.4g	53mm	6×3		
6106	釘	中間部残存	05 北池	Au-14g-4		2.0g	71mm	4×2		
6107	釘	中間部残存	05 北池	Au-14gフク土		1.1g	53mm	4×-		
6108	釘	中間部残存	05 北池	Au-14g-5		1.8g	41mm	4×-		
6109	釘	完形	05 北池	Ax-14g-25	頭部片折	1.5g	38mm	4×2		
6110	釘	中間部残存	05 北池	Ax-14g-26	頭部片折	1.6g	37mm	5×3		
6111	釘	中間部残存	05 北池	Ax-14g-26	頭部片折	1.6g	34mm	5×3		
6112	釘	一部残存	05 北池	フク土	頭部片折	0.6g	23mm	5×4		
6113	釘	一部残存	05 北池	Ax-14g-24	頭部片折	0.6g	22mm	4×3		
6114	釘	一部残存	05 北池	Au-14g-5		1.0g	27mm	5×4		
6115	釘	下部欠損	06 北池北西	Ay-10g-5	頭部片折	10.2g	65mm	10×5		
6116	釘	頭部下部欠損	06 北池北西	Ba-11gフク土	頭部片折	5.4g	47mm	9×5		
6117	釘	上部下部欠損	06 北池北西	Ba-9g一層	頭部片折	2.7g	37mm	6×3		
6118	釘	中間部残存	06 北池北西	Ba-10gフク土	頭部片折	1.6g	35mm	5×4		
6119	釘	下部残存	06 北池北西	Bc-9g-5	頭部片折	1.3g	28mm	5×3		
6120	釘	一部残存	06 北池北西	Ba-12g	頭部片折	0.5g	25mm	5×-		
6121	釘	一部残存	06 北池北西	Ba-11g-9	頭部片折	1.5g	23mm	6×5		
6122	釘	一部残存	06 北池北西	Ba-11g-16	頭部片折	1.0g	23mm	4×-		
6123	釘	中間部残存	08 南池	At-18gフク土	頭部片折	2.8g	48mm	5×3		
6124	釘	中間部残存	08 南池	A区		2.2g	52mm	4×2		
6125	釘	中間部残存	08 南池	At-20g-11		1.1g	32mm	4×3		
6126	釘	下部残存	08 南池	Aw-19g-8	頭部片折	0.4g	18mm	3×-		
6127	釘	一部欠損	09 南池西	Be-21g-7	頭部片折	14.0g	105mm	7×3		
6128	釘	一部欠損	09 南池西	Be-21g-36	頭部片折	8.0g	68mm	9×3		
6129	釘	上部欠損	09 南池西	Be-22g-3	頭部片折	3.6g	57mm	7×3		
6130	釘	一部欠損	09 南池西	Bc-21g-61	頭部片折	4.8g	60mm	6×4		
6131	釘	下部欠損	09 南池西	Bd-21g-4	頭部片折	2.5g	51mm	7×3		
6132	釘	中間部残存	09 南池西	Bc-21g-51	頭部片折	2.7g	41mm	6×3		
6133	釘	下部欠損	09 南池西	Be-21g	頭部片折	2.0g	42mm	6×2		
6134	釘	上部残存	09 南池西	Be-21g-30	頭部片折	2.5g	42mm	5×4		
6135	釘	中間部残存	09 南池西	Bd-22g-4	頭部片折	1.9g	39mm	6×3		
6136	釘	上部下部欠損	09 南池西	Bc-22g-2	頭部片折	1.9g	38mm	5×4		
6137	釘	上部下部欠損	09 南池西	Ba-22gフク土	頭部片折	1.9g	35mm	6×-		
6138	釘	頭部下部欠損	09 南池西	Bb-22g-25	頭部片折	1.8g	31mm	5×4		
6139	釘	上部下部欠損	09 南池西	Bc-21gフク土	頭部片折	1.6g	41mm	3×2		
6140	釘	中間部残存	09 南池西	Be-21g	頭部片折	1.4g	40mm	5×4	曲り	
6141	釘	中間部残存	09 南池西	Be-21g	頭部片折	3.1g	35mm	7×5		
6142	釘	中間部残存	09 南池西	Be-22gフク土	頭部片折	2.1g	42mm	5×1		
6143	釘	上部欠損	09 南池西	Be-22g-18	頭部片折	1.5g	40mm	5×4		
6144	釘	一部残存	09 南池西	Be-21g	頭部片折	1.7g	27mm	5×3		
6145	釘	下部欠損	09 南池西	Bc-21gフク土	頭部片折	1.6g	34mm	7×3		
6146	釘	頭部残存	09 南池西	Be-22g-16	頭部片折	1.2g	19mm	6×5		
6147	釘	一部残存	09 南池西	Be-21g-30	頭部片折	0.9g	19mm	6×5		
6148	釘	一部残存	09 南池西	Be-22g-16	頭部片折	1.2g	23mm	5×4		
6149	釘	一部欠損	11 寺院址中央B	Bf-18g-23	頭部片折	10.1g	68mm	8×4		
6150	釘	下部欠損	14 寺院址北西B	Bh-10g-3	頭部片折	6.4g	53mm	10×6		
6151	釘	下部欠損	14 寺院址北西B	Bh-10g-3	頭部片折	4.5g	55mm	5×-		
6152	釘	中間部残	10 寺院址中央A	Be-15gフク土	頭部片折	2.3g	33mm	6×3		
6153	釘	一部残存	10 寺院址中央A	Be-15表土	頭部片折	3.5g	33mm	8×6		
6154	釘	完形	11 寺院址中央B	Bh-14g-81	頭部片折	8.3g	94mm	9×2		
6155	釘	頭部下部欠損	11 寺院址中央B	Bh-20g-1	頭部片折	6.0g	52mm	8×4		
6156	釘	下部欠損	11 寺院址中央B	Bh-22g-23	頭部片折	4.9g	52mm	5×4		
6157	釘	上部欠損	11 寺院址中央B	Bi-16g-17	頭部片折	5.0g	55mm	7×5		
6158	釘	頭部下部欠損	11 寺院址中央B	Bg-19g-19	頭部片折	6.2g	54mm	8×3		
6159	釘	上部残存	11 寺院址中央B	Bg-21gフク土	頭部片折	4.1g	42mm	6×4		
6160	釘	上部残存	11 寺院址中央B	Bh-15g-40	頭部片折	5.3g	39mm	8×5		

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

番号	器種	残存状況	出土区域遺構	グリッド名	特徴	重量	長さ	幅	形状	備考
6161	釘	頭部残存	11 寺院址中央B	Bh-14g-23	頭部片折	6.5g	38mm	11×5		
6162	釘	頭部残存	11 寺院址中央B	Bi-21gフク土	頭部片折	2.1g	41mm	5×3	鍵形	
6163	釘	上部残存	11 寺院址中央B	Bg-21gフク土	頭部片折	1.5g	32mm	5×-		
6164	釘	上部残存	11 寺院址中央B	Bi-21gフク土	頭部片折	1.1g	32mm	5×3		
6165	釘	上部残存	11 寺院址中央B	Bh-14g-14	頭部片折	2.4g	26mm	5×-		
6166	釘	中間部残存	11 寺院址中央B	Bh-20g-9	頭部片折	1.5g	35mm	5×3		
6167	釘	一部残存	11 寺院址中央B	Bh-20gフク土	頭部片折	1.5g	24mm	5×-		
6168	釘	一部残存	11 寺院址中央B	Bh-20g-1	頭部片折	1.7g	27mm	5×-		
6169	釘	頭部残存	11 寺院址中央B	Bj-19g-3	頭部片折	1.3g	23mm	6×4		
6170	釘	上部残存	11 寺院址中央B	Bi-19g-2	頭部片折	1.2g	27mm	4×3		
6171	釘	下部欠損	11 寺院址中央B	Bf-15g-7	頭部片折	3.2g	60mm	6×4		
6172	釘	下部欠損	12 寺院址中央C	Be-12g-8	頭部片折	3.9g	50mm	6×3		
6173	釘	頭部欠損	12 寺院址中央C	Bd-12g-21	頭部片折	2.7g	47mm	5×3		
6174	釘	下部欠損	13 寺院址北西B	Bf-10g-229	頭部片折	2.4g	41mm	5×-		
6175	釘	完形	12 寺院址中央C	Bb-11gフク土	頭部片折	2.0g	50mm	5×4		
6176	釘	下部欠損	12 寺院址中央C	Bb-12g-9	頭部片折	1.5g	45mm	5×2		
6177	釘	上部下部欠損	12 寺院址中央C	Bd-13g-35	頭部片折	2.3g	46mm	6×3		
6178	釘	上部欠損	12 寺院址中央C	Bd-13g-29	頭部片折	2.3g	47mm	4×2		
6179	釘	中間部残存	12 寺院址中央C	Be-12g-9	頭部片折	2.6g	54mm	6×4	C形に曲がっている	
6180	釘	中間部残存	12 寺院址中央C	Bd-12g-17	頭部片折	2.0g	38mm	6×3		
6181	釘	中間部残存	12 寺院址中央C	Bd-13gフク土	頭部片折	2.2g	39mm	4×-		
6182	釘	下部欠損	12 寺院址中央C	Bc-12g-14	頭部片折	1.7g	35mm	7×3		
6183	釘	一部残存	12 寺院址中央C	Bc-10g-9	頭部片折	2.2g	30mm	8×6		
6184	釘	下部残存	12 寺院址中央C	Be-11g-12	頭部片折	1.5g	30mm	5×2		
6185	釘	一部残存	12 寺院址中央C	Be-11g-2	頭部片折	2.0g	27mm	5×4		
6186	釘	頭部残存	13 寺院址北西A	Bg-10g-229	頭部片折	1.3g	25mm	5×3		
6187	釘	一部残存	12 寺院址中央C	フク土	頭部片折	1.4g	28mm	6×4		
6188	釘	一部残存	12 寺院址中央C	Bc-13g-6	頭部片折	1.1g	26mm	6×4		
6189	釘	頭部残存	12 寺院址中央C	Bc-13g-6	頭部片折	1.4g	24mm	8×4		
6190	釘	一部残存	12 寺院址中央C	Bd-11g-25	頭部片折	1.8g	25mm	6×5		
6191	釘	下部残存	12 寺院址中央C	Bd-11	頭部片折	1.1g	34mm	4×2		
6192	釘	一部残存	12 寺院址中央C	Bd-13フク土	頭部片折	2.6g	26mm	7×5		
6193	釘	下部残存	12 寺院址中央C	Bd-13g-24	頭部片折	0.7g	31mm	4×3		
6194	釘	一部残存	12 寺院址中央C	Be-13g 1層	頭部片折	1.1g	25mm	5×4		
6195	釘	一部残存	12 寺院址中央C	Be-13g-6	頭部片折	1.1g	27mm	4×-		
6196	釘	一部残存	12 寺院址中央C	Bd-12g-40	頭部片折	1.2g	20mm	5×-		
6197	釘	一部残存	12 寺院址中央C	Bd-12g-27	頭部片折	0.5g	21mm	5×4		
6198	釘	上部欠損	12 寺院址中央C	Bf-11gフク土	頭部片折	0.7g	28mm	3×-		
6199	釘	頭部残存	12 寺院址中央C	Bc-12gフク土	頭部片折	0.9g	19mm	5×4		
6200	釘	一部残存	12 寺院址中央C	Bd-13g-5	頭部片折	0.7g	26mm	4×-		
6201	釘	一部残存	12 寺院址中央C	フク土	頭部片折	0.6g	18mm	4×3		
6202	釘	一部残存	12 寺院址中央C	フク土	頭部片折	0.6g	18mm	5×2		
6203	釘	一部残存	12 寺院址中央C	Bd-13g-28		0.4g	23mm	2×-		
6204	釘	一部残存	12 寺院址中央C	Bd-13g-27	頭部片折	0.5g	13mm	4×-		
6205	釘	完形	13 寺院址北西A	Bf-9g-9	頭部片折	7.6g	79mm	7×4		
6206	釘	頭部欠損	13 寺院址北西A	Bf-9g-10	頭部片折	8.1g	68mm	11×4		
6207	釘	一部欠損	13 寺院址北西A	Bf-8gフク土	頭部片折	3.8g	67mm	6×5		
6208	釘	下部欠損	13 寺院址北西A	Bf-9gフク土	頭部片折	5.0g	66mm	8×5		
6209	釘	下部欠損	13 寺院址北西A	Bf-9g-15	頭部片折	3.9g	63mm	6×4		
6210	釘	一部欠損	13 寺院址北西A	Bf-8g-5	頭部片折	4.4g	56mm	6×5		
6211	釘	一部欠損	13 寺院址北西A	Bf-8gフク土	頭部片折	3.7g	58mm	6×5		
6212	釘	下部欠損	13 寺院址北西A	Bf-9g-3	頭部片折	3.2g	48mm	4×-		
6213	釘	一部欠損	13 寺院址北西A	Bf-9g-8	頭部片折	3.4g	51mm	6×2		
6214	釘	下部欠損	13 寺院址北西A	Bf-9g-11	頭部片折	4.5g	49mm	7×4		
6215	釘	下部欠損	13 寺院址北西A	Be-8g-28	頭部片折	4.2g	49mm	7×3		
6216	釘	一部欠損	13 寺院址北西A	Bf-9g-16	頭部片折	3.0g	47mm	6×3		
6217	釘	一部残存	13 寺院址北西A	Bf-9gフク土	頭部片折	11.8g	47mm	9×-		
6218	釘	頭部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-8	頭部片折	2.5g	39mm	8×5		
6219	釘	下部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-2	頭部片折	2.5g	42mm	5×3		
6220	釘	上部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-14	頭部片折	3.1g	37mm	6×4		
6221	釘	中間部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-20	頭部片折	2.5g	38mm	5×-		

第4節 寺院址出土遺物

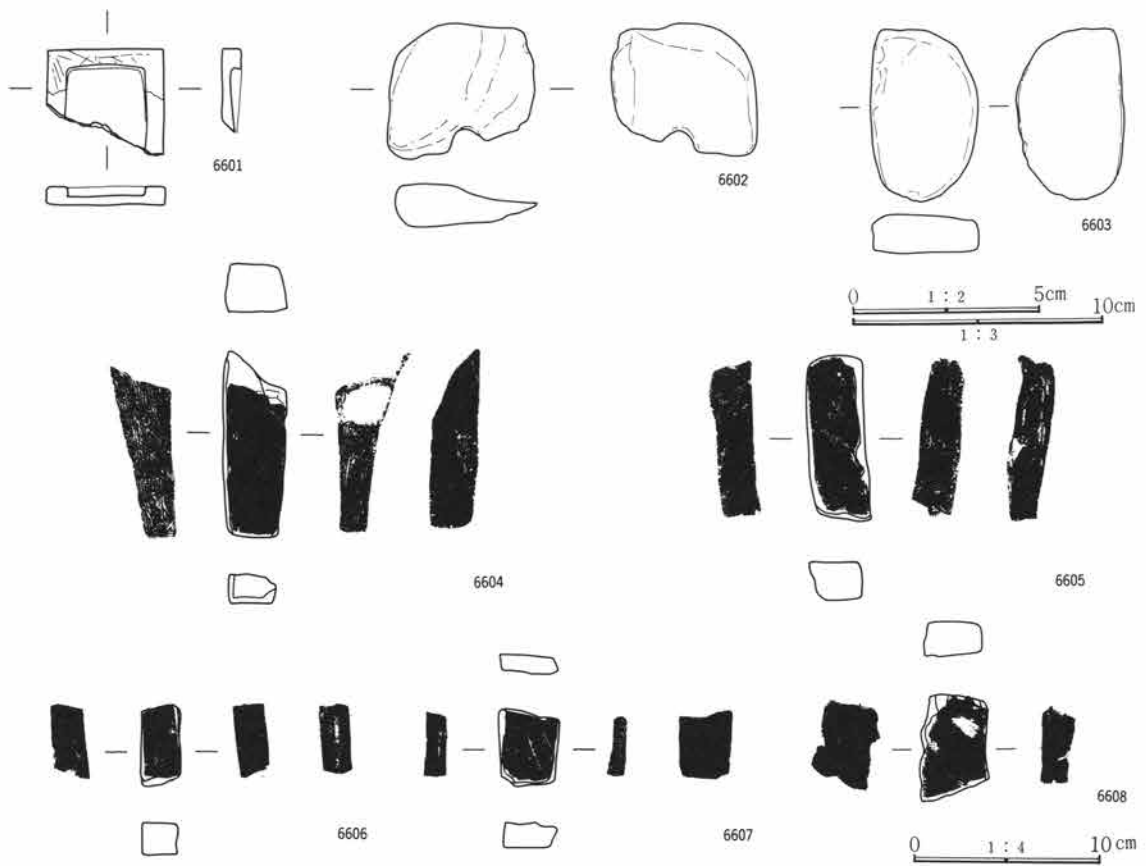
番号	器種	残存状況	出土区域遺構	グリッド名	特徴	重量	長さ	幅	形状	備考
6222	釘	上部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-172	頭部片折	2.7g	38mm	4×-		
6223	釘	中間部残存	13 寺院址北西A	Bf-8g-5	頭部片折	2.1g	50mm	4×-		
6224	釘	頭部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-4	頭部片折	3.0g	35mm	7×5		
6225	釘	頭部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-6	頭部片折	2.2g	32mm	7×5		
6226	釘	中間部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-11	頭部片折	2.6g	36mm	6×4		
6227	釘	一部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-175	頭部片折	2.2g	32mm	6×5		
6228	釘	一部残存	13 寺院址北西A	Be-8g-29	頭部片折	2.7g	33mm	6×5		
6229	釘	頭部残存	13 寺院址北西A	Be-8gフク土	頭部片折	4.6g	31mm	6×-		
6230	釘	上部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-12	頭部片折	2.3g	30mm	5×3		
6231	釘	上部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-7	頭部片折	1.9g	30mm	5×4		
6232	釘	頭部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-1	頭部片折	2.6g	29mm	8×5		
6233	釘	一部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-1	頭部片折	1.5g	24mm	6×-		
6234	釘	一部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-2	頭部片折	1.2g	23mm	5×-		
6235	釘	下部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-3	頭部片折	2.5g	28mm	6×-		
6236	釘	一部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-7	頭部片折	1.9g	25mm	5×3		
6237	釘	一部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-7	頭部片折	1.1g	26mm	4×3		
6238	釘	一部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-18	頭部片折	1.5g	27mm	8×5		
6239	釘	一部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-17	頭部片折	1.8g	28mm	7×4		
6240	釘	下部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-17	頭部片折	1.0g	31mm	6×2		
6241	釘	上部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-13	頭部片折	1.7g	30mm	5×2		
6242	釘	一部残存	13 寺院址北西A	Be-8g-29	頭部片折	2.2g	25mm	6×5		
6243	釘	一部残存	13 寺院址北西A	Be-8g-29	頭部片折	0.8g	21mm	4×-		
6244	釘	一部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-5	頭部片折	0.8g	21mm	5×-		
6245	釘	一部残存	13 寺院址北西A	Be-8g-28	頭部片折	1.1g	18mm	7×4		
6246	釘	一部残存	13 寺院址北西A	Bf-9g-2	頭部片折	0.6g	20mm	4×2		
6247	釘	下部欠損	14 寺院址北西B	Bg-11gフク土		8.8g	89mm	13×5	丸い感じ	
6248	釘	頭部一部欠損	14 寺院址北西B	Bg-9g-181	頭部片折	8.0g	88mm	7×5		
6249	釘	下部欠損	14 寺院址北西B	Bg-9g-23		7.4g	63mm	6×5	頭が六角形	
6250	釘	一部欠損	14 寺院址北西B	Bg-9g-149	頭部片折	6.8g	60mm	6×-		
6251	釘	一部欠損	14 寺院址北西B	Bg-10gフク土	頭部片折	3.1g	58mm	5×3		
6252	釘	頭部欠損	14 寺院址北西B	Bj-11gフク土	頭部片折	3.3g	49mm	6×2		
6253	釘	中間部残存	14 寺院址北西B	Bj-11gフク土		3.7g	48mm	6×4	折れ曲がってる	
6254	釘	下部欠損	14 寺院址北西B	Bg-9g-21	頭部片折	5.6g	44mm	6×4		
6255	釘	上部下部欠損	14 寺院址北西B	Bg-9g-22	頭部片折	2.7g	26mm	6×3		
6256	釘	上部下部欠損	14 寺院址北西B	Bk-12gフク土	頭部片折	3.5g	48mm	8×4		
6257	釘	上部一部欠損	14 寺院址北西B	Bk-12gフク土	頭部片折	1.9g	42mm	5×3		
6258	釘	下部欠損	14 寺院址北西B	Bg-9g-149	頭部片折	3.4g	33mm	6×-		
6259	釘	完形	14 寺院址北西B	Bg-9g-179	頭部片折	1.9g	38mm	5×1		
6260	釘	下部残存	14 寺院址北西B	Bg-9g-181	頭部片折	2.3g	33mm	8×3		
6261	釘	上部残存	14 寺院址北西B	Bg-11gフク土	頭部片折	2.0g	32mm	5×3		
6262	釘	中間部残存	14 寺院址北西B	Bj-11gフク土	頭部片折	1.1g	34mm	5×3		
6263	釘	下部欠損	14 寺院址北西B	Bg-9g-210	頭部片折	1.6g	32mm	4×3		
6264	釘	下部残存	14 寺院址北西B	Bj-11g-18	頭部片折	1.5g	32mm	5×3		
6265	釘	下部残存	14 寺院址北西B	Bg-9g-24	頭部片折	0.6g	30mm	4×2		
6266	釘	中間部残存	14 寺院址北西B	Bg-9g-24	頭部片折	0.9g	24mm	5×3		
6267	釘	下部欠損	14 寺院址北西B	Bj-11g-18	頭部片折	0.6g	29mm	4×3		
6268	釘	一部残存	14 寺院址北西B	Bg-9g-181	頭部片折	2.4g	20mm	9×6		
6269	釘	下部欠損	15 寺院址西部	Be-18g-6	頭部片折	11.0g	86mm	7×4		
6270	釘	上部下部欠損	15 寺院址西部	pit3-1 Bn-20g		4.7g	60mm	9×6		
6271	釘	頭部欠損	15 寺院址西部	Bn-31g-12	頭部片折	3.6g	62mm	6×2		
6272	釘	上下部欠損	15 寺院址西部	pit3-3 Bn-22g	頭部片折	2.2g	50mm	5×3		
6273	釘	中間部残存	15 寺院址西部	Bm-22gフク土	頭部片折	7.0g	52mm	7×4		
6274	釘	頭部下部欠損	15 寺院址西部	Bl-21gフク土	頭部片折	4.5g	40mm	6×-		
6275	釘	中間部残存	15 寺院址西部	Bm-19g-3	頭部片折	4.0g	36mm	7×6		
6276	釘	下部欠損	15 寺院址西部	Pit21 Bm-21g	頭部片折	2.4g	39mm	4×2		
6277	釘	上、下部欠損	15 寺院址西部	Bm-18g	頭部片折	2.9g	49mm	6×3		
6278	釘	上、下部欠損	15 寺院址西部	Bm-21g-11	頭部片折	2.2g	34mm	6×4		
6279	釘	上、下部欠損	15 寺院址西部	Bk-13gフク土	頭部片折	3.3g	51mm	7×4		中世以降

第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

番号	器種	残存状況	出土区域遺構	グリッド名	特徴	重量	長さ	幅	形状	備考
6280	釘	中間部残存	15 寺院址西部	Bk-13gフク土	頭部片折	5.0g	40mm	8×4		中世以降
6281	釘	下部欠損	15 寺院址西部	Bk-15gフク土	頭部片折	3.0g	37mm	4×-		中世以降
6282	釘	一部残存	15 寺院址西部	Bk-13gフク土	頭部片折	0.7g	33mm	5×4		中世以降
6283	釘	一部残存	15 寺院址西部	Bk-13gフク土	頭部片折	0.4g	28mm	3×-		中世以降
6284	釘	完形	15 寺院址西部	Bk-14gフク土		3.9g	30mm	6×3		中世以降
6285	釘	完形	15 寺院址西部	Bm-19g-3	頭部片折	1.5g	33mm	4×3		
6286	釘	下部残存	15 寺院址西部	Bl-22gフク土	頭部片折	1.4g	32mm	5×2		
6287	釘	下部残存	15 寺院址西部	pit3-2 Bn-22g		1.6g	30cm ²	5×-		
6288	釘	中間部残存	15 寺院址西部	Bm20gフク土	頭部片折	1.3g	30mm	5×3		
6289	釘	一部残存	15 寺院址西部	Be-22g	頭部片折	0.6g	28mm	5×3		
6290	釘	頭部欠損	15 寺院址西部	Bn21g-10	頭部片折	0.8g	32mm	3×-		
6291	釘	下部欠損	15 寺院址西部	Bm-20gフク土	頭部片折	1.5g	27mm	6×4		
6292	釘	下部欠損	15 寺院址西部	Bm-15gフク土	頭部片折	1.1g	26mm	5×3		
6293	釘	一部残存		pit3フク土 Bm-22g		1.9g	25mm	6×4	丸い形	
6294	釘	完形	16 寺院址南西	Bk-24gフク土	頭部片折	9.5g	75mm	8×4		中世以降
6295	釘	下部欠損	16 寺院址南西	pit3フク土 Bl-24g	頭部片折	16.0g	60mm	8×6		
6296	釘	一部欠損	16 寺院址南西	pit-1 Bn-23g	頭部片折	8.0g	49mm	8×4		
6297	釘	中間部残存	16 寺院址南西	pit30-1 Bl-23g	頭部片折	2.7g	46mm	5×3		
6298	釘	頭部残存	16 寺院址南西	pit19-フク土 Ao-26g	頭部片折	2.9g	40mm	7×4		
6299	釘	中間部残存	16 寺院址南西	pit10フク土 Bm-24g	頭部片折	4.0g	36mm	6×-		
6300	釘	中間部残存	16 寺院址南西	pit19 Bn-23g	頭部片折	1.9g	35mm	6×3		
6301	釘	一部残存	16 寺院址南西	pit11フク土 Bn-23g	頭部片折	2.2g	37mm	9×-	半面剥離してる	
6302	釘	中間部残存	16 寺院址南西	pit11-フク土 Bn-23g	頭部片折	4.7g	33mm	8×6		
6303	釘	頭部残存	16 寺院址南西	Bl-25gフク土	頭部片折	2.0g	34mm	6×4		
6304	釘	中間残存	16 寺院址南西	pitフク土 Bn-25g	頭部片折	1.3g	31mm	4×3		
6305	釘	一部残存	16 寺院址南西	pit6フク土 Am-24g	頭部片折	1.3g	23mm	5×-		
6306	釘	下部残存	16 寺院址南西	pit3フク土 Bn-26g	頭部片折	0.3g	13mm	4×3		
6307	釘	一部残存	17 農道西	Bn-12g	頭部片折	0.7g	19mm	4×-		
6308	釘	一部欠損	AD-1フク土			2.2g	49mm	5×-		近世以降
6309	釘	中間部残存	AD-1フク土		頭部片折	1.5g	35mm	5×4		近世以降
6310	釘	一部欠損	AD-3-37	An-12g		5.3g	77mm		剥離がはげしい	近工以降
6311	釘	一部欠損	AD-3-38	An-12g	頭部片折	2.5g	50mm	5×4		近世以降
6312	釘	一部欠損	BD-1	Bg-22g		4.1g	84mm	4×-		
6313	釘	完形	BD-1	Bg-22g	頭部片折	1.7g	49mm	4×2		
6314	釘	頭部欠損	BD-1	Bg-22g	頭部片折	1.7g	44mm	6×2		
6315	釘	頭部残存	BD-7	Bk-14フク土	頭部片折	1.9g	28mm	5×3		中世以降
6316	釘	下部残存	BD-7フク土		頭部片折	0.5g	16mm	5×-		中世以降
6317	釘	一部残存	Bk-3	フク土	頭部片折	0.4g	23mm	3×-		中世以降
6318	釘	一部欠損	Bk-25	Bg-9g-25	頭部片折	3.7g	47mm	8×5		
6319	釘	下部欠損	BE-1フク土		頭部片折	1.9g	46mm	5×4	逆L字状	中世以降
6320	釘	一部残存	1号配石	Bi-15g-10	頭部片折	0.7g	25mm	5×3		
6321	釘	下部欠損	フク土 3号配石下		頭部片折	8.1g	76mm	9×8		中世以降
6322	釘	一部残存	フク土 3号配石下		頭部片折	3.0g	30mm	6×-		中世以降
6323	T釘	下部欠損	09南池西	Bf-21g-3		5.3g	42mm	30×6		
6324	T釘	頭部残存	12 寺院北中央C	Be-13g-23		9.5g	16mm	56×7		

第4節 寺院址出土遺物

番号	器種	残存状況	出土区域遺構	グリッド名	特徴	重量	長さ	幅	形状	備考
6325	鏡	10寺院址中央A	トレンチ内 Bb-19g			26.2g	89mm	9×5		
6326	刀子		08南池	At-18gフク土	柄	7.1g	59mm	12mm		
6327	刀子		08南池	At-18gフク土	柄	9.0g	45mm	13mm		
6328	刀子		09 南池西	Be-21g-35	柄	5.7g	46mm	10mm		
6329	刀子		11 寺院址中央B	Bi-20g	★	5.0g	57mm	16×6		
6330	刀子		11 寺院址中央B	Bi-19gフク土	★	2.4g	21mm	15×4		
6331	刀子		11 寺院址中央B	Bi-18gフク土	★	9.0g	20mm	7mm		
6332	刀子		11 寺院址中央B	Bg-22g	鋒	1.5g	29mm	14mm		
6333	刀子		12 寺院址中央C	Be-13g-16	刀身	12.5g	57mm	17mm		
6334	刀子		12 寺院址中央C	Bc-12g-17	柄	7.7g	55mm	12mm	ねじ曲っている	
6335	刀子		15 寺院址西部	Pit13-1 Bn-23g	刀身	8.3g	53mm	19mm		
6336	刀子		15 寺院址西部	Pit13-2 Bn-23	★	6.8g	56mm	16×10		
6337	刀子		17 農道西	トレンチ内 Bf-23	刀身	17.2g	75mm	31mm		
6338	火打金	ほぼ完形	12 寺院址中央C	Bc-13g-61		10.5g	20mm	58mm		
6339	火打金	一部欠損	13 寺院址北西A	Bd-9g-4		22.2g	38mm	97mm		
6340	キセル		11 寺院址中央B	Bf-15gフク土	吸口	3.1g	30mm	10×8		
6341	キセル		BK-2フク土		吸口	2.0g	37mm	13×4	下は折り曲げてつぶしてある	
6342	不明		11 寺院址中央B	Bh-14g-80		2.3g	42mm	11×4		
6343	管		05 北池	Au-14gフク土		5.2g	72mm	9mm		
6344	蓋		不明	不明		79.5g	69mm	—		
6345	鉄輪		10 寺院址中央A	Bf-18g-2		4.7g	外径 27mm	内径 19mm		
6346	鉄輪		15 寺院址西部	Bl-19gフク土		5.2g	外径 33mm	内径 26mm		
6347	不明		11 寺院址中央B	Bi-15gフク土		2.0g	21mm			
6348	不明		12 寺院址中央C			2.3g	20mm	15×3		
6349	不明		13 寺院址北西A	Be-8g-29		2.4g	35mm	20×5		
6350	不明		15 寺院址西部	Bn-20gフク土		7.0g	34mm	18mm		
6351	不明		15 寺院址西部	Bm-20gフク土		6.9g	24mm	13mm		
6352	不明		15 寺院址西部	Bn-22gフク土		1.0g	32mm	16mm		
6353	不明		16 寺院址南西	Pitフク土 Bl-24g		10.2g	50mm	32mm		
6354	不明		16 寺院址南西	Pit7-1 Bm-24g		2.3g	22mm	19mm		
6355	不明		16 寺院址南西	Pitフク土 Bm-24g		2.8g	26mm	16mm		
6356	不明		17 農道西	トレンチ内 Bg-11g		14.2g	22mm	38mm		
6357			12 寺院址中央C	Bd-12g-14		11.1g	45mm	25mm		
6358			15 寺院址中央C	Bk-20gフク土		3.3g	38mm	16mm		
6359			Bk-29-1	Bi-21g		11.3g	41mm	17mm		
6401	キセル	一部残存	11 寺院址中央B	Bf-19g-1	雁首	2.0g	11mm	16×6	たばこを詰める部分	
6402	キセル	一部残存	11 寺院址中央B	Bh-19g-3	吸口	2.0g	40mm			
6403	鉄砲玉		05北池	As-15g-3		10.3g	12mm	11mm		
6404	鉄砲玉		B区	表探		11.0g	12mm	12mm		



第195図 大御堂寺院址出土遺物実測図(54)―石製品―

7 石製品・石材

寺院址部分では、石造物および園池遺構に伴う石材の他に、硯・砥石等が出土している。

6601は約1/2の残存状態で、幅31mm、厚さ5mm、長さは不明である。

6602は砂岩の小礫に穿孔の痕跡が認められるものである。6603は軽石製の砥石である。長径97mm、短径57mm、18mmである。

6604～6608は仕上げ砥と思われる砥石で、いずれもかなり使いこまれている。時期は不明であるが近世以降と思われる。(綿貫鋭次郎)

第5節 C区検出の中近世の遺構と遺物

1 C区検出の中近世遺構

(1) 検出遺構の概況(第196図・第197図)

大御堂調査区の中央付近を南北に横断する農道から、前原調査区との境を為す比高3m～5mの段差までの間、約100mの区間(B区の一部とC区)では、前述の縄文・弥生時代の遺構と遺物の他に、中近世の時期と考えられる多数の溝状遺構、井戸跡、掘立柱建物跡群等が検出された。

この区域は鮎川崖からは約100m離れており、農道下には第2号濠跡が確認されている。調査前には水田圃場として利用されており、現況での標高は107.50m～108.50mであった。ここでは表土層(水田耕作土)は約20cmの厚さで堆積し、その下には標準土層第II層がほぼ水平に堆積している。中近世と考えられる遺構群は、この2つの層を除去した段階の暗褐色粘質土上面での遺構確認作業で検出された。確認面標高は東側農道近くで107.00m、西側段差下で108.50mで、やや西が高いもののかなり水平に近い平坦面である。

溝状遺構は28条確認したが、その多くは、埋土中に浅間A軽石が混入しているのが確認され、調査前の現況で確認される水路をほぼトレースし、出土遺物は非常に少なく、幾つか見られた陶磁器類の小片も近現代のものであることから、報告対象からは除外することとした。ここで取り上げる5条の溝状遺構のうち、大御堂第18号～第21号溝状遺構は調査前現況では既に完全に埋没して痕跡の確認はできず、近世以前の時期のものとして推定された。また、大御堂第22号溝状遺構では近世後半の陶磁器類の比較的まとまった出土が見られた。大御堂第22号溝状遺構をトレースする水路は丈量図において確認出来るが、出土遺物から近世後半の18世紀後半から19世紀にかけて開削であろうと推定される。鮎川左岸の低位面での水田圃場は東西に細長い短冊形に畦畔が区切られ、長辺はほぼ1町(108m)である。報告対象外とした溝状遺構もすべてこれと同様の性格のものと考えられ、近世後半以降現代(調査開始前)まで使用された農業用水路と考えられる。

大御堂第18号～第21号溝状遺構は、埋土中に浅間A軽石が見られないことから近世前半以前の時期と考えられる。更には、この4条は方形区画を構成する平面的配置で、その区域内からは掘立柱建物跡が8棟検出され、相互に関連する性格をもつことが推定される。また、ここは寺院址のすぐ西側にあたり、“寺域”に対する“寺地”としての性格が考えられ、寺院址との関係が想定される。

(2) 大御堂第18号～大御堂第22号溝状遺構(第197図、写真図版42)

調査前の地割りにはその痕跡が認められず、近世以前と考えられた溝状遺構は5条確認された。そのうち大御堂第1号溝状遺構(BD17)は、埋土及び切り合い関係から、この区域においては最も古い遺構として、その出土遺物から8世紀代以降11世紀以前と推定した(第III章第1節参照)。

大御堂第18号溝状遺構(CD2)はこの大御堂第1号溝状遺構を切って東西方向にのび、調査区内での確認長は112m、主軸方位はN-71°-Wである。東端はBq24グリッドで第2号濠に接続しここでの確認面標高は107.30m、底面標高は106.70mである。西端はCs16グリッドで調査区外へのびここでの確認面標高は107.50m、底面標高は106.70mである。溝は箱葉研堀の断面形状で、上端幅は140cm、下端幅は25cm～30cm、深さは80cm～90cmである。溝埋土は1層に茶褐色粘質(シルト質)土がブロック状に混入した黒褐色粘質土、2層にはやや軽石の混入した黒褐色土が見られる。埋土1層は人為的埋め戻し土と見られ、2層には水流の痕跡が認められる。流水の痕跡を示す薄い砂質土の堆積は、第2号濠に近い東よりの土層に顕著に確認された。

大御堂第22号溝状遺構は、これと平行してすぐ南で検出された。遺構検出面は大御堂第18号溝状遺構をか

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物

なり削平した面と見られ、確認面からの深さは40cm～50cmで底面近くまで浅間A軽石を含む褐色土が見られた。この溝は浅間A軽石降下以降、即ち18世紀後半より後の掘削と考えられ、Bs26グリッド付近で北方向に走行を変える。第2号濠が埋められ農道として存在しており、それに規制されて北流する走行となったと考えられる。現在まで確認される土地利用の形態は、この大御堂第22号溝状遺構の掘削された18世紀末～19世紀以降のものであると考えられ、他の浅間A軽石を埋土に含み現在まで残る溝についてもほぼ同様に考えられる。

大御堂第18号溝状遺構と平行する走行を示す溝が大御堂第21号溝状遺構 (CD24) である。大御堂第18号溝状遺構とは約56m離れて、調査区の南よりで検出された。確認長は約46mで、東端はCq32グリッドで調査区外に、西端はDa27グリッドで段差下に沿う現代の溝により切られ、その先の走行は不明である。溝の断面形状は比較的浅い逆台形で、上端幅120cm、下端幅40cm、深さは約35cmである。埋土の状況は大御堂第18号溝状遺構とほぼ同様である。主軸方位はN-60°-Wである。この平行する2条の溝を結ぶ南北方向の走行を示す溝が2条検出された。東側のものが大御堂第19号溝状遺構 (CD12)、西側で検出されたものが大御堂第20号溝状遺構 (CD22) である。

大御堂第19号溝状遺構 (CD12) は、上端幅80cm、下端幅20cm、深さ50cmでやや小規模な箱薬研堀である。主軸方向はN-20°-Eで、Cb21グリッドで大御堂第18号溝状遺構と接続し、南端は調査区外へのび、確認面(底面)標高はそれぞれ107.40m (106.90m)、107.60m (107.20m) である。調査区内での確認長は約40mであるが、これと平行する大御堂第20号溝状遺構と同様のものとすれば、56m～62mの推定長である。

大御堂第20号溝状遺構 (CD22) は、上端幅96cm、下端幅36cm、深さ50cmでやや小規模な箱薬研堀である。主軸方向はN-21°-Eで、Cb21グリッドで第18号溝状遺構と接続し、南端はCt30グリッドで大御堂第21号溝状遺構に接続する。確認面(底面)標高はそれぞれ107.55m (106.90m)、109.20m (108.80m) であり、確認長は約56mであり、前述の大御堂第20号溝状遺構と同様の規模で約54mの距離をおいて平行する。

この2条の溝状遺構は遺構規模は大御堂第18号・第22号溝状遺構よりは断面形状においてやや小規模なものであり、接続部での底面標高に段差が見られることから、その掘削には若干の時間差があるものと思われるが、大御堂第20号溝状遺構が示すように、2つの溝状遺構と直交して接続し、方形区画を形成する意図をもつものとすれば、この4条の溝状遺構は同時期に存在していたものと推定される。それぞれの遺構埋土に、上層で黄褐色シルト質がブロック状に多量に混入した黒褐色土があり、下層に砂質土まじりの黒褐色土が見られるという共通点からも考えられる。大御堂第18号溝状遺構を南へ大御堂第21号溝状遺構を東へそれぞれ延長すれば、両者は接続するものと考えられる。その場合に4条の溝状遺構は四辺がNE←53m→NW←57m→SW←(55m)→SE←(64m)→NEのほぼ方形の区画となる。また、東西方向の二つの溝状遺構は西端は段差付近に、東端は第2号濠跡と考えられ、その距離は約120mである。したがって、平行する大御堂第18号溝状遺構と大御堂第21号溝状遺構との間では、大御堂第19号・第20号溝状遺構によって3つの方形区画が作られる。東・中・西の3区画を見ると、東区画は北西部の半分程度が調査区内となるがここでの遺構検出は見られず、中及び西区画では掘立柱建物跡がそれぞれ検出されている。

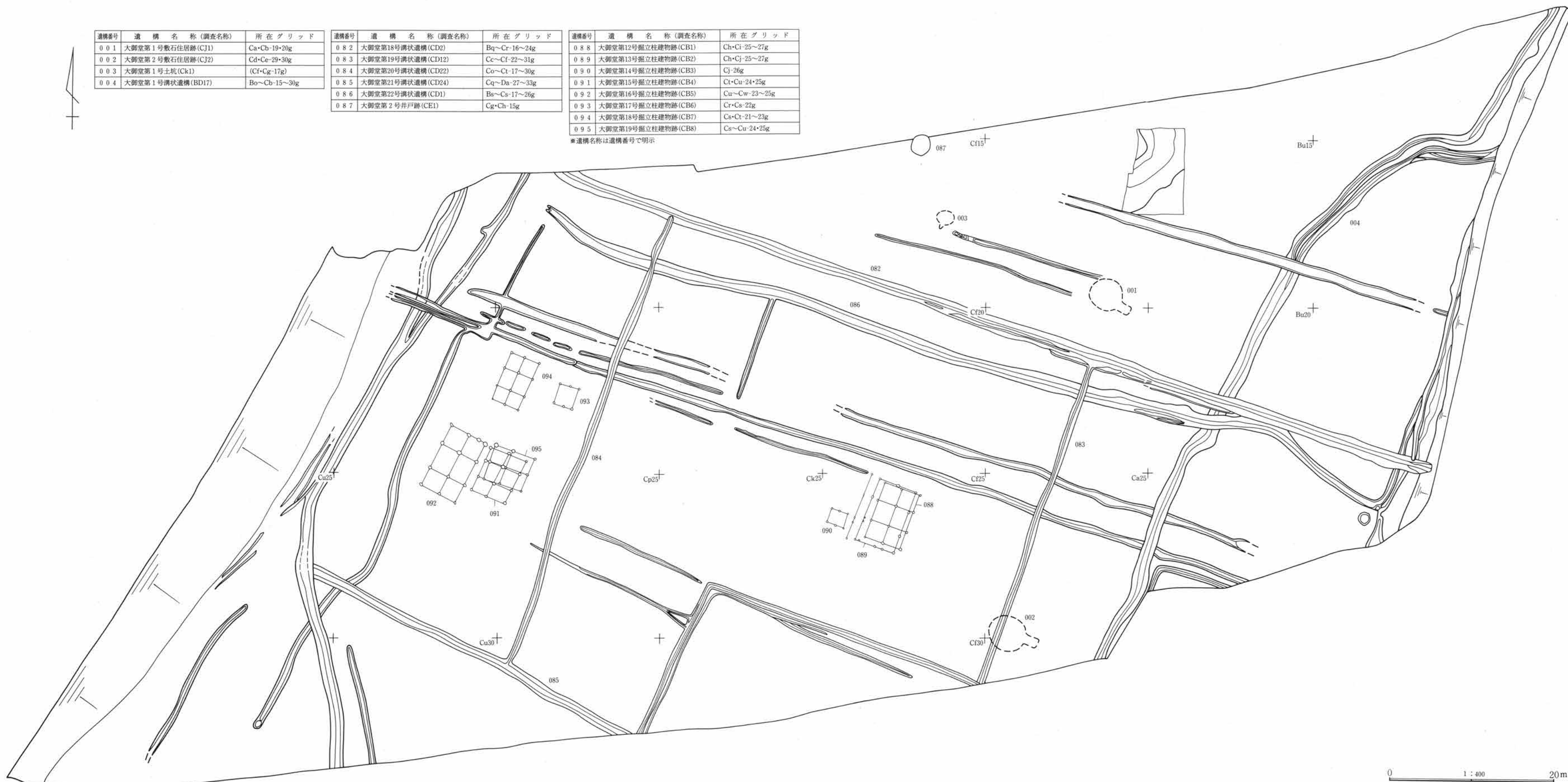
大御堂第21号溝状遺構は他の3条の溝状遺構と比較して、主軸方位に若干のずれが認められる。しかし、溝はほぼ同時期に機能したのと考えられることから、開削時期の若干の時間差と推定され、その場合には本遺構が他の3条に先行するものと思われる。

(3) 掘立柱建物跡

C区では8棟の掘立柱建物跡が検出された。いずれも前述の溝状遺構による方形区画の中にあることから、

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド	遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド	遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
001	大御堂第1号敷石住居跡(CJ1)	Ca・Cb-19・20g	082	大御堂第18号溝状遺構(CD2)	Bq~Cr-16~24g	088	大御堂第12号掘立柱建物跡(CB1)	Ch・Ci-25~27g
002	大御堂第2号敷石住居跡(CJ2)	Cd・Ce-29・30g	083	大御堂第19号溝状遺構(CD12)	Cc~Cf-22~31g	089	大御堂第13号掘立柱建物跡(CB2)	Ch・Cj-25~27g
003	大御堂第1号土坑(Ck1)	(Cf・Cg-17g)	084	大御堂第20号溝状遺構(CD22)	Co~Ct-17~30g	090	大御堂第14号掘立柱建物跡(CB3)	Cj-26g
004	大御堂第1号溝状遺構(BD17)	Bo~Cb-15~30g	085	大御堂第21号溝状遺構(CD24)	Cq~Da-27~33g	091	大御堂第15号掘立柱建物跡(CB4)	Ci・Cu-24・25g
			086	大御堂第22号溝状遺構(CD1)	Bs~Cs-17~26g	092	大御堂第16号掘立柱建物跡(CB5)	Cu~Cw-23~25g
			087	大御堂第2号井戸跡(CE1)	Cg・Ch-15g	093	大御堂第17号掘立柱建物跡(CB6)	Cr・Cs-22g
						094	大御堂第18号掘立柱建物跡(CB7)	Cs・Ct-21~23g
						095	大御堂第19号掘立柱建物跡(CB8)	Cs~Cu-24・25g

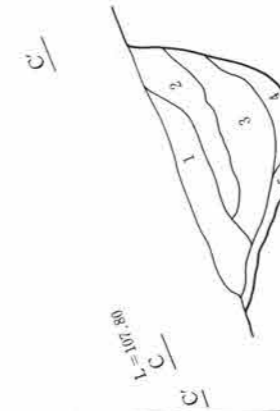
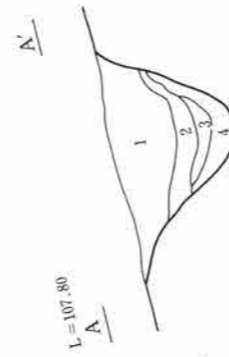
※遺構名称は遺構番号で明示



第196図 大御堂調査区C区遺構全体図

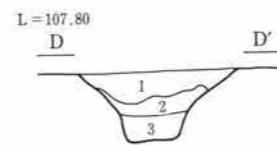
大御堂第18号溝状遺構 A-A'、B-B'、C-C'注記

- 1 暗褐色砂質土層 黄褐色粒子の混入が見られる。
- 2 茶褐色土層 粒子やや粗く砂質。
- 3 黒褐色砂質土層 B軽石を主とする砂質土層。水流の痕跡が認められる。
- 4 暗灰褐色土層 粘質土、下層では砂質。水流の痕跡が認められる。
- 5 暗褐色土層 粘質土と砂質土が互層に観察でき、水流の痕跡が認められる。



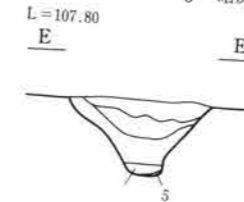
大御堂20号溝状遺構 D-D'注記

- 1 黒褐色土層 黄褐色シルト質土小ブロック・軽石を含む。
- 2 黒褐色土層 やや暗灰色に近い色調を呈し、粘質土・砂質土の層が認められる。
- 3 黒褐色粘質土層



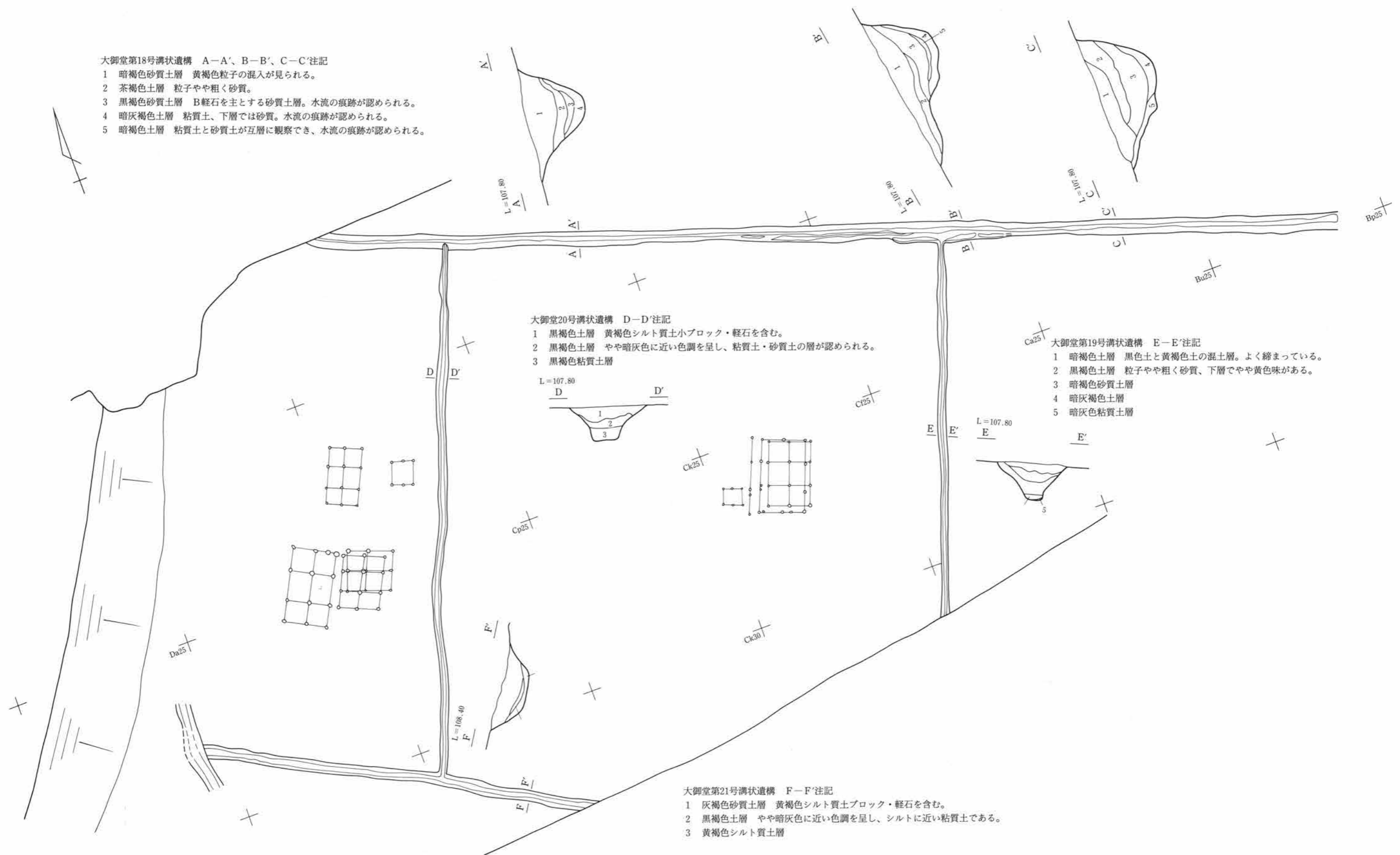
大御堂第19号溝状遺構 E-E'注記

- 1 暗褐色土層 黒色土と黄褐色土の混土層。よく締まっている。
- 2 黒褐色土層 粒子やや粗く砂質、下層でやや黄色味がある。
- 3 暗褐色砂質土層
- 4 暗灰褐色土層
- 5 暗灰色粘質土層



大御堂第21号溝状遺構 F-F'注記

- 1 灰褐色砂質土層 黄褐色シルト質土ブロック・軽石を含む。
- 2 黒褐色土層 やや暗灰色に近い色調を呈し、シルトに近い粘質土である。
- 3 黄褐色シルト質土層



第197図 大御堂調査区C区中世遺構平面図

溝と掘立柱建物跡とは関連性のあるものと推定される。大御堂第12号～第14号掘立柱建物跡（C区東群）は中区画にまとまって検出され、大御堂第15号～第19号掘立柱建物跡（C区西群）は西区画で検出された。東群の掘立柱建物跡は確認標高が107.00m、西群では107.83m～108.05mである。

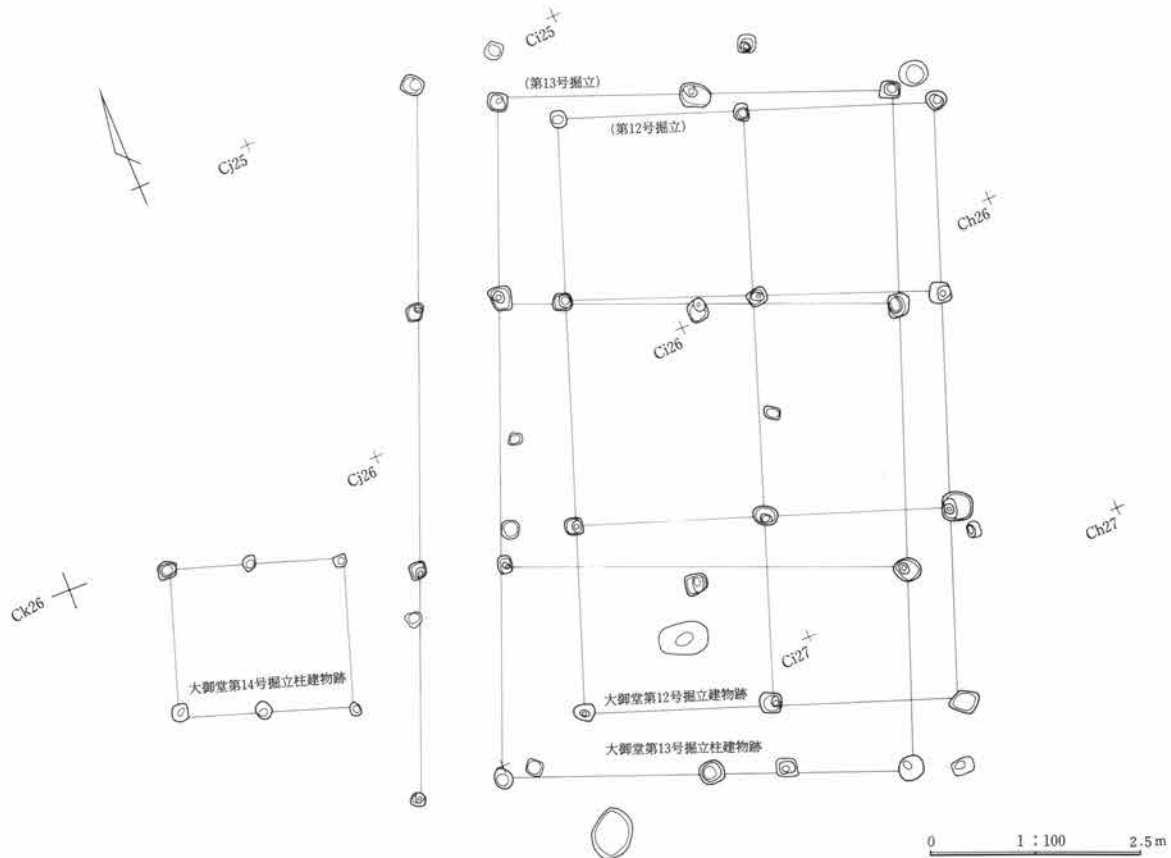
東群では3棟が検出された。大御堂第12号掘立柱建物跡と大御堂第13号掘立柱建物跡は2間×3間の総柱構造で、建物長軸方位がN-21°-E、N-22°-Eとほぼ一致し、規模もほぼ同様に重複する。大御堂第13号掘立柱建物跡には西の入側先に外屋ないし廂がつく。重複の新旧関係は不明である。

大御堂第14号掘立柱建物跡はこの2棟のすぐ西にある1間×2間の小規模な建物である。大御堂第12号掘立柱建物跡とは建物の南側の棟がほぼ一直線上に揃うという共通性が認められ、おおよそ1間半の距離で、大御堂第12号掘立柱建物跡の梁間1間と桁間距離がほぼ同じであることから同時期に存在していた可能性が高いと思われる。柱穴埋土は浅間B軽石を含む黒褐色土である。

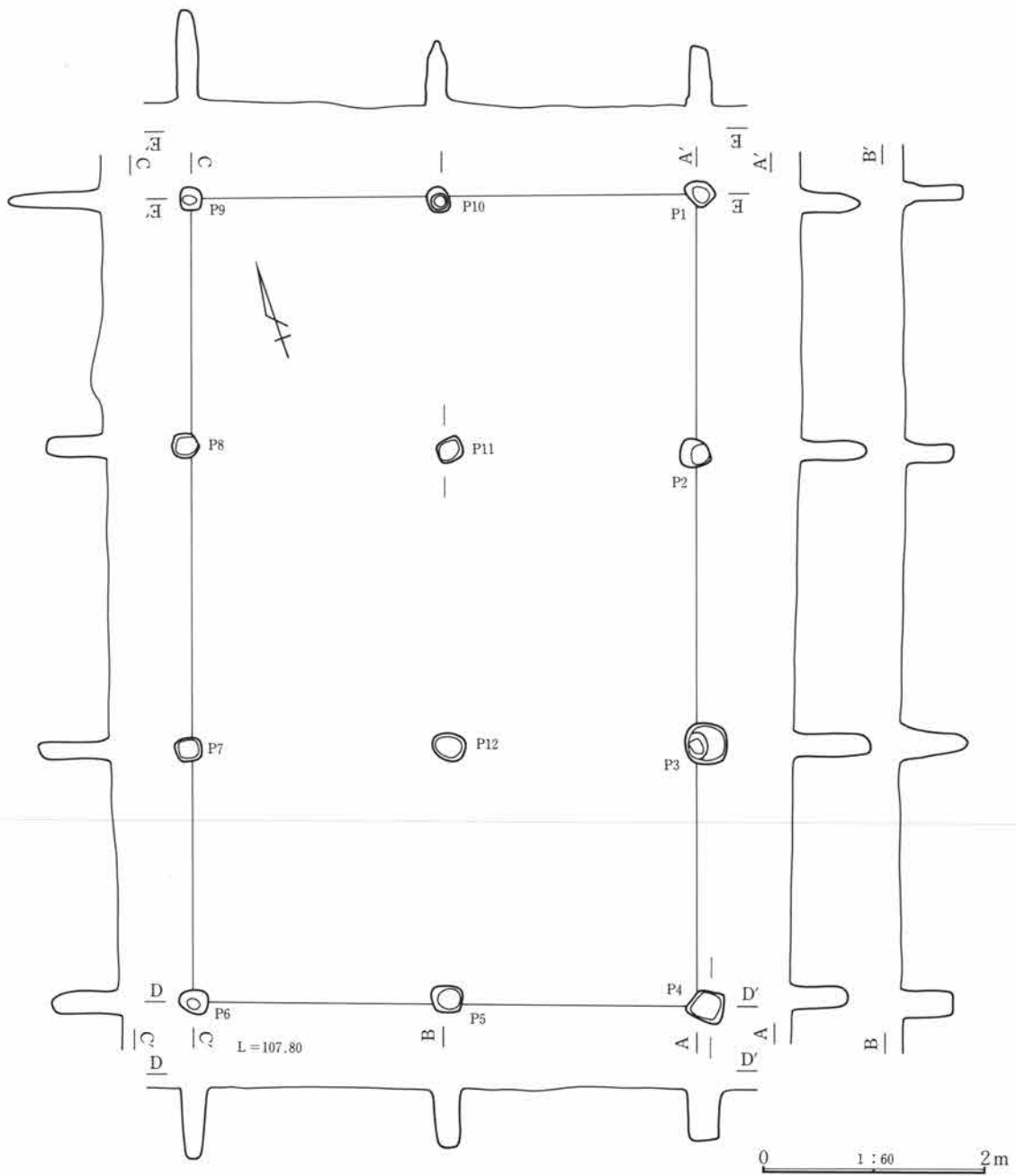
西群では5棟の掘立柱建物跡が検出された。大御堂第15号～第17号掘立柱建物跡は2間×3間、大御堂第

第20表 大御堂調査区C区掘立柱建物跡一覧表

遺構名称	調査名称	棟方位	規模 (間)×(間)	面積(m ²)	桁行(m)		梁行(m)		庇(m)	柱穴平面 形状	備考
					①長辺	②短辺	①長辺	②短辺			
第12号掘立柱建物跡	CB1	N-20°-E	3×2	32.2	①7.07	②7.05	①4.57	②4.55	—	隅丸方形	総柱
第13号掘立柱建物跡	CB2	N-21°-E	3×2	31.7	①8.10	②8.08	①4.90	②4.81	8.49	隅丸方形	総柱
第14号掘立柱建物跡	CB3	N-70°-W	2×1	3.62	①2.12	②2.10	①1.74	②1.70	—	円形	
第15号掘立柱建物跡	CB4	N-26°-E	3×2	24.2	①5.74	②5.67	①4.37	②4.14	—	隅丸方形	総柱
第16号掘立柱建物跡	CB5	N-28°-E	3×2	37.5	①8.19	②8.16	①4.63	②4.55	—	楕円形	総柱
第17号掘立柱建物跡	CB6	N-19°-E	2×1	6.1	①2.65	②2.58	①2.35	②2.35	—	円形	
第18号掘立柱建物跡	CB7	N-24°-E	3×2	21.8	①6.29		①3.61	②3.34	—	円形	総柱
第19号掘立柱建物跡	CB8	N-71°-W	2×2	21.1	①4.38	②4.33	①4.86	②4.84	—	円形	総柱



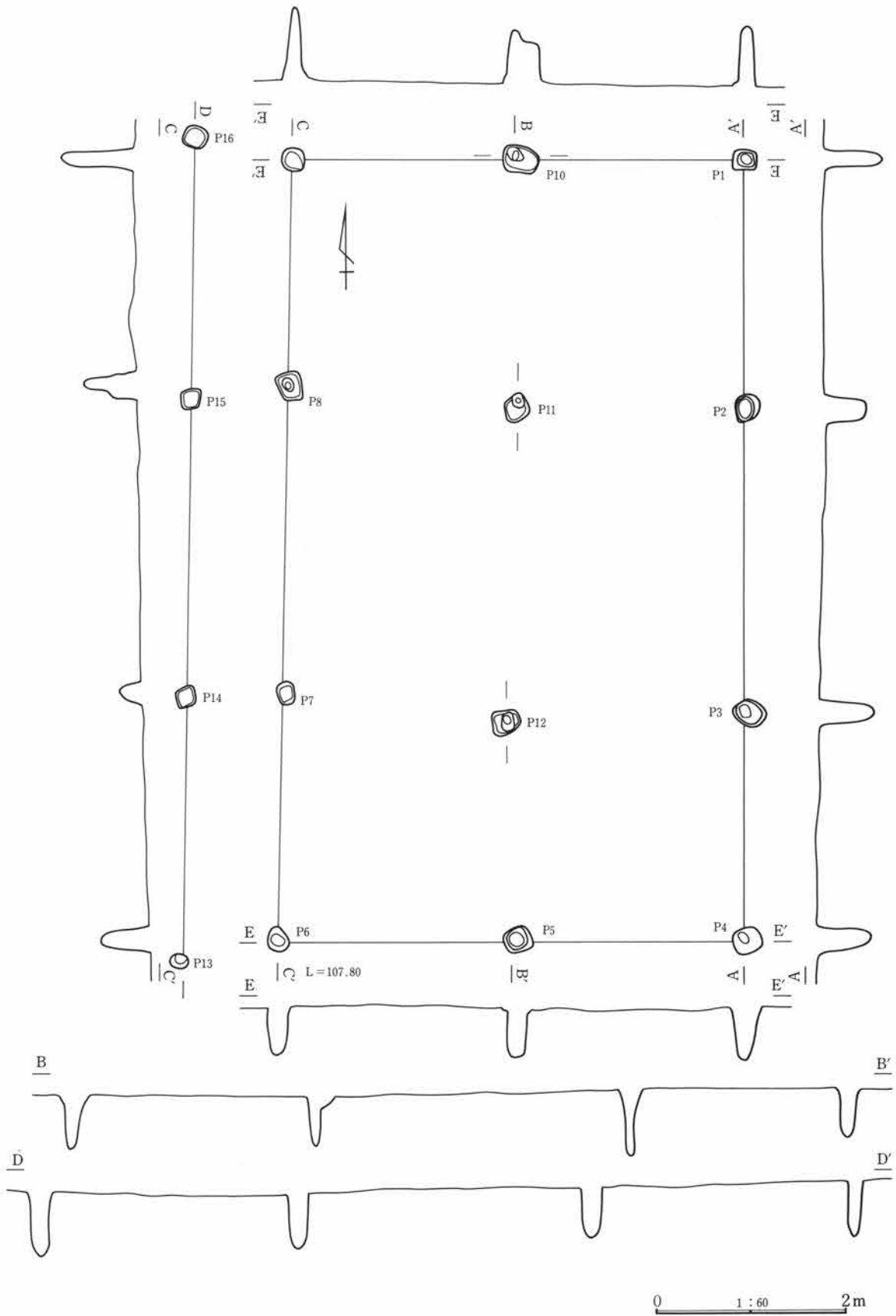
第198図 大御堂調査区C区東群掘立柱建物跡遺構平面図



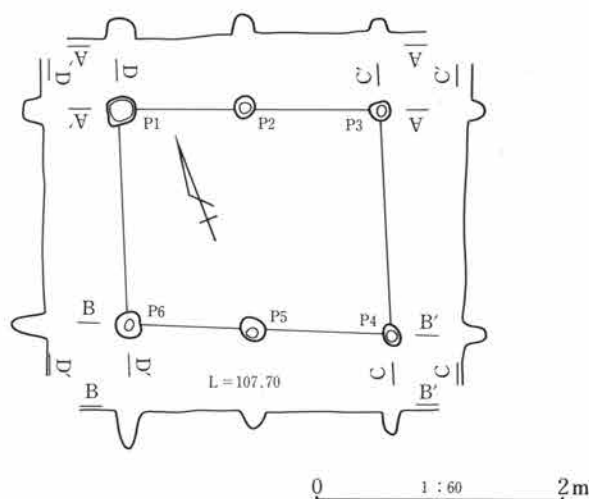
第199図 大御堂第12号掘立柱建物跡遺構平面図

18号掘立柱建物跡は2間×2間の平面構造で全て総柱構造である。大御堂第17号掘立柱建物跡は1間×2間(2.67m×2.29m)とたいへん小規模なもので、東群にも同様な建物が見られ、この二つの建物については付属舎のような性格の建物であったと推定される。

平面的配置からは、北の2棟と南の3棟とに別れるが、大御堂第18号掘立柱建物跡と大御堂第19号掘立柱建物跡に重複関係が見られ同時期存在は最大で4棟である。建物の棟方位に若干の差異が認められるが、大御堂第18号掘立柱建物跡と方位を共通する大御堂第16号掘立柱建物跡は、半間(3尺)の距離を隔てただけで並んでおり、密接に関係する建物と推定される。また、大御堂第19号掘立柱建物跡とは北側の2棟が共通性を持つと考えられ、この3棟を一群の建物とし、これに対し南側の大御堂第15号掘立柱建物跡と大御堂第16号掘立柱建物跡とが対の存在としてあったことが考えられる。



第200図 大御堂第13号掘立柱建物跡遺構平面図



第201図 大御堂第14号掘立柱建物跡遺構平面図

第14号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	22×20×8	107.53	P 1～P 2 102	P 1～P 6 170
2	18×16×17	107.47	P 2～P 3 110	P 2～P 5 178
3	16×14×9	107.51		P 3～P 4 174
4	16×13×18	107.48	P 6～P 5 110	
5	20×18×11	107.56	P 5～P 4 100	
6	22×18×25	107.42		

建物規格からは、大御堂第16号掘立柱建物跡と大御堂第18号掘立柱建物跡に桁行3間の柱間の取り方で、中央がやや広いという共通する特徴が認められる。また、大御堂第17号掘立柱建物跡は、遺構規模が小さく付属舎的な性格を持つものと推定されるが、建物方位からは大御堂第19号掘立柱建物跡との共通性が窺われる。

大御堂第17号掘立柱建物跡では中央やや東寄りに直径20cm・深さ2cmの焼土痕跡が検出された。確認段階ではこれに掘り方は認められず、ただ地面が焼土化していただけであったが、その中央部は強い火力を受けたらしく青黒く硬化していた。単一面での確認であるため、この焼痕が大御堂第17号掘立柱建物跡に確実に付随するものであると断定するのは難しいが、もし同時期の所産であるとするならばこの焼痕から判断して固定的な燃焼施設の存在も窺われる。以上は調査時の所見であるが、遺物整理の段階においてふいごの羽口と思われる小片が見られた。これについては整理作業の工程上の問題と遺物の残存状況が思わしくなかったもので、図化等は省いたが、あるいはこうした焼土痕跡に関係するものと推定でき、ここの建物跡の性格を窺わせるものの可能性がある。これについては、類例資料を待って検討したい。なお、同様な焼土痕跡は、大御堂第19号掘立柱建物跡のやや東方でも1カ所確認されている。

C区で検出された掘立柱建物跡は、東西2群に分かれ、ほぼ半町を単位として方形に区画された溝状遺構のなかにある。東群の大御堂第12号掘立柱建物跡・大御堂第14号掘立柱建物跡と西群の大御堂第16号掘立柱建物跡と大御堂第17号掘立柱建物跡とは東西でほぼ同じ位置にあり、通常の居住域としてというよりは、ほぼ南北に長軸をもつ建物の配置や柱間距離の不規則性などから、共通の企画性をもち何らかの意図をもつ

第21表(1)

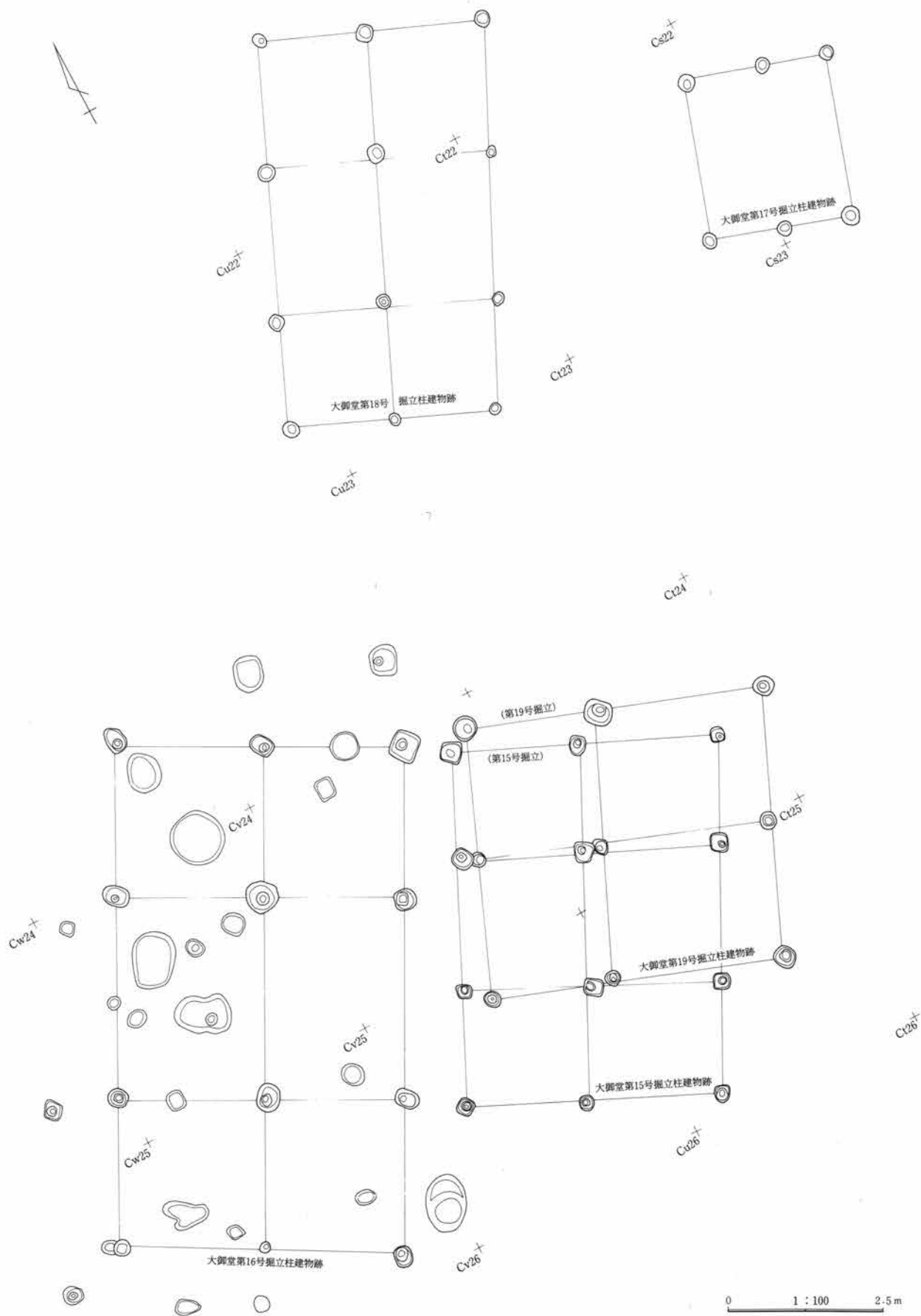
第12号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	28×24×51	107.11	P 1～P 2 225	P 1～P 10 230
2	26×24×41	107.20	P 2～P 3 258	P 10～P 9 225
3	36×36×61	107.04	P 3～P 4 224	
4	32×28×39	107.25		P 2～P 11 231
5	26×24×37	107.28	P 10～P 11 219	P 11～P 8 266
6	26×20×40	107.27	P 11～P 12 263	
7	22×20×59	107.00	P 12～P 5 223	P 3～P 12 234
8	24×22×41	107.16		P 12～P 7 224
9	19×18×79	106.72	P 9～P 8 215	
10	22×18×54	107.01	P 8～P 7 266	P 4～P 5 233
11	22×22×57	106.99	P 7～P 6 224	P 5～P 6 224
12	28×23×67	106.95		

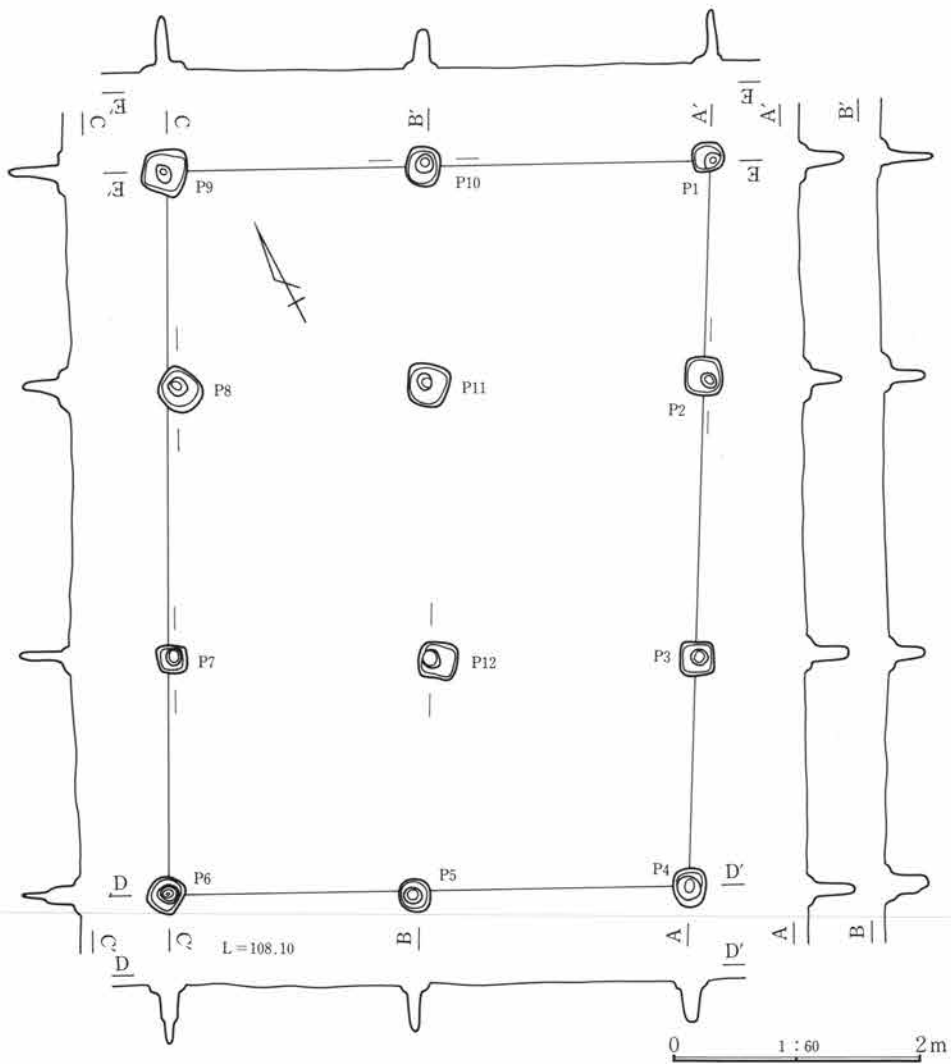
第13号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	28×20×54	107.03	P 1～P 2 250	P 1～P 10 246
2	28×25×31	107.28	P 2～P 3 318	P 10～P 9 235
3	32×28×48	107.17	P 3～P 4 242	
4	30×28×65	107.03		P 2～P 11 237
5	30×29×46	107.21	P 10～P 11 247	P 11～P 8 236
6	26×22×49	107.19	P 11～P 12 328	
7	22×20×27	107.36	P 12～P 5 233	P 3～P 12 245
8	30×24×51	107.16		P 12～P 7 234
9	24×24×74	106.72	P 9～P 8 238	
10	38×28×27	107.29	P 8～P 7 316	P 4～P 5 242
11	25×25×66	106.91	P 7～P 6 250	P 5～P 6 248
12	29×25×66	106.97		
13	18×16×29	107.19	庇P 13～P 16	P 9～P 16 103
14	20×20×36	107.26	P 16～P 15 266	P 8～P 15 101
15	20×20×48	107.09	P 15～P 14 311	P 7～P 14 105
16	26×22×35	107.22	P 14～P 13 250	P 6～P 13 104

第5節 C区検出の中近世の遺構と遺物



第202図 大御堂調査区C区西群掘立柱建物跡遺構平面図



第203図 大御堂第15号掘立柱建物跡遺構平面図

た配置と考えることができよう。

建物群の柱穴からは浅間B軽石を含む黒褐色土が見られ、寺院址とは同時期に存在した可能性が考えられ、構築時期を中世と考えることができよう。ここはいわゆる寺地に当たる区域であり、寺地における建物の在り方を知る上では重要である。この点については、今後の類例資料を待って検討課題としたい。

(4) 大御堂第2号井戸跡(第208図)

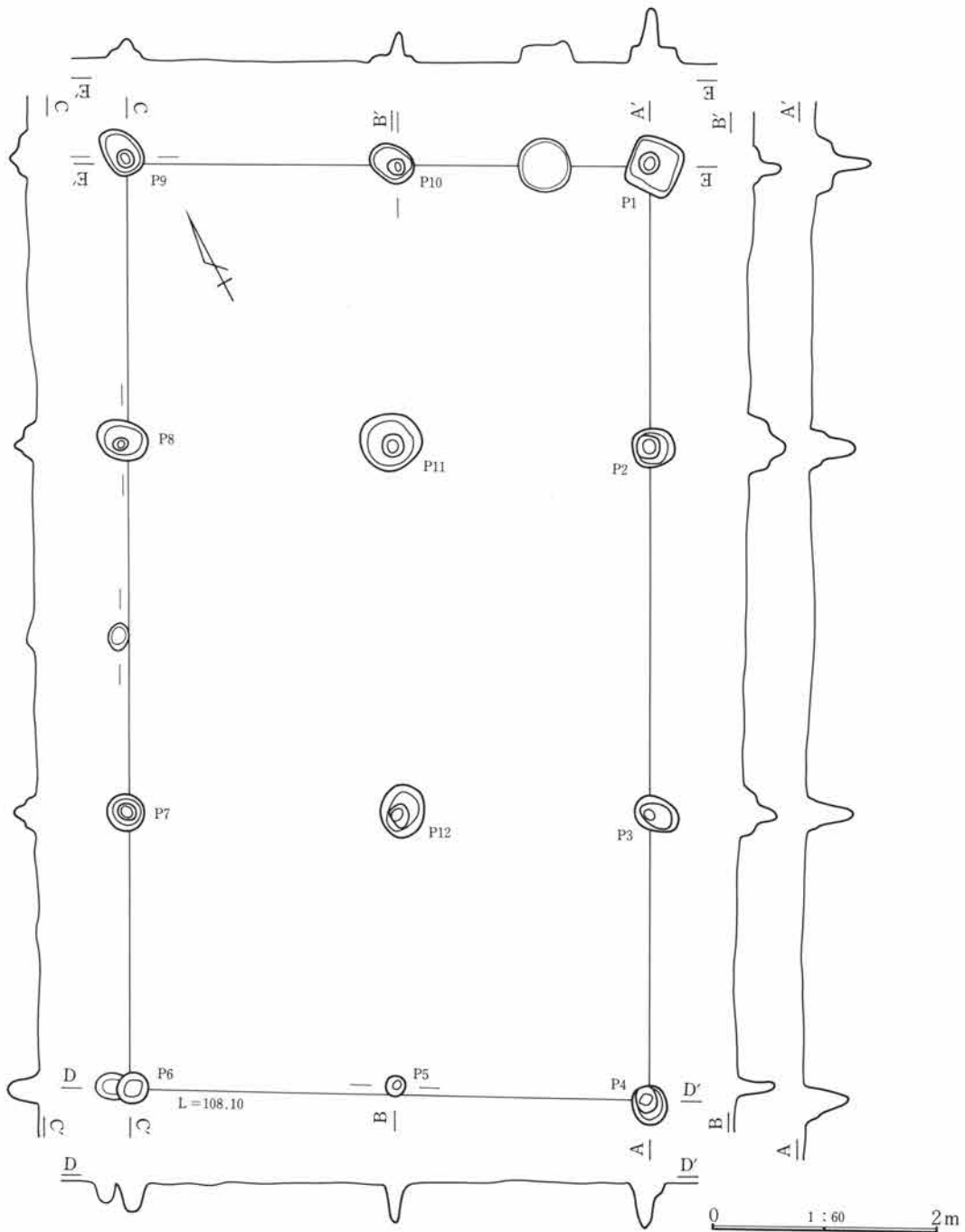
大御堂第2号井戸跡はC区中程の北よりにあたるCg・Ch-15グリッドで検出された。ほぼ円形の平面形状を示し、径は264cm~222cmである。確認面より深さ約110cmまで掘り下げ、それより下部は湧水のため未掘である。遺構埋土には浅間A軽石が認められ、本遺構は近世後半以降の埋没と推定される。

(船藤亨・綿貫鋭次郎)

第21表(2)

第15号掘立柱建物跡柱穴計測表

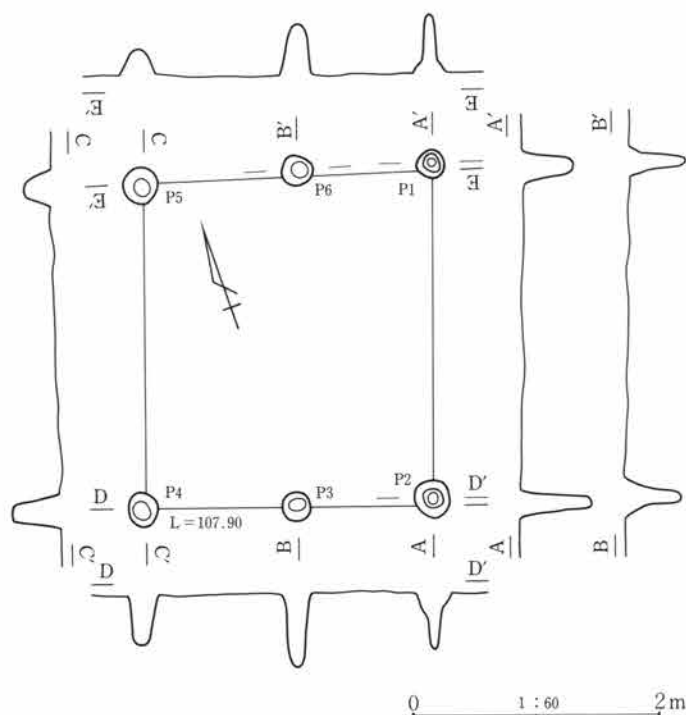
柱穴番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	25×24×42	107.52	P 1~P 2 175	P 1~P10 230
2	31×31×33	107.59	P 2~P 3 220	P10~P 9 207
3	28×27×29	107.64	P 3~P 4 172	
4	28×25×33	107.66		P 2~P11 223
5	24×23×37	107.62	P10~P11 173	P11~P 8 198
6	32×27×47	107.55	P11~P12 217	
7	28×23×38	107.57	P12~P 5 183	P 3~P12 213
8	46×35×34	107.63		P12~P 7 204
9	35×34×39	107.56	P 9~P 8 170	
10	30×23×32	107.63	P 8~P 7 213	P 4~P 5 220
11	34×32×29	107.67	P 7~P 6 191	P 5~P 6 194
12	31×28×31	107.66		



第204図 大御堂第16号掘立柱建物跡遺構平面図

2 C区出土の中近世遺物 (第209図、写真図版74)

C区での中近世遺物の出土はA・B区と比較すると極端に少なくなる。寺院址遺構とは農道及び農道下検出の第2号濠跡によって隔てられ、遺構が溝状遺構の検出を除けば殆ど見られないこととも符合するように、遺物の出土量もかなり少ない。出土遺物は、近世以降の陶磁器類が中心である。掲載した遺物は、出土遺物(収納箱で約2箱)のうち近代以降のものを除き、個体識別が可能でC区における状況を説明し得る資料を選択した。遺構に直接伴うものは大御堂第16号掘立柱建物跡のピットから出土した3702の須恵器の瓶胴部小片である。しかし、埋土は遺物の年代よりはやや時代が下ると思われ、遺構の時期を示す資料であるかどうか



第205図 大御堂第17号掘立柱建物跡遺構平面図

第21表(3)

第16号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	48×45×48	107.47	P 1～P 2 250	P 1～P 10 223
2	35×34×37	107.61	P 2～P 3 319	P 10～P 9 240
3	40×28×39	107.62	P 3～P 4 250	
4	36×30×38	107.67		P 2～P 11 228
5	18×18×31	107.71	P 10～P 11 246	P 11～P 8 238
6	16×16×23	107.79	P 11～P 12 322	
7	34×30×18	107.83	P 12～P 5 238	P 3～P 12 224
8	44×34×18	107.80		P 12～P 7 238
9	44×33×17	107.77	P 9～P 8 250	
10	40×30×22	107.72	P 8～P 7 322	P 4～P 5 225
11	54×50×31	107.65	P 7～P 6 244	P 5～P 6 230
12	46×39×30	107.71		

第17号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	23×23×45	107.32	P 1～P 2 265	P 1～P 6 107
2	30×28×44	107.38		P 6～P 5 128
3	23×23×6	107.76	P 6～P 3 266	
4	26×23×39	107.43		P 2～P 3 111
5	26×26×20	107.56	P 5～P 4 258	P 3～P 4 125
6	25×24×41	107.37		

かは不明である。これ以外に掲載した3701・3703～3719・3721の19点はすべて大御堂第22号溝状遺構からのもので、出土総量の約¼である。グリッド掘り下げ途中でも遺物出土はわずかながら見られたが、近代～現代のものが多く、近世のものとしては掲載遺物がC区を代表する。

3701の埴輪小片の他は近世と思われる軟質陶器・陶磁器類である。3703は盤若しくは火舎類の口縁部かと思われる。3704は火舎の口縁部片で、外面にへら描きの唐草文が見られる。いずれも瓦質焼成である。3705～3709は陶器の摺鉢である。3705・3706は瀬戸美濃系で鉄釉が掛かり、3706はやや焼き締まっている。3707・3708は炆器質であり、関西系の焼締陶器と思われる。3709は灰釉の掛かる焼き締めの摺鉢で在地系と思

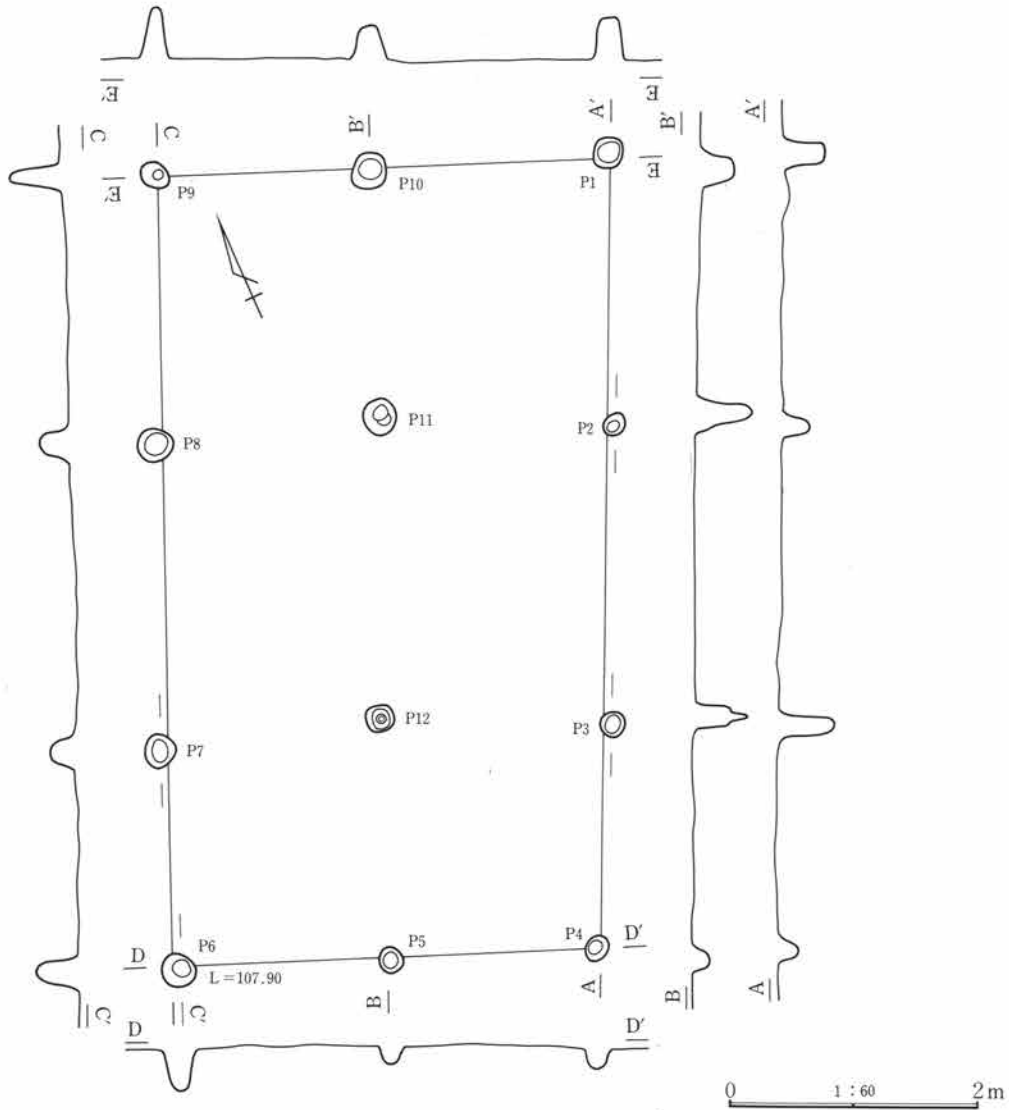
われる。3710は褐釉の掛かる鉢(筒形)の体部下半で瀬戸系である。3711は黄瀬戸釉の丸碗底部片である。3712～3719は肥前系の白磁染付で、3712・3714は皿、3713は袋物、3715～3719は碗の小片である。3721は陶胎染付の胴部小片と思われる。

肥前系の染付については生産地での年代が特定されており、それによれば3712～3714は17世紀末～18世紀前半、3715は18世紀前半～中頃、3718では18世紀中頃以降の生産年代である。大御堂第22号溝状遺構に伴うと考えられる遺物の年代は17世紀末を上限として18世紀中頃までが主たる時期と考えることができよう。ここで見られる遺物は、寺院址で出土した近世陶磁器類に共通する。

3720は近代に入ってからからの溝から出土した染付で、急須の胴部である。呉須は濃いコバルトブルーに発色し、染付には滲みが見られ、焼成の状況は良くない。(綿貫鋭次郎)

3 浅間A軽石降下前後の遺構(第210図～第212図)

大御堂調査区においては、浅間A軽石の純堆積層の確認と、これを埋土とする遺構確認が遺構検出の当初の段階で実施された。寺院址に関わる遺構については、この段階から園池遺構をはじめとして確認されたが、



第206図 大御堂第18号掘立柱建物跡遺構平面図

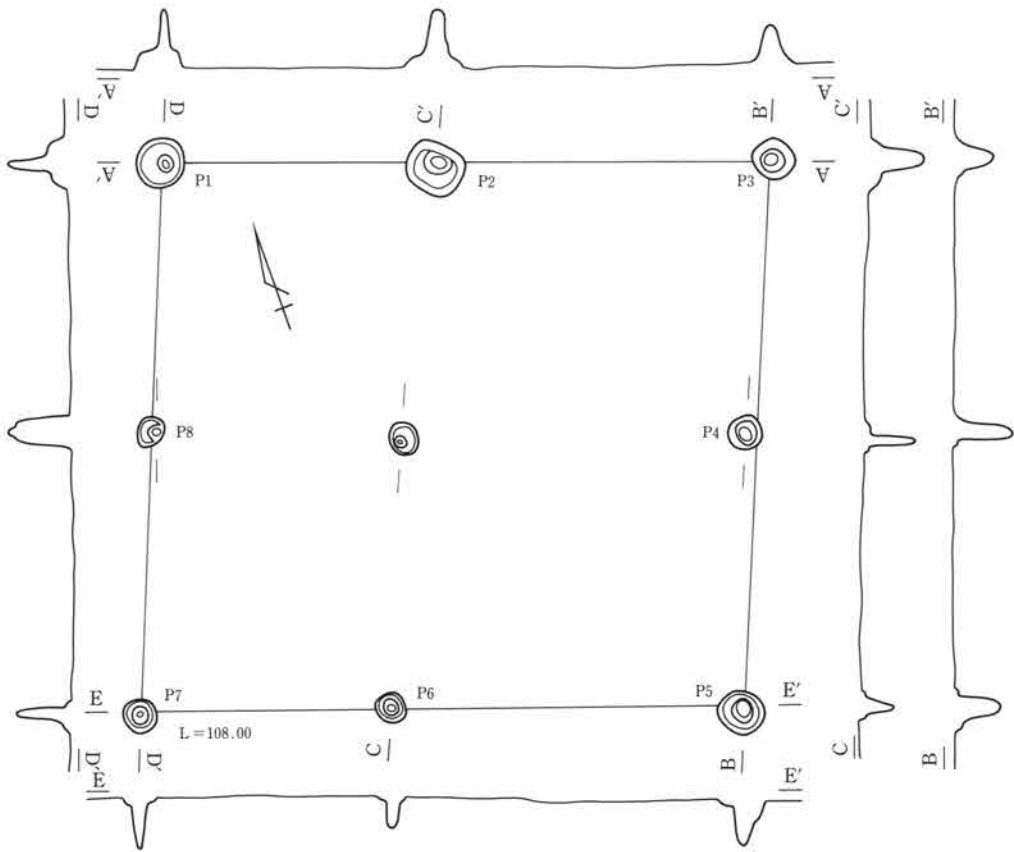
農道西側では面的にはほとんど確認されず、溝状遺構の埋土中に見られたのみである。A・B区においても同様で、調査前の現況で確認できる水路の痕跡には浅間A軽石が埋土中に認められる。

浅間A軽石の降下純層を明瞭に確認することはできなかったが、南池・北池及び第1号池状遺構において水流の影響を受けてはいるが比較的純層に近い状態を確認できた。埋没年代は浅間A軽石降下後のある程度下った時期と考えられ、18世紀末以降と考えられる。これと同じ時期の遺構として、寺院址北部にあたるAr~Ba-05~08グリッドで畝作の痕跡と思われる畝

第21表(4)

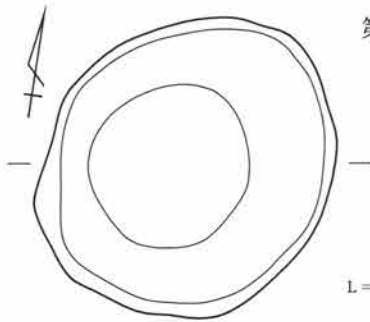
第18号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	26×24×31	107.43	P 1~P 2 218	P 1~P10 191
2	18×18×20	107.57	P 2~P 3 236	P10~P 9 170
3	21×18×44	107.38	P 3~P 4 175	
4	21×20×15	107.68		P 2~P11 184
5	20×19×13	107.73	P10~P11 193	P11~P 8 180
6	28×27×32	107.52	P11~P12 242	
7	26×25×20	107.64	P12~P 5 190	P 3~P12 185
8	28×28×23	107.56		P12~P 7 176
9	23×20×42	107.32	P 9~P 8 214	
10	30×28×26	107.49	P 8~P 7 244	P 4~P 5 166
11	30×29×43	107.36	P 7~P 6 174	P 5~P 6 168
12	22×22×43	107.40		

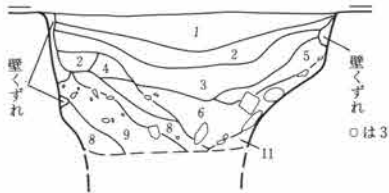


0 1:60 2m

第207図 大御堂第19号掘立柱建物跡遺構平面図



L = 107.20



- 5 黒褐色砂質土を主とする。
- 6 黒褐色粘質土を主とする。
- 7 3と6の混土
- 8 灰褐色砂質土
- 9 8に小礫を多量に含む。
- 10 灰褐色粘質土
- 11 10に同色で砂質をややおびている。

土層注記

- 1 軽石を多量に含む砂質の灰黒褐色土
軽石はA軽石と思われる。
- 2 1と同質で軽石の含有量が少ない。
- 3 黒褐色砂質土で少量の軽石を含む。
- 4 8に同じ。

0 1:60 2m

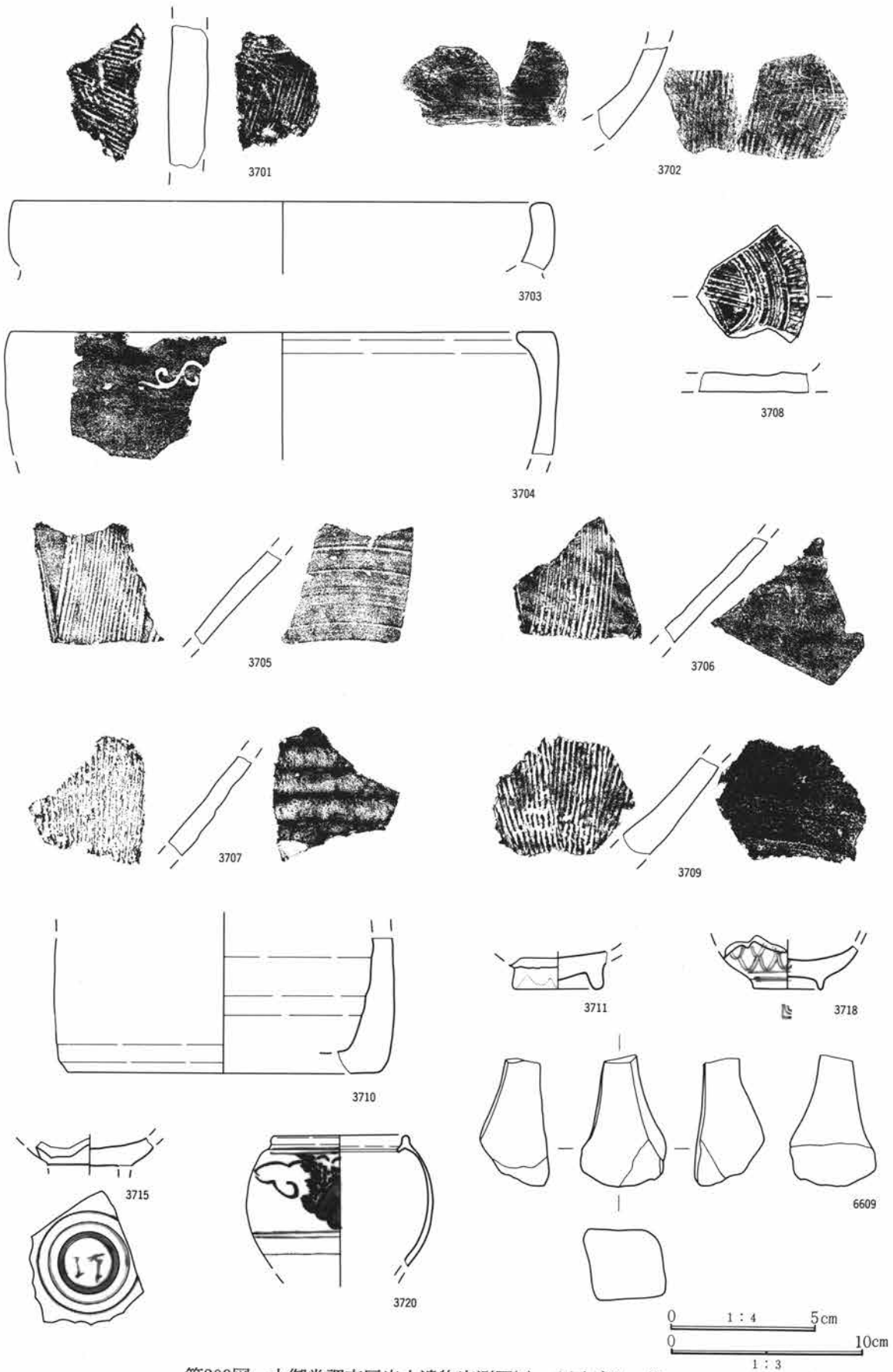
第208図 大御堂第2号井戸跡遺構平面図

第21表(5)

第19号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴 番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	35×31×28	107.60	P 1～P 2 215	P 1～P 8 264
2	27×27×45	107.48	P 2～P 3 218	P 8～P 7 220
3	38×35×36	107.56		
4	24×23×24	107.71	P 8～P 9 224	P 2～P 9 278
5	27×26×45	107.50	P 9～P 4 210	P 9～P 6 196
6	24×20×52	107.44		
7	40×38×48	107.45	P 7～P 6 214	P 3～P 4 284
8	48×40×37	107.57	P 6～P 5 224	P 4～P 5 202
9	25×24×41	107.51		

第5節 C区検出の中近世の遺構と遺物

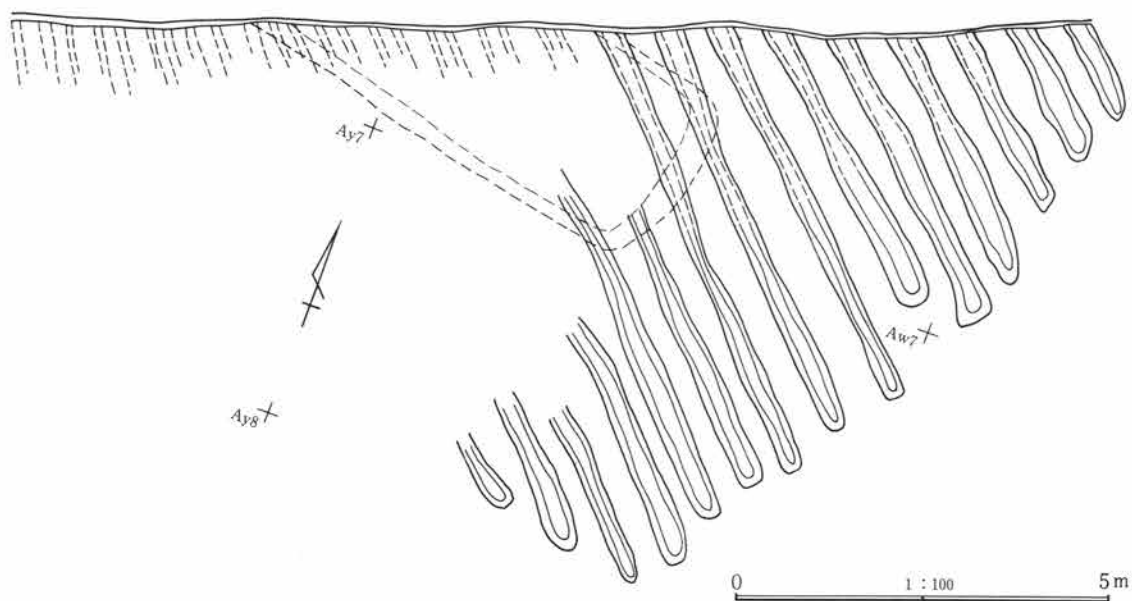


第209図 大御堂調査区出土遺物実測図(55)―C区グリッド―

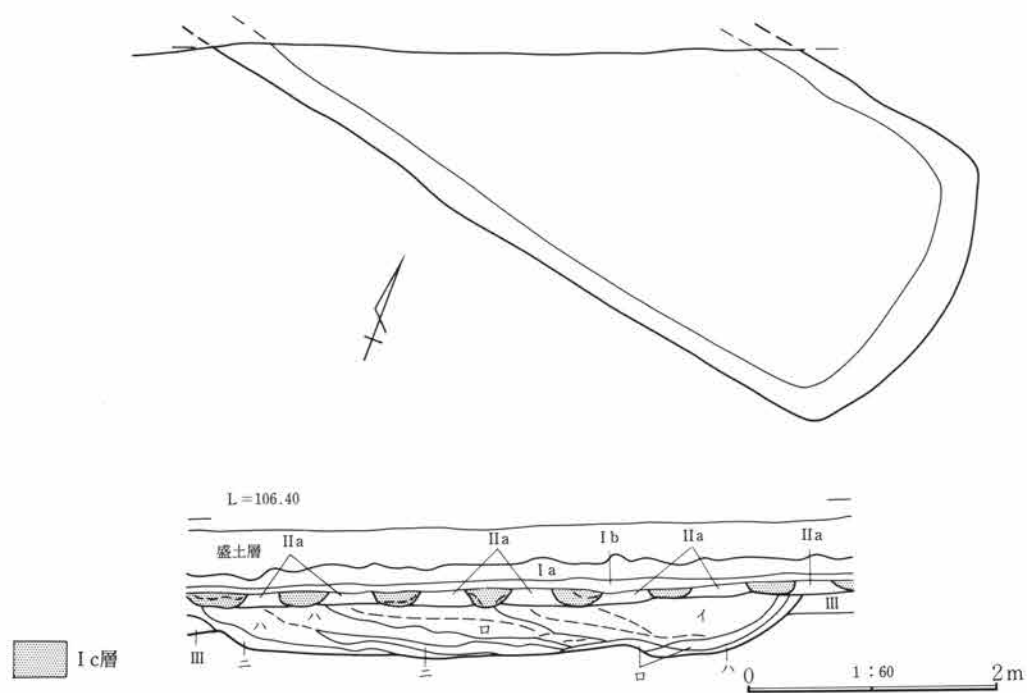
第三章 大御堂調査区の遺構と遺物

第22表 大御堂調査区出土遺物観察表 - C区 -

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	法量 (mm)	摺目条 摺目幅	成 形 底 部 器 形	①胎土(文様) ②焼成 ③色調	特 徴	備 考
3701 209 74	埴輪 円筒 胴部小片	Cf02g 大第22号溝	厚 20		紐作り 円筒	①中粒砂 ②酸化焰・普通 ③表面：鈍い赤褐色、断面：鈍い褐色	外：縦ハケ 内：横ハケ	
3702 209 74	須恵器 甕 胴部小片	大第16号掘立	厚 12 ~14		紐作り 欠損 球形胴	①細粒砂、白色小砂粒 ②還元焰・良好 ③表面：紫灰色、断面：青灰色	外：平行叩き 内：横ナデ	
3703 209 74	軟質陶器 火舎 口縁部	大第22号溝	厚 15		ロクロ作り 欠損 高台付盤形か	①細粒砂、微粒雲母・白色小粒子 ②還元焰・瓦質 ③表面：青黒色、断面：青灰色	外内：横ナデ 表面：ミガキ	平口縁
3704 209 74	大軟質陶器 火舎 口縁部	第22号溝	厚 8 口唇幅20		ロクロ作り 欠損 円形火鉢か	①細粒砂、微粒雲母・赤褐色小粒子 ②酸化焰・表面燻、瓦質 ③表面：青黒色、断面：浅黄橙色	外内：横ナデ 口唇部は平坦で 内反する	体部外面に 唐草文
3705 209 74	陶器 摺鉢 体部片	大第22号溝	厚 8	目 20条 幅 45mm	ロクロ成形 欠損 鉢形	①細粒砂 ②酸化焰・良好 ③表面：暗赤褐色、断面：灰白色	外：横ナデ 器面：鉄釉	瀬戸美濃系
3706 209 74	陶器 鉢・摺鉢 体部片	大第22号溝	厚 9 ~7	目 13条 幅 38mm	ロクロ作り 欠損 鉢形	①細粒砂、黒色粒子 ②酸化焰・やや焼締(断面一部還元) ③表面：暗赤褐色、断面：灰白色(灰色)	外：横ナデ 器面：鉄釉	瀬戸美濃系
3707 209 74	陶器 鉢・摺鉢 体部片	大第22号溝	厚 10 ~6	目7条? 幅 20mm	ロクロ作り 欠損 鉢形	①粗粒砂、小砂粒 ②酸化焰・焼締・堅緻 ③表面：暗褐色、断面：褐灰色	外：指ナデ痕 器面：鉄釉	関西系 (信楽か)
3708 209 74	陶器 鉢・摺鉢 底部	Ck19g 大第22号溝	厚 9	目 7条 幅 22mm	ロクロ成形 平底 鉢形	①細粒砂・精選 ②酸化焰・焼締・堅緻 ③表面：暗褐色、断面：褐灰色	器面：鉄釉	関西系
3709 209 74	陶器・施釉 鉢・摺鉢 体部片	大第22号溝	厚 17 ~10	目 11条 幅 27mm	ロクロ成形 欠損 鉢形	①粗粒砂・精選 ②酸化焰・焼締・堅緻 ③表面：浅黄橙色、釉調：暗オリーブ	器面：灰釉	在地系 (下仁田か)
3710 209 74	陶器 鉢 体~底部	大第22号溝	厚 15 ~10		ロクロ成形 平底 盤形か	①細粒砂、精選・均質、灰白色 ②酸化焰・良好・堅緻 ③外面：褐色	器表面：褐釉	瀬戸美濃系
3711 209 74	陶器 丸碗 底部	大第22号溝	底 10		ロクロ成形	①細粒砂、精選、灰白色 ②酸化焰、良好 ③釉調：黄色	黄瀬戸釉 高台裏・無釉	瀬戸美濃系
3715 209 74	磁器・染付 碗 底部	大第22号溝	底 36		ロクロ成形 やや密	①白色、精選 ②良好 ③青灰色	高台裏「太明選 年製」くずれ	肥前系 18c中~後
3718 209 74	磁器・染付 碗 底部	大第22号溝	底 36		ロクロ成形	①白色精選 ②良好 ③青灰色	高台裏「渦福」 外、二重網目文 内、網目文	肥前系 18c前~中
3720 209 74	磁器・染付 急須 体部	近代溝(CD25)			ロクロ成形	①胎土：やや密・白色 ②やや良好 ③くすんだ白	呉須は濃いコバ ルトブルーに発 色	関西または 会津系 19c



第210図 大御堂調査区浅間A軽石埋没畠作遺構平面図



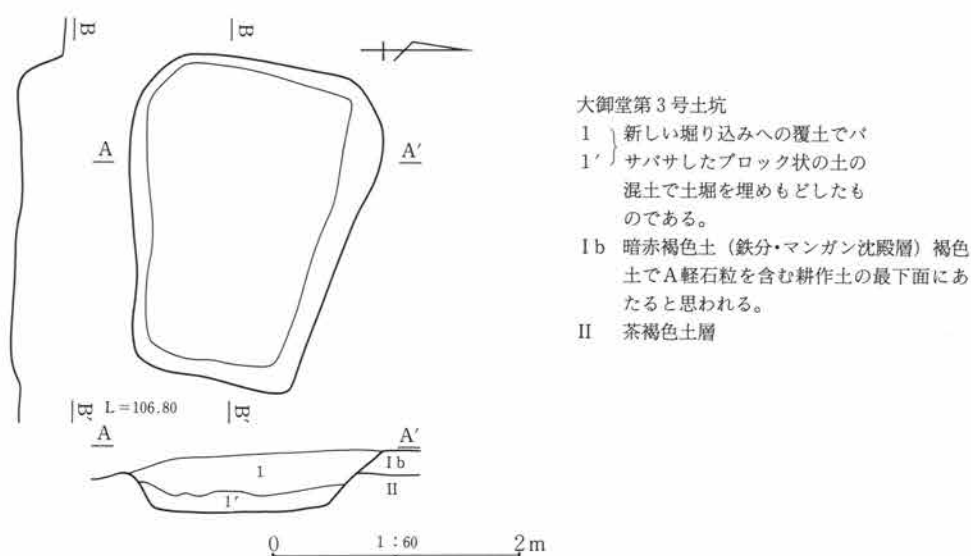
大御堂第3号土坑

- イ 明褐色粘土ブロックを主とする。
- ロ 黒褐色土に明褐色粘質土ブロックを混じる。
- ハ 黒褐色土 やや砂質っぽい。
- ニ 暗黒褐色粘質土

- I a 灰褐色砂質土 (A軽石含有)
- I b 暗赤褐色土 (鉄分・マンガン沈殿層)
- I c A軽石純層
- II a 茶褐色土層 やや砂質・粘性弱い
- III 暗褐色粘質土層

第211図 大御堂第3号土坑遺構平面図

第III章 大御堂調査区の遺構と遺物



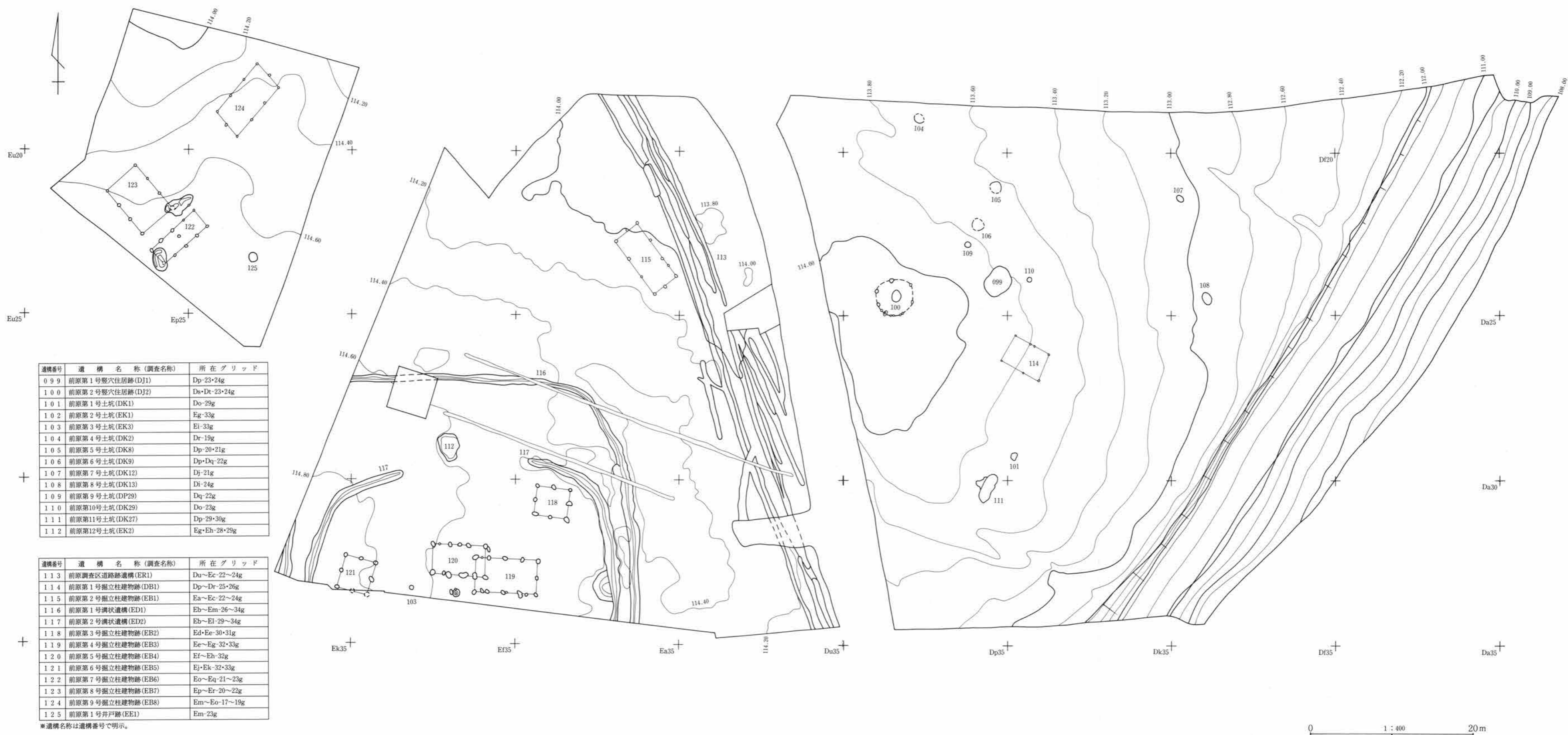
第212図 大御堂第4号土坑遺構平面図

状遺構を検出した。畝方向はN-43°-Wで、畝幅は30cm~40cm、浅間A軽石の埋没する作は上端幅20cm~40cm、深さ5cm~10cmであり、調査区北壁土層で明瞭に観察される。遺構の重複関係を見ると、大御堂第3号・第4号溝状遺構の覆土上面にあり、大御堂第2号土坑の直上で確認されている。

この畝作遺構の下面には大御堂第3号土坑が検出された。大御堂第3号土坑は長方形と思われる平面形の掘り方で、長軸方位はN-78°-Wである。埋土には黒褐色土と明茶褐色粘質土が互層となって確認され、人為的な埋め戻しと観察される。浅間A軽石埋没畝作遺構との関係からは近世前半以前と考えられる。長軸の方位は寺院址に見られる区画に一致するが、その関係は検証できず不明である。

浅間A軽石降下後の遺構として、寺院址西部の土塁跡上のBi・Bj-21・22グリッドで大御堂第4号土坑が検出されている。261cm×200cmの長方形土坑で深さは48cmである。埋土には茶褐色土が認められる。本遺構は土塁跡南西隅にあたり、大御堂第2号土坑を切っている。

上記の3つの遺構が、大御堂調査区で検出された遺構のうち、もっとも新しいものである。土坑については目的と性格等が不明であるが、畝作遺構の確認は寺院址の一角が近世中頃に農地として開墾されていたことを物語っている。調査前の現況で確認できた道路・水路等は残存部が寺院址遺構検出面にも見られたが、ここが主に水田として開墾されてからのものと考えられ、畝作遺構が浅間A軽石によって埋められて後のことと考えられる。(右島和夫・船藤亨・綿貫鋭次郎)



遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
099	前原第1号竪穴住居跡(DJ1)	Dp-23・24g
100	前原第2号竪穴住居跡(DJ2)	Ds-Dt-23・24g
101	前原第1号土坑(DK1)	Do-29g
102	前原第2号土坑(EK1)	Eg-33g
103	前原第3号土坑(EK3)	Ei-33g
104	前原第4号土坑(DK2)	Dr-19g
105	前原第5号土坑(DK8)	Dp-20・21g
106	前原第6号土坑(DK9)	Dp-Dq-22g
107	前原第7号土坑(DK12)	Dj-21g
108	前原第8号土坑(DK13)	Di-24g
109	前原第9号土坑(DP29)	Dq-22g
110	前原第10号土坑(DK29)	Do-23g
111	前原第11号土坑(DK27)	Dp-29・30g
112	前原第12号土坑(EK2)	Eg-Eh-28・29g

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
113	前原調査区道路跡遺構(ER1)	Du~Ec-22~24g
114	前原第1号掘立柱建物跡(DB1)	Dp~Dr-25・26g
115	前原第2号掘立柱建物跡(EB1)	Ea~Ec-22~24g
116	前原第1号溝状遺構(ED1)	Eb~Em-26~34g
117	前原第2号溝状遺構(ED2)	Eb~Ei-29~34g
118	前原第3号掘立柱建物跡(EB2)	Ed~Ee-30・31g
119	前原第4号掘立柱建物跡(EB3)	Ee~Eg-32・33g
120	前原第5号掘立柱建物跡(EB4)	Ef~Eh-32g
121	前原第6号掘立柱建物跡(EB5)	Ej~Ek-32・33g
122	前原第7号掘立柱建物跡(EB6)	Eo~Eq-21~23g
123	前原第8号掘立柱建物跡(EB7)	Ep~Er-20~22g
124	前原第9号掘立柱建物跡(EB8)	Em~Eo-17~19g
125	前原第1号井戸跡(EE1)	Em-23g

*遺構名称は遺構番号で明示。

第213図 前原調査区遺構全体図

第IV章 前原調査区の遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構—竪穴住居跡—

(1) 前原第1号竪穴住居跡 (第214図・第215図、写真図版45・105)

〔位置〕 前原調査区の東寄りのDp-23・24グリッドで検出された (調査名DJ1)。遺構確認面の標高は113.88mで、台地縁辺からは直線距離で約30m、前原第2号竪穴住居跡の東約12.5mの所に位置している。

〔経過〕 昭和62年度の調査において検出された。6月22日に住居跡を確認し、翌日に住居跡の出土遺物実測図の作成と遺物出土状態の写真撮影を実施した。当住居跡は、耕作による攪乱が著しく、遺構の保存状況は極めて悪かった。このために短期間で調査を終了した。

〔重複〕 耕作溝によって破壊をうけている。

〔覆土〕 ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は3層に分かれた。覆土の説明は第214図中に示してある。

〔形状〕 住居の壁はかなり攪乱を受けているが、楕円形を呈している。

〔壁高〕 住居跡確認面より約4～10cm程である。

〔周溝〕 なし。

〔床面〕 全体に軟弱である。

〔柱穴〕 4個のピットが検出されている。P₁の深さ30cm、P₂は20cm、P₃は55cm、P₄は66cmであり、P₃・P₄のピットが大きくて深い。柱穴間の距離はP₁-P₂間250cm、P₂-P₃間195cm、P₃-P₄間230cm、P₄-P₁間255cmであり、P₃-P₄間に埋甕が存在することから考えて、この部分が住居の出入口部になるものと判断される。

〔炉〕 床面を掘り窪めた地床炉の形態をとり、住居のほぼ中央に存在している。長径35cm・短径30cmの規模であり、焼土の堆積と周辺には炭化物の分布も認められた。

遺物出土状況 P₃寄りから胴部を意図的に欠損された加曾利E3式土器が、55×50×6cmのほぼ円形のピットに正位状態で埋設されていた。この他に同時期の縄文土器片47点が出土している。部位別点数は口縁部8点、胴部38点、底部1点である。石器では凹石1点、敲石1点、磨製石斧1点、磨石1点が出土している。

〔所見〕 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の竪穴住居跡である。炉跡と埋甕を結んだラインが住居の主軸方向と考えられ、その方位はN-47°-Eである。加曾利E3式期の住居跡は加曾利E4式期の柄鏡形敷石住居跡とは集落立地を異にしている。

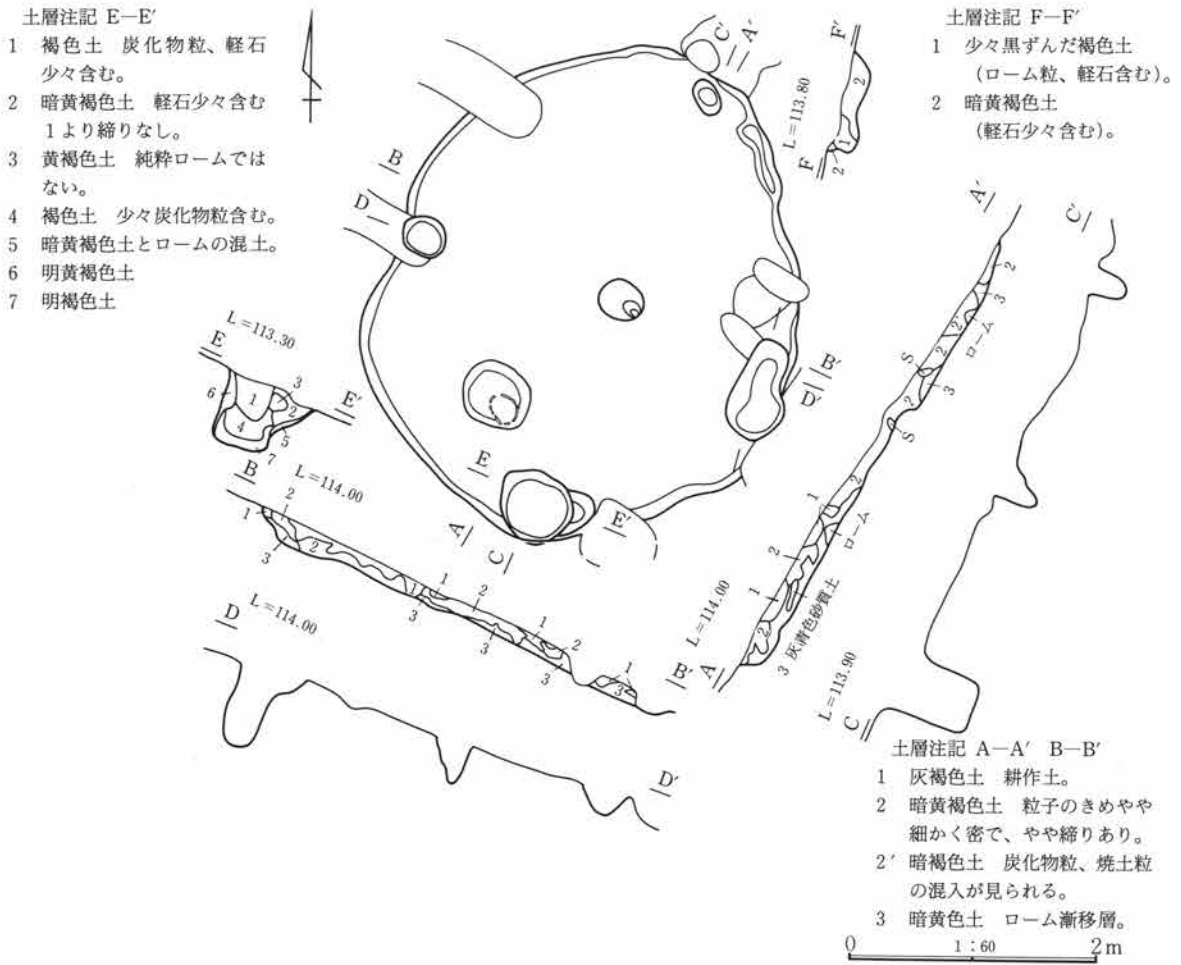
(2) 前原第2号竪穴住居跡 (第217図、写真図版46)

〔位置〕 前原第1号竪穴住居跡の西約12.5mのDs・Dt-23・24グリッドで確認された (調査名DJ2)。遺構確認面の標高は114mである。

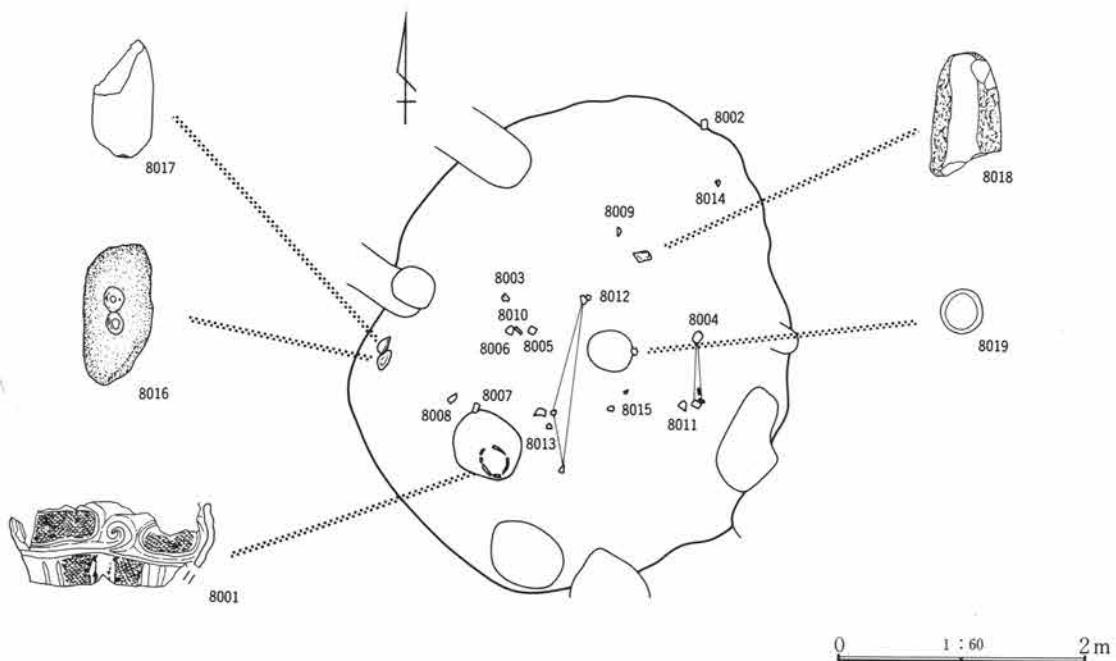
〔経過〕 昭和62年度の調査において検出された。6月25日に地床炉と柱穴を確認し、翌日に全景写真の撮影を実施した。当住居跡は前原第1号竪穴住居跡と同様に、耕作による削平・攪乱が著しく、遺構の残存状況が極めて悪かった。

〔重複〕 なし。

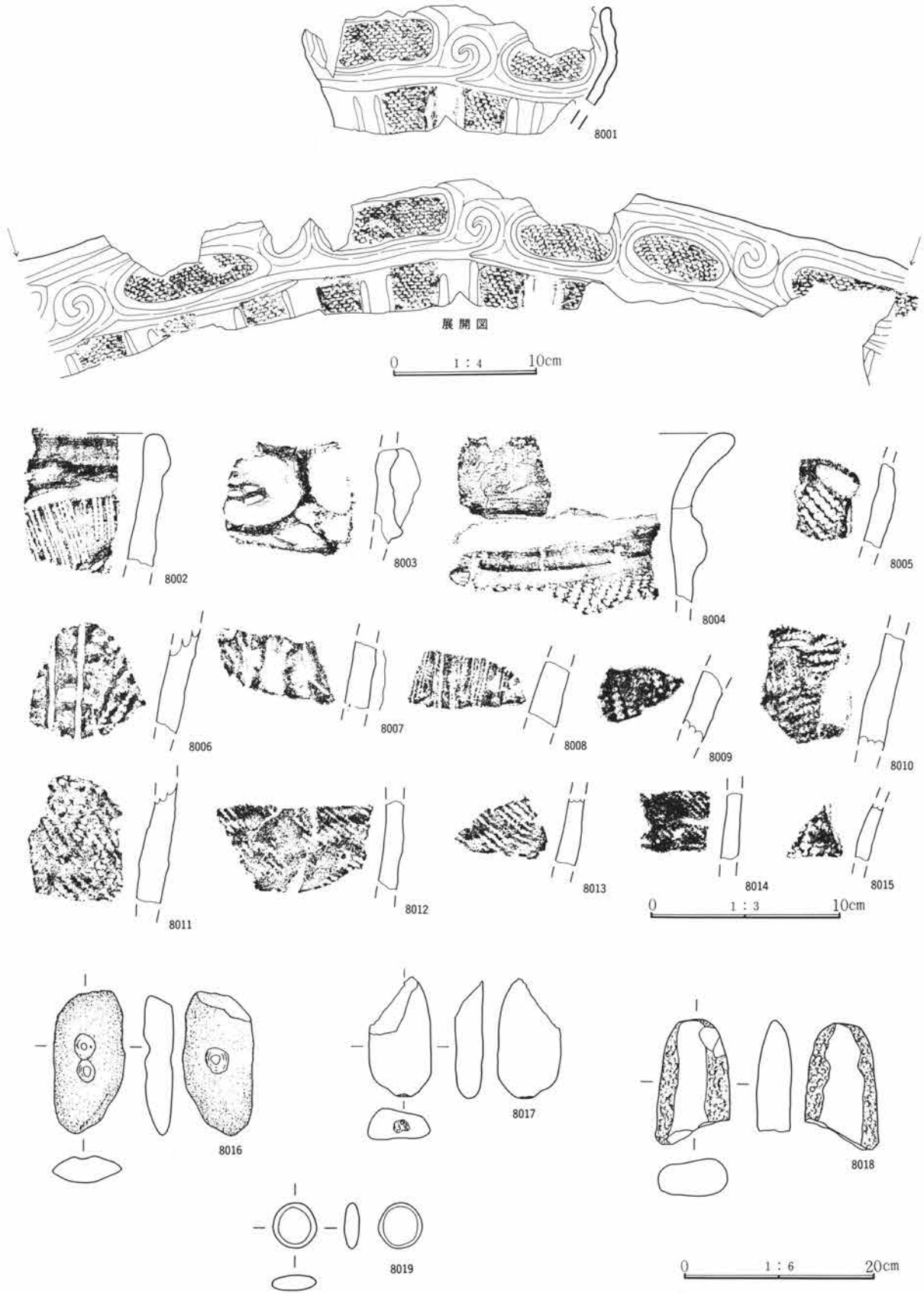
第IV章 前原調査区の遺構と遺物



第214図 前原第1号住居跡遺構平面図



第215図 前原第1号住居跡遺物分布図



第216図 前原第1号住居跡出土遺物実測図

第IV章 前原調査区の遺構と遺物

第23表 前原調査区出土遺物観察表(1)―第1号竪穴住居跡・縄文土器―

遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)		出土状況
8001 216 105	口縁部～ 胴部	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部～胴部。器厚8mm。 内面は横方向のやや丁寧なミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線による楕円・渦巻等の文様を描き、区画内に $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\} \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right\}$ 。胴部にも $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\} \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right\}$ 。沈線を垂下。		埋塞
8002 216 —	口縁部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11～14mm。 内面は横方向のやや粗い調整。 外面色調にぶい橙色、内面にぶい赤褐色。	口縁部に沈線による楕円の文様が描かれ、内部に条線が施されている。		覆土
8003 216 —	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整。 外面は灰黄褐色、内面はにぶい黄褐色。	口縁部に隆帯による楕円の文様が描かれ、内部に刺突が施されている。		覆土
8004 216 —	口縁部片	①中粒の砂を混入 ②良	浅鉢形土器の口縁部片。器厚8～12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は灰黄褐色。	口縁部は外反する。口縁部に無文帯をおき1条の隆帯を巡らせる。以下縄文施文。 原体は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right\}$ 縦転がし。土器面は柔軟。		覆土
8005 216 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向のやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	口縁から胴部にかけての破片。口縁部に沈線による楕円の文様を描き、以下縄文施文。 原体は $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\}$ 。押圧が強い。		覆土
8006 216 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は縦方向の丁寧な調整。 外面の色調は黒褐色、内面は灰黄褐色。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right\}$ 縦転がし。 沈線を垂下。		覆土
8007 216 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11～12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。	隆帯を垂下している。		覆土
8008 216 —	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13～16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は橙色。	条線が施されている。		覆土
8009 216 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面はやや粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right\}$ 。		覆土
8010 216 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10～14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right\}$ 縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。		覆土
8011 216 —	胴部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は荒れている。 内外面はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right\}$ 。 土器面は柔軟。		覆土
8012 216 —	胴部片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9～10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は浅黄褐色。	縄文施文。原体は $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\}$ 縦転がし。		覆土
8013 216 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8～11mm。 内面は横方向の丁寧な調整。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体は $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\}$ 縦転がし。		覆土
8014 216 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7～9mm。 内面は横方向のやや粗い調整。 外面色調はにぶい黄褐色、内面灰黄褐色。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right\}$ 縦転がし。		覆土
8015 216 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right\}$ 縦転がし。		覆土

第23表 前原調査区出土遺物観察表(2)―第1号竪穴住居跡・石器―

遺物番号 挿図・写真	器 種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
8016 216・105	凹石	完形	砂岩	15.2	7.4	2.8	325	両面に3個の凹みがある。凹みの平均は長径27mm、短径21mm、深さ3mmである。	覆土西壁寄り
8017 216・105	敲石	3/4	輝緑岩	(12.7)	6.5	3.1	(382)	敲打痕が認められる。	覆土西壁寄り
8018 216・105	磨製石斧	3/4	輝緑岩	(13.3)	7.6	3.8	(630)	磨き段階。	覆土中央
8019 216・105	磨石	完形	輝緑岩	4.9	4.5	1.6	57	全面に磨耗痕が認められる。	炉周辺

〔覆土〕 検出できなかった。

〔形状〕 耕作による削平・攪乱が著しく、遺構の残存状況が極めて悪かった。炉跡と考えられる焼土と円形に配列された柱穴と考えられるピット群から、住居跡であることを確認した次第である。壁は残っておらず、正確な形状と規模は不明であるが、ピット群の配列から楕円形を呈していたものであろう。

〔壁高〕 検出できなかった。

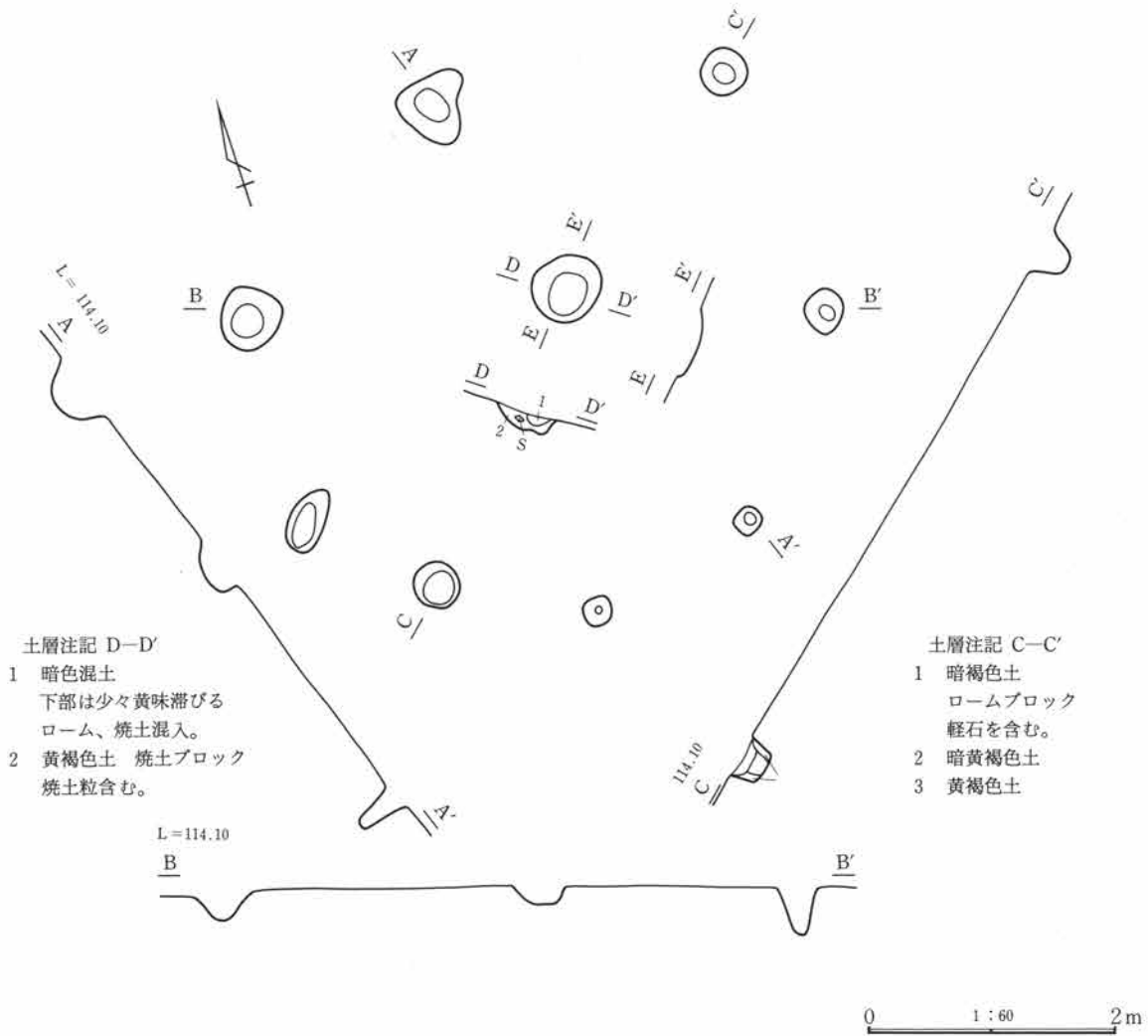
〔周溝〕 なし。

〔柱穴〕 8個のピットが検出されている。

〔炉〕 床面を掘り窪めた地床炉の形態をとり、住居のほぼ中央に存在している。長径58cm、短径52cm、深さ15cmの円形で、焼土粒子・焼土ブロックが検出されている。

遺物出土状況 なし。

〔所見〕 当住居跡は地床炉と柱穴が検出されたのみである。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、縄文時代の住居跡であることはまちがいのない事実であろう。



第217図 前原第2号住居跡遺構平面図

2 遺構 —土坑—

(1) 前原第1号土坑 (第218図・第219図、写真図版46・105)

Do-29グリットにおいて検出された(調査名DK1)。第1号竪穴住居跡の南約21mの所に位置している。確認面標高は113.70mである。土坑上面の規模は87×78cm、底面は68×61cm、深さ26cmの楕円形を呈する。底面は凸凹があり、面積約0.36㎡である。土坑内からは底部と口縁部の一部を欠損した加曾利E3式土器が正位状態で埋設されていた。屋外の単独の埋設土器として理解できる遺構である。

(2) 前原第2号土坑 (第220図・第221図、写真図版46)

Eg-33グリットにおいて検出された(調査名EK1)。第2号竪穴住居跡の南西約65mの所に位置している。確認面標高は113.70mである。土坑上面の規模は93×83cm、底面は28×23cm、深さ51cmの楕円形を呈する。底面は凸凹があり、面積約0.05㎡である。土坑内からは縄文土器片28点が出土している。加曾利E3式土器を主体としている。

(3) 前原第3号土坑 (第222図・第223図、写真図版46・105)

Ei-33グリットにおいて検出された(調査名EK3)。前原第2号土坑の西5.70m、前原第2号竪穴住居跡の南西69mの所に位置している。確認面標高は113.70mである。後世の土坑によって一部を壊されているが、土坑上面の規模は57×53cm、底面は35×28cm、深さ44cmの楕円形を呈する。底面にはやや凸凹があり、面積は約0.08㎡である。土坑内からは、口縁部と底部を欠損(胴部のみ)した加曾利E3式土器が正位状態で埋設されていた。第1号土坑と同様に屋外の単独の埋設土器として理解できる遺構である。

(4) 前原第4号土坑 (第224図)

Dr-18・19グリットにかけて検出された(調査名DK2)。前原第1号竪穴住居跡の北西約22mの所に位置している。確認面標高は113.10mである。土坑上面の規模は129×128cm、底面は105×96cm、深さ42cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦で、面積約0.82㎡である。

(5) 前原第5号土坑 (第224図)

Dp-20・21グリットにかけて検出された(調査名DK8)。前原第1号竪穴住居跡の北約11.5mの所に位置している。確認面標高は113.65mである。土坑上面の規模は141×138cm、底面は95×95cm、深さ17cmのほぼ円形を呈する。底面は凸凹が激しく、面積約0.71㎡である。

(6) 前原第6号土坑 (第224図)

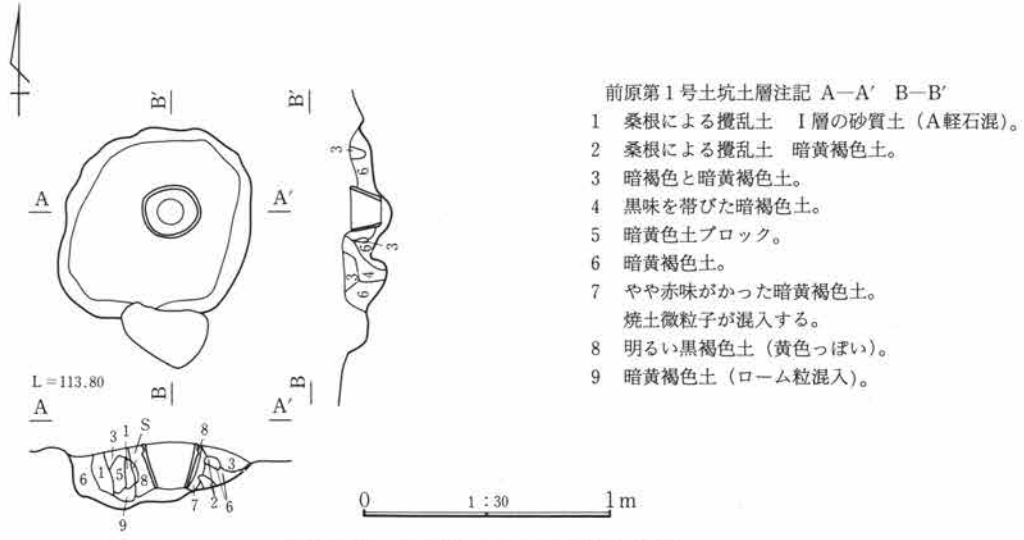
Dp・Dq-22グリットにかけて検出された(調査名DK9)。前原第1号竪穴住居跡の北北西約7mの所に位置している。確認面標高は113.75mである。土坑上面の規模は147×137cm、底面は126×113cm、深さ12cmの楕円形を呈する。底面は凸凹が激しく、面積約1.17㎡である。

(7) 前原第7号土坑 (第224図)

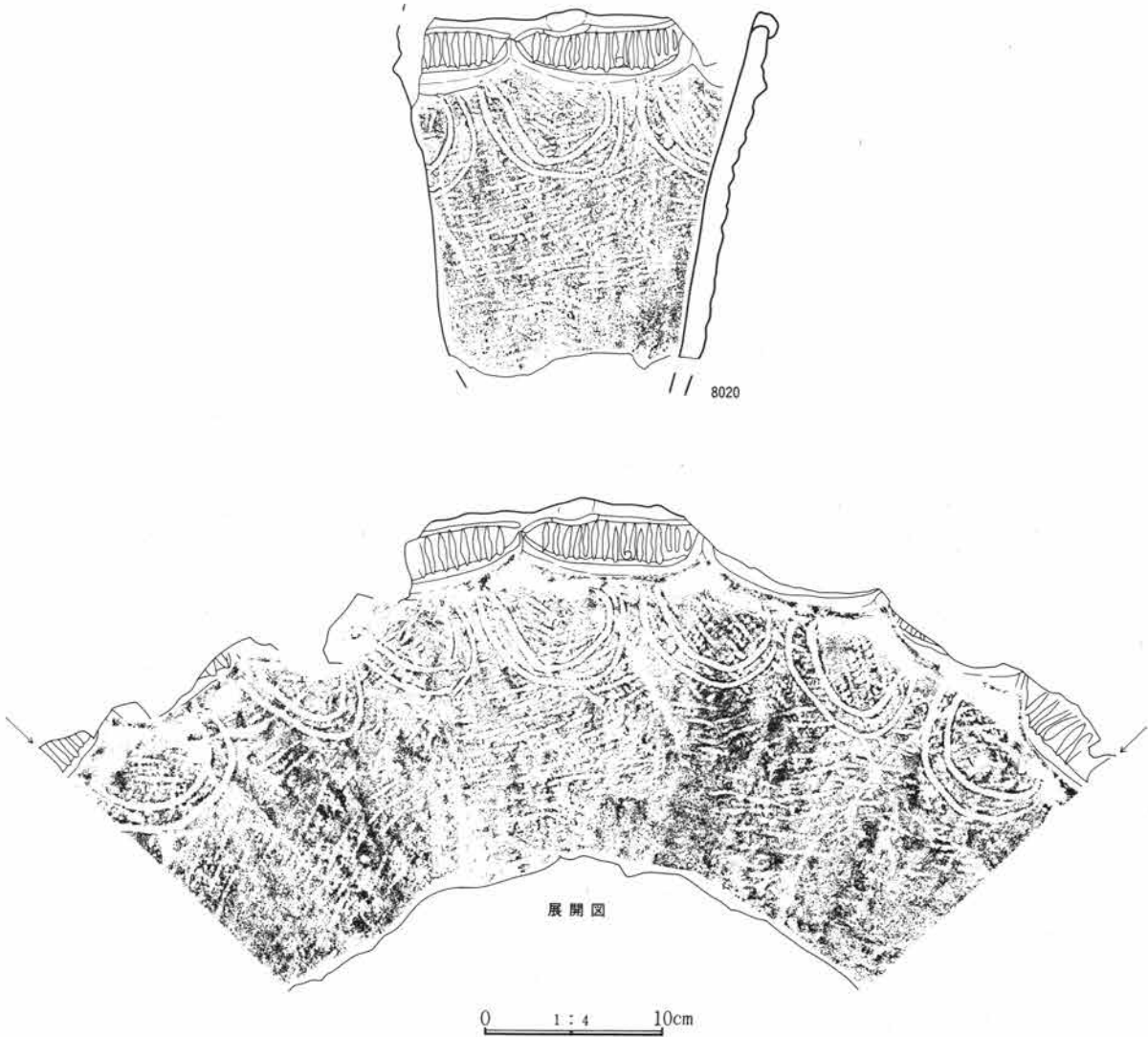
Dj-21グリットにおいて検出された(調査名DK12)。前原第1号竪穴住居跡の南東約24.5m所に位置している。確認面標高は113.00mである。土坑上面の規模は95×75cm、底面は70×30cm、深さ26cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.2㎡である。

(8) 前原第8号土坑 (第224図)

Di-24グリットにおいて検出された(調査名DK13)。前原第1号竪穴住居跡の東約26mの所に位置している。確認面標高は112.90mである。土坑上面の規模は126×122cm、底面は96×95cm、深さ21cmのほぼ円形を呈する。底面は皿状であり、面積約0.72㎡である。

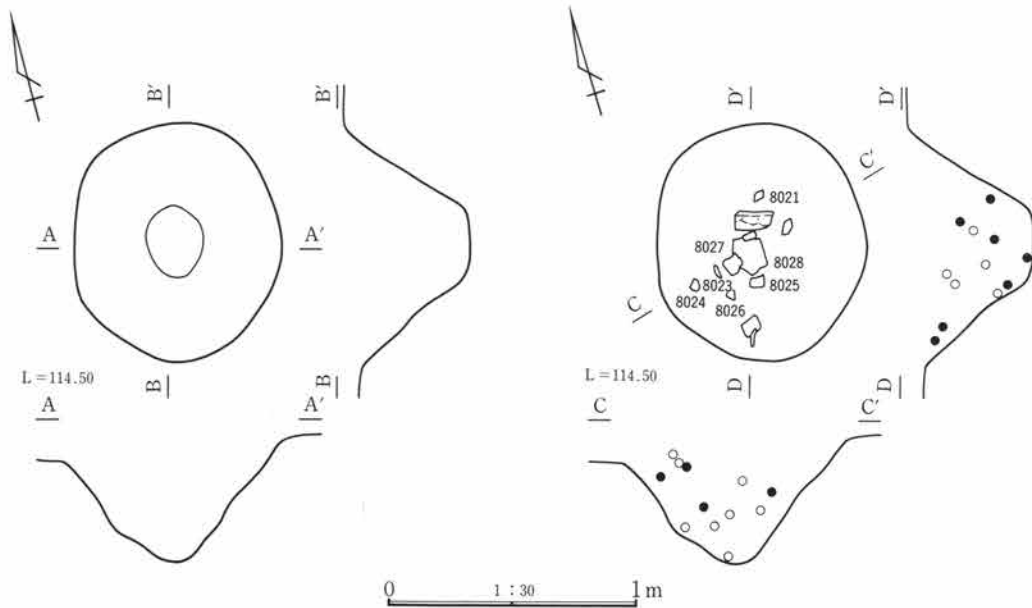


第218図 前原第1号土坑遺構平面図

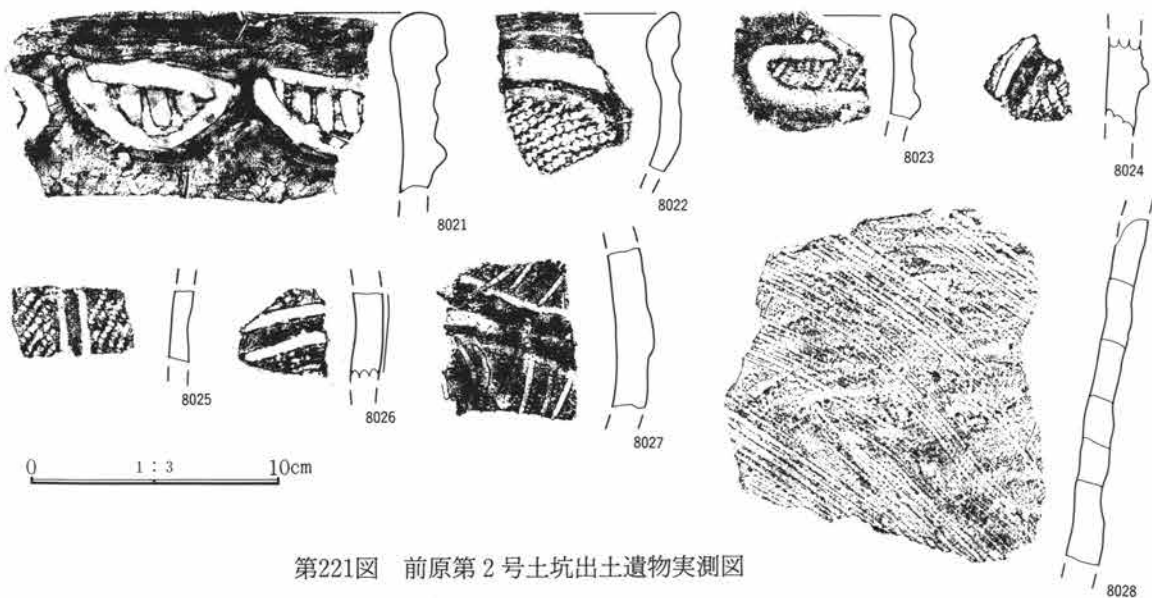


第219図 前原第1号土坑出土遺物実測図

第IV章 前原調査区の遺構と遺物



第220図 前原第2号土坑遺構平面図・遺物分布図



第221図 前原第2号土坑出土遺物実測図

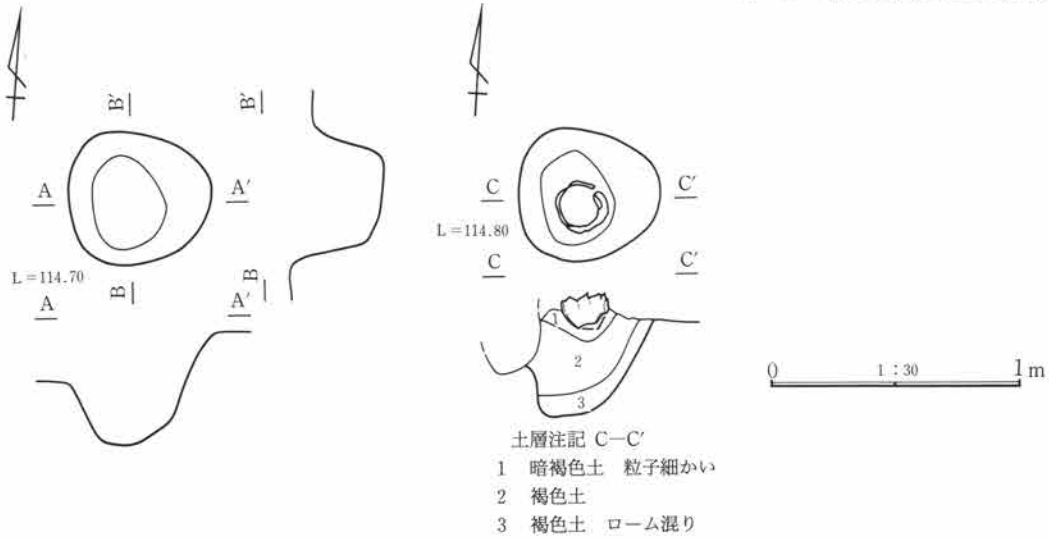
(9) 前原第9号土坑 (第224図)

Dq-22グリットにおいて検出された(調査名 DP29)。前原第1号竪穴住居跡の北西約5.5mの所に位置している。確認面標高は113.80mである。土坑上面の規模は96×68cm、底面は47×32cm、深さ15cmの楕円形を呈する。底面は皿状であり、面積約0.13m²である。

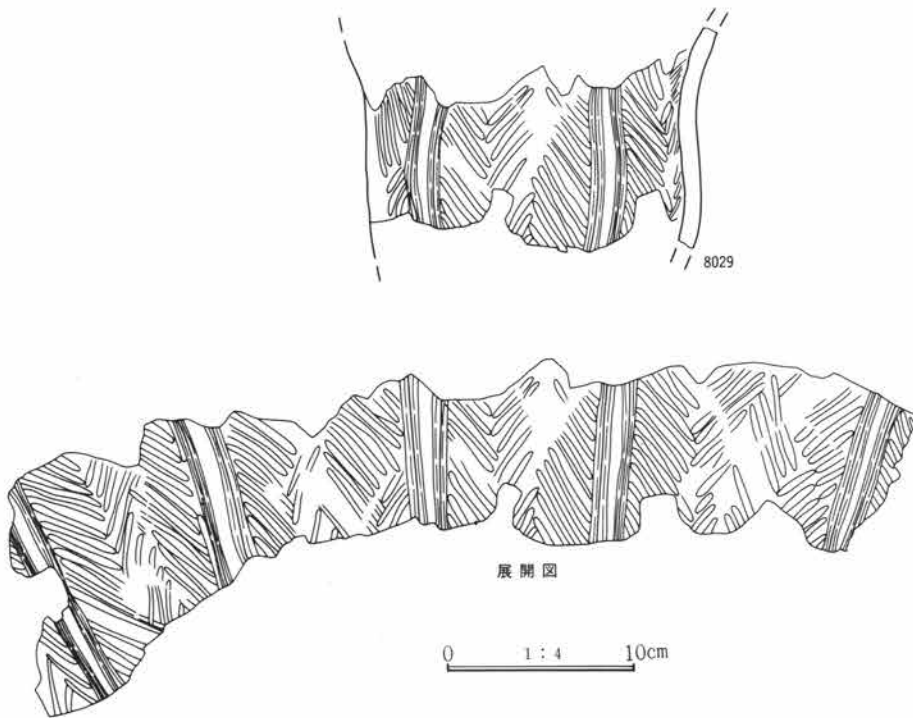
前原第4号～第9号土坑からは縄文土器片の出土はなかったが、覆土の状態から縄文時代中期の土坑と判断したものである。

(10) 前原第10号土坑 (第224図・写真図版47)

Do-23グリットにおいて検出された(調査名 DK29)。前原第1号竪穴住居跡の東約8mの所に位置している。確認面標高は113.70mである。土坑上面の規模は106×92cm、底面は90×75cm、深さ62cmのほぼ円形を呈



第222図 前原第3号土坑遺構平面図・遺物出土平面図



第223図 前原第3号土坑出土遺物実測図

する。底面は平坦、断面はややフラスコ状であり、面積約0.76㎡である。縄文時代の貯蔵穴であろう。

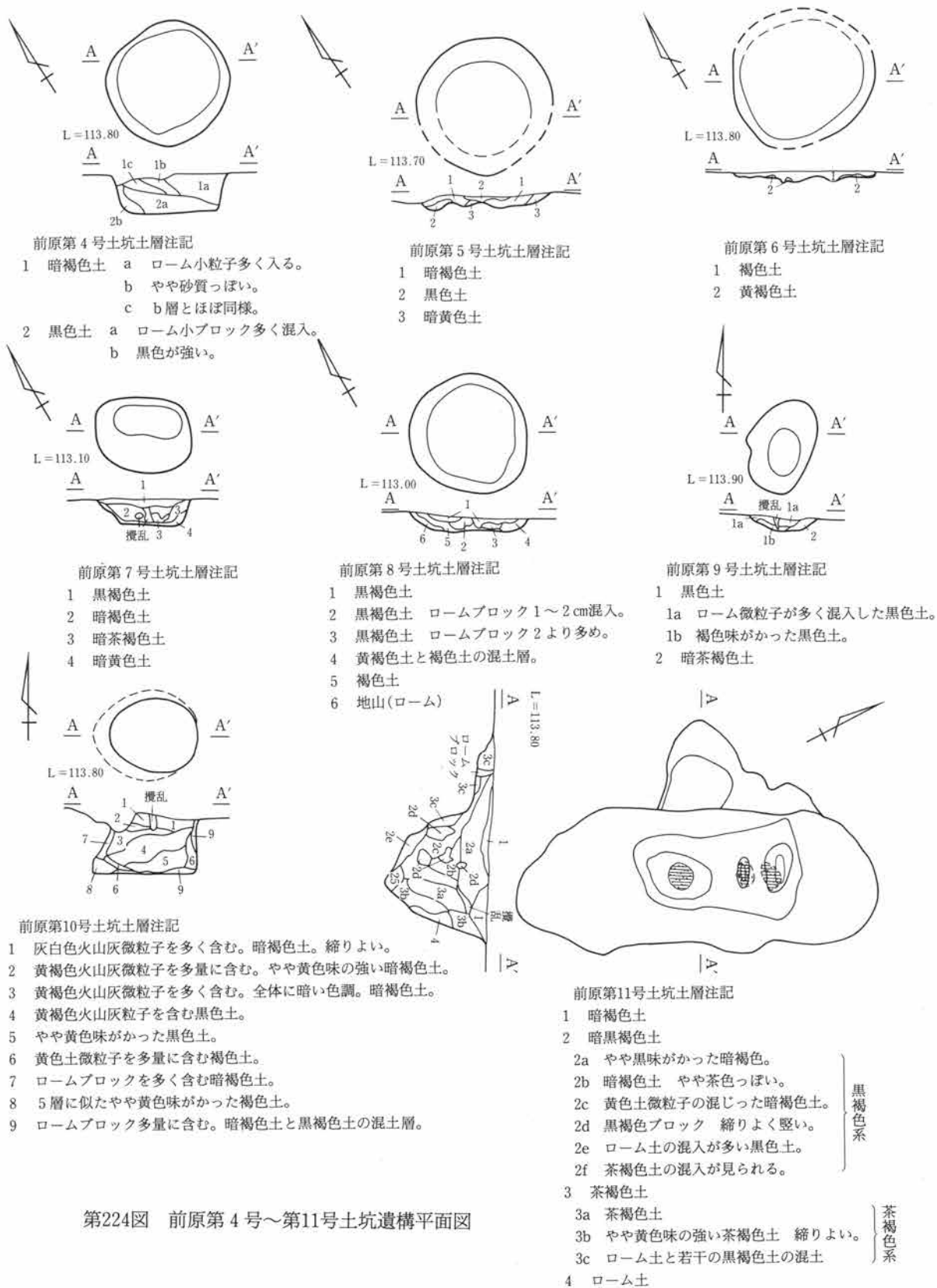
(1) 前原第11号土坑 (第224図、写真図版47)

Dp-29・30グリットにかけて検出された (調査名DK27)。前原第1号竪穴住居跡の南約25mの所に位置している。確認面標高は113.70mである。土坑上面の規模は374×135cm、底面は170×70cm、深さ117cmの長楕円形を呈する。底面積は約1.32㎡である。底面からは3個のピットが検出された。ピットの深さはP₁11cm、P₂12cm、P₃7cmである。またピット周辺から白色粘質土が検出されている。恐らくピットは逆茂木埋設のためのものであり、白色粘質土は逆茂木固定のための粘土であろう。当土坑は縄文時代の落とし穴となろう。

(2) 前原第12号土坑 (第225図～第227図、写真図版47・105)

Eg・Eh-28・29グリットにかけて検出された (調査名EK2)。前原第2号竪穴住居跡の南西約58mの所に位

第四章 前原調査区の遺構と遺物



第224図 前原第4号~第11号土坑遺構平面図

0 1:60 2m

第23表 前原調査区出土遺物観察表(3)―第1号土坑―

遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
8020 219 105	口縁 部～ 胴部	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部意図的欠損。器厚11～13mm。内面は横・縦方向の調整が行われている。内外面の色調は明黄褐色。	口縁部に隆帯と沈線による楕円の文様が描かれ、内部に縦位の沈線が施されている。胴部は沈線による連弧状の文様。地文に縄文施文。	屋外埋設土器

第23表 前原調査区出土遺物観察表(4)―第2号土坑―

遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
8021 221 —	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12～22mm。内面は横方向の調整が行われている。外面の色調はにぶい褐色、内面は橙色。	口縁部はやや内湾する。口縁部に隆帯と沈線による楕円の文様が描かれ、内部に太い短沈線が施されている。	覆土
8022 221 —	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7～13mm。内面は横方向のやや丁寧な調整。外面色調はにぶい橙色、内面にぶい黄褐色。	口縁部は内湾する。口縁部に沈線による楕円等の文様が描かれ、内部に縄文施文。原体は $L\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right\}$ 横転がし。	覆土
8023 221 —	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8～9mm。内面は横方向の調整が行われている。内外面の色調は橙色。	口縁部に隆帯と沈線による楕円の文様が描かれ、内部に縄文施文。原体は $L\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right\}$ 。	覆土
8024 221 —	口縁 部片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。内面は横方向のやや粗い調整が行われている。内外面の色調はにぶい褐色。	口縁部に隆帯と沈線による楕円等の文様が描かれ、内部に縄文施文。原体は $R\left\{\begin{matrix} L \\ L \end{matrix}\right\}$ 。	覆土
8025 221 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7～8mm。内面は横方向のやや粗い調整。外面はにぶい黄褐色、内面にぶい褐色。	縄文施文。原体は $R\left\{\begin{matrix} L \\ L \end{matrix}\right\}$ 縦転がし。沈線を垂下している。外面にススが附着している。	覆土
8026 221 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11～12mm。内面は横方向の調整が行われている。外面の色調は褐灰色、内面は灰黄褐色。	縄文施文。原体は $R\left\{\begin{matrix} L \\ L \end{matrix}\right\}$ 。隆帯と沈線による文様が描かれている。	覆土
8027 221 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12～13mm。内面は横方向の丁寧な調整。外面色調はにぶい赤褐色、内面暗赤褐色。	隆帯が施され、沈線による文様が描かれている。	覆土
8028 221 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9～13mm。内面は横方向のやや粗い調整。外面色調はにぶい黄褐色、内面は褐灰色。	5本一単位の条線が斜位に施されている。	覆土

第23表 前原調査区出土遺物観察表(5)―第3号土坑―

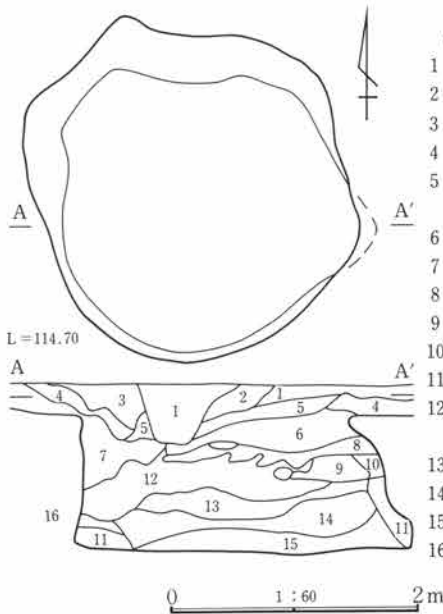
遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
8029 223 105	胴部	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部。口縁と胴下部を意図的欠損。器厚8mm～1cm。内面は横方向の調整。内外面の色調はにぶい橙色。	隆帯を垂下している。区画内には矢羽根状の沈線が施されている。	屋外埋設土器

第23表 前原調査区出土遺物観察表(6)―第11号土坑―

遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
8041 228 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚6～7mm。内面は横方向のやや粗い調整が行われている。外面色調は明赤褐色、内面は黒色。	縄文施文。原体は $R\left\{\begin{matrix} L \\ L \end{matrix}\right\}$ 。半截竹管による2条の平行沈線を横位に巡らせている。前期諸磯式土器。	覆土

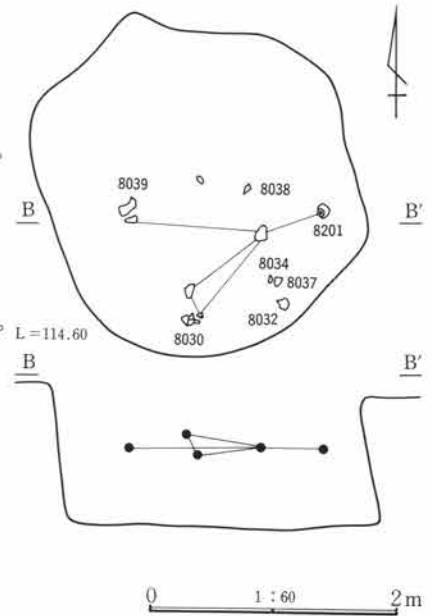
置している。確認面標高は114.60mである。土坑上面の規模は279×261cm、底面は236×233cm、深さ132cmのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦、断面はややフラスコ状であり、面積約4.15m²である。覆土からは縄文前期土器片1点、中期土器片66点、打製石斧1点、さらに中世の花瓶1点が覆土上層に認められたロームの二次堆積層上から出土している。(菊池実)

第IV章 前原調査区の遺構と遺物

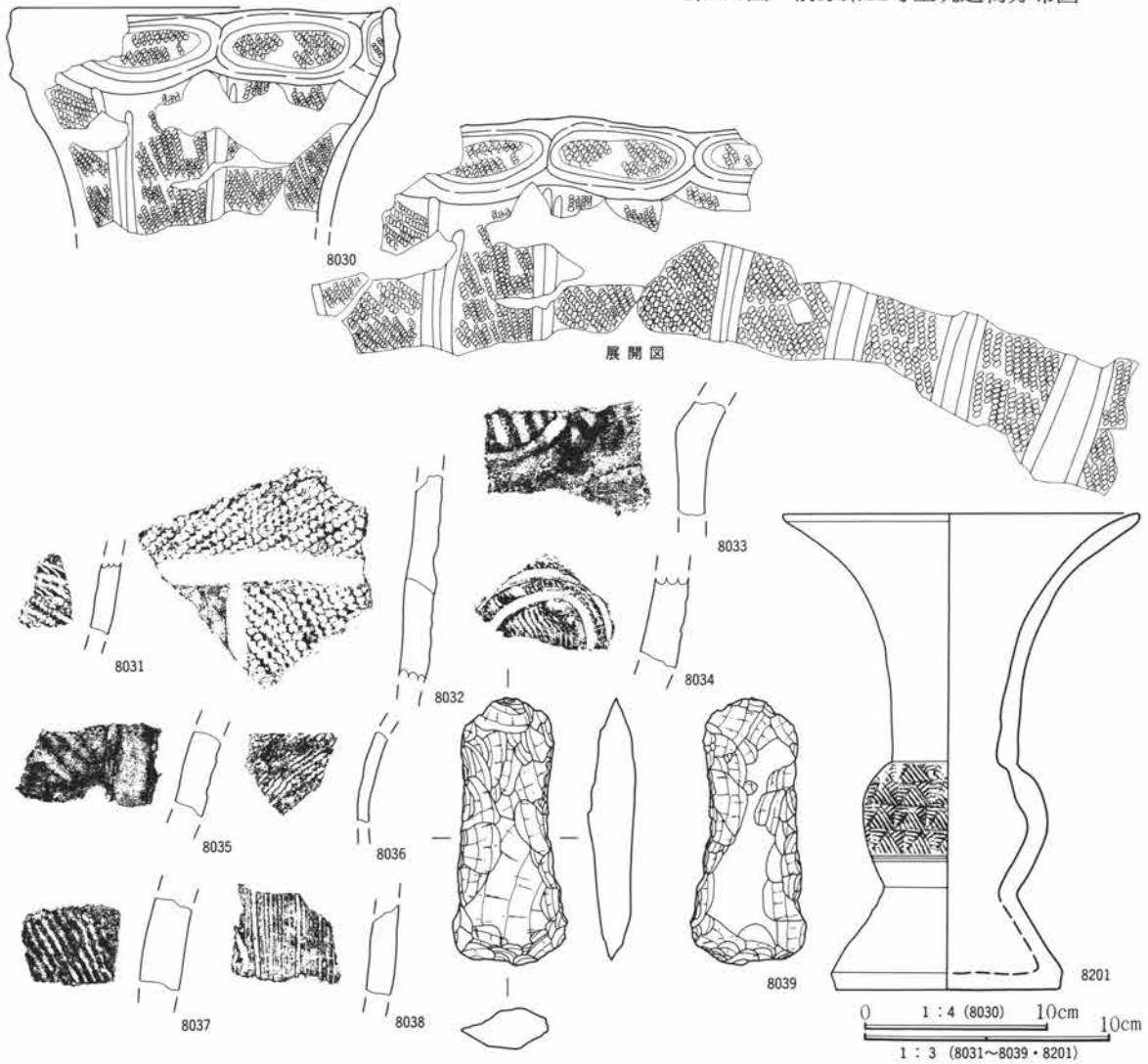


第225図 前原第12号土坑遺構平面図

- 前原第12号土坑土層注記
- 1 褐色土。
 - 2 ロームブロックを主とする。
 - 3 締りのない褐色土（畑土）。
 - 4 3にロームブロックが少量混じる。
 - 5 締りのない黒褐色土にローム少ブロックを少量混じる。
 - 6 締りのない黒色土。
 - 7 黒色土と褐色土の混土。
 - 8 黒色土にロームブロックを少々。
 - 9 ロームを主としややよごれている。
 - 10 } ロームのくずれたもの。
 - 11 }
 - 12 木の根により、地山のロームが浮き上がったもの。
 - 13 黒褐色土にロームが混じる。
 - 14 やや暗い色調のローム。
 - 15 粘性のある黒色土で締りない。
 - 16 黒色土に11のロームを混じる。



第226図 前原第12号土坑遺物分布図



第227図 前原第12号土坑出土遺物実測図—縄文土器・石器、軟質陶器—

第23表 前原調査区出土遺物観察表(7)―第12号土坑―

遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
8030 227 105	口縁部～ 胴部	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部～胴部。 器厚5～10mm。 内面は横方向のやや粗い調整。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黄褐色。	口縁部はやや内湾する。口縁部に隆帯と沈線による楕円の文様、区画内に縄文施文。原体はR(1/2)横転がし。胴部もR(1/2)で沈線を垂下している。	覆土
8031 227 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	浮線文。浮線上に刻みが施されている。 地文に縄文施文。原体はR(1/2)。 前期諸磯式土器。	覆土
8032 227 —	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10～12mm。 内面は横方向の丁寧な調整。 内外面の色調は灰黄褐色。	口縁～胴部にかけての破片。口縁部にはL(1/2)横位。胴部はL(1/2)縦位で、沈線を垂下している。	覆土
8033 227 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10～15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は灰黄色。	隆帯と沈線による楕円等の文様が描かれ、区画内には沈線が施されている。	覆土
8034 227 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14～15mm。 内面は横方向の丁寧な調整。 外面の色調は黒褐色、内面にぶい橙色。	縄文施文。原体はL(1/2)縦転がし。 沈線による文様が描かれている。	覆土
8035 227 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12～13mm。内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は橙色。	縄文施文。原体はL(1/2)縦転がし。 細沈線を垂下している。	覆土
8036 227 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚5mm。 内面は横方向のやや粗い調整。外面色調は明黄褐色、内面にぶい赤褐色。	縄文施文。原体はL(1/2)。	覆土
8037 227 —	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16～17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面色調は橙色、内面にぶい黄褐色。	縄文施文。原体はL(1/2)。	覆土
8038 227 —	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10～11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明赤褐色。	条線が施されている。 蛇行沈線が垂下している。	覆土

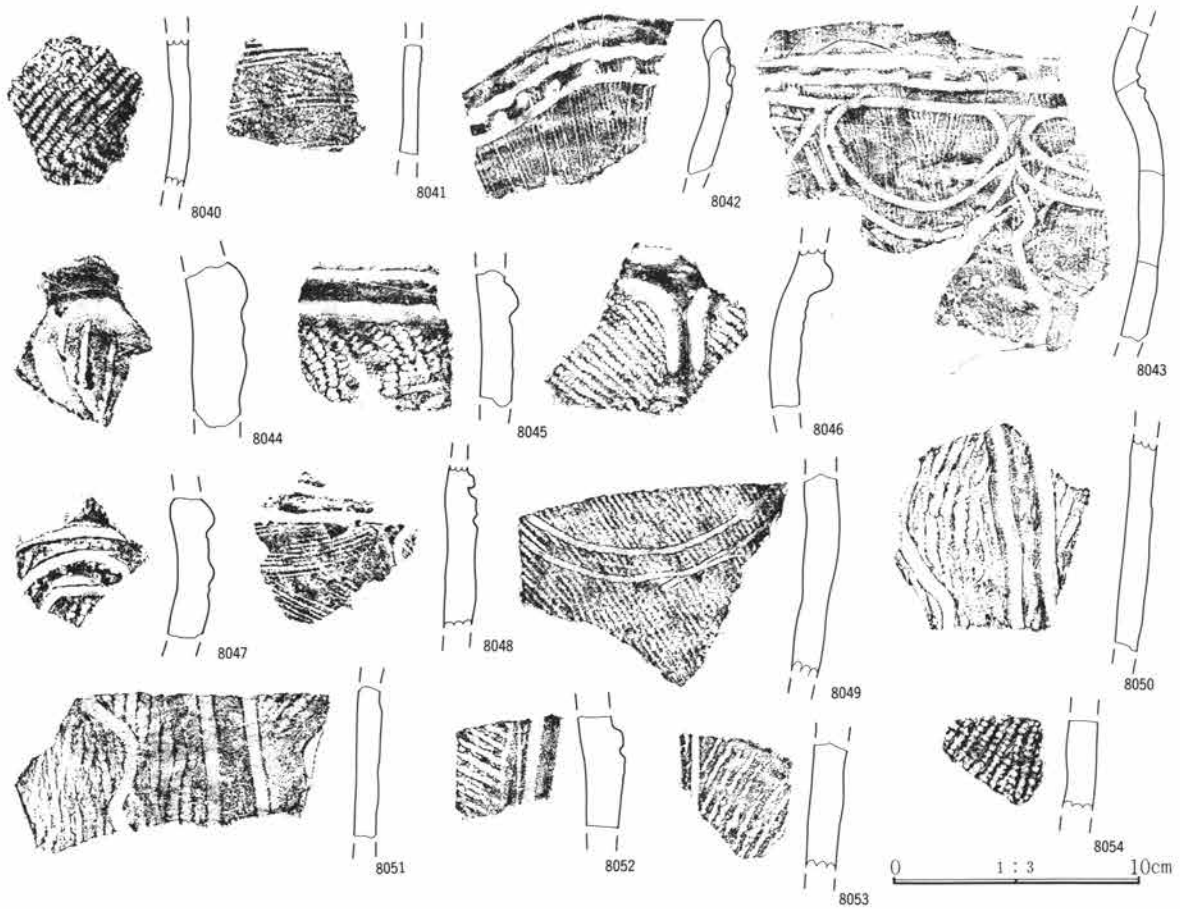
第23表 前原調査区出土遺物観察表(8)―第12号土坑―

遺物番号 挿図・写真	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g) 全長 幅 厚 重量	特 徴	出土状況
8039 227・一	打製石斧	完形	熱変成岩	14.2 6.4 2.5 257	バチ型。	覆土

第23表 前原調査区出土遺物観察表(9)―D区・縄文土器―

遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
8040 228 —	胴部片	①細粒の砂を混入 繊維を含む ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7～8mm。 内面は横方向のやや粗い調整。 内外面の色調は橙色。	縄文施文。原体はL(1/2) (0段多条)とR(1/2) (0段多条)の環付の縄文で羽状に施されている。前期関山I式土器。	D区一括
8042 228 —	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8～9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は浅黄色。	波状口縁部片。口唇部に狭い無文帯をおき2条の沈線を巡らせ、刺突を施している。以下、5本一単位の条線を縦位施文。諸磯式土器。	D区一括
8043 228 —	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8～10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は淡黄色。	頸部でくの字状に括れる器形。5本一単位の条線を縦位施文。頸部には3本の沈線を巡らせ刺突が施されている。以下沈線による文様。	D区一括
8044 228 —	胴部片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚20mm。 内面は荒れている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	口縁部に隆帯と沈線による楕円の文様が描かれ、内部に沈線が施されている。	D区一括

第IV章 前原調査区の遺構と遺物



第228図 前原調査区出土遺物実測図(1)―縄文土器―

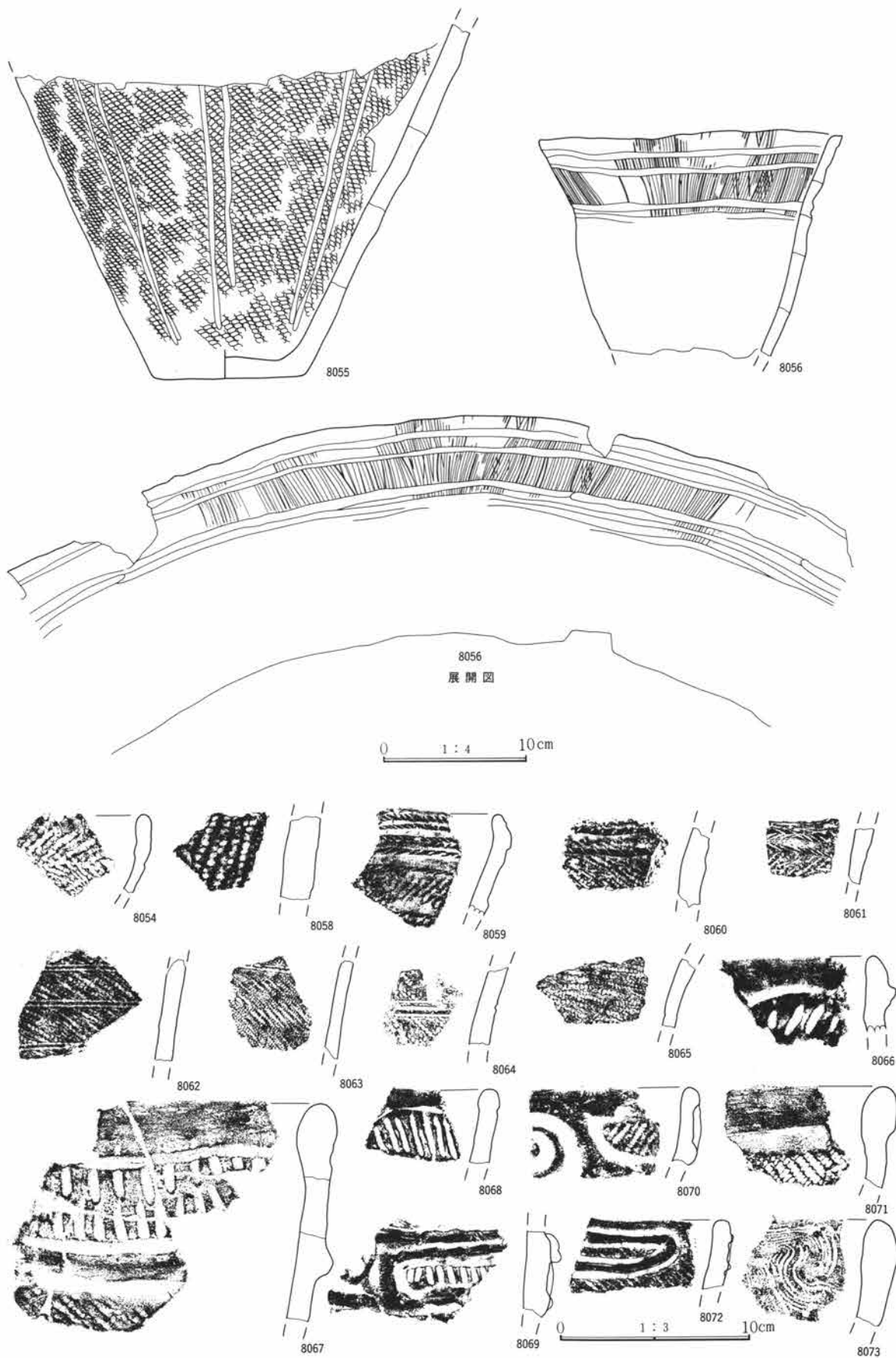
遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
8045 228 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向のやや粗い調整が行われている。内外面の色調はにぶい黄褐色。	隆帯を施し、縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 。 土器面は柔軟で、押圧が強い。	D区一括
8046 228 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は横方向のやや粗い調整。外面色調はにぶい黄褐色、内面にぶい黄褐色。	隆帯と沈線による区画が施されている。 縄文施文。原体はL{ $\frac{R}{R}$ 縦転がし。	D区一括
8047 228 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	隆帯と沈線による楕円等の文様が描かれている。 区画内に縄文施文。原体はL{ $\frac{R}{R}$ 。	D区一括
8048 228 —	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~12mm。 内面は縦方向の丁寧なミガキ。外面の色調はにぶい橙色、内面は灰褐色。	5本一単位の条線を施した後、沈線を斜位に 施している。	D区一括
8049 228 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 2条の沈線を施している。	D区一括
8050 228 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。外面色調はにぶい橙色、内面にぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。沈線を垂下 している。土器面は柔軟で押圧が強い。 炭化物が付着している。	D区一括
8051 228 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面色調はにぶい橙色、内面にぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 。 沈線と蛇行沈線を垂下している。 土器面は柔軟で押圧が強い。	D区一括

第1節 縄文時代の遺構と遺物

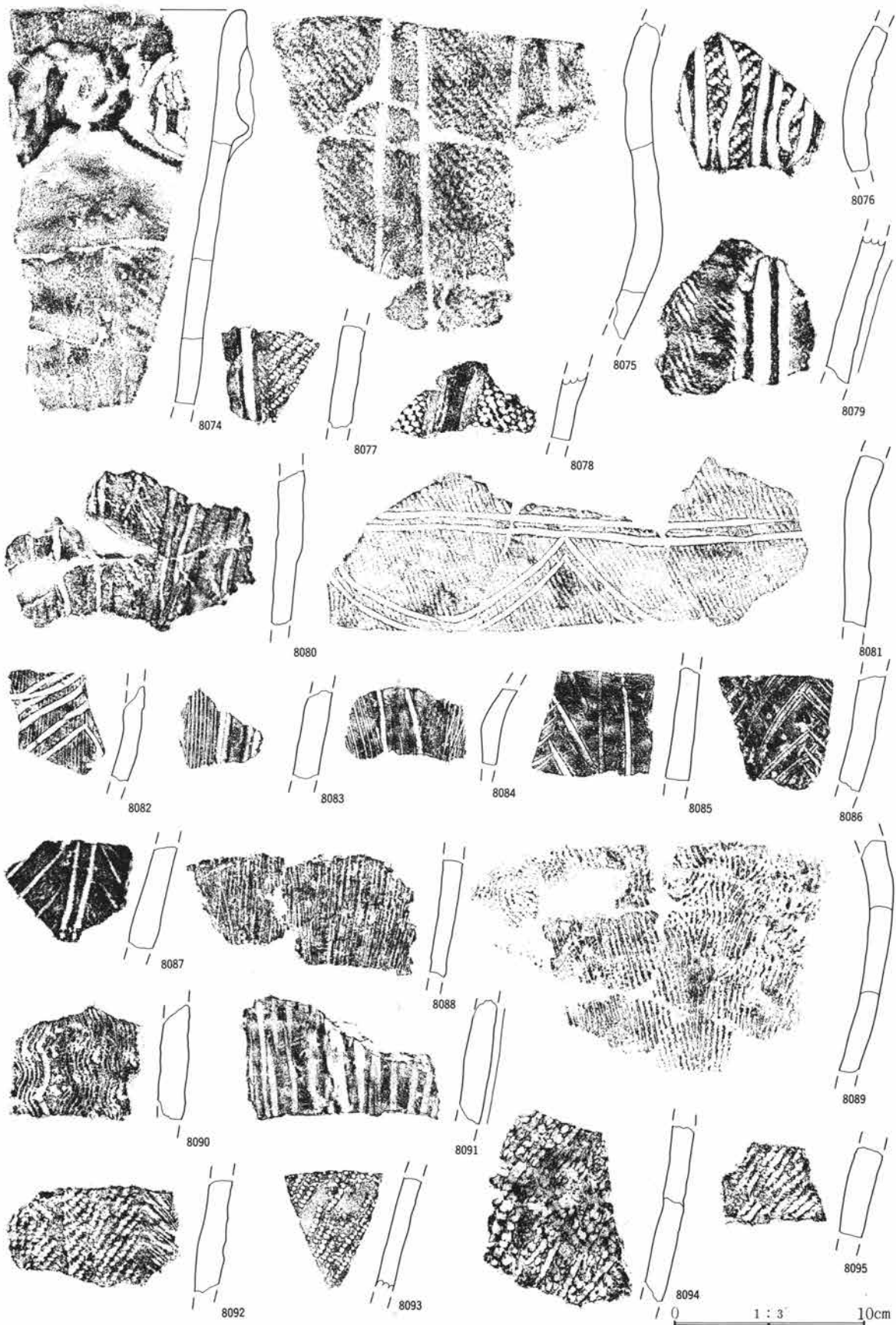
遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
8052 228 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい橙色。	縄文施文。原体はL $\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right\}$ 。 沈線を垂下している。	D区一括
8053 228 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR $\left\{\begin{matrix} \downarrow \\ \downarrow \end{matrix}\right\}$ 縦転がし。 沈線を垂下している。	D区一括
8054 228 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR $\left\{\begin{matrix} \downarrow \\ \downarrow \end{matrix}\right\}$ 縦転がし。	D区一括

第23表 前原調査区出土遺物観察表(10)―E区・縄文土器―

遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
8055 229 105	胴部 ~底部	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部~底部片。器厚13~16 mm。内面は横方向のやや粗い調整。外面 色調はにぶい橙色、内面はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はL $\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right\}$ 縦転がし。 2本一単位の沈線を垂下している。沈線間は 磨消してはいない。	Ef-26g
8056 229 105	口縁 部~ 胴部	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部欠損。器厚8~10mm。 胴下部は縦方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口縁部は外傾する。口縁部に縦位の条線が施 され、口唇部に2条の沈線を巡らせる。胴部 の境には沈線を3条巡らせ、以下ミガキ。 外面にススが附着している。	Ei-33g
8057 229 —	口縁 部片	①細粒の砂を混入 繊維を含む ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚5~8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面色調はにぶい赤褐色、内面にぶい橙色。	波状口縁部片。縄文施文。原体はL $\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right\}$ (0段 多条)とR $\left\{\begin{matrix} \downarrow \\ \downarrow \end{matrix}\right\}$ で羽状。 前期関山式土器。	Ei-21g
8058 229 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 繊維を含む ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は横方向の調整。荒れている。 外面色調は褐色、内面はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR $\left\{\begin{matrix} \downarrow \\ \downarrow \end{matrix}\right\}$ 。 前期黒浜式土器。	Ej-30g
8059 229 —	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7~9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は橙色。	浮線文を施している。地文に縄文施文。 原体はL $\left\{\begin{matrix} \downarrow \\ \downarrow \end{matrix}\right\}$ 。 前期後半諸磯式土器。	Ei-33g
8060 229 —	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は横方向の粗い調整。 外面色調は明赤褐色、内面はにぶい橙色。	浮線文を施している。地文に縄文施文。 原体はR $\left\{\begin{matrix} \downarrow \\ \downarrow \end{matrix}\right\}$ 。 前期後半諸磯式土器。	Ea-19g
8061 229 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚6~9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面色調はにぶい赤褐色、内面明赤褐色。	浮線文。地文に縄文施文。原体はL $\left\{\begin{matrix} \downarrow \\ \downarrow \end{matrix}\right\}$ 。 前期後半諸磯式土器。	Ej-33g
8062 229 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向の丁寧な調整。 外面色調はにぶい黄褐色、内面は褐色。	地文に縄文施文。原体はR $\left\{\begin{matrix} \downarrow \\ \downarrow \end{matrix}\right\}$ 横・縦転がし。 半截竹管による刺突が施されている。 前期後半諸磯式土器。	Ed-27g
8063 229 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚6~7mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われてい る。内外面の色調はにぶい褐色。	縄文施文。原体はR $\left\{\begin{matrix} \downarrow \\ \downarrow \end{matrix}\right\}$ 横転がし。 半截竹管による刺突が施されている。	Ei-25g
8064 229 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われてい る。内外面の色調はにぶい褐色。	地文に縄文施文。原体はR $\left\{\begin{matrix} \downarrow \\ \downarrow \end{matrix}\right\}$ 横転がし。 半截竹管による平行沈線を巡らせている。 土器面は柔軟。	Ee-28g
8065 229 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚6~8mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われてい る。内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR $\left\{\begin{matrix} \downarrow \\ \downarrow \end{matrix}\right\}$ 横転がし。 土器面は柔軟。	Ee-30g
8066 229 —	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口縁部に隆帯による区画が施され、内部に短 沈線が施されている。	Ef-27g
8067 229 —	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~13mm。 内面は剝離している。 内外面の色調は明赤褐色。	縄文施文。原体はL $\left\{\begin{matrix} \downarrow \\ \downarrow \end{matrix}\right\}$ 。	Ed-27g



第229図 前原調査区出土遺物実測図(2)―縄文土器―



第230図 前原調査区出土遺物実測図(3)―縄文土器―

第IV章 前原調査区の遺構と遺物

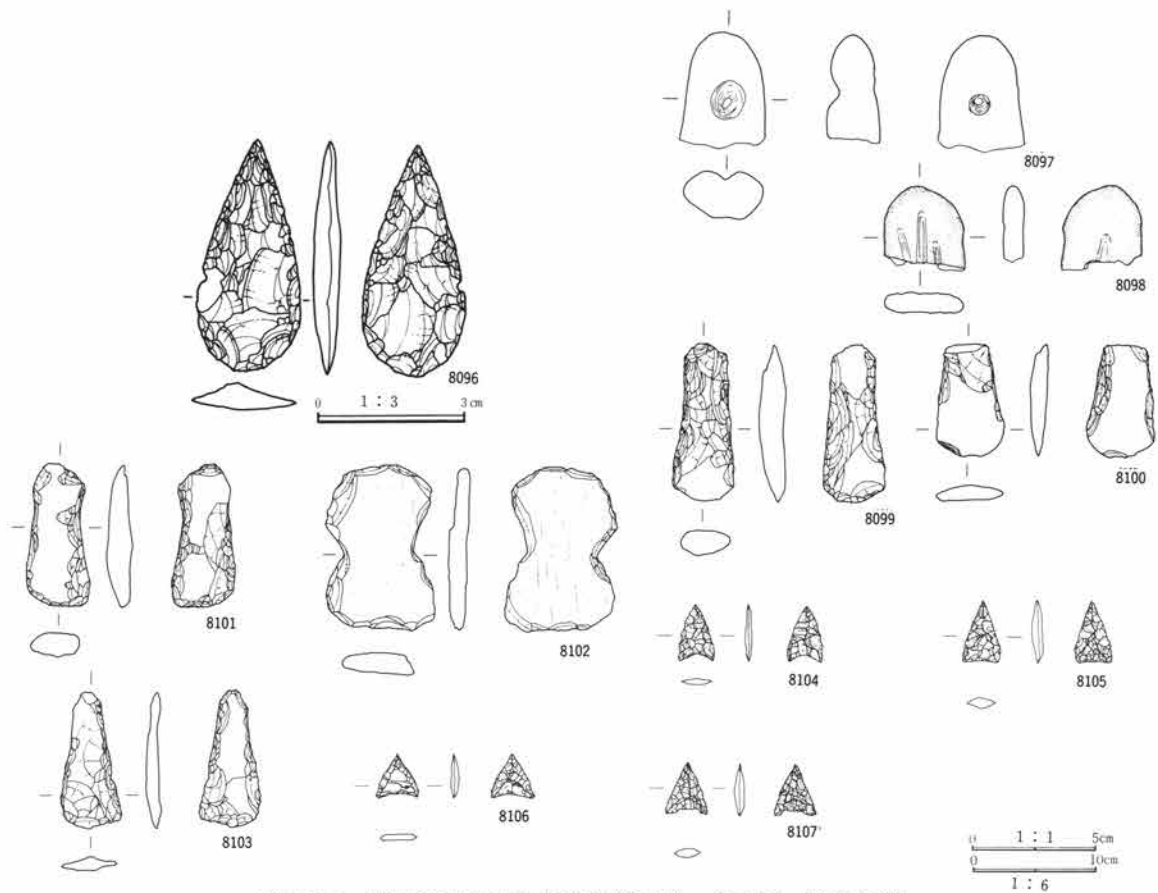
遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
8068 229 —	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は灰黄褐色。	口縁部に沈線による楕円の文様が描かれ、内 部に斜位の沈線が施されている。	Ef-20g
8069 229 —	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明赤褐色。	口縁部に隆帯による楕円等の文様が描かれ、 内部に短沈線が施されている。	Eg-25g
8070 229 —	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7~8mm。 内面は横方向の調整。荒れている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	口縁部に隆帯と沈線による楕円・渦巻き等の 文様が描かれ、内部に縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{L}$ }。	Eg-33g
8071 229 —	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~18mm。 内面は横方向のやや粗い調整が行われて いる。内外面の色調はにぶい黄褐色。	口縁部に沈線による楕円等の文様が描かれ、 内部に縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{L}$ }横転がし。	Ei-21g
8072 229 —	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9~10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面色調は明赤褐色、内面ににぶい黄褐色。	地文に縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{L}$ }。 口縁部に隆帯と沈線による楕円の文様が描か れている。	Ea-21g
8073 229 —	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13~18mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	口縁部はやや内湾する。口縁部に6本一単位 の条線が施されている。	Eg-22g
8074 230 —	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	口縁部に隆帯と沈線による楕円・渦巻き等の 文様が描かれ、区画内に幅広の短沈線が施さ れている。胴部にはR{ $\frac{1}{L}$ }。	Eg-29g
8075 230 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	縄文施文。原体はL{ $\frac{R}{R}$ }縦転がし。 隆帯と沈線を垂下している。	Ee-27g
8076 230 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~12mm。 内面は横方向のやや粗い調整が行われて いる。内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{L}$ }縦転がし。 沈線と蛇行沈線を垂下している。	Ee-27g
8077 230 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整。荒れている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	沈線を垂下している。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{L}$ }縦転がし。 土器面は柔軟。	Eg-25g
8078 230 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われてい る。内外面の色調は灰黄褐色。	縄文施文。原体はL{ $\frac{R}{R}$ }縦転がし。 沈線を垂下している。	Eh-28g
8079 230 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われて いる。内外面の色調はにぶい褐色。	縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{L}$ }縦転がし。粗い施文。 隆帯を垂下している。	Ef-25g
8080 230 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は暗褐色。	縄文施文。原体はL{ $\frac{R}{R}$ }で施文は粗い。 沈線が垂下している。	Ej-26g
8081 230 —	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~13mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	胴部で括れる器形。縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{L}$ }縦 転がし。括れ部に2条の沈線を巡らせ、以下、 同沈線による連弧文を施している。	Ed-27g
8082 230 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向の丁寧な調整。 外面色調はにぶい赤褐色、内面灰褐色。	縦位の条線が施され、沈線による文様が描か れている。	Ee-23g
8083 230 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面色調は褐色、内面ににぶい黄褐色。	縦位の条線を施し、沈線を垂下している。	Eh-22g
8084 230 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7~10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われてい る。内外面の色調はにぶい黄褐色。	縦位の条線を施し、沈線を垂下している。	Eh-29g
8085 230 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は丁寧な横方向の調整。 外面色調は褐色、内面ににぶい黄褐色。	沈線が垂下している。内部に斜行する沈線が 施されている。	Eh-28g
8086 230 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整。荒れている。 外面色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。	斜行する沈線を施している。 内面に炭化物が付着している。	Ef-26g

第1節 縄文時代の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
8087 230 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は縦・斜方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。	沈線を垂下し、区画内に斜行する沈線を施している。	Ey-18g
8088 230 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は横方向の粗い調整。 外面色調はにぶい赤褐色、内面は褐灰色。	条線が施されている。 内面に炭化物が付着している。	Ed-27g
8089 230 105	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部大型破片。器厚10~13mm。 内面は横方向の調整。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	5本一単位の条線が施されている。	Eg-30・31g
8090 230 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整。荒れている。 外面色調はにぶい橙色、内面は淡黄色。	条線が施されている。	Ee-27g
8091 230 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は横方向のやや粗い調整。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。	隆帯を垂下し、沈線を施している。 内面に炭化物が付着している。	Ec-28g
8092 230 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面色調はにぶい褐色、内面にぶい赤褐色。	縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }とL{ $\frac{1}{2}$ }の縦転がし。	Ej-29g
8093 230 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。	Eh-29g
8094 230 —	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面は褐灰色。	縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ } $\frac{R}{L}$ 。乱雑な施文。	Ei-33g
8095 230 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面は横方向の丁寧な調整。 外面色調は灰褐色、内面はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }(0段3条)縦転がし。	Eg-33g

第23表 前原調査区出土遺物観察表(1)―D・E区 石器―

遺物番号 挿図・写真	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
8097 231・105	凹石	½	緑簾緑泥片岩	(9.3)	6.8	4.2	(370)	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径24mm、短径21mm、深さ5mmである。片面に敲打痕が認められる。	Ed-24g
8098 231・105	砥石	½	砂岩(牛伏・多胡)	(6.7)	6.5	1.7	(90)		Eg-33g
8099 231・105	打製石斧	完形	熱変成岩	12.5	5.0	2.7	165	バチ型。	Eg-31g
8100 231・105	打製石斧	基部欠損		(9.0)	5.5	1.6	(100)	バチ型。	Ed-28g
8101 231図・105	打製石斧	完形	熱変成岩	11.4	5.1	2.2	145	バチ型。	Eb-29g
8102 231・105	打製石斧	完形	熱変成岩	10.9	5.0	1.3	60	バチ型。	Eg-33g
8103 231・105	打製石斧	完形	紅簾絹雲母 石墨片岩	13.2	8.7	1.7	255	分銅型。	E区一括
8104 231・105	石鏃	完形	黒曜石	2.3	1.6	0.3	0.5	基縁は器体に向ってやや内湾し、脚部が明確に作出される。	Di-19g
8105 231・105	石鏃	完形	黒曜石	2.6	1.3	0.4	1.4	基縁は器体に向ってやや内湾し、脚部が若干認められる。	Dt-18g
8106 231・105	石鏃	完形	チャート	1.8	1.6	0.3	0.8	基縁は器体に向ってやや内湾し、脚部が若干認められる。	Dt-18g
8107 231・105	石鏃	完形	黒曜石	2.2	1.6	0.4	0.9	基縁は器体に向ってやや内湾し、脚部が明確に作出される。	De-20g



第231図 前原調査区出土遺物実測図(4)―先土器・縄文石器―

3 遺物

先土器時代から縄文時代草創期にかけてと考えられる石器(8096)が、表採ではあるが出土している。木葉形の槍先形先頭器で、石材は黒色ガラス質安山岩、長さ92mm、幅43mm、厚さ10mm、重量36gを測る。器体下半部に最大幅を有し、基部は丸みを持ち、断面形は凸レンズ状を呈す。調整加工は両面に施され、先端部及周辺は微細な調整加工によって入念に作り出されているが、全体的に観察すると、やや粗くステップフレイキングを起こしている部分も認められる。また、調整加工の度合が高いため、素材の形状を留めていない。台地縁辺部からの単独表採資料であるため、遺物そのもの以外の情報は得られず、詳細な年代は不明であるが、前述の時期と推定される。(関口博幸)

第2節 中近世の遺構と遺物

1 遺 構 (第213図、写真図版44・48)

《分布・概要》

前原調査区においては中近世に属すと考えられる遺構として道路跡・掘立柱建物跡・井戸跡・土坑等が検出されている。道路跡は、現在も使用されている緑笹と根岸を結ぶ道路の旧路と考えられ、この道筋については群馬県教育委員会の調査で“鎌倉街道”とされている。

掘立柱建物跡は調査区の東よりD区及びE区で単独で建てられていたと考えられるものが2棟確認され、調査区中程のE区では2条の方形に巡ると思われる溝状遺構の中に4棟まとまって確認され、E区の県道西側でも3棟が比較的近接して検出された。井戸跡は調査区の西側で検出されている。

本調査区は表土層を除去するとすぐにローム面となり、耕作による攪乱を受けて遺構の残存状況は極めて悪く、その層位的確認も困難であった。

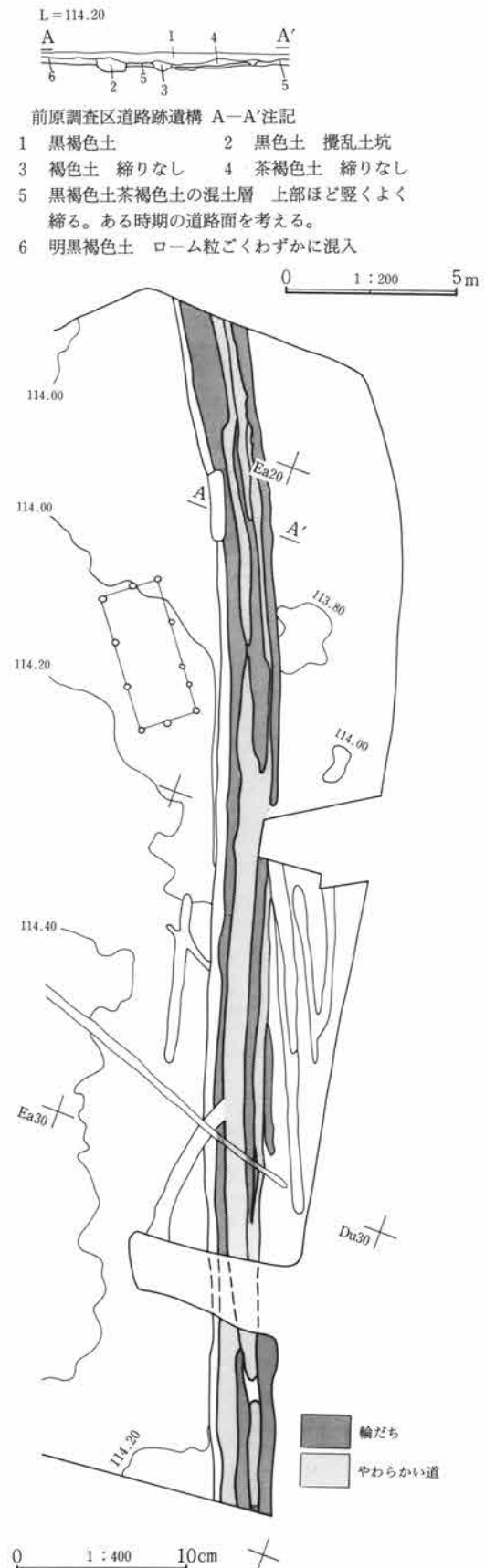
(1) 道路跡 (第232図、写真図版49)

《確認状況》

表土層直下で確認したが、覆土が薄く残存状況は良好とは言えない。この道路跡は、現在使用されている舗装道路のすぐ西側に平行に検出された。幅員は約1.8mで、黒褐色土が道路敷と考えられる硬化面を約30cmの厚さで覆い、道路は両端に側溝を持ち、断面はやや蒲鉾型に近い形状である。覆土の黒褐色土に浅間A軽石の混入が見られないことから近世前半以前であると考えられる。側溝には円礫が投棄されていたが、道路敷面・側溝での遺物出土は見られない。

《遺構の性格》

元禄6年(1693)作成の白石村絵図に秩父道として記載されたものと、群馬県教育委員会による“歴史の道”の調査によって「鎌倉街道」と比定される道にほぼ合致する。鮎川崖から美濃山丘陵までの間で、往還としての性格を有す道路遺構は他に見られないことから、絵図記載の遺構と考えられる。



第232図 前原調査区道路跡遺構平面図・土層断面図

第IV章 前原調査区の遺構と遺物

(2) 前原第1号掘立柱建物跡 (第233図、写真図版50)

本遺構はD区のほぼ中程、Dp・Dr-25・26グリッドで検出された。段丘崖からは約30mの距離があり、道路跡からもほぼ同じ距離を隔てて単独で検出され、2間×1間の規模である。耕作による攪乱が著しく、遺構の残存状況は良好とは言えず、遺構に伴う遺物も検出されなかった。ピット埋土に暗褐色土が見られることから中世ないし近世と推定される。

第24表 前原調査区掘立柱建物跡一覧表

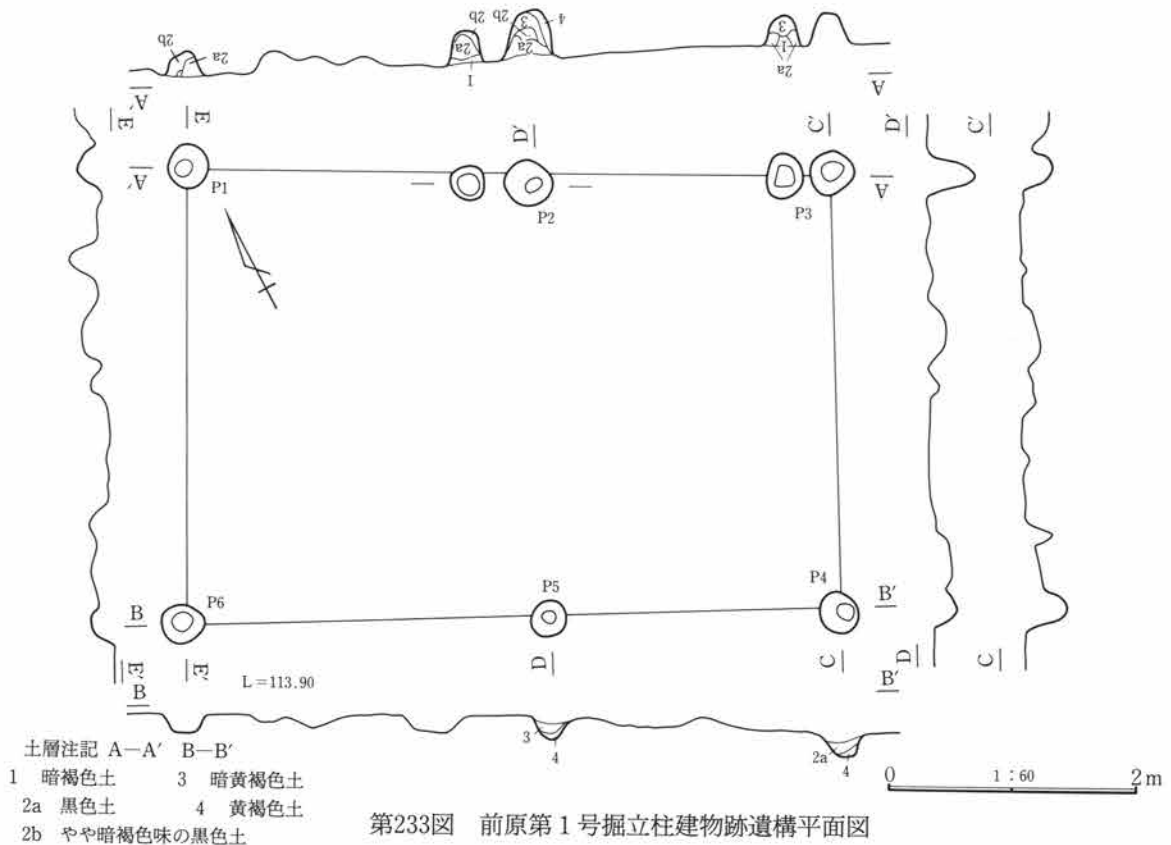
遺構名称	調査名称	棟方位	規模 (間)×(間)	面積(m ²)	桁行(m)		梁行(m)		庇(m)	柱穴平面 形状	備考
					①長辺	②短辺	①長辺	②短辺			
第1号掘立柱建物跡	DB1	N-62°-W	2×1	18.5	①5.26	②5.20	①3.61	②3.48	—	円形	
第2号掘立柱建物跡	EB1	N-38°-W	3×2	28.3	①8.10	②8.16	①3.48	②3.48	—	円形	

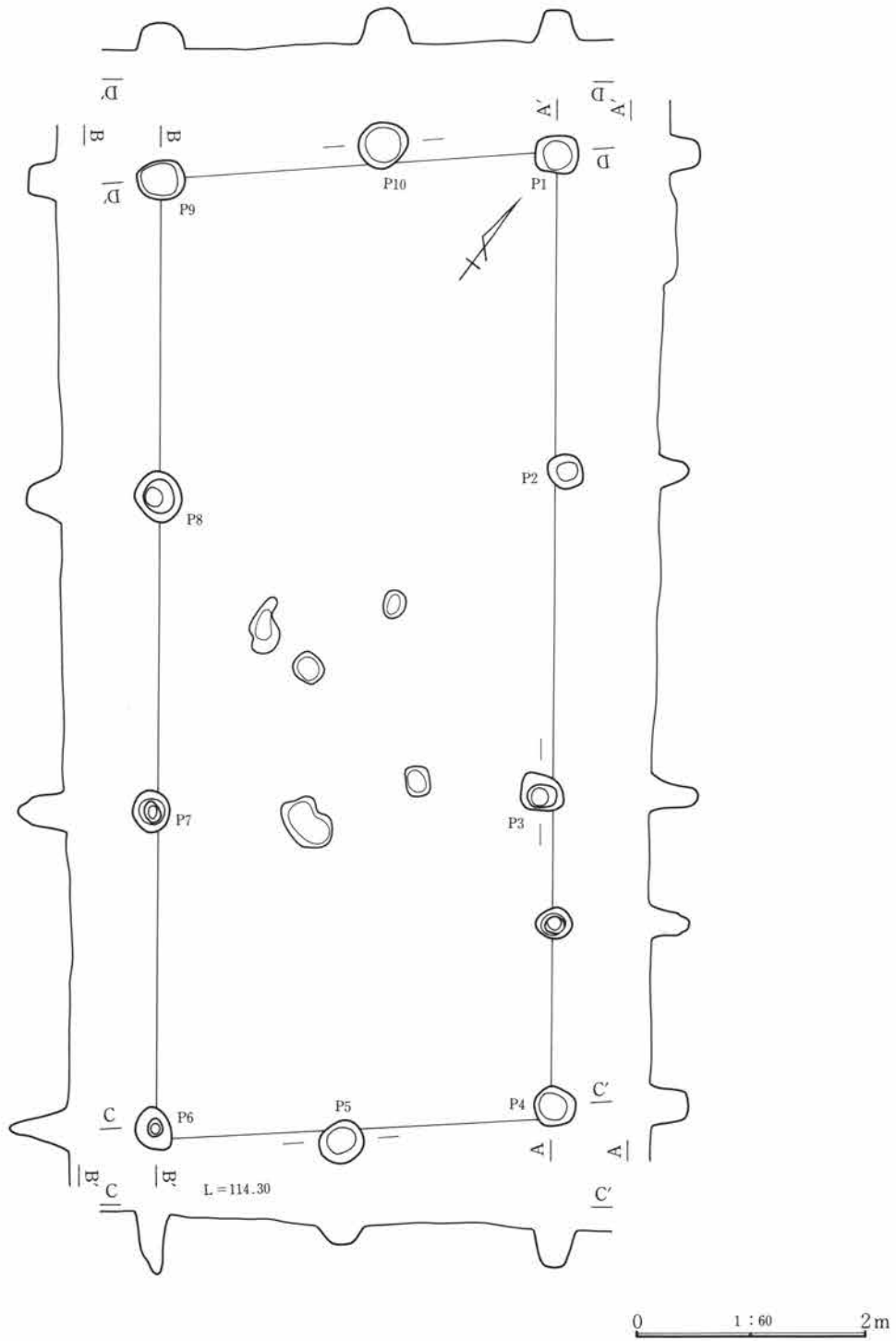
第1号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴 番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P1	34×28×17	113.65	P1~P2 282	P1~P6 361
2	37×35×38	113.36	P2~P3 347	
3	33×33×25	113.43		P2~P5 347
4	32×31×31	113.39	P6~P5 292	
5	29×28×17	113.58	P5~P4 234	P3~P4 348
6	32×32×16	113.70		

第2号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴 番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P1	36×31×23	113.72	P1~P2 272	P1~P10 152
2	30×29×23	113.78	P2~P3 268	P10~P9 196
3	36×30×38	113.72	P3~P4 266	
4	36×34×34	113.34	113.78	P2~P8 348
5	39×38×16	113.97	P10~P5 852	
6	34×32×47	113.73		P3~P7 270
7	35×31×40	113.75	P4~P8 272	
8	42×40×32	113.79	P8~P7 268	P4~P5 188
9	42×34×23	113.82	P7~P6 270	P5~P6 160
10	42×30×27	113.70		





第234図 前原第2号掘立柱建物跡遺構平面図

(3) 前原第2号掘立柱建物跡 (第234図)

本遺構は前原調査区の中程の Ea~Ee-22~24グリッドで検出された。遺構は梁行長に対して桁行長の長い1間×3間で、長軸方位はN-38°-Wを示し、道路遺構に近接して存在する。本遺構で検出されたピットは11個であるが、支柱穴と考えられるのは P₁~P₄とP₆~P₉の8個であり、P₅とP₁₀は梁行の外側に位置することから棟持柱の柱穴と考えられる。P₁₁は通常の柱間の中間にあり、道路跡に面した位置であることから、建物の出入りに関する施設の柱穴であることが考えられる。遺物を伴出せず、表土掘削後のローム面での確

第IV章 前原調査区の遺構と遺物

認であったために層位的把握は難しいが、埋土には黒味がかかる暗褐色土がはいり、道路跡覆土に近い特徴であり、これと差のない時期の遺構と推定される。

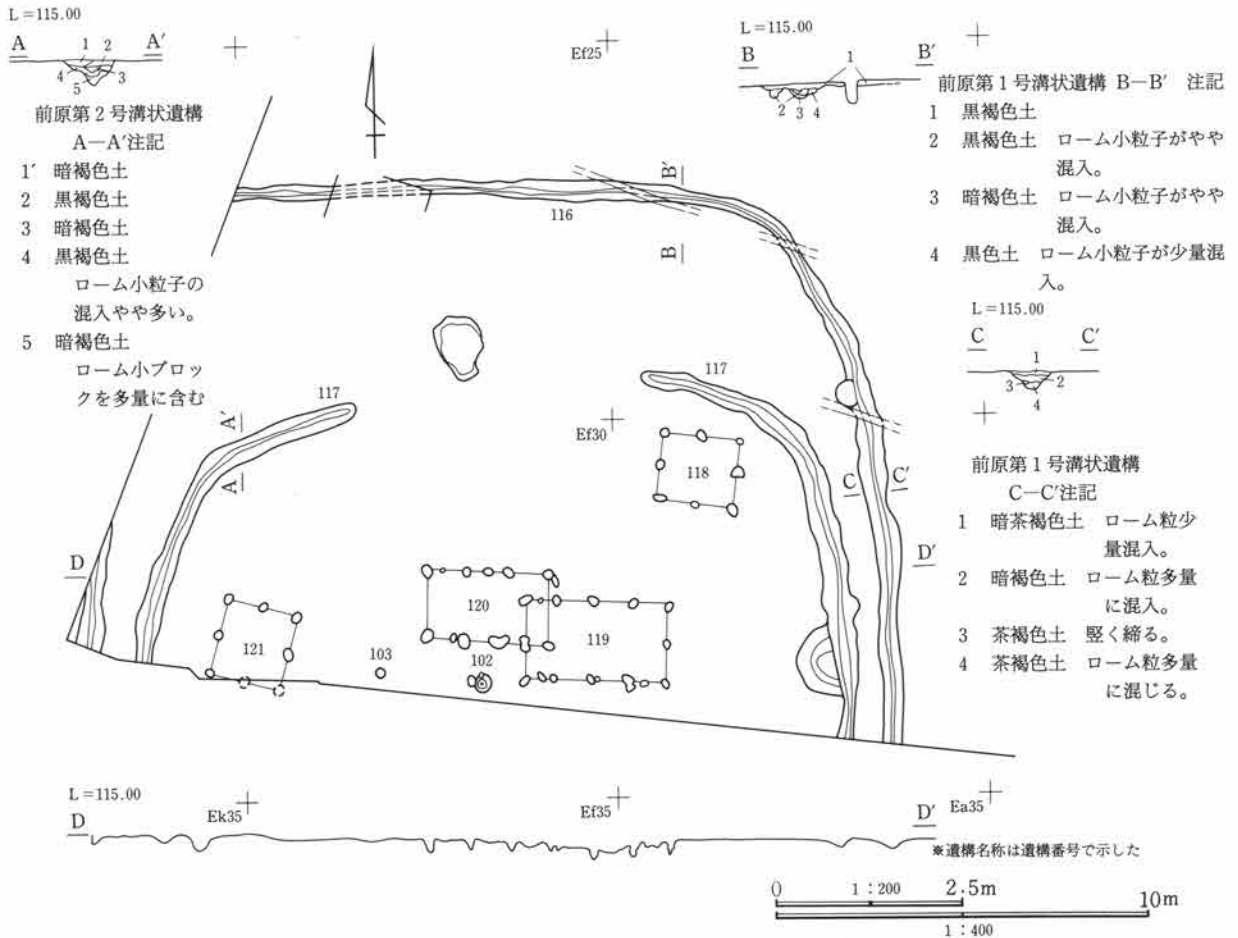
(4) 前原屋敷跡遺構 (第235図、写真図版48)

前原調査区のE区県道東側で、2条の溝状遺構に取り囲まれた4棟の掘立柱建物跡を検出した。これらの遺構群は屋敷を構成するひとまとまりのものと考えられる。検出位置は27ラインの南でEbライン～Emラインの間にあり、東西約45m、南北は南半が調査区外となるため不明であるが、全体のほぼ程度が検出されたものと思われる。遺構確認面の標高は114.40m～114.80mで、前原調査区の県道東側区域では最も標高が高い。

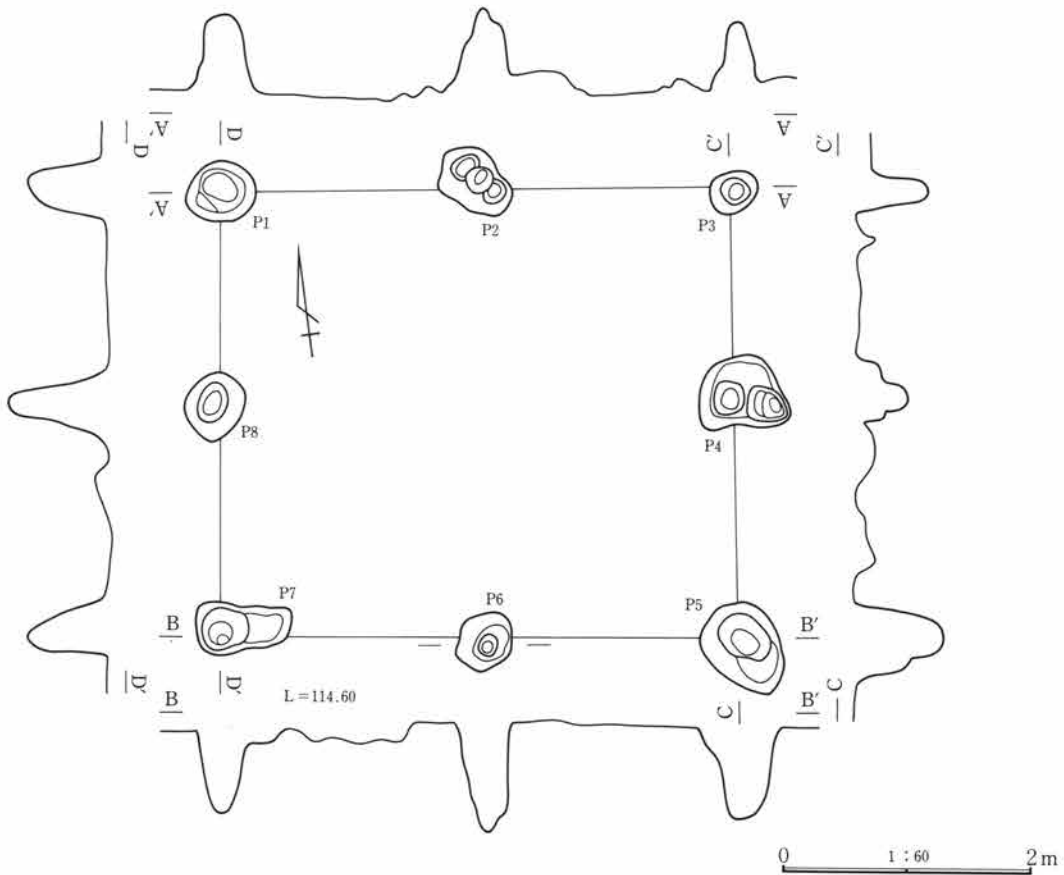
2条の溝状遺構は基本的には方形の区画を意図したのと考えられるが、東辺及び西辺にあたる部分ではやや弧状を描く。外周する前原第1号溝状遺構の北辺はほぼ直線で、ここでの走行方位はN-88°-Wである。また、前原第2号溝状遺構はこの内側に一回り小さくあり、溝は東辺と西辺を確認した。やや緩やかな弧状を描き、北辺で約15mにわたる間隙が認められた。溝の性格を屋敷の内外を区画するものと考え、北辺が入り口にあると推定される。

第24表 前原調査区掘立柱建物跡一覧表(2)

遺構名称	調査名称	棟方位	規模 (間)×(間)	面積(m ²)	桁 行(m)		梁 行(m)		庇(m)	柱穴平面 形状	備 考
					①長辺	②短辺	①長辺	②短辺			
第3号掘立柱建物跡	EB 2	N-82°-W	2×2	14.5	①4.17	②4.06	①3.54	②3.54	—	楕円形	
第4号掘立柱建物跡	EB 3	N-88°-W	4×2	32.0	①7.70	②7.56	①4.47	②3.93	7.11	楕円形	
第5号掘立柱建物跡	EB 4	N-85°-W	3×1	23.8	①6.50	②6.50	①3.70	②3.64	—	楕円形	
第6号掘立柱建物跡	EB 5	N-13°-E	2×2	15.2	①3.62	②(3.80)	①4.10	②(4.10)	—	円形	



第235図 前原調査区近世屋敷跡遺構平面図・土層断面図



第236図 前原第3号掘立柱建物跡遺構平面図

外周する前原第1号溝状遺構は、上端幅60cm~120cm、下端幅20cm、深さ20cm~40cmで、箱葉研の断面形状である。内周する前原第2号溝状遺構は、上端幅60cm~100cm、下端幅20cm、深さ20cm~30cmで、やはり箱葉研の断面形状である。遺構埋土も比較的似て、上層にやや暗い色調の茶褐色土が、下層ではロームブロック・ローム粒子の混入した褐色土が見られる。溝状遺構に伴う遺物は見られないが前原第1号溝状遺構の東南端近くで土坑状の落ち込みを切っており、そこでは須恵器片・軟質陶器片等が見られる。溝の掘削・存続時期は中世から近世と考えられる。

屋敷跡内では4棟の掘立柱建物跡が検出されている。このうち、前原第4号掘立柱建物跡と前原

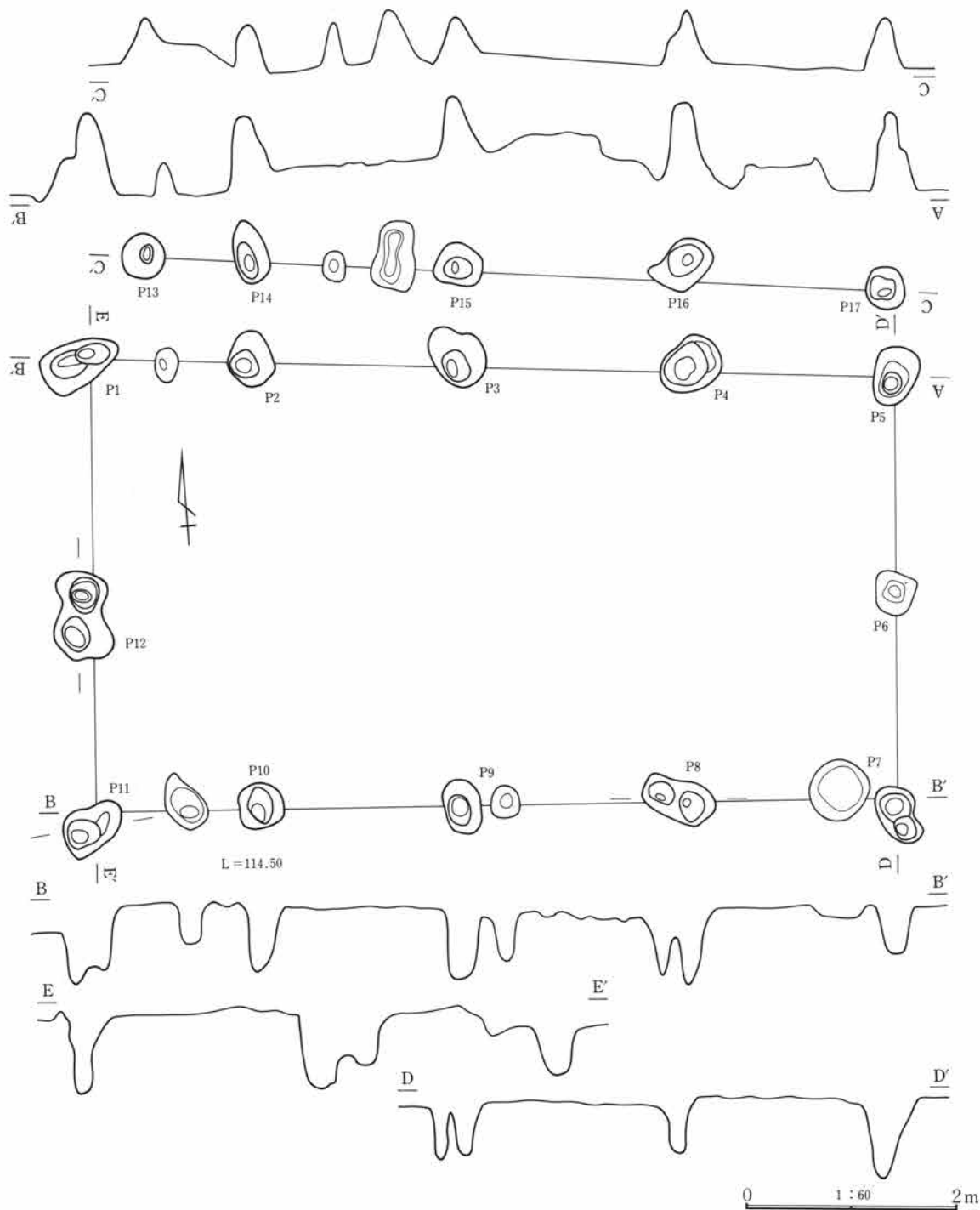
第25表 前原調査区遺構計測表(2)
第4号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	74×42×76	113.64	P 1~P 2 148	P 1~P12 227
2	52×42×70	113.68	P 2~P 3 194	P12~P11 220
3	62×49×59	113.49	P 3~P 4 222	
4	57×45×73	113.60	P 4~P 5 192	P 2~P10 418
5	53×45×70	113.68		
6	42×46×52	113.93	P12~P 6 767	P 3~P 9 420
7	52×48×46	113.93		
8	74×42×65	113.67	P11~P10 172	P 4~P 8 401
9	50×33×63	113.74	P10~P 9 189	
10	42×42×59	113.83	P 9~P 8 214	P 5~P 6 195
11	58×41×47	113.72	P 8~P 7 195	P 6~P 7 198
12	82×47×73	113.66		
13	42×42×35	113.91	庇 P13~P17	P 1~P13 110
14	60×32×41	113.98	P13~P14 96	P 2~P14 95
15	44×40×44	113.92	P14~P15 195	P 3~P15 96
16	55×39×49	113.88	P15~P16 220	P 4~P16 100
17	38×37×44	113.96	P16~P17 200	P 5~P17 85

第3号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	56×50×61	113.83	P 1~P 2 208	P 1~P 8 168
2	66×46×58	113.76	P 2~P 3 198	P 8~P 7 186
3	40×33×47	113.88		
4	80×53×39	114.02	P 8~P 4 414	P 2~P 6 374
5	80×58×71	113.77		
6	46×42×81	113.68	P 7~P 6 212	P 3~P 4 165
7	68×42×61	113.82	P 6~P 5 205	P 4~P 5 194
8	52×49×77	113.67		

第IV章 前原調査区の遺構と遺物

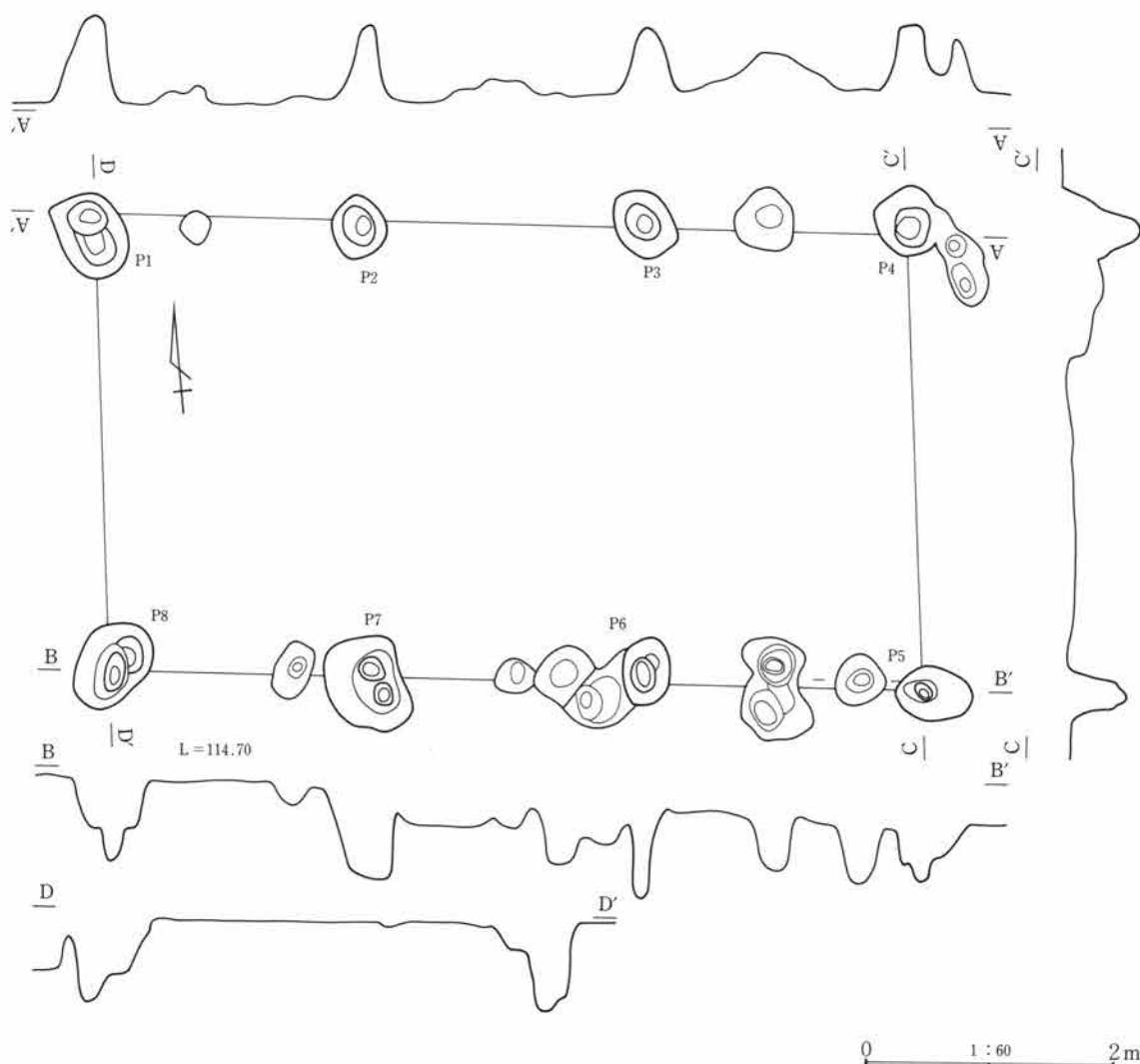


第237図 前原第4号掘立柱建物跡遺構平面図

第5号掘立柱建物跡には重複関係が認められる。また、前原第6号掘立柱建物跡は桁方向を南北にとる建物であるが、南半は調査区外となるため遺構の全容は不明である。

前原第3号掘立柱建物跡は屋敷内の北東隅に位置し、桁行2間、梁行2間の小規模な建物である。

前原第4号掘立柱建物跡と前原第5号掘立柱建物跡はいずれも棟方向をほぼ同じにする。遺構の位置からは前原第5号掘立柱建物跡が屋敷跡のほぼ中央に占地する。棟方位を見た場合には前原第4号掘立柱建物跡が前原第1号溝状遺構の北辺での走行方位に一致する。検出した4棟の建物は、屋敷内での占地の状況にこ



第238図 前原第5号掘立柱建物跡遺構平面図

れを圍繞する溝状遺構との関わりがそれぞれ認められる。ここでは遺構に伴う遺物は見られなかったが、グリッド取り上げのものには、中世後半ないし近世にかけてのものが認められ、近世中頃までの時期の遺物が確認できる。したがって、これらの遺構群もこれと差のない時期と推定される。

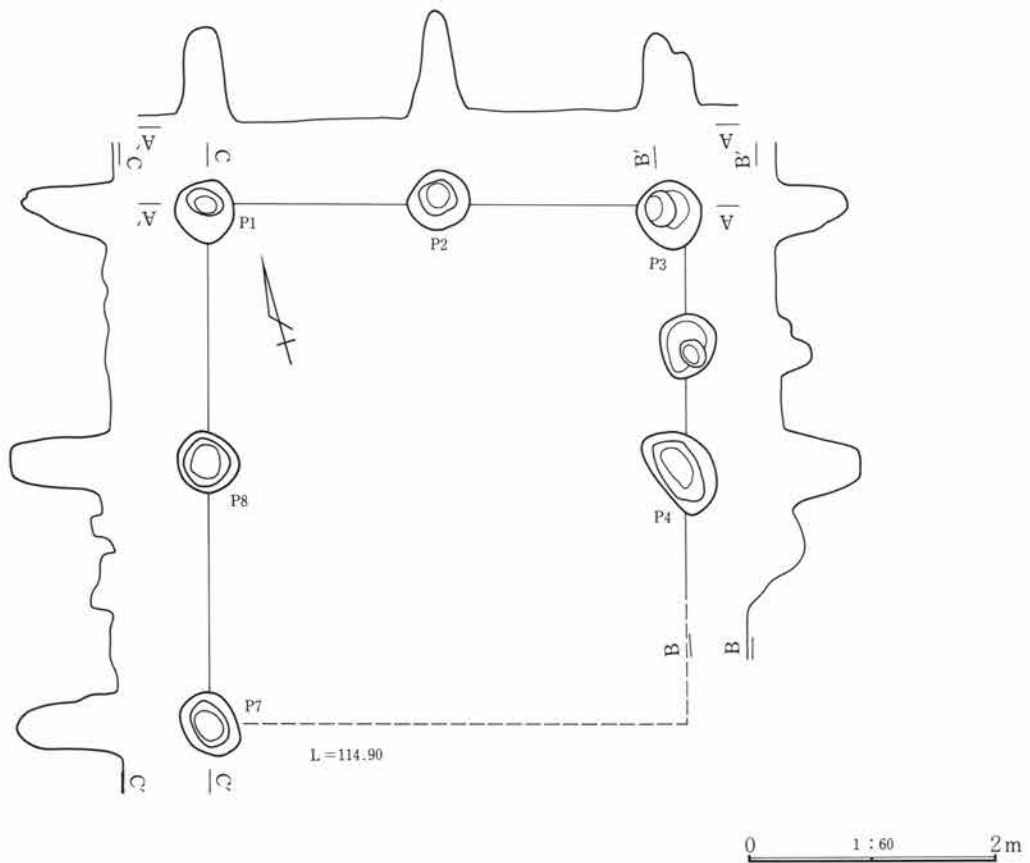
前原第4号掘立柱建物跡は、桁行4間、梁行2間で北面に半間の庇をもつ建物である。支柱穴は12個であるが、幾つかの柱穴には掘り替えの痕跡が認められ、前原第5号掘立柱建物跡との重複関係も含めて、建物の建て替えがなされていることが考えられる。前原第5号掘立柱建物跡はこれよりはやや小さい桁行3間、梁行1間の建物である。この建物では桁行の東の1間に半間の位置で柱穴が検出され、梁が4本+1本という構造上の特徴を認められる。

(5) 前原調査区西群掘立柱建物跡 (第240図)

前原調査区のある洪積台地上には、調査区を横断して県道金井倉賀野停車場線が走っている。この道路の西側でも3棟の掘立柱建物跡を検出した。

第25表 前原調査区遺構計測表(3)
第5号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	70×49×69	113.75	P 1～P 2 217	P 1～P 8 364
2	48×43×54	113.75	P 2～P 3 225	P 2～P 7 352
3	59×46×53	113.75	P 3～P 4 208	P 3～P 6 350
4	54×48×40	113.88	P 4～P 5 370	
5	60×47×43	113.92	P 8～P 7 205	
6	53×38×70	113.74	P 7～P 6 220	
7	80×62×52	113.75	P 6～P 5 225	
8	76×54×64	113.97		



第239図 前原第6号掘立柱建物跡遺構平面図

前原第7号掘立柱建物跡と前原第9号掘立柱建物跡は棟方位をほぼ同方向にとり、前原第8号掘立柱建物跡はこれと直交する棟方位で、前原第2号掘立柱建物跡に共通する。これらの掘立柱建物跡は県道東側の屋敷跡で検出された4棟とは棟方向が明らかに異なり、これらとは別に建てられたものと考えられる。

前原第7号掘立柱建物跡は桁行4間であるが梁行1間とやや狭長な建物である。南東隅が攪乱土坑により壊され、柱穴は9個確認されたのみであった。

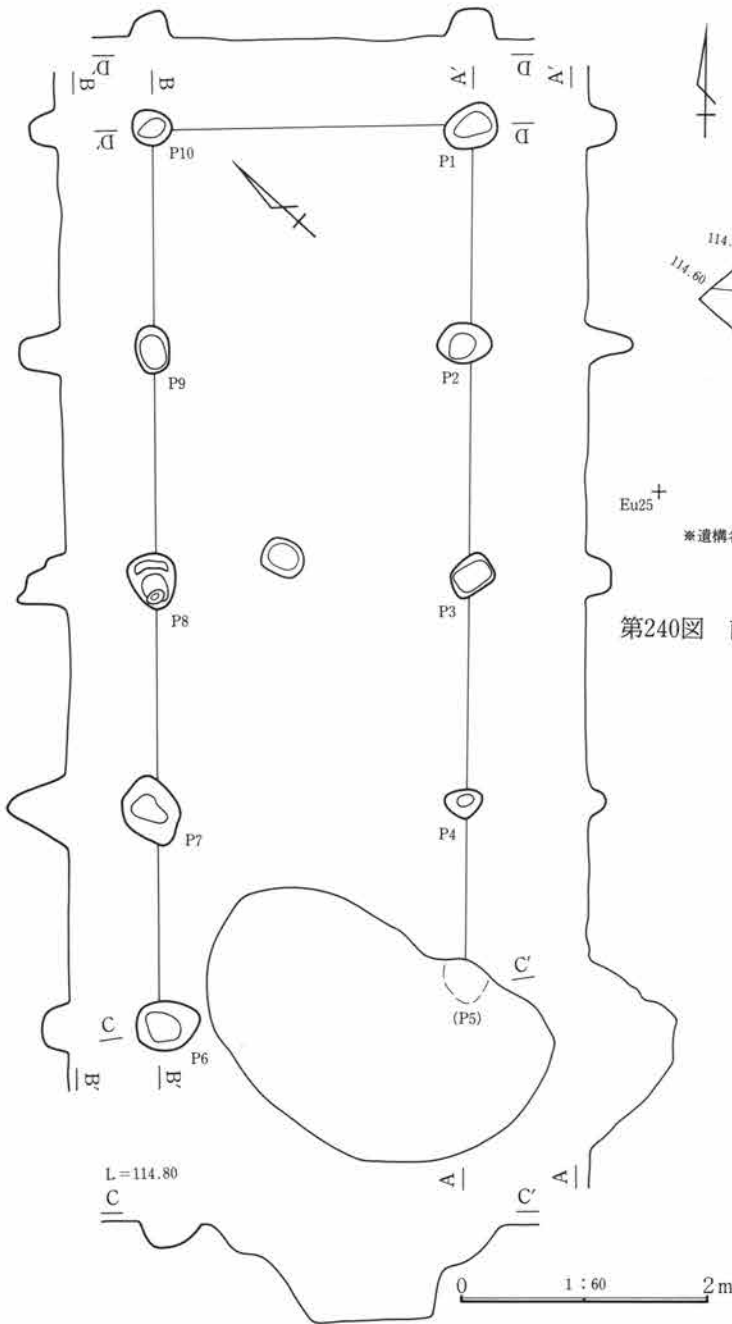
前原第8号掘立柱建物跡は3間×1間の規模であるが、梁行1間が桁行2間分に相当する。前原第7号掘立柱建物跡の桁方位と第8号掘立柱建物跡の梁方位はほぼ一致し、建物の間隔も約1間(1.8m)であることから、相互に関連したものであると推定される。

この2棟の北東に約11mの距離を隔てて前原第9号掘立柱建物跡がある。桁行3間、梁行2間でやや歪んだ平面形状である。

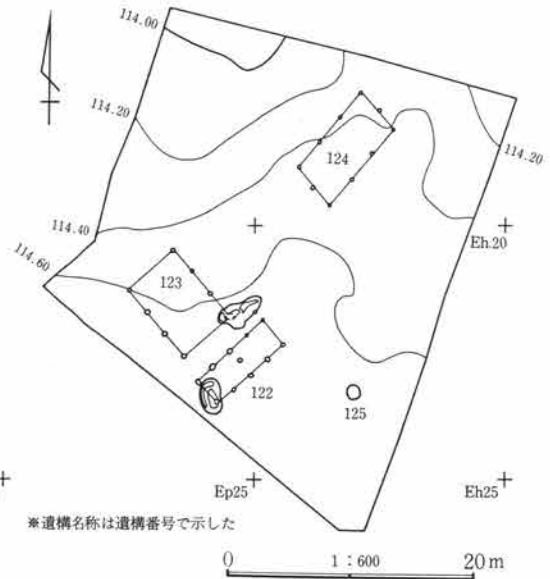
第25表 前原調査区遺構計測表(4)
第6号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	50×48×71	114.13	P 1～P 2 185	P 1～P 8 202
2	49×48×81	113.99	P 2～P 3 177	P 8～P 7 208
3	52×50×53	114.19		
4	74×46×54	114.03	P 8～P 4 (410)	P 2～P 6 (410)
P 5	—	—		
6	—	—	P 7～P 5 (380)	P 3～P 5 (410)
7	51×43×48	113.71	()は推定	
8	48×46×74	114.01		

第2節 中・近世の遺構と遺物



第241図 前原第7号掘立柱建物跡遺構平面図



第240図 前原調査区西群掘立柱建物跡遺構平面図

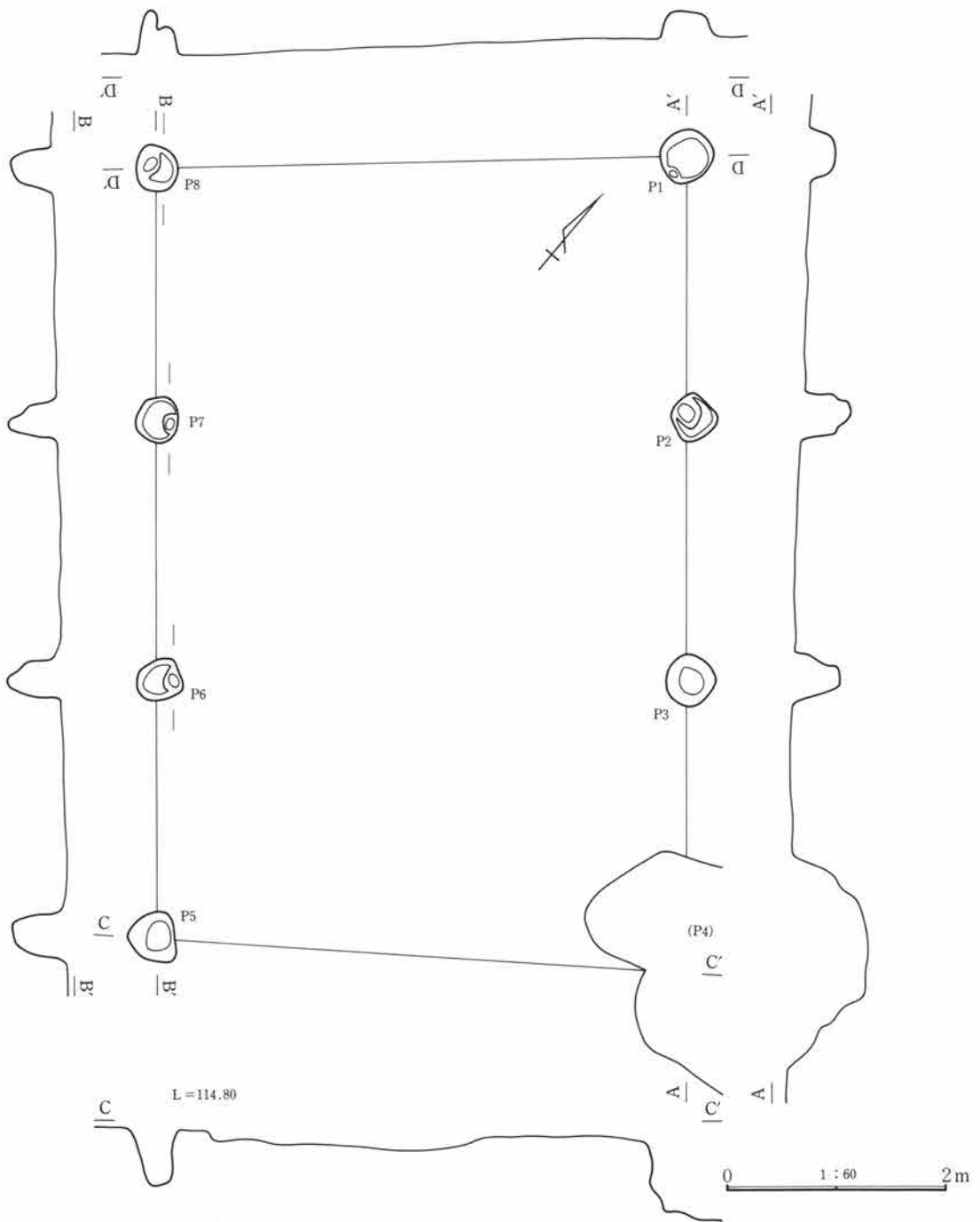
第25表 前原調査区遺構計測表(5)
第7号前原調査区遺構計測表

E B 6		
柱穴番号	長径×短径×深さ (cm)	底面標高 (m)
P 1	42× 33× 23	114.44
2	42× 32× 36	114.33
3	36× 26× 20	114.50
4	28× 22× 10	114.56
5	—	—
6	50× 38× 21	114.54
7	53× 43× 44	114.25
8	43× 34× 39	114.34
9	36× 27× 33	114.35

E B 6			
柱	間	計	測 値 (cm)
桁	行	梁	行
P 1	~ P 2	175	P 1 ~ P10 258
P 2	~ P 3	182	P 2 ~ P 9 254
P 3	~ P 4	175	P 3 ~ P 8 252
P 4	~ P 5 (146)	175	P 4 ~ P 7 247
			P 5 ~ P 6 (246)
P10	~ P 9	175	
P 9	~ P 8	194	() は推定
P 8	~ P 7	172	
P 6	~ P 7	174	

第24表 前原調査区掘立柱建物跡一覧表(3)

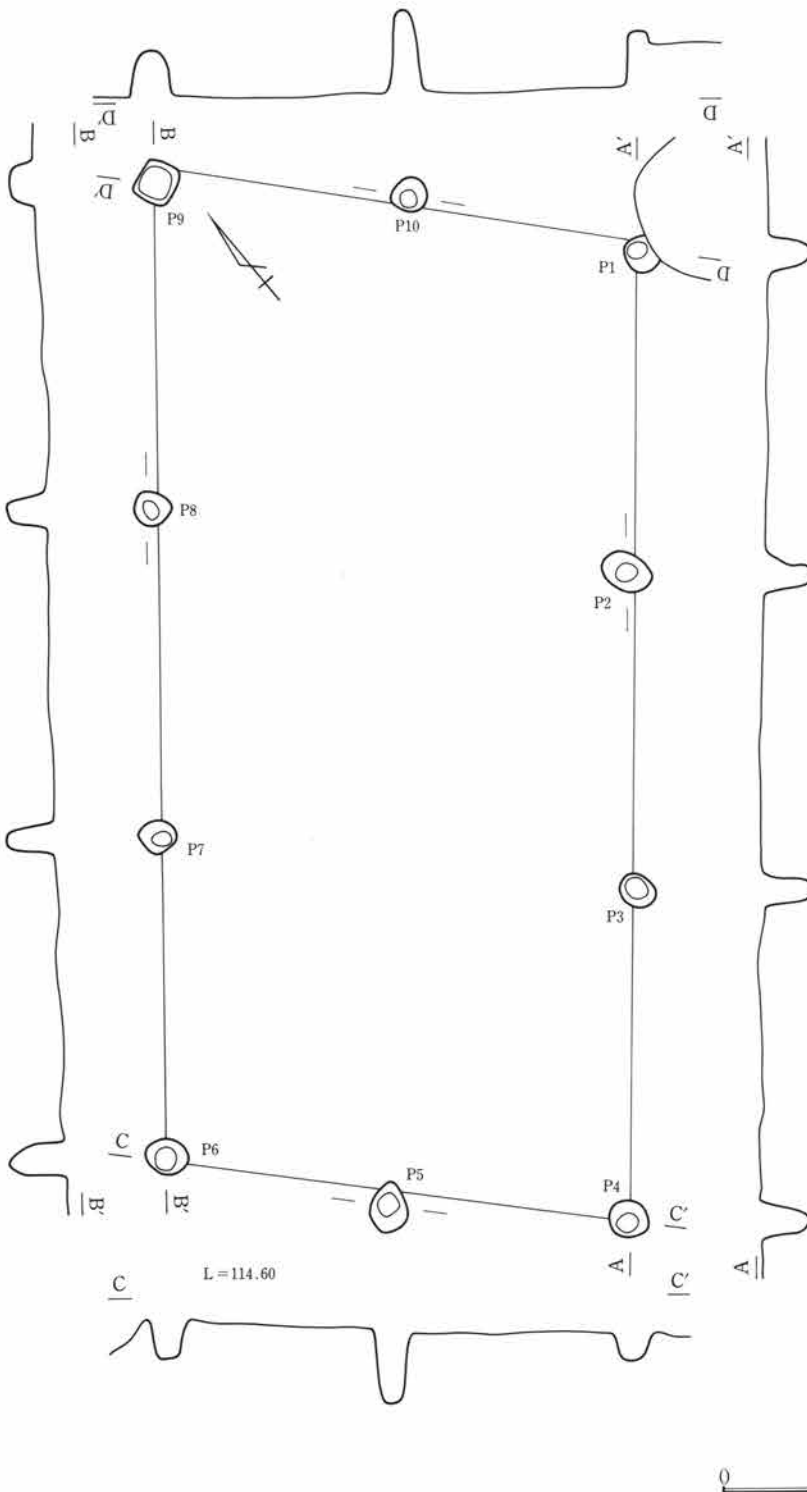
遺構名称	調査名称	棟方位	規模 (間)×(間)	面積(m ²)	桁 行(m)		梁 行(m)		庇(m)	柱穴平面形状	備 考
					①長辺	②短辺	①長辺	②短辺			
第7号掘立柱建物跡	E B 6	N- 48°-E	4× 1	17.5	①7.15	②6.78	①2.58	②(2.6)	—	円形	
第8号掘立柱建物跡	E B 7	N- 41°-W	3× 1	33.7	①7.25	②6.84	①4.80	②4.78	—	円形	
第9号掘立柱建物跡	E B 8	N- 40°-E	3× 2	29.2	①7.69	②7.66	①3.90	②3.72	—	円形	



第242図 前原第8号掘立柱建物跡遺構平面図

第25表 前原調査区遺構計測表(6)

柱穴 番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	48×46×21	114.24	P 1～P 2 230	P 1～P 8 478
2	43×41×42	114.10	P 2～P 3 235	
3	45×44×44	114.17	P 3～P 4 (260)	P 2～P 7 479
4	—	—		
5	42×42×48	114.24	P 8～P 7 222	P 3～P 6 476
6	40×36×37	114.23	P 7～P 6 234	
7	39×38×42	114.21	P 6～P 5 228	P 4～P 5 (480)
8	40×38×38	114.22	() は推定	



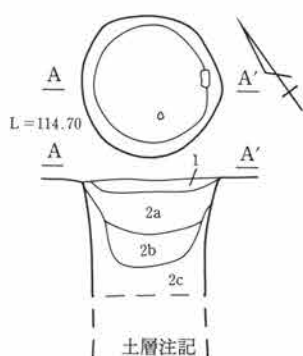
第25表 前原調査区遺構計測表(7)
第9号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径×深さ (cm)	底面標高 (m)
P 1	28×28×31	114.13
2	38×28×37	114.11
3	27×22×38	114.15
4	31×29×37	114.20
5	40×32×61	113.89
6	32×28×41	114.05
7	32×26×37	114.01
8	30×26×28	114.08
9	34×32×58	114.10
10	27×26×56	113.78

E B 8

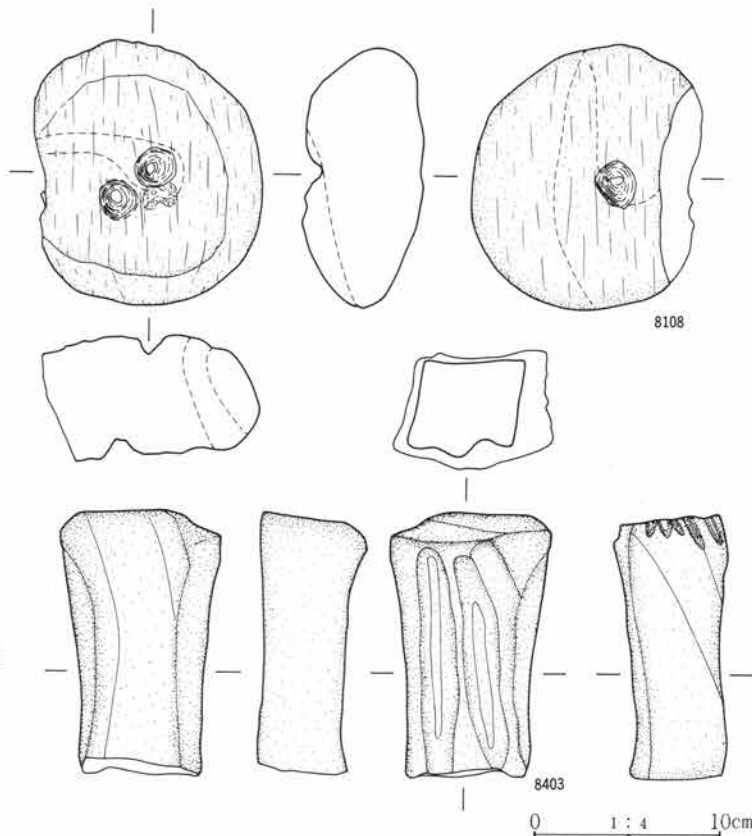
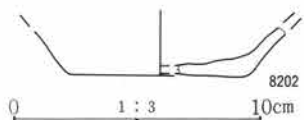
柱間計測値(cm)		
桁行	梁行	
P 1 ~ P 2	256	P 1 ~ P 15 186
P 2 ~ P 3	250	P 15 ~ P 9 204
P 3 ~ P 4	263	
		P 2 ~ P 8 336
P 10 ~ P 5	794	
		P 3 ~ P 7 378
P 4 ~ P 8	256	
P 8 ~ P 7	258	P 4 ~ P 5 192
P 7 ~ P 6	252	P 5 ~ P 6 180

第243図 前原第9号掘立柱建物跡遺構平面図



- 土層注記
- 1 黒色土層 粘性締りなし。
 - 2a 黒褐色土層 黄色土粒がやや多い。粘性なし、E E 1の中では一番固く締っている。
 - 2b 2層に比べ、やや黄色土粒が少なく黒っぽい、やや粘性がある。
 - 2c 黒褐色土と黄褐色ローム土との混じり。
- 0 1:60 2m

第244図 前原第1号井戸跡遺構平面図



第245図 前原第1号井戸跡出土遺物実測図

(6) 前原第1号井戸跡 (第244図・第245図、写真図版50)

本遺構はE区県道西側の En23グリッドで検出された。平面形は径1.1mの円形で、確認面標高は114.60mである。前原第8号掘立柱建物跡の東約6mのところに位置する。埋土を約1m掘り下げたところで湧水のためそれ以下の掘り下げを断念した。埋土最上層に浅間B軽石と思われる砂粒の混じる黒色土が見られ、その下には黄色土微粒子を混じてやや堅く締まる黒褐色土が観察される。この層下は未掘となるが泥質のノロを確認する。

本遺構からは、縄文の多孔石 (8108)、皿形の土師質土器 (8202)、砥石 (8403) が出土している。8202は底部片でやや焼成の堅緻な土師質土器である。8108の多孔石は径140mm、厚さ90mmの点紋緑泥片岩に径15mm程度の孔を穿ったものである。8403の砥石は熔岩製でいわゆる荒砥である。かなり使用したものであるが、1面には12mm~15mmの2条の筋状の摩滅が認められ、玉砥石としての使用痕のようにも見られる。

土師質土器は中世後半ないし近世初頭と考えられることから、本遺構もそれに近い時期と推定される。(船藤亨・綿貫鋭次郎)

2 遺物

(1) 種別と出土状況 (第247図～第250図)

前原調査区で出土した遺物は、第1節で述べた縄文時代のものの他に古墳～平安時代の須恵器片・土師器片、中世から近世にかけての土器・陶磁器類が見られる。出土総量は遺物収納箱で約5箱あるが、古墳時代より平安時代にかけての土師器片は出土量は極めて少なく、須恵器片の出土も僅かである。須恵器片はE区の南東部にややまとまって出土しており、周辺に何らかの遺構があったものと推定される。多くは大甕の胴部片である。8219は大甕の口縁部片で、櫛描文が認められ焼成はやや甘い酸化焰である。他の須恵器片も同様な焼成傾向が認められる。上毛古墳総覧には字前原と字薬師原との境付近に古墳の記載があり、また、F₉薬師原遺跡でも2基の古墳周溝が検出されたことから付近に小規模な古墳の群集があるものと思われる、本調査区出土遺物もこうした遺構に伴うものと考えられる。

中世から近世にかけての遺物は、土師質土器・軟質陶器・陶磁器・土製品・銭貨・金属製品・石製品等が見られたが、表土(耕作土)下がすぐにローム面となり、良好な保存状況であるとは言えない。また、ほとんどが覆土からの出土で、遺構に伴って検出されたのは前原第1号井戸跡出土の皿形土師質土器と、前原第12号土坑出土の軟質陶器製の花瓶の2点のみである。遺物は中世から近世にかけての時期と思われるが、D区(台地縁辺から農道まで)・E区東(農道から県道まで)・E区西(県道西側)で、若干の相違が認められる。E区東は道路跡・屋敷跡が検出されているが、ここでの遺物には中世のものが認められ、やや古い様相を示す。現場で採集した遺物には現代のものも見られたが、近世若しくは近代以前のもので比較的良好なものを選択し掲載した。したがって、遺構年代を遺物からの類推が可能となるよう留意している。

(2) 土師質土器・軟質陶器

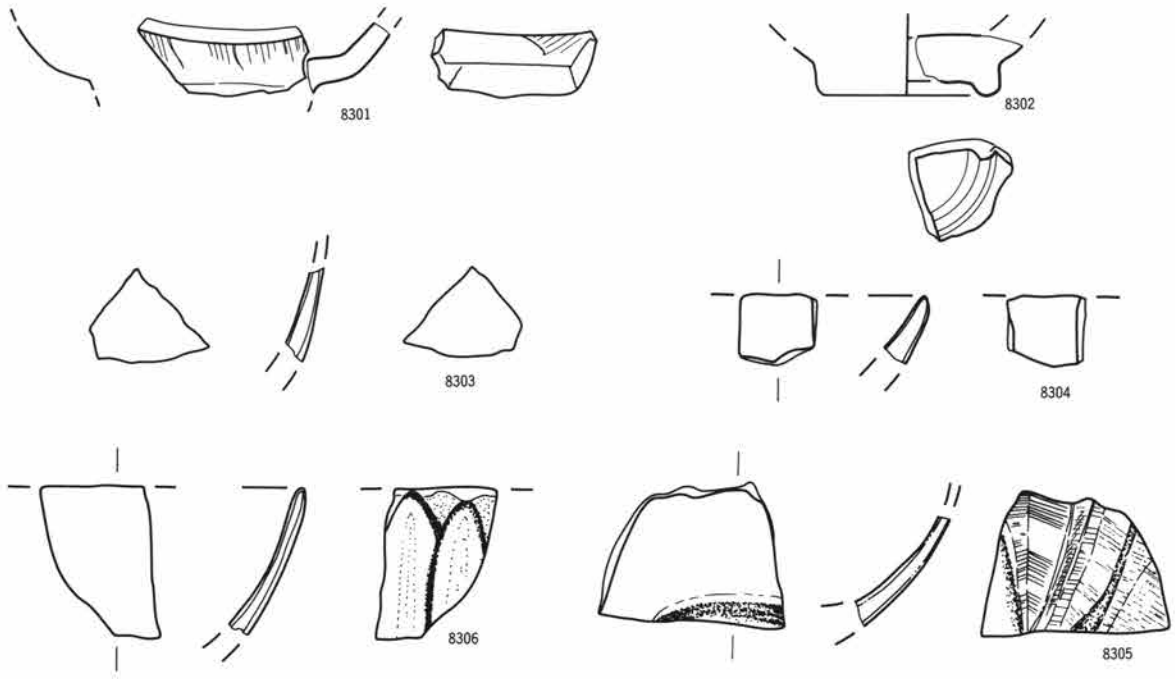
皿形の土師質土器は3点あり、いずれもロクロ成形で底部は平底で糸切り痕が残る。口縁部は直に外反し、口唇部の器壁はやや肥厚し、底部に近い部分は薄くなる。内面には撫で調整がなされる。8202は前原第1号井戸跡出土で、やや硬質の酸化焰焼成で赤褐色を呈す。8203・8204は灰褐色を呈し須恵質の堅緻な焼成である。器形からは中世後半の時期と見られる。

軟質陶器類は摺鉢・内耳鍋類と焙烙類・他が見られる。8213～8215は軟質陶器の摺鉢口縁部片で、やや土師質に近い焼成である。8215は口唇部が平坦で、内面には摺目としての櫛描波状文が見られ、器壁は使用により摩滅している。8213は口唇端部が三角形の断面形状を呈し、器面は比較的きれいに横ナデされる。8216・8217は内耳鍋の口縁部片で焼成は須恵質で堅緻である。口端から内稜まではやや短い。8218は内耳鍋の底部片と思われるが、焼成は酸化焰で褐色を呈し、堅緻な焼き上がりである。以上の摺鉢・内耳鍋類は中世と見られる。

8205は軟質陶器製の摺鉢で、内面に粗い櫛目が見られる。土師質の焼成で明褐色を呈す。8206は口縁部に外反する鏝をもつ羽釜かと推定される。8207・8208は焙烙の口縁部である。この他に十能の把手(8209)、泥面子と見られる型押し土製品(8210～8212)が出土している。これらは近世に入ってからのものと推定される。

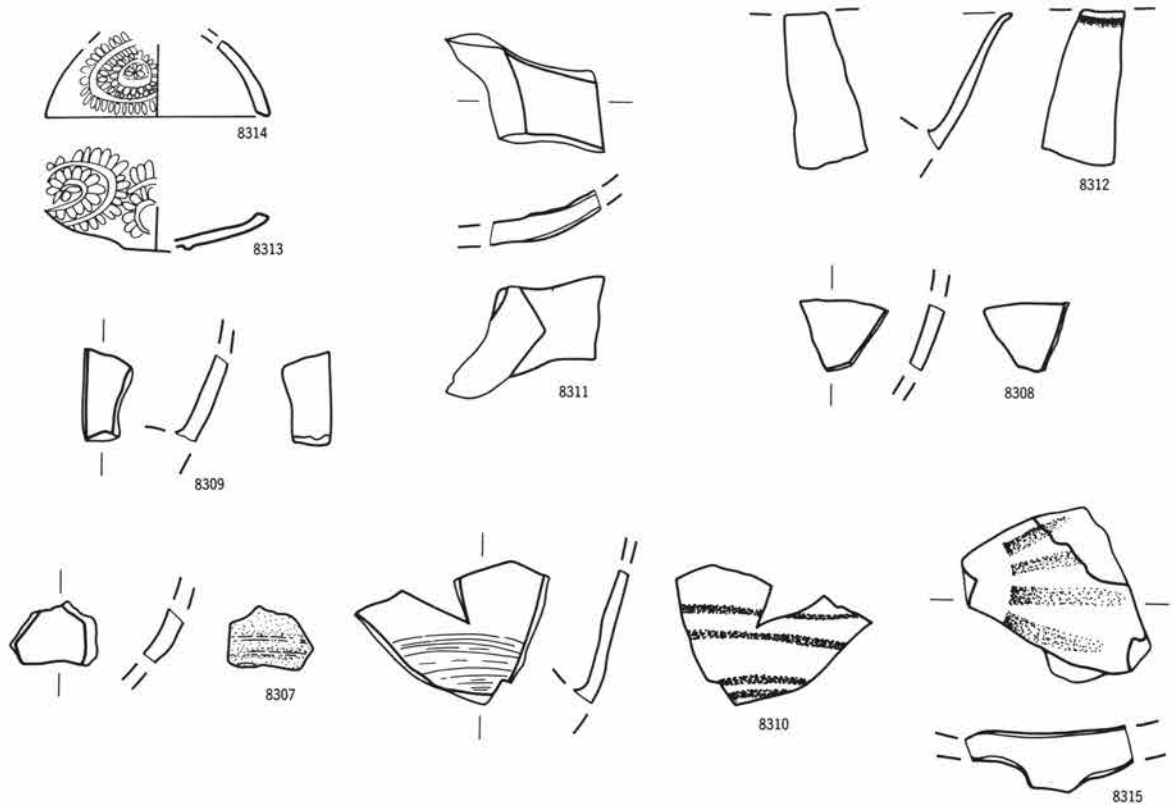
8201は前原第12号土坑出土の花びである。この土坑は縄文時代中期のフラスコ状の土坑であるが、ここに近世の土坑が再度掘られ、花瓶はそれに伴う遺物と考えられる。埋土中に堅く締まったローム土が見られ、その上面から出土している。花瓶は仏具であり、墓壇等に伴うものと推定されることから、本遺物もそうした性格のものと推定される。

第IV章 前原調査区の遺構と遺物



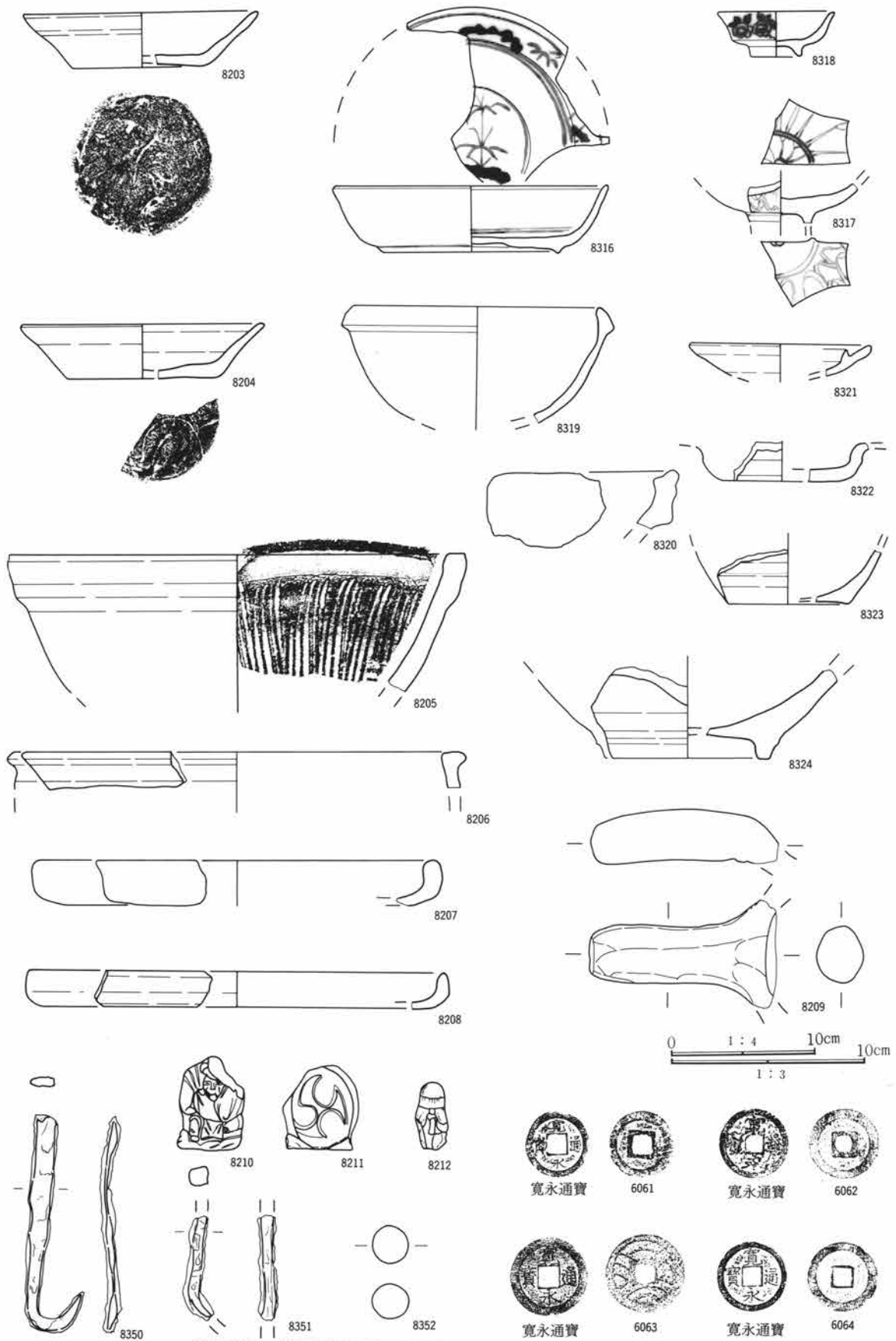
第246図 前原調査区出土遺物実測図(5)―輸入磁器―

0 1 : 2 5 cm

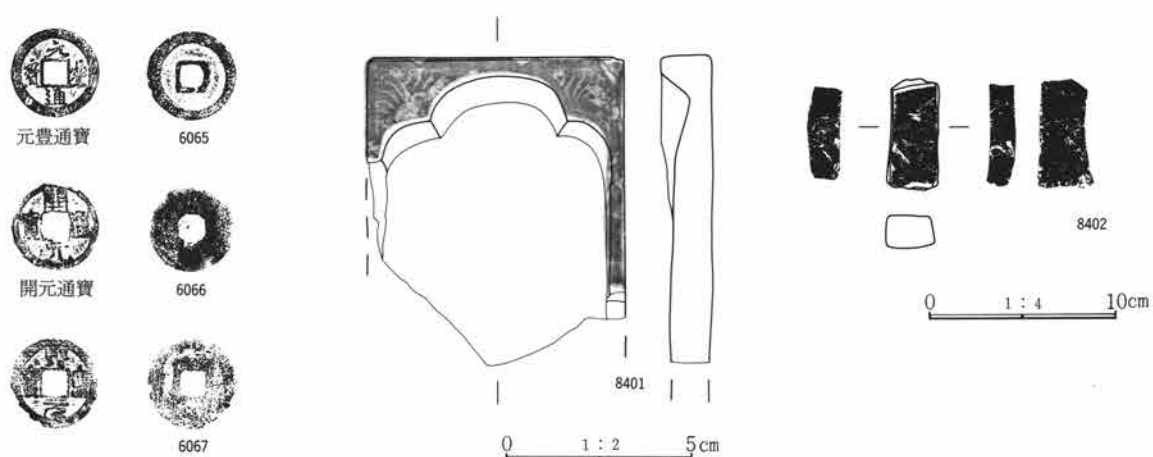


第247図 前原調査区出土遺物実測図(6)―近世磁器―

0 1 : 2 5 cm



第248図 前原調査区出土遺物実測図(7)-D区・中近世遺物-



第250図 前原調査区出土遺物実測図(9)－E区・銭貨・石製品－

(3) 陶磁器類

陶磁器類は量は比較的少ないものの種類が豊富である。ここでも輸入磁器（8301～8306）が見られたが、大御堂調査区出土のものと同様、13世紀代の龍泉窯製と見られる。台地縁辺に近いD区で検出されたものが多く、寺院址との関連が推定される遺物である。8325の常滑製大甕の頸部片、8326は常滑製鉢（片口鉢）の口縁部片で、中世のものである。

この他の多くは近世に入ってからのもので、瀬戸美濃系・肥前系が中心である。8307～8315は肥前系の青磁の小片である。これらはD区出土のものが多く、17世紀中頃から18世紀代にかけてのものである。染付は18世紀代のものが見られる。8316は蛇ノ目凹型高台の小皿、8317は内外面とも二重網文の丸碗である。8318は猪口で、銅版転写の染付で時期はやや下る。8346～8349はE区出土である。8346～8348は県道東側より出土の18世紀代の丸碗、8349は菊花ちらし文の筒形碗で県道西側での出土である。肥前唐津系の陶器の小片もいくつか認められる（8328～8331）。8345も唐津系の大盤底部片である。8343・8344はいわゆる肥前系の京焼風陶器で17世紀から18世紀にかけてのものである。

陶器類は、瀬戸美濃系が中心である。8327は片口のおろし皿で15～16世紀とみられ、確認された施釉陶器の碗皿類の中では古い部類に属す。8332～8334は白色の長石釉がかけられた志野系の小片である。8339・8340は褐釉の丸碗底部片、8341はいわゆる尾呂茶碗と見られる。8337は灰釉の灯明皿であるが上手物である。

出土遺物を年代別に見ると、中世前半には青磁類（輸入磁器）が見られ、国産の常滑系の甕も見られる。軟質陶器製の摺鉢もこの時期と思われ、内耳鍋・土師皿はやや下るものと考えられる。中世後半から近世にかけては瀬戸美濃系のおろし皿があり、陶器類は近世前半から中頃にかけて多い。肥前系のもは青磁が17世紀中頃から後半、染付・京焼風陶器は17世紀後半から18世紀前半で、他の陶器類もこれに並行する時期が中心と思われる。

銭貨は7点出土し、D区では「寛永通寶」が、E区では渡来銭が出土して、E区とD区での出土遺物の時期差を端的に示していると考えられる。（綿貫鋭次郎）

第IV章 前原調査区の遺構と遺物

第26表 前原調査区出土遺物観察表—グリッド出土中近世遺物—

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種・分類 残存状況	出土位置 出土地点 出土遺構	①口径(㎜)④重量(g) ②器高(㎜)⑤口高比 ③底径(㎜)⑥口底比	①成形技法 ③色調 ⑤焼成	②底部の特徴 ④胎土 ⑥器形	整形・調整等	備考
8201 227 108	軟質陶器 花瓶 完形	第12号土坑	①146(頸径31) ②192(胴径70) ③93(器厚6~7)	①ロクロ成形 ②平底 ③表:赤褐色 ④細粒砂(やや精選) ⑤酸化焰、良好 ⑥尊式仏花瓶	表面は全体にきれいなミガキ、胴部に押圧文		中近世
8202 245 —	土師質土器 皿 底部片	第1号井戸跡		①ロクロ成形 ②回転糸切り ③赤褐色 ④細粒砂 ⑤酸化焰、やや硬質 ⑥口縁部は直に外反	体部:横ナデ 器壁はやや薄い		中世
8203 248 106	土師質土器 皿 口~底%	Dh30g I層	①120 ②26 ③70	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③灰色 ④細粒砂、微粒雲母、黒色鉱物粒子やや多 ⑤還元焰(須恵質) ⑥口縁部は直に外反	横ナデ調整、口縁部際やや肥厚		中世
8204 248 106	土師質土器 皿 口~底%	Dj30g I層	①126 ②28 ③80	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③灰色~にぶい灰白色 ④細粒砂、微粒雲母、黒色鉱物粒子 ⑤還元焰(須恵質) ⑥口縁部は直に外反	横ナデ調整 口縁部際やや肥厚		中世
8205 248 106	軟質陶器 鉢・摺鉢 口縁部%	Ds33g I層	①(320)	①ロクロ成形 ②欠損不明 ③鈍い赤褐色 ④中粒砂、微粒雲母、砂粒 ⑤酸化焰、良好 ⑥橙色	口唇内・体部外横ナデ、摺目4条粗い		近世(18c頃の瀬戸美濃系に似る)
8206 248 107	軟質陶器 鍋 口縁部片	Dr24g I層	①(320)	①ロクロ成形 ②欠損・不明 ③鈍い赤褐色 ④細粒砂、黒色鉱物粒、白色粒、雲母 ⑤酸化焰 ⑥口唇部が鏝状に横に広がる	口:横ナデ		近世
8207 248 107	軟質陶器 焙烙 口縁部片	Ds29g I層	①(276) ②(31) ③(280)	①型作りか ②浅い皿状か ③明褐色 ④やや密、白色粒子、微粒雲母 ⑤酸化焰、良好、外面燻	口:横ナデ		近世
8208 248 107	軟質陶器 焙烙 口縁部片	Dq22g I層	①(288) ②25 ③(270)	①ロクロ成形 ②平底 ③明褐色 ④やや密、白色微粒子少 ⑤酸化焰、良好 ⑥口縁部は直立し体部との間に稜へら削りか	口:横ナデ		近世
8209 248 106	軟質陶器 十能 把手	Dt24g I層	残長98 柄長92	①紐作りか ④やや密、赤褐色粒子、白色粒子 ⑤酸化焰、表面燻 ⑥十能の柄の部分と思われる	縦・へらナデ		
8210 248 106	土製品 泥面子 ほぼ完形	Dg20g	④5.5	①型物 ④細粒砂 ⑤酸化焰	七福神か		近世
8211 248 106	土製品 泥面子 ほぼ完形	Df29g	④おさか	①型物 ④細粒砂 ⑤酸化焰	右三巴文(巴の頭は大きく尾は短い)		近世
8212 248 106	土製品 泥面子 ほぼ完形	Ei33g	④1.4	①型物 ④細粒砂 ⑤酸化焰	童人形か		近世
8213 249 106	軟質陶器 摺鉢 口縁部	Eb27g		①紐作り ②欠損 ③鈍い赤褐色、表面一部灰褐色 ④細粒砂、白色粒、微粒雲母 ⑤酸化焰、良好	内:横ナデ 外:指調整 口縁部:三角		中世 内:磨減
8214 249 107	軟質陶器 摺鉢 口縁部	Eb29g	器厚12mm	①紐作り ②欠損 ③表面:灰褐色、断面:鈍い赤褐色 ④細粒砂、白色粒、微粒雲母 ⑤酸化焰、やや瓦質(堅緻)	内外:横ナデ 口縁部:平		中世 口唇平坦 内:やや磨減
8215 249 107	軟質陶器 摺鉢 口縁部	Eb29g	器厚10mm	①紐作り ②欠損 ③表面:黄橙色、内面:灰黄橙色 ④細粒砂、黒色鉱物粒子、小砂粒 ⑤やや還元焰(普通)	外:横ナデ 内:波状文 口端部:平		中世 内:やや磨減
8216 249 107	軟質陶器 内耳鍋 口縁部	Eg25g03	器厚9mm 口唇~内稜20mm	①紐作り ②欠損 ③表面:灰黒色、断面:鈍い黄褐色 ④細粒砂、白色微粒子 ⑤やや還元焰(瓦質)	内:横ナデ 外:横ナデ 内稜まで短い		中世 外:煤付着
8217 249 107	軟質陶器 内耳鍋 口縁部	Eh31g	器厚10mm 口唇~内稜19mm	①紐作り ②欠損 ③表面:青灰色、断面:赤褐色 ④細粒砂、黒色小粒子、白色粒子 ⑤酸化焰、表面燻(やや瓦質)	内外:丁寧な横ナデ		中世
8218 249 107	軟質陶器 内耳鍋 底部	Ef21g01	底部厚6~8mm	①型作りか ②浅い丸底状 ③表面:暗褐色、断面:黒色 ④細粒砂、白色小砂粒 ⑤酸化焰、良好	内・外:丁寧な横ナデ		中世

第2節 中・近世の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種・分類 残存状況	出土位置 出土地点 出土遺構	①口径(㎜)④重量(g) ②器高(㎜)⑤口高比 ③底径(㎜)⑥口底比	①成形技法 ③色調 ⑤焼成	②底部の特徴 ④胎土 ⑥器形	整形・調整等	備考
8219 249 107	須恵器 大甕 口縁部	Ec27g01		①紐作り ②欠損 ③表面：黄橙色、断面：赤褐色 ④細粒砂、やや精選、白色微粒子 ⑤酸化焰、やや良		内・唇：横ナデ 外：櫛描文	

第26表 前原調査区出土遺物観察表—中・近世—

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(㎜) ②器高(㎜) ③底径(㎜)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調)⑦染付(文様・呉須) ⑧他	特徴	備考 (産地、時期等)
8301 246 口絵カラー	磁器・青磁 碗 B類 体部小片	Db25 g 01	器厚 5～6.5	④密、灰色(N) ⑥緑灰色(10GY) ⑦蓮弁文		龍泉窯系 13c
8302 246 口絵カラー	磁器・青磁 碗 E類 底部小片	Di23 g	器厚 12	④密、灰色(N) ⑥緑灰色(10GY)		龍泉窯系 13c
8303 246 口絵カラー	磁器・青磁 碗 E類 体部小片	Dk37 g	器厚 5	④密、オリーブ灰色(2.5GY) ⑥緑灰色(5G) ⑦蓮弁文		龍泉窯系 13c
8304 246 口絵カラー	磁器・青磁 不明 D類 口縁部小片	DI31 g	器厚 5～7	④密、オリーブ灰色(2.5GY) ⑥明緑色(10GY) ⑦不明	二重貫入	龍泉窯系 13c
8305 246 口絵カラー	磁器・青磁 碗 E類 体部小片	Eb29 g	器厚 4～7	④密、灰色(N) ⑥緑灰色(5G) ⑦蓮弁文		龍泉窯系 13c
8306 246 口絵カラー	磁器・青磁 碗 D類 口縁部小片	Ec33 g	器厚 3～5	④密、オリーブ灰色(2.5GY) ⑥緑灰色(5G) ⑦蓮弁文		龍泉窯系 13c
8307 247 —	磁器・青磁 不明 小片		器厚 4～5	④密、灰白色(N) ⑥明緑灰色(10GY)		肥前系
8308 247 —	磁器・青磁 不明 小片		器厚 4	④密、灰白色(N) ⑥明緑灰色(10GY)		肥前系
8309 247 —	磁器・青磁 不明 小片		器厚 5	④密、灰白色(N) ⑥明緑灰色(10GY)		肥前系 18c代
8310 247 —	磁器・青磁 瓶類 体部小片	Dj20 g	器厚 4	④密、灰白色(N) 内面一部黄橙色 ⑥明緑灰色(10GY)		肥前系 17c代
8311 247 —	磁器・青白 磁 皿 体部小片	Dj21 g		④密、灰白色(N)、底部は黄色味がかっている ⑥明緑灰色(10GY)		肥前系 17c後～ 18c中
8312 247 —	磁器・青白 碗 口縁部片	Dk27 g		④密、灰白色(N) ⑥明緑灰色(10GY)、内面は灰白色(N)	クローム青磁	肥前系 (明治以降)
8313 247 —	磁器・白磁 合子 身	Ds20 g I層		①型作り ②高台作り ④精選・密 ⑤良好 ⑥内面・外面上半に透明釉 ⑧外面にたこ唐草を刻印	口端部は平端につくる	肥前系 18c末～ 19c
8314 247 —	磁器・白磁 合子	Du20 g I層		①型作り ④精選・密 ⑤良好 ⑥内面・外面口縁部付近に透明釉 ⑧外面にたこ唐草文を刻印		肥前系 18c末～ 19c
8315 247 —	磁器・青磁 皿 底部小片	E区表採		①ロクロ成形 ②高台やや幅広・高台疊付無釉 ③浅い皿 ④非常に密に精選 ⑤良好		肥前系 1630～1640 代
8316 248 —	磁器 染付 皿 口～底迄	Dp19 g I層	① 144 ② 34 ③ 92	①ロクロ成形 ②蛇の目凹形高台 ③体部は直に近い立ち上り ④精選・密(白色) ⑤良好 ⑦見込雪輪竹文、体部内面雪輪笹文		肥前系 19c 初～幕 末

第IV章 前原調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調)⑦染付(文様・呉須) ⑧他	特徴	備考 (産地、時期等)
8317 248 —	磁器・染付 碗 底部	Dt15 g		①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ④精選・密(白色) ⑤良好 ⑥見込菊花文、内面一重網文、外面二重網文		肥前系 18c中～後
8318 248 —	磁器 染付 猪口 口～底%	Df22 g	① 42 ② 18 ③ 16	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ③精選・密(白色) ⑤良好 ⑥外面蝶花文		明治後半 ～大正
8319 248 —	陶器 小型鉢 口縁部片	DI26 g	①130	①ロクロ成形 ②欠損 ③口縁部玉縁状に折り返し ④精選・密(灰色) ⑤還元焰・良好 ⑥灰釉(灰色)		関西 丹波系か
8320 248 —	陶器 揃鉢 口縁部片	Dg21 g	揃目11条 揃幅21.5mm	①ロクロ成形 ②欠損 ③縁帯外面に2条口唇部に1条の凹線 ④細粒砂・白色微粒子 ⑤酸化焰(赤褐色)		備前系 17c
8321 248 —	陶器 灯明皿 口縁部片	Ds19 g	① 94	①ロクロ成形 ②欠損 ③油受け皿 ④精選・やや密(灰白色) ⑤良好 ⑥褐釉		関西 信楽系か
8322 248 —	陶器 蓋物	Dp27 g	② 20 ③ 55	①ロクロ成形 ③落し蓋形式 ④小粒砂、ややきめが粗い(灰黄色) ⑤還元焰 ⑥灰釉(緑色)、裏面無釉		在地系 (下仁田)18 c後半以降
8323 248 —	陶器 小型鉢 底部片	Dw20 g 1層		①ロクロ成形 ②回転系切り、やや底上げ ③体部やや内湾気味 ④精選・密(褐灰～にぶい橙色) ⑤良好	体部外面～底 部に煤付着	18c後半以降
8324 248 —	陶器 鉢 底部片	Db27 g		①ロクロ成形 ②高台外面に段を持つ ④精選・密(橙色) ⑤外：鉄釉、内：灰釉	高台の作りに 18C代唐津の 特徴	肥前系唐津 18c
8325 249 —	陶器 大甕 頸部	Ea20 g 01		①紐作り ②不明 ④精選、白色小粒子多 ⑤酸化焰・焼締・堅緻 ⑥頸部外面に自然釉がかかる。		常滑系 13～14c
8326 249 —	陶器 鉢 口縁部	Eg31 g	器厚9～10	①紐作り ③口端部は平担、体部は直に外反か ④精選・密 ⑤酸化焰・焼締・堅緻 ⑥表面は鈍い赤褐色		
8327 249 —	施釉陶器 おろし皿 口～底部%	Ef33 g		①ロクロ成形 ②回転系切り ③浅い皿、口唇部平担、内稜、片口 ④やや密(淡黄色) ⑤口縁から体部に灰釉(淡黄色)	おろし目はへ ラによりやや 粗くほられる	瀬戸美濃系 15c～16c
8328 249 108	陶器 碗 小片	Er31 g		①ロクロ成形 ②欠損 ③皿形か ④やや密(赤色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉(灰白色) 刷毛塗り		肥前系唐津 18c
8329 249 108	陶器 小片	Ed28 g		①ロクロ成形 ②欠損 ③碗形か ④精選・密(褐灰色) ⑤還元焰・良好 ⑥外面横・内面縦の灰釉刷毛塗り		
8330 249 108	陶器 小片	Ed28 g		①ロクロ成形 ②欠損 ③碗形か ④精選・密(褐灰色) ⑤還元焰・良好 ⑥外面横・内面縦方向灰釉刷毛塗り		肥前系
8331 249 108	陶器 碗 小片	E区フク土		①ロクロ成形 ②欠損 ③碗形か ④精選・密(灰赤色) ⑤還元焰・普通 ⑥外面横・内面縦方向灰釉刷毛塗り		肥前系
8332 249 108	陶器 皿 口縁小片	Ec13 g		①ロクロ成形 ②欠損 ③小皿か ④やや密(淡黄色) ⑤酸化焰・普通 ⑥長石釉(灰白色)		瀬戸美濃系 (志野)
8333 249 108	陶器 皿 口縁小片	Ey29 g		①ロクロ成形 ②欠損 ③口端部外反 ④やや密(淡黄色) ⑤酸化焰・普通 ⑥長石釉(灰白色)		
8334 249 108	陶器 皿 底部片	Ek30 g		①ロクロ成形 ②欠損 ③削り出し高台 ④やや密(淡黄色) ⑤酸化焰・普通 ⑥長石釉(灰白色)、内面鉄絵		
8335 249 106	陶器 碗 口～体部片	E区表採		①ロクロ成形 ②欠損 ③腰折れ ④精選・密 ⑤やや還元焰か・良好 ⑥灰釉、白化粒土		瀬戸系

第2節 中・近世の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調)⑦染付(文様・具須) ⑧他	特徴	備考 (産地、時期等)
8336 249 106	陶器 碗 体部小片	Ec19g		①ロクロ成形 ②欠損 ③腰折れ ④やや密(鈍い黄橙色) ⑤酸化焰・良好 ⑥褐釉		
8337 249 106	陶器 灯明皿 口縁部片	Eb38g		①ロクロ成形 ②欠損 ③油受け皿 ④精選・密(灰白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉、外面は口唇部まで施釉		
8338 249 106	陶器 鉢 口縁部片	Ef33g		①ロクロ成形 ②欠損 ③口縁部折り返し ④やや密(淡黄色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉		
8339 249 106	陶器 碗 底部	Eg30g		①ロクロ成形 ②高台 ③やや深い丸碗 ④やや密(灰白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥黒褐釉、高台無釉		
8340 249 106	陶器 碗 底部	Eh30g		①ロクロ成形 ②高台無釉 ④やや密(淡黄色) ⑤酸化焰・良好 ⑥内面に黒褐釉		瀬戸美濃系
8341 249 106	陶器 碗 底部	Er26g04		①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ④やや密(灰白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥内面灰釉、外面黒褐釉		瀬戸美濃系18c (尾台か)
8342 249 106	陶器 丸碗 底部	Eh30g		①ロクロ成形 ②高台裏施釉 ④精選・密(灰白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉		瀬戸美濃系18c
8343 249 106	陶器 碗 底部	Eh29g		①ロクロ成形 ②削り出し高台・無釉 ④精選・密(淡黄色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉	京焼風	肥前系
8344 249 106	陶器 碗 底部	Ej31g01		①ロクロ成形 ②高台削出・高台裏無釉 ④精選・緻密(灰白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉	高台裏窯印	
8345 249 108	陶器・施釉 鉢 底部	E区		①ロクロ成形 ②高台削出 ④精選・密(暗赤褐色) ⑤外：褐釉、内：灰釉刷毛塗	やや大型の盤形か	肥前系唐津
8346 249 106	磁器・染付 丸碗 底部	E区		①ロクロ成形 ②高台施釉 ④精選・密(灰白色) ⑥雪輪梅掛文か、高台外：二重圏線高台裏「渦福」か、具須は明るい青灰色		肥前系18c中頃
8347 249 106	磁器・染付 丸碗 底部	Eg25g	③ 30	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ④精選(灰白色) ⑥外下半・高台際に圏線、具須は青白色に発色(やや良)		肥前系18c代
8348 249 106	磁器・染付 丸碗 口～底部	Ek19g01		①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ③白色 ④精選 ⑤良好		肥前系
8349 249 106	磁器・染付 筒形碗 底部	Ey18g		①ロクロ成形 ②高台削り出し ③白色 ④精選 ⑤良好 ⑥筒型 ⑦見込み五弁花手描、体部外面菊花文		肥前系18c末 ～1810代

第27表 前原調査区出土銭貨一覧

遺物番号	挿図	写真	出土区域	遺構名称	グリッド	銭貨銘	読順	材質	外径	内径	孔	重量	書体	特徴・初鋳造年・備考
6061	248	108	D区農道東		Dq23g	寛永通寶	対読	銅	22	18	7	2.4	楷書	
6062	248	108	E区県道東	屋敷跡東方	Dv34g02	寛永通寶	対読	銅	24	20	6	3.9	楷書	
6063	248	108	E区県道東	屋敷跡東方	Dw33g05	寛永通寶	対読	銅	27	21	7	4.2	楷書	新寛永(明和4年)、裏青海波
6064	248	108	E区県道東	屋敷跡東方	Dw33g04	寛永通寶	対読	銅	24	20	6	2.4	楷書	
6065	250	108	E区県道東	道路跡付近	Eb19	元豊通寶	順読	銅	23	18	6	2.8	楷書	宋(神宗)元豊元年(1078)
6066	250	108	E区県道東	屋敷跡付近	Ec33g09	開元通寶	対読	銅	23	20	7	2.4	楷書	唐(高祖)武徳4年(621)
6067	250	108	E区県道東	屋敷跡付近	Eh33g01	??通寶	対読	銅	24	19	7	1.7		

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

《遺物分布の状況》

上谷戸調査区は、藤岡市と吉井町との境をなす丘陵から北東にのびた尾根の南東斜面・裾部に位置している。この尾根は美濃山と呼ばれており、藤岡市教育委員会の詳細遺跡分布調査により縄文土器・土師器・須恵器等の散布が知られており、平井地区No14遺跡として縄文及び古墳～平安時代の包蔵地として周知されている。また、上谷戸の字名はこの尾根の南、不動池からの沢にちなむもので「谷戸」のルビは「ガイト」である。古い地名には「上ヶ谷戸」と記載される例も見られる。

本調査区では先土器・縄文時代の明瞭な遺構は検出されなかったが、縄文土器片や石器などの遺物が少量ながら出土し、生活の痕跡をたどることができる。出土遺物は、胎土に繊維を含む前期前葉から中葉の土器片、中期初頭から末葉の土器片及び後期のものが認められた。

大御堂調査区でのものが中期加曾利E 4式土器を主体としたのに対し、前原・上谷戸調査区においては、前期の関山式から諸磯式土器、中期の五領ヶ台式土器が含まれており、周辺に該期の集落の存在が予想される。上谷戸調査区が丘陵斜面部から裾部にかけて調査されていることを考慮すると、丘陵尾根部から斜面部にかけて集落が想定される。

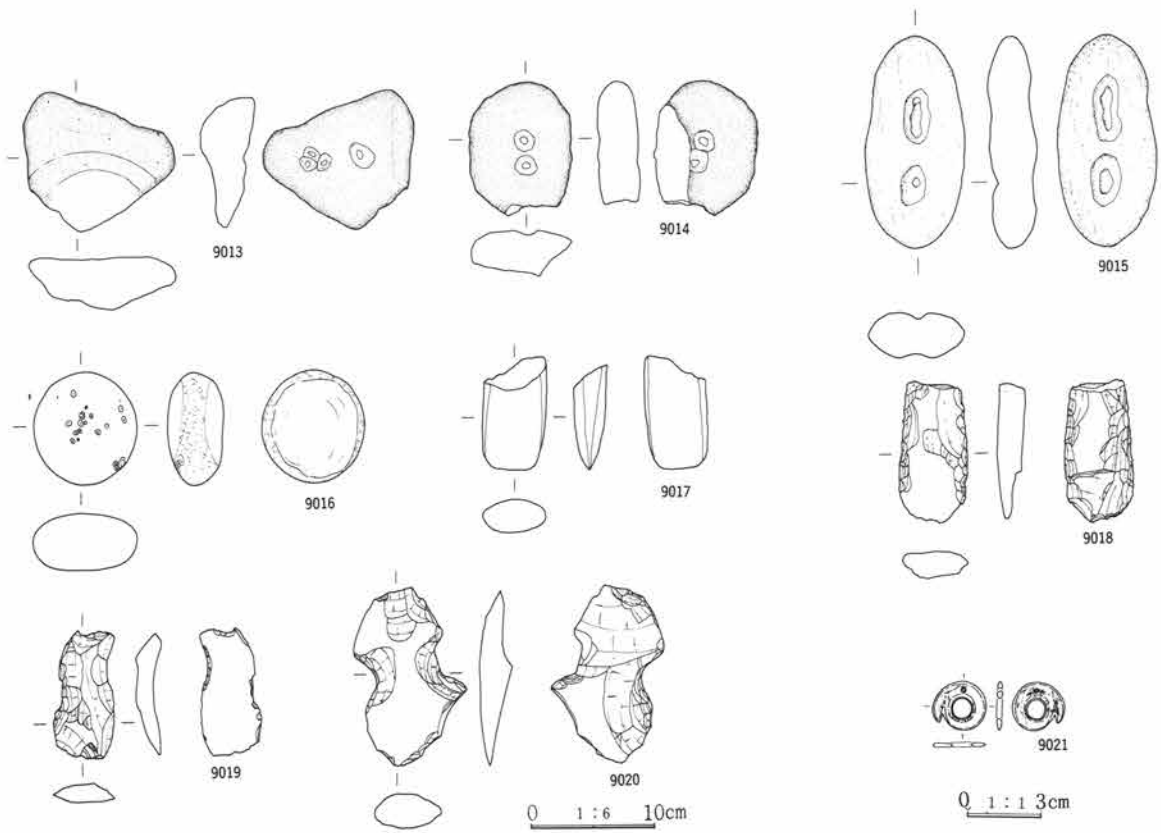
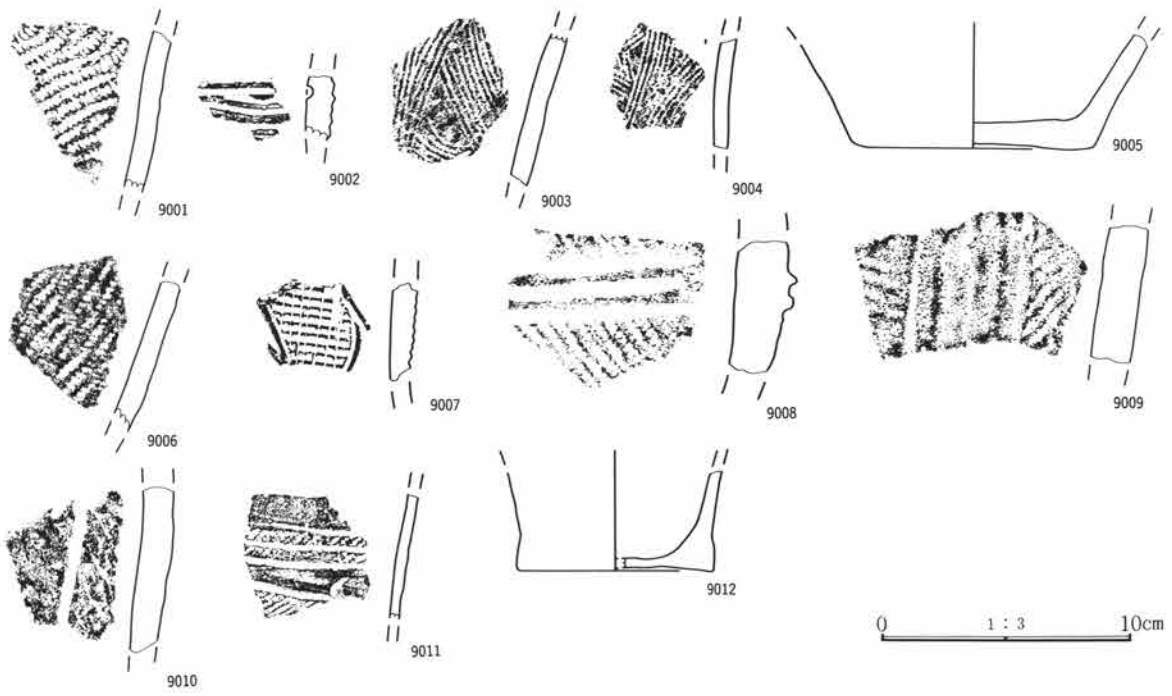
上谷戸調査区で出土した縄文時代の遺物のなかで、特記すべき遺物として、9021のいわゆる「の」の字状垂飾品がある。石材は蛇紋岩で、器体上部と中央部の2カ所に穿孔部を持ち、径は器体上部が3mm、中央部が16mmである。大きさは長径43mm、短径37mm、厚さ2.5mm、重量5gで、表裏両面にわたり非常に良く研磨されて仕上げられており、器体及び出土遺物実測図穿孔部周辺は稜を形成し、両方向からの穿孔が行われている。中央部の穿孔は2段階にわたり行われることが観察される。本資料も表採であるために得られる情報が乏しいが、類例資料が縄文時代前期から中期にかけての時期の遺物と共伴することが知られており、本資料の年代もこれと同じ時期と推定される。⁽¹⁾

本資料の類例は、東京都八丈島倉輪遺跡⁽¹⁾、富山県立山町天林北遺跡⁽²⁾での出土が知られており、いずれも蛇紋岩製であり、形状・加工方法も酷似して何らかの関連性を持つものと考えられる。(菊池実 関口博幸)

(1) 藤田富士夫『玉』考古学ライブラリー52、1989、ニューサイエンス社

(2) 同上

第1節 縄文時代の遺構と遺物



第251図 上谷戸調査区出土遺物実測図(1)―縄文土器・石器―

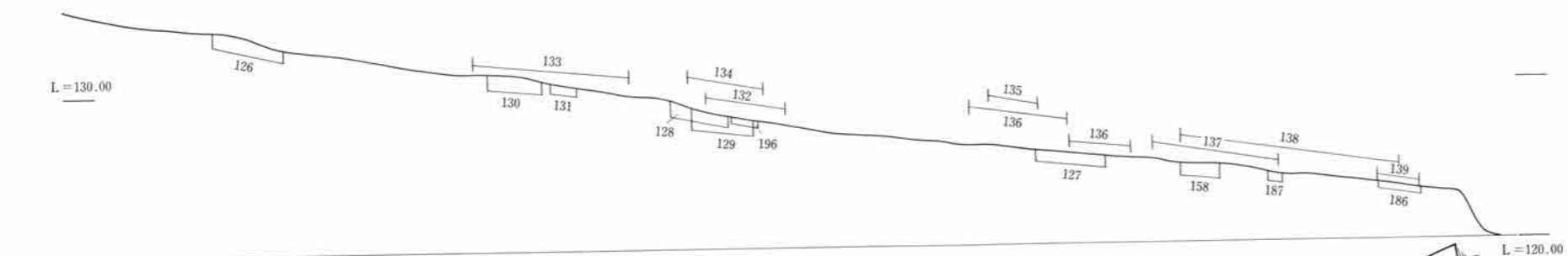
第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

第28表 上谷戸調査区出土遺物観察表(1)―縄文土器―

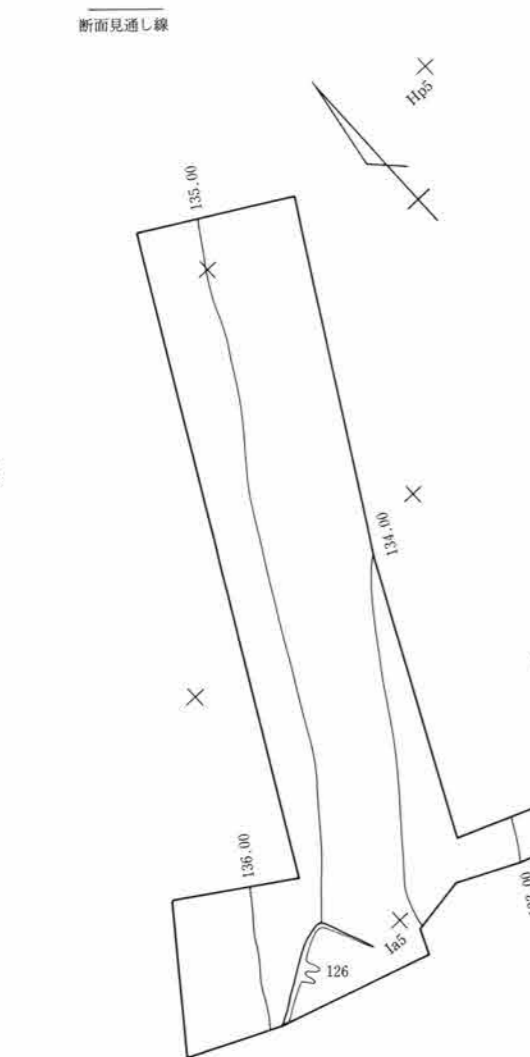
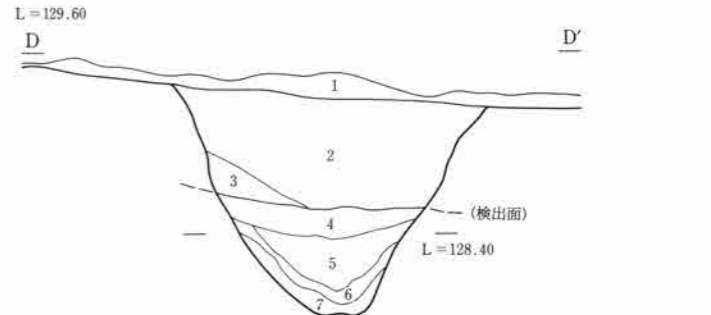
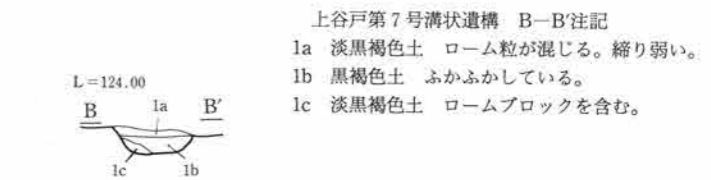
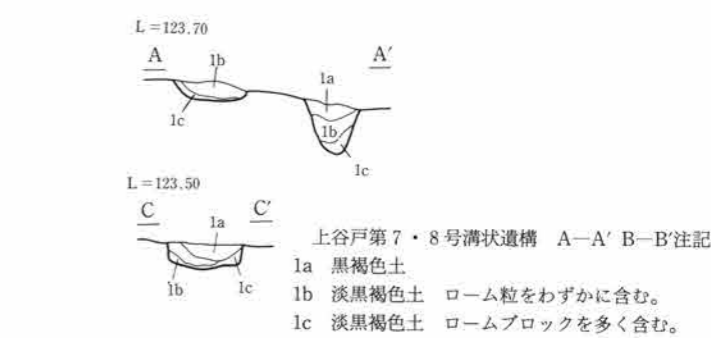
遺物番号 挿図番号 写真図版	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
9001 251 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 繊維を含む ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面色調はにぶい赤褐色、内面は赤褐色。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段3条)。 前期前葉関山式土器。	Gd-18g
9002 251 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 繊維を含む ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	半截竹管による平行沈線が施されている。 前期中葉有尾系土器。	Gc-10g
9003 251 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は荒れている。 内外面の色調はにぶい褐色。	半截竹管を櫛状に束ねた原体による集合沈線 が施されている。 前期後半諸磯式土器。	Gi-18g
9004 251 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚5~6mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	半截竹管を櫛状に束ねた原体による集合沈線 が施されている。 前期後半諸磯式土器。	Gb-16g
9005 251 —	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径9.6cm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 横転がし。 中期。	Gd-16g
9006 251 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。 中期前半。	Gf-18g
9007 251 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	細沈線による格子目文が施され、半截竹管に よる平行沈線によって小区画文が配される。 中期五領ヶ台式土器。	Gk-18g
9008 251 —	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚16~20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	口縁部に隆帯による楕円等の文様を描き、縄 文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。 中期加曾利E3式土器。	G一括
9009 251 —	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚15~16mm。 内面は横方向の調整。荒れている。 外面色調はにぶい黄褐色、内面にぶい褐色。	断面三角形の隆帯を垂下。 縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。 中期加曾利E3式土器。	Gd-19g
9010 251 —	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の調整。荒れている。 内外面の色調はにぶい褐色。	沈線を垂下。縄文施文。原体は不明。 内面に炭化物が付着している。 中期加曾利E3式土器。	Gs-15g
9011 251 —	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚4~5mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は灰褐色。	3条の平行沈線による充填縄文帯を数帯重畳 する胴部片。縄文原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。 後期加曾利B1式土器。	Gm-8g
9012 251 —	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径8cm。 内面はミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	後期。	Go-6g

第28表 上谷戸調査区出土遺物観察表(2)―縄文・石器―

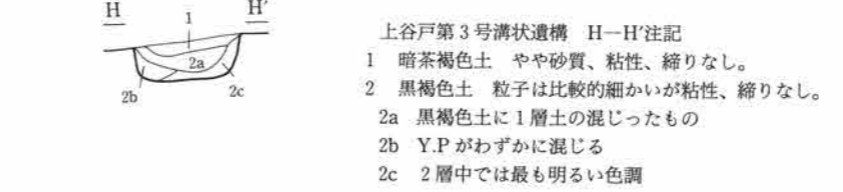
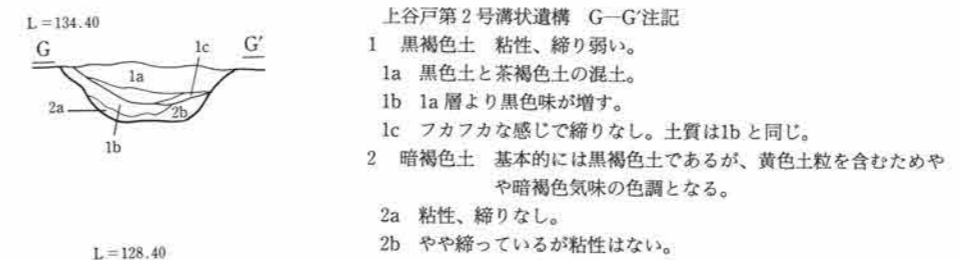
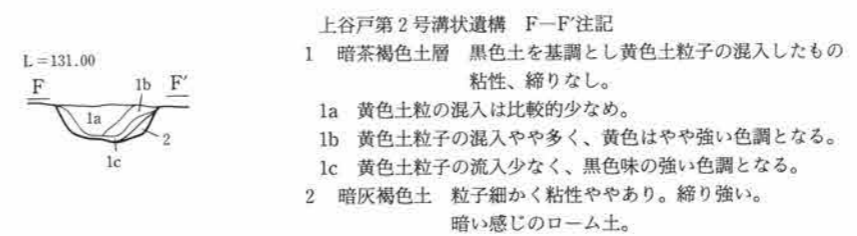
遺物番号 挿図・写真	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g) 全長 幅 厚 重量	特 徴	出土状況
9013 251・109	石皿	破片	安山岩	(11.0)(12.5) 4.0 (527)	裏面に4個の凹みがある。	Gs-18g
9014 251・109	凹石	1/2	輝緑岩	(9.8)(8.0) 3.0 (489)	両面に4個の凹みがある。凹みの平均は長径18 mm、短径17mm、深さ3mm。一部焼けている。	G区一括
9015 251・109	凹石	完形	点紋緑泥片岩	16.4 7.6 3.4 850	両面に4個の凹みがある。凹みの平均は長径41 mm、短径20mm、深さ4mmである。	Gd-3g
9016 251・109	たたき石	完形	輝緑岩	8.7 8.0 4.5 605	敲打痕と磨耗痕が認められる。	Hg-6g
9017 251・109	磨製石斧	1/2	輝緑岩	(8.8) 4.9 2.5 (199)	磨き段階。	Hj-5g
9018 251・109	打製石斧	基部欠損	輝緑岩	(10.5) 5.3 2.0 (198)	短冊型。	Gk-5g
9019 251・109	打製石斧	完形	熱変成岩	10.0 4.8 1.3 99	バチ型。	Gd-10g
9020 251・109	打製石斧	完形	熱変成岩	14.0 8.6 2.5 381	分銅型。	Ge-3g



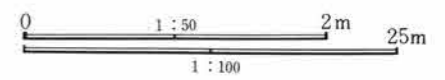
遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
132	上谷戸第1号溝状遺構(HD10)	Hh·Hi-1~2g
133	上谷戸第2号溝状遺構(HD9)	Hn·Ho-00~2g
134	上谷戸第3号溝状遺構(HD11)	Hn~Hp-05~06g
135	上谷戸第4号溝状遺構(HD4)	Hd~Hf-00~04g
136	上谷戸第5号溝状遺構(HD5)	Hd-03~04g
137	上谷戸第6号溝状遺構(HD8)	Gy-01~04g
138	上谷戸第7号溝状遺構(HD6)	Gv~Hb-03~04g
139	上谷戸第8号溝状遺構(HD7)	Gu·Gv-04~05g
158	上谷戸第2号井戸跡(HE1)	Gy·Ha-02~03g
186	上谷戸第28号土坑(HK7)	Gt-03g
187	上谷戸第29号土坑(HK11)	Gv-02g
196	上谷戸第38号土坑(HK8)	Hm-05g



遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
126	上谷戸第1号竪穴住居跡(HJ6)	Ia~Ic-04g
127	上谷戸第2号竪穴住居跡(HJ1)	Hc·Hd-02~03g
128	上谷戸第3号竪穴住居跡(HJ2)	Hk·Hl-00~01g
129	上谷戸第4号竪穴住居跡(HJ3)	Hi·Hm-02~03g
130	上谷戸第5号竪穴住居跡(HJ4)	Hi·Hm-04g
131	上谷戸第1号集石遺構	Hr-03g



第252図 上谷戸調査区斜面部遺構全体図



*遺構名称は遺構番号で明示

第2節 古墳～平安時代の遺構と遺物

1 遺構の分布（第252図、写真図版51・52・53）

古墳時代より平安時代にかけての遺構は、当初の調査予定地には入っていなかった丘陵斜面部で竪穴住居跡5軒と古墳の周溝と考えられる溝状遺構1条を検出した。美濃山から北東にのびる丘陵尾根の東南に面す斜面にあり、遺構の分布する斜面は13/100の勾配で、調査区内の標高は120～143mである。この丘陵尾根は藤岡市教育委員会の遺跡分布調査で平井地区No14遺跡として周知されていたところであり、土器片等の遺物散布が確認されている。

この丘陵斜面部の調査は、上谷戸調査区の平坦部（F・G・H区）の全容が明らかとなった段階の昭和63年12月に平坦面際の表土掘削を行い、平成元年1月から斜面部に試掘トレンチを設定し、遺構確認を実施した。路線内での尾根頂部の標高は143mで、南東側斜面について10mに1本の割合でトレンチを入れ、遺構・遺物の検出を行った。斜面部と平坦部との境は標高123m～125mにあり、裾部から中腹にかけては竪穴住居跡・溝状遺構・土坑等が検出され、標高132m付近までは全面的に表土掘削を実施した。また、標高132m～143mまでの頂部から中腹にかけては数カ所でトレンチを拡張したが遺構・遺物の包蔵を明瞭に確認できず、約30%の試掘に停どめた。

竪穴住居跡は5軒検出した。古墳時代の住居跡が2軒（上谷戸第1号・第2号竪穴住居跡）、平安時代の住居跡が3軒（上谷戸第3号～第5号竪穴住居跡）である。また、弧を描く溝状遺構が1条検出されたが、形状・埋土の観察から古墳の周溝の残存とみられる。この他には集石遺構を1基検出した。（綿貫鋭次郎）

2 遺構

(1) 上谷戸第1号竪穴住居跡（第253図～第257図、写真図版51・110）

本遺構は、丘陵斜面の中程、標高135mのIa～Ic-04・05グリッドで検出した。上谷戸調査区で検出した遺構の中では最も西に位置し、標高も最も高い。住居の南半が路線外となるため全掘はできず、丘陵の裾に近い斜面に位置するため、ヤトに面した南半については削平を受けていて遺構の残存状況はあまり良好とは言えず、全体の1/3程度の調査である。

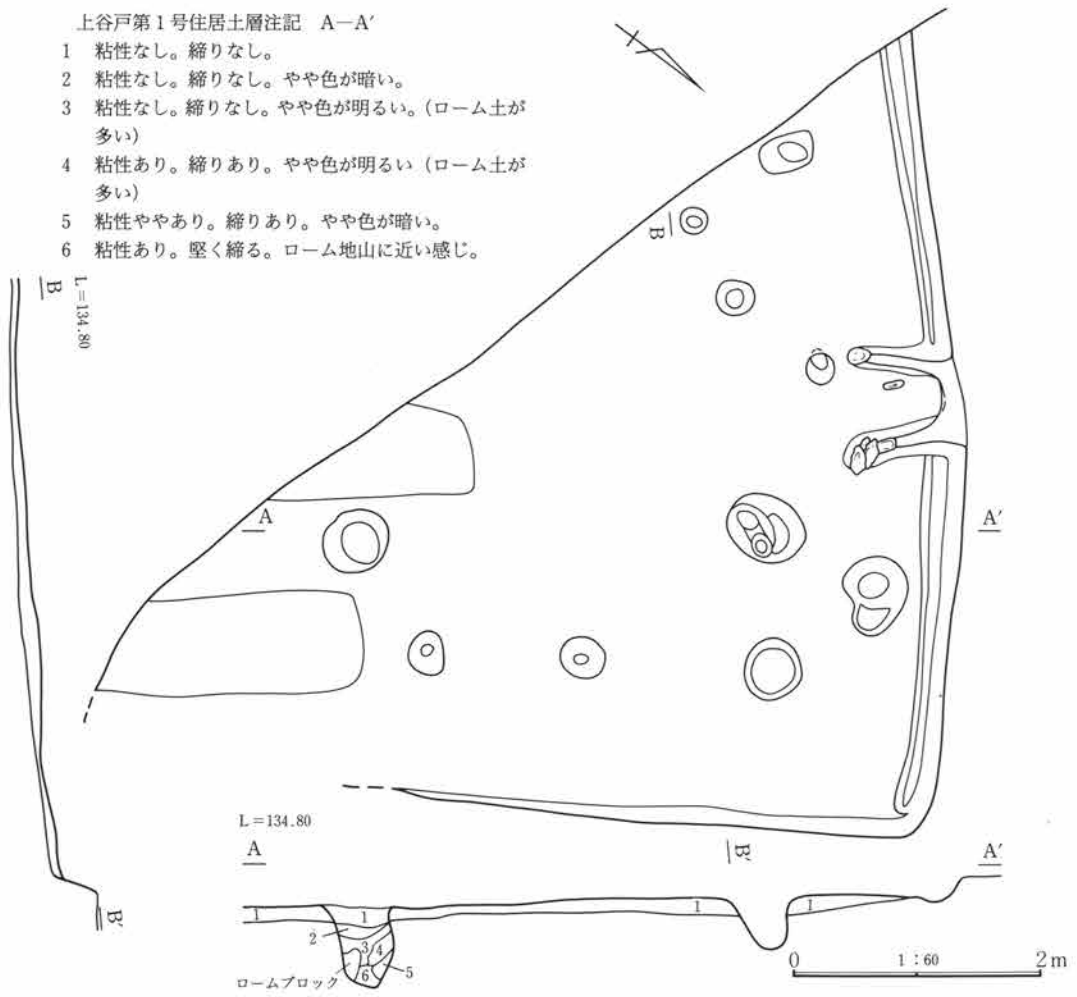
平面プランは方形（一辺6m程か）で北にカマドをもつ。カマドを中心とした住居主軸方向はN-30°-Wで、これは斜面の傾斜方向に符合する。確認された壁高は斜面上位の北壁で40～45cm、東壁では傾斜に合わせて徐々に削られ、北東コーナーから約4.5mで壁高が確認できなくなる。床面は住居北東の一角でロームの貼り床を確認したのみで、北壁際では床面下2～3cmの壁溝も検出された。東壁際での壁溝は検出されず、床面の大部分は残存していなかった。また、住居に伴う柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。

カマドは住居の北壁中央に造り付けて築かれ、カマド規模は右袖長70cm、左袖長80cm、焚口部幅50cm、燃焼部奥幅25cm、煙道入口部幅20cmで煙道は確認できなかった。袖芯・支脚等は石材が使用されていた。右袖石は長さ46cm、幅12cm～18cmの結晶片岩系の棒状の円礫が立位で下半が埋められていた。左袖石には径20cm、厚さ10cmの砂岩の角礫3個が平らに載せられている。支脚には長さ30cm、径8cm×5cmの結晶片岩系の棒状の円礫が約45°の傾斜角で埋められていた。また、焚き口部には焼けて非常に脆い板状の砂岩質の礫（25cm×35cm×10cm）が横たわっていた。天井石の崩落したものである。炭化物・灰層は確認されなかったが、焼土化した火床面が確認された。

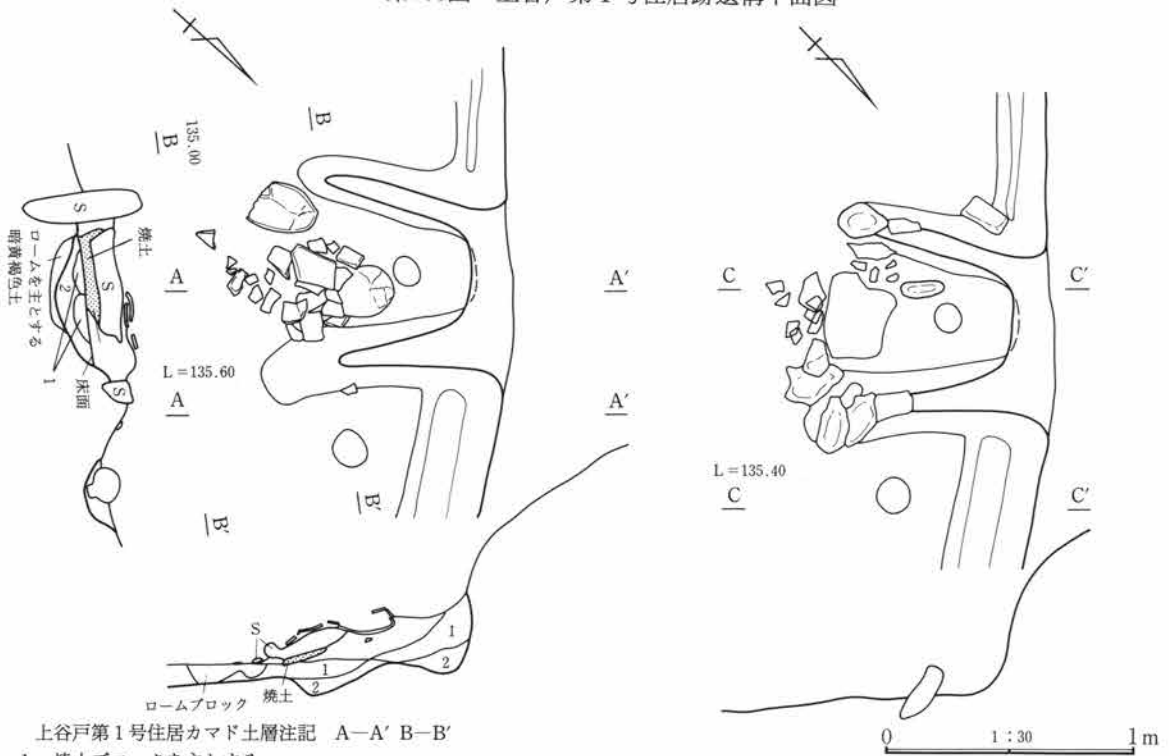
第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

上谷戸第1号住居土層注記 A-A'

- 1 粘性なし。縮りなし。
- 2 粘性なし。縮りなし。やや色が暗い。
- 3 粘性なし。縮りなし。やや色が明るい。(ローム土が多い)
- 4 粘性あり。縮りあり。やや色が明るい(ローム土が多い)
- 5 粘性ややあり。縮りあり。やや色が暗い。
- 6 粘性あり。強く縮る。ローム地山に近い感じ。



第253図 上谷戸第1号住居跡遺構平面図

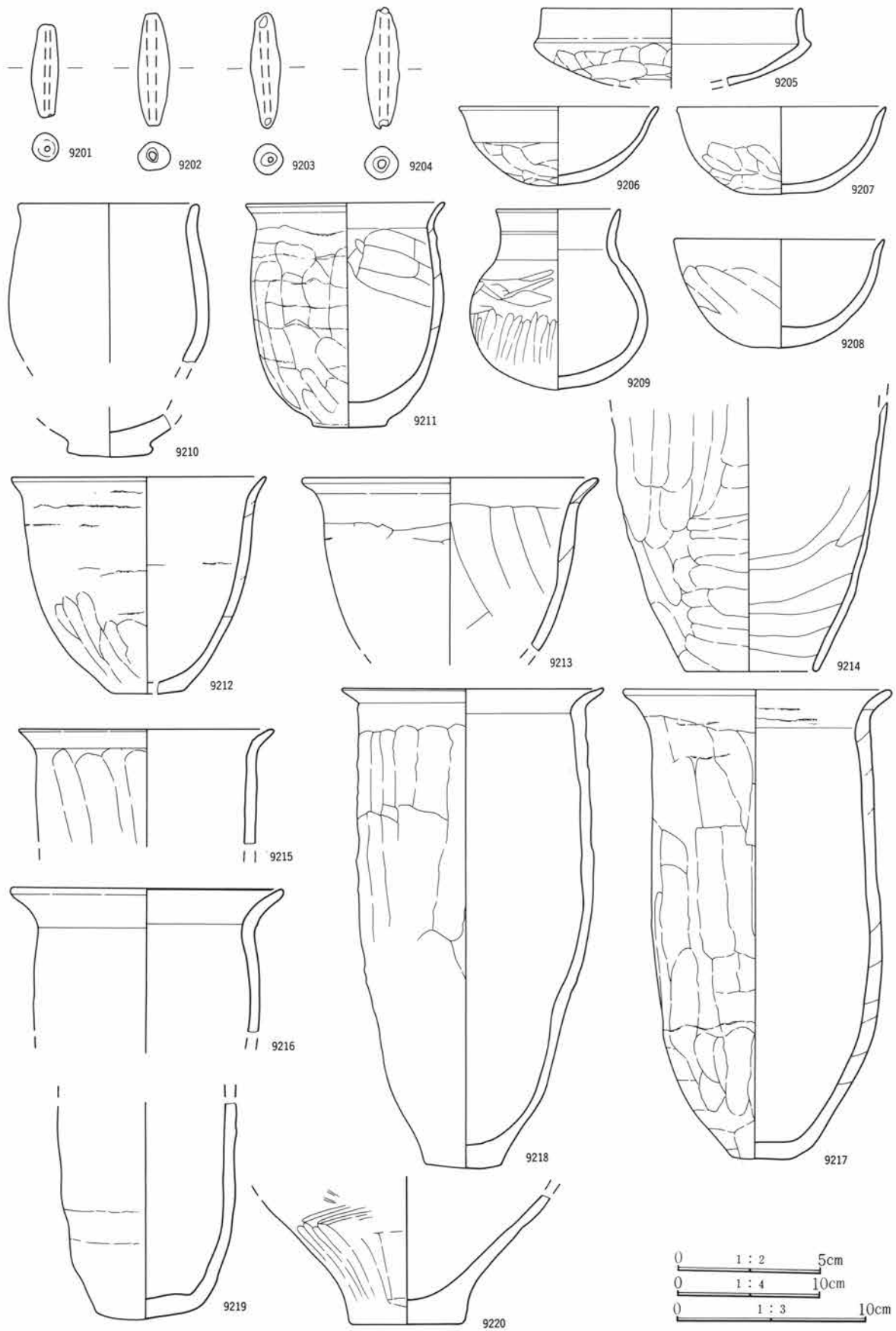


上谷戸第1号住居カマド土層注記 A-A' B-B' C-C'

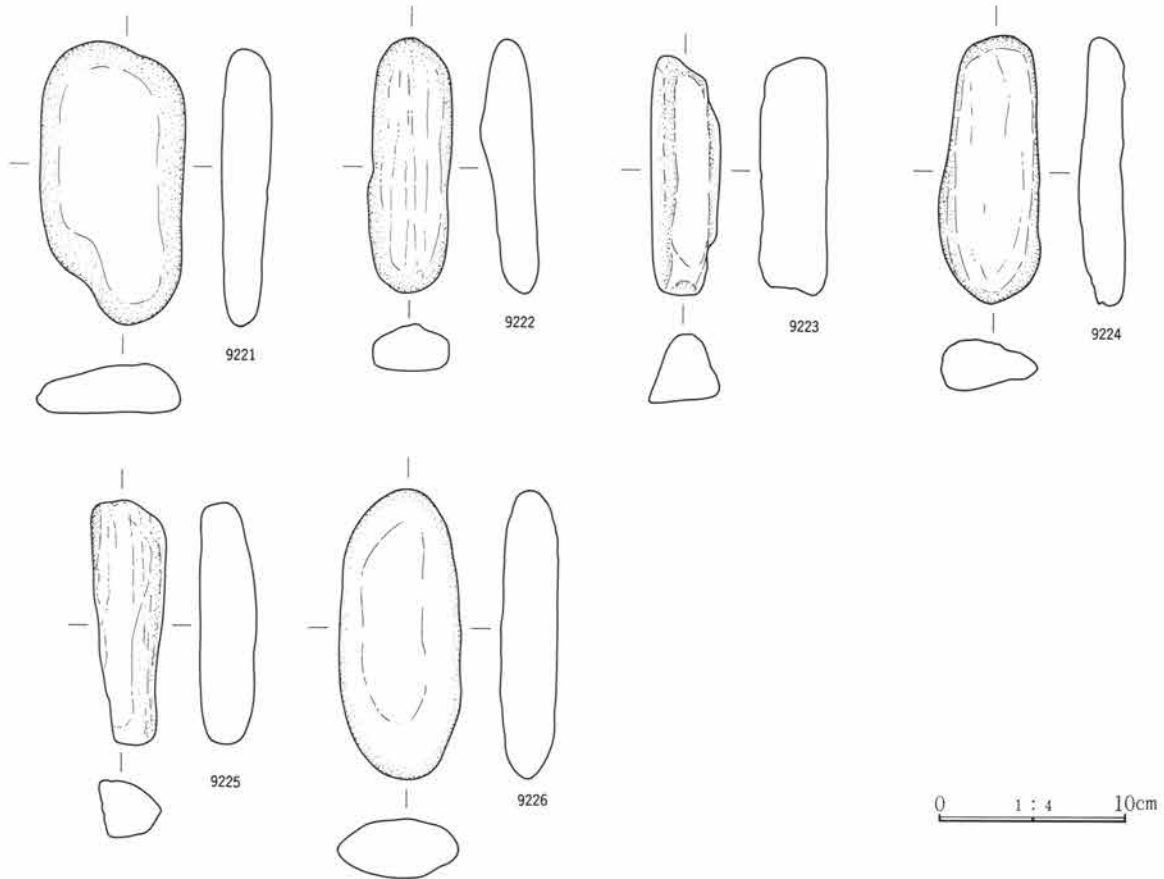
- 1 焼土ブロックを主とする。
- 2 焼土まじりの暗褐色土

第254図 上谷戸第1号住居跡カマド平面図

第2節 古墳～平安時代の遺構と遺物



第255図 上谷戸第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第256図 上谷戸第1号住居跡出土遺物実測図(2)

遺物は土師器・土製品等があり、特にカマドとその前面に集中して分布し、残存状況も比較的良好である。器種は長甕・甗・小型甕・小型壺・碗・坏が見られ、この外に、土錘・こも網石が出土している。

本住居跡は6世紀後半代の時期と思われる。

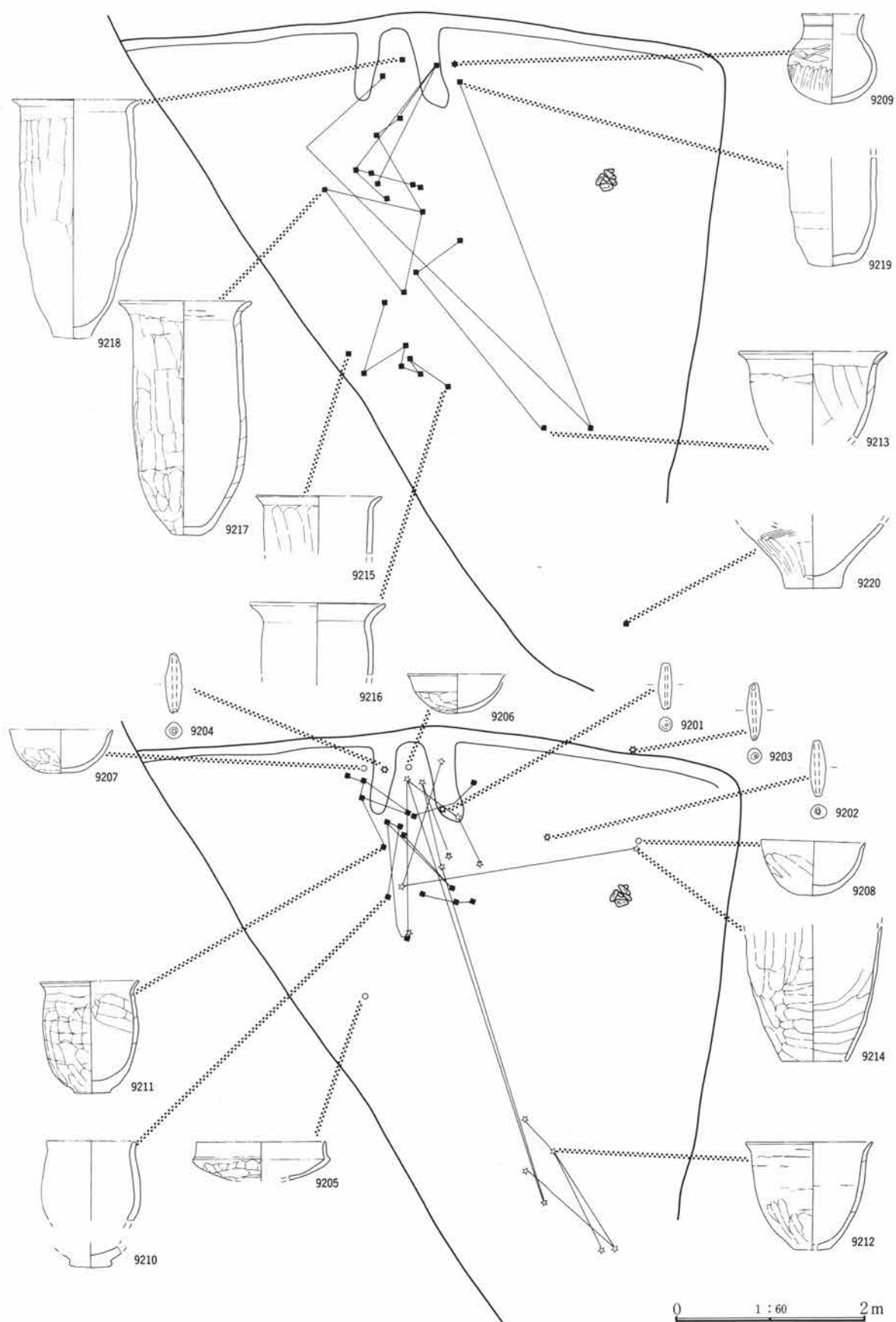
(2) 上谷戸第2号竪穴住居跡(第258図～第261図、写真図版52・110)

本遺構は、検出された住居跡では最も東のHc・Hd-02・03グリッドにあり、確認面標高は125.8mと斜面部では裾に近い低い位置である。いも穴と思われる攪乱土坑が見られるものの残存状況は比較的良好であった。平面形状は1辺3.5m～3.7mのほぼ正方形で、東壁のほぼ中央にカマドがあり、主軸方位はN-69°-Eである。埋土は上下2層が見られ、上層は黒色土、下層は黒色土にロームブロック・小粒子の混じったもので、床面はローム貼り床で顕著な硬化面が認められた。壁高は約25cmを測る。壁溝・柱穴は確認できなかったが、住居北東隅に径96cm×52cm、深さ25cmの楕円形の土坑が検出され、貯蔵穴と認められる。

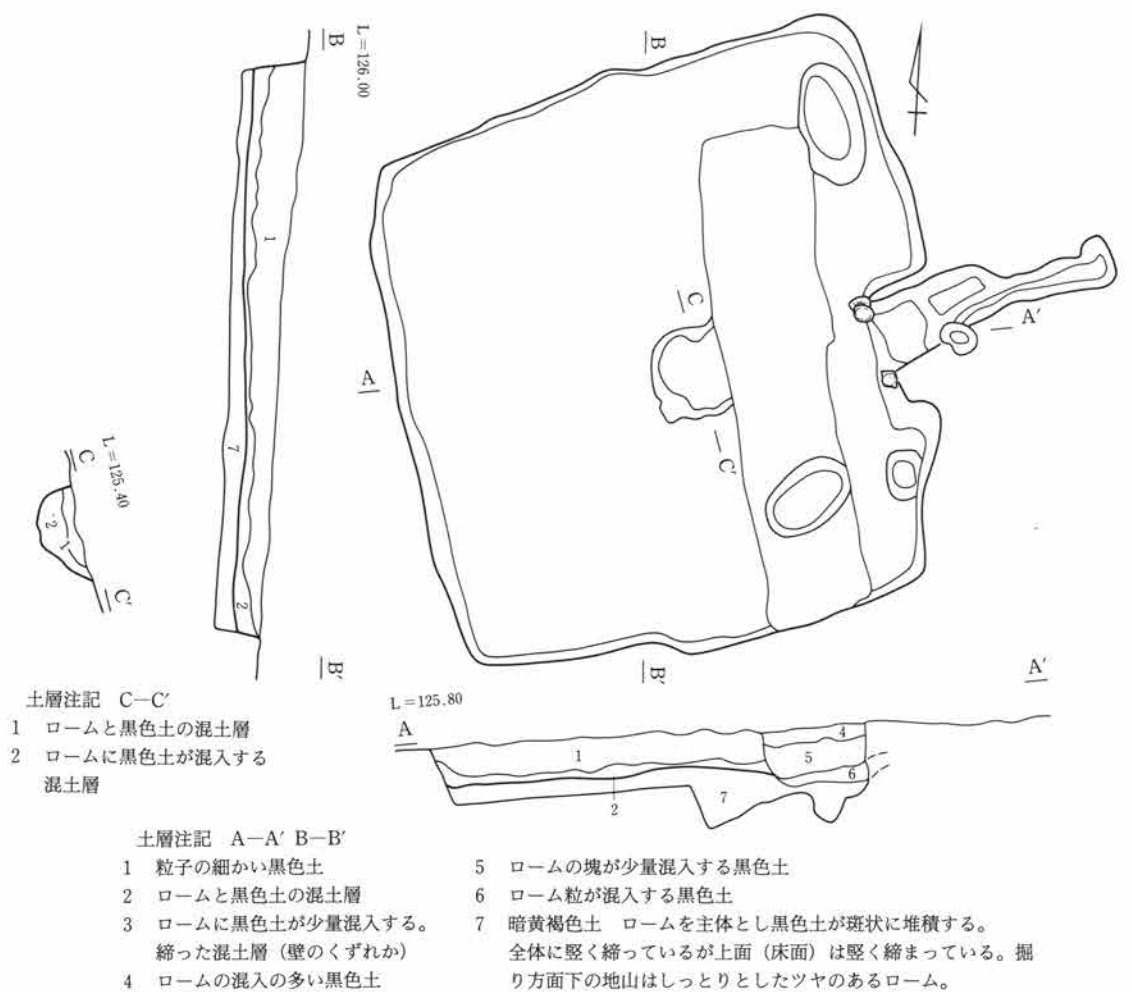
住居掘り方の調査において、住居ほぼ中央に径37cmの円形の土坑を確認したが、いわゆる床下土坑と考えられる。また、いも穴内でも楕円形土坑(76cm×48cm)を確認し、床面下約40cmであり、やはり床下土坑としての可能性が考えられるが、調査において明確には検証できなかった。

カマドは住居東壁のほぼ中央に構築されており、袖部・燃烧部が住居内に、煙道が住居外に伸びているのが確認され、残存状況は比較的良好である。カマド規模は、右袖長が66cm、左袖長は約50cmを確認し、焚き口幅40cm、燃烧部長36cm・奥幅44cm、煙道長140cm、煙道幅20cm～25cmを計測する。また、床面と燃烧部との間に15cm、燃烧部と煙道部との間に10cmの段差が認められる。右袖の芯には再利用の長甕を伏せて立て、左袖芯には砂岩質の角礫を使用している。火床面の焼土化はさほど著しくないが、カマド埋土中に多量の焼土

第2節 古墳～平安時代の遺構と遺物

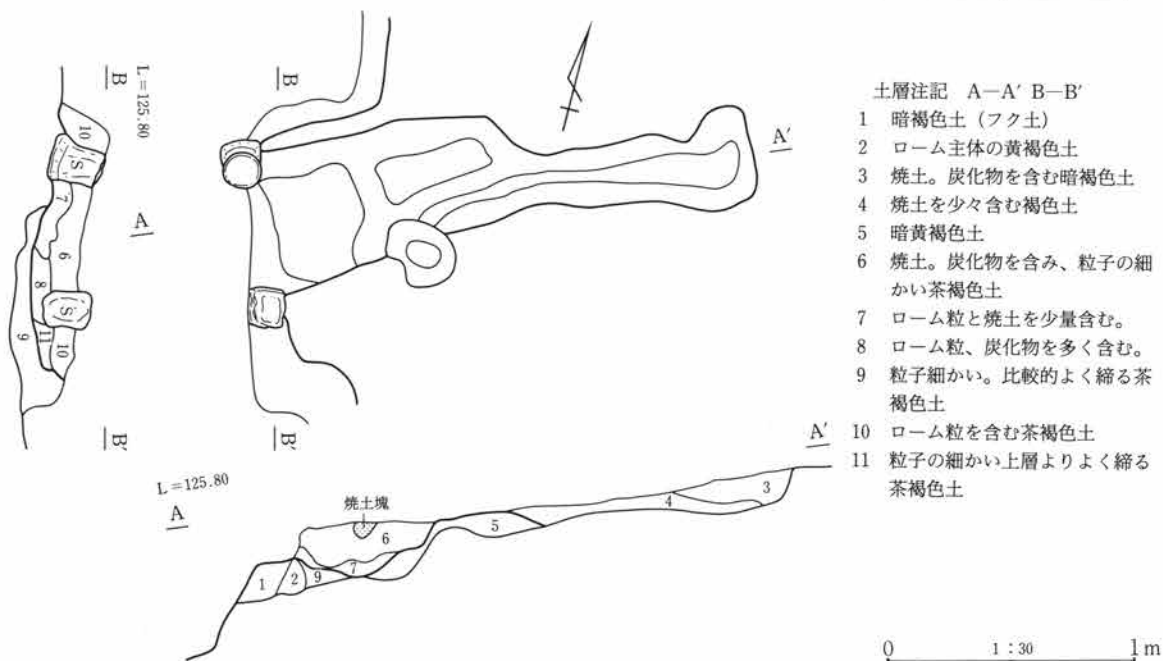


第257図 上谷戸第1号住居跡遺物分布図



第258図 上谷戸第2号住居跡遺構平面図

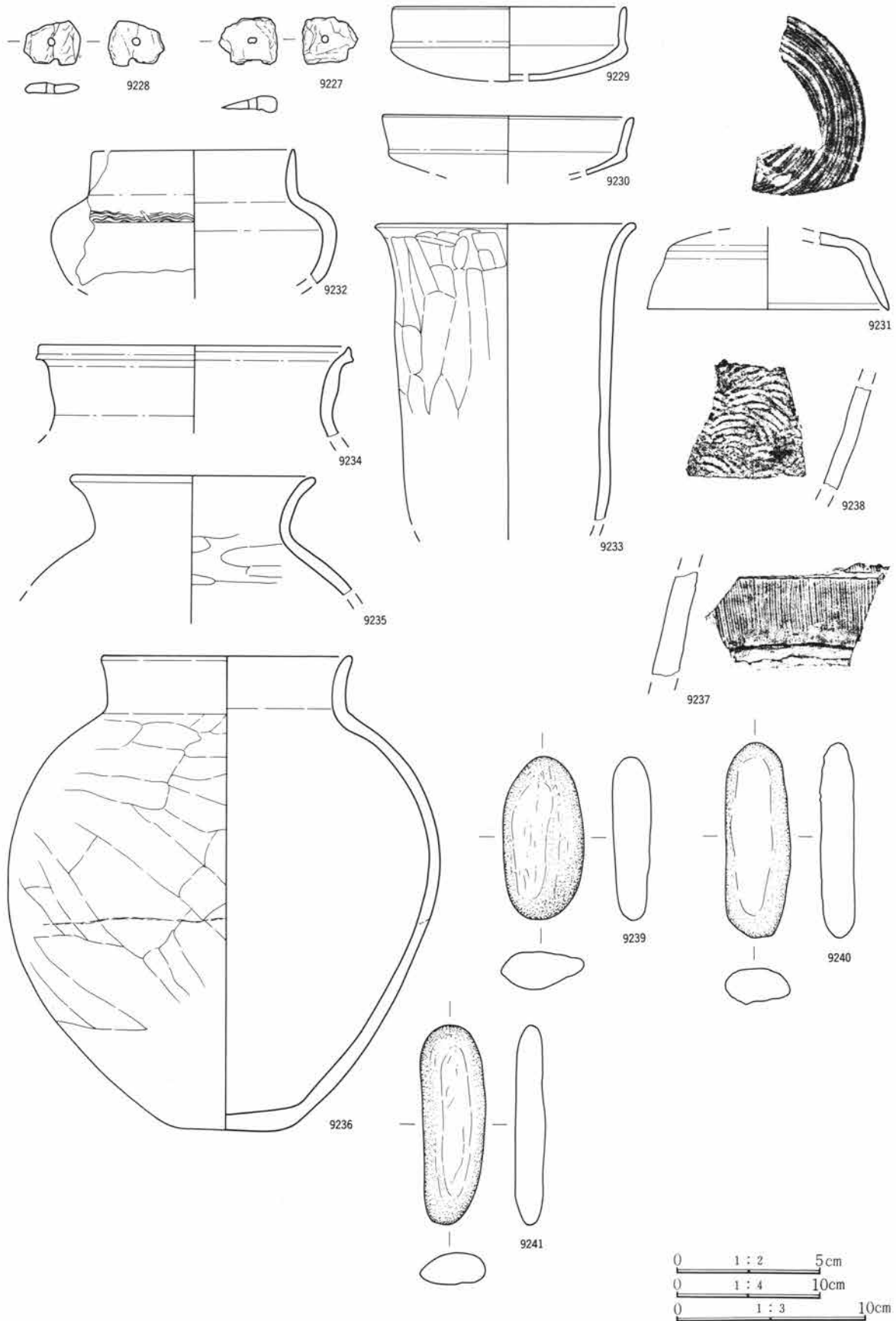
0 1:60 2m



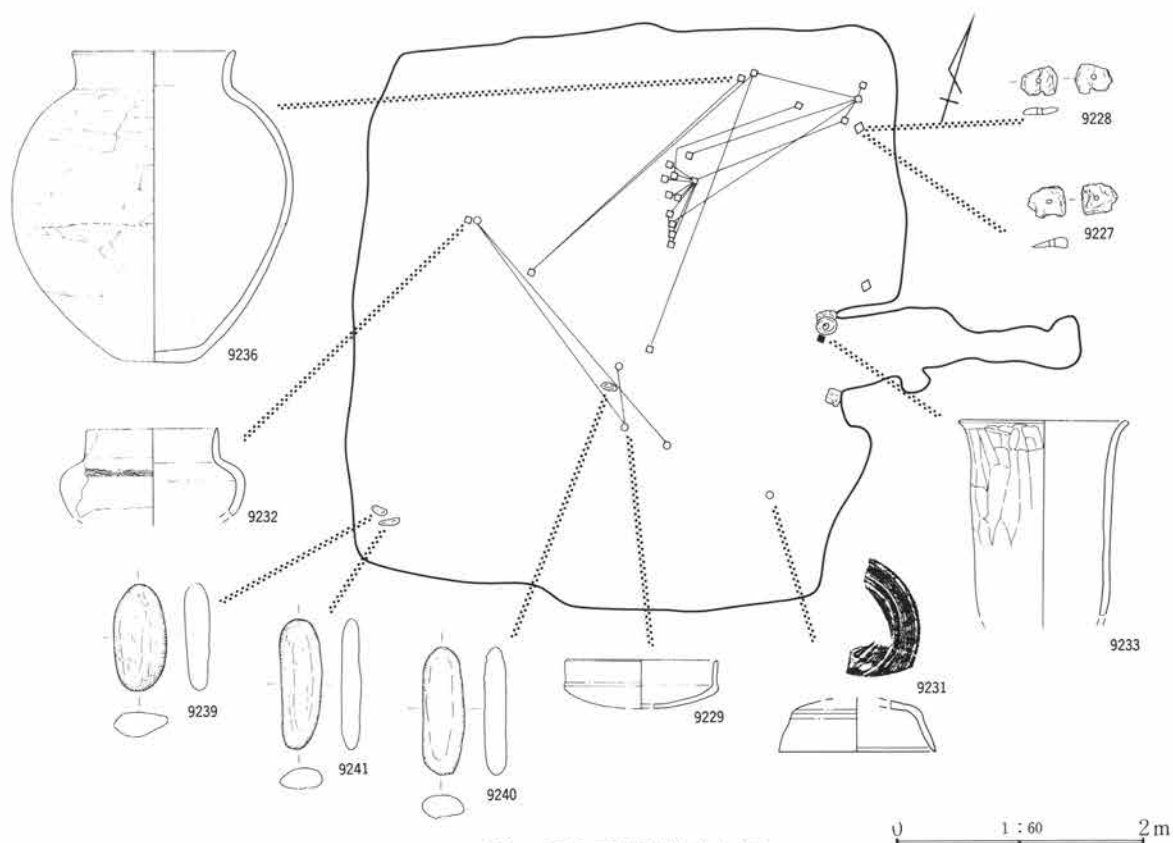
第259図 上谷戸第2号住居跡カマド平面図

0 1:30 1m

第2節 古墳～平安時代の遺構と遺物



第260図 上谷戸第2号住居跡出土遺物実測図



第261図 上谷戸第2号住居跡遺物分布図

粒・焼土ブロックの混入が認められた。カマド内における遺物の出土は見られなかった。

本遺構に伴う遺物はカマド袖芯に転用の長甕の他、土師器が3点、須恵器が1点見られただけである。また、滑石製の有孔円板2点と、こも網石3点が出土している。

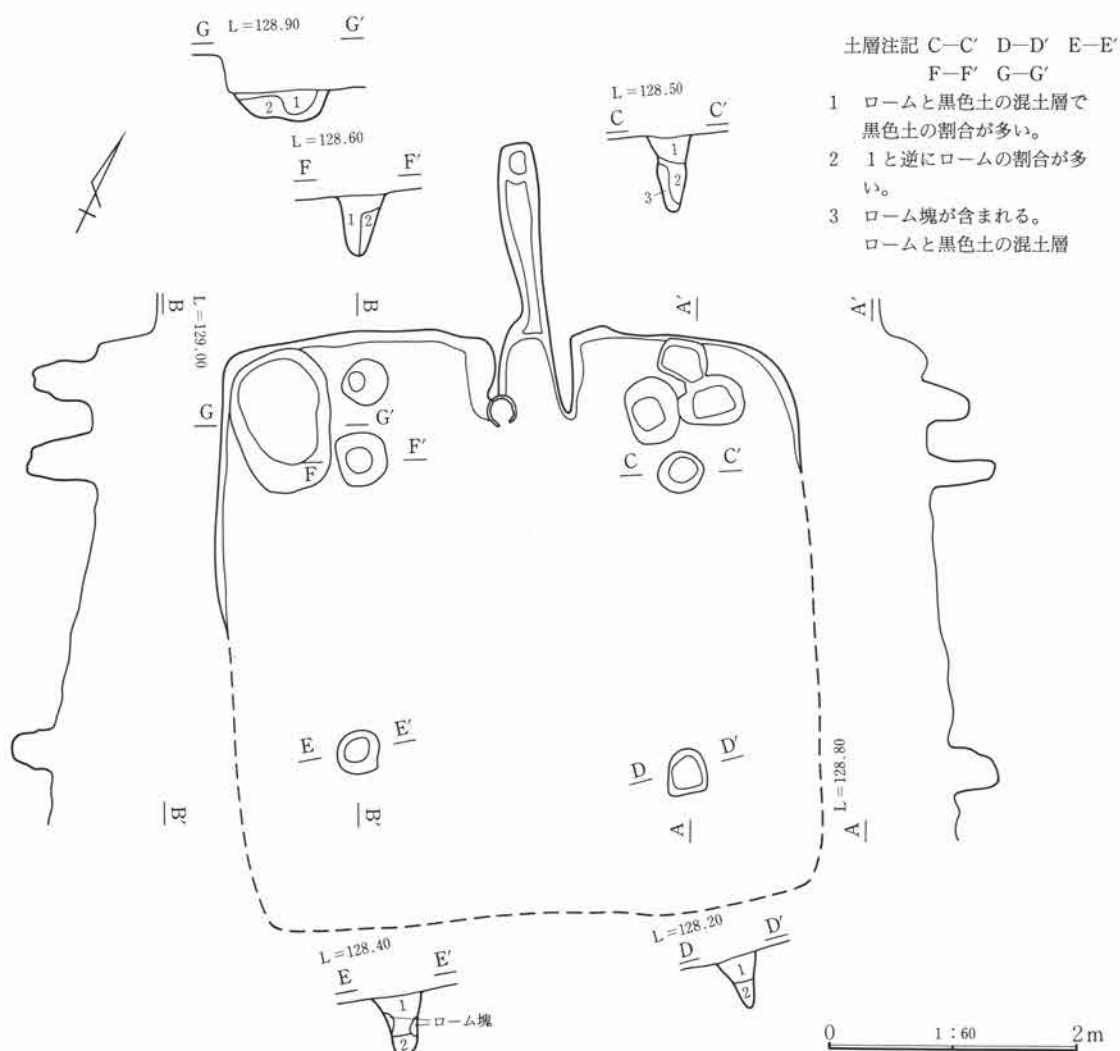
(3) 上谷戸第3号竪穴住居跡 (第262図～第265図、写真図版53・111)

本遺構は斜面部の中程、Hk・H1-00・01グリッドにあり、確認標高は128.90mである。上谷戸第4号住居跡が本住居跡南西に近接して存在する。斜面部にあるため下位レベルの東及び南側は侵食を受け、残存状況は良好とは言えなかったが、柱穴については4個を確認することができ、住居の平面形・規模について推定復元が可能である。平面形は一辺約4.6mの方形で、北壁にカマドを有し、住居の主軸方向はN-29°-Wである。壁高は北西隅で40cmを確認し、北壁に近い部分ではローム貼り床を検出した。埋土には黒色土が見られ、上下2層が確認される。北西隅に貯蔵穴を確認した。長径110cm、短径80cm、深さ23cmの楕円形土坑である。また、北壁際でカマドをはさんで西に1個、東に3個のピットを検出したが性格は不明である。壁溝は認められない。

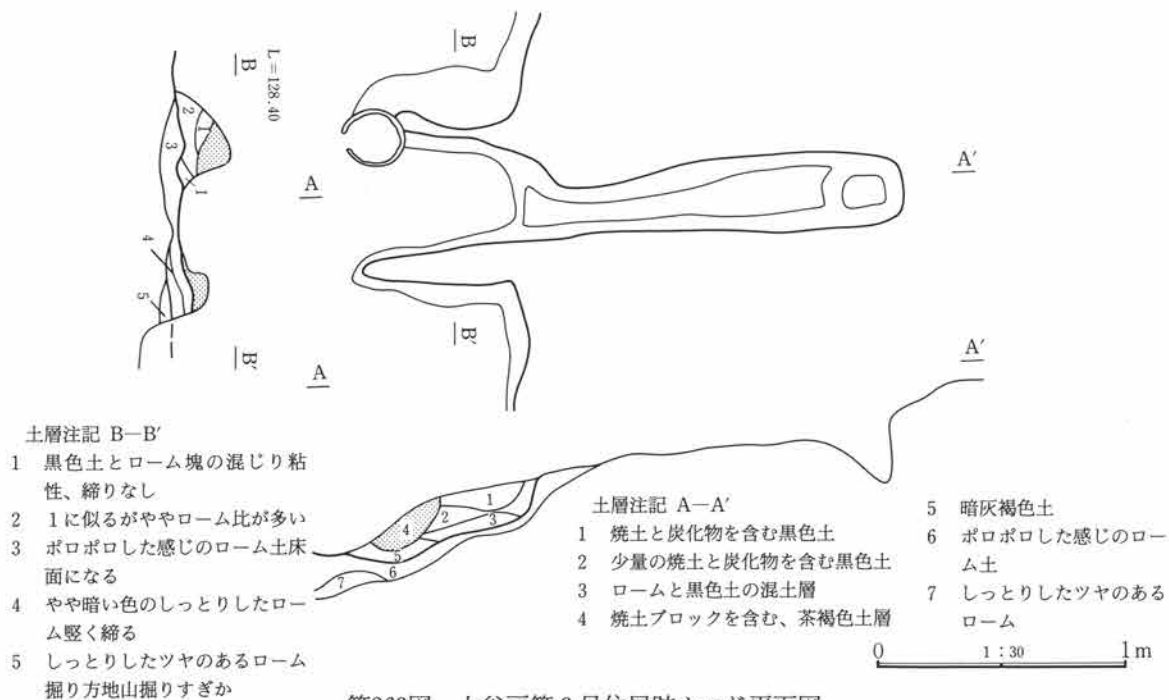
カマドは北壁のほぼ中央に構築され、第2号住居跡同様に袖部・燃烧部を住居内に張り出し、煙道を外に細長くのぼし、残存状況は比較的良好である。カマド規模は、右袖長70cm、左袖長64cm、焼き口部幅48cm、燃烧部長65cm、燃烧部幅25cm、煙道部長152cm、煙道部幅20cm～30cmで、燃烧部の立ち上がりは住居北壁に一致する。右袖先端部には長甕が袖芯に転用されている。火床面・袖部壁面の焼土化は顕著に認められた。支脚等は確認されなかった。

本遺構に伴う遺物は、北西隅・貯蔵穴付近に集中しており、全て土師器である。器種は坏が7点、長甕の底部片が2点確認された。他に滑石製白玉1点とこも網石4点が出土している。

第2節 古墳～平安時代の遺構と遺物

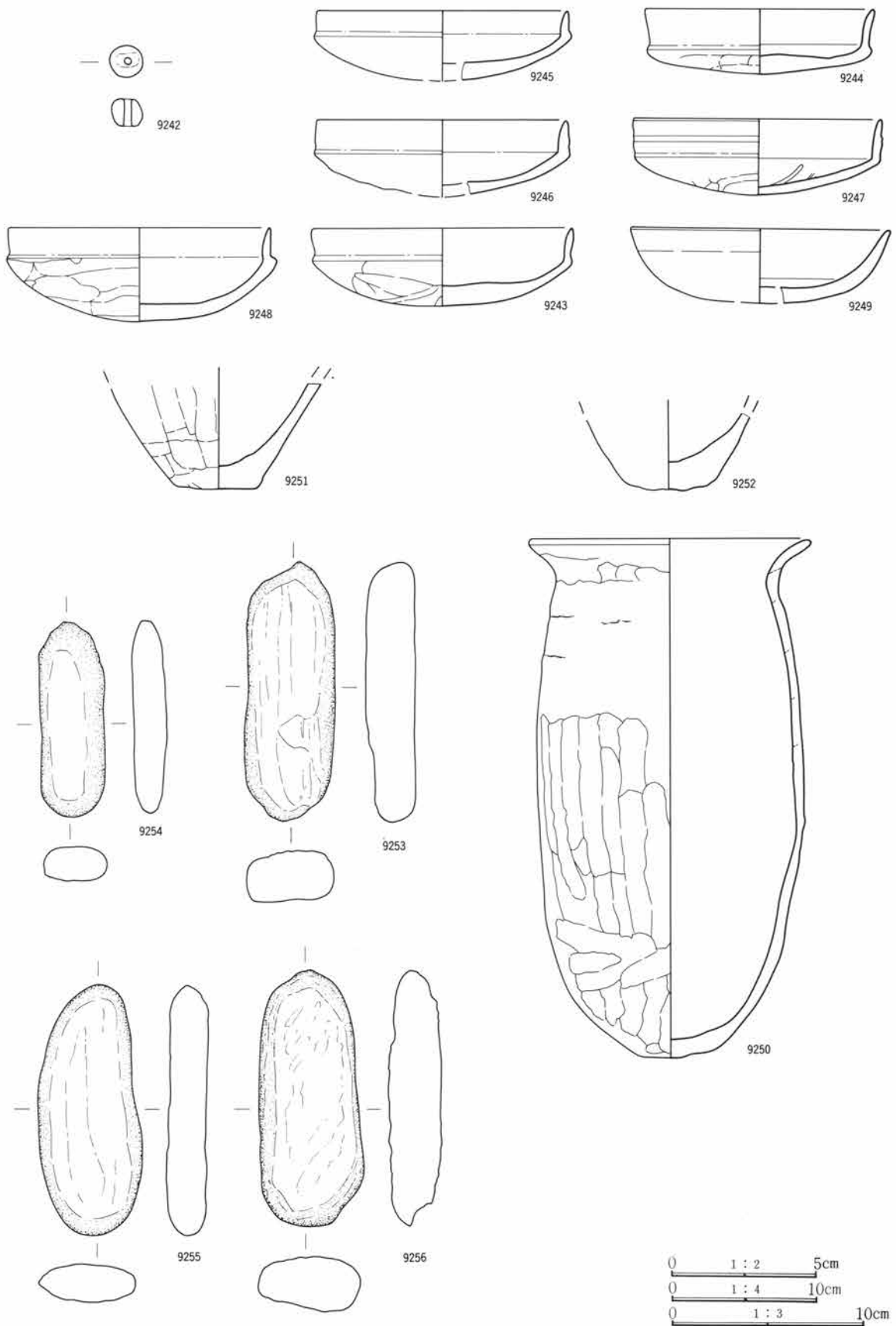


第262図 上谷戸第3号住居跡遺構平面図

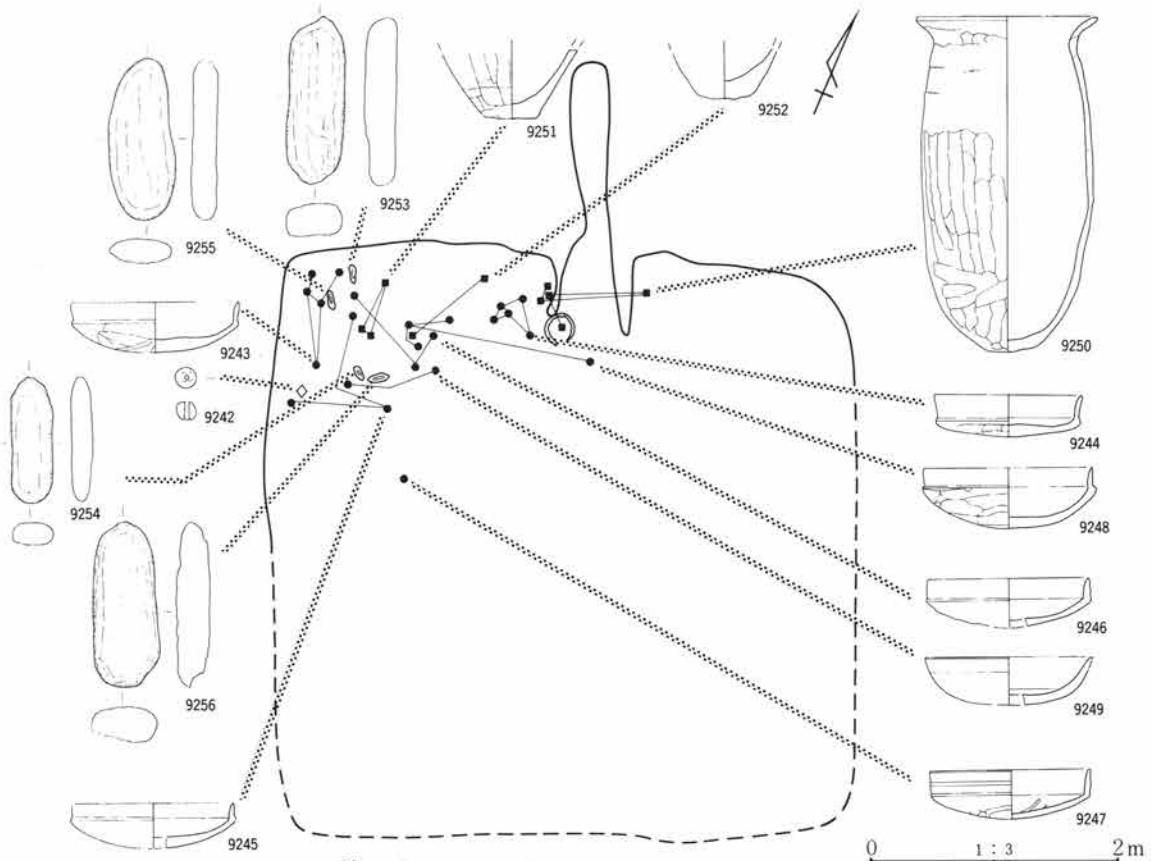


第263図 上谷戸第3号住居跡カマド平面図

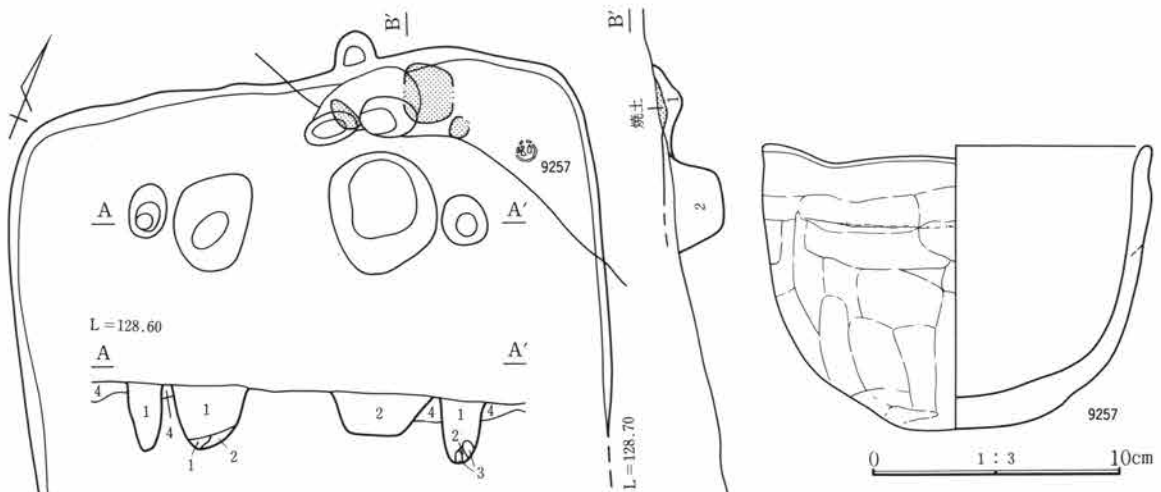
第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物



第264図 上谷戸第3号住居跡出土遺物実測図



第265図 上谷戸第3号住居跡遺物分布図



第267図 上谷戸第4号住居跡出土遺物実測図

土層注記 A-A'

- 1 黒褐色土とロームの混土層
- 1' 1と比べ、ややロームの混入が多い
- 2 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを含む。
- 3 ロームブロック
- 4 茶褐色土 ロームの混土層。

土層注記 C-C' D-D'

- 1 黒色土とロームの混土層
- 2 1に比べややロームの混入が多い。
- 3 ロームの混入の多い黒色土

第266図 上谷戸第4号住居跡遺構平面図

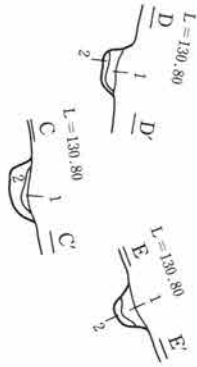
第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

土層注記 D-D'

- 1 ローム土と茶褐色土の混じり粘性締りなし
- 2 焼土を少量含む

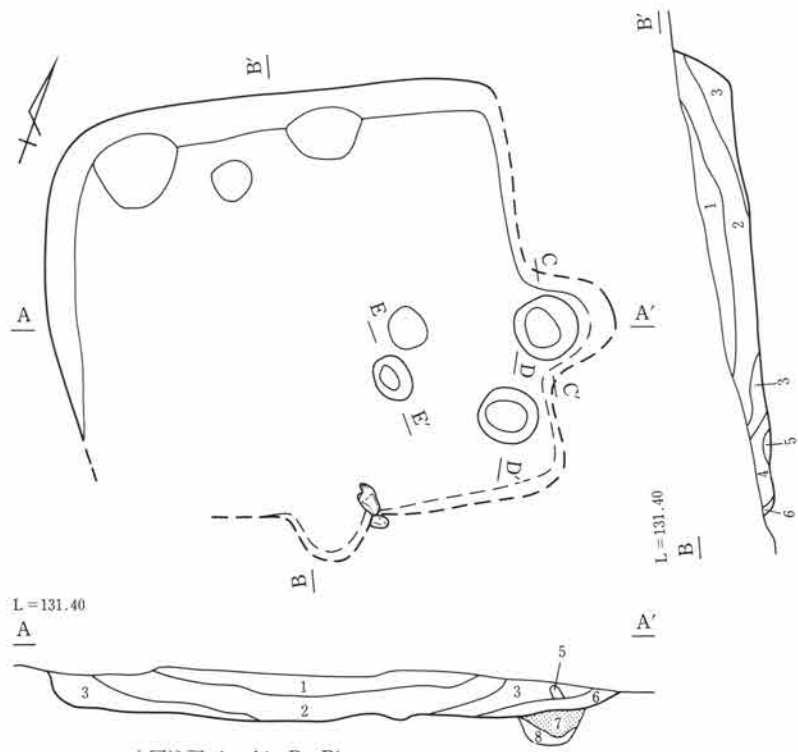
土層注記 C-C'

- 1 淡赤褐色土 焼土が多量に混じる。
- 2 ローム土と暗茶褐色土の混じり



土層注記 E-E'

- 1 淡赤褐色土 焼土が多量に混じる。
- 2 ローム土と暗茶褐色土の混じり

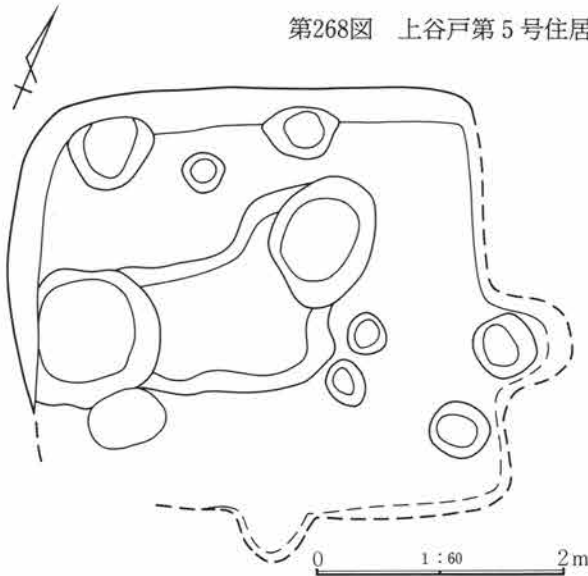


土層注記 A-A' B-B'

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1 暗褐色土 締り弱し。 | 5 淡赤褐色土 焼土粒少々入る。 |
| 2 褐色土 ロームブロックが少々入る。 | 6 淡黄褐色土 焼土粒少々入る。 |
| 3 暗褐色土 | 7 淡赤褐色土 焼土が多量に混じる。 |
| 4 暗褐色土 焼土、炭化物少々入る。 | 8 ローム土と暗茶褐色土の混じり |

0 1:60 2m

第268図 上谷戸第5号住居跡遺構平面図(1)―床面―



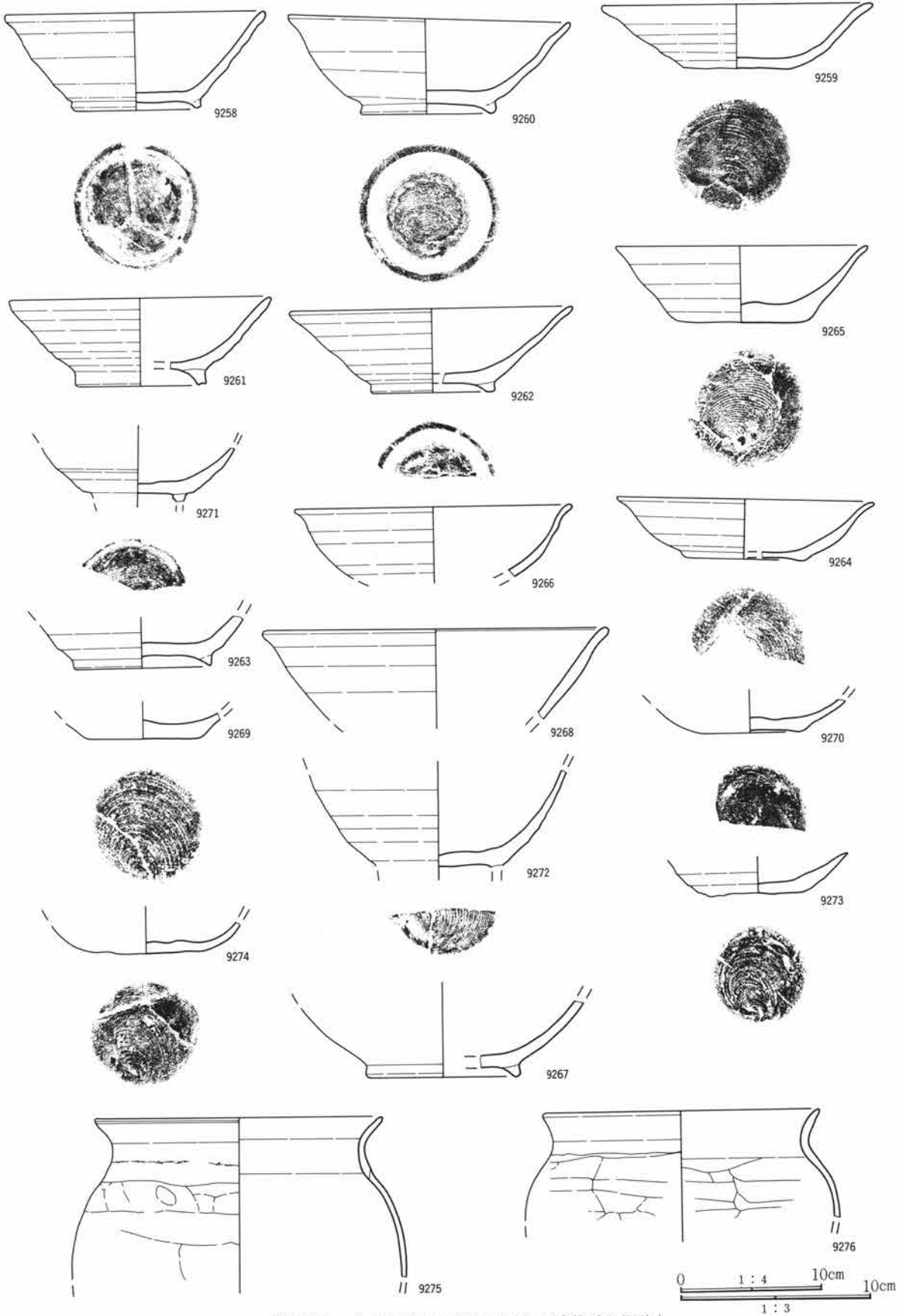
第269図 上谷戸第5号住居跡遺構平面図(2)―掘り方面―

(4) 上谷戸第4号竪穴住居跡 (第266図・第267図、写真図版53・112)

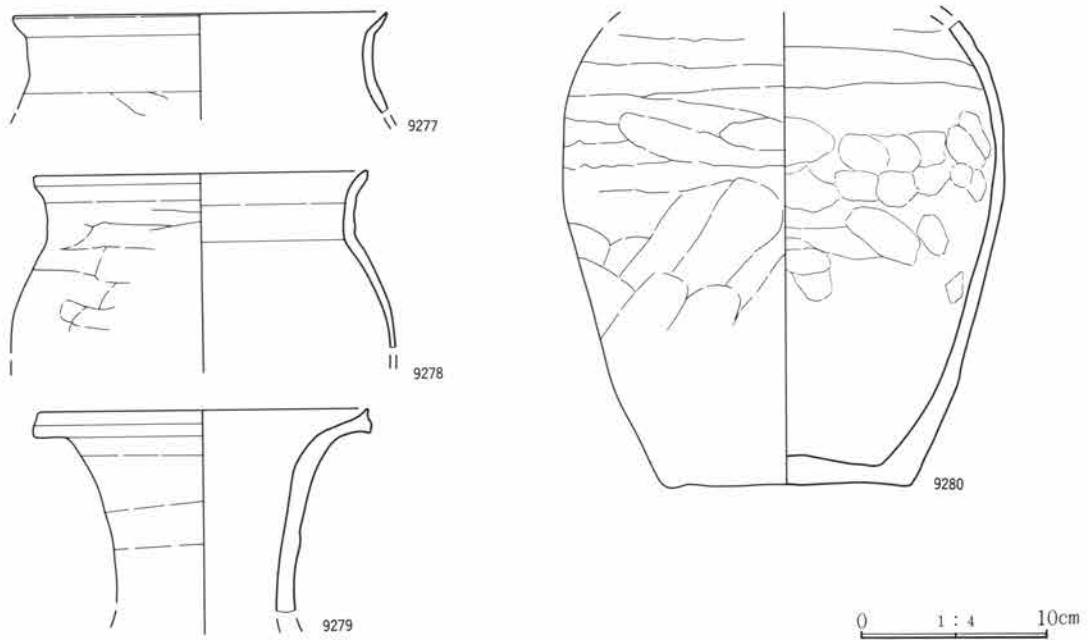
本遺構はH1・Hm-02・03グリッドの標高128.50mの南東斜面中腹で確認された。住居跡群の中では上谷戸第3号住居跡とともに分布域の中央部にあり、上谷戸第3号住居跡とは約3m離れている。他の遺構との重複関係は認められない。傾斜面に立地するため住居跡北東隅を残して大部分は侵食を受けており、遺構の保存状況は悪い。しかし、支柱穴と見られる4個のピットを検出し、遺構の平面形態・規模等を推定することができる。東西4.6m、南北5.0mの方形に近い平面形状で、主軸方向はN-30°-Eを示す。床面の検出された部分で

はローム貼り床であり、北壁寄り土坑が2基検出され、貯蔵穴若しくは床下土坑の可能性が考えられるが確証はない。カマドは住居東壁で焼土の分布域が認められたが、カマド施設は確認できず不明である。

遺物は北東隅で土師器の完形の小型甕が1点出土したのみである。



第270図 上谷戸第5号住居跡出土遺物実測図(1)



第271図 上谷戸第5号住居跡出土遺物実測図(2)

(5) 上谷戸第5号竪穴住居跡 (第268図～第272図、写真図版53・112)

本遺構は検出した住居跡の中では最も北のH1・Hm-03・04グリッドにあり、確認面標高は131.30mである。遺構の残存状況は極めて悪く、平面プランは不明瞭であるが、遺物分布等から判断して方形であると推定される。また、調査時において焼土の分布域を2カ所で検出したため、重複の可能性も考えられたが確認できず、カマドの造り替えの可能性が考えられた。傾斜面に立地するため低位のレベルでは侵食が著しく、残存状況は悪い。平面形状は一辺3.2m～3.5mの方形で、壁高は最大45cmを計測する。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は確認できなかった。床面は、確認できた部分では地山ローム面を踏み固めたものである。掘り方面で2個の土坑(径約1m)、ピット7個を検出した。

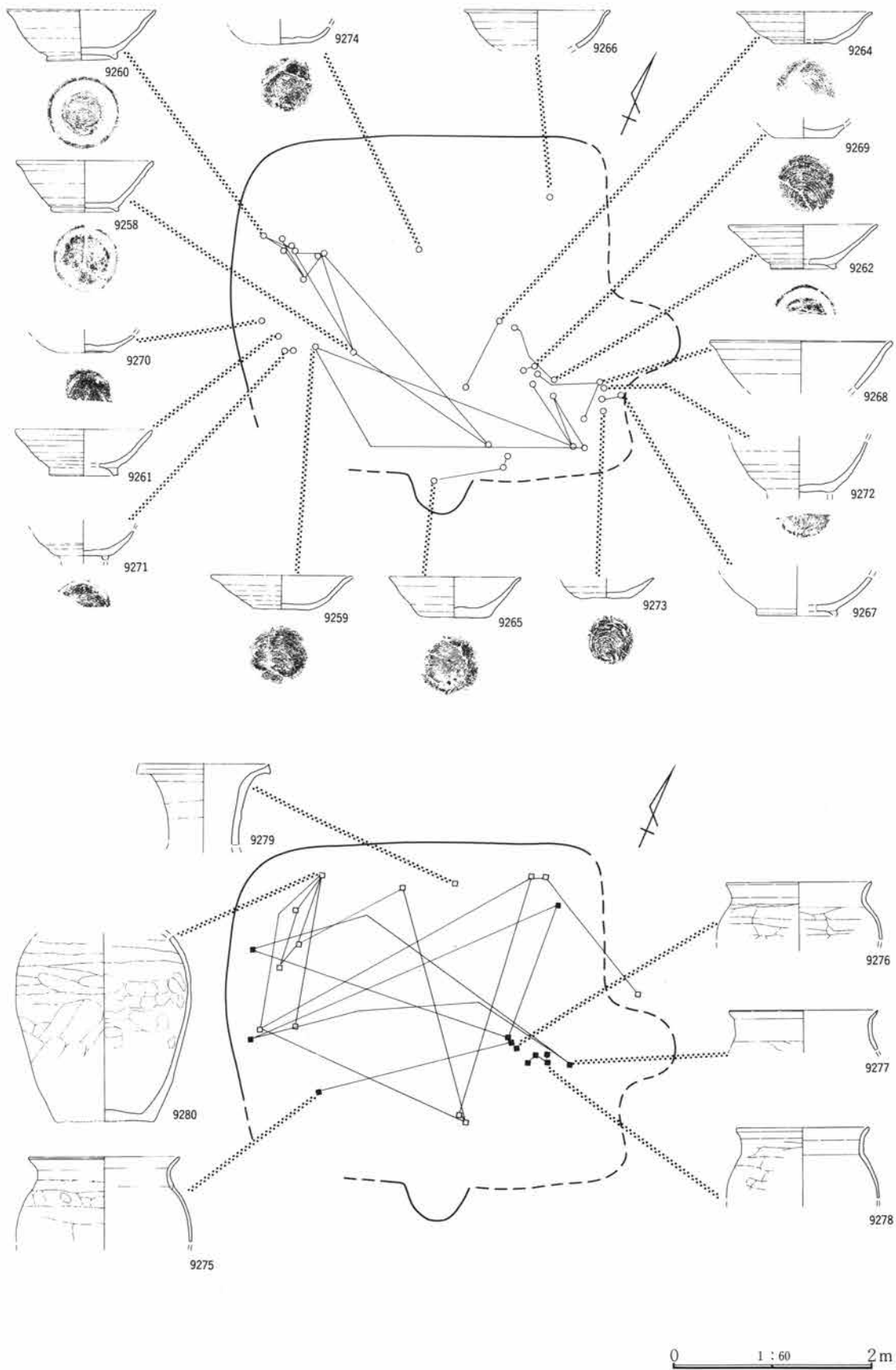
カマドの痕跡は東壁中央付近と南壁中央付近で焼土を確認したが、東壁際では幅50cm、奥行き50cmの広がり、床面とほぼ同レベルで、壁より外側に確認した。南側では袖に使用されたと考えられる結晶片岩の棒状の円礫(長35cm、径12cm×15cm)が2個、やや傾くものの立位で検出され、50cm×70cmの範囲で焼土分布域も認められた。円礫には火熱を受けた痕跡が認められた。

遺物は東カマドから南カマドの間の住居南半に集中する傾向が認められるが接合関係からは住居全体に広がる。器種別では須恵器の坏が多く出土し、土師器は少ない。

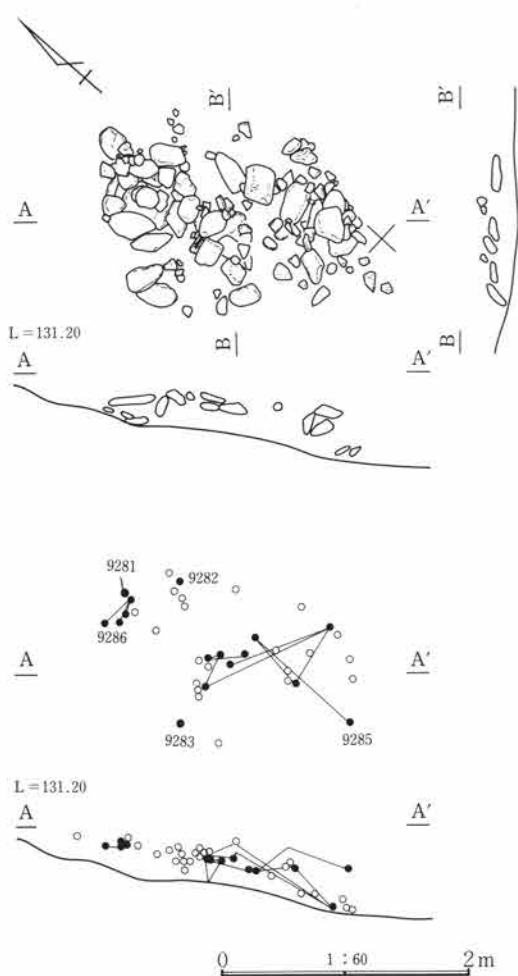
(6) 上谷戸第1号集石遺構 (第273図・第274図、写真図版53・112)

本遺構は上谷戸第1号住居跡の東方約32.6mのHr-03グリッドで検出された。検出位置は標高131mの南東斜面で、2.5m×1.5mの範囲に小礫が密集した状態で確認された。分布範囲の長軸方位はN-35°-Wであるが、これは傾斜に沿ったものと認められる。出土した礫は15cm～38cmのやや大きめのもの33石とそれ以下の小礫からなる。小礫を含めた礫石はほぼ一円にあったが、主要石材の分布は北西と南東の二つのブロックに分かれる。石材は結晶片岩系のものが多いが、砂岩質・安山岩質等のものも見られ多様である。礫の形状はほとんどが楕円形で扁平なものである。石材に交じって壺・蓋等の須恵器片が出土している。

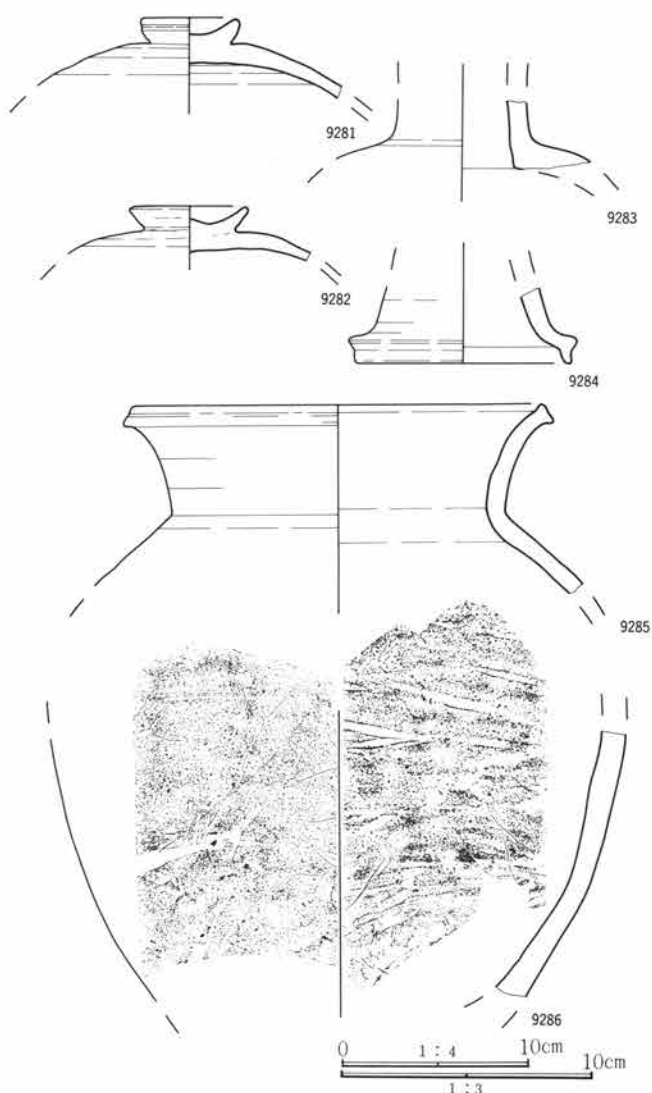
人為的な集石と考えられるが、意図的に配置されたとは考え難く、掘り方も見られない。礫に加工痕等も認められないことから、投棄されたものである可能性が高い。



第272図 上谷戸第5号住居跡遺物分布図



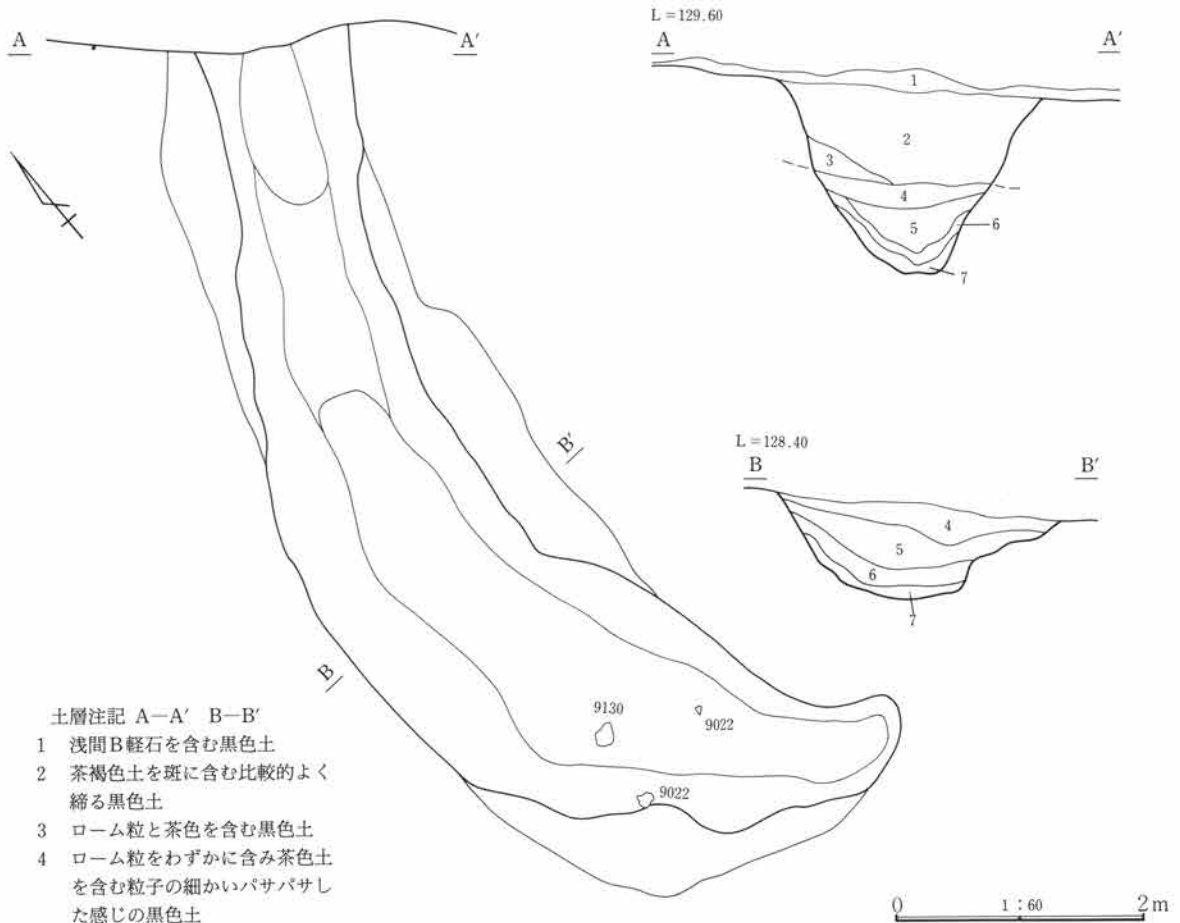
第273図 上谷戸第1号集石遺構平面図



第274図 上谷戸第1号集石遺構出土遺物実測図

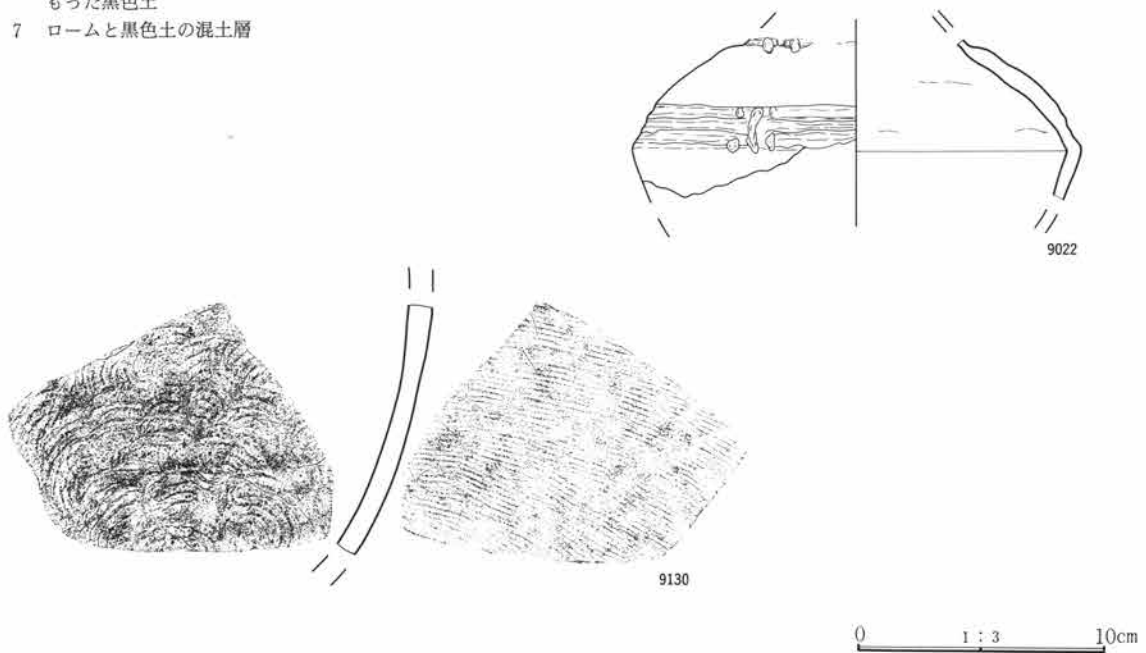
(7) 上谷戸第1号溝状遺構 (第275図・第276図、写真図版54)

本遺構は上谷戸調査区の丘陵斜面部Hh・Hi-01・02グリッドで検出された。上端幅1.60m～2.15m、下端幅0.55m～1.15m、深さ0.42m～0.83mで、確認長約8.5mで弧を描く形状である。溝内からは縄文土器片が1点と須恵器の甕胴部片が出土している。溝埋土には上層に浅間B軽石層である黒褐色砂質土が見られ、黒褐色土・暗褐色土・暗黄褐色土となる。遺構が収束するのは斜面部にあつて削平されたためとも思われるが、遺構底面がフラットではなく、掘り方も一定ではないことから、通常の溝とは異なる性格をもつものと考えられる。埋土に見られる層位はこの地域の古墳周溝に見られるものと共通する。また、丘陵斜面に弧を描く形状ということから本遺構は古墳周溝としての可能性が高いと言えよう。遺物はいずれも溝中への流れ込みと考えられるが須恵器片は溝の掘削年代に近い遺物と推定される。



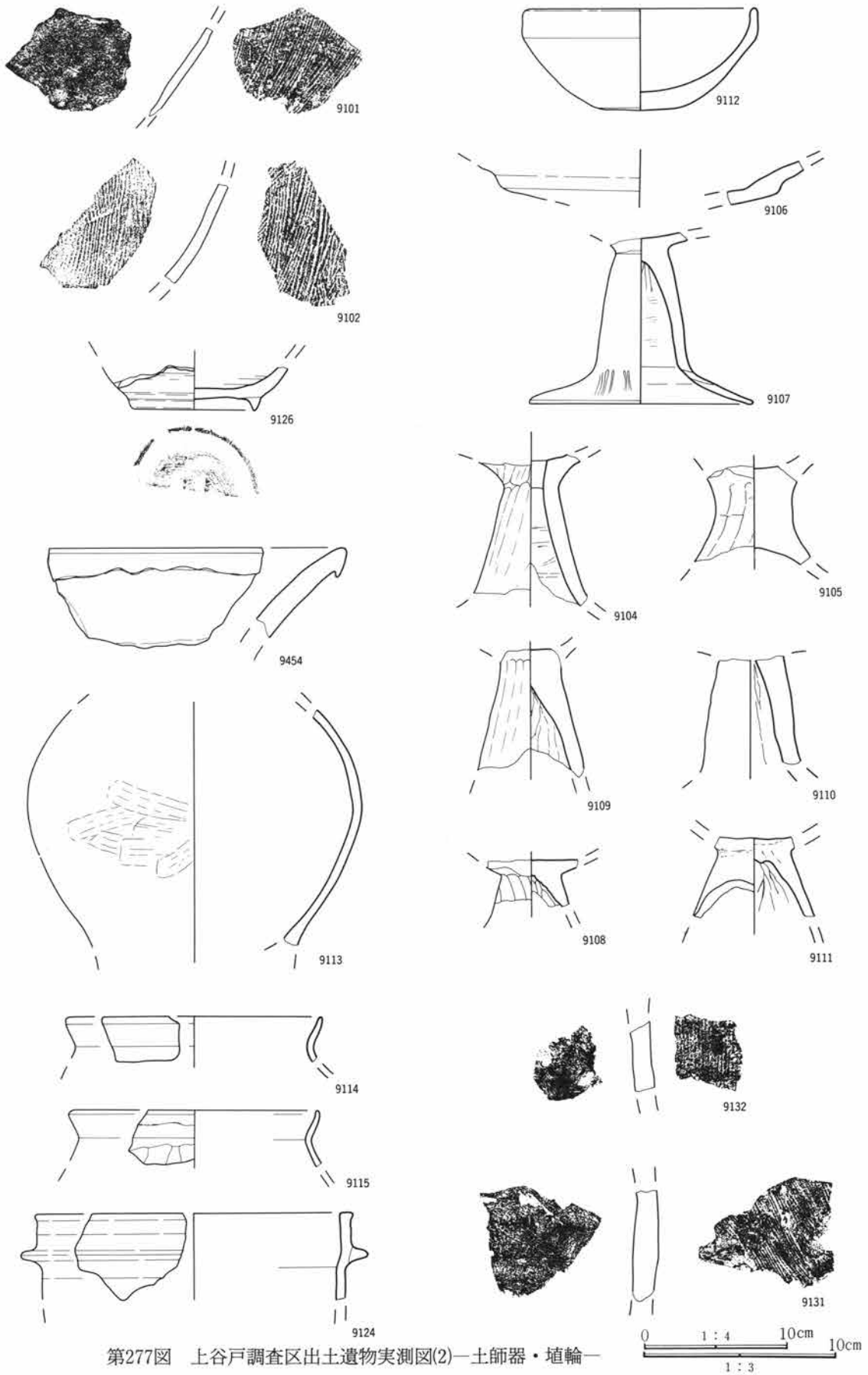
- 土層注記 A-A' B-B'
- 1 浅間B軽石を含む黒色土
 - 2 茶褐色土を斑に含む比較的よく締る黒色土
 - 3 ローム粒と茶色を含む黒色土
 - 4 ローム粒をわずかに含み茶色土を含む粒子の細かいパサパサした感じの黒色土
 - 5 茶色土を多く含む粒子の細かいパサパサした感じの黒色土
 - 6 ロームを多く含むやや粘性をもった黒色土
 - 7 ロームと黒色土の混土層

第275図 上谷戸第1号溝状遺構平面図

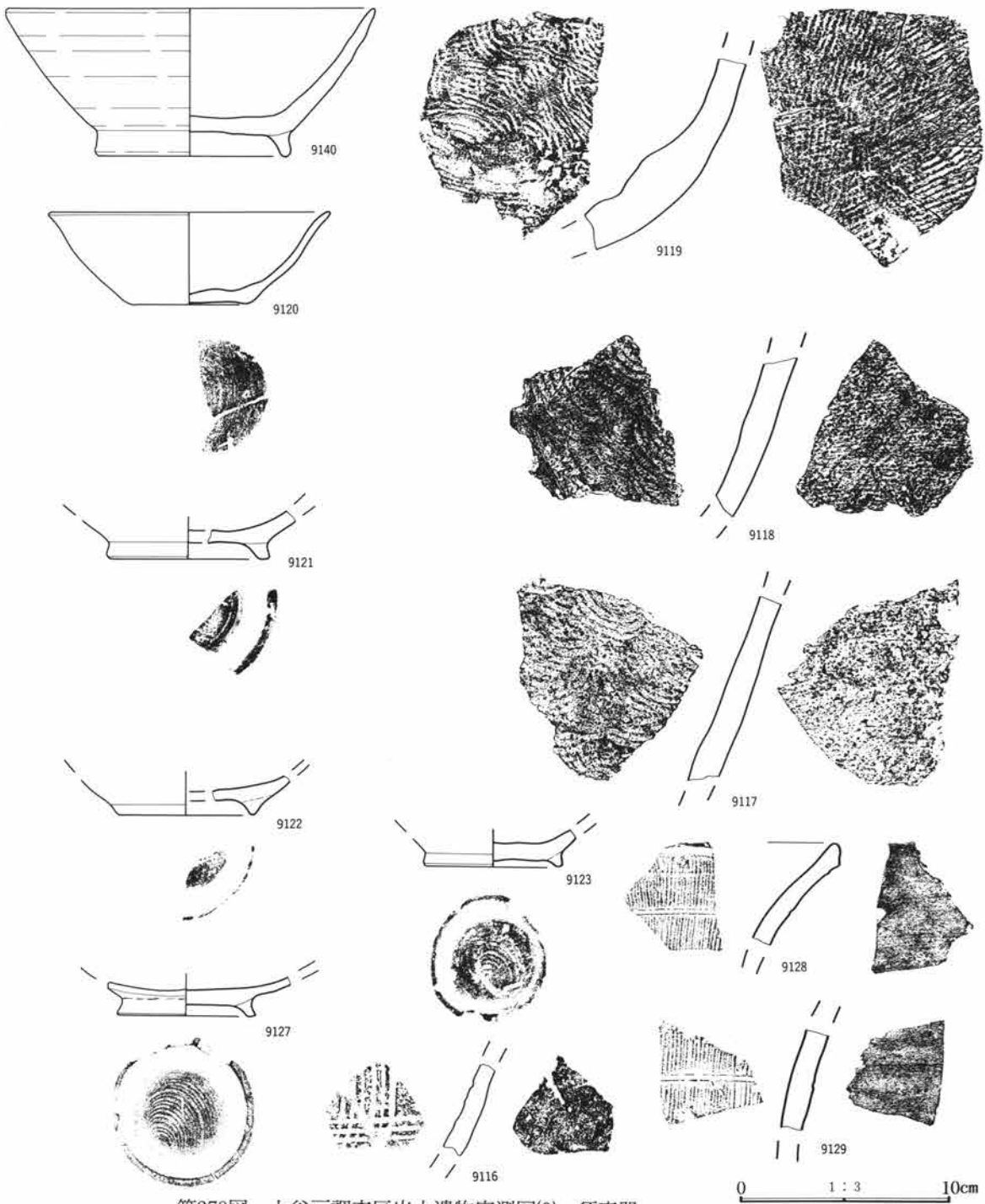


第276図 上谷戸第1号溝状遺構出土遺物実測図

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物



第277図 上谷戸調査区出土遺物実測図(2)―土師器・埴輪―



第278図 上谷戸調査区出土遺物実測図(3)―須恵器―

3 遺物 (第277図・第278図、写真図版109)

上谷戸調査区では前述の住居跡出土の遺物のほか、グリッド出土の土師器・須恵器が見られる。9101・9102は石田川式の台付甕の胴部片であり、4世紀代に比定される。9454は古式土師器の壺形土器の口縁部片で折り返しが見られる。土師器の小塊(9112)、高坏(坏部9106・脚部9107)、小型壺(9113)は胎土・色調に共通する特徴が認められる。この他に器台(9104)、高坏(9105・9108～9111)、甕口縁部片(9114・9115)などが見られる。円筒埴輪の小片(9131・9132)も見られる。須恵器は壺・甕類の胴部片と坏が多く見られた。

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

第29表 上谷戸調査区出土遺物観察表 —古墳～平安時代—

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ③器形 ⑤焼成	②底部 ④胎土 ⑥色調	特徴	備考
9101 277 —	土師器 台付甕 脚部小片	Gi13g	①—器厚3~4	①紐作り ②(脚台付) ⑥橙色	④細粒砂 ⑤普通	胴下半部の小片	石田川式 5c代
9102 277 —	土師器 台付甕 胴部小片	Gx08g	①—器厚5~6	①紐作り ④細粒砂、微粒雲母、白色微粒子 ⑤普通 ⑥橙色		体部外面に横ハケ目 内面横ハケ 煤付着	石田川式 5c代
9103 — 109	土師器 台付甕 胴部下半	上第19号溝		①紐作り ④細粒砂 ⑤やや良好 ⑥にぶい褐色(外面暗褐色)		外面ハケ目 内面ハケ目	5c
9104 277 —	土師器 器台 脚部上半	Gs16g04		①紐作り ②欠損 ③高坏脚部 ④細粒砂、 黒色鉱物粒子、微粒雲母 ⑤良好 ⑥橙色		脚：縦ナデ	5c
9105 277 —	土師器 高坏 脚部	Gl07g01		①紐作り ②欠損 ④細粒砂 ⑤普通 ⑥橙 色、外一部赤変		外：縦ヘラナ デ 内：横ヘラナ デ	5c
9106 277 —	土師器 高坏 坏部	Gs15g01		①紐作り ②欠損 ③高坏脚部 ④細粒砂 ⑤良好 ⑥明褐色		外：縦ヘラナ デ 内：横ヘラナ デ	5c
9107 277 109	土師器 高坏 脚部	Gg16g01	③116	①紐作り ③高坏脚部 ④細粒砂 ⑤良好 ⑥明赤褐色		外：縦ヘラナ デ 内：絞り調整	5c
9108 277 —	土師器 高坏 脚部	Gw05g		①紐作り ②欠損 ④細粒砂 ⑤やや堅緻 ⑥明赤褐色		外：縦ヘラナ デ 内：絞り調整	5c
9109 277 —	土師器 高坏	Gu12g01		①紐作り ②欠損 ④細粒砂 ⑤酸化焙 ⑥ にぶい黄灰褐色		外：縦ヘラナ デ 内：絞り調整	
9110 277 109	土師器 高坏 脚部	上第19号溝		①紐作り ②欠損 ④微粒雲母小砂粒 ⑤酸 化焙良好 ⑥鈍い橙色		外：縦ヘラナ デ 内：絞り調整	
9111 277 109	土師器 高坏 脚部	Hb11g		①紐作り ②欠損 ④細粒砂 ⑤酸化焙 ⑥ 明赤褐色		外：縦ヘラナ デ 内：絞り調整	
9112 277 109	土師器 鉢(塀) %口~底部	Gs16g03	①120 ②52 ③60	①紐作り ②平底 ④やや粗い白色粒子微粒 雲母赤褐色粒子 ⑤やや堅緻 ⑥橙色		外：ヘラ削り 内：横ナデ 底ヘラ起し	
9113 277 —	土師器 壺形 胴部	Gs16g02		①紐作り ②欠損 ③壺形土器 ④やや粒子 の粗い小砂粒 ⑤酸化焙良好 ⑥明褐色		外：ヘラ削り 内：ナデ調整	
9114 277 —	土師器 甕 口縁部	Gw07g07		①紐作り ②欠損 ④白色微粒子 、黒色鉱物粒子⑤良好 ⑥明赤褐色		外：ヘラ削り 内：横ナデ	
9115 277 —	土師器 甕 口縁部	Gw08g02		①紐作り ②欠損 ④黒色鉱物粒子 ⑤良好 ⑥明赤褐色		外：ヘラ削り 内：横ナデ	
9116 278 —	須恵器 甕 胴部小片	Gr19g		①紐作り ②欠損 ④黒色粒子 ⑤良好 ⑥ 表、灰黄色、内、灰色		内：平行条線	
9117 278 —	須恵器 甕 胴部小片	Gc04g		①紐作り ②欠損 ④白色粒子 ⑤堅緻 ⑥ 灰色		外：平行叩き のナデ 内：青海波文	
9118 278 —	須恵器 甕 胴部小片	Gx09g03		①紐作り ②欠損 ④白色粒子、黒色鉱物粒 子 ⑤普通 ⑥灰色		外：叩き後 ナデ調整 内：青海波文	

第2節 古墳～平安時代の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm)④重量(g) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ③器形 ⑤焼成	②底部 ④胎土 ⑥色調	特徴	備考
9119 278 —	須恵器 甕 胴部片	Gt04g		①紐作り ②欠損 ④白色小粒子多く入る ⑤堅緻 ⑥灰色		外：平行叩き 内：青海波	
9120 278 109	須恵器 高台付坏 1/2口～底部	Gw08g	①132 ② 42 ③ 57	①ロクロ成形 ②回転糸切りヘラ調整 ③口 縁部やや外反 ④黒色鉱物粒子、白色微粒子 ⑤還元焰、普通 ⑥オリーブ灰色		外：横ナデ 内：横ナデ	やや磨滅
9121 278 —	須恵器 高台付坏 底部片	Gu07g03	③(76)	①ロクロ成形 ②貼り付高台 ④細粒砂、黒 色粒子、きめ細かい ⑤普通 ⑥オリーブ灰 色		内：ナデ	
9122 278 —	須恵器 高台付坏 底部片	Gu05g	③(64)	①ロクロ成形 ②貼り付高台 ④細粒砂、白 色微粒子、黒色鉱物粒子 ⑤普通 ⑥オリ ーブ灰色		外：横ナデ 内：横ナデ	磨滅が著し い
9123 278 —	須恵器 高台付坏 底部片	Gu08g01	③ 62	①ロクロ成形 ②貼り付高台 ④細粒砂、砂 粒を混じる ⑤普通 ⑥オリーブ灰色		内外とも横ナ デ 底部糸切 り未調整	磨滅が著し い
9124 277 —	須恵器 羽釜 口縁部小片	Gu16g		①ロクロ成形 ②欠損 ③ツバは直に外反 ④中粒砂、小砂粒を混じる ⑤酸化焰 ⑥灰 黄色		口縁部～ツバ にかけて横ナ デ	
9125 282 —	須恵器 坏 底部	上第20号溝		①ロクロ成形 ②回転糸切り ④細粒砂、精 良 ⑤普通 ⑥灰白色		内外とも横ナ デ 底部糸切 り未調整	
9126 277 109	須恵器 高台付坏 底部	Hp07g		①ロクロ成形 ②貼り付高台 ④細粒砂、精 良 ⑤やや甘い ⑥オリーブ灰色		内外とも横ナ デ 底部糸切 り未調整	
9127 278 109	須恵器 坏 底部	Hs03g	③ 66	①ロクロ成形 ②回転糸切り貼り付高台 ④ 細粒砂 ⑤還元焰、堅緻 ⑥灰黄褐色			
9129 278 —	須恵器 大甕 頸部片	上第6号溝		①紐作り ②欠損 ④精良 ⑤良好 ⑥灰色		外：縦のカキ 目 内：横ナデ	
9130 276	須恵器 大甕 胴部片	上第1号溝		①紐作り ②欠損 ④長石粒を混じる ⑤良 好 ⑥灰色		外：平行叩き 内：青海波文	
9131 277 —	埴輪 円筒 胴部片	Gv05g		①紐作り ④砂粒、長石粒 ⑤普通 ⑥鈍い 黄橙色		外：縦ハケ目 内：横の指調 整	
9132 277 —	埴輪 円筒 胴部片	Gf10g		①紐作り ④砂粒、長石粒 ⑤普通 ⑥明褐 色		外：縦ハケ目 内：横の指調 整	
9139 316 128	須恵器 高台付坏 口～底	上第38号土坑	①143	①ロクロ成形 ②付け高台 ④細粒砂 ⑤あ まい ⑥黒褐色		底糸切り未調 整	
9140 278 109	須恵器 碗 口～底	Hb05g01	①175 ② 71 ③ 92	①ロクロ成形 ②付け高台 ④細粒砂、小砂 粒 ⑤軟質焼成の坏 ⑥灰黄色		体：横ナデ	
9141 289 —	須恵器 大甕 胴部片	上第1号井戸跡		①紐作り ②欠損 ④白色微粒子 ⑤良好 ⑥灰色		外：櫛文	
9128 — —	須恵器 大甕 口縁部片	上第6号溝		①紐作り ②欠損 ④精良 ⑤良好 ⑥灰色		外：縦のカキ 目 内：横ナデ	

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

第30表 上谷戸調査区出土遺物観察表 — 古墳～平安 —

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調)⑦染付(文様・呉須) ⑧他	特徴	備考 (産地、時期等)
9201 255 110	土製品 土鍾 完形	上谷戸1号住	① 32 ② 10 ③ 2	⑥外面：黒色		
9202 255 110	土製品 土鍾 完形	上谷戸1号住	① 39 ② 11 ③ 2	⑥外面：黒褐色～淡褐色		
9203 255 110	土製品 土鍾 完形	上谷戸1号住	① 40 ② 11 ③ 2	⑥外面：黒色一部淡褐色		
9204 255 110	土製品 土鍾 完形	上谷戸1号住	① 42 ② 22 ③ 3	⑥外面：黒色		
9205 255 110	土師器 坏 口～底部	上谷戸1号住	①136 ②(44) ③最大径 (146)	④砂粒 ⑤普通 ⑥明黄褐 ⑦外面：口縁横ナデ、底部ヘラ削り、内面：横ナデ後ヘラ磨き		
9206 255 110	土師器 碗 口～底%	上谷戸1号住	①104 ② 41	④緻密 ⑤良好 ⑥橙色 ⑦外面：口縁横ナデ、体部～底部不定ヘラ削り、内面：横ナデ後ヘラ磨き		
9207 255 110	土師器 碗 口～底%	上谷戸1号住	①110 ② 45	④緻密 ⑤良好 ⑥浅黄色 ⑦外面：口縁横ナデ、体部～底部不定ヘラ削り、内面：横ナデ後ヘラ磨き	煤付着	
9208 255 110	土師器 碗 口～底%	上谷戸1号住	①110 ② 56	④緻密 ⑤良好 ⑥橙色 ⑦外面：口縁横ナデ、体部～底部不定ヘラ削り、内面：横ナデ後ヘラ磨き		
9209 255 110	土師器 小型壺 完形	上谷戸1号住	① 87 ②124	④細粒砂 ⑤良好 ⑥にぶい黄褐色 ⑦外面：口縁横ナデ、体部上半ヘラ削り後ヘラ磨き、下半ナデ、内面：横ナデ	煤付着	
9210 255 110	土師器 小型甕 口～底%	上谷戸1号住	①126 ③ 62	④砂礫混入 ⑤良好 ⑥暗褐色 ⑦外面：体部縦ヘラ削り、内面：ナデ		
9211 255 110	土師器 小型甕 口～底%	上谷戸1号住	①140 ②155 ③ 52	④砂礫混入 ⑤良好 ⑥暗褐色 ⑦外面：口縁～体部上半ナデ、体部下半縦ヘラ削り、内面：ナデ	体部 煤付着	
9212 255 110	土師器 甕 口～底%	Ia・Ib-04・05 g 上谷戸1号住	①179 ②150 ③ 50	④細粒砂 ⑤良好 ⑥橙色 ⑦外面：口縁ナデ、体部縦ヘラ削り、底部横ヘラ削り、内面：ナデ、黒色仕上げ		
9213 255 —	土師器 甕 口～胴%	Ia・Ib-04・05 g 上谷戸1号住	①110 ②(120)	④砂礫混入 ⑤良好 ⑥明赤褐色 ⑦口縁ナデ、体部外面：縦ヘラ削り、内面：横ヘラ削り		
9214 255 110	土師器 長胴甕 胴～底%	Ia・Ib-04・05 g 上谷戸1号住	②(185) ③ 90	④精選 ⑤良好 ⑥橙色 ⑦体部外面：縦ヘラ削り、下半一部横ヘラ削り、後ナデ調整、内面：ヘラナデ		
9215 255 —	土師器 長胴甕 口縁部%	Ia・Ib-04・05 g 上谷戸1号住	①180	④砂礫 ⑤良好 ⑥橙色 ⑦口縁横ナデ、体部縦ヘラ削り、内面横ナデ		
9216 255 —	土師器 長胴甕 口～胴%	上谷戸1号住	①190	④砂礫混入 ⑤良好 ⑥暗褐色 ⑦外面：縦ヘラ削り、内面：ナデ		
9217 255 110	土師器 長胴甕 口～底%	上谷戸1号住	①186 ②325 ③ 45	④砂礫混入 ⑤良好 ⑥暗褐色～明赤褐色 ⑦外面：口縁ナデ、体部縦ヘラ削り、内面：ナデ、平底	体部 煤付着	
9218 255 110	土師器 長胴甕 完形	上谷戸1号住	①182 ②332 ③ 57	④砂礫混入 ⑤良好 ⑥暗褐色～赤褐色 ⑦外面：口縁ナデ、体部縦ヘラ削り、内面：ナデ、平底	体部 煤付着	
9219 255 110	土師器 甕 胴～底%	上谷戸1号住	②(140) ③ 70	④砂粒 ⑤ふつう ⑥明赤褐色 ⑦外面：ナデ、内面：ナデ		

第2節 古墳～平安時代の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調) ⑦染付(文様・具須) ⑧他	特 徴	備 考
9220 255 110	縄文 鉢 底部	上谷戸1号住	③ 82	④砂粒 ⑤良好 ⑥にぶい黄色		
9221 256 110	円礫 こもあみ石	上谷戸1号住	長150 重502 幅 76 厚 25	(石材) 点紋絹雲母石墨片岩		
9222 256 110	円礫 こもあみ石	上谷戸1号住	長135 重237 幅 40 厚 24	(石材) 点紋絹雲母石墨片岩		
9223 256 110	円礫 こもあみ石	上谷戸1号住	長126 重259 幅 37 厚 35	(石材) 点紋絹雲母石墨片岩		
9224 256 110	円礫 こもあみ石	上谷戸1号住	長141 重285g 幅 51 厚 22	(石材) 点紋絹雲母石墨片岩		
9225 256 110	円礫 こもあみ石	上谷戸1号住	長128 重227g 幅 33 厚 30	(石材) 点紋絹雲母石墨片岩		
9226 256 110	円礫 こもあみ石	上谷戸1号住	長153 重227g 幅 65 厚 30	(石材) 点紋絹雲母石墨片岩		
9227 260 111	石製品 有孔円板	上谷戸2号住	長 20 重 1.9g 幅 14 厚 4	(石材) 滑石		
9228 260 111	石製品 有孔円板	上谷戸2号住	長 19 重 1.7g 幅 15 厚3.4	(石材) 滑石		
9229 260 111	土師器 坏 口～底部%	上谷戸2号住	①132 ② 38	④緻密 ⑤良好 ⑥暗赤褐色 ⑦外面：口縁横ナデ、底部ヘラ削り、内面：横ナデ		
9230 260 —	土師器 坏 口～底部%	上谷戸2号住	①132 ②(35)	④細粒砂 ⑤あまい ⑥褐色 ⑦外面：口縁横ナデ、内面：横ナデ		
9231 260 111	須恵器 蓋 ? 口～底部%	上谷戸2号住 H J 1-76	①126 ② 37 ③100	④緻密 ⑤ふつう ⑥灰色 ⑦外面：口縁横ナデ、底部回転ヘラ削り、内面：横ナデ		高坏の坏部の可能性あり
9232 260 111	須恵器 短頸壺 口～底部%	上谷戸2号住	①105	④緻密 ⑤あまい ⑥黒褐色 ⑦外面：口縁横ナデ、体部手持ちナデ、内面：横ナデ、肩部に波状文		
9233 260 111	土師器 長甕 口～胴部%	上谷戸2号住	①178	④砂礫(長石、片岩等)が混じる ⑤良好 ⑥にぶい黄褐色 ⑦口縁ナデ、体部外面：縦ヘラ削り、内面：ヘラ横ナデ		
9234 260 —	須恵器 壺 口縁部	上谷戸2号住	①116 ③ 54	④緻密 ⑤良好 ⑥灰色 ⑦内外とも横ナデ、頸部に波状文		
9235 260	土師器 壺 口縁部	上谷戸2号住	①(170)	④砂粒 ⑤ふつう ⑥褐色 ⑦外面：口縁横ナデ、内面：口縁横ナデ、体部ヘラ横ナデ		
9236 260 111	土師器 壺 口～底%	上谷戸2号住	①197 ②320 ③95	④砂礫混入 ⑤良好 ⑥褐色 ⑦口縁ナデ体部外面：(上半)横ヘラ削り、(下半)斜めヘラ削り、内面：ヘラナデ、平底	体部 煤付着	
9237 260 —	須恵器 甕 胴部小片	上谷戸2号住		④砂粒 ⑤良好 ⑥灰色 ⑦外面：ナデ、内面：青海波文		
9238 260 —	須恵器 甕 頸小片	上谷戸2号住		④細粒砂 ⑤良好 ⑥灰色 ⑦外面：縦カキ目、内面：横ナデ		

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(㎜) ②器高(㎜) ③底径(㎜)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥軸調(色調)⑦染付(文様・具須) ⑧他	特徴	備考 (産地、時期等)
9239 260 110	円礫 こもあみ石	上谷戸2号住	長114 重241g 幅 56 厚25.5	(石材) 点紋絹雲母石墨片岩		
9240 260 110	円礫 こもあみ石	上谷戸2号住	長136 重263g 幅 45 厚 22	(石材) 点紋絹雲母石墨片岩		
9241 260 110	円礫 こもあみ石	上谷戸2号住	長138 重214g 幅 43 厚 21	(石材) 点紋絹雲母石墨片岩		
9242 264 111	石製品 白玉	上谷戸3号住	① 11 重9 ② 11 孔径2mm 厚1.7	(石材) 滑石		
9243 264 111	土師器 坏 口～底部%	上谷戸3号住	①133 ② 40	④緻密 ⑤良好 ⑥橙色 ⑦外面：口縁横ナデ、底部ヘラ削り、内面：横ナデ		
9244 264 111	土師器 坏 口～底部%	上谷戸3号住	①118 ② 34	④緻密 ⑤良好 ⑥にぶい褐色 ⑦外面：口縁横ナデ、底部ヘラ削り、内面：横ナデ		
9245 264 —	土師器 坏 口～底部%	上谷戸3号住	①130 ② 36	④緻密 ⑤良好 ⑥にぶい褐色 ⑦外面：口縁横ナデ、底部ヘラ削り、内面：横ナデ		
9246 264 111	土師器 坏 口～底部%	上谷戸3号住	①130 ② 39	④緻密 ⑤良好 ⑥橙色 ⑦外面：口縁横ナデ、底部ヘラ削り、内面：横ナデ		
9247 264 111	土師器 坏 口～底部%	上谷戸3号住	①128 ② 38	④細粒砂 ⑤ふつう ⑥灰褐色 ⑦外面：口縁横ナデ、底部ヘラ削り、内面：横ナデ		
9248 264 111	土師器 坏 口～底部%	上谷戸3号住	①136 ② 48	④緻密 ⑤良好 ⑥にぶい赤褐色 ⑦外面：口縁横ナデ、底部ヘラ削り、内面：横ナデ		
9249 264 111	土師器 坏 口～底部%	上谷戸3号住	①134 ② 38 丸底	④細粒砂 ⑤良好 ⑥外面：橙色、内面：黒 ⑦外面：口縁横ナデ、底部横ヘラ削り、内面：横ナデ		
9250 264 111	土師器 長甕 ほぼ完形	上谷戸3号住	①192 ②354 ③ 55	④砂礫混入 ⑤良好 ⑥黒褐色～橙色 ⑦外面：口縁ナデ、体部縦ヘラ削り、内面：ナデ		
9251 264 111	土師器 長甕 底部	上谷戸3号住	③ 55	④砂粒 ⑤ふつう ⑥黒褐色 ⑦外面：縦ヘラ削り、内面：ナデ		
9252 264 111	土師器 長甕 底部	上谷戸3号住	③ (60)	④砂粒 ⑤ふつう ⑥橙色 ⑦外面：縦ヘラ削り、内面：ナデ		
9253 264 111	円礫 こもあみ石	上谷戸3号住	長172 重705 幅 60 厚 33	(石材) 絹雲母石墨片岩		
9254 264 111	円礫 こもあみ石	上谷戸3号住	長133 重300 幅 43 厚 22	(石材) 点紋絹雲母石墨片岩		
9255 264 111	円礫 こもあみ石	上谷戸3号住	長171 重600 幅 67 厚 26	(石材) 点紋絹雲母石墨片岩		
9256 264 111	円礫 こもあみ石	上谷戸3号住	長175 重800 幅 70 厚 35	(石材) 絹雲母石墨片岩		
9257 267 109	土師器 小型甕 ほぼ完形	上谷戸4号住	①154 ②100 ③ 45	④砂礫混入 ⑤ふつう ⑥赤褐色 ⑦外面：口縁ナデ、体部縦ヘラ削り、一部横削り、内面：ナデ	体部 煤付着	

第2節 古墳～平安時代の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(㎜) ②器高(㎜) ③底径(㎜)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調)⑦染付(文様・具須) ⑧他	特徴	備考 (産地、時期等)
9258 270 112	須恵器 高台付 坏 口～底%	上谷戸5号住	①138 ② 51 ③ 70	④緻密 ⑤あまい ⑥灰オリーブ色 ⑦内外とも横ナデ、底部糸切り後ナデ		
9259 270 112	須恵器 坏 口～底%	上谷戸5号住	①142 ② 33 ③ 58	④細粒砂 ⑤ふつう ⑥にぶい黄橙色～黒褐色 ⑦内外面：横ナデ、底部糸切り未調整		
9260 270 112	須恵器 高台付 碗 口～底%	上谷戸5号住	①150 ② 52 ③ 70	④細粒砂⑤ふつう ⑥にぶい黄橙色 ⑦内外面：横ナデ、底部糸切り後ナデ		
9261 270 112	須恵器 高台付 碗 口～底%	上谷戸5号住	①140 ② 45 ③ 70	④緻密 ⑤良好 ⑥灰色 ⑦内外とも横ナデ		
9262 270 112	須恵器 高台付 碗 口～底%	上谷戸5号住	①141 ② 44 ③ 64	④細粒砂 ⑤あまい ⑥にぶい黄橙色 ⑦内外とも横ナデ		
9263 270 112	須恵器 高台付碗? 底部	上谷戸5号住	③ 70	④砂粒 ⑤あまい ⑥にぶい黄橙色 ⑦内外とも横ナデ		
9264 270 112	須恵器 坏 口～底%	上谷戸5号住	①136 ② 31 ③ 63	④砂粒 ⑤あまい ⑥灰色～黒褐色 ⑦内外とも横ナデ、底部糸切り未調整		
9265 270 112	須恵器 坏 口～底%	上谷戸5号住	①132 ② 40 ③ 65	④細粒砂 ⑤ふつう ⑥灰黄色 ⑦内外とも横ナデ糸切り未調整		
9266 270 —	須恵器 高台付碗? 口～底%	上谷戸5号住	①146	④緻密 ⑤ふつう ⑥灰色 ⑦内外とも横ナデ		
9267 270 112	須恵器 高台付碗? 口～底%	上谷戸5号住	③ 78	④砂粒 ⑤あまい ⑥にぶい黄橙色 ⑦内外とも横ナデ		
9268 270 112	須恵器 高台付 碗 口～体部%	上谷戸5号住	①184	④砂粒 ⑤あまい ⑥浅黄色 ⑦内外ともに横ナデ		
9269 270 112	須恵器 坏 底部	上谷戸5号住	③ 59	④砂粒 ⑤あまい ⑥灰色 ⑦底部糸切り未調整		
9270 270 112	須恵器 坏 底部	上谷戸5号住	③ 54	④細粒砂 ⑤ふつう ⑥灰色 ⑦内外とも横ナデ、底部糸切り未調整		
9271 270 112	須恵器 高台付 坏 底部	上谷戸5号住	③ 50	④緻密 ⑤ふつう ⑥灰色 ⑦内外ともに横ナデ、底部糸切り未調整		
9272 270 112	須恵器 高台付 碗 底～体部%	上谷戸5号住	③ 66	④細粒砂 ⑤ふつう ⑥灰色 ⑦内外とも横ナデ、底部糸切り未調整		
9273 270 112	須恵器 坏 底部	上谷戸5号住	③ 52	④砂粒 ⑤ふつう ⑥橙色 ⑦内外とも横ナデ、底部糸切り未調整		
9274 270 112	須恵器 坏 底部	上谷戸5号住	③ 60	④細粒砂 ⑤良好 ⑥灰色 ⑦内外とも横ナデ、底部糸切り未調整		
9275 270 112	土師器 甕 口～肩部%	上谷戸5号住	①204	④緻密 ⑤良好 ⑥橙色 ⑦外面：口縁横ナデ、体部上半横ヘラ削り、内面：横ナデ		
9276 270 —	土師器 甕 口～肩部%	上谷戸5号住	①196	④緻密 ⑤良好 ⑥橙色 ⑦外面：口縁横ナデ、体部上半横ヘラ削り、内面：口縁横ナデ、体部上半横ハケ		

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調)⑦染付(文様・呉須) ⑧他	特徴	備考 (産地、時期等)
9277 271 —	土師器 甕 口～肩部 $\frac{1}{2}$	上谷戸5号住	①200	④緻密 ⑤良好 ⑥橙色 ⑦内外とも横ナデ		
9278 271 —	土師器 甕 口～肩部 $\frac{1}{2}$	上谷戸5号住	①198	④緻密 ⑤良好 ⑥橙色 ⑦外面：口縁横ナデ、体部上半横ヘラ削り、内面：横ナデ		
9279 271 112	須恵器 長頸壺 口～頸部	上谷戸5号住	①176	④砂粒 ⑤ふつう ⑥にぶい黄橙色 ⑦内外とも横ナデ		
9280 271 112	須恵器 瓶 胴～底部	上谷戸5号住	②(253) ③134	④細粒砂 ⑤良好 ⑥灰色 ⑦平行叩き後の横ナデ 内面：横ナデ		
9281 274 —	須恵器 蓋坏 蓋部 $\frac{1}{2}$	1号集石	①40(つまみ部) ②(29)	④白色粒、黒色粒が目立つ ⑤ふつう ⑥オリーブ灰色 ⑦外面：頂部回転ヘラ削り、口縁横ナデ、内面：横ナデ		
9282 274 —	須恵器 蓋坏 蓋部 $\frac{1}{2}$	1号集石	①47(つまみ部) ②(20)	④砂粒が混じる ⑤あまい酸化焼成 ⑥にぶい橙色 ⑦外面頂部回転ヘラ削り、口縁横ナデ、内面：横ナデ		
9283 274 —	須恵器 短頸壺 頸部片	1号集石	①40(頸部) ②(26)	④精選 ⑤あまい ⑥灰白色 ⑦内外面とも横ナデ		
9284 274 —	須恵器 壺 脚部片	1号集石	②(30) ③(86)	④精選 ふつう ⑥オリーブ灰色 ⑦内外面とも横ナデ		
9285 274 112	須恵器 壺 口縁部	1号集石	①218 ②(100)	④白色粒が目立つ ⑤良好 ⑥灰色 ⑦外面：横ナデ、内面：口頸部横ナデ、肩部ナデ		
9286 274 112	須恵器 壺 胴部片	1号集石	②(140)	④白色粒が目立つ ⑤良好 ⑥灰色 ⑦外面：横ナデ、内面：横ヘラナデ		
9287 286 —	須恵器 坏 底部	上谷戸1号石組	②(20) ③74	④砂粒 ⑤あまい ⑥にぶい黄色 ⑦内外とも横ナデ、底部糸切り後ナデ		

第3節 中近世の遺構と遺物

1 遺構

(1) 遺構の分布 (第279図、写真図版55)

上谷戸調査区は美濃山丘陵から伸びる尾根の南東斜面部とその裾に当たる緩傾斜面からなる。地形的には前原調査区と一続きの洪積台地面が、台地縁辺から300m～350mの幅で広がり、標高120mの等高線に沿って傾斜変換線が見られここから丘陵斜面部に続く。この傾斜変換線に沿って南北方向の道路(市道)があり、調査地付近ではこの道路を境として、東側が字前原に、西側が丘陵斜面部まで含めて字上谷戸に属す。上谷戸調査区の調査は前原調査区の県道東側部分の調査に引き続き、トレンチ調査による遺構・遺物の確認調査を実施した。その結果、洪積台地の中央部(E・F区)では遺構・遺物は見られず、丘陵の麓にあたるG・H区で溝状遺構・井戸跡・掘立柱建物跡・土坑等が検出された。これらの遺構の多くは市道の西側に集中する。市道の東側では数条の溝状遺構の他は土坑群が検出されただけであった。上谷戸調査区の平坦部は標高117m～125mの間にあるが、市道付近で1m近い段差が見られ、標高123mのあたりにも小さな段差が認められ、丘陵の裾部は平坦面造成のために削られており、平坦部が人為的所産であることを窺わせる。

中・近世と見られる遺構は掘立柱建物跡1棟、井戸跡2基、石組遺構1基、溝状遺構21条、土坑38基である。これらの遺構は表土層下から検出され、遺構の残存状況はあまり良好とは言えない。遺構の時期については埋土に浅間A軽石が見られるものが多く、遺物も陶磁器類をはじめとして概ねその前後と見られることから近世と考えられる。中には浅間A軽石降下以前に埋没した遺構もあり、中世にさかのぼると推定できるものも認められた。また、ここでの遺構は、市道を挟んで東と西、さらに市道西側の下位面と上位面という3つの平坦面にそれぞれ分けられる。ここで検出した中近世遺構について、市道東側、市道西側下位面、市道西側上位面の順に確認状況を説明する。

(2) 市道東側検出の遺構

県道から市道に至るまでの間は約200mあり、この間は標高115m～120mで緩やかな傾斜面となっている。この区間(E・F・G区)での遺構は前原調査区でのE区西群の掘立柱建物跡と、上谷戸調査区に属す部分での遺構がわずかに認められたのみであった。

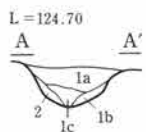
遺構が検出されたのは市道から東約75mの間(Fp～Gmライン)で、溝状遺構3条と土坑23基が検出された。溝状遺構は等高線に沿う南北方向のものが2条、これと交差する東西方向のものが2条検出された。土坑は数種の形状が見られるが、市道に沿って検出された上谷戸第20号溝状遺構より東に集中している。

《溝状遺構》(第279図～第282図、写真図版54・57)

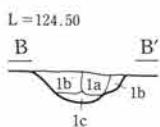
溝状遺構は市道に沿って南北の走行で、両端が調査区外にのびる上谷戸第20号溝状遺構と、これを横切る上谷戸第21号・第22号溝状遺構が検出された。いずれも浅間A軽石が埋土に多量に混じっており、近世以降の畦畔の痕跡と考えられる。上谷戸第20号溝状遺構は上端幅152cm、下端幅88cm、深さ27.5cmで、断面形状はU字形である。第21号溝状遺構からは陶器(常滑系)大甕が出土しており、中世に遡りうる資料である。

《土坑》(第292図～第299図、写真図版59・60)

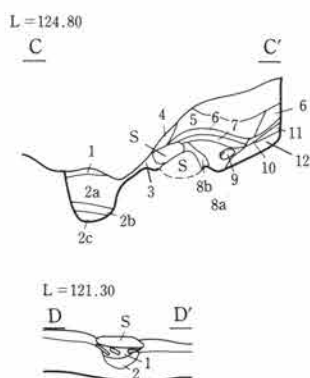
土坑は24基が比較的まとまって検出されており、ピット状の小規模のもので方形(上谷戸第13号・第14号土坑)・円形(上谷戸第15号～第20号土坑)、墓塚と考えられる円形土坑(上谷戸第12号・第21号・第22号土坑)、風倒木痕と考えられる長楕円形のもの(上谷戸第1号～第4号・第6号～第9号・第11号土坑)、いわ



- 上谷戸第11号溝状遺構 A-A'注記
- 1 灰褐色砂質土層 浅間A軽石を主とする砂質土層
 - 1a A軽石を主とし、茶褐色土（I層）が混じったもの
 - 1b 1a層よりA軽石を多量に含む。
 - 1c A軽石の純層に近い砂質土層
 - ※ 1層のA軽石は二次的堆積と考えられる。
 - 2 暗灰褐色土層 粒子細かくよく締っている。

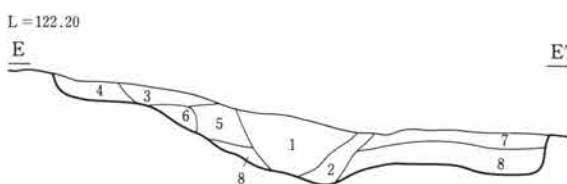


- 上谷戸第10号溝状遺構 B-B'注記
- 1 暗褐色土層 全体的に堅く締っている。
 - 1a やや暗い色調
 - 1b 褐色味が強く堅く締っている。
 - 1c やや暗い色調、堅くよく締っている。

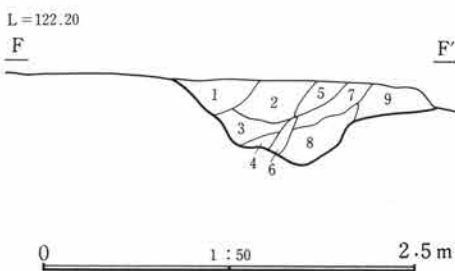


- 上谷戸第11号溝状遺構 C-C'注記
- 1 暗色砂質土 A軽石ではなく流れの影響によるもの。
 - 2a 暗褐色砂質土 A軽石と褐色土の混土
 - 2b A軽石の純層に近い。
 - 2c A軽石と褐色土の混土
 - 3 暗色土 粒子細かく、やや粘性あり。
 - 4 暗黄褐色土
 - 5 黄褐色土
 - 6 淡暗原褐色土 粒子は細かくよく締る。
 - 7 灰褐色土 やや粘性あり。
 - 8a 暗黄褐色土 細砂質で、パサパサしている。
 - 8b 暗黄褐色土 8aよりやや暗い。
 - 9 黒褐色土 締め強くやや粘性あり。
 - 10 淡暗灰色土 粒子細かくよく締る。
 - 11 黄褐色土 細砂土
 - 12 淡灰色土 粒子細かくやや粘性あり。

- 上谷戸第16号溝状遺構 D-D'注記
- 1 暗褐色土 粒子は比較的細かい。締め弱い。
 - 2 黄褐色土 細砂質土



- 上谷戸第14号溝状遺構 E-E'注記
- 1 暗褐色土 粒子はたいへん細かく均質
 - 2 褐色土
 - 3 淡暗色土 細かな幅で版築状を呈す。たいへん堅く締まる。
 - 4 暗褐色土 粒子はたいへん細かい。
 - 5 暗灰色土 暗黄褐色砂質土、茶褐色等が版築状に堆積。たいへん堅く締る。
 - 6 暗灰色土 5と同様で締めなし。
 - 7 暗褐色土 締めなし。
 - 8 淡茶褐色土



- 上谷戸第14号溝状遺構 F-F'注記
- 1 暗褐色土 ローム粒多量に入り締めなし。
 - 2 暗黄褐色土 ローム粒多量に入る。
 - 3 黄褐色土 ローム小ブロック極めて多量に入る。
 - 4 黒褐色土 ローム小ブロック入る。
 - 5 暗色土 ローム粒少々入る。
 - 6 暗色土
 - 7 暗褐色土
 - 8 淡褐色土 粒子細かくやや粘性あり。部分的に堅く締る。
 - 9 淡黄褐色土

第279図 上谷戸調査区溝状遺構土層断面図(1)



遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
168	上谷戸第10号土坑(GK2)	Gd-11g
169	上谷戸第11号土坑(GK12)	Gd-12-13g
170	上谷戸第12号土坑(FK6)	Fr-12g
171	上谷戸第13号土坑(GK11)	Ga-Gb-12g
172	上谷戸第14号土坑(GK10)	Gb-11g
173	上谷戸第15号土坑(GK13)	Gd-13g
174	上谷戸第16号土坑(GK14)	Gc-13g
175	上谷戸第17号土坑(GK15)	Gb-Gc-14g
176	上谷戸第18号土坑(GK16)	Gc-14g
177	上谷戸第19号土坑(GK17)	Gc-14g
178	上谷戸第20号土坑(GK7)	Gb-12g
179	上谷戸第21号土坑(GK1)	Gf-11-12g

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
180	上谷戸第22号土坑(GK3)	Ge-13g
181	上谷戸第23号土坑(GK9)	Gb-Gd-12~14g
182	上谷戸第24号土坑(GK8)	Gf-Gg-13-14g
183	上谷戸第25号土坑(GE2)	Gw-Gx-11-12g
184	上谷戸第26号土坑(GK18)	Gq-Gr-08-09g

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
140	上谷戸第9号溝状遺構(HD3)	Hi-07~10g
141	上谷戸第10号溝状遺構(HD2)	Hj-Hk-08-09g
142	上谷戸第11号溝状遺構(HD1)	Gx-Hi-05~09g
143	上谷戸第12号溝状遺構(GD6)	Gs-Gt-06~09g
144	上谷戸第13号溝状遺構(GD7)	Gr-Gt-03~08g
145	上谷戸第14号溝状遺構(GD8)	Gs-Gy-04~09g
146	上谷戸第15号溝状遺構(GD9)	Gt-Gw-06-07g
147	上谷戸第16号溝状遺構(GD11)	Gw-Gy-09~15g
148	上谷戸第17号溝状遺構(GD13)	Gv-Hb-13~15g
149	上谷戸第18号溝状遺構(GD12)	Gu-Gv-12~16g
150	上谷戸第19号溝状遺構(GD10-4)	Gh-Gp-05~18g
151	上谷戸第20号溝状遺構(GD1)	Gg-Gk-09~20g
152	上谷戸第21号溝状遺構(GD2)	Gg-Gk-16~18g
153	上谷戸第22号溝状遺構(GD3)	Gd-Gg-09-10g
154	上谷戸第23号溝状遺構(GD5)	Gh-Gt-06~09g
155	上谷戸第1号掘立柱建物跡(GB1)	Gp-Gq-14~16g
156	上谷戸第1号石組み遺構(GE1)	Ha-14g
157	上谷戸第1号井戸跡(GE3)	Gu-Gv-15g

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
159	上谷戸第1号土坑(FK7)	Fq-Fr-11-12g
160	上谷戸第2号土坑(FK5)	Fr-Fs-13-14g
161	上谷戸第3号土坑(FK4)	Fs-Ft-13-14g
162	上谷戸第4号土坑(FK3)	Fv-Fw-10-11g
163	上谷戸第5号土坑(FK2)	Fv-Fw-12-13g
164	上谷戸第6号土坑(FK1)	Fw-Fx-12-13g
165	上谷戸第7号土坑(GK5)	Fy-13g
166	上谷戸第8号土坑(GK6)	Ga-11-12g
167	上谷戸第9号土坑(GK4)	Ga-Gb-13-14g

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
185	上谷戸第27号土坑(GK19)	Gl-04-05g
188	上谷戸第30号土坑(HK10)	Hb-05g
189	上谷戸第31号土坑(HK5)	Hb-Hc-06g
190	上谷戸第32号土坑(HK9)	He-06g
191	上谷戸第33号土坑(HK6)	He-07g
192	上谷戸第34号土坑(HK4)	Hj-Hk-06g
193	上谷戸第35号土坑(HK3)	Hk-06-07g
194	上谷戸第36号土坑(HK2)	Hk-08g
195	上谷戸第37号土坑(HK1)	Hk-09g

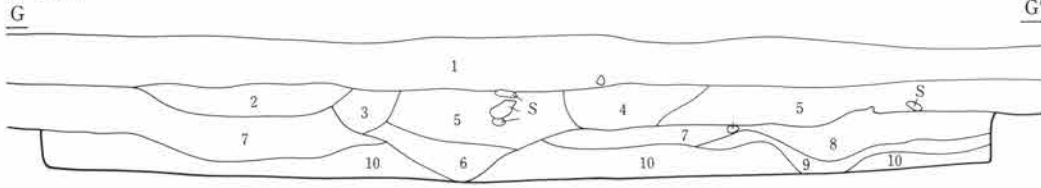
*遺構名称は遺構番号で明示。

*遺構名称は遺構番号で示した



第280図 上谷戸調査区平坦部遺構全体図

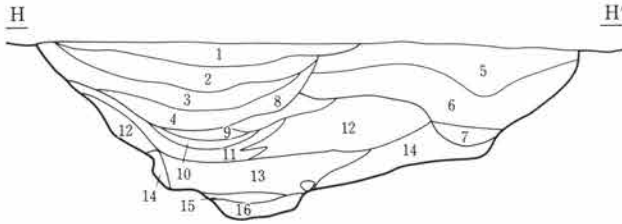
L = 130.10



上谷戸第17号溝状遺構 G-G'注記

- 1 茶褐色土 A軽石混入
- 2 褐色土 締りあり。
- 3 暗褐色砂質土
- 4 暗褐色土 粒砂混じる
- 5 褐色土 細砂混じる
- 6 黒褐色土 細砂混じるが、粘性あり
- 7 暗色土 やや粘性あり
- 8 黒色土 粘性あり
- 9 暗灰色粘質土
- 10 暗茶褐色粘質土 非常によく締る

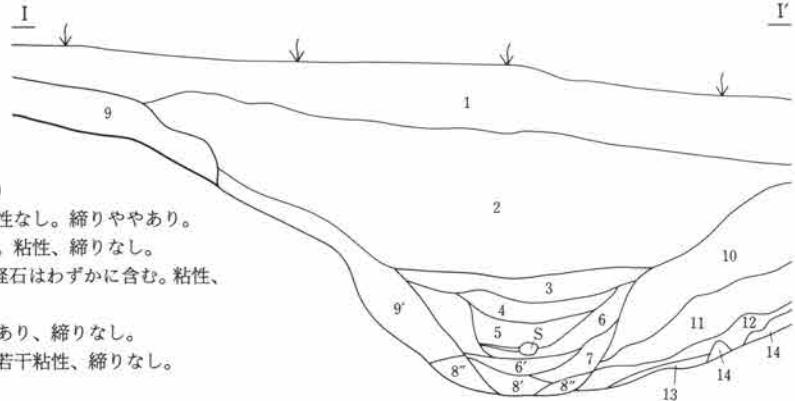
L = 119.90



上谷戸第19号溝状遺構 H-H'注記

- 1 暗色土
- 2 灰褐色土 粘性あり
- 3 暗褐色土
- 4 暗灰色粘質土
- 5 暗褐色土 砂質分多し。締りなし
- 6 褐色土 砂質分多し
- 7 灰褐色粘質土 黄色土小ブロック混入
- 8 灰褐色土
- 9 暗灰色粘性土 砂質分混入
- 10 暗灰色砂質土
- 11 暗褐色土
- 12 暗色土
- 13 暗灰色粘質土と淡暗灰色砂質土の混土層
- 14 淡暗灰色砂質土 若干粘質土混じる
- 15 淡暗灰色砂質土
- 16 黒褐色砂質土 急速な水流があったものとする

L = 120.30

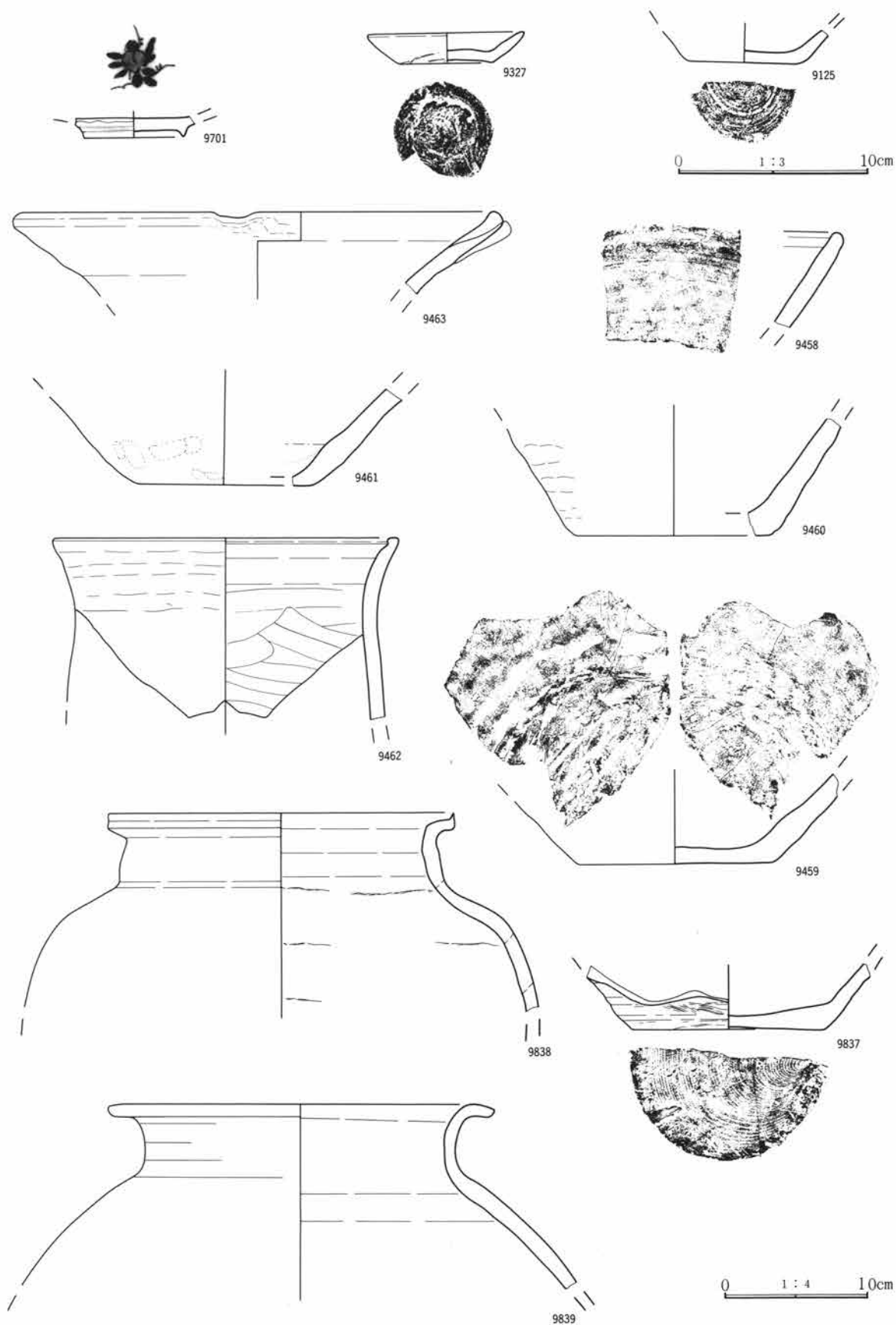


上谷戸第19号溝状遺構 I-I'注記 (北壁)

- 1 茶褐色土 A軽石を多量に含む。粘性なし。締りややあり。
- 2 茶褐色土 1層より軽石はやや多い。粘性、締りなし。
- 3 濃茶褐色土 わずかに赤味を帯びる。軽石はわずかに含む。粘性、締りなし。
- 4 暗茶褐色土 3と同様だが、粘性ややあり、締りなし。
- 5 暗赤褐色土 軽石、黄色土粒を含む。若干粘性、締りなし。5'は粒子粗くやや砂質。
- 6 暗茶褐色土 赤味はわずかで粘性、締りなし。6'は多少赤味が勝る。黄色土粒もわずかだが含まれる。
- 7 茶褐色土 9'と4、5層あたりの漸移層、ローム粒含む。粘性、締りなし。
- 8 赤味を帯びる暗茶褐色土 黄色土粒を含む。粘性、締りなし。8'はやや砂質。黄色土粒の量も8より多い。8''もやや砂質。色調がやや淡く灰色味が出る。
- 9 茶褐色土とローム土との混層 粘性、締りなし。軽石はほとんど含まれない。9'はローム土の割合が多い。
- 10 暗茶褐色土 軽石はほとんど含まず、黄色土粒を若干含む。粘性、締りなし。
- 11 暗茶褐色土 10と同様で黄色土粒は少し多い。粘性がある。締りあり。
- 12 暗茶褐色土 やや赤味を帯び粘性が強い。よく締っている。
- 13 白色粘土 ところどころが赤い
- 14 暗茶褐色土とローム塊との混層 ローム塊の方が多い。

0 1:50 2.5 m

第281図 上谷戸調査区溝状遺構土層断面図(2)



第282図 上谷戸調査区溝状遺構出土遺物実測図—中近世遺物—

ゆるな穴状土坑に類するもの（上谷戸第5号・第11号・第23号・第24号土坑）が見られ、遺物は上谷戸第22号土坑と上谷戸第24号土坑から出土している。

上谷戸第1号土坑（FK7）は市道東側の東端に近いFq・Fr-11・12グリッドにあり、径450cm×270cm、深さ66cmの楕円形の土坑である。確認面標高は116.24mで、埋土には①黒色土、②暗黄褐色土、③黄褐色土が観察され、遺物は見られない。（第292図、写真図版59）

上谷戸第2号土坑（FK5）は市道東側のFr・Fs-13・14グリッドにあり、径455cm×258cm、深さ99cmの楕円形の土坑である。確認面標高は116.46mで、埋土には①茶褐色土、②暗灰褐色土、③黒色土、④黒褐色粘質土が観察され、遺物は見られない。（第292図）

上谷戸第3号土坑（FK4）は市道東側のFs・Ft-13・14グリッドにあり、径404cm×147cm、深さ71cmの長楕円形の土坑である。確認面標高は116.58mで、埋土には①黒色土、②黄褐色土、③暗褐色土が観察され、遺物は見られない。（第292図、写真図版59）

上谷戸第4号土坑（FK3）は市道東側のFv・Fw-10・11グリッドにあり、径398cm×312cm、深さ83cmの楕円形の土坑である。確認面標高は116.58mで、埋土には①黒色土、②暗黄褐色土、③黄褐色土が観察され、遺物は見られない。（第292図、写真図版59）

上谷戸第5号土坑（FK2）は市道東側のFv・Fw-12・13グリッドにあり、径327cm×267cm、深さ36cmのほぼ方形の浅い土坑である。確認面標高は117.20mで、埋土には①黒色土、②暗黄褐色土、③黄褐色土が観察され、遺物は見られない。（第292図、写真図版59）

上谷戸第6号土坑（FK1）は市道東側のFw・Fx-12・13グリッドにあり、径405cm×183cm、深さ87cmの長楕円形の土坑である。確認面標高は117.26mで、埋土には①黒色土、②暗黄褐色土、③黄褐色土が観察され、遺物は見られない。（第292図、写真図版59）

上谷戸第7号土坑（GK5）は市道東側のFy-13グリッドにあり、径414cm×168cm、深さ60cmの長楕円形の土坑である。確認面標高は117.44mで、埋土には①暗茶褐色土、②ローム粒混暗茶褐色土が観察され、遺物は見られない。（第293図）

上谷戸第8号土坑（GK6）は市道東側のGa-11・12グリッドにあり、径297cm×147cm、深さ62cmの長楕円形の土坑である。確認面標高は117.76mで、埋土には①暗茶褐色土、②明茶褐色土が観察され、遺物は見られない。（第293図、写真図版59）

上谷戸第9号土坑（GK4）は市道東側のGa・Gb-13・14グリッドにあり、径552cm×243cm、深さ48cmの長楕円形の土坑である。確認面標高は117.50mで、埋土には①暗茶褐色土、②ローム粒混暗茶褐色土が観察され、遺物は見られない。（第293図）

上谷戸第10号土坑（GK2）は市道東側のGd-11グリッドにあり、径289cm×153cm、深さ99cmの不整長方形の土坑である。確認面標高は118.16mで、埋土には①黒色土、②黒褐色土、③茶褐色土が観察され、遺物は見られない。（第293図）

上谷戸第11号土坑（GK12）は市道東側のGd-12・13グリッドにあり、径289cm×165cm、深さ12cmの不整長方形の土坑である。確認面標高は118.10mで、埋土には①黒色土、②黒褐色土、③茶褐色土が観察され、遺物は見られない。（第293図）

上谷戸第12号土坑（FK6）は市道東側のFr-12グリッドにあり、径135cmの円形で、深さ54cmである。北東部は別のピットと考えられる。確認面標高は116.40mで、土層確認がなされていないが耕作土と同様の茶褐色土であり、近世後半以降と思われる。遺構の形状からは墓壇に類したものと考えられる。（第293図、写真

図版59)

上谷戸第13号土坑 (GK11) は市道東側の Ga・Gb-12グリッドにあり、長径153cm、短径111cm、深さ26cmの隅丸長方形の土坑で、確認面標高は117.50m、埋土は①ロームを主とする明茶褐色土である。(第293図)

上谷戸第14号土坑 (GK10) は市道東側の Gb-11グリッドにあり、長径87cm、短径84cm、深さ26cmの隅丸長方形の土坑で、確認面標高は117.47m、埋土は①ロームを主とする明茶褐色土で軽石を含む。(第293図)

上谷戸第15号土坑 (GK13) は市道東側の Gd-13グリッドにあり、径84cm×72cm、深さ63cmのほぼ円形の土坑である。確認面標高は118.60mで、埋土は①暗茶褐色土、②明茶褐色土が観察される。(第293図)

上谷戸第16号土坑 (GK14) は市道東側の Gc-13グリッドにあり、径87cm×72cm、深さ57cmのほぼ円形の土坑である。確認面標高は117.74mで、埋土は①暗茶褐色土、②明茶褐色土が観察される。(第293図)

上谷戸第17号土坑 (GK15) は市道東側の Gb・Gc-14グリッドにあり、径60cm×54cm、深さ33cmの円形の土坑である。確認面標高は117.77mで、埋土は①明茶褐色土が観察される。(第293図)

上谷戸第18号土坑 (GK16) は市道東側の Gc-14グリッドにあり、径95cm×62cm、深さ69cmの円形の土坑である。確認面標高は117.77mで、埋土は①茶褐色土、②暗茶褐色土、③明茶褐色土が観察される。(第293図)

上谷戸第19号土坑 (GK17) は市道東側の Gc-14グリッドにあり、径74cm×66cm、深さ33cmの円形の土坑である。確認面標高は117.72mで、埋土は①暗茶褐色土が観察される。(第293図)

上谷戸第20号土坑 (GK7) は市道東側の Gd-12グリッドにあり、径129cm×122cm、深さ66cmのほぼ円形の土坑である。確認面標高は117.68mで、埋土は①暗茶褐色土、②明茶褐色土が観察される。(第294図)

上谷戸第21号土坑 (GK1) は市道東側の Gf-11・12グリッドにあり、径188cm×174cm、深さ51cmのほぼ円形の土坑で、確認面標高は118.50mで、埋土は①暗灰色土、②黒褐色土、③黄褐色土が観察される。(第294図)

上谷戸第22号土坑 (GK3) 土坑は市道東側の Ge-13グリッドにあり、径252cm×228cm、深さ69cmの円形土坑である。確認面標高は118.24mで、埋土には①暗茶褐色土、②茶褐色土が認められ、陶器の甕の口縁部片、軟質陶器製の内耳鍋口縁部片が出土している。(第295図・第296図、写真図版60)

上谷戸第23号 (GK9) 土坑は市道東側の Gb~Gd-12~14グリッドにあり、径945cm×600cm、深さ73cmの不整形の竪穴状土坑である。確認面標高は118.10mで、埋土には①暗茶褐色土、②明茶褐色土、③黒色土が認められる。(第297図)

上谷戸第24号土坑 (GK8) 土坑は市道東側の Gf・Gg-13・14グリッドにあり、径479cm×398cm、深さ36cmの不整形の竪穴状土坑である。確認面標高は118.30mで、埋土には①暗茶褐色土、②明茶褐色土、③黒色土が認められる。(第298図、第299図、写真図版60)

(2) 市道西側下位面検出の遺構

市道西側の下位面は標高122m~123mの等高線が通るHbライン付近までで、この一角には調査前に住宅があり、撤去の際に攪乱を受けて遺構確認が不可能な部分があったが、掘立柱建物跡1棟、石組遺構1基、井戸跡1基、溝状遺構9条、土坑3基が検出された。下位面の西側は上位面との境をなす段差が、北側には丘陵裾部との境をなす段差が認められ、また、東側で検出された上谷戸第19号溝状遺構は規模も大きく、山を背にした屋敷の東側を画す性格を持つと見られ、中世から近世にかけての時期の屋敷跡であると推定される。《溝状遺構》(第279図~第282図、写真図版54・55・56・57)

市道西側下位面で検出された溝状遺構は10条あり、2条に浅間A軽石が埋土中に認められ、他はその時点では埋没しており、層的には近世前半ないし中世にまで遡りうる。また幾つかの遺構には重複関係が認められる。

上谷戸第19号溝状遺構は市道に沿って南北方向の走行で確認され南北両端が調査区外にのびる。調査区を横断する溝と考えられるが中央部に住宅があり撤去の際に攪乱を受け、調査時には南北で別の遺構として検出したが、走行・形状・埋土から同一の遺構と判断した。確認面標高は南で119.80m、北で120.20mである。走行方位はN-29°-Eを示す。断面形状は箱型に近いU字形で、南側では底面にさらに小溝が見られる。上端幅は市道にかかり確認できないものの最大で4.5mを越えると推定され、下端幅も1.2mあり、最深部で1.94mを測る。南側底面の小溝は上端幅50~60cm、深さ15~30cmの浅いU字形である。埋没は浅間A軽石降下以前であり、底面小溝には流水の痕跡が認められた。埋没の過程で2度にわたる掘り返しが認められる。

出土遺物は板碑・土師質土器・軟質陶器・陶器などである。9328の土師質土器はロクロ成形の浅い小型皿である。軟質陶器は9458~9461の摺鉢と9462に内耳鍋が見られる。また、9839は陶器（常滑系）の大甕口縁部であり、いずれも中世のもので、本遺構の年代を示す資料と考えられる。(写真図版124・128)

上谷戸第22号溝状遺構はGq-06グリッド付近をコーナーとして鍵形に確認された溝状遺構である。下位面の造成に伴うものと見られ、通水を目的としたものではない。上端幅2.2m、下端幅1.4m、深さは20cmである。本遺構は上谷戸第19号溝状遺構とともに下位面を方形に区画する性格を持つと考えられる。

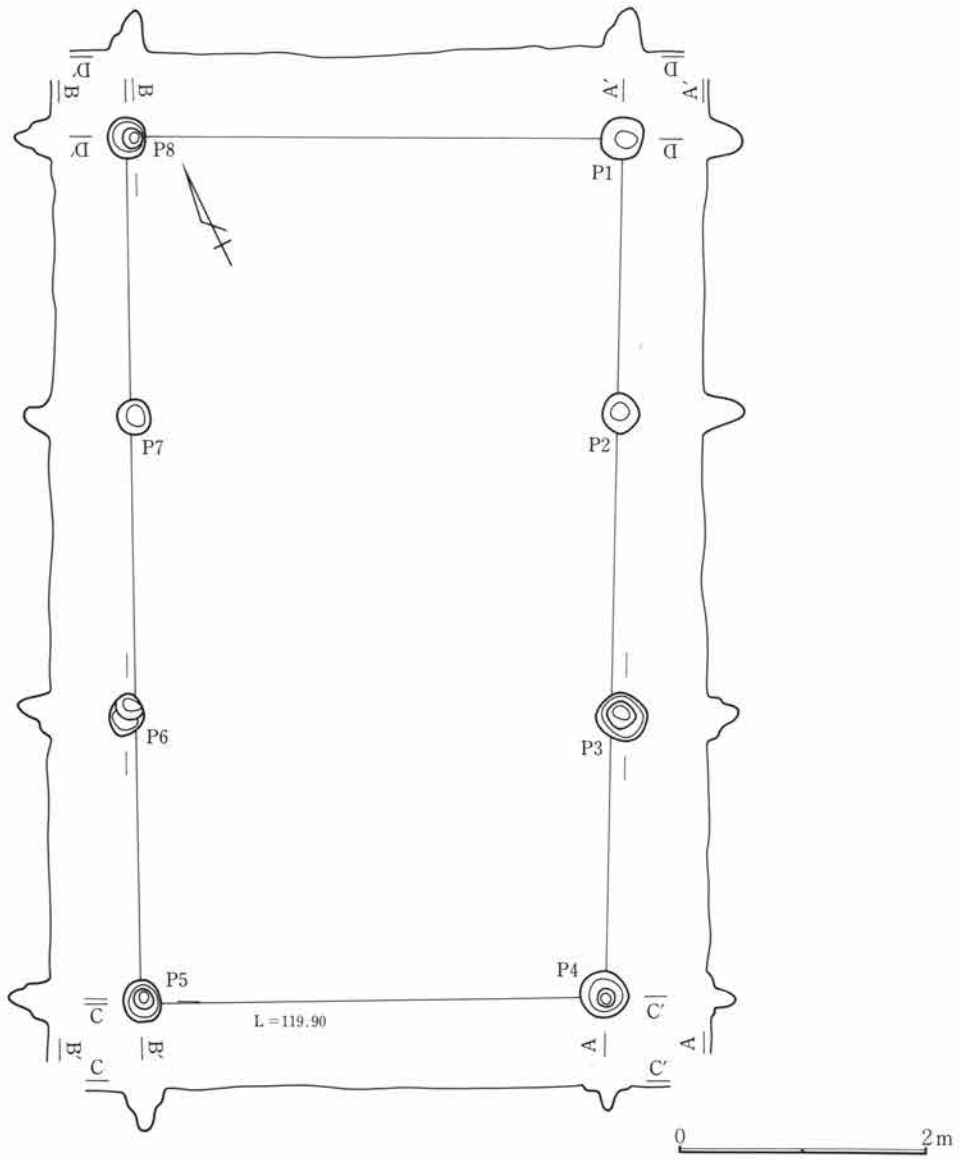
上谷戸第12号溝状遺構と上谷戸第13号溝状遺構は平行する南北方向の溝状遺構であるが、埋土に浅間A軽石が認められ、下位面の溝状遺構の中では新しい時期のものである。(写真図版56)

上谷戸第14号溝状遺構と上谷戸第15号溝状遺構は下位面の山際に位置する溝で、浅間A軽石降下以前に埋没した溝である。両者に切り合い関係があるが上谷戸第14号溝状遺構がやや新しい。上谷戸第14号溝状遺構はGx-09グリッドで終息する。そして、この部分から南~南東方向へ暗渠である上谷戸第16号溝状遺構がのびる。暗渠用石材には片岩系の扁平な円礫が使用されているが、板碑の転用例も認められる。走行がやや鍵の手であることから屋敷に伴うものと推定される。上谷戸第17号溝状遺構は下位面の南縁で検出され、第1号石組遺構・第1号井戸跡・第16号溝状遺構との重複が認められる遺構である。(写真図版55)

上谷戸第14号溝状遺構は、下位面の西よりに位置し、走行はN-45°-Eで、標高122mの等高線にほぼ一致する。確認長は31mで、南部においては遺構が流失していた。この間の高度差は80cmである。また断面形状は上部を大きく開くU字状を呈し、上端幅1~1.3m、下端幅は30~40cm、最深部で76cmを測る。なお本溝はいったん埋没した後、若干北寄りに再度掘り返された痕跡が認められる。また、北岸上にはこれと併走する形で約15mにわたって硬化面が確認され、道路の痕跡と考えられる。この硬化面と溝とは関連性があるものと考えられる。本遺構は上谷戸第13号・第15号溝状遺構と重複関係にあるがいずれの遺構よりも古い。(写真図版55)

上谷戸第15号溝状遺構は、上谷戸第14号溝状遺構の北約50cmに位置し、これとほぼ併走する走向を示す。だが全体的な平面形状は鍵形を呈し、両端部は南東方向へ曲がり上谷戸第14号溝状遺構を断ち切る。確認全長は12.5mであった。断面形状は緩いU字状を呈し、上端幅は40~60cm、最深部で39cmを測る。底面には一定方向への傾斜は見られず、中央部やや北寄りの深所と比して北側では14cm、南側では25cmそれぞれ高くなっている。なお、比較的深く掘り込まれた部分のその底部付近からは、直径20~30cmほどの円礫が投棄されたような状態で、約7mにわたって検出されている。また下部の埋土にはロームブロックが多量に混入していたことから本遺構の埋没は人為的なものであった可能性が考えられる。上谷戸第13号溝状遺構と重複しているが、これよりも古い。

上谷戸第17号溝状遺構は、丘陵斜面の傾斜が緩みをみせ始めるG区の西南端からH区東南端にかけて位置する。基本的には西から東へ下る走向を示すと思われるが、調査区内では南西方向から出現したあと緩やかな円弧を描きながら南東方向へ戻って行く様子が見られる。確認全長は36mであった。断面は上手ではV字形

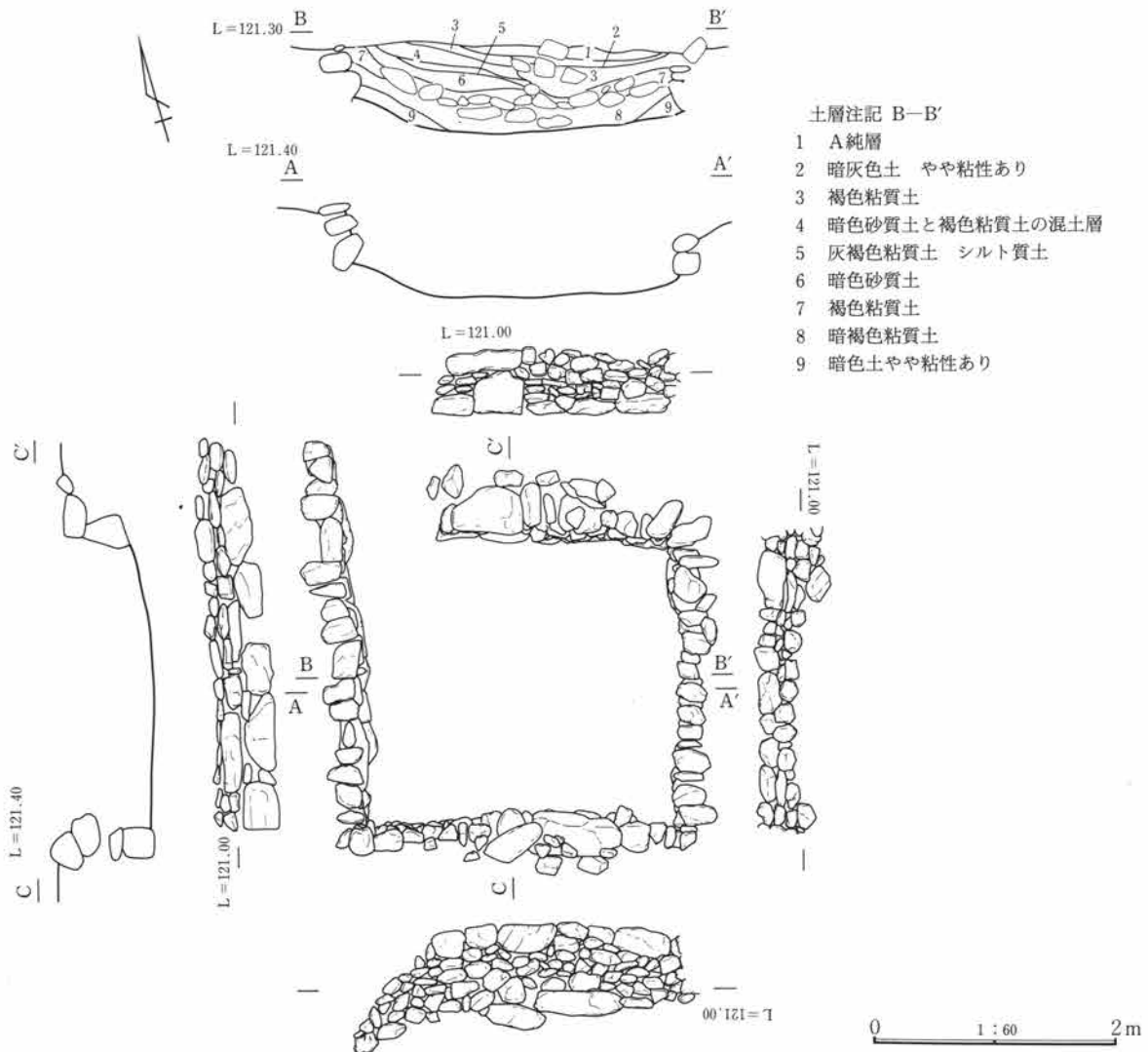


第283図 上谷戸第1号掘立柱建物跡遺構平面図

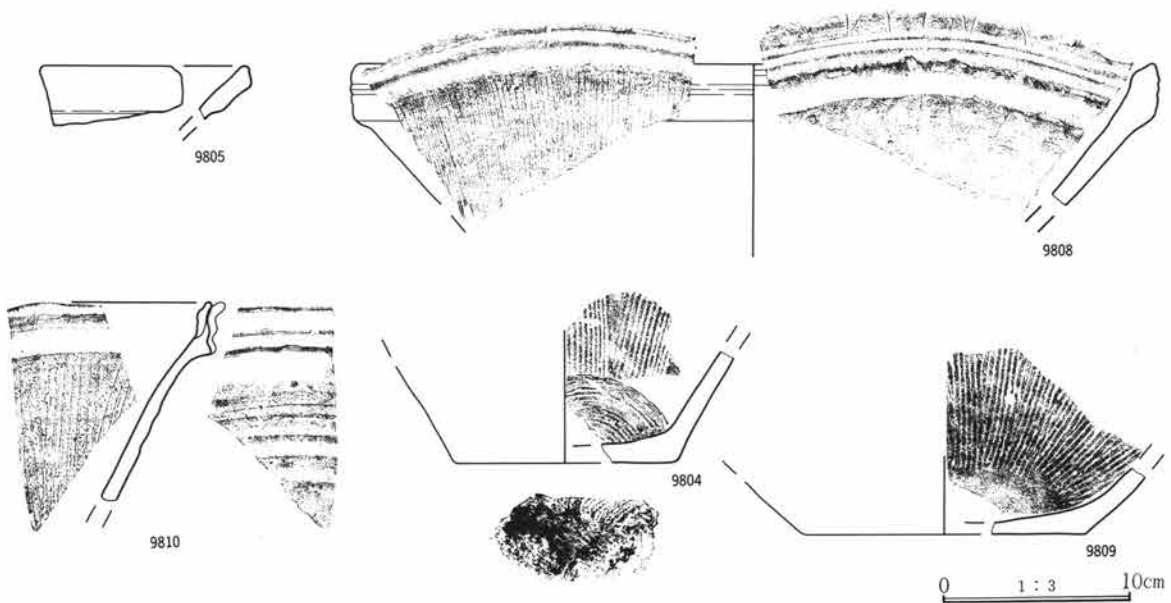
第31表 上谷戸第1号掘立柱建物跡計測表

柱穴番号	長径×短径×深さ	底面標高	柱間計測値(cm)	
			桁行	梁行
P 1	36×32×26	119.86	P 1～P 2 215	P 1～P 8 391
2	29×28×31	119.59	P 2～P 3 236	
3	39×36×23	119.05	P 3～P 4 225	P 2～P 7 387
4	39×35×20	119.67		
5	33×30×32	119.51	P 8～P 7 218	P 3～P 6 388
6	34×27×25	119.61	P 7～P 6 228	
7	27×25×22	119.64	P 6～P 5 230	P 4～P 5 370
8	33×32×30	119.57		

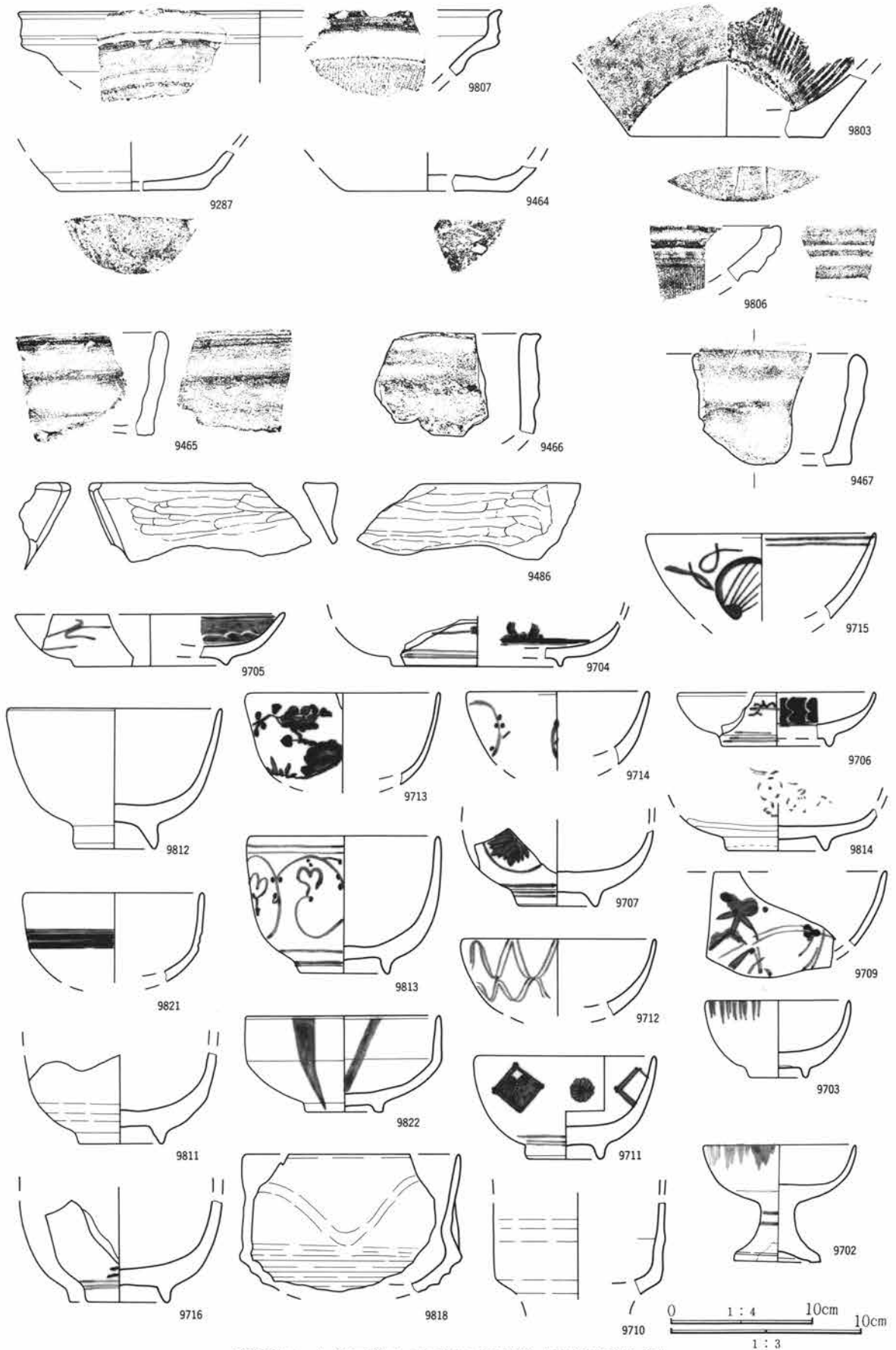
遺構名称	調査名称	棟方位	規模 (間)×(間)	面積(m ²)	桁行(m)		梁行(m)		庇(m)	柱穴平面 形状	備考
					①長辺	②短辺	①長辺	②短辺			
第1号掘立柱建物跡	G B 1	N-25°-E	3×1	25.7	①6.76	②6.76	①3.91	②3.70	円		



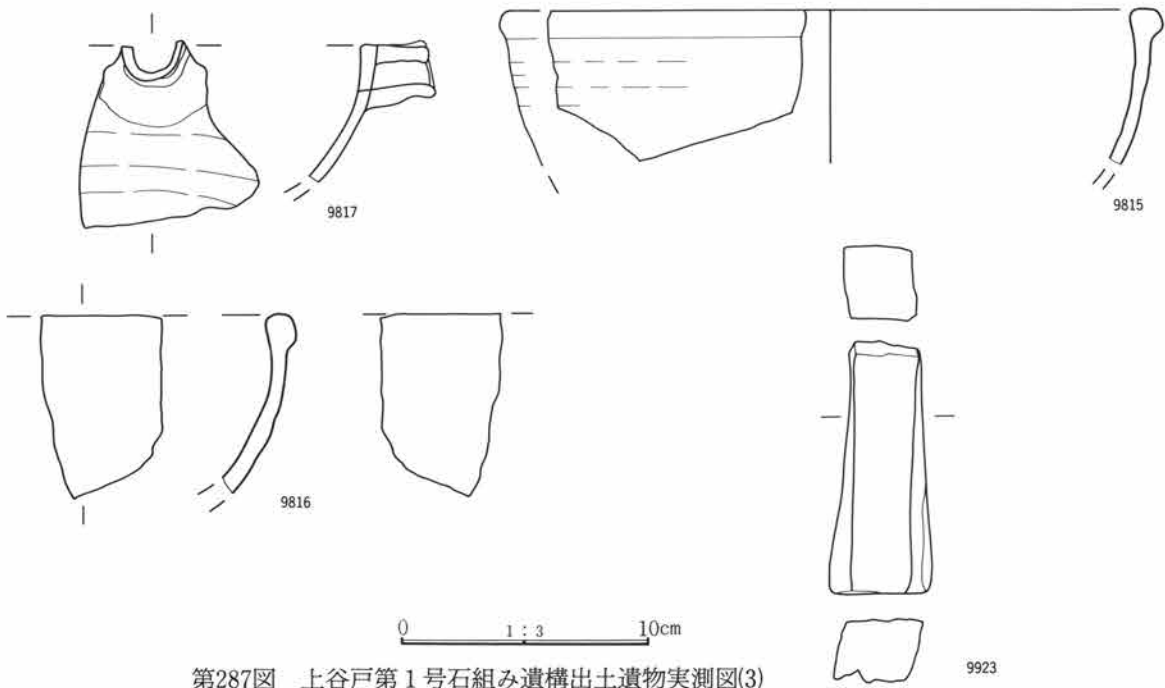
第284図 上谷戸第1号石組み遺構平面図



第285図 上谷戸第1号石組み遺構出土遺物実測図(1)



第286図 上谷戸第1号石組み遺構出土遺物実測図(2)



第287図 上谷戸第1号石組遺構出土遺物実測図(3)

状を示すが、中ほどより下手においては上部の大きく開いたU字形状である。上端幅80~130cm、底部幅は上手で10~20cm、下手では30~40cmを測る。最深部は46cmである。また溝底部は西から東へ132cmの比高差で傾斜する。埋土には明瞭な流水痕跡は確認できず、下手へいくほど灰色粘質土の厚く堆積することから、排水溝とは別の性格の遺構と推定される。上谷戸第1号石組遺構、上谷戸第16号・第18号溝状遺構、そして上谷戸第1号井戸跡と重複関係にあり、上谷戸第1号井戸跡より新しく、他の3遺構よりは古い。(写真図版57)《掘立柱建物跡》(第283図、写真図版58)

下位面は屋敷跡と考えられるが、建物については掘立柱建物跡を1棟(上谷戸第1号掘立柱建物跡)確認した。下位面南東部に位置し、3間×1間の規模で、上谷戸第19号溝状遺構の西に約3.6m離れて棟方向を溝の走行とほぼ同じくする。柱穴埋土は上谷戸第19号溝状遺構埋土にも共通する黒色土が見られることから、関連のある遺構と考えられる。

《石組遺構・井戸跡》(第284図~第291図、写真図版58)

下位面では調査時には3基の井戸跡と考えられる遺構を検出している。しかし、整理の過程で遺構の形状・埋土等の検証の結果、1基については排水枿のような性格の石組遺構(上谷戸第1号石組遺構)、他の1基については浅い竪穴状土坑に類する性格のもの(上谷戸第25号土坑)と考え、井戸跡としたのは1基(上谷戸第1号井戸跡)である。また、上谷戸第19号溝状遺構の南端に円形石組の井戸跡が $\frac{1}{3}$ 程度確認されたが、比較的新しく、最近まで使用されていたとのことで報告から除いた。

上谷戸第1号石組遺構は、調査区の南縁に近いHa-14グリッドで検出され、下位面の南西隅に位置する。遺構は北西隅を開口する方形の石組みが見られ、石組みは60cm~90cmの高さで円礫の横口を面として直に積み上げられている。石組みは北辺が1.9m、東辺が2.2m、南辺が2.5m、西辺が3.2mで、石は掘り方底面から積まれており後詰めは認められない。東西長で4.5mを測る方形掘り方が認められている。石組と掘り方との間の土層観察がなされず、両者の関係は不明であるが、北西隅の開口部に掘り方に共通する傾斜面が見られ、傾斜面上端と掘り方上端がほぼ一致することから石組遺構のための掘り方と考えられる。また、本遺構は上谷戸第17号溝状遺構を切って構築されている。

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

埋土中からは多量の陶磁器類を出土している。陶器製摺鉢、軟質陶器製焙烙、肥前系磁器の碗皿類、瀬戸美濃系陶器の碗などである。これらの遺物は17世紀末から始まり18世紀前半～中頃のものが多く、本遺構の時期を示す。また、埋土には泥質・シルト質のやや還元された色調を呈すものが互層となって見られ、下位面でも谷に面した低い位置にあることや、埋土中の多量の遺物投棄から、排水施設としての性格の遺構と考えられる。なお、遺物は市道西側上位面で大量に出土したものと共通性が認められる。

上谷戸第1号井戸跡は上谷戸第1号石組遺構の東約20mのGu・Gv-15・16グリッドで検出された。確認面より約1mの深さまでしか確認できなかった。確認形状は径3.3m～4.0mの不整形円で浅い皿状であり、北に石組みが見られる。井戸に伴う石組みとして検出したが、石組みが部分的でありやや不自然で検討を要す。本遺構は2条の溝状遺構と重複するが、いずれも本遺構埋土中にあり、本遺構に後出する。遺物は土師質土器皿(9323)、軟質陶器摺鉢(9468・9469)・内耳鍋(9470・9471)等が見られ、いずれも中世のものである。このほかに天目碗と見られる陶器(9826)も出土しているが、これについては遺構との関係が明瞭ではない。遺構の重複関係と遺物からは、上谷戸調査区の中近世遺構の中で最も古い時期に属すと考えられる。

《土坑》(第301図～第304図、写真図版126)

市道西側下位面では3基の土坑を検出した。

上谷戸第25号土坑(GE2)は、下位面西よりのGw・Gx-11・12グリッドで検出した。調査時には井戸跡と考えたが、浅い竪穴状の土坑と判断した。平面形状は不整形楕円形で、長径475cm、短径348cm、深さ78cmで、確認面標高は120.63mである。(第300図)

上谷戸第26号土坑(GK18)は、下位面西よりのGq・Gr-08・09グリッドで検出した。平面形状は浅い楕円形のいわゆる竪穴状遺構で、長径522cm、短径471cm、深さ54cmで、確認面標高は121.03mである。遺物は、土師質土器の皿(9325)、軟質陶器の摺鉢(9476・9477)・内耳鍋(9478～9480)が出土しており、いずれも中世である。

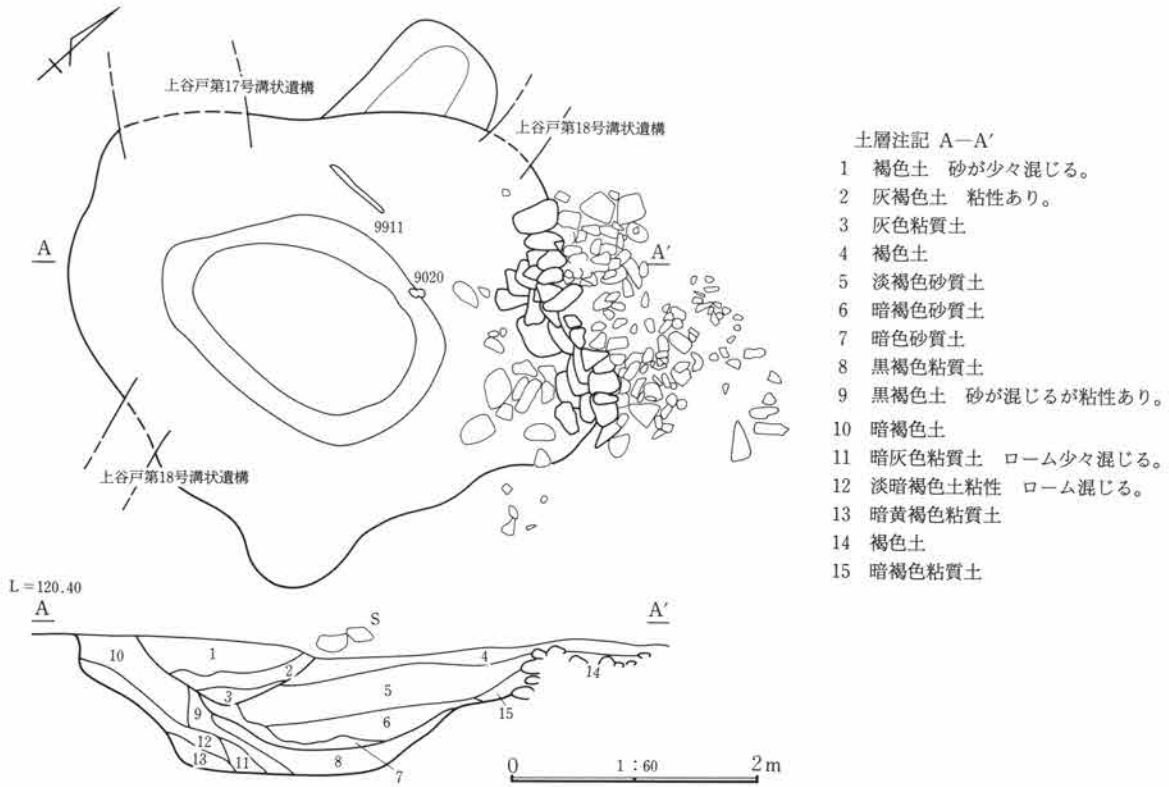
上谷戸第27号土坑(GK19)は、下位面の北よりの一段高くなるG1-04・05グリッドで検出された円形土坑である。径261cm×227cm、深さ108cmで、大甕をはじめとする遺物が出土した。調査時に丸掘りしてしまったために埋土の観察はされず不明であるが、遺物からは近世の中頃か後半と推定される。9836は常滑系の焼締陶器大甕、9481は軟質陶器の焙烙、9426の土師質土器はロクロ成形の皿形で内面に墨書が見られる。9718は肥前系京焼風陶器、9719～9721は肥前系磁器の染付碗、9828は瀬戸系のいわゆる尾呂茶碗である。

(3) 市道西側上位面及び斜面部検出の遺構

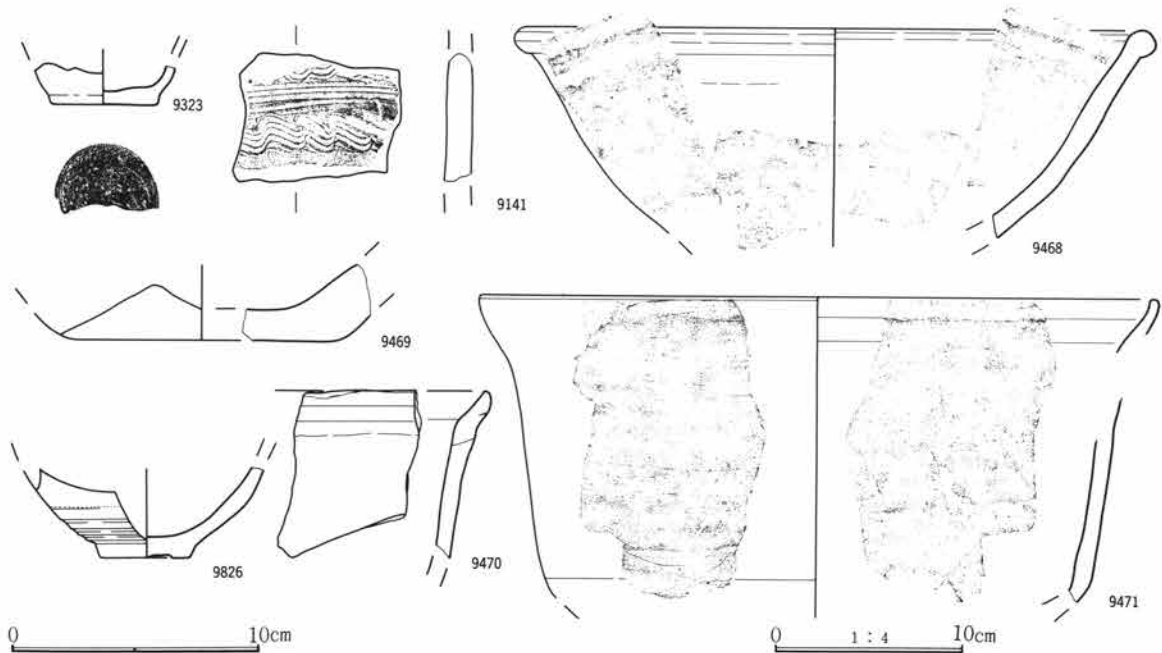
市道西側の上位面は標高125m付近に沿って斜面部とは明瞭に区分される段差が存在し、下位面とも約1m近い比高差の見られる一角である。この面は山裾を削り取って平坦に造成したと見られ、方形に区画された形跡が段差に認められる。ここでの遺構は表土掘削後に浅間A軽石を含む溝状遺構・土坑等が検出され、建物自体の痕跡を認めないものの溝・土坑の配置と平坦面の造成の様子、それと出土遺物の在り方から近世の屋敷跡と推定した。下位面との関係では、出土遺物に大きな差異は見られないものの若干古いものが下位面出土のものに見られることや、遺構埋土に浅間A軽石を含むものが多く、上位面の遺構が下位面よりやや下る時期と推測された。丘陵部は上位面の造成で裾が削られて段差が見られるが、段差より上の斜面部にも上位面に関連すると考えられる溝状遺構や井戸跡が検出された。

《溝状遺構》(第213図、第279図、写真図版54)

斜面部で検出された7条の溝状遺構(上谷戸第2号～第10号溝状遺構)はすべて浅間A軽石を何らかの形で埋土としている。上谷戸第2号及び第3号溝状遺構は締りのない暗茶褐色土を埋土とすることから耕地の



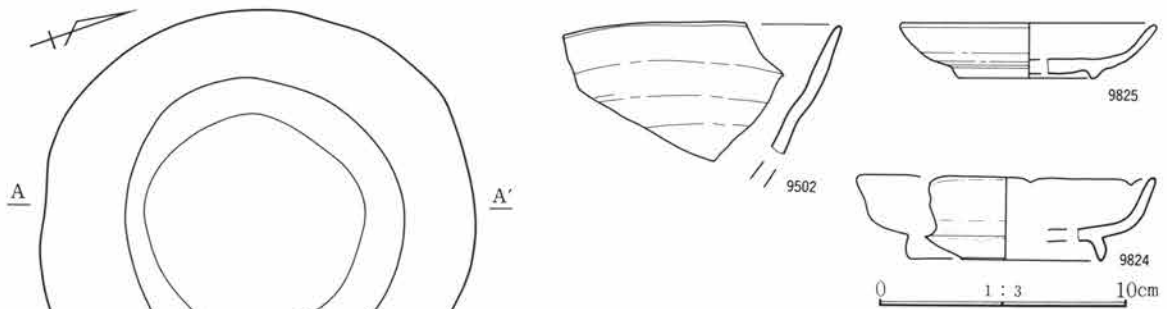
第288図 上谷戸第1号井戸跡遺構平面図



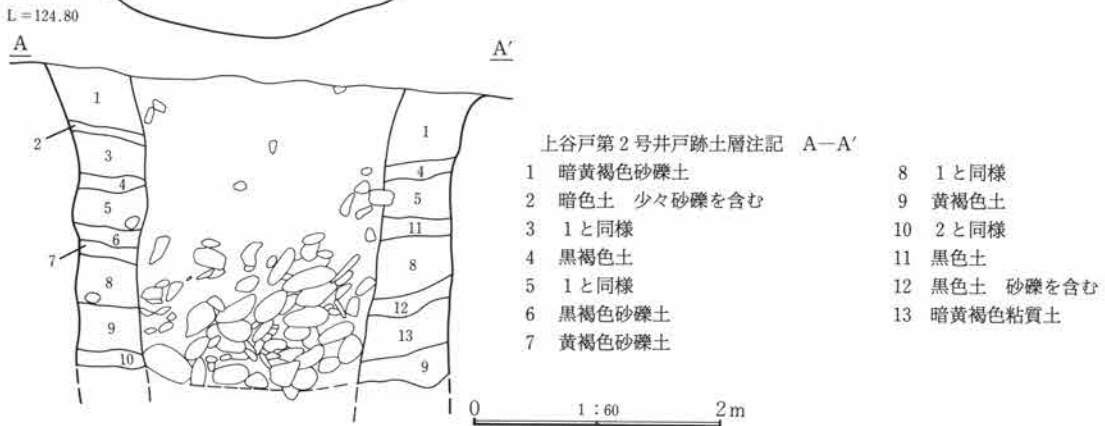
第289図 上谷戸第1号井戸跡出土遺物実測図

境をなす溝状遺構と推定され、他の溝状遺構もこれと同様のものと考えられる。上谷戸第4号溝状遺構と上谷戸第5号溝状遺構に切り合い関係がみられるものの時間的には大きな差異は認め難い。南北方向のものは耕地境としての性格がかなり高い。上谷戸第5号溝状遺構に純層に近い浅間A軽石が見られ、斜面部検出の近世溝状遺構の中では最も古い。またこの溝はHb-04グリッドで上位面の上谷戸第11号溝状遺構に落ち込み、埋土にも共通性が認められる。

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物



第291図 上谷戸第2号井戸跡出土遺物実測図



第290図 上谷戸第2号井戸跡遺構平面図

上谷戸第11号溝状遺構は、丘陵裾部を削り平坦部上位面を造成した際の境界を区画する性格の遺構と思われる。遺構はGxラインからH1ラインまでほぼ06ラインに沿って東西にのび、H1ラインでは南北に走行を替え、削平段差に沿って存在する。上谷戸第9号溝状遺構にも同様の埋土が見られる。上位面では、畝状に浅間A軽石が認められており、浅間A軽石降下以降の屋敷等の存在は考えられない。上谷戸調査区では上位面に多量の遺物出土が見られるが、特にこの上谷戸第11号溝状遺構に沿って遺物の集中傾向が認められる。

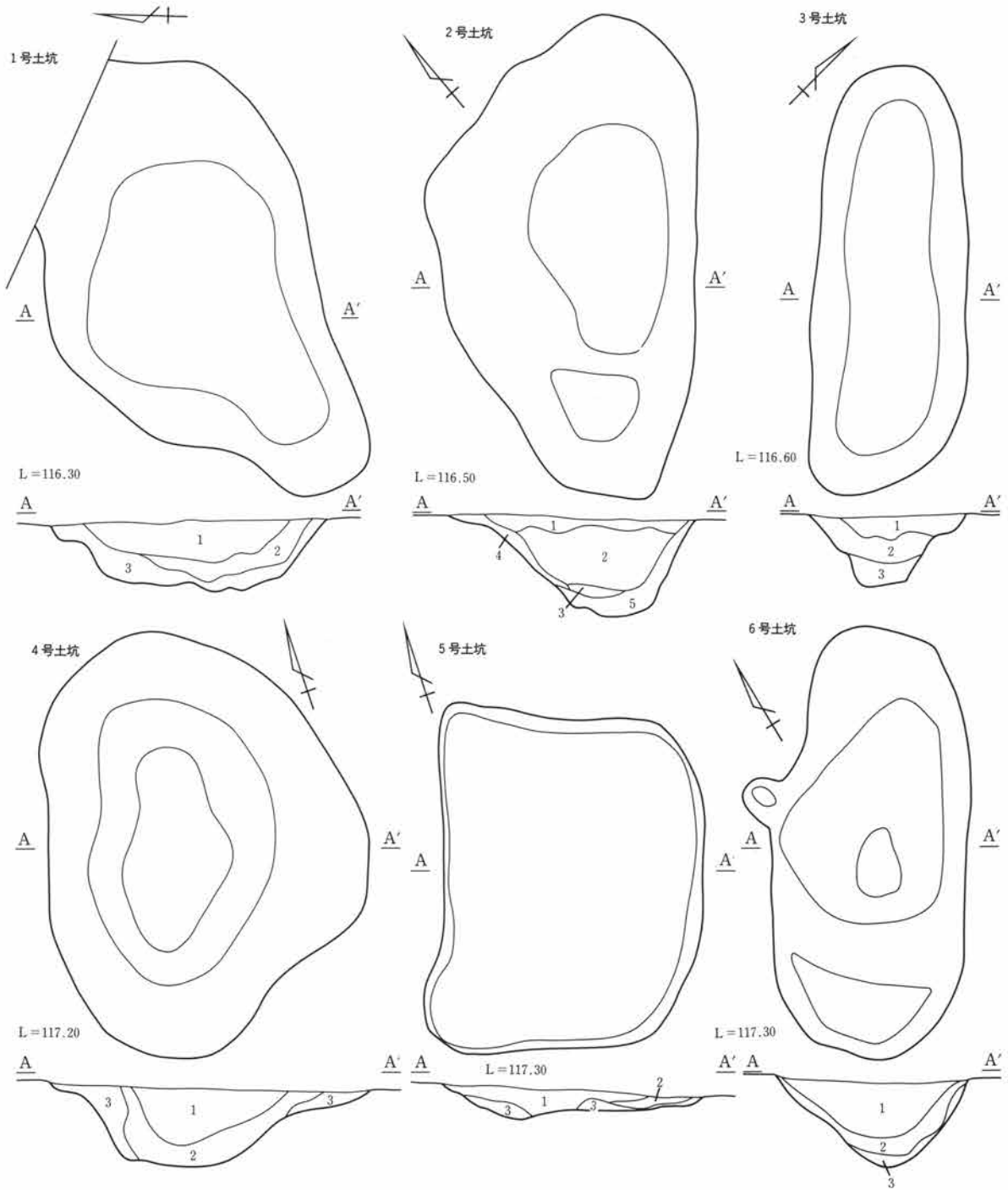
《井戸跡》（第290図・第291図、写真図版58・117・125）

上谷戸第2号井戸跡（HE1）は丘陵の裾に近い斜面部のGy・Ha-03グリッドに位置し、確認面標高は124.74mである。径3.3m～3.4mの円形の平面形で、水平に堆積した埋没土中に、更に径2.2mの円形掘り方が見られる。深さは約2.4mまで確認したのみである。出土遺物には肥前系の青磁碗の口縁部片（9502）や瀬戸美濃系の輪花皿（9824）、同じく長石釉のかかる皿（9825）が見られる。9825には内面に煤の付着が認められた。いずれも近世の中頃の17世紀～18世紀のものである。本遺構は斜面部に位置するものの上位面若しくは下位面に関係する遺構と考えられる。

《土坑》

土坑は上位面の平坦に整地された部分と斜面部から検出されている。このうち墓墳と考えられるものが1基あり、上位面の周縁にあって屋敷と関連するもの数基が、土坑の性格をやや明らかにしている。

上谷戸第28号土坑（HK7）は、斜面部の裾に近いGt-03グリッドにあり、確認面標高は123.40mである。不整な長楕円形を呈し、長径365cm、短径186cmで、張り出し部のような出っ張りがあり、ここでの幅が287cmである。深さは54cmで、埋土には①暗褐色土、②黒褐色土、③暗褐色土、④暗黄褐色土が見られる。（第305図、写真図版60）



上谷戸第1号土坑
土層注記

- 1 黒色土
- 2 暗茶褐色土
- 3 黄褐色土

上谷戸第2号土坑
土層注記

- 1 茶褐色土
- 2 暗茶褐色土
- 3 暗灰褐色土
- 4 黒色土
- 5 黒褐色土

上谷戸第3号土坑
土層注記

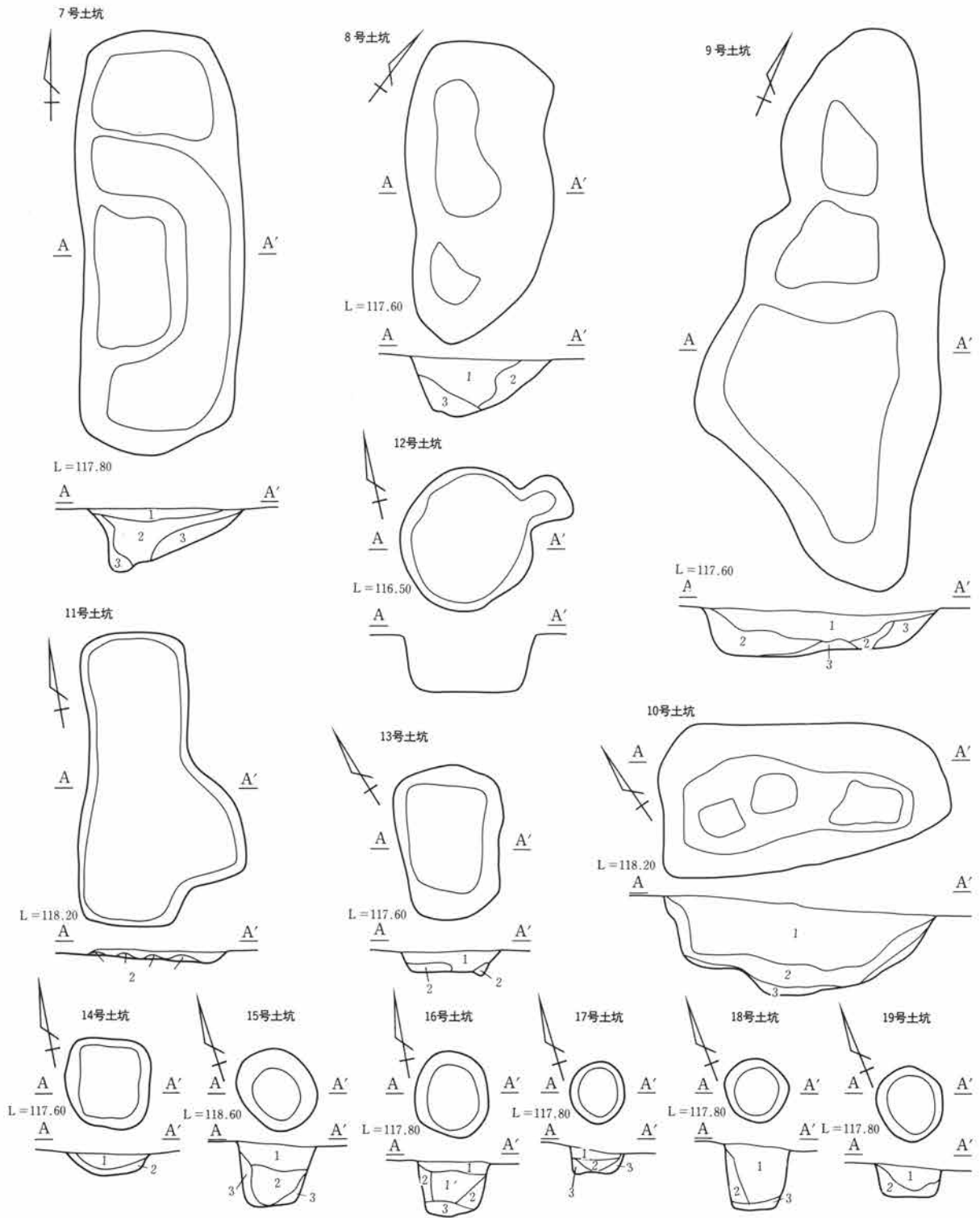
- 1 黒色土
- 2 黄褐色土
- 3 暗褐色土

上谷戸第4号・第5号・第6号土坑
土層注記

- 1 黒色土
- 2 暗褐色土
- 3 黄褐色土

0 1 : 60 2m

第292図 上谷戸第1号～第6号土坑遺構平面図



上谷戸第7号・第9号土坑
土層注記

- 1 暗茶褐色土
- 2 ローム粒混暗茶褐色土
- 3 ロームブロック

上谷戸第8号土坑土層注記

- 1 暗茶褐色土
- 2 明茶褐色土
- 3 ロームのぐずれ

上谷戸第10号・第11号土坑
土層注記

- 1 黒色土 2 黒褐色土
- 3 茶褐色土

上谷戸第13号・第14号土坑
土層注記

- 1 ロームを主とする。
- 2 明茶褐色土

上谷戸第15号・第16号土坑土層注記

- 1 暗茶褐色土 軽石多くローム少
- 1' 暗茶褐色土 軽石少ない。
- 2 明茶褐色土 軽石なし。
- 3 暗茶褐色土 軽石なし。

上谷戸第17号土坑
土層注記

- 1 明茶褐色土
- 2 暗茶褐色土
- 3 明茶褐色粘質土

上谷戸第18号土坑
土層注記

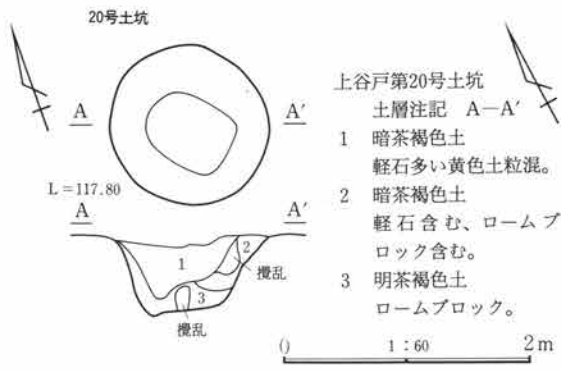
- 1 茶褐色土
- 2 暗茶褐色土
- 3 明茶褐色土

上谷戸第19号土坑
土層注記

- 1 暗茶褐色土
- 2 暗茶褐色土
- ローム塊あり。

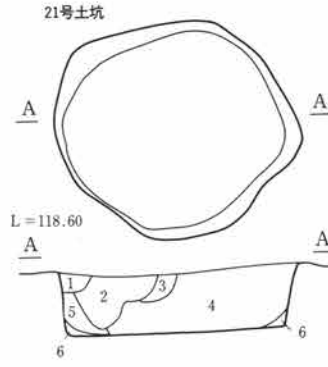
第293図 上谷戸第7号～第19号土坑遺構平面図

0 1:60 2m



上谷戸第20号土坑
土層注記 A-A'

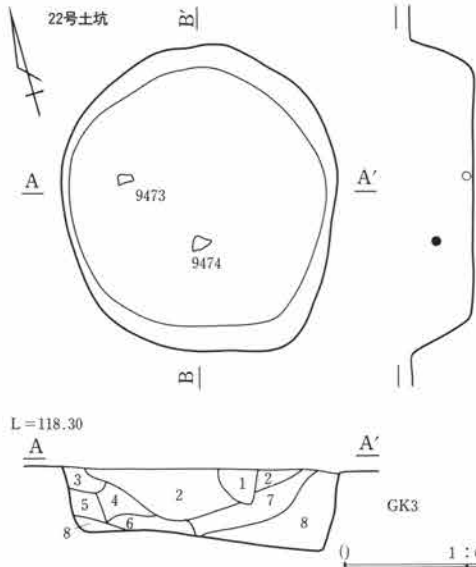
- 1 暗茶褐色土 軽石多い黄色土粒混。
- 2 暗茶褐色土 軽石含む、ロームブロック含む。
- 3 明茶褐色土 ロームブロック。



上谷戸第21号土坑土層注記

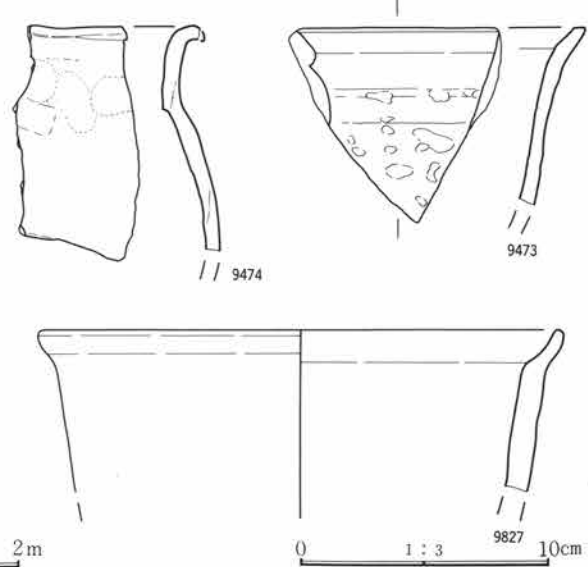
- 1 暗灰色土 粘性締りなし 軽石、ローム粒を含む。
- 2 黒褐色土 粘性締りなし 軽石、ローム粒を含む。
- 3 2、4の中間
- 4 黄褐色土 ローム粒、塊が非常に多い、粘性締りともに全くなし。
- 5 黄褐色土 拳大のローム塊との混じり。
- 6 黄褐色土 細かいローム粒との混じり。

第294図 上谷戸第20号・第21号土坑遺構平面図



上谷戸第22号土坑土層注記 A-A'

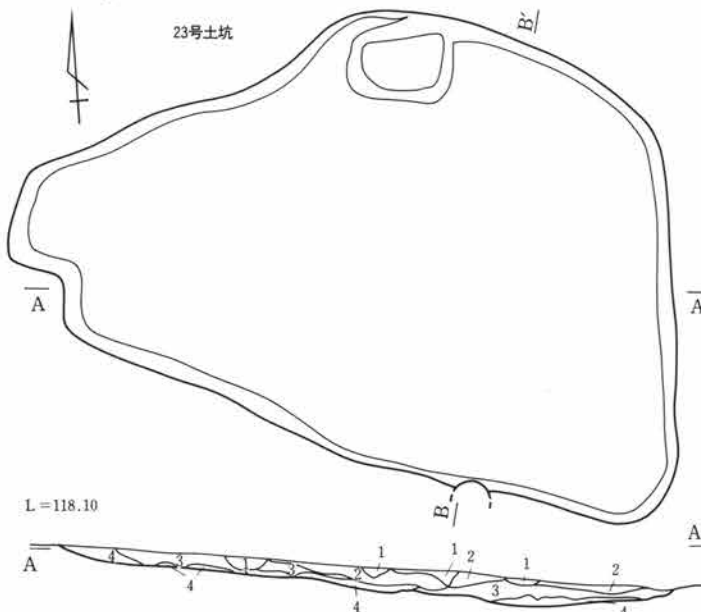
- 1 暗茶褐色土 軽石多し、ローム粒塊若干あり。
- 2 暗茶褐色土 軽石多し、ローム粒塊全くなし。
- 3 ローム塊
- 4 暗褐色土 軽石若干あり、ローム粒混じる。



第296図 上谷戸第22号土坑出土遺物実測図

- 5 4層に似るが軽石なし。
- 6 4層に似るがローム多し。
- 7 白色粘土塊を多く含む暗茶褐色土
- 8 茶褐色土 粘性、締りなし。

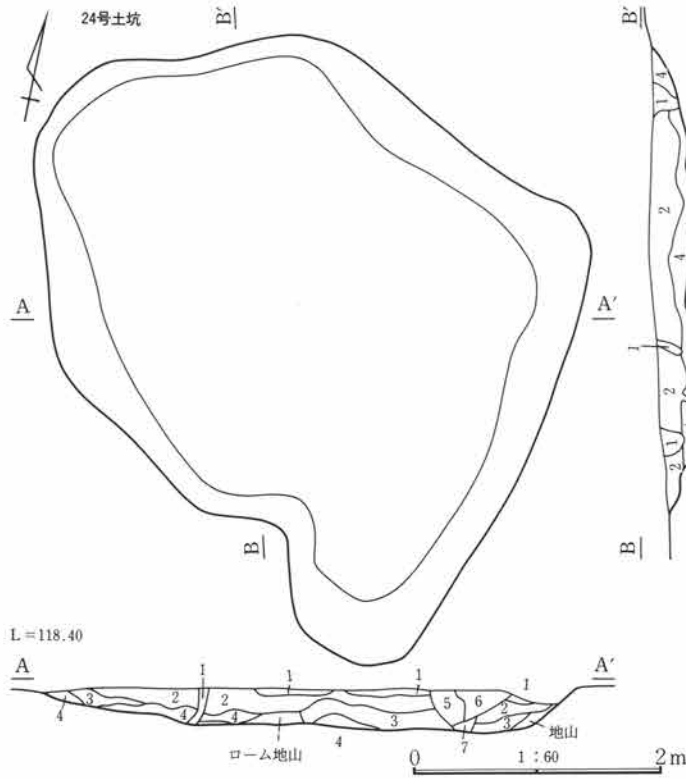
第295図 上谷戸第22号土坑遺構平面図



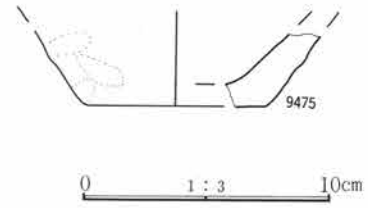
上谷戸第23号土坑土層注記

- 1 耕作土(黒褐色土) 軽石若干あり。
- 2 暗茶褐色土 軽石多くローム粒若干あり。
- 3 明茶褐色土 軽石多くローム粒も多い。
- 4 明茶褐色土 軽石ほとんどなくローム土が主体。

第297図 上谷戸第23号土坑遺構平面図



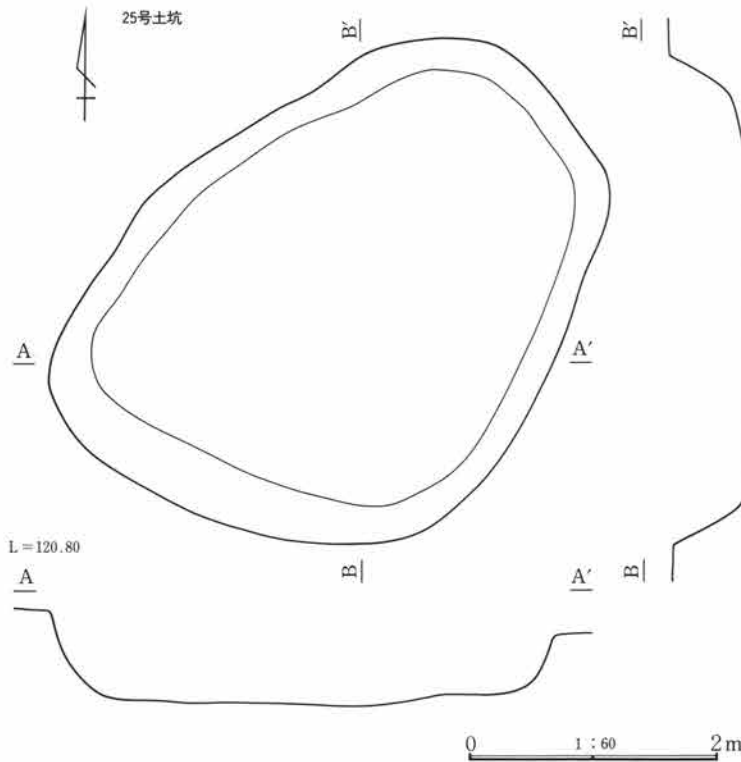
第298図 上谷戸第24号土坑遺構平面図



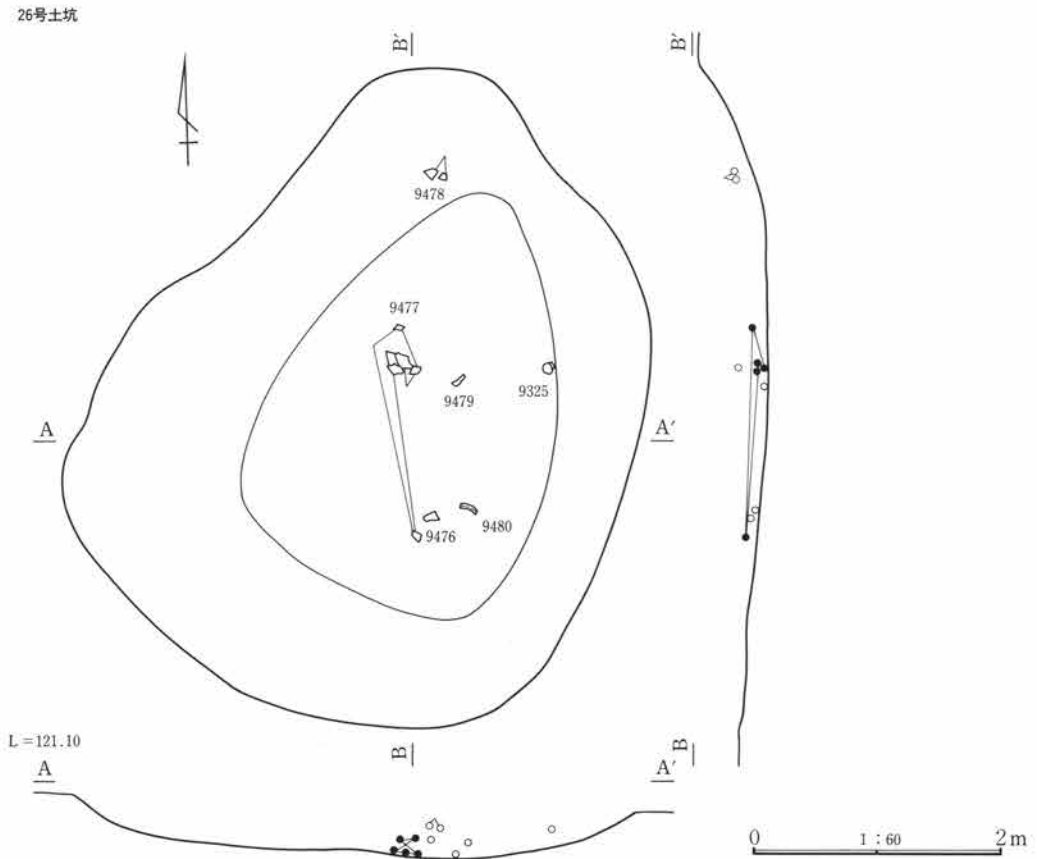
第299図 上谷戸第24号土坑出土遺物実測図

上谷戸第24号土坑土層注記

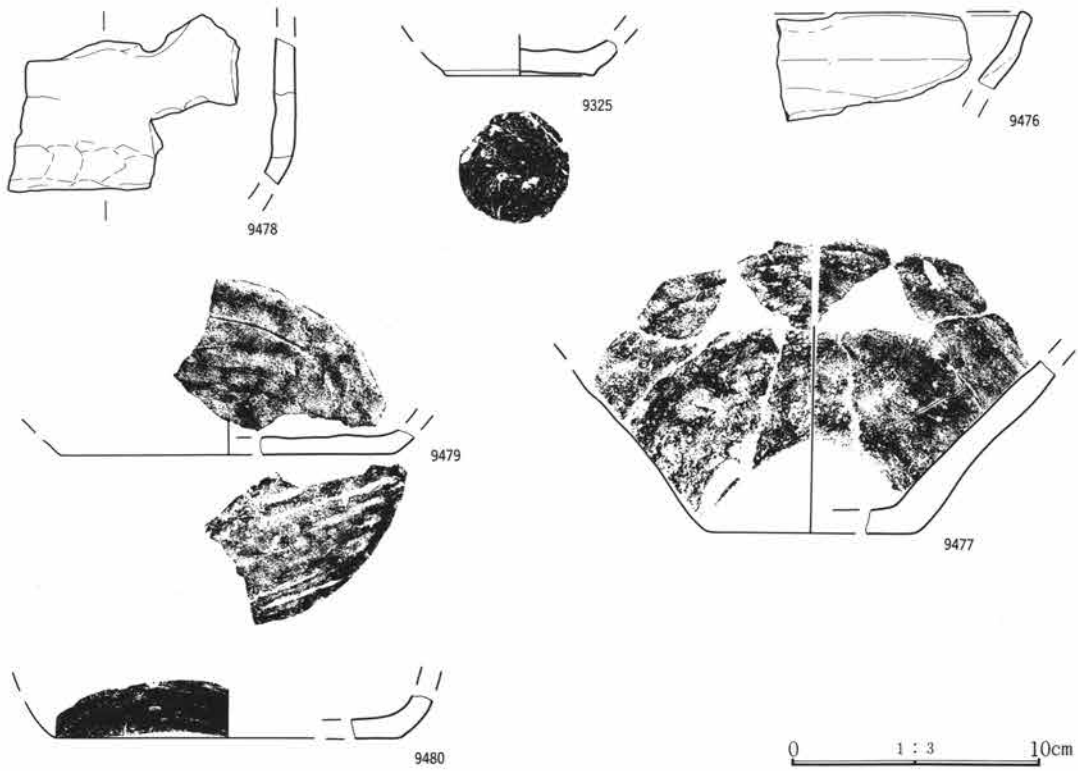
- 1 耕作土(黒褐色土) 軽石若干あり。
- 2 暗茶褐色土 軽石多くローム粒若干あり。
- 3 明茶褐色土 軽石多くローム粒多し。
- 4 明茶褐色土 軽石ほとんどなくロームが主体。
- 5 暗茶褐色土 軽石を含む、大きめのローム塊が混じる。
- 6 黒色土 軽石を含む、ローム粒若干含む。
- 7 ローム塊 軽石を含む。



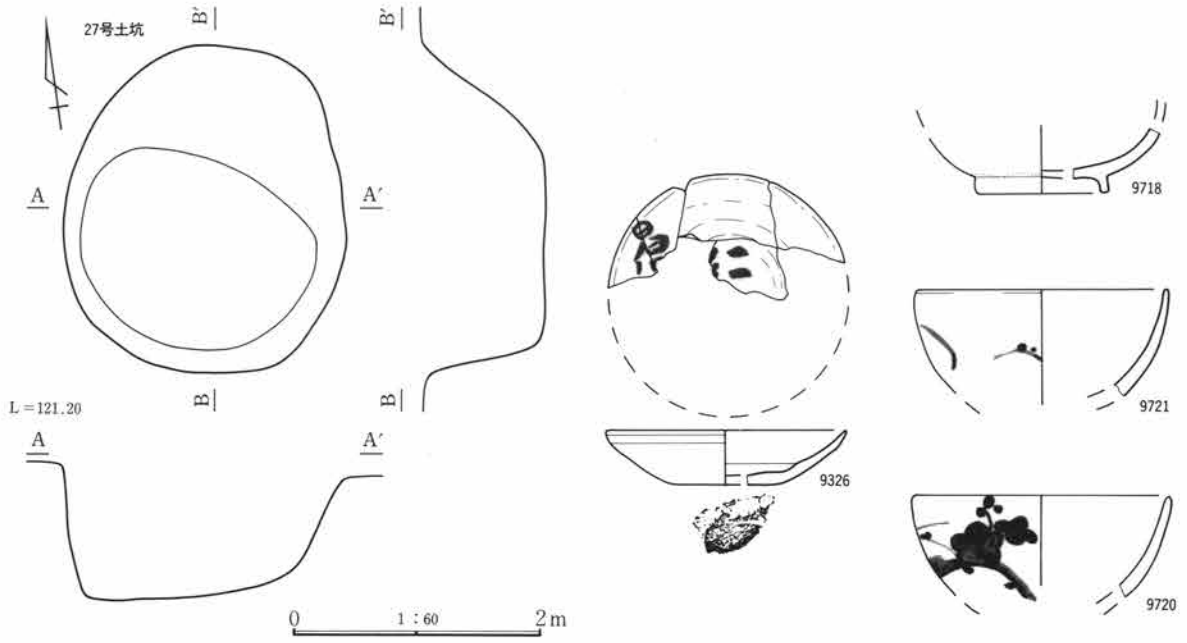
第300図 上谷戸第25号土坑遺構平面図



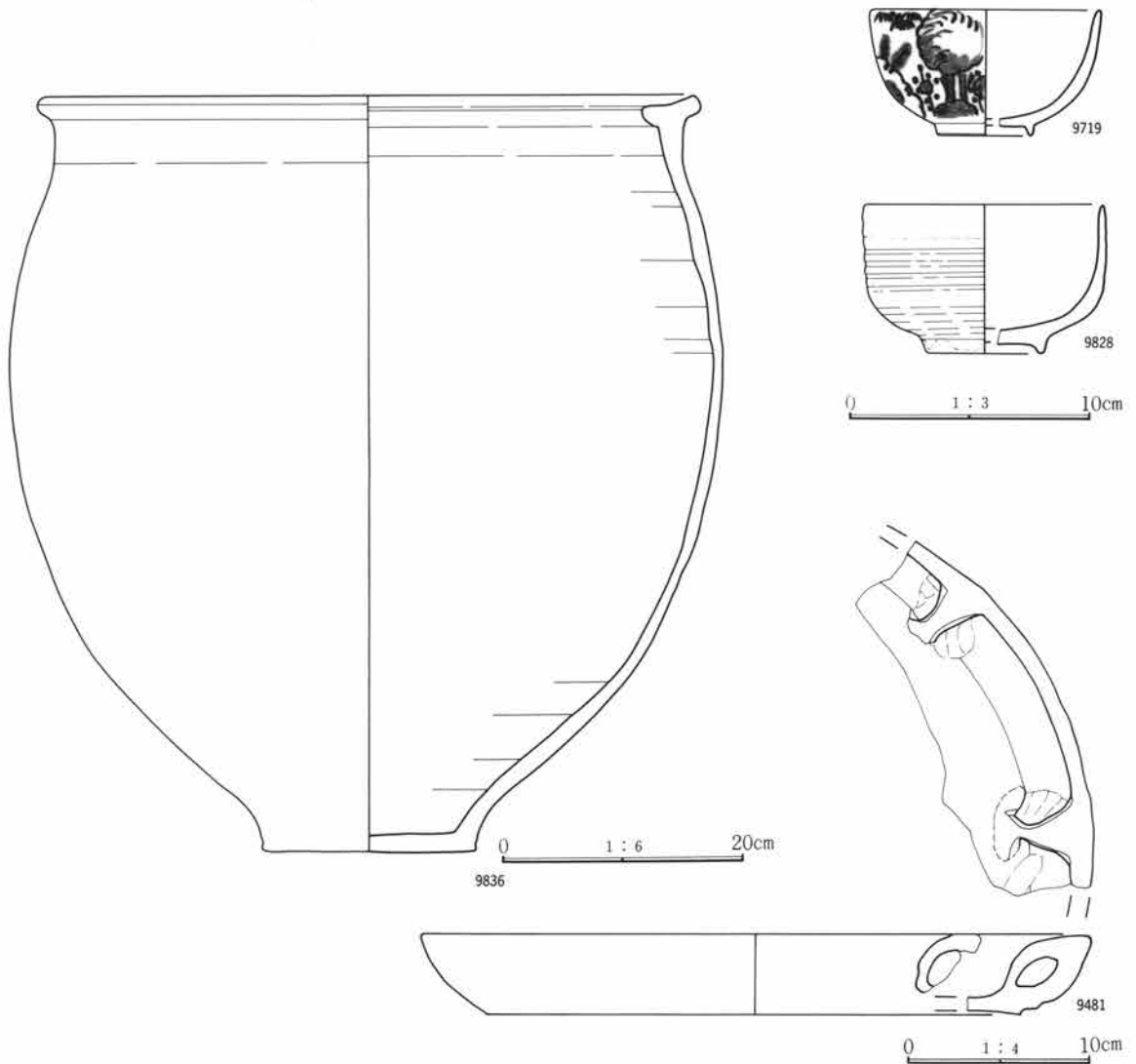
第301図 上谷戸第26号土坑遺構平面図



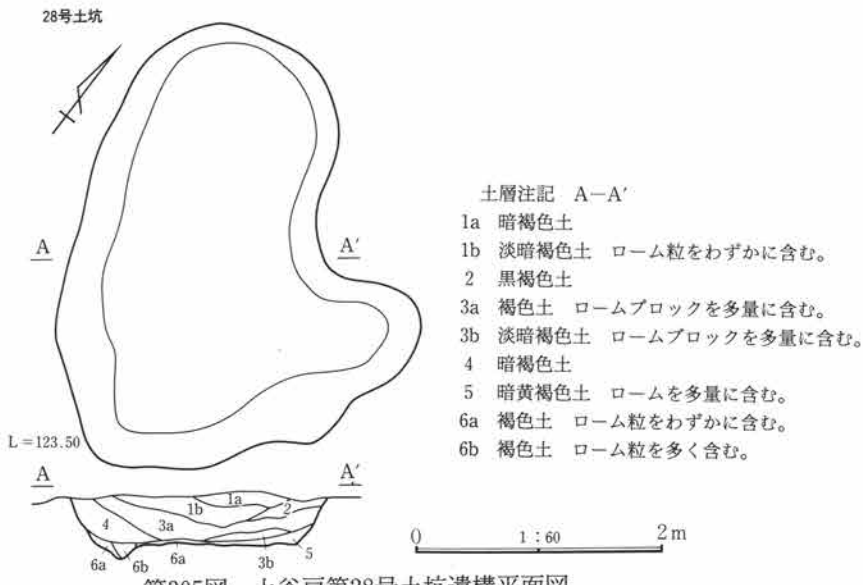
第302図 上谷戸第26号土坑出土遺物実測図



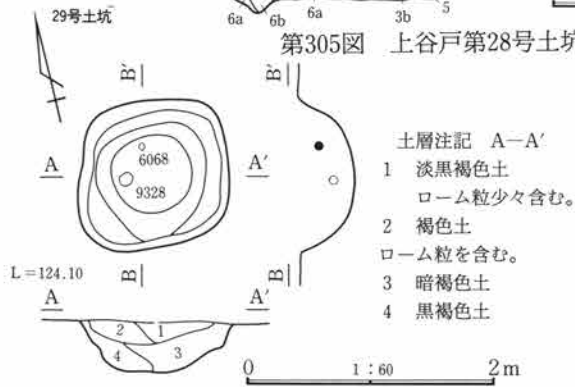
第303図 上谷戸第27号土坑遺構平面図



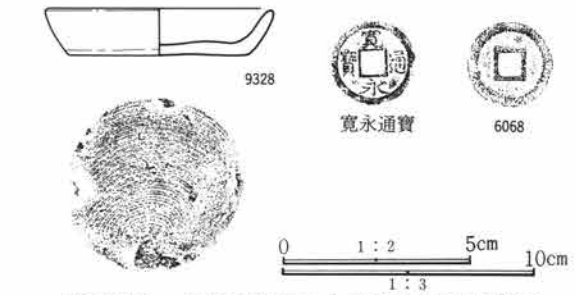
第304図 上谷戸第27号土坑出土遺物実測図



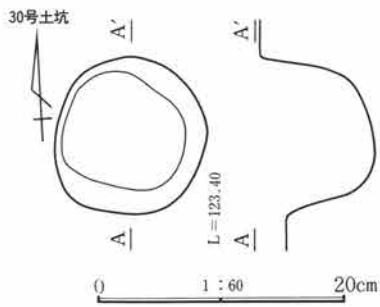
第305図 上谷戸第28号土坑遺構平面図



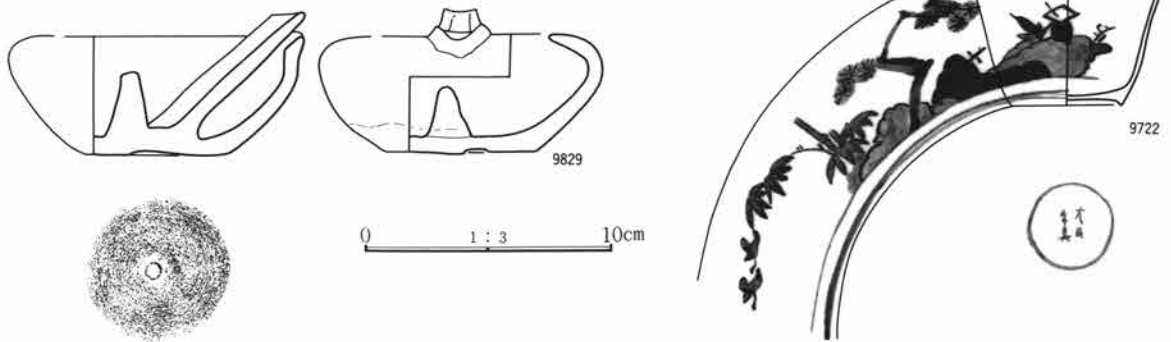
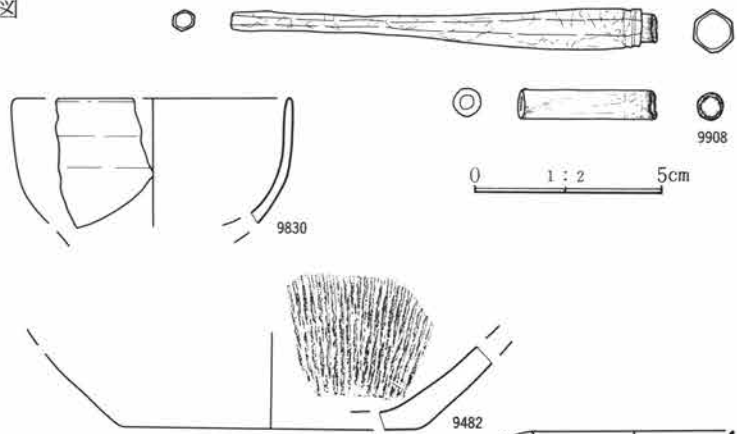
第306図 上谷戸第29号土坑遺構平面図



第307図 上谷戸第29号土坑出土遺物実測図

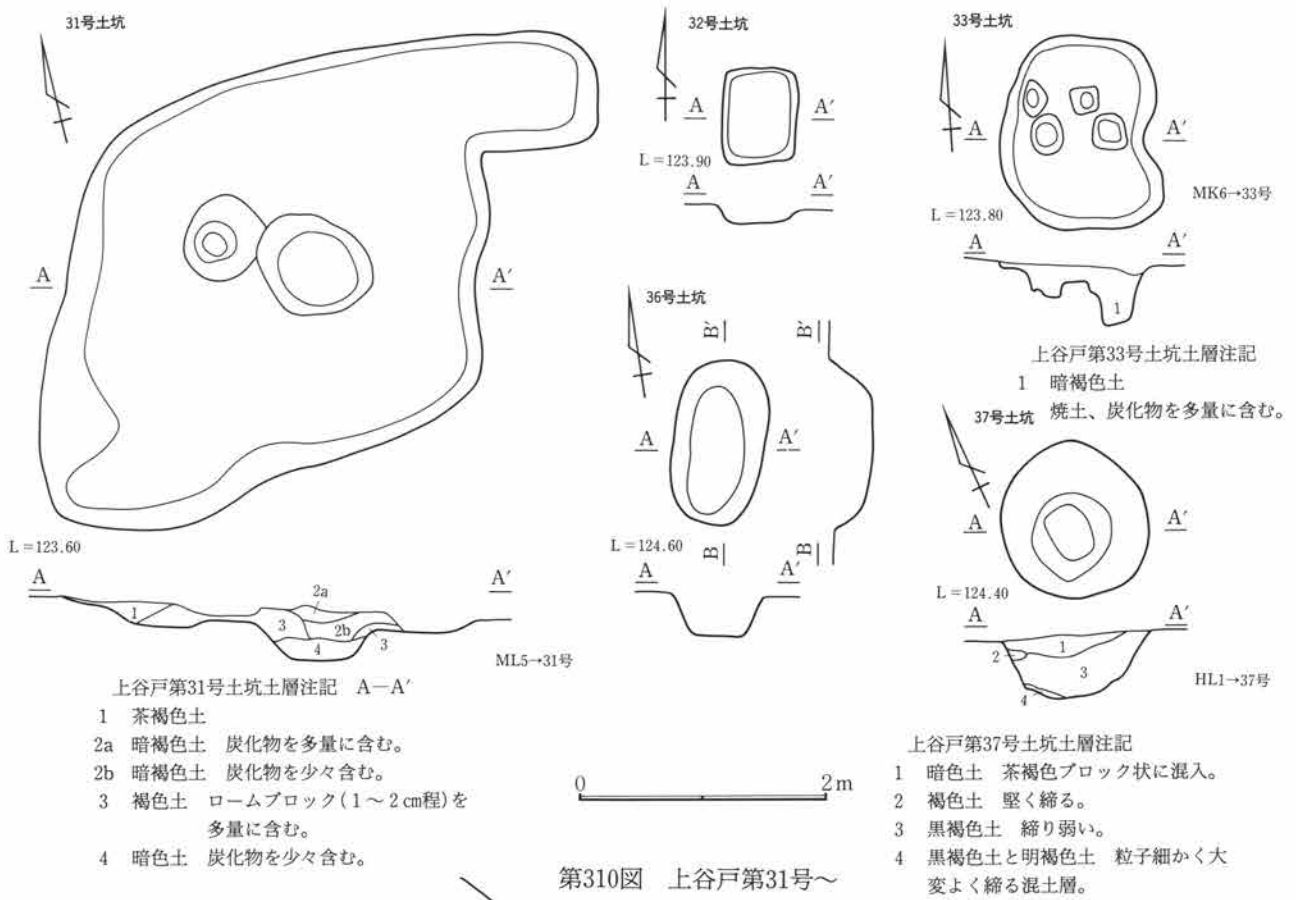


第308図 上谷戸第30号土坑遺構平面図



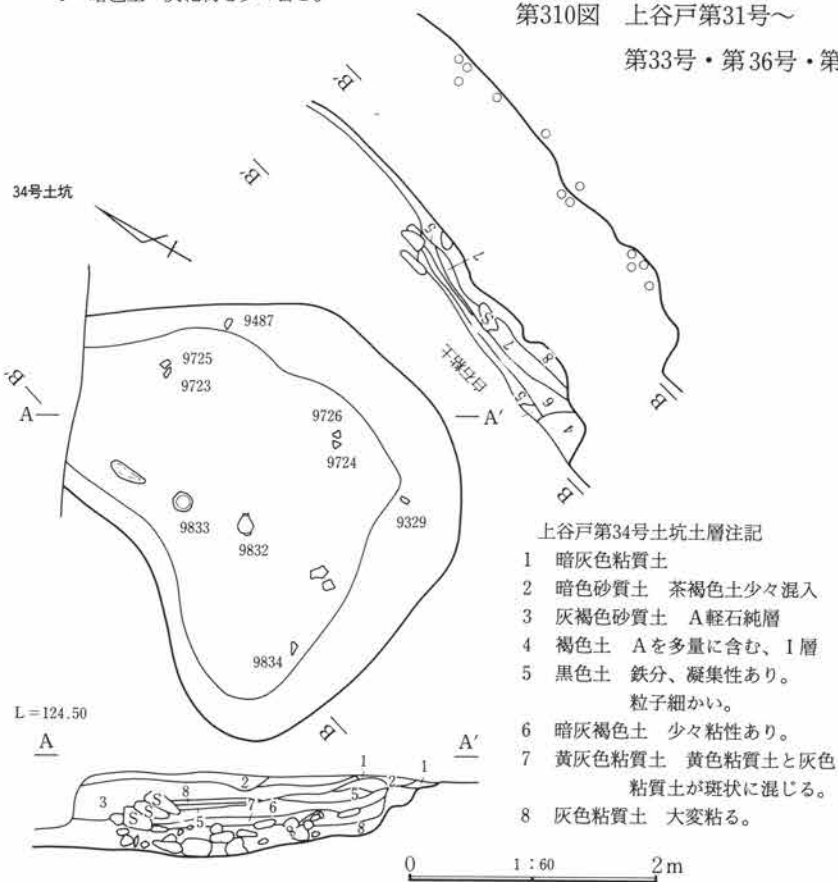
第309図 上谷戸第30号土坑出土遺物実測図

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

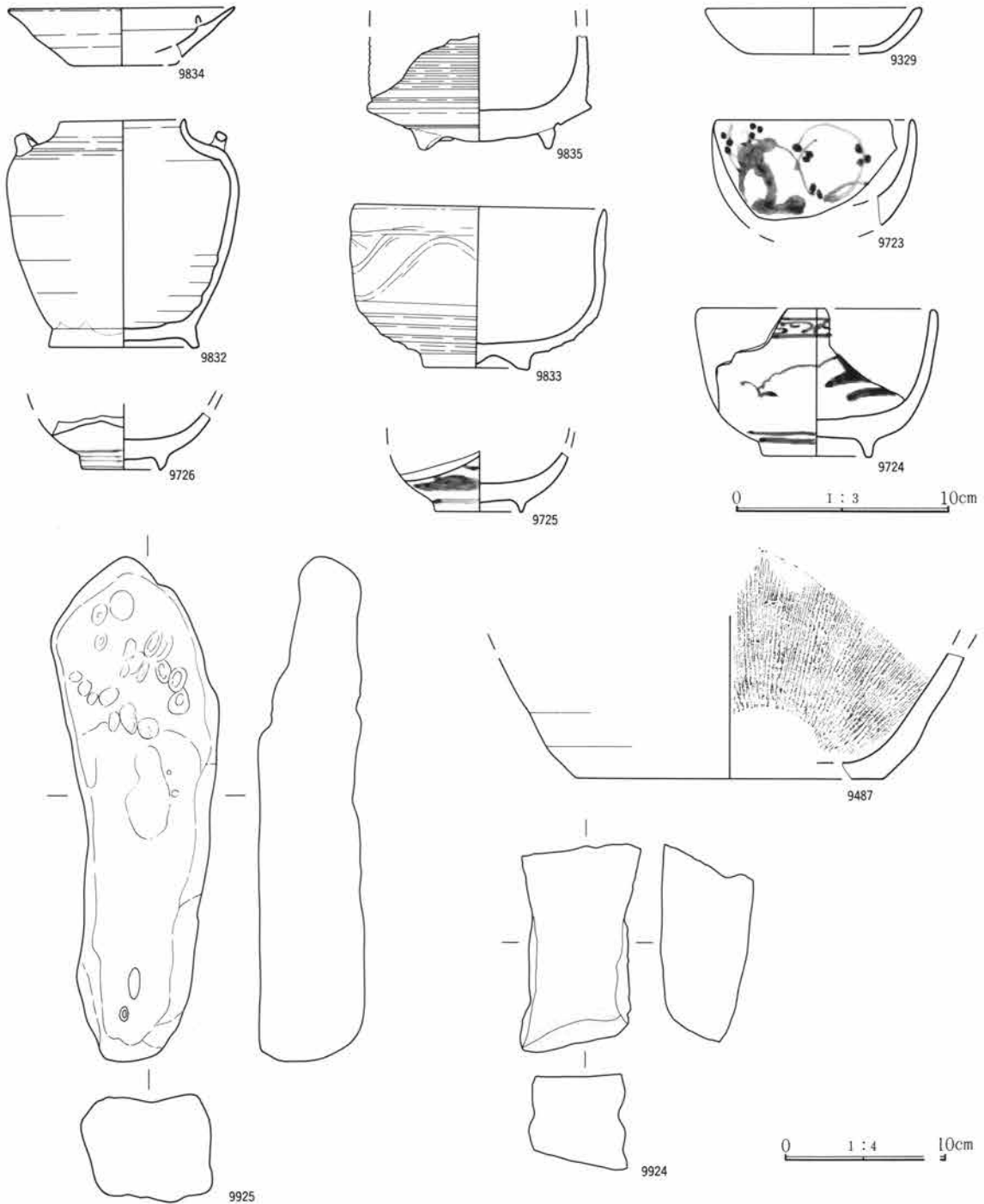


第310図 上谷戸第31号~

第33号・第36号・第37号土坑遺構平面図



第311図 上谷戸第34号土坑遺構平面図

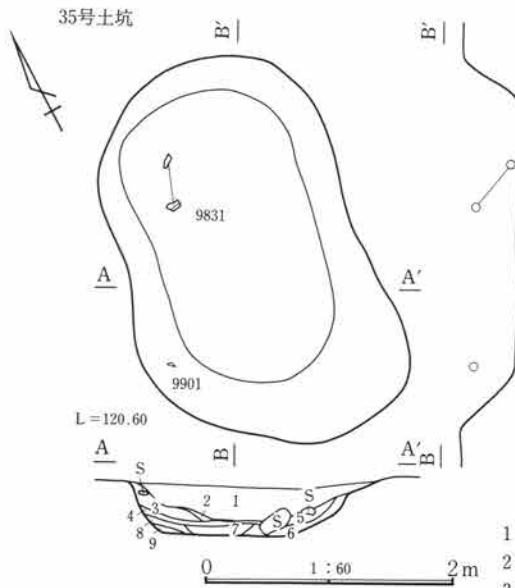


第312図 上谷戸第34号土坑出土遺物実測図

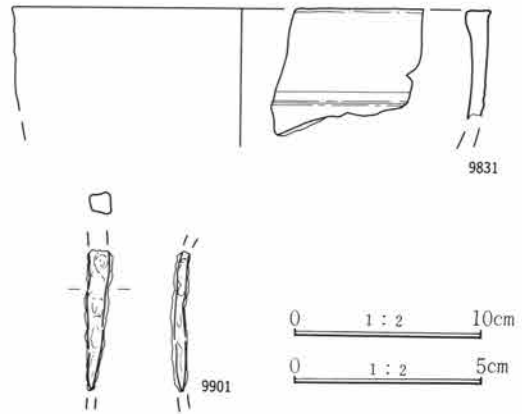
上谷戸第29号土坑 (HK11) は、斜面部の裾に近い Gv-02グリッドにあり、確認面標高は124.00mである。確認形状は隅丸方形であるが、底面では円形の掘り方が認められる。径120cm、深さ45cmで、埋土には①ローム粒子を含む黒褐色土、②暗褐色土、③黒褐色土が見られる。遺物は土師質土器の皿 (9328) と「寛永通寶」(6068) が出土しており、埋土と遺物からは墓塚と考えられる。(第306図、第307図、写真図版60、127、128)

上谷戸第30号土坑～第37号土坑は上位面で検出されており、基本的には斜面裾部を削平し、上位面を平坦に整地してからの遺構と考えられる。上谷戸第4号溝状遺構に沿って検出され、この溝状遺構の埋土が浅間A軽石であり、浅間A軽石降下以前の時期の屋敷に関連する遺構と考えられる。

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物



第313図 上谷戸第35号土坑遺構平面図



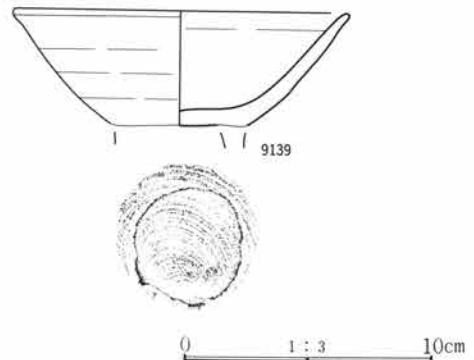
第314図 上谷戸第35号土坑出土遺物実測図

上谷戸第35号土坑土層注記 A-A'

- | | |
|----------------------|-----------|
| 1 褐色砂質土(A軽石の純粹堆積に近し) | 6 暗褐色粘質土 |
| 2 黄褐色粘質土 | 7 暗黄褐色粘質土 |
| 3 黄白色粘質土(掘り返された地山) | 8 暗赤褐色粘質土 |
| 4 暗灰色粘質土(水成堆積) | 9 赤褐色砂質土 |
| 5 暗灰色粘質土(黄白色粘質の混土層) | |
- } 砂粒を含む



第315図 上谷戸第38号土坑遺構平面図



第316図 上谷戸第38号土坑出土遺物実測図

上谷戸第30号土坑(HK10)はHb-05グリッドで検出された円形土坑で、径は131cm×123cm、深さ95cmである。埋土中から陶器碗(9830)、磁器染付端反り碗(9722)、陶器摺鉢(9482)、ひょうそくと思われる陶器(9829)、銅製キセル(9908)などが出土している。(第308図、第309図、写真図版60、127、128)

上谷戸第31号土坑(HK5)はHb・Hc-06グリッドに位置し、確認面標高は123.54mである。浅い方形の竪穴状土坑として確認され、長径555cm、短径339cmで、さらに中心付近に径94cm×76cmの円形の掘り込みが見られ、ここでの深さは47cmである。埋土は①茶褐色土、②暗褐色土が見られ、いずれにも炭化物の混入が認められる。(第310図、写真図版61)

上谷戸第32号土坑(HK9)はHe-06グリッドに位置し、確認面標高は123.82mである。方形を呈し、長径78cm、短径58cm、深さ15cmである。(第310図、写真図版61)

上谷戸第33号土坑(HK6)はHe-07グリッドに位置し、確認面標高は123.74mである。長径153cm、短径134cm、深さ56cmの隅丸方形を呈し、数個のピットが見られる。埋土には焼土・炭化物を含む暗褐色土が見られた。(第310図)

上谷戸第34号土坑(HK4)はHj・Hk-06グリッドに位置し、確認面標高は123.28mである。北側を第10号溝状遺構により切られており、溝に面しての石積みが認められた。遺構形状は不整楕円形で一方の径が約

309cm、深さは69cmである。埋土には上層に暗褐色砂質土が数層認められ、下層には泥質・粘質の灰褐色土が互層となって確認され、小礫が投棄されていた。遺物も豊富に出土している。上位面では多量の陶磁器類が出土しているが、それと同様の傾向の遺物である。(第311図、第312図、写真図版61)

上谷戸第35号土坑(HK3)は、上谷戸第34号土坑に隣接してHk-06・07グリッドで検出された。確認面標高は124.42m、平面形状は長楕円形で、長径318cm、短径210cm、深さ45cmで、埋土最上層に浅間A軽石の純層が見られ、下層には水成堆積の粘質土が観察される。埋土中から陶器(9831)、鉄製品(9901)が出土した。(第313図・第314図、写真図版61)

上谷戸第36号土坑(HK2)は、Hk-08グリッドで検出された長径131cm、短径78cmの楕円形で、深さは36cmである。確認面標高は124.46mである。(第310図、写真図版62)

上谷戸第37号土坑(HK1)は、Hk-09グリッドで検出された径126cm×117cmの円形で、深さは54cm、確認面標高は124.36mである。埋土には①暗褐色土、②黒褐色土が見られる。(第310図、写真図版62)

上谷戸第38号土坑(HK8)は丘陵斜面部のHm-05グリッドにあり、確認面標高は128.08mである。方形を呈し、浅い竪穴状土坑で、径231cm×195cm、深さ20cmである。埋土中から須恵器の坏(9139)が出土している。(第315図、第316図、写真図版128)

2 遺物

(1) 種別

上谷戸調査区で出土した遺物は、溝・井戸・土坑等の遺構に伴うものの他はグリッド毎の取り上げである。出土遺物は土師質土器、軟質陶器、陶器、磁器、銭貨、鉄・銅製品等が見られる。市道西側の上位面と下位面との遺物の分別は実施できなかったが、G区のもの主として下位面、H区が上位面と大別は可能である。以下、種別毎に述べる。なお、遺物は残存状況からA～Fランクに分類し、個体識別が可能なA・B・Cランクのものを抽出し、さらにその中から器形復元及び図化が可能なものを選択して報告した。

(2) 土師質土器(第317図、写真図版113・114) 9301～9329

土師質土器は上谷戸第19号溝状遺構・上谷戸第1号井戸跡・上谷戸第27号土坑・上谷戸第29号土坑で1点ずつ出土した他は、H区(上位面)で4点、G区(下位面)で18点出土している。器形は皿形であり、残存状況は良好で完形のものが多い。25点のうち手捏成形のものは1点のみで、他は全てロクロ成形による。中世の皿形土師質土器は大御堂調査区でまとまって出土しているが、ここで見られる土師質土器には、大御堂調査区出土のものと同通するものとそうでないものが見られる。また、大御堂調査区のものの中世に属すもののみであったが、ここでは近世陶磁器類と供伴すると考えられるものがあり、大御堂調査区出土のものとは異なる特徴を持つものが認められる。

ここでは、大御堂調査区出土のものと同通するものについては同じ基準で分類し、ロクロ成形のもので別に分類の必要なものをN類～P類に分けた。以下、分類した種別毎に説明する。

[B類]

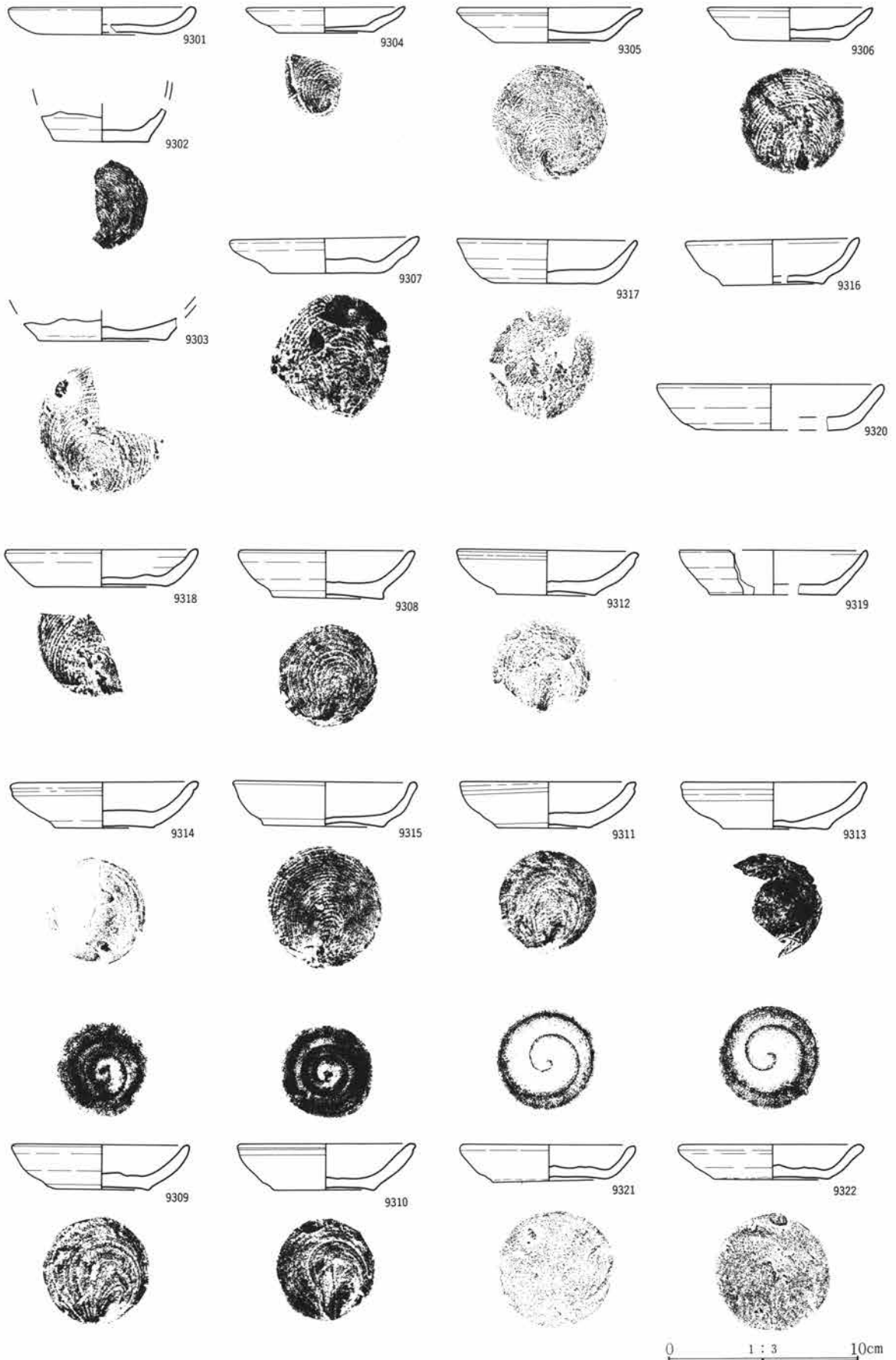
9301がこれにあたる。口径が98mmの手捏成形の小型皿で、器高は25mmと比較的浅い。色調は浅黄橙色を呈す。手捏成形のものはこの1点のみで、上谷戸第1号井戸跡の所在するグリッドからの出土である。

大御堂調査区出土の土師質土器のB₁類の小型皿に相当する。

[J類]

9302・9323は底径42mmの小型皿である。法量および器形の特徴は3011と同じで、底部は回転糸切り、体部

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物



第32表 上谷戸調査区出土遺物観察表 一土師質土器一

遺物番号 挿図番号 写真図版	種 別 器 種 残 存 状 況	出 土 位 置 出土グリッド 出 土 遺 構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	④重量(g)	①成 形 ③器 形 ⑤焼 成	②底 部 ④胎 土 ⑥色 調	特 徴	備 考
9301 317 —	土師質土器 皿 ⅔	Gu16g	① 98 ② 17 ③ 68	④ 15	①手捏成形 ②偏平・平底 ④細粒砂・白色粒子、黒色鉱物粒子、赤褐色 ⑤酸化焰 ⑥浅黄橙色			
9302 317 —	土師質土器 皿 N類 ⅔	Gr05g		④ 20 ③ 50	①ロクロ成形 ④細粒砂、白色微粒子・黒色 ⑤酸化焰・良好 ⑥明赤褐色	体部横ナデ		
9303 317 —	土師質土器 皿 N類 ⅔	Gw05g		④ 30 ③ 67	①ロクロ成形 ②右回転糸切り ④細粒砂、 ⑤酸化焰・普通 ⑥鈍い赤褐 色	体部横ナデ		
9304 317 —	土師質土器 皿 O ₂ 類 ⅔	Gk17g	① 84 ② 17 ③ 51	④ 10	①ロクロ成形 ②左回転糸切り ④細粒砂、 ⑤酸化焰・普通 ⑥鈍い橙色			
9305 317 113	土師質土器 皿 O ₁ 類 完形	Gt04g	① 95 ② 16 ③ 59	④ 60	①ロクロ成形 ②右回転糸切り ④細粒砂、 ⑤酸化焰・良好 ⑥浅黄橙色			
9306 317 113	土師質土器 皿 O ₂ 類 ⅔	Gv05g	① 87 ② 18 ③ 58	④ 50	①ロクロ成形 ②左回転糸切り ④細粒砂、 ⑤酸化焰・良好 ⑥浅黄橙色			
9307 317 113	土師質土器 皿 O ₂ 類 ⅔	Gq17g77	① 92 ② 18 ③ 60	④ 50	①ロクロ成形 ②右回転糸切り ④細粒砂、 ⑤酸化焰・良好 ⑥浅黄橙色			
9308 317 113	土師質土器 皿 P類 完形	Gp05g03	① 90 ② 25 ③ 58	④ 70	①ロクロ水挽成形 ②左回転糸切り ④細粒 ⑤酸化焰・良好 ⑥橙色	底部内面未調 整		
9309 317 113	土師質土器 皿 P類 完形	Gp05g03	① 90 ② 23 ③ 54	④ 75	①ロクロ成形 ②左回転糸切り ④細粒砂、 ⑤酸化焰・良好 ⑥橙色	底部内面未調 整		
9310 317 113	土師質土器 皿 P類 完形	Gp05g03	① 92 ② 24 ③ 55	④ 76	①ロクロ成形 ②回転糸切り ④細粒砂、白 ⑤酸化焰・良好 ⑥ 色			
9311 317 113	土師質土器 皿 P類 完形	Gp05g03	① 91 ② 24 ③ 52	④ 75	①ロクロ成形 ②左回転糸切り ④細粒砂、 ⑤酸化焰・良好 ⑥橙色			
9312 317 113	土師質土器 皿 P類 ⅔	Gp05g01	① 93 ② 23 ③ 52	④ 65	①ロクロ成形 ②左回転糸切り ④細粒砂、 ⑤酸化焰・良好 ⑥橙色			
9313 317 113	土師質土器 皿 P類 ⅔	Gp05g1・4	① 95 ② 24 ③ 56	④ 45	①ロクロ成形 ②左回転糸切り ④細粒砂、 ⑤酸化焰・良好 ⑥橙色			
9314 317 113	土師質土器 皿 P類 ⅔	Gm05g01・04	① 96 ② 23 ③ 52	④ 70	①ロクロ成形 ②左回転糸切り ④細粒砂、 ⑤酸化焰・普通 ⑥鈍い橙色			
9315 317 113	土師質土器 皿 P類 ⅔	Gm05g	① 94 ② 22 ③ 62	④ 40	①ロクロ成形 ②左回転糸切り ④細粒砂、 ⑤酸化焰・普通 ⑥ 鈍い橙色			
9316 317 —	土師質土器 皿 P類 ⅔	Gu05g	① 92 ② 23 ③ 23	④ 15	①ロクロ成形 ②左回転糸切り ④細粒砂、 ⑤酸化焰・良好 ⑥浅黄橙色			
9317 317 113	土師質土器 皿 P類 ⅔	Gp05g05・04	① 93 ② 22 ③ 56	④ 65	①ロクロ成形 ②右回転糸切り ④細粒砂、 ⑤酸化焰・良好 ⑥ 浅黄橙色			
9318 317 113	土師質土器 皿 P類 ⅔	Gm05g	① 100 ② 19 ③ 68	④ 30	①ロクロ成形 ②右回転糸切り ④細粒砂、 ⑤酸化焰・良好 ⑥浅黄橙色			
9319 317 113	土師質土器 皿 P類 ⅔	He07g01	① 98 ② 23 ③ 66	④ 15	①ロクロ成形 ②回転糸切り ④細粒砂、白 ⑤酸化焰・良好 ⑥浅黄橙色			

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種 別 器 種 残 存 状 況	出 土 位 置 出土グリッド 出 土 遺 構	①口径(㎜)④重量(g) ②器高(㎜) ③底径(㎜)	①成 形 ③器 形 ⑤焼 成	②底 部 ④胎 土 ⑥色 調	特 徴	備 考
9320 317 —	土師質土器 皿 P類 ⅓		①120 ④20 ②24 ③76	①ロクロ成形 ④細粒砂、 酸化焙・良好 ⑥橙色			
9321 317 114	土師質土器 皿 P類 完形	Ha13g01	①88 ④55 ②18 ③60	①ロクロ成形 ②左回転糸切り ④細粒砂、 黒色鉱物粒子、白色粒子 ⑤酸化焙・良好 ⑥ 浅黄橙色		底部内面未調整	
9322 317 114	土師質土器 皿 P類 完形	He13g02	①93 ④60 ②17 ③59	①ロクロ成形 ②左回転糸切り ④細粒砂、 黒色鉱物粒子 ⑤酸化焙・良好 ⑥浅黄橙色			
9323 289 113	土師質土器 皿 ⅓	Gu15g 上第1号井戸	④20 ③41	①ロクロ成形 ②右回転糸切り ③極小型皿 ④細粒砂、精選 ⑤酸化焙・良好 ⑥赤褐色			
9325 302 126	土師質土器 皿 底部	Gq08g 上第26号土坑	④70 ③60	①ロクロ成形 ②右回転糸切り ④細粒砂、 微粒良好、白色粒子、黒色鉱物粒子 ⑤酸化 焙・普通 ⑥褐色			
9326 304 126	土師質土器 皿 Q類 ⅓	GI04・05g 上第27号土坑	①96 ④20 ②22 ③40	①ロクロ成形 ④細粒砂、精選、白色・黒色 微粒子 ⑤酸化焙・良好 ⑥外面橙色、内面 黒色		墨書 器厚は薄い	
9327 282 124	土師質土器 皿 ⅓	上第19号溝	①83 ④40 ②114 ③51	①ロクロ成形 ②左回転糸切り ④細粒砂、 白色・黒色鉱物微粒子 ⑤酸化焙・良好 ⑥ 浅黄橙色			
9328 307 —	土師質土器 皿 完形	上第29号土坑	①90 ②18 ③72	①ロクロ成形 ②回転糸切り ④細粒砂、黒 色鉱物粒子 ⑤酸化焙・良好 ⑥橙色		体～口は直に 近い立ち上り	
9329 312 —	土師質土器 皿⅓	上第34号土坑		①ロクロ成形 ②回転糸切り ④細粒砂、黒 色鉱物粒子 ⑤酸化焙・良好 ⑥浅黄橙色			

はやや内湾する。色調は赤褐色を呈す。

[N類]

9303の1点のみである。口縁部が欠損しているので全体の器形復元が難しいが、底径が68mmとやや大きく器壁は薄い。体部はやや内湾すると推定でき、赤褐色を呈す。

[O類]

ロクロ成形の皿で浅黄橙色を呈す一群である。器形の点では器壁やや薄く直に外反するO₁類(9305・9307)と、やや内湾傾向で器壁がやや厚いO₂類(9306・9318・9321・9322)とが見られる。ロクロの回転方向はいずれも右方向である。

O₁類は口縁部はやや浅く直に外反し、内外面ともにきれいにナデ調整されている。O₂類は若干器壁が厚く、体部がやや内湾気味である。9316は口縁部小片であるがO₂類と思われる。

[P類]

9308～9314・9317の8点である。すべてGp-05グリッド出土で、9308～9311の4個体は重なって検出され、一括出土資料である。橙色を呈し、器壁はやや厚く、ロクロ成形で底部は左回転糸切りである。体部から口縁部にかけてやや内湾し、内面にはロクロ痕を残すものが見られる。口唇部外面に浅い凹みを伴う横ナデ調整が施される。9328は上谷戸第29号土坑出土で「寛永通寶」と供伴する。体部から口縁部にかけてほぼ直に外反し内湾傾向を示す本類と若干異なる点が見られるが、胎土・焼成・色調等の点では共通する。

[Q類]

9326は比較的精緻な作りの土師質土器で、器壁は薄く、内外面ともにきれいなナデ調整がされる。上谷戸第27号土坑出土であり、18世紀中頃の陶磁器類が供伴する。内面に墨書が見られ、そのうち底面中央の文字は

「行」と読み取れる。

《遺物の年代観について》

上谷戸調査区出土の土師質土器には土坑出土で他の遺物と供伴するものが見られる。遺構と遺物の性格が明らかなのは墓壇と考えられる上谷戸第29号土坑である。9328は6068の「寛永通寶」とともに副葬された遺物と見られ、17世紀後半以降18世紀代のもと考えられる。また、上谷戸第27号土坑出土の9326にも18世紀中頃以降の年代が与えられる。また、B類・J類に関しては大御堂調査区出土のものと同通する中世のものと考えられ、上谷戸第1号井戸跡出土の9323は出土遺構の埋没年代と供伴遺物の軟質陶器類からも中世後半の年代が与えられる。

O類とP類の土師質土器については大御堂調査区に類例が見られず、G・H区での出土遺物の状況から近世にはいつのものとの可能性が高いと判断される。O₁類の9305の器形は大御堂調査区のK類・L類の流れを汲むと見られ、これに後出すると考えられる。P類の土器は一括廃棄されたものと考えられ、ここにあって考えられる屋敷に伴うものと推定され、近世前半又は中頃と考えられる。

(3) 摺鉢類 (第318図・第319図、写真図版114・115)

摺鉢類は近世の陶器製のものを中心に、上位面からかなり多量に出土しているが、中世の軟質陶器製の摺鉢目が見られないものも見られる。以下、焼成方法を基準に分類して説明する。

[A類・焼締陶器] 9401

常滑系の焼締陶器製片口の摺鉢口縁部片である。堅緻な焼成で、口唇部は平坦で短く直に外反する。摺鉢目は見られず、中世のものである。

[B類・軟質陶器] 9402～9406

9402～9404は非常に堅緻な焼締陶器で、在地系かと考えられる。9405・9406は須恵質であり、摩滅が著しい。これらには摺鉢目が見られず、いずれも中世と考えられる。上谷戸第1号井戸跡出土の2点も同時期のものと見られる。

[C類・陶器] 9407～9411

C₁類(9407～9410)は胎土のやや粗い焼締陶器で関西系とみられ、このうち9408～9410は信楽製と見られる。いずれも器壁は厚くなく粘土紐痕が観察されやや外反する。C₂類(9411)は瀬戸美濃系の摺鉢で表面に鉄釉が掛けられている。底部には糸切り痕が残る。

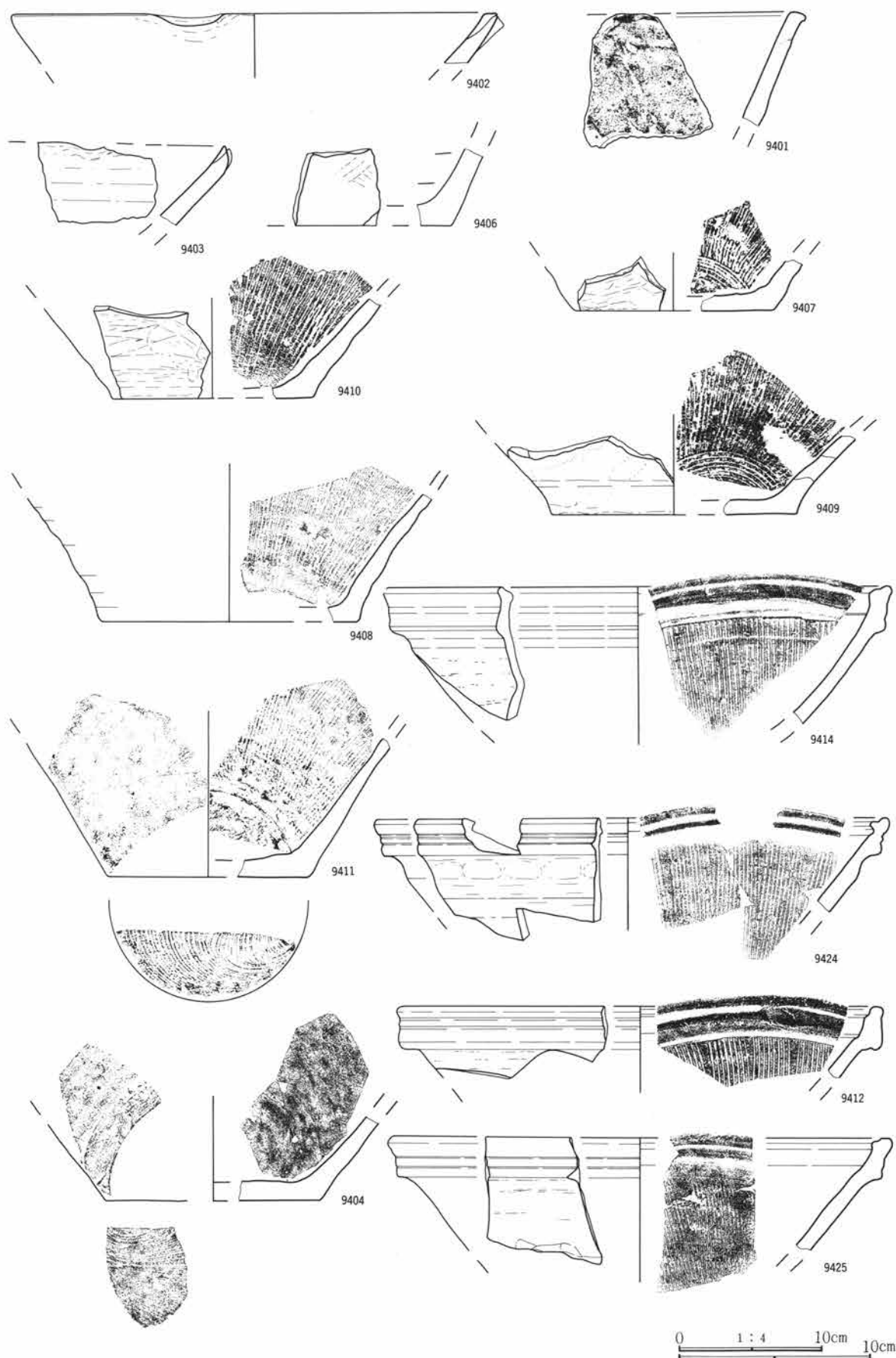
[D類・陶器] 9412～9425

赤褐色を呈す無釉の陶器製摺鉢で9412～9425がこれにあたり、器形の特徴や摺鉢目には若干の差異が見られる。底部はほとんどが平底であるが、高台作りのものも見られる。体部は直に開くものとやや内湾するものが見られる。口縁部は帯状に緑帯をつくり口唇部側に1条の、外面に2条の沈線が共通して見られる。口縁部下の内面にはほぼ全面に摺鉢目が見られ、摺鉢目は7条～12条で工具幅12～32mmである。体部外面には横方向のケズリがほぼ全面に見られる。胎土は比較的密で、良く焼き締まっており、無釉である。色調は赤褐色ないし鈍い赤褐色を呈し、断面では白色粒子の夾雑が観察される。いわゆる堺焼きの摺鉢と考えられる。ほとんどが上位面(H区)からの出土である。

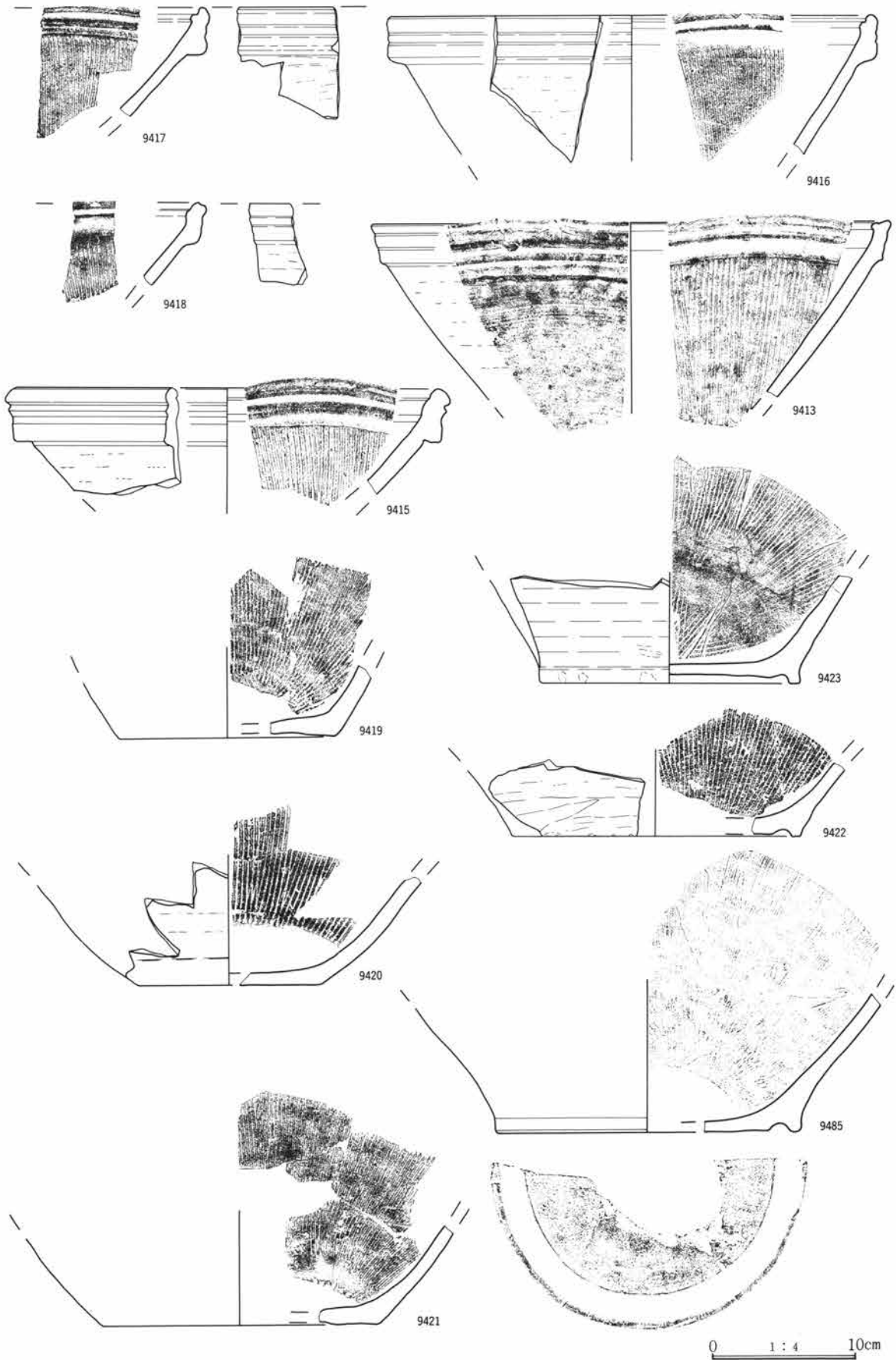
(4) 鍋・焙烙・火舎・香炉類 (第320図・第321図、写真図版115)

[内耳鍋]

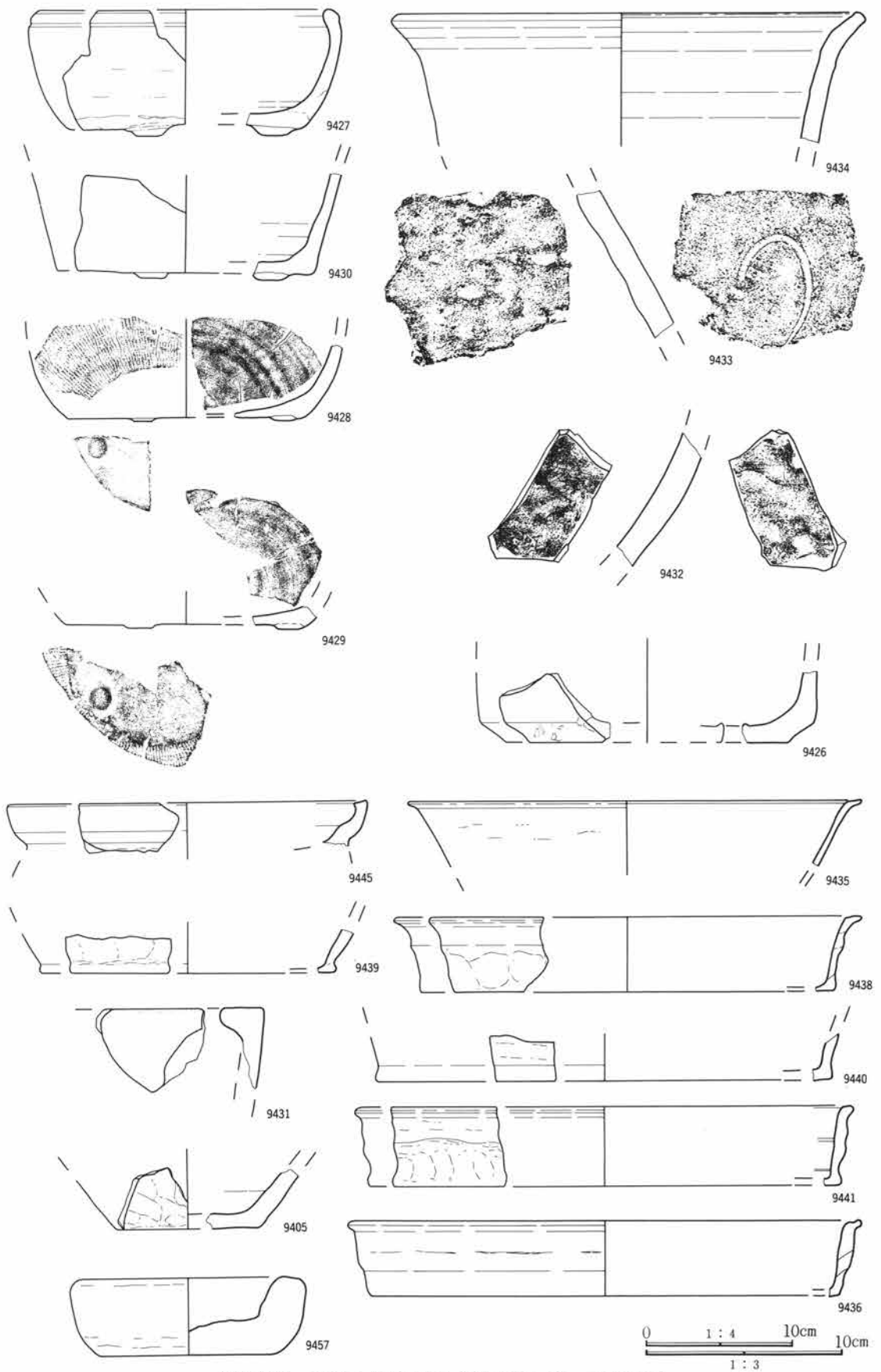
内耳鍋は遺構からのものが多く、グリッド取り上げのものは9434の1点だけであった。9434は褐色を呈す瓦質焼成で、口端部から内稜までは比較的短い。



第318図 上谷戸調査区出土遺物実測図(5)―軟質陶器・陶器(摺鉢類)―

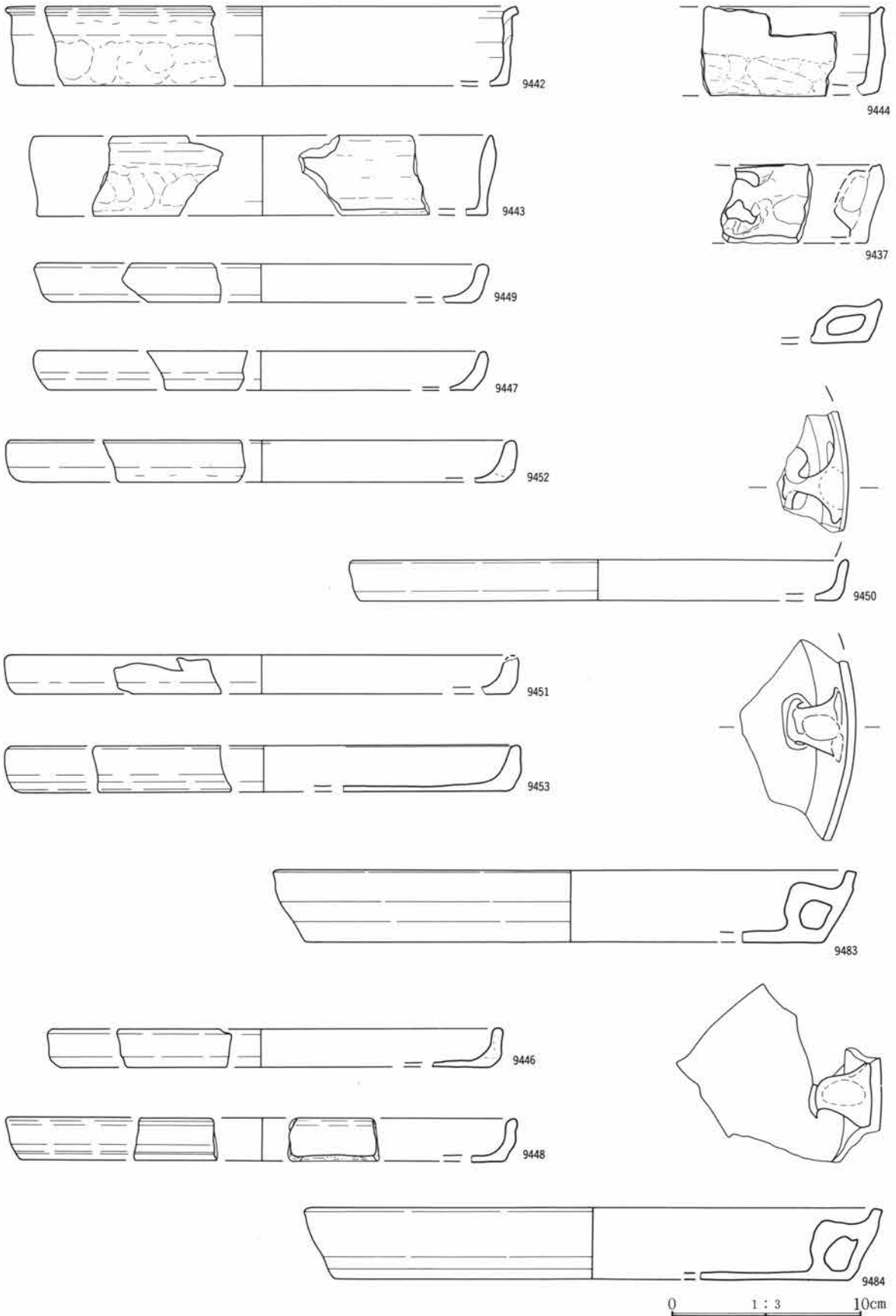


第319図 上谷戸調査区出土遺物実測図(6)―陶器 (摺鉢類) ―



第320図 上谷戸調査区出土遺物実測図(7)―軟質陶器―

第3節 中・近世の遺構と遺物



第321図 上谷戸調査区出土遺物実測図(8)―軟質陶器―

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

第33表 上谷戸調査区出土遺物観察表—摺鉢類—

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm)④器厚(mm) ②器高(mm)⑤摺目条 ③底径(mm)⑥摺目幅	①成形 ③器形 ⑤焼成	②底部 ④胎土 ⑥色調	特徴	備考
9401 318 —	陶器 不明 口縁部	Gy04g01	④12~13	①紐作り ②欠損 ③逆ハの字 ④中粒砂、白色微粒子多 ⑤酸化焰・堅緻な焼締 ⑥暗赤褐色		口唇部は外反 内外面横ナデ	常滑系 14c
9402 318 —	軟質陶器 鉢 片口 口縁部	G区	① 338 ④320	①紐作り ②欠損 ③口端：平 ④白色微粒子多 ⑤還元焰・須恵質・焼締 ⑥にぶい赤褐色、断面褐灰色		片口 内面はかなり 磨滅	
9403 318 —	軟質陶器 鉢 片口 口縁部	Hb12g	④125	①ロクロ成形 ②欠損 ③体部は直に外反、口端部断面三角 ④細粒砂・精選・白色微粒子 ⑤酸化焰・堅緻な焼締 ⑥表面黒褐色		片口 内面：横ナデ 外面：指圧痕	
9404 318 114	軟質陶器 鉢 底部	Hb12g	④200	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③体部は直に外反 ④細粒砂・精選、白色微粒子 ⑤酸化焰・堅緻な焼締 ⑥黒褐色(断面にぶい赤褐色)		9403と同一か 内面やや摩滅	
9405 320 113	軟質陶器 鉢 底部	Ha05g01	④ 70	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③体部は直に外反 ④細粒砂、白色粒子 ⑤還元焰、須恵質 ⑥灰色		内面かなり摩滅	
9406 318 115	軟質陶器 鉢 底部	Hb10g	④ 50	①ロクロ成形 ②平底 ③細粒砂、白色微粒子 ⑤還元焰・須恵質 ⑥灰色		内面：横ナデ	
9407 318 114	軟質陶器 鉢・摺鉢 底部	Hb05g12	④ 70	①ロクロ成形 ②平底 ③中粒砂、砂粒を多く含む ⑤酸化焰・焼締 ⑥黄褐色			
9408 318 114	陶器 鉢・摺鉢 体~底部	Hj05g	④170 ⑤ 7条 ⑥19mm	①ロクロ成形 ②平底 ③体部はやや外反傾向 ④細粒砂、小粒砂 ⑤酸化焰・焼締 ⑥内面浅黄橙色、外面にぶい褐色		内面摩滅が著しい	
9409 318 114	陶器 摺鉢 底部	Hf05g	④190 ⑤ 6条 ⑥16mm	①ロクロ成形 ②平底 ③体下半は外湾気味 ④中粒砂、小砂粒混 ⑤酸化焰・焼締 ⑥浅黄橙色		内面やや摩滅	
9410 318 114	陶器 鉢・摺鉢 底部	Hf06g01	④160	①ロクロ成形 ②平底 ③体部はほぼ直に外反 ④細粒砂、白色微粒子 ⑤酸化焰・焼締 ⑥にぶい橙色、断面、内面浅黄色		内面やや摩滅	信楽系
9411 318 115	陶器 鉢 摺鉢 底部	Ha13g03	④450 ⑤16条 ⑥38mm	①ロクロ成形 ②回転糸切り ③体部は直に外反 ④細粒砂・やや密 ⑤酸化焰 ⑥表面に鉄釉(暗褐色)、断面 浅黄色			瀬戸美濃系
9412 318 115	陶器 鉢 摺鉢 口縁部	Hc05・06g	④280 ⑤ 8条 ⑥24mm	①ロクロ成形 ②欠損 ③口縁内側に1条、外に2条の凹線 ④細粒砂、白色砂粒 ⑤酸化焰・焼締 ⑥赤褐色		体部外面：横 ヘラケズリ	関西系 堺又は明石
9413 319 114	陶器 鉢 摺鉢 口縁部	Gm05g	④360 ⑤11条 ⑥37mm	①ロクロ成形 ②欠損 ③縁帯はやや薄く、口唇1条、外2条の凹線 ④細粒砂、緻密、淡黄色粒子 ⑤酸化焰・焼締 ⑥赤褐色、外面に鉄釉		体部外面ヘラ ケズリ後、横 ナデ	関西系
9414 318 114	陶器 鉢 摺鉢 口縁部	Hc06g68	④230 ⑤ 7条 ⑥23mm	①ロクロ成形 ②欠損 ③体部内湾、縁帯やや幅広 ④細粒砂、砂粒 ⑤酸化焰・焼締 ⑥赤褐色		縁帯下横ナデ 体部外面ヘラ ケズリ	関西系
9415 319 114	陶器 鉢 摺鉢 口縁部	Hb05g16	④250 ⑤ 7条 ⑥22mm	①ロクロ成形 ②欠損 ③縁帯はやや大きく肥厚 ④細粒砂、白色小砂粒多 ⑤酸化焰・焼締 ⑥赤褐色		体部外面横ヘ ラケズリ	関西系
9416 319 115	陶器 鉢 摺鉢 口縁部	Hg00g	④120 ⑤12条 ⑥34mm	①ロクロ成形 ②欠損 ③縁帯はやや薄い ④細粒砂、白色小粒子 ⑤酸化焰・焼締 ⑥にぶい赤褐色		縁帯下横ナデ 体部外面横ヘ ラケズリ	関西系
9417 319 115	陶器 鉢 摺鉢 口縁部	Hf00g	④100 ⑤10条 ⑥28mm	①ロクロ成形 ②欠損 ③縁帯はやや薄い ④細粒砂、白色微粒子 ⑤酸化焰・焼締 ⑥にぶい赤褐色、断面一部赤褐色		縁帯下横ナデ 体部外面横ヘ ラケズリ	関西系
9418 319 115	陶器 鉢 摺鉢 口縁部	Hh08g	④ 50	①ロクロ成形 ②欠損 ③縁帯はやや薄い ④細粒砂・密 ⑤酸化焰、堅緻な焼締 ⑥にぶい赤褐色		体部外面横ヘ ラケズリ	
9419 319 114	陶器 鉢 摺鉢 底部	Hj05・06g	④245 ⑤12条 ⑥30mm	①ロクロ成形 ②平底、ヘラ起し ③体部やや内湾気味 ④細粒砂・密 ⑤酸化焰、焼締 ⑥赤褐色		体部外面横ナ デ	

第3節 中・近世の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	④重量(g)	①成形 ③器形 ⑤焼成	②底部 ④胎土 ⑥色調	特徴	備考
9420 319 114	陶器 鉢 摺鉢 底部	Hc05・06g46他	⑤8条 ⑥24mm		①ロクロ成形 ②平底 ③体部はやや内湾気味 ④細粒砂・密、白色小砂粒 ⑤酸化焰・焼締 ⑥赤褐色・内面小さくすんである		体部外面横ナデ	
9421 319 115	陶器 鉢 摺鉢 底部	Hf05・Hg06g	⑤11条 ⑥28mm		①ロクロ成形 ②平底 ③体部はやや内湾気味 ④細粒砂・密 ⑤酸化焰・焼締 ⑥赤褐色		体部外面横ナデ	
9422 319 114	陶器 鉢 摺鉢 底部	Hf00・Hi05g	⑤10条 ⑥30mm		①ロクロ成形 ②平底・高台作り ③体部はほぼ直に外反 ④細粒砂、白色粒子 ⑤酸化焰・焼締 ⑥明赤褐色		体部外面横ナデ、高台部は凹線により区画	
9423 319 115	陶器 鉢 摺鉢 底部	Hb07g04	⑤9条 ⑥28mm		①ロクロ成形 ②平底・高台作り ③体部は直に外反 ④細粒砂・密、白色小粒子 ⑤酸化焰・焼締 ⑥表面鉄釉(鈍い赤褐色)、断面赤褐色		体部外面横ナデ、穹線による高台部区画	
9424 318 115	陶器 鉢 摺鉢 口縁部	Hb05・06g	⑤11条 ⑥30mm		①ロクロ成形 ②欠損 ③縁帯は薄い ④細粒砂・密 ⑤酸化焰・焼締 ⑥にぶい赤褐色、内面断面赤褐色		縁帯下指頭押圧、体部外面横ケズリ	
9425 318 115	陶器 鉢 摺鉢 口縁部	Hk07g03	⑤12条 ⑥32mm		①ロクロ成形 ②欠損 ③縁帯はやや薄い ④細粒砂・密、淡黄色粒子 ⑤酸化焰・焼締 ⑥赤褐色		縁帯下横ナデ 体部外面ヘラケズリ	
9426 320 114	陶器 鉢 底部	He06g-02			①ロクロ成形 ②平底 ③筒形の器形か ④中粒砂、⑤酸化焰・やや焼締 ⑥にぶい黄橙色・無釉		底部に穿孔あり、体部横ナデ調整	
9427 320 115	軟質陶器 火舎・香炉 口～底部	Hc06g			①ロクロ成形 ②平底・ボタン状脚貼付 ③体部やや内湾 ④細粒砂、白色微粒子 ⑤酸化焰・燻 ⑥黒・内面一部と断面にぶい褐色		内：横ナデ 外面口縁部に1条の沈線	
9428 320 115	軟質陶器 火舎・香炉 底部	Hb05g			①ロクロ成形 ②平底、ボタン状脚貼付 ③体部内湾 ④細粒砂・均質 ⑤酸化焰・燻 ⑥表面：黒褐色、断面鈍い赤褐色		内面横ナデ外面、全面にスタンプ	
9429 320 115	軟質陶器 火舎・香炉 底部	Hb05g			①ロクロ成形 ②平底・ボタン状脚貼付 ③体部内湾 ④細粒砂 ⑤酸化焰・燻 ⑥表面暗赤褐色、断面にぶい赤褐色		内面横ナデ 外面、スタンプ	
9430 320 115	軟質陶器 火舎・香炉 底部	Hi05g			①ロクロ成形 ②平底、ボタン状脚貼付 ③体部は外傾気味に直立 ④細粒砂 ⑤酸化焰 ⑥明褐色		体部横ナデ	
9431 320 115	軟質陶器 火鉢 口縁部	Hc08g			①型作り ②欠損 ③口唇部は平坦で幅広 ④細粒砂、赤褐色粗粒子 ⑤酸化焰・良好 ⑥にぶい黄橙色		口縁部では横ナデ調整	
9432 320 —	陶器 甕 胴部	Gs06g			①紐作り ②・③不明 ④細粒砂・密 ⑤酸化焰・焼締 ⑥外面赤褐色・内面灰白・断面浅黄			
9433 320 —	陶器 甕 肩部	Gw06g			①紐作り ②・③不明 ④中粒砂、白色小砂粒 ⑤酸化焰・焼締 ⑥外面オリーブ黄色・内面明赤褐色・断面一部黒色			常滑系灰釉 ヘラ描き
9434 320 —	軟質陶器 内耳鍋 口縁部	Gd10g			①紐作り ②欠損 ③体部は外傾、口縁部は外反、内稜はなし ④中粒砂、白色微粒子 ⑤酸化焰 ⑥外：暗褐色・内：浅黄・断面にぶい褐色		外面煤付着	
9435 320 —	軟質陶器 内耳鍋 口縁部	Gm05g			①ロクロ成形 ②欠損 ③体部外傾、口縁部外反 ④細粒砂・密 ⑤酸化焰・瓦質 ⑥黒色、一部灰色		内面、外面口縁部横ナデ、体外面ケズリ	
9436 320 113	軟質陶器 焙烙 口～底部	Gu06g01・02			①紐作り ②平底か ③体部外傾気味に直立、口唇部外反 ④細粒砂、微粒雲母、黒色鉱物粒子 ⑤酸化焰・燻 ⑥にぶい黄褐色		口唇部に沈線 内面横ナデ体 下指頭圧痕	
9437 321 —	軟質陶器 焙烙 口～底部	Gu15g			①紐作り ②平底か ③体部やや肥厚して外傾 ④細粒砂、赤褐色粗粒子、黒色鉱物粒子 ⑤酸化焰 ⑥外面黄褐色・内面淡黄色		内耳は幅広 体部横ナデ	

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(㎜)④重量(g) ②器高(㎜) ③底径(㎜)	①成形 ③器形 ⑤焼成	②底部 ④胎土 ⑥色調	特徴	備考
9438 320 115	軟質陶器 焙烙 口～底部	Hc05g		①紐作り ②平底か ③体部外傾、口端部外反 ④細粒砂、微粒雲母、白色微粒子 ⑤酸化焙・燻 ⑥外面黒褐色・内面におい黄褐色		内面横ナデ 外面指頭圧痕	
9439 320 115	軟質陶器 焙烙 底部	Hf08g		①紐作り ②平底か ③体部外反 ④細粒砂・密、白色・黒色微粒子 ⑤還元焙・やや瓦質 ⑥表面黒色・内面灰色		内面やや摩滅	
9440 320 127	軟質陶器 焙烙 底部	Hi08g	③(310mm)	①紐作り ②平底 ③体部やや外傾 ④細粒砂、黒色鉍粒子 ⑤酸化焙・燻(やや瓦質) ⑥器表面黒褐色、断面浅黄褐色		内外面横ナデ	
9441 320 127	軟質陶器 焙烙 口～底部	Hb05g		①紐作り ②平底か ③体部外傾気味に直立、口端部短く外反 ④中粒砂、小砂粒 ⑤酸化焙 ⑥外面灰褐色・内面におい黄褐色		内面、外上半横ナデ、体外下指頭圧痕	
9442 321 127	軟質陶器 焙烙 口～底部	Hk05g		①紐作り ②平底 ③体部ほぼ直立、口端部短く外反 ④細粒砂 ⑤酸化焙・燻 ⑥灰褐色、断面におい黄褐色		内・外上半横ナデ、体外下指頭圧痕	
9443 321 127	軟質陶器 焙烙 口～底部	He05g		①紐作り ②平底 ③体部外傾気味に直立、肥厚 ④中粒砂、白色微粒子、小砂粒 ⑤酸化焙・燻 ⑥におい黄褐色		内・外上半横ナデ、体外下指頭圧痕	
9444 321 127	軟質陶器 炬烙 口～底部	Hb10g		①紐作り ②平底 ③体部外傾気味に直立、肥厚 ④中粒砂、白色微粒子 ⑤酸化焙 ⑥におい黄褐色		内・外上半横ナデ、体外下指頭圧痕	
9445 320 127	軟質陶器 焙烙 口～底部	Hf07g		①紐作り ②不明 ③内湾、口端部平坦 ④微粒子、赤褐色粗粒子 ⑤酸化焙・燻、やや瓦質 ⑥表面黒色、断面におい橙色		外面ミガキ 内面横ナデ	
9446 321 127	軟質陶器 焙烙 口～底部	Hc05g		①型作り ②平底 ③口縁部は短く直立 ④微粒砂、赤褐色粗粒子 ⑤酸化焙 ⑥橙色		体部横ナデ	近世
9447 321 127	軟質陶器 焙烙 口～底部	Hb05g08		①型作り ②平底 ③口縁部は内湾気味に直立 ④細粒砂、微粒雲母 ⑤酸化焙・外面燻 ⑥橙色		体部横ナデ	
9448 321 127	軟質陶器 焙烙 口～底部	Ha05g		①型作り ②平底 ③口縁部は内湾気味に直立 ④細粒砂、白色微粒子、赤褐色粒子 ⑤酸化焙・燻(やや瓦質) ⑥黄灰色		体部横ナデ	
9449 321 127	軟質陶器 焙烙 口～底部	Hb06g05		①型作り ②平底 ③口縁部はやや外傾気味に直立 ④細粒砂、微粒雲母 ⑤酸化焙		体部横ナデ	近世
9450 321 127	軟質陶器 焙烙 口縁部	Hf07g03		①型作り ②平底 ③口縁部はやや外傾気味に直立 ④微粒砂、白色微粒子・微粒雲母 ⑤酸化焙・良好 ⑥橙色		体部横ナデ	近世
9451 321 127	軟質陶器 焙烙 底部	Hc・Hf05g		①型作り ②平底 ③口縁部は外傾気味に短く直立 ④微粒砂、赤褐色粒子、微粒雲母 ⑤酸化焙・燻 ⑥外面黒褐色、内面褐色		体部横ナデ	近世
9452 321 127	軟質陶器 焙烙 口～底部	Hc06g		①型作り ②平底 ③口縁部は外傾気味に直立 ④細粒砂、微粒雲母・赤褐色粒子 ⑤酸化焙・燻 ⑥におい赤褐色、外面一部黒色		体部横ナデ	
9453 321 127	軟質陶器 焙烙 口～底部	Hb・Hc06g		①型作り ②平底 ③口縁部は外傾気味に短く直立 ④微粒砂、微粒雲母、赤褐色粒子 ⑤酸化焙		体部横ナデ 外面煤付着	
9454 277 —	土師器 壺型土器 口縁部	Ha05g02		①紐作り ②欠損 ③折り返し口縁 ④細粒砂、小砂粒 ⑤酸化焙焼成 ⑥灰白色		口縁部横ナデ	
9457 320 125	軟質陶器 不明 口～底部	上第23号溝		①型作り ②平底 ③器種は不明 ④中粒砂、小砂粒を多く含む ⑤酸化焙 ⑥表面黒色、断面におい黄褐色			
9458 282 124	軟質陶器 鉢 口縁部	上第19号溝		①紐作り ②欠損 ③口端部は内側にやや肥厚 ④細粒砂、白色微粒子、微粒雲母 ⑤還元焙(須恵質) ⑥灰色		外面・口縁内側横ナデ 内面やや摩滅	

第3節 中・近世の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種 別 器 種 残 存 状 況	出 土 位 置 出 土 グリッド 出 土 遺 構	①口径(≡)④器厚(≡) ②器高(≡)⑤摺目条 ③底径(≡)⑥摺目幅	①成 形 ③器 形 ⑤焼 成	②底 部 ④胎 土 ⑥色 調	特 徴	備 考
9459 282 124	軟質陶器 鉢 底部	上第19号溝		①紐作り ②平底 ③体部に直に外反 ④細粒砂、小砂粒 ⑤還元焰(須恵質) ⑥灰色		外面指ナデ調整、内面の摩滅著しい	
9460 282 124	軟質陶器 鉢 底部	上第19号溝		①紐作り ②平底 ③体部は直に外反 ④細粒砂、赤褐色粒子・小砂粒 ⑤酸化焰・燻 ⑥鈍い赤褐色		外面指ナデ内面摩滅	
9461 282 124	軟質陶器 鉢 底部	上第19号溝		①紐作り ②平底 ③体部外反 ④細粒砂、赤褐色粒子、微粒雲母 ⑤酸化焰・燻 ⑥断面鈍い赤褐色		外面横ナデ内面摩滅 外面煤付着	
9462 282 124	軟質陶器 内耳鍋 口縁部	上第19号溝		①紐作り ②欠損 ③体部直立、口縁部外反 ④中粒砂、赤褐色粒子、白色小粒子、微粒雲母 ⑤酸化焰・燻 ⑥表面灰色、断面鈍い赤褐色		内面横ナデ口縁外横ナデ 体外煤付着	
9463 282 125	軟質陶器 鉢 片口 口縁部	Gu14g02 上16号溝		①紐作り ②欠損 ③口唇部やや肥厚 ④細粒砂、白色・黒色粒子 ⑤還元焰(瓦質) ⑥灰色		外面指頭押圧後ナデ調整 内面横ナデ	内面摩滅
9464 286 —	軟質陶器 不明 体～底部	上1号石組		①ロクロ成形 ②平底 ③体部は外方に開く ④細粒砂、微粒雲母、小砂粒 ⑤酸化焰・燻 ⑥浅黄橙色、表面黒色			
9465 286 —	軟質陶器 焙烙	上1号石組	② 55	⑤還元焰(瓦質)			
9466 286 —	軟質陶器 焙烙	上1号石組	②(52)	①紐作り ②欠損 ③体部はほぼ直立、口唇部は短く外反 ④中粒砂、白色粒子 ⑤酸化焰・燻 ⑥表面黒色、断面鈍い赤褐色		内・外上横ナデ、体外下指頭押圧	
9467 286 —	軟質陶器 焙烙	上1号石組		①紐作り ②欠損 ③やや外傾気味に直立 ④細粒砂、微粒雲母、黒色鉍物粒子 ⑤酸化焰(やや瓦質) ⑥鈍い黄橙色		体部横ナデ	
9468 289 124	軟質陶器 鉢 口縁部	上1号井戸跡		①紐作り ②欠損 ③体部はやや内湾気味に開き、口唇部は玉縁状 ④細粒砂、小砂粒 ⑤酸化焰 ⑥橙色		口縁部横ナデ内面摩滅、波状の摺目	
9469 289 124	軟質陶器 鉢 底部	上1号井戸跡		①紐作り ②平底 ③細粒砂、白色小砂粒 ⑤酸化焰 ⑥にぶい黄橙色		体下半～底部の摩滅が著しい	
9470 289 124	軟質陶器 内耳鍋	上1号井戸跡		①紐作り ②欠損 ③体部外傾気味に直立、口縁部外反 ④細粒砂、白色微粒子 ⑤還元焰、やや瓦質 ⑥灰黄褐色		内外面：横ナデ	
9471 289 124	軟質陶器 内耳鍋 口～体部	上1号井戸跡		①紐作り ②欠損 ③やや外傾気味、口縁部外反 ④細粒砂 ⑤酸化焰・普通 ⑥橙色 ⑧外面煤付着		内外面：横ナデ、体下半にヘラケズリ	
9472 — —	軟質陶器 内耳鍋 底部	上1号井戸跡		①紐作り ②平底 ③不明 ④細粒砂 ⑤酸化焰一部還元・やや須恵質 ⑥褐灰色		内面：横ナデ 体外面：横ナデ	
9473 296 126	軟質陶器 内耳鍋 口縁部	上第22号土坑		①ロクロ作り ②欠損 ③体部は外傾気味に直立、口縁部はやや外反、口端部は平坦 ④細粒砂、白色微粒子 ⑤還元焰・須恵質 ⑥灰色		内外面：横ナデ 内稜まで短い	
9474 296 126	軟質陶器 内耳鍋 口縁部	上第22号土坑		①紐作り ②欠損 ③体部はやや外傾、口縁部外反 ④細粒砂、微粒雲母、黒色鉍物粒子 ⑤酸化焰・良好 ⑥にぶい橙色		内綾あり 体部横ナデ	
9475 300 126	軟質陶器 鉢 こね鉢 底部	上第24号土坑	③(96)	①紐作り ②欠損 ③口縁部近くが内湾 ④白色微粒・黒色鉍物粒・微粒雲母、細粒砂 ⑤還元焰・やや須恵質 ⑥鈍い橙色		内面かなり摩滅 外面指頭圧痕	
9476 302 126	軟質陶器 鉢 こね鉢 口縁部	上第26号土坑		①紐作り ②欠損 ③口縁部付近でやや内湾、口端部平坦 ④細粒砂、黒色微粒子 ⑤還元焰・須恵質・堅緻 ⑥灰色		片口	
9477 302 126	軟質陶器 鉢 こね鉢 底部	上第26号土坑	③ 110	①紐作り ②平底 ③直に外反 ④細粒砂、黒色粒子 ⑤還元焰・須恵質・堅緻 ⑥灰色		内面：横ナデ 外面：指圧痕 内面：摩滅	

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(㎜)④器厚(㎜) ②器高(㎜)⑤摺目条 ③底径(㎜)⑥摺目幅	①成形 ③器形 ⑤焼成	②底部 ④胎土 ⑥色調	特徴	備考
9478 302 126	軟質陶器 内耳鍋	上第26号土坑		①紐作り ②欠損 ③直に近い立ち上り ④細粒砂 ⑤酸化焰・良好 ⑥鈍い黄褐色		外面煤付着 内：横ナデ 外下半：ヘラケズリ	
9479 302 126	軟質陶器 内耳鍋 底部	上第26号土坑	③ 180	①たたら作り ②平底 ③体～口欠損で不明 ④細粒砂、黒色微粒子 ⑤還元焰・須恵質・堅緻 ⑥灰色		底内面：横ナデ 体外：横ナデ	
9480 302 126	軟質陶器 内耳鍋 底部	上第26号土坑	③ 182	①たたら作り ②平底 ③体部はやや内湾 ④細粒砂 ⑤酸化焰・やや堅緻な土師質 ⑥赤褐色		内外面：横ナデ	
9481 304 126	軟質陶器 焙烙 口～底部	上27号土坑	① 370 ② 44 ③ 296	①たたら作り ②平底 ③口縁は内湾して浅い立ち上り、口端は平坦 ④細粒砂・砂粒混 ⑤酸化焰・土師質 ⑥橙色一部暗褐色		内耳 口縁内外面横ナデ	
9482 309 128	陶器 摺鉢 底部	上第30号土坑		①ロクロ成形 ②平底 ③体部はやや内湾気味 ④細粒砂、白色砂粒多 ⑤酸化焰・焼締 ⑥赤褐色			
9483 321 115	軟質陶器 焙烙 口～底部	Hb05g-15		①たたら・紐作り ②平底 ③口縁部はやや外傾気味に直立 ④細粒砂、白色・黒色鉱物粒子 ⑤酸化焰(やや瓦質) ⑥にぶい黄褐色		内面は幅広 体部横ナデ 底内面刻印	
9484 321 115	軟質陶器 焙烙 口～底部	Hb 5 g14・09		①たたら・紐作り ②平底 ③口縁部はやや外傾気味に直立 ④細粒砂、白色・黒色鉱物粒子 ⑤酸化焰(やや瓦質) ⑥にぶい赤褐色		内耳は幅広 体部横ナデ	※9483と同一か
9485 319 114	陶器 摺鉢 体～底部	Gm05g		①ロクロ成形 ②平底、高台作り ③体部は直に外反 ④細粒砂・白色砂粒 ⑤酸化焰・焼締 ⑥赤褐色		体部外面横ナデ	
9486 286 125	軟質陶器 あんか 口～体部	上1号石組		①たたら作り ②欠損 ③方形の火鉢か ④細粒砂・白色微粒子 ⑤酸化焰・良好 ⑥浅黄褐色～褐灰色		口縁部面取り 内外面横ナデ	
9487 312 —	軟質陶器 摺鉢 口～底部	上第34号土坑		①ロクロ成形 ②平底 ③体部はやや内湾気味 ④細粒砂・白色砂粒 ⑤酸化焰・焼締 ⑥赤褐色		体部外面ヘラケズリ後横ナデ	

[焙烙類]

焙烙類は、体部から口縁部への立ち上がり、外方に開くもの（A類）、ほぼ直立するもの（B類）、短く内湾傾向を示すもの（C類）とが見られる。また、焼成では瓦質のもの、酸化焰による土師質のものが見られる。いずれのものにも内耳が伴うと思われる。ほとんどが上位面（H区）からの出土である。

焙烙A類は、9453がこれにあたる。器壁の薄い精緻な作りで、瓦質焼成で灰褐色～黒褐色を呈す。体部は逆ハの字形に開き、口縁部は短く外反する。類例の少ないタイプである。

焙烙B類は、体部がほぼ直に近い立ち上がりで、口唇部が短く外反する。体部上面には横ナデ調整が見られ、下半には指頭による押圧痕が見られ、底部は平坦である。体部の作りは、器壁の比較的薄い B₁類(9438・9442)、やや肉厚の B₂類 (9437・9439～9441・9444)、体部上半が肥厚する B₃類 (9443) がみられる。外面が灰褐色、断面では黄褐色を呈し、やや還元の瓦質の焼成と思われる。

焙烙C類は、酸化焰焼成で赤褐色を呈す一群である。9446～9553・9483・9484がこれにあたる。体部から口縁部まではやや内湾する短い立ち上がりで、きれいな横ナデ調整が見られ、底部は平底である。体部は肉厚のものや薄いものが見られる。9484には底部内面に刻印が認められる。

[火舎・香炉類]

9427～9430がこれにあたる。底部は平底で、ボタン状の脚が3カ所に貼付される。体部から口縁部にかけては9437が直であるのに対し、9427～9429はやや内湾する。9428・9429には体部外面に押圧によるスタンプ

文が見られる。

9431は角型の火舎口縁部片と思われる。

[不明・その他]

9453は内外面とも比較的きれいに磨きかけられた黒色を呈し、口唇部は平坦で、体部がやや内湾し、下半は欠損して不明であるが、高台もしくは脚を伴うものと思われる。

9457は軟質焼成のものと思われるが器種は不明である。

(5) 陶磁器類 (第322図～第327図、写真図版116～123)

上谷戸調査区からは市道西側の上位面 (H区) を中心に多量の近世陶磁器類が出土している。肥前系の染付類と瀬戸系の施釉陶器類が中心であるが、肥前系陶器類 (唐津系・京焼風)、瀬戸系染付等も見られ、また無釉の焼締陶器も見られる。また、輸入磁器も1点出土している。器種は碗皿類が中心であるが、鉢類や壺・瓶類、火入れ・香炉類、灯明皿・ひょうそく・仏具類等がみられる。なお、ここでは磁器及び施釉陶器を主に扱い、摺鉢類についてはすでに述べたのでここでは省く。

[陶器・壺甕類] (第320図)

9433は大甕の肩部片と思われ、ヘラ描きが見られる。9432は炆器質の大甕の胴部片である。

[磁器・皿類] (第322図、第325図、写真図版116、117)

9501は明青花、皿の底部片で、内面に笹文が見られる。17世紀前半代の福建省か広東省あたりの製品である。他は肥前系の製品である。9503～9505は青磁の小片である (図化略)。9507・9508は内面草花文の青磁染付皿である。9506は有田製、9510は内面にコンニャク印版が見られ、17世紀末～18世紀前半にかけてのものである。9511～9514は内面松竹梅文、外面唐草文、見込み五弁花手描きの輪花皿である。9516は笹文の輪花皿である。9518・9519・9520には内面に蛇ノ目釉ハギが見られる。

[磁器・碗類] (第323図・第324図、写真図版118、119、127)

ここで見られる磁器碗は大部分が陶胎染付も含む肥前系であり、少量ではあるが瀬戸系 (新製焼) 染付も見られる。器種は丸碗が多く、端反り碗・広東碗・小碗・小盃等が見られる。

9523は柴垣文の丸碗で器壁が薄く、精緻な作りであり有田製と見られる。9539もやはり有田製である。9542の扇文も比較的上手である。量的に多く見られる丸碗の染付文様は雪輪梅樹文であり、二重網文も見られる。コンニャク印版による菊花文 (9543) も見られる。

丸碗以外の器形として筒形碗 (9530・9564)、ソバ猪口形 (9542)、端反り碗 (9528・9531・9548)、やや筒形の丸碗 (9560・9558・9563) と、猪口 (9561) が見られる。またこれらより若干生産年代の下る広東型碗 (9567～9570) とその蓋 (9571・9572) が確認される。

瀬戸系染付は9588～9597の10点で、肥前系とは呉須の発色等にはっきりした相違が認められた。やや明るい色調か濃い藍色で、透明釉に細かな気泡が観察され、呉須の溜まりはやや盛り上がっている感じである。9590・9597の端反り碗には墨弾きによる絵付けが見られる。

[磁器・その他] (第324図・第325図、写真図版117、119、121、127)

碗皿類の他には青磁香炉 (9576)、青磁火入れ (9577・9578)・白磁染付火入れ (9579)、仏飯器 (9580・9581)、袋物 (9584・9586・9587) が見られる。9586は袋物の底部で、外面の高台際に赤絵の圏線が見られる。9503は青磁、9582は染付で、仏花器かと思われる。

[陶器・灯明皿] (第325図、写真図版120)

灯明皿は油皿と油受皿が6点ずつ12点 (9601～9612) あり、他にひょうそく (9613) が1点出土している。

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

9601～9603は灰釉が掛かる関西系と思われる製品で、他は鉄釉が刷毛塗りされたものである。9613のひょうそくは黒褐釉の瀬戸美濃系の製品である。

[陶器・肥前系] (第325図・第326図、写真図版119・121・123)

9619は肥前系京焼風陶器の碗で、赤絵である。9620・9622・9623・9625は同じく肥前系京焼風陶器、9621・9630は肥前系唐津の灰釉刷毛塗りの碗である。17世紀末から18世紀前半の製品である。9627は唐津内野山の皿である。

[陶器・瀬戸美濃系] (第325図・第326図、写真図版120～123)

黒褐釉のものは9613～9616の4点で、9614・9615は白色の長石釉をいっちゃん掛けした抹茶碗である。9617は灰釉碗、9618は灰釉皿である。9625・9526は瀬戸系の灰釉皿、9628・9629は瀬戸美濃系である。9631～9647・9651～9654は瀬戸系・瀬戸美濃系の碗で、黄瀬戸釉、褐釉、灰釉等が掛けられ、いわゆる尾呂茶碗・鎧茶碗等が見られる。9648はやや大型の盤に近い器形で黄瀬戸釉が掛かる。

釉調は9613と同じである。

石造物・石製品 (第329図～第331図、写真図版123・129・130)

上谷戸調査区では9点の板碑 (9911～9918・9922) が出土している。

(1) 板碑(9914)は残高86.5cm、幅33.8cm、厚さ3.5cmの胴部中程で折れ、基底部端を欠失している。頂部は、やや左下がりの山形をなすが2条線は認められない。種字は中央付近に阿弥陀三尊の種字「キリーク・サー・サク」が浅く丸彫りされる。裏面縁辺部はハツリ仕上げ成形が施されている。点紋絹雲母石墨片岩製。

板碑 (9913) は残高55.5cm、残幅23.5cm、厚さ2.8cmの頂部から上胴部にかかる右半分の破片で、表面には阿弥陀の種字「キリーク」が浅く丸彫りされている。裏面の縁辺部はハツリ仕上げが認められる。絹雲母緑泥片岩製。

板碑 (9916) は残高31cm、残幅21.5cm、厚さ3cm頂部付近左半分の残片である。本板碑の残存部分には種字等の残存は確認されない。裏面にはハツリ仕上げ成形が認められることから、板碑の破片であると断定できる。絹雲母緑泥片岩製。

板碑 (9912) は残高53cm、幅40cm、厚さ5cmの基部破片で、表面は平滑に仕上げられ、裏面には幅1.3cm程の平ノミ状工具による左右からの剝離痕が顕著に認められる。緑泥片岩製。

板碑 (9917) は残高42cm、残幅22cm、厚さ3.5cmの頂部付近の破片で、種字の「キリーク」の左半分が認められ、表裏面ともに平滑に仕上げられている。点紋緑泥片岩。

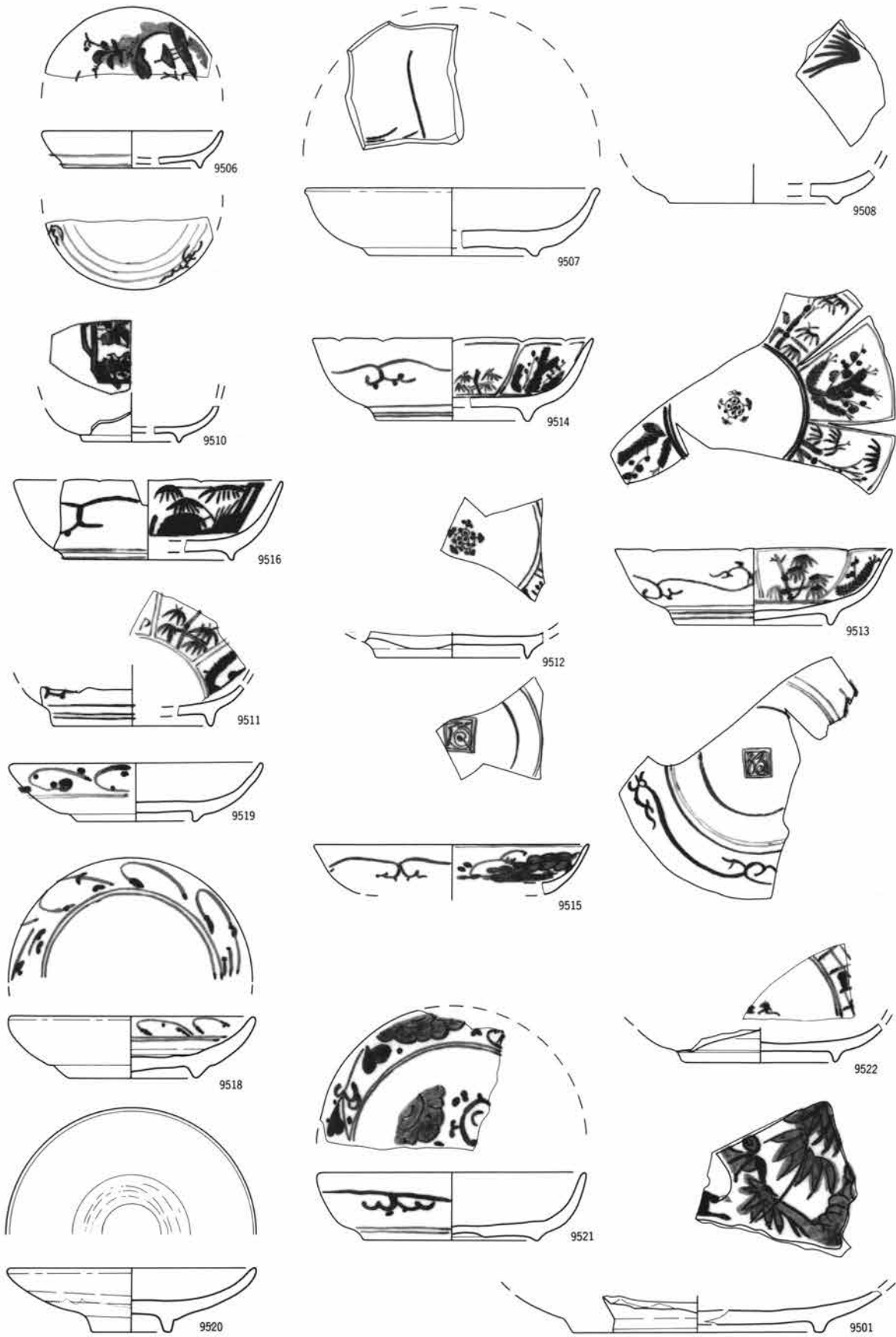
板碑 (9918) は残高48.5cm、残幅19cm、厚さ3cmの側端部の破片で天地不明である。表面は水磨き仕上げされる。点紋緑泥片岩製。

板碑 (9915) は残高35.5cm、残幅19cm、厚さ3.5cmの基底部左下端部の破片である。絹雲母緑泥片岩製。

板碑 (9911) は残高63cm、幅30cm、厚さ5cm程のものであるが、風化が激しく現在でも薄く剝離が進んでいる。このため表面の拓本のみで、実測および裏面の採拓は行わなかった。板碑に認められる種字は阿弥陀三尊の内、蓮台に乗る「キリーク」、無台の「サ」のみが確認された。緑泥片岩製。

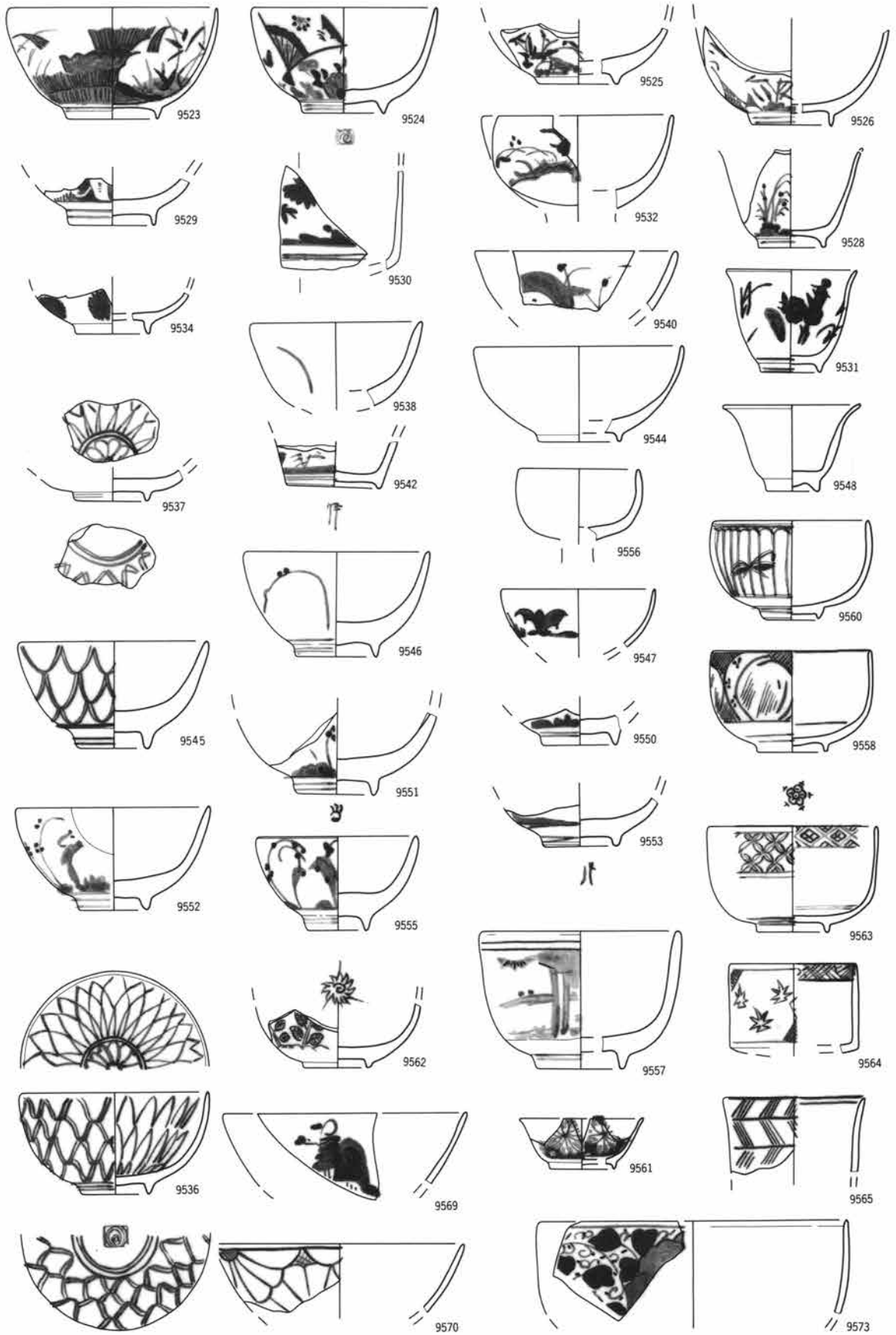
板碑 (9922) は中位部から基部にかけての破片で、残高28cm、幅17.5cm、厚さ2.3cmで、基部側表面の一部が剝離している。上端部中央に蓮台が残るが種字は不明。

これらの板碑は、本来使用されていた場所から移動されて、暗渠排水溝の天井に再利用されたもの、井戸あるいは溝に廃棄されたものであったが、板碑の持つ年代観は近接するもので、同一箇所からの持ち込みが想定される。板碑のいずれにも頂部2条線が存在しないこと、種字の彫り込みが浅いこと、板碑の仕上がりが



第322図 上谷戸調査区出土遺物実測図(9)―磁器―

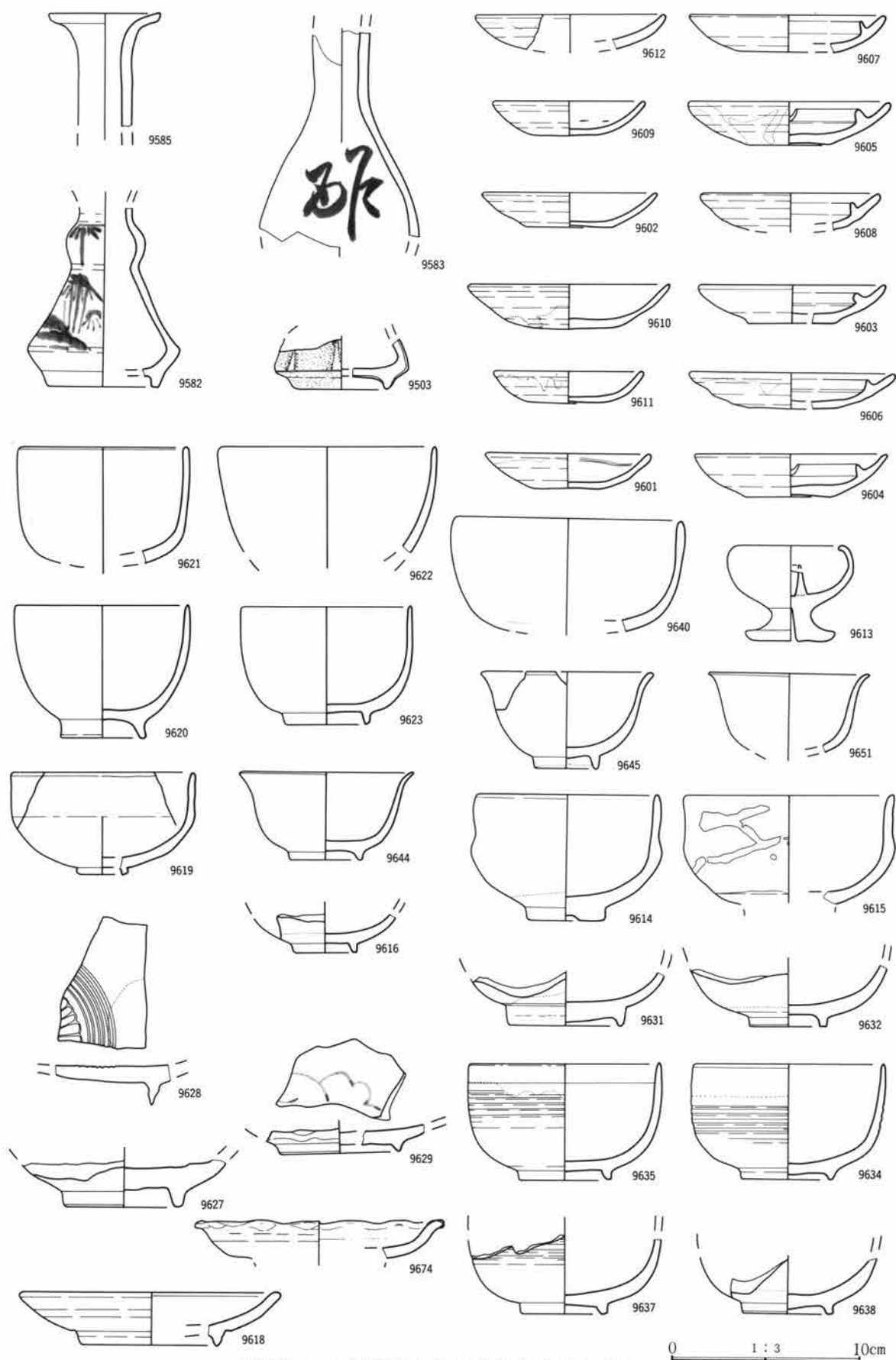
0 1:3 10cm



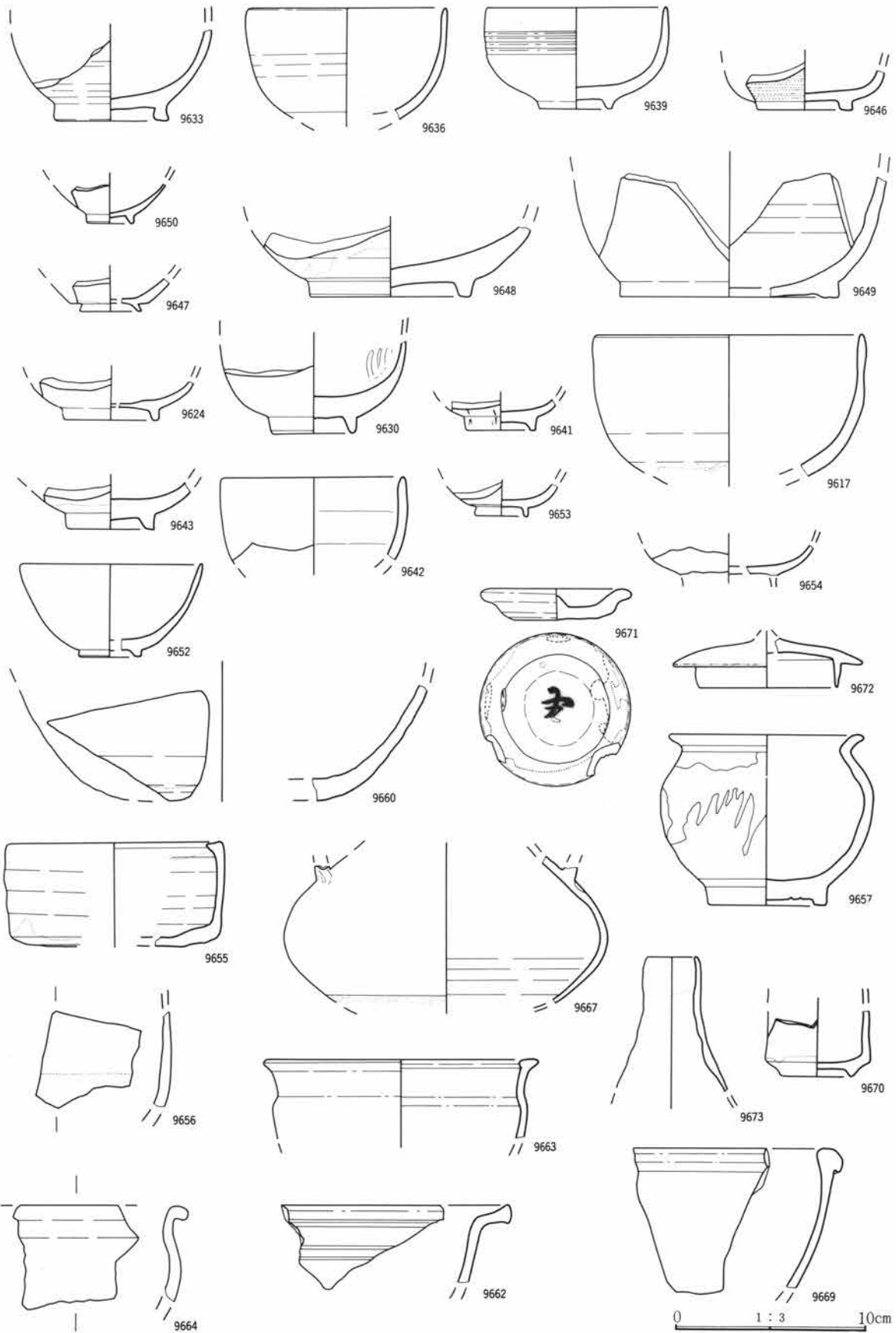
第323図 上谷戸調査区出土遺物実測図(10)―磁器―



第324図 上谷戸調査区出土遺物実測図(11)一磁器一

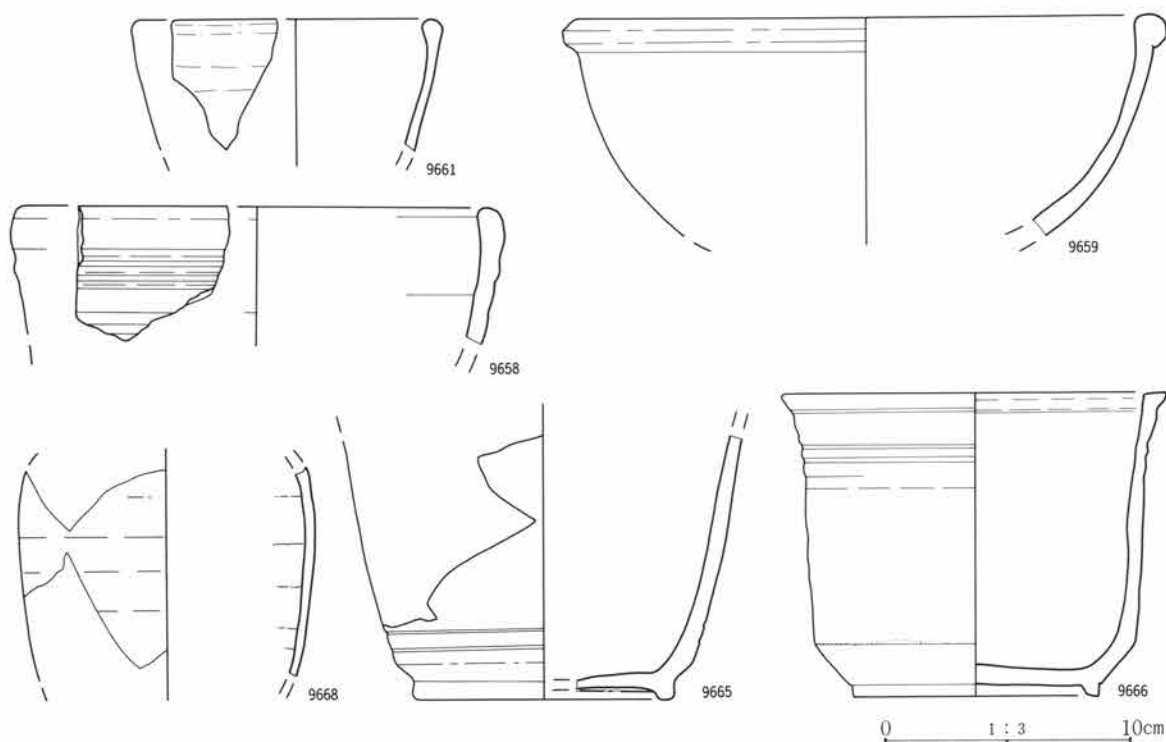


第325図 上谷戸調査区出土遺物実測図(12)―陶器―



第326図 上谷戸調査区出土遺物実測図(13)―陶器―

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物



第327図 上谷戸調査区出土遺物実測図(14)―陶器―

第34表 上谷戸調査区出土遺物観察表 ―磁器・グリッド―

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部 ③器形 ④胎土 ⑤焼成 ⑥色調 ⑦染付文様 ⑧呉須の色	特徴	備考
9501 322 116	磁器・青花 皿 底部	Hf09g	③(75)	②高台畳付無釉、誰山砂付着 ③低平な皿形 ④精選密(白色) ⑤良好 ⑥白色 ⑦笹文 ⑧やや濃い青色に発色	高台裏に砂付着	明代 17C 広東か福建
9502 291 117	磁器・青磁 碗 口縁部片	上第2号井戸	①118 ②33 ③80	②欠損 ③体部に稜を認める ④精緻(灰色) ⑤良好 ⑥オリブ灰色		肥前系 17c
9503 325 117	磁器・染付 香炉 底部小片	Hb05g		②高台畳付無釉 ③袋物底部で体部に面取り ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥緑灰色(内面 無釉)		肥前系 17c中
9506 322 117	磁器・染付 小皿 1/2口~底	G区表採	①85 ②19 ③65	②高台畳付無釉 ③口縁部やや内湾 ④精選 (白色) ⑤良好 ⑦内面全面に山水文、体 部外面唐草文 ⑧淡い青色に良好に発色		肥前系 1690~18c 初
9507 322 116	磁器・青染 皿 1/2口~底	Gm05g	①146 ②34 ③76	②高台畳付無釉 ③体部内湾気味に直立、口 唇部外反 ④精緻(灰白色) ⑤良好 ⑥内外 面青磁釉(淡緑色) ⑦内面草花文 ⑧濃い青		肥前系有田 17c末~18c 前
9508 322 —	磁器・青染 皿 1/2体~底	Gk08g	③88	②高台畳付無釉 ④精緻(灰白色) ⑤良好 ⑥内外面青磁釉(淡緑色) ⑦内面草花文 ⑧ 極めて良好に発色		肥前系 17c末~18c 前
9509 — 177	磁器 皿 小片			②不明 ④精緻(灰白色) ⑤良好 ⑥内外 面青磁釉(淡緑色) ⑦内面草花文 ⑧呉須 は良好に発色		肥前系 17c末~18c 前
9510 322 —	磁器・染付 皿 底部	Ha14g02	③52	②高台畳付無釉 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑦見込コンニャク印判草花文 ⑧やや淡い青 色に発色		肥前系 1690~18c 前
9511 322 116	磁器・染付 皿 体~底部	Hg05g		②高台畳付無釉 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑦体部内面松竹文、外面唐草文 ⑧良好な発 色	輪花皿か	肥前系 18c前

第3節 中・近世の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種 別 器 種 残 存 状 況	出 土 位 置 出土グリッド 出 土 遺 構	①口径(㎜) ②器高(㎜) ③底径(㎜)	①成形 ②底部 ③器形 ④胎土 ⑤焼成 ⑥色調 ⑦染付文様 ⑧呉須の色	特 徴	備 考
9512 322 116	磁器・染付 皿 底部	Hb05g	③ 80	②高台畳付無釉 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑦体部内面松竹文か、見込五弁花手描き、高 台裏「渦福」 ⑧鮮かな青に発色		肥前系 18c前
9513 322 116	磁器・染付 皿 底部	Hb06g59	①140 ② 40 ③ 80	②高台畳付無釉 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑦ 体部内面松竹梅文、外面唐草文、見込五弁花 手描き、外面唐草文 ⑧鮮かな青色	輪花皿 「渦福」	肥前系 18c前
9514 322 116	磁器・染付 皿 底部	Hb06g04	①146 ② 42 ③ 80	②高台畳付無釉 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑦ 体部内面松竹梅文、外面唐草文 ⑧青色に良 好に発色	輪花皿	肥前系 18c前
9515 322 116	磁器・染付 皿 口縁部	Hc05g	①144	②欠損 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑦内面 つる草文、外面唐草文 ⑧濃淡いずれも青色 に良好に発色		肥前系 18c前～中
9516 322 116	磁器・染付 皿 口～底部	Hb05g	①120 ② 41 ③ 88	②高台畳付無釉 ④精緻(灰白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色 ⑦内面雪持笹文、外面唐草文 ⑧暗青灰色に発色	輪花皿 うるし継痕	肥前系 18c中～後
9517 — 116	磁器・染付 皿 口～底部	Hd05g		②高台畳付無釉 ④精緻(灰白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色 ⑦内面宝文、外面唐草文 ⑧や やくすんだ青色		肥前系 18c中～後
9518 322 116	磁器・染付 皿 片完形	Hc06g57	①132 ② 32 ③ 66	②高台畳付無釉 ③見込蛇ノ目釉ハギ ④精 選(灰白色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦体部内 面つる草文 ⑧ややくすんだ青色		肥前系 18c後
9519 322 117	磁器・染付 皿 片完形	Hc05g77	①128 ② 30 ③ 60	②高台畳付無釉 ③見込蛇ノ目釉ハギ ④精 選(灰白色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦体部内 面つる草文 ⑧やや淡い青色		肥前系 18c後
9520 322 121	磁器・青磁 皿 口～底	Gv07g・Hb05g	①142 ② 32 ③ 42	②高台無釉 ③見込蛇ノ目釉ハギ ④精選 (灰白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色		肥前系 18c
9521 322 117	磁器・染付 皿 口～底	Hc05g	①140 ② 35 ③ 90	②蛇ノ目凹形高台 ④精選(灰白色) ⑤良 好 ⑦体部内面唐草文 ⑧良好に発色		肥前系 18c末～ 19c前
9522 322 116	磁器・染付 皿 底部小片	Hf09g	①142 ② 32 ③ 42	②高台畳付無釉 ④精選(白色) ⑤良好 ⑦ 内面格子目文、見込五弁花コンニャク印判 ⑧鮮かな青色	「渦福」	肥前系 18c後
9523 323 118	磁器・染付 碗 口～底	Hj05g	①110 ② 57 ③ 48	②高台畳付無釉 ③薄手、精緻な作り ④精 緻(白色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦体部外面 柴垣文 ⑧発色は良好		肥前系 1690～18c 初
9524 323 118	磁器・染付 丸碗 口～底	Gm05g	① 96 ② 54 ③ 43	②高台畳付無釉 ④精緻(灰白色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦外面に扇面草花文 ⑧釉面に細 かな気泡が見られ、呉須は良好に発色	「渦福」	肥前系 1690～18c 前
9525 323 —	磁器・染付 丸碗 体～底	Gm05g	① ② ③ 42	②高台畳付無釉 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦八ツ橋草花文 ⑧器面がやや白 濁気味、呉須は良好に発色		肥前系 1690～18c 前
9526 323 —	磁器・染付 丸碗 体～底	Gm08g	③ 42	②高台畳付無釉 ④精選(白色) ⑤良好 ⑦ 外面綱干葺文 ⑧淡い青色に発色		肥前系 1690～18c 前
9527 324 —	磁器・染付 小型・丸碗 口～体	Gm05g	① 76	②欠損 ③体部下半に稜線 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑥透明な白色(内面やや劣化) ⑦ 流水文 ⑧明るい青色に発色		肥前系 18c前
9528 323 118	磁器・染付 端反碗体 ～底	Gu05g	②(50) ③ 36	②高台畳付無釉 ④精選(白色) ⑤良好 ⑥ やや明緑灰色 ⑦体部外面に草花文 ⑧やや くすんだ青色		肥前系 1690～18c 前
9529 323 119	磁器・染付 碗 体～底	Hj05g	③ 44	②高台畳付無釉 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥白色 ⑦体部外面に海波風景文(帆掛舟) ⑧呉須は明るい青色		肥前系 1690～18c 前
9530 323 118	磁器・染付 碗・ソバ猪 口体部	Hj05g		②欠損 ④精選(白色) ⑤良好 ⑥やや青 味があった白色 ⑧やや濃い青色		肥前系 17c末～ 18c前

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部 ③器形 ④胎土 ⑤焼成 ⑥色調 ⑦染付文様 ⑧呉須の色	特 徴	備 考
9531 323 118	磁器・染付 碗・端反碗 口～底	Hi06g06	① 68 ② 52 ③ 30	②高台畳付無釉 ④精緻(灰白色) ⑤良好 ⑦草花文コンニャク印判併用 ⑧ややくすんだ青色		肥前系 1690～18c 前
9532 323 —	磁器・染付 丸碗 口縁部	Gm05g	①100	②欠損 ④精緻(灰白色) ⑤良好 ⑦草花 文 ⑧明るい青色		肥前系 18c前
9533 324 118	磁器・染付 碗 口～底	Hf00g	① 97 ② 52 ③ 40	②高台畳付無釉(鉄錆) ③やや厚手 ④精 選(灰白色) ⑤良好 ⑥明オリブ灰色 ⑦ 手描きつる草文コンニャク印判併用	「大明年製」 くずれ	18c前
9534 323 —	磁器・染付 碗 底部	Hf05g	③ 40	②高台畳付無釉 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥白色 ⑦体部外面コンニャク印判菊花文 ⑧明るい青色に発色		肥前系 18c前
9535 324 118	磁器・染付 碗 口～底	Hj06g07・Hj05 g	① 86 ② 48 ③ 34	②高台畳付無釉 ③やや薄手 ④精選(灰白 色) ⑤良好 ⑥明緑灰色 ⑦雪符笹文 ⑧ ややくすんだ青色に発色		肥前系 18c前
9536 323 118	磁器・染付 丸碗 口～底	Gm05g	①100 ② 52 ③ 38	②高台畳付無釉 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑥ 明緑灰色 ⑦体部外面二重網文、内面一重網 文、見込菊花文 ⑧良好な発色	「渦福」	肥前系 18c前
9537 323 —	磁器・染付 丸碗 底部	Hf08g	③ 40	②高台畳付無釉 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑥ 白色 ⑦外面二重網文、内面一重網文、見込 菊花文 ⑧淡い青色に発色、良好		肥前系 18c前
9538 323 —	磁器・染付 丸碗 口縁部	Hi05g3	① 90	②欠損 ③厚手 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色 ⑦外面に梅樹文 ⑧淡い青色に 発色		肥前系 18c前～中
9539 324 118	磁器・染付 碗 口～底	Hc06g18・19・25	① 90 ② 65 ③ 40	②高台畳付無釉 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑦ 若松文 ⑧明るい青色に発色		肥前系 18c前～中
9540 323 —	磁器・染付 碗 口縁部	Hd07g	①106	②欠損 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥明緑 灰色、器面やや劣化 ⑦雪輪梅樹文 ⑧くす んだ青色		肥前系 18c前～中
9541 324 118	磁器・染付 碗 底部	Hc06g58		②高台畳付無釉 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥明オリブ灰色 ⑦体部外面草花文 ⑧や やくすんだ青色に発色		肥前系 18c前～中
9542 323 118	磁器・染付 碗 底部	Hc06g17	③ 50	②高台畳付無釉 ③ソバ猪口型 ④精選、密 (灰白色) ⑤良好 ⑦海浜風景文か ⑧明 るい青色に発色		肥前系 18c前～中
9543 — 117	磁器・青染 筒形碗 底部	Hf05g	③ 37	②高台畳付無釉 ③体部内面白磁染付、外面 青磁釉 ④精緻(灰白色) ⑤良好、見込み 五弁花 ⑧淡い青色		肥前系
9544 323 —	磁器・青染 丸碗 口～底部	Gs06g	① 87 ② 51 ③ 43	②高台畳付無釉(鉄錆) ③体部内面白磁染 付、外面青磁釉 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑥ 明緑灰色 ⑦見込み五弁花か		肥前系 18c中
9545 323 118	磁器・染付 碗 口～底	Hf05g05	①100 ② 55 ③(36)	②高台畳付無釉 ③厚手 ④精選、密(灰白 色) ⑤良好 ⑥明緑灰色 ⑦体部外面二重 網文 ⑧発色は良好		肥前系 18c中
9546 323 118	磁器・染付 丸碗 口～底	Hf05g	① 96 ② 54 ③ 44	②高台畳付無釉 ③厚手 ④精選、密(灰白 色) ⑤良好 ⑦雪輪梅文		肥前系 18c中～後
9547 323 —	磁器・染付 丸碗 口縁部	Gm05g	① 78	②欠損 ④精選(白色) ⑤良好 ⑥透明な 白色 ⑦体部外面草花文 ⑧鮮かな青色		肥前系 18c中～後
9548 323 118	磁器・白磁 小坏 口～底	Hj05g	① 72 ② 44 ③ 28	②高台施釉 ③端反り小坏 ④精選、密(灰 白色) ⑤良好 ⑥オリブ灰色		肥前系 17c末～18c 前
9550 323 119	磁器・染付 碗 底部	Hc05g	③ 38	②高台畳付無釉 ④精選(白色) ⑤良好 ⑦ 雪輪梅樹文 ⑧淡い青色に発色、良好	「大明年製」 くずれ	肥前系 18c中～後

第3節 中・近世の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部 ③器形 ④胎土 ⑤焼成 ⑥色調 ⑦染付文様 ⑧呉須の色	特 徴	備 考
9551 323 118	磁器・染付 碗 底部	Hb05g	③ 40	②高台畳付無釉 ③厚手丸碗 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色 ⑦雪輪梅樹文 ⑧呉須 は淡い青色に発色		肥前系 18c中～後
9552 323 118	磁器・染付 丸碗 口～底	Gs06g01	①100 ② 53 ③ 36	②高台畳付無釉 ③厚手丸碗 ④精選(灰白 色) ⑤良好 ⑥表面が劣化、白濁 ⑦雪輪 梅樹文 ⑧呉須は白濁のため明青灰色		肥前系 18c後
9553 323 119	磁器・染付 碗 底部	Hk05g	③ 40	②高台畳付無釉 ③やや厚手 ④精緻(灰白 色) ⑤良好 ⑥明緑灰色器表面白濁 ⑦雪 輪文か		肥前系 18c後
9554 — 118	磁器・染付 碗 底部	Hj05g		②高台畳付無釉 ③やや厚手 ④精選(灰白 色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦高台際圏線、見 込五弁花コンニャク印判 ⑧淡い青色に発色		肥前系 18c後半
9555 323 118	磁器・染付 丸碗 口～底	Hc06g02	① 84 ② 48 ③ 30	②高台畳付無釉 ③やや厚手の丸碗 ④精選 (灰色) ⑤良好 ⑥明緑灰色 ⑦雪輪梅樹 文 ⑧呉須の発色はやや不良(暗緑灰色)		肥前系 18c後
9556 323 —	磁器・白磁 仏飯器 坏部	Gm05g	① 62 ② (36)	②脚部欠損 ③仏飯器の坏部 ④精選(灰白 色) ⑤良好 ⑥明緑灰色やや白濁 ⑦体部 外面雪輪文か ⑧発色はやや不良(暗緑灰色)		肥前系 18c後
9557 323 118	磁器・染付 碗 口～底部	Gm05g	①102 ② 71 ③ 46	②高台畳付無釉(鈍い赤褐色) ③厚手 ④ 精選(灰色) ⑤良好 ⑥緑灰色 ⑦山水文 ⑧呉須は暗オリブと淡い青色に発色		肥前系 18c
9558 323 119	磁器・染付 丸碗 口～底部	Hc06g22	① 82 ② 52 ③ 38	②高台畳付無釉 ④精選(白色) ⑤良好 ⑦ 体部外面丸文ちらし、見込み五弁花 ⑧呉須 は濃い青色に発色		肥前系
9559 324 119	磁器・染付 碗 体部片	Hh07g08		②欠損 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥器表 面はやや白濁 ⑦矢羽根文 ⑧発色はやや良		肥前系
9560 323 119	磁器・染付 丸碗 口～底部	Hc06g65		②高台畳付無釉(鉄錆) ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦縞文 ⑧一部暗オリ ブで全体的には良好な発色		肥前系
9561 323 119	磁器・染付 小坏・猪口 口～底	Hb05・He05g	② 26	④精緻(白色) ⑤良好 ⑦菊花文(内外面) ⑧鮮かな青色に発色	焼き継ぎ	肥前系 18c末～ 19c前
9562 323 118	磁器・染付 碗 底部	Hb05g02	② 2 ③ 34	②高台畳付無釉、高台径小 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑦体部外面本葉文、見込み染付あり ⑧濃い青色		肥前系 18c末～ 19c初
9563 323 118	磁器・染付 碗 口～底	Ha06g01	② 55 ③ 36	②高台畳付無釉 ③やや筒形の丸碗 ④精選 (白色) ⑤良好 ⑥体外面、内面口縁部に 幾可文、高台際圏線、見込五弁花 ⑧良好		肥前系 18c末～ 19c初
9564 323 119	磁器・染付 筒型碗 口～体部	Hc05g34	① 68	②欠損 ③筒形 ④精選(白色) ⑤良好 ⑦ 体部外面紅葉ちらし文 ⑧やや黒ずんで発色		肥前系 18c末～ 1810
9565 323 —	磁器・染付 筒型碗 口～体部	Hc06g07	① 74	②欠損 ③体部直立やや外傾 ④精選(灰白 色) ⑤良好 ⑦体部外面横矢羽根文、内面 口縁部圏線 ⑥釉調はやや白濁 ⑧鈍い青色		肥前系 18c末～ 1810
9566 324 119	磁器・染付 碗・広東型 口～底部	Hb05g10他	①(118) ② 64 ③(48)	②高台畳付無釉 ④精選(白色) ⑤良好 ⑦ 体部外面宝文、内面に圏線、見込み不明		肥前系 18c後半
9567 324 118	磁器・染付 碗・広東型 底部	Hd05g05	③ 54	②高台畳付無釉 ④精選(白色) ⑤良好 ⑦ 雪輪文か、高台際圏線 ⑧呉須は濃淡描き分 け、良好な発色		肥前系 19c前
9568 — 119	磁器・染付 広東型 底部片	Hi09g01		④精選(白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色 ⑦不 明 ⑧暗青灰色に発色		肥前系 19c前
9569 323 127	磁器・染付 広東型碗 口縁部	Hc05g		④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥透明な白色 ⑦ 山水文 ⑧やや濃い青色		肥前系 19c前

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部 ③器形 ④胎土 ⑤焼成 ⑥色調 ⑦染付文様 ⑧呉須の色	特 徴	備 考
9570 323 —	磁器・染付 広東型碗 口縁部	Hc06g26	①126	③体部はやや内湾気味 ④精緻(灰白色) ⑤良好 ⑥透明な白色 ⑦輪花文 ⑧暗青灰色に発色		肥前系 19c前
9571 324 119	磁器・染付 広東型碗 蓋	Hc06g06	①(52) ② 29 ③ 59	③広東型碗の蓋部 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑥透明な白色 ⑦海浜風景文 ⑧濃淡描き分け、良好な発色		肥前系 1780～19c 前
9572 324 127	磁器・染付 広東型碗 蓋	Hc06g43		③広東型碗の蓋部 ④精緻(灰白色) ⑤良好 ⑦外面ナス文、内面圏線 ⑧濃い青色に発色		肥前系 1780～19c 前
9573 323 127	磁器・染付 碗・蓋物 口縁部	Hd07g05		③広東型碗、口唇部軸ハギ、薄手 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑦唐草文(絵付部分の面積が大) ⑧やや濃い青色に発色		肥前系 19c初～幕 末
9574 324 119	磁器・染付 小碗 口～底部	Hb05g	② 41	②高台畳付無軸 ③薄手の小坏 ④精選(白色) ⑤良好 ⑥透明な白色 ⑦笹文か ⑧明るい青色に発色		肥前系 19c初～末
9575 324 119	磁器・染付 小碗 口～底部	Hc06g	①(65) ② 35 ③ 26	③やや端反り気味の小平 ④精選(白色) ⑤良好 ⑥白色 ⑧淡い青色に発色		肥前系有田 19c初～末
9576 324 117	磁器・青磁 香炉 口縁部	Hf05g		②欠損 ③口唇部は平坦、体部は内湾気味に直立 ④精選(白色) ⑤良好 ⑥青緑色で良好な発色(細かい気泡が見られる)	上手	肥前系有田 17c後半
9577 324 —	磁器・青磁 火入れ 底部	Gu05g	③ 82	②蛇ノ目凹形高台、鉄泥 ③筒形 ④精選(白色) ⑤良好 ⑥釉調は比較的良好な淡い緑色		肥前系 18c
9578 324 117	磁器・青磁 火入れ 口～底部	Hc06g55	①104 ② 80 ③ 70	②蛇ノ目凹形高台、鉄泥 筒形 ④精選(白色) ⑤良好 ⑥釉調は比較的良好な淡い緑色、体下半に貫入		肥前系 18c
9579 324 117	磁器・染付 火入れ 口～底部	Hc06g08	① 95 ② 70 ③ 85	②蛇ノ目凹形高台 ③筒形 ④精選(灰色) ⑤良好 ⑥明緑灰色、体部内面下半は無軸 ⑦流水笹文 ⑧発色は良好		肥前系 18c末～ 19c初
9580 324 117	磁器・染付 仏飯器 ほぼ完形	Hk06g02	① 74 ② 56 ③ 40	②脚下半～裏面無軸 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦口縁部雨降文、坏下半に圏線 ⑧淡い青色、一部オリブ褐色		肥前系 18c前半
9581 324 117	磁器・染付 仏飯器 体～底	Ha05g03	③ 40	②脚裏面無軸 ④精選(白色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦体部外面に圏線		肥前系 18c中～後
9582 325 117	磁器・染付 袋物 頸～底部	Hf00g	③ 54	②高台畳付無軸 ③花瓶の器形か ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色 ⑦雪輪竹文 ⑧暗緑灰色に発色、一部に釉切れ		肥前系 18c
9583 325 117	磁器・染付 袋物 頸～体部	Hc06g72・66		②欠損 ④精緻(灰白色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦肩部に「酢」 ⑧発色は良好		肥前系
9584 324 127	磁器・染付 袋物 体部片	Hb05g		④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦幾可文 ⑧発色は良好		肥前系
9585 325 117	磁器・白磁 袋物 口～頸	Hh06g	① 58	②欠損 ③口唇部は外反 ④精緻(灰白色) ⑤良好 ⑥明オリブ灰色		肥前系
9586 324 121	磁器・赤絵 袋物 底部	Hc06g	③ 48	②高台畳付無軸(鉄錆) ③袋物底部 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色 ⑦高台際に赤絵の圏線		肥前系
9587 324 119	磁器・染付 袋物 底部	Hf05g	③ 38	②高台畳付無軸 ③袋物底部 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑦高台際に圏線 ⑧発色は良好		肥前系
9588 324 119	磁器・染付 碗 口～底	Hc06g25	① 72 ② 58 ③ 35	②高台畳付無軸 ③筒形の丸碗 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑦口唇内面・高台際圏線、体部外面海浜文 ⑧発色は良好(水色)		瀬戸系

第3節 中・近世の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部 ③器形 ④胎土 ⑤焼成 ⑥色調 ⑦染付文様 ⑧呉須の色	特 徴	備 考
9589 324 119	磁器・染付 碗 口～底	Hc06g41	① 73 ② 53 ③ 40	②高台壘付無軸 ③筒形の丸碗 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑦口唇内外面高台際圏線、体部外面海浜文 ⑧濃い青色		瀬戸系
9590 324 119	磁器・染付 碗 口縁	Ha06g14		③端反り碗 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑥白色 ⑦体部外面に梅花、雁文、口縁部下墨弾き ⑧発色良好		瀬戸系
9591 324 119	磁器・染付 碗 体～底	Hc06g03	③ 34	②高台壘付無軸 ③丸碗(高台径やや小) ④精選やや密(灰白色) ⑤良好 ⑥明オリープ灰色 ⑦人物文(竹の子掘り) ⑧青色	見込み五弁花	瀬戸系
9592 324 119	磁器・染付 碗 口～体	Hc06g03		②欠損 ③丸碗 ④精選(灰色) ⑤良好 ⑥灰白色 ⑦人物文(竹の子掘り) ⑧明るい青色		瀬戸系
9593 324 118	磁器・染付 碗 体～底	Hc05g28	③ 20	②高台壘付無軸 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥明オリープ灰色 ⑦竹文(竹の子掘りか) ⑧暗青色に近い発色		瀬戸系
9594 324 119	磁器・染付 碗 体～底	Hc05g29	③ 40	②高台壘付無軸 ④精選(白色) ⑤良好 ⑥透明な白色 ⑦紅葉ちらし文 ⑧呉須は濃い青色		瀬戸系
9595 324 —	磁器・染付 碗 底部	Hd05g	③ 46	②高台壘付無軸 ④精選(白色) ⑤良好 ⑧コバルトブルー		瀬戸系
9596 324 118	磁器・染付 碗 口～底	Hf09g	① 90 ② 50 ③ 42	②高台壘付無軸 ④精緻(白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色 ⑦雪輪梅樹文 ⑧暗青灰色		肥前系
9597 324 119	磁器・染付 碗 口～底	Hc06g21	① 92 ② 52 ③ 35	②高台壘付無軸 ③端反り ④精緻(白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色 ⑦鳳凰文 ⑧暗青灰色、内面墨弾き、見込「米」		瀬戸系

第35表 上谷戸調査区出土遺物観察表—陶器・グリッド—

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部 ③器形 ④胎土 ⑤焼成 ⑥色調 ⑦染付(文様・呉須) ⑧他	特 徴	備 考
9601 325 120	陶器・施釉 灯明皿 口～底	Hc06g42	① 85 ② 18 ③ 36	①ロクロ成形 ②平底 ③内面に劃花、施釉 ④精選、密(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(灰白色)、外面に鉄錆		信楽系 18c～19c
9602 325 120	陶器・施釉 灯明皿 口～底	Hc05g	① 92 ② 18 ③ 46	①ロクロ成形 ②平底 ③内面施釉 ④精選緻密(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(灰白～浅黄色)	外面煤付着	信楽系 18c～19c
9603 325 120	陶器 灯明皿 口～底	Hj05g	① 98 ② 20 ③ 46	①ロクロ成形 ②平底 ③油受皿 ④精選やや密(浅黄～灰色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(灰白色)		瀬戸美濃系
9604 325 120	陶器 灯明皿 ほぼ完形	Hb05g	①100 ② 22 ③ 44	①ロクロ成形 ②平底 ③油受皿 ④精選(灰色) ⑤酸化焰、良好 ⑥鉄錆釉(にぶい赤褐色)		
9605 325 120	陶器 灯明皿 口～底	Hc06g53	①106 ② 23 ③ 42	①ロクロ成形 ②平底 ③油受皿 ④精選(灰色) ⑤酸化焰、良好 ⑥鉄錆釉(にぶい赤褐色)		瀬戸美濃系
9606 325 120	陶器 灯明皿 口～底	Hf09g	①106 ② 19 ③ 42	①ロクロ成形 ②平底 ③油受皿 ④精選(灰色) ⑤酸化焰、良好 ⑥鉄錆釉(にぶい赤褐色)		瀬戸美濃系
9607 325 120	陶器 灯明皿 口～底	Hc06g53	①106 ② 19 ③ 50	①ロクロ成形 ②平底 ③油受皿 ④精選(灰色) ⑤酸化焰、良好 ⑥鉄錆釉(にぶい赤褐色)		瀬戸美濃系
9608 325 120	陶器 灯明皿 口～底	He06g01	① 94 ②(20)	①ロクロ成形 ②平底 ③油受皿 ④精選(灰色) ⑤酸化焰、良好 ⑥鉄錆釉(にぶい赤褐色)		瀬戸美濃系
9609 325 120	陶器 灯明皿 口～底	Hj06g	① 80 ② 18 ③ 30	①ロクロ成形 ②平底 ③油皿 ④精選(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥鉄錆釉(褐色)		瀬戸美濃系

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部 ③器形 ④胎土 ⑤焼成 ⑥色調 ⑦染付文様 ⑧具須の色	特徴	備考
9610 325 120	陶器 灯明皿 口～底	He08g02	①106 ② 23 ③ 40	①ロクロ成形 ②平底 ③油皿 ④精選、密(明褐色) ⑤酸化焰、良好 ⑥鉄錆釉(暗褐色)		瀬戸美濃系
9611 325 120	陶器 灯明皿 口～底	Hc05g	① 78 ② 16 ③ 38	①ロクロ成形 ②平底 ③油皿 ④精選、やや密(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥鉄錆釉(褐色)	煤付着	
9612 325 120	陶器 灯明皿 口～底	Hb05g	① 98 ②(18)	①ロクロ成形 ②平底か ③油底 ④精選、やや密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥鉄錆釉(褐色)		
9613 325 120	陶器・施釉 ひょうそく 完形	Hk07g01	① 52 ② 49 ③ 38	①ロクロ成形 ②平底、回転糸切り高台裏無釉、回転糸切り ④精選(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥黒褐釉		
9614 325 121	陶器・施釉 碗 口～底	He05g01	① 98 ② 65 ③ 40	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選、密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥黒褐釉、長石釉 いっちゃんかけ		瀬戸美濃系
9615 325 121	陶器・施釉 碗 口～体部	Hc06g76	①110	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選、密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥黒褐釉、長石釉 いっちゃん掛け		瀬戸美濃系
9616 325 123	陶器・施釉 碗 底部片	Hc05g	③ 32	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選やや密(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥黒褐釉		瀬戸美濃系
9617 326 122	陶器・施釉 碗 口縁片	Hd05g	①140	①ロクロ成形 ②欠損 ③やや深い碗型 ④精選(灰白色) ⑤やや還元焰 ⑥灰釉(オリープ灰色)		18c～19c
9618 325 121	陶器・施釉 皿 口～底	Gm08g	①134 ② 27 ③(72)	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ③重ね焼き痕 ④精選(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥うすく灰釉がかかる(灰オリープ色)		瀬戸系 18c
9619 325 119	陶器・施釉 碗 口～底	Gm05g	① 94 ②53.5 ③ 26	①ロクロ成形 ②高台無釉 ③見込赤絵、体部に稜 ④精選、密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥黄瀬戸釉	京焼風	肥前系 18c前
9620 325 119	陶器・施釉 丸碗 口～底	Gm05g01	① 90 ② 68 ③ 44	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ④精選、密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥黄瀬戸釉(浅黄色)		肥前系 18c前
9621 325 —	陶器・施釉 丸碗 口～体	Gv15g	① 90	①ロクロ成形 ②欠損 ④精選、密(灰褐色～にぶい赤褐色) ⑤酸化焰、堅緻 ⑥灰釉刷毛塗(内タテ、外ヨコ、暗赤褐色に白色)		肥前系唐津 1690～18c
9622 325 —	陶器施釉 丸碗 口～体	Gm05g	① 90 ② 68 ③ 44	①ロクロ成形 ②欠損 ④精選、密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(にぶい黄橙色)	京焼風	肥前系 17c末～ 18c前
9623 325 119	陶器施釉 丸碗 口～高台	Hf05g	① 90 ② 60 ③ 42	①ロクロ成形 ②高台裏無釉 ③高台の削りは精緻 ④精選、密(浅黄橙色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(浅黄橙色)	京焼風	肥前系
9624 326 122	陶器施釉 碗 高台片	Hg05g04	③ 60	①ロクロ成形 ②高台無釉 ③高台は精緻な削り出し ④精選、密(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(浅黄橙色)	高台裏「柴」	肥前系 17c～18c初
9625 — 123	陶器施釉 皿 体下半部片	H区表採		①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ④精選、密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(浅黄色)		肥前系
9626 — 121	陶器施釉 皿 体部片	Hc05g33		①ロクロ成形 ②欠損 ③縁折れ ④精選、密(灰白色) ⑤やや還元焰、堅緻 ⑥灰釉(暗オリープ色)		肥前系唐津 17c末～ 18c前
9627 325 121	陶器施釉 皿 底部片	Hc06g	③ 62	①ロクロ成形 ②高台裏無釉 ③やや高高台 ④精選、密(灰白色) ⑤やや還元焰、堅緻 ⑥灰釉(灰白色)	見込蛇ノ目釉 ハギ	肥前系唐津 内野山 17c末～ 18c前
9628 325 121	陶器施釉 皿 底部片	H区表採		①ロクロ成形 ②高台裏無釉 ③低平な皿、見込に菊花印刻 ④精選やや密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥黄瀬戸釉(灰白色)		瀬戸美濃系

第3節 中・近世の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部 ③器形 ④胎土 ⑤焼成 ⑥色調 ⑦染付文様 ⑧呉須の色	特 徴	備 考
9629 325 121	陶器施釉 皿 底部小片	He07g01		①ロクロ成形 ②高台壘付無釉 ③見込みに呉須絵 ④精選やや密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥黄瀬戸釉(浅黄橙色)		瀬戸美濃系
9630 326 119	陶器施釉 碗 底部片	Hk07g07	③ 42	①ロクロ成形 ②高台壘付無釉 ④精選、密(にぶい橙色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉刷毛塗		肥前系唐津
9631 325 119	陶器施釉 碗 底部片	Gu05g	③ 62	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥内面に褐釉		瀬戸系
9632 325 —	陶器施釉 碗 底部片	Gs04g	③ 40	①ロクロ成形 ②高台無釉 ③白化粧土 ④精緻(灰色) ⑤やや還元焰、良好 ⑥灰釉(やや緑がかった灰白色)		瀬戸系 18c
9633 326 —	陶器施釉 碗 底部片	Gu06g02	③ 56	①ロクロ成形 ②高台壘付無釉 ④精選(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(オリーブ褐色)		瀬戸系
9634 325 —	陶器施釉 碗 底部片	Gm05g	①100 ② 60 ③ 44	①ロクロ成形 ②高台壘付無釉 ③釉かけ分け ④精選やや密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥口縁外～内面灰釉、外体下半褐釉		瀬戸系
9635 325 121	陶器施釉 碗 底部片	Gm05g	①100 ② 60 ③ 50	①ロクロ成形 ②高台壘付無釉 ③釉かけわけ ④精選密(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥口縁外～内面灰釉、外体下半褐釉		瀬戸系
9636 326 —	陶器施釉 碗 底部片	Gm05g	①102	①ロクロ成形 ②欠損 ④精選(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(黄褐色)、高台無釉か	※9642と類似	瀬戸系
9637 325 121	陶器・施釉 碗 底部片	Gm05g	③ 44	①ロクロ成形 ②高台壘付無釉 ④精選やや密(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥内面灰釉外面褐釉		瀬戸系
9638 325 —	陶器施釉 碗 底部片	Gm05g	③ 48	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(赤褐色)		瀬戸系
9639 326 121	陶器施釉 碗 口～高台	Hb05g	①(100) ②(60) ③(44)	①ロクロ成形 ②高台壘付無釉 ③釉かけわけ ④精選、密(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥内面灰釉、外面褐釉		瀬戸系
9640 325 122	陶器施釉 碗 口～体	Ha14g04	①136 ②(59)	①ロクロ成形 ②欠損 ④精選(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(オリーブ褐色)		瀬戸美濃系
9641 326 123	陶器・施釉 碗 体～底	Hn03g	③ 36	①ロクロ成形 ②高台壘付無釉 ④精選(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥赤絵上絵付		瀬戸美濃系
9642 326 125	陶器施釉 碗 口縁部	Ha14g04	① 98	①ロクロ成形 ②欠損 ④精選(黄灰色) ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(黄褐色)	※9636と類似	瀬戸美濃系
9643 326 122	陶器施釉 碗 底部片	H区表採	③ 46	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥黄瀬戸釉		瀬戸美濃系
9644 325 123	陶器施釉 碗 口～底	Hc06g	① 90 ② 45 ③ 38	①ロクロ成形 ②高台壘付無釉 ③口縁部端反り ④精選(浅黄色～灰色) ⑤酸化焰一部還元焰 ⑥黄瀬戸釉	京焼風 口縁外面に梅花文	瀬戸美濃系 18c
9645 325 —	陶器施釉 碗 口～底	Hb05g	① 90 ② 50 ③ 32	①ロクロ成形 ②高台壘付無釉 ③口縁部端反り ④精選(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥黄瀬戸釉	京焼風 口縁外面に梅花文	瀬戸美濃系 18c
9646 326 121	陶器施釉 碗 底部片	Hi05g12	③ 48	①ロクロ成形 ②高台壘付無釉 ③鎚茶碗 ④精選、密(灰黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥内面黒色釉、外面灰釉		瀬戸美濃系
9647 326 123	陶器施釉 碗 底部片	Hc05g08	③ 32	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選、密(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(灰白色)		瀬戸美濃系

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種 別 器 種 残 存 状 況	出 土 位 置 出土グリッド 出 土 遺 構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部 ③器形 ④胎土 ⑤焼成 ⑥色調 ⑦染付文様 ⑧呉須の色	特 徴	備 考
9648 326 122	陶器施釉 碗 底部	Hc05g25	③ 82	①ロクロ成形 ②高台無釉 ③大型の碗 ④精選、密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(オリーブ褐色)		瀬戸美濃系
9649 326 122	陶器施釉 鉢 底部	Hg05g10	③112	①ロクロ成形 ②高台無釉 ③袋物の底部か ④精選、密(灰色) ⑤酸化焰、良好 ⑥体部外面褐釉(黒褐色)		瀬戸美濃系
9650 326 123	陶器施釉 碗 底部	Hf05g	③ 22			瀬戸美濃系
9651 325 121	陶器施釉 碗 口縁部	Hb05g	① 85	①ロクロ成形 ②欠損 ③口縁端反り ④精選、密(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(灰白色)、貫入多し		関西系
9652 326 123	陶器施釉 碗 口～底部	Hb05g	① 96 ② 47 ③ 32	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精緻(灰白色) ⑤還元焰・良好 ⑥灰釉(灰白色)		関西系
9653 326 123	陶器施釉 碗 底部	Hb05g14	③ 28	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選、密(灰白色) ⑤還元焰、良好 ⑥灰釉(灰白色) 貫入		関西系
9654 326 121	陶器施釉 碗 体部下半	不明		①ロクロ成形 ②高台欠損 ③丸碗 ④精選密(灰色) ⑤酸化焰、良好 ⑥外面褐釉(暗褐色)、内面灰釉(灰白色)		相馬
9655 326 122	陶器施釉香 炉 口～体	Hj06g	①112	①ロクロ成形 ②欠損 ③体部はほぼ直立、口端部は内傾 ④精選、密(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(オリーブ褐色)		瀬戸美濃系
9656 326 —	陶器施釉香 炉 体部小片	Hf06g03		①ロクロ成形 ②欠損 ④精選やや密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(暗オリーブ色)		
9657 326 122	陶器施釉 小型甕 完形	Hc05g03	①100 ② 88 ③ 60	①ロクロ成形 ②高台無釉 ③口縁は短く外反 ④精選やや密 ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(赤褐色)		瀬戸美濃系
9658 327 —	陶器施釉 鉢 口縁部	Gg03g03	①186	①ロクロ成形 ②欠損 ③外面に三条の凹線 ④精選密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(褐色)		瀬戸美濃系
9659 327 122	陶器・施釉 鉢 口縁部	Gu58g	①240	①ロクロ成形 ②欠損 ③口縁部は玉縁状に折り返し ④精選、密(赤褐色) ⑤酸化焰、堅緻 ⑥灰釉刷毛塗		肥前系唐津
9660 326 —	陶器施釉 盤 体部	Hf07g01		①ロクロ成形 ②欠損 ③体下半部にきれいな灰釉 ④精選、密(灰色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(オリーブ灰色)		瀬戸系
9661 327 —	陶器施釉 鉢 口縁部	Hc06g20	①166	①ロクロ成形 ②欠損 ③口縁部玉縁 ④精選やや密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(オリーブ)		瀬戸美濃系
9662 326 —	陶器施釉 鉢 口縁部	Hf05g		①ロクロ成形 ②欠損 ③口縁部外反、口端部やや肥厚 ④精選、やや粗い ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(オリーブ黒色)、一部白濁		
9663 326 —	陶器施釉 甕 口縁部	Hg05g		①ロクロ成形 ②欠損 ③口唇部T字形 ④精選、密(灰色) ⑤酸化焰、堅緻 ⑥外面は灰釉刷毛塗(オリーブ褐色)		肥前系唐津 18c～幕末
9664 326 —	陶器施釉 甕 口縁部	Hi05g		①ロクロ成形 ②欠損 ③口縁部外反、体部上半に陰刻施文 ④精選密(浅黄褐色) ⑤酸化焰、良好 ⑥銅緑釉(深緑色)		瀬戸美濃系 火鉢
9665 327 122	陶器施釉 鉢 底部	Hg06g22	③140	①ロクロ成形 ②高台豊付無釉 ③全面に褐釉 ④精選、やや密(黄褐色～褐灰色) ⑤酸化焰 ⑥褐釉(暗褐色)		瀬戸美濃系
9666 327 122	陶器施釉 鉢 口～底	Hj07g01	①206 ②160 ③132	①ロクロ成形 ②高台、ヘラケズリ ③内面に胎土目痕 ④精選やや密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥褐釉(暗褐色)		瀬戸美濃系

第3節 中・近世の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部 ③器形 ④胎土 ⑤焼成 ⑥色調 ⑦染付文様 ⑧呉須の色	特 徴	備 考
9667 326 122	陶器施釉 袋物か急須 胴部	Hc06g44他	胴径170	①ロクロ成形 ②欠損 ③耳付 ④精選、密(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(灰白色)、体下半部まで施釉		関西系
9668 327 122	陶器施釉 袋物 胴部	Hc05g	胴径160	①ロクロ成形 ②欠損 ③肩部がやや張る ④精選やや密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥外面に褐釉(暗オリーブ褐色)		瀬戸系
9669 326 —	陶器 鉢・こね鉢 口縁部	Hc06g54		①ロクロ成形 ②欠損 ③口縁部折り返し ④やや密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(浅黄色) 一部緑色		瀬戸美濃系 18c~19c中頃
9670 326 122	陶器施釉 袋物 底部	Hc06g51		①ロクロ成形 ②削り出し高台無釉 ③細い筒形 ④精選、やや密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(灰白~淡黄色)		
9671 326 122	陶器施釉 蓋 完形	Hg06g15	外径78 器高16 下径43	①ロクロ成形 ③下底面へラケズリ、裏面無釉 ④精選、密(灰白色) ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(淡黄色)	裏面に墨書あり	瀬戸美濃系
9672 326 122	陶器施釉 蓋 つまみ 部 体部	Hg06g01	外径98 下径72	①ロクロ成形 ③裏面無釉 ④精選、やや密(淡黄色) ⑤酸化焰、良好 ⑥青緑色釉		瀬戸美濃系
9673 326 —	陶器施釉 袋物 口~頸	Hc05g25	① 30	①ロクロ成形 ②欠損 ③短い鶴首 ④精選密(褐色) ⑤酸化焰 ⑥白色釉(浮白色)		瀬戸美濃系
9674 325 121	陶器施釉 皿 口~体	Hj06g02	①128	①ロクロ成形 ②欠損 ③縁折れ皿、輪花状に調整 ④精選、やや密 ⑤酸化焰、良好 ⑥灰釉(灰白~淡黄色)、見込呉須絵		瀬戸美濃系

第36表 上谷戸調査区出土遺物観察表—磁器・遺構—

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調) ⑦染付(文様・呉須) ⑧他	特 徴	備 考
9701 282 —	磁器・染付 碗 底部	上第12号溝	②(11) ③ 52	②高台疊付無釉 ④精緻(白色) ⑤還元焰、良好 ⑧見込みに草花文		肥前系 18c前半
9702 286 125	磁器・染付 仏飯器 口~底	上第1号石組	① 80 ② 62 ③ 46	②脚下端~底無釉 ④精選 ⑤良好、呉須は淡い青色に発色 ⑥明青灰色 ⑦口縁部雨降文、胴下・脚に圈線		肥前系 18c前半
9703 286 —	磁器・染付 小碗 口~底	上第1号石組	① 36 ② 40 ③ 30	②高台疊付無釉 ④精選(白色) ⑤良好、呉須は淡い青色 ⑥明緑灰色 ⑦口縁部に雨降文		肥前系 18c前
9704 286 —	磁器・染付 皿 体~底	上第1号石組	① ②(23) ③(88)	②高台疊付無釉(砂が付着) ④精選(白色) ⑤良好、呉須はやや青黒色 ⑥明緑灰色 ⑦体部外面唐草文か、内面梅文か		肥前系 1690~18c前
9705 286 —	磁器・染付 皿 口~底	上第1号石組	①(142) ② 27 ③(82)	②高台疊付無釉 ④精選(灰白色) ⑤良好、表面がやや劣化して白濁 ⑥白色 ⑦外面唐草文か、内面墨弾き		肥前系 18c前
9706 286 —	磁器・染付 皿 口~底	上第1号石組	①(102) ② 28 ③(56)	②高台疊付無釉 ④精選(白色) ⑤良好、呉須の発色良好 ⑥明緑灰色 ⑦外面唐草文、内面墨弾き		肥前系 18c前
9707 286 —	磁器・染付 碗 体~底	上第1号石組	②(40) ③(42)	②高台疊付無釉「太明手製」か ④精緻(白色) ⑤良好(釉に細かい気泡あり、呉須の発色やや良) ⑥体部外面		肥前系 18c前~中
9709 286 —	磁器・染付 碗 口~体	上第1号石組		②欠損 ③薄手の丸碗 ④精選(灰白色) ⑤良好(釉の表面やや劣化)、呉須はやや黒っぽく発色 ⑦松竹梅文か		肥前系 1690~18c前
9710 286 —	磁器・染付 火入れ	上第1号石組	②(48)	②欠損 ③胴下半に稜、内面無釉 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥明緑灰色(内面はやや赤味)		肥前系 17c末~18c中

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種 別 器 種 残 存 状 況	出 土 位 置 出土グリッド 出 土 遺 構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調) ⑦染付(文様・呉須) ⑧他	特 徴	備 考
9711 286 125	磁器・染付 丸碗 口～底	上第1号石組	① 94 ② 54 ③ 40	②高台壘付無釉 ④精緻(灰白色) ⑤良好、呉須は暗青灰色 ⑥明緑灰色 ⑦体部外面コンニャク印判		肥前系 18c前～中
9713 286 —	磁器・染付 丸碗 口～体	上第1号石組	①(100) ②(45)	②欠損 ③薄手 ④精選(灰白色) ⑤良好、呉須はきれいに発色 ⑥灰白色 ⑦雪輪梅文		肥前系 18c中～後
9714 286 —	磁器・染付 丸碗 口～体	上第1号石組	①(96)	②欠損 ③丸碗 ④精緻(白色) ⑤良好(呉須は暗緑灰色に発色) ⑥明オリーブ灰色 ⑦雪輪梅樹文		肥前系 18c中～後
9715 286 —	磁器・染付 碗 口～体	上第1号石組	①(118) ②(43)	②欠損 ③広東型 ④精緻(灰白色) ⑤良好(呉須は青灰色) ⑥明オリーブ灰色		肥前系 18c後
9716 286 —	磁器・染付 碗 体～底	上第1号石組	②(52) ③(50)	②高台壘付無釉(にぶい赤褐色) ③厚手 ④精選(灰色) ⑤良好 ⑥釉調は青灰色、呉須はややくすんだ青色 ⑦草花文か		肥前系 18c後
9718 304 126	陶器・施釉 碗 体～底	上第27号土坑	②(24) ③(52)	②高台無釉 ④精選(灰白色) ⑤良好 ⑥黄瀬戸釉(淡黄色)	京焼風	肥前系 17c末～18c前
9719 304 126	磁器・染付 碗 口～底	上第27号土坑	① 94 ② 51 ③ 40	②高台壘付無釉 ④精緻(白色) ⑤良好(呉須は良好に発色) ⑦雪輪松竹梅文		肥前系・有田 18c前～中
9720 304 126	磁器・染付 碗 口～体	上第27号土坑	① 100 ②(37)	②欠損 ③丸碗 ④精緻(白色) ⑤良好(呉須の発色やや良) ⑥雪輪梅樹文		肥前系 18c中～後
9721 304 126	磁器・染付 碗 口～体	上第27号土坑	① 100 ②(43)	②欠損 ③丸碗 ④精緻(白色) ⑤良好(呉須の発色良) ⑦梅樹文か		肥前系
9722 309 128	磁器・染付 碗 完形	上第30号土坑	① 81 ② 53 ③ 44	②高台壘付無釉「大明年製」 ③ソバ猪口型 ④精緻 ⑤良好、呉須はブルーに発色 ⑥松・竹・雁・人物図		肥前系 18c
9723 312 —	磁器・染付 碗 口～体	上第34号土坑	①(92)	②欠損 ④精緻(灰白色) ⑤還元焰・良好 ⑦雪輪梅樹文、器表面は明緑灰色、呉須は青灰色に発色		
9724 312 128	磁器・染付 碗 口～底	上第34号土坑	①(109) ② 68 ③ 48	②高台壘付無釉(暗褐色) ④精選(灰色) ⑤還元焰・良好 ⑥緑灰色 ⑦海浜風景		肥前系 18c
9725 312 —	磁器・染付 碗 体～底	上第34号土坑	②(28) ③ 40	②高台端部が欠ける ④精緻(灰白色) ⑤還元焰・良好 ⑦外面の劣化が著しく染付文様は判然とせず		
9726 312 —	磁器・染付 碗 体～底	上第34号土坑	②(26) ③ 38	②高台壘付無釉(鉄錆が見られる) ④精緻(灰白色) ⑤還元焰・良好 ⑦高台際～体下半に圈線、呉須の発色はやや良		

第37表 上谷戸調査区出土遺物観察表 —陶器・遺構—

遺物番号 挿図番号 写真図版	種 別 器 種 残 存 状 況	出 土 位 置 出土グリッド 出 土 遺 構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調) ⑦染付(文様・呉須) ⑧他	特 徴	備 考
9803 286 125	陶器 摺鉢 底部	上第1号石組	摺目10条 ③(136) 摺幅36mm	①ロクロ成形 ②平・回転糸切り ③体部は直に外反 ④精選・やや密(淡黄色) ⑤酸化焰・堅緻 ⑥器表面に鉄釉(褐色)		瀬戸美濃系 18c
9804 285 —	陶器 摺鉢 底部	上第1号石組	摺目11条 ③(117) 摺幅27mm	①ロクロ成形 ②平・回転糸切り ③体部は直に外反 ④精選・密(淡黄色) ⑤酸化焰・堅緻 ⑥器表面に鉄釉(褐色)		瀬戸美濃系 18c
9805 285 —	陶器 摺鉢 口縁部小片	上第1号石組		①ロクロ成形 ②欠損 ③縁帯はやや肥厚 ④やや密(淡黄色)、砂粒まじり ⑤酸化焰・良好 ⑥鉄釉(褐色)		瀬戸美濃系
9806 286 —	陶器 摺鉢 口縁部小片	上第1号石組		①ロクロ成形 ②欠損 ③口唇部1条、縁帯外面2条の凹線 ④精選・密(赤褐色)、白色小粒子 ⑤酸化焰・焼締 ⑥表面暗赤褐色	縁帯下横ナデ	関西系 (堺か)

第3節 中・近世の遺構と遺物

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(㎜) ②器高(㎜) ③底径(㎜)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調) ⑦染付(文様・具須) ⑧他	特徴	備考
9807 286 —	陶器 摺鉢 口縁部	上第1号石組	①(340) 摺目8条 摺幅26mm	①ロクロ成形 ②欠損 ③体部は外反し口縁部は直立、口唇部外反 ④精選、やや密、砂粒 ⑤酸化焰・焼締 ⑥淡黄色	口縁部・体部外面横ナデ	関西系 信楽
9808 285 125	陶器・焼締 摺鉢 口縁部	上第1号石組	①(320) 摺目9条 摺幅25mm	①ロクロ成形 ②欠損 ③体部はやや内湾 ④精選・密(赤褐色)、白色砂粒 ⑤酸化焰・焼締	縁部下横ナデ 体部外面ヘラケズリ	関西系 堺か
9809 285 125	陶器 摺鉢 底部	上第1号石組	摺目9条 ③(150) 摺幅25mm	①ロクロ成形 ②平底 ③体部はやや内湾気味 ④精選・密(赤褐色)、白色砂粒 ⑤酸化焰・焼締	体部外面指ヘラケズリ	関西系 堺か
9810 285 —	陶器 摺鉢 口縁部	上第1号石組	摺目7条 摺幅26mm	①ロクロ成形 ②欠損 ③体部に紐状痕、口縁部に2条の凹線 ④精選・密(暗青灰色) ⑤酸化焰・焼締 ⑥器表面褐色	外面横ナデ	関西系
9811 286 125	陶器 丸底 体～底	上第1号石組	③ 46	①ロクロ成形 ②高台削り出し、畳付無釉 ④精選・密(にぶい橙色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉刷毛塗(内:タテ、外:横)		肥前系 唐津
9812 286 —	陶器 丸底 口～底	上第1号石組	①(110) ② 73 ③(44)	①ロクロ成形 ②高台削り出し、畳付無釉 ④精選・密(浅黄橙色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉		肥前系
9813 286 125	陶器・染付 丸碗 口～底	上第1号石組	① 100 ② 70 ③ 48	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ④精選・密(灰色) ⑤還元焰・堅緻 ⑦唐草文 ⑧全体に灰色がかった色調		肥前系 波佐見か
9814 286 —	陶器・施釉 摺絵皿 底部	上第1号石組	③(52)	①ロクロ成形 ②高台無釉 ④精選・やや密(灰白色) ⑤酸化焰・堅緻 ⑥灰釉 ⑦見込 摺絵		瀬戸美濃系
9815 287 —	陶器・施釉 鉢 口縁部	上第1号石組		①ロクロ成形 ②欠損 ③口縁部に玉線状の折り返し、体部内湾 ④精選・密(赤褐色) ⑤酸化焰 ⑥内:灰釉・鉄絵、外:灰釉刷毛	体部外面に いっちゃんかけ	肥前系 唐津
9816 287 —	陶器・施釉 鉢 口縁部	上第1号石組		①ロクロ成形 ②欠損 ③口縁部に玉線状の折り返し ④精選(赤褐色) ⑤酸化焰 ⑥内外面灰釉刷毛塗り(灰白色)		肥前系 唐津
9817 287 —	陶器・施釉 片口 口～体	上第1号石組		①ロクロ成形 ②欠損 ③注口付 ④精選・やや密(淡黄色) ⑤酸化焰 ⑥黄瀬戸釉(明黄褐色)		瀬戸美濃系
9818 286 —	陶器・施釉 碗 口～体	上第1号石組	①(114)	①ロクロ成形 ②欠損 ③やや腰折れ、体下半にロクロ痕 ④精選・密(灰色) ⑤酸化焰 ⑥鉄釉(褐色)、口唇部に灰釉二度掛け	抹茶碗	
9821 286 —	陶器・施釉 碗 口～体	上第1号石組	①(94)	①ロクロ成形 ②欠損 ③体部外面に2条の凹線 ④精選・やや密(淡黄色) ⑤酸化焰 ⑥口縁～内:白化粧土灰釉、外:褐釉		
9822 286 125	陶器・施釉 碗・腰折碗 口～底	上第1号石組	① 100 ② 50 ③ 40	①ロクロ成形 ②腰折れ碗 ④精選・密(灰色) ⑤酸化焰・良好 ⑥灰釉と錆釉の掛け分け		瀬戸系
9823 — 125	陶器・施釉 碗 体～底	上第1号石組	③ 46	①ロクロ成形 ②高台削り出し、無釉 ④精選・密(灰色) ⑤酸化焰・良好 ⑥暗オリープ色		瀬戸系
9824 291 125	陶器・施釉 皿 口～底	上第2号井戸跡	② 34	①ロクロ成形・型作り ②高台無釉 ③輪花皿 ④精選・密(灰色) ⑤酸化焰 ⑥灰釉		瀬戸系
9825 291 125	陶器・施釉 皿 口～底	上第2号井戸跡	① 12 ② 21 ③ 55	①ロクロ成形 ②高台裏無釉 ③浅い皿型 ④精選・やや密(淡黄色) ⑤酸化焰 ⑥口縁から内面に長石釉(劣化・ハク離が著しい)	口縁部に煤付着	瀬戸美濃系
9826 289 124	陶器・施釉 碗・天目 底部	上第1号井戸跡	③(40)	①ロクロ成形 ②天目碗か ③精選・密(灰白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥鉄釉(褐色) 外面下半無釉		
9827 296 —	陶器・焼締 甕 口縁部	上第22号土坑		①紐作り ②欠損 ③甕の頸部から肩部 ④細粒砂、白色微粒子、小砂粒 ⑤酸化焰・焼締(黄色) ⑥表面暗赤褐色		常滑系

第V章 上谷戸調査区の遺構と遺物

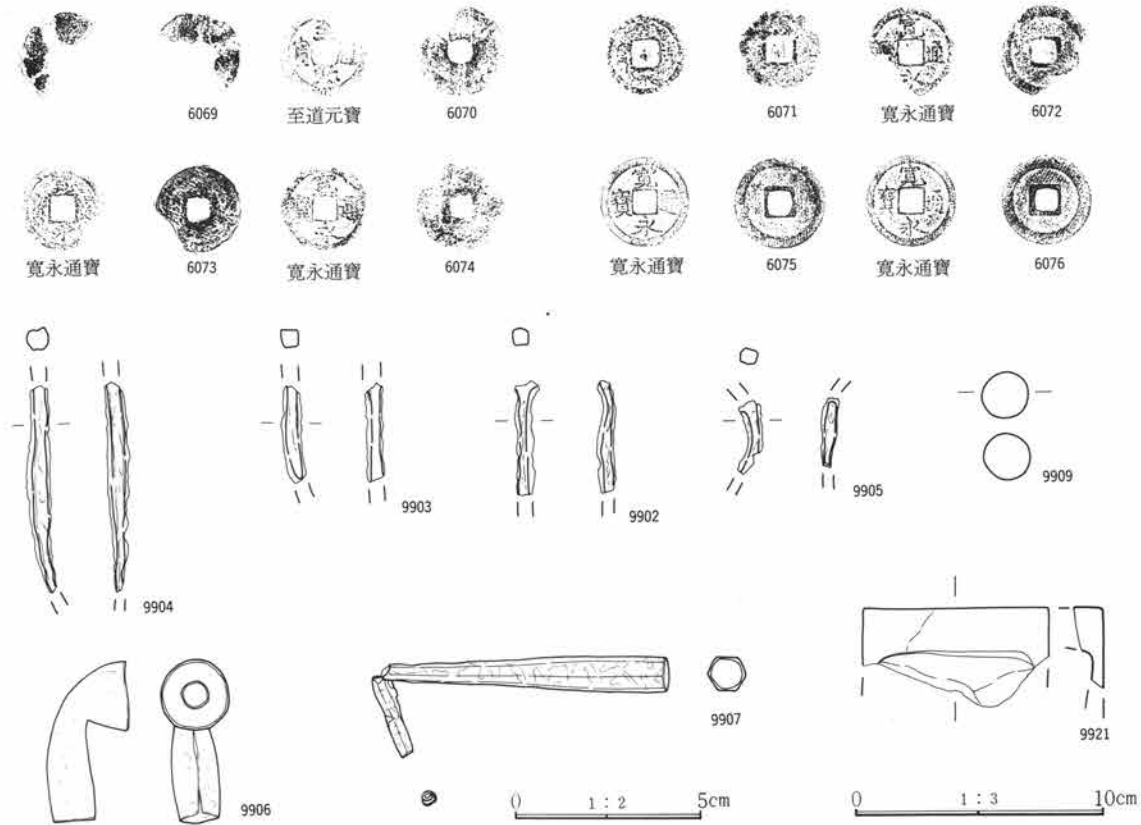
遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種 残存状況	出土位置 出土グリッド 出土遺構	①口径(mm) ②器高(mm) ③底径(mm)	①成形 ②底部・高台 ③器形の特徴 ④胎土(色調) ⑤焼成 ⑥釉調(色調) ⑦染付(文様・具須) ⑧他	特徴	備考
9828 304 126	陶器・施釉 碗・丸碗 口～底	上第27号土坑	①(100) ②(60) ③(48)	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ③体部外面に筋状沈線 ④精選・密(灰白色) ⑤酸化焰 ⑥口縁～内面灰釉(灰白色)、体下半褐釉		瀬戸美濃系 尾呂茶碗
9829 309 128	陶器・施釉 ひょうそく 完形	上第30号土坑	① 70 胴径113 ② 57 ③ 59	①ロクロ成形 ②平底 ③油差し状 ④精選・密(にぶい黄橙色) ⑤酸化焰 ⑥内面・外面灰釉(灰オリーブ)、口唇部・底面無釉		在地系 下仁田か 19c
9830 309 128	陶器・施釉 碗 口～体	上第30号土坑	①(110)	①ロクロ成形 ②欠損 ④精選・密(灰白色) ⑤酸化焰 ⑥内外面灰釉(オリーブ黄色)		瀬戸系
9831 314 —	陶器・施釉 鉢 口縁部	上第35号土坑		①ロクロ成形 ②欠損 ③口唇部平坦 ④精選・密(灰色) ⑤酸化焰 ⑥褐釉		
9832 312 128	陶器・施釉 小型双耳壺 完形	上第34号土坑	① 58 ② 104 ③ 70	①ロクロ成形 ②高台無釉 ③肩衝き茶入れ双耳壺 ④精選・やや密(淡黄色) ⑤酸化焰 ⑥褐釉、肩部に灰白釉、口唇部無釉		瀬戸美濃系 18c前半代
9833 312 128	陶器・施釉 碗 完形	上第24号土坑	① 116 ② 75 ③ 50	①ロクロ成形 ②高台畳付無釉 ③体下半にロクロ痕、上半に沈線波形 ④精選・密(灰) ⑤酸化焰 ⑥褐釉、灰釉を口縁部に二度掛け	抹茶碗	
9834 312 —	陶器・灰釉 燈明皿 口～底	上第34号土坑	① 106 ②(23)	①ロクロ成形 ②平底か ③油皿 ④精選・密(灰色) ⑤酸化焰・焼締 ⑥鉄錆釉(暗褐色)		
9835 312 128	陶器・施釉 香炉 体～底	上第34号土坑	②(52) ③ 100	①ロクロ成形 ②粘土紐脚付 ④精選・密(灰白色) ⑤酸化焰・良好 ⑥内・外面に褐釉(黄褐色)		
9836 304 126	陶器・焼締 大甕 口～底	上第27号土坑	① 592 ② 610 ③ 178	①紐作り ②平底 ③口縁部は平坦 ④精選(灰色) ⑤酸化焰・焼締 ⑥器面は褐色		常滑系
9837 282 124	陶器 盤 底部	上第19号溝	②(45) ③ 132	①ロクロ成形 ②平・回転糸切り ③縁折れ盤 ④精選・やや密(淡黄色) ⑤酸化焰 ⑥内面に灰釉が部分的に見られる		瀬戸系
9838 282 128	陶器・焼締 大甕 口～体	上第20号溝	①(240)	①紐作り ②欠損 ③口縁部T字状折り返し。 ④精選(灰色) ⑤酸化焰・焼締 ⑥肩部に自然釉、体部は鈍い赤褐色	頸～口縁部横ナデ、体部内面に指頭圧痕	常滑系
9839 282 128	陶器・焼締 大甕 口～体	上第20号溝	①(134) ②(127)	①紐作り ②欠損 ③頸部は短く直立、口縁部は平坦 ④精選やや密(淡橙色) ⑤酸化焰・焼締(やや甘い) ⑥淡橙色	頸部横ナデ	常滑系

がやや雑なことなどから14世紀中頃から後半代の所産になるものと考えられる。

(2) 石 白

9919は径64cm、厚さ20cmの石白半欠品で、目無しの下白である。中央部には心棒穴の貫通孔が、下面には大きなえぐりが施されている。全体的に片べりの傾向が窺え、長期間の使用が想定される。砂岩製。

9920は推定径64cm、厚さ15cmの、石白3分の1程の破片で推定5分画の基本溝数は7本前後と思われる。中央部には心棒穴の貫通孔が、下面にはえぐりが施されている。全体的に薄く擦り減っていることから、長期間の使用が想定される。砂岩製。



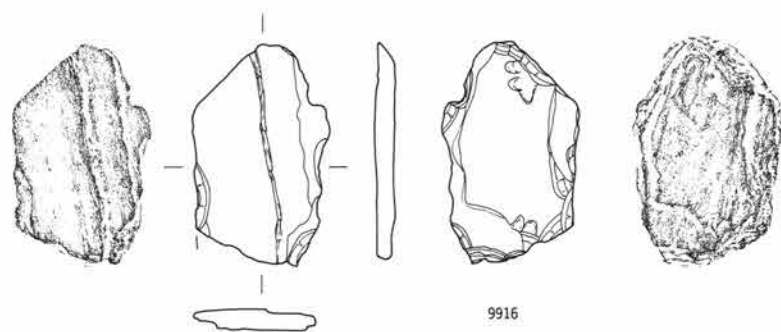
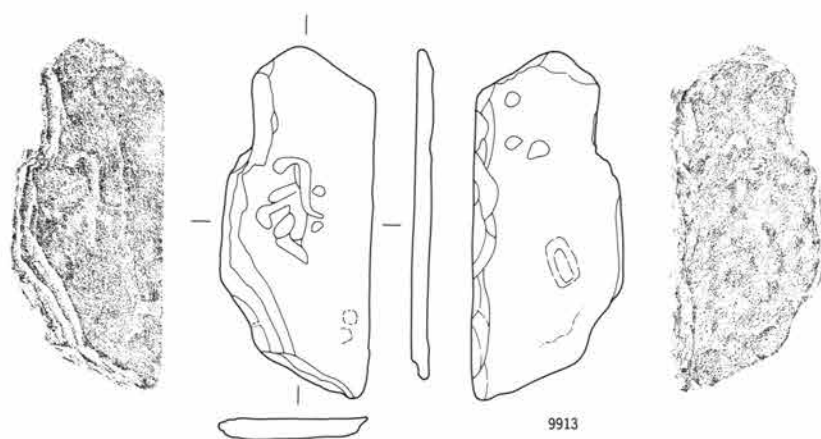
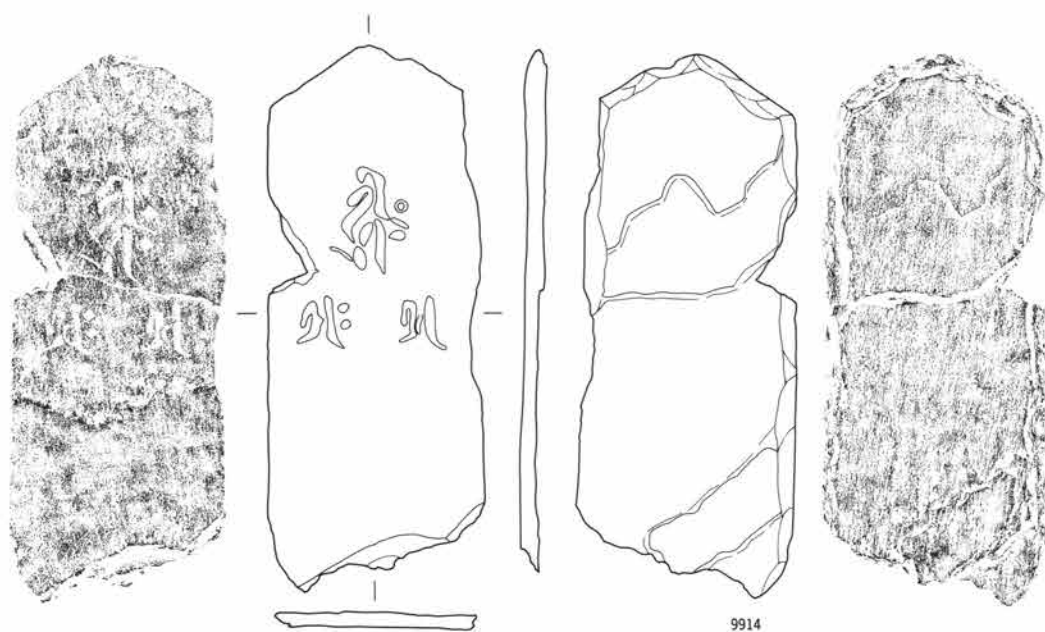
第328図 上谷戸調査区出土遺物実測図(15)一銭貨・鉄製品一

第38表 上谷戸調査区出土銭貨一覧

遺物番号	挿図	写真	出土区域	遺構名称	グリッド	銭貨銘	読順	材質	外径	内径	孔	重量	書体	特徴・初鋳造年・備考
6068	300	127	斜面部墓壇	第29号土坑		寛永通寶	対読	銅	23	19	6	2.4	楷書	
6069	322	127	西側下位面	第19号溝付近	Gi 5 g01	不明		銅	25	24		0.9		欠損
6070	322	127	西側下位面		Gk 3 g10	至道元寶	対読	銅	24	19	6	1	楷書	宋(太宗)至道元年(995)
6071	322	127	西側下位面		Gq 3 g01	寛永通寶	対読	銅	21	17	7	1.6	楷書	
6072	322	127	西側上位面	31土坑付近	Hc 6 g63	寛永通寶	対読	銅	24	20	7	3.3	楷書	
6073	322	127	西側上位面	31土坑付近	Hc 6 g62	寛永通寶	対読	銅	22	19	7	1.5	楷書	
6074	322	127	西側上位面	31土坑付近	Hc 6 g10	寛永通寶	対読	銅	22	19	6	2.1	楷書	
6075	322	127	斜面部	2溝付近	Hp04g	寛永通寶	対読	銅	24	19	6	2.3	楷書	
6076	322	127	斜面部		Hs03g	寛永通寶	対読	銅	24	20	6	2.9	楷書	

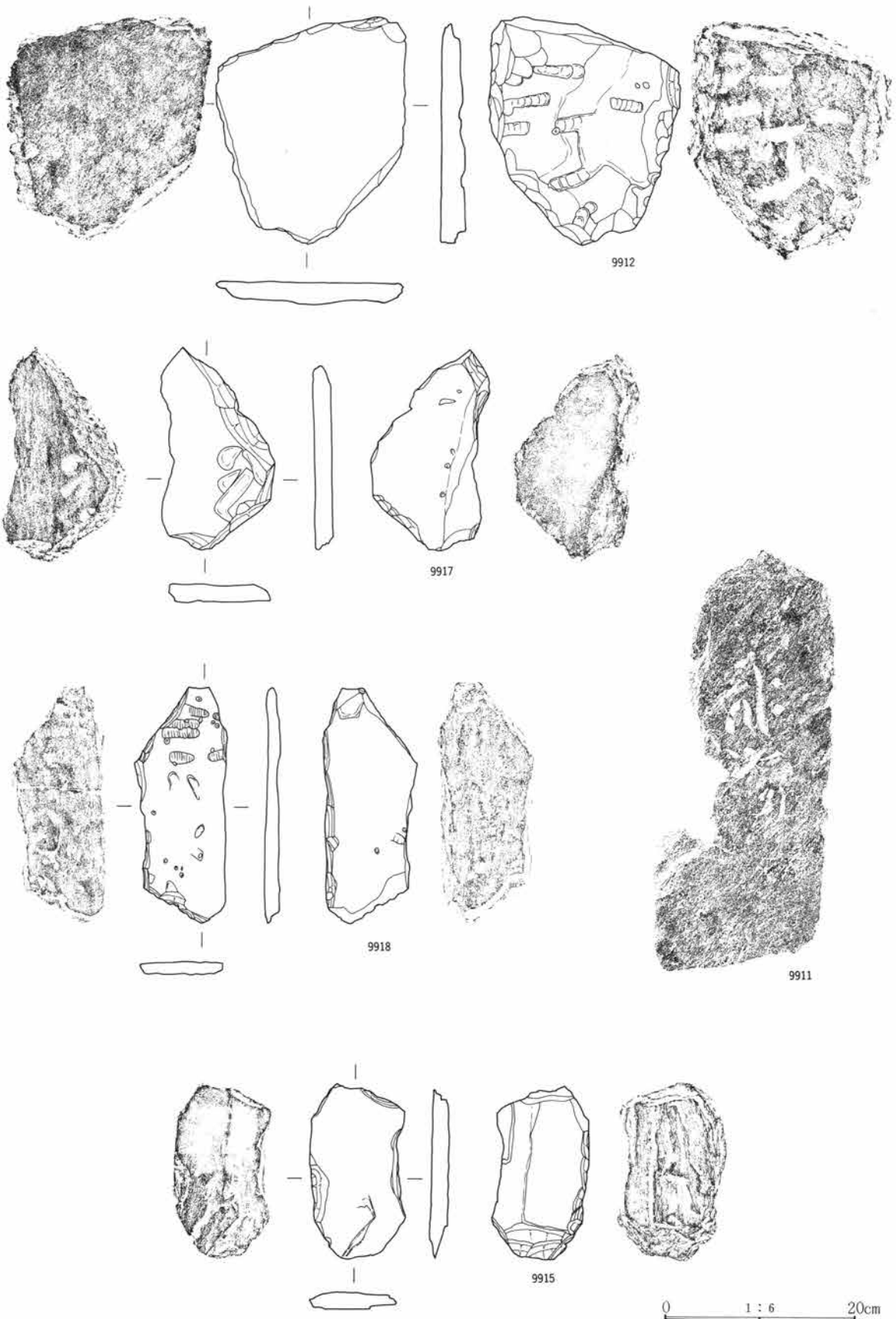
第39表 上谷戸調査区出土鉄製品一覧表

遺物番号	挿図	写真	出土区域	グリッド名	重量	長さ	幅(mm)	形状	特徴	備考
9902	328	—	上谷戸 H区	Hc05 g 05	1.1g	30mm	4×—	釘 頭部片折れ	断面 角	頭部残存
9903	328	—	上谷戸 H区	Hc05 g	1.3g	26mm	5×—	釘 頭部片折れ	断面 角	一部残存
9904	328	—	上谷戸 H区	Hg06 g 25	4.0g	55mm	7×4	釘 頭部片折れ	断面 角	一部欠損
9905	328	—	上谷戸 H区	Hc05 g	0.7g	19mm	4×—	釘 不明	不明	一部残存
9906	328	127	上谷戸 H区	Hb05 g	8.7g	41mm	12	きせる(雁首)		完形
9907	328	127	上谷戸 H区	Hf08 g	7.7g	98mm	10×5	きせる(吸口)	完形	折れ曲る
9909	328	127	上谷戸 H区	Hh07 g	10.4g	12mm	12	鉄砲玉		

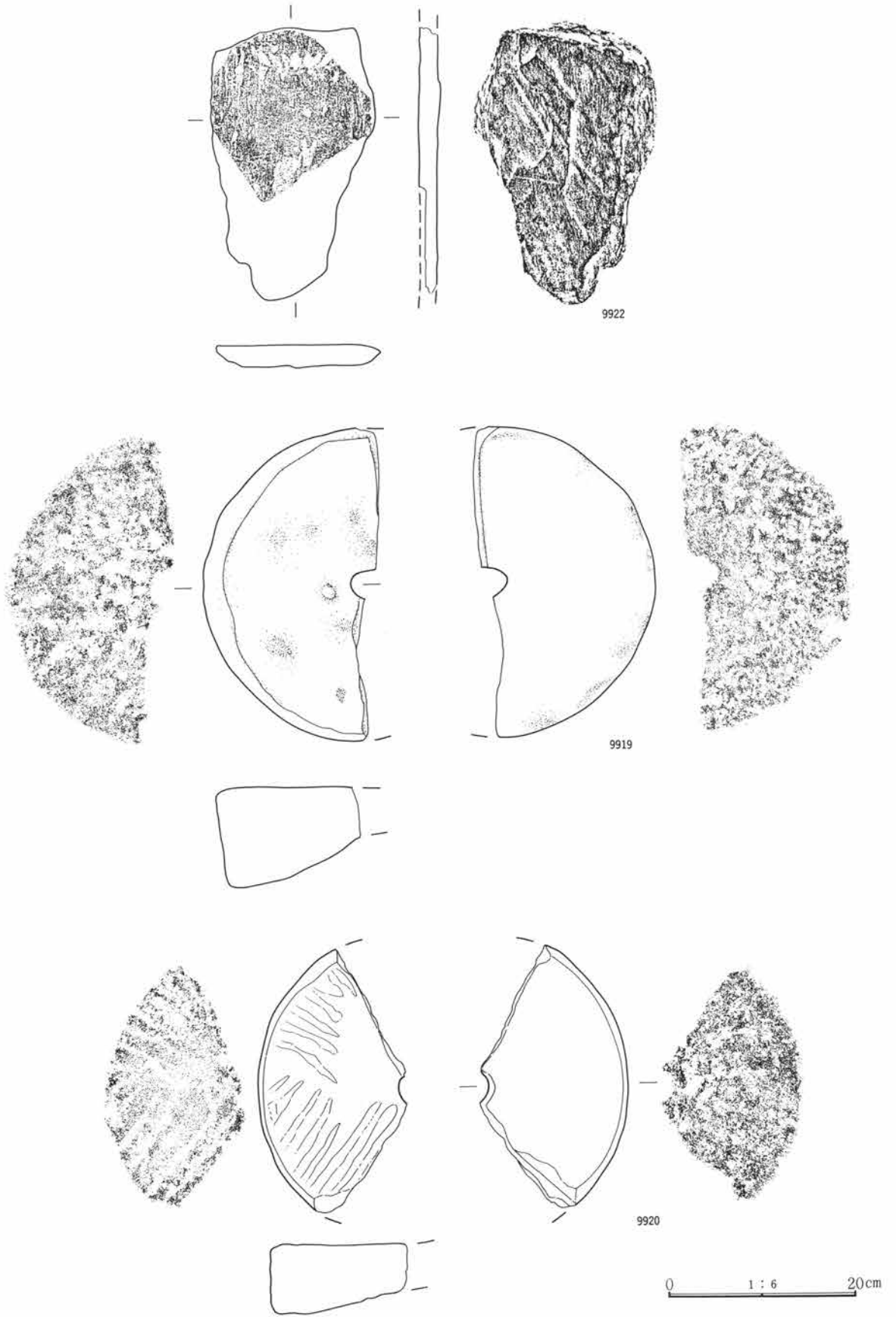


0 1 : 6 20cm

第329図 上谷戸調査区出土遺物実測図(16)―板碑―



第330図 上谷戸調査区出土遺物実測図(17)―板碑―



第331図 上谷戸調査区出土遺物実測図(18)―板碑・石臼―

第VI章 考 察

第1節 調査の成果と問題点

1 はじめに

白石大御堂遺跡の所在する鮎川流域は埋蔵文化財の豊富なことで知られ¹、発掘調査も数多く実施されている。その内容は、白石稲荷山古墳³・金井金山瓦窯跡⁴などで実施された学術的成果を目的とした調査、白石稲荷山古墳⁵・七興山古墳⁶・東平井古墳群⁷などでの遺跡保存を目的とした行政による調査例、そして、開発行為に伴ういわゆる緊急（行政）発掘と呼ばれるもので、調査例及び調査面積が圧倒的に多いのは第三の例による。白石大御堂遺跡の発掘調査もその線上にある。

この行政主導による緊急調査は昭和50年代以降に飛躍的に増加しており、それがまた本地域の考古学的解明を進める原動力ともなったのである。昭和52年の竹沼遺跡の発掘調査⁹はその画期をなすものであり、それに続く緑埜遺跡群をはじめとする一連の発掘調査¹⁰は、遺跡の個別的調査から広域的・網羅的方向へと調査の性格を変えて行った。しかし、それは調査の視点や調査目的の広域化ではなく、開発行為の大規模化・広域化¹¹により埋蔵文化財の保護という観点からは次善の策としての記録保存に頼らざるを得ないという点では充分であるとは言えない状況である。しかし、こうした状況下にあっても、すでに蓄積された関係者の努力の結果は埋蔵文化財の保護と保存活用と言った面で着実な成果をあげ、地元住民の理解と協力が図られつつある。

本地域が藤岡市内はもとより県下でも有数の埋蔵文化財包蔵地であることはかなり周知徹底され、一部の意図的な古墳の破壊行為¹³を除けば開発行為と文化財保護という問題について、本地域・行政当局・地元住民は先駆的な実績のある地域と言える。前述の古墳の保存整備のための調査¹⁴のほかに、住民運動の成果として中世山城の保存¹⁵が、その開発計画の一部を変更して実現され着実な成果をあげている。

白石大御堂遺跡の発掘調査は、こうした地域の文化財保存の状況下で実施された。その結果、鮎川流域における埋蔵文化財の在り方について新たな成果を得ることができ、特に中世から近世にかけて考古学的な調査による成果を得られたという点で重要な意味をもつものと言える。そこで、本調査の意義と当該地域におけるその位置付けについて若干の考察を加えてみたいと思う。

2 白石大御堂遺跡の立地について

鮎川流域では、その中・下流域にあたる日野金井より上落合にいたる間に、かなり濃密に遺跡が分布している。また、遺跡の種類も墳墓・集落・生産・城館等多様であり、遺跡立地も沖積低地・洪積台地・丘陵（山麓・尾根上）等多岐にわたる。その中で最も多くかつ古くから知られているのは古墳・古墳群である。白石稲荷山古墳・七興山古墳を中心とした白石古墳群が下流域左岸に、東平井古墳群が中流域右岸に分布している。また、これらの古墳・古墳群と同時期の集落跡もあるはずであるが、現在までにこの流域で確認された遺跡は、竹沼遺跡・緑埜遺跡群など西平井から緑埜にかけての洪積台地上に広がるものである。この洪積台地上の集落遺跡¹⁶は古墳時代のみならず縄文から平安時代にいたる長期間にわたって確認されており、当該地域の開発が古くから行われて来たことを物語っている。考古学的に調査される遺跡・遺構は縄文時代から平

安時代にかけてのものが多く、近年では中・近世のものも増加しつつある。¹⁷

この鮎川流域が地形的特徴から沖積低地（鮎川氾濫原）、洪積台地（鮎川河岸段丘）、丘陵裾部（山麓）、丘陵尾根部（鞍部）と地形的な遷移が見られ、遺跡の性格もその地形特性に左右されたものとなっている。白石大御堂遺跡の発掘調査は、ミクロ的な視点からは、鮎川左岸に地形横断的にトレンチを入れ、遺跡分布の在り方を直線的に確認し、¹⁸遺構と地形的条件との関係を明らかにするという点に重要な意味を持ち、マクロ的には鮎川左岸流域での遺跡・遺構の分布の中で占める位置が遺跡の性格を反映したものとして、さらには関東平野北西部における地形的な傾斜変換点・地理的な結節点に位置することで、そうした状況下での遺跡の在り方を考えるという点からその意義を認めるものである。

この地域では、すでに藤岡市教育委員会により十数件の発掘調査が実施され、従前のものを含めてかなりの数に上る（付図1 白石大御堂遺跡と周辺遺跡、第10図 鮎川流域遺跡分布図参照）。そうした調査の成果や現状で認められる古墳の分布・土器片の散布等からは、確認された遺跡と地形との個別的关系については、特にこの鮎川流域では、地形が標式的であることから、各時代・種別毎の遺跡選地の特徴を比較考察することが可能な地域としてとらえられてきた。本調査によっても、通常の生活の場としての営みが、縄文時代・古墳時代・平安時代そして中・近世に至るまで確認された。しかし、その立地には各時代毎に差異が認められ、それぞれの時代特性を反映した遺跡選地の状況がなされたと言える。また、一方では、中世の寺院址が明らかとなり、本遺跡に通常の集落遺跡とは別の視点からの分析も必要となり、二つの異なる性格を併せ持った遺跡としてとらえなければならない。また、その際に従前の発掘調査の成果を踏まえて考えなければならぬ問題でもある。

すでに実施された『F1竹沼遺跡群』『F2緑埜遺跡群』の調査は、本調査を上回る広域かつ大規模なものであるが、地形的に見た場合には同一条件下において広がる遺跡の調査、すなわち前者においては洪積台地上の、後者においては沖積低地に広がる遺跡の調査が主であったと言える。最も広域にわたった緑埜遺跡群の調査においても、水田の基盤整備に伴う土地改良事業による発掘調査であったために、調査範囲は地形的には水田の分布範囲（＝洪積台地上の谷地部分）が中心であり、調査された遺跡の内容には、沖積地の開発状況を示す内容が窺われる。

竹沼遺跡・薬師原遺跡等の発掘調査においては、洪積台地縁辺部に立地する集落遺跡が明らかとなった。居住域の選択を見た場合に、当該地域に於けるひとつの在り方を示すものと言える。

また、これとはやや性格が異なるが平井城跡²⁰をはじめとする城館跡の立地や、金井金山瓦窯跡・鉦沢遺跡²¹等の生産遺物立地も地域内での地形的条件と吟味して選地していると考えられ、それぞれ諸条件を示唆するものとしてとらえられよう。しかし、これらの遺跡についてはより広い視野からの考察を必要とする内容があり、単に一地域の限られた範囲において語ることは遺跡のもつ固有の性格を歪めてしまう危険性をもつものである。

鮎川流域に於ける遺跡立地という問題は非常にミクロな視点ではあるが、鮎川流域に視野を広げても同様な在り方を示すものと考えられることから、地域開発と土地利用の在り方を考えようとする際に重要な情報を含み得る地域と言える。

3 調査の成果

白石大御堂遺跡の調査の意義は、地形縦断的な発掘調査という方法に画期をもたらすべき内容があり、ここで得られた考古学的知見は従来のパターン化された集落立地を基本とする遺跡のとりえ方に修正をもたら

す内容をもつという点で重要である。さらには、縄文時代から中近世に至るまで各時代にわたって連続と続く人々の営みがあったことが、そこで検出された遺構と出土した遺物から知られ、地域における連続的な変遷を知る上でも重要な意味をもつ調査と言える。

次に発掘調査によって明らかとなった諸点を列記し、各時代毎にその要点を述べたいと思う。なお、その中で重要と考えられる幾つかについてはさらに節を改めて考察を加えることとする。

(1) 先土器・縄文・弥生時代

① 先土器時代の遺物として、石器を前原調査区で採集した。鮎川左岸の洪積台地上では白石字稻荷原²³や竹沼遺跡²⁴で出土例が報告されている。本遺跡は他の2遺跡の中間的な位置を占め、洪積台地の東側縁辺部というほぼ同じ立地条件で有ることから、ここでの先土器時代の遺跡の存在を示唆させるものである。

② 縄文時代の遺構としては、中期の加曽利E式期の住居跡を検出している。検出遺構は4軒であるが、前原調査区で検出された2軒と大御堂調査区で検出された2軒とは立地条件・住居形態・時期等に次のような差異が認められる。

前原調査区	円形・竪穴住居跡	2軒	加曽利E3式	洪積台地面（鮎川左岸上位段丘面）
大御堂調査区	柄鏡形・敷石住居跡	2軒	加曽利E4式	沖積低地面（鮎川左岸下位段丘面）

ここで注目されるのは集落（住居）立地の変化であるが、台地の上位面から下位面への遷移という点に注目される。上位面には関東ローム層（板鼻層）の堆積がみられ、前原調査区の竪穴住居跡2軒はこれを掘りくぼめて作られている。下位面に当たる大御堂調査区では、河川堆積物である粘質土面に結晶片岩を主とする敷石住居を作っている。前2軒は加曽利E3式、後2軒は加曽利E4式と、編年的には連続する時期であり、ここでの集落立地に明確な垂直的遷移傾向が認められる。しかも敷石住居の発生と密接に関連した問題としてとらえられる。すでに籾川流域において類例が知られており、また、同じ鮎川流域には中大塚敷石住居跡があり、当該地域における縄文時代中期の様相のひとつの傾向を示す資料として重要である。（このことについては本章第2節において詳説する。）

③ 縄文時代の遺物として注目されるのは、上谷戸調査区において発見された「の」字形垂飾である。表採資料で出土状況や供伴する遺物を明らかにし得なかったのは残念であるが、類例が東京都八丈島倉輪遺跡²⁵や富山県天林北遺跡²⁶などわずかで、縄文時代前期～中期の土器とともに出土していることが知られている。上谷戸調査区での縄文土器も前期から中期のものが見られることから、本遺跡出土のものもこれに該当する時期に当たると考えられる。縄文時代の特殊玉生産とその流通に関連して貴重な発見例であると言えよう。

④ 縄文時代の遺構は前原・大御堂の各調査区で検出され、遺物は上谷戸調査区においても出土している。その時期は前期が少量見られ、中期が主体的に存在し、後期のものも若干含むといった内容であり、それぞれの調査区において縄文人の足跡をたどることが可能である。各調査区の出土遺物の傾向は、前期の土器は丘陵斜面部（上谷戸調査区）や洪積台地縁辺部（前原調査区）に見られ、中期後半中頃に洪積台地縁辺に近い平坦面に集落を構成し（前原調査区）、中期後半末葉には更に下位の沖積低地に遷移することが判明した。このことは、鮎川左岸における縄文時代遺跡の分布と立地を端的に説明する成果であると言える。

⑤ 大御堂調査区の沖積低地面においては、縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけての遺物が比較的まとまって出土した。千網谷戸式から岩櫃山式にかけての時間的に連続すると見られる一群の資料で、内容的には縄文晩期の変形工字文の流れをくむものと、遠賀川式系のものが見られる。類例資料の蓄積があまり進んでいない該期の遺物として重要である。縄文晩期の遺跡はいわゆる低湿地に多く立地することが知られて

いるが、本遺跡出土資料も同様な立地条件と考えられ、藤岡市内においては沖Ⅱ遺跡²⁷において、弥生時代初頭の土器の出土が知られる。また、温井遺跡²⁸からも小片ではあるが同様の土器片が出土している。いずれも藤岡台地の周辺沖積低地に立地するという共通性が認められ、水稻耕作の開始と関連して注目される。該期の遺跡が沖積低地面に進出し、湿地部分の水田開発と自然堤防状の微高地への居住域の展開を示唆するものと考えられる。

(2) 古墳～平安時代

古墳～平安時代にかけては各調査区において土師器・須恵器・埴輪等の遺物が出土しているが、遺構として確認できたのは上谷戸調査区における5軒の竪穴住居跡である。古墳時代の住居が2軒、平安時代の住居が3軒で、いずれも丘陵の南東斜面に立地し、“上谷戸”谷に面している。該期の集落はかなり規模の大きいものも知られるが、ここで検出された2時期の集落は、立地する斜面の規模を考慮に入れるとさほど大きなものでないことが予想され、検出数が2軒と3軒であることを考えると、5・6軒程度の小規模な集落の一部であると予想される。

鮎川左岸における拠点(基幹)集落としては竹沼遺跡が知られ、その生産基盤は緑埜遺跡群に求められる。この竹沼・緑埜遺跡群がこの地域の中核的存在としてあり、その周辺に古墳群の分布が見られる。すなわち、南に西平井古墳群、東には緑埜古墳群と鮎川の対岸には東平井古墳群が、そして北には白石緑埜古墳群及び白石古墳群が分布する。これらのことから、少なくとも古墳時代後半には鮎川左岸流域において、集落・生産・墳墓が地域の中で固有の選地がなされ、遺跡として展開することが明らかである。

この地域での農耕集落は古墳時代初頭より開始されることは、竹沼遺跡で鮎川崖に沿う部分で最も古い時期の住居が見られ、本遺跡上谷戸調査区からも前期の石田川式の土器片が出土して、これに続く5世紀代の土師器も見られ、古墳時代当初より開発は始まっていたと考えられる。竹沼遺跡では鮎川崖に近い部分であったが、基本的には丘陵裾部に見られる小支谷の開発によるもので、限定された生産力に見合う小規模なものである。上谷戸調査区に見られるような丘陵裾部に展開する集落は、古墳時代より平安時代にいたるまで見られるが、古墳時代初頭に於ける場合とそれ以降とでは、その集落の性格が異なったものと推定される。上谷戸調査区出土の古墳時代前期の土師器は開発初期の時代の遺物と考えられる。

上谷戸調査区検出の住居は古墳時代後期の6世紀代と平安時代前期の9世紀代である。6世紀の鮎川流域の状況は稲荷山古墳・七興山古墳などの首長墓が作られ、かなりの生産力があつた地域と考えられ、さらに円墳が群集(密集)して作られる時期にもあたる。すでに竹沼遺跡を基幹集落とする村落構成が出来上がっており、これを母村として耕地の拡大が図られ、周辺に小規模な分村が営まれる。こうした傾向は、この鮎川・鮎川流域においては丘陵裾部(下位段丘面最奥部)の小支谷の(再)開発として見られ、上谷戸調査区の住居もそうした性格のものと考えられる。

(3) 中世～近世

本遺跡の調査を実施するに当たり、当初包蔵が予想された埋蔵文化財は前原・上谷戸調査区のある洪積台地面における縄文及び古墳～平安時代集落であり、中近世に関しては、「大御堂」の字名と「アミダイケ」の地名伝承の他には、藤岡市教育委員会による発掘調査が実施されるまでは考古学的な確認は何らなされてなかったと言える。否、鮎川流域では分布密度の最も薄い地域と見られていた。

発掘調査の実施により、大御堂調査区においては中世の寺院址と重複する範囲に見られる埋葬遺構群、近世に入ってから残る寺院址遺構の一部、前原調査区においては“鎌倉街道”と見られる道路跡と中世後半の屋敷跡を検出し、上谷戸調査区においては近世の屋敷跡とそれに先行する中世の遺構群が検出されている。

これらの成果は、従来、考古学的な調査の実施されることの少なかった中・近世の遺構・遺物を明らかにしたという点で意義があり、今後の指標となり得る重要なものと言えよう。

調査で明らかにし得た中近世の成果は次の諸点である。

- ① 大御堂調査区において中世前半期の創建と思われる寺院址遺構を検出した。方形区画が認められる寺域の範囲内に園池遺構を検出した。いわゆる臨池伽藍寺院であり、平安時代後半から鎌倉時代にかけて京都を中心に造営された形式の流れを汲む遺構である。(寺院址遺構に関しては本章第3節で考察する。)
- ② 寺院址遺構からは、寺院建築にかかわる遺物として瓦類及び釘を主とする多量の鉄製品が出土している。瓦類はその形状・焼成・胎土等から新旧2時期と考えられ、古い時期のものが創建瓦と考えられ、その時期は鎌倉時代と推定される。また、新しい時期の瓦はその特徴から室町時代に入ってからのもものと推定され、寺院址の存続期間を示す資料である。
- ③ 寺院址遺構からの出土遺物は、建物に関する瓦・釘類の他に、土師質土器・軟質陶器・陶磁器類・銭貨類等が見られる。詳細に見ると中世に属す遺物と近世に入ってからのもものに分けられ、少なくとも遺物の持つ時間幅の中では寺院又は寺院址としての何らかの機能があった期間のもと考えられる。また、種別・器種別に出土傾向を見ると寺院址遺構の変遷を時代の経過とともにたどり得るものである。
- ④ 中世の出土遺物は寺院に直接・間接に関わるもので、寺院の存続期間の中では一括資料として捉えることが可能である。出土した遺物には形式的変遷をたどり得る資料より、同一時期の一括資料と見なされるものが多い。
- ⑤ 寺院の創建年代は中世前半の鎌倉時代と考えられ、室町時代に入るところまでは存続していたものと推定される。(これについては本章第3節の出土遺物の考察で詳述したい。)
- ⑥ 大御堂調査区のA・B区は寺院址の主要部が検出されたが、これに隣接するC区は寺地としての広がりと考えられ、意図的な区画・配置の溝状遺構と掘立柱建物跡群が検出されている。
- ⑦ 寺院址では、埋葬遺構がまとまって検出されている。配石墓・火葬跡・火葬墓・土坑墓・土壙等、多様な様相を見せ、中世後半から近世にかけての時期に営まれたものである。中世墓地としてまとまった資料であり、寺院址との関係が注目される。
- ⑧ 前原調査区において、いわゆる“鎌倉街道”と考えられる道路跡を検出し、本遺跡の地理的重要性が指摘される。また、道路跡に沿って、中世後半と考えられる屋敷跡が検出された。中世後半には平井城が築造され、上野国における中心的な役割を果す地域であり、屋敷跡が交通の要衝にあたる位置を占めると考えられ、その関係が注目される。
- ⑨ 上谷戸調査区においては近世前半の屋敷跡を検出した。遺構と遺物からは中世にまで遡ることが可能であり、元禄年間の村絵図に記載も認められ、その末裔と考えられる人家が隣接してあることから、地域史の視点から近世の様相が明らかとなった。
- ⑩ 字名・地名伝承・村絵図等の関連資料と発掘調査の結果から、特に近世段階において地域史の再検討・再構築が可能となった。(本章第4節で考察する。)

以上の諸点が調査の成果として明らかとなった。特に中世史については、平井城と上杉氏に関連して注目されているが、それ以前の様相については、文献資料が断片的には追えるもののそれを傍証する手掛かりはやや不十分であったと言わざるを得ない。考古学的にも中世前半の資料は発見例が少なく、しかもそれが地域的に偏在することを考えると、本遺跡の出土資料とその成果は今後重要な意味をもつであろう事は明らかである。(綿貫鋭次郎)

第VI章 考 察

- 1 『上毛古墳綜覧』による古墳分布調査をはじめとして、多くの報告書に流域での遺跡分布が示されている。特に文献14～18の遺跡詳細分布調査によりその実態はかなり把握されるようになった。本書では鮎川流域の遺跡分布を第7図～第10図に示したが、そこでの掲載遺跡はこれまでの分布報告例を集成したもので、現段階で周知された最新のものと言える。
- 2 第1章第2節第2項に詳述
- 3 群馬県『史蹟名勝天然記念物調査報告』第三輯
- 4 文献32
- 5 昭和60・61年度に藤岡市教育委員会により確認調査実施。
- 6 昭和47年度に群馬県教育委員会により、昭和63年度～平成2年度に藤岡市教育委員会が確認調査実施。
- 7 昭和55年度に群馬県教育委員会調査、文献23
- 8 緊急発掘による応急の記録保存は、藤岡市に於いては特に古墳の滅失に関わって実施されてきた。鮎川流域では中流域右岸での工場建設、下流域左岸での住宅団地造成をその端緒として、以降、様々な開発行為が実施されている。
- 9 県営圃場整備事業の実施に伴う緊急調査として発掘調査が実施された。事業は昭和48年度より昭和52年度まで継続して実施されたが、昭和52年度の調査は藤岡市教育委員会に文化財担当の専門職員を配して初の直営事業として行なわれ、文化財保護行政の転機として特筆される。文献13
- 10 藤岡市教育委員会では、発掘調査の多くが開発事業に起因して実施され、当該区域内のみの記録保存を当座の目的として、ひとつの遺跡に対しても様々な原因による調査が実施されることを想定し、遺跡名称(=原因者別事業名称)の記号化を図っている。報告書に記載された「F₁竹沼遺跡群」のアルファベットは町村合併以前の区域に便宜的に分類し(A～H)、数字は区域別に発掘調査の着手順に冠されている。従って、調査の実施件数は、昭和52年度以降のものについては地区毎に冠された数字の最も大きいものが示している。ちなみに本遺跡の所在する平井地区(F)での発掘調査を見ると、平成2年度実施の関越道上越線工事用道路部分のうち藤岡市教育委員会の調査部分が「F13」と冠する予定であるとのことで、藤岡市教育委員会実施のものが13件にのぼっていると理解できる。平井地区での調査総件数は、これに昭和51年度以前のものと同昭和52年度以降に藤岡市教育委員会以外の実施機関(県教委・当事業団等)の件数を加えたものである。
- 11 開発事業の中で最も広域的なものは、農業基盤整備(土地改良・圃場整備)事業である。鮎川左岸では竹沼地区に続き緑埜地区でも実施され、この両者を合わせると約80万㎡にもなり、中下流域のかかなりの部分を占める。同様の事業は市内では小野地区・藤岡平地区でと計画され、それにかかわる調査が実施されている。
- 12 藤岡市では担当職員の増員、担当課の設置により、文化財保護行政の充実を図っている。
- 13 数多く存在していた古墳の滅失は、耕地拡大を図る農民の日々の営みの結果と考えられるが、近年、重機を使用して削平するといった事例も散見される。
- 14 東平井古墳群は、市内はもとより県内でも有数の群集墳として知られ、現在、史跡公園の整備が進められている。文献。
- 15 本遺跡の西南方約3kmのところにある『平井金山城(平井詰め城)』は、ゴルフ場建設工事に伴い大幅な地形変化が予定されて一部保存を前提として、緊急調査が実施された。地元では『平井城址保存会』を中心に、平井城に関連するこの山城の保存運動が持ち上がった。その結果、ゴルフ場の設設変更により、山城は全面的に保存されることとなった。これは、文化財保護が住民運動として結実した成果と評価できる。
- 16 鮎川左岸の洪積台地上の集落遺跡としては「F₁竹沼遺跡」、「F₂薬師原遺跡」が調査されている。竹沼遺跡では、圃場整備事業に係る道路・水路部分のみの調査であったにもかかわらず、縄文時代から古墳・平安時代までの竪穴住居跡が55軒確認され、中流域左岸に展開する基幹的集落かと思われる。
- 17 「F₂薬師原遺跡」において中世の溝状遺構が検出され、「比久尼橋」、「比久尼屋敷」等の地名伝承も残る。また、「F₂緑埜地区遺跡群I」の中でも中近世遺物の報告が見られる。
- 18 地形横断的な発掘調査は、藤岡市東半を占める神流川左岸の地域で、国道254号線バイパス建設工事に関連して実施され、「A₁堀ノ内遺跡群」としてまとめられている。ここでは古墳時代初頭より平安時代に至る集落跡と、古墳時代前期～後期の方形周溝墓・前方後方墳・群集墳が検出され、台地上での種別・時代別の選地の傾向が明らかとなった。
- 19 生活域・居住域としての集落遺跡という性格と、寺院址・埋葬址(墓地)としての特殊な性格(信仰の対象として)の遺跡として。
- 20 文献11
- 21 文献12
- 22 遺跡の広がり、生活の場の広がり、竪穴住居跡等の生活遺構の検出により居住域については確認できる。この生活の場の周辺には生産の場が確保されなければならない。先土器・縄文時代においては狩猟・採集の場が、弥生時代以降については農業生産の場(水田・畑地等)の確保が必須であり、更にこれに墓地等の埋葬遺構が加わって人間の営みとしての遺跡として確認できる。
- 23 文献9
- 24 文献13
- 25 P336参照
- 26 P336参照
- 27 文献30
- 28 文献25

第2節 鐮川流域における敷石住居跡の様相

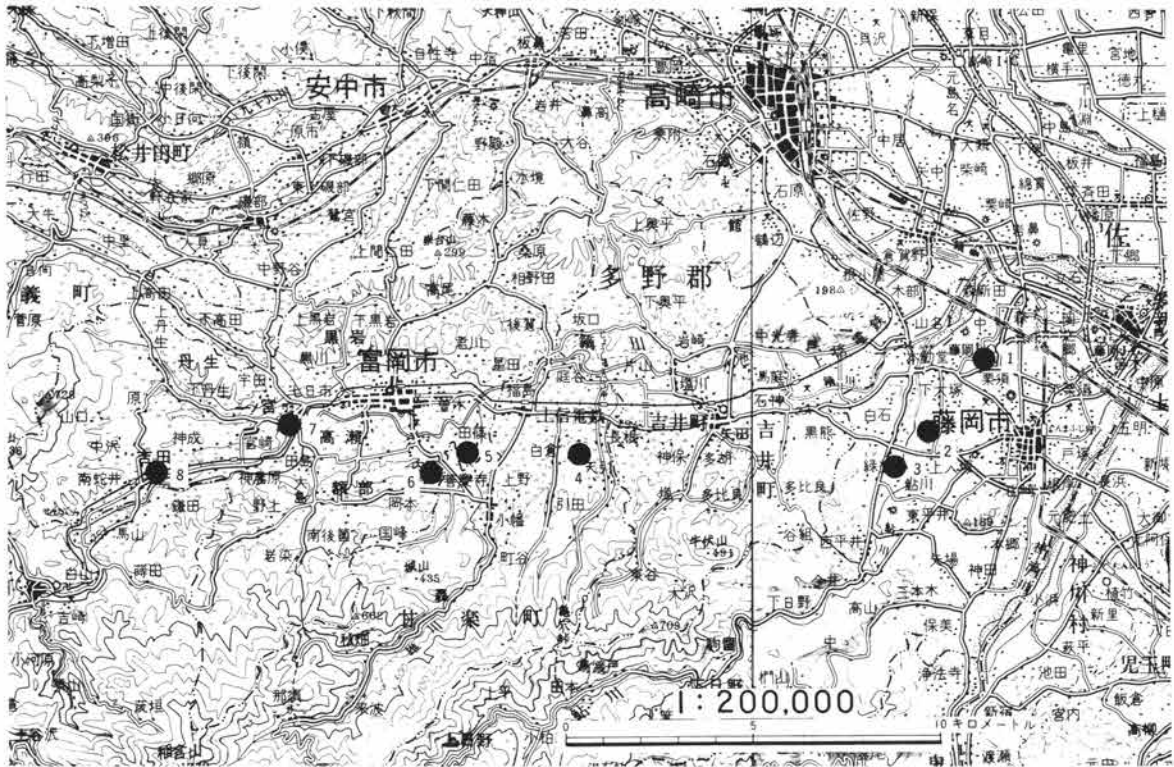
1 かぶらの谷の地形概観

群馬県の北西部に位置する荒船山頂に立つと、かぶらの谷が一望できる。荒船山(1,423m)とその裾野に連なる山々は、上信越国境の分水嶺になっている。この谷合いから湧き出る水は鐮川の源流となり、たくさんの支流を集めて、下仁田町、富岡市、甘楽町を東に流れて烏川に合流しているが、この流域を「かぶらの谷」と呼んでいる。下仁田町東方の鐮川流域は、川の流れも一転して緩やかになり、河岸段丘面が未広がりに平地をつくっている。富岡市を中心とした平坦地は、鐮川を境にして、南側には高瀬段丘面が広く発達している。一方北側には、妙義山麓丘陵、丹生丘陵、富岡丘陵など小高い丘が続いている。高田川(21,619m)、丹生川、そして鐮川(37.645m)の流水の働きによって河岸段丘(面)が発達し、一ノ宮・富岡市街地をつくっている。甘楽町一帯の地形は、下仁田町との境界に聳え立つ稲倉山(1,370m)に源を発して流れる雄川(15,394m)が、小幡丘陵の北側を流れて小幡扇状地を発達させて鐮川へ合流している。藤岡市周辺の地形は、関東構造線(下仁田―藤岡構造線)以南の山地(標高500~600m)と北側の丘陵(標高150~300m)及び、これを開析する鐮川、鮎川、神流川等に沿って発達する扇状地性の台地(標高80~150m)と低地(70~100m)に大きく区分される。

2 検出された敷石住居跡

かぶらの谷に関越道上越線建設に伴う調査が開始されたのは昭和61年からであり、これを契機として県内西毛地域での考古学的調査がさかんになった。調査では各時代の各種遺構が検出されたが、縄文時代の調査においては中期末から後期にかけての敷石住居跡の検出が相次いだ。藤岡市上栗須寺前遺跡(第332図-1)から後期の敷石住居跡2軒、同白石大御堂遺跡(第332図-3)から中期加曾利E4式期の敷石住居跡2軒、甘楽町白倉下原遺跡(第332図-4)から中期末~後期にかけて7軒、富岡市田篠中原遺跡(第332図-5)から中期加曾利E3式期7軒、E4式期4軒、同内匠上之宿遺跡(第332図-6)から後期1軒、同南蛇井増光寺遺跡(第332図-8)から中期末~後期6軒である。この他に昭和49年に調査された藤岡市中大塚遺跡(第332図-2)から加曾利E4式期1軒、昭和53~54年にかけて調査された富岡市本宿・郷土遺跡(第332図-7)から加曾利E4式期1軒が検出されており、合計8遺跡31軒の敷石住居跡の検出となる。これ以外にも下仁田町において敷石住居跡の調査例はあるが、詳細不明のために割愛した。31軒の敷石住居跡を時期別にみると、加曾利E3式期の敷石住居跡は1遺跡7軒、同E4式期6遺跡10軒、後期称名寺~堀之内式期4遺跡13軒となる。鐮川流域における敷石住居跡の出現は、中期加曾利E3式期に確実に求められる。この事実は、南関東・中部域においても敷石住居跡の出現としては一番早い時期に相当する。加曾利E4式期になると遺跡数も増加し、この傾向は後期へと続いていく。

加曾利E3式期の敷石住居跡出現前(円形竪穴住居跡に代表される)の集落は、鐮川の上位段丘面に立地している。代表的遺跡としては、吉井町長根安坪遺跡をあげることができる。未報告のために詳細は不明であるが、この遺跡からは加曾利E3式期の円形竪穴住居跡と小規模な環状列石、配石遺構が検出されている。ところが、加曾利E3式期のある段階(敷石住居跡出現前後)に集落立地が上位段丘面から下位に移行する急激な変化をみせる。田篠中原遺跡は中期加曾利E3式期のある段階までは居住不可能な湿地状態にあり、白石大



第332図 鍋川流域敷石住居検出遺跡分布図

御堂遺跡も同様な状態であった。このような場所に突如として集落が営まれた。こうした集落は加曽利E4式期まで継続されていくが、後期には再び上位段丘面（ローム台地上）に集落が営まれるようになる。鍋川流域では中期末の一時期に集落変遷史上に大きな画期を認めることができるが、これと軌を一にするように新たな住居形態である敷石住居の登場、大規模な配石遺構群の登場に特徴づけられるようになる。

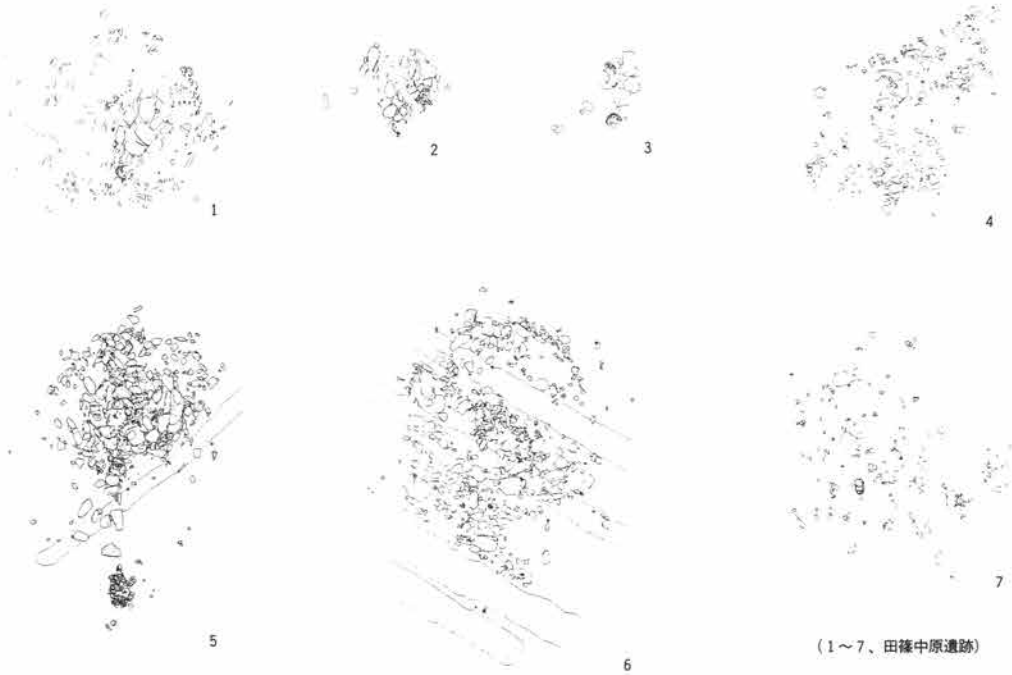
3 各時期における敷石住居跡の様相

加曽利E3式期の敷石住居跡は、現在のところ田篠中原遺跡検出の7軒のみである(第333図1～7)。E3式期の敷石住居跡を概観すると、円形を呈するもの(可能性も含む)4軒(第333図1～4)、柄鏡形を呈するもの(第333図5～7)3軒となり、加曽利E4式期と後期の敷石住居跡がすべて柄鏡形(第333図8～15)を呈するのとは対比的である。すでに田篠中原遺跡の報文中でも触れたが、加曽利E3式期は住居形態が円形竪穴住居跡から柄鏡形敷石住居跡へと変化する過渡的段階と把握することができるのであろう。

敷石住居跡の敷石状態をみると、加曽利E3式期では主体部に全面敷石を施すことはなく、あっても部分敷石(炉辺部)であり、また周縁に小礫(縁石)を配することである。この傾向は加曽利E4式期にもうけつがれ、白石大御堂遺跡の2軒にも認められた。主体部に全面敷石を施している例は、藤岡市中大塚遺跡例(第333図-15)、甘楽町白倉下原遺跡例、富岡市南蛇井増光寺遺跡例があり、加曽利E4式期でも後出的なものとなる。後期の敷石状態は、富岡市内匠上之宿遺跡、甘楽町白倉下原遺跡B・C区検出住居跡のように主体部は無敷石となり、張り出し部のみ敷石を施している。以上のことから敷石の変遷は、加曽利E3式期に始まった部分敷石(炉辺部)・縁石が加曽利E4式期になって全面敷石へと展開したものであろう。しかし加曽利E4式期においても、主体部は縁石のみの敷石住居跡が多いことから、全面敷石との相違を時間差としてとらえることができる。後期には集落立地が上位段丘面へと前時代の集落立地に回帰するように、敷石も縮少傾向に

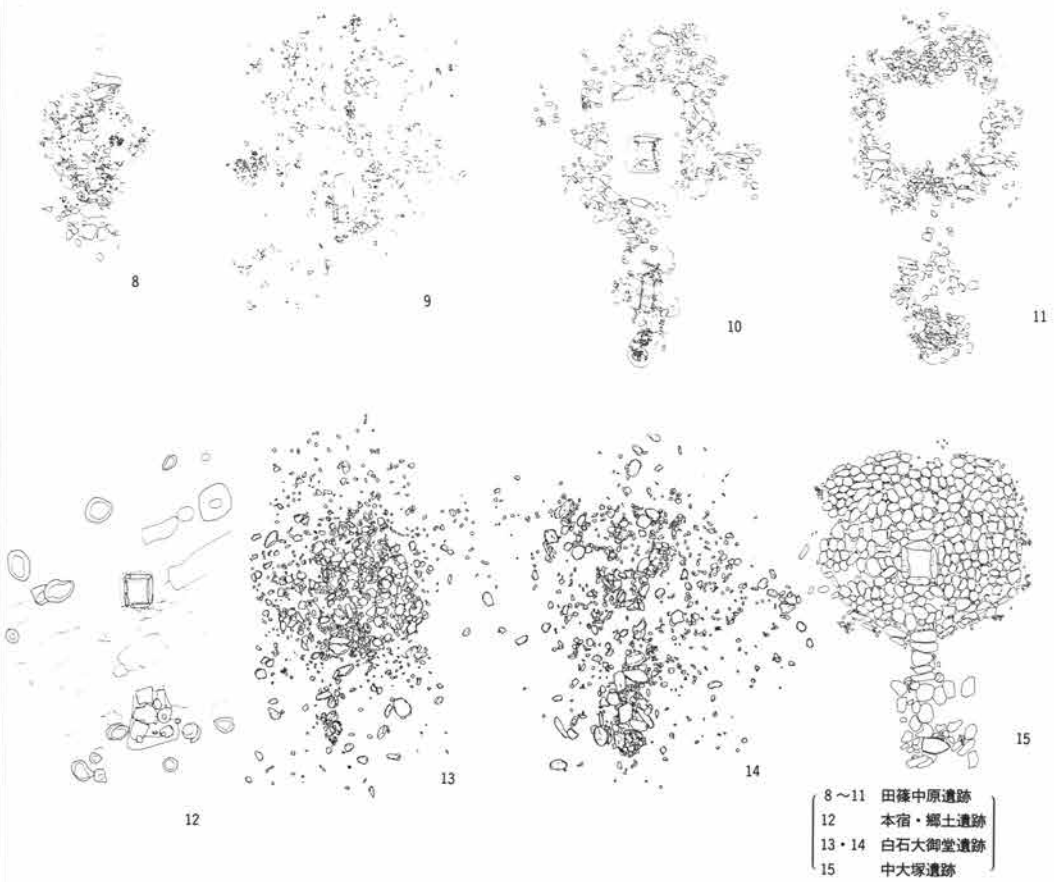
鎭川流域検出の敷石住居跡

加曾利E3式期



(1~7、田塚中原遺跡)

加曾利E4式期



8~11 田塚中原遺跡
12 本宿・郷土遺跡
13・14 白石大御堂遺跡
15 中大塚遺跡

第333図 鎭川流域検出の敷石住居跡変遷図

なり、わずかに張り出し部のみにその名残りととどめることになる。また屋内施設である住居内埋甕については、加曾利E3式期は基本的に1個体である。しかし田篠中原遺跡の36号配石遺構(柄鏡形敷石住居跡第333図-5)では主体部と張り出し部の接続部から1個体と張り出し部の先端部から1個体の計2個体が出土しているように、複数個体をもつのはまれではあるが存在している。加曾利E4式期では1個体出土している住居跡5軒、2個体以上出土している住居跡は6軒となった。その埋設場所は、接続部1個体2軒、接続部2個体1軒、張り出し部先端部1個体3軒、張り出し部先端部複数個体2軒、接続部と張り出し部先端部にもつもの3軒と、統一性はない。しかしいずれも住居の出入口部に該当する場所である。埋設位置に統一性はないが、遺跡間で比較してみた場合にはある共通性が認められる。たとえば、田篠中原遺跡での加曾利E4式期の柄鏡形敷石住居跡である24号配石遺構には、接続部1個体、先端部に1個体の埋甕、23号配石遺構には先端部に2個体の埋甕が埋設されていた。同様な傾向は白石大御堂遺跡の2軒の敷石住居跡にも認められた。1号敷石住居跡には張り出し部先端部に3個体の埋甕、2号敷石住居跡には接続部と張り出し部先端部に埋甕が検出された。同一集落内における埋甕受容の違い、また他遺跡間における埋甕受容の共通性など、埋甕が胎盤を収納した容器と結論づけたとしても、さらにそこに秘められた奥深い意図を感じざるを得ない。ところが、後期になると埋甕の設置はほとんどみられなくなる。他の遺跡では箱状石囲い施設や出入口部土壇へと変遷してゆく傾向が確認されており、敷石の無敷石化と同様に、後期になると何らかの祭祀の様相が薄らいでいくことが判断されることはたしかである。

今回とりあつかった鍋川流域は日本でも有数の石材の豊富な地域である。南関東・中部域にさきがけて敷石住居跡の登場も十分に納得できる背景はあるが、中期加曾利E3式期から後期堀之内式期にかけての期間だけでさえ、部分敷石→全面敷石→無敷石へと敷石住居跡の形態がめまぐるしく変化をしているように、単純に石材が豊富な地域だからと結論づけることはできない。敷石住居跡の登場する中期末に集落立地が急激に変化する大きな画期を認めることができたが、こうした社会的要因も深く考えていかなければならないであろう。それにしても鍋川流域は、他地域にさきがけて敷石住居跡が出現したことは間違いのない事実である。

(菊池 実)

第2節 鎭川流域の敷石住居跡の様相

第40表 縄文時代敷石住居跡一覧表

No	遺跡名	所在地	遺構No	構築状態	形状	敷石状態 主体部 張り出し部	屋内施設					出土遺物	時期			
							炉		埋 壘		立石					
							石囲	埋壘 地床	接続部	先端部						
1	上栗須寺前	藤岡市上栗須寺前	3	竪穴	柄鏡	縁石 ○(?) 部分	○	—	—	—	—		後期			
			6	平地	?	縁石 ?	○	—	—	—	—		後期			
2	中大塚	藤岡市中大塚字鎌倉		平地	柄鏡	全面 ○	○	○	—	○ ₁	○ ₁₊₁	○	石棒・多孔石等	E4		
3	白石大御堂	藤岡市白石字大御堂	1	平地	柄鏡	縁石 ○	○	—	—	—	○ ₃	—	—	多孔石・凹石等	E4	
			2	平地	柄鏡	縁石 ○	○	—	—	○ ₁	○ ₁₊₁	—	—	—	石皿・凹石等	E4
4	白倉下原	甘楽郡甘楽町大字白倉	A区97	竪穴	柄鏡 (?)	部分 不明	—	○	—	—	—	—	—	多孔石	後期 称名寺	
			A区37	竪穴	柄鏡	縁石 ○	—	○	—	—	—	—	—	—		後期 堀之内
			A区96	竪穴	柄鏡 (?)	部分 —	○	○	—	—	—	—	—	—	注口土器	後期 堀之内
			B区26	竪穴	柄鏡	全面 ○	○	—	—	石組み	○	—	—	—	多孔石	E4
			B区89	竪穴	柄鏡	—	○	—	—	○	○ ₁	○ ₂	—	—	多孔石	
			C区76	竪穴	柄鏡	—	○	—	○	—	—	—	—	—	石皿 多孔石	後期 堀之内
			C区77	竪穴	柄鏡	—	—	○	○	—	—	—	—	—		後期 堀之内
			5	田篠中原	富岡市田篠字中原	1	平地	円形	炉辺 —	○	—	—	○ ₁	—	—	多孔石・凹石
2	平地	(円形)	炉辺 —	—	—	○	○ ₁	—	—	—	—	—		E3		
5	平地	円形	炉辺 —	○	—	—	○ ₁	—	—	—	—	—	多孔石・凹石等	E3		
8	平地	柄鏡	縁石 ○	○	○	—	○ ₁	—	—	—	—	—	凹石等	E4		
17	平地	—	縁石 —	○	—	—	—	—	—	—	—	—	石皿・多孔石等	E3		
23	竪穴	柄鏡	縁石 ○	○	—	—	—	—	○ ₂	○	—	—	石皿・多孔石等	E4		
24	竪穴	柄鏡	縁石 ○	—	—	—	○ ₁	○ ₁	—	—	—	—	石皿・多孔石等	E4		
26	平地	柄鏡	縁石 ○	—	○	—	—	—	○ ₁	—	—	—	石棒(?)・凹石等	E4		
36	平地	柄鏡	炉辺 ○	○	—	—	○ ₁	○ ₁	—	—	—	—	石皿・多孔石等	E3		
37	平地	柄鏡	縁石 ○	○	—	—	—	—	○ ₁	○	—	—	石皿・多孔石等	E3		
38	平地	柄鏡	—	○	—	—	—	—	○ ₁	—	—	—	石皿等	E3		
6	内匠上之宿	富岡市内匠字上之宿	7	竪穴	柄鏡	—	○	○	—	—	—	—	石皿・多孔石等	後期		
7	本宿・郷土	富岡市一ノ宮字本宿	MT23	平地	柄鏡	—	○	○	—	—	○	—	凹石	E4		
8	南蛇井増光寺	富岡市南蛇井字増光寺	C区30	平地	柄鏡	全面 ○	○	—	—	—	—	—	—	多孔石等	後期 堀之内	
			C区38	平地	柄鏡	—	○	—	—	○	—	—	—	—		後期 称名寺
			C区70	竪穴	柄鏡	○	—	○	—	—	—	—	—	—		E4
				—	部分 不明	○	—	—	—	—	—	—	—	—		
			E区22	平地	柄鏡	部分 ○	○	○	—	○ ₂	—	—	—	—	凹石	中期末
E区46	平地	柄鏡	部分 ○	—	○	—	○ ₁	—	—	—	—	凹石	中期末			

※未発表の資料については、調査担当者である石塚久則氏、木村 収氏、新井 仁氏、伊藤 肇氏、小野和之氏、亀山幸弘氏から御教示いただきました。記して感謝いたします。

第3節 中世寺院址について

〈はじめに〉

本節では大御堂調査区で検出された寺院址について、立地・伽藍配置・出土遺物・建立及び廃絶の年代と社会的背景について若干の考察を加えてみたいと思う。特に、出土遺物は寺院址を傍証する最も有力な手掛かりとなることから、第III章第3節で報告した寺院址出土の遺物について、出土分布と出土状況から、寺院址遺構との関わりについて検討し、その年代観から寺院の創建及び廃絶、更にはその変遷についての考察を行い、寺院建立の背景と歴史的意義について検討してみたい。

1 寺院の立地について

寺院の立地条件を考えた場合に『好処』を選ぶということが国分寺造立の詔に見られる。この『好処』は、その理想的な地理的条件として「丘陵の扇状地帯に位置し、南方に平地をのぞむところであり」、これに風水の思想を取り入れると、「後方に山を負い、左右にも丘陵を配し、前面の平地に河川をのぞむ」、いわゆる四神相応の地ということになる。これが古墳の立地条件にも合致することはすでに指摘され、特に白石稲荷山古墳・七興山古墳等の存在から、鮎川流域がこうした条件の適地であることを物語っている。やや時代が下って、中世から近世にかけての城郭についても同様なことが言われる。古墳・寺院・城郭等のモニュメントとしての性格をもつものには共通して指摘し得る立地と言えよう¹。

大御堂寺院址は、鮎川左岸の沖積低地(下位段丘)面上にあり、鮎川川床面との比高差は現状では約6～7mである。沖積低地中央部付近には沢が北東方向に伸び、これと鮎川とに挟まれた低台地上に寺院は造られている。寺院は東に鮎川を臨み西に丘陵を背負うという形になり、前述の立地条件に適う。ここでは、縄文時代中期に敷石住居跡の検出があったものの、通常の居住の場としては背後に洪積台地が存在することとも併せて、基本的には集落に適した立地ではない。これは寺院廃絶後に農地としての土地利用がなされたことや寺院建立以前の遺構・遺物の検出状況からも判断できる。生活・居住の場というより生産の場にふさわしい立地条件であると言える²。

立地条件には地理的要素も重要であり、古代から駅や大道との関連が特に国分寺等の場合において強く認められる。大御堂寺院址の北約100mの所には国道254号線が通っており現在も主要交通幹線として機能している。この道筋は近世には姫街道と呼ばれ、中山道の裏街道として栄えた。一方、中世においては「鎌倉街道上道」の道筋³にあたり、鑄川の谷の出入り口として山間部と平野部とを結ぶ位置を占め、鮎川の渡河地点にあたるという点でも重要な場所であったと考えられ、交通の要衝であったと言える。遺跡の南方にある平井城⁶はやや時代の降る中世後半であるが、同様な立地条件に戦略的・防衛的な要素が加わったものと看取することができる。

2 寺域について

わが国の寺院は「占地として方形の平地がえらばれ」、「そこに南面して経営されている」ことが古代寺院等の発掘調査例から知られている。これは平安時代の山岳寺院においてはその形態が変わるものの、中世以降の平地寺院においては、依然として踏襲される形式である⁴。

大御堂寺院址においても発掘調査前の現況地籍図で、道路を境として一辺約120mの周辺の地割りととは異なった区画を認めることができる。さらにそこには寺院境内域を示すと思われるような小区画も見られ、そ

の中に「アミダイケ」も存在する。この地割りは発掘調査によって寺院の区画を踏襲したものであることが判明した。調査により確認された寺院址区画は、西に大御堂第1号濠と土塁跡、北に大御堂第3号溝状遺構、南に大御堂第13号溝状遺構、東に大御堂第14号溝状遺構が考えられる。南北については、藤岡市教育委員会の調査で大御堂第13号溝状遺構に平行する溝状遺構が南側にもう1条検出されており、これを加えて寺院址区画をなすと考えられる。

大御堂第1号濠跡・土塁跡・大御堂第2号溝状遺構・園池遺構東縁・大御堂第14号溝状遺構はその長軸方向をN-14°~15°-Eに揃えて平行して存在する。北側については大御堂第2号・第3号溝状遺構が北縁となる模様で、南縁の大御堂第13号溝状遺構及びそれと平行する溝状遺構を含めて考えると、南北は溝状遺構の外縁まで含めて約78mが、東西については第1号濠の中心線から大御堂第14号溝状遺構までで約81m(外縁を基準とすると84m)の方形区画にほぼ収まる。これを寺域と考えることができよう。

また、大御堂第2号溝状遺構は土塁跡とともにいわゆる境内地を区画する性格の遺構と考えられ、ほぼ南北に一直線である。この溝を基準として寺院境内地の縄取りが推定され、一辺が約57mの区画が想定され、境内地に該当するものと思われる。これをもとにすると第336図に示す寺域・境内地の区画が推定される。検出遺構の範囲からは大御堂寺院址の規模は東西84m、南北78mが計測される。

3 伽藍配置と検出遺構について

(1) 検出遺構と検出面

境内域内で検出された寺院に関する遺構は僅かに掘立柱建物跡2棟と井戸跡1基のみであった。しかし、寺院址の中央部で検出された大御堂第11号掘立柱建物跡は、この周辺に集中するピットで瓦が多く出土し、比較的大き目の破片であることから、瓦が廃棄されて後に意図的に入れられたものと考えられ、中世の寺院に伴うとは考えられない。大御堂第10号掘立柱建物跡は大御堂第2号溝状遺構の南西コーナーに沿って存在し、合理的な配置と考えられることから寺院に伴う建物である可能性が高い。

寺院址は鮎川崖から大御堂第2号濠跡までの微高地にあり⁵、検出面が最も高い位置は土塁跡上での浅間B軽石の自然堆積面で、標高106.80mである。このレベルが寺院建立時の旧地表面に近いと思われる。また、大御堂第2号溝状遺構の確認面は寺院建立時のレベルに最も近く、地業層あるいは基壇はこれより上のレベルと考えられる。その後の削平で寺院建築の遺構の痕跡をとどめるものは少ないが、園池遺構の検出は寺院址の性格を示唆するものとして重要である。また、南西部で検出された掘立柱建物跡群は、寺院址に関係するものであることはその位置と出土遺物から明らかである。これらの遺構をもとにして大御堂寺院址の性格について考えてみたい。

大御堂第1号濠跡から大御堂第14号溝状遺構までを寺域としたが、寺院址東部検出遺構として報告した大御堂第16号・第17号溝状遺構は、主軸方向が寺院址に伴うと考えられるものとはやや異なっており、大御堂第17号溝状遺構は方形区画をなすと見られ、その広がり方が東方に予想されるものの鮎川左岸の浸食作用によってかなり削られた結果が調査により明らかとなった。寺院建立時には鮎川の流路は現在より東にあり、寺院の東にこれとは別の遺構(区画)が存在していたことが大御堂第17号溝状遺構の形状から推定される。この溝からは土師質土器の出土が見られ、また、これを切って掘られている大御堂第16号溝状遺構では埋土上面で13世紀代の常滑製片口鉢が完形で出土している。大御堂第17号溝状遺構は寺院創建時に近い時期、大御堂第16号溝状遺構はこれを切っているが、ほぼ同じ位置で規模を大きくしたのと考えられ、大きな時間差は認められない。土師質土器と常滑製片口鉢の時間幅の中にこの2条の溝は構築されたと思われる。大御堂第

17号溝状遺構からは土師質土器・軟質陶器の小片が見られ、大御堂第2号溝状遺構とも共通する傾向を見せる。出土した土師質土器は時期的に大きな差は認められないが器形・胎土等では寺院址出土のものとは異なる傾向を見せる。土師質土器の分類と編年は別項で述べるが、ここで出土したものは在地的・伝統的要素の強いものであると考えられ、溝の年代は大御堂第2号溝状遺構等と大差の無いものと思われる。

大御堂寺院址が当初より寺院建立を目的としたものであったことは、中世以前の遺構と遺物がほとんど見られなかったことと、中世の遺物が寺院址に集中して検出されたことから明らかである。しかし、何もない所に忽然と寺院が建てられたとは思われず、周辺に寺院址以外の遺構が存在していた可能性は否定できない。調査区域の中では、寺院西側は洪積台地の段丘崖までが寺地の広がりとして推定され、ここで検出された溝状遺構・掘立柱建物跡群は、寺院と何らかの関係を持つものと推定される。寺院の南北については藤岡市教育委員会の調査で寺域を画する溝状遺構の一部が検出されたほかは見られず、寺院址東部で検出された溝状遺構に、別遺構の存在が想定される。特に大御堂第17号溝状遺構は寺院址区画の規格とやや異なる方形区画を構成すると思われるが、現状では半分以上が鮎川による浸食作用を受け滅失している。この遺構が、寺院址と同時期または先行するものと考えられる。

(2) 園池遺構について

「大御堂」という字名と寺域内に配された園池遺構から、大御堂寺院址はいわゆる「寝殿造式伽藍配置」の寺院と推定されるが、これは次のように説明される。

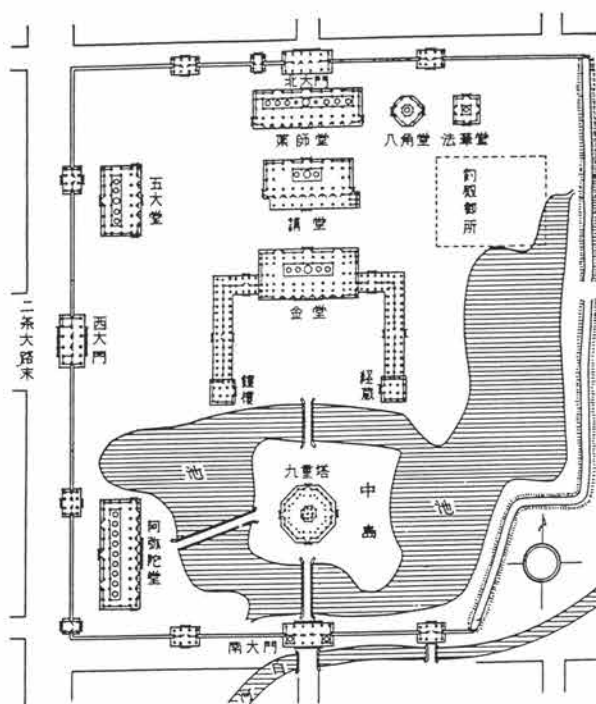
「藤原時代の貴族の住宅寝殿造を基にして作られた伽藍配置である。寝殿造りの主要建築である対の屋を仏の御堂とし、その北の対の屋を講堂にし前面に池を掘り中島を築き、中島に橋を架して南門に通せしめ、池の東西にある釣殿泉殿を鐘楼・経蔵に変改したものである。ただし当時は摂関貴族が仏門に入って入道と称することが多く、したがってその山荘を住宅兼用の仏舎として造営せられたことに起因するものと思われる。京都日野法界寺・浄瑠璃寺・大和忍辱山円成寺はこの系統のものと思われ、宇治平等院はこれをさらに変化させたものと言うべきである。この式伽藍配置は畿内より飛火して奥州平泉の毛越寺・観自在王院・無量光院・白水阿弥陀堂の造営となり、また、時代は降るが鎌倉二階堂、金沢称名寺伽藍もこの系統の伽藍配置と思われる。この式伽藍の流行は、上限は藤原時代に限られ、下限は金沢称名寺の例によって鎌倉時代中期頃までおよんだようである。」(石田茂作「伽藍配置の研究」『仏教考古学講座第二巻寺院』1984)

大御堂寺院址で確認された園池遺構は「アミダイケ」の名称が冠され、大正時代まで存続していたことが分かっている。園池遺構は中央部を土橋状に隔てられた南北二つの池からなり、それぞれの池に遣水施設と考えられる溝状遺構を伴い、暗渠や滝口施設と見られる遺構も確認されたことから、いわゆる浄土式庭園を模した遺構と判断され、中世に遡ることが考えられた。

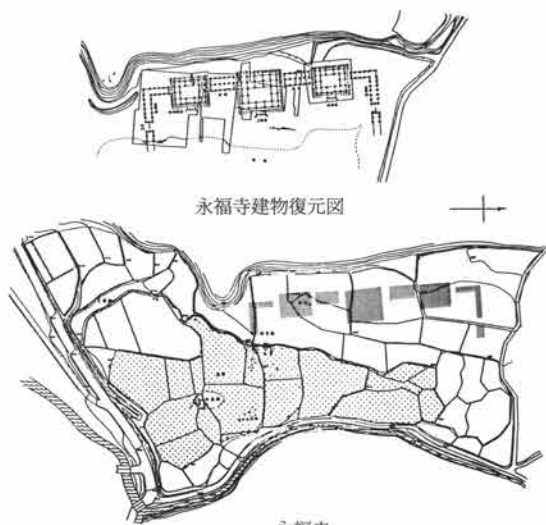
調査で最初に確認したのは池周縁部に見られる石垣列で、石垣列検出面での池埋土は②層〔浅間A軽石を主とする砂質土〕であり、この層中からは近世陶磁器類が出土している。石垣列は池修築工事によるもので、南北両池共に検出されている。近世遺物で時期の特定できる資料のうち最も古いものは肥前系の青磁皿の破片で、17世紀中頃(1630～1640)の生産年代が与えられる⁶。この遺物は、比較的安定した南池埋土③層〔黒褐色粘質土〕上面からの出土で、この面が石垣修築の時期の池底面と考えられる。また、出土陶磁器類は17世紀後半から18世紀中頃までの時期に集中し、この時期に寺院址が何らかの形で復興していたことが予想され、園池遺構も、石垣の積み方とその平面形状の特徴からいわゆる放生池に改変されたもの⁸と考えられる。この段階では園池遺構はすでに当初の掘り方よりやや狭い。近世の石垣列は、北池北縁・東縁、南池東縁・北西縁・南西縁で確認されたが、修築の時期と性格については差異が認められる。南池北部で石垣列が見ら

第41表 中世史年表・関連寺院一覧表

西 暦	記 事	寺 院	記 事
1016	藤原道長、摂政となる	東 三 条 殿	藤原良房邸にはじまり、道長・頼通らを経て、忠通の仁安元年(1166)焼亡
1051~87	前9年・後3年の合戦	堀 河 殿	藤原基経邸にはじまり、頼通・師実らを経て、保安元年(1120)焼亡
1086	院政始まる	法 成 寺	藤原道長、治安2年(1022)
1095	亡弊のため、上野国貢税を免除される	法 界 寺	藤原(日野)資業、永承6年(1051)
1108	浅間山噴火。上野大半を火山災害が襲う。浅間山南麓の水田の復旧は困難を窮めた。	平 等 院	藤原頼道、天喜元年(1053)(史跡・名勝T・11)
12世紀前半	女堀が開削される。疲弊した「こかんの郷ごう」の再開発がはじまる	高 陽 院	藤原頼道(992~1074)治安3年(1023)頃作庭
1114	藤原家綱、雑物押収により上野国司より訴えられる	法 勝 寺	白河天皇、承暦元年(1077)焼亡(1342)
1119	関白藤原忠実家の上野国荘園設立計画、院の反対で停止	鳥 羽 殿	応徳3年~保安4年(1086~1123)
1129	上野国司、火山灰降下によって貢税免除を申請	浄 瑠 璃 寺	嘉承2年(1107)阿弥陀堂建立、久安6年(1150)恵信、作庭(特別名勝・史跡S, 60)
1131	高山御厨、成立	法 金 剛 院	待賢門院、大治5年(1130)作庭(特別名勝・青女滝・附五位山、S, 62)
1141以前	安楽寿院領土井出・笠科荘、成立	円 成 寺	寛遍僧正、仁平3年(1153)作庭(名勝S, 48)
1156	蘭田御厨、成立	平 泉 中 尊 寺	藤原清衡、長治2年(1105)~大治元年(1126)建立
1157	金剛心院領新田荘、成立。新田義重、下司となる	平 泉 毛 越 寺	藤原基衡、久安6年(1150)頃(特別名勝S, 34、特別史跡S, 27)(1226)炎上
1159	安楽寿院領下野国足利荘、成立	平 泉 親自在王院	藤原基衡妻(特別史跡S, 27)
1167	平清盛、太政大臣となる	平 泉 無 量 光 院	藤原秀衡(特別史跡S, 30)
1173	新田義重、蘭田御厨と相論	い わ き 白 水 阿 弥 陀 堂	藤原基衡娘徳尼、永暦元年(1160)建立(史跡S, 41)
1175	高山御厨、武蔵児玉荘と相論。これに宣旨が下る	京 都 法 住 寺 殿	後白河上皇、永暦2年(1161)
1180	新田義重、平家方として帰国し、源頼朝の挙兵に应ぜず寺尾(高崎)で自立の動き	鎌 倉 永 福 寺	源頼朝、堂前に池を掘り、静玄を召して石立てする
1189	高山重久(重昭改)、比企能員に属して泰衡討伐に従軍	北 山 殿	西園寺公経創建(現、鹿苑寺)
1190	小林次郎、頼朝上洛の随兵に加わる	金 沢 称 名 寺	金沢貞頼のとき伽藍完成、性一法師作庭「称名寺絵図」成る(1323)
1192	源頼朝、征夷大將軍となる	足 利 鏡 阿 寺 大 御 堂	(1229)上棟
1195	源頼朝東大寺供養の随兵に小林次郎、同三郎が加わる	尊 勝 寺	焼失(1314)
1221	承久の乱起こる	最 勝 寺	焼失(1314)
1221	徳川義季、世良田に長楽寺を創建	世 良 田 長 楽 寺	栄朝、創建(1221)
1224	北条泰時、執権となる	臨 川 寺	被災(1361)
1274	モンゴル襲来(文永の役)	足 利 法 楽 寺	足利義氏、建長元年(1249)建立
1281	モンゴル襲来(弘安の役)	足 利 智 光 寺	足利泰氏、文永2年(1265)建立
1333	鎌倉幕府滅亡		
1333	新田義貞、生品神社(新田町)に挙兵し、鎌倉を攻める		
1334	建武の新政		
1335	上杉憲房、上野国守護となる		
1338	足利尊氏、征夷大將軍となる		
1338	新田義貞、敗死		
1454	享徳の乱起こる		
1467	応仁の乱起こる		
1469	金山城(太田市)、岩松氏によって築城		
1476	白井城主長尾景春、関東管領の就任を阻まれ反乱、上野各地で戦いが起こる		
1526	このころ長野氏、箕輪城(箕郷町)を築く		
1552	関東管領上杉憲政、平井城を捨て、越後の長尾景虎を頼る		
1556	武田信玄、箕輪城を攻略		
1573	室町幕府滅びる		
1582	本能寺の変		
1582	滝川一益、厩橋城(前橋市)に入る		
1585	豊臣秀吉、関白となる		
1590	後北条氏降伏		
1590	名胡桃城(月夜野町)、後北条方に落とされる		
1600	徳川家康、箕輪に井伊直政、館林に榊原康政、厩橋に、平岩親吉などを封じ、関東北辺を固める		
1600	関ヶ原の戦		
1603	徳川家康、征夷大將軍となる		



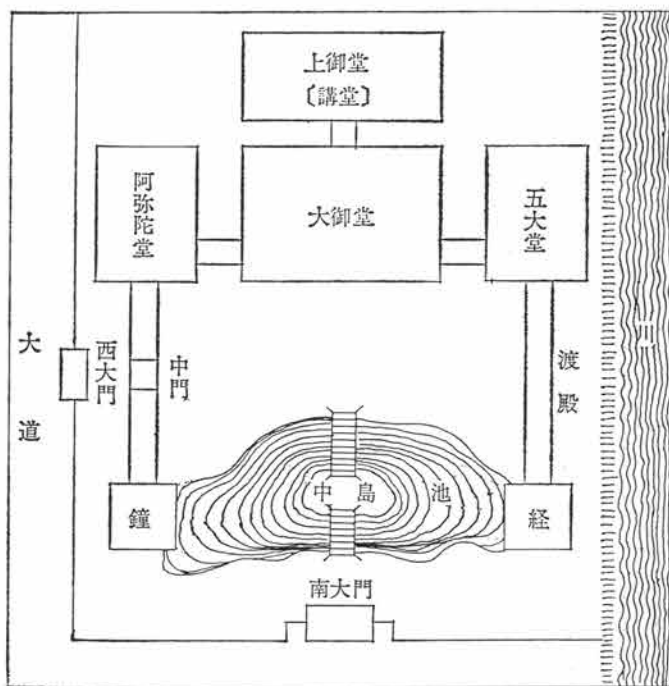
法勝寺復元図



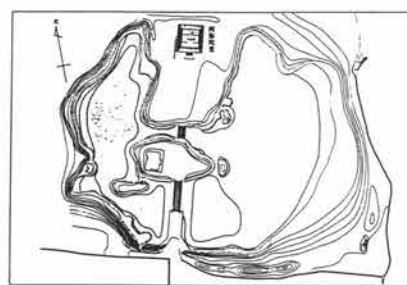
永福寺



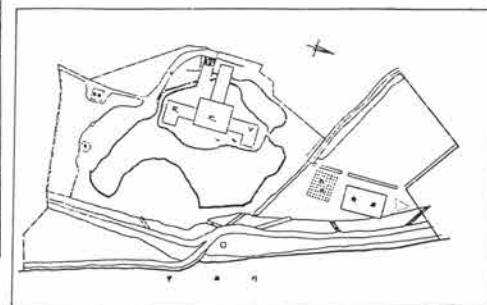
無量光院



法成寺復元図

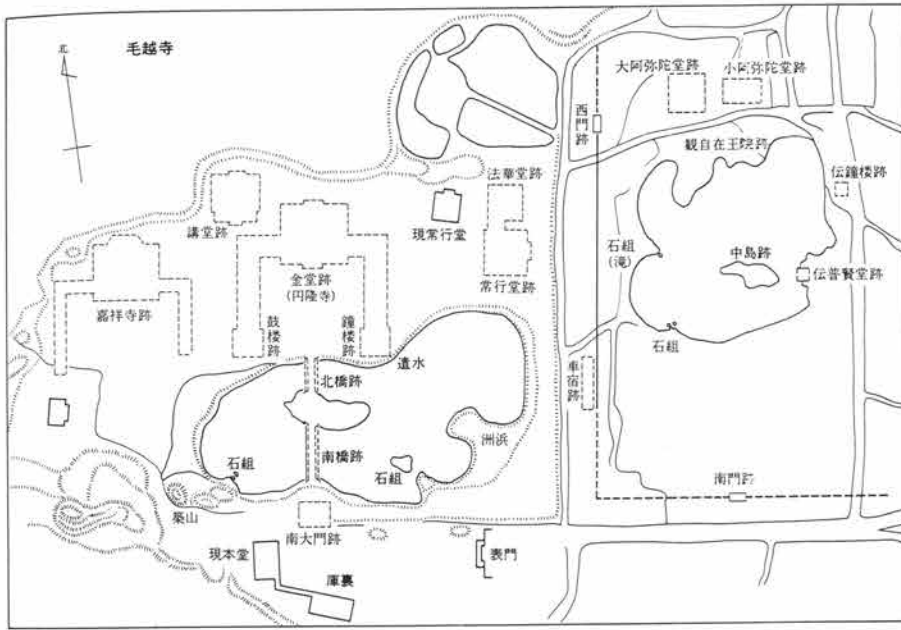


白水阿弥陀院

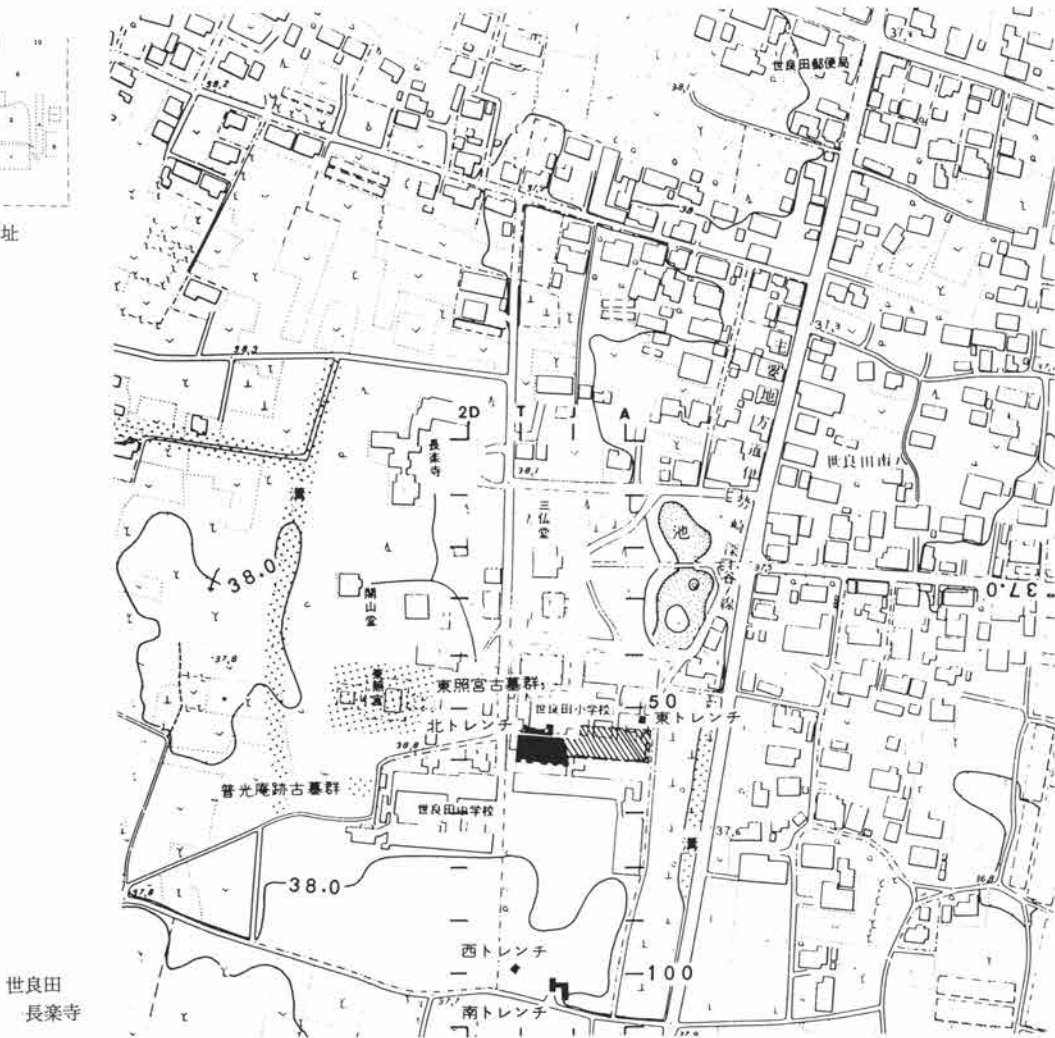


平等院庭園

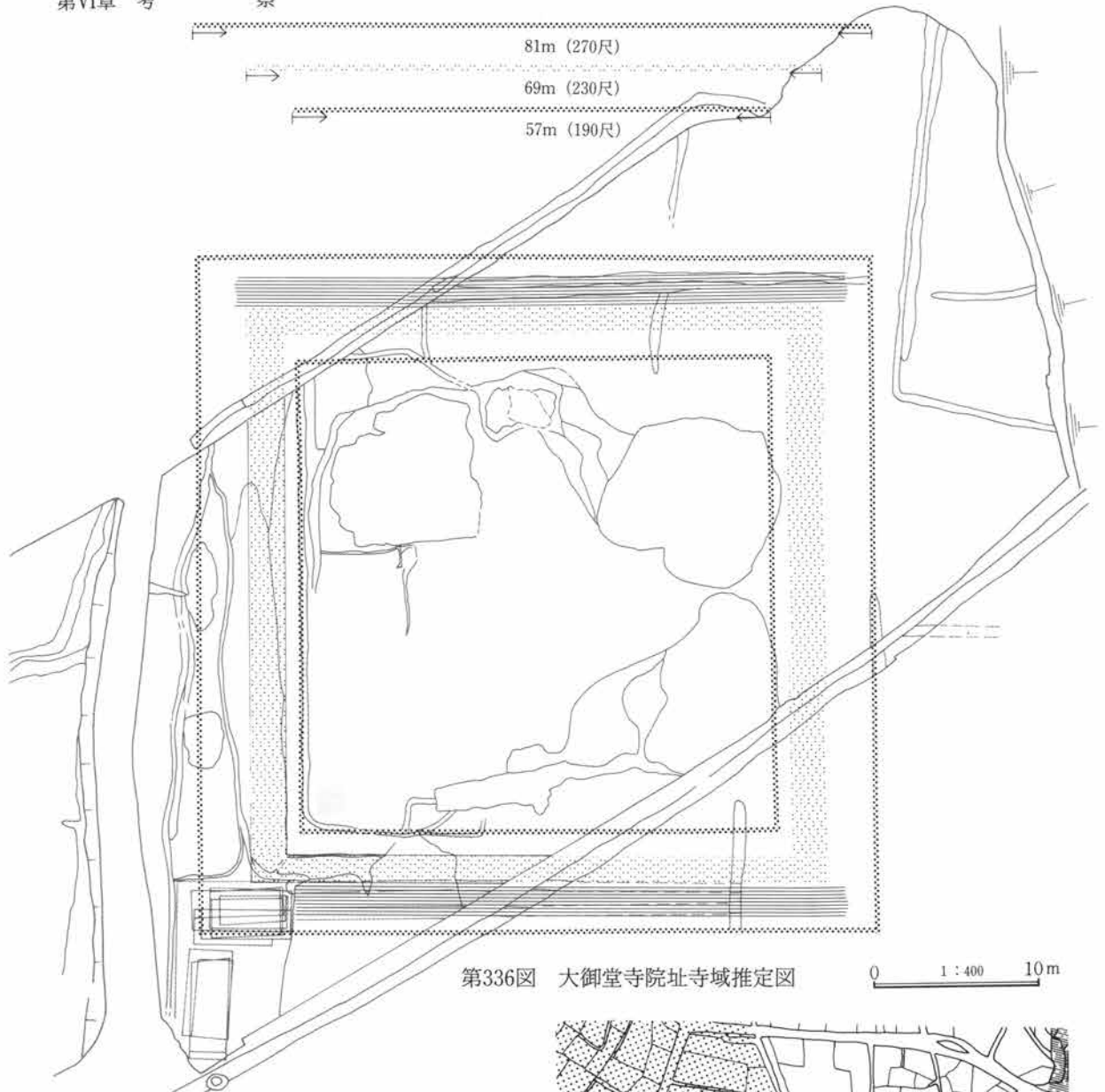
第334図 臨池伽藍寺院遺構集成図(1)



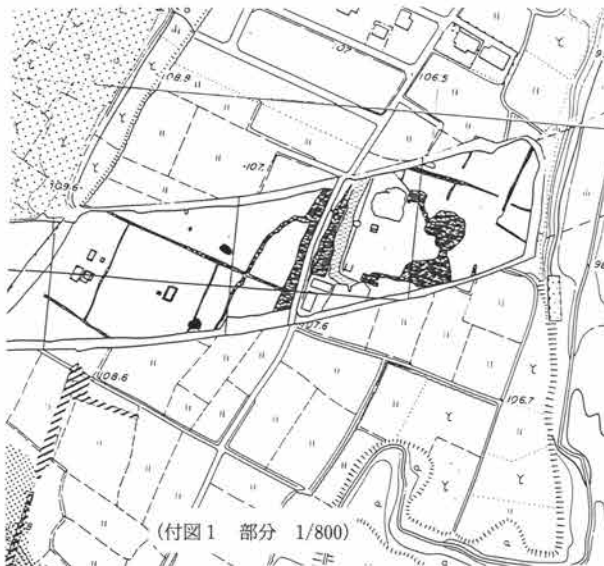
毛越寺・観自在王院復元図



第335図 臨池伽藍寺院遺構集成図(2)



第336図 大御堂寺院址寺域推定図



れず、崩落に近い状況の円形掘り込みと、池底面まで埋土①・②層が確認されることから、北西縁石垣列修築以降の比較的新しい時期の造作であることは明らかである。北池北縁・東縁の石垣列は北池北東隅から東にのびる近世溝状遺構と一連のもので、前述の南池北西縁の石垣列よりやや時代の下るものと推定される。南池東縁の石列も同様と考えられる。

近世以前の園池遺構の形状は、南池北西部の石垣列下の掘り方面検出作業で、埋土③・④層が石垣列の下に堆積しているのを確認し、古瀬戸の梅瓶の出土もあって中世面の残存部分と判断した。この面は近世の石垣列に示された池汀線より2m程度広がり、この間は緩やかな傾斜面で小礫が敷かれ、洲浜状の造作がなされたものと推定された。北池では池の西縁が緩やかな傾斜面となり上端の確認が困難であったが、これも南池と同様の遺構の性格に因ると思われる。浄土庭園の造りとしては、白水阿弥陀堂¹⁰や称名寺¹¹に見られる例に似て、東方より池をまたいで西方の阿弥陀堂（大御堂）を拝したものと推定され、洲浜となる部分は堂宇全面の園池遺構西縁である。世良田の長楽寺¹²にも勅旨門を入った所に園池が広がり、同時期に造られたものの遺構として近似した特徴が認められる。調査前の地籍図では東方より池に向かう道路が確認され、これは近世段階での参道である可能性が高く、北池と南池との間の土橋部分まで確認でき、ここから寺院部分と考えられる。寺院址中央部で検出された大御堂第11号掘立柱建物跡はこの延長線上にあたるので、『元禄村絵図』に記載された小堂宇である可能性が高い。この建物周辺のピットから瓦類の出土が見られることから、寺院廃絶後の多少時間を隔てた時期と考えられる。

園池遺構での遺物出土の傾向を見ると、近世陶磁器類が寺院址内では最も多く出土していることが分かる。これは埋土①・②層中からの出土で、埋土③・④層中からの中世陶磁器類の出土とは明らかに傾向を異にし、池が近世以降も維持され続けて来たことを証明している。北池での最上層の埋土①層中からは明治に入ってから陶磁器類の出土も見られ、大正時代に池を埋めたという話を出土遺物からも裏付けている。

南北それぞれの池への暗渠施設を伴う遣水遺構の確認も行われた。園池遺構は寺院建立当初より設計され存在したものと認められ、その形式が「浄土式庭園」にあたると思われる。池には洲浜が確認され、遣水は南北共に段差を設けて滝口を作り、南池滝口には立石を配したことが推定される。大御堂第11号溝状遺構から大御堂第12号溝状遺構に続く部分で長さ120cm、幅45cm、厚さ35cmの牛伏砂岩製の大石が検出され、同様な砂岩が数個まとまってあったことから判断した。大御堂第12号溝状遺構は埋土下層からは瓦類を主として、多くの遺物が出土している。しかし、ここに近世陶磁器類は見られず、埋没の時期が中世に遡ることが考えられる。

大御堂第11号溝状遺構は南池遣水遺構では最も新しい時期と見られるが、これを切って大御堂第2号土坑墓が作られ、副葬された土師質土器が15世紀後半から16世紀にかけてのもものと見られるので、遣水遺構の埋没はそれ以前の時期であると思われる。したがって、大御堂第12号溝状遺構の埋没もこれと同時期であり、15世紀前半にはすでに形状をとどめていなかったものと考えられる。

(3) 寺院の復元

建物推定位置は遺構検出状況と瓦分布状況から土塁跡・大御堂第2号溝状遺構と園池遺構との間と思われ、東面する建物が想定される。南面する建物を仮定した場合には、大御堂第7号溝状遺構よりは北に位置し、その場合には大御堂第3号・第4号溝状遺構をまたぐか、又は、その北側ということになる。しかし、この場合には確認された寺域外となり、園池遺構との関係もそぐわない。また、瓦出土状況も北側での建物の存在を示唆しないと判断され、大御堂寺院址における建物は池を正面とするものと考えられる。阿弥陀堂建築は平安時代中期の比叡山の常行三昧堂をその起源とし、方3間ないし方5間を基本とするが、平等院鳳凰堂・

毛越寺¹³・永福寺¹⁴などに見られる翼楼付き二階堂形式、浄瑠璃寺に見られる九体阿弥陀堂形式等も知られる。多量の瓦類の出土は、瓦葺き建物の存在を意味し、その内容に胎土・焼成・大きさ等の異なるA・B類二種が見られ、出土分布に2種が偏在する傾向も認められたことから、時期を隔てた葺き替え又は建て替え、あるいは別棟の建て増し等を示唆すると思われる。建物構造については、A類鬼瓦に大棟・降棟用との二種類が見られ、入り母屋若しくは寄せ棟形式の屋根であったことが推測される。また道具瓦に小型の瓦が認められ、数種の建物があったことを窺わせる。

建物基壇は既に削平されたものと思え、礎石の確認もできなかったが、建物基壇に使用されたと思われる砂岩製の切石が寺院周辺から馬入れ・水路等に転用された形で出土している。いずれも断面では30cm×15～20cmの方形に揃っており、最も長いもので120cmを計る。6個確認し、いずれも牛伏砂岩である。2点については地覆石と見られ、表面に当たる部分が特に丁寧に仕上げられている。こうした状況から遺構検出はなかったものの、園池遺構に面して大御堂（阿弥陀堂）とされる建物があったことが推定される。園池遺構から第1号濠跡までの間に主要堂宇があったものと思われ、瓦類の出土分布が土塁の東面に南北に広がりを見せることから、南北に長い構造であった可能性が考えられる。

土塁跡は浅間B軽石の自然堆積面上で二次堆積と見られる黄褐色粘質土が薄く確認され、土塁跡の残存部分と判断した。また、この面は寺院創建時の地表面に最も近い面と見られ、大御堂第1号濠の掘削土を積み上げたものと推定される。濠については掘り方がやや不整であるが、本来は南端で確認されたように明瞭な方形掘り方であったと推定され、埋土の状況からは空堀であったと思われる。濠内土坑は濠掘削時の祭祀遺構と判断され、出土遺物は祭祀時の一括廃棄と見られ、大御堂第2号溝状遺構出土のもの併せて寺院創建時の遺物と考えられる。

(4) 類例資料との比較検討

園池遺構を伴う庭園例は飛鳥時代にまで遡ることができるが、発掘調査により確認された例としては平城京内の左京三条二坊六坪の曲水の造園例が知られる。平安時代前期には自然湧水を利用したものが「神泉苑」などを代表例として造営される。大御堂寺院址はいわゆる浄土庭園の園池遺構を配した寝殿造系伽藍配置の寺院と考えられるが、この形式は「東三条殿」に代表される平安時代の貴族の寝殿造形式の住宅の庭園に起源をもち、平安時代後半にはいってこれらの住宅が寺院として造営されるに従い、臨池伽藍配置という形式が完成される（第41表参照）。平安時代後半に京都・畿内に始まり、東国へは奥州平泉を経て伝播したことが知られ、鎌倉時代にかけて盛行する。鎌倉時代の中頃には禅宗系の林泉寺院伽藍配置が見られるようになり、園池の規模や形状に変化が見られる。これは室町時代に盛行し、その特色は室町初期までは浄土式庭園の影響下にあるが、中期以降に面積の縮小、水利用の困難などが原因して表現の簡素化、意匠の象徴化が認められる¹⁶。

11世紀代に京都ではじまる寝殿造式伽藍配置の寺院造立は12世紀代に奥州平泉に及び、奥州征伐を機に関東地方にも及ぶ。京都での造寺が摂関家を中心とする権門勢家によるものであり、奥州でのそれが藤原氏を背景としたように、東国においては荘園を基盤とする武士勢力の台頭が、源頼朝の武家政権の確立を契機として、御家人層の中での造寺につながるものと理解される。現存又は調査により明らかな類例寺院としては、上野国世良田長楽寺、下野国足利智光寺¹⁷、同法界寺、相模国二階堂永福寺、武蔵国金沢称名寺¹⁸、伊豆国韭山願成就院等¹⁹が知られる。永福寺は源頼朝が奥州征伐を機に平泉で見聞した中尊寺・毛越寺などの精舎を模して造られたことが知られ、創建が文治5年（1189）で応永12年（1403）に炎上消失し、その間に何度か罹災・復興を繰り返していることが記録に残っている。平泉における寺院造立が京都・畿内における文化の移植と

いう性格を持ち、東国での諸例は、頼朝による勝長寿院・二階堂永福寺の建立を契機として武士階層にも広がりを見せる阿弥陀堂建築の流れの中に位置付けられる。永福寺着工と同じ年に北条時政による願成就院の建立を初めとして、足利氏・新田氏など鎌倉幕府の有力御家人による造寺が12世紀末から13世紀代にかけて見られ、大御堂寺院址もそうした流れの中に位置付けることができる。藤岡市とは神流川を挟んだ埼玉県児玉郡上里町にも大御堂の字名が残り、ここには幕府の御家人安保氏の館跡²⁰とともに寺院址の存在が知られ、地名が寺院に由来するなら本遺跡と同様のものと類推できる。

4 出土遺物について

大御堂寺院址からは多種多様の出土遺物が見られた。その多くは寺院に直接・間接に伴うものと考えられ、明確な寺院遺構が検出されない中で、出土遺物は寺院の年代と構造を明らかにするうえで重要である。ここでは寺院址内における各遺物の出土傾向とその年代についての考察を加えることとする。

(1) 瓦類

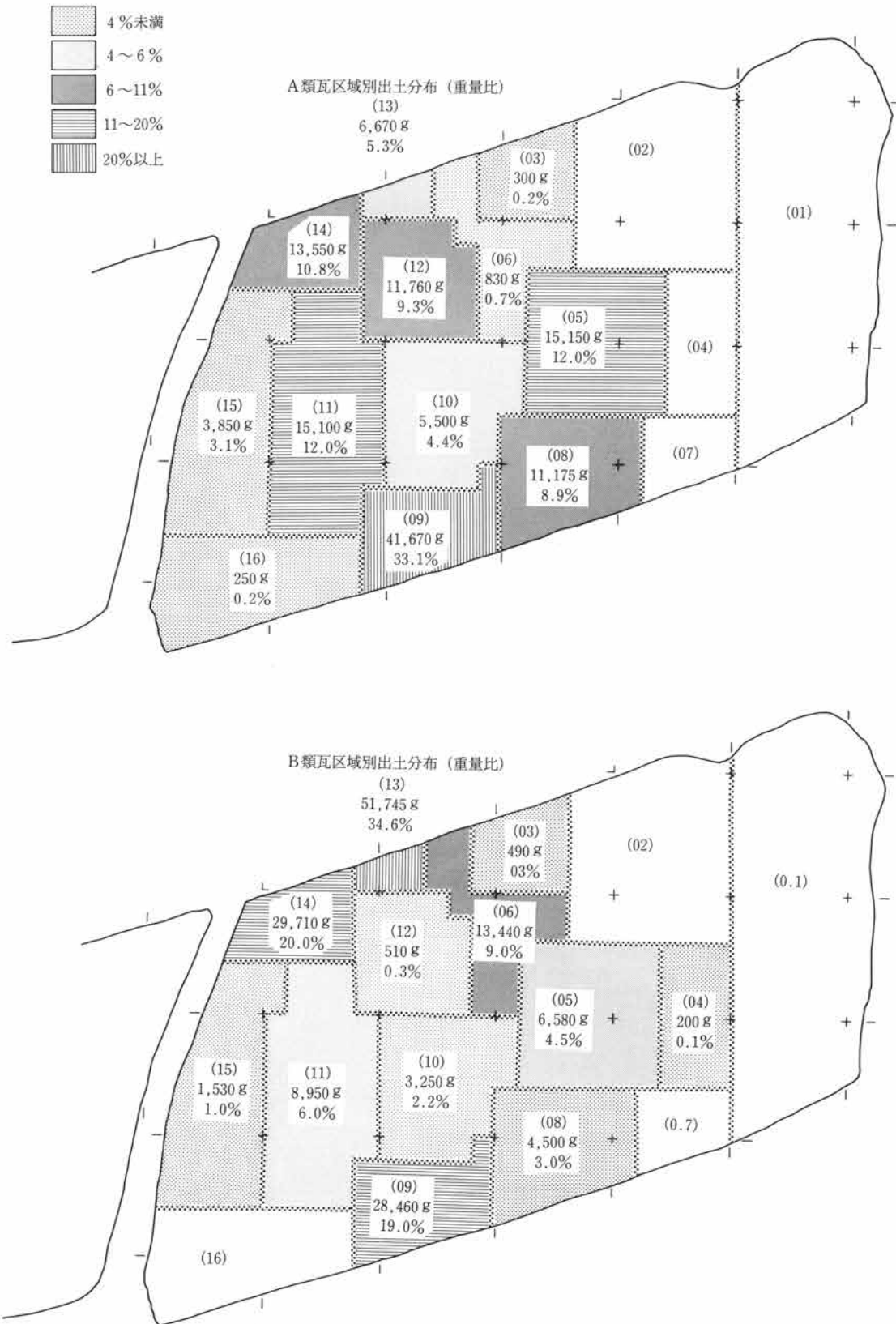
大御堂調査区の中世寺院址で最も多く出土した遺物は瓦である。そして、この瓦は胎土・焼成・大きさ等の相違からA類とB類の2種類とに分けられた。A類瓦とB類瓦の相違点として胎土の選択と焼成方法に明瞭な差が認められ、技術的系譜が異なることが指摘できる。基本的には瓦工集団の相違としてとらえられよう。遺構としての寺院建築物が検出されない中で、瓦の出土はその存在を直接的に証明できる遺物である。瓦は寺院創建にかかわる遺物であるが、A類とした瓦がこれにあたる考えた。また、B類瓦はA類瓦とは明瞭な差異が認められ、技術的系譜の相違を示すと同時に、生産・使用年代の時間差を示すか、使用建物の相違を示すかのいずれかと考えられた。

出土瓦の総量は約275kgで、A類瓦とB類瓦の比率は46：54である。寺域面積約6500m²（一辺81mの方形区画）、そのうち境内域面積約3200m²（一辺57m）である。南西部で掘立柱建物跡群が検出されているがここではほとんど瓦は出土せず、この建物は瓦葺きではなかったことが推測される。大御堂第1号濠跡にあたる寺院西部での出土量も少ない。また、園池遺構の東側及び寺院北部からの出土例も殆ど無く、瓦の分布範囲は寺院址境内域にほぼ一致すると考えられる。この範囲はほぼ90%が調査区域内であり、削平がほぼ一様に進んでいるとすれば、地区別の出土分布も建物位置を示唆する内容を含むと考えられよう。

A類瓦は南池西で約 $\frac{1}{3}$ の出土が見られるが、ほとんどは大御堂第12号溝状遺構の埋土中からである。南池・北池・中央B・中央C・北西部Bでそれぞれ10%前後で比較的四至に分散する出土傾向を示す。B類瓦では北西部の瓦溜まりに分布の中心があり、全体の55%が集中する。同じ区域でA類瓦が16%の出土量であることと比較しても顕著である。次に多いのが南池西での19%で、遺構の深さや埋没土の残存状況とはあまり関係なく、むしろ北と南に偏在する傾向を示す。A類瓦との分布の層位は使用建物の相違を意味し、創建時とは別の棟に使用された事が、出土分布の偏在傾向から推定される。

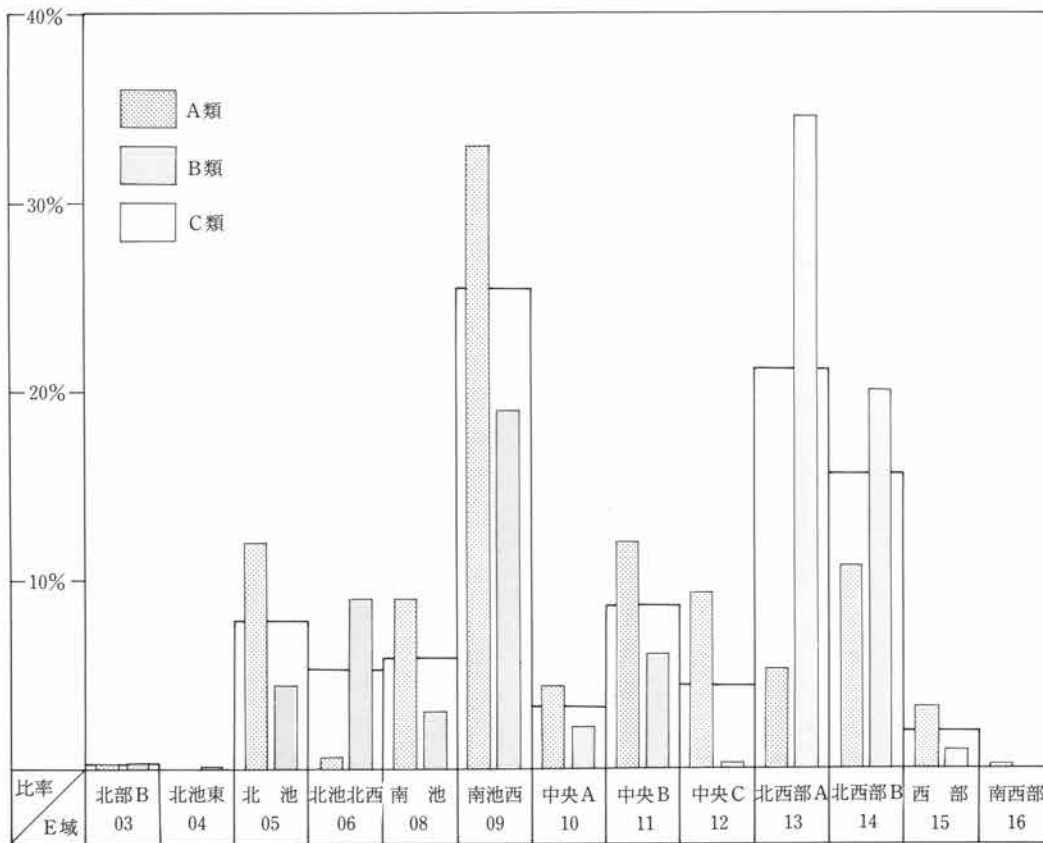
確認された瓦当範種は4型式に分類され、①瓦当文様、②瓦の成形技法等の相違点及び特徴は次のように整理される。

型式分類	胎土	焼成	色調	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦平瓦	時期
I A ₁ 類	微粒砂	酸化焰・燻	明赤褐色	左三巴文	連珠文	丸凹：布目	13c～
II A ₂ 類	細粒砂	酸化焰・燻	鈍い赤褐色	複弁蓮華文	宝相華唐草文	平凸：鋸齒状叩き	13c～
III B ₁ 類	細粒砂	還元焰	灰色	左三巴文	均正唐草文	丸凸：縄叩き	14c～
IV B ₂ 類	中粒砂	還元焰	暗灰色	右三巴文	均正唐草文	平凸：二条線	14c～



第337図 大御堂寺院址遺物分布図(1)一瓦一

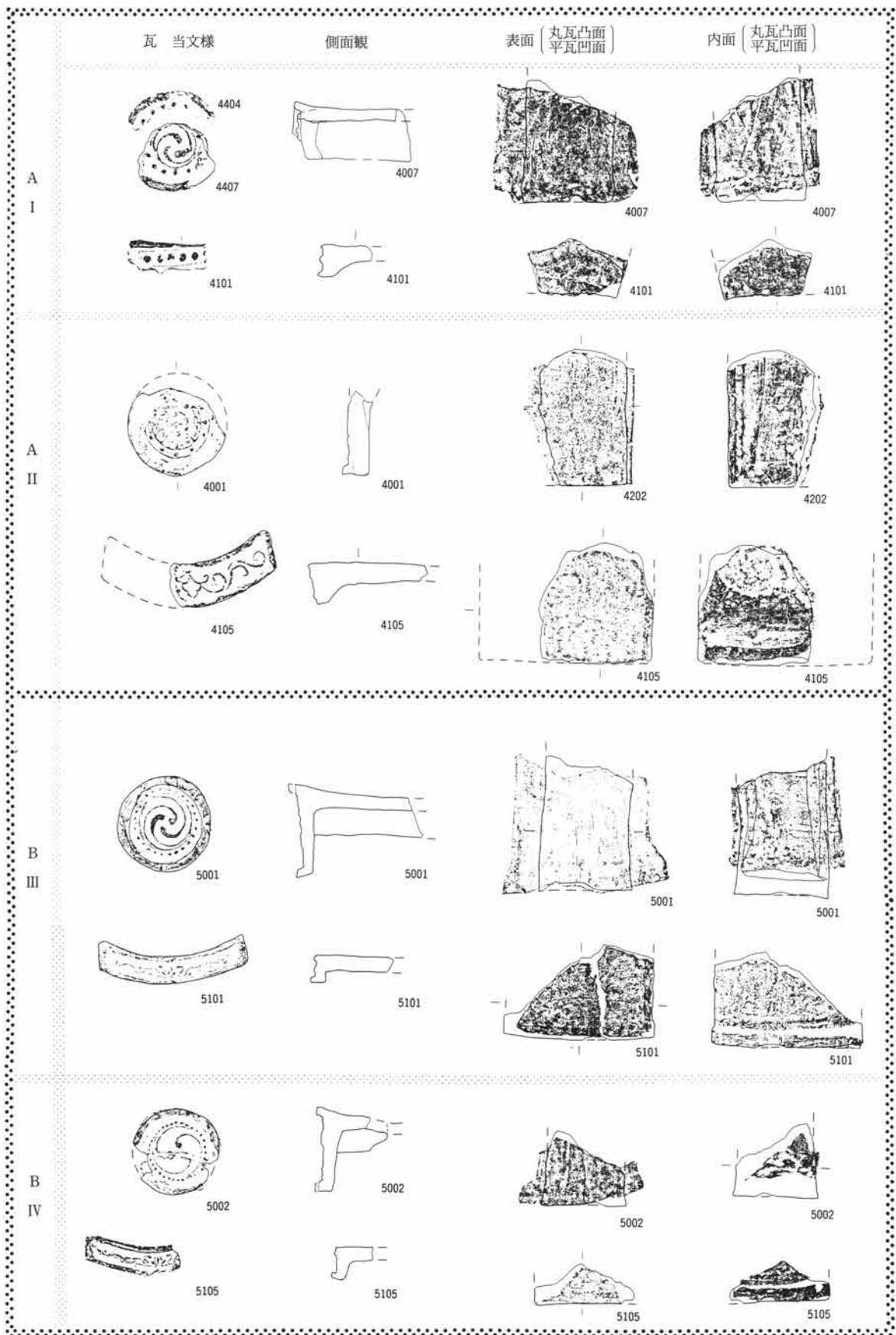
第3節 中世寺院址について



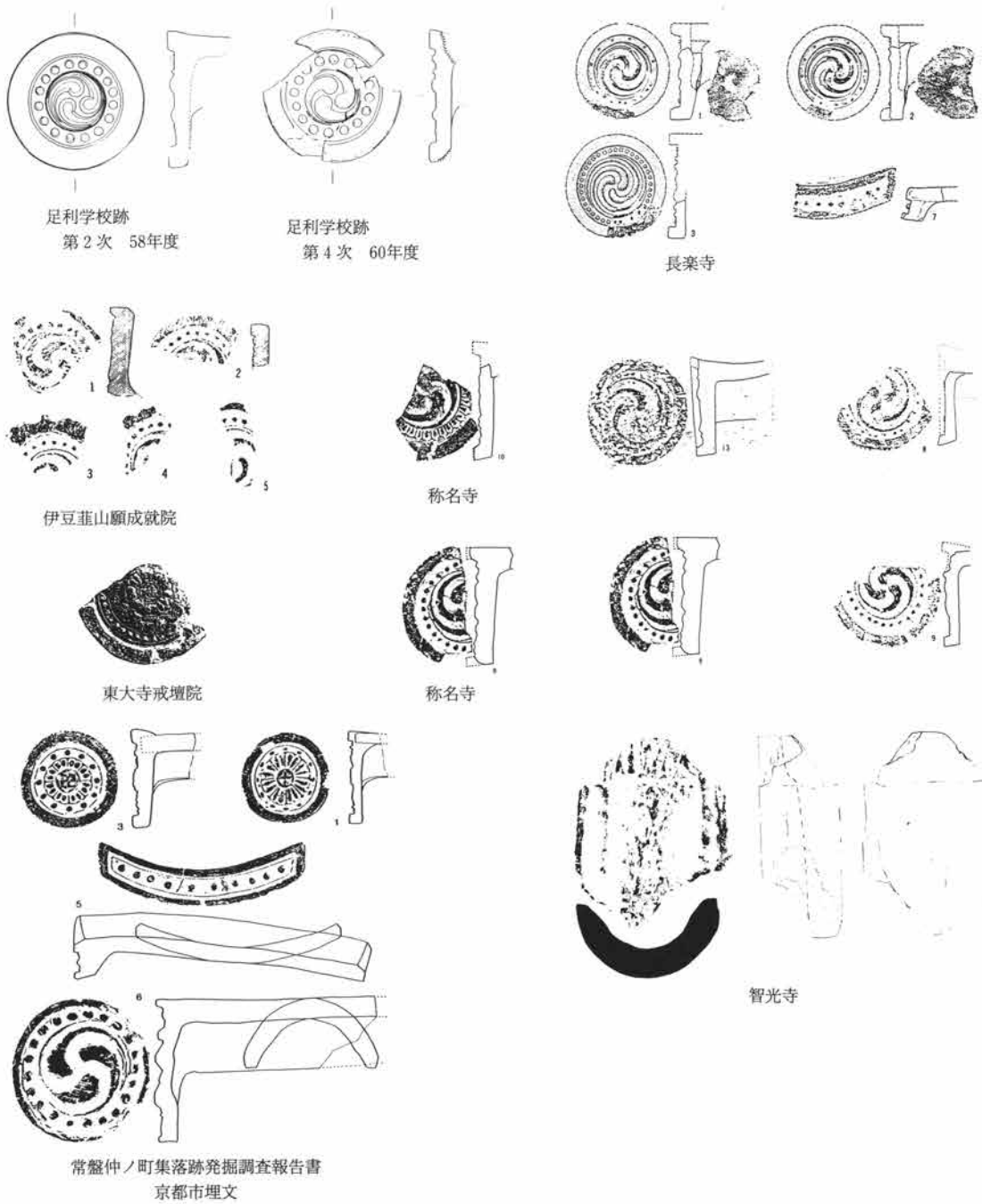
第42表 大御堂寺院址出土瓦種類別総量一覧表

単位g ()内は個数

区域 種類	03	04	05	06	08	09	10	11	12	13	14	15	16	合計
A 類	軒丸		150 (2)	600 (2)	120 (2)	1,250 (2)			260 (3)	700 (2)				3,080 (13)
	丸	100 (1)	1,800 (16)		1,050 (20)	2,650 (22)	550 (3)	750 (8)	1,250 (11)	1,250 (8)	2,000 (14)	300 (4)		11,700 (107)
	軒平				940 (4)	2,000 (4)	1,650 (3)		1,250 (2)	420 (3)		200 (1)		6,460 (17)
	平	200 (5)	13,200 (136)	100 (10)	9,000 (192)	28,590 (252)	3,300 (37)	12,400 (218)	9,000 (122)	4,300 (23)	11,550 (111)	3,350 (36)	250 (3)	95,240 (1,145)
	鬼			130 (1)	65 (1)	7,180 (15)		1,950 (1)						
A類計	300 (6)		15,150 (154)	830 (13)	11,175 (219)	41,670 (295)	5,500 (43)	15,100 (227)	11,760 (138)	6,670 (36)	13,550 (125)	3,850 (41)	250 (3)	125,805 (1,300)
B 類	軒丸		200 (1)	300 (2)		220 (1)				600 (7)	300 (3)			1,620 (14)
	丸	110 (3)		2,830 (22)	4,620 (23)	1,700 (11)	11,230 (36)	1,100 (1)	2,100 (21)		15,750 (133)	6,400 (57)	280 (2)	46,120 (309)
	軒平		400 (3)	100 (1)	100 (1)	2,510 (7)	1,450 (3)	450 (2)		1,010 (4)	200 (2)	300 (2)		6,520 (25)
	平	380 (4)	3,050 (34)	8,720 (45)	2,700 (21)	13,300 (64)	700 (4)	6,400 (59)	510 (9)	34,000 (323)	22,810 (241)	950 (8)		93,250 (812)
	鬼					1,200 (1)				385 (2)				1,585 (3)
B類計	490 (7)	200 (1)	6,580 (61)	13,440 (69)	4,500 (33)	28,460 (109)	3,250 (8)	8,950 (82)	510 (9)	51,745 (469)	29,710 (303)	1,530 (12)		149,365 (1,163)
A・B類 合計	790 (13)	200 (1)	21,730 (215)	14,270 (82)	15,675 (252)	70,130 (404)	8,750 (51)	24,050 (309)	12,270 (147)	58,415 (505)	43,260 (428)	5,380 (53)	250 (3)	275,170 (2,463)



第338图 大御堂寺院址出土瓦当文様分類図



第339図 中世瓦集成図

軒丸瓦の瓦当文様は巴文と復弁蓮華文の2種が見られる。巴文は平安時代末に始まり中世以降に一般化する瓦当文様で、A₁類・B₁類・B₂類に見られる。いずれも三つ巴文であるが頭の形や尾の長さ、内区と外区との間に見られる圏線の有無、外区に配された連珠の大きさ・個数、瓦当径に対する内区比等から次のような差が認められる。巴文自体の形式的変遷をたどることは難しいが、本寺院址出土瓦に見られる巴文の変遷の一般的傾向としてはA₁類→B₁類→B₂類の形式的変化が考えられるが、A₁類とB₁類・B₂類との巴文の相違はA類瓦とB類瓦の相違を反映したものととらえられ、B類内での相違は意匠上のもので時期差を示すものとは考えられない。

複弁蓮華文はA₂類に見られる。その特徴は内区を4分割して8葉の複弁の蓮華を配し、凸式中房内に「十」字を陽刻で表す。複弁は比較的短く、複弁蓮華文の系譜の中では比較的后出するものと見られる。

種 別	巴の種類	頭 の 形 状	尾 の 特 徴	外区の連珠(数)	圏線	瓦当径・内区径・比
A ₁ 類	左三巴文	頭部は平坦で幅広	やや短く圏線に接す	径8mm・粗(14)	有	130mm 62mm 0.48
B ₁ 類	左三巴文	頭部は平坦で幅広	長く圏線に接す	径6mm・密(26)	有	132mm 79mm 0.60
B ₂ 類	右三巴文	頭は円形で大きい	長く互いに接しない	径5mm・密(35)	無	120mm 68mm 0.57

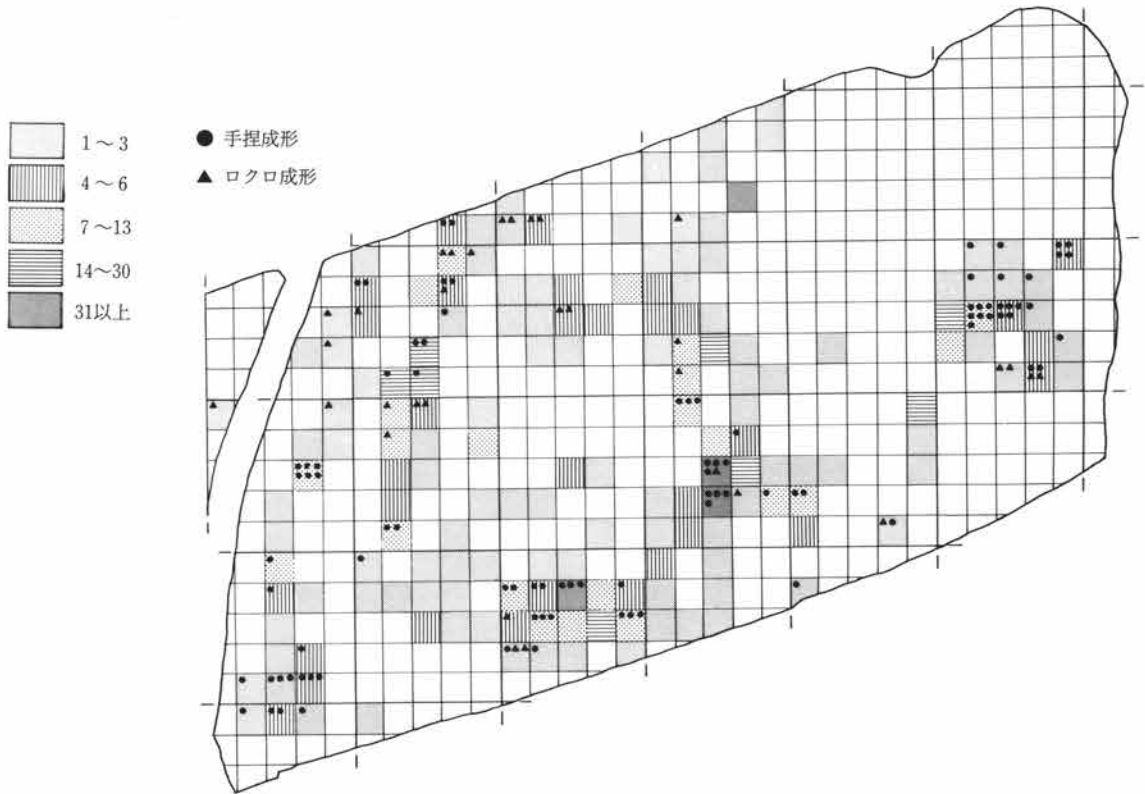
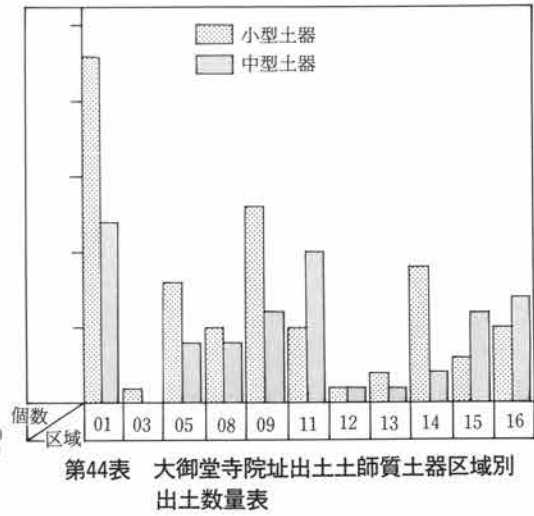
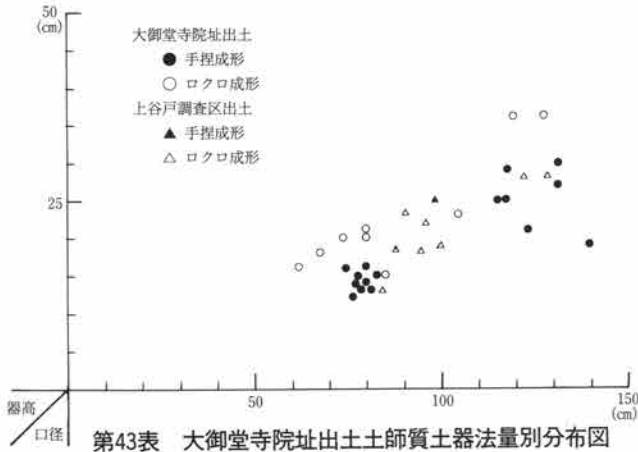
軒平瓦はB類においては範種が均正唐草文のみであるが、A類においては連珠文と宝相華唐草文との2種が見られる。これはA類軒丸瓦の2範種に対応するものと見られ、胎土と焼成の特徴からI型式(A₁類)とII型式(A₂類)の組み合わせになるとと思われる。また、B類に於ける組み合わせは巴文軒丸瓦と均正唐草文軒平瓦である。B₁類とB₂類の軒平瓦の範種が同一であり、B類軒丸瓦は5001以外はすべてB₂類であることから型的には1種類と見たほうがよいかもしれない。

技法的な特徴としては、軒丸瓦に於ける瓦当裏面の調整がA₂類では押えの粘土がやや厚く、指押えによる調整痕が見られる。A₁類は裏面が剝離して不明であるが、A₂類と同様の調整かと思われる。B類では瓦当面は薄くなり、裏面はヘラで平坦に、端部は直角に調整され、A類における指押えとは異なる。軒平瓦では瓦当部と平瓦部の接合方法に特徴が見られる。A₁類の連珠文では顎貼り付け、A₂類の宝相華唐草文では顎折り曲げが、B類の均正唐草文では顎折り曲げ、または瓦当部・平瓦部の両端を斜めにカットした後に接合するという技法が見られ、顎貼り付け→顎折り曲げ→端部斜めカット後接合という変遷が認められる。

以上の特徴から、大御堂寺院址の瓦類はA類瓦が13世紀代、B類瓦は後出する要素を認めることから14世紀代と考えられよう。巴文による類例比較は困難であるので、複弁蓮華文から系譜をたどると、類例資料として京都府の臨川寺境内遺跡出土例・常盤仲ノ町集落遺跡出土例に近似した特徴が認められる²¹。軒平瓦の連珠文や顎貼り付け技法とともに、鎌倉前期の特徴が認められ、13世紀前半から中頃を創建時期と推定できよう²²。

発掘調査による中世瓦の出土例は平安京・南都の畿内地域、平泉、鎌倉などで知られる。古代においては寺院のほかに官衙からの出土もあったが、中世にはほとんど寺院に限られる。これらの寺院は『八宗体制』または『顕密体制』と呼ばれる荘園を経済的基盤とした中世的な色彩の濃いものへ再編成される過程²³ではその中心となった南都・北嶺の諸寺院の影響下に造営されたものと考えられる。造瓦に関してはその需要が寺院からのもので有り、瓦工人集団は有力寺院に所属して活動していたものと思われる。したがって仏教文化の地方への伝播はこうした技術者集団(寺匠・瓦工等)の移動を伴うものと考えられる。大御堂寺院址出土瓦も、在地での系統的発展によると見るより、工人集団の移動によりもたらされたものとするのが妥当であろう。

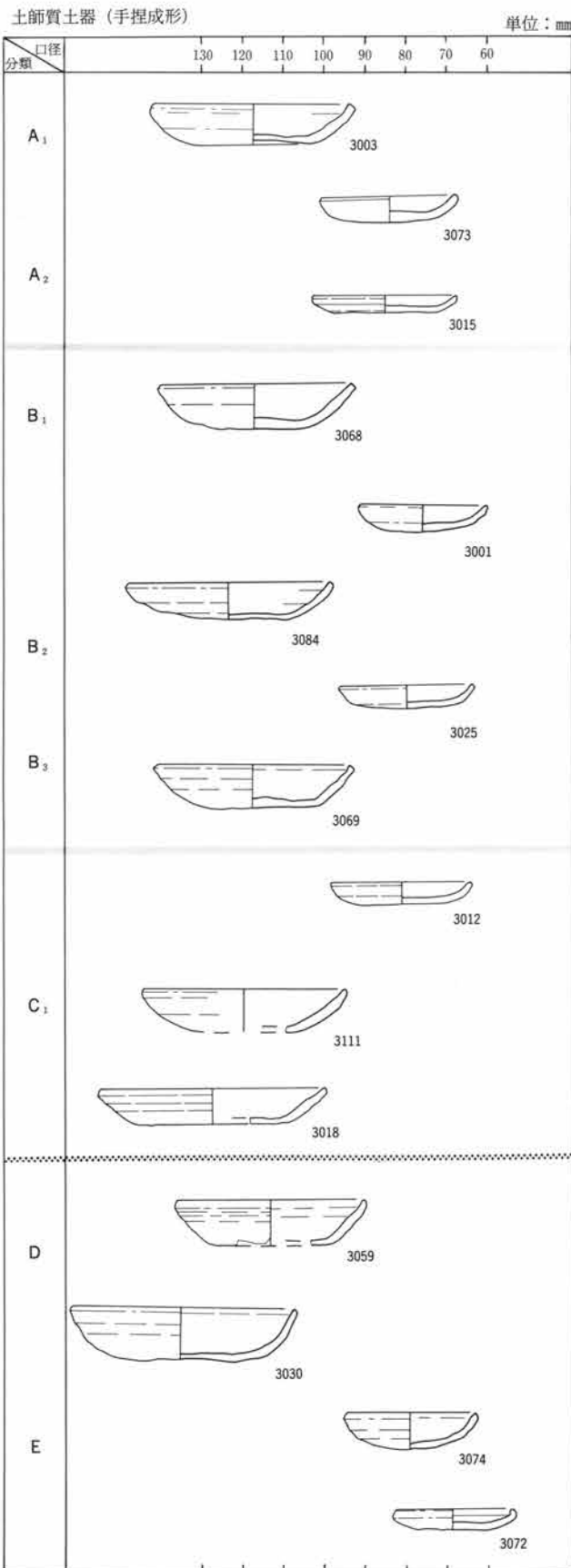
大御堂寺院址出土瓦を創建年代が明らかで紀年銘瓦も出土している永福寺出土例・智光寺出土例との比較検討を試みた。永福寺のものとは直接比較できる内容を持ち得ないが、その創建瓦の巴文にA類瓦との若干の類似性が認められたが、内容的には隔たりが大きい。足利智光寺例の出土瓦には大御堂出土例と近似した傾向が認められる。すなわち、創建瓦とこれに後出するものとの2傾向が認められ、創建期のものは胎土がきめ細かく精選された粘土を使用し、新しい時期のものは砂粒が多く含まれる。これは大御堂寺院址におけるA類・B類と同様の区分傾向・特徴が認められる。相互の比較において大御堂出土例のほうが若干古い要素を持つと認められ、智光寺に先行するものと思われる。なお、類例資料については第339図に示した。



(2) 土師質土器

寺院址から出土した土師質土器は個体の識別できるものが129点で、手捏成形のものと同クロ成形のものが見られ、その比率は86：14で圧倒的に手捏成形のものが多く、また、比較的完形で確認されるものが多いのが特徴と言える。出土遺構・層位との関係からは寺院址に伴うものと埋葬遺構に伴うものとに分けられる。埋葬遺構からのものはすべて同クロ成形のもので量的には土師質土器全体の8%程度と少ないが、残存状況は良好で銭貨を共伴し、その年代推定が可能な資料である。隣接したC区からはほとんど見られないことから、寺院址・埋葬遺構に関連した遺物と判断される。土師質土器の分布状況は寺院址内の境内域に集中する傾向が認められ、特に園池遺構～南池西及び中央部から北西部にかけて多く出土している。また、寺院址南西部の掘立柱建物跡群及び東部の溝状遺構群にやや集中しての分布傾向も認められ、特に東部出土の土師質

第VI章 考 察



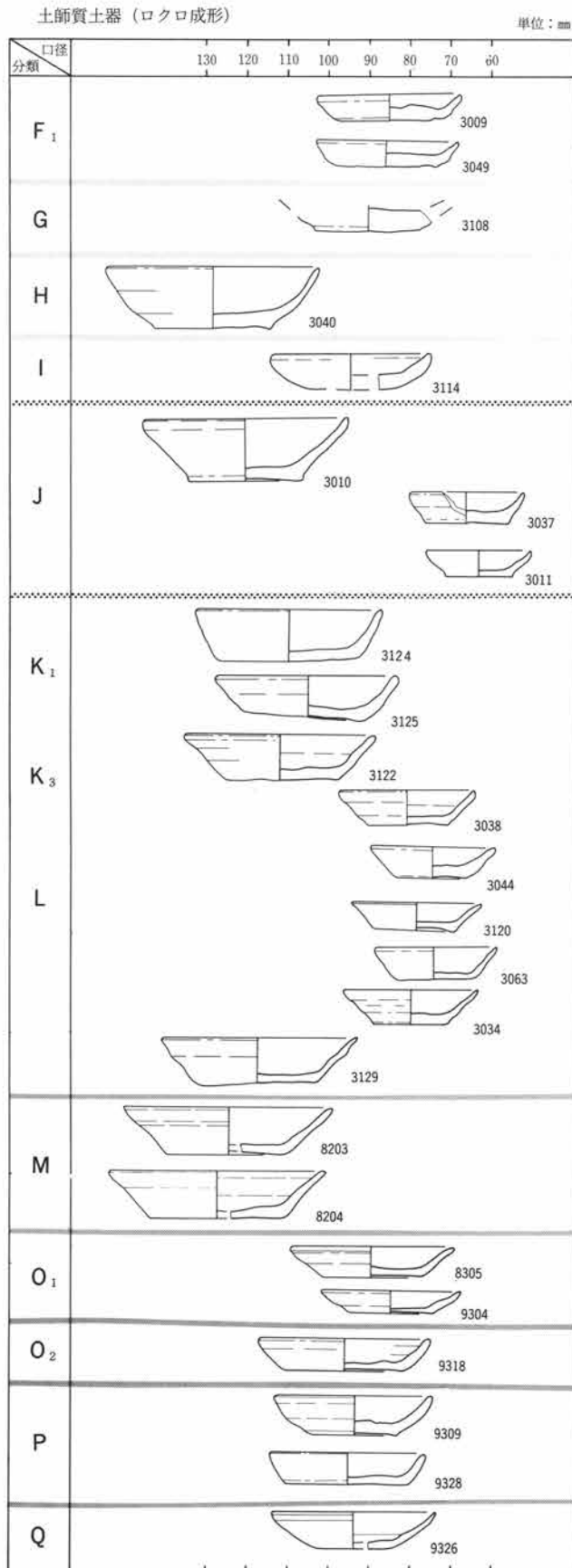
第341図 大御堂寺院址出土土師皿編年図(1)

土器は他のものと異なる様相を示しており、検出遺構の性格と併せて寺院址との関係が目される。

土師質土器は手捏成形のものをA類～E類に分類し、ロクロ成形のものをF類～L類に分類した。さらに前原調査区・上谷戸調査区での出土も見られ、大御堂寺院址出土のものと異なる様相を示すものについては、これをM類～Q類に分類し、比較資料として検討する事とした。

《手捏成形土師質土器について》

手捏成形の土師質土器の分類の基本は、胎土と色調に見られる差異であり、器形の点ではE類のコースター形を除いて口径120mm前後のものと口径80mm前後の2種の法量差が認められる皿形である。A類～C類は共通の浅い皿形であるが、D類はやや深くなり、若干の器形的差異が認められる。これは胎土・色調の相違とも合致する。調整技法の点では手捏成形の後に、内面はほぼ全面に横ナデし、外面は口縁部下を一段横ナデした後、口唇部を横ナデして口端部の断面形状が三角となるように仕上げられる。出土状況から見ると、大御堂第1号濠内土坑の出土遺物（A類・B類）と大御堂第2号溝状遺構からの出土遺物（D類）が寺院址遺構に関係して層位的に最も古い遺物と考えられる。いずれも寺院創建時のものとするなら、両者の間での時期的な差は認められず、手捏成形の皿形土師質土器は一括して寺院に伴うものと考えられ、その性格には非日常的な色彩が強く窺われる。A類～E類に見られる差異は、時期差を示さずとも何らかの意図が働いてのものとは判断され、旧来の素焼き土器の色調である褐色系のものとは別に、特に白色を強調した土器の出現を示すと理解され、B類・C類にこの傾向が認められる。これは手捏成形の土師質土器の製作目的とも関連する問題と考えられる。



第342図 大御堂寺院址出土土師皿編年図(2)

器形の点では土師質土器の口径縮小化傾向や、器高の点でD類に古い要素を認めることもできるが、遺物の寺院址に於ける性格と出土状況から時期差を持つものとは考えなかった。この点に関しては類例資料を待って検討したい。

《ロクロ成形土師質土器皿について》

ロクロ成形の土師質土器は出土量は少ないものの、形式的にはF類～L類まで7種に細分される。これらは遺構との関係から寺院址のもの（F類～I類）と、埋葬遺構のもの（K類・L類）とに分けられる。

F類としたものは口縁部の立ち上がりが短く低平な器形で、口底比は小さく底面の器厚に対して口縁部は薄くなっている。外面のナデ調整は口縁部と底部際に2段にわたっている。13世紀後半代に比定される。大御堂第1号濠跡・北池から出土している。

G類は底部片のみであるが、底径からは中型の皿と思われる。この一群の土器片は寺院址東部の大御堂第17号溝状遺構からの出土であり、胎土が土師質土器皿の中では砂粒を多く含み、最も粗い。

H類としたものは体部から口縁部にかけてやや内湾し、器壁は薄く、精緻に仕上げられている。鎌倉で14世紀代に見られるものに共通する特徴が見られる。²⁵

I類は大御堂第14号溝状遺構からの出土である。小型で器壁はやや厚く、体部から口縁部にかけてやや内湾する。

J類は底部から体部にかけてやや外反気味で口縁部では内湾する。中型・小型の二種が見られる。寺院西部の第1号濠跡からの出土である。

K類は火葬墓出土のもので、第2号～第4号火葬墓からの出土である。遺構の共通性からまとめたが、器壁が薄くなり、体部外反により口底比が大きくなる傾向が認められる。

供伴する銭貨から15世紀以降と判断される。

L類は土坑墓出土の土師質土器皿である。K₃類としたものと共通する器形であるが、器壁は薄くなり、底部には回転糸切り痕が残らず、へら削りによる器面調整がなされたものと考えられる。

M類は前原調査区出土の土師質土器皿である。器形としてはL類のものと共通性が認められるが、法量的にはやや大きくなり須恵質の焼成でやや堅緻な焼き上がりである。

N類以下は上谷戸調査区で出土した土師質土器皿を分類したもので、供伴する遺物との関係から近世に入ってからのものでと推定される。

N類は、口縁部が欠損して全体は不明であるが器壁は薄く、堅緻な酸化焰焼成である。

O類は器壁薄く口縁部が直に外反するO₁類と、器肉やや厚く体部から口縁部にかけてやや内湾するO₂類が見られる。色調は浅黄橙色を呈す。

P類は橙色を呈し、器壁やや厚く体部は内湾し、内面にロクロ成形痕を未調整のまま残すものも見られる。

Q類は精緻な作りの土器で、体部にはきれいなナデ調整が施される。土坑からの出土で供伴遺物からは18世紀中頃かと推定される。

《手捏成形土師質土器皿の年代観について》

手捏成形系土師質土器は県内及び近県での出土例が少なく比較資料が少ないが、京都及び鎌倉などの都市遺跡においては編年作業が進んでおり、そこでの成果と比較検討してみたいと思う。²⁶

鎌倉においては鶴岡八幡宮境内出土のものを中心として斉木秀雄氏により、12世紀末から17世紀までをVIII期に分類して編年している。ここで手捏成形の出土比率が高いのはII期で、III期になるとロクロ成形のものと出土比率が逆転し、IV期には激減する。13世紀中頃をピークとして14世紀代まで見られる。

京都においては小森俊寛氏による「平安京とそれに重複する中近世京都及び周辺出土土器編年案—土師器小型供膳形態を軸とした—」²⁷が示され、9世紀から17世紀までの椀・杯・皿類をVII期に分類している。この編年案にしたがえば、大御堂寺院址出土のものはVI期ないしVII期のものに共通する特徴を認めることができる。VI期の特徴は「一段凹みナデ化し口径縮小化、中小の2種が主力、白色系が分化する」、VII期は「中小の口径縮小化、体部外反化、白色系は薄手化しヘソ皿定型化する」という特徴が見られる。VI期とVII期とは1270年頃を境として区分され、13世紀から14世紀にかけての編年の指標となる。本遺跡出土のものは口唇部を横ナデして口端部断面を三角形に見せており、中型の口径が120mm～130mm、小型の口径が80mm～90mmである。これはVI期（新）ないしVII期（古）のものに共通性が認められる。VII期にはコースター形が消滅しヘソ皿の定型化が認められるが、本遺跡にはヘソ皿は見られず、ヘソ皿出現以前のコースター形が縮小化して消滅する時期までに該当すると思われ、13世紀の後半を中心としてその前後する時期であると推定される。鎬手蓮弁文の青磁碗もVI期（新）から見られ、この点でも共通する特徴を認められる。

法量別分布については第43表に示したが、小型皿に比し、中型皿に若干のばらつきが見られる。口径の縮小化という流れの中では、ばらつきの中に時間差が含まれる可能性もあるが、連続する型式の範囲内に収まる程度と思われる。

畿内では9世紀からの黒色土器、11世紀からの瓦器椀にみられる黒色に仕上げることを目的とした供膳具が多く出土する。この瓦器椀に代表される供膳形態は14世紀まで続き、搬入品としての瓦器椀は鎌倉でも出土しているが、これが東国に定着することはなかった。本遺跡A類の土器は、黒色に仕上げることを目的に作られた土器と考えられる。手捏成形土師質土器は、黒色・白色（淡黄色）・褐色（赤褐色）等の色彩に意味があるものと推定される。これについては畿内に見られる土器様相が何らかの影響をしている可能性が推測

される。

《ロクロ成形土師質土器の年代観》

埋葬遺構のものは配石墓・火葬墓・土坑墓からであり、錢貨を供伴し一括して埋納することから、時期の推定が可能である。埋葬遺構と寺院址とは層位的・時間的に明瞭な差異が認められ、中世前半と後半とに分けることができる。

ロクロ成形の土師質土器を中心とした編年は太田浜町屋敷内遺跡C地点系統変遷図²⁸・赤塚遺跡系統編遷図・石那田遺跡系統変遷図・下野国に於ける土師質土器系統編年図に13世紀代から15世紀までの編年が示されている。これと鎌倉での編年を指標として大御堂寺院址及び白石大御堂遺跡出土の土師質土器を見るとき、編年の位置付けが比較的是っきりするものとして、13世紀後半とされるF類と、14世紀とされるH類がある。いずれも比較的精緻な作りであり、寺院に伴う遺物と判断される。F類については手捏成形のものと平行する時期関係にあるものと思われる。また、埋葬遺構からのK類とL類は器形的な変遷が認められるが、概ね15世紀後半から16世紀にかけての時期に位置付けられる。J類については埋葬遺構からのものに近いことも考えられる。したがって、寺院に関係することが比較的是っきりするのはF類～I類のグループである。

(3) 大御堂寺院址遺物出土状況

瓦類及び土師質土器については比較的出土量が多く、編年的な指標ともなり得ることからその変遷と寺院址内での出土状況を見て来たが、それ以外の遺物について分布状況と時期について検討を加える。

輸入磁器はすべて龍泉窯系の製品で13世紀代と見られる。第343図の示す分布傾向は寺院境内域に比較的まとまる傾向を見せる。

軟質陶器の出土分布は第344図に示したが、摺鉢・内耳鍋類など中世のものと焙烙類など近世にはいつてからのもの、火舎・香炉類では中世のものと近世のものが見られる。出土分布は寺院中央部、園池遺構、寺院西部とにほぼ3分割される。このうち、中世のものは中央部から西部に、近世のものは園池遺構に多く見られる。

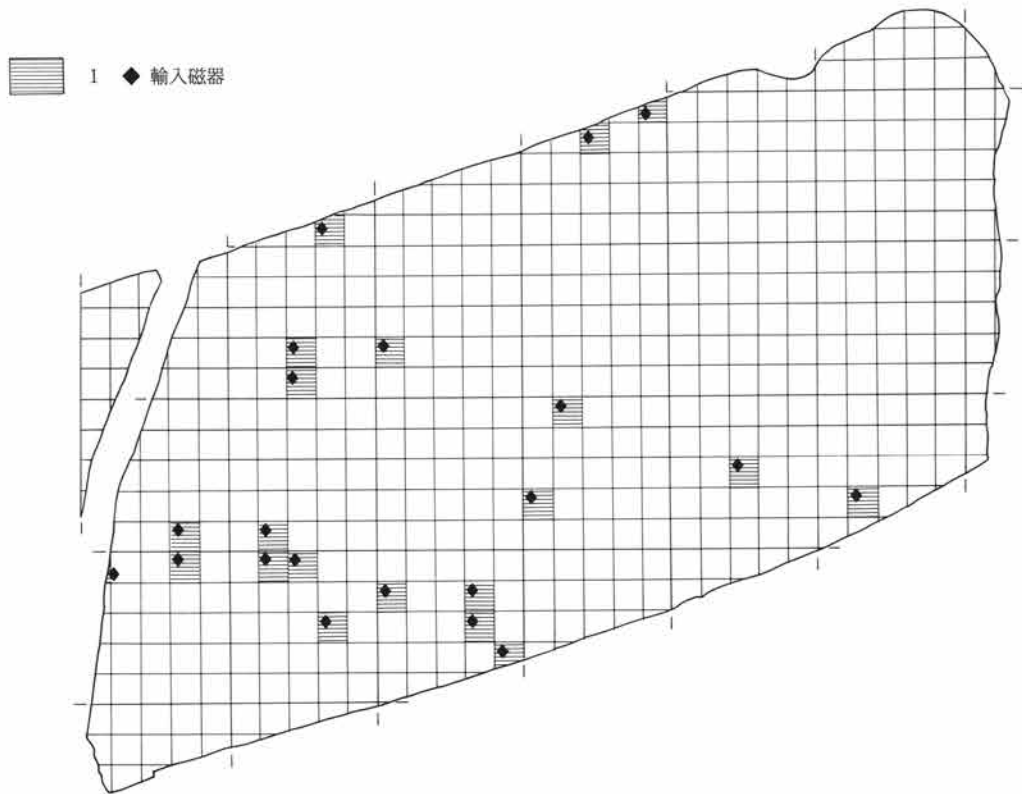
第345図には国産陶器の出土分布を示したが、園池遺構に集中する傾向が認められる。また、中世の陶器類は寺院西部から南西部にかけて分布する。第346図には近世磁器の出土分布を示した。陶器の分布と基本的には同様の傾向を示し、園池遺構に集中する。

第347図に示した鉄製品の分布は、寺院中央部から西部にかけて分布し、近世陶磁器類の分布の中心である園池遺構からは極めて少ない。鉄製品の大部分が釘であり、その一部について埋葬遺構出土のものがあるものの、基本的には寺院建物に関する遺物と見ることができ、中央部での分布は瓦類と同様の傾向を示し、さらに西部及び南西部にも分布する。

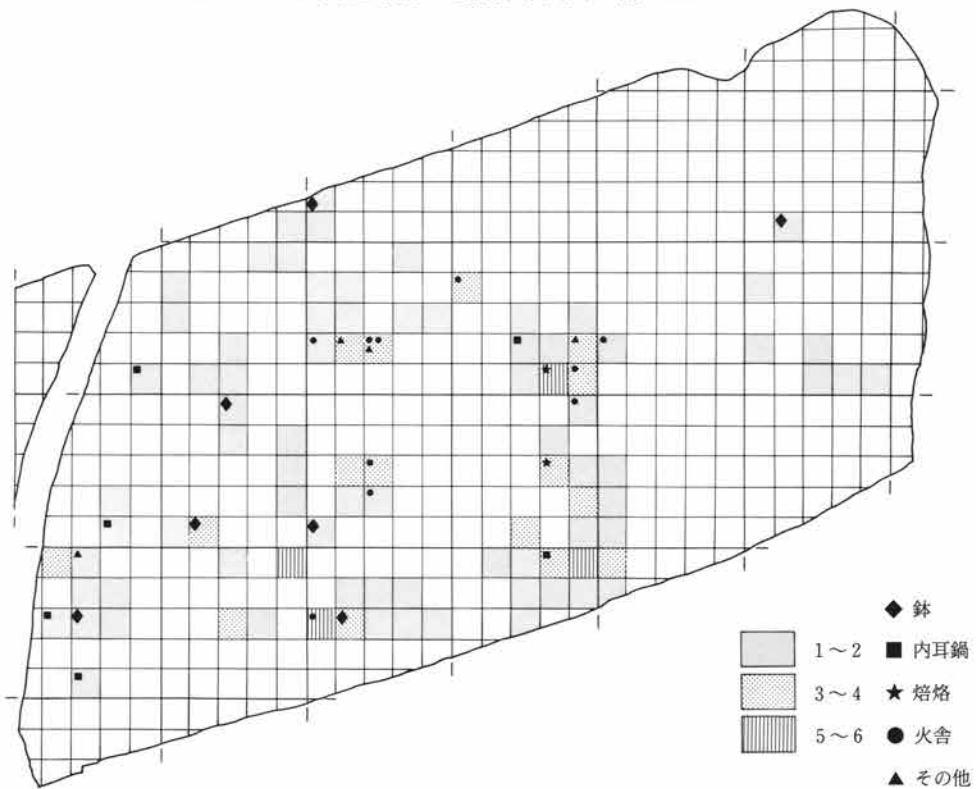
第348図に示す錢貨の分布は埋葬遺構の分布とほぼ一致する。

以上、寺院址内での遺物分布の傾向を概観してみると、園池遺構には近世遺物が比較的集中し、寺院址に関与と思われる中世の遺物は中央部から西部にかけて分布する。これは遺構分布とともに中世面の包含層の有無とも関係する。瓦・鉄製品は建物に関する遺物であるが、鉄製品は土塁の外側となる南西部掘立柱建物跡群から第1号濠跡南半部にかけて分布する。ここでは輸入磁器・中世軟質陶器・中世国産陶器も見られ、中央部の南西隅及び南池西と併せて寺院関連遺物の分布域と言える。園池遺構では水平的な分布では近世遺物が優勢であるが、層位的には中世遺物と近世遺物とに分けられる。

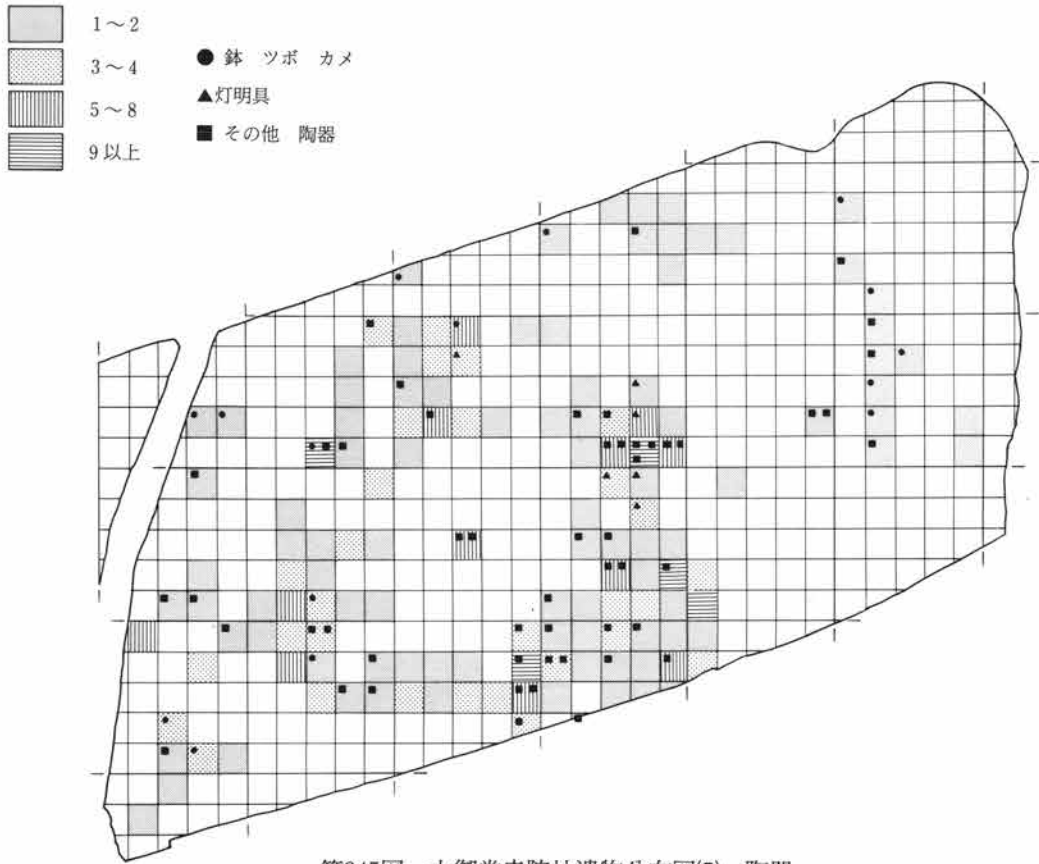
なお、寺院東部の溝状遺構からの出土遺物は寺院址出土遺物とほぼ同時期と思われるが、内容について土師質土器に見られるように若干の相違が認められる。常滑製の陶器の摺鉢にも寺院址内出土のものと器形が



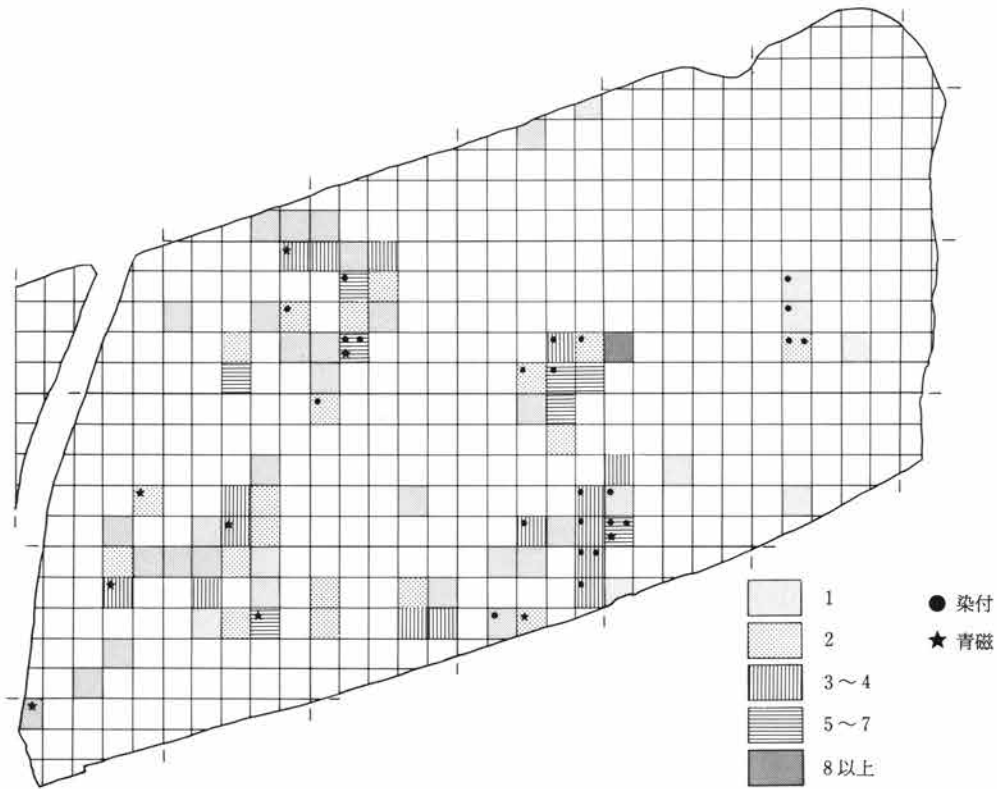
第343図 大御堂寺院址遺物分布図(3)―輸入磁器―



第344図 大御堂寺院址遺物分布図(4)―軟質陶器―

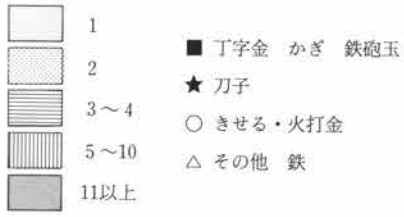


第345図 大御堂寺院址遺物分布図(5)―陶器―



第346図 大御堂寺院址遺物分布図(6)―磁器―

第VI章 考 察



第347図 大御堂寺院址遺物分布図(7)―鉄製品―



第348図 大御堂寺院址遺物分布図(8)―銭貨―

異なり、寺院址とほぼ同時期ではあるが別遺構の存在を示唆する内容と判断される。

5 寺院の創建・廃絶の年代とその背景について

(1) 創建年代について

寺院址内で出土した遺物のうち、瓦A類は寺院創建にかかわる遺物と考えられ、土師質土器A～E類（手捏成形）がこれと同時期と考えられ、胎土分析の結果でも指摘される³⁰。瓦A類の年代は、瓦当文様に中世前半の鎌倉時代の特徴が窺え、軒平瓦の技術的特徴も符合する。複弁蓮華文の意匠からは「天福元年」銘のものとの類似性が指摘され、A類瓦には13世紀の前半～中頃の年代観が与えられる。手捏成形土師質土器皿の（A類～E類）及びロクロ成形のF類は13世紀後半に位置付けられよう。また、輸入磁器が13世紀代であり、これに中世国産陶器（常滑系）及び軟質陶器の摺鉢・内耳鍋もこれらとほぼ同じ時間幅のなかに収まることから、遺物から見た寺院の創建年代を13世紀中頃から後半にかけてと推定できる。

寺院は建立後はある程度の時間幅の中で存続していたものと考えられ、その幅は瓦A類と瓦B類の製造年代の時期差に使用期間を加えた時間幅で想定でき、14世紀の後半頃までは存続したものと推定される³¹。土師質土器H類はF類に後出する14世紀代のものが見られ、常滑系の甕の胴部・口縁部片や古瀬戸の梅瓶・仏花瓶なども14世紀代のものが見られ、これらは寺院の存続年代を示す遺物と言えよう。

園池遺構に続く遣水遺構では暗渠の造り替えが見られ、それに続く大御堂第12号溝状遺構では当初の掘り方面とは別に、ある程度埋没してからの面が園池遺構の一部として機能していたことが考えられ、瓦に見られる時期差に遺構も対応するものと考えられる。

類例寺院と比較すると、永福寺よりは新しく称名寺が整備されるまでの、12世紀末から14世紀初頭までの間の時期と考えられる。その間に創建年代のはっきりする資料として、世良田長楽寺、足利智光寺等があり、いずれも13世紀前半から中頃にかけての創建である。勝長寿院・永福寺、伊豆葦山願成就院などは東国における鎌倉初期の建立寺院で、12世紀末であるが、これらに続いて盛んに建立された阿弥陀堂建築のひとつとして考えられ、長楽寺にはやや後出し智光寺にはやや先行するか同時期のものと推定されるが、これは瓦の瓦当文様の比較による時期比定であり、他の遺物を含めての検討ではなく、今後の検証が必要であろう。

(2) 寺院の廃絶とその後の変遷について

墓地の造営は、分布範囲が寺院址と重複することから何らかの関係があったことは推定される。しかし埋葬遺構の検出面は寺院址遺構がある程度埋没してからのことであり、寺院が当初の姿で維持された期間でないことは明らかである。したがって、埋葬遺構との関連を検討することにより寺院の廃棄の過程とその年代を明らかにすることが可能である。

寺院の廃棄を直接的に示唆する遺物としては、前述の古瀬戸の梅瓶及び仏花瓶があげられる。いずれも園池遺構からの出土であり、まとまってはいるが破碎された状態で検出されている。梅瓶は南池北西縁の洲浜状の小礫面で、人為的にしかできないような小片に砕かれており、廃棄時の状況を示唆する。

大御堂第1号配石墓は土壘跡東面にあり園池遺構の中央土橋から見て正面に位置し、寺院址と密接に関連した選地がなされている。渥美製の骨蔵器が出土しているが、渥美の中では新しい時期と見られ、13世紀末ないし14世紀初頭の生産年代と推定される。また、周辺では石造物の廃棄も見られることから、宝篋印塔・板碑等の造立年代である14世紀中頃以降の時期と推定される。被葬者が若年であることと、既に寺院址の埋没が開始されていることから開山・開基にかかわるものとは考え難い。

火葬墓・土坑墓からは銭貨及び土師質土器の出土が見られ、15世紀以降と考えられる。この埋葬遺構は西

部での検出状況から、濠が埋没してから営まれたものであり、大御堂第11号溝状遺構を切って構築された大御堂第1号土坑墓においても埋没後の造営であることは確かである。したがって、15世紀の後半には寺院址遺構はかなり埋没が進み、すでに廃絶されていたものと想定される。墓地の造営は寺院規制に則ってその跡地利用したものと考えられる。³²

なお、園池遺構はその形を変えながらも近世以降も残る。これについては『元禄村絵図』との関係において次節で述べる。

(3) 寺院造立の背景について

大御堂寺院址はその出土遺物から13世紀中頃から後半にかけて造営され、14世紀代まで続いたと考えられる。そして、14世紀の後半ないし15世紀の前半には配石墓が営まれ、15世紀後半から16世紀にかけて火葬跡・火葬墓・土坑墓等の埋葬遺構群が営まれる。近世に入ってからは、何らかの形で復興し、園池遺構にも修復の手が加えられたものと推定される。近世後半には寺院址は農地となり池は農業用に改変され、近代に続くことが調査により明らかとなった。ここでは、寺院が存続した期間及びその前後の社会的背景について述べてみたい。この時期に関しては『群馬県史 通史編3 中世』に詳述されており、これを参考として大御堂寺院址建立の背景を考えたい。

寺院建立以前の上野国の状況を見ると、天仁元年の浅間山大爆発による火山灰（浅間B軽石）の大量降下により耕作地は大きな被害を受けたことは記録にも残っており、調査でも浅間B軽石層が地表面を覆っていたことが確認できる。浅間B軽石下の水田・畠等は多くの遺跡で検出され、火山災害のすさまじさを物語っている。この浅間山大爆発の前後の11世紀末から12世紀前半にかけて、上野国に関しては貢税免除の記事も見られ、災害によりかなり疲弊していた様子が窺える。そうした災害復旧の過程において多くの開発私領が形成され、それから荘園化という動きにつながる。高山御厨、土井出・笠科荘、新田荘、青柳御厨、玉村御厨などが立荘の年を確認でき、その他にも荘園の形成がすすみ、また、国衙領の成立もこの頃と推定される。

12世紀代の荘園設立の過程においては、こうした在地土豪（土着官人・武士）層による私領開発が、院・摂関家等の本所・領家への寄進により本領安堵を図るという構図ができていく。この構造は中世に於ける権力構造の変化を敏感に反映し、鎌倉時代に入ってから下司・地頭層の台頭が守護の権力と結びついて本所・領家との関係に優先し、上野国内においても荘園・御厨の変遷過程にそれを看取することができる。

上野国緑埜郡に所在する高山御厨は天承元年（1131）建立され、永治2年（1142）宣旨によって公認されたことが建久3年（1192）8月の伊勢皇大神宮神領注文にあり、安元元年（1175）には武蔵国児玉荘と相論を起こしていることが『玉葉』に見える。この高山御厨は秩父氏（平）系の高山氏による私領開発をその基盤とするものと推定され、高山氏に関しては鎌倉時代に幕府御家人としての活動が『吾妻鏡』に見られる他、『高山文書』等によってその事蹟が知られる。高山氏とともに幕府御家人として小林氏の名も見られるが、高山氏から分流した同族である。高山御厨に関しては、建久3年の段階では没官地とあり、給主は不明である。高山御厨は、室町時代の守護領国化の動きまでは存続したと思われる、少なくとも鎌倉時代を通じての存在は確認される。高山の地名は藤岡市の南部のやや山間部に入った所に残るが、ここを在所とするのは時代がかなり下ってからのことと思える。徳治3年の所領争いは大塚郷・中栗須郷を巡ってのものであり、さらに安元元年の武蔵国児玉荘と相論を起こしていることで、高山の御厨の範囲を神流川以西の藤岡台地を基盤とする地域であることが想定される。

高山御厨が成立した12世紀中頃は、西毛地方には源義賢・秩父重隆の勢力が優勢で、赤城南麓の藤原姓足利氏と上野国の二大支配勢力をなしていたが、久寿2年（1155）に源義平により武蔵国大蔵館において義賢

が源義平に討たれる頃から、南関東の武士団の動きとも関係して、中央での政治的状況の変化を敏感に反映するようになり、頼朝政権の誕生に至るまで、争乱状況は続く。上野武士団の動きを見ると、鎌倉幕府誕生の過程においても上野の武士団は、多胡荘における源義賢の遺領を継承する木曾義仲陣営に入るもの、平氏方の反頼朝陣営に属すもの、新田義重に見られる自立の動きなど様々であった。

鎌倉幕府設立以降の上野国は、守護として安達氏の力が支配的になり、承久の乱を経て北条氏の執権政治が確立した後も継続される。安達氏は鎌倉にいたが上野国に於ける中心は家宰としての玉村氏とその基盤である玉村御厨であった。安達氏の影響力は13世紀後半の霜月騒動（1185）まで続くが、その後は北条得宗家の知行地として上野国の得宗領国化が進む。安達氏に次いで上野国を支配したのは得宗被官の平頼綱で、その後長崎高資が守護代となる。こうした動きは、上野守護の失脚と関係して上野国内の在地武士団にも直接的な影響を与え、御家人の得宗被官化や幕府法曹官僚の所領化がすすむ。高山御厨に関して徳治3年（1308）2月7日の関東下知状で大塚郷・中栗須郷を巡り、摂津親暨と三善朝清妻大江氏が争っている。このことで高山御厨が幕府法曹官僚の所領であったことが判明しており、霜月騒動以後の状況が窺える。

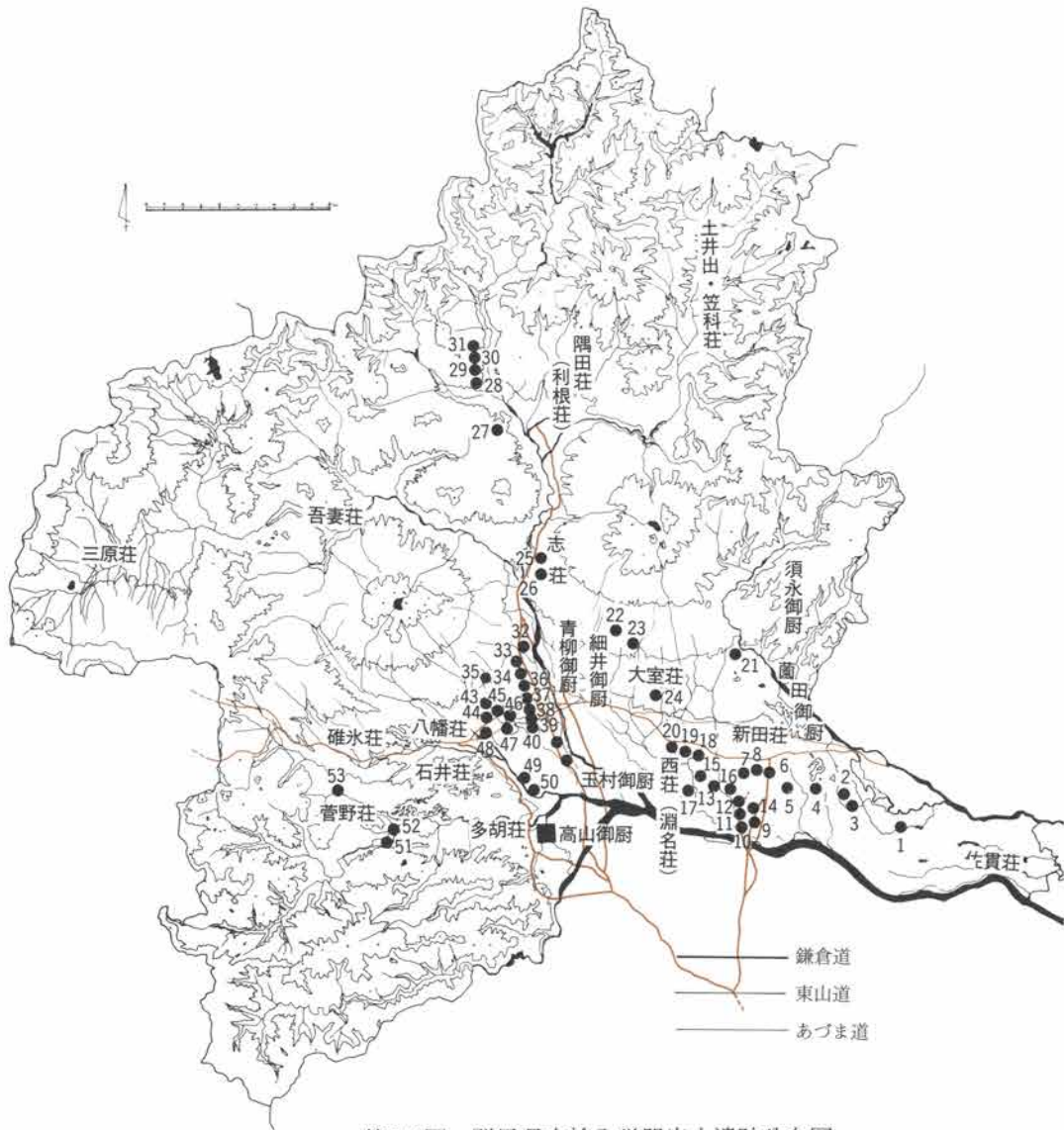
鎌倉幕府滅亡後は新田氏の挙兵が直接的契機となったが、南北朝・室町時代を通じて再び動乱期に入り、上野国もその例外ではない。最初の動きは楠木合戦への動員であり、続いて新田義貞挙兵と続く。建武期に入り幕府与党であった御家人の所領は没収され、その後の新田氏と足利氏の対立、足利政権内での対立を通して足利氏の支配が強まり、観応の擾乱を経て上杉氏体制へと移行する。この時期の上野武士団は「短い間に権力者が次々に交替したためにつねにその選択を強いられ」、また、「一族の分裂」と「惣領による統制が弱く」、「戦乱の度に大量の欠所地ができ、新しい領主が補任され、所領関係が複雑なものとなっていった」ことが指摘され、こうした状況は貞治2年（1363）の上杉憲顕復活まで続く。

以上が、大御堂寺院址が建立されたと考えられる中世前半（鎌倉時代）の上野国の情勢であり、その概要は以下のとおりである。

- 12世紀初頭→→→浅間山大噴火………上野国疲弊
- 12世紀前半→→→復興・再開「こかん（空閑）の郷々」、立荘の動き＝武士団の成長
- 12世紀中頃→→→高山御厨成立（高山氏を背景）
- 12世紀後半→→→保元・平治の乱～治承の動乱（源平合戦）
- 12世紀末→→→鎌倉幕府成立、御家人層の台頭＝在地武士団の御家人化
- 13世紀前～後→→→上野国守護安達氏＝比較的安定した社会状況（封建的主従関係の確立）
- 13世紀後半→→→上野国北条得宗領化、幕府法曹官僚の所領化（封建的主従関係崩壊の兆し）
- 14世紀前半→→→鎌倉幕府滅亡
- 14世紀中頃→→→南北朝の動乱～観応の擾乱、白旗一揆の成立
- 14世紀後半→→→関東官領上杉氏による支配＝比較的安定期

大御堂寺院址造立の背景を考えた時に、それを可能とする幾つかの条件を考えねばならない。中世の寺院建立の檀越となったのは、社会的にその地位が上昇してきた武士階級であり、荘園をその経済的基盤として成長して来た中小の在地武士団である。頼朝の永福寺建立をはじめとする有力御家人の造寺の影響は地方に波及したものと考えられ、特に鎌倉幕府の安定期に見られ、上野国においても新田氏族の関係した長楽寺が知られる。

大御堂寺院址は旧緑埜郡白石村に所在し、緑埜郡域が高山御厨を基盤とすることから、これとの関係が最も注目される。上野国を安達氏が支配していた時期は13世紀前半から後半にかけてであり、安達氏は金剛三



第349図 群馬県内輸入磁器出土遺跡分布図

1	パテレン遺跡
2	賀茂遺跡
3	庚塚遺跡
4	浜町屋敷内遺跡
5	伝新田氏累代の墓
6	村田・上野井遺跡
7	市野井・重殿遺跡
8	市野井・生品神社南中世墓跡
9	歌舞伎遺跡
10	長楽寺遺跡
11	上新田西遺跡
12	西今井遺跡
13	下淵名遺跡
14	小角田前遺跡
15	十三宝塚遺跡
16	三ツ木遺跡
17	明神遺跡

18	書上下吉祥寺遺跡
19	書上上原之城遺跡
20	上植木老町田遺跡
21	新宮遺跡
22	横沢遺跡
23	大胡城址
24	荒砥東原遺跡
25	三原田遺跡
26	中畦遺跡
27	名胡桃城遺跡
28	洞I遺跡
29	洞II遺跡
30	洞田遺跡
31	藪田遺跡
32	清里・陣場遺跡
33	下東西遺跡
34	国分寺中間遺跡
35	同道遺跡

36	鳥羽遺跡
37	中尾遺跡
38	吹屋遺跡
39	日高遺跡
40	新保遺跡
41	元島名遺跡
42	元島名B遺跡
43	矢島遺跡
44	寺ノ内遺跡
45	御布呂遺跡
46	芦田貝戸遺跡
47	融通寺遺跡
48	上並榎南遺跡
49	下佐野遺跡
50	舟橋遺跡
51	本宿遺跡
52	稲荷森遺跡
53	菅原遺跡

味院建立に尽力するなど高野山との関係が深いことが指摘されている。その勢力基盤は玉村御厨とされ、大御堂寺院址とは同一水系の比較的近い距離にある。出土遺物に見られる輸入磁器は13世紀代の龍泉窯製であり、こうした遺物の搬入には鎌倉の有力御家人を介在してのことが予想され、その場合には安達氏の影響が最も大きいと推定される。第349図において、群馬県内からの輸入磁器の出土遺跡分布図³⁴を示したが、上野国の有力武士層との関係が出土傾向にも関係すると思われる。一般的な出土傾向は、越磁をはじめとした最も古いタイプは国府周辺に見られ、13・14世紀代のもは新田郡周辺に集中する。榛名山東南麓における分布は長野氏に関係する遺跡のもので、時期もやや下る。この図に示す限りでは大御堂遺跡周辺の西毛地域での出土例が少ないが、調査自体が緊急発掘によるものでその粗密に影響された部分もあり、中世での在地武士団の動きを考えると、その消長とも関係した出土傾向を示すとも考えられる。鎌倉街道の推定路に概ね一致する分布は看取できると思う。西毛地域においては類例遺跡³⁵は今後増えるものと予想される。

大御堂寺院址の鎌倉街道上道での重要性と利根川水系での河川交通の便を考慮した地理的位置についての検討、隣接地する板倉郷・山名郷・多胡荘などとの関係については、今後の検討課題としたい。また、檀越としての可能性が高いのは高山氏若しくはその一族の小林氏であるが確証はない。調査結果からは、寺院の廃絶が意図的な破却であった可能性が考えられ、在地の中小武士団の動向と関連しての検討が必要である。近世での復興に旧地の回復といった意味のものが加わるのかについても一考の余地があろう。

大御堂寺院址の創建時期については類例資料が乏しく、比較検討できた範囲では13世紀中頃を中心とする時期と考えられ、14世紀代までは続くことが考えられた。また、造立の背景には高山御厨の存在と高山氏が考えられるが、調査結果にはこれを直接的に示すものは見られなかった。また、上杉氏が平井城を基盤として上野国を支配する15世紀後半には、大御堂寺院址においては埋葬遺構が営まれている。その時期は出土土師質土器皿や銭貨からは15世紀後半から16世紀代にかけてと思われるが、平井城に地理的に近接することから、その関連が目される。これについては、大御堂寺院址の廃絶とも関係して今後の検討課題としたい。

(綿貫鋭次郎)

第VI章 考 察

- 1 齊藤忠「II寺院跡 1立地」『新版仏教考古学講座 第二巻寺院』pp7～9、1984 雄山閣出版
- 2 鮎川左岸には洪積（ローム）台地が発達し、集落が立地する好条件を備えている。その概況は第7図～第10図に示したが、生活址（集落）、生産址（水田址等）及び墳墓（古墳等）が、一定の条件下でいわゆる「棲み分け」の如き状況で分布している様子が着取できる。本遺跡もそうした観点からは、沖積低地面での生産址と洪積台地面での生活址といった認識が可能な遺跡である。しかし、寺院址・城館址といった遺構は、その立地条件に地理的・地勢的要因が加味され、造立の背景が強く影響するものと思われる。
- 3 鎌倉街道については、文献（24）の報告がなされ、埼玉県側についても文献（107）をはじめとして多くの調査がなされている。
- 4 注1。寺院の伽藍配置については、密教系山岳寺院の例を除けば、方形区画で南面するという基本的パターンを踏襲している。
- 5 鮎川は、遺跡付近では寺院建立時の流路が現在より東方にあったものと考えられ、かなり蛇行した流路であったことが現地地形からも窺える。（付図1参照）寺院址は沖積低地面の中では、周辺より微かに高い自然堤防上に選地したものと思われる。
- 6 出土陶磁器類の遺物鑑定は大橋康二氏による。1630～1640年代の生産年代から与えられる肥前系青磁皿は、比較的優品で日常雑器として一般的に流通したものとはとらえ難く、特筆すべきものとの指摘があった。17世紀前半～中頃の遺跡の在り方を示す遺物とも考えられる。
- 7 園池遺構の主要な埋土は浅間A軽石を主とする砂質土層であることから、石垣列で示された近世園池の埋没は天明年間以降と考えられる。陶磁器の示す17世紀後半より18世紀中頃という時期とも合致する。
- 8 加藤充彦文化財調査官によれば、池の形状は近世段階での特徴を備えているとの指摘があった。
- 9 園池遺構西側の寺院址中央部で検出された小礫面は、早田勉氏の鑑定により自然堆積層の露頭面と判断された。しかし、南池北西縁石垣列の背面ではこれとは異なる小礫面が検出され、前述の古瀬戸梅瓶の出土も見られることから、この部分は洲浜状遺構の残存部と判断される。
- 10 文献 123・124
- 11 文献 130
- 12 文献 84・85
- 13 文献 133
- 14 文献 125～129
- 15 奈良国立文化財研究所宮本長二郎氏・上原真人氏の御教示による。
- 16 文献 144
- 17 文献 121
- 18 文献 130
- 19 文献 菲山町教育委員会『伊豆菲山願成就院発掘調査概報』
- 20 文献 101～103
- 21 上原真人氏の御教示による。特に「天福元年」の紀年銘瓦に類似した特徴が認められ、瓦の年代をこれに近い時期と考えてよい。
- 22 群馬県内の類似資料（中世瓦）としては、世良田長楽寺出土瓦、鬼石町浄法寺出土瓦、国分寺中間地域出土瓦等が知られている。
- 23 文献 213
- 24 齊木秀雄氏の御教示による。
- 25 同 上
- 26 本遺跡出土土師質土器を鎌倉市内出土と資料、及び平安京出土資料との直接比較を試みた。
鎌倉出土の資料との比較においては、F類・H類としたものに顕著な共通点が認められた（齊木氏、福田氏、原氏の御教示による）。
平安京出土資料との比較は、小森俊寛氏にお願いしたが、直接的な関係を認め得る内容は確認できなかった。しかし、平安京編年をその指様として考えることは可能で、その場合に法量的・形態的特徴からの比較は可能であると考え、年代考定の根拠とした。
- 27 奈良国立文化財研究所、平成2年度発掘技術者専門研修「中・近世窯器調査課程」の講義資料である。
- 28 榑群馬県埋蔵文化財調査事業団『太田浜町屋敷内遺物C地点』1982
- 29 大橋康二氏の御教示による。
- 30 土師質土器と瓦とに共通する粘土を使用したと認められるものがあり、同時に作成していた可能性を指摘できる。本章第5節で鑑定結果を報告している。
- 31 瓦B類について、大江正行氏、木津博明氏によって、群馬県内出土の室町時代の瓦に共通する特徴を認められるとの御教示がある。
- 32 埋葬遺構に関しては、時間的制約から十分な検討をなされぬままとなった。しかし、白石大御堂遺跡の出土資料は今後、重要なものとなると思われるので、出土資料の検討は継続的に行っていききたい。
- 33 遺跡の南方に所在する平井城は15世紀中頃以降のものと考えられ、本遺跡の埋葬遺構群とは時期的には並行関係が認められ、相互の関係については検討の余地が残ると思われる。
- 34 群馬県立歴史博物館企画展『関東の古陶磁展』図録、1982年をもとに作成。
- 35 関越道上越線関連の発掘調査に於いても神保植松遺跡をはじめとして多くの遺跡で出土しており、今後、出土遺跡数が増加することは確実である。

第4節 『元禄村絵図』について

白石大御堂遺跡ではA区からI区にかけてのほぼ全域から近世の遺物及び遺構が数多く検出されている。遺物に関しては特にA・B区の寺院址部分（字大御堂）とG・H区の丘陵裾部（字上谷戸）においてその質・量ともに目を見張るものがあつた。ここでは上記の二調査区を対象に、若干の文献史料や村絵図を検討することによってその近世以降の変遷の概要を把握し、発掘調査の成果とあわせて地域史の解明を試みるものである。

1 大御堂調査区

大御堂調査区の寺院址の一部（字大御堂2215番地ほか）は、戦後の農地解放までは藤岡市白石字上郷に所在する真言宗般若寺の所有地であつた。当寺は大和国長谷寺の直末として元和元年に創建されたと伝えられ、¹慶安二年（1649）には13石の朱印地を受けている。²現在は無住となり吉井町延命密院の兼住を受けるが、昭和初期までは専住の僧侶がいたようである。

明治六年五月「緑埜郡白石村壬申地引絵図」³（以下「明治地籍図」と略称する）によれば、寺院址周辺は一面の畑地であつたが、この一画のみ一辺約50mの方形の水田となつており周囲に比べ一段低い土地であつたことがわかる。この中央やや西よりは「塚」を示すマーキングがあり、また東辺部の北寄りと南寄りには扇形をした二つの池が認められる。池はそれぞれ2号池・3号池に相当すると考えられるが、当時の般若寺の所有地はこの3号池の西部、つまり大御堂等12号溝状遺構とほぼ重複する1畝20歩ばかりの東西に細長い土地のみであつた。地元の古老の話によれば、その後般若寺は一檀家より「塚」周辺の土地8畝12歩の寄進を受け、大正の半ば頃には「塚」の盛土を崩して両池を埋め、一挙に方形区画内の開田化を成し遂げている。なお埋めたて前の池の水は3号池の南西方向から取水し、2号池の北東部分から排水がなされていたという。なお当地の「塚」は、昭和10年に作成された『上毛古墳総覧』に白石村623号墳として記載されている。当時これは既に消滅していたため古墳と判断した根拠は乏しいが、少なくとも大正頃までは小丘が存在していたことは確実であろう。

さらに時代を溯り、17世紀後半代の当地の様相を元禄六年（1693）に作成された「白石村般若寺・同村百姓野論裁許絵図」⁴（以下「元禄村絵図」と略称する）によって窺い知ることができる。これによると180年の時間差にも拘らず遺跡地を取り巻く景観にさほど大きな変化は見られない。しかし当図にはその使用目的上「明治地籍図」ほどの詳細さはないが、それでも大御堂調査区内を見た場合、明治期の様相との間に若干の相違が見られることに気づく。

例えば、南北の二つの池は当時は接続していたようでその水域は眼鏡形に表現されている。また寺院址の中心範囲を示すと思われる区画がやはり見られるが、その南辺は「く」字状に中央部が張り出し、その屈曲部分は南方に広がる水田地帯の末端部分と接するように描かれていた。この接触部分こそが池へつながる当時の導水路の位置を示すものと考えられる。なお当絵図は田・畑などの基本的な地目と争論の対象である般若寺の所有地を彩色することにより識別するが、この区画部分については顔料の褪色によって指示事項が判然としない。当絵図の添書によると、もしその配色が鼠色であるならば単なる水田を、紫色であるならば般若寺所有の田畑を表すものとなるのであるが、現段階では結論付けることはできなかった。またさらに注目すべきことは、この長方形区画のほぼ中ほどに中島状のさらに小さな方形区画が見られ、その中心には宗教施設の存在を示す朱点が記されていた。しかしこの施設がいかなる規模で、またいかなるものを崇拜対象と

して納置するものであったのか、図上に注記はない。ただ現在村中に残る他の宗教関係施設の規模から推測すると、当絵図上の施設の表現方法は比較的規模の大きいものには朱書きでその家屋形状を、祠堂程度のものには朱点と、それぞれ描き分けていたものと考えられる。また東側の池は大正の埋め立て時まで「阿弥陀池」と呼称されていたという事からも考え合わせると、図上のこの朱点は比較的小規模な阿弥陀堂を表現するものであった可能性が高いと思われる。

2 上谷戸調査区

本調査区は丘陵の東斜面部に位置しているが、南約10mのところを東流する小谷川の開析によりやや南東方向に緩い傾斜を持つ地形上にある。その中腹から裾部にかけてほぼ東西方向に開析地形を利用した高さ2m前後の人為的な段差が見られ、段下においては傾斜が一際緩くなる。調査前まではいずれも主に桑畑として利用されていた。

これは明治初期においてもほぼ同様な状況が窺える。「明治地籍図」によれば、特にG区中央部を南北に貫く道路と丘陵部中腹の間は平井幸治郎・平井鉄五郎・平井源吉の三家によって所有されており、現況と相違する点は調査区内北寄りの高位所にこの鉄五郎家の家屋があったことぐらいである。今回の調査で確認された上谷戸第2号井戸がこの名残であると考えられる。また、この真南にあたる段下の造成面からは特に多量の陶磁器類が検出されているが、当地も同家所有の畑地として記載されている。三家の関係については現在のところ明確にしえないが、同姓であること、屋敷が本村からやや離れた当調査区の北方にあって互いに近接していることなどから血縁的に深い繋がりのあることが察せられる。中でも幸治郎家はこの本家筋にあたる家柄といわれている。(以下便宜上、幸治郎家を平井本家と称する)

平井本家は現在、八郎氏を当主とし、当調査区に北接した丘陵斜面部に広大な屋敷構えを伝えている。当地への定着時期については詳らかでないが、屋敷地の西約250m、丘陵の頂部に位置する当家墓地には最古のものでは寛永二年(1625)「奉□院火乗妙□居士」銘のある墓石が存在することから、遅くとも寛永以前にまで溯ることができるものと思われる。また天保年間(1830～43)に作成されたと考えられる「緑埜郡白石村古書古言記」⁶(以下「古書古言記」と略す)によれば、当時まで残存していた天正期(1573～91)のものと同様に伝承される古水帳中に当家の遠祖が全村高の半分に及ぶ530石余を領していたことが記載されていたという。さらに同墓所内の寛保元年(1741)銘の墓石碑文によれば寛永年中に清和源氏新田氏流の堀口姓から平井に改姓した旨が記されており、もしこれらが事実であるとするならば、当家は由緒ある血筋と豊かな財力に支えられた当村内でも屈指の家柄であったと言える。

その後、延宝二年(1674)、それまで幕領であった当村は旗本二家の相給村となり、総石高987石中の287石が松平(鷹司)氏の所領としてあてがわれている。⁸当地は後に白石村古領の名で呼ばれ、「古書古言記」によると平井本家はその二代目の名主役を引き受けている。それは遅くとも元禄六年(1693)以前のことであったと考えられ、当時「身代世さ加里」の家勢を誇っていたことがその委任理由であったと推測される。当家は通称「上谷戸」の名で呼ばれ、以後延享二年(1745)まで名主役として当領内での指導的役割を果たしていたようである。しかし名主役にある程度付随する高札場や郷倉を明和年間(1764～71)までその屋敷地付近で保持、管理していたと伝えられることから当家の村内における優位的な立場は18世紀の後半ごろまでは続いていたものと思われる。しかしこれ以降、村内における本家の位置付けを明確かつ具体的に示す史料は現在のところ見当たらない。¹⁰

ところで「元禄村絵図」を見ると当時の当調査区域内に家屋等の構造物は見当たらない。だが、当時すで

第4節 『元禄村絵図』について

に存在していた平井本家の屋敷とその南方を東流する谷川との間に本家の屋敷区画とほぼ同規模で、かつその内部を空白とする方形区画が外四方を植栽に囲まれた形で記載されている。これは新家屋の建設前の造成地、あるいは逆に家屋倒壊後のさら地などといった屋敷区画を示すものであるのか、または除地等の特殊な土地を表現するものであったのか、今のところ確定的な答えは見いだせない。ただ平井本家の屋敷区画と南北に違和感なく並ぶことから当家と非常に密接な関係をもつ土地であったと考えられる。

また、明治初期には分家筋にあたると思われる鉄五郎家が上谷戸調査区の主要部分を所持していたことから、これより約1世紀溯る当区内の屋敷跡も平井家の縁者が居住していた可能性が極めて高いと考えられる。さらに屋敷跡の一角にある上谷戸第34号土坑からは農民階層の所持品としては大変稀な抹茶椀が2点検出されていることから、ここの住者は本家と非常に近い関係にある人物であったと推測することができる。また当屋敷跡は出土遺物から判断すると18世紀の初頭頃より営まれはじめたが、天明三年の軽石の降下以前には廃絶している状況が窺われ、このことは平井本家が当村吉井藩古領内の先導的立場を離れる時期とほぼ一致している。平井家の名主役交替の理由がいかなるものであったかは不明であるが、いずれにしろそれが家勢の相対的な衰微によるものであったことは間違いあるまい。ここで検出された屋敷跡も18世紀後半における平井本家の衰勢を反映するものとして、あるいは逆に導いたものとしてとらえることができるのであろうか。(船藤亨)

- (1)
- (2) 元禄七年八月「白石村領・般若寺寺領境界論争裁可書上」(『藤岡市史』資料編 近世—205) 平成二年刊
- (3) 群馬県立文書館蔵
- (4) 藤岡市白石 堀越茂三郎家蔵
- (5) 『藤岡市史』資料編 近世—148
- (6) 『群馬県史』資料編9—112 昭和五十二年刊 本文書は、16世紀初頭から天保五年(1834)にわたる白石村の領主および所領の変遷、名主の交替などを克明に記録したものである。伝聞事項の記述も多いが、現在となつてはすでに失われてしまっている古水帳や古名寄帳などを参考にしてまとめられており、その内容はかなり信頼性のあるものであると考えられる。
- (7) 墓石裏面に「堀口美濃守貞満朝臣支流苗裔旨命云 寛永年中俗称善兵衛代ヨリ改 平井氏」とある。旨命とは被葬者の名であるが平井家の系譜上の位置付けは不明である。
- (8) 『群馬県史』通史編4 285頁 平成二年刊 これは初代信平(1636~89)の在任中にあたる。「古書古言記」には、慶安三年(1650)、三代松平(鷹司)仁十郎(矢田藩初代 信清1689~1724)の頃とあるが、これは時代的に一致せず誤認であったものと考えられる。ちなみに「寛政重修諸家譜」によると、当松平家にとって慶安三年とは、信平が義兄にあたる三代將軍家光の招きによって京都から江戸に下り、「廣米千俵、月棒二百口」を給された年にあたる。
- (9) 前掲注2 18世紀以降、平井本家の家系中に四郎右衛門の名を複数見かける。当資料中にも松平仁十郎部分の名主として四郎右衛門の名があり、「古書古言記」の内容からもこれが平井本家の先祖にあたる人物であろうと考えられる。
- (10) 「古書古言記」によると寛政六年(1794)から文政六年(1823)にかけての30年間は四郎左衛門なる者が古領の名主を勤めたとあるが、現在の白石地内のどの家につながる人物であるかは不明である。ちなみに当時の平井本家の当主は四郎右衛門(1766~1842)といい、文化五年(1808)「緑埜村正福寺、白山権現取替議定」(『藤岡市史』資料編—555)に白石村古領の名主として同様の名が見える。このことから四郎左衛門とは四郎右衛門の誤りであるか、または平井本家の四郎右衛門が文化五年前後に名主役を勤めていた可能性も考えられよう。

第5節 白石大御堂遺跡出土試料胎分析鑑定報告

(株)第四紀地質研究所 井上 巖

X線回折試験及び電子顕微鏡観察

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第45表胎土性状表に示すとおりである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{m/m}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製 JDX-8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target : Cu、Filter : Ni、Voltage : 40Kv、Current : 30mA、ステップ角度 : 0.02° 、計数時間 : 0.5SEC。

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製 T-20を用い、倍率は35、350、750、1500、5000の5段階で行い、写真撮影をした。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取扱い

実験結果は第45表胎土性状表に示すとうりである。

第45表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組成が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの高さ(強度)を m/m 単位で測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバーライト(Cristobalite)等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mo-Mi-Hb 三角ダイアグラム

第350図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo、Mi、Hb、の三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、パーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは $Mo / (Mo + Mi + Hb) * 100$ でパーセントとして求め、同様にMi、Hb、も計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1～4はMo、Mi、Hb、の3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第350図に示すとうりである。

2) Mo—Ch、Mi—Hb 菱形ダイアグラム

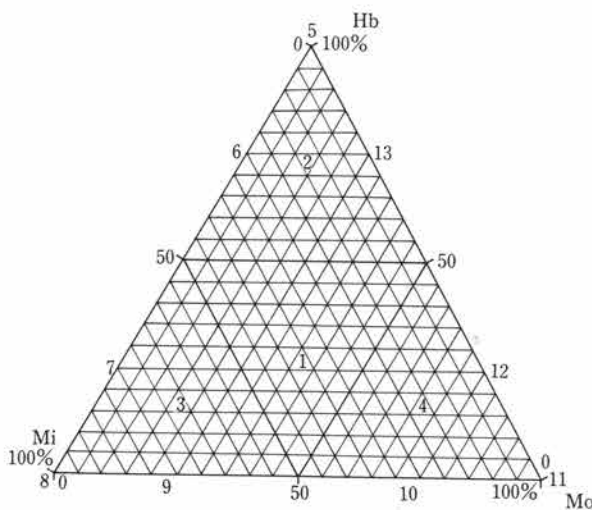
第351図に示すように菱形ダイアグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch)、のうち、a) 3成分以上含まれない、b) Mont、Ch、の2成分が含まれない、c) Mi、Hb、の2成分が含まれない、の3例がある。

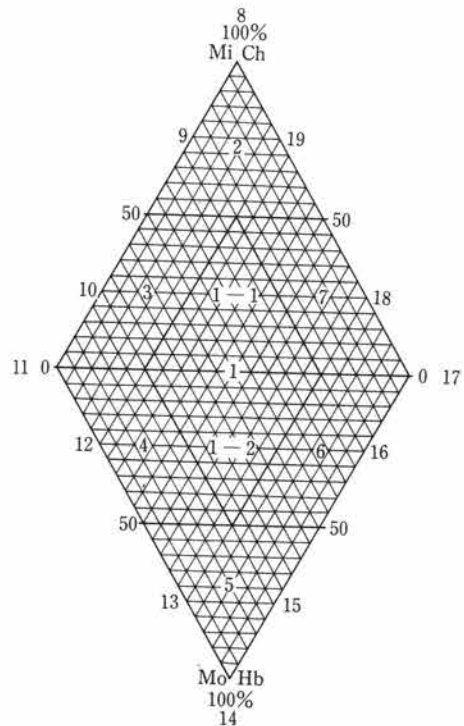
菱形ダイアグラムは Mont—Ch、Mica—Hb の組合せを表示するものである。Mont—Ch、Mica—Hb のそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表するもので、例えば、 $Mo / (Mo + Ch) * 100$ と計算し、Mi、Hb、Ch、も各々同様に計算し記載する。

菱形ダイアグラム内にある1～7はMo、Mi、Hb、Ch、の4成分を含み、各辺はMo、Mi、Hb、Ch、のうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第351図に示すとうりである。



第350図 三角ダイアグラム位置図



第351図 菱形ダイアグラム位置図

第45表 胎土性状表

試料 No	遺物 名称	遺物 番号	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘 土 鉱 物 お よ び 造 岩 鉱 物													ガラス	備 考
					Mo-Mi -Hb	Mo-ch Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch (Fe)	Ch (Mg)	Ka 01	K- fels	Al bite	Qt	Pl	Mu	Cr			
1	瓦A類	4007	F	III	7	9		345	162	307						1528	767		127	中粒	中粒砂
2	瓦A類	4103	A	II~III	1	1	220	208	147	276				182		1335	514		119	中~粗粒	中粒砂
3	瓦A類	4102	E	II~III	6	20		106	150						1498	444		200	中~粗粒	細粒砂	
4	瓦A類	4105	F	II~III	7	9		222	145	398	386				1576	1338		153	中~粗粒	中粒砂	
5	瓦A類	4106	F	III	7	9		409	171	312	295				1607	1863		153	中粒	中粒砂	
6	瓦A類	4301	F	III	7	9		328	129	391	202				1905	937		95	中粒	中粒砂	
7	瓦B類	5001	C	II	5	20			89						1772	873	58	146	中~粗粒	細粒砂	
8	瓦B類	5201	D	I~II	6	10		76	80	85					1705	848	63	172	粗粒	中粒砂	
9	瓦B類	5103	I	I~II	14	20									1015	773	69	154	粗粒	中粒砂	
10	瓦B類	5211	B	II	1	15	97	89	165						1511	721		150	中~粗粒	細粒砂	
11	瓦B類	5303	G	III	7	20		196	128						1567	831		175	中粒	細粒砂	
12	瓦B類	4201	D	III	6	10		176	177	128					1749	549		119	中粒	細粒砂	
13	瓦B類	5231	E	III	6	20		121	145						1896	740		146	中粒	細粒砂	
14	瓦B類	5201	G	II	7	20		125	116						1694	1081		136	中~粗粒	細粒砂	
15	縄文	1053	G	III~IV	7	20		179	150						2793	516		147	細~中粒	粗粒砂	
16	縄文	1036	F	III	7	9		148	137	217	73				2707	747		166	中粒	粗粒砂	
17	弥生	1510	F	III	7	9		195	112	153					3177	687		128	中粒	粗粒砂	
18	弥生	—	A	III~IV	1	1	212	225	160	304					3967	1431		295	細~中粒	粗粒砂	
19	弥生	1511	F	III~IV	7	9		164	158	324	141				2817	638		93	細~中粒	粗粒砂	
20	土師器	1603	E	III	6	20		91	177						1488	2222		189	中粒	中粒砂	
21	土師皿	3004	A	III	1	1	324	187	177	391					1118	381		193	中粒	細粒砂	
22	土師皿	3040	C	II~III	5	20			57						2788	925		140	中~粗粒	細粒砂	
23	土師皿	3041	A	III~IV	1	1	304	537	244	365					2653	1080			細~中粗	細粒砂	
24	土師皿	3129	F	III	7	9		363	212	389	212				2384	959			中粒	細粒砂	
25	土師皿	3125	H	III	12	14	137		90						803	1071			中粒	中粒砂	
26	土師皿	9318	G	III	7	20		102	74						1034	1172		291	中粒	中粒砂	

焼成ランク Mu: I Mu-Cr: II Cr-glass: III glass: IV 原子: Mont: モンモリロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石
Ch: 緑泥石 Ka: カオリナイト Hy: 紫蘇輝石 Qt: 石英 Pl: 斜長石 Cr: クリソバーライト Mu: ムライト

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリソバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリソバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI~Vの5段階に区分した。

a) 焼成ランク I: ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。

b) 焼成ランク II: ムライトとクリソバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

c) 焼成ランク III: ガラスの中にクリソバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

d) 焼成ランク IV: ガラスのみが生成し、原土 (素地土) の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。

e) 焼成ランク V: 原土に近い組織を有し、ガラスは殆んどできていない。

以上のI~Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリソバーライト

などの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第45表の右端の備考に理由を記した。

2-3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類による組合せによって行った。同じ組成を持った土器胎土は、位置分類の数字組合せも同じはずである。

タイプ分類は、三角ダイアグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるもので、便宜上、アルファベットの大きい文字を使用し、同じ組合せのものは同じ文字を使用し、表現した。

例えば、三角ダイアグラムの1と菱形ダイアグラムの1の組合せはA、三角ダイアグラムの2と菱形ダイアグラムの15はBという具合にである。なお、タイプ分類のA、B、C、などは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加にともなって統一した分類名称を与える考えである。

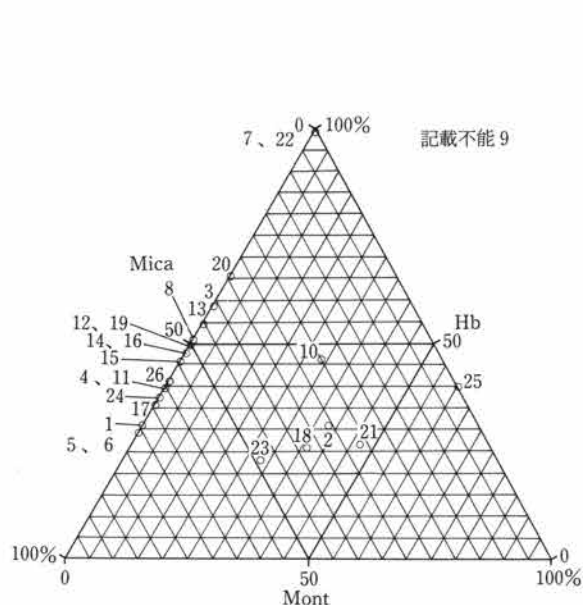
3 実験結果

3-1 タイプ分類

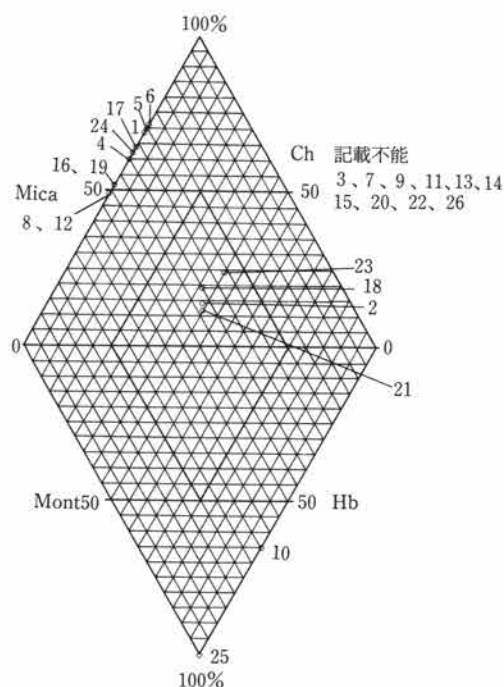
白石大御堂遺跡出土土器は第45表に示すように、第352図三角ダイアグラム、第353図菱形ダイアグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA～Iの9タイプに分類された。

土器胎土のうち最も多いタイプはFタイプ(7-9)で、個体数は8個に達する。続いてGタイプ(7-20)と、Aタイプ(1-1)の4個、Eタイプ(6-20)の3個、Cタイプ(5-20)とDタイプ(6-10)の2個、B(1-15)、H(12-14)、I(14-20)の各1個となる。

分析したものは13~15Cの瓦類が14個、12~17Cの土師質土器が6個、古墳時代の土師器が1個、弥生時代の甕が3個、縄文時代の加曾利E4式深鉢が2個となっている。弥生式土器は株木(B4)遺跡、縄文式土



第352図 Mo, Mi, Hb 三角ダイヤグラム



第353図 Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

器は田篠中原遺跡の分析結果と対比した。

電子顕微鏡分析によると、瓦類は粗粒のガラスが生成している焼成ランクがⅠ～Ⅱのものは2個と比較的少なく、中～粗粒のガラスが生成しているものが多い。土師質土器は中粒のガラスが生成し、焼成ランクはⅢと幾分高い。縄文と弥生式土器は細～中粒のガラスが生成し、焼成ランクはⅢ～Ⅳと低くなる。

次に各タイプについて記述する。

Aタイプ…大御堂—2、18、21、23

Mont、Mica、Hb、Ch、の4成分を含むもので、個体数は4個と、比較的多い。

Bタイプ…大御堂—10

Mont、Mica、Hb、の3成分を含み、Ch 1成分に欠ける。個体数は1個と少ない。

Cタイプ…大御堂—7、22

Hb 1成分を含み、Mont、Mica、Ch、の3成分に欠ける。個体数は2個である。

Dタイプ…大御堂—8、12

Mica、Hb、Ch の3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。個体数は2個である。

Eタイプ…大御堂—3、13、20

Mica、Hb の2成分を含み、Mont、Ch、の2成分に欠ける。個体数は3個である。

Fタイプ…大御堂—1、4、5、6、16、17、19、24

Mica、Hb、Ch、の3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。個体数は8個と最も多い。Dタイプも類似する組成を示しているが検出強度が異なるために位置分類が異なっている。Dタイプも類似する組成として扱えば、個体数は10個となり、最も多いタイプで、在地あるいは在地近傍の可能性が考えられる。

Gタイプ…大御堂—11、14、15、26

Mica、Hb、の2成分を含み、Mont、Ch、の2成分に欠ける。個体数は4個と比較的多い。組成的にはEタイプと類似するもので、Eタイプも含めると7個となり、個体数の多いことから推察して、Fタイプと同様に在地あるいは在地近傍の可能性が考えられる。

Hタイプ…大御堂—25

Mont、Hb、の2成分を含み、Mica、Ch、の2成分に欠ける。個体数は1個と少ない。

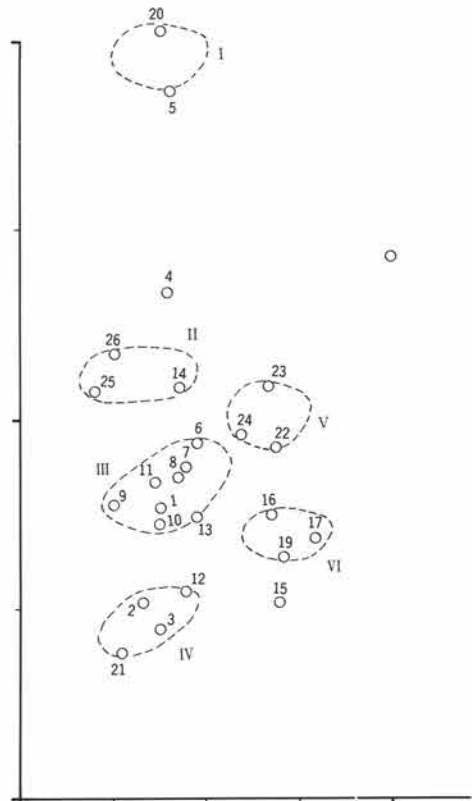
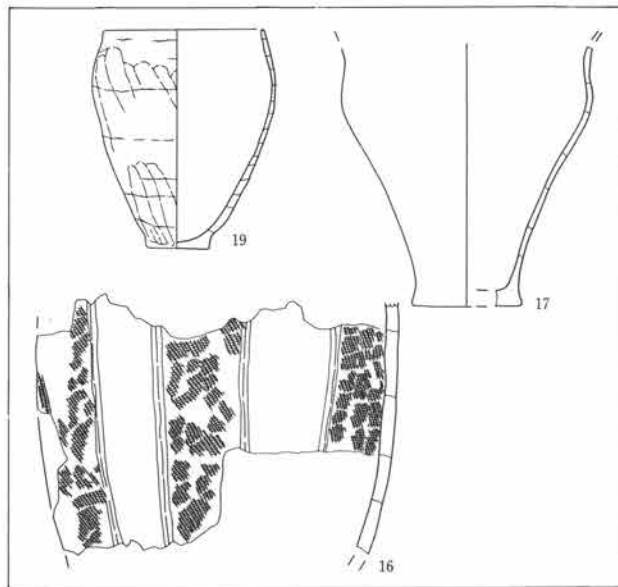
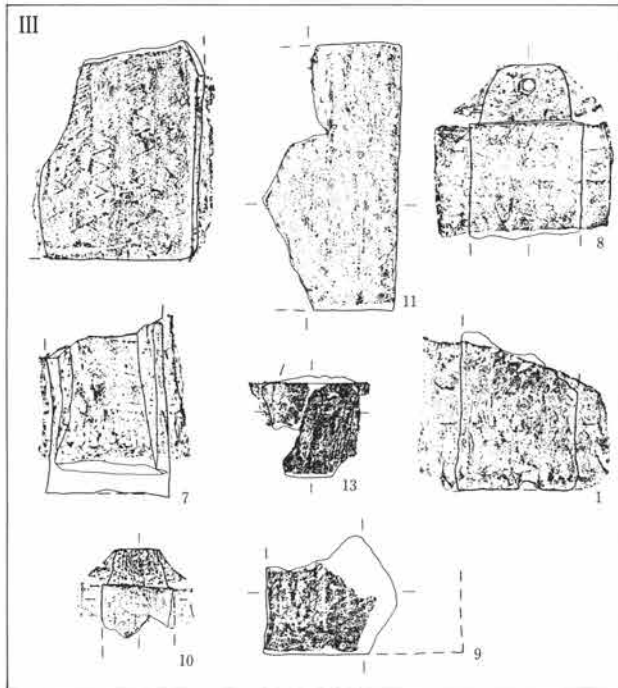
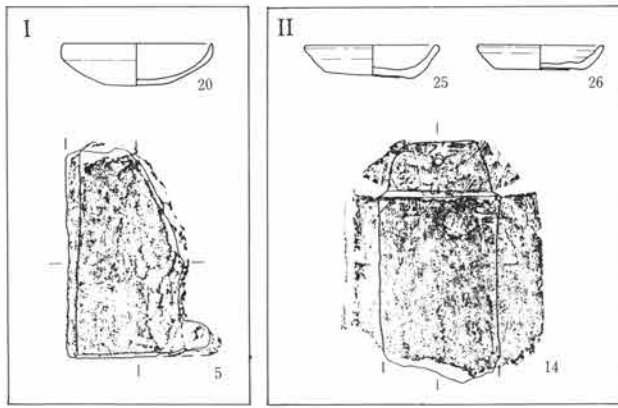
Iタイプ…大御堂—9

Mont、Mica、Hb、Ch、の4成分に欠ける。個体数は1個である。粗粒のガラスが生成し、高温で焼成されたときにできるムライト、クリストパーライト生成していることから判断して、4成分は高温のために分解してガラス化したものであろう。

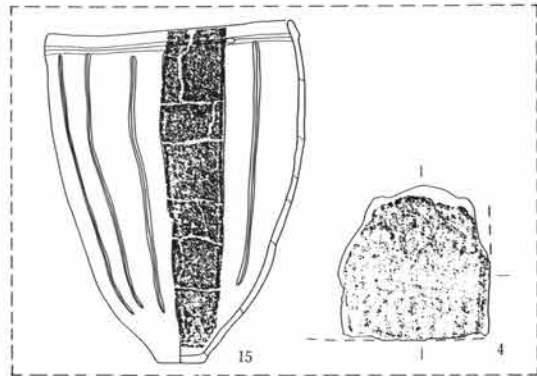
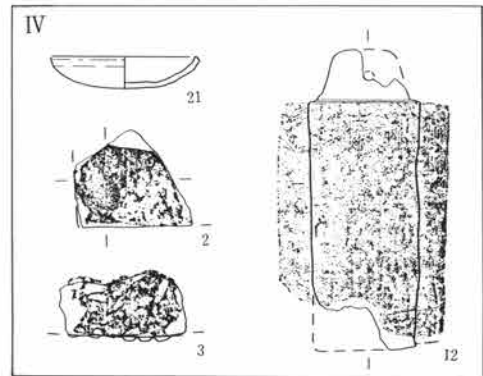
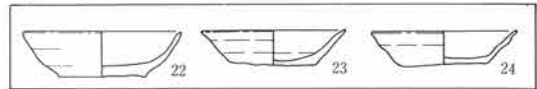
分析結果によるタイプ分類ではA～Iの9タイプに分類されたが、DとF、EとGのように類似するものを1つとすると7タイプになる。またこれらの分析結果の特徴は雲母類(Mica)と角閃石(Hb)を主体とし、緑泥石(Ch)とモンモリロナイト(Mont)が加わるという組成を示していることである。この様な組成は結晶片岩系との関わりが強いと判断される。

田篠中原遺跡の縄文式土器でも7—9と7—20の組成をもつものが主流となり、同様の傾向が認められる。大御堂—15は7—20のGタイプ、大御堂—16は7—9のGタイプで、組成的には非常によく似ているといえる。

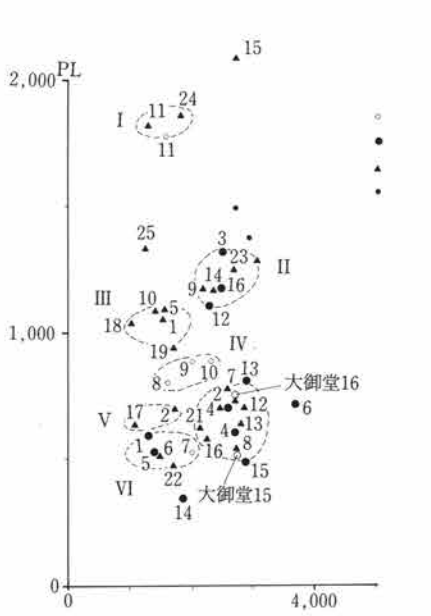
大御堂—17、18、19は弥生式土器であるが、株木(B4)遺跡の組成と比較すると大御堂—17と19は7—9の



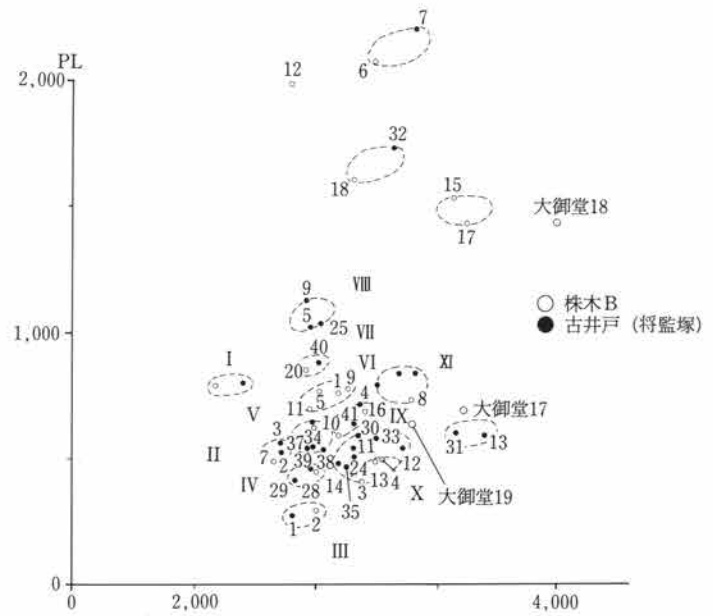
V 第355図 Qt-P1相関図一瓦・土師質土器一



第354図 Qt-P1相関図分析資料実測図



第356図 Qt-Pl 相関図 —縄文土器—



第357図 Qt-Pl相関図—弥生土器—

- 田篠中原 加曾利E3 7-11
- // 加曾利E4
- △ 1~6 12-16
- ▲ 将監塚1~25
- 原土 上・下層

Fタイプ、大御堂-18は1-1のAタイプであり、株木(B4)遺跡の組成とよく類似している。

組成的な問題と混入した砂の問題とは密接な関係にあるので、砂との関係については次の項で検討する。

3-2 石英 (Qt) —斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るといことは個々の集団が持つ土器製作上の個有の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々個有の石英—斜長石比を有しているといえる。

この個有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは前記のように各々の集団の有する個有の技術の一端である。

第354図石英—斜長石相関図に示すように、大御堂遺跡出土土器はI~VIの6つのグループと“その他”に分類された。縄文式土器は田篠中原遺跡の土器と、弥生式土器は株木(B4)遺跡の土器と対比、検討した。

次に各グループと“その他”について各々検討する。

I グループ…大御堂-5、20

石英は800~200、斜長石は1850~2200の範囲にあり、個体数は2個である。これらは斜長石の強度が異常に高く、他と比較して異質である。斜長石の強度において2つの土器には差があり、同じグループを形成するものではないかも知れない。

IIグループ…大御堂-14、25、26

石英は600～1800、斜長石は1050～1200の範囲にあり、個体数は3個である。25と26は土師質土器、14はB類の丸瓦である。土師質土器は近接した関係にあるが瓦は離れており、両者は異なるグループを形成するのかも知れない。

IIIグループ…大御堂-1、6、7、8、9、10、11、13

石英は800～2200、斜長石は700～950の範囲にあり、個体数は8個と最も多い。1と6はA類の瓦であるが、他はB類の瓦で構成され、瓦が集中するグループ、特にB類の瓦が集中するグループとして特徴付けられる。

IVグループ…大御堂-2、3、12、21

石英は800～1900、斜長石は350～550の範囲にあり、個体数は4個である。2と3はA類の連珠紋平瓦、12はB類の丸瓦、21は土師質土器で構成される。このグループの特徴はA類の連珠紋平瓦が集中することとB類の丸瓦や土師質土器など異なるものが共存することである。胎土的にはAタイプで特徴付けられるようである。土師質土器では21だけが離れており、他と比較して特徴的である。

Vグループ…大御堂-22、23、24

石英は2200～3200、斜長石は900～1100の範囲にあり、個体数は3個である。これらはいずれも土師質土器であり、土師質土器のグループとして特徴付けられる。

VIグループ…大御堂-16、17、19

石英は2400～3500、斜長石は650～750の範囲にあり、個体数は3個である。16は縄文式土器の加曾利E 4、17と19は弥生式土器の甕である。胎土はいずれもFタイプであり、統一的である。弥生式土器とFタイプの胎土で特徴付けられる。

“その他” …大御堂-4、15、18

4はA類の唐草文の平瓦で、斜長石の強度が高いのが特徴である。15は縄文式土器の加曾利E 4タイプで、斜長石の強度が幾分低い。18は弥生式土器の甕で、石英と斜長石の強度が他と比較して高く、異質である。組成的にはAタイプの胎土であり、この地域のもつと判断される。縄文式土器に関しては田篠中原遺跡の土器との対比で特徴を述べる。

<A類の瓦について>

大御堂-1、4、5、6はいずれもFタイプの胎土で構成され、石英の強度は変化が小さいが、斜長石の強度において高いものから低いものへと分布が分散する。斜長石の強度が高いものは4と5の唐草紋、それより低い1、6は丸瓦と平瓦となり、両者には差があるように見受けられる。また2と3は連珠紋の平瓦であり、この様に見てくると瓦の文様によって斜長石の強度が異なっているように見受けられる。

<B類の瓦について>

大御堂-7、8、9、10、11、13の瓦はIIIグループに集中し、平瓦、丸瓦、均正唐草紋平瓦など形の異なるものや文様の異なるものが共存し、これら異なるものが同じ焼成方法で焼かれているように見受けられる。12はIVグループに属し、斜長石の強度が低く異質であり、14は斜長石の強度が高く、これも異質である。

<土師質土器について>

土師質土器は大きく分けて3タイプとなる。大御堂-21は唐草文の瓦のグループのIVグループに属し、胎土もAタイプで、類似性が高い。この土器は他のものと異なり、異なる器種と共存するのが特徴である。22、

23、24はVグループを形成し、土師質土器だけで構成されるグループとして特徴付けられる。25と26は非常に近接した関係にあり、これら2個で独自のグループを形成するようである。

<土師器について>

大御堂-20は明らかに斜長石の強度が高く他と比較して異質である。組成的にはEタイプで遺跡周辺の組成と一致している。A類の唐草文平瓦と近い関係にあるかも知れない。

<縄文式土器について>

大御堂-15と16は縄文式土器の加曾利EIVタイプの深鉢である。田篠中原遺跡の土器と比較したものが第356図である。図からも明らかなように田篠中原遺跡のVIIグループの中に入っている。このグループは加曾利E3タイプの土器で構成されるものであり、器種的には異なっている。グルーピングの中にはちょうど入っており、組成的には、15は7-20、16は7-9で田篠中原遺跡の土器との類似性は高い。

<弥生式土器について>

弥生式土器については株木B4遺跡の土器との対比を行った。株木B4遺跡については第357図に示す通りである。この図には埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘した古井戸遺跡の土器も記載してある。大御堂-17はVIIグループに近く、大御堂-19はVグループに近い。これらはいずれも古井戸遺跡のグループに近いもので、株木B遺跡とは幾分離れている傾向を示すこと、また、組成的にも両者は7-9であり、古井戸遺跡の組成と類似していることから推察して、古井戸遺跡の土器に近いように思える。大御堂-18は石英と斜長石の強度が高く、どこにも属さず、異質である。

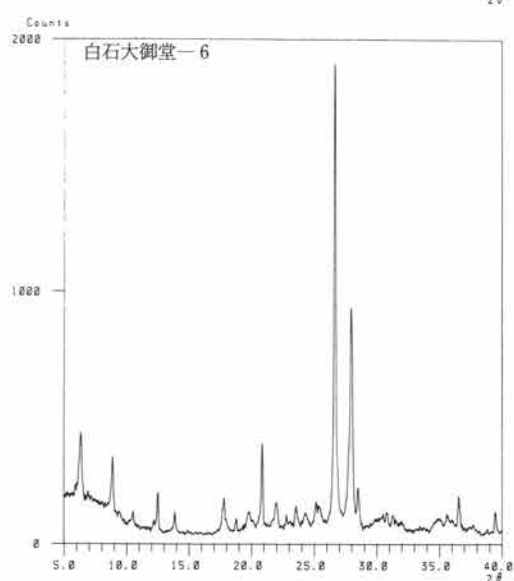
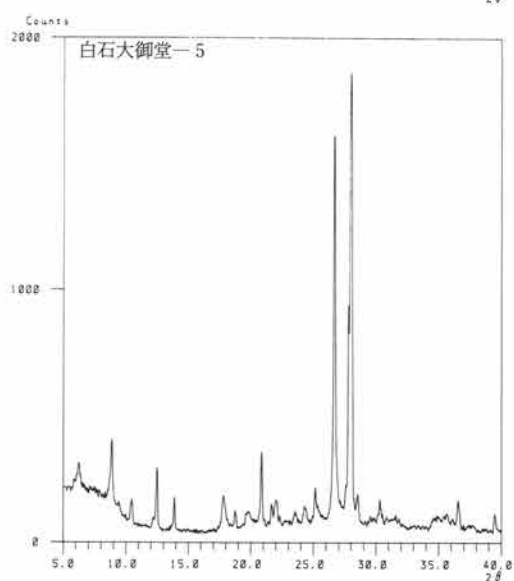
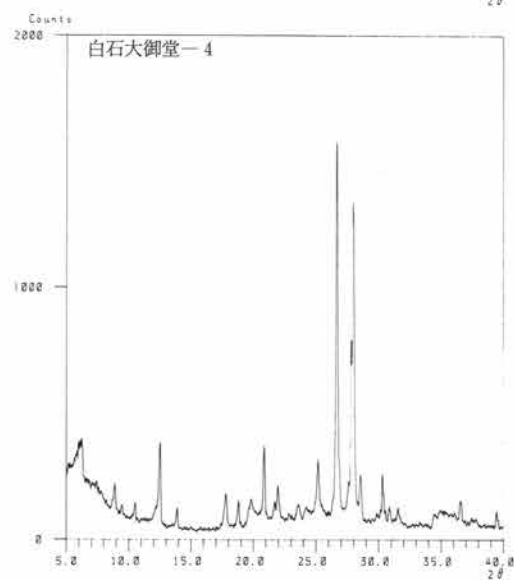
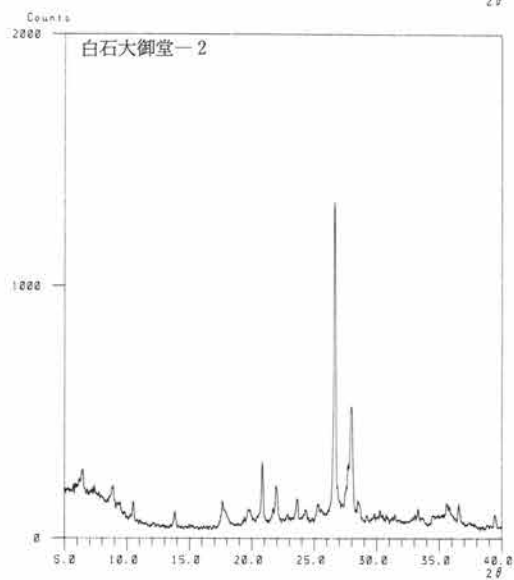
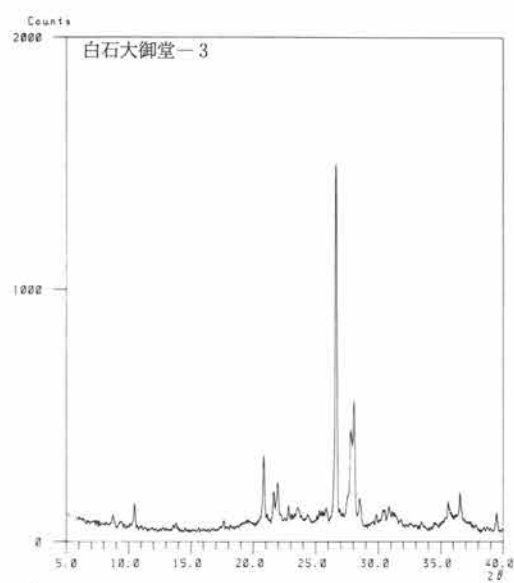
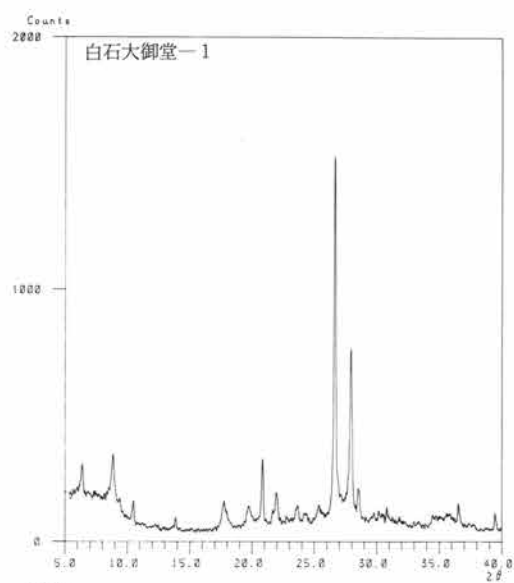
4 ま と め

- i) 土器胎土はA-Iの9タイプに分類されたがDとF、EとGタイプはそれぞれ類似する組成をしており、タイプとしては7タイプになるのではなかろうか。雲母類 (Mica) と角閃石 (Hb) の2成分を主体とし、モンモリロナイト (Mont) と緑泥石 (Ch) の両方、あるいはどちらか一方が含まれる組成は結晶片岩系の影響を受けているものと判断され、白石大御堂遺跡の土器の大半はこの状況下にある。
株木B遺跡と田篠中原遺跡の土器の組成と比較対比してみると、大御堂遺跡の土器の組成は両遺跡の組成と類似している。
- ii) 電子顕微鏡分析によると瓦類は中～粗粒のガラスが生成し、焼成ランクがI～IIあるいはII～IIIと高い。土師質土器、弥生式土器、縄文式土器は中粒のガラスが生成し、焼成ランクはIIIあるいはIII～IVと幾分低い。
- iii) 石英と斜長石の分類ではI～VIの6グループと“その他”に分類された。A類の瓦は分散しているのが特徴であるが、斜長石の強度の高いものは唐草紋、中くらいのは丸瓦と平瓦、低いものは連珠紋と分かれているようである。B類の瓦はIIIグループに集中し、異なる器種のもものが混在している。土師器は明らかに斜長石の強度が高く、異質である。土師質土器は3つのグループに分かれ、はっきりとした傾向を示している。
- iv) 白石大御堂遺跡の縄文式土器は加曾利E4タイプの土器である。田篠中原遺跡の土器と対比すると、組成的には類似性が高いが、田篠中原遺跡の分類では加曾利E3タイプの土器で構成されるVIIグループに属する。このことが意味することははっきりしない。大御堂-17、18、19の弥生式土器は株木B4遺跡の土器と対比したが、大御堂-17と19は株木B4遺跡の土器よりは埼玉県古井戸遺跡の土器に近いグループと組成を示している。大御堂-18は石英と斜長石の強度がともに高く、どのグループにも属さず、異

第5節 白石大御堂遺跡出土試料胎土分析鑑定報告

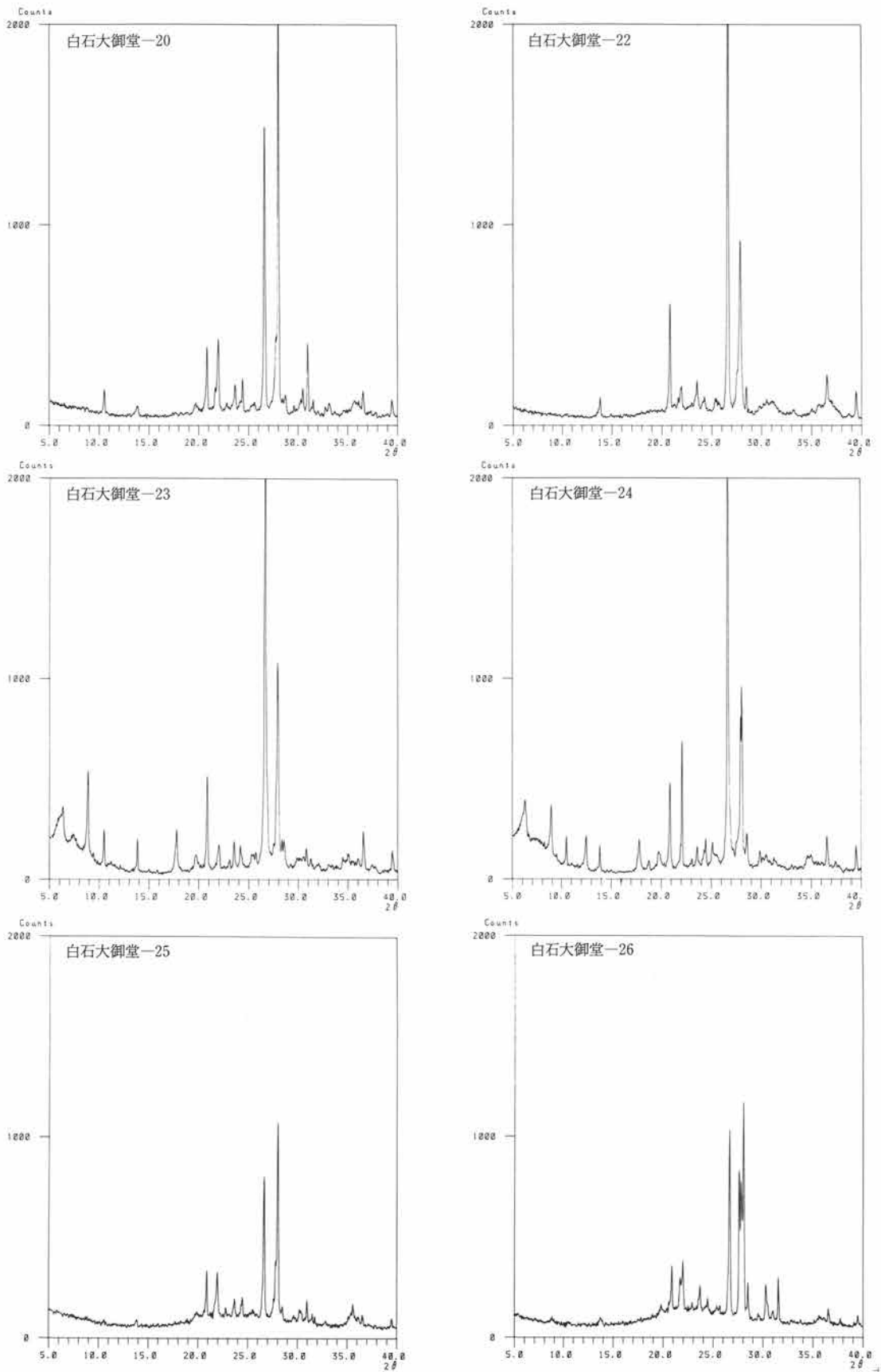
質である。大御堂-19は東海系であるが、胎土的には結晶片岩系であり、在地あるいは在地近傍で作られている可能性が高いと推察された。

第VI章 考 察



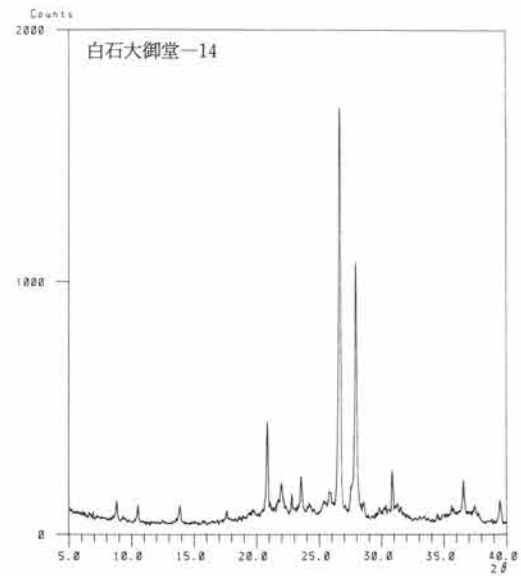
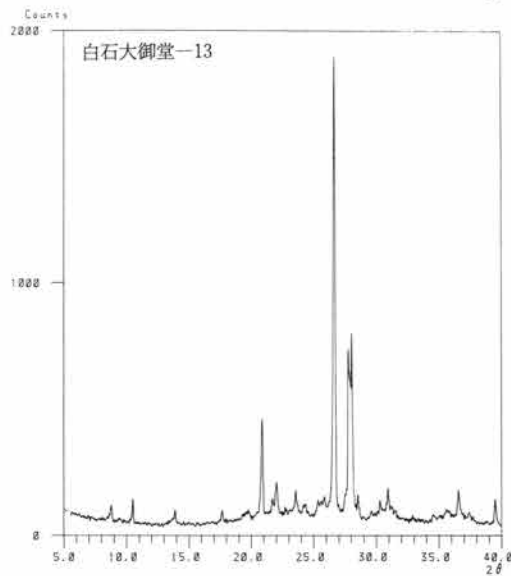
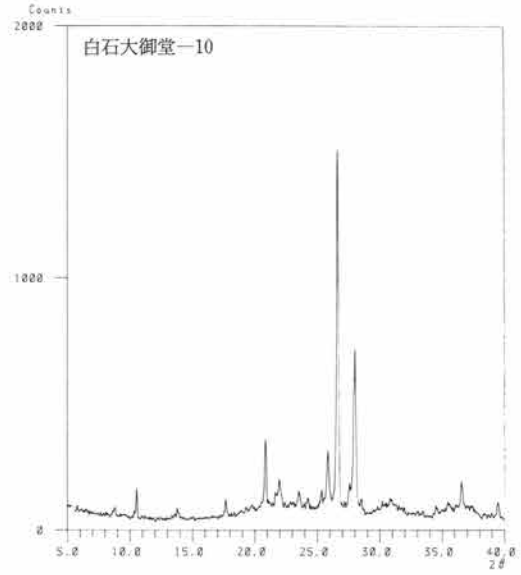
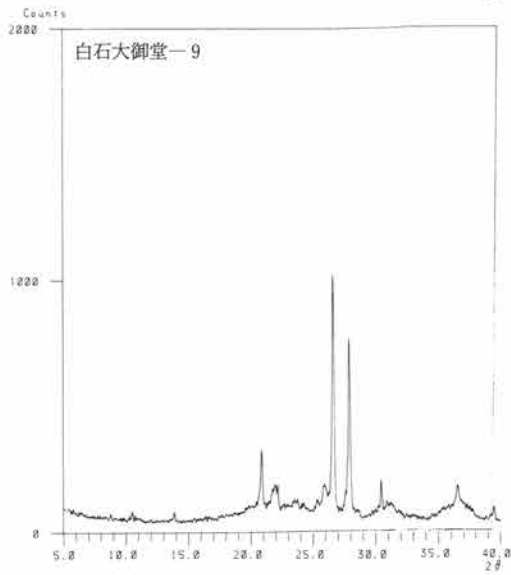
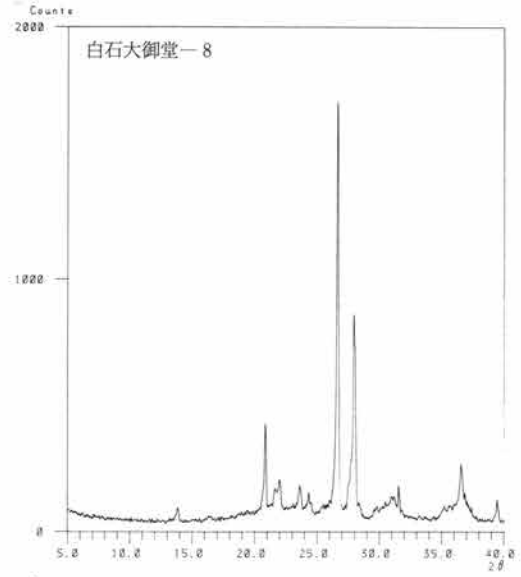
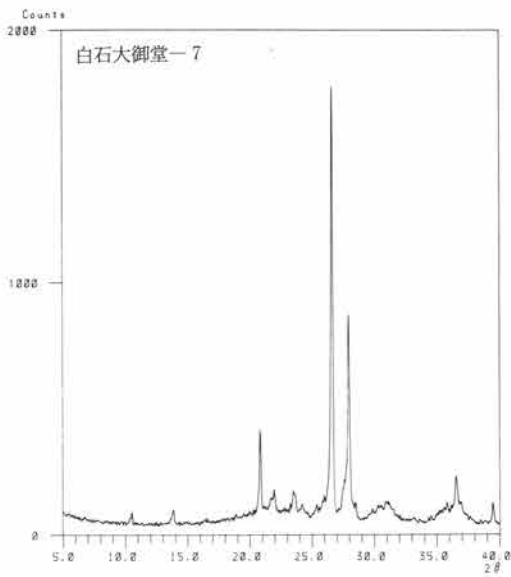
第358図 X線回析図型(1)

第5節 白石大御堂遺跡出土試料胎土分析鑑定報告



第359図 X線回析図型(2)

第VI章 考 察



第360図 X線回析図型(3)

白石大御堂遺跡整理参考文献

※ 編・著者名「論文名」「書名・雑誌名」発行年、発行所（編集・発行が同一の場合略）

- (1) 群馬県教育委員会『関越自動車道地域埋蔵文化財分布調査報告書—直江津線—昭和47年度』1972
- (2) 群馬県教育委員会『群馬県遺跡台帳Ⅱ』—西毛編—1974
- (3) 群馬県教育委員会『群馬県遺跡地図』1973
- (4) ㈱ダイヤコンサルタント『関越自動車道藤岡市第一次土質調査報告書』1983、日本道路公団東京第二建設局富岡工事事務所
- (5) ㈱ダイヤコンサルタント『関越自動車道藤岡市第二次土質調査報告書』1985、日本道路公団東京第二建設局富岡工事事務所
- (6) 藤岡市史編さん委員会『藤岡市史 自然編』1989、藤岡市
- (7) 金子稔『藤岡市の地形・地質』『藤岡市史 自然編』1989、藤岡市
- (8) 木崎嘉雄 野村哲 中島啓治『群馬のおおいたちをたずねて』1977、上毛新聞社
- (9) 多野藤岡地方誌編集委員会『多野藤岡地方誌 総説編・各説編』1976
- (10) 藤岡町史編纂委員会『藤岡町史』1957、群馬県藤岡市
- (11) 藤岡市教育委員会『F2 緑蔭遺跡群Ⅰ』昭和57年度～昭和62年度土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1986、藤岡市教育委員会
- (12) 藤岡市教育委員会『F9 薬師原遺跡』藤岡市農業協同組合穀類乾燥貯蔵施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1985 藤岡市農業協同組合・藤岡市教育委員会
- (13) 藤岡市教育委員会『F1 竹沼遺跡』昭和52年度発掘調査概報 1978、藤岡市教育委員会
- (14) 藤岡市教育委員会『藤岡市詳細遺跡分布調査（Ⅲ）平井地区』1984、藤岡市教育委員会
- (15) 藤岡市教育委員会『藤岡市詳細遺跡分布調査（Ⅱ）美土里地区』1983、藤岡市教育委員会
- (16) 藤岡市教育委員会『藤岡市詳細遺跡分布調査（Ⅴ）藤岡地区』1986、藤岡市教育委員会
- (17) 藤岡市教育委員会『藤岡市詳細遺跡分布調査（Ⅳ）神流地区』1985、藤岡市教育委員会
- (18) 藤岡市教育委員会『藤岡市詳細遺跡分布調査（Ⅰ）小野地区』1982、藤岡市教育委員会
- (19) 藤岡市教育委員会『A1 堀ノ内遺跡群』国道254号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1982、藤岡市教育委員会
- (20) 藤岡市教育委員会『C4 小野地区遺跡群発掘調査報告書』1982、藤岡市教育委員会
- (21) 藤岡市教育委員会『B4 株木遺跡 都市計画街路小林—立石線第1期事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1984 藤岡市建設部都市施設課・藤岡市教育委員会
- (22) 藤岡市教育委員会『藤岡市文化財探訪のしおり』1987、藤岡市教育委員会
- (23) 群馬県教育委員会『東平井古墳群 昭和55年度遺跡詳細分布調査実績報告書』1981
- (24) 群馬県教育委員会文化財保護課『歴史の道調査報告書 鎌倉街道』1983、群馬県教育委員会
- (25) 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団『温井遺跡』—関越自動車道（新湯線）地域埋蔵文化財調査報告書第2集—1981
- (26) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『森・中Ⅰ・中Ⅱ』—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第2集—1983
- (27) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『上栗須・下栗須・中大塚遺跡』主要地方道前橋長瀬線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告 1989、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (28) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『本郷尺地遺跡』一級河川笹川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 1989
- (29) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『本郷山根遺跡』一級河川笹川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 1989
- (30) 藤岡市教育委員会『一級河川中川小規模河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）』1987
- (31) 群馬県『上毛古墳綜覧』『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第五輯』1938、群馬県
- (32) 坂詰秀一『上野・金山瓦窯跡』1966、ニューサイエンス社
- (33) 多野郡教育会（清水喜一郎）『多野郡誌』1910、多野郡教育会
- (34) 多野郡教育会編『多野郡誌（復刻版）』1978、文献出版
- (35) 藤岡市史編さん委員会『藤岡市史 資料編』民俗 1989、藤岡市史編さん委員会
- (36) 藤岡市史編さん委員会『藤岡市史 資料編』近世 1989、藤岡市史編さん委員会
- (37) 藤岡市史編さん委員会『白石古墳群調査報告書』藤岡市史資料編別巻 1989、藤岡市史編さん委員会
- (38) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『長根羽田倉遺跡』1990、関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
- (39) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『矢田遺跡 平安時代時住居跡編（Ⅰ）』1987、関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
- (40) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『大御堂遺跡現地説明会資料』1986
- (41) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『大島上城遺跡・北山茶臼山西古墳』1988、関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- (42) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『田篠上平遺跡』1987、関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- (43) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『田篠中原遺跡』1990、関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
- (44) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『田端遺跡』—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第12集—1989
- (45) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『下佐野遺跡Ⅱ地区』—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第11集—1986
- (46) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『下佐野遺跡Ⅰ地区・寺前地区（4）中世・近世編』—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第11集—1989
- (47) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『舟橋遺跡』—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第12集—1989
- (48) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『元島名B・吹屋遺跡』1982 関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
- (49) 高崎市教育委員会『元島名遺跡—圃場整備事業に伴う元島名遺跡の調査報告（2）』1979、高崎市文化財調査報告書第6集
- (50) 高崎市教育委員会『矢島遺跡・御布呂遺跡—圃場整備事業に伴う浜川遺跡群の調査概要』1979、高崎市文化財調査報告書第7集
- (51) 高崎市教育委員会『寺ノ内遺跡』1979、高崎市文化財調査報告書第13集
- (52) 高崎市教育委員会『芦田貝戸遺跡』1979、高崎市文化財調査報告書第19集
- (53) 高崎市教育委員会『矢中遺跡群（Ⅸ）下村北・砂内遺跡』1986
- (54) 高崎市教育委員会『矢中遺跡群（Ⅶ）矢中村東遺跡』1984

- (55) 高崎市教育委員会『柴崎遺跡群(VII) 村間・富士塚前A遺跡』1984
- (56) 高崎市教育委員会『石原稲荷山古墳』1981
- (57) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『下斉田・滝川A 滝川B・C』1987
- (58) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『熊野堂遺跡(1)』1984
- (59) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『熊野堂遺跡第三地区 雨壺遺跡』1984
- (60) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『上並榎南遺跡』1985
- (61) 吉井町教育委員会『塚原遺跡・黒熊第1遺跡』1983
- (62) 吉井町教育委員会『黒熊遺跡群発掘調査報告書(2) (図版編)』1983
- (63) 吉井町教育委員会『黒熊遺跡群発掘調査報告書(3) (図版編・本文編)』1984
- (64) 富岡市教育委員会『稲荷森遺跡発掘調査報告書』1980
- (65) 富岡市教育委員会『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』1981
- (66) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『庚塚・上・雷遺跡』国道122号バイパス改良工事に伴う文化財調査報告書I 1980
- (67) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『清里・陣場遺跡』県営畑地帯総合土地改良事業清里地区文化財調査報告第1集 1981
- (68) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『歌舞伎遺跡』一般国道17号線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1982
- (69) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『同道遺跡』県立高崎北高等学校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1983
- (70) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『大原II・村主遺跡』1984
- (71) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『中尾一遺物編』1984 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
- (72) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『藪田遺跡』—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第4集— 1985
- (73) 群馬県教育委員会『上野国分寺周辺地域発掘調査報告書』1971、群馬県教育委員会
- (74) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『下東西遺跡』—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第16集— 1987
- (75) 群馬県教育委員会『上野国分寺周辺地域発掘調査報告書』1971 群馬県教育委員会
- (76) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『上野国分僧寺・尼寺中間地域 第1分冊』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 1986
- (77) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『上野国分僧寺・尼寺中間地域 第2分冊』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第20集 1987
- (78) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『上野国分僧寺・尼寺中間地域 第3分冊』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第24集 1988
- (79) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『上野国分僧寺・尼寺中間地域 第4分冊』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第33集 1989
- (80) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥東原遺跡 県営圃場整備事業荒砥南部地区埋蔵文化財発掘調査報告書』1979
- (81) 群馬県教育委員会『上野国分寺周辺地域発掘調査報告』1971
- (82) 群馬県教育委員会『上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報II』1975
- (83) 日本考古学協会『十三宝塚遺跡』『日本考古学年報27 1974年版』1976
- (84) 日本考古学協会『長楽寺遺跡』『日本考古学年報28 1975年版』1977
- (85) 尾島町教育委員会『長楽寺遺跡 世良田小学校改築に伴う発掘調査』1978
- (86) 群馬県史編さん委員会『群馬県中世史年表』1976 群馬県
- (87) 群馬県史編さん委員会『群馬県史 資料編5 中世1 古文書・記録』1989 群馬県
- (88) 群馬県史編さん委員会『群馬県史 資料編6 中世2 編年資料1』1989 群馬県
- (89) 群馬県史編さん委員会『群馬県史 資料編7 中世3 編年資料2』1989 群馬県
- (90) 群馬県史編さん委員会『群馬県史 資料編8 中世4 金石文』1989 群馬県
- (91) 群馬県史編さん委員会『群馬県史 資料編8 中世4 金石文』1989 群馬県
- (92) 群馬県史編さん委員会『群馬県史 通史編3 中世』1989 群馬県
- (93) 山崎 一『群馬県古城址の研究』上巻、1971
- (94) 山崎 一『群馬県古城址の研究』下巻、1971
- (95) 山崎 一『群馬県古城址の研究 補遺編』上巻、1979
- (96) 山崎 一『群馬県古城址の研究 補遺編』下巻、1979
- (97) 群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1989
- (98) 新井房夫『関東盆地北西部地域の第四紀編年』1962 群馬大学紀要自然科学編104 群馬大学
- (99) 藤岡市史編さん委員会『藤岡地方の中世史料 藤岡市史資料編 別巻』1988、藤岡市
- (100) 埼玉県教育委員会『埼玉の中世城館跡』1988
- (101) 臼樹原・榎下遺跡調査会(神川町教育委員会内)『臼樹原・榎下遺跡1(阿保境の館跡) 中世編』—朝日工業㈱児玉工場関係埋蔵文化財発掘調査報告— 1989
- (102) 臼樹原・榎下遺跡調査会(神川町教育委員会内)『臼樹原・榎下遺跡調査概報I』1986
- (103) 臼樹原・榎下遺跡調査会(神川町教育委員会内)『臼樹原・榎下遺跡調査概報II』1987
- (104) 上里町教育委員会『金久保内出遺跡発掘調査報告書—県営ほ場整備事業上里北部に伴う発掘調査報告書—』1987、上里町教育委員会
- (105) 上里町教育委員会『前原遺跡発掘調査報告書—県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書—』1987、上里町教育委員会
- (106) 上里町教育委員会『五明院寺発掘調査報告書—町道改良舗装工事に伴う発掘調査報告書—』1987、上里町教育委員会
- (107) 吉本富男編『埼玉歴史街道』1990、埼玉新聞社
- (108) 太田富康『鎌倉街道』『埼玉歴史街道』1990、pp49~76、埼玉新聞社
- (109) 鶴ヶ丘古墳お寺山遺跡発掘調査団・鶴ヶ島町教育委員会『お寺山遺跡発掘調査報告書』1985
- (110) 所沢市教育委員会『椿峰遺跡群—埼玉県所沢市椿峰遺跡群の調査』1984、所沢市文化財調査報告書第12集
- (111) 富士見市遺跡調査会『針ヶ谷遺跡群I』1979、埼玉県富士見市遺跡調査会 富士見市遺跡調査会調査報告第6集
- (112) 富士見市遺跡調査会『針ヶ谷遺跡群II』1979、埼玉県富士見市遺跡調査会 富士見市遺跡調査会調査報告第7集

- (113) 浦和市遺跡調査会『北宿、馬場北、馬場東、馬場・小室山遺跡発掘調査報告書—馬場土地区画整理地内遺跡2—』1983
- (114) 熊谷市教育委員会『三尻遺跡群 黒沢館跡・樋ノ上遺跡』1985、埼玉県熊谷市教育委員会 昭和59年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- (115) 足利市教育委員会『史跡足利学校跡第1次発掘調査概報』1983
- (116) 足利市教育委員会『史跡足利学校跡第2次発掘調査概報』1984
- (117) 足利市教育委員会『史跡足利学校跡第3次発掘調査概報』1985
- (118) 足利市教育委員会『史跡足利学校跡第4次発掘調査概報』1986
- (119) 足利市教育委員会『史跡足利学校跡第5次発掘調査概報』1987
- (120) 足利市教育委員会『史跡足利学校跡第6次発掘調査概報』1988
- (121) 前澤輝政『足利智光寺址の研究』1967、綜芸舎
- (122) 足利市教育委員会『智光寺跡・平石遺跡第2次発掘調査結果について』(記者発表・現地説明会資料)1990
- (123) 史跡白水阿弥陀堂境域復元調査団『昭和57年度 史跡白水阿弥陀堂境域復元整備調査報告書』第一次調査～第五次調査 1987 いわき市教育委員会
- (124) 史跡白水阿弥陀堂境域復元調査団『昭和58年度 史跡白水阿弥陀堂境域復元整備調査報告書』第七次調査報告書 1988 いわき市教育委員会
- (125) 史跡永福寺試掘調査団『鎌倉市二階堂 史跡永福寺跡 —昭和56年度—』1982、鎌倉市教育委員会
- (126) 鎌倉市教育委員会『鎌倉市二階堂 史跡永福寺跡 —昭和59年度—』1985 鎌倉市教育委員会
- (127) 鎌倉市教育委員会『鎌倉市二階堂 史跡永福寺跡 —昭和60年度—』1986 鎌倉市教育委員会
- (128) 鎌倉市教育委員会『鎌倉市二階堂 史跡永福寺跡 —昭和61年度—』1987 鎌倉市教育委員会
- (129) 鎌倉市教育委員会『鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書 —昭和60年度—』1986、鎌倉市教育委員会
- (130) 横浜市教育委員会『史跡称名寺境内 庭園池保存整備報告書(昭和53～62年度)』1988
- (131) 御伊勢森中世遺跡発掘調査委員会『神奈川県伊勢原市御伊勢森遺跡(傳上杉定正館址)の調査』1979、学校法人産業能率大学
- (132) 文化庁『埋蔵文化財発掘調査報告第三 無量光院跡(岩手県西磐井郡平泉町)』1954(初版)、1976(再版)、吉川弘文館
- (133) 藤島玄次郎『平泉 毛越寺と観自在王院の研究』1961、財団法人東京大学出版会
- (134) 森蘊・荒木伸介・小野真一『伊豆韭山願成就院発掘調査概報』1971、韭山町教育委員会
- (135) 森蘊『日本史小百科19 庭園』1984、近藤出版社
- (136) 森蘊『中世庭園文化史』奈良国立文化財研究所学報第六冊 1959、奈良国立文化財研究所
- (137) 杉山信三『院の御所と御堂—院家建築の研究—』奈良国立文化財研究所学報第十一冊 1962、奈良国立文化財研究所
- (138) 杉山信三『藤原氏の氏寺とその院家』奈良国立文化財研究所学報第十六冊 1968、奈良国立文化財研究所
- (139) 白石太一郎・伊藤玄三・近藤喬一『平安京三条西殿発掘調査報告』[平安博物館研究紀要第3輯]1971
- (140) 平安京調査本部(甲元真之)『平安京六角堂の発掘調査—平安京跡研究調査報告 第2輯—』1977 財団法人古代学協会
- (141) 京都市埋蔵文化財研究所『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』1978 京都市埋蔵文化財研究所調査報告IV
- (142) 平安博物館考古学第三研究室(下條信行・植山茂・定森秀夫)『三條西殿跡』[平安京跡研究調査報告第7輯]1983、財団法人古代学協会
- (143) 石田茂作『総説飛鳥時代寺院址の研究』1944、大塚巧芸社
- (144) 石田茂作『伽藍配置の変遷』[日本考古学講座]6 1956、河出書房
- (145) 石田茂作『伽藍配置の研究』[新版仏教考古学講座 第二卷 寺院]pp199～218 1984、雄山閣出版
- (146) 田辺征夫・森郁夫『寺院の造営』[日本歴史考古学を学ぶ(中)]pp1547、1986、有斐閣
- (147) 橋本久和『在地系土器を中心とした中近世土器研究の現状』平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修『中・近世窯器調査課程講義資料』1990、奈良国立文化財研究所
- (148) 飯田陽一『土師質土器について』[群馬文化]204号、群馬県地域文化研究協議会
- (149) 木津博明『上野国に於ける在地生産土器に就いて』[中近世土器の基礎研究V]1989 日本中世土器研究会
- (150) 横田洋三『出土土師血編年試案』[平安京左京五条三坊十五町の発掘調査]古代学協会
- (151) 服部実喜『鎌倉旧市域出土の中世土師器—所請かわらけの編年を中心に』[中近世土器の基礎研究1]
- (152) 伊野近富『かわらけ』考 [京都府埋蔵文化財論集 第1集]1987、
- (153) 小森俊寛『平安京とそれに重複する中近世京都及び周辺出土土器編年案』平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修『中・近世窯器調査課程 消費地の様相<平安京> 講義資料』1990、奈良国立文化財研究所
- (154) 亀井明徳『輸入陶磁器の研究』平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修『中・近世窯器調査課程講義資料』1990、奈良国立文化財研究所
- (155) 出光美術館『近年発見の窯址出土の中国陶磁展』1982
- (156) 大橋康二『肥前陶磁の変遷』平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修『中・近世窯器調査課程 生産地の様相<唐津・有田・伊万里> 講義資料』1990、奈良国立文化財研究所
- (157) 大橋康二『肥前陶磁の変遷と出土分布—発掘調査資料を中心として—』[北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁]1984、佐賀県立九州陶磁文化館
- (158) 三上次男『有田天狗谷古窯』1972、有田町教育委員会
- (159) 赤羽一郎『生産地の様相<常滑>』平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修『中・近世窯器調査課程講義資料』1990、奈良国立文化財研究所
- (160) 吉岡康暢『珠洲焼を中心とした生産と流通』平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修『中・近世窯器調査課程講義資料』1990、奈良国立文化財研究所
- (161) 藤沢良祐『生産地の様相<瀬戸・美濃>』平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修『中・近世窯器調査課程講義資料』1990、奈良国立文化財研究所
- (162) 藤澤良祐『瀬戸大窯発掘調査報告』[瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V]1986、瀬戸市歴史民俗資料館

- (163) 葛西城址調査会(宇田川洋編)『青戸・葛西城址調査報告III』1975、葛飾区・葛西城址調査会
- (164) 東京大学理学部遺跡調査室『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』1989、東京大学遺跡調査室発掘調査報告書I
- (165) 瀬戸市教育委員会『尾呂一愛知県瀬戸市定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』1990、瀬戸市教育委員会
- (166) 江戸遺跡研究会『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨・資料編 1990
- (167) 上原真人「中・近世瓦研究の現状」平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修「中・近世窯器調査課程講義資料」1990、奈良国立文化財研究所
- (168) 佐川正敏「法隆寺の中・近世瓦の研究」平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修「中・近世窯器調査課程講義資料」1990、奈良国立文化財研究所
- (169) 印南敏秀「南山城の瓦づくり」『山城郷土資料館報第4号』1986、京都府立山城郷土資料館
- (170) 駒井綱之助『かわら日本史』1981、雄山閣出版
- (171) 印南敏秀「京瓦の技法と用具」『京都府埋蔵文化財論集 第1集』1987
- (172) 岡本東三「屋瓦とその技法」『日本歴史考古学を学ぶ(下)』1986、有斐閣
- (173) 大川清「瓦摺 種類と用途」『新版考古学講座 第7巻』有史文化・下、1979、雄山閣出版
- (174) 田辺征夫「瓦」『考古資料の見方<遺物篇>』1977、柏書房
- (175) 福山敏男・大塚ひろみ「法成寺の古瓦」『仏教芸術68』1968、毎日新聞社
- (176) 植山茂「平安宮所用瓦の様相」『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』1983、角田文衛先生古稀記念事業会(平安博物館内)
- (177) 乗安和二三「周防国跡出土の東大寺瓦」『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』1983、角田文衛先生古稀記念事業会(平安博物館内)
- (178) 森郁夫「瓦」『文化財講座 日本の建築1 古代』1977、第一法規出版株式会社
- (179) 小林康幸「関東地方における中世瓦の模様一中世都市鎌倉と周辺地域に見る系譜性を中心として」『神奈川考古 第25号』1989 神奈川考古同人会
- (180) 中谷雅治「平安時代後期の瓦当文様」『平安文化の研究1』古代学協会研究紀要第2輯 1971、財団法人古代学協会
- (181) 岡本東三「七世紀代の瓦窯跡」『仏教芸術174号 特集最近発掘された寺院跡とその遺物』1987、毎日新聞社
- (182) 福田実「永福寺(神奈川県)」『仏教芸術174号 特集最近発掘された寺院跡とその遺物』1987、毎日新聞社
- (183) 小林謙一・佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦」『伊弉留我』法隆寺昭和資財帳調査概報10』1989、小学館
- (184) 井上新太郎「本瓦葺の技術」1974、彰国社
- (185) 今泉潔「絵図に見る瓦作り」『ふいーのどーとNo5』1963、本庄考古学研究室
- (186) 今泉潔「*板木棧瓦、の造瓦器具と製作技術」『物質文化42』1984、物質文化研究会
- (187) 伊藤ていじ『城一築城の技法と歴史一』読売選書23 1973 読売新聞社
- (188) 今里幾次「播磨魚橋瓦窯跡」『播磨考古学研究』1980
- (189) 今里幾次「小野市長尾寺跡出土瓦」加古川史学会1988
- (190) 上原真人「平安時代後期の軒瓦に関する基礎的研究」『考古学論考一小林行雄先生古稀記念論文集一』1982
- (191) 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14合併号、1978、元興寺文化財研究所
- (192) 上原真人「中央官衙系瓦屋の製品に見る筧記号について」
- (193) 上原真人「11・12世紀に於ける瓦当文様の研究」『古代文化』第32巻第5・6号 1980、財団法人古代学協会
- (194) 植山茂「古代瓦私見(四)一平安京に運び込まれた瓦(1)一」『古代文化第33巻第9号』1980、財団法人古代学協会
- (195) 内田律雄「菅谷地区出土の李朝系古瓦について」『史跡富田城跡 菅谷地区一第一次発掘調査概報一』1985、広瀬町教育委員会
- (196) 久保智康「越前における近世瓦生産の開始について」『福井県立博物館紀要第3号』1989、福井県立博物館
- (197) 梅沢太夫「慈光寺出土瓦について」『埼玉県立歴史資料館研究紀要第3号』1981
- (198) 法隆寺『法隆寺の古瓦』1978、法隆寺
- (199) 法隆寺昭和資財帳編纂所『伊弉留我 法隆寺昭和資財帳調査概報10』1989、小学館
- (200) 原廣志「鎌倉における瓦の様式」『仏教芸術164号 特集鎌倉の発掘』1986、毎日新聞社
- (201) 元興寺文化財研究所「中・近世瓦の調査研究一元興寺篇一」1983
- (202) 脇田晴子「中世の手工業と流通」平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修「中・近世窯器調査課程講義資料」1990、奈良国立文化財研究所
- (203) 橋口尚武「平安時代後半の遺跡・遺物あれこれ」一多摩地区を中心として一『多摩のあゆみ』Vol. 25 1981、多摩中央信用金庫
- (204) 藤澤典彦「中世墓地ノート」『仏教芸術182号 特集中世の墳墓』1989、毎日新聞社
- (205) 小川良祐「お寺山遺跡」『仏教芸術182号 特集中世の墳墓』1989、毎日新聞社
- (206) 馬淵和雄「鎌倉永福寺とその苑池」『仏教芸術164号 特集鎌倉の発掘』1986、毎日新聞社
- (207) 玉林美男「鎌倉の葬制」『仏教芸術164号 特集鎌倉の発掘』1986、毎日新聞社
- (208) 手塚直樹「鎌倉出土の工芸品」『仏教芸術164号 特集鎌倉の発掘』1986、毎日新聞社
- (209) 永井正憲「中世鎌倉の生活用具」『仏教芸術164号 特集鎌倉の発掘』1986、毎日新聞社
- (210) 藤田邦雄「中世土器素描一加賀地方の土師器を中心にして一」『北陸の考古学II』1989、石川考古学研究会
- (211) 西和夫「図解 古建築入門 日本建築はどう造られているか」1990、彰国社
- (212) 峰岸純夫「争点日本の歴史第四巻中世編」1991、(株)新人物往来社
- (213) 佐藤弘夫「旧仏教と鎌倉新仏教の関係をどうみるか」『争点日本の歴史第四巻中世編』1991、(株)新人物往来社
- (214) 古泉弘「江戸の考古学」1987、ニューサイエンス社 考古学ライブラリー48
- (215) 川原由典「日本各地の墳墓 北関東」『新版仏教考古学講座第7巻墳墓』pp175~193、1984、雄山閣出版(株)
- (216) 久保常晴「特論 墓地と火葬場」『新版仏教考古学講座第7巻墳墓』pp223~235、1984、雄山閣出版(株)
- (217) 小山富士夫「日本の陶磁」1974、中央公論美術出版
- (218) 亀井明德「中世の貿易陶磁器研究の現状」『月刊考古学ジャーナル10 (No268)』1986、ニューサイエンス社
- (219) 橋本久和「中世土器研究の現状」『月刊考古学ジャーナル10 (No268)』1986、ニューサイエンス社

- (220) 大三輪龍彦「鎌倉の中世遺跡」『月刊考古学ジャーナル10 (No.268) 1986、ニューサイエンス社
- (221) 坂詰秀一「中世考古学管見」『月刊考古学ジャーナル10 (No.268) 1986、ニューサイエンス社
- (222) 常滑市教育委員会『常滑市高坂古窯址群』常滑市文化財報告第10集 1981
- (223) 矢部倉吉『古銭と紙幣』1990 (改訂版)、金園社
- (224) 坂詰秀一『考古学ライブラリー45 出土渡来銭—中世—』1986、ニューサイエンス社
- (225) 杉崎章・村田正雄『常滑焼—その歴史と民俗—』1988、(株)名著出版
- (226) 山村宏「一の谷中世墳墓群の発掘」『中世の都市と墳墓』1988 日本エディタースクール出版部
- (227) 千々和到『板碑とその時代』1988 平凡社
- (228) 市古貞次・浅井清・久保田淳・篠原昭二・堤精二・堀内秀晃・益田宗・三好行雄編『日本文化総合年表』1990、岩波書店
- (229) 伊藤延男「鎌倉建築」『日本の美術』198号、1982
- (230) 中村浩「窯構造の変遷」『日本歴史考古学を学ぶ(下) 生産の諸相』1986、有斐閣
- (231) 坂詰秀一「中・近世考古学の形成」『日本歴史考古学を学ぶ(下) 生産の諸相』1986、有斐閣
- (232) 宇野隆夫「考古資料にみる古代と中世の歴史と社会」1989、真陽社
- (233) 縣敏夫「墓塔としての板碑」『月刊考古学ジャーナル』No.288、1988、ニューサイエンス社
- (234) 京都市埋蔵文化財研究所『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』1978、京都市埋蔵文化財研究所調査報告IV
- (235) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告書』1986、奈良国立文化財研究所
- (236) 毎日新聞社「特集 鎌倉の発掘」『佛教藝術 164号』
- (237) 毎日新聞社「特集 中世の墳墓」『佛教藝術 182号』1989
- (238) 前 久夫『仏教堂塔事典』1979、東京美術
- (239) 藤澤典彦「墓塔・墓標」『日本歴史考古学を学ぶ(中)』pp185~203、1986、有斐閣
- (240) 池上悟「骨蔵器」『日本歴史考古学を学ぶ(中)』pp147~159、1986、有斐閣
- (241) 木下密運「中世の墳墓」『日本歴史考古学を学ぶ(中)』pp133~146、1986、有斐閣
- (242) 田口昭二『美濃焼』1983、ニューサイエンス社
- (243) 内藤匡『新訂古陶磁の科学』1969、雄山閣出版
- (244) 大三輪龍彦『鎌倉の考古学』1985、ニューサイエンス社
- (245) 森『瓦』
- (246) 黒板勝美・国史大系編修会『新訂増補 国史大系 吾妻鏡 第一』1984、吉川弘文館
- (247) 黒板勝美・国史大系編修会『新訂増補 国史大系 吾妻鏡 第二』1986、吉川弘文館
- (248) 黒板勝美・国史大系編修会『新訂増補 国史大系 吾妻鏡 第三』1983、吉川弘文館
- (249) 黒板勝美・国史大系編修会『新訂増補 国史大系 吾妻鏡 第四』1985、吉川弘文館
- (250) 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『女堀—中世初期・農業用水址の発掘調査—1984、(株)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (251) 勝守すみ『長尾氏の研究』関東武士研究書 第六巻 1978 名著出版
- (252) 久保田順一「西上野における公領・庄園と在地領主」『群馬文化』209号、群馬県地域文化研究協議会
- (253) 赤羽一郎『常滑焼』1984、ニューサイエンス社
- (254) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『浜町屋敷内遺跡C地点』1929
- (255) 峰岸純夫『中世の東国、地域と権力』1989、東京大学出版会
- (256) 藤岡瓦沿革史編纂委員会『藤岡のかわら史』1977

なお、本報告書をまとめるにあたり、多くの人々を煩わした。また、多くの人々に御助言・御指導・御教示を得て、多大な成果をあげることができた。記して謝意を表明したい。特に鎌倉市教育委員会の玉村氏・福田氏・原氏には発掘・整理をそれぞれの段階で貴重な御助言をいただいた。

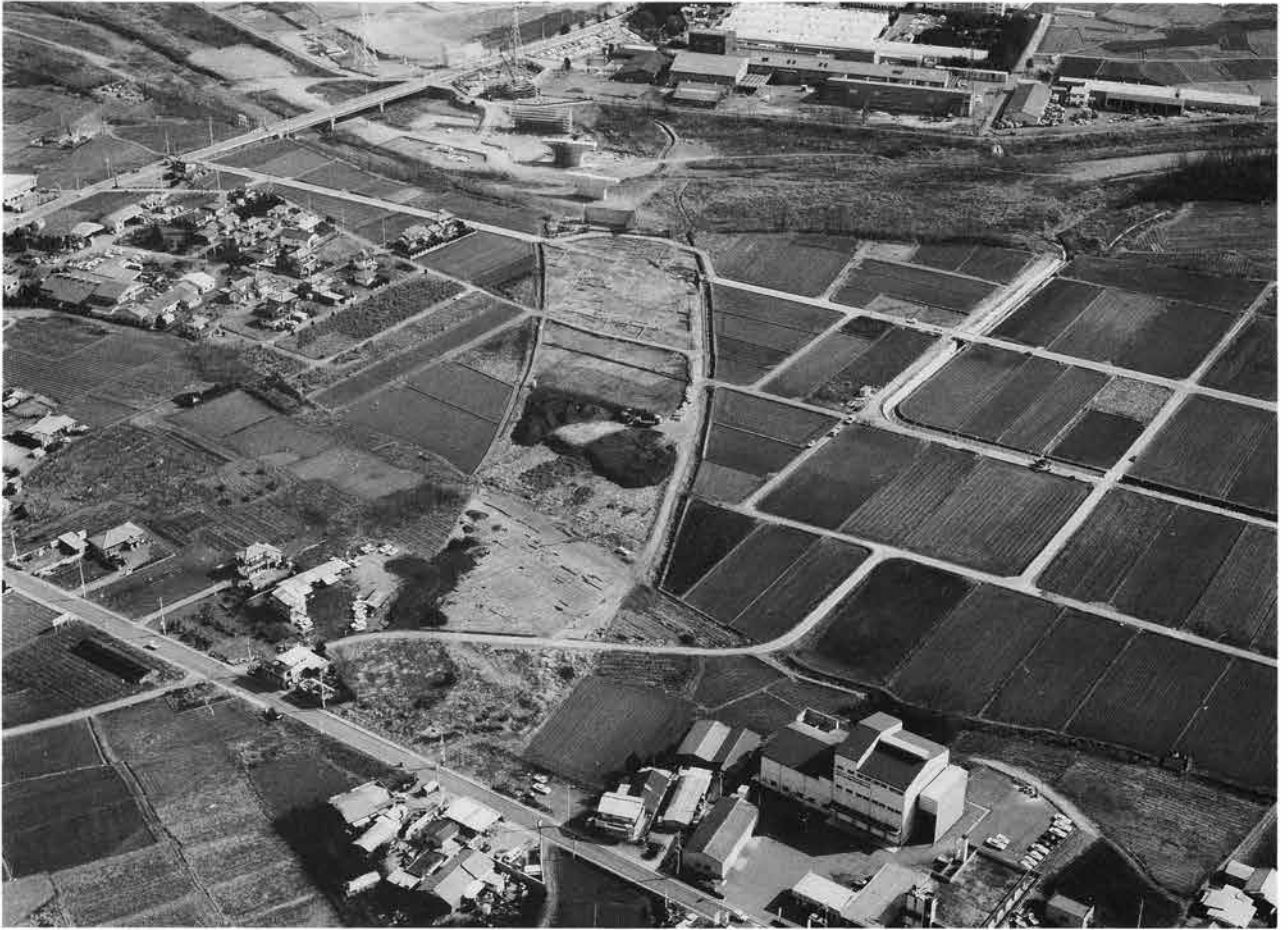
また、奈良国立文化財研究所の平成2年度発掘技術者専門研修『中・近世窯器調査課程』においては、上原真人先生・宮本長二郎先生をはじめとして講師の先生方並びに研修生の皆様に、本遺跡出土資料の実見を願ひ、有益な御教示を得ることができた。大橋康二先生には九州からはるばる来団されての御指導を受け、こうした諸先輩の御協力の成果が本報告書と言える。本報告書で検討課題としたものについては、今後、継続的に調査研究を進めることを自己の課題として背負ひ、皆様の御協力に感謝する次第である。

(綿貫鋭次郎)

写 真 图 版



白石大御堂遺跡空中写真



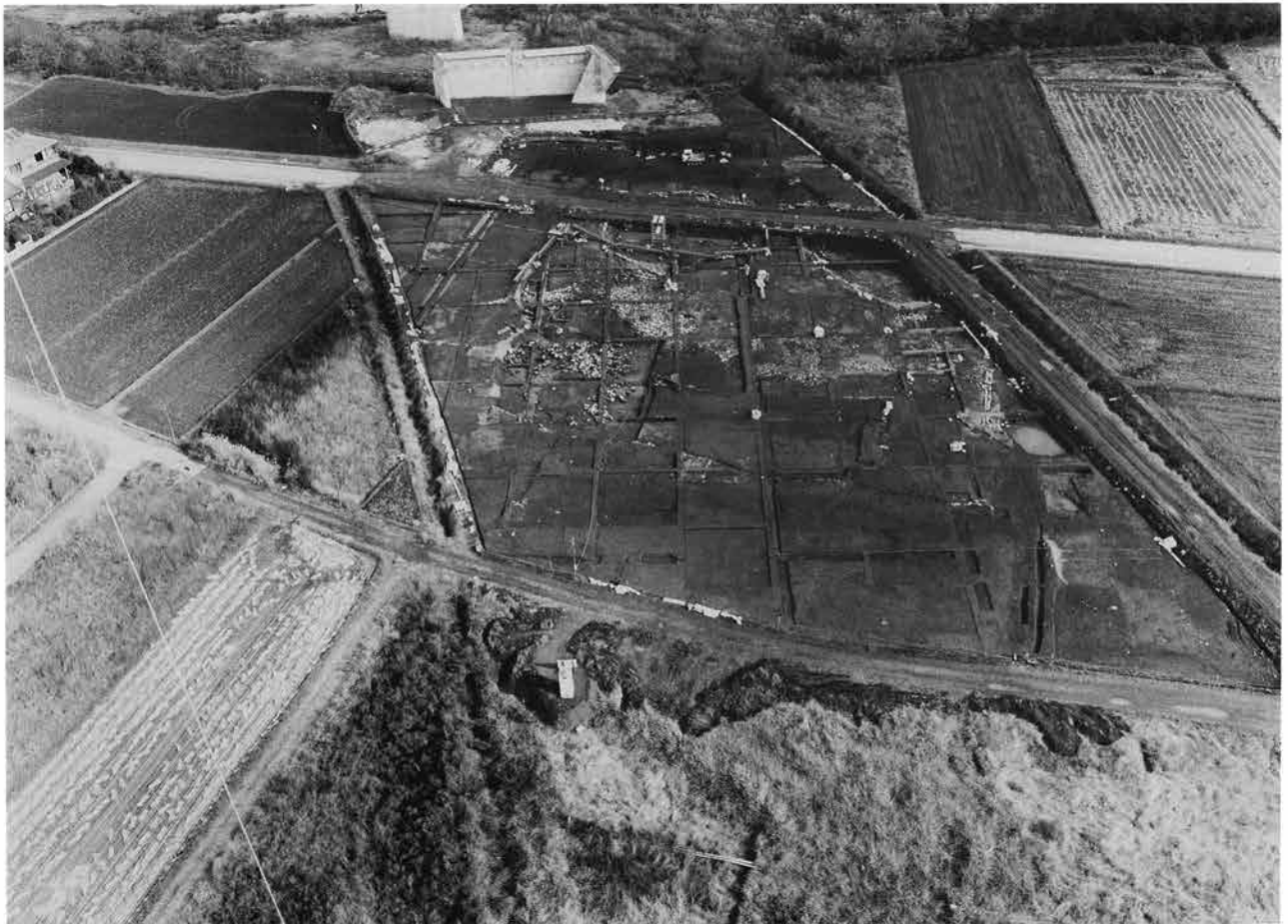
白石大御堂遺跡空中写真（西から）



白石大御堂遺跡空中写真（東から）



寺院址垂直写真 (A・B区)



寺院址斜め写真 (西から)



寺院址地鎮祭



線刻五輪塔付近(調査前)



寺院址中央部の作業風景



土塁跡付近(調査前)



寺院址中央部試掘調査



寺院址から西方を望む



降雨後の寺院址（南西から）



作業風景（南池西）



作業風景（南池北縁部）



作業風景（南池西）



作業風景（埋葬遺構）



城山小児童の遺跡見学



作業風景（北西部）



大御堂第1号溝状遺構・第1号濠跡（北から）



大御堂第1号濠跡・土塁跡（南から）



大御堂第1号濠跡土層（南から）



土塁跡・大御堂第2号溝状遺構



大御堂第1号濠跡土層



大御堂第1号濠内土坑土層・炭化物出土状況



大御堂第1号濠内土坑遺物出土状況



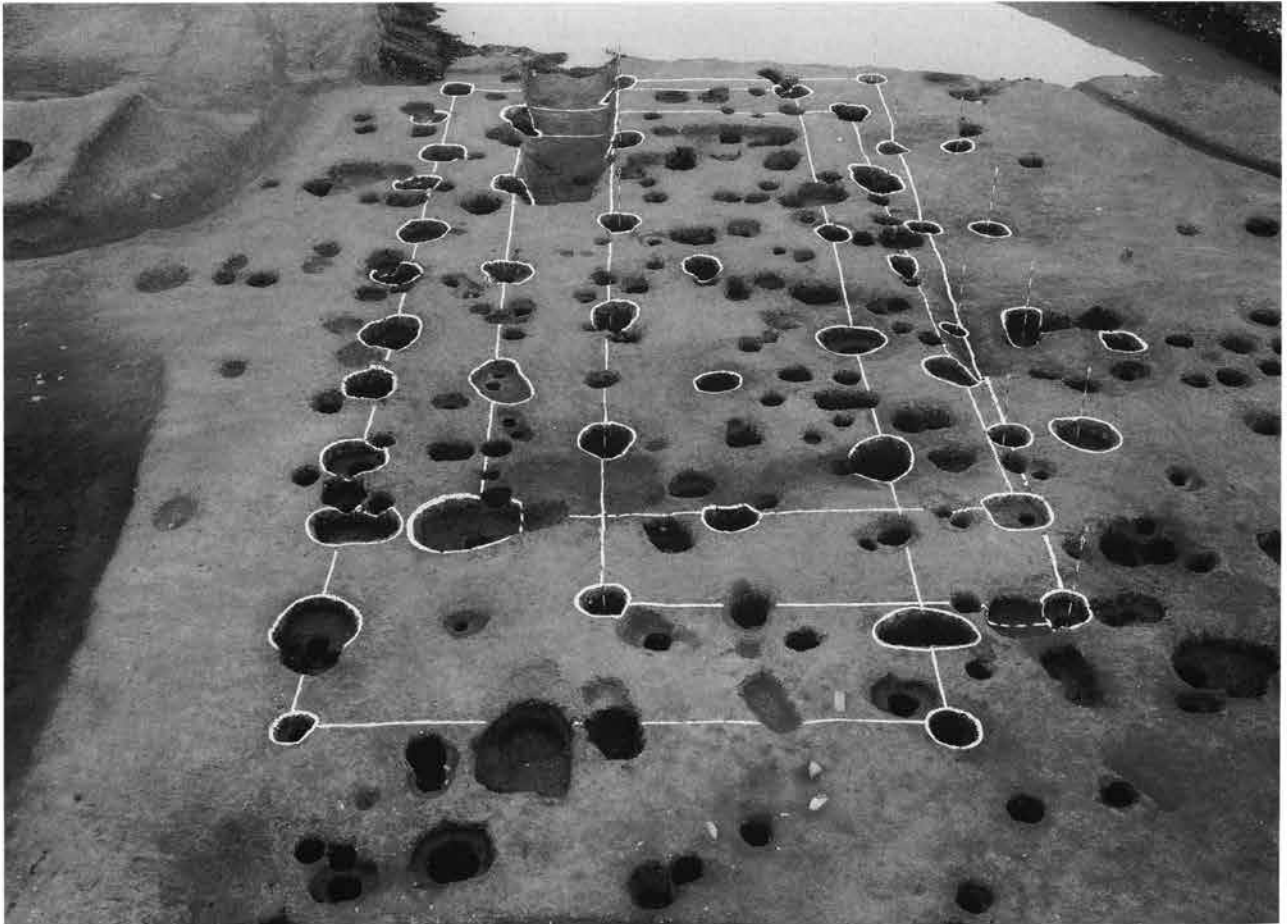
寺院址西部・中央部を望む（南西から）



寺院址南西部掘立柱建物跡群（北から）



寺院址南西部掘立柱建物跡南棟群（南から）



寺院址南西部掘立柱建物跡北棟群（西から）



寺院址南西部掘立柱建物跡群内土坑 a (東から)



寺院址南西部掘立柱建物跡群内土坑 a (南から)



大御堂第 2 号溝状遺構・土塁跡



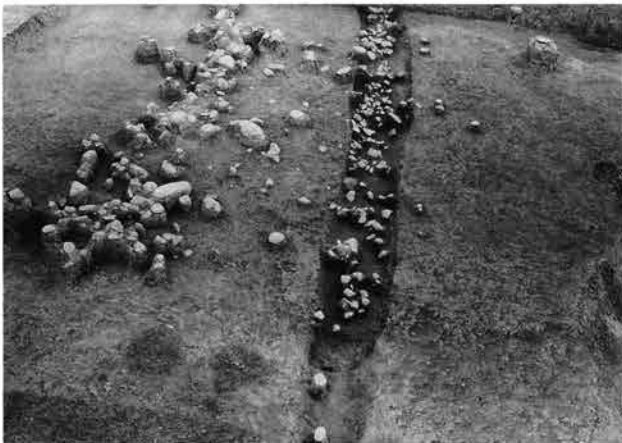
大御堂第 2 号溝状遺構



寺院址中央部作業風景



大御堂第 2 号溝状遺構遺物出土状況 (第 1 号配石墓下)



大御堂第 2 号溝状遺構遺物出土状況



大御堂第 2 号溝状遺構遺物出土状況



寺院址北西部瓦溜まり（東から）



寺院址北西部瓦溜まり（南から）



大御堂第3号・第4号溝状遺構（東から）



大御堂第3号・第4号溝状遺構（東から）



寺院址作業風景（北東から）



大御堂第1号池状遺構



大御堂第7号溝状遺構土層



寺院址中央部北池遺水遺構（南東から）



大御堂第6号～第7号溝状遺構滝口段差



大御堂第7号溝状遺構掘り方遺物出土状況



大御堂第5号～第7号溝状遺構（北西から）



大御堂第6号溝状遺構暗渠（北西から）



寺院址北池北縁部石垣（南西から）



北池底面遺物出土状況



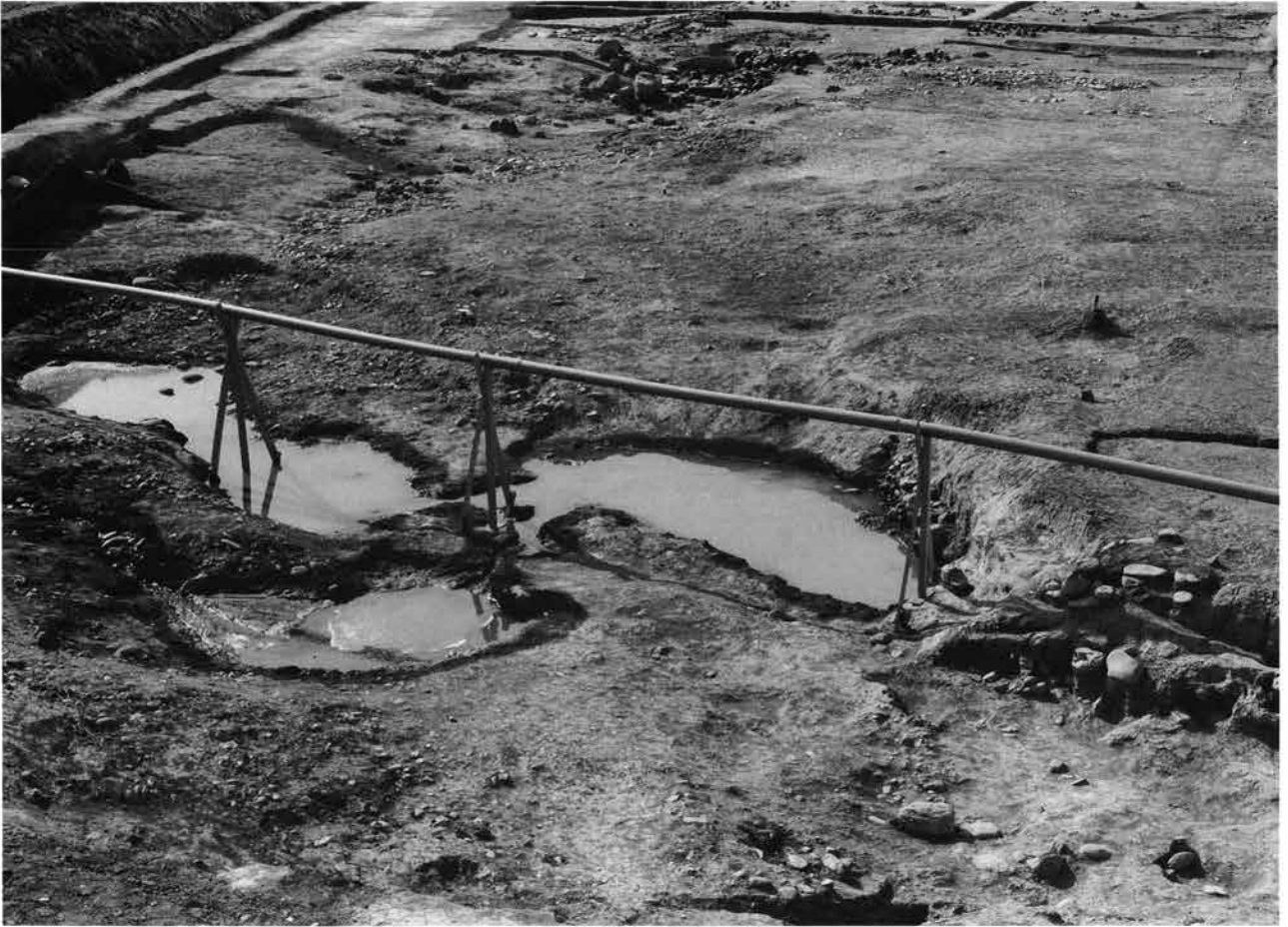
南池西遺物出土状況



北池北縁部土層



北池確認状況（浅間A軽石面）



寺院址南池（北東から）



北池・南池間土橋（東から）



寺院址南池道路下土層



寺院址南池土層 (Ay ライン)



南池～第12号溝状遺構南西縁石列



南池北西部 (Bb ライン)・土層



南池遺構底面確認状況



寺院址南池土層（南壁）



寺院址南池近世面検出状況（北西から）



寺院址南池西閉塞石積（東から）



寺院址南池西閉塞石垣（東から）



寺院址南池西閉塞石垣（北から）



寺院址中央部南縁遣水遺構



大御堂第12号溝状遺構 (Bc・Bd ライン・西から)



大御堂第12号溝状遺構（北から）



大御堂第12号溝状遺構（北東から）



大御堂第12号溝状遺構土層



大御堂第12号溝状遺構掘り方（北東から）



大御堂第12号溝状遺構西端部



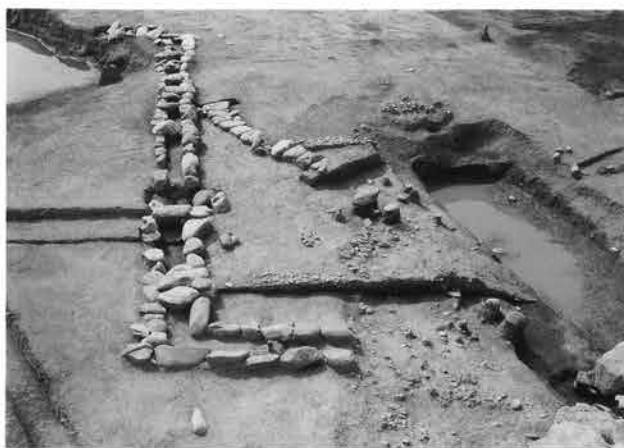
大御堂第12号溝状遺構大石出土状況



大御堂第10号溝状遺構土層



大御堂第11号溝状遺構肩部小礫面



大御堂第10号・第11号溝状遺構



大御堂第12号溝状遺構遺物出土状況



大御堂第12号溝状遺構遺物出土状況



大御堂第11号溝状遺構土層



大御堂第9号～第12号溝状遺構（東から）



大御堂第17号溝状遺構・近世道路跡



大御堂第17号溝状遺構遺物出土状況



大御堂第16号・第17号溝状遺構（北から）



寺院址東部全景



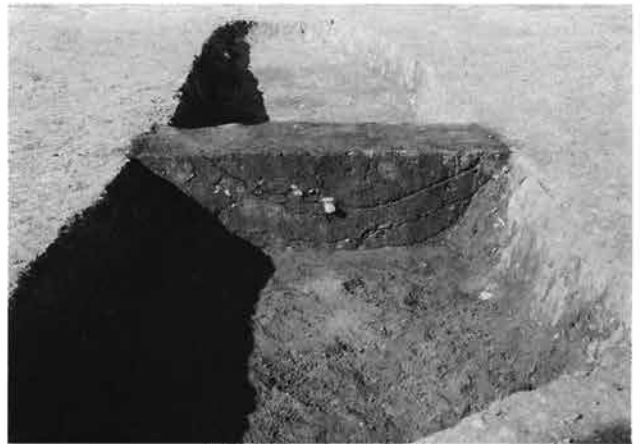
大御堂第15号溝状遺構掘り方



大御堂第15号溝状遺構小礫埋没状況



大御堂第14号溝状遺構



大御堂第14号溝状遺構



大御堂第17号溝状遺構コーナー一部



大御堂第17号溝状遺構



大御堂第16号溝状遺構土層



大御堂第2号土坑



大御堂第1号配石墓全景（東から）



大御堂第1号配石墓全景（北から）



大御堂第1号配石墓掘り方（東から）



大御堂第1号配石墓骨蔵器



大御堂第1号配石墓骨蔵器確認状況



大御堂第1号配石墓土層（東から）



大御堂第1号配石墓炭化物確認状況(南から)



大御堂第1号配石墓遺物出土状況



大御堂第1号配石墓土層（南から）



大御堂第1号濠跡北西部小礫敷面



大御堂第1号濠跡内石造物出土状況



大御堂第1号跡濠内火葬跡群（南から）



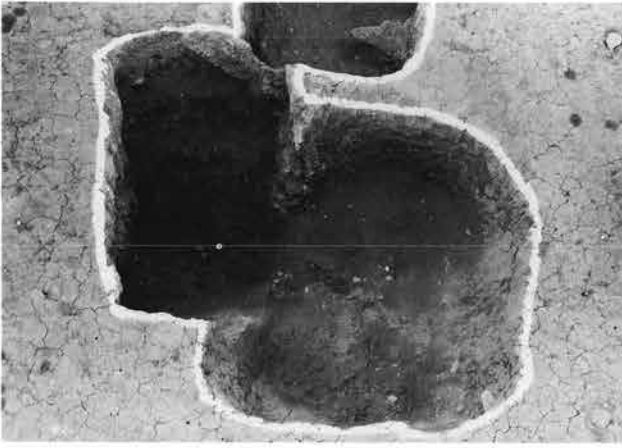
大御堂第1号濠跡内石造物出土状況



大御堂第9号火葬跡・第1号火葬墓・第1号土坑墓



大御堂第1号濠跡埋土上面検出埋葬遺構群（北から）



大御堂第1号火葬墓・第1号土坑墓遺物出土状況



大御堂第1号火葬墓銭貨出土状況



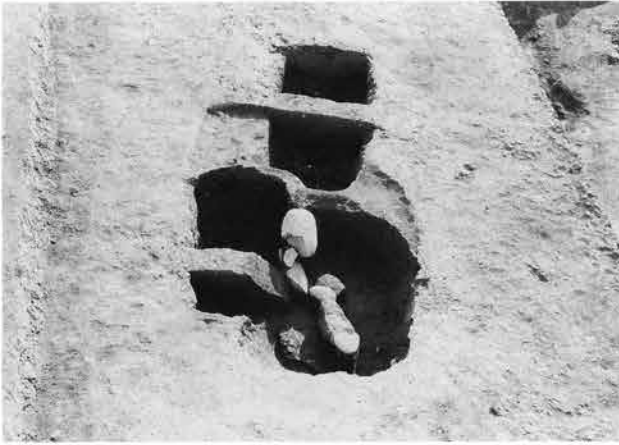
大御堂第1号土坑墓銭貨出土状況



大御堂第1号土坑墓銭貨棺材出土状況



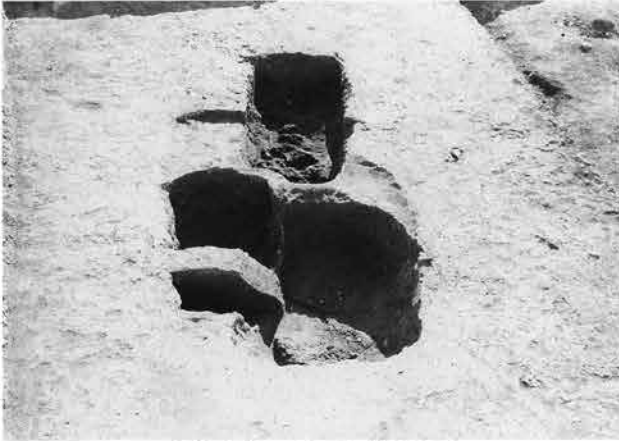
大御堂第1号濠跡埋土上面検出埋葬遺構群（北から）



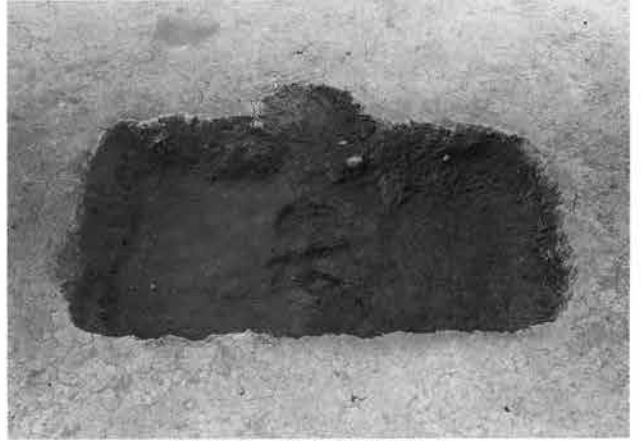
大御堂第1号土坑墓礎検出状況



大御堂第1号土坑墓土層



大御堂第1号土坑墓掘り方



大御堂第2号火葬跡掘り方



大御堂第1号火葬跡掘り方



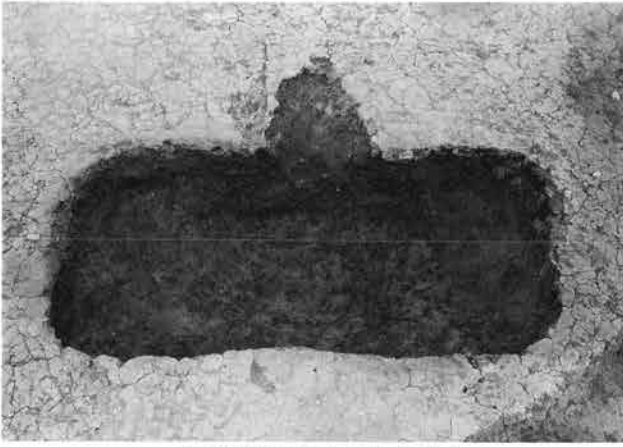
大御堂第1号火葬跡掘り方



大御堂第1号火葬跡土層



大御堂第2号火葬跡土層



大御堂第3号火葬跡掘り方



大御堂第3号火葬跡磔検出状況



大御堂第3号火葬跡土層



大御堂第3号火葬跡掘り方



大御堂第4号火葬跡掘り方



大御堂第4号火葬跡土層



大御堂第4号火葬跡人骨検出状況



大御堂第4号火葬跡人骨検出状況



大御堂第5・6号火葬跡掘り方



大御堂第5・6号火葬跡炭化物出土状況



大御堂第5・6号火葬跡土層



大御堂第5・6号火葬跡炭化物出土状況



大御堂第7号火葬跡土層



大御堂第7号火葬跡炭化物出土状況



大御堂第7号火葬跡掘り方



大御堂第7号火葬跡人骨検出状況



大御堂第8号火葬跡土層



大御堂第12号火葬跡土層



大御堂第8号火葬跡人骨検出状況



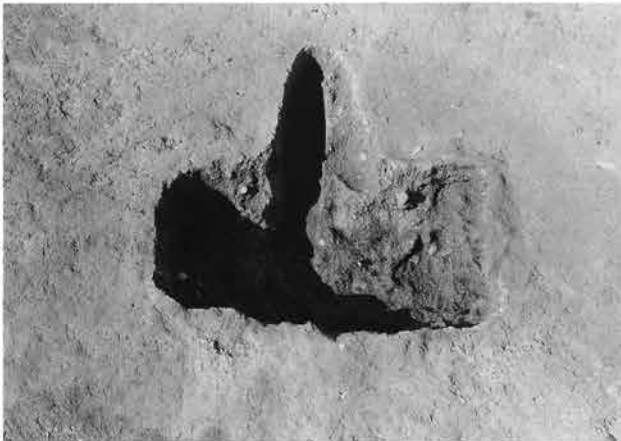
大御堂第12号火葬跡炭化物検出状況



大御堂第8号火葬跡掘り方



大御堂第9号火葬跡土層



大御堂第9号火葬跡炭化物出土状況



大御堂第9号火葬跡掘り方



大御堂第11号火葬跡炭化物出土状況



大御堂第11号火葬跡土層



大御堂第11号火葬跡人骨検出状況



大御堂第11号火葬跡掘り方



大御堂第5号火葬墓掘り方（東から）



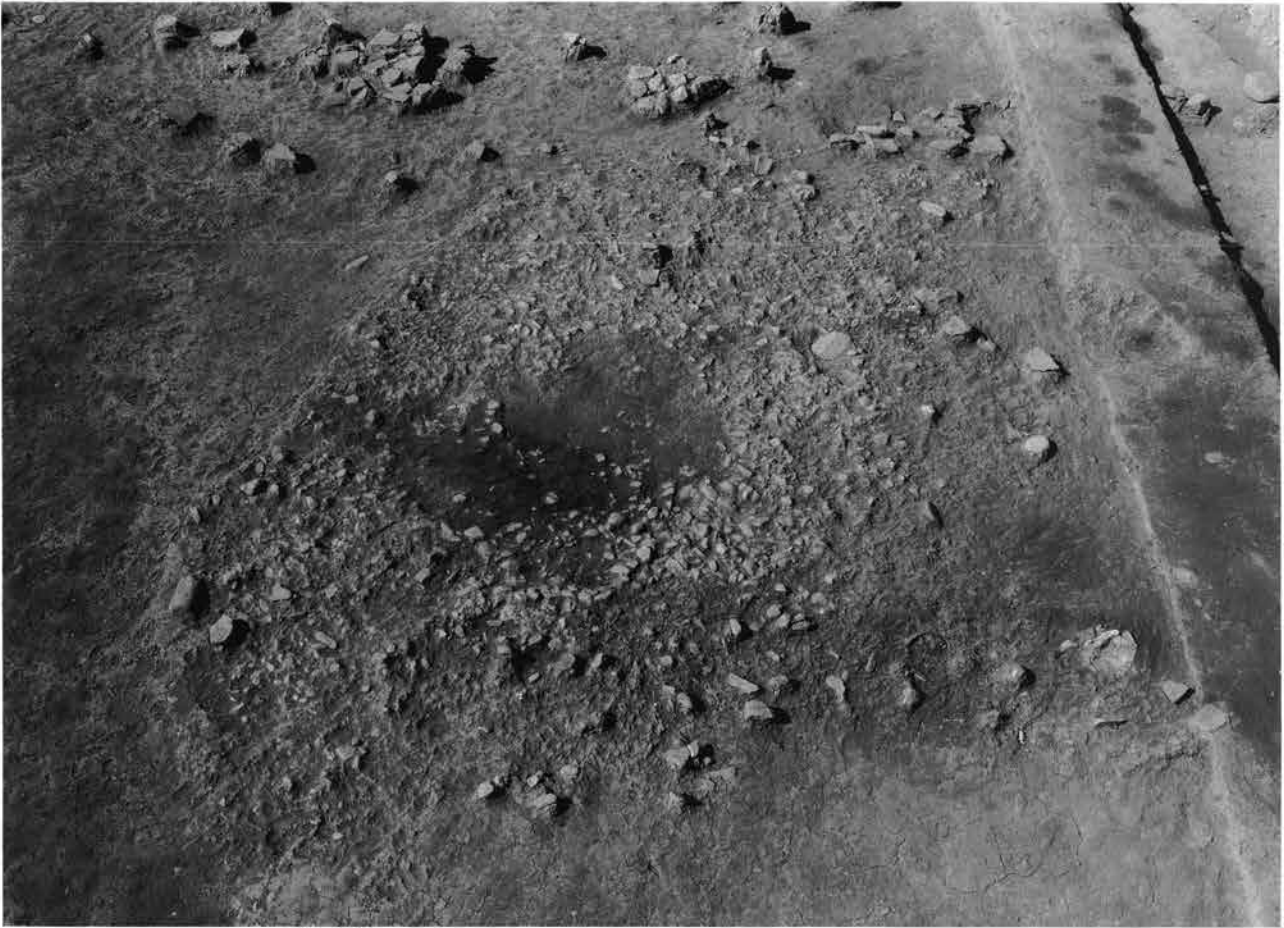
大御堂第5号火葬墓土層（北から）



大御堂第5号火葬墓炭化物検出状況（東から）



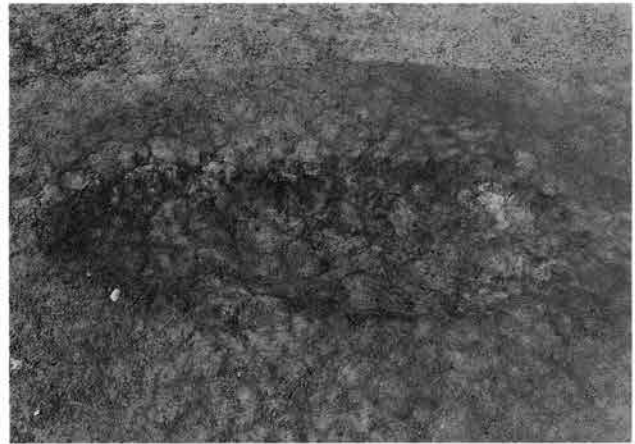
大御堂第5号火葬墓人骨検出状況



大御堂第4号火葬墓遺構検出状況（東から）手前右は第3号火葬墓



大御堂第4号火葬墓（東から）



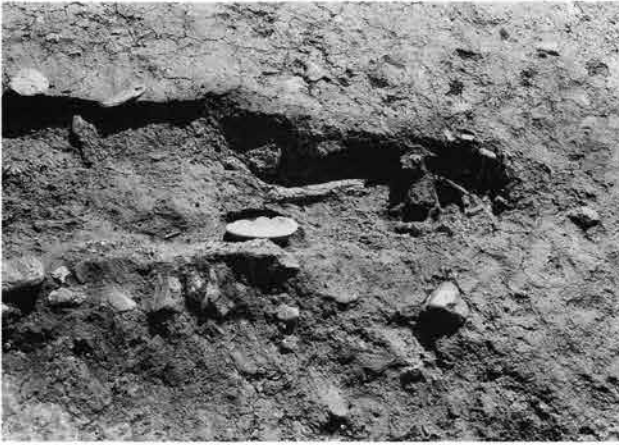
大御堂第2号火葬墓掘り方（東から）



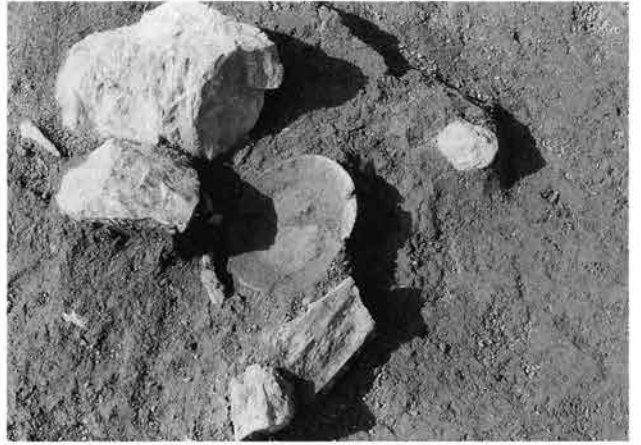
大御堂第3号・第4号火葬墓遺構検出状況（南東から）



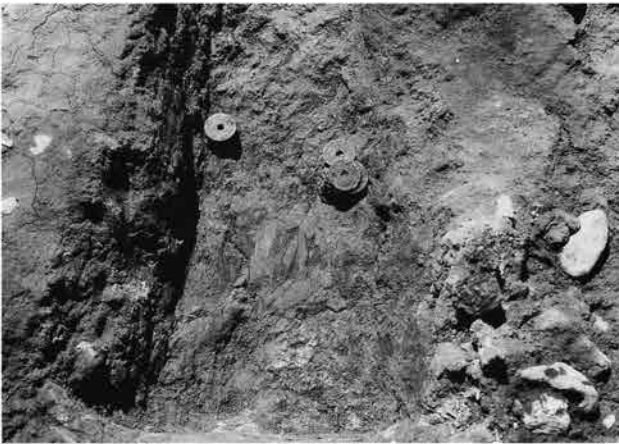
大御堂第2号火葬墓銭貨出土状況（東から）



大御堂第5号火葬墓遺物出土状況 (西から)



大御堂第2号火葬墓遺物出土状況 (東から)



大御堂第5号火葬墓遺物出土状況 (北から)



大御堂第2号火葬墓遺物出土状況 (西から)



大御堂第5号火葬墓遺物出土状況 (東から)



大御堂第2号火葬墓遺物出土状況 (東から)



大御堂第5号火葬墓遺物出土状況 (北東から)



大御堂第3号火葬墓遺物出土状況 (東から)



大御堂第4号土坑墓礫遺物出土状況（南西から）



大御堂第4号土坑墓（南西から）



大御堂第5号土坑墓礫出土状況



大御堂第5号土坑墓遺物出土状況



大御堂第3号土坑墓礫検出状況（南から）



大御堂第3号土坑墓礫検出状況（東から）



大御堂第3号土坑墓遺物出土状況（西から）



大御堂第3号土坑墓遺物出土状況（北から）



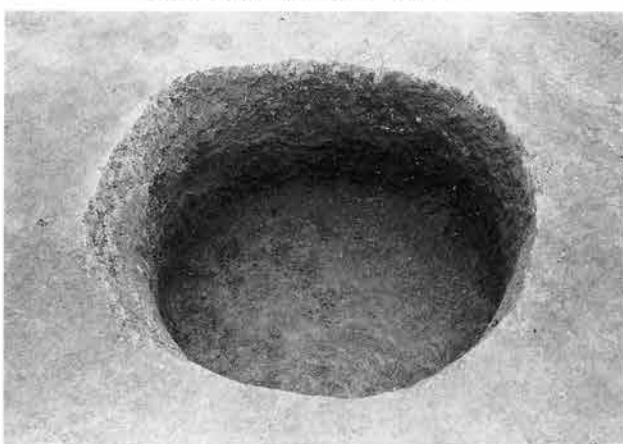
大御堂第6号(手前)・第7号土坑墓(南から)



大御堂第8号土坑墓(東から)



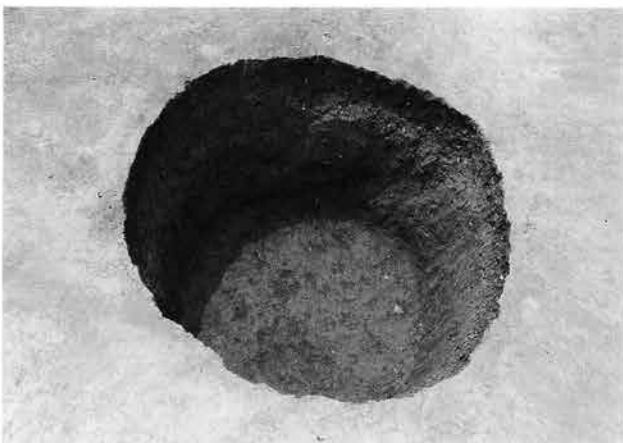
大御堂第1号土坑(南から)



大御堂第2号土坑(西から)



大御堂第4号土坑(南東から)



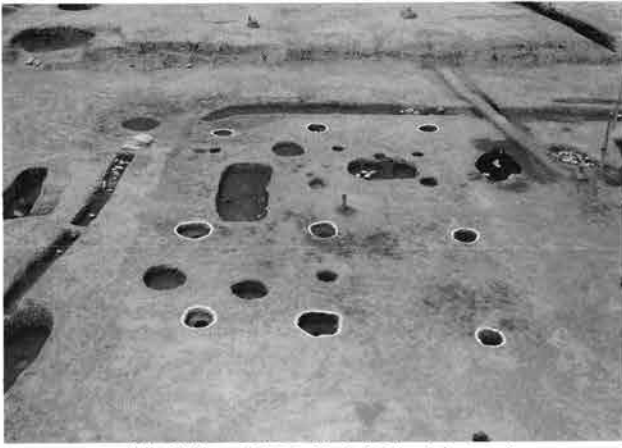
大御堂第5号土坑(北から)



大御堂寺院址中央部南隅ピット柱根検出状況



大御堂寺院址中央部ピット内遺物出土状況



大御堂第11号掘立柱建物跡（東から）



大御堂第11号掘立柱建物跡（南から）



大御堂第1号井戸跡掘り方（東から）



大御堂第1号井戸跡土層（北から）



大御堂第2土坑礫検出状況（東から）



大御堂第2土坑土層（南から）



B区農道西馬入れ・砂岩切石検出状況（南から）



A区トレンチ土層



大御堂第1号敷石住居跡（東南から）



石囲い炉検出状況（西から）



石囲い炉完掘状況（東南から）



先端部埋壘検出状況（南から）



張り出し部から主体部を望む（東南から）



先端部埋壘完掘状況（南から）



大御堂第2号敷石住居跡（東南から）



第2号敷石住居跡検出状況（東から）



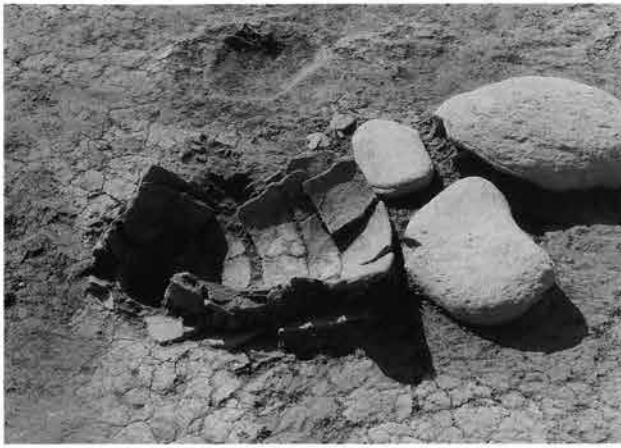
張り出し部（東から）



石囲い炉（南から）



先端部埋壘検出状況（北から）



先端部埋壙完掘状況（北から）



作業風景



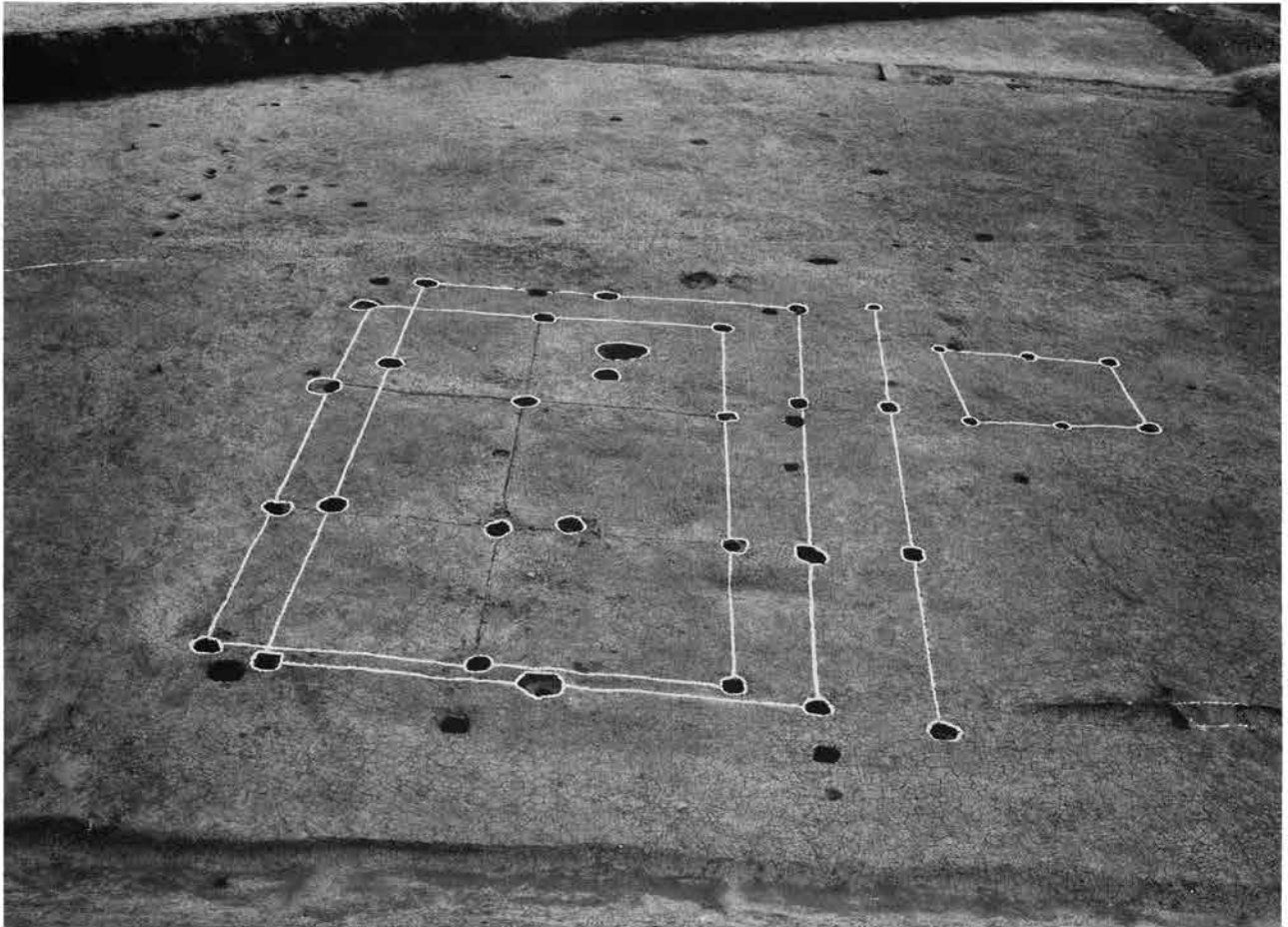
C区南西部遺物包含層遺物出土状況



C区全景（西から）



C区空中写真



大御堂第12号～第14号掘立柱建物跡・C区東群（北から）



大御堂第15号～第19号掘立柱建物跡・C区西群（北から）



大御堂第1号溝状遺構（西から）



大御堂第1号溝状遺構（北東から）



C区溝状遺構作業風景（東から）



大御堂第18号・第22号溝状遺構（北西から）



大御堂第19号溝状遺構（南から）



大御堂第19号溝状遺構（南西から）手前は第18号溝



大御堂第20号溝状遺構（北東から）



大御堂第21号溝状遺構（北西から）



C区西端部段差下遺構検出状況



大御堂第2号井戸跡 (南西から)



C区全景 (西から)



前原調査区段丘崖土層



C・D・E区全景 (北西から)



前原・上谷戸調査区全景（東から）



前原調査区D区全景（垂直写真）



前原調査区E区全景（北から）



前原第1号竖穴住居跡（西から）



前原第1号竖穴住居跡遺物出土状況（南西から）



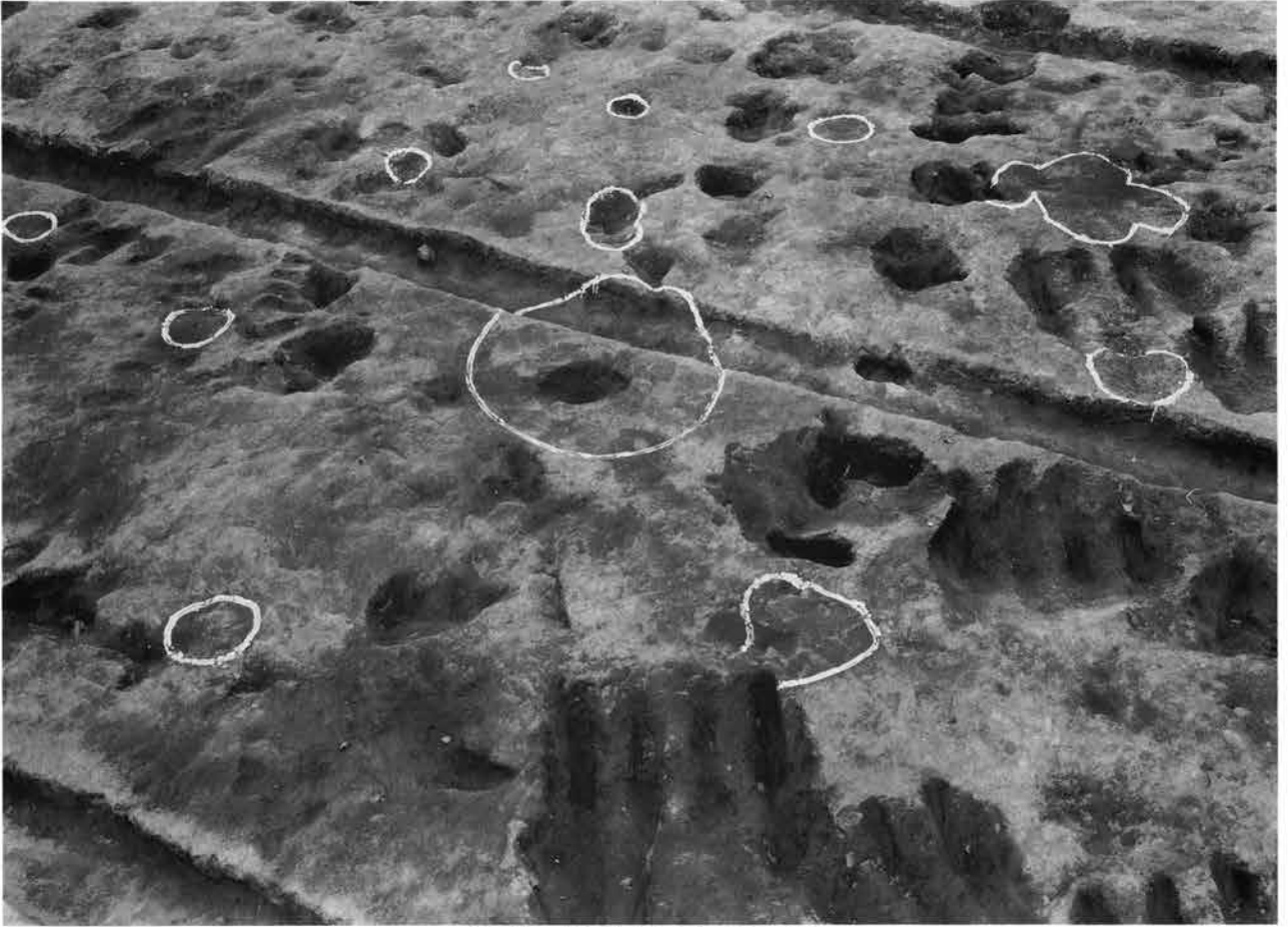
前原第1号竖穴住居跡埋壺検出状況（東南から）



前原第1号竖穴住居跡・埋壺確認状況



前原第1号竖穴住居跡作業風景



前原第2号竖穴住居跡（北から）



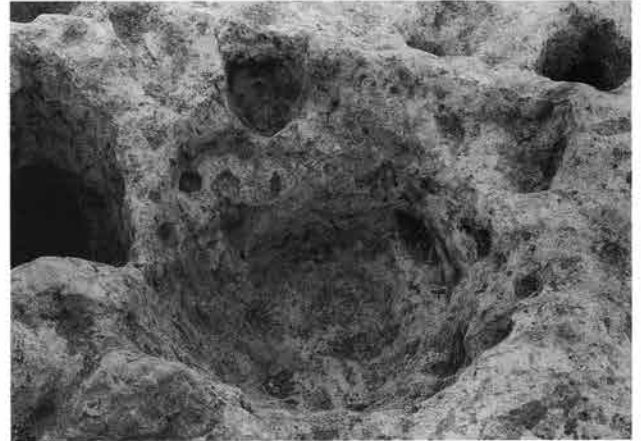
前原第2号竖穴住居跡内炉跡



前原第1号土坑（西から）



前原第2号土坑（南から）



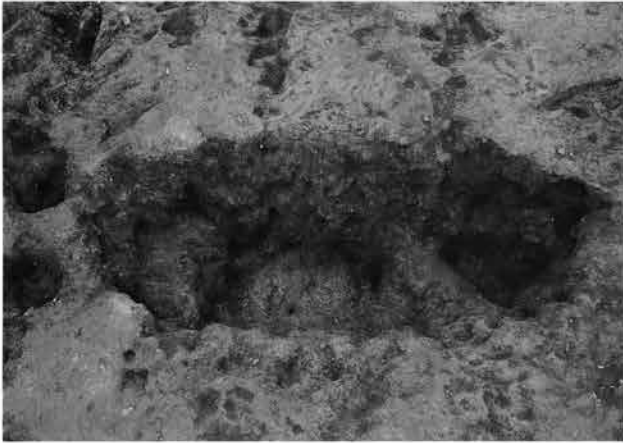
前原第2号土坑掘り方（南東から）



前原第3号土坑（北から）



前原第10号土坑（東から）



前原第11号土坑（北西から）



前原第11号土坑土層（南から）



前原第12号土坑・遺物出土状況



前原第12号土坑土層（南から）



E区遺物出土状況



D区遺物出土状況



E区屋敷跡（東から）



E区屋敷跡（垂直写真）



前原第1号・第2号溝状遺構東部分（南から）



道路跡覆土土層（南西から）



道路跡（北から）



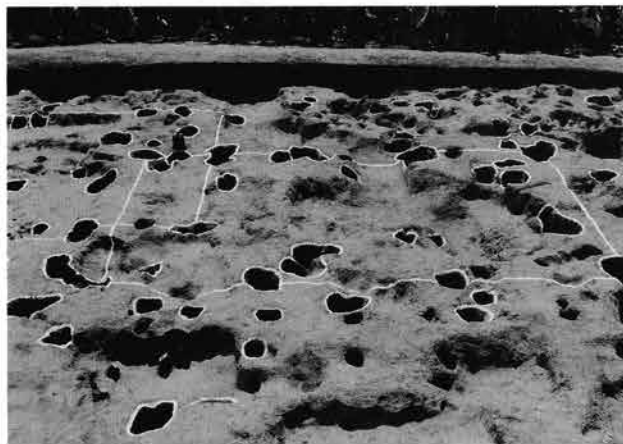
道路跡（北東から）上方に第2号掘立柱建物跡



前原第3号掘立柱建物跡（西から）



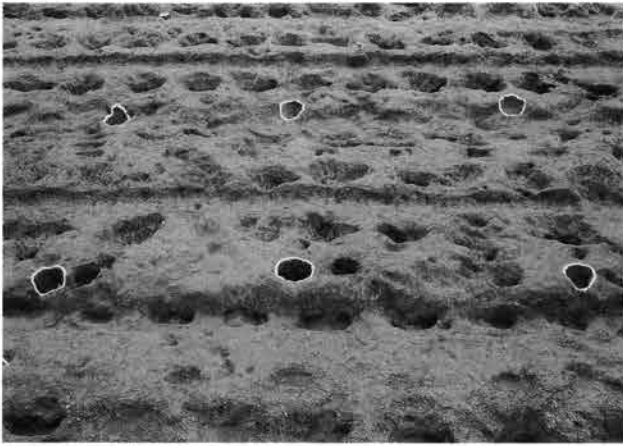
前原第4号（手前）・第5号掘立柱建物跡（東から）



前原第5号掘立柱建物跡（北から）



前原第6号掘立柱建物跡（北から）



前原第1号掘立柱建物跡（北東から）



前原第1号井戸跡



前原第7号～第9号掘立柱建物跡（西から）



前原第8号掘立柱建物跡（南西から）



前原第9号掘立柱建物跡（南東から）



前原第11号土坑遺物出土状況（南から）



D区作業風景



前原第11号土坑遺物出土状況（南西から）



上谷戸調査区斜面部全景（東から）



上谷戸第1号住居跡（東から）



上谷戸第1号住居跡遺物出土状況（北東から）



上谷戸第1号住居跡カマド内遺物出土状況（東から）



上谷戸第1号住居跡カマド（東から）



上谷戸第1号住居跡カマド



上谷戸第2号住居跡遺物出土状況 (南西から)



上谷戸第2号住居跡掘り方 (南西から)



上谷戸第2号住居跡カマド (南西から)



上谷戸第3号住居跡



上谷戸第3号住居跡遺物出土状況 (南東から)



上谷戸第3号住居跡掘り方 (南東から)



上谷戸第3号住居跡カマド (南東から)



上谷戸第4号住居跡・遺構全景（南東から）



上谷戸第4号住居跡遺物出土状況（南東から）



上谷戸第5号住居跡掘り方（南東から）



上谷戸第5号住居跡南カマド（南東から）



上谷戸第5号住居跡遺物出土状況（東から）



上谷戸第1号集石遺構（北東から）



G区遺物出土状況（南東から）



上谷戸第1号集石遺構（北東から）



上谷戸第1号溝状遺構（南から）



上谷戸第2号溝状遺構（南東から）



上谷戸第3号溝状遺構（東から）



上谷戸第6号溝状遺構（南から）



上谷戸第7号・第8号溝状遺構（北東から）



上谷戸第7号・第8号溝状遺構（北東から）



上谷戸調査区・丘陵斜面部試掘調査（北から）



上谷戸調査区試掘トレンチ・土層



市道西側上位面全景（西から）



市道西側下位面～上位面（東から）



市道西側下位面（南西から）



上谷戸第14号溝状遺構（南西から）



上谷戸第14号（左側）・第15号溝状遺構（北東から）



上谷戸第17号溝状遺構（西から）右は1号石組遺構掘り方



上谷戸第19号溝状遺構（南西から）



上谷戸第19号溝状遺構土層（北壁）



上谷戸第19号溝状遺構土層（南壁）



上谷戸第11号溝状遺構（東から）



上谷戸第11号溝状遺構西部分（南から）



上谷戸第11号溝状遺構土層（東から）



上谷戸第12号・第13号溝状遺構（南西から）



上谷戸第16号溝状遺構暗渠検出状況（東から）



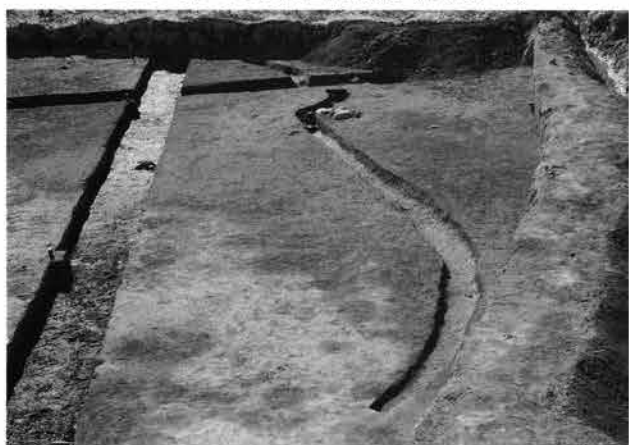
上谷戸第16号溝状遺構暗渠遺構面（東から）



上谷戸第16号溝状遺構暗渠（北東から）



上谷戸第16号溝状遺構暗渠蓋石（中央は板碑片）



上谷戸第18号溝状遺構（北から）



上谷戸第20号溝状遺構（北東から）



上谷戸第21号溝状遺構（西から）



上谷戸第23号溝状遺構（北東から）



上谷戸第1号掘立柱建物跡（北西から）



上谷戸第1号石組み遺構（東から）



上谷戸第1号石組み遺構（西から）



上谷戸第1号石組み遺構掘り方（北から）



上谷戸第1号井戸跡遺物出土状況（北から）



上谷戸第1号井戸跡土層（南東から）



上谷戸第1号井戸跡（東から）



上谷戸第2号井戸跡土層（東から）



上谷戸調査区市道東側全景（西から）



上谷戸第2号・第3号土坑（北西から）



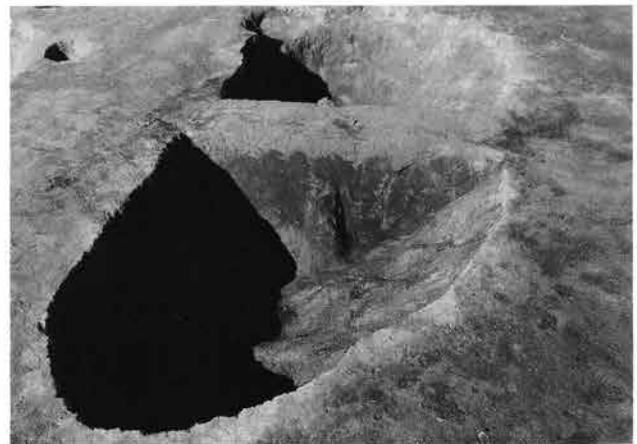
上谷戸第4号土坑（南から）



上谷戸第5号土坑（南から）



上谷戸第6号土坑（南から）



上谷戸第8号土坑（南東から）



上谷戸第11号土坑（西から）



上谷戸第12号土坑（南から）



上谷戸第20号土坑



上谷戸第21号土坑 (南西から)



上谷戸第22号土坑 (南西から)



上谷戸第24号土坑 (西から)



上谷戸第19号溝状遺構南端井戸跡 (北東から)



上谷戸第28号土坑 (北西から)



上谷戸第29号土坑 (西から)



上谷戸第30号土坑 (北東から)



上谷戸第31号土坑 (北西から)



上谷戸第32号土坑 (北から)



上谷戸第34号土坑 (北東から)



上谷戸第34号土坑 (北東から)



上谷戸第34号土坑掘り方 (北東から)



上谷戸第34号土坑遺物出土状況 (北東から)



上谷戸第34号・第35号土坑 (手前) (北東から)



上谷戸第35号土坑 (東から)



上谷戸第36号土坑（左方東から）



上谷戸第37号土坑（北東から）



G区遺物出土状況



H区遺物出土状況



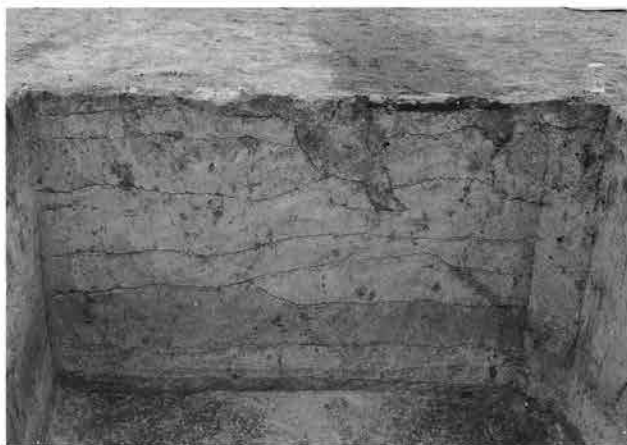
H区遺物出土状況（南から）



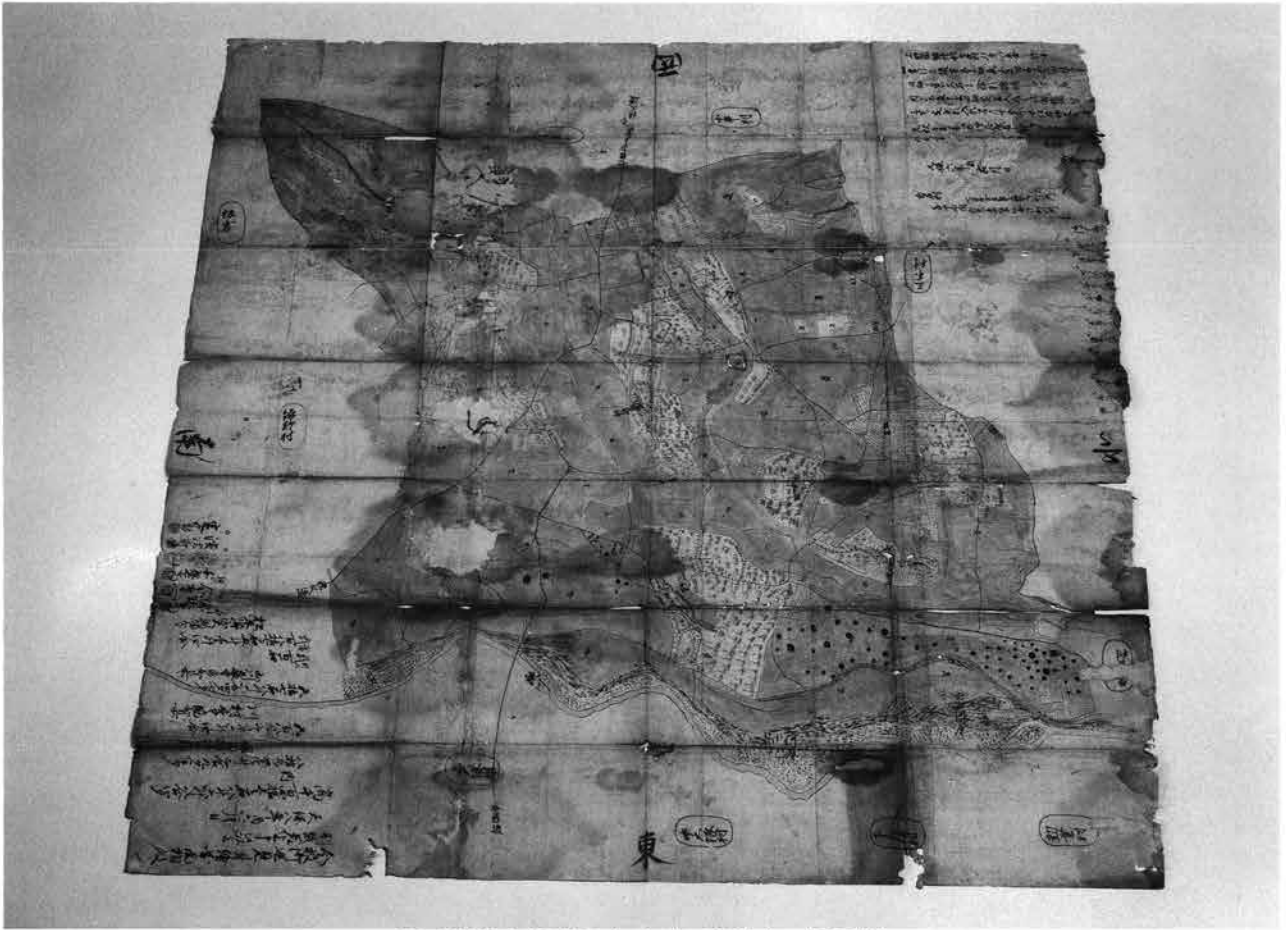
上谷戸調査区F区試掘調査（西から）



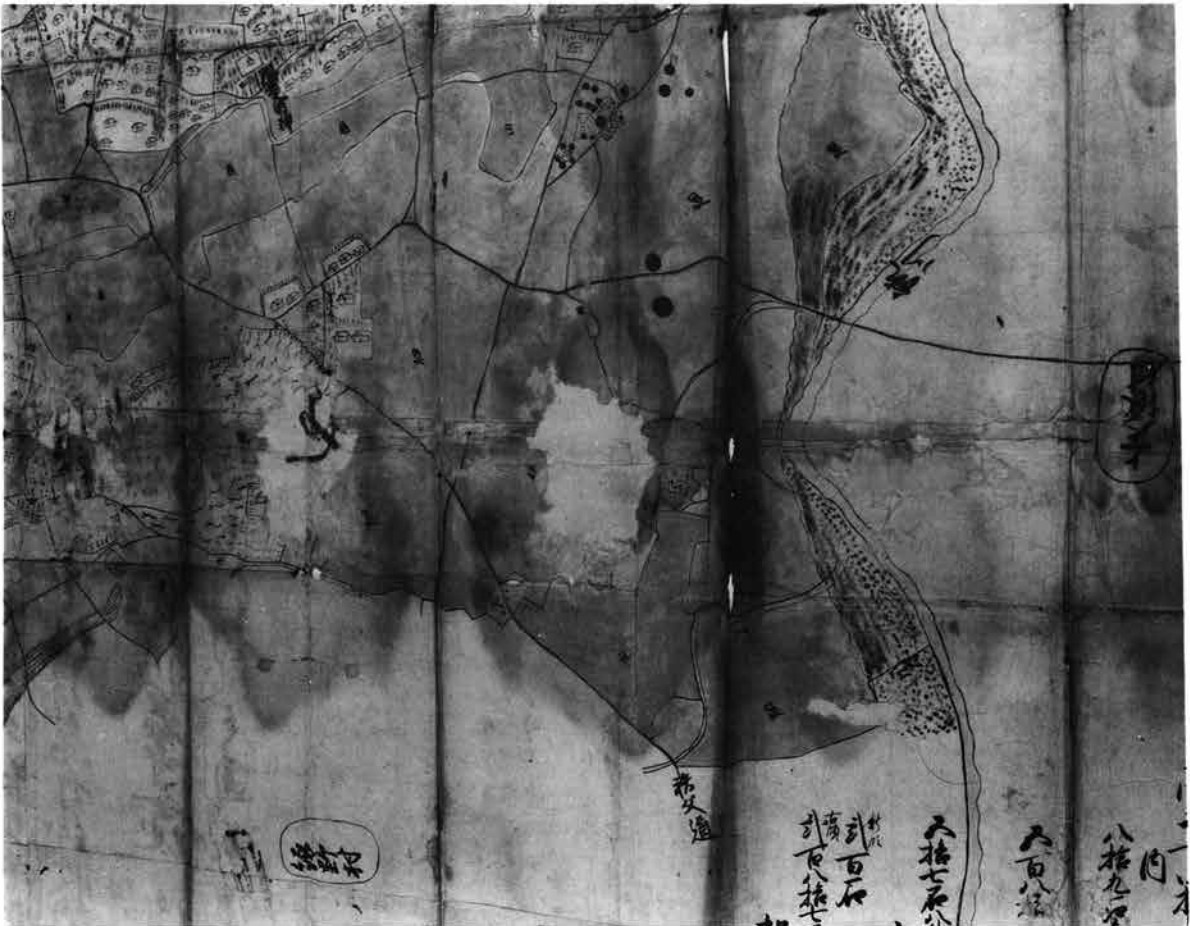
上谷戸調査区試掘トレンチ土層



上谷戸調査区試掘トレンチ土層

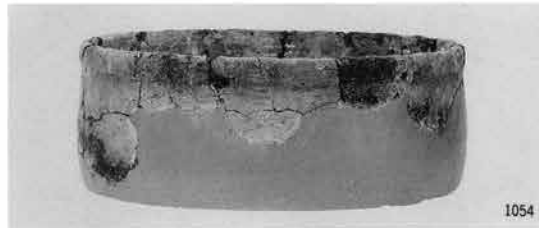
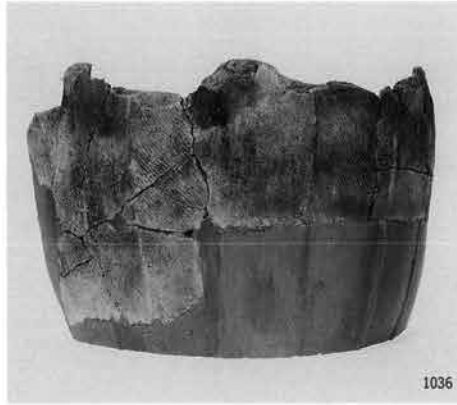


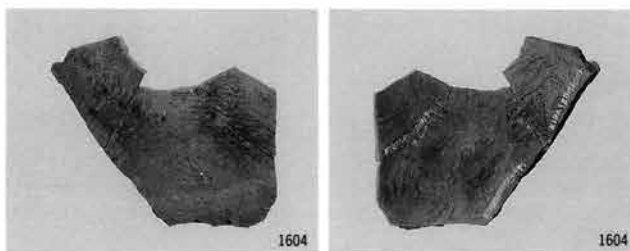
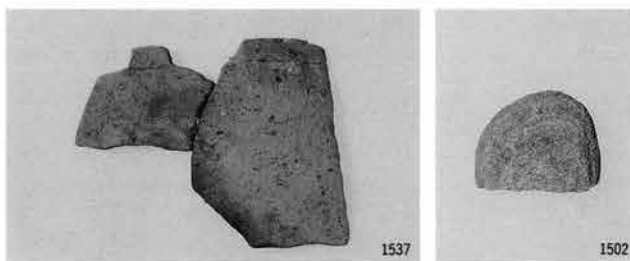
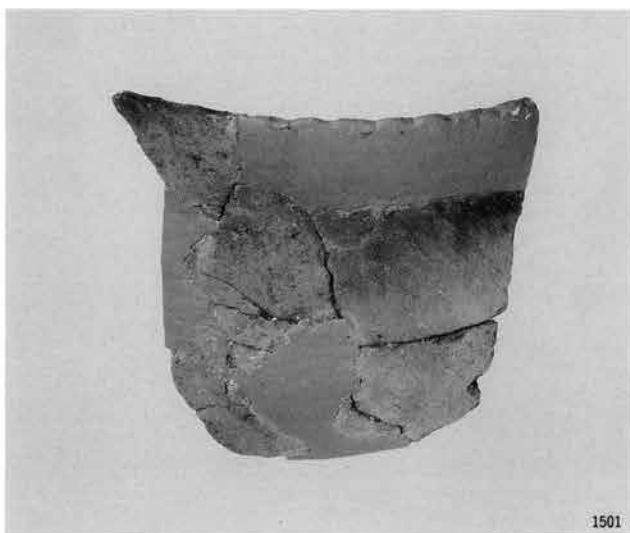
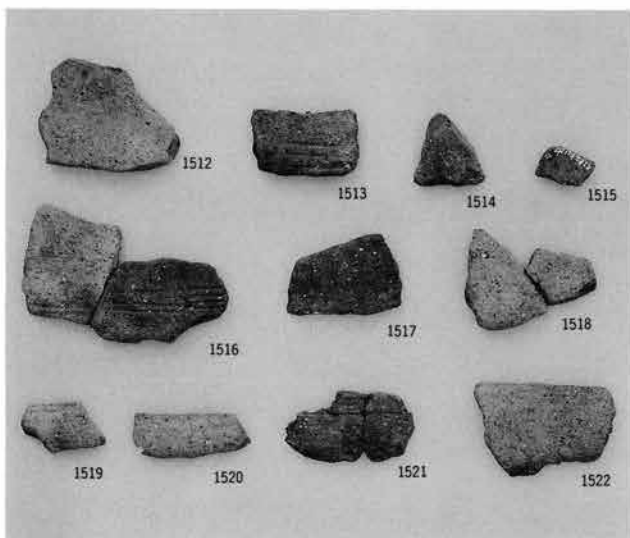
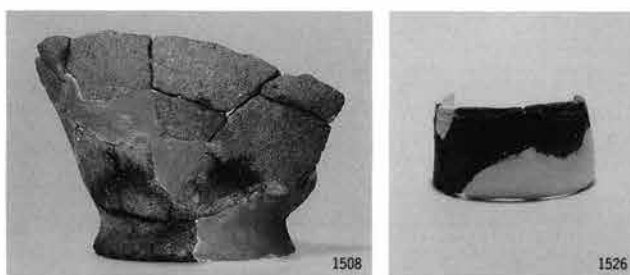
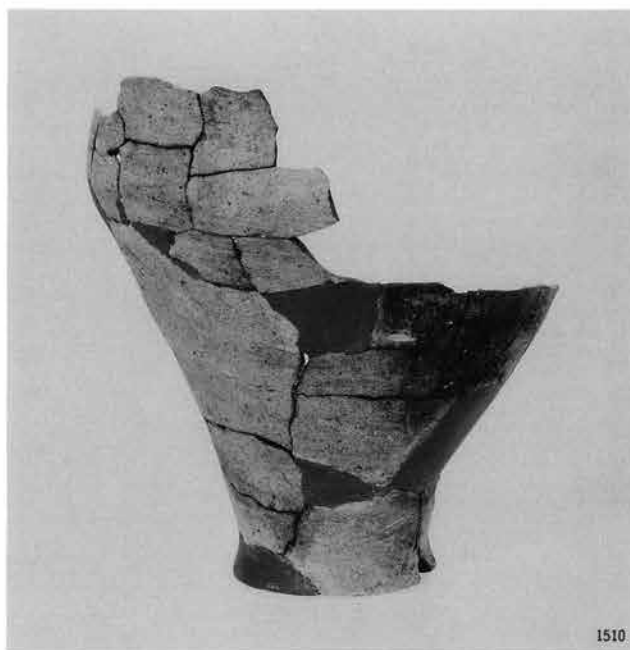
白石村絵図（元禄六年作成・堀越茂三郎氏蔵）

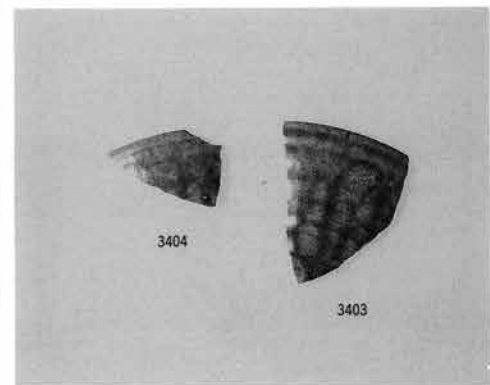
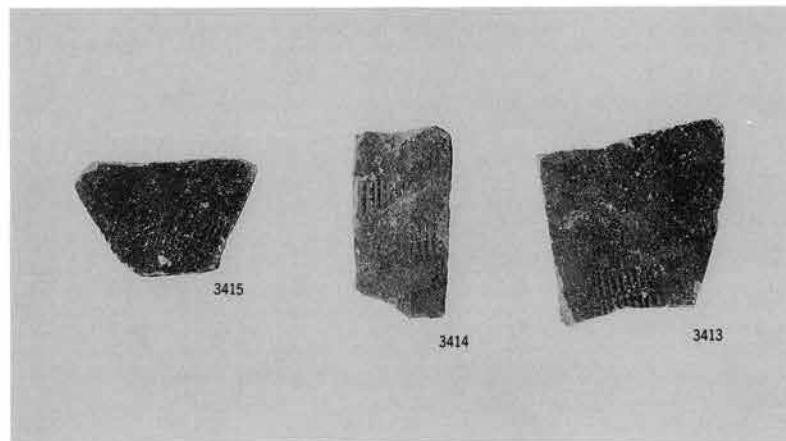
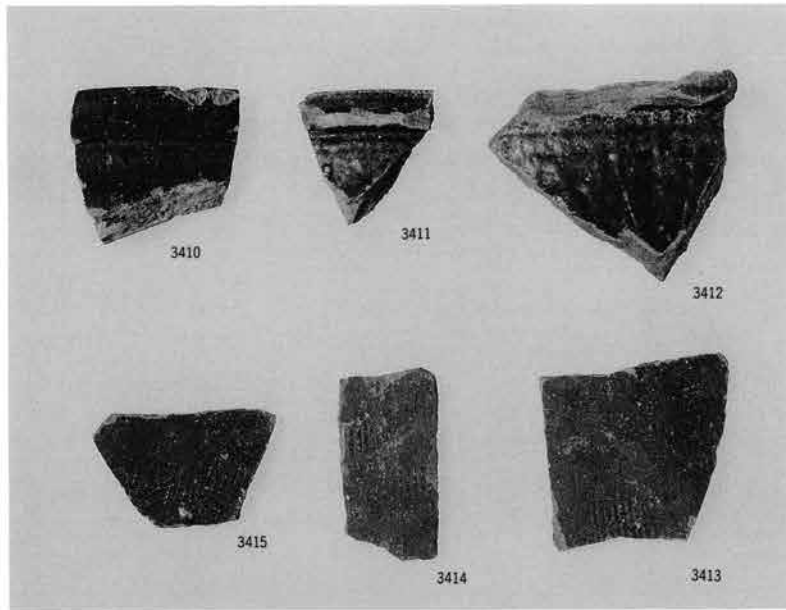
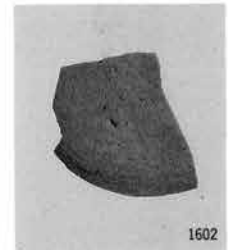
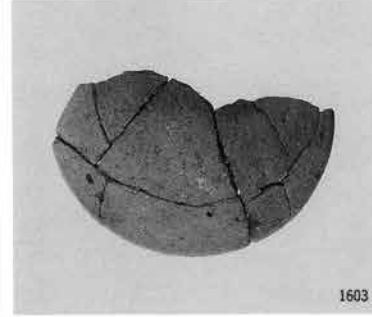
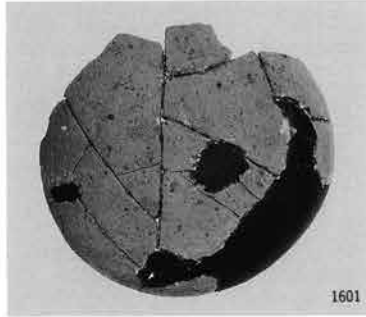
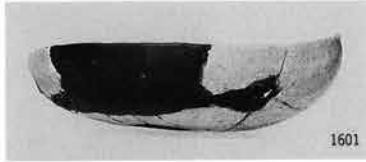
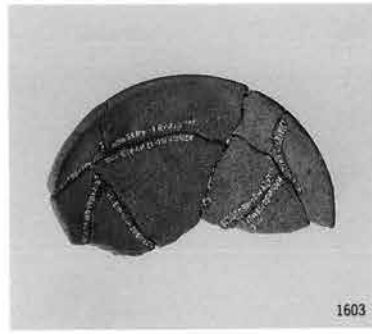
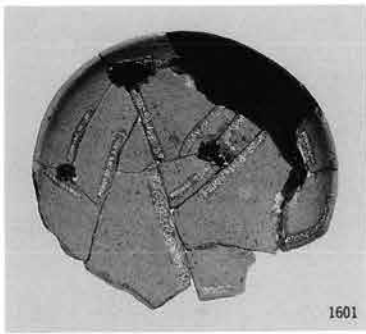


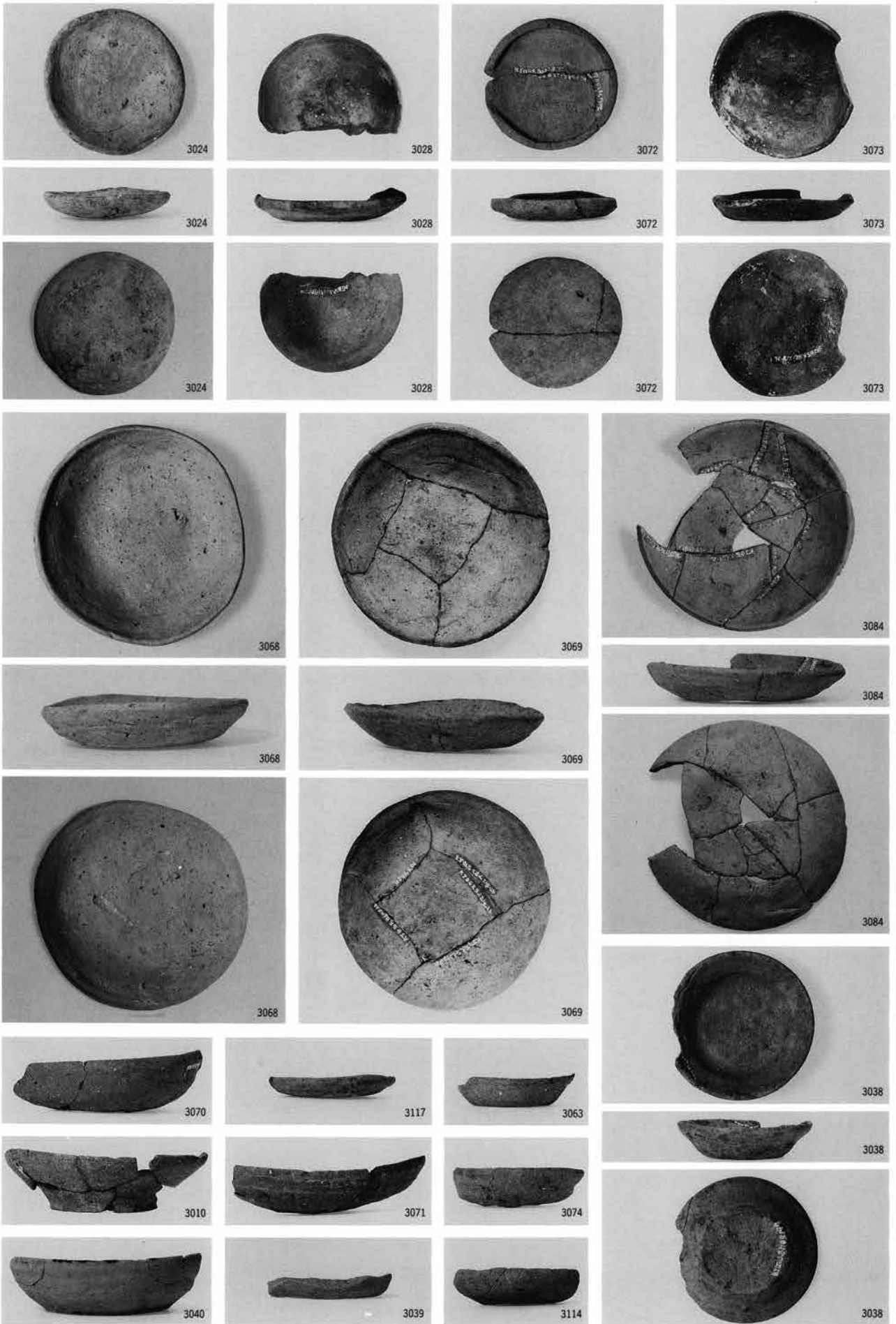
白石村絵図・調査区域部分

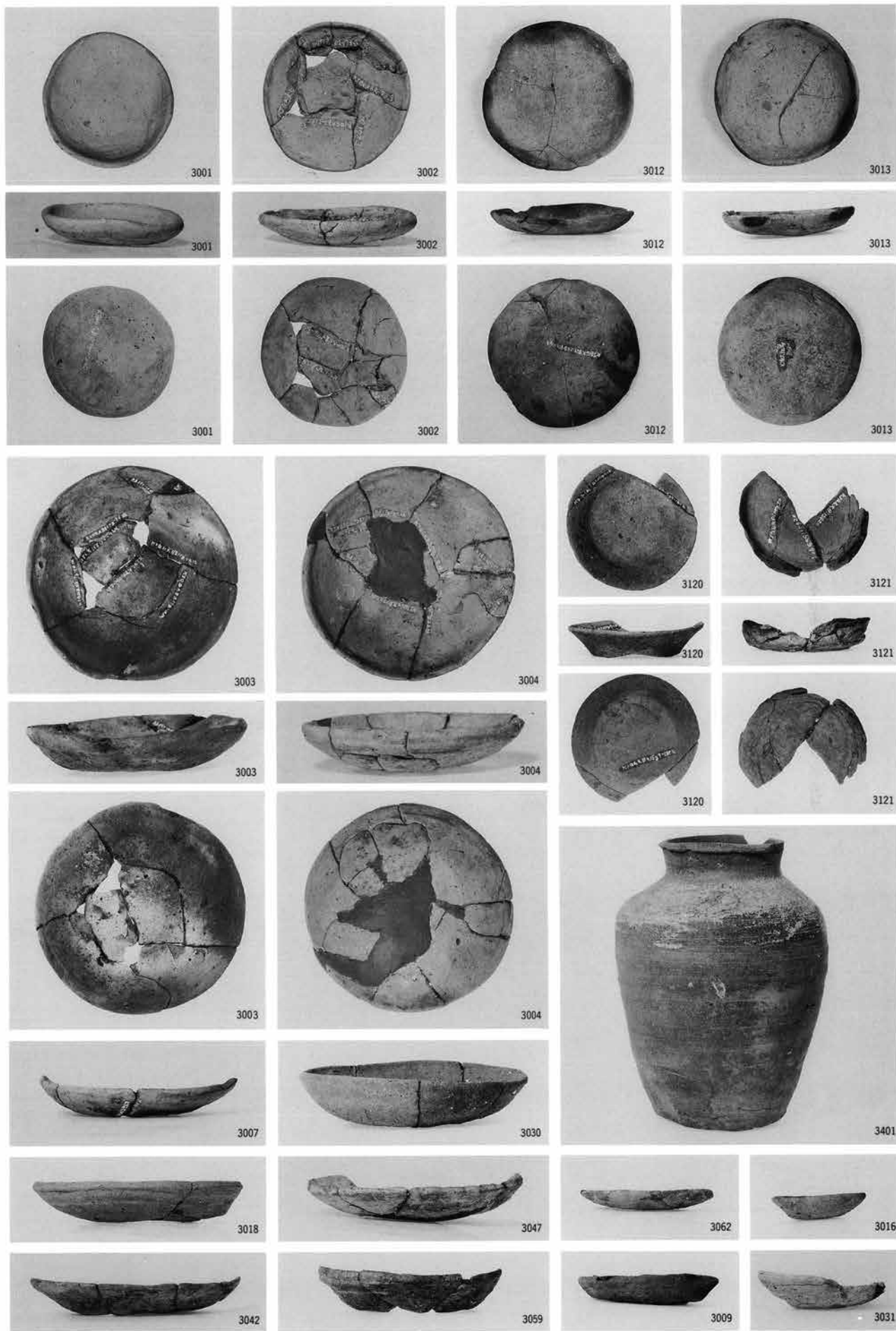


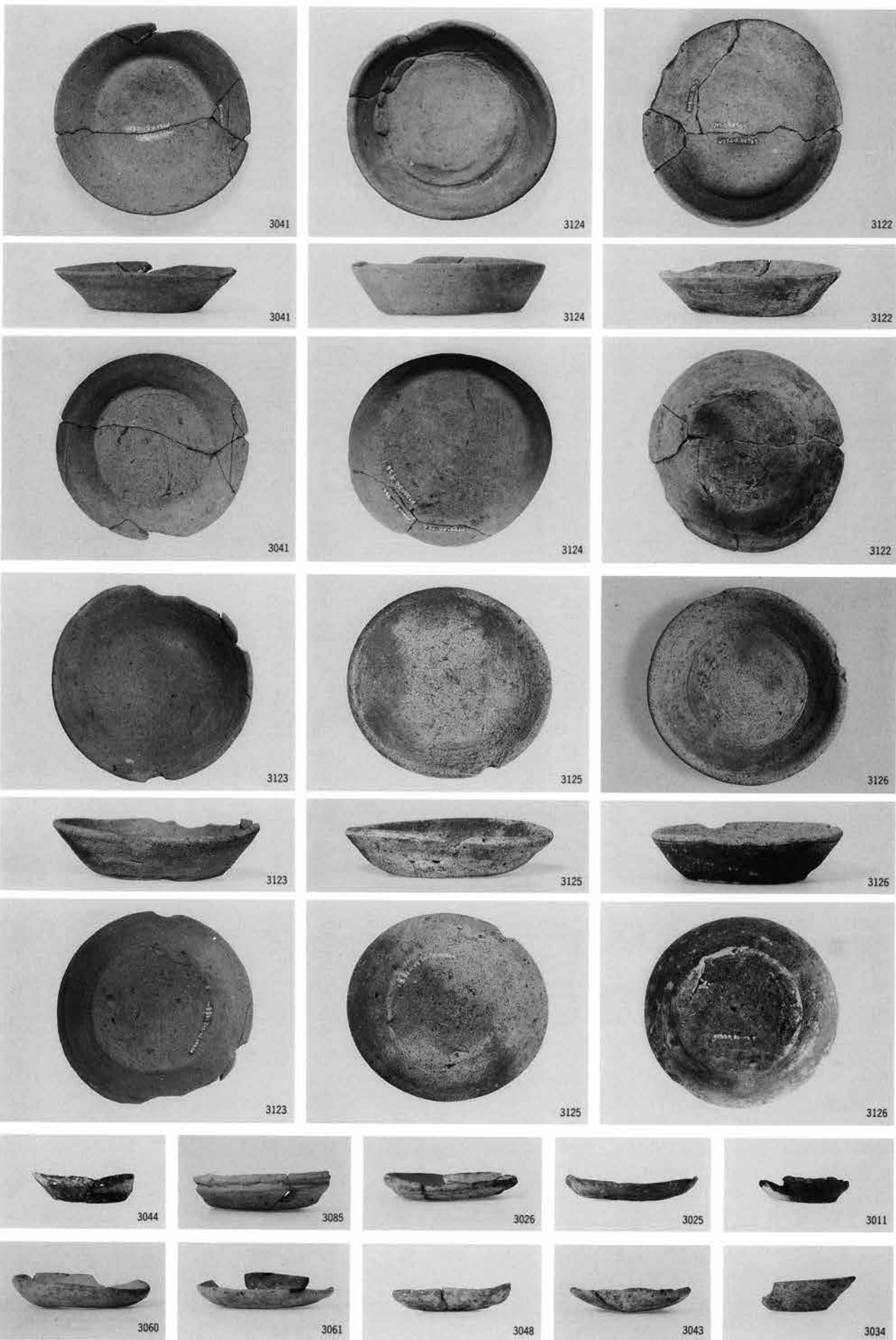


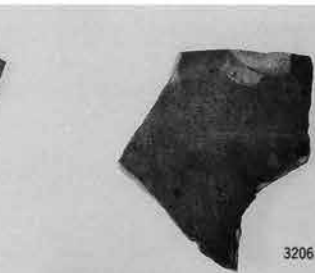
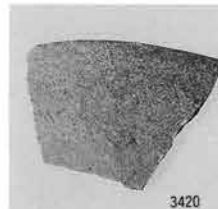
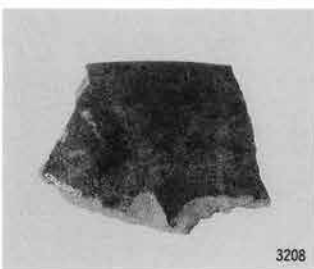
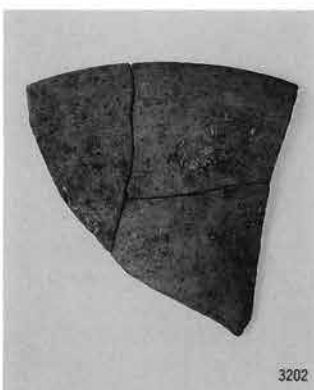
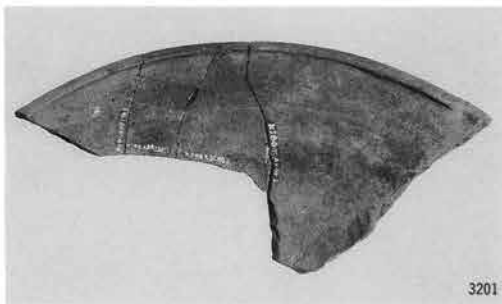
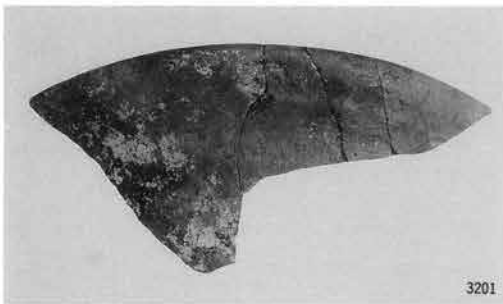
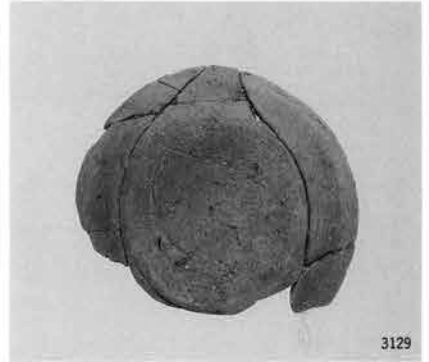
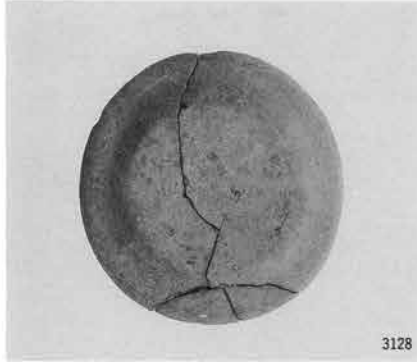
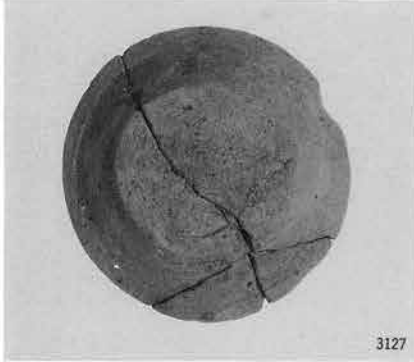
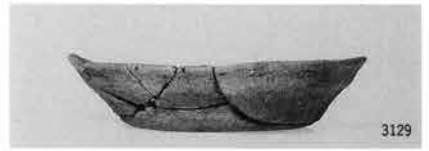
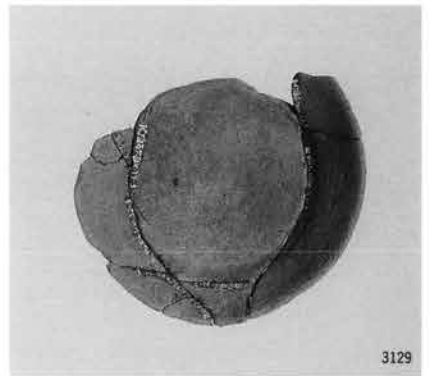
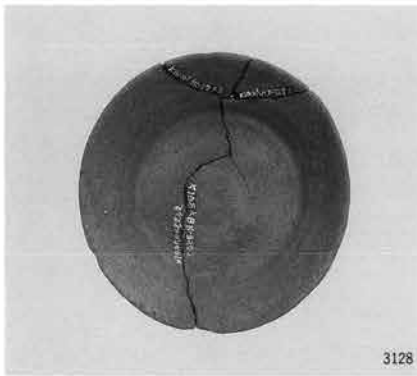
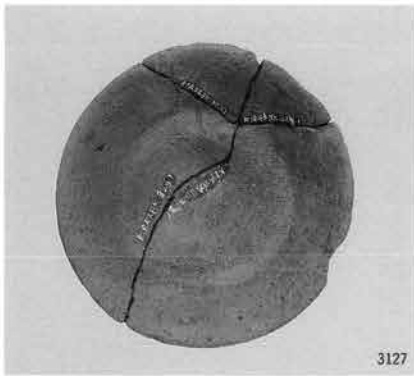


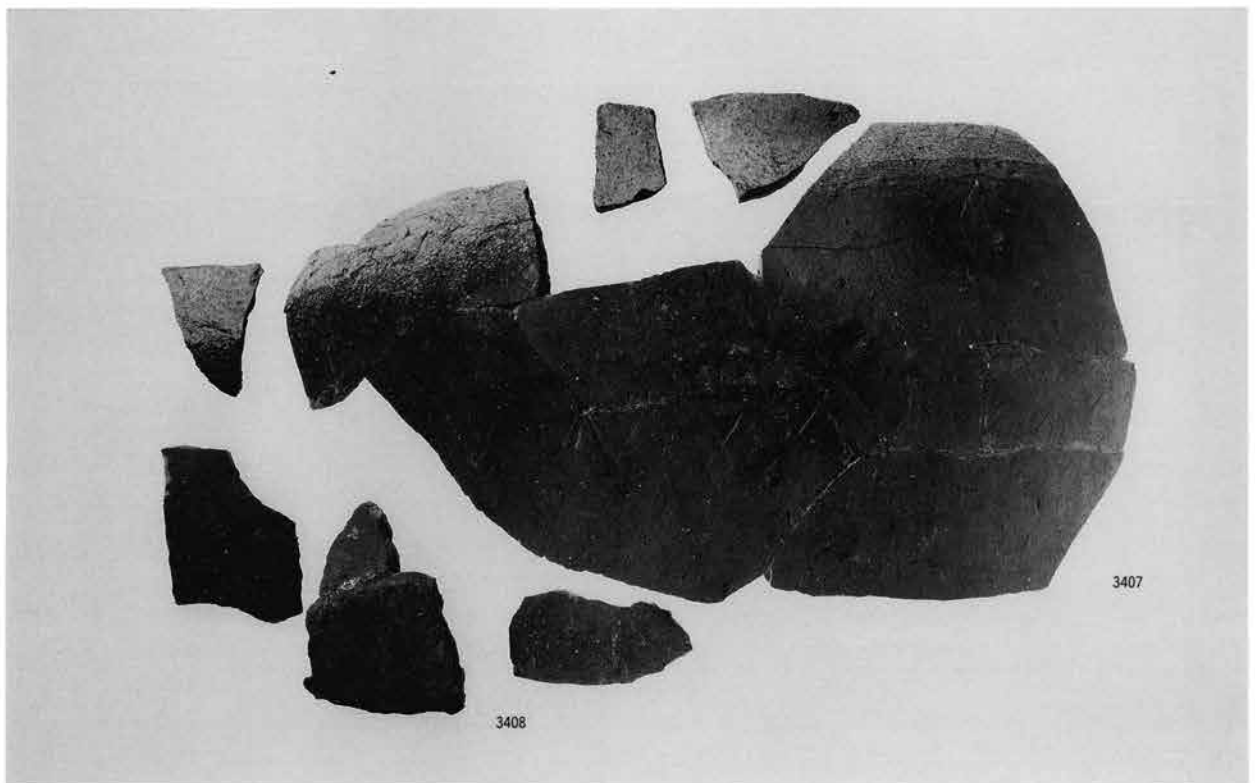
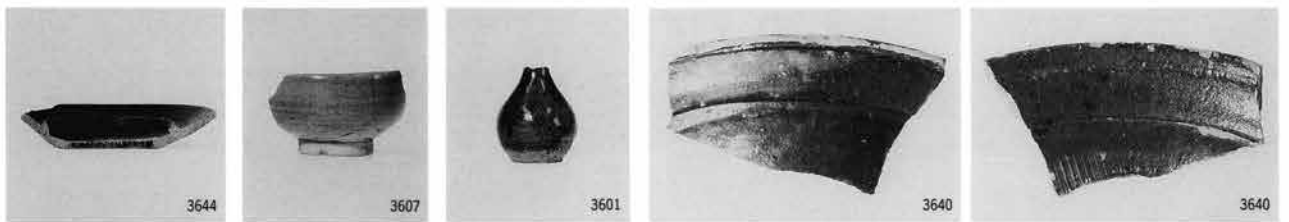
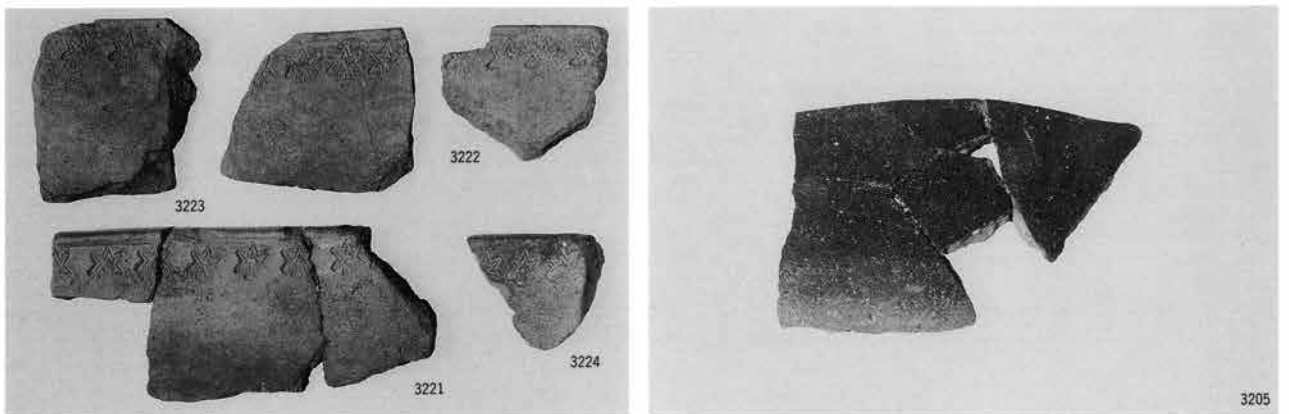
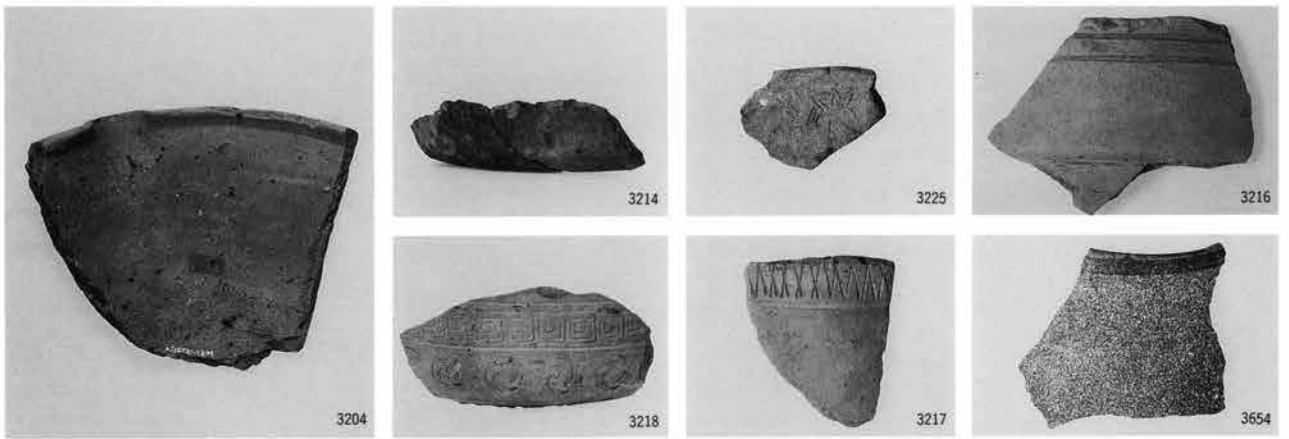


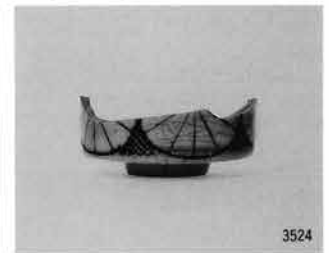
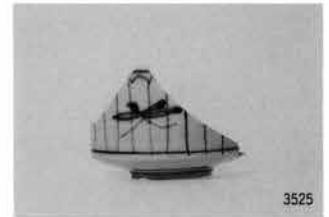
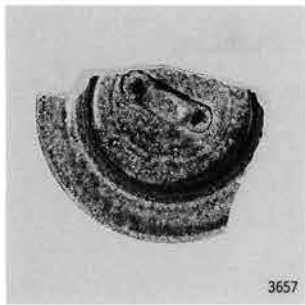
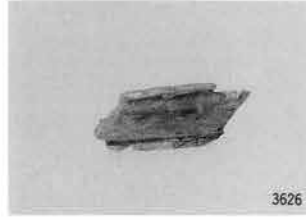
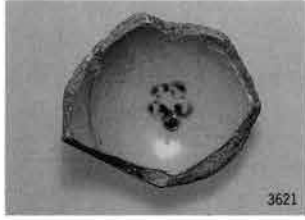
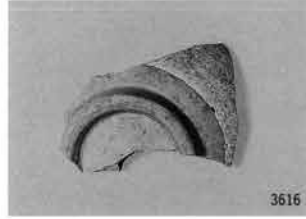
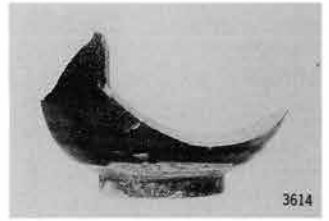
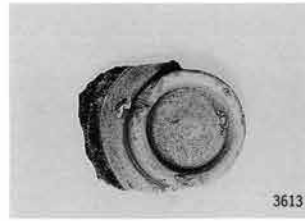




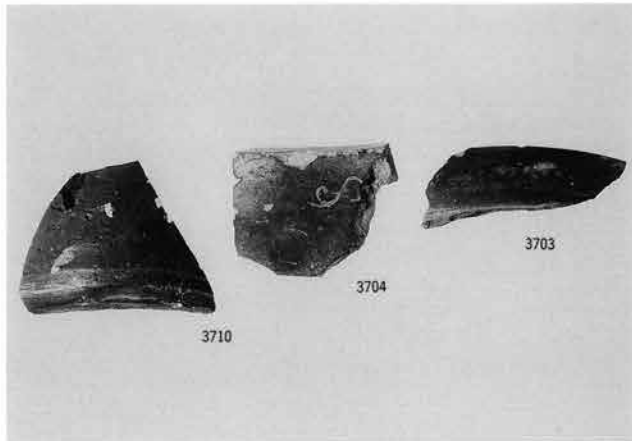
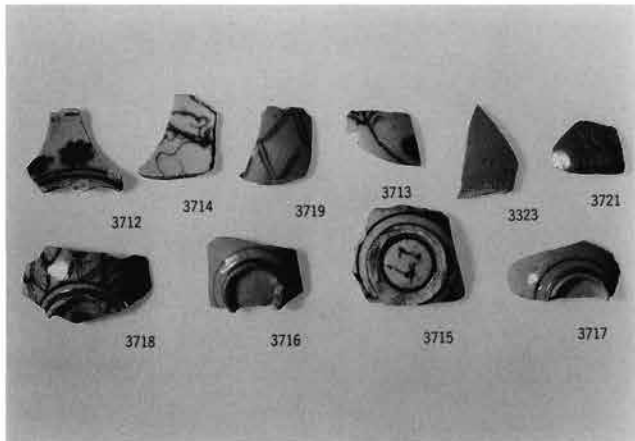
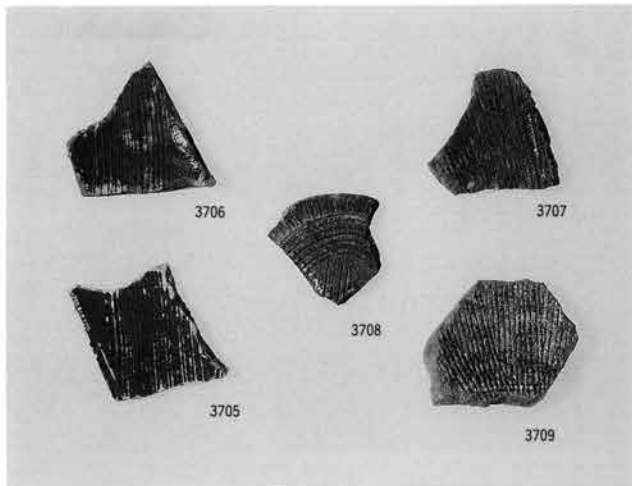
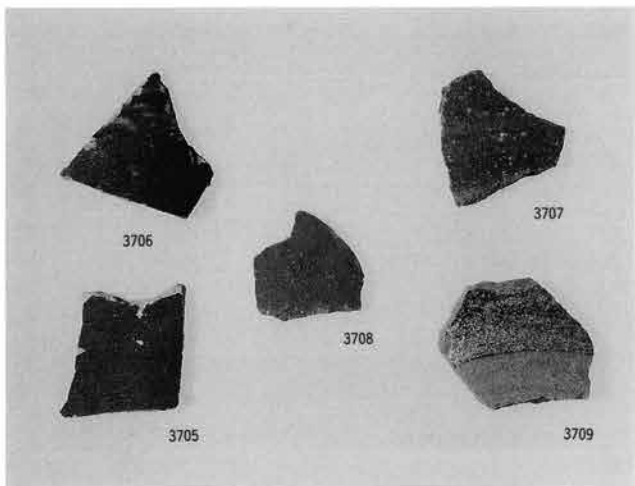
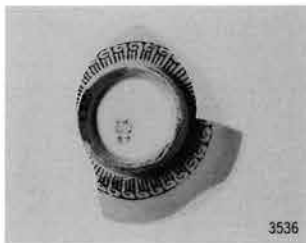
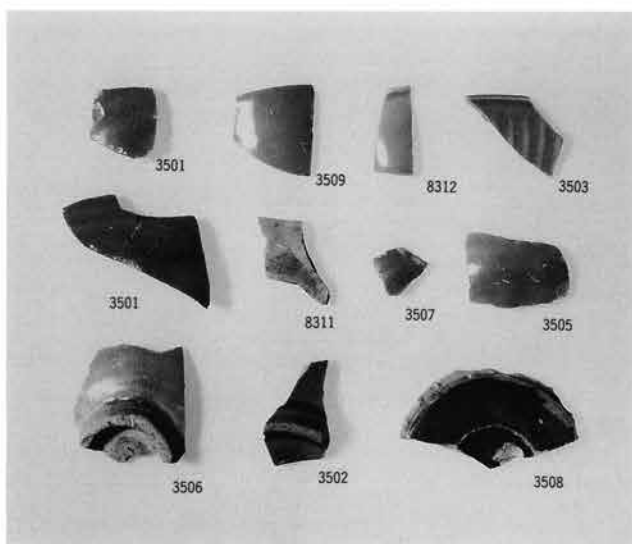
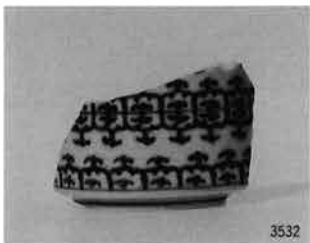
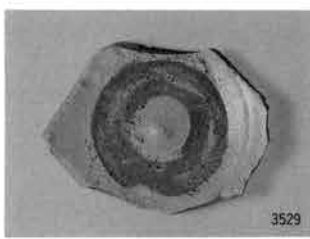


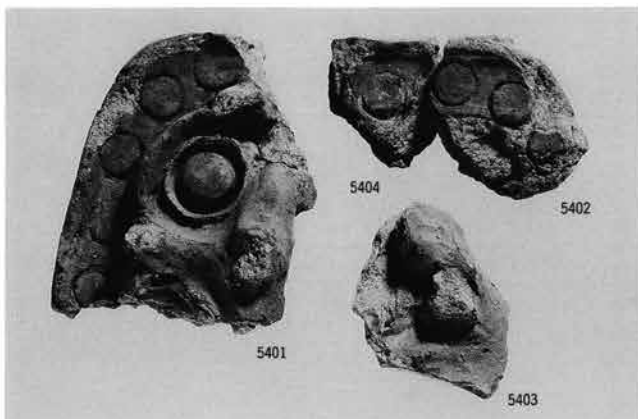


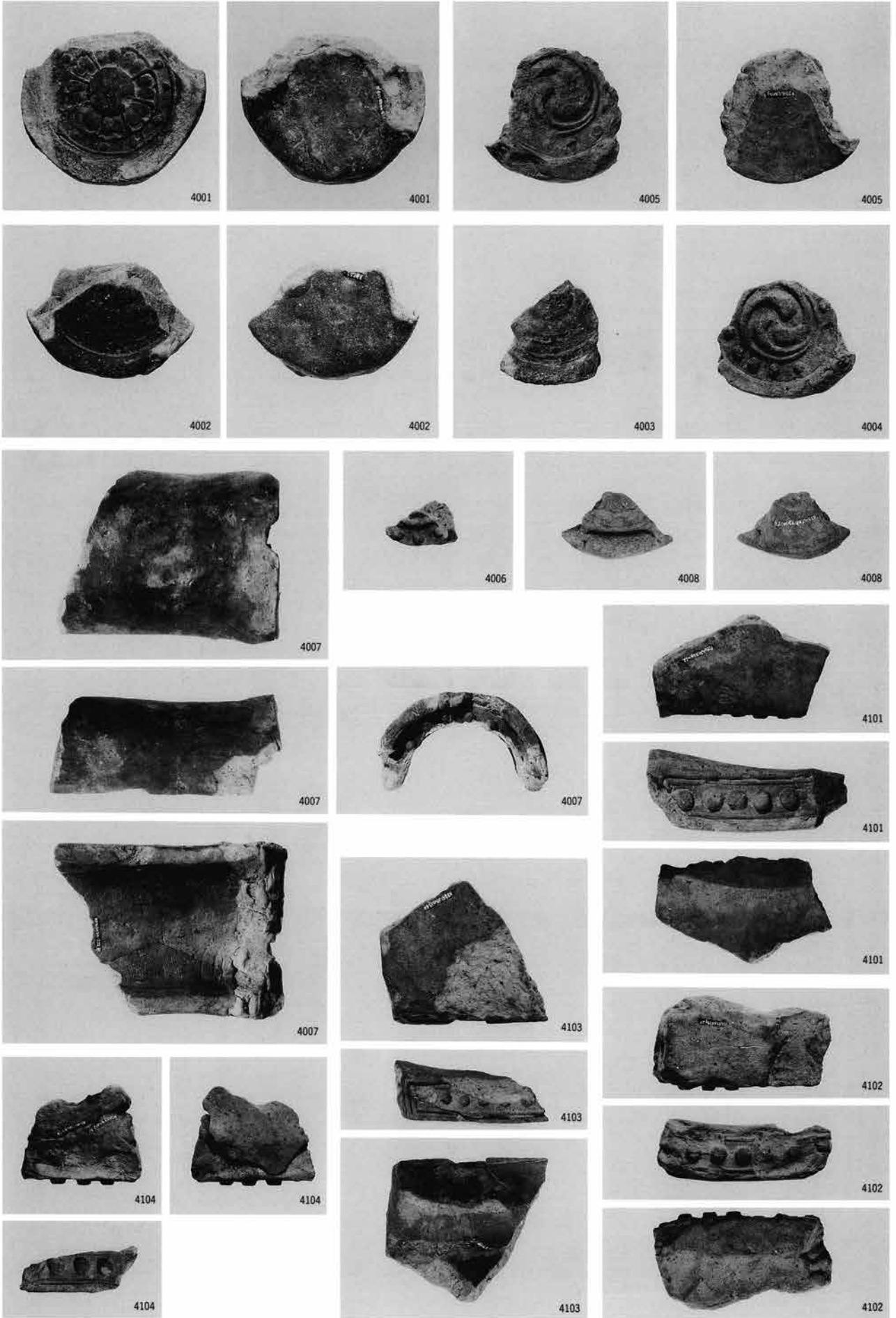


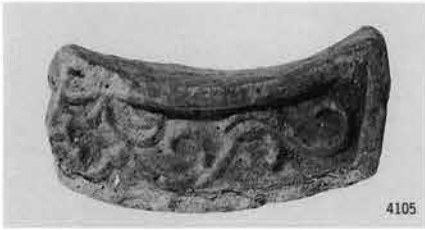


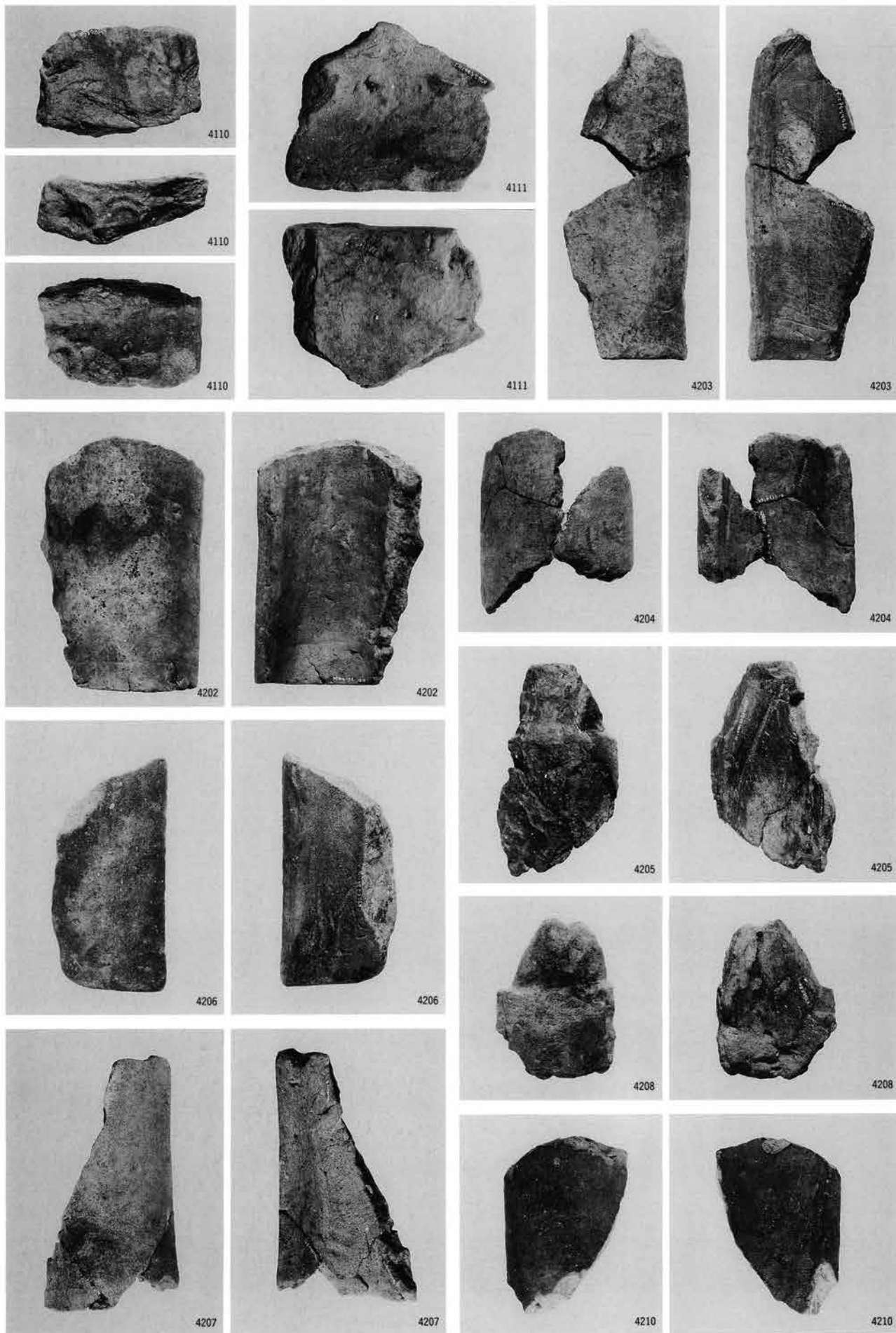
写真図版74 大御堂調査区

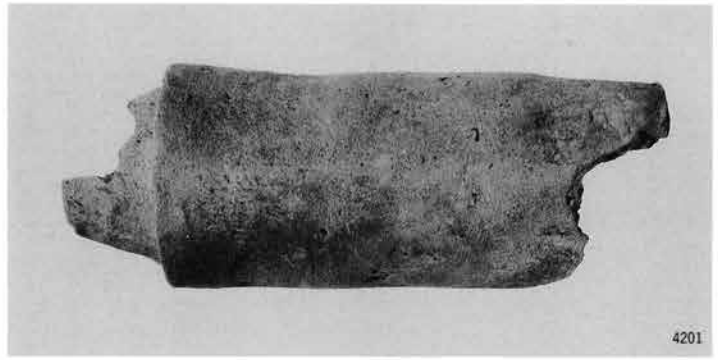
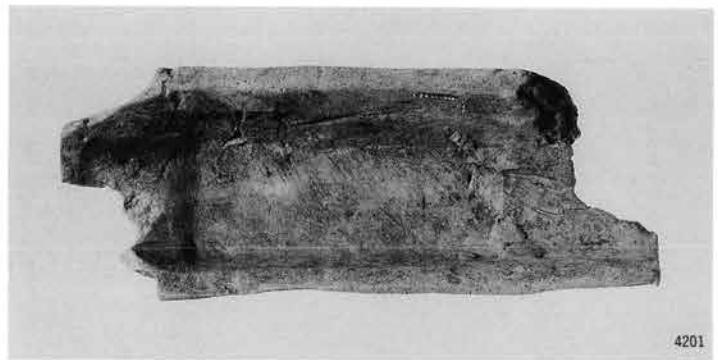


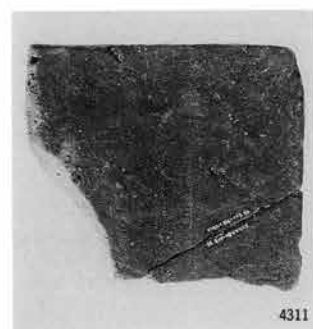
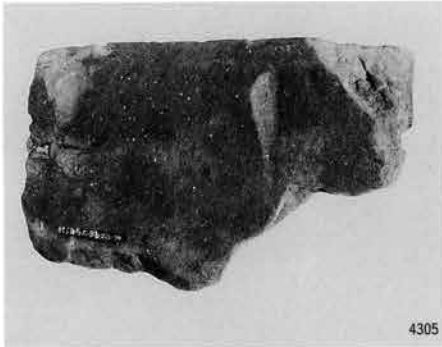
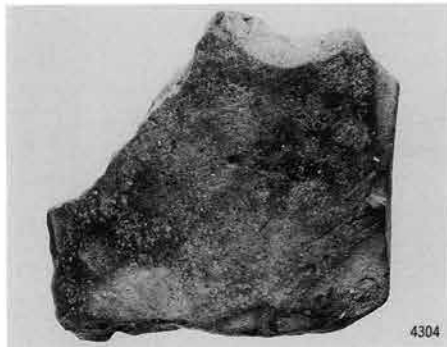
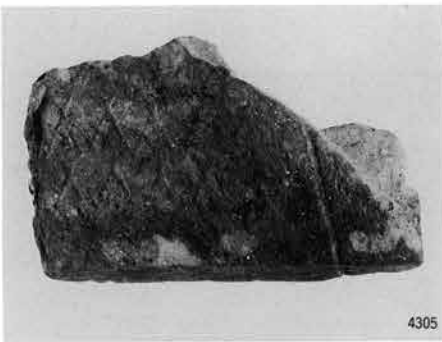


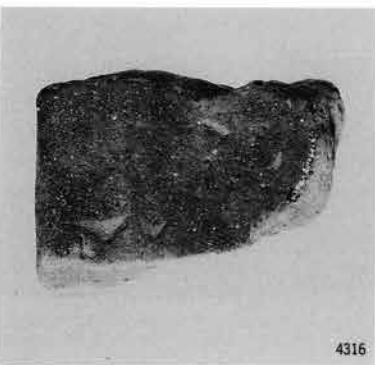
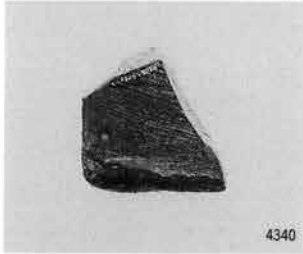
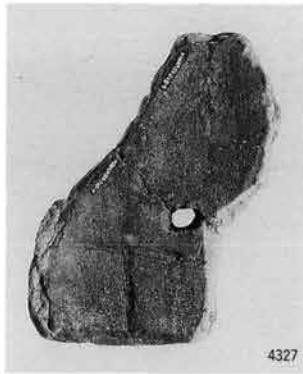


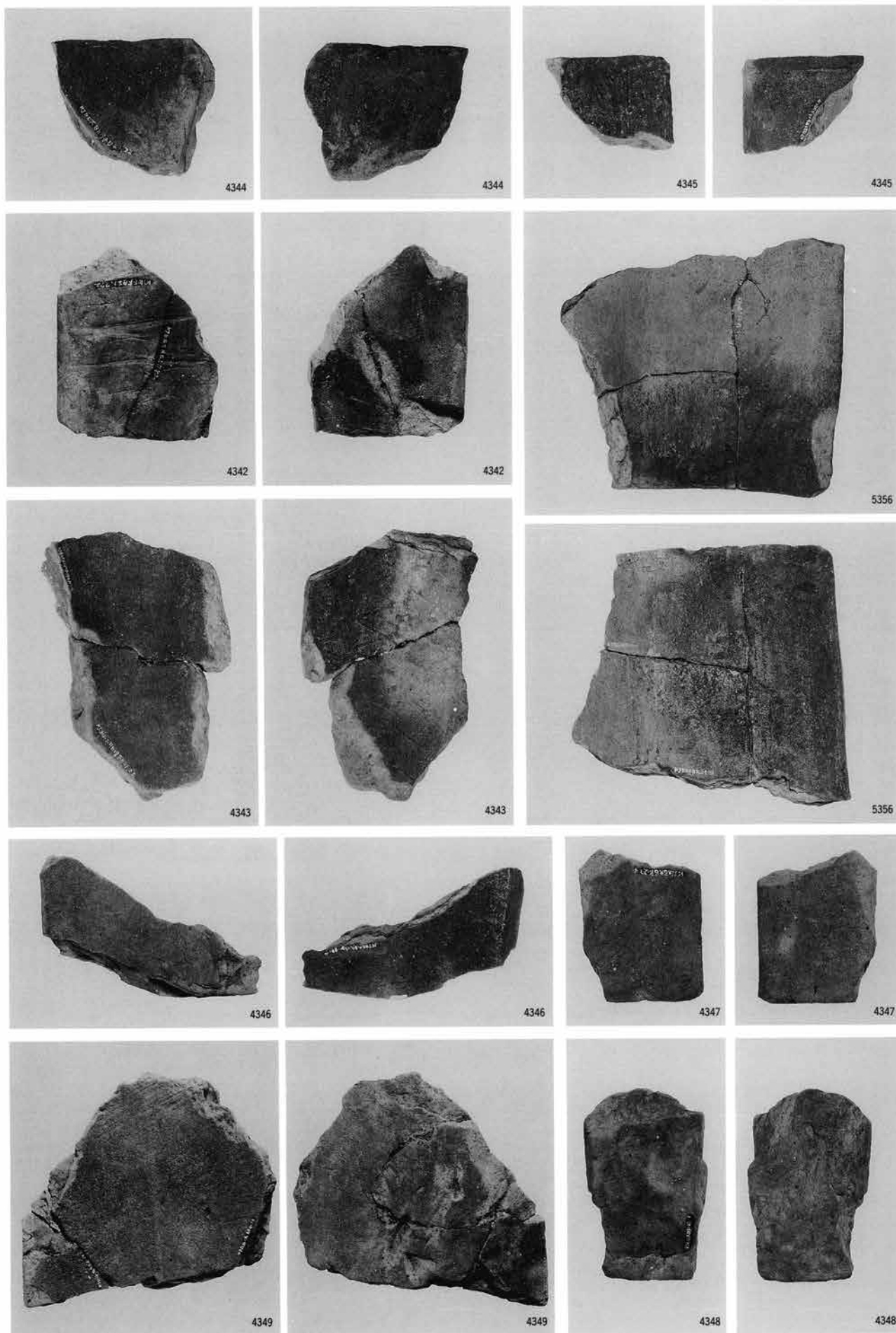


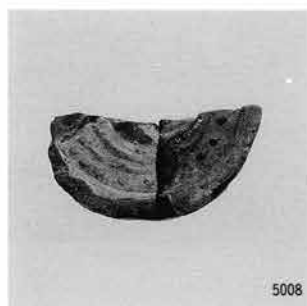
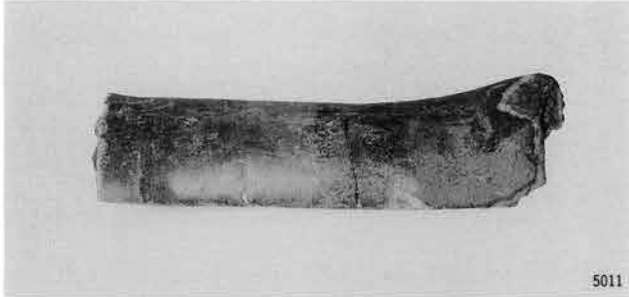
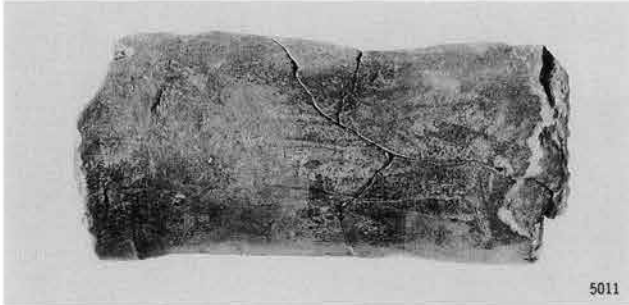
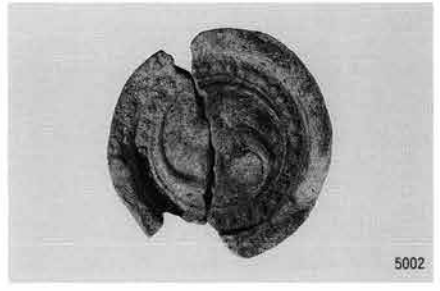
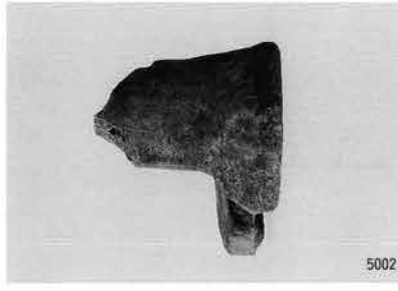


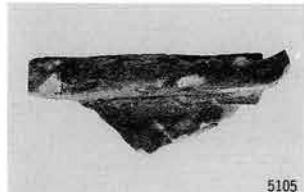
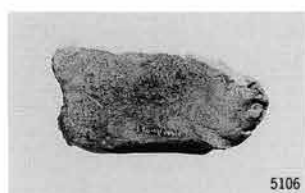
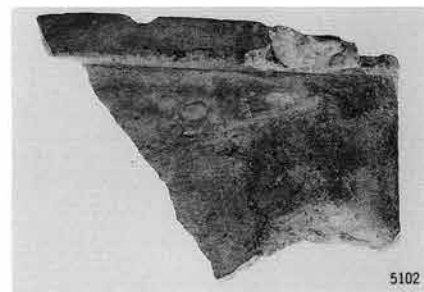
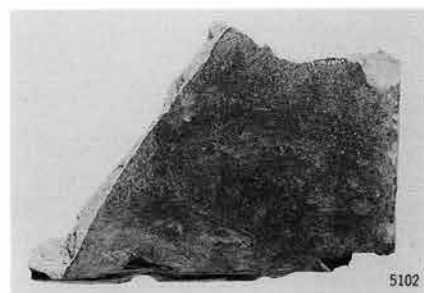
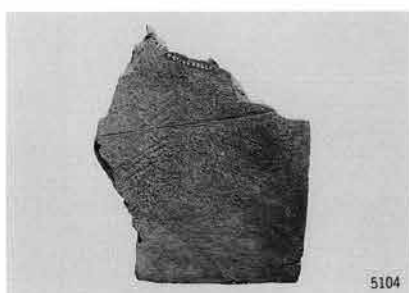
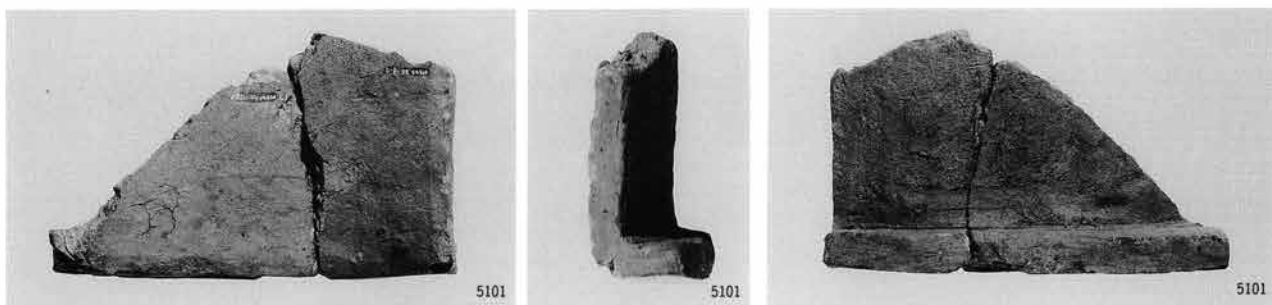


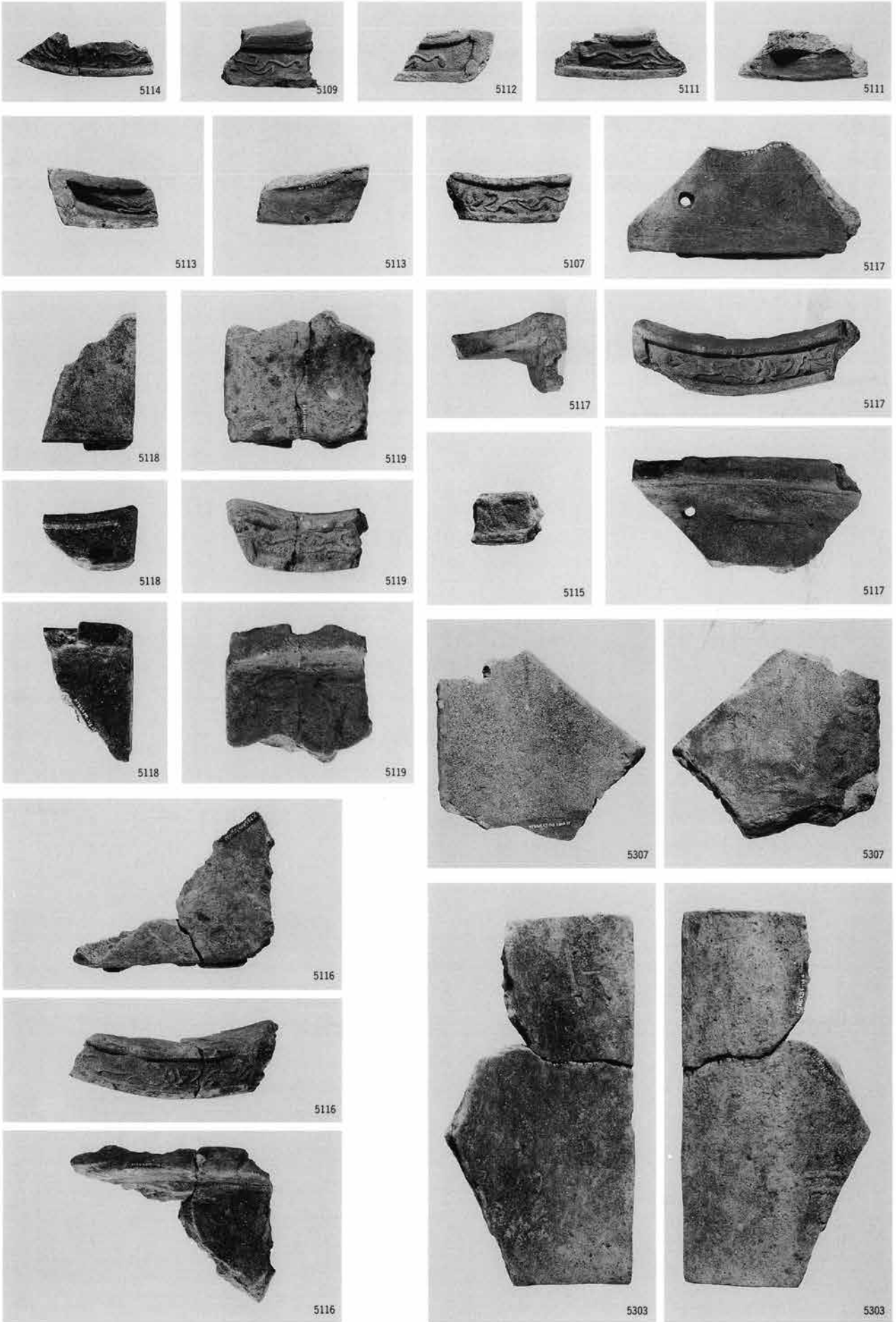


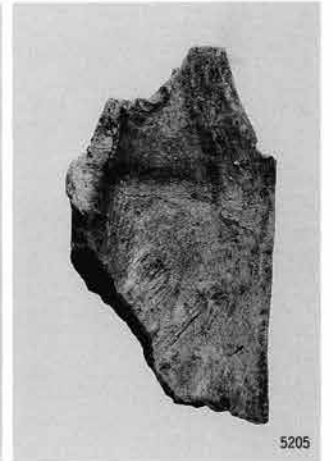
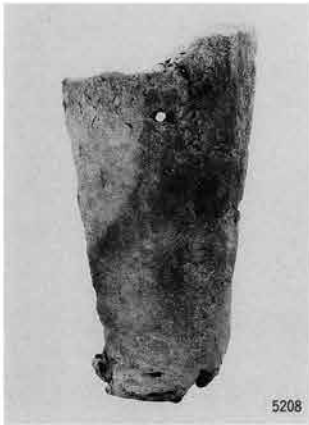


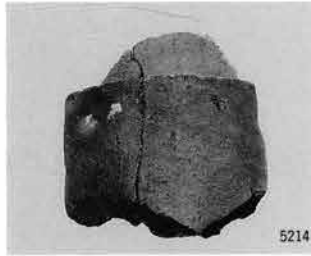


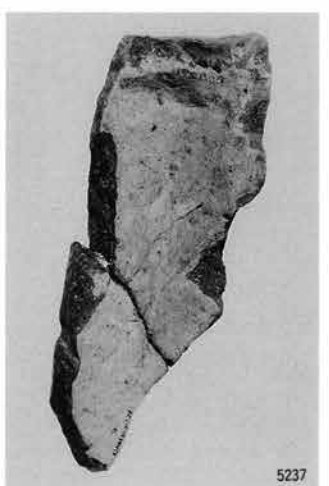
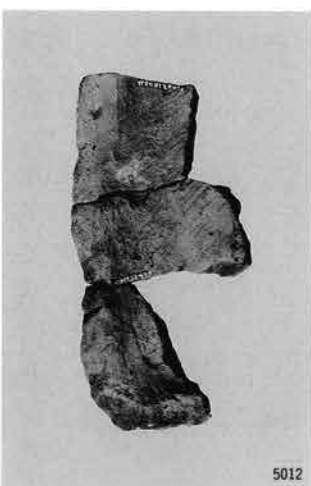
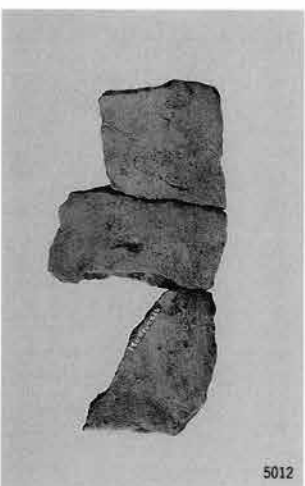
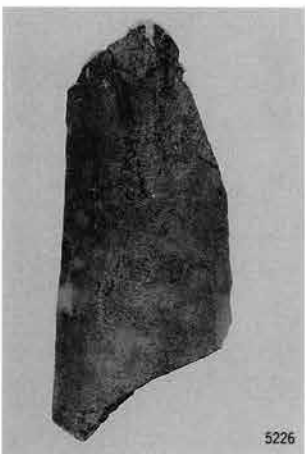
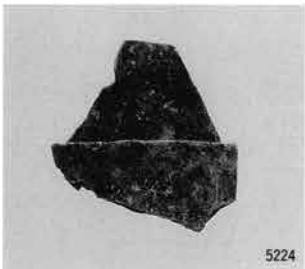
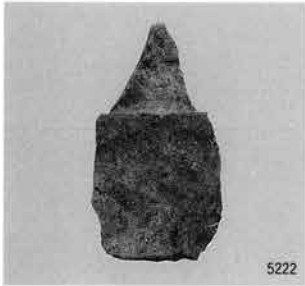


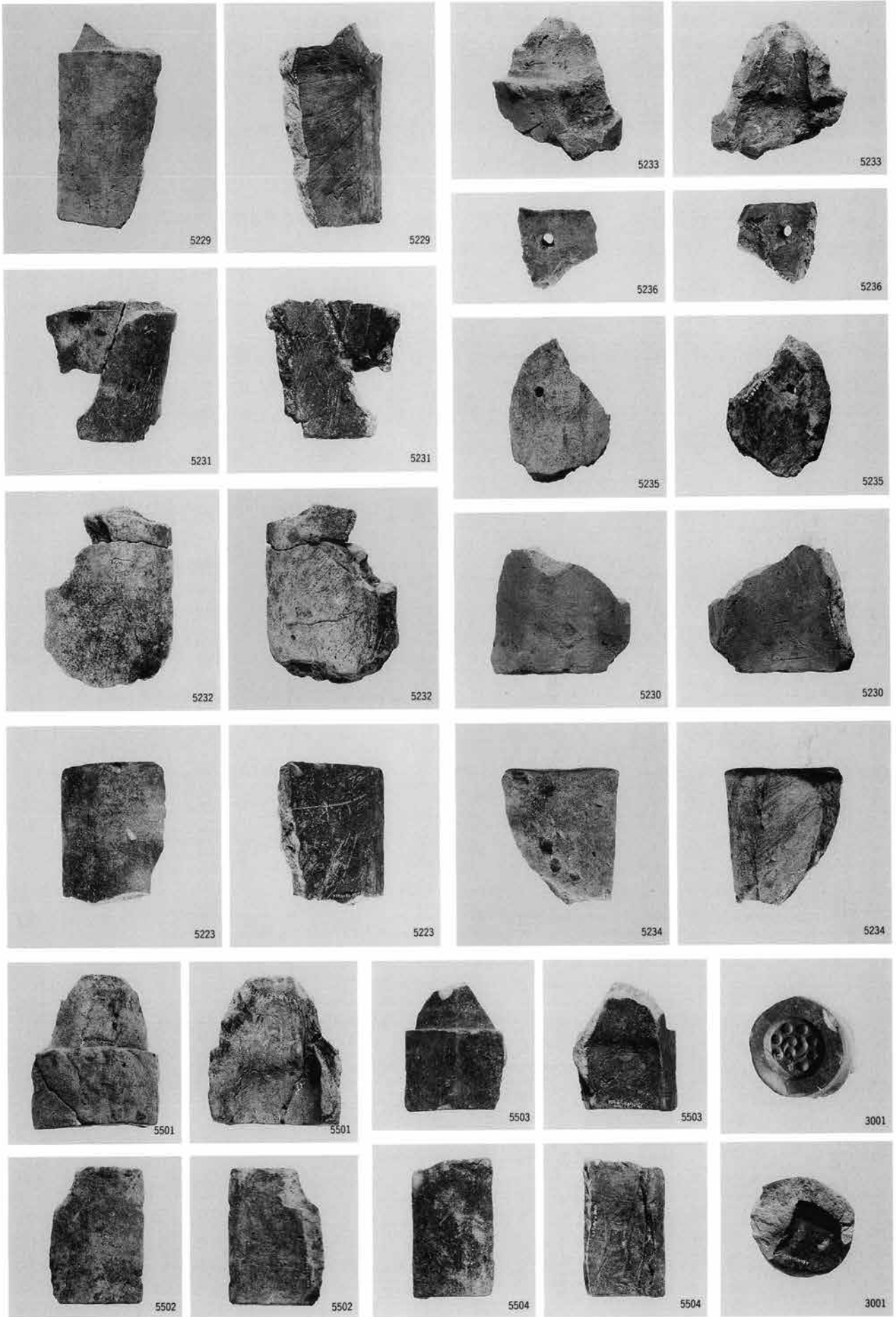


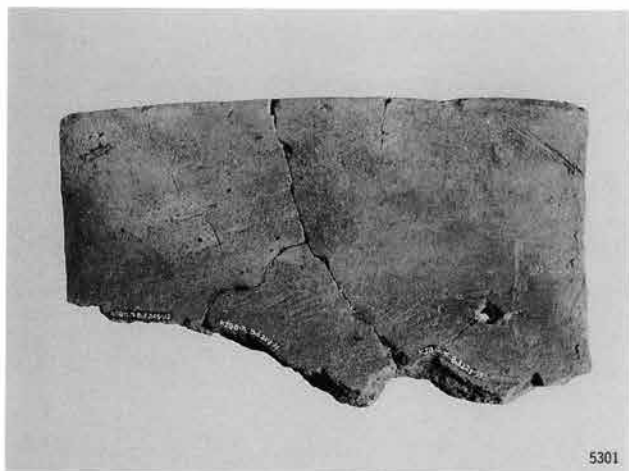




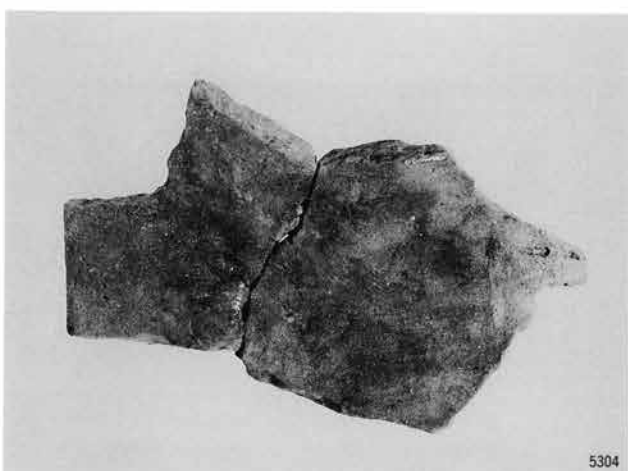




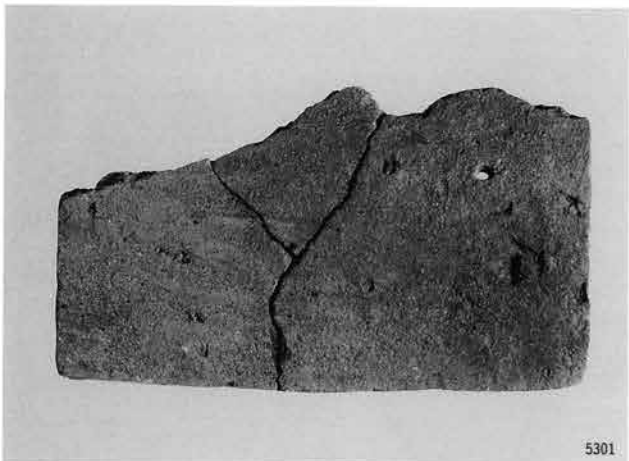




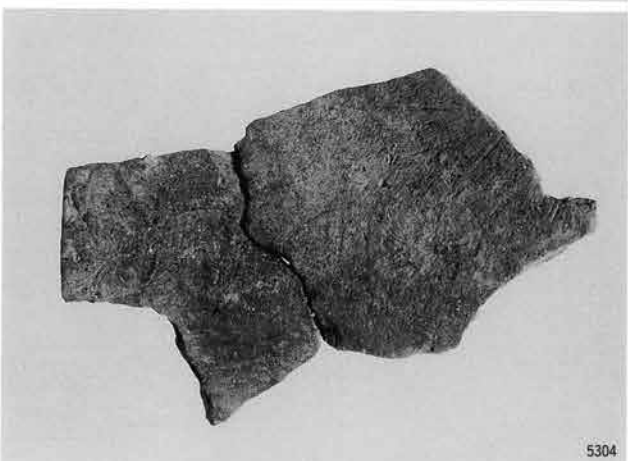
5301



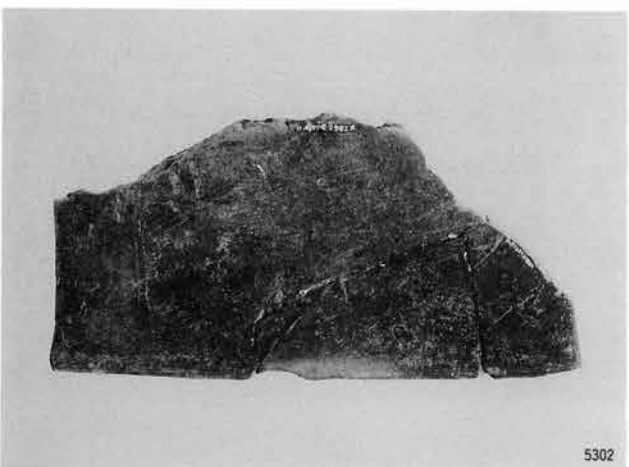
5304



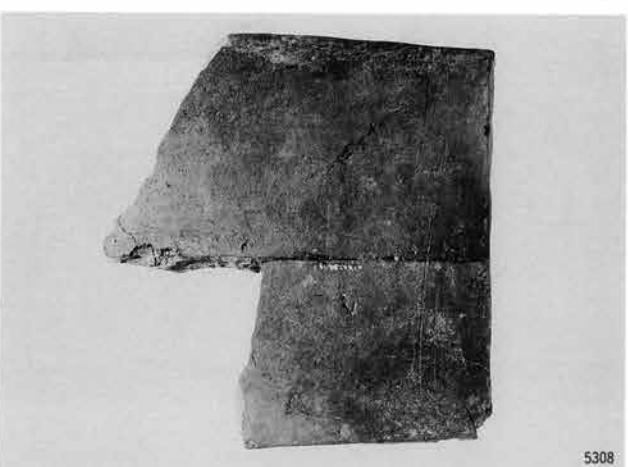
5301



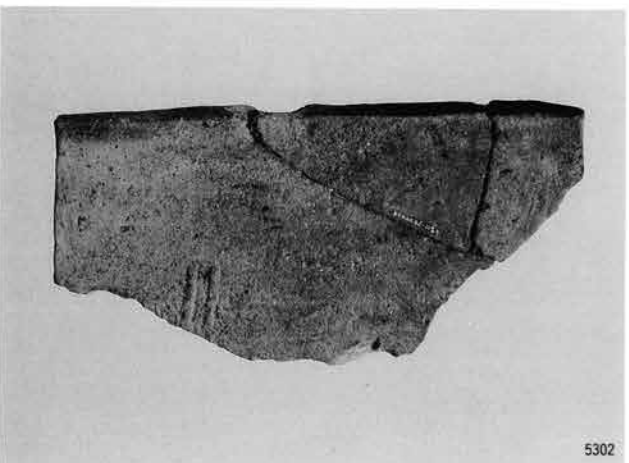
5304



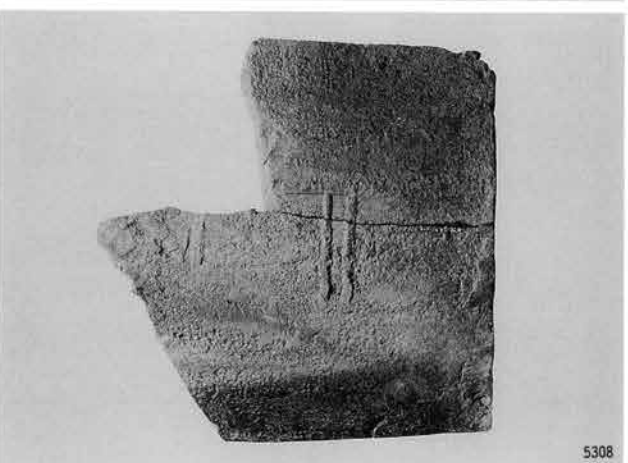
5302



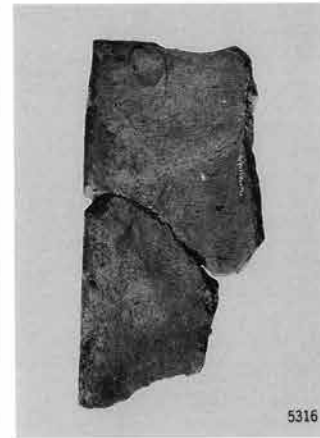
5308

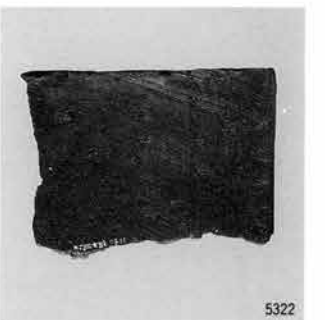
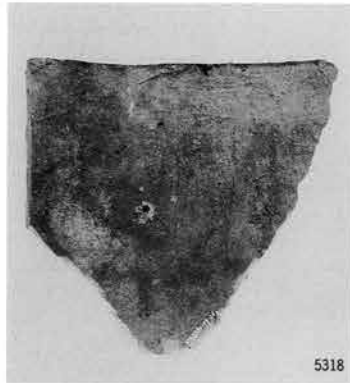
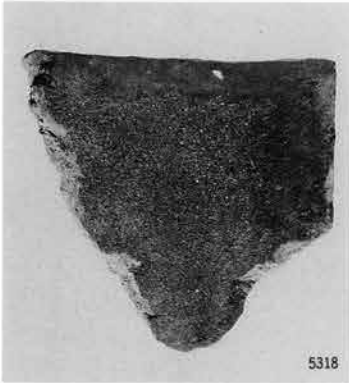


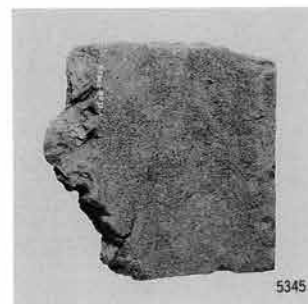
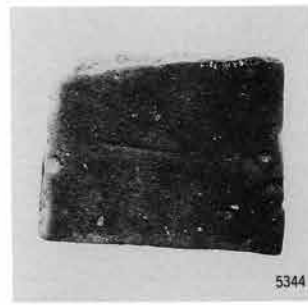
5302

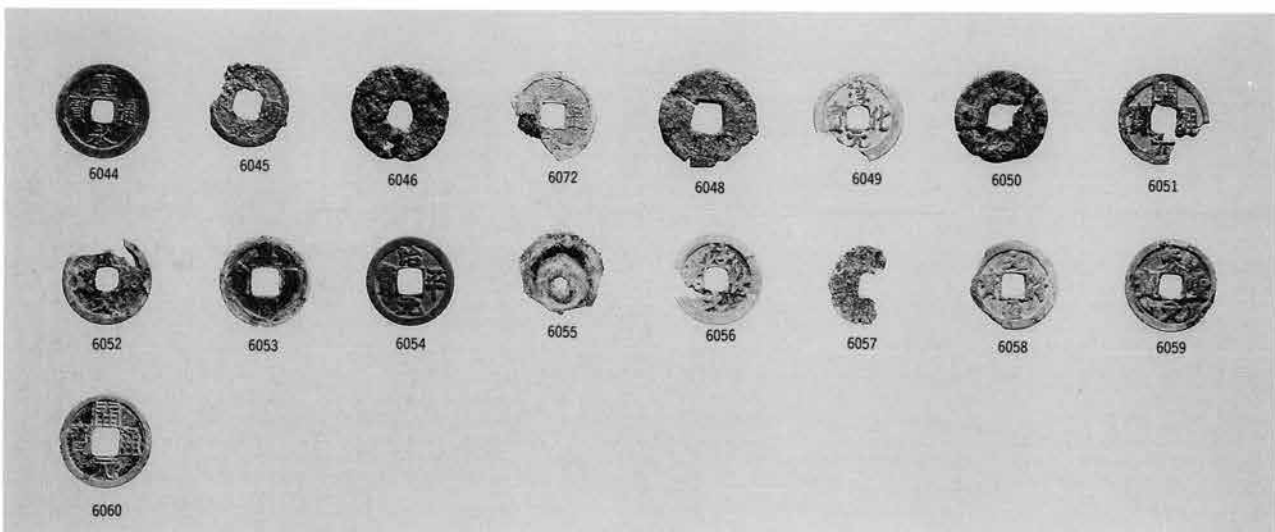
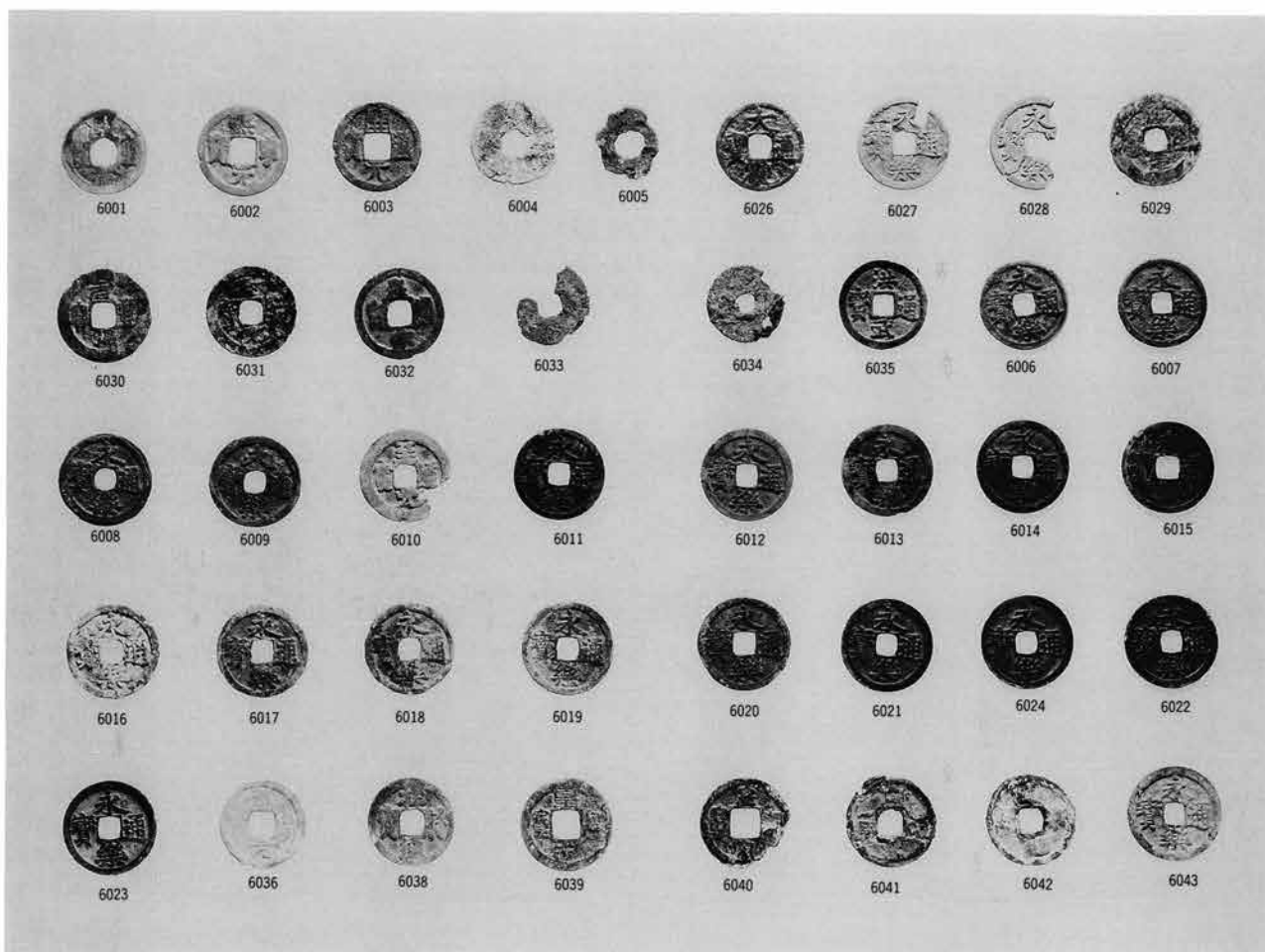


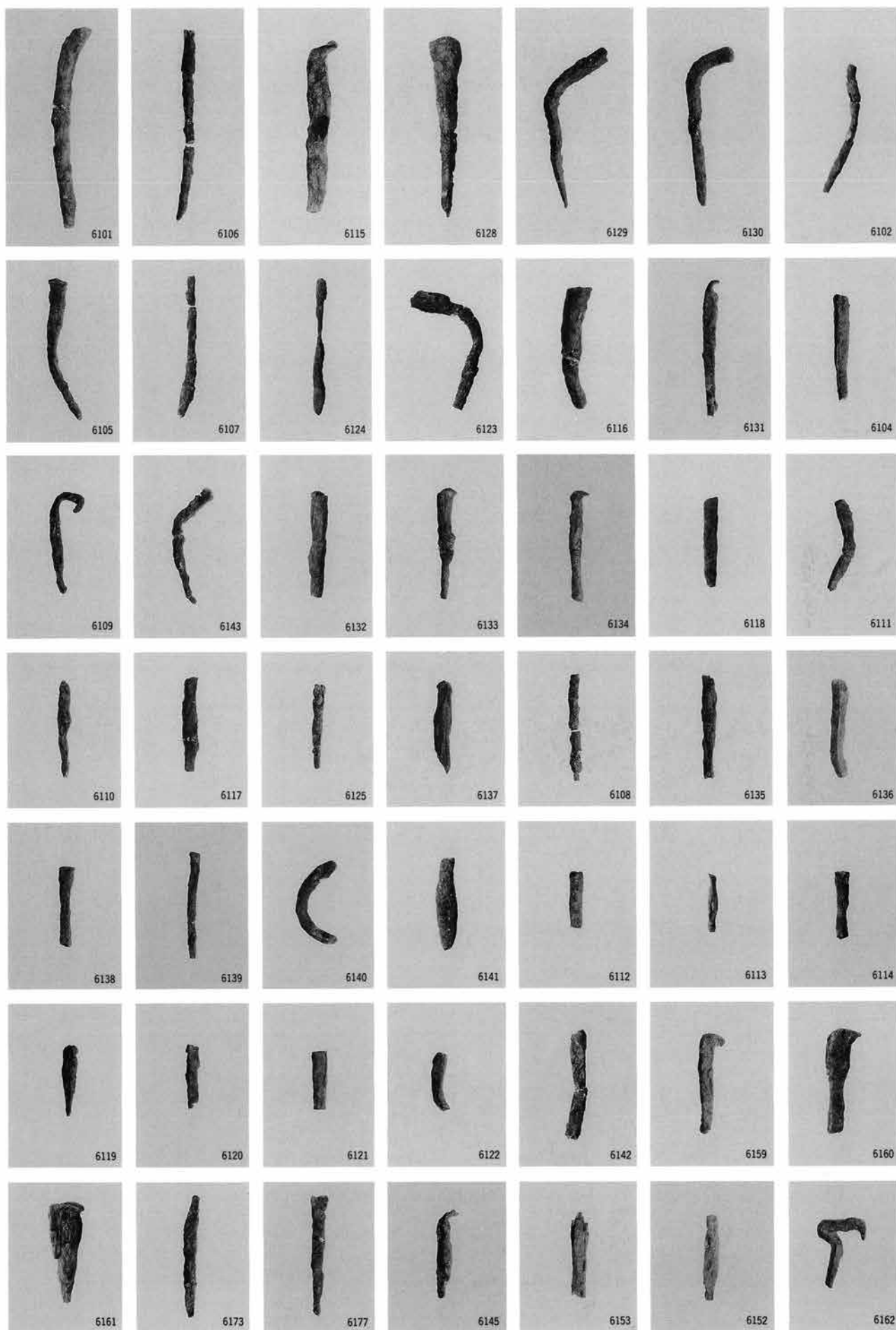
5308

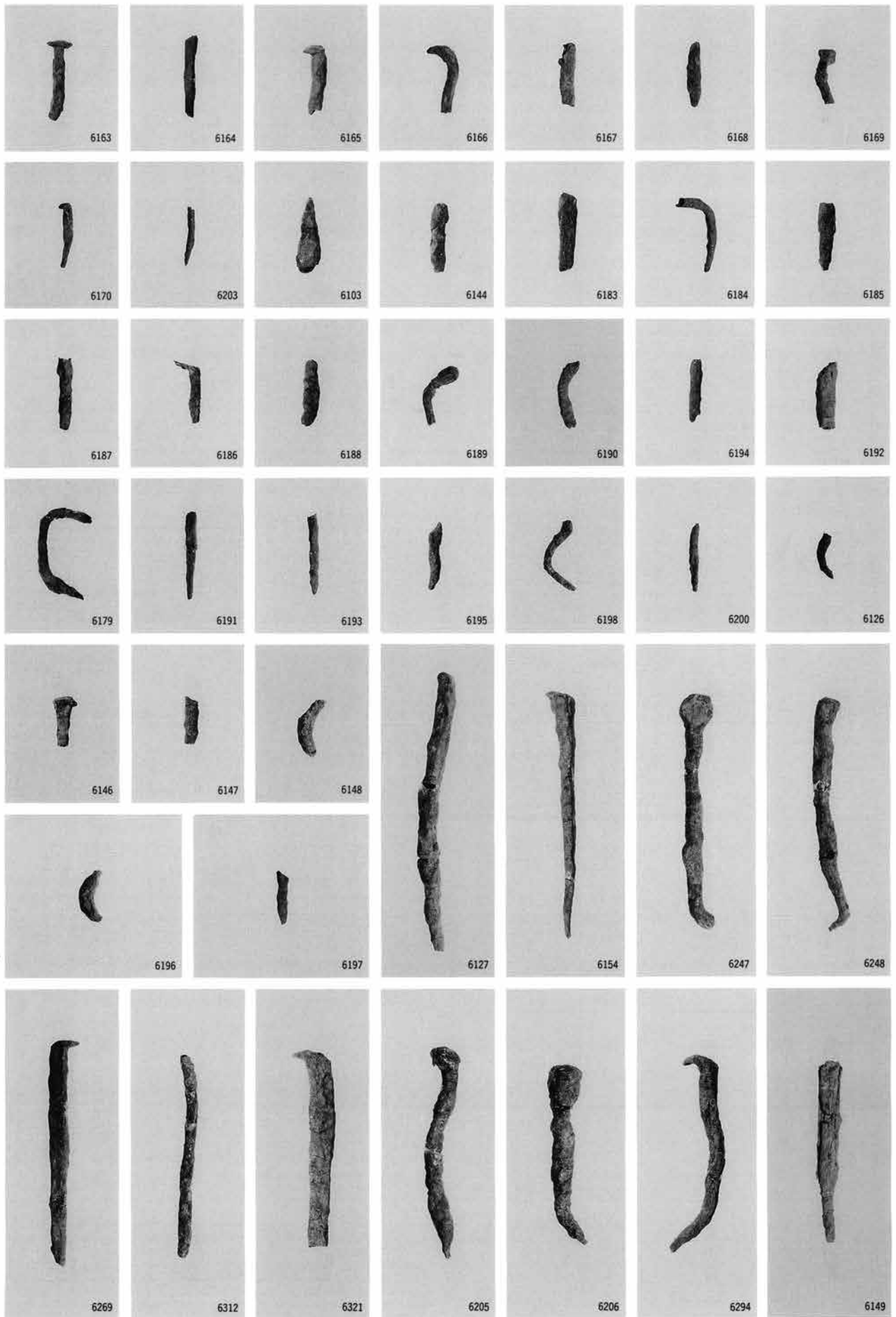


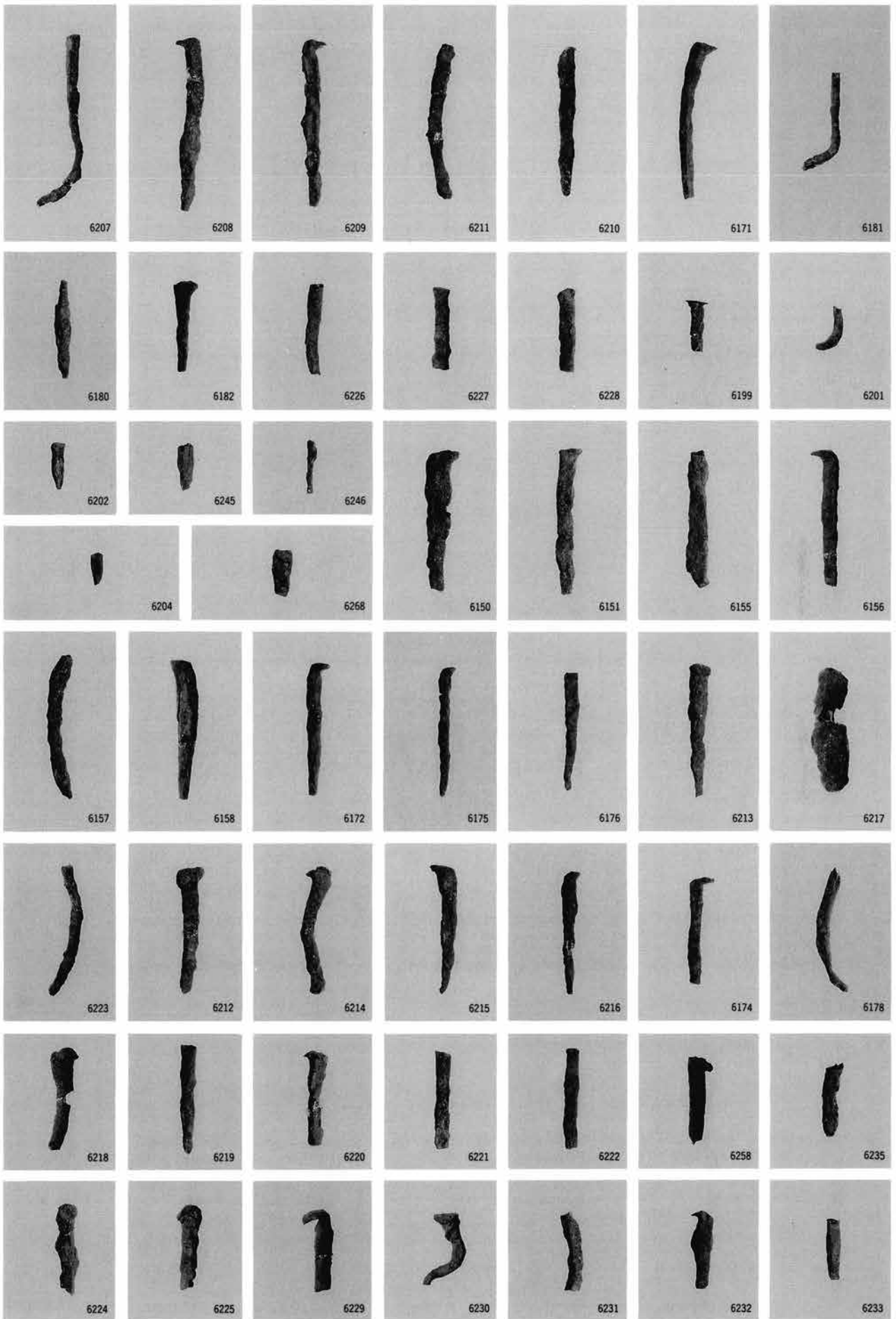


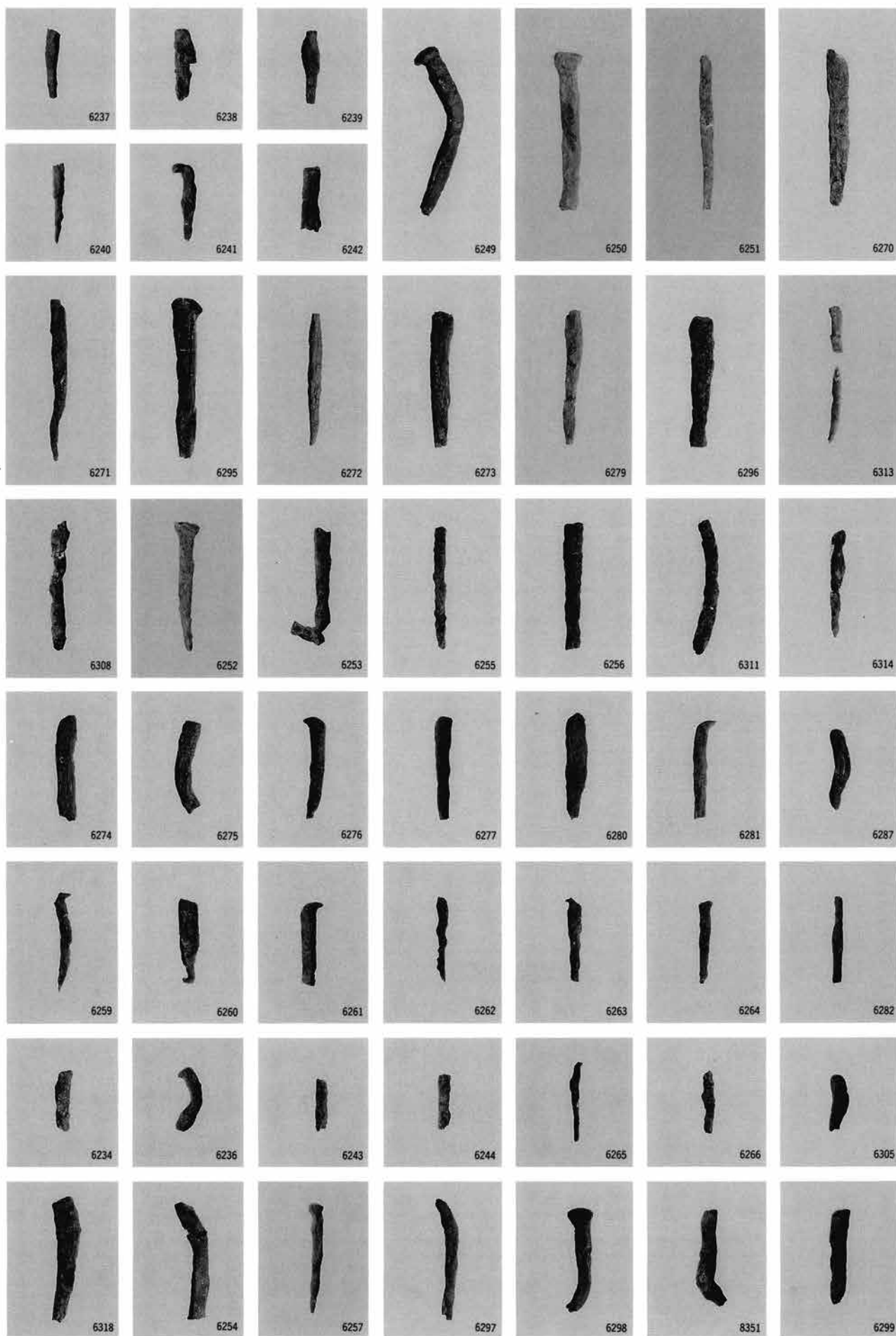


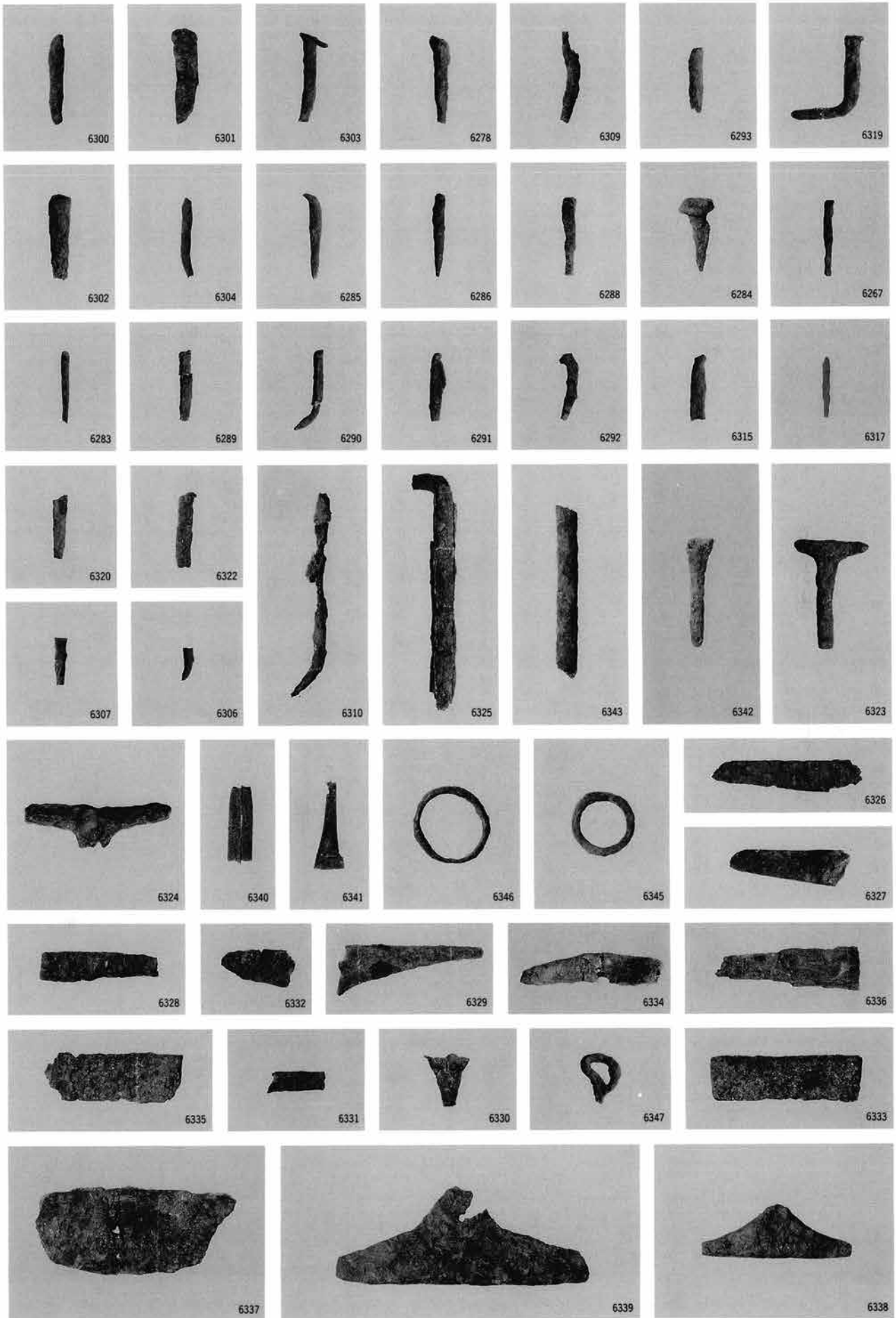


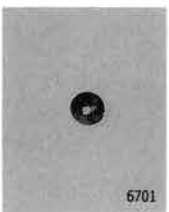
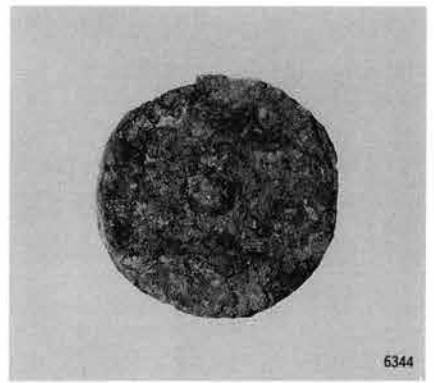
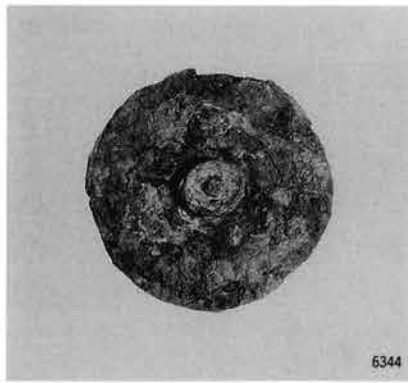
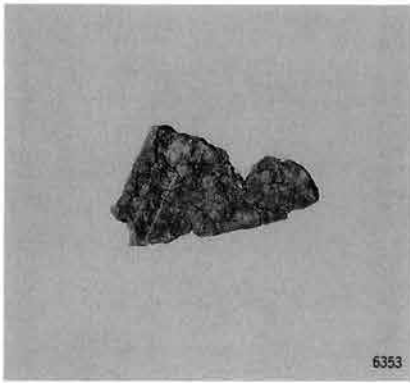


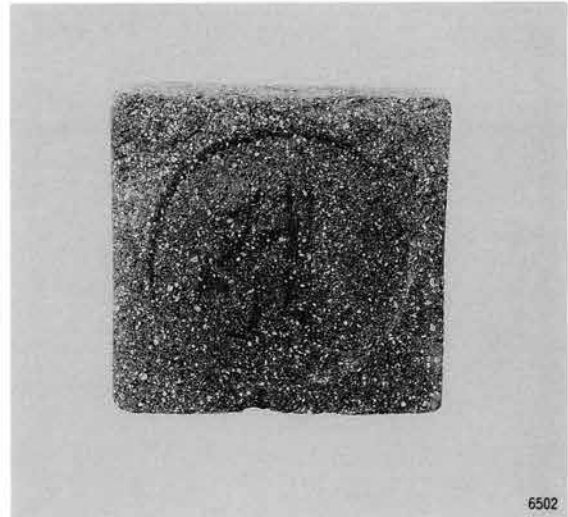
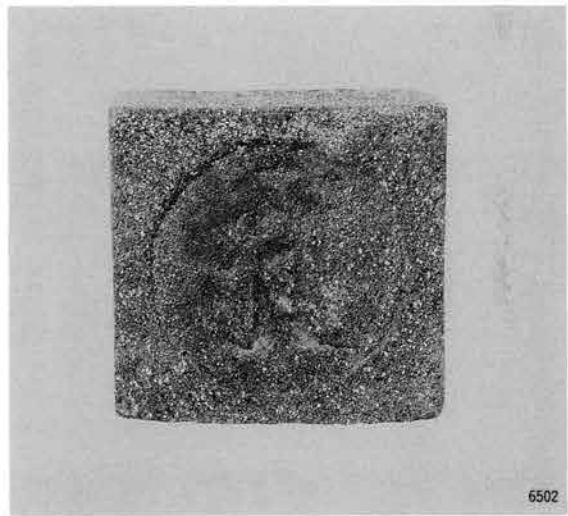
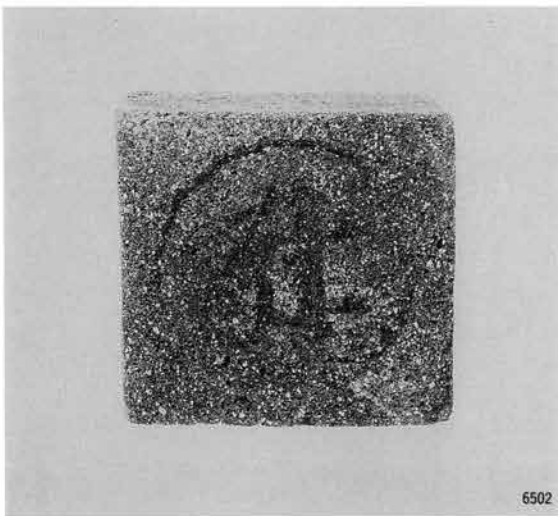






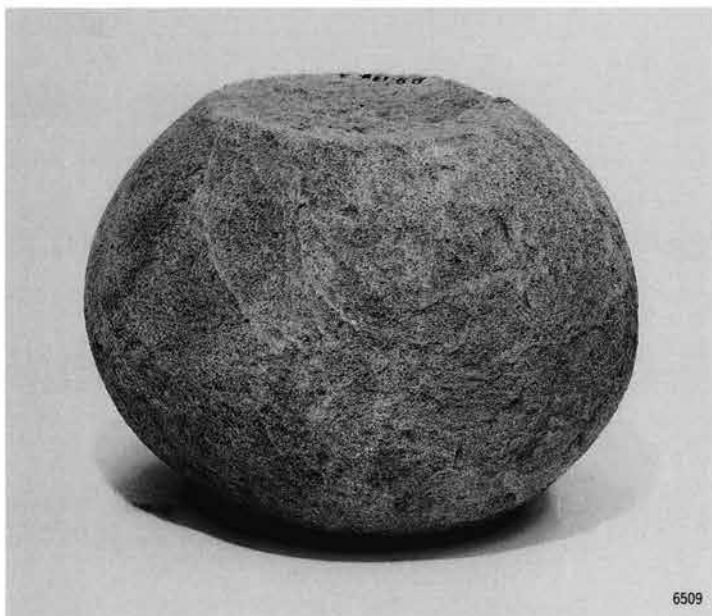


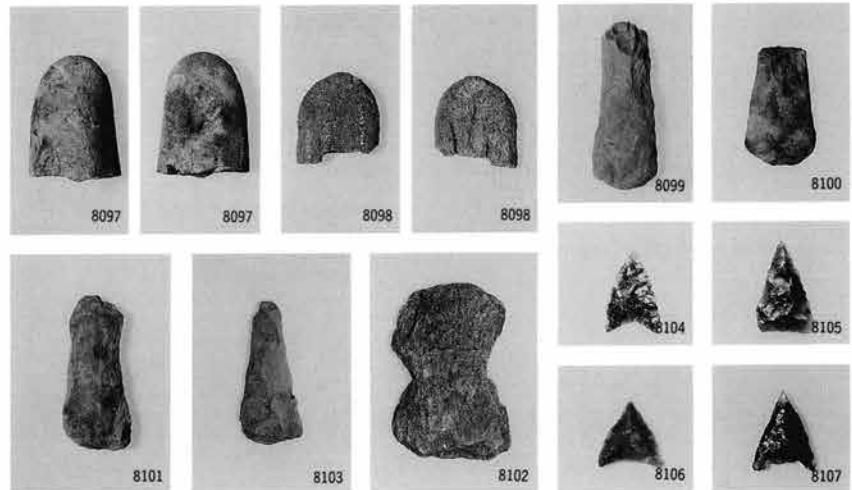
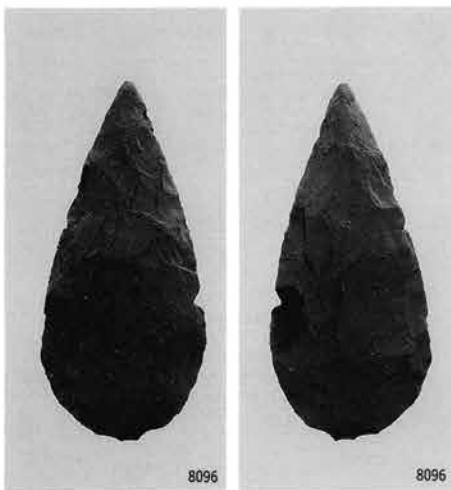
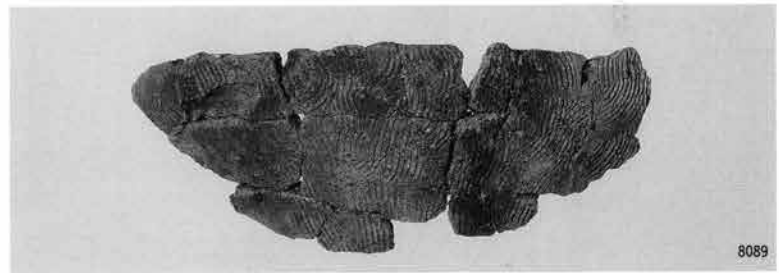
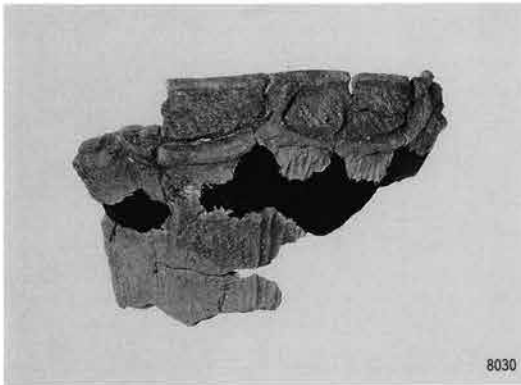
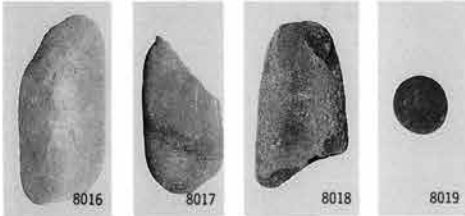
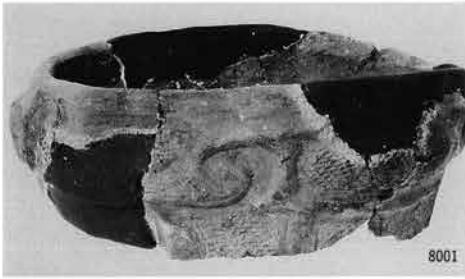


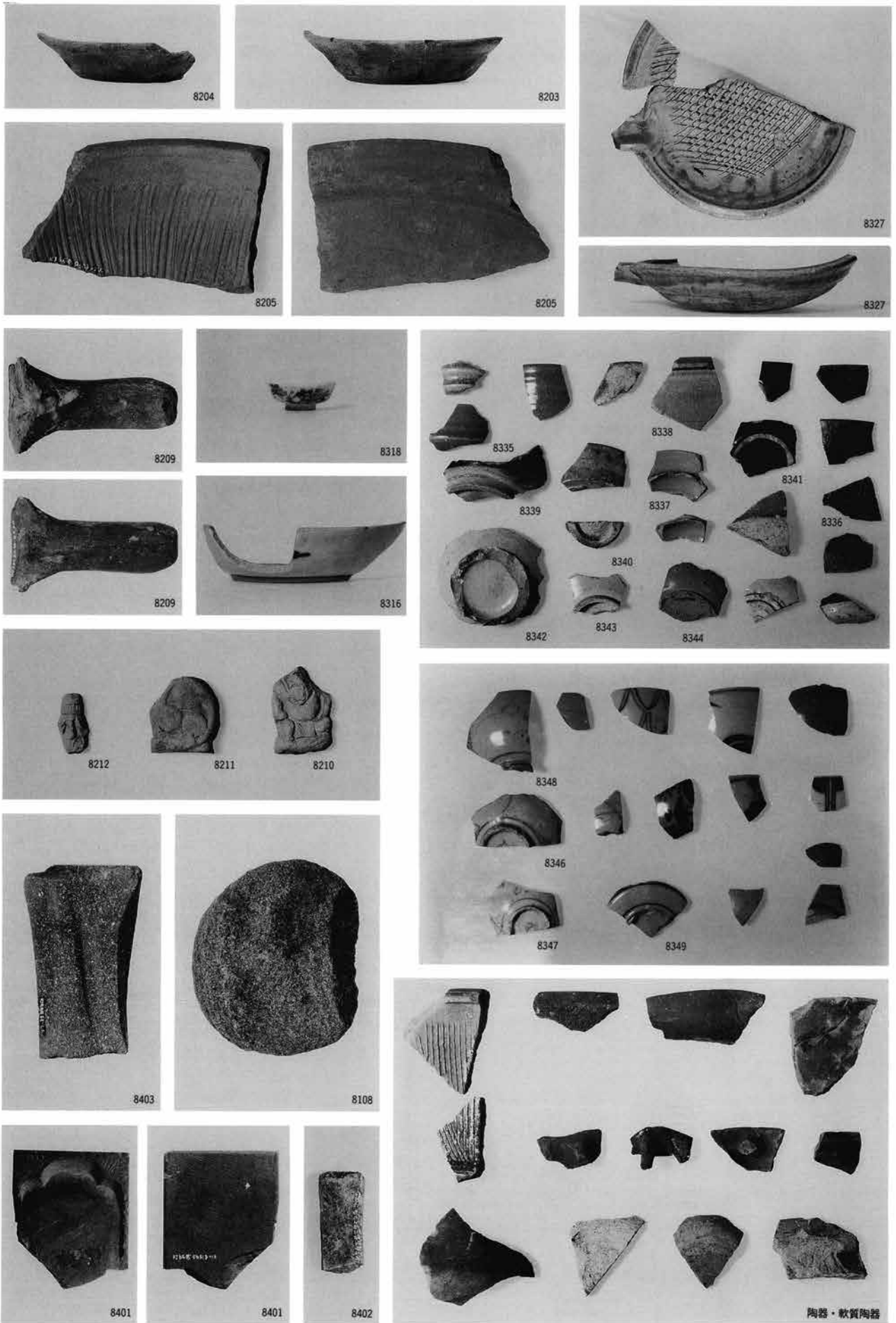


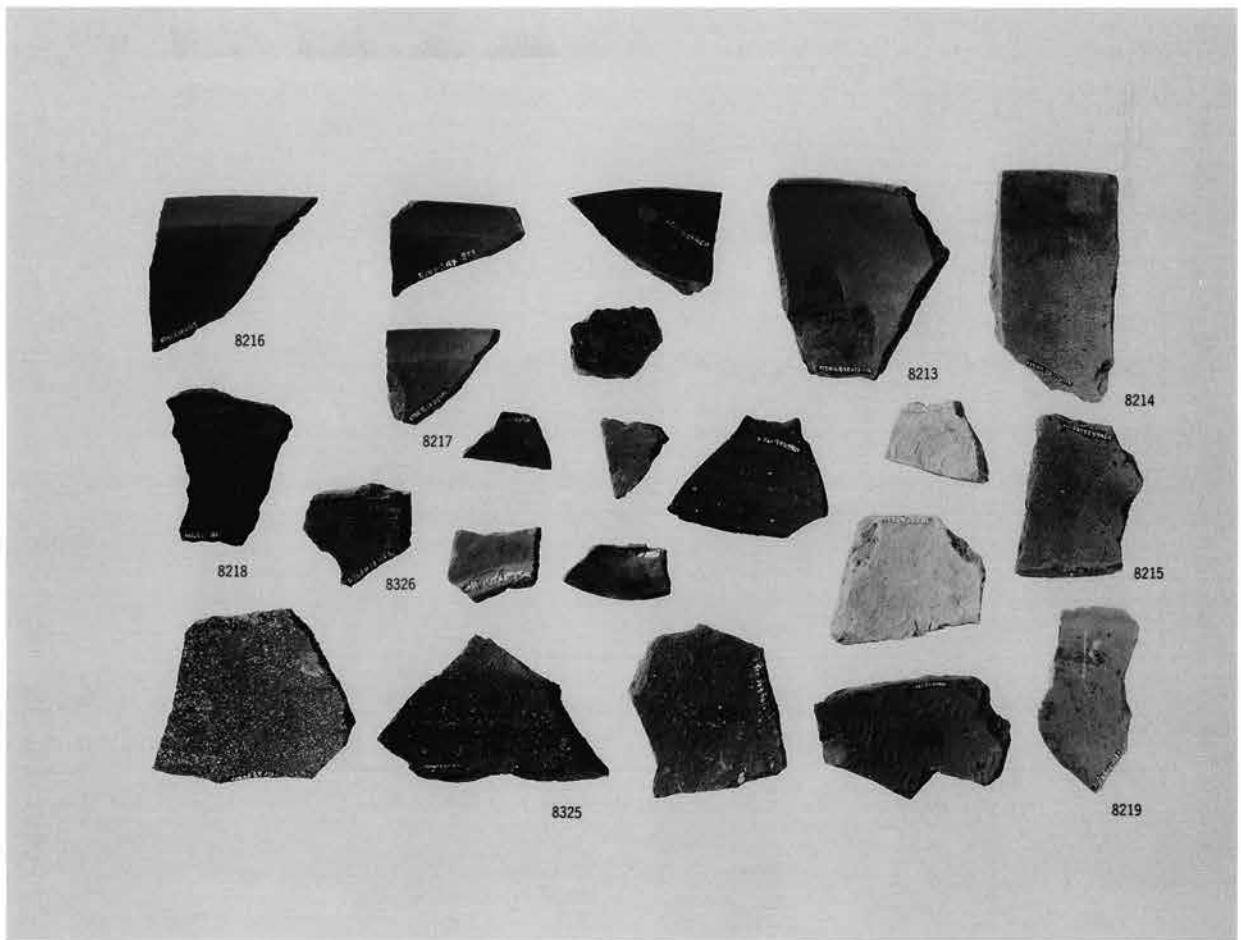
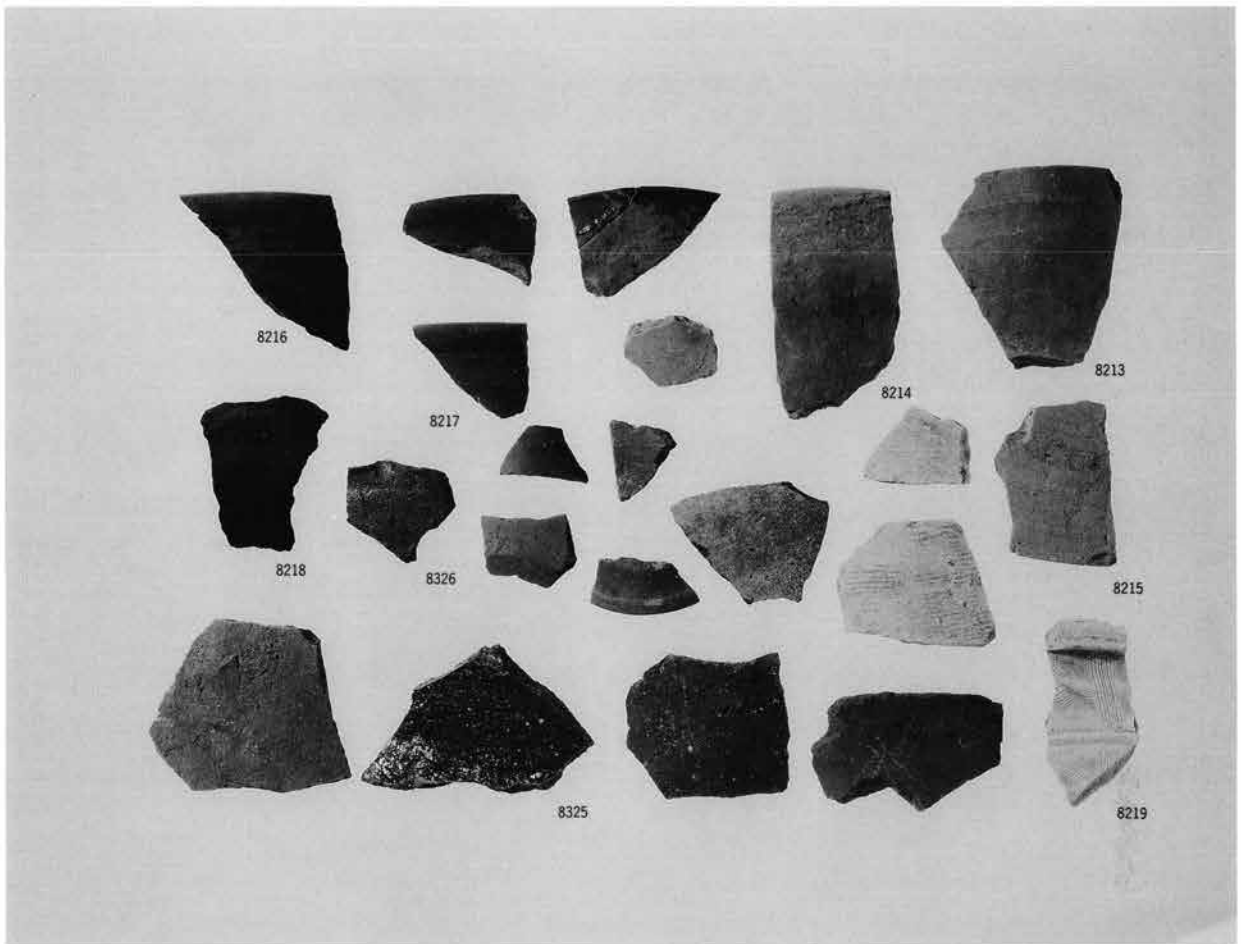


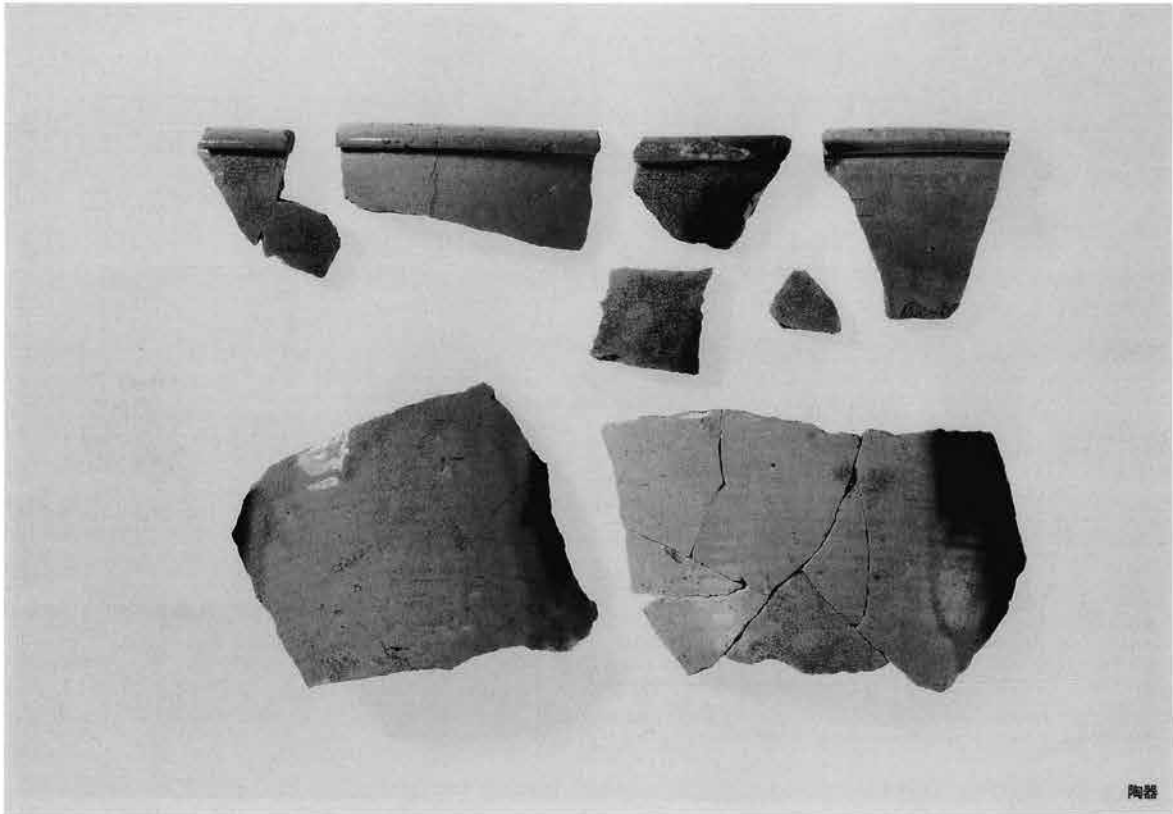
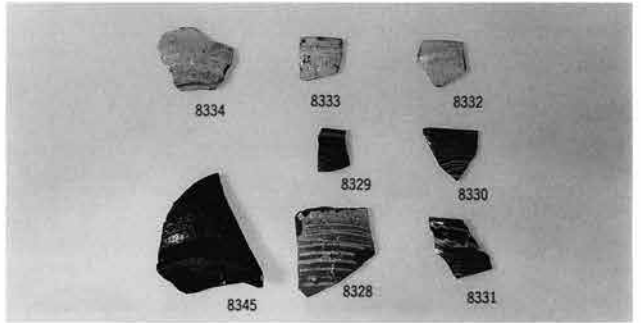
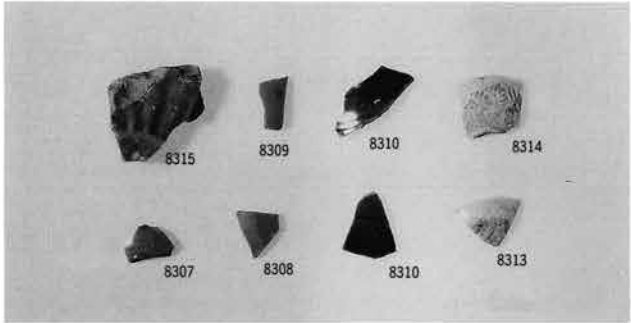
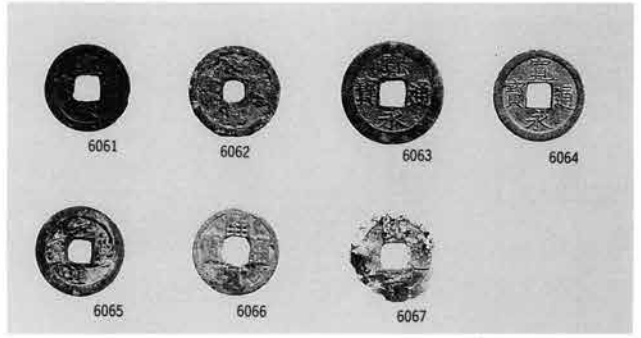


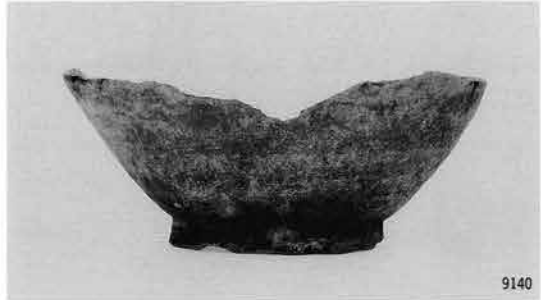
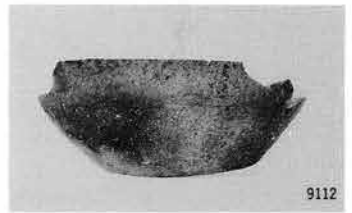
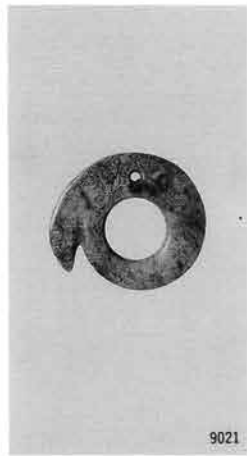


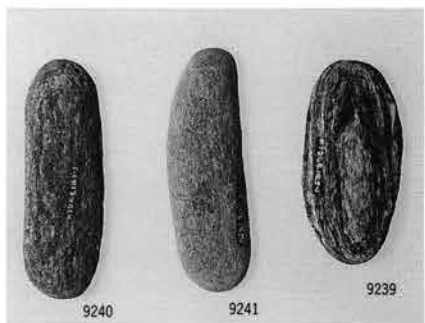
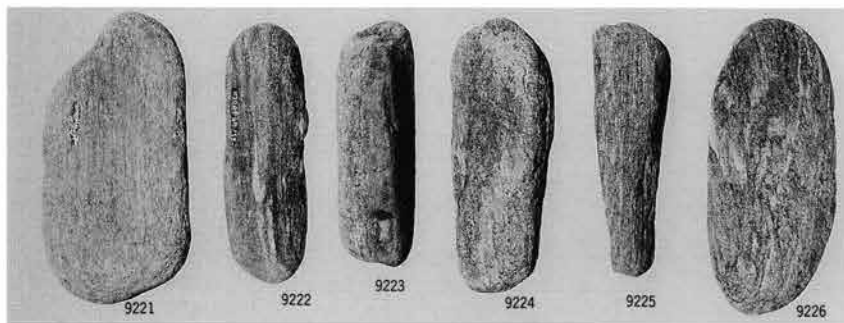
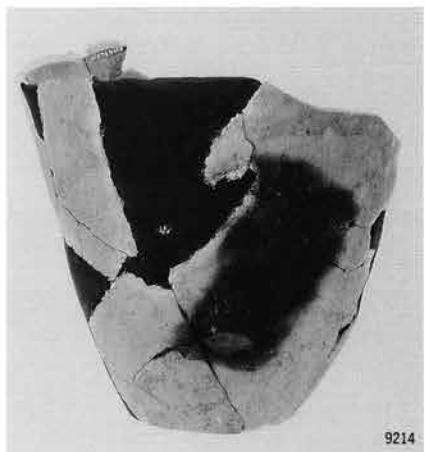
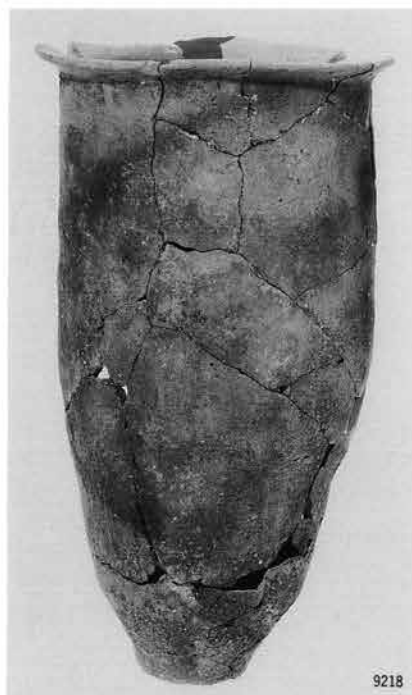
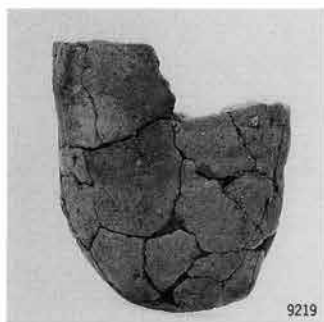


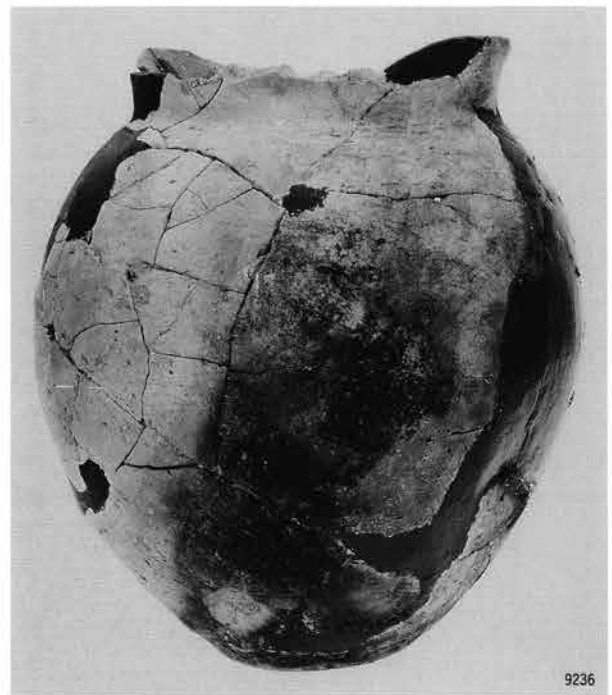
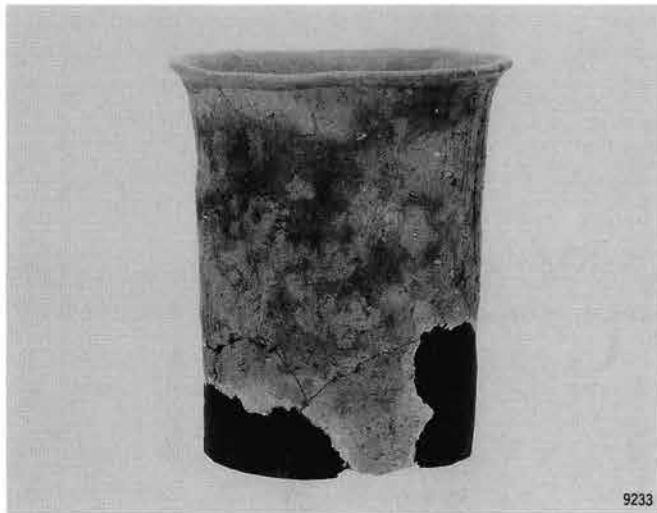
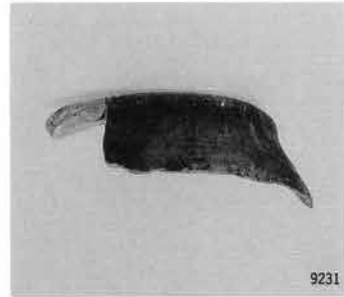
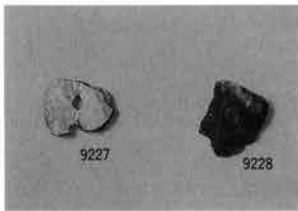
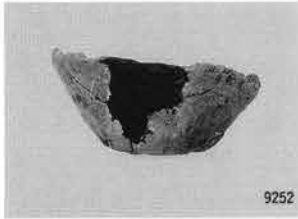
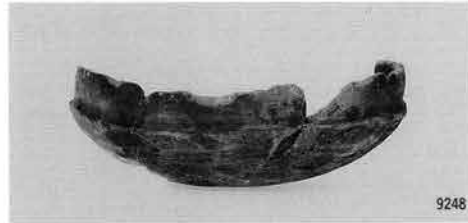
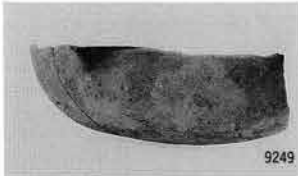
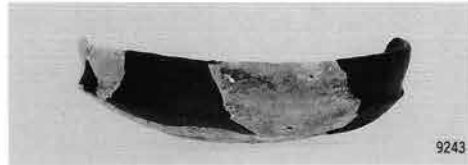




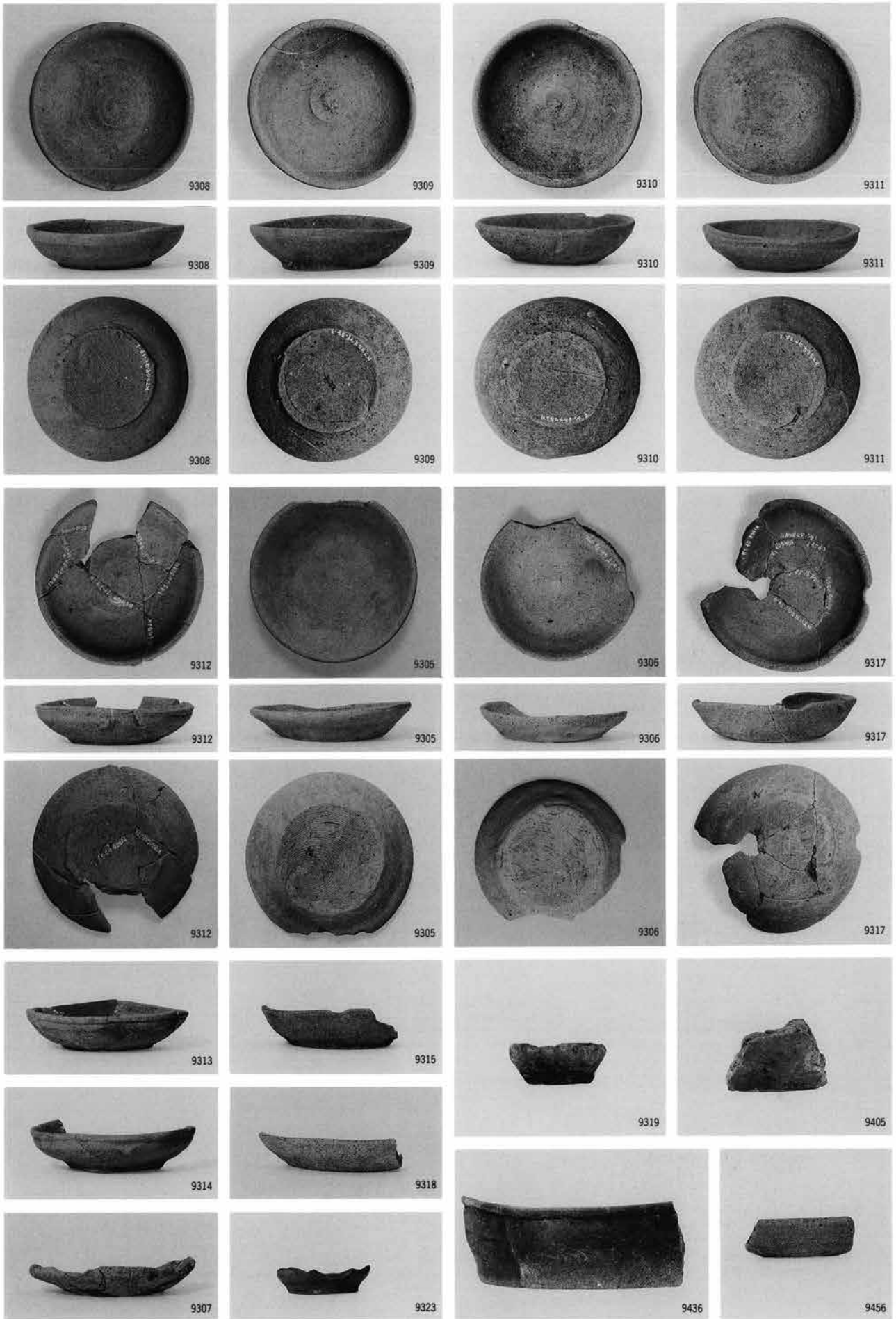


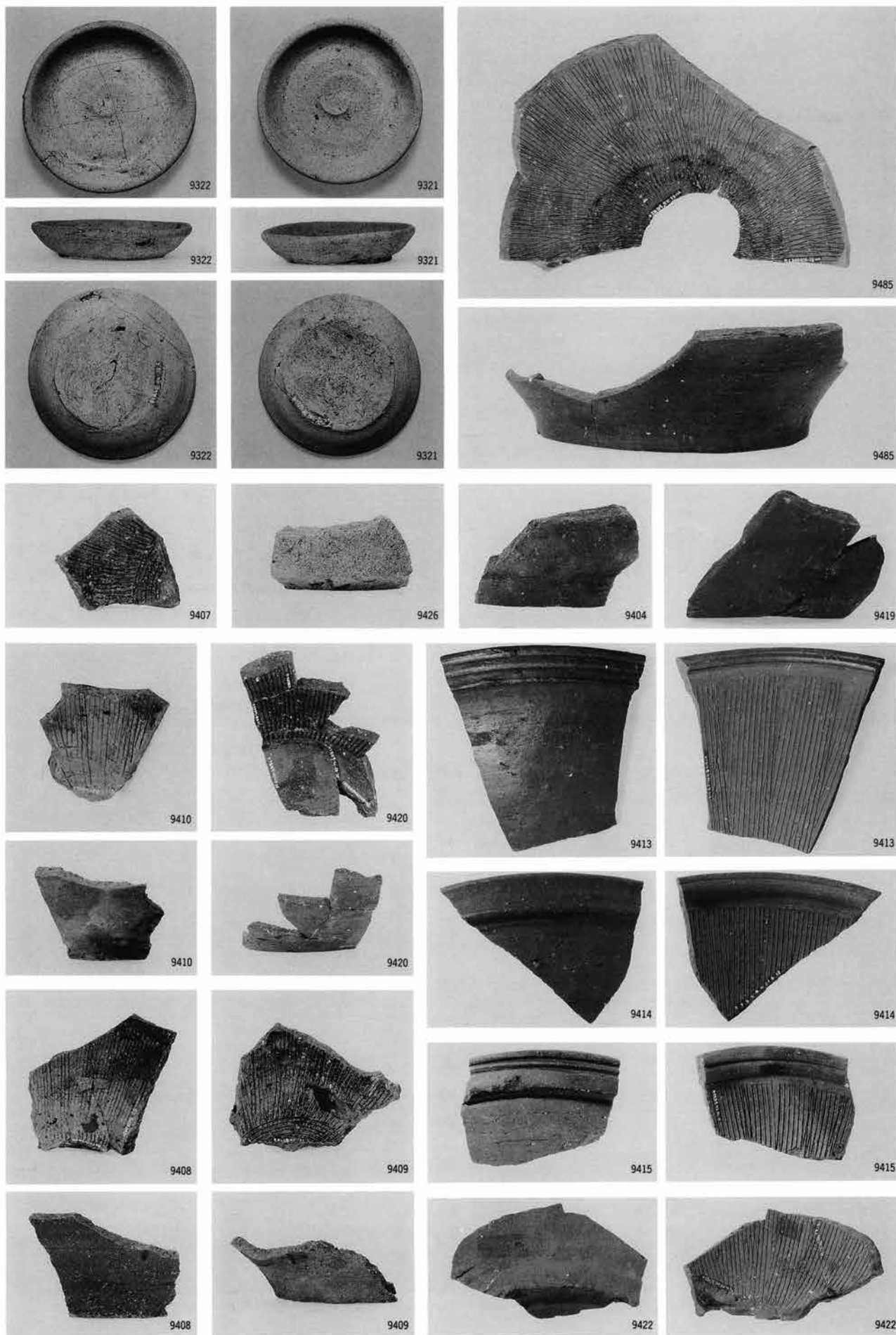


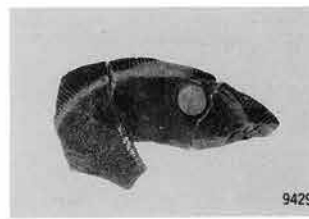
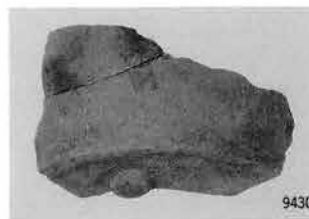
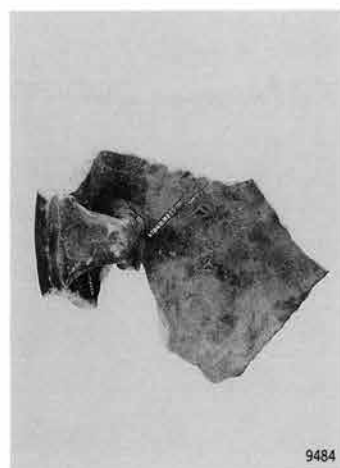
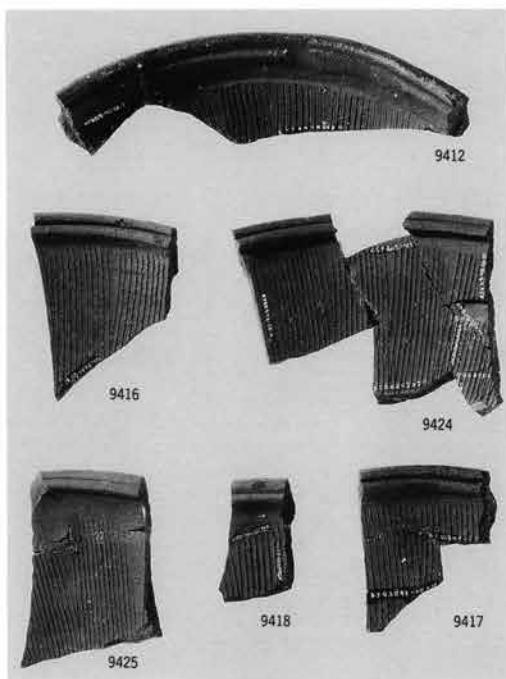
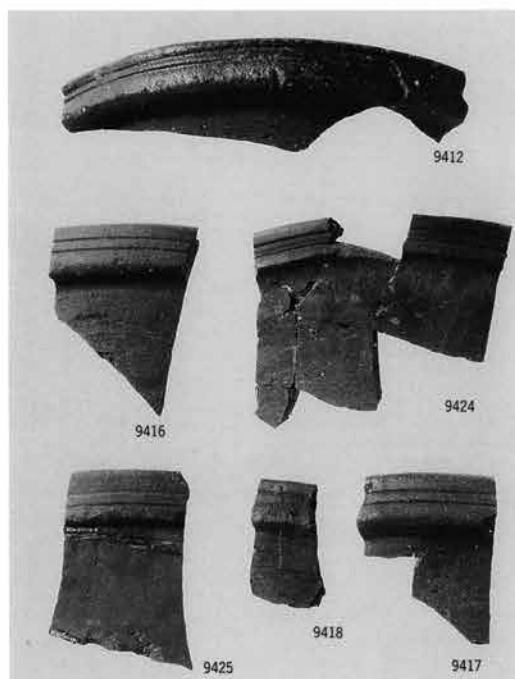
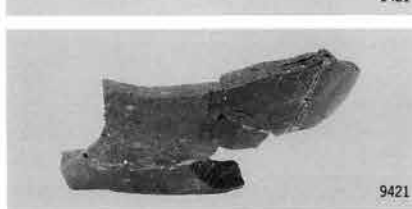
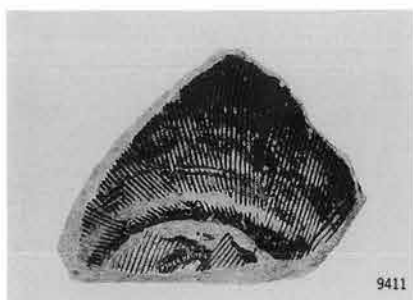


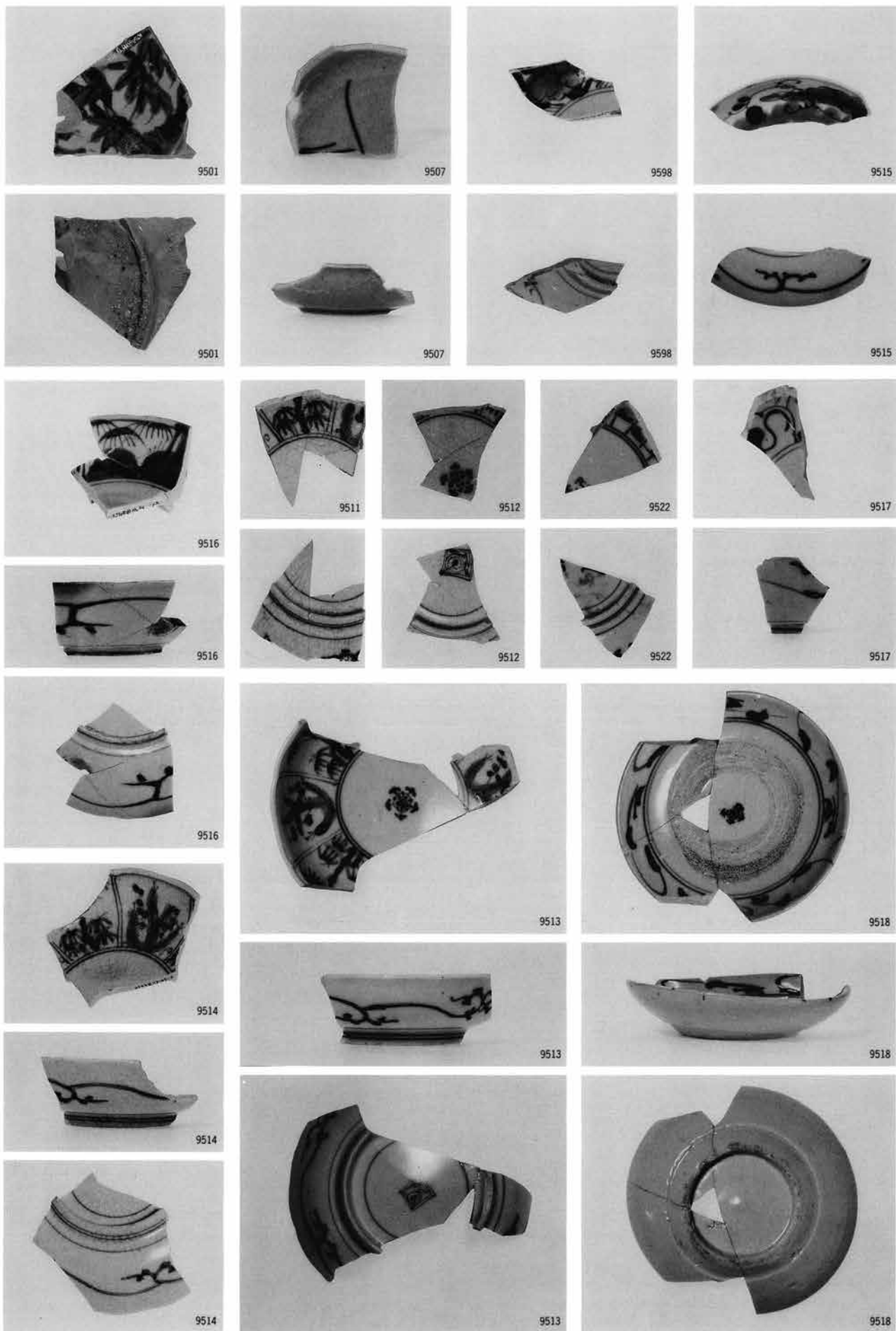














9578



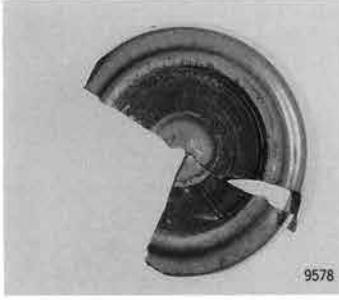
9579



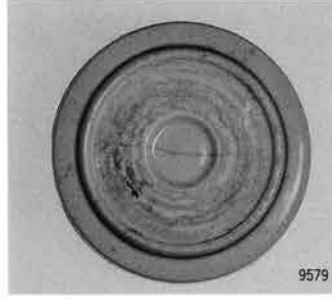
9580



9581



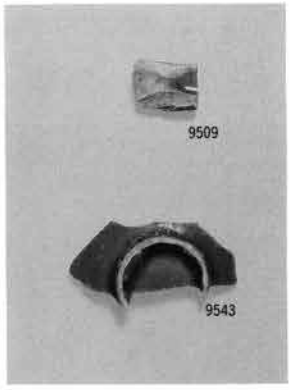
9578



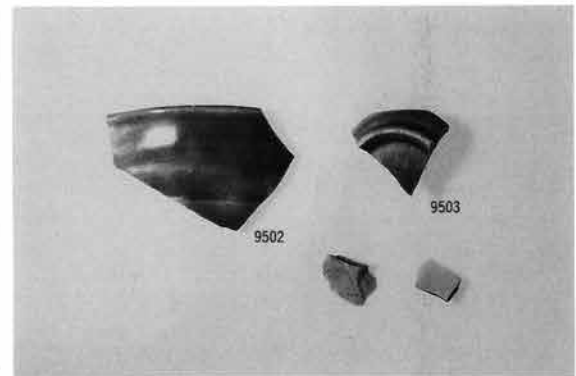
9579



9509

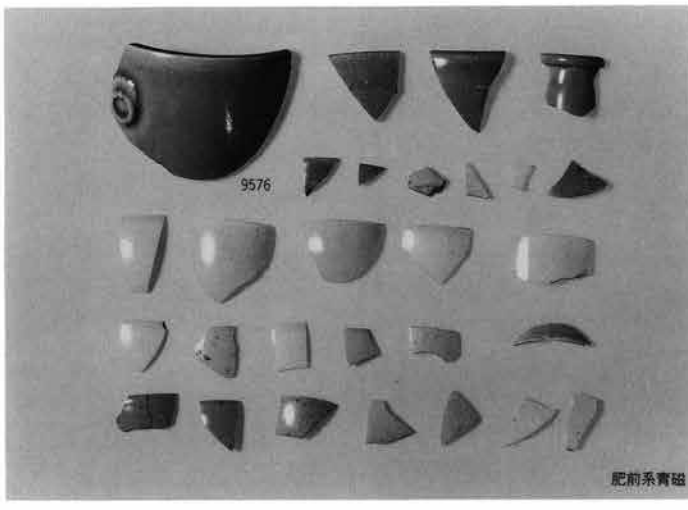


9509



9502

9503



9576

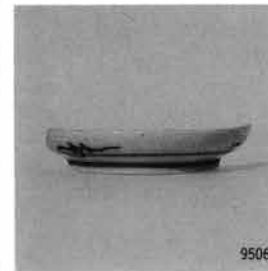
肥前系青磁



9519



9521



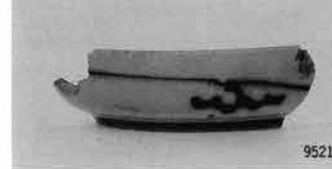
9506



9585



9519



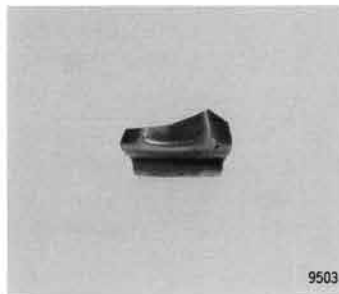
9521



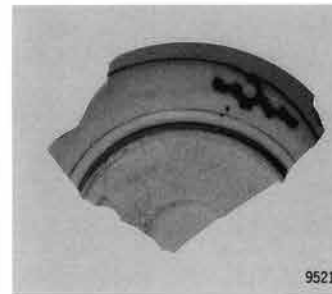
9582



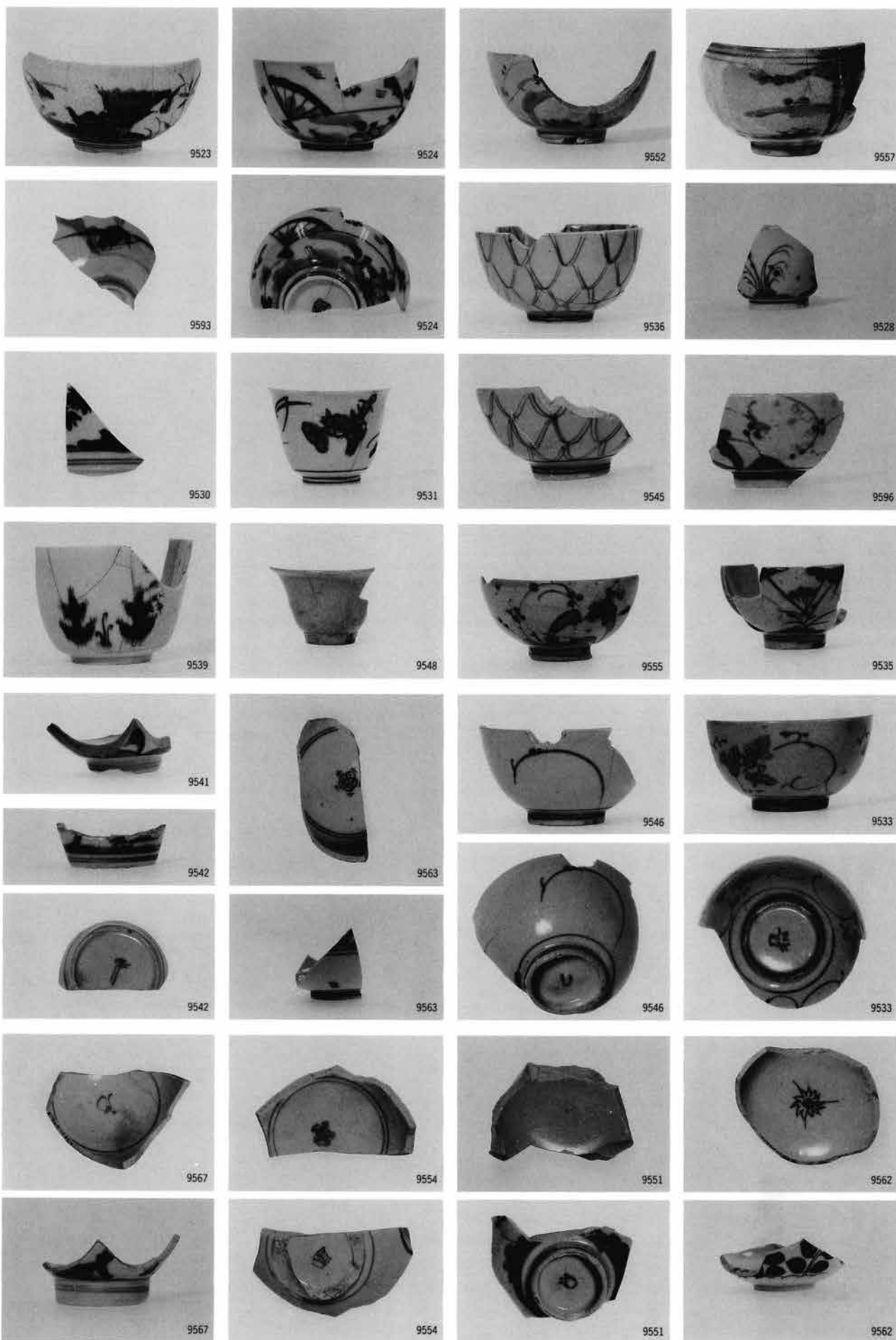
9583

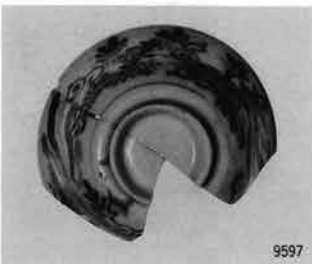
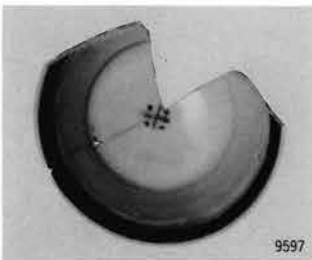
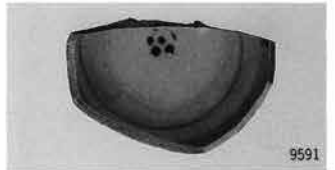
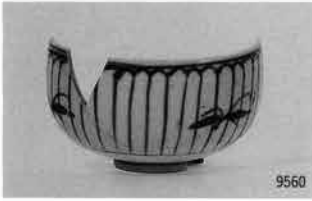
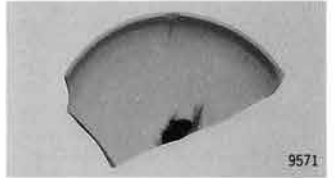
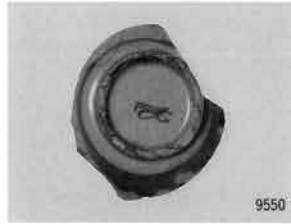
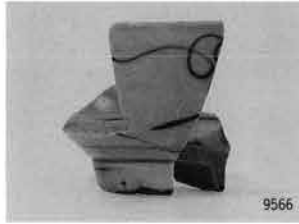


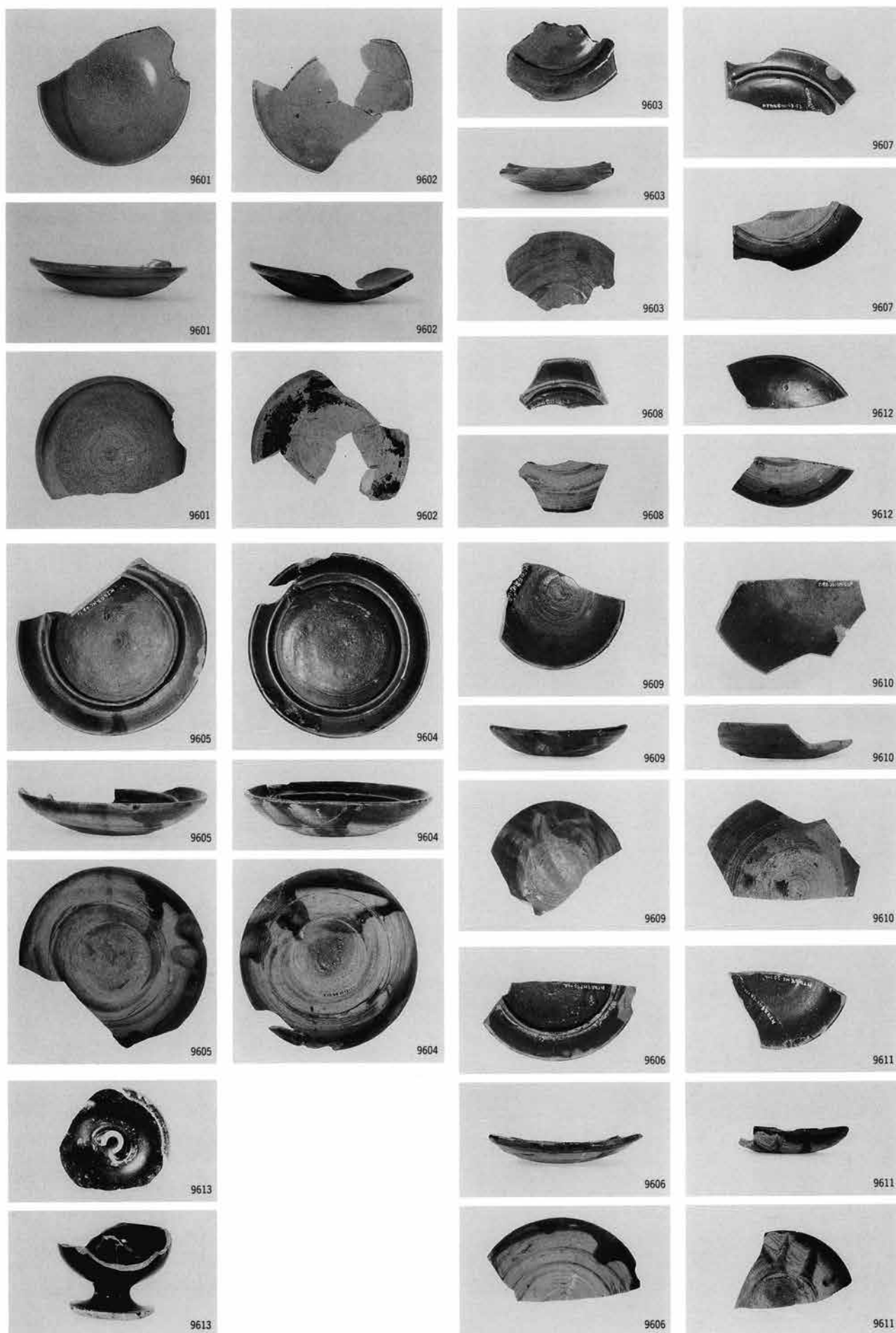
9503

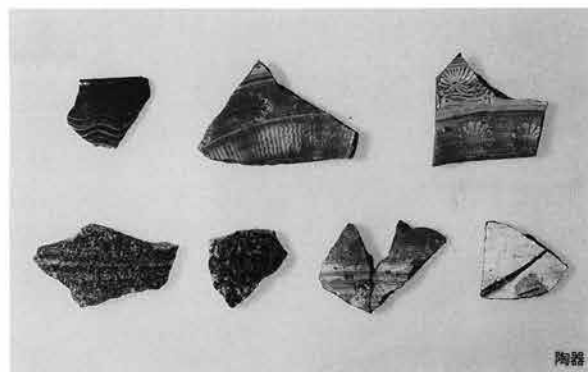
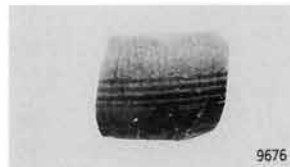


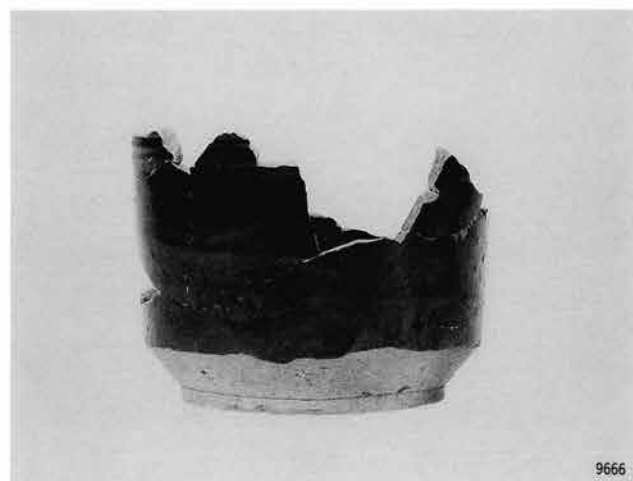
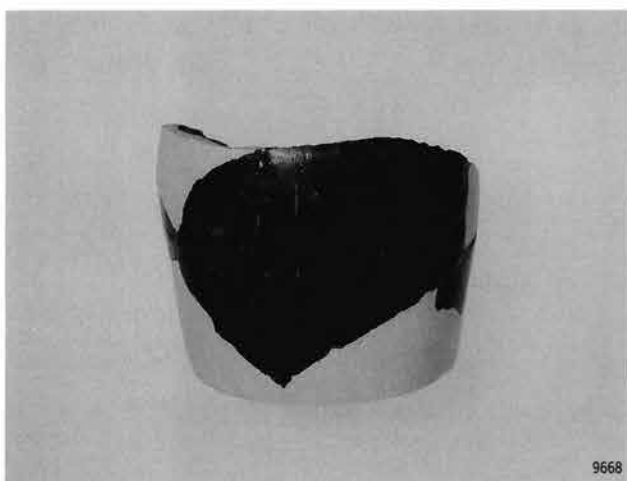
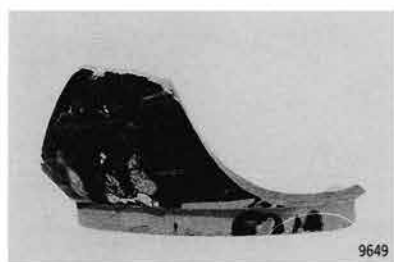
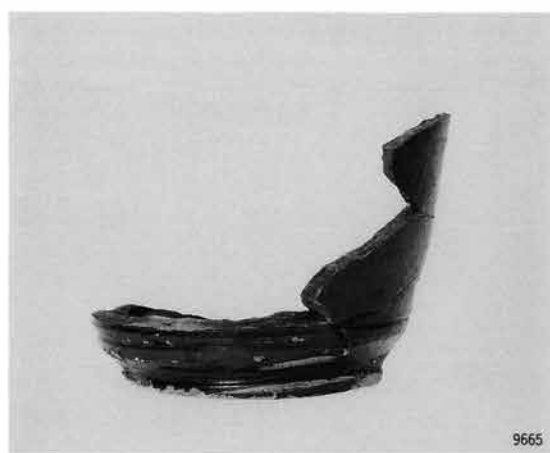
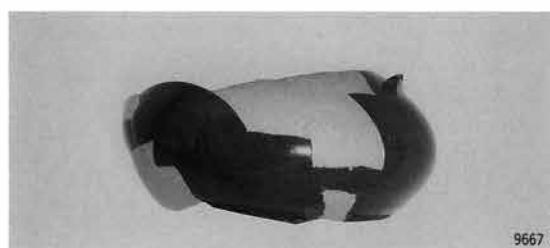
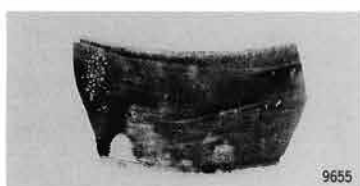
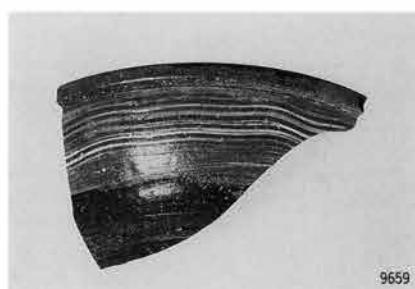
9521

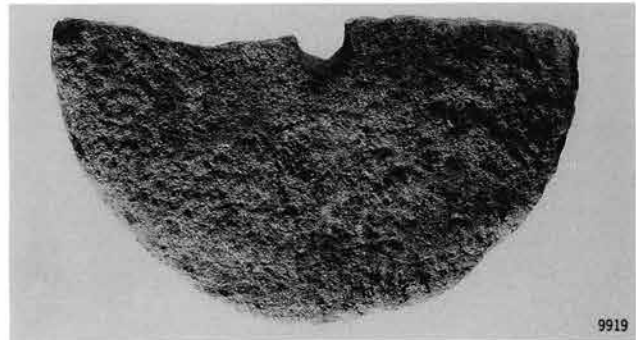
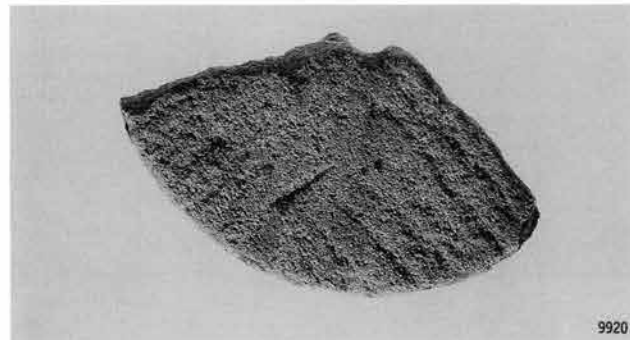
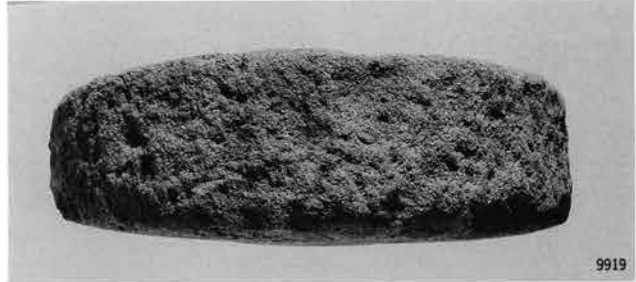
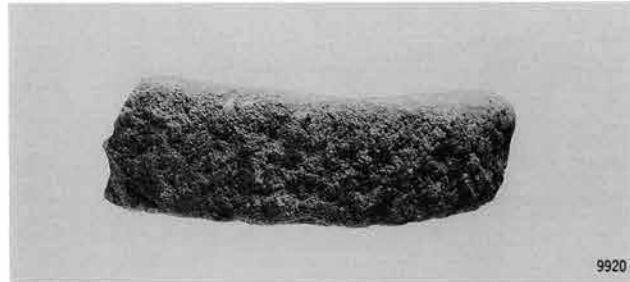
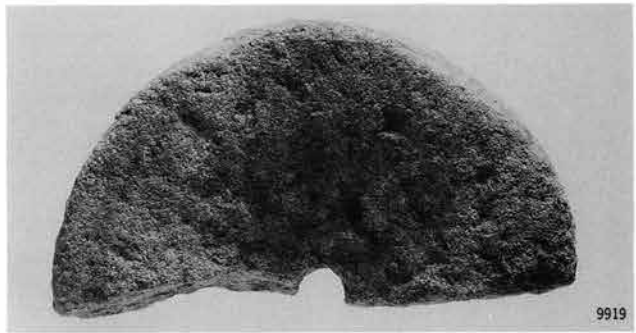
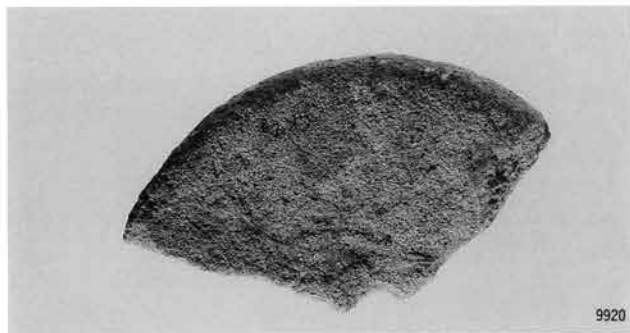
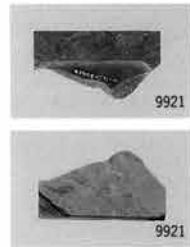
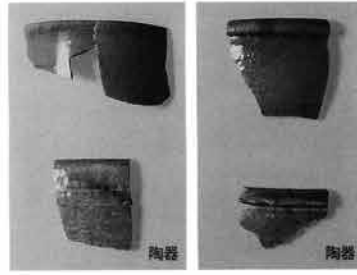
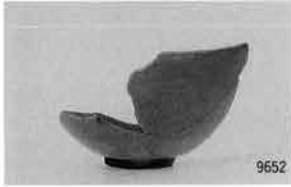


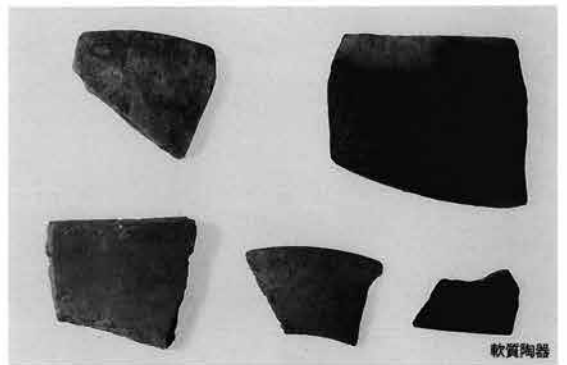
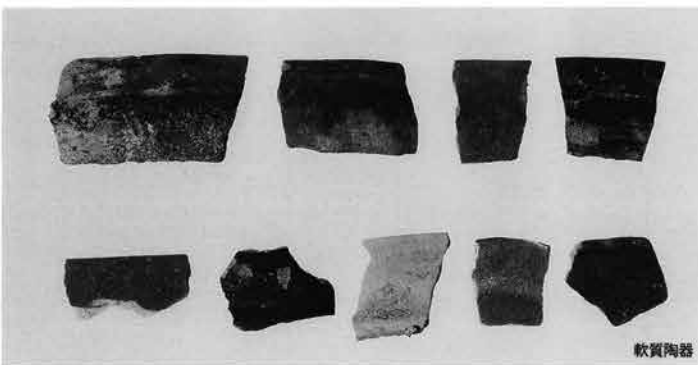
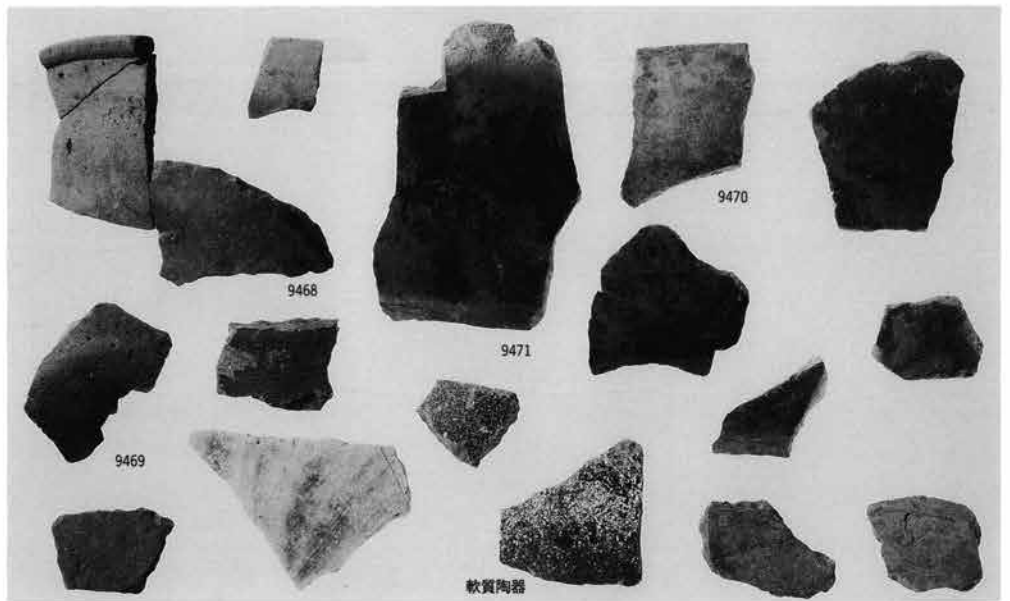
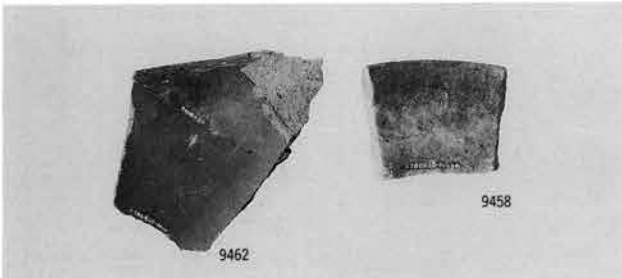
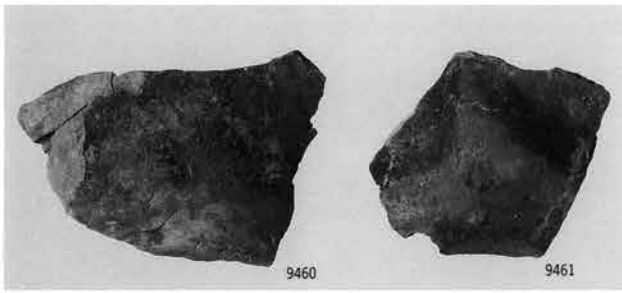










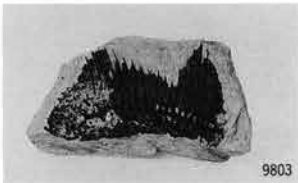




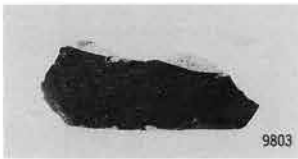
9809



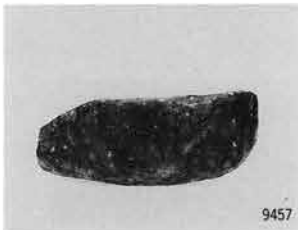
9809



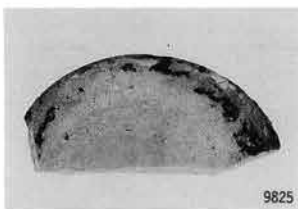
9803



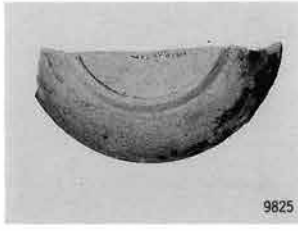
9803



9457



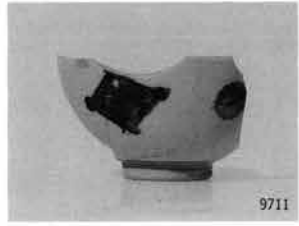
9825



9825



9813



9711



9702



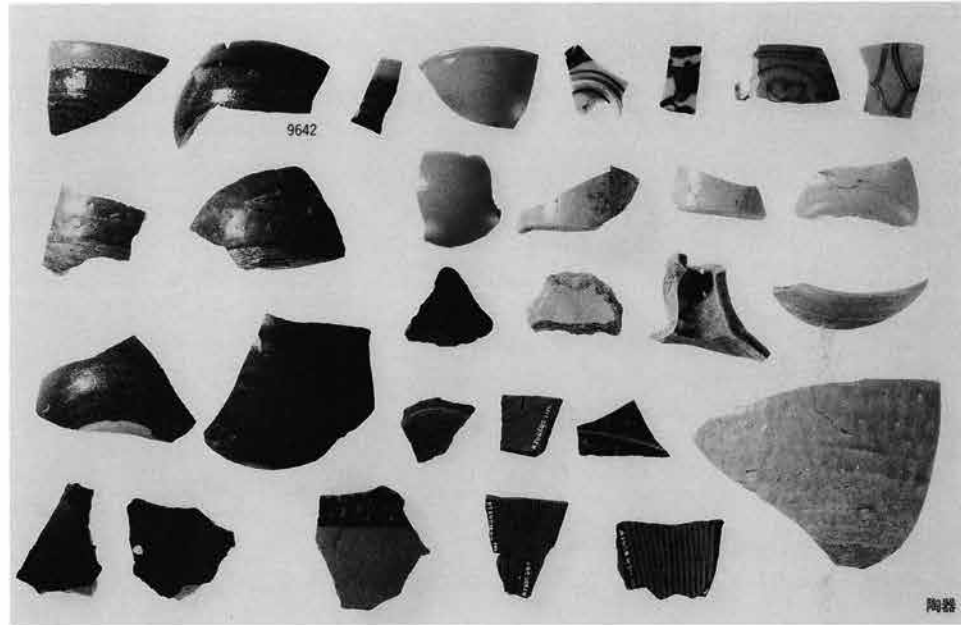
9822



9811



9823

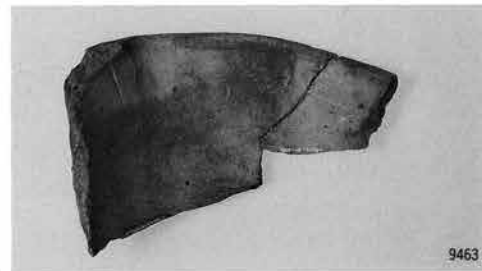


9642

陶器



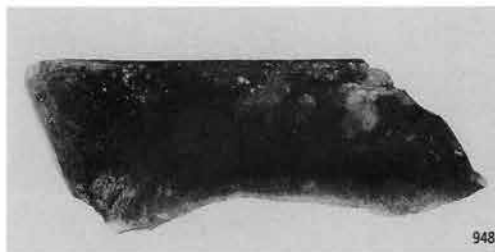
9463



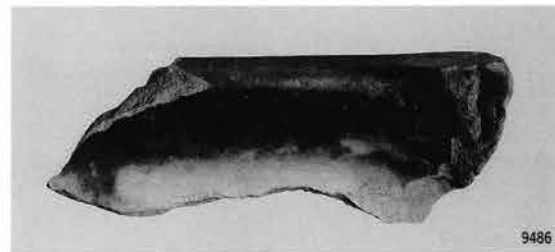
9463



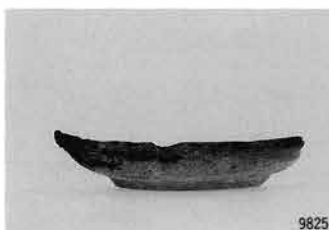
9824



9486



9486



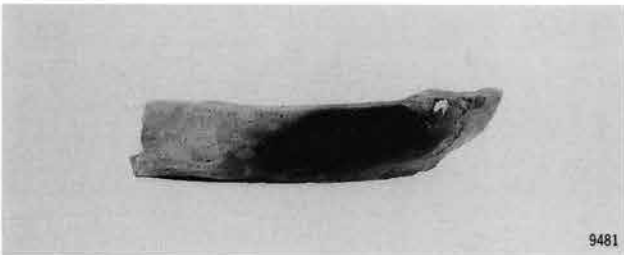
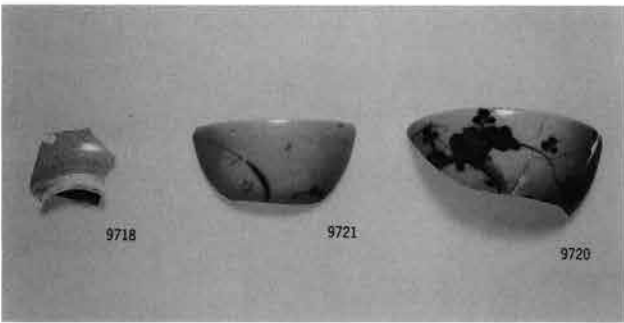
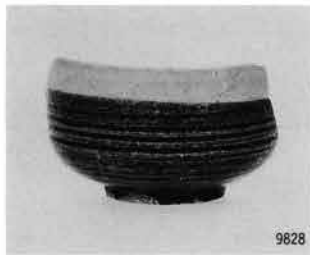
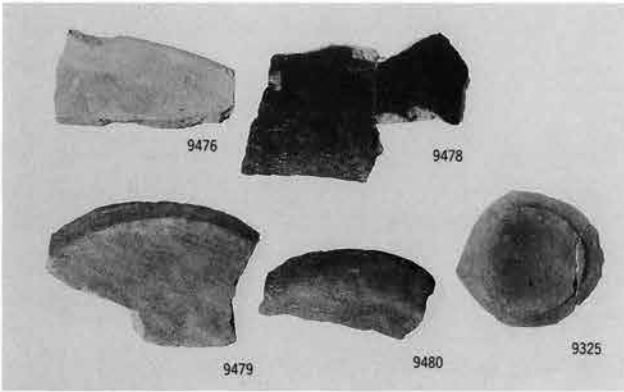
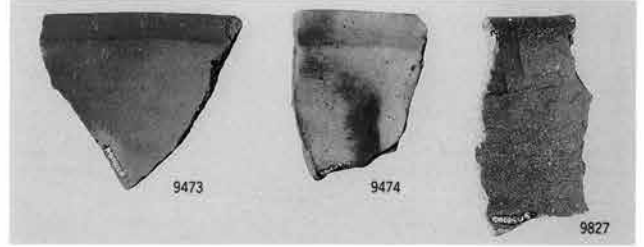
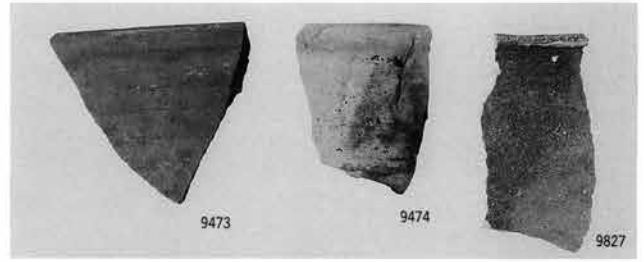
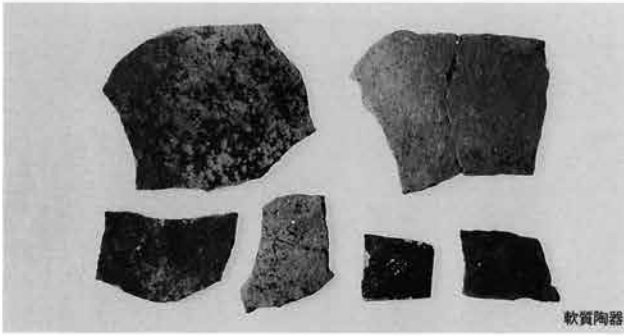
9825

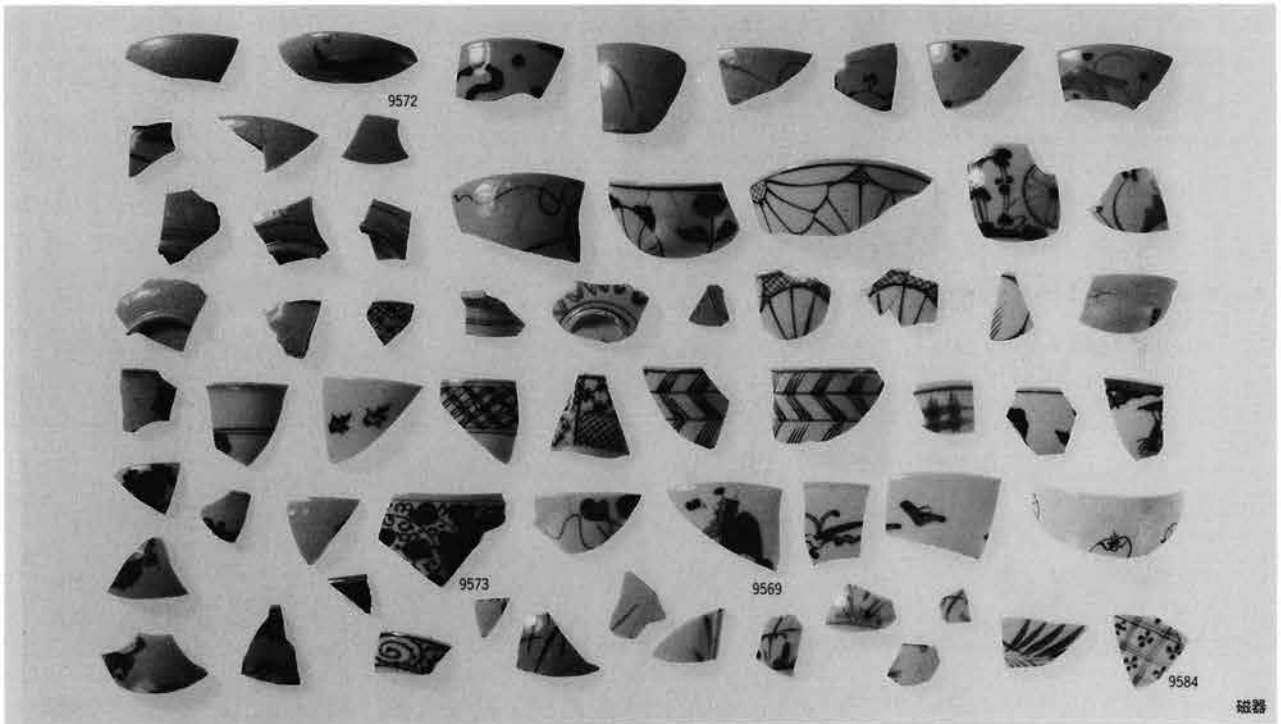


9808

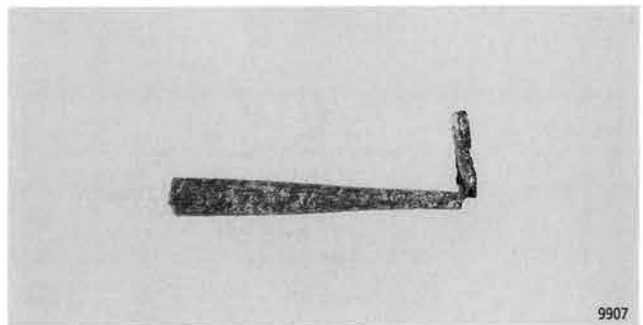
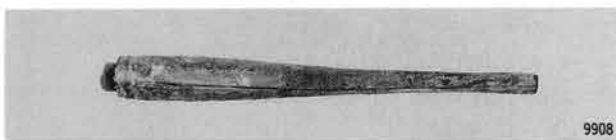
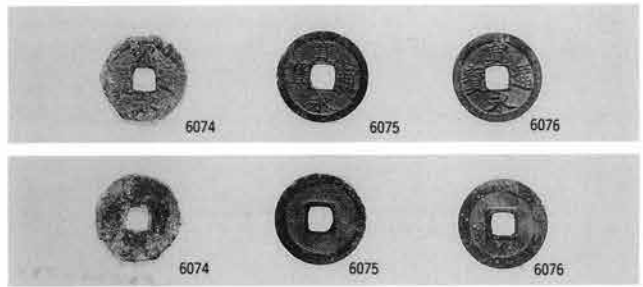
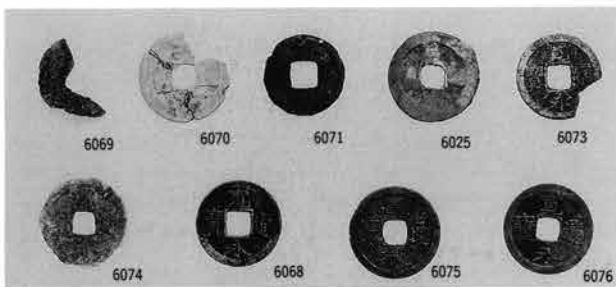


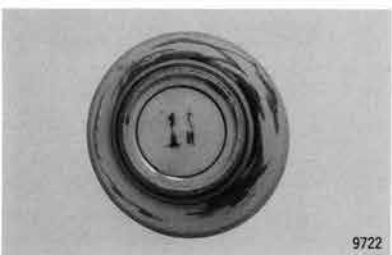
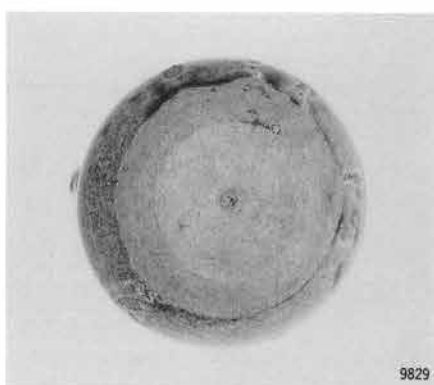
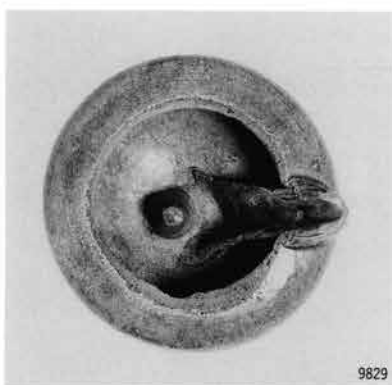
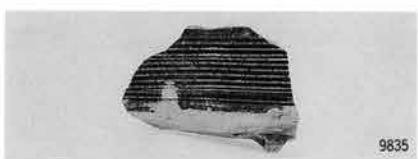
9808

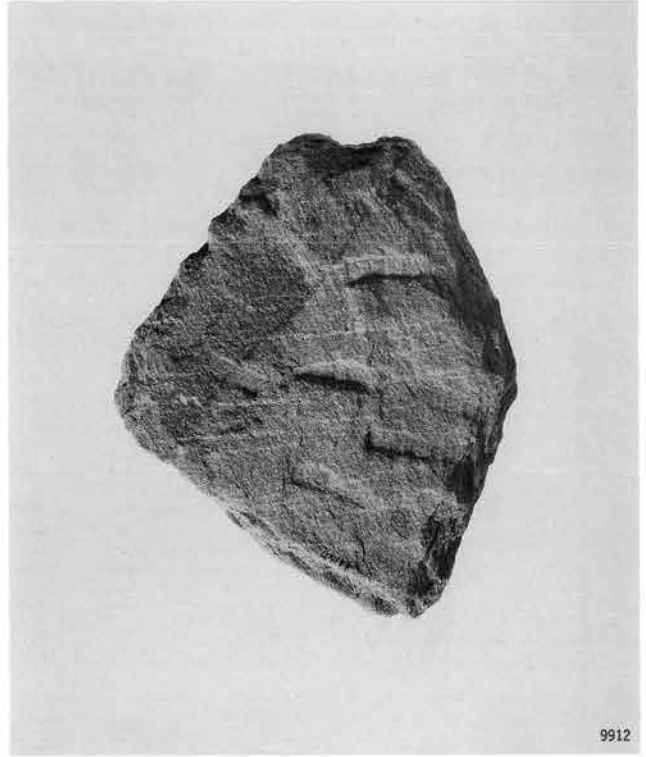




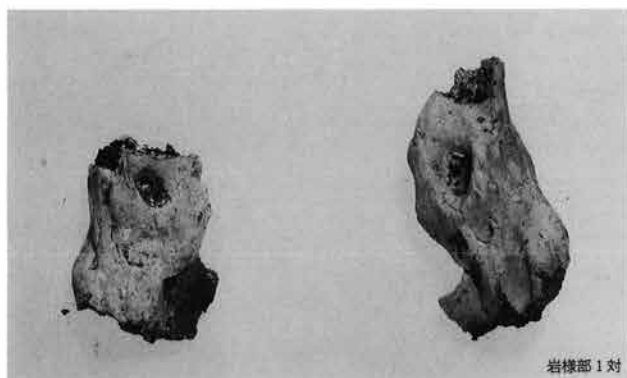
磁器







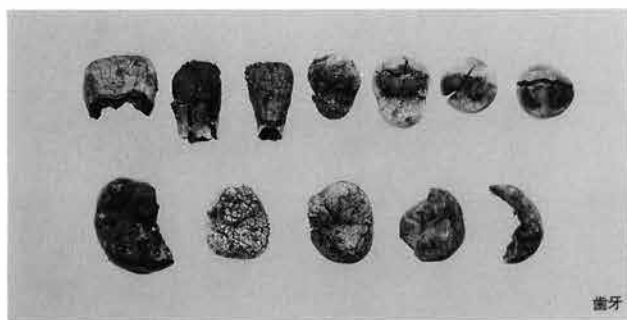




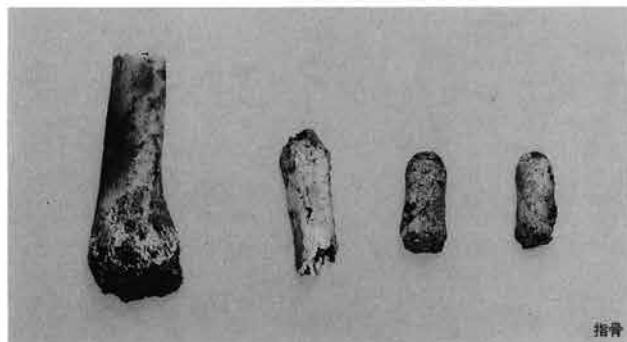
岩様部1対



蓋石と骨蔵器



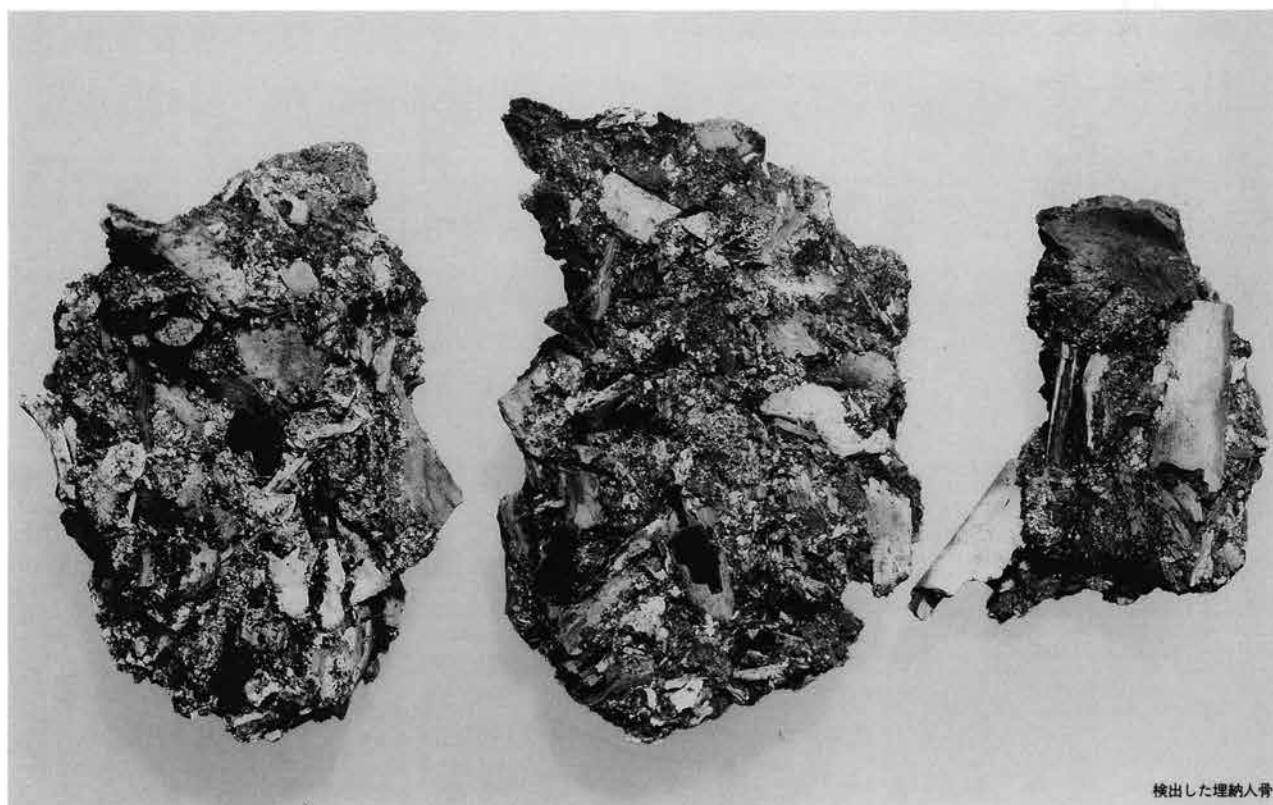
歯牙



指骨



骨蔵器内の様子



検出した埋納人骨

写真図版132

倍率 ×35

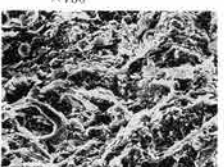
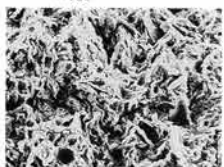
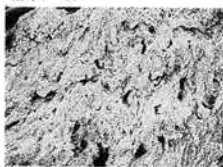
×750

×5,000

×35

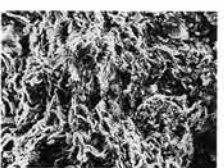
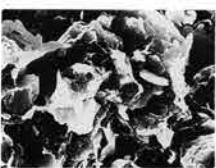
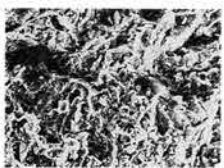
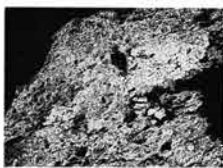
×750

×5,000



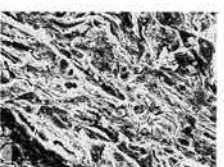
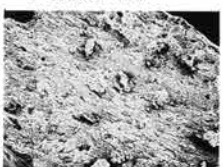
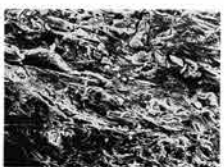
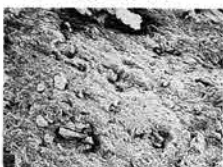
2 瓦A類 4103

6 瓦A類 4301



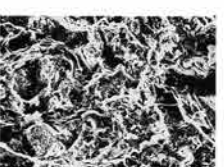
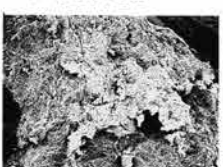
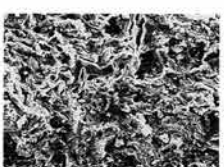
23 土師質土器 3041

1 瓦A類 4007



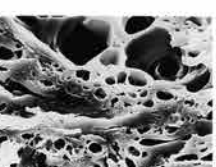
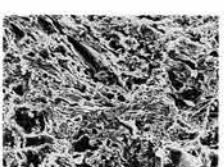
10 瓦B類 5211

14 瓦B類 5201



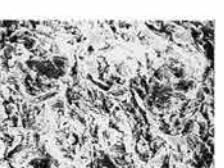
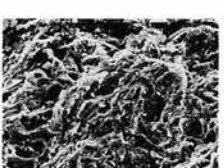
7 瓦A類 4301

11 瓦B類 5303



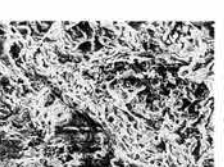
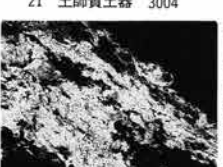
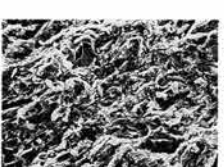
8 瓦B類 5201

9 瓦B類 5103



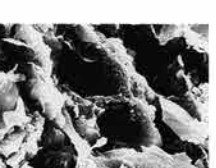
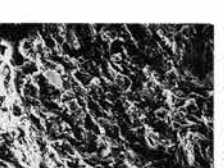
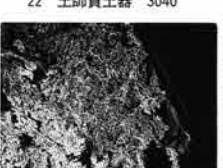
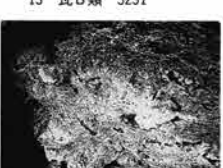
12 瓦B類 4201

21 土師質土器 3004



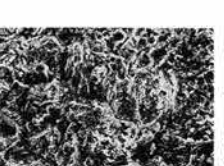
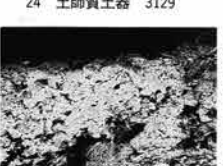
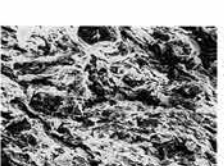
13 瓦B類 5231

22 土師質土器 3040



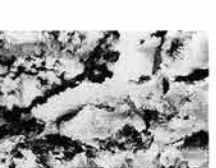
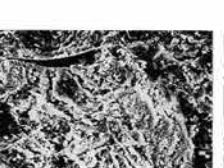
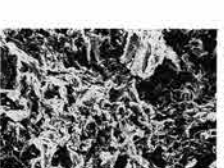
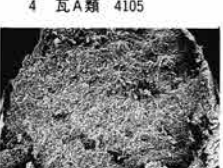
3 瓦A類 4102

24 土師質土器 3129



4 瓦A類 4105

26 土師質土器 9318



5 瓦A類 4106

25 土師質土器 3125

助群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第122集

白石大御堂遺跡

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第8集

平成3年3月20日 印刷

平成3年3月25日 発行

編集・発行／助群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

白石大御堂遺跡発掘調査報告書正誤表

ページ	行・図・表	誤	正
抄録	2 遺構数量 上谷戸調査区	住居跡 古墳2・平安3	古墳4・平安1
抄録	3 まとめ 古墳～平安時代	住居跡が5軒（古墳2・平安3）	（古墳4・平安1）
15	右9行目	大御堂調査区標準層序	大御堂調査区（ゴチック体）
55	第19図		別添図に差し替えて下さい
68	第31図 1526	文様展開図	天地が逆
73	第35図 1607縮尺	（記入漏れ）	1：2
75	15行目	墓壇	土坑墓・土壇
76	21行目	B軽石降下以降A軽石降下以前	浅間B軽石降下以降浅間A軽石降下以前
76	25行目	A軽石降下後	浅間A軽石降下後
84	第41図	（記入漏れ）	スクリーントーン上→6、スクリーントーン下→7
74	第41図 縮尺	2	2.5m
88	30行目	廂	庇
88	31行目	可能性がある。	と考えられる。
100	第9号掘立柱建物跡柱 穴計測表	P6及びP8の欄	bの記載を削除
103	4行目	藤岡市教委	藤岡市教育委員会
103	12行目	伺われる	窺われる
103	17行目	火葬跡	火葬墓
117	8行目	Bc-08で	Bc-08グリッドで
119	13行目	伺われる	窺われる
124	8行目	伺われる	窺われる
133	第78図 標高記載	105.65	（削除）
137	12行目	墓壇	土坑墓
148	4行目	伺われる	窺われる
151	第10表 第5・6号火 葬跡	153×94(115)ウ42	153×94(115)×42
187	17行目	供伴	共伴
271	第19表	6329・6330・6331・6336の★印	茎
277・278	第197図 EE'	土層番号が欠	上から1・2・3・4を入れる
277・278	第197図 FF'	土層番号が欠	上から1・2・3を入れる
304	第224図 AA'	土層記号の25	2f
337	第251図 9021	縮尺比1：1	1：3
376	第283図		縮尺比1：60
390	第310図	ML5→31号	削除
390	第310図	MK6→33号	削除
390	第310図	HL1→37号	削除
390	第311図	白石粘土	白色粘土
392	第314図	上段縮尺 1：2	1：4
392	第313図 土層注	5 暗灰色粘質土（黄白色粘質の	黄白色粘質土との混土層
434	8行目	古墳時代の住居が2軒	古墳時代の住居跡が4軒
434	9行目	平安時代の住居が3軒	平安時代の住居跡が1軒
434	11行目	検出数が2軒と3軒	検出数が4軒と1軒



遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
0 9 9	前原第1号竪穴住居跡(DJ1)	Dp-23-24g
1 0 0	前原第2号竪穴住居跡(DJ2)	Ds-Dr-23-24g
1 0 1	前原第1号土坑(DK1)	Dg-29g
1 0 2	前原第2号土坑(EK1)	Eg-33g
1 0 3	前原第3号土坑(EK3)	Ei-33g
1 0 4	前原第4号土坑(DK2)	Dr-19g
1 0 5	前原第5号土坑(DK8)	Dp-20-21g
1 0 6	前原第6号土坑(DK9)	Dp-Dq-22g
1 0 7	前原第7号土坑(DK12)	Dj-21g
1 0 8	前原第8号土坑(DK13)	Di-24g
1 0 9	前原第9号土坑(DP29)	Dq-22g
1 1 0	前原第10号土坑(DK29)	Do-23g
1 1 1	前原第11号土坑(DK27)	Dp-29-30g
1 1 2	前原第12号土坑(EK2)	Eg-Eh-28-29g
1 1 3	前原調査区道路跡遺構(ER1)	Du-Ec-22-24g
1 1 4	前原第1号孤立柱建物跡(BB1)	Dp-Dr-25-26g
1 1 5	前原第2号孤立柱建物跡(BB1)	Ea-Ec-22-24g
1 1 6	前原第3号孤立柱建物跡(BB2)	Eb-Em-26-34g
1 1 7	前原第4号孤立柱建物跡(BB3)	Ed-Ee-30-31g
1 1 8	前原第5号孤立柱建物跡(BB3)	Ee-Eg-32-33g
1 1 9	前原第6号孤立柱建物跡(BB4)	Ef-Eh-33g
1 2 0	前原第7号孤立柱建物跡(BB5)	Ei-Ek-32-33g
1 2 1	前原第8号孤立柱建物跡(BB6)	Eo-Eq-21-23g
1 2 2	前原第9号孤立柱建物跡(BB7)	Ep-Er-20-22g
1 2 3	前原第10号孤立柱建物跡(BB8)	Em-Eo-17-19g
1 2 4	前原第11号井戸跡(EE1)	Em-23g

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
0 5 1	大御堂第1号火葬跡(Ak5)	An-17g
0 5 2	大御堂第2号火葬跡(Ak4)	An-15g
0 5 3	大御堂第3号火葬跡(Ak3)	An-14g
0 5 4	大御堂第4号火葬跡(Bk7)	Bk-15g
0 5 5	大御堂第5号火葬跡(Bk8a)	Bi-14-15g
0 5 6	大御堂第6号火葬跡(Bk8b)	Bi-14-15g
0 5 7	大御堂第7号火葬跡(Bk9)	Bm-17g
0 5 8	大御堂第8号火葬跡(Bk10)	Bi-Bm-17g
0 5 9	大御堂第9号火葬跡(Bk12)	Bi-18g
0 6 0	大御堂第10号火葬跡(Bk14)	Bk-14g
0 6 1	大御堂第11号火葬跡(Bk15)	Bk-13-14g
0 6 2	大御堂第12号火葬跡(Bk11)	Bi-17-18g
0 6 3	大御堂第13号火葬跡(Bk22)	Bd-09g
0 6 4	大御堂第14号火葬跡(Bk23)	Bd-08-09g
0 6 5	大御堂第15号火葬跡(Bk24)	Bd-09g
0 6 6	大御堂第16号火葬跡(Bk25)	Bg-09-10g
0 6 7	大御堂第17号火葬跡(Bk21)	Bd-09g
0 6 8	大御堂第18号火葬跡(Bk13)	Bi-17-18g
0 6 9	大御堂第19号火葬跡(Bk31)	Bh-14g
0 7 0	大御堂第20号火葬跡(Bk32)	Bd-22-23g
0 7 1	大御堂第21号火葬跡(Bk27)	Bh-22g
0 7 2	大御堂第22号火葬跡(Bk28)	Bi-22g
0 7 3	大御堂第23号火葬跡(Bk29)	Bi-21g
0 7 4	大御堂第24号火葬跡(Bk30)	Bi-20g
0 7 5	大御堂第25号火葬跡(Bk17)	BG-18g
0 7 6	大御堂第1号土壇(Ak1)	Aj-06g
0 7 7	大御堂第2号土壇(Bk4)	Bk-21-22g
0 7 8	大御堂第3号土壇(Bk5)	Bj-15g
0 7 9	大御堂第4号土壇(Bk6)	Bi-15g
0 8 0	大御堂第5号土壇(Bk33)	Bd-26g
0 8 1	大御堂第1号壕北部礎石面(4号配石)	Bj-Bk-10-14g

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
0 3 6	大御堂第9号溝状遺構(BD6)	Bi-Bg-21-22g
0 3 7	大御堂第10号溝状遺構(4号暗渠)	Be-Bg-22-23g
0 3 8	大御堂第11号溝状遺構(1号暗渠)	Bd-Bg-22-23g
0 3 9	大御堂第12号溝状遺構(BD10)	Ba-Bi-21-22g
0 4 0	大御堂第13号溝状遺構(BD8-16)	Bd-Bk-23-24g
0 4 1	大御堂調査区北池(2号池)	Ar-Ax-12-17g
0 4 2	大御堂調査区南池(3号池)	Ar-Ba-18-22g
0 4 3	大御堂第10号孤立柱建物跡(BB1)	Bh-Bi-20-21g
0 4 4	大御堂第11号孤立柱建物跡(BB2)	Be-Bf-15-16g
0 4 5	大御堂第1号井戸跡(BE1)	Bh-Bi-19g
0 4 6	大御堂第14号溝状遺構(AD11)	Ap-Aq-19-20g
0 4 7	大御堂第15号溝状遺構(AD7)	Aj-Ai-10-11g
0 4 8	大御堂第16号溝状遺構(AD4)	Aj-An-03-12g
0 4 9	大御堂第17号溝状遺構(AD5-8)	Aj-An-03-15g
0 5 0	大御堂第1号配石墓(1号配石)	Bh-Bi-15g

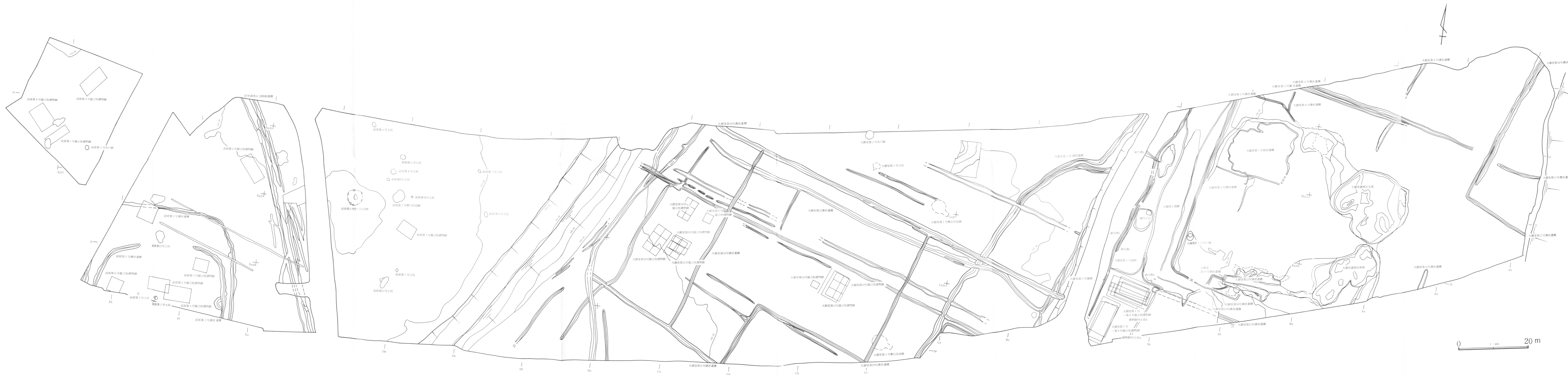
遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
0 0 1	大御堂第1号竪穴住居跡(CJ1)	Ca-Cc-19-20g
0 0 2	大御堂第2号竪穴住居跡(CJ2)	Cd-Ce-29-30g
0 0 3	大御堂第1号土坑(Ck1)	Cf-Cg-17g
0 0 4	大御堂第1号溝状遺構(BD17)	Bo-Cb-15-30g
0 0 5	大御堂第2号溝状遺構	Bk-Ba-11-27g
0 0 6	大御堂第1号溝状遺構(溝跡)	Bj-Bn-11-22g
0 0 7	大御堂第1号溝内土坑(Bk16)	Bi-Bj-18g
0 0 8	大御堂第1号溝内溝a(BD13)	Bi-Bj-14g
0 0 9	大御堂第1号溝内溝b(BD11)	Bj-Bn-10-23g
0 1 0	大御堂第1号溝内溝c(BD12)	Bi-Bn-15-26g
0 1 1	大御堂第1号溝内溝d(BD6)	Bj-Bi-20-23g
0 1 2	大御堂・土原跡(土原跡)	Bm-Bk-09-22g
0 1 3	大御堂寺院址欄列a	Bk-Bm-22-23g
0 1 4	大御堂寺院址欄列b	Bo-Bn-22-26g
0 1 5	大御堂第1号孤立柱建物跡(BB10)	Bk-Bm-23-24g
0 1 6	大御堂第2号孤立柱建物跡(BB9)	Bk-Bm-22-24g
0 1 7	大御堂第3号孤立柱建物跡(BB8)	Bk-Bm-22-24g
0 1 8	大御堂第4号孤立柱建物跡(BB3)	Bk-Bn-22-24g
0 1 9	大御堂第5号孤立柱建物跡(BB4)	Bk-Bn-22-24g
0 2 0	大御堂第6号孤立柱建物跡(BB5)	Bk-Bn-23-24g
0 2 1	大御堂第7号孤立柱建物跡(BB6)	Bm-Bn-24-27g
0 2 2	大御堂第8号孤立柱建物跡(BB7)	Bm-Bn-24-27g
0 2 3	大御堂第9号孤立柱建物跡(BB11)	Bm-Bn-24-27g
0 2 4	大御堂第1号土壇(Bk26)	Bo-27g
0 2 5	大御堂第2号土壇(Bk35)	Bm-13g
0 2 6	大御堂第3号土壇(Bk34)	Bi-13g
0 2 7	大御堂第4号土壇(Bk33)	Bi-13g
0 2 8	大御堂第5号土壇(Bk32)	Bi-13g
0 2 9	大御堂第6号土壇(Bk31)	Bi-13g
0 3 0	大御堂第7号土壇(Bk30)	Bi-13g
0 3 1	大御堂第8号土壇(Bk29)	Bi-13g
0 3 2	大御堂第9号土壇(Bk28)	Bi-13g
0 3 3	大御堂第10号土壇(Bk27)	Bi-13g
0 3 4	大御堂第11号土壇(Bk26)	Bi-13g
0 3 5	大御堂第12号土壇(Bk25)	Bi-13g

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
1 6 4	上谷戸第6号土坑(FK1)	Fw-Fx-12-13g
1 6 5	上谷戸第7号土坑(GK5)	Fy-13g
1 6 6	上谷戸第8号土坑(GK6)	Ga-11-12g
1 6 7	上谷戸第9号土坑(GK4)	Ga-Gb-13-14g
1 6 8	上谷戸第10号土坑(GK2)	Gd-11g
1 6 9	上谷戸第11号土坑(GK12)	Gd-12-13g
1 7 0	上谷戸第12号土坑(FK6)	Fr-12g
1 7 1	上谷戸第13号土坑(GK11)	Ga-Gb-12g
1 7 2	上谷戸第14号土坑(GK10)	Gb-11g
1 7 3	上谷戸第15号土坑(GK13)	Gd-13g
1 7 4	上谷戸第16号土坑(GK14)	Gc-13g
1 7 5	上谷戸第17号土坑(GK15)	Gb-Gc-14g
1 7 6	上谷戸第18号土坑(GK16)	Gc-14g
1 7 7	上谷戸第19号土坑(GK17)	Gc-14g
1 7 8	上谷戸第20号土坑(GK7)	Gb-12g
1 7 9	上谷戸第21号土坑(GK1)	Gf-11-12g
1 8 0	上谷戸第22号土坑(GK3)	Gc-13g
1 8 1	上谷戸第23号土坑(GK9)	Gb-Gd-12-14g
1 8 2	上谷戸第24号土坑(GK8)	Gf-Gg-13-14g
1 8 3	上谷戸第25号土坑(GE2)	Gw-Gx-13-12g
1 8 4	上谷戸第26号土坑(GK18)	Ga-Gb-08-09g
1 8 5	上谷戸第27号土坑(GK19)	Gf-04-05g
1 8 6	上谷戸第28号土坑(HK17)	Gf-03g
1 8 7	上谷戸第29号土坑(HK11)	Gv-02g
1 8 8	上谷戸第30号土坑(HK10)	Hb-05g
1 8 9	上谷戸第31号土坑(HK5)	Hb-Hc-06g
1 9 0	上谷戸第32号土坑(HK9)	Hb-06g
1 9 1	上谷戸第33号土坑(HK6)	Hc-07g
1 9 2	上谷戸第34号土坑(HK4)	Hj-Hk-06g
1 9 3	上谷戸第35号土坑(HK3)	Hk-06-07g
1 9 4	上谷戸第36号土坑(HK2)	Hk-08g
1 9 5	上谷戸第37号土坑(HK1)	Hk-09g
1 9 6	上谷戸第38号土坑(HK8)	Hm-05g

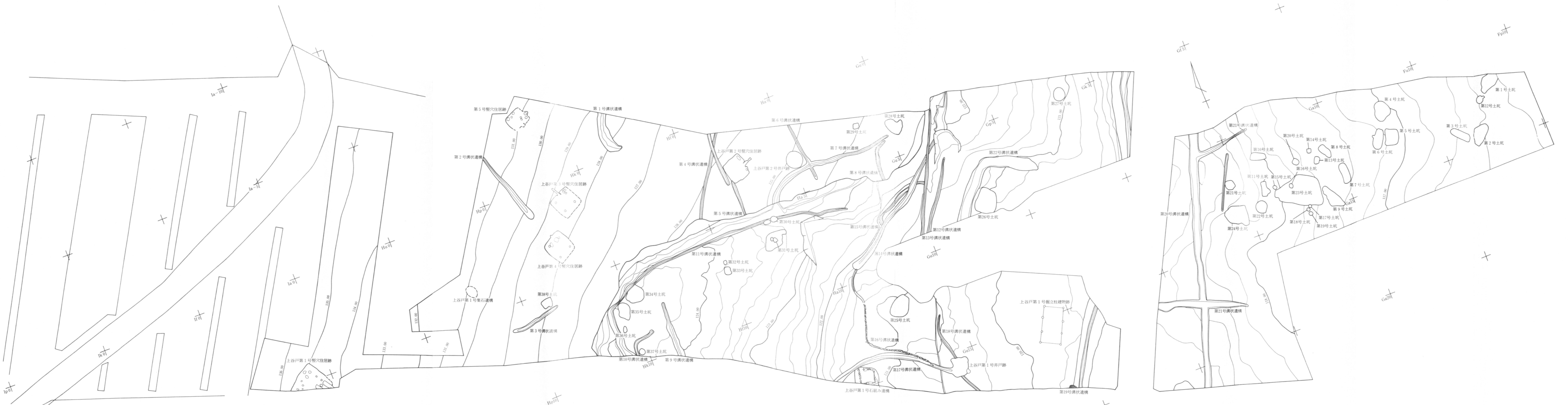
遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
1 4 3	上谷戸第12号溝状遺構(GD6)	Ga-Gf-06-09g
1 4 4	上谷戸第13号溝状遺構(GD7)	Gr-Gt-03-08g
1 4 5	上谷戸第14号溝状遺構(GD8)	Ga-Gy-04-09g
1 4 6	上谷戸第15号溝状遺構(GD9)	Gt-Gw-06-07g
1 4 7	上谷戸第16号溝状遺構(GD11)	Gw-Gy-09-15g
1 4 8	上谷戸第17号溝状遺構(GD13)	Gv-Hb-13-15g
1 4 9	上谷戸第18号溝状遺構(GD12)	Gu-Gv-12-16g
1 5 0	上谷戸第19号溝状遺構(GD10-4)	Gh-Gp-05-18g
1 5 1	上谷戸第20号溝状遺構(GD1)	Gg-Gk-09-20g
1 5 2	上谷戸第21号溝状遺構(GD2)	Gg-Gk-16-18g
1 5 3	上谷戸第22号溝状遺構(GD3)	Gd-Gg-09-10g
1 5 4	上谷戸第23号溝状遺構(GD5)	Gh-Gt-06-09g
1 5 5	上谷戸第1号孤立柱建物跡(GB1)	Gp-Gq-14-16g
1 5 6	上谷戸第1号石組遺構(GE1)	Ha-14g
1 5 7	上谷戸第1号井戸跡(GE3)	Gu-Gv-15g
1 5 8	上谷戸第2号井戸跡(HB1)	Gy-Ha-02-03g
1 5 9	上谷戸第3号土坑(FK7)	Fq-Fr-11-12g
1 6 0	上谷戸第2号土坑(FK5)	Fr-Fs-13-14g
1 6 1	上谷戸第3号土坑(FK4)	Fs-Ft-13-14g
1 6 2	上谷戸第4号土坑(FK3)	Fv-Fw-10-11g
1 6 3	上谷戸第5号土坑(FK2)	Fv-Fw-12-13g

遺構番号	遺構名称(調査名称)	所在グリッド
1 2 6	上谷戸第1号竪穴住居跡(HJ6)	Ia-Ic-04g
1 2 7	上谷戸第2号竪穴住居跡(HJ1)	Ic-Ie-02-03g
1 2 8	上谷戸第3号竪穴住居跡(HJ2)	Ih-Ii-00-01g
1 2 9	上谷戸第4号竪穴住居跡(HJ3)	Ih-Iim-02-03g
1 3 0	上谷戸第5号竪穴住居跡(HJ4)	Ih-Iim-04g
1 3 1	上谷戸第1号集石遺構	Ih-03g
1 3 2	上谷戸第1号溝状遺構(HD10)	Ih-Hi-1-2g
1 3 3	上谷戸第2号溝状遺構(HD9)	Ih-Ho-00-2g
1 3 4	上谷戸第3号溝状遺構(HD11)	Ih-Hp-05-06g
1 3 5	上谷戸第4号溝状遺構(HD4)	Ih-Hf-00-04g
1 3 6	上谷戸第5号溝状遺構(HD5)	Hd-03-04g
1 3 7	上谷戸第6号溝状遺構(HD8)	Gy-01-04g
1 3 8	上谷戸第7号溝状遺構(HD6)	Gv-Hb-03-04g
1 3 9	上谷戸第8号溝状遺構(HD7)	Gu-Gv-04-05g
1 4 0	上谷戸第9号溝状遺構(HD3)	Hf-07-10g
1 4 1	上谷戸第10号溝状遺構(HD2)	Hj-Hk-08-09g
1 4 2	上谷戸第11号溝状遺構(HD1)	Gx-Hi-00-09g

付図2 白石大御堂遺跡全体図

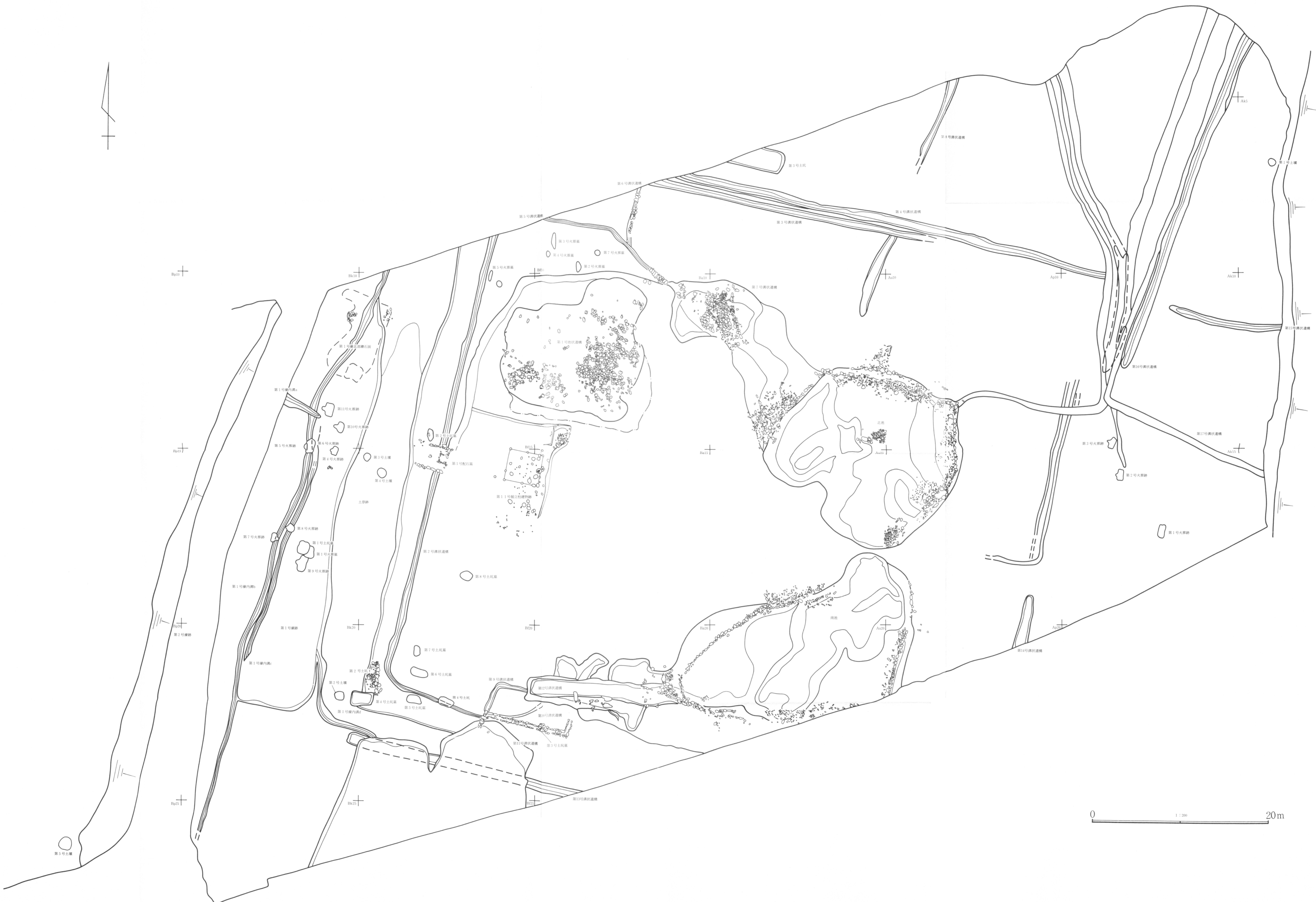


付図3 白石大御堂遺跡大御堂・前原調査区全体図



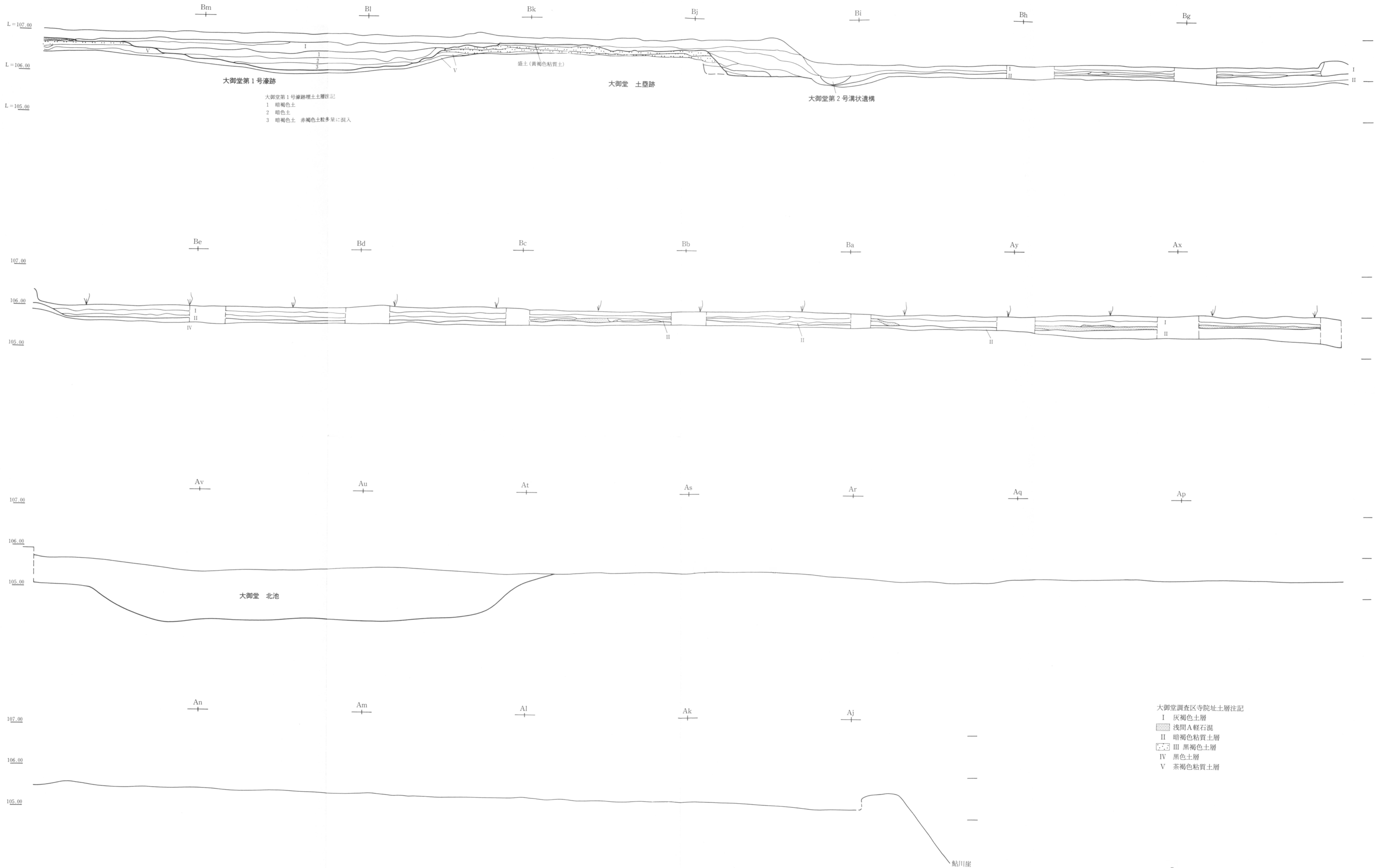
付図4 白石大御堂遺跡上谷戸調査区全体図

0 1:400 20m



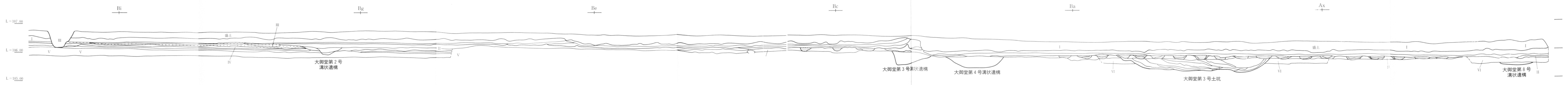
付图6 大御堂調査区寺院址遺構—中近世面—全体図

17ライン (東西方向) 土層断面図

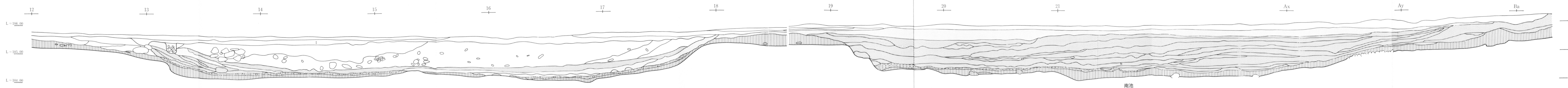


付図7 大御堂調査区寺院址土層断面図(1)





大御堂調査区 B区北壁土層断面図



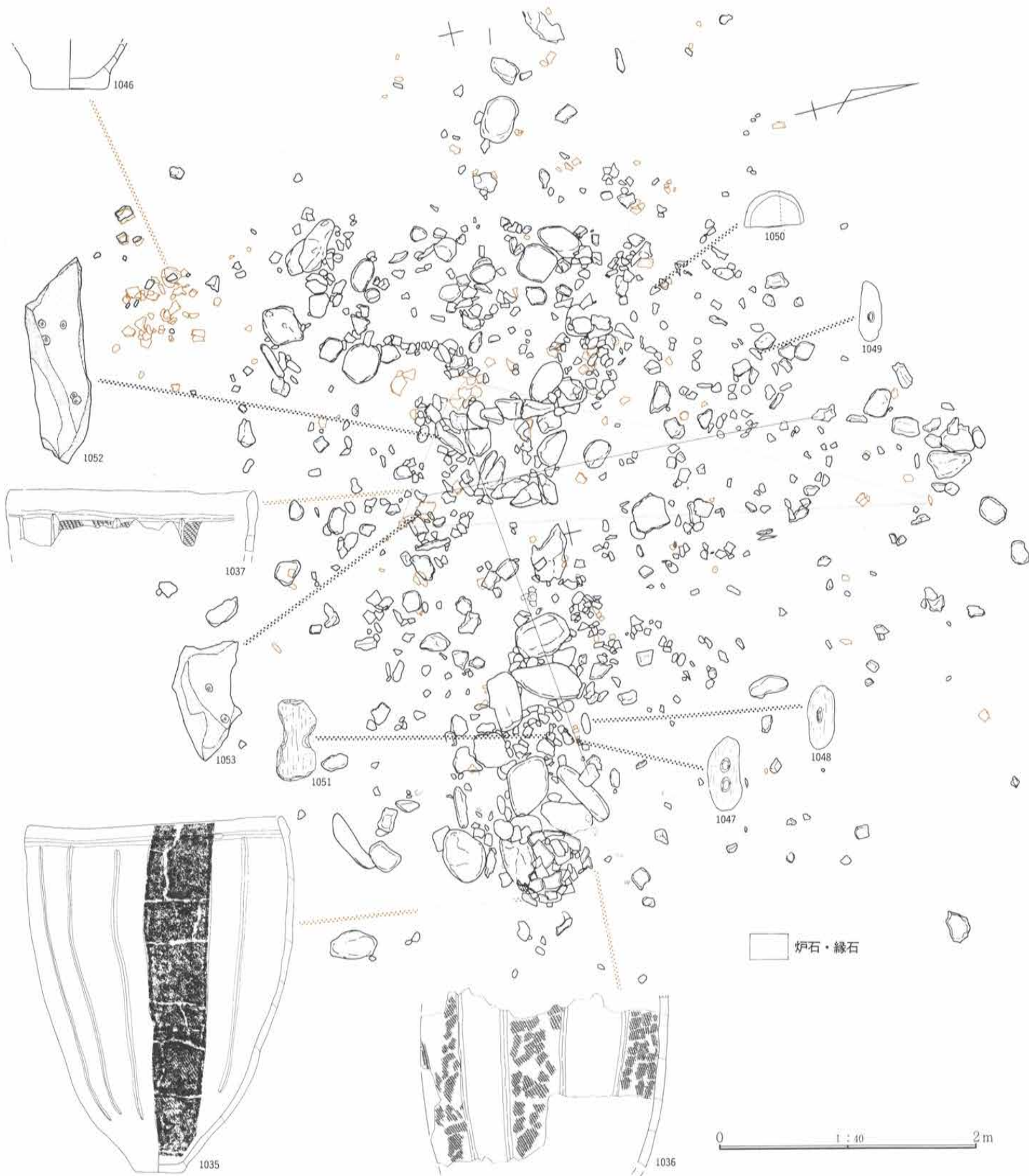
大御堂調査区 土地改良農道際土層断面図

付図8 大御堂調査区寺院址土層断面図(2)

- 大御堂調査区土層注記
- I 灰褐色土層 耕作土
 - II 暗褐色粘質土層
 - III 黒褐色土層
 - IV 黒色土層
 - V 茶褐色粘質土層
 - VI 暗褐色粘質土層
- 池 埋土
- 埋土1層
 - 埋土2層 (A軽石混り)
 - 埋土2'層 (A軽石の混入少なく粘質やある暗褐色土)
 - 埋土3層 (黒褐色粘質土)
 - 埋土4層 (灰褐色シルト質土)

東壁 ← | → 南壁





第19図 大御堂第2号敷石住居跡出土遺物分布図